

# HP SiteScope

ソフトウェア・バージョン : 11.30

## SiteScope の使用

ドキュメント・リリース日 : 2015 年 1 月  
ソフトウェア・リリース日 : 2015 年 1 月



## ご注意

### 保証

HP 製品、またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載で追加保証を意図するものは一切ありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、HP はいかなる責任も負いません。

ここに記載する情報は、予告なしに変更されることがあります。

### 権利の制限

機密性のあるコンピュータ・ソフトウェアです。これらを所有、使用、または複製するには、HP からの有効な使用許諾が必要です。商用コンピュータ・ソフトウェア、コンピュータ・ソフトウェアに関する文書類、および商用アイテムの技術データは、FAR 12.211 および 12.212 の規定に従い、ベンダーの標準商用ライセンスに基づいて米国政府に使用許諾が付与されます。

### 著作権について

© Copyright 2005 - 2015 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

### 商標について

Adobe™ は、Adobe Systems Incorporated の商標です。

Microsoft® および Windows® は Microsoft Corporation の米国登録商標です。

UNIX® は The Open Group の登録商標です。

本製品には、Copyright © 1995-2002 Jean-loup Gailly and Mark Adler である「zlib」汎用圧縮ライブラリのインタフェースが含まれています。

## ドキュメントの更新情報

このマニュアルの表紙には、以下の識別番号が記載されています。

- ソフトウェアのバージョン番号は、ソフトウェアのバージョンを示します。
- ドキュメント・リリース日は、ドキュメントが更新されるたびに変更されます。
- ソフトウェア・リリース日は、このバージョンのソフトウェアのリリース日を示します。

最新の更新情報をチェックする、またはご使用のドキュメントが最新版かどうかを確認するには、次のサイトをご利用ください。 <https://softwaresupport.hp.com/group/softwaresupport/search-result?keyword=>

このサイトでは、HP Passport のアカウントが必要です。アカウントがない場合は、HP Passport のサイン・インページで **【アカウントの作成】** ボタンをクリックしてください。

## サポート

次の HP ソフトウェアのサポート Web サイトを参照してください。 <https://softwaresupport.hp.com>

HP ソフトウェアが提供する製品、サービス、サポートに関する詳細情報をご覧ください。

HP ソフトウェア・サポートではセルフソルブ機能を提供しています。お客様の業務の管理に必要な対話型の技術支援ツールに素早く効率的にアクセスいただけます。HP ソフトウェア・サポート Web サイトのサポート範囲は次のとおりです。

- 関心のある技術情報の検索
- サポート・ケースとエンハンスメント要求の登録とトラッキング
- ソフトウェア・パッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HP サポート窓口の検索
- 利用可能なサービスに関する情報の閲覧
- 他のソフトウェア・カスタマーとの意見交換
- ソフトウェア・トレーニングの検索と登録

一部を除き、サポートのご利用には、HP Passport ユーザとしてご登録の上、サインインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。HP Passport ID を登録するには、 <https://softwaresupport.hp.com> にアクセスして、 **【登録】** をクリックしてください。

アクセス・レベルの詳細情報については、次の URL を参照してください。

<https://softwaresupport.hp.com/web/softwaresupport/access-levels>

## HP ソフトウェア・ソリューション & 統合 とベスト・プラクティス

『HP Software Solutions Now』（<https://h20230.www2.hp.com/sc/solutions/index.jsp>）にアクセスすると、HP ソフトウェア・カタログの製品がどのように連動するかについて調べたり、情報交換したり、ビジネス・ニーズを解決できます。

『Cross Portfolio Best Practices Library』（<https://hpln.hp.com/group/best-practices-hpsw>）にアクセスすると、ベスト・プラクティスのドキュメントおよび関連資料を参照できます。



# 目次

SiteScope の概要 .....	9
第1章: SiteScope の概要 .....	10
第2章: SiteScope Failover の概要 .....	16
 第1部: はじめに .....	17
第3章: SiteScope へのログイン .....	18
第4章: SiteScope の操作 .....	22
第5章: SiteScope の設定および管理 .....	63
第6章: 基本的な監視構造の作成 .....	69
第7章: テンプレートを使用した監視構造の作成 .....	70
第8章: ビューの選択およびフィルタ .....	71
 第2部: 概要と管理 .....	74
第9章: クイック検索 .....	75
第10章: SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ .....	78
第11章: 複数のグループやモニタに対するアクションの実行 .....	90
第12章: SiteScope オブジェクトのコピーと移動 .....	93
第13章: グローバル検索と置換 .....	96
第14章: SiteScope ツール .....	112
第15章: SiteScope 公開 API .....	171
第16章: SiteScope モバイル・アプリケーション .....	184
第17章: 正規表現 .....	187
 第3部: 統合 .....	204
第18章: 統合の概要 .....	205
第19章: 他のアプリケーションとの統合 .....	208
第20章: BSM サーバとの接続 .....	216
第21章: HP の負荷テスト製品との統合 .....	247
第22章: HP Application Lifecycle Management との統合 .....	250
 第4部: モニタとグループ .....	253
第23章: SiteScope のグループの作成 .....	254
第24章: SiteScope のモニタの作成 .....	261
第25章: カスタム・モニタの作成 .....	328
第26章: ベースラインを使用したモニタしきい値の設定 .....	335

第27章: 計算済みメトリックの作成 .....	369
第28章: ダイナミック・モニタリング・メカニズム .....	381
第29章: XML ドキュメントの監視 .....	384
<b>第5部: 統合モニタ .....</b>	<b>387</b>
第30章: 統合モニタの概要 .....	388
第31章: メトリック・データを収集する統合モニタの設定 .....	410
第32章: イベント・データを収集する統合モニタの設定 .....	447
第33章: チケット発行データを収集する統合モニタの設定 .....	466
第34章: データなしのトポロジのレポート .....	474
第35章: Network Node Manager の統合 .....	476
<b>第6部: リモート・サーバ .....</b>	<b>478</b>
第36章: リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定 .....	479
第37章: リモート Windows 監視用の WMI サービスの設定 .....	496
第38章: リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定 .....	499
第39章: オペレーティングシステム・アダプタを使用した拡張 UNIX 監視 .....	509
第40章: SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化 .....	517
第41章: セキュア・シェル (SSH) を使用したリモート監視の設定 .....	523
第42章: リモート・サーバのプロパティ・ページ .....	546
<b>第7部: プリファレンス .....</b>	<b>549</b>
第43章: 証明書管理 .....	550
第44章: 共通イベント・マッピング .....	556
第45章: 資格情報のプリファレンス .....	569
第46章: 電子メール・プリファレンス .....	577
第47章: イベント・コンソール・プリファレンス .....	584
第48章: 一般プリファレンス .....	590
第49章: HTTP プリファレンス .....	603
第50章: 高可用性プリファレンス .....	611
第51章: インフラストラクチャ・プリファレンス .....	622
第52章: 統合プリファレンス .....	669
第53章: ログ・プリファレンス .....	710
第54章: ページャ・プリファレンス (廃止) .....	717
第55章: スケジュール・プリファレンス .....	723
第56章: タグの検索 / フィルタ .....	730
第57章: SNMP プリファレンス .....	734
第58章: ユーザ管理プリファレンス .....	744
第59章: SiteScope での多言語化 .....	773
第60章: 認証方法 .....	779

<b>第8部: ユーザ定義のコンテンツ</b>	<b>791</b>
第61章: テンプレートの作成	792
第62章: コンテンツ・パッケージの作成	837
第63章: テンプレートとコンテンツ・パッケージのエクスポートおよびインポート	839
第64章: テンプレートのデプロイ	861
第65章: XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ	875
第66章: テンプレート変更の適用	891
第67章: HP Live Network での SiteScope コンテンツの共有	906
 <b>第9部: ソリューション・テンプレート</b>	 <b>909</b>
第68章: ソリューション・テンプレートのデプロイ	910
第69章: Active Directory ソリューション・テンプレート	920
第70章: AIX Host ソリューション・テンプレート	923
第71章: Hadoop クラスタ監視ソリューション・テンプレート	926
第72章: HP Quality Center ソリューション・テンプレート	931
第73章: HP QuickTest Professional License Server サーバ・ソリューション	942
第74章: HP Service Manager ソリューション・テンプレート	945
第75章: HP Vertica ソリューション・テンプレート	952
第76章: JBoss Application Server ソリューション・テンプレート	955
第77章: Linux Host ソリューション・テンプレート	961
第78章: Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート	964
第79章: Microsoft IIS ソリューション・テンプレート	971
第80章: Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート	975
第81章: Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレート	980
第82章: Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート	984
第83章: Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート	990
第84章: .NET ソリューション・テンプレート	993
第85章: Oracle Database Solution Templates	997
第86章: SAP ソリューション・テンプレート	1003
第87章: Siebel ソリューション・テンプレート	1007
第88章: Solaris Host ソリューション・テンプレート	1016
第89章: VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレート	1019
第90章: VMware Host ソリューション・テンプレート	1027
第91章: VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレート	1031
第92章: WebLogic ソリューション・テンプレート	1036
第93章: WebSphere ソリューション・テンプレート	1042
 <b>第10部: SiteScope でのデータの表示</b>	 <b>1047</b>
第94章: SiteScope ダッシュボード	1048
第95章: SiteScope 統合コンソール	1077
第96章: Multi-View	1080

第97章: イベント・コンソール .....	1102
<b>第11部: SiteScope サーバの状況 .....</b>	<b>1128</b>
第98章: SiteScope サーバの状況モニタ .....	1129
第99章: SiteScope サーバ統計 .....	1153
第100章: SiteScope 状況マップとパフォーマンス統計情報ログ .....	1226
<b>第12部: 警告 .....</b>	<b>1230</b>
第101章: SiteScope 警告の設定 .....	1231
第102章: 警告テンプレートのカスタマイズ .....	1286
第103章: スクリプト警告のスクリプトの記述 .....	1291
第104章: 警告, テンプレート, イベントで利用可能なプロパティ .....	1295
<b>第13部: レポート .....</b>	<b>1310</b>
第105章: SiteScope レポートの作成 .....	1311
第106章: サーバ中心のレポートの作成 .....	1357
<b>第14部: 予測解析 .....</b>	<b>1367</b>
第107章: 予測解析の設定 .....	1368
<b>ドキュメントに関するフィードバックの送信 .....</b>	<b>1392</b>

# SiteScope の概要

HP SiteScope は、分散 IT インフラストラクチャおよびアプリケーションの可用性とパフォーマンスを維持するために設計されたエージェントレス監視ソリューションです。SiteScope モニタは、さまざまな物理、仮想、クラウド・インフラストラクチャからサーバとアプリケーションの状況を収集します。この収集動作は、Web ベースのアーキテクチャを介して行われるため、実運用システム上にデータ収集エージェントをインストールする必要はありません。詳細については、「[SiteScope の概要](#)」(10ページ)を参照してください。

**ヒント:** 次の HP Video Gallery で、SiteScope アプリケーションのガイドとナレーション付きの概要が表示できます。<http://h20621.www2.hp.com/video-gallery/us/en/ssss/20308EBD-0975-4C42-9671-DF922B64E6D2/r/video/>。

SiteScope には、フル・エディションに加えて、次の各エディションも用意されています。

- **SiteScope Failover** : インフラストラクチャ監視用のフェールオーバー機能を実装できます。プライマリ・システムが異常停止したり、一時的に稼働を中止する場合に、自動的にプライマリ・システムの機能をスタンバイ・サーバに切り替えます。詳細については、「[SiteScope Failover の概要](#)」(16ページ)を参照してください。
- **SiteScope for Load Testing** : HP LoadRunner および HP Performance Center で提供されるこのエディションでは、LoadRunner および Performance Center ユーザは LoadRunner または Performance Center アプリケーションで SiteScope モニタを定義し、使用できます。詳細については、「[HP の負荷テスト製品との統合](#)」(247ページ)を参照してください。

# 第1章: SiteScope の概要

SiteScope モニタは、幅広いバックエンド・インフラストラクチャ・コンポーネントの主要なパフォーマンスの測定値を収集し、トポロジをレポートします。モニタは、ネットワーク環境でのシステムおよびサービスのパフォーマンスと可用性を自動的にテストするように個々に設定されています。

SiteScope 監視には、監視対象の環境のリアルタイム画像用のダッシュボードとともに警告およびレポート機能が含まれます。SiteScope は、IT インフラストラクチャの問題を検出するたびに警告を送信するように設定できます。さらに、SiteScope は、時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するモニタまたはモニタ・グループのレポートを作成できます。詳細については、「[SiteScope 監視モデル](#)」(10ページ)を参照してください。

組織全体にわたり類似する監視設定の基準を用いたモニタのデプロイを支援するために、テンプレートを定義する、または事前設定した SiteScope ソリューション・テンプレートを使用できます。テンプレートを使用することにより、各オブジェクトを個別に更新しなくても、グローバル変更と置換機能を使用して繰り返しデプロイし、簡単に更新可能な1つの構造に標準化された一連のモニタ・タイプと設定を開発および維持できます。

SiteScope にはまた、さまざまなメディアでイベント情報の通信と記録に使用できる警告テンプレート・タイプも用意されています。警告テンプレートは、組織のニーズに合わせてカスタマイズできます。

SiteScope の機能のリストについては、「[SiteScope の主な機能](#)」(11ページ)を参照してください。

**ヒント:** 次の HP Video Gallery で、SiteScope アプリケーションのガイドとナレーション付きの概要を確認できます。<http://h20621.www2.hp.com/video-gallery/us/en/ssss/20308EBD-0975-4C42-9671-DF922B64E6D2/r/video/>。

## SiteScope 監視モデル

SiteScope の Web 対応アーキテクチャでは、集中管理された拡張性の高い監視環境の作成と継続的な管理が可能です。

アーキテクチャは次の主要コンポーネントで構成されます。

- **ブラウザ・ベースのインタフェース:** エンド・ユーザのステータス情報要求、設定変更要求、アクセス制御を管理します。
- **スケジューラ:** モニタ、警告作成、レポート生成の実行を調整します。
- **グループ:** グループは監視アセットのコンテナです。グループはモニタの整理に使用され、サブグループを含む場合があります。グループはモニタよりも前に作成されます。
- **モニタ:** モニタは監視対象システムのパフォーマンスおよび可用性情報を収集します。サーバ・コンポーネント、主要なアプリケーション・プロセス、ログ・ファイル、ネットワーク・デバイス

などのステータスをチェックします。選択したメトリックスに基づいてデータも収集し、設定されたしきい値に対して正常、警告またはエラーのステータスを表示します。

- **警告** : 警告は、監視対象アセットのステータスが変化するとトリガされるアクションです。問題イベントや障害が発生すると必要なユーザに通知します。警告は、電子メール、ページャ、SMS（ショート・メッセージ・サービス）メッセージ、SNMPトラップなど、さまざまなメディアに送信できます。
- **レポート** : レポートは傾向把握および分析を目的とした監視対象データの履歴表現です。SiteScope では、クイック・モニタ・レポートから詳細な管理レポートまで、さまざまなレポートを提供します。レポートを使用して、傾向と運用パフォーマンスの追跡や問題のトラブルシューティングを行うことができます。

## SiteScope の主な機能

SiteScope には次の機能があります。

### エージェントレスのエンタープライズ対応アーキテクチャ

- **エンタープライズ対応アーキテクチャ** : 多数のシステムの同時監視を実現し、セキュリティ保護された接続をサポートします。
- **エージェントレス監視** : 監視対象のサーバ上にエージェント・ソフトウェアをデプロイすることなく監視を行います。この機能により、SiteScope のデプロイメントおよび保守は、ほかのパフォーマンス監視ソリューションに比べて非常に簡素です。
- **簡素なインストールとデプロイメント** : SiteScope は、サービスまたはプロセスとして稼動する1台のサーバ上にインストールされます。このため、インストールが迅速で、監視の設定も容易です。

### Web ベースのユーザ・インタフェース

- **直感的な管理** : SiteScope では、ユーザが使いやすいブラウザ・ベースのインタフェースで監視プラットフォームの表示と管理ができるため、監視環境の管理にかかる時間が短縮されます。詳細については、[「SiteScope の操作」\(22ページ\)](#)を参照してください。
- **統合コンソール** : 統合コンソールを使用すると、問題を特定して解決する能力を高めることができます。統合コンソールには、次のビューがあります。
  - **Ops ビュー** : イベント・コンソールと Multi-View を組み合わせて1つのビューを形成します。両者を並べて作業できるため、調査担当者は、選択したモニタまたはモニタ・グループに関連付けられたイベント、または選択したイベントに関連付けられたモニタを特定し、ドリル・ダウンしてトラブルシューティングを実行することにより、問題を分離および診断できます。詳細については、[「SiteScope 統合コンソール」\(1077ページ\)](#)を参照してください。
  - **イベント・コンソール** : SiteScope のイベント・コンソールを使用すると、単一のインタフェースから、監視対象環境のステータスのリアルタイム追跡、イベントの優先順位付けと配信、およびイベントのライフサイクル管理を実行できます。また、イベント履歴の詳細を確認

することもできます。イベント履歴は、以前の問題の解決方法を追跡したり、トレンドや隠れたパターンを見つけ出すのに便利です。詳細については、[「イベント・コンソール」\(1102ページ\)](#)を参照してください。

- **Multi-View** : IT インフラストラクチャに存在するあらゆる監視対象のステータスを単一のビューで確認できます。各個人の見方に合わせてさまざまな方法でオブジェクトをグループ化できます。Multi-View では、たとえば、SiteScope のグループやモニタを、ネストされた矩形のセットとして階層ツリー・マップに表示できます。その際、データ間の関係が失われることはありません。モニタをターゲット・リモート・サーバでグループ化して表示したり、カスタムの検索 / フィルタ・タグでモニタをグループ化して表示するといったことが可能です。Multi-View は、ネットワーク運用環境で全社規模のモニタ・ステータスを表示するのに理想的です。詳細については、[「Multi-View」\(1080ページ\)](#)を参照してください。

### 標準化されたモニタのテンプレートによるデプロイメントと更新

- **ユーザ定義のテンプレート** : SiteScope は再利用可能なテンプレートを作成して公開する機能をサポートします。これにより、類似する監視設定基準を用いて複数の IT 要素を設定およびデプロイできます。テンプレート変更適用ウィザードを使用すれば、広範な手動による更新を実行することなく、組織全体にわたり監視環境を速やかに更新できます。詳細については、[「テンプレートの作成」\(792ページ\)](#)を参照してください。
- **ソリューション・テンプレート** : SiteScope 提供のソリューション・テンプレートには、専用のモニタ、標準設定のメトリックとしきい値、事前のテスト、特定のアプリケーションやコンポーネントを監視するためのベスト・プラクティスといった形でさまざまな専門領域の知識が組み込まれています。詳細については、[「ソリューション・テンプレートのデプロイ」\(910ページ\)](#)を参照してください。
- **XML による自動デプロイメント** : SiteScope では、XML ファイルを使用してユーザ・インタフェースをバイパスしテンプレートをデプロイできます。これにより、単一操作で多数のモニタを導入することが可能となり、IT 部門は時間と経費を節約できます。詳細については、[「XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ」\(875ページ\)](#)を参照してください。

### インフラストラクチャのパフォーマンスと可用性の監視

- **設定済みのモニタ** : SiteScope には、使用率、応答時間、使用状況、リソース可用性などを監視する 100 個以上の設定済みのモニタが用意されています。詳細については、[「モニタとグループ」\(253ページ\)](#)を参照してください。
- **カスタマイズ可能モニタ** : SiteScope にはカスタム・モニタが用意されています。カスタム・モニタを使用して、新規のモニタ・タイプを作成したり、既存のモニタをカスタマイズしたりして SiteScope 環境を拡張できます。カスタム・モニタを使用することにより、HP のユーザやパートナー企業は、既存の SiteScope モニタではサポートされていない環境向けにソリューションを開発できます。カスタム・モニタを HP Live Network の HP SiteScope コミュニティで公開することにより、他のユーザと共有することもできます。詳細については、[「カスタム・モニタの作成」\(328ページ\)](#)を参照してください。
- **柔軟な構成** : 柔軟な構成により、ユーザの IT 環境の変化に合わせて SiteScope の監視設定を自動的に調整できます。SiteScope には、時間の経過に伴い自動的に更新されるさまざまな動的モニタ



が用意されています。これにより、仮想マシンが別のホスト・システムに移動した際に、カウンタとしきい値が追加および削除されます。また、監視データ履歴に基づいてしきい値が動的に変更されるベースライン設定もサポートされています。ダイナミック・モニタには「VMware ホスト・モニタ」、「VMware Datastore Monitor」、「汎用ハイパーバイザ・モニタ」、「Hadoop モニタ」、「HP Vertica JDBC モニタ」、「KVM モニタ」、「ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ」および「ダイナミック JMX モニタ」があります。

- **ベースライン管理** : SiteScope を使用して、ベースラインを作成したり、時間帯または日付に基づいて特定のしきい値をスケジュールできます。設定のために計算されたベースラインを実際のパフォーマンス状況に照らし合わせてテストして、計算されたベースラインによって削減されたエラーと警告を表示できます。グラフを使用して、パフォーマンスの改善の可能性を判断するために現在のしきい値設定と計算されたベースラインを比較できます。詳細については、「[ベースラインを使用したモニタしきい値の設定](#)」(335ページ)を参照してください。
- **カスタマイズ機能** : SiteScope では、カスタム・データ・フィールドと HTML センシティブな記述タグを使用して、カスタマイズしたグループとモニタを表示できます。さらに、SiteScope では、テンプレートとユーザ定義変数を使用して警告テキストとレポート設定のカスタマイズが可能です。詳細については、「[警告、テンプレート、イベントで利用可能なプロパティ](#)」(1295ページ)を参照してください。
- **自己監視** : SiteScope は自身の動作状況の主要要素を監視して、モニタ設定上の問題や重大なサーバ負荷を識別します。また、Business Service Management へのレポートが設定されている場合、自身の統合やデータのイベントも監視します。詳細については、「[SiteScope サーバの状況モニタ](#)」(1129ページ)を参照してください。

## 警告、通知、レポート

- **予防的警告** : カスタマイズ可能なしきい値に基づく警告機能により、問題が顕在化する前に修復できます。警告は、設定済みのしきい値と定義済みのスケジュールに基づいて、IT 管理者に送信されます。警告アクションには、電子メールの送信、SNMP (Simple Network Management Protocol) トラップ、スクリプトの実行など、いくつかのタイプがあります。詳細については、「[SiteScope 警告の設定](#)」(1231ページ)を参照してください。
- **サーバベースのレポート** : SiteScope は特定のサーバから複数の事前に選択したメトリックスを収集し、ご使用の環境内の任意のサーバの主要なパフォーマンス監視データに素早くアクセスできる単一のグラフに結合します。サーバベースのレポートの主な利点の1つは、サーバ関連の問題のトラブルシューティングのためにレポートをドリルダウンが可能なことです。詳細については、「[レポート](#)」(1310ページ)を参照してください。

## 予測解析

**予測解析** : 予測解析は、クリティカルなアプリケーションでの潜在的な問題を予測し、ビジネス・フローに影響する可能性がある問題について通知することによって、ビジネスに IT 問題が影響しないよう保護するのに役立ちます。SiteScope はベースライン計算と相関計算を使用してシステムの問題を分析し、根本原因分析を支援するよう詳細情報を提供して、ビジネス・フローに影響が及ぶ前に問題を予測できるようにします。詳細については、「[予測解析の設定](#)」(1368ページ)を参照してください。

## さまざまな HP ソフトウェアおよびサードパーティ製品との統合

SiteScope は、次に示す広範な HP ソフトウェアおよびサードパーティ製品と統合できます。

- **HP Business Service Management** :SiteScope は HP Business Service Management (BSM) のデータ・コレクタとして使用可能です。BSM は、エンド・ユーザ、ビジネス・プロセス、システムに関するデータを受信し、レポートおよび分析で使します。すべてのモニタ、または選択したモニタについて、SiteScope 監視データを BSM に送信できます。詳細については、「[BSM サーバとの接続](#)」(216ページ)を参照してください。
- **HP Operations Manager および Operations Management : (エージェントレス監視とエージェント・ベースの監視の組み合わせ)** :SiteScope を HP Operations Manager (HPOM) または Operations Management (OMi) と組み合わせて使用することにより、単一のコンソールを検出されたすべてのイベントのセントラル・レポジトリとして動作させることができます。SiteScope は、イベントを収集し、SiteScope サーバ上の HP Operations エージェントを使用してエージェント・データ・ストアにログを記録します。この情報は、HPOM/Operations Management に転送されます。詳細については、SiteScope ヘルプの『HP Operations Manager 製品との統合』を参照してください。
- **HP Performance Manager およびパフォーマンス・グラフ作成 : (パフォーマンスの監視時にエージェントレスとエージェント・ベースの両方の表示)** :SiteScope サーバ上の HP Operations Agent または BSM 内のプロファイル・データベース (パフォーマンス・グラフ作成へのレポート専用) を使用して、HP Performance Manager の SiteScope メトリック、および Operations Management のグラフ作成コンポーネントを表示できます。詳細については、SiteScope ヘルプの『HP Operations Manager 製品との統合』を参照してください。
- **その他の HP ソフトウェア製品** : データ統合により、SiteScope レポートの表示および SiteScope ユーザ・インタフェースのホスティングをすべて HP Performance Center 内で実行できます。SiteScope のシステム・レベルのパフォーマンスおよび可用性情報を HP Diagnostics 内で確認できます。他にも、SiteScope イベントとメトリックを Network Node Manager (NNMi) に送信する機能、HP Operations Orchestration との統合により SiteScope 内にモニタを自動作成する機能などが実現されています。また、SiteScope では、HP Application Lifecycle Management (ALM) との統合により、実運用環境からの監視データとテンプレートを共有して、負荷テスト担当エンジニアによるパフォーマンス・テストとアプリケーションのデプロイメントの計画作成を可能にします。さらには、SiteScope を HP LoadRunner と Performance Center ソフトウェアの監視基盤として使用することで、負荷テスト段階でのボトルネックの特定が容易になります。詳細については、「[統合の概要](#)」(205ページ)を参照してください。
- **Amazon CloudWatch** : SiteScope を使用して、SiteScope モニタ測定値データを Amazon CloudWatch サービスに報告できます。この統合を行うと、AWS がホストするアプリケーションの監視用に SiteScope を使用しているユーザは、SiteScope 測定値を Amazon CloudWatch サービスに報告できます。SiteScope 測定値データは、AWS の AutoScaling、報告、警告に使用できます。詳細については、「[Amazon CloudWatch 統合ブリファレンス](#)」(669ページ)を参照してください。

さまざまな SiteScope 統合を説明する図については、「[他のアプリケーションとの統合](#)」(208ページ)を参照してください。

## モバイル・アクセス

**どこからでも IT の状況を監視** : SiteScope のダウンロード可能な無償のアプリ (iPhone, iPad, iPod touch, および Android 携帯およびタブレット) を使用してモバイル・デバイスから SiteScope にアクセスできます。この機能により、HP SiteScope サーバを検索して各モニタとグループの統計情報を表示する、検索結果に対してアクションを実行して問題を軽減する、IT インフラストラクチャで問題が検出されたとき電子メール警告に回答する、選択したモニタまたはグループをお気に入り一覧に追加する、モニタ、グループ、または警告の特定期間における一時的なレポートを生成するといった作業を実行できます。詳細については、[「SiteScope モバイル・アプリケーション」 \(184ページ\)](#)を参照してください。

## 高可用性環境におけるミッションクリティカルなアプリケーション監視のためのフェールオーバー機能

**フェールオーバー機能** : SiteScope では、冗長性を高め、SiteScope サーバで可用性に関する問題が発生したとき自動的にフェールオーバー保護を実現するため、フェールオーバー機能をサポートしています。プライマリ HP SiteScope サーバが使用不能になると、セカンダリ・サーバが処理を引き継ぎ、監視が中断されないようにします。この機能は、ハードウェアを追加しなくても使用できます。また、中断発生時のロールバック機能を可能にするミラー化操作を利用しています。詳細については、[「SiteScope Failover の概要」 \(16ページ\)](#)を参照してください。

## 業界標準および政府認定プログラムの準拠

HP SiteScope では、業界標準および政府認定プログラムに準拠した業界をリードするインフラストラクチャ・モニタリング・ソフトウェアを提供できるように取り組んでいます。

- **共通基準認定** : SiteScope は、評価保証レベル (EAL) 2+ の共通基準認定の取得過程にあります。共通基準は IT 製品の評価における国際的に認識された ISO 標準です。
- **FIPS 140-2 コンプライアンス** : SiteScope は FIPS 140-2 対応モードで機能するように設定できます。FIPS 140-2 は、National Institute of Standards and Technology (NIST) が管理する暗号化モジュール検証プログラムで、暗号化モジュールのセキュリティ要件を指定します。

詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』(<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm) の「SiteScope の安全な稼動」の項を参照してください。

## 第2章: SiteScope Failover の概要

SiteScope Failover（自動ミラーリング）ソリューションを使用して、バックアップ、冗長性、フェールオーバーのメカニズムを使用できるようにすることにより、インフラストラクチャ監視用のフェールオーバー機能を実装できます。プライマリ・システムが異常停止したり、一時的に稼働を中止する場合に、自動的にプライマリ・システムの機能をスタンバイ・サーバに切り替えます。

SiteScope Failover のインストールおよび設定の詳細については、HP SiteScope Failover Guide（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）を参照してください。

**注:** SiteScope Failoverを使用するには、SiteScope フェールオーバー・ライセンス・ファイルが必要です。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「SiteScope のエディションおよび SiteScope のライセンス」の項を参照してください。

# 第1部: はじめに

本項では、SiteScope へのアクセス方法（「[SiteScope へのログイン](#)」(18ページ)）と、SiteScope ユーザ・インタフェースの操作方法（「[SiteScope の操作](#)」(22ページ)）について説明します。また、監視ソリューションの設定および管理の推奨フロー（「[SiteScope の設定および管理](#)」(63ページ)）と、SiteScope で監視の管理と追跡を行うためにフィルタとタグ付け機能を使用する際の推奨フロー（「[ビューの選択およびフィルタ](#)」(71ページ)）を提供します。

SiteScope での作業を開始しやすいようにするため、以下の推奨されるワークフローを参照してください。

- 「[基本的な監視構造の作成](#)」(69ページ): SiteScope で基本的な監視構造を作成する場合はこのワークフローを使用します。
- 「[テンプレートを使用した監視構造の作成](#)」(70ページ): 一括（エンタープライズ）デプロイメント用に標準化されたテンプレートを作成する場合はこのワークフローを使用します。

## 第3章: SiteScope へのログイン

SiteScope サーバへのネットワーク接続（イントラネットまたはインターネット）が可能なコンピュータから、サポートされている Web ブラウザまたは Windows プラットフォームの [スタート] メニューを使用して SiteScope にアクセスできます。または、SiteScope ログイン・ページを表示せずに直接特定の SiteScope サーバに移動できるサイレント・ログイン URL を使用することも可能です（詳細については、[「サイレント・ログイン」\(18ページ\)](#)を参照）。

正常に SiteScope を表示するための最小要件と、ブラウザの要件の詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「システム要件」セクションを参照してください。

### 学習事項

#### サイレント・ログイン

サイレント・ログイン URL を使用して SiteScope にアクセスできます。これにより、ログイン・ページをスキップし、サイレント・ログイン・アドレスを使用して特定のユーザ名とパスワードに対するユーザ・アカウントを直接開くことができます。

さらに、サイレント・ログインとブラウザのお気に入りのリストに保存したページ・オプション・ビューを併用すると、SiteScope の特定のグループまたはビューを直接表示できます。お気に入りのページ・オプション・ビューの設定の詳細については、[「共通ツールバー」\(24ページ\)](#)の「ページ・オプション」を参照してください。

サイレント・ログインを使用して SiteScope を起動するには、ユーザ・ログイン名およびパスワードを SiteScope 暗号化ツールを使用して暗号化し、暗号化した情報をサイレント・ログイン URL に入力する必要があります。タスクの詳細については、[「サイレント・ログインを使用して SiteScope にアクセスする方法」\(19ページ\)](#)を参照してください。

#### SiteScope にログインするときに表示される通知メッセージ

SiteScope 管理者は、SiteScope を有効にして、ユーザが SiteScope にログオンするときにログイン画面に表示される、カスタマイズしたメッセージを表示できます。管理者はメッセージのテキストを指定できます。たとえば、管理者はユーザが安全なシステムにログインしようとしていることをユーザに伝えることができます。

通知メッセージが表示されたら、SiteScope の使用に進む前に **[OK]** をクリックしてメッセージを確認します。

ログイン通知メッセージの有効化および設定の詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』の強化の項を参照してください。

## タスク

ブラウザまたは [スタート] メニューから SiteScope にアクセスする方法

- ブラウザから SiteScope にアクセスするには、SiteScope アドレスを Web ブラウザに入力します。標準アドレスは、`http://<サーバ名>:8080/SiteScope` です。
- [スタート] メニューから SiteScope にアクセスするには（Windows プラットフォームの場合のみ）、**[スタート] > [プログラム] > [HP SiteScope] > [HP SiteScope を開く]** をクリックします。

SiteScope を初めてデプロイする場合は、インタフェース要素の初期化のために遅延が生じます。SiteScope に接続すると、SiteScope の [ダッシュボード] ビューが開きます。

### ヒント:

- このアカウントとその権限の使用を制限するには、ユーザ名とログイン・パスワードを含めるように管理者アカウント・プロファイルを編集する必要があります。SiteScope によって SiteScope にアクセスする前にログイン・ページが表示されます。管理者ユーザにユーザ名およびパスワードが定義されていない場合、SiteScope はログイン・ページをスキップして自動的にログインします。管理者アカウント・プロファイルの編集方法の詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」\(744ページ\)](#)を参照してください。
- ユーザ名とログイン・パスワードを含めるように統合ビュー・アカウント・プロファイルを変更することを推奨します。

サイレント・ログインを使用して SiteScope にアクセスする方法

このタスクでは、サイレント・ログイン URL の作成方法と、SiteScope のログイン・ページを表示せずに指定した SiteScope サーバに直接アクセスする方法を説明します。

### 1. ユーザ・プロファイルの作成

[プリファレンス] コンテキストで、**[ユーザ管理プリファレンス]** メニューをクリックし、ユーザ・アカウントを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[ユーザ管理プリファレンス\] ページ」\(748ページ\)](#)を参照してください。

### 注:

- 管理者アカウントは標準設定のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。ほかのアカウントを作成するには、ユーザ・ログイン名およびパスワードを含めるように最初に管理者アカウント・プロファイルを編集する必要があります。
- 次のいずれかの特殊文字をパスワードで使用しているユーザの場合、サイレント・ログインはサポートされません。'（引用符）、"（二重引用符）、/（スラッシュ）、\（バックスラッシュ）および'（アポストロフィ）。



**例：**

表示名「一般ユーザ」を持つユーザ・プロファイルが、ログイン名 Regular、パスワード Regular で追加されました。

メイン設定

表示ユーザ名: Regular User

ログイン名: Regular

パスワード: .....

パスワードの確認: .....

LDAP サービス プロバイダ:

LDAP セキュリティ プリンシパル:

☐ ログインを無効にする

許可されているグループ: SiteScope

権限

2. ユーザ権限の設定 - オプション

【新規ユーザ】 / 【ユーザの編集】 ダイアログ・ボックスの【権限】セクションで、ユーザのアクション権限を設定します。標準設定では、新規ユーザにはほかのユーザのプリファレンスの変更または削除権限を除く、すべての権限が与えられます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[権限](#)」(757ページ)を参照してください。

3. ユーザ・プロファイルの暗号化

ユーザ・ログイン名およびパスワードを暗号化します。

- コマンド・プロンプトで、ログイン名についてコマンド  
**< SiteScope のルート・ディレクトリ > \tools\AutoDeployment\encrypt\_password.bat < ログイン名 >** を実行します。

例を次に示します。

C:\SiteScope\tools\AutoDeployment\encrypt\_password.bat Regular  
Regular の暗号化値は (sisp)uq1zrGl1lms= です。

- 必要に応じて、非標準の URL 文字をエンコードします。非標準の URL 文字のエンコードに関する情報は、一般的に公開されているさまざまな Web サイトに記載されています。1 文字の URL エンコーディングは、% 記号とそれに続く 2 桁の文字表現で構成されます。



この例では、= が予約文字であるため %3D で置き換えます。その結果、Regular のエンコード値は (sisp)uq1zrGl1lms%3D になります。

- c. 暗号化値をサイレント・ログイン URL に追加できるように保存します。
  - d. ログイン・パスワードについて暗号化プロセスを繰り返します（ログイン名と異なる場合）。
4. ブラウザに SiteScope サイレント・ログイン URL を入力します。
- ユーザ・プロフィール用の SiteScope サイレント・ログイン URL を作成して、その URL を Web ブラウザに入力します。次の URL 形式を使用します。

```
http:// <サーバ名> :8080/SiteScope?sis_silent_login_type=encrypted&login=  
<暗号化ログイン名>&password=<暗号化パスワード>  
<暗号化ログイン名> と <暗号化パスワード> は暗号化したログイン名とパスワードで置き換  
えます。
```

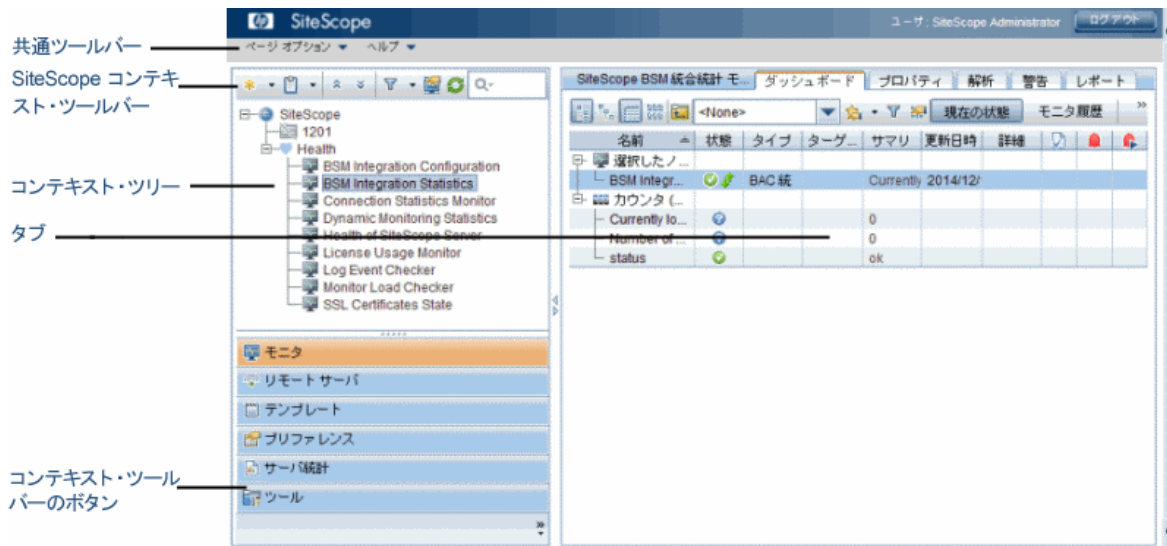
#### 5. 結果

SiteScope はログイン・ページをスキップし、指定されたユーザ名およびパスワードに対するユーザ・アカウントを直接開きます。

**注:** ログイン名およびパスワード・パラメータに入力した値がどちらも存在しないか見つからない場合、または認証が失敗した場合は、SiteScope のログイン・ページが表示されます。

## 第4章: SiteScope の操作

SiteScope に接続すると、SiteScope の「ダッシュボード」ビューが次のように開きます。ユーザ名を入力して SiteScope にログインすると、ウィンドウの右上隅にユーザ名が表示されます。



## 学習事項

### 本項の内容

- ・「重要なナビゲーション要素」(22ページ)
- ・「コンテキスト・ツリーでのアクションの操作と実行」(23ページ)
- ・「SiteScope キーボード・ショートカット」(23ページ)

### 重要なナビゲーション要素

SiteScope ウィンドウには、次の主要な要素が含まれます。

- ・ **SiteScope 共通ツールバー** : ページ・オプション、ドキュメント、追加のリソースにアクセスできます。このツールバーはウィンドウの上部にあります。詳細については、「[共通ツールバー](#)」(24ページ)を参照してください。
- ・ **SiteScope コンテキスト・ツールバー** : 選択した SiteScope コンテキスト内でよく使用されるコマンドのボタンが含まれます。詳細については、「[コンテキスト・ツールバーのボタン](#)」(25ページ)を参照してください。
- ・ **SiteScope コンテキスト・ツリー** : ツリー構造で SiteScope オブジェクトを作成、管理できます。詳細については、「[モニタ・ツリー](#)」(30ページ)、「[リモート・サーバ・ツリー](#)」(41ページ)、「[テンプレート・ツリー](#)」(42ページ)を参照してください。

- **SiteScope コンテキスト・ボタン** : SiteScope のモニタ, リモート・サーバ, テンプレート, プリファレンス, サーバ統計, 診断ツールにアクセスできます。詳細については, [「コンテキスト・ボタン」 \(29ページ\)](#)を参照してください。

**注:** SiteScope の以前のバージョンで利用できた SiteScope クラシック・インタフェース (URL は `http://<sitescope_host>:8888`) は, SiteScope の管理には使用できなくなりました。詳細については, 『SiteScope デプロイメント・ガイド』 (<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm) の「SiteScope クラシック・インタフェース」の項を参照してください。

## コンテキスト・ツリーでのアクションの操作と実行

コンテキスト・ツリーの操作, アクションの実行, オブジェクト・プロパティの編集にはいくつかの方法があります。

コンテキスト・ツールバーを使用してアクションを実行するか, またはコンテキスト・ツリー内でオブジェクトを選択して右クリックし, そのオブジェクトのメニュー・オプションにアクセスできます。たとえば, モニタ・ツリーで SiteScope ノードを右クリックした場合, その SiteScope ノードに対して実行できるアクションのみが表示されたメニューから選択します。複数のグループおよびモニタに対してアクションを実行することもできます。詳細については, [「複数のグループやモニタに対するアクションの実行」 \(90ページ\)](#)を参照してください。

コンテキスト・ツリー・オブジェクトとツリーのオブジェクトごとに利用可能なショートカット・メニュー・オプションの詳細については, [「モニタ・ツリー」 \(30ページ\)](#), [「リモート・サーバ・ツリー」 \(41ページ\)](#), [「テンプレート・ツリー」 \(42ページ\)](#), [「プリファレンス・メニュー」 \(52ページ\)](#), [「\[サーバ統計\] メニュー」 \(54ページ\)](#), [「\[ツール\] メニュー」 \(56ページ\)](#)を参照してください。

## SiteScope キーボード・ショートカット

次のコマンドは, モニタ・ツリー, テンプレート・ツリー, リモート・サーバ・ツリーで対応するショートカット・キーを押して実行できます。

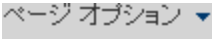



ショートカット・キー	詳細
CTRL+A	【新規警告】ダイアログ・ボックスが開き, 新規警告を作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については, <a href="#">「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」 (1256ページ)</a> を参照してください。
CTRL+C	選択した項目をクリップボードにコピーします。
CTRL+D	選択した項目を削除します。
CTRL+F	【新規フィルタ】ダイアログ・ボックスが開き, 新規フィルタを作成できま

ショートカット・キー	詳細
	す。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」 (82ページ)</a> を参照してください。
CTRL+G	[新規グループ] ダイアログ・ボックスが開き、新規グループを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」 (258ページ)</a> を参照してください。
CTRL+J	[テンプレートの選択] / [グループの選択] ダイアログ・ボックスが開き、デプロイするテンプレート、またはテンプレートのデプロイ先にするグループを選択できます。[テンプレートの選択] のユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」 (325ページ)</a> を参照してください。[グループの選択] のユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」 (868ページ)</a> を参照してください。
CTRL+M	[新規モニタ] ダイアログ・ボックスが開き、新規モニタを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「新規モニタ・ダイアログ・ボックス」 (274ページ)</a> を参照してください。
CTRL+R	[フィルタ] ダイアログ・ボックスで設定したフィルタをクリアします。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」 (82ページ)</a> を参照してください。
CTRL+V	クリップボードの内容を選択した場所に貼り付けます。
CTRL+X	選択した項目を切り取ってクリップボードに置きます。
削除	選択内容を削除します。
F5	ツリーを最新の表示に更新します。

## UI の説明

### 共通ツールバー

SiteScope共通ツールバーは、SiteScope ウィンドウの上部にあり、すべてのコンテキストからアクセスできます。次のボタンが含まれます。

UI 要素	詳細
	<p>次のページ・オプションを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>お気に入りに追加</b> : 現在の SiteScope ビューをブラウザのお気に入りのリストに追加できます。</li> <li>・ <b>ユーザのお気に入りにレイアウトを保存</b> : 現在のビューを特定の SiteScope ユーザの標準設定のレイアウトとして保存できます。</li> </ul>
	<p>SiteScope のヘルプ、特定のウィンドウのコンテキスト・センシティブ・ヘルプ、その他の追加オンライン・リソースにアクセスできます。</p> <p>また、ほとんどのページまたはダイアログ・ボックスでユーザ・インタフェース要素の説明を表示できます。この機能を有効にするには、特定のページまたはダイアログ・ボックスで <b>【クイック ヘルプ】</b>  ボタンをクリックし、マウス・ポインタを要素ボックスの上に置いてヒントの説明を表示します。この機能を利用不可にするには、<b>【クイック ヘルプ】</b> ボタンをもう一度クリックします。</p>
	SiteScope セッションからログアウトします。


モニタ・ツリーのビューをカスタマイズして、作業中の SiteScope 要素のみを表示することができます。また、検索/フィルタ・タグをグループ、モニタ、レポート、警告に割り当てて、選択内容をさらに絞り込むこともできます。このトピックの詳細については、[「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」\(78ページ\)](#)を参照してください。






SiteScope では、グローバル置換を使用して複数のモニタ、グループ、または複数の SiteScope を対象にモニタ設定を変更できます。グローバル置換のユーザ・インタフェースの詳細については、[「グローバル検索と置換」\(96ページ\)](#)を参照してください。







### コンテキスト・ツールバーのボタン



左上のペインの上に表示されるコンテキスト・ツールバーから、**【モニタ】**、**【リモート サーバ】**、**【テンプレート】** ビューの共通の機能を実行できます。

SiteScope ビューによっては使用できないツールバー・ボタンがあります。各ビューの詳細については、[「モニタ・ツリー」\(30ページ\)](#)、[「リモート・サーバ・ツリー」\(41ページ\)](#)、[「テンプレート・ツリー」\(42ページ\)](#)を参照してください。

UI 要素	詳細
	<b>新規</b> :SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ、テンプレート）を関連するツリーに追加する。追加できるオブジェクトはコン

UI 要素	詳細
	テキストによって異なります。
	<p><b>編集</b> : 次の編集オプションのいずれかを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>コピー</b> : 選択したオブジェクトのコピーを作成する。</li> <li>・ <b>貼り付け</b> : オブジェクトをツリー内の選択した場所にコピーまたは移動する。</li> <li>・ <b>切り取り</b> : 選択したオブジェクトをツリー内の別の場所に移動する。</li> <li>・ <b>削除</b> : 選択したオブジェクトをツリーから削除する。</li> </ul>
	<p><b>削除</b> : 選択したリモート・サーバをツリーから削除する。</p> <p><b>注</b> : リモート・サーバ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p><b>テスト</b> : サーバとの接続をテストする。</p> <p><b>注</b> : リモート・サーバ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p><b>詳細テスト</b> : リモート・サーバの実行コマンドの結果を表示するテストを実行する。このテストにより、定義済みユーザの権限を確認できます。</p> <p><b>注</b> : UNIX サーバのリモート・サーバ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p><b>フィルタ</b> : モニタ・ツリーをフィルタし、定義した基準を満たす SiteScope オブジェクトのみを表示する。</p> <p>フィルタ・オプションを次から選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>新規フィルタ</b>。フィルタを作成できる [新規フィルタ] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス</a>」(82ページ)を参照してください。</li> <li>・ <b>フィルタをクリア</b>。フィルタ設定をクリアする。</li> <li>・ <b>&lt;既存のフィルタのリスト&gt;</b> : 既存のフィルタのリストを表示する。次のオプションを指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>適用</b> : 左側のツリー表示枠にフィルタを適用する。</li> </ul> </li> <li>・ <b>編集</b> : フィルタを編集できる [フィルタの編集] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス</a>」(82ページ)を参照してください。</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p>• <b>削除</b>: フィルタ・リストからフィルタを削除する。</p> <p><b>注</b>: モニタ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p><b>モニタとグループの管理</b>: モニタ・ツリー内の複数のグループおよびモニタに対するアクション（コピー、移動、削除、モニタの実行、モニタの有効化 / 無効化、関連する警告の有効化 / 無効化）を実行できる。また、モニタ・ツリー内のオブジェクトのリストをフィルタできます。[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスの詳細については、<a href="#">「複数のグループやモニタに対するアクションの実行」(90ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>注</b>: モニタ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p><b>すべて折りたたみ</b>: ツリーの分岐をすべて折りたたむ。</p> <p><b>注</b>: モニタおよびテンプレート・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p><b>すべて展開</b>: ツリーの分岐をすべて展開する。</p> <p><b>注</b>: モニタおよびテンプレート・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p><b>更新</b>: ツリーのデータを更新する。</p>
	<p><b>すべて表示</b>: 非表示のツールバー・ボタンを表示する。</p>
	<p><b>クイック検索</b>: モニタ、テンプレート、リモート・サーバ、または（一部の参照可能な一部のカウンタ・モニタのモニタ・プロパティの）カウンタ・ツリーの設定オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、カウンタ）内で、特定の名前または値を検索できます。</p> <p>ボックスの左端をクリックすると、フィルタ・オプションのドロップダウン・メニューが開きます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>【大文字と小文字を区別】</b>を選択すると、入力したとおりのフィルタ文字列が検索されます。<b>【大文字と小文字を区別しない】</b>を選択すると、フィルタ文字列の大文字と小文字は区別されません。</li> <li>• <b>【ワイルドカードを使用】</b>を選択すると、フィルタ文字列にワイルドカード記号 (*) を使用できます。検索項目の一部分だけの入力で検索できるようにするために、検索文字列にアスタリスク (*) を使用できます。</li> <li>• <b>【はじめがマッチする】</b>を選択すると、フィルタ文字列をプロパティの名前または値の先頭から検索します。<b>【Match exactly】</b>を選択すると、完全に一致するフィルタ文字列が検索されます。<b>【いずれかがマッチする】</b>を選択</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p>すると、プロパティ内の任意の場所でフィルタ文字列が検索されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>［リーフノードにのみ一致］</b> を選択すると、ツリーのリーフ・ノード（モニタと空のグループのみ）内のフィルタ文字列が検索されます。クリアすると、すべてのノードが検索されます。</li> <li>・ <b>［このないノードを非表示］</b> を選択すると、フィルタ文字列に一致するリーフ・ノードがないグループ（空のグループ）が非表示になります。</li> <li>・ <b>［祖先のいずれかがマッチする場合、子を保持］</b> を選択すると、フィルタ文字列と一致するグループに含まれるすべての子ノードが（子ノード自体が検索文字列に一致していなくても）表示されます。</li> <li>・ <b>［自動フィルタの使用］</b> を選択すると、検索テキストフィールドに文字が入力されると自動的に検索されます。自動フィルタが実行されるまでの遅延を、<b>［プリファレンス］</b> &gt; <b>［インフラストラクチャ プリファレンス］</b> &gt; <b>［一般設定］</b> &gt; <b>［クイック検索自動フィルタ遅延 (ミリ秒)］</b> で設定できます。標準設定の遅延は 800 ミリ秒 (0.8 秒) です。<b>［自動フィルタの使用］</b> が選択されていない場合は、検索を実行するたびに Enter キーを押す必要があります。</li> </ul> <p><b>ヒント：</b> 高負荷環境では、<b>［クイック検索自動フィルタ遅延］</b> の遅延時間を増やすか、<b>［自動フィルタの使用］</b> オプションを無効することをお勧めします。</p> <p><b>注：</b> フィルタをツリーに適用すると、検索は現在表示されているレコードに制限されます。</p>
	<p><b>パネルを表示/非表示：</b>（左側と右側の表示枠の間）ツリーを表示または非表示にし、右側の表示枠を展開または縮小する。</p>
	<p>（コンテキスト・メニューの下）クリックしてコンテキスト・ボタンの表示を設定する。次のオプションを指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>ボタン表示を増やす：</b> クリックすると、次に表示率の高い SiteScope コンテキスト・ボタンが左側の表示枠に表示される。このボタンは、一部のコンテキスト・ボタンが表示されていない場合にのみ表示されます。</li> <li>・ <b>ボタン表示を減らす：</b> クリックすると、表示率の最も低い SiteScope コンテキスト・ボタンが左側の表示枠で非表示になる。このボタンは、少なくとも 1 つのコンテキスト・ボタンが表示されている場合にのみ表示されます。</li> <li>・ <b>オプション：</b> SiteScope コンテキスト・ボタンを表示する順序を選択する。順序を並べ替えるには、<b>［上へ移動］</b> ボタンと <b>［下へ移動］</b> ボタンを使用します。左側の表示枠でボタンを非表示にするには、コンテキストのチェック・ボックスをクリアします。標準設定では、すべてのコンテキスト・ボタ</li> </ul>



UI 要素	詳細
	<p>ンが選択されます（左側の表示枠に表示されます）。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>ボタンの追加と削除</b>：コンテキスト・ボタンの表示 / 非表示の状態を表示する。標準設定では、すべてのコンテキスト・ボタンが選択されます（左側の表示枠に表示されます）。ボタンを非表示にするには、コンテキストのチェック・マークをクリアします。</li></ul>

コンテキスト・ツリーとメニュー・オプション



- ・ [「モニタ・ツリー」 \(30ページ\)](#)
- ・ [「リモート・サーバ・ツリー」 \(41ページ\)](#)
- ・ [「テンプレート・ツリー」 \(42ページ\)](#)
- ・ [「プリファレンス・メニュー」 \(52ページ\)](#)
- ・ [「\[サーバ統計\] メニュー」 \(54ページ\)](#)
- ・ [「\[ツール\] メニュー」 \(56ページ\)](#)





タブ

- ・ [\[ダッシュボード\] タブ](#) ( [「SiteScope ダッシュボード」 \(1048ページ\)](#)を参照)
- ・ [\[プロパティ\] タブ](#) ( [「共通モニタ設定」 \(290ページ\)](#)を参照)
- ・ [「\[解析\] タブ」 \(1386ページ\)](#)
- ・ [「\[警告\] タブ」 \(60ページ\)](#)
- ・ [「\[レポート\] タブ」 \(61ページ\)](#)

コンテキスト・ボタン

SiteScope には次のコンテキストがあり、左側の表示枠から使用できます。

UI 要素	詳細
 <b>モニタ</b>	モニタ・ツリーで表された階層で SiteScope グループおよびモニタの作成、管理できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「モニタ・ツリー」 (30ページ)</a> を参照してください。
 <b>リモート サーバ</b>	SiteScope がリモートの Windows 環境と UNIX 環境で実行されているシステムとサービスを監視できるように、接続プロパティを設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「リモート・サーバ・ツリー」 (41ページ)</a> を参照してください。

UI 要素	詳細
 テンプレート	テンプレートを使用して、標準化した監視パターンを、インフラストラクチャの複数の要素へデプロイできます。事前に設定された SiteScope ソリューション・テンプレートを使用することも、独自のテンプレートを作成および管理することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「テンプレート・ツリー」 (42ページ)</a> を参照してください。
 プリファレンス	SiteScope 内のほとんどの管理タスクに関連する特定のプロパティおよび設定値を設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「プリファレンス・メニュー」 (52ページ)</a> を参照してください。
 サーバ統計	主要な SiteScope サーバ・パフォーマンス測定値を表示できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[サーバ統計] メニュー」 (54ページ)</a> を参照してください。
 ツール	SiteScope の問題のトラブルシューティングや、モニタ設定に役立つ診断ツールを表示できます。利用可能なツールの詳細については、 <a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a> を参照してください。









## モニタ・ツリー

モニタ・ツリーは、ネットワーク環境内のシステムとサービスの体系を表します。ツリーには、インフラストラクチャ内のコンテナとオブジェクトが含まれます。「ショートカット・メニュー・オプション」では、モニタ・ツリーの各オブジェクトで利用できるショートカット・メニュー・オプションについて説明します。

アクセス方法	<b>【モニタ】</b> コンテキストを選択します。モニタ・ツリーが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>ツリーのルート・ノードは SiteScope コンテナである。モニタ・ツリーには、SiteScope ノードが1つだけ存在します。SiteScope ノードの下にツリーにその他の要素をすべて追加します。</li><li>ノードを選択し、ポップアップ検索ボックスに検索する文字を入力して、モニタ・ツリー内のオブジェクトを検索できる。検索ボックスを閉じるには、Esc キーをクリックします。</li></ul>
関連情報	<a href="#">「モニタとグループ」 (253ページ)</a>

## モニタ・ツリー・オブジェクト

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<p>個々の SiteScope サーバを表します。</p> <p><b>親:</b> エンタープライズ・ノードまたはコンテナ。</p> <p><b>ツリーへの追加方法:</b> 空の SiteScope プロファイルをインポートまたは追加します。</p>
	<p>SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない）を表します。</p> <p>モニタ・グループまたはサブグループに警告が設定されている場合、グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>モニタ・グループまたはサブグループに管理レポートが設定されている場合、グループ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p> <p><b>親:</b> SiteScope または SiteScope グループ。</p> <p><b>ツリーへの追加方法:</b> グループが定義されている SiteScope を使用して作成、またはインポートします。</p>
	<p>SiteScope モニタ（有効/無効）を表します。</p> <p>モニタに警告が設定されている場合、モニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>モニタに管理レポートが設定されている場合、モニタ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p> <p><b>親:</b> SiteScope グループまたはサブグループ、テンプレート、またはソリューション・テンプレート。</p> <p><b>ツリーへの追加方法:</b> モニタが設定されている SiteScope を使用して作成またはインポートする。</p>
	<p>SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる利用可能な状況モニタの集合を表します。</p> <p><b>親:</b> SiteScope.</p> <p><b>ツリーへの追加方法:</b> オブジェクトで SiteScope 自動的に追加されます。</p>

[SiteScope] のショートカット・メニュー・オプション  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
ベースライン設定	<p>SiteScope の下にあるすべてのモニタで、応答時間の変動やインフラストラクチャのパフォーマンスの監視に使用するベースラインを作成できる。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• <b>計算</b> : モニタを選択し、ベースラインの計算に使用する関連時間とスケジュールを指定する。また、ベースラインの順守レベルを選択、微調整し、境界を定義できます。</li><li>• <b>レビューと有効化</b> : 計算したモニタとベースライン・データのサマリを表示する。現在のモニタ設定の保存、失敗した操作の表示と再試行、ベースライン測定値グラフの表示、ベースライン設定の適用もできます。</li><li>• <b>削除</b> : ベースラインしきい値を削除、またはベースラインを計算した後に再計算できる。</li><li>• <b>状態レポート</b> : SiteScope の下にあるすべてのモニタのベースラインの状態に関する情報を表示する。</li></ul> <p>このトピックの詳細については、<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」 (335ページ)</a>を参照してください。</p>
テンプレートのデプロイ	<p>グループにデプロイするテンプレートを選択できる [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「 [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」 (325ページ)</a>を参照してください。</p>
CSV を使用してテンプレートをデプロイ	<p>CSV ファイルを使用してグループにデプロイするテンプレートを選択できる [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「 [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」 (325ページ)</a>を参照してください。</p>
すべて展開	<p>SiteScope の下のすべてのサブツリーを開きます。</p>
グローバル検索と置換	<p>[グローバル検索と置換] ウィザードを開く。このウィザードでは、モニタ、警告、グループ、プリファレンス、警告アクション、レポートのプロパティのグローバル検索と置換を実行できます。このトピックの詳細については、<a href="#">「グローバル検索と置換」 (96ページ)</a>を参照してください。</p>
モニタ・デプロイメント・ウィザード	<p>このメニュー項目は、BSM のシステム可用性管理 (SAM) から SiteScope にアクセスするユーザのみが使用できる。[モニタ デプロイメント ウィザード] が開きます。このトピックの詳細については、BSM ヘルプにあるBSM アプリケー</p>

メニュー項目	詳細
	ション管理ガイドの「モニタ・デプロイメント・ウィザード」を参照してください。
<b>【新規作成】 &gt; 【警告】</b>	SiteScope の新しい警告を定義できる【新規警告】ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、 <a href="#">「SiteScope 警告の設定」(1231ページ)</a> を参照してください。
<b>【新規作成】 &gt; 【グループ】</b>	新しい SiteScope グループを定義できる【新規グループ】ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「【新規 SiteScope グループ】ダイアログ・ボックス」(258ページ)</a> を参照してください。
<b>貼り付け</b>	選択した（事前にコピーまたは切り取った）SiteScope オブジェクトを SiteScope ノードに貼り付けます。
<b>別の SiteScope から貼り付ける</b>	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できます。別の SiteScope から選択した（事前にコピーまたは切り取った）SiteScope オブジェクトを SiteScope ノードに貼り付けます。
<b>【レポート】 &gt; 【管理/クイック/モニタ/警告】</b>	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。これらのレポートの詳細については、 <a href="#">「SiteScope レポートの作成」(1311ページ)</a> を参照してください。
<b>レポート &gt; サーバ中心</b>	モニタの【サーバ中心のレポートを有効化】チェックボックスが選択されているという条件のもとで、Microsoft Windows リソースまたは Unix リソースによってリモート・サーバについてサーバ中心のレポートを作成することができます。詳細については、 <a href="#">「サーバ中心のレポートの作成」(1357ページ)</a> を参照してください。
<b>【レポート】 &gt; 【BSM 設定変更レポート】</b>	このメニュー項目は、SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できます。BSM の設定変更のログが表示されます。詳細については、 <a href="#">「SiteScope レポートの作成」(1311ページ)</a> を参照してください。
<b>ツール</b>	特定のモニタの設定または編集時に利用可能です（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限を付与されたユーザのみ）。ツールが利用可能な場合には、クリックしてツールを開きモニタの既存のデータを入力として実行します。テスト結果は【結果】表示枠に表示されます。利用可能なツールの詳細については、 <a href="#">「SiteScope ツール」(112ページ)</a> を参照してください。

## グループのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
ベースライン設定	<p>グループ内のすべてのモニタで、応答時間の変動やインフラストラクチャのパフォーマンスの監視に使用するベースラインを作成できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>計算</b> : グループからモニタを選択し、ベースラインの計算に使用する関連時間とスケジュールを指定できます。また、ベースラインの順守レベルを選択、微調整し、境界を定義できます。</li> <li>・ <b>レビューと有効化</b> : グループの計算したモニタとベースライン・データのサマリを表示します。現在のモニタ設定の保存、失敗した操作の表示と再試行、ベースライン測定値グラフの表示、ベースライン設定の適用もできます。</li> <li>・ <b>削除</b> : ベースラインしきい値を削除、またはベースラインを計算した後に再計算できる。</li> <li>・ <b>状態レポート</b> : グループ内のすべてのモニタのベースラインの状態に関する情報を表示します。</li> </ul> <p>このトピックの詳細については、<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」(335ページ)</a>を参照してください。</p>
コピー	<p>グループとその内容（モニタ、警告、レポート）をモニタ・グループまたはテンプレートにコピーする。</p> <p><b>注</b> : ベースラインしきい値が設定されているモニタを含むグループをコピーすると、ベースラインしきい値は静的しきい値（現在のパーセンタイル値）に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。</p>
別の SiteScope にコピーする	<p>このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できます。別の SiteScope のグループとその内容（モニタ、警告、レポート）を SiteScope ノードのモニタ・グループまたはテンプレートにコピーします。</p> <p><b>注</b> : 依存関係のある複数のモニタをほかの SiteScope にコピーする場合、モニタ間の依存関係を保持する必要がある場合は、グループ・コンテナと一緒にそれらをコピーします。</p>
テンプレートにコピー	<p>グループとその内容（モニタ、警告、レポート）をテンプレート・グループにコピーする。このトピックの詳細については、<a href="#">「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」(811ページ)</a>を参照してください。</p>

メニュー項目	詳細
切り取り	<p>グループとその内容（モニタ、警告、レポート）またはモニタとその内容（警告とレポート）をモニタ・グループに移動する。</p> <p><b>注：</b> ベースラインしきい値が設定されているモニタを含むグループを移動すると、ベースラインしきい値は静的しきい値（現在のパーセンタイル値）に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。</p>
削除	<p>グループを削除する。</p> <p><b>注：</b> コンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、グループは削除できません。依存関係があるグループを削除するには、各依存関係の <b>警告ターゲット</b> と <b>レポートのターゲット</b> からグループを削除してから、グループを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるグループは削除できます。</p>
テンプレートのデプロイ	<p>グループにデプロイするテンプレートを選択できる <b>テンプレートの選択</b> ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「テンプレートの選択」ダイアログ・ボックス</a> (325ページ)を参照してください。</p>
CSV を使用してテンプレートをデプロイ	<p>CSV ファイルを使用してグループにデプロイするテンプレートを選択できる <b>テンプレートの選択</b> ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「テンプレートの選択」ダイアログ・ボックス</a> (325ページ)を参照してください。</p>
モニタの有効化/無効化	<p>モニタ・プロパティの設定に関係なく、グループ内のモニタを有効化または無効化する <b>グループ内のモニタの有効化/無効化</b> ダイアログ・ボックスを開きます。 <b>モニタを無効化</b> を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って <b>モニタを有効化</b> を選択するまでモニタは無効になります。 <b>グループ内のモニタの有効化/無効化</b> のユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「グループ内のモニタの有効化/無効化」ダイアログ・ボックス</a> (1063ページ)を参照してください。</p>
すべて展開	<p>グループの下のすべてのサブツリーを開く。</p>
グローバル検索と置換	<p><b>グローバル検索と置換</b> ウィザードを開く。このウィザードでは、モニタ、警告、グループ、プリファレンス、警告アクション、レポートのプロパティのグローバル検索と置換を実行できます。このトピックの詳細については、<a href="#">「グローバル検索と置換」</a> (96ページ)を参照してください。</p>
モニタ・デプロ	<p>このメニュー項目は、BSM のSAM管理から SiteScope にアクセスするユーザの</p>



メニュー項目	詳細
イメント・ウィザード	みが使用できる。[モニタ デプロイメント ウィザード] が開きます。このトピックの詳細については、BSM ヘルプにあるBSM アプリケーション管理ガイドの「モニタ・デプロイメント・ウィザード」を参照してください。
【新規作成】 > 【警告】	グループの新しい警告を定義できる [新規警告] ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、 <a href="#">「SiteScope 警告の設定」(1231ページ)</a> を参照してください。
【新規作成】 > 【グループ】	新しい SiteScope グループを定義できる [新規グループ] ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」(258ページ)</a> を参照してください。
【新規作成】 > 【モニタ】	新しい SiteScope モニタを定義できる [新規モニタ] ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「新規モニタ・ダイアログ・ボックス」(274ページ)</a> を参照してください。
貼り付け	選択したグループとその内容（モニタ，警告，レポート）またはモニタとその内容（警告とレポート）を指定したモニタ・グループに貼り付ける。
別の SiteScope から貼り付ける	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合にSAM 管理からのみ使用できます。別の SiteScope から選択したグループとその内容（モニタ，警告，レポート）またはモニタとその内容（警告とレポート）を指定したモニタ・グループに貼り付けます。
【レポート】 > 【管理/クイック/モニタ/警告】	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。このトピックの詳細については、 <a href="#">「SiteScope レポートの作成」(1311ページ)</a> を参照してください。
レポート > サーバ中心	モニタの【サーバ中心のレポートを有効化】チェックボックスが選択されているという条件のもとで、指定されたモニタ・グループ内の Microsoft Windows リソースまたは Unix リソース・モニタによってモニタされているリモート・サーバについてサーバ中心のレポートを作成することができます。詳細については、 <a href="#">「サーバ中心のレポートの作成」(1357ページ)</a> を参照してください。
モニタの実行	グループ内に設定されている任意のモニタを実行し、結果を表示する情報ウィンドウを開く。



## モニタのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
ベースライン設定	<p>特定のモニタの応答時間の変動やインフラストラクチャのパフォーマンスの監視に使用するベースラインを作成できる。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>計算</b> : モニタを選択し、ベースラインの計算に使用する関連時間とスケジュールを指定する。また、ベースラインの順守レベルを選択、微調整し、境界を定義できます。</li><li>・ <b>レビューと有効化</b> : モニタとベースラインの算出データのサマリを表示する。現在のモニタ設定の保存、失敗した操作の表示と再試行、ベースライン測定値グラフの表示、ベースライン設定の適用もできます。</li><li>・ <b>削除</b> : ベースラインしきい値を削除、またはベースラインを計算した後に再計算できる。</li><li>・ <b>状態レポート</b> : モニタのベースラインの状態に関する情報を表示します。</li></ul> <p>このトピックの詳細については、「<a href="#">ベースラインを使用したモニタしきい値の設定</a>」(335ページ)を参照してください。</p>
コピー	<p>モニタとその内容（警告とレポート）をモニタ・グループまたはテンプレートにコピーする。</p> <p><b>注</b> : ベースラインしきい値が設定されているモニタをコピーすると、ベースラインしきい値は静的しきい値（現在のパーセンタイル値）に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。</p>
別の SiteScope にコピーする	<p>このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できます。別の SiteScope のモニタとその内容（警告とレポート）をモニタ・グループまたはテンプレートにコピーします。</p> <p><b>注</b> : 依存関係のある複数のモニタをほかの SiteScope にコピーする場合、モニタ間の依存関係を保持する必要がある場合は、グループ・コンテナと一緒にそれらをコピーします。</p>
テンプレートにコピー	<p>モニタとその内容（警告とレポート）をテンプレート・グループにコピーする。このトピックの詳細については、「<a href="#">既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法</a>」(811ページ)を参照してください。</p>
切り取り	<p>モニタとその内容（警告とレポート）をモニタ・グループに移動する。</p> <p><b>注</b> : ベースラインしきい値が設定されているモニタを移動すると、ベースラインしきい値は静的しきい値（現在のパーセンタイル値）に置換され、モニタは</p>

メニュー項目	詳細
	ベースライン・モードではなくなります。
<b>削除</b>	<p>モニタを削除する。</p> <p><b>注：</b> モニタにコンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、そのモニタは削除できません。依存関係があるモニタを削除するには、各依存関係の【警告ターゲット】と【レポートのターゲット】からモニタを削除してから、モニタを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるモニタは削除できます。</p>
<b>モニタの有効化/無効化</b>	<p>モニタ・プロパティの設定に関係なく、モニタを有効化または無効化する【グループ内のモニタの有効化/無効化】ダイアログ・ボックスを開きます。【無効化】を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って【有効化】を選択するまでモニタは無効になります。【グループ内のモニタの有効化/無効化】のユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「【グループ内のモニタの有効化/無効化】ダイアログ・ボックス」(1063ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>グローバル検索と置換</b>	<p>【グローバル検索と置換】ウィザードを開く。このウィザードでは、モニタ、警告、グループ、プリファレンス、警告アクション、レポートのプロパティのグローバル検索と置換を実行できます。このトピックの詳細については、<a href="#">「グローバル検索と置換」(96ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>【新規作成】 &gt; 【警告】</b>	<p>モニタの新しい警告を定義できる【新規警告】ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、<a href="#">「SiteScope 警告の設定」(1231ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>貼り付け</b>	<p>選択したモニタのコンテキスト・オブジェクトを指定したモニタに貼り付ける。</p>
<b>別の SiteScope から貼り付ける</b>	<p>このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できます。別の SiteScope から選択したモニタのコンテキスト・オブジェクトを指定したモニタに貼り付けます。</p>
<b>予測解析</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li> <b>新規予測解析：</b> 選択したモニタの解析を設定できます。このメニュー項目は、次の場合だけ使用できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>【インフラストラクチャ プリファレンス】 &gt; 【解析処理】 &gt; 【有効化された解析】で解析が有効になっている（標準設定）。</li> <li>モニタが【インフラストラクチャ プリファレンス】 &gt; 【解析処理】 &gt; 【除外されたモニタ タイプ】に表示されている除外タイプではない。</li> </ul> </li> </ul>

メニュー項目	詳細
	<ul style="list-style-type: none"><li>• <b>予測解析の削除</b>：選択したモニタから予測解析を削除できます。このメニュー項目は、選択したモニタの解析が設定されている場合にのみ使用できます。</li></ul> <p>このトピックの詳細については、<a href="#">「予測解析の設定」(1368ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>【レポート】 &gt; 【管理/クイック/モニタ/警告】</b>	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。このトピックの詳細については、 <a href="#">「SiteScope レポートの作成」(1311ページ)</a> を参照してください。
<b>レポート &gt; サーバ中心</b>	モニタの <b>【サーバ中心のレポートを有効化】</b> チェックボックスが選択されているという条件のもとで、Microsoft Windows リソースまたは Unix リソース・モニタによってリモート・サーバについてサーバ中心のレポートを作成することができます。詳細については、 <a href="#">「サーバ中心のレポートの作成」(1357ページ)</a> を参照してください。
<b>モニタの実行</b>	モニタを実行し、結果を表示する情報ウィンドウを開く。

[SiteScope Health] のショートカット・メニュー・オプション  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。



メニュー項目	詳細
ログ記録の無効化	日次ログ・ファイルへの SiteScope サーバ状況データのログを無効にします。SiteScope サーバの状況の詳細は、 <a href="#">「SiteScope サーバの状況モニタ」 (1129 ページ)</a> を参照してください。
ログ記録の有効化	日次ログ・ファイルへの SiteScope サーバ状況データのログを有効にします。SiteScope サーバの状況の詳細は、 <a href="#">「SiteScope サーバの状況モニタ」 (1129 ページ)</a> を参照してください。
すべて展開	SiteScope 状況の下のすべてのサブツリーを開く。
【新規作成】 > 【警告】	状況の新しい警告を定義できる [新規警告] ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、 <a href="#">「SiteScope 警告の設定」 (1231 ページ)</a> を参照してください。
【新規作成】 > 【グループ】	新しい SiteScope グループを定義できる [新規グループ] ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」 (258 ページ)</a> を参照してください。
【新規作成】 > 【モニタ】	新しい SiteScope モニタを定義できる [新規モニタ] ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「新規モニタ・ダイアログ・ボックス」 (274 ページ)</a> を参照してください。
貼り付け	モニタおよびモニタ・グループを状況コンテナに貼り付ける。
欠落している状況モニタの再作成	状況コンテナから削除された状況モニタを復元できる。
レポート	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。このトピックの詳細については、 <a href="#">「SiteScope レポートの作成」 (1311 ページ)</a> を参照してください。
モニタの実行	状況モニタを実行し、結果を表示する情報ウィンドウを開く。

# リモート・サーバ・ツリー

リモート・サーバ・ツリーは、ネットワーク環境内に設定されているリモート・サーバを表します。  
「ショートカット・メニュー・オプション」では、リモート・サーバ・ツリーの各オブジェクトで  
使用できるショートカット・メニュー・オプションについて説明します。

アクセス方法	[リモート サーバ] コンテキストを選択する。リモート・サーバ・ツリーが左側の表示枠に表示されます。
関連情報	<a href="#">「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 (546ページ)</a>

リモート・サーバ・ツリー・オブジェクト  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	リモート・サーバ・ビューの Windows/UNIX リモート・サーバ・コンテナを表します。
	Windows / UNIX リモート・サーバを表します。 <b>親</b> : Windows / UNIX リモート・サーバ・コンテナ。 <b>追加方法</b> : Windows / UNIX リモート・サーバ・コンテナまたはテンプレート・ツリーで作成する。

リモート・サーバのショートカット・メニュー・オプション  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
新規 Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバ	新規 Microsoft Windows サーバまたは UNIX サーバを定義できる 新規サーバ・ウィンドウを開く。

## リモート・サーバのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
テンプレートにコピー	リモート・サーバをテンプレート・グループにコピーする。このトピックの詳細については、 <a href="#">「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」</a> (811 ページ) を参照してください。
削除	リモート・サーバを削除する。
詳細テスト	リモート・ホストで実行中のコマンドをテストし、定義されたユーザの権限を確認できる。UNIX サーバでのみ使用できます。
テスト	リモート・サーバへの接続をテストできる。

## テンプレート・ツリー











テンプレート・ツリーには、ユーザ定義テンプレート、SiteScope ソリューション・テンプレート・セット、テンプレート例、および、モニタ・グループがデプロイに使用できる [モニタ デプロイメント ウィザード] テンプレートが表示されます。「ショートカット・メニュー・オプション」では、テンプレート・ツリーの各オブジェクトで使用するショートカット・メニュー・オプションについて説明します。



アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーが左側の表示枠に表示されます。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「テンプレートの作成」</a> (792ページ)</li><li>・ <a href="#">「ソリューション・テンプレートのデプロイ」</a> (910ページ)</li><li>・ <a href="#">「[SiteScope テンプレート] ページ」</a> (817ページ)</li><li>・ <a href="#">「テンプレート・ツリー - [警告] タブ」</a> (820ページ)</li></ul>

## テンプレート・ツリー・オブジェクト

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細

UI 要素	詳細
	<p>個々の SiteScope サーバを表します。</p> <p><b>親:</b> エンタープライズ・ノードまたはコンテナ。</p> <p><b>ツリーへの追加方法:</b> 空の SiteScope プロファイルをインポートまたは追加します。</p>
	<p>ソリューション・テンプレート・コンテナを表します（利用可能/利用不可）。利用可能アイコンのあるライセンスが供与されたソリューション・テンプレートのみを設定できます。</p> <p><b>親:</b> SiteScope。</p>
	<p>テンプレート・コンテナを表します。テンプレート・コンテナは、デプロイメントの設定テンプレートの整理に使用されます。</p> <p><b>親:</b> SiteScope。</p> <p><b>テンプレート・ツリーへの追加方法:</b> テンプレート・コンテナが定義されている SiteScope を使用して作成またはインポートします。</p>
	<p>SiteScope オブジェクトのデプロイ用のテンプレート設定を表します。</p> <p><b>親:</b> テンプレート・コンテナ。</p> <p><b>テンプレート・ツリーへの追加方法:</b> 作成。</p>
	<p>SiteScope テンプレート・グループまたはサブグループ（モニタが有効/モニタなしまたはモニタが無効）を表します。</p> <p>警告がテンプレート・グループまたはサブグループに設定されている場合、グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>管理レポートがテンプレート・グループまたはサブグループに設定されている場合、グループ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p> <p><b>親:</b> テンプレート。</p> <p><b>ツリーへの追加方法:</b> テンプレート・グループが定義されている SiteScope を使用して作成またはインポートします。</p>
	<p>SiteScope テンプレート・モニタを表します（有効/無効）。</p> <p>警告がテンプレート・モニタに設定されている場合、モニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>管理レポートがテンプレート・モニタに設定されている場合、モニタ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p>

UI 要素	詳細
	<p><b>親:</b> テンプレート・グループ, テンプレート・サブグループ, テンプレート, またはソリューション・テンプレート。</p> <p><b>ツリーへの追加方法:</b> テンプレート・モニタが設定されている SiteScope を使用して作成またはインポートする。</p>
	<p>Windows / UNIX リモート・サーバを表します。</p> <p><b>親:</b> テンプレート。</p> <p><b>追加方法:</b> リモート・サーバ・ツリーまたはテンプレート・ツリーで作成する。</p>
	<p>テンプレートのデプロイ時に入力促すプレースホルダとして使用する変数を表示します。</p> <p><b>親:</b> テンプレート。</p> <p><b>テンプレート・ツリーへの追加方法:</b> 作成。</p>

[SiteScope] のルート - ショートカット・メニュー・オプション  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
<b>すべて展開</b>	SiteScope の下のすべてのサブツリーを開きます。
<b>インポート</b>	コンテンツ・インポートダイアログ・ボックスを開き, テンプレート・ファイルのインポートを有効にするか, または, コンテンツ・パッケージを開き, 1 つ以上のテンプレートとそれらの依存関係を保存します (templates.os ファイル, .jar ファイル, .conf ファイルなど)。詳細については, 「 <a href="#">[内容のインポート] ダイアログ・ボックス</a> 」(859ページ)を参照してください。
<b>【新規作成】 &gt; 【テンプレート コンテナ】</b>	新しいテンプレート・コンテナを定義できる【新規テンプレート コンテナ】ウィンドウを開きます。
<b>貼り付け</b>	SiteScope ルートの下でのテンプレート・コンテナを貼り付けます。



## ソリューション・テンプレート・コンテナ-ショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
すべて展開	コンテナ内のすべてのソリューション・テンプレートを表示するように、ソリューション・テンプレート・コンテナを展開します。

## ソリューション・テンプレート-ショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
コピー	ソリューション・テンプレートをコピーします。テンプレート・ツリーのテンプレート・コンテナにソリューション・テンプレートを貼り付けられます。
テンプレートのデプロイ	ソリューション・テンプレートをデプロイするグループを選択できる [グループの選択] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」 (868ページ)</a> を参照してください。
CSV を使用してテンプレートをデプロイ	CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイするグループを選択できる [グループの選択] ダイアログ・ボックスを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」 (868ページ)</a> を参照してください。
すべて展開	コンテナ内のすべてのソリューション・テンプレートを表示するように、ソリューション・テンプレート・コンテナを展開します。
XML の生成	ソリューション・テンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイルを作成できる自動デプロイメント XML の生成ウィンドウを開きます。詳細については、 <a href="#">「XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ」 (875ページ)</a> を参照してください。

テンプレート・コンテナ-ショートカット・メニュー・オプション  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
コピー	テンプレート・コンテナとその内容をコピーします。SiteScope ルートの下 のテンプレート・コンテナ、またはテンプレート・ツリー内で選択したテン プレート・コンテナを貼り付けられます。
切り取り	テンプレート・コンテナとその内容を移動します。SiteScope ルートの下 のテンプレート・コンテナ、またはテンプレート・ツリー内で選択したテン プレート・コンテナを貼り付けられます。
削除	テンプレート・コンテナを削除します。
テンプレートの デプロイ	1つまたは複数のテンプレートをデプロイするグループを選択できる [グル ープの選択] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細 については、 <a href="#">「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」(868ページ)</a> を参照 してください。
すべて展開	コンテナ内のすべてのテンプレート・オブジェクトを表示するように、テン プレート・コンテナを展開します。
【エクスポート】>【テン プレート】	テンプレート・ファイルをエクスポートできるテンプレートのエクスポート・ ウィンドウを開きます。詳細については、 <a href="#">「[テンプレートのエクスポート] ダイアログ・ボックス」(852ページ)</a> を参照してください。
【エクスポート】>【コン テンツ パッケー ジ】	コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードを開きます。このウィ ザードを使用すると、1つ以上のテンプレートとその依存ファイルをコンテ ンツ・パッケージ・ファイルにエクスポートできます。コンテンツ・パッケージ は、カスタム・モニタ（スクリプトや警告ファイルなどの拡張ファイルを使用 したモニタ）を他の SiteScope ユーザと共有する際に必要です。詳細につい ては、 <a href="#">「コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザード」(853ページ)</a> を参 照してください。
XML の生成	コンテナ内のテンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイ ルを作成できる自動デプロイメント XML の生成ウィンドウを開きます。
インポート	コンテンツ・インポートダイアログ・ボックスを開き、テンプレート・ファイ ルのインポートを有効にするか、または、コンテンツ・パッケージを開き、1 つ以上のテンプレートとそれらの依存関係を保存します（templates.os ファイ

メニュー項目	詳細
	ル, .jar ファイル, .conf ファイルなど)。詳細については, 「 <a href="#">[内容のインポート] ダイアログ・ボックス</a> 」(859ページ)を参照してください。
<b>【新規作成】 &gt; 【テンプレート】</b>	新しいテンプレートを定義できる【新規テンプレート】ウィンドウを開きます。
<b>【新規作成】 &gt; 【テンプレート コンテナ】</b>	新しいテンプレート・コンテナを定義できる【新規テンプレート コンテナ】ウィンドウを開きます。
<b>貼り付け</b>	テンプレートまたはテンプレート・コンテナをテンプレート・コンテナに貼り付けます。

テンプレート・ショートカット・メニュー・オプション  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
<b>コピー</b>	テンプレートとその内容をコピーします。テンプレートを, テンプレート・ツリー内のテンプレート・コンテナに貼り付けられます。
<b>切り取り</b>	テンプレートとその内容を移動します。テンプレートを, テンプレート・ツリー内のテンプレート・コンテナに貼り付けられます。
<b>削除</b>	テンプレートを削除します。
<b>テンプレートのデプロイ</b>	テンプレートをデプロイするグループを選択できる【グループの選択】ダイアログ・ボックスを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については, 「 <a href="#">[グループの選択] ダイアログ・ボックス</a> 」(868ページ)を参照してください。
<b>CSV を使用してテンプレートをデプロイ</b>	CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイするグループを選択できる【グループの選択】ダイアログ・ボックスを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については, 「 <a href="#">[グループの選択] ダイアログ・ボックス</a> 」(868ページ)を参照してください。
<b>すべて展開</b>	テンプレートのすべてのサブツリーを開きます。

メニュー項目	詳細
【エクスポート】 > 【テンプレート】	テンプレート・ファイルをエクスポートできるテンプレートのエクスポート・ウィンドウを開きます。詳細については、「 <a href="#">[テンプレートのエクスポート] ダイアログ・ボックス</a> 」(852ページ)を参照してください。
【エクスポート】 > 【コンテンツ パッケージ】	コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードを開きます。このウィザードを使用すると、1つ以上のテンプレートとその依存ファイルをコンテンツ・パッケージ・ファイルにエクスポートできます。コンテンツ・パッケージは、カスタム・モニタ（スクリプトや警告ファイルなどの拡張ファイルを使用したモニタ）を他の SiteScope ユーザと共有する際に必要です。詳細については、「 <a href="#">コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザード</a> 」(853ページ)を参照してください。
OM にエクスポート	<p>テンプレートを Operations Manager（HPOM）にエクスポートします。HPOM のポリシーの割り当てとデプロイメントを通じて SiteScope のテンプレートとモニタを設定できます。詳細については、SiteScope ヘルプにある『HP Operations Manager 製品との統合』の「HPOM からのテンプレートの中央管理」の項を参照してください。<a href="#">HP ソフトウェア統合</a>サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます（Windows の場合:  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39</a>, UNIX の場合:  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628</a>）。</p> <p><b>注:</b>このメニュー・オプションは、次の場合だけ使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>HPOM および SiteScope が同じマシンにインストールされていて、SiteScope がサポートされているバージョンの HPOM に接続されている。この SiteScope リリースでサポートされる HPOM バージョンについては、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（&lt;SiteScope ルート・ディレクトリ&gt;\sisdocs\doc_lib\Get_Documentation.htm）の「SiteScope サポート・マトリックス」の項を参照してください。</li> <li>HP Operations Agent は、SiteScope サーバにインストールされます。エージェントのインストールの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（&lt;SiteScope ルート・ディレクトリ&gt;\sisdocs\doc_lib\Get_Documentation.htm）の「SiteScope のインストール」の項を参照してください。</li> <li>HP Operations Manager 統合は SiteScope で設定され、HP Operations Manager 統合メイン設定で <b>【HP Operations Manager へのテンプレートのエクスポートを有効にする】</b> チェック・ボックスが選択されます。</li> </ul>
【新規作成】 >	新しいテンプレート・グループを定義できる新規グループ・ウィンドウを開き

メニュー項目	詳細
【グループ】	<p>ます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">【新規 SiteScope グループ】ダイアログ・ボックス</a>」(258ページ)を参照してください。</p> <p><b>注：</b>このメニュー項目は、テンプレート・グループにテンプレートが含まれていない場合にだけ使用できます。</p>
【新規作成】 > 【UNIX リモート サーバ】	<p>新しいリモート UNIX テンプレートを定義できる [新規 UNIX リモート サーバ] ウィンドウを開きます。</p> <p><b>注：</b>このメニュー項目は、テンプレートにリモート・サーバが含まれていない場合にのみ使用できます。</p>
【新規作成】 > 【変数】	<p>新しいテンプレート変数を定義できる [新規変数] ウィンドウを開きます。</p>
【新規作成】 > 【Microsoft Windows リモート サーバ】	<p>新しいリモート Windows テンプレートを定義できる [新規 Microsoft Windows リモート サーバ] ウィンドウを開きます。</p> <p><b>注：</b>このメニュー項目は、テンプレートにリモート・サーバが含まれていない場合にのみ使用できます。</p>
貼り付け	<p>テンプレートにテンプレート・グループ、モニタ、または警告を貼り付けます。</p>
変更の適用	<p>テンプレート変更適用ウィザードが開き、デプロイしたグループのテンプレート・コンプライアンスをチェックします。また、テンプレートを更新するたびにテンプレートによってデプロイされる SiteScope オブジェクトを更新できます。</p>

テンプレート変数 - ショートカット・メニュー・オプション  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
コピー	<p>テンプレート変数をコピーします。テンプレート変数を、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。</p>
切り取り	<p>テンプレート変数を移動します。テンプレート変数を、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。</p>

メニュー項目	詳細
削除	テンプレート変数を削除します。

テンプレート・リモート-ショートカット・メニュー・オプション  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
コピー	テンプレート・リモート・サーバをコピーします。テンプレート・リモート・サーバを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。 <b>注:</b> 1つのテンプレートに追加できるのは1つのテンプレート・リモート・サーバのみです。これは、古いバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには適用されません。
切り取り	テンプレート・リモート・サーバを移動します。テンプレート・リモート・サーバを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。 <b>注:</b> 1つのテンプレートに追加できるのは1つのテンプレート・リモート・サーバのみです。これは、古いバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには適用されません。
削除	テンプレート・リモートを削除します。

テンプレート・グループ-ショートカット・メニュー・オプション  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
コピー	テンプレート・グループとその内容（モニタ、警告、およびサブグループ）をコピーします。テンプレート・グループを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
切り取り	テンプレート・グループとその内容（モニタ、警告、およびサブグループ）を移動します。テンプレート・グループを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
削除	テンプレート・グループを削除します。

メニュー項目	詳細
すべて展開	テンプレート・グループのすべてのサブツリーを開きます。
【新規作成】 > 【警告】	テンプレート・グループの新しい警告を定義できる【新規警告】ウィンドウを開きます。このトピックの詳細については、 <a href="#">「SiteScope 警告の設定」(1231 ページ)</a> を参照してください。
【新規作成】 > 【グループ】	新しいテンプレート・サブグループを定義できる【新規グループ】ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「【新規 SiteScope グループ】ダイアログ・ボックス」(258 ページ)</a> を参照してください。
【新規作成】 > 【モニタ】	テンプレート・グループの新しい SiteScope モニタを定義できる新規モニタ・ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「新規モニタ・ダイアログ・ボックス」(274 ページ)</a> を参照してください。
貼り付け	選択したテンプレート・グループとその内容（モニタ，警告，およびサブグループ）をテンプレートに貼り付けます。

テンプレート・モニタ-ショートカット・メニュー・オプション  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
コピー	テンプレート・モニタとその内容（警告）をコピーします。テンプレート・モニタを、テンプレート・ツリー内のテンプレート・グループに貼り付けられます。
切り取り	テンプレート・モニタとその内容（警告）を移動します。テンプレート・モニタを、テンプレート・ツリー内のテンプレート・グループに貼り付けられます。
削除	テンプレート・モニタを削除します。
【新規作成】 > 【警告】	テンプレート・モニタの新しい警告を定義できる【新規警告】ウィンドウを開きます。このトピックの詳細については、 <a href="#">「SiteScope 警告の設定」(1231ページ)</a> を参照してください。
貼り付け	選択したテンプレート・モニタとその内容（警告）をテンプレート・グループに貼り付けます。

## プリファレンス・メニュー

プリファレンス・メニューは、SiteScope で使用できる大部分の管理タスクに関連する特定のプロパティと設定を設定できるプリファレンス・タイプを表します。

アクセス方法	【プリファレンス】コンテキストを選択します。【プリファレンス】メニュー・オプションが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	管理者、または「<プリファレンス・タイプ>の編集」権限を付与されたユーザのみが、SiteScope プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、 <a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」(744ページ)</a> を参照してください。

UI 要素	詳細
<プリファレンスのタイプ>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>証明書管理</b> : 各証明書で操作を変更した後に SiteScope を再起動せずに、サーバの証明書の追加と削除、およびキーストアの再読み込みを行うために使用します。詳細については、<a href="#">「証明書管理」(550ページ)</a>を参照してくだ</li></ul>



UI 要素	詳細
	<p>さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>共通イベント・マッピング</b> :SiteScope ランタイム・データと、HPOM / BSM サーバに送信されるイベント属性値間のイベント・マッピング・インスタンスを作成するために使用します。詳細については、<a href="#">「共通イベント・マッピング」(556ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>資格情報のプリファレンス</b> :SiteScope リソースの資格情報の作成と管理に使用します。詳細については、<a href="#">「資格情報のプリファレンス」(569ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>電子メール・プリファレンス</b> :SiteScope 電子メール警告と状態レポートに使用される、電子メール・サーバの設定とプロファイルの定義に使用します。詳細については、<a href="#">「電子メール・プリファレンス」(577ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>イベント・コンソール・プリファレンス</b> : イベント・コンソールの警告アクションからトリガされた警告を異なるユーザ・グループに転送するためのフィルタの定義に使用します。詳細については、<a href="#">「イベント・コンソール・プリファレンス」(584ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>一般プリファレンス</b> : 標準と任意指定の SiteScope ライセンス・キーの入力、表示機能の制御、セキュリティ・オプションの設定など、設定後のタスクの実行に使用します。詳細については、<a href="#">「一般プリファレンス」(590ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>HTTP プリファレンス</b> : 一般イベント統合を使用して管理コンソールにイベント・データを送信するとき、SiteScope で使用する設定の定義に使用します。詳細については、<a href="#">「HTTP プリファレンス」(603ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>高可用性プリファレンス</b> : SiteScope Failover の動作の設定、システムに障害が発生した場合、または一時的にサービスが停止している場合、SiteScope システムの機能を自動的に担うように設計された SiteScope の別々のインストールを設定するために使用されます。詳細については、<a href="#">「高可用性プリファレンス」(611ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>インフラストラクチャ・プリファレンス</b> : SiteScope でグローバル設定の値の定義に使用します。詳細については、<a href="#">「インフラストラクチャ・プリファレンス」(622ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>統合プリファレンス</b> : SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するために使用します。詳細については、<a href="#">「統合プリファレンス」(669ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>ログ・プリファレンス</b> : モニタのデータ・ログの累積と保管の制御に使用します。詳細については、<a href="#">「ログ・プリファレンス」(710ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>ページャ・プリファレンス</b> : (廃止) SiteScope でのページャ警告の送信に </li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p>使用する設定と追加のページ・プロファイルの設定に使用します。詳細については、<a href="#">「ページ・プリファレンス（廃止）」</a> (717ページ)を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• <b>スケジュール・プリファレンス</b> : SiteScope モニタと警告の操作を、特定の時間でのみ、または特定の期間中にのみ実行するようにカスタマイズするために使用します。詳細については、<a href="#">「スケジュール・プリファレンス」</a> (723ページ)を参照してください。</li><li>• <b>タグの検索 / フィルタ</b> : SiteScope で定義されたタグの検索 / フィルタの管理に使用します。コンテキスト・ツリーとプリファレンス・プロファイルの1つ以上の項目にタグを割り当て、そのタグをフィルタのオブジェクトとして使用できます。詳細については、<a href="#">「タグの検索 / フィルタ」</a> (730ページ)を参照してください。</li><li>• <b>SNMP プリファレンス</b> : 管理コンソールへのデータ送信時に SiteScope SNMP トラップ警告で使用する設定の定義に使用します。詳細については、<a href="#">「SNMP プリファレンス」</a> (734ページ)を参照してください。</li><li>• <b>ユーザ管理プリファレンス</b> : ほかのユーザが SiteScope にアクセスする方法を制御するユーザのログイン・プロファイルの定義と管理に使用します。詳細については、<a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」</a> (744ページ)を参照してください。</li></ul>

## 「サーバ統計」メニュー

「サーバ統計」メニューでは、いくつかの主要な SiteScope サーバのパフォーマンス統計の概要を表示できます。このコンテキストには、SiteScope サーバの負荷、実行中のモニタや最近実行されたモニタのリスト、perfex プールのサマリおよび統計、WMI 統計、SSH 接続、Telnet 接続、ダイナミック・モニタリング統計が含まれます。また、SiteScope ログ・ファイルも表示されます。


アクセス方法	「サーバ統計」コンテキストを選択します。「サーバ統計」メニューのオプションが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、 <a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」</a> (744ページ)を参照してください。
関連タスク	<a href="#">「SiteScope ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバ統計を分析する方法」</a> (1159ページ)
関連情報	<a href="#">「SiteScope サーバ統計」</a> (1153ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<メニュー・オプション>	<p>SiteScope で利用可能なモニタ・パフォーマンス・データ・オプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>ダイナミック・モニタリング統計</b>: ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用してダイナミック・モニタリングのカウンタとしきい値を自動的に更新する時に統計が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[ダイナミック モニタリング] ページ」 (1159ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>一般</b>: SiteScope サーバの統計を表示します。SiteScope サーバの負荷（実行中モニタ数、待機中モニタ数、実行モニタ数/分）、タイプごとの実行中モニタ数のリストが含まれます。詳細については、<a href="#">「[一般] ページ」 (1162ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>ログ・ファイル</b>: SiteScope のパフォーマンスの問題の理解、モニタと警告の問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認に役立つ、SiteScope のログ・ファイルのリストを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[ログ ファイル] ページ」 (1163ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>Perfex プロセス・プール</b>: プロセス・マネージャ・サマリ、各プールのプール統計と状態テーブルを表示します。詳細については、<a href="#">「[Perfex プロセス プール] ページ」 (1169ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>PowerShell プロセス プール</b>: Microsoft Exchange Base モニタによって使用される PowerShell プールを表示します。詳細については、<a href="#">「[PowerShell プロセス プール] ページ」 (1171ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>実行中のモニタ数</b>: 実行中の SiteScope モニタ、最近実行されたモニタ、実行された時間、実行で返された状態のリストを表示します。詳細については、<a href="#">「[実行中のモニタ数] ページ」 (1173ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>SSH 接続</b>: リモート UNIX または Windows サーバへの接続にセキュア・シェル (SSH) を使用した場合の SSH 統計と SSH 接続のサマリを表示します。詳細については、<a href="#">「[SSH 接続] ページ」 (1174ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>Telnet 接続</b>: リモート UNIX または Windows サーバへの接続に Telnet を使用した場合の Telnet 統計を表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[Telnet 接続] ページ」 (1176ページ)</a>を参照してください。 </li> <li> <b>WMI 統計</b>: Windows Management Instrumentation (WMI) 統計のプロセス・マネージャ・サマリを表示します。詳細については、<a href="#">「[WMI 統計] ページ」 (1177ページ)</a>を参照してください。 </li> </ul>

## [ツール] メニュー

[ツール] メニューには、SiteScope の問題のトラブルシューティングに役立ち、モニタ設定を容易にする診断ツールのリストが表示されます。

アクセス方法	<p>[ツール] コンテキストを選択します。[ツール] メニューのオプションが左側の表示枠に表示されます。次のカテゴリからツールを選択できます。 <a href="#">「アプリケーション・ツール」</a> (57ページ), <a href="#">「共通ユーティリティ・ツール」</a> (57ページ), <a href="#">「データベース・ツール」</a> (57ページ), <a href="#">「メール・ツール」</a> (58ページ), <a href="#">「ネットワーク・ツール」</a> (58ページ), <a href="#">「オペレーティング・システム・ツール」</a> (58ページ), <a href="#">「SNMP ツール」</a> (59ページ), <a href="#">「Web ツール」</a> (59ページ)。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• 左側の表示枠の [ツール] コンテキストでツールを表示または使用するには、SiteScope の管理者、または「<a href="#">ツールを使用</a>」権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、<a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」</a> (744ページ)を参照してください。</li><li>• また、特定のモニタの設定または編集時にも、一部のツールが利用可能です (SiteScope の管理者、または「<a href="#">モニタ・ツールを使用</a>」権限を付与されたユーザのみ)。モニタの設定または編集時にツールが利用可能な場合 (<a href="#">「診断ツールを使用したモニタ設定のテスト」</a> (1050ページ)を参照)、次の方法でツールにアクセスできます。</li><li>• 新規モニタの設定時に新規モニタのダイアログ・ボックスで、または既存のモニタの設定時にモニタの <b>[プロパティ </b>] タブで、<b>[ツールを使用]</b> ボタンをクリックします。</li><li>• 既存のモニタのテスト・ツールの実行中に、SiteScope ダッシュボードのツールバーで <b>[ツール]</b> ボタンをクリックします。この操作で、入力にモニタの既存のデータを使用したツールが開いて実行され、<b>[結果]</b> 表示枠にテスト結果が表示されます。</li><li>• SiteScope クライアントで SiteScope サーバと異なるマルチバイトのロケールを使用する場合の文字セットの問題を避けるには、<b>&lt;SiteScope ルートディレクト&gt;\groups\master.config</b> ファイルの <b>_httpCharset</b> 設定の値を <b>UTF-8</b> に設定します。標準設定では、<b>_httpCharset</b> の値は空で、標準設定のサーバのロケールが使用されます。</li></ul>
関連情報	<a href="#">「SiteScope ツール」</a> (112ページ)

## アプリケーション・ツール

UI 要素	詳細
ニュース・サーバ・ツール	ニュース・サーバが使用可能かどうかをチェックします。詳細については、 <a href="#">「ニュース・サーバ・ツール」</a> (138ページ)を参照してください。

## 共通ユーティリティ・ツール

UI 要素	詳細
正規表現ツール	監視する内容のサンプルに対して一致する内容の正規表現をテストします。詳細については、 <a href="#">「正規表現ツール」</a> (144ページ)を参照してください。
XSL 変換ツール	参照可能な XML モニタで監視する XML データのカスタム XSL 変換をテストします。詳細については、 <a href="#">「XSL 変換ツール」</a> (169ページ)を参照してください。
ログ分析ツール	ログ・ファイル内のパターンを分析し、すべての定期パターンのリストを提供します。各パターンはログ・ファイル・モニタで利用できる正規表現に転送できます。詳細については、 <a href="#">「ログ分析ツール」</a> (131ページ)を参照してください。
SiteScope ログ・グラバ・ツール	SiteScope のログ・ファイルや設定ファイルを取得、表示します。詳細については、 <a href="#">「SiteScope ログ・グラバ・ツール」</a> (147ページ)を参照してください。

## データベース・ツール

UI 要素	詳細
データベース接続ツール	JDBC または ODBC データベース接続の接続性と設定をチェックします。詳細については、 <a href="#">「データベース接続ツール」</a> (116ページ)を参照してください。
データベース情報ツール	製品とドライバのバージョン、SQL の互換性レベル情報、サポートされている SQL 関数などのデータベース・サーバ・メタデータを取得、表示します。詳細については、 <a href="#">「データベース情報ツール」</a> (119ページ)を参照してください。
LDAP 認証状態ツール	ユーザ認証を要求して LDAP サーバをテストします。詳細については、 <a href="#">「リンク・チェック・ツール」</a> (127ページ)を参照してください。

## メール・ツール

UI 要素	詳細
メールの送受信ツール	テスト・メッセージを送受信してメール・サーバをテストします。詳細については、 <a href="#">「メールの送受信ツール」 (134ページ)</a> を参照してください。

## ネットワーク・ツール

UI 要素	詳細
DNS ツール	DNS サーバでドメイン名を解決できるかどうかをテストします。詳細については、 <a href="#">「DNS ツール」 (120ページ)</a> を参照してください。
ネットワーク状態ツール	サーバのネットワーク・インタフェースの状態とアクティブな接続を表示します。詳細については、 <a href="#">「ネットワーク状態ツール」 (137ページ)</a> を参照してください。  注：このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
Ping ツール	ネットワーク全体で Ping の送受信テストを実行します。詳細については、 <a href="#">「Ping ツール」 (142ページ)</a> を参照してください。
トレース・ルート・ツール	サーバから別の場所へのトレースルートを実行します。詳細については、 <a href="#">「トレース・ルート・ツール」 (156ページ)</a> を参照してください。

## オペレーティング・システム・ツール

UI 要素	詳細
イベント・ログ・ツール	ローカルまたはリモート・サーバの Windows イベント・ログの一部を表示します。詳細については、 <a href="#">「イベント・ログ・ツール」 (121ページ)</a> を参照してください。  注：このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
パフォーマンス・カウンタ・ツール	Windows パフォーマンス・カウンタのレジストリへの接続性と値をチェックします。詳細については、 <a href="#">「パフォーマンス・カウンタ・ツール」 (139ページ)</a> を参照してください。

	注：このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
<b>プロセス・ツール</b>	ローカルまたはリモート・サーバで現在実行中のプロセスのリストを表示します。詳細については、 <a href="#">「プロセス・ツール」 (143ページ)</a> を参照してください。
<b>サービス・ツール</b>	現在実行中の Windows サービスのリストを表示します。詳細については、 <a href="#">「サービス・ツール」 (145ページ)</a> を参照してください。  注：このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。

## SNMP ツール

UI 要素	詳細
<b>SNMP ブラウザ・ツール</b>	SNMP MIB を参照して利用可能な OID を表示します。詳細については、 <a href="#">「SNMP ブラウザ・ツール」 (149ページ)</a> を参照してください。
<b>SNMP ツール</b>	指定した SNMP ホストに対して SNMP の get コマンドを実行して OID のリストを取得します。詳細については、 <a href="#">「SNMP ツール」 (152ページ)</a> を参照してください。
<b>SNMP トラップ・ツール</b>	SNMP が使用可能なデバイスから SiteScope が受信した SNMP トラップのログを表示します。詳細については、 <a href="#">「SNMP トラップ・ツール」 (155ページ)</a> を参照してください。

## Web ツール

UI 要素	詳細
<b>FTP ツール</b>	FTP サーバの可用性と、ファイルを取得可能かどうかをチェックします。詳細については、 <a href="#">「FTP ツール」 (123ページ)</a> を参照してください。
<b>リンク確認ツール</b>	Web ページ上の内部リンクと外部リンクの可用性をチェックして、リンク先に到達することを確認します。詳細については、 <a href="#">「リンク・チェック・ツール」 (127ページ)</a> を参照してください。
<b>URL ツール</b>	サーバから URL を要求して、返されたデータを印刷します。詳細については、 <a href="#">「URL ツール」 (157ページ)</a> を参照してください。



Web サービス・ツール	SOAP が使用可能な Web サービスの可用性をテストします。詳細については、 <a href="#">「Web サービス・ツール」 (163ページ)</a> を参照してください。
--------------	---

## 「警告」 タブ

この「警告」タブには、選択したモニタまたはグループに関連付けられている警告に関する情報が表示されます。このタブを使用して、警告定義を追加、編集、削除します。

「警告」タブのショートカット・メニュー・オプションには、警告で利用可能なショートカット・メニュー・オプションの説明が含まれます。

アクセス方法	【モニタ】または【テンプレート】コンテキストを選択し、右側の表示枠で【警告】タブをクリックします。
関連情報	<a href="#">「SiteScope 警告の設定」 (1231ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
コピー	モニタ・ツリーの選択した場所に警告をコピーします。 注：【モニタの警告】 / 【グループの警告】 テーブルの警告でのみ利用可能です。
別の SiteScope にコピーする	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合にSAM 管理からのみ使用できます。モニタ・ツリーの選択した場所に、別の SiteScope からの警告をコピーします。
削除	警告を削除します。
この警告を無効化する	警告を無効にします。
警告の編集	警告を編集するウィンドウが開き、警告の設定を編集できます。
この警告を有効化する	警告を有効にします。
新規警告	【新規警告】 ダイアログ・ボックスが開き、新規警告の定義を作成できます。このタスクの実行方法の詳細については、 <a href="#">「SiteScope 警告の設定」 (1231ページ)</a> を参照してください。



メニュー項目	詳細
	<b>注：</b> [モニタの警告] / [グループの警告] テーブルの警告でのみ利用可能です。
貼り付け	選択した警告を貼り付けます。 <b>注：</b> [モニタの警告] / [グループの警告] テーブルの警告でのみ利用可能です。
すべての子孫の警告を表示	選択したノードのすべての子孫の警告を表示します。
子の警告を表示	選択したノードの直接の子の警告のみを表示します。
テスト	[警告のテスト] ダイアログ・ボックスが開き、警告をテストできます。

## [レポート] タブ

[レポート] タブ, SiteScope で定義されたレポートに関する情報が表示されます。このページでは, レポート定義の追加, 編集, 削除を行います。

[レポート] タブのショートカット・メニュー・オプションには, モニタ・ツリーの管理レポートで利用可能なオプションの説明が含まれます。

アクセス方法	[モニタ] または [テンプレート] コンテキストを選択し, 右側の表示枠で [レポート] タブをクリックします。
関連情報	<a href="#">「SiteScope レポートの作成」 (1311ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	詳細
選択を解除	選択をクリアする。
レポートのコピー	モニタ・ツリーの選択した場所にレポートをコピーします。 <b>注：</b> [モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルのレポートでのみ利用可能です。
レポートの新規作成	作成する SiteScope レポートのタイプを選択できます。このトピックの詳細については, <a href="#">「SiteScope のレポート・タイプ」 (1311ページ)</a> を参照してください

メニュー項目	詳細
	<p>い。</p> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>【モニタのレポート】 / 【グループのレポート】</b> テーブルのレポートでのみ利用可能です。</li> <li>・ 管理レポートのみが <b>【レポート】</b> タブに追加されます。</li> </ul>
<b>レポートの削除</b>	レポートを削除します。
<b>レポートの編集</b>	レポートを編集するウィンドウが開き、レポートの設定を編集できます。
<b>レポートの生成</b>	レポートを生成します。
<b>貼り付け</b>	<p>選択したレポートを貼り付けます。</p> <p><b>注：</b> <b>【モニタのレポート】 / 【グループのレポート】</b> テーブルのレポートでのみ利用可能です。</p>
<b>すべて選択</b>	表示されたレポートをすべて選択します。
<b>すべての子孫レポートの表示</b>	選択したノードのすべての子孫レポートを表示します。
<b>子レポートの表示</b>	選択したノードの直接の子レポートのみを表示します。

## 第5章: SiteScope の設定および管理

このタスクでは、SiteScope の使用準備をする際の推奨作業順序について説明します。

### 注:

- セキュアな接続 (https) を必要とするように SiteScope を設定する必要がある場合は、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の強化の項を参照してください。
- SiteScope Failover を使用してバックアップのインフラストラクチャ監視を使用可能にする場合、推奨される作業順序については、HP SiteScope Failover Guide（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）を参照してください。

### 1. SiteScope へのログイン

Web ブラウザで SiteScope のアドレスを入力します。標準アドレスは、<http://localhost:8080/SiteScope> です。

### 2. SiteScope ライセンスの入力

インストール時に SiteScope のライセンス情報を入力しなかった場合、**【プリファレンス】** > **【一般プリファレンス】** > **【ライセンス】** で入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「ライセンス」\(594ページ\)](#)を参照してください。

### 3. SiteScope ユーザ・アカウントの作成 - 任意指定

管理者アカウントは標準設定のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。このアカウントは SiteScope を管理するすべての権限を持ち、アカウントを制限しなければ、製品にアクセスするすべてのユーザが使用します。そのため、組織の要件に基づいて、その他のユーザ・アカウントを作成、設定することをお勧めします。タスクの詳細については、[「SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法」\(747ページ\)](#)を参照してください。

### 注:

- 管理者ユーザにユーザ名およびパスワードが定義されていない場合、SiteScope はログイン・ページをスキップして自動的にログインします。
- 特定の IP アドレスまたはホスト名について、SiteScope ユーザ・インタフェースへのアクセスを制限できます。詳細については、[「SiteScope へのアクセスの制限」\(65ページ\)](#)を参照してください。

### 4. SiteScope のプリファレンスの設定（必要な場合）

SiteScope 内の管理タスクに関連する特定のプロパティと設定値を設定します。

- a. **SiteScope の電子メール・プリファレンスでサーバを設定します。**管理者の電子メール・アドレスを設定し、SiteScope がユーザへの電子メール・メッセージや警告の送信に使用できるメール・サーバを指定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[電子メール プリファレンス\] ページ](#)」(577ページ)を参照してください。
  - b. **ログ・プリファレンスを調整します。**監視データを SiteScope サーバ上に保持する日数を設定します。標準では、SiteScope は 40 日以上経過したログを削除します。監視データを外部データベースにエクスポートする場合は、データベースと必要なドライバを準備し、ログのプリファレンスを適切に設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[ログ・プリファレンス](#)」(710ページ)を参照してください。
  - c. **SiteScope オブジェクトの資格情報を設定します。**「資格情報のプリファレンス」を使用して、ユーザ認証を必要とする SiteScope オブジェクトの資格情報を保存、管理します。タスクの詳細については、「[資格情報のプリファレンス](#)」(569ページ)を参照してください。
  - d. さらに、必要に応じてほかの SiteScope プリファレンスも設定できます。詳細については、「[プリファレンス・メニュー](#)」(52ページ)を参照してください。
5. その他のアプリケーションを使用して統合するための SiteScope の設定（任意指定）

SiteScope は、次のような他のさまざまなアプリケーションで、データ・コレクタとして使用できます。

- HP Business Service Management (BSM) : BSM にレポートする SiteScope 監視データとトポロジを記録できます。タスクの詳細については、「[BSM と通信するための SiteScope の設定方法](#)」(228ページ)を参照してください。
- Operations Manager (HPOM) : SiteScope イベントの送信および HPOM と BSM 製品への測定値データのレポートが可能になります。SiteScope がイベントを HPOM または OMi に送信できるようにする場合や SiteScope が HP Operations Agent を使用してメトリクスをレポートできるようにする場合の詳細については、SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」を参照してください。[HP ソフトウェア統合](#)サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます（Windows の場合：  
<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>, UNIX の場合：  
<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>）。
- HP Network Node Manager i (NNMi) : SiteScope イベントの送信および NNMi への測定値データのレポートが可能になります。タスクの詳細については、SiteScope ヘルプの「NNMi との統合」を参照してください。[HP Software Integrations](#) では、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます  
(<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=483>)。
- HP Diagnostics : Diagnostics が監視するアプリケーション・サーバに関する包括的な情報を表示できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、SiteScope ヘルプの「Integrating SiteScope with HP Diagnostics」を参照してください。[HP Software Integrations](#) では、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます  
(<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=665>)。

- 一般データ統合: 直接統合が存在しないアプリケーションに SiteScope メトリックを転送できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「一般データ統合プリファレンス」](#) (694 ページ) を参照してください。
- 一般イベント統合: 直接統合が存在しないサードパーティのアプリケーションまたは管理コンソールにイベントを転送できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「一般イベント統合プリファレンス設定」](#) (699 ページ) を参照してください。

## 6. リモート・サーバの接続プロファイルの設定

セキュリティ要件に応じて、監視するリモート・サーバの接続方法を指定します。

SiteScope によるリモート Windows サーバのデータ監視の有効化の詳細については、[「リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定」](#) (479 ページ) を参照してください。

SiteScope によるリモート UNIX サーバのデータ監視の有効化の詳細については、[「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定」](#) (499 ページ) を参照してください。

## 7. ミドルウェア・ドライバのインストール (必要な場合)

リモート・データベースとの接続用のミドルウェア・ドライバと、ドライバを必要とするモニタ用のアプリケーションをインストールします。

詳細については、各モニタのヘルプを参照してください。

## 8. JMX サーバのパスワード保護の有効化 (任意指定)

SiteScope に組み込まれた JMX サーバに対して許可されていないエントリを防止するには、JMX パスワードの認証を有効にします。詳細については、[「JConsole の認証を有効化する方法」](#) (66 ページ) を参照してください。

JMX コンソールの使用の詳細については、[「JMX コンソールの使用方法」](#) (66 ページ) を参照してください。

## 9. SiteScope の使用開始

これで SiteScope を使用できるようになりました。

- SiteScope での基本的な監視構造の作成の詳細については、[「基本的な監視構造の作成」](#) (69 ページ) を参照してください。
- 企業で異なる要素の監視を標準化するテンプレートの使用についての詳細は、[「テンプレートを使用した監視構造の作成」](#) (70 ページ) を参照してください。

# SiteScope へのアクセスの制限

このタスクでは、特定の IP アドレスまたはホスト名について、SiteScope ユーザ・インタフェースへのアクセスを制限する方法について説明します。

1. **< SiteScope のルート・ディレクトリ > \Tomcat\conf** ディレクトリにある **server.xml** ファイルを開きます。

2. **RemoteAddrValve** 値と **RemoteHostValve** 値を探し、必要に応じて、それらの値のコメント行指定をはずし、設定して、IP アドレスまたはホスト名を許可または拒否します。これらの値を設定する方法の詳細については、**server.xml** ファイルの説明と例を参照してください。標準設定では、すべてのホストがアクセスを許可されます。
3. ユーザ・インターフェイスを通じて、リクエストが SiteScope に送信された IP アドレスとホスト名（およびこれらのホストのアクセス状態）を記録するには、**FastCommonAccessLogValve** 値のコメント行指定をはずします。
4. SiteScope のレポートへのアクセスをポート 8888 に制限するには、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config** ファイルで次のプロパティを設定します。
  - **\_checkAddressAndLogin** 値を **=true** に設定します。
  - **\_authorizedIP** レポートへのアクセスが許可されるすべての IP アドレスのカンマ区切りのリストを提供します。標準設定では、すべてのホストが SiteScope レポートへのアクセスを許可されます。

## JMX コンソールの使用方法

SiteScope には、Java 監視および管理 (JConsole) ツールが含まれています。このツールは、Java Management Extension (JMX) テクノLOGYを使用し、Java プラットフォーム上で実行されるアプリケーションのパフォーマンスおよびリソース消費に関する情報を提供します。

JConsole を使用して、リモート管理操作の実行、プロセスのパフォーマンス表示、SiteScope の問題領域のトラブルシューティングを行うことができます。このツールは、実運用環境のメモリ消費、スレッドなどに関する難しい問題のデバッグに役立つ場合があります。

### JConsole ツールにアクセスする方法

1. JConsole ツールにアクセスするには、Windows プラットフォーム上では **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\java\bin\jconsole.exe** を、UNIX プラットフォーム上では **<SiteScope root directory>/java/bin/jconsole** バイナリ・ファイルを実行します。
2. 監視対象の SiteScope に応じて、**ローカル**、または**リモート**とポート **28006** を選択します（標準設定の JMX ポート）。

#### 注:

- JMX サーバへのアクセスはパスワードで保護されていないため（SiteScope では JConsole のパスワード認証が標準設定で無効になっています）、JMX パスワード認証を有効にして不正な入力を禁止することをお勧めします。詳細については、[「JConsole の認証を有効化する方法」\(66ページ\)](#)を参照してください。
- JConsole のその他の設定は変更しないようにしてください。

### JConsole の認証を有効化する方法

1. プロパティ・ファイルを作成して、ユーザ、パスワード、アクセス・ロールを設定します

(Windows / UNIX / Linux プラットフォーム)。

- a. ユーザとパスワードが指定された **password.properties** という名前のプロパティ・ファイルを作成し、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\conf フォルダにコピーします。

```
# specify actual password instead of the text password
userLogin1=password
userLogin1=password
```

- b. ユーザとアクセス・ロールが指定された **access.properties** という名前のプロパティ・ファイルを作成し、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\conf フォルダにコピーします。

```
# The "monitorRole" role has readonly access.
# The "controlRole" role has readwrite access.
userLogin1=readonly
userLogin2=readwrite
```

- c. 両ファイルのアクセス許可を変更します。現在のユーザに対する読み取りアクセスのみを許可し、その他のアクセス許可はすべて削除します。

- 詳細については、Oracle の Web サイト (<http://docs.oracle.com/javase/7/docs/technotes/guides/management/agent.html>) を参照してください。
- Microsoft Windows システムで、パスワード・ファイルをセキュリティ保護する方法については、<http://docs.oracle.com/javase/6/docs/technotes/guides/management/security-windows.html> を参照してください。
- UNIX / Linux システム上でパスワード・ファイルのファイル権限を設定するには、次のコマンドを実行します。

```
chmod 600 jmxremote.password
```

2. Windows プラットフォームにインストールされている SiteScope の場合、次を実行します。

- go.bat ファイルを使用して SiteScope を起動する場合は、次の手順を実行します。
  - i. <SiteScope のルート・ディレクトリ>\conf\go.bat ファイルを編集用に開きます。
  - ii. ..\java\bin\SiteScope で始まる文字列を検索し、その文字列の末尾に次のパラメータを追加します。

```
-Dcom.sun.management.jmxremote.password.file=../conf/password.properties
-Dcom.sun.management.jmxremote.access.file=../conf/access.properties
```

- iii. パラメータ -Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate を検索し、その値を「false」から「true」に変更します。
- iv. 変更内容を保存します。

- HP SiteScope サービスを使用して SiteScope を起動する場合は、次の手順を実行します。

- i. レジストリ・エディタ regedit.exe を起動します。
- ii. 次のレジストリ・サブキーを見つけてクリックします。

**HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\services\HP SiteScope\serviceParam**

- iii. 次のパラメータを標準設定値の末尾に追加します。

```
-Dcom.sun.management.jmxremote.password.file=../conf/password.properties  
-Dcom.sun.management.jmxremote.access.file=../conf/access.properties
```

- iv. パラメータ -Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate を検索し、その値を「false」から「true」に変更します。
- v. 変更内容を保存します。

3. UNIX/Linux プラットフォーム上にインストールされている SiteScope の場合、次を実行します。

- go.sh ファイルを使用して SiteScope を起動する場合は、次の手順を実行します。

- i. **<SiteScope のルート・ディレクトリ>/bin/go.sh** ファイルを編集用を開きます。
- ii. ../java/bin/SiteScope で始まる文字列を検索し、その文字列の末尾に次のパラメータを追加します。

```
-Dcom.sun.management.jmxremote.password.file=../conf/password.properties  
-Dcom.sun.management.jmxremote.access.file=../conf/access.properties
```

- iii. パラメータ -Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate を検索し、その値を「false」から「true」に変更します。
- iv. 変更内容を保存します。

- SiteScope bin フォルダにある start コマンドを使用して SiteScope を起動する場合は、次の手順を実行します。

- i. **<SiteScope のルート・ディレクトリ>/bin/start-monitor** ファイルを編集用を開きます。
- ii. ../java/bin/SiteScope で始まる文字列を検索し、その文字列の末尾に次のパラメータを追加します。

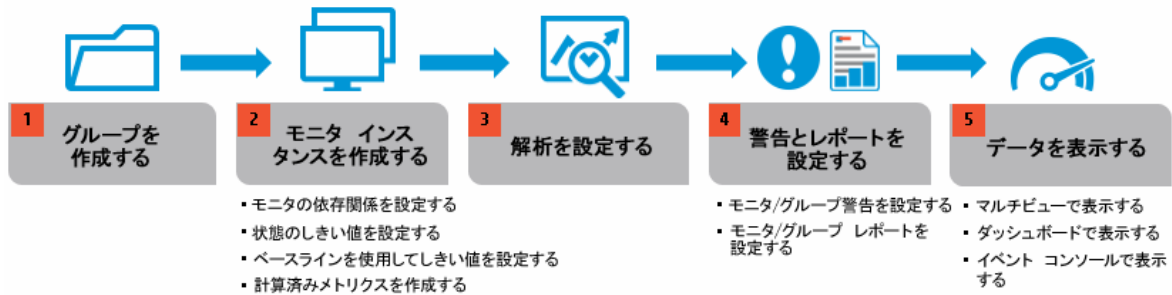
```
-Dcom.sun.management.jmxremote.password.file=../conf/password.properties  
-Dcom.sun.management.jmxremote.access.file=../conf/access.properties
```

- iii. パラメータ -Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate を検索し、その値を「false」から「true」に変更します。
- iv. 変更内容を保存します。



## 第6章: 基本的な監視構造の作成

SiteScope で基本的な監視構造を作成する場合はこのワークフローを使用します。



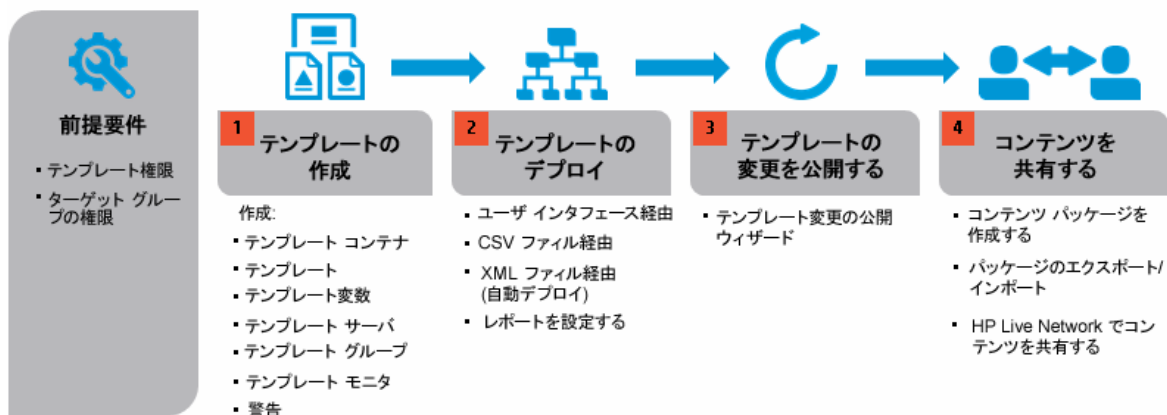
タスクの詳細については、[「モニタを作成、デプロイする方法」](#) (270ページ)を参照してください。

**ヒント:** または、SiteScope テンプレート、ソリューション・テンプレートを使用して、企業内のさまざまな IT 要素の監視を標準化できます。テンプレートは一括デプロイメントでモニタをデプロイする際の、より効率的な方法です。詳細については、[「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」](#) (804ページ)を参照してください。

## 第7章: テンプレートを使用した監視構造の作成

テンプレートは、一連のモニタ・タイプや設定を1つの構造にまとめて標準化するために使用します。この構造を、同様の特性を共有する監視対象環境の複数の要素を対象とするモニタのグループとして、繰り返しデプロイできます。

テンプレートを使用した監視構造の作成では、次の画像の手順を実行します。



タスクの詳細については、「[テンプレートを使用した監視構造の作成方法](#)」(804ページ)を参照してください。

**ヒント:** テンプレートでの作業を開始しやすいようにするには、Windows と UNIX の環境の監視用として提供されているテンプレート例を使用します。詳細については、「[テンプレート例](#)」(798ページ)を参照してください。

## 第8章: ビューの選択およびフィルタ

フィルタおよびタグ作成機能を使用すれば、SiteScope でのモニタの管理や追跡が容易になります。これにより、参照する必要があるモニタのみを簡単に見つけて表示できます。



1

状態フィルタ



2

設定フィルタ



3


タグ フィルタ

**ヒント:** フィルタやタグを使用したモニタの管理および追跡については、YouTube のガイドとナレーション付きのデモ (<http://hpsw.co/r5D4GxA>) を参照してください。

### フィルタ・タイプ

次の表を参考にして、用途に最も適した SiteScope ビューおよびフィルタ・オプションを選択してください。

フィルタ・オプション	使用方法	設定が必要かどうか	詳細情報
<b>1. ステータス・フィルタ</b> : モニタのステータス（[エラー]，[警告]，[良好]，[無効] など）でフィルタする場合に使用します。	Multi-View の [状態] リスト，または SiteScope ダッシュボードのコンテキスト・ツールバーの [お気に入り] フィルタから事前定義されたステータス・フィルタのいずれかを選択します。 <b>推奨事項</b> : Multi-View では，データ間の階層関係が失われることなく，すべてのグループとモニタのステータスが表示されるため，Multi-View を使用することをお勧めします。	No	「ビューを選択および設定する方法」(1085ページ)
<b>2. 設定 (カスタム)</b>	1. SiteScope ダッシュボードの	はい	「設定フィルタ

フィルタ・オプション	使用方法	設定が必要かどうか	詳細情報
<p><b>フィルタ</b>: モニタ名, モニタ・タイプ, ターゲット・サーバなどの各種条件や, 特定のタグ値が割り当てられたモニタでフィルタする場合に使用します。</p>	<p>コンテキスト・ツールバーの  <b>「フィルタ」</b>  を使用してフィルタを作成します。</p> <p>2. 次の場所で結果を確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Multi-View (フィルタのドロップダウン・リストをクリックしてフィルタを選択します)</li> <li>ダッシュボード (使用するフィルタをドロップダウン・フィルタ・リストから選択します)</li> </ul> <p><b>推奨事項</b>: Multi-View では, データ間の階層関係が失われることなく, すべてのグループとモニタのステータスが表示されるため, Multi-View を使用することをお勧めします。</p>		<p><a href="#">を使用した表示のフィルタ方法</a> (79ページ)</p>
<p><b>3. 検索/フィルタ・タグによるフィルタ</b>: モニタに割り当てられたキーワード・タグでフィルタします。これにより, SiteScope データを表示する各ユーザのパーспекティブに合わせてモニタをグループ化できます。</p>	<p>1. <b>「タグの検索/フィルタ」</b> プリファレンスでタグを作成し, モニタ・プロパティ ( <b>「タグの検索/フィルタ」</b> パネル) からモニタに割り当てます。</p> <p>2. 次の場所で結果を確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Multi-View (ビューのドロップダウン・リストから <b>「タグ」</b> を選択します)</li> <li>ダッシュボード (フィルタを作成し, <b>「タグ」</b> フィールドでフィルタとして使用するタグを選択します)</li> </ul>	はい	<p><a href="#">「タグの検索/フィルタ」</a> (730ページ)</p> <p><a href="#">「タグの検索/フィルタ」を使用してビューをフィルタする方法</a> (80ページ)</p>

フィルタ・オプション	使用方法	設定が必要かどうか	詳細情報
	<b>推奨事項</b> :Multi-View では、SiteScope モニタをモニタ・タグに基づいてグループ化でき、各モニタはそのタグに応じて新しいグループの下に表示されるため、Multi-View を使用することをお勧めします。これにより、複数の方法でシステムのステータスを確認できます。タグまたはタグ値をドリルダウンし、それらのタグまたはタグ値が割り当てられたモニタのみを表示できます。		

## 第2部: 概要と管理


### 本項の内容

- SiteScope の検索とフィルタの使用 (「[クイック検索](#)」(75ページ), 「[SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ](#)」(78ページ))
- SiteScope オブジェクトに対する一括操作の実行 (「[複数のグループやモニタに対するアクションの実行](#)」(90ページ))
- SiteScope オブジェクトの別の場所へのコピー / 移動 (「[SiteScope オブジェクトのコピーと移動](#)」(93ページ))
- グローバルな検索と置換 (「[グローバル検索と置換](#)」(96ページ))
- SiteScope 診断ツール (「[SiteScope ツール](#)」(112ページ))
- 正規表現の使用 (「[正規表現](#)」(187ページ))
- SiteScope モバイル・アプリ (「[SiteScope モバイル・アプリケーション](#)」(184ページ))
- SiteScope 設定およびデータ取得 API の使用 (「[SiteScope 公開 API](#)」(171ページ))

## 第9章: クイック検索

クイック検索を使用すると、モニタ、テンプレート、リモート・サーバ、カウンタ・ツリー内でグループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、カウンタなどの SiteScope 設定オブジェクトを検索できます。

### アクセス方法

モニタ、テンプレート、リモート・サーバ、または（一部の参照可能なカウンタ・モニタのモニタ・プロパティの）カウンタ・ツリーで、検索ボックスまたは **「クイック検索」**  ボックスに検索する文字を入力します。

## 学習事項

### クイック検索の概要


クイック検索を使用すると、設定オブジェクトで、特定のプロパティの名前または値を検索できます。クイック検索はモニタ、テンプレート、リモート・サーバ、カウンタ・ツリーで利用できます（ブラウズ可能なカウンタ・モニタのモニタ・プロパティで）。クイック検索ボックスに文字列を入力して、プロパティの名前および値をフィルタします。ツリーでは、指定した文字列テキストを含むすべてのノードが展開されます。

クイック検索には、大文字と小文字の区別、ワイルドカード、一致オプション、ノード / 子オプションで検索をフィルタできるオプションがあります。また、自動フィルタも用意されており、これを選択した場合、検索語を入力すると自動的に検索が実行されます。検索を実行するたびに Enter キーを押す必要はありません。

タスクの詳細については、[「クイック検索の使用方法」\(75ページ\)](#)を参照してください。

## タスク

### クイック検索の使用方法


検索オプションを設定するには、**「クイック検索」**  ボックスの左端をクリックしてドロップダウン・メニューを開き、必要なオプションを選択します。クイック検索オプションの詳細については、[「クイック検索」\(76ページ\)](#)を参照してください。

**「クイック検索」** ボックスに文字列を入力して、プロパティの名前および値をフィルタします。ツリーでは、指定した文字列テキストを含むすべてのノードが展開されます。

関連タスク: [「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」\(78ページ\)](#)

# UI の説明

## クイック検索

UI 要素	詳細
	<p><b>クイック検索:</b> モニタ、テンプレート、リモート・サーバ、または（一部の参照可能な一部のカウンタ・モニタのモニタ・プロパティの）カウンタ・ツリーの設定オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、カウンタ）内で、特定の名前または値を検索できます。</p> <p>ボックスの左端をクリックすると、フィルタ・オプションのドロップダウン・メニューが開きます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>【大文字と小文字を区別】</b> を選択すると、入力したとおりのフィルタ文字列が検索されます。<b>【大文字と小文字を区別しない】</b> を選択すると、フィルタ文字列の大文字と小文字は区別されません。</li><li>・ <b>【ワイルドカードを使用】</b> を選択すると、フィルタ文字列にワイルドカード記号（*）を使用できます。検索項目の一部分だけの入力で検索できるようにするために、検索文字列にアスタリスク（*）を使用できます。</li><li>・ <b>【はじめがマッチする】</b> を選択すると、フィルタ文字列をプロパティの名前または値の先頭から検索します。<b>【Match exactly】</b> を選択すると、完全に一致するフィルタ文字列が検索されます。<b>【いずれかがマッチする】</b> を選択すると、プロパティ内の任意の場所でフィルタ文字列が検索されます。</li><li>・ <b>【リーフノードにのみ一致】</b> を選択すると、ツリーのリーフ・ノード（モニタと空のグループのみ）内のフィルタ文字列が検索されます。クリアすると、すべてのノードが検索されます。</li><li>・ <b>【このないノードを非表示】</b> を選択すると、フィルタ文字列に一致するリーフ・ノードがないグループ（空のグループ）が非表示になります。</li><li>・ <b>【祖先のいずれかがマッチする場合、子を保持】</b> を選択すると、フィルタ文字列と一致するグループに含まれるすべての子ノードが（子ノード自体が検索文字列に一致していなくても）表示されます。</li><li>・ <b>【自動フィルタの使用】</b> を選択すると、検索テキストフィールドに文字が入力されると自動的に検索されます。自動フィルタが実行されるまでの遅延を、<b>【プリファレンス】</b> &gt; <b>【インフラストラクチャ プリファレンス】</b> &gt; <b>【一般設定】</b> &gt; <b>【クイック検索自動フィルタ遅延 (ミリ秒)】</b> で設定できます。標準設定の遅延は 800 ミリ秒 (0.8 秒) です。<b>【自動フィルタの使用】</b> が選択されていない場合は、検索を実行するたびに Enter キーを押す必要があります。</li></ul>



UI 要素	詳細
	<p><b>ヒント:</b> 高負荷環境では, <b>「クイック検索自動フィルタ遅延」</b> の遅延時間を増やすか, <b>「自動フィルタの使用」</b> オプションを無効することをお勧めします。</p> <p><b>注:</b> フィルタをツリーに適用すると, 検索は現在表示されているレコードに制限されます。</p>


## 第10章: SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ

SiteScope フィルタを使用すると、定義した基準を満たす SiteScope モニタのみが表示されるように、表示をフィルタできます。モニタ名、モニタ・タイプ、ターゲット・サーバ、キーワード・タグ、モニタまたは警告のステータスの有効化 / 無効化、BSM レポート設定によるフィルタなど、異なるユーザの視点から見たデータ表示に適用できるさまざまな条件を使用して、フィルタを定義できます。

また、SiteScope モニタ・ツリーで定義されたフィルタを使用して Multi-View で SiteScope モニタをフィルタしたり、事前定義のステータス・フィルタを使用して特定のステータスにあるモニタをすべて表示することもできます。Multi-View の使用の詳細については、「[Multi-View](#)」(1080ページ)を参照してください。

**ヒント:** フィルタやタグを使用したモニタの管理および追跡については、YouTube のガイドとナレーション付きのデモ (<http://hpsw.co/r5D4GxA>) を参照してください。

### アクセス方法

モニタ・ツリーのコンテキスト・ツールバー（左側のペインの上）で、**[フィルタ]**  ボタンをクリックします。事前定義フィルタの選択、新規フィルタの作成、または既存のフィルタの値の編集を行うことができます。

**ヒント:** フィルタ・オプションは、[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスで複数の SiteScope オブジェクトを操作する場合にも利用できます。詳細については、「[複数のグループやモニタに対するアクションの実行](#)」(90ページ)を参照してください。

## 学習事項

### フィルタ処理の概要

モニタのデプロイメントを管理するときに、追加されたすべてのオブジェクトを表示する広範囲なツリーの管理が困難な場合があります。SiteScope では、表示するモニタを、フィルタ条件に基づいて選択できます。さまざまな設定タスクに適用できる、異なる条件を使用した複数のフィルタを定義できます。

たとえば、CPU 使用率とディスク領域を監視する SiteScope モニタのみを表示するフィルタを作成できます。このフィルタの結果として、エンタープライズ・ノードのすぐ下に、CPU およびディスク領域モニタのすべての種類を示すツリーが表示されます。

タスクの詳細については、「[設定フィルタを使用した表示のフィルタ方法](#)」(79ページ)を参照してください。

**注:** 特定の共通するプロパティに基づいてフィルタを作成するには、グローバル検索と置換を使用します。詳細については、「[グローバル検索と置換](#)」(96ページ)を参照してください。

## 検索/フィルタ・タグを使用したフィルタ処理

SiteScope モニタの検索とフィルタには、キーワード・タグが使用されます。SiteScope 内の任意のモニタにタグを割り当て、そのタグを使用して表示を検索またはフィルタできます。タグとその値を定義し、それらをエンタープライズ内のさまざまな要素に割り当てます。

たとえば、「Critical, High」, 「Medium」, 「Low」という値を使用する Priority というタグを定義します。これらのタグの値をインフラストラクチャ内のさまざまなモニタに割り当てます。お客様からのアクセスを 24 時間年中無休でサポートする Web サーバおよびデータベースのモニタには、「Priority: Critical」のカテゴリ値を割り当てることができます。新しいフィルタ設定を追加するときには、[フィルタ オプション] セクションで [タグ] を選択し、オブジェクトの値に「Priority: Critical」を入力して、[保存] をクリックします。このフィルタにより、このタグと値が割り当てられている要素のみが表示されます。

タグは、<tag> 属性を使用して警告テンプレートでも使用できます。<tag:[tagName]> プロパティを使用することで、フィルタ・タグ内の値を警告内のパラメータとして含めることができます。この方法により、SiteScope 10.00 で削除されたカスタム・プロパティ・メカニズムに似た機能を提供できます。たとえば、値 Apache がモニタに割り当てられた AppServer というタグあり、モニタ用に設定された警告テンプレートに <tag:AppServer> を含めます。警告がトリガされた場合、警告テキストの新しいプロパティが Apache に置き換えられます。警告テンプレート・プロパティの詳細については、「[警告、テンプレート、イベントで利用可能なプロパティ](#)」(1295ページ)を参照してください。


タスクの詳細については、「[タグの検索 / フィルタを使用してビューをフィルタする方法](#)」(80ページ)を参照してください。

# タスク

## 設定フィルタを使用した表示のフィルタ方法


このタスクでは、モニタ・ツリーと Multi-View でのモニタのフィルタ処理に関する手順について説明します。


1. 新しいフィルタを作成するか、既存のフィルタを選択します。

モニタ・ツリーのコンテキスト・ツールバー（左側表示枠の上）で、[フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックします。

- 定義済みのフィルタがある場合は、モニタ・ツリーの上のドロップダウン・フィルタ・リストに表示されます。使用するフィルタを選択します。

- 新しいフィルタを作成するには、**【新規フィルタ】**を選択し、SiteScope で特定のオブジェクト・タイプやプロパティ値を検索するフィルタを**【新規フィルタ】 / 【フィルタの編集】**ダイアログ・ボックスで設定します。ユーザ・インターフェースの詳細については、「**【新規フィルタ】 / 【フィルタの編集】**ダイアログ・ボックス」(82ページ)を参照してください。

事前定義のフィルタをリストから選択するか、新しいフィルタを作成すると、フィルタ選択で定義したオブジェクトのみがツリーに表示されます。フィルタが適用されると、フィルタ・アイコンがとして表示されます。

フィルタ選択をクリアしてすべてのオブジェクトをモニタ・ツリーに表示するには、**【フィルタをクリア】**をクリックします。フィルタがクリアされると、アイコンが表示されます。

## 2. Multi-View でフィルタ処理をします。

SiteScope Multi-View で作業している場合は、次の操作を行うことができます。

- SiteScope モニタ・ツリーに定義された任意のフィルタを選択して、モニタをフィルタします。SiteScope Multi-View で、（**【モニタ】**、**【サーバ】**、**【タグ】**ドロップダウンの右側にある）フィルタ・ドロップダウン・リストをクリックし、フィルタを選択します。
- 事前定義のステータス・フィルタを使用して、特定のステータス条件を満たすグループとモニタを表示します。たとえば、エラー・ステータスまたは無効ステータスにあるすべてのモニタを表示できます。（フィルタ・ドロップダウンの右側にある）ステータス・ドロップダウン・リストをクリックし、表示するステータス条件を選択します。

**ヒント:** フィルタ・ドロップダウンで選択したフィルタにステータス・フィルタを適用すると、フィルタ条件を満たし特定のステータスにあるモニタのみを表示できます。

Multi-View の使用の詳細については、「**【Multi-View】** (1080ページ)を参照してください。

## タグの検索 / フィルタを使用してビューをフィルタする方法

このタスクでは、検索/フィルタ・タグを定義し、1つ以上のモニタに割り当ててから、これらのタグを使用して表示を検索またはフィルタする手順について説明します。

### 1. 前提条件:

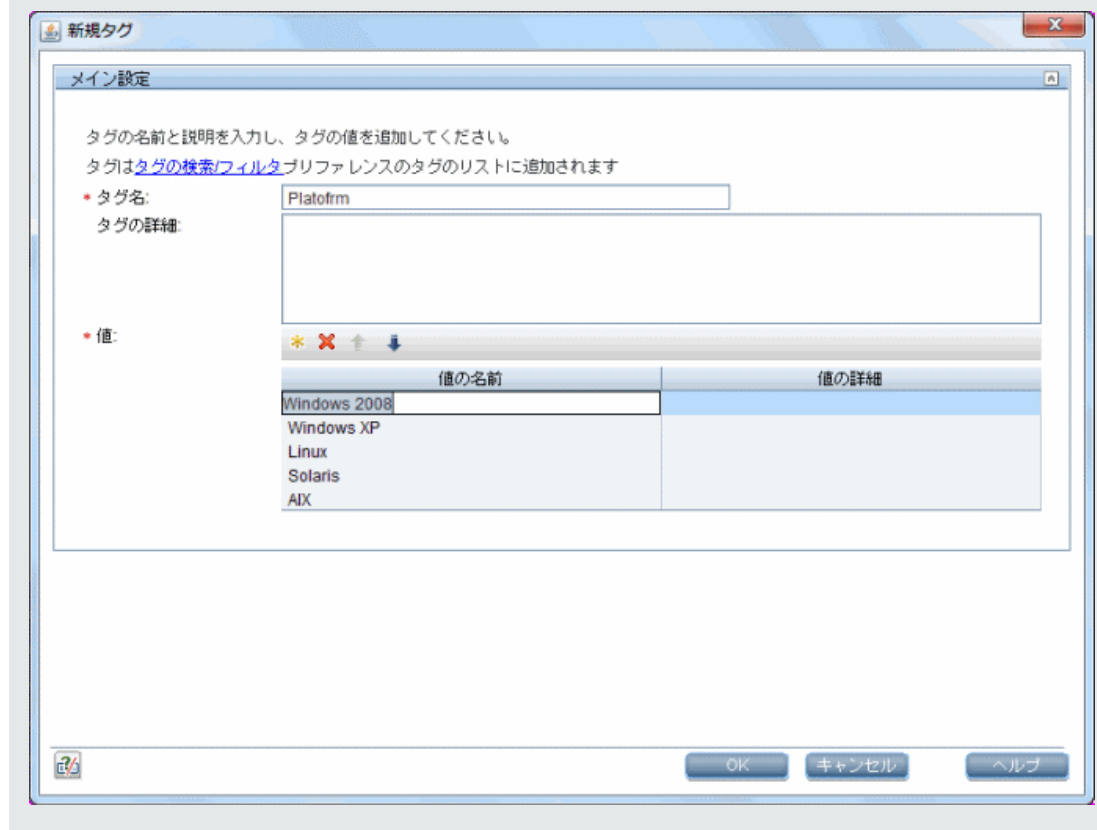
- 検索/フィルタ・タグを表示するには、SiteScope の管理者、または「**タグの表示**」権限が付与されたユーザである必要があります。
- 検索/フィルタ・タグとタグの値を追加、編集、削除するには、SiteScope の管理者、または「**タグを追加、編集、または削除します**」権限が付与されたユーザである必要があります。

ユーザ権限の詳細については、「**権限**」(757ページ)を参照してください。

### 2. 検索/フィルタ・タグを作成します。

SiteScope で、**【プリファレンス】 > 【タグの検索/フィルタ】**を選択し、表示のフィルタ処理に使用する検索/フィルタ・タグを作成します。タグとその値を定義します。たとえば、「HR」, 「CRM」, 「Online Banking」という値を使用する Application というタグを定義します。

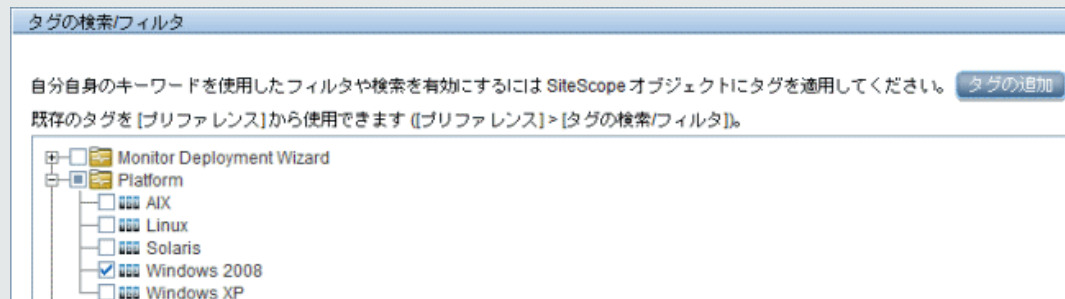
**例：**モニタが実行されているオペレーティング・システムの種類を示すタグを作成します。タグ Platform には、Windows 2008, Windows XP, Solaris, Linux などの値を設定します。



ユーザ・インタフェースの詳細については、「[【新規タグ】 / 【タグの編集】 ダイアログ・ボックス](#)」(87ページ)を参照してください。

3. SiteScope モニタに検索/フィルタ・タグを割り当てます。
  - a. SiteScope モニタ・ツリーで、タグを付けるモニタを選択します。
  - b. 【プロパティ】タブで、**【タグの検索/フィルタ】**パネルを展開し、タグとその値をモニタに割り当てます。
  - c. このタグと値を割り当てるすべてのモニタについて、同じ操作を繰り返します。


**例：**タグをモニタに割り当てるには、モニタの検索/フィルタ設定を開き、Platform タグの下にある適切なタグの値を選択します。



この新しいタグを使用して、特定のプラットフォームで実行されているモニタのみが表示されるように、フィルタ設定を定義できます。

#### 4. タグにより、SiteScope モニタをフィルタします。

1 つ以上のモニタにタグを割り当てたら、フィルタ用のオブジェクトとしてタグを使用できます。

- a. コンテキスト・メニューで、**【フィルタ】**  ボタンの横の矢印をクリックして、表示するタグの値を含むフィルタを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「【新規フィルタ】 / 【フィルタの編集】 ダイアログ・ボックス」 \(82ページ\)](#)を参照してください。
- b. **【タグ】** フィールドにタグの値を入力するか、**【参照】** ボタンをクリックし、タグ・リストからフィルタするタグの値を選択します。**【フィルタ タグ】** のユーザ・インタフェースの詳細については、[「【フィルタ タグ】ダイアログ・ボックス」 \(87ページ\)](#)を参照してください。
- c. フィルタを作成すると、選択したタグの値が割り当てられたモニタのみがツリーに表示されます。

#### 5. タグでグループ化されたモニタを Multi-View に表示します。

Multi-View には、SiteScope データを表示するさまざまなユーザの視点に合わせた新しいグループ化オプションが備えられています。モニタのタグに基づいて SiteScope モニタをグループ化することができ、各モニタはそのタグに従って新しいグループに表示されます。これにより、複数の方法でシステムのステータスを確認できます。タグまたはその値をドリルダウンして、タグまたはその値が割り当てられたモニタのみを表示できます。

Multi-View の詳細については、[「Multi-View」 \(1080ページ\)](#)を参照してください。




## UI の説明

[【新規フィルタ】 / 【フィルタの編集】 ダイアログ・ボックス](#)

**【フィルタ】** ボタンは、モニタ・ツリーのコンテキスト・ツールバーにあります。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>一般設定</b> (このパネルは、[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスからフィルタにアクセスした場合は表示されません)	
<b>フィルタ名</b>	この名前は、[フィルタ] 矢印をクリックしたときに選択できるフィルタのリストに表示されます。
<b>フィルタの詳細</b>	フィルタの詳細。この詳細は、フィルタを編集するときに表示されます。 <b>注:</b> このフィールドは任意指定です。
<b>パブリック・フィルタ</b>	フィルタの権限を表します。フィルタが公開用の場合、すべてのユーザがフィルタを表示、使用、編集できますが、公開フィルタの所有者のみがこのフィルタを非公開フィルタに変更できます。  公開用以外のフィルタは、現在のユーザのみが表示、使用できます。
<b>フィルタ・オプション</b>	
<b>正規表現</b>	モニタ・ツリーのフィルタに標準の正規表現を使用できます。  選択すると、フィルタ・リストからモニタ名、モニタ・タイプ、タグの値は選択できません。チェック・ボックスをクリアすると、フィルタでは POSIX 正規表現形式が使用されます。  <b>標準設定値:</b> 選択されている
<b>モニタ名</b>	ツリーに表示されるオブジェクトをモニタ名でフィルタするには、モニタ名を入力します。  <ul style="list-style-type: none"> <li>モニタ名は、モニタの設定時に [一般設定] パネルの [名前] ボックスに入力した文字列です。</li> <li>フィルタを拡張するには、正規表現を入力できます。ワイルド・カード ("*") と <b>OR</b> 表現を使用して、ツリーに表示される SiteScope オブジェクトをモニタ名でフィルタします。</li> </ul> モニタ・ツリーには、グループ内で、入力した文字列に一致したモニタとそれらのモニタを含むグループのみが表示されます。  <b>例:</b> 表現 /URL Monitor.*\.gov/ は、ドメイン .gov を含むアドレスを使用する文字列 URL Monitor を含むモニタ名すべてに一致します。  <b>注:</b> このフィールドでは大文字と小文字が区別されます。



UI 要素	詳細
<b>モニタ・タイプ</b>	<p>ツリーに表示されるオブジェクトをモニタ・タイプでフィルタするには、モニタ・タイプを入力するか、<b>【ブラウズ】</b>  ボタンをクリックして<b>【モニタ】</b> リストからフィルタするモニタ・タイプを選択します。</p> <p>たとえば、プロパティに関係なく、すべての CPU モニタを含むフィルタを定義できます。このビューでは、モニタ・ツリーには SiteScope で定義されているすべての CPU モニタが表示されます。</p> <p><b>【モニタ タイプのフィルタ】</b> のユーザ・インタフェースの詳細については、<b>「<a href="#">【モニタ タイプのフィルタ】 ダイアログ・ボックス</a>」 (85ページ)</b>を参照してください。</p> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>複数のモニタを入力する場合は、カンマ (",") で区切ります。</li> <li>モニタ・タイプを入力するときには、正規表現を入力できます。</li> </ul> <p><b>例：</b> SAP* または CPU*</p>
<b>ターゲット・サーバ</b>	<p>ツリーに表示されるオブジェクトをターゲット・サーバでフィルタするには、サーバ名を入力するか、<b>【ブラウズ】</b>  ボタンをクリックしてターゲット・リストからフィルタするリモート・サーバを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ターゲット名は、モニタの設定時に<b>【モニタ設定】</b> パネルの<b>【サーバ】</b> ボックスに入力した文字列です。</li> <li>フィルタを拡張するには、正規表現を入力できます。</li> </ul> <p>ツリーには、グループ内で、入力した文字列に一致したターゲット・サーバのモニタとそれらのモニタを含むグループのみが表示されます。</p> <p><b>【ターゲットサーバのフィルタ】</b> のユーザ・インタフェースの詳細については、<b>「<a href="#">【ターゲットサーバのフィルタ】 ダイアログ・ボックス</a>」 (86ページ)</b>を参照してください。</p> <p><b>注：</b> 複数のターゲットを入力する場合は、カンマ (",") で区切ります。</p>
<b>タグ</b>	<p>特定のタグの値を使用する SiteScope オブジェクトをすべて含むフィルタを定義できます。たとえば、Windows, Linux, AIX, Solaris という値のプラットフォーム・タグがある場合、AIX というタグの値が割り当てられたすべてのオブジェクトをフィルタできます。</p> <p>タグの値を入力するか、<b>【ブラウズ】</b>  ボタンをクリックしてタグ・リストからフィルタするタグの値を選択します。<b>【フィルタ タグ】</b> のユーザ・インタフェースの詳細については、<b>「<a href="#">【フィルタ タグ】ダイアログ・ボックス</a>」</b></p>



UI 要素	詳細
	<p><a href="#">(87ページ)</a>を参照してください。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"><li>複数のタグ値を入力する場合は、カンマ (",") で区切ります。</li><li>タグ値のフィルタには、ワイルドカード文字 ("*") , <b>and</b> 表現, または <b>or</b> 表現を使用できます。</li></ul>
モニタの有効化/ 無効化	<p>有効または無効の SiteScope モニタのみを含むフィルタを定義できます。</p> <p>標準設定値 :なし</p>
関連する警告の 有効化/無効化	<p>フィルタする関連警告の状態（有効/無効）。</p> <p>標準設定値 :なし</p>
HP BSM ログ記録	<p>BSM へのレポート・データの設定に基づいてモニタを含めるフィルタを定義できます。</p> <p>ログ記録オプションの詳細については、<a href="#">「HP 統合設定」(303ページ)</a>を参照してください。</p>

## 「モニタ タイプのフィルタ」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスで、SiteScope オブジェクトをフィルタするモニタ・タイプを選択できます。

アクセス方法	<p>コンテキスト・ツールバーで、<b>「フィルタ」</b>  ボタンの横の矢印をクリックして<b>「新規フィルタ」</b>を選択するか、既存のフィルタを選択して<b>「編集」</b>をクリックします。<b>「新規フィルタ」</b> / <b>「フィルタの編集」</b> ダイアログ・ボックスで、<b>「モニタ タイプ」</b>の横の<b>「ブラウズ」</b>  ボタンをクリックします。</p>
関連情報	<p><a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」(78ページ)</a></p>



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細

UI 要素	詳細
使用可能なモニタ・タイプ	<p>使用可能なモニタ・タイプが表示されます。</p> <p>フィルタに含めるモニタ・タイプを選択し、<b>「選択されたモニタ タイプへ移動」</b> ボタンをクリックします。選択したモニタ・タイプが<b>「選択されたモニタ タイプ」</b> リストに移動されます。</p>
選択されたモニタ・タイプ	<p>このフィルタに現在選択されているモニタ・タイプが表示されます。</p> <p>このリストからモニタ・タイプを削除するには、モニタ・タイプを選択し、<b>「使用可能なモニタ タイプへ移動」</b> ボタンをクリックします。測定値が<b>「使用可能なモニタ タイプ」</b> リストに移動されます。</p>

## 「ターゲット サーバのフィルタ」 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、SiteScope で設定されている選択したサーバ・ターゲットによって SiteScope オブジェクトをフィルタできます。

アクセス方法	<p>コンテキスト・ツールバーで、<b>「フィルタ」</b>  ボタンの横の矢印をクリックして<b>「新規フィルタ」</b>を選択するか、既存のフィルタを選択して<b>「編集」</b>をクリックします。<b>「新規フィルタ」</b> / <b>「フィルタの編集」</b> ダイアログ・ボックスで、<b>「ターゲット サーバ」</b> の横の<b>「ブラウズ」</b>  ボタンをクリックします。</p>
関連情報	<a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」 (78ページ)</a>



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
使用可能なターゲット・サーバ	<p>SiteScope で使用可能なリモート・サーバが表示されます。</p> <p>フィルタに含めるリモート・サーバを選択し、<b>「選択されたターゲット サーバへ移動」</b> ボタンをクリックします。選択したリモート・サーバが<b>「選択されたターゲット サーバ」</b> リストに移動されます。</p>
選択されたターゲット・サーバ	<p>このフィルタに現在選択されているリモート・サーバが表示されます。</p> <p>このリストからリモート・サーバを削除するには、リモート・サーバを選択し、<b>「使用可能なターゲット サーバへ移動」</b> ボタンをクリックします。測定値</p>

UI 要素	詳細
	が [使用可能なターゲット サーバ] リストに移動されます。

## [フィルタ タグ]ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスで、SiteScope オブジェクトをフィルタするタグの値を選択できます。

アクセス方法	コンテキスト・ツールバーで、 <b>[フィルタ]</b>  ボタンの横の矢印をクリックして <b>[新規フィルタ]</b> を選択するか、既存のフィルタを選択して <b>[編集]</b> をクリックします。 <b>[新規フィルタ]</b> / <b>[フィルタの編集]</b> ダイアログ・ボックスで、 <b>[タグ]</b> の横の <b>[ブラウズ]</b>  ボタンをクリックします。
関連情報	<a href="#">「タグの検索 / フィルタを使用してビューをフィルタする方法」(80ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	タグが作成されている場合は、タグの名前と値が表示されます。フィルタに含めるタグの横にあるチェック・ボックスを選択して、 <b>[保存]</b> をクリックします。
ツリー・フィルタ	タグのツリー フィルタ条件を定義する演算子を選択します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• <b>and</b>: すべてのタグが選択されているすべてのオブジェクトを表示します。</li><li>• <b>or</b>: 少なくとも 1 つのタグが選択されているすべてのオブジェクトを表示します。</li></ul> <b>注</b> : 選択できる演算子のタイプは 1 つのみです（演算子を混合させて使用することはできません）。





## [新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい検索/フィルタ・タグを追加できます。

アクセス方法	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、テンプレート、またはプリファ
--------	--

	<p>レンス・プロファイル) を選択し, [プロパティ] タブまたはプリファレンス・プロファイル・ページの <b>「タグの検索/フィルタ」</b> パネルを開きます。  <b>「タグの追加」</b> ボタンをクリックします。</p>
<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ [プリファレンス] コンテキスト ( [プリファレンス] &gt; <b>「タグの検索/フィルタ」</b> ) で既存のタグを編集できます。このトピックの詳細については, <b>「タグの検索/フィルタ」 (730ページ)</b> を参照してください。</li> <li>・ SiteScope 管理者ユーザ, または適切なタグ権限を付与されたユーザのみがタグを表示, 追加, 編集できます。ユーザ権限の詳細については, <b>「権限」 (757ページ)</b> を参照してください。</li> <li>・ SiteScope オブジェクトで参照されている場合, 検索/フィルタ・タグまたはタグの値は削除できません。削除するには, すべての SiteScope オブジェクトからタグまたはタグの値を削除する必要があります。</li> <li>・ タグは, &lt;tag&gt; 属性を使用して警告テンプレートでも使用できます。詳細については, <b>「警告, テンプレート, イベントで利用可能なプロパティ」 (1295ページ)</b> を参照してください。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<b>「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」 (78ページ)</b>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>新規</b> : タグの値を追加します。新しい行がタグの値リストの末尾に追加されます。
	<b>削除</b> : 選択した値をタグから削除します。
	<b>タグ値を高くする</b> : タグ値のリスト内で, 選択したタグ値を上に移動します。この方法を使用すると, アルファベット順ではなく, タグ値順に並べ替えることができます。
	<b>タグ値を低くする</b> : タグ値のリスト内で, 選択したタグ値を下に移動します。この方法を使用すると, アルファベット順ではなく, タグ値順に並べ替えることができます。
<b>タグ名</b>	<p>検索/フィルタ・タグの名前。</p> <p><b>最大文字数</b>: 255 文字</p>
<b>タグの詳細</b>	検索/フィルタ・タグの詳細。


UI 要素	詳細
値	タグに含まれる値。
値の名前	タグに含まれる値の名前。各タグには、少なくとも1つの値を含める必要があります。モニタ・ツリー内のすべてのオブジェクトのタグ設定を定義または編集するときに、各値はタグ名の子オブジェクトとして表示されます。
値の詳細	各値の詳細。この詳細は、タグを編集するときに表示されます。

# 第11章: 複数のグループやモニタに対するアクションの実行

1 つ以上の SiteScope オブジェクトに対して一括操作を実行するには、モニタとグループの管理機能を使用します。[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスを使用して、組織の展開可能な階層ビューから 1 つ以上のグループ、モニタ、あるいはその両方を選択し、実行するアクション（コピー、移動、削除、モニタの実行、モニタの有効化 / 無効化、関連する警告の有効化 / 無効化）を選択できます。

また、フィルタ・オプションを使用して、フィルタ基準に基づいてフィルタを適用したグループとモニタのリストを作成するか、モニタ・ツリー・フィルタで以前定義した既存のフィルタを選択することもできます。

## アクセス方法


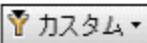
[**モニタ**] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーのツールバーで、[**モニタとグループの管理**]  ボタンをクリックします。






## UI の説明






### [モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックス

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ ツールバー・アクションは、ユーザ権限と選択したオブジェクトに従って使用できる。</li><li>・ 状況コンテナは削除できない。</li></ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「グループの管理方法」</a> (256ページ)</li><li>・ <a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」</a> (270ページ)</li><li>・ <a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」</a> (78ページ)</li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
 	<b>フィルタ</b> :モニタ・ツリーをフィルタし、定義した基準を満たすSiteScopeオブジェクトのみを表示できる。フィルタを適用した後に、フィルタの名前がボタンに表示されます（フィルタを[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボッ

UI 要素	詳細
	<p>クスで作成した場合は<b>【カスタム】</b>、それ以外の場合は、モニタ・ツリー・フィルタで定義したフィルタの名前です）。</p> <p><b>【フィルタ】</b> ボタン矢印をクリックして、フィルタ・オプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>新規フィルタ</b>。フィルタを作成できる<b>【新規フィルタ】</b> ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<b>【新規フィルタ】 / 【フィルタの編集】 ダイアログ・ボックス</b>」(82ページ)を参照してください。</li> <li>・ <b>フィルタをクリア</b>。フィルタ設定をクリアする。</li> <li>・ <b>&lt;既存のフィルタのリスト&gt;</b>:モニタ・ツリー・フィルタで以前定義した既存のフィルタのリストを表示します。</li> </ul>
	<b>すべて選択</b> : 表示されたすべてのSiteScopeオブジェクトを選択します。
	<b>選択を解除</b> : 選択を解除します。
	<p><b>切り取り</b> : 選択したオブジェクトを宛先グループに移動します。</p> <p><b>注 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 特定のモニタに定義された警告は、モニタと一緒に転送される。</li> <li>・ モニタを移動すると、モニタ履歴が再起動し、モニタに生成されるレポートはモニタを移動した時点から開始される。履歴データはログ・ファイルに残りますが、モニタの移動後はそのモニタのレポートからアクセスできなくなります。グループの移動は、履歴に影響しません。</li> <li>・ モニタを移動すると、グループとモニタの依存関係が壊れる可能性がある。移動するモニタのステータスに依存するグループが1つ以上ある場合、モニタの移動後に依存関係を更新します。</li> </ul>
	<b>コピー</b> : 宛先グループに貼り付けるために選択したオブジェクトのコピーを作成します。
	<p><b>貼り付け</b> : 選択したオブジェクトを宛先グループに貼り付けます。SiteScope オブジェクトのコピーを作成し、その名前がコンテナ内の既存のオブジェクトと同じである場合、SiteScope では自動的にサフィックス（数字）がオブジェクト名の最後に追加されます。</p> <p><b>例</b> : モニタ Mail Flow のコピーを作成し、同じモニタ・グループ内に貼り付けると、SiteScope では自動的に名前が Mail Flow(1) に変更されます。</p>

UI 要素	詳細
	<b>削除</b> : 選択したオブジェクトをモニタ・ツリーから削除します。
	<b>モニタの実行</b> : 選択したモニタ, またはグループ内に設定されている任意のモニタを実行します。結果を表示する情報ウィンドウが開きます。
	<b>モニタの有効化/無効化</b> : モニタ・プロパティの設定に関係なく, 選択したモニタまたはグループ内のすべてのモニタを有効化または無効化する [モニタの有効化/無効化] ダイアログ・ボックスを開く。[ <b>モニタを無効化</b> ] を選択すると, このダイアログ・ボックスに戻って [ <b>モニタを有効化</b> ] を選択するまでモニタは無効になります。ユーザ・インターフェースの詳細については, 「 <a href="#">[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス</a> 」(1063ページ)を参照してください。
	<b>関連する警告の有効化/無効化</b> : [関連する警告の有効化/無効化] ダイアログ・ボックスが開き, モニタやグループ内の全モニタに関連付けられているすべての警告を有効化または無効化できます。詳細については, 「 <a href="#">関連する警告の有効化/無効化</a> 」(318ページ)を参照してください。
<b>&lt;SiteScope オブジェクト&gt;</b>	<p>アクションは, ツリーのチェック・ボックスを使用して選択したすべてのモニタとグループに適用される。ツリーの表示は, ダイアログ・ボックスへのアクセスおよび関連するアクション全体にわたって保存されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>オブジェクトを選択するには, オブジェクト名の左側にあるチェック・ボックスを選択する。グループまたはモニタの任意の組み合わせを選択できます。グループの左側に表示される  アイコンは, そのグループ内に含まれるモニタおよびサブグループのすべてが選択されていないことを示します。</li> <li>オブジェクトのコピー先または移動先を選択するには, (チェック・ボックスではなく) オブジェクト名をクリックする。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> : 最上位レベルのグループが表示されるが, オブジェクトは選択されません。</p>



## 第12章: SiteScope オブジェクトのコピーと移動


SiteScope オブジェクトをコンテキスト・ツリー内の別の場所にコピーできます。さらに、SiteScope オブジェクトをテンプレートにコピーできます。また、モニタとグループをその内容とともにモニタ・ツリーの別のグループに移動することもできます。

各オブジェクトを区別できるように、オブジェクト名は親コンテナ内で一意にする必要があります。たとえば、SiteScope オブジェクトをコピーまたは移動する場合、同じグループ内でまったく同じ名前を持つ2つのモニタは作成できません。SiteScope オブジェクトのコピーを作成し、その名前がコンテナ内の既存のオブジェクトと同じである場合、SiteScope では自動的にサフィックス（数字）がオブジェクト名の最後に追加されます。たとえば、モニタ Mail Flow のコピーを作成し、同じモニタ・グループ内に貼り付けると、SiteScope では自動的に名前が Mail Flow(1) に変更されます。

次の SiteScope オブジェクトをコピーまたは移動できます。

SiteScope オブジェクト	操作と説明
グループ	<p><b>コピー/貼り付け:</b> モニタ・グループ（サブグループ、モニタ、警告、レポートを含む）を同じまたは別のモニタ・グループにコピーします。</p> <p><b>切り取り/貼り付け:</b> モニタ・グループ（サブグループ、モニタ、警告、レポートを含む）を別のモニタ・グループに移動します。</p> <p><b>テンプレートにコピー:</b> モニタ・グループ（モニタ、警告、レポートを含む）をテンプレートにコピーします。</p> <p><b>注:</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>モニタ・グループをそのサブグループに移動またはコピーすることはできません。</li><li>警告やレポートのターゲットであるグループを移動し、その警告やレポートを移動しないと、そのグループは警告やレポートのターゲットから削除されます。</li><li>ベースラインを使用してしきい値を設定したモニタをコピーまたは移動する場合、ベースラインしきい値は一緒にコピーまたは移動されません。</li></ul>
モニタ	<p><b>コピー/貼り付け:</b> モニタ（警告、レポートを含む）を同じまたは別のモニタ・グループにコピーします。</p> <p><b>切り取り/貼り付け:</b> モニタ（警告、レポートを含む）を別のモニタ・グループに移動します。</p> <p><b>テンプレートにコピー:</b> モニタ（警告、レポートを含む）をテンプレートにコピーします。</p>

SiteScope オブジェクト	操作と説明
	<p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>警告やレポートのターゲットであるモニタを移動し、その警告やレポートを移動しないと、そのモニタは警告やレポートのターゲットから削除されます。</li> <li>モニタをコピーしたら、通常はモニタが対象とするシステムまたはアプリケーションを変更する必要があります。変更しない場合、コピーされたモニタは元のモニタ・インスタンスの監視アクションを複製します。</li> <li>ベースラインを使用してしきい値を設定したモニタをコピーまたは移動する場合、ベースラインしきい値は一緒にコピーまたは移動されません。</li> </ul>
リモート・サーバ	<b>テンプレートにコピー：</b> リモート・サーバ・プロファイルをテンプレートにコピーします。
テンプレート・コンテナ	<b>コピー/貼り付け：</b> テンプレート・コンテナをコピーして別のテンプレート・コンテナまたは SiteScope ルートに貼り付けます。
テンプレート	<b>コピー/貼り付け：</b> テンプレート（グループ、モニタ、警告、レポートを含む）をテンプレート・コンテナにコピーします。
テンプレート・グループ	<b>コピー/貼り付け：</b> テンプレート・グループ（サブグループ、モニタ、警告、レポートを含む）をテンプレート（テンプレートにまだテンプレート・グループが含まれていない場合）またはテンプレート・グループにコピーします。
テンプレート・モニタ	<b>コピー/貼り付け：</b> テンプレート・モニタ（警告、レポートを含む）をテンプレート・グループにコピーします。
警告	<b>コピー/貼り付け：</b> 警告定義を（[警告] タブから）モニタ・ツリーまたはテンプレート・ツリーの同じまたは別の場所（グループまたはモニタ）にコピーします。
レポート	<b>コピー/貼り付け：</b> レポート定義を（[レポート] タブから）モニタ・ツリーまたはテンプレート・ツリーの同じまたは別の場所（グループまたはモニタ）にコピーします。

**注:** また、モニタ・ツリー・ツールバーの **[モニタとグループの管理]**  ボタンをクリックしても、複数のモニタとグループをターゲット・グループに移動またはコピーできます。詳細については、「[複数のグループやモニタに対するアクションの実行](#) (90ページ)」を参照してください。

SiteScope オブジェクトのコピーと移動の詳細については、「[コンテキスト・ツリーとメニュー・オプション](#)」(29ページ)で関連する SiteScope ビューのコンテキスト・メニュー・オプションを展開してください。

## 第13章: グローバル検索と置換

【グローバル検索と置換】ウィザードでは、モニタ、警告、警告アクション、グループ、プリファレンス、レポートのプロパティを変更できます。オブジェクト・タイプに基づいてオブジェクトを選択し、特定の SiteScope で（SAM 管理を使用している場合は複数の SiteScope で）選択オブジェクトのプロパティをグローバルに置換できます。

たとえば、BSM をアップグレードする場合、【グローバル検索と置換】ウィザードを使用して BSM にデータをレポートするすべての SiteScope をアップグレードしたバージョンに設定します。

### アクセス方法

- SiteScope で、グローバル置換を実行するモニタ・ツリーの SiteScope ルート、グループ、モニタのいずれかを右クリックします。プリファレンス・オブジェクトを置換するには、**SiteScope** ルートを右クリックします。警告オブジェクトを置換するには、**SiteScope** ルート、または関連グループかモニタ・オブジェクトを右クリックします。コンテキスト・メニューから【**グローバル検索と置換**】を選択します。
- BSM で、【**管理**】 > 【**システム可用性管理**】を選択します。右側の表示枠の【SiteScope サマリ】テーブル下で、【**グローバル検索と置換**】ボタンをクリックします。

## 学習事項

### 影響を受けるオブジェクトをフィルタ

【影響を受けるオブジェクトをフィルタ】オプションでは、検索操作の選択オブジェクトをさらに絞り込みます。特定のプロパティを選択して、オブジェクトに属する値を選択または入力できます。これにより、置換する値ではなく選択オブジェクトを制限できます。

置換操作の実行中に、【影響を受けるオブジェクトをフィルタ】ページで選択したプロパティに一致するオブジェクトのみで、置換する値のみが置換されます。たとえば、頻度を 5 分に設定したすべてのモニタを選択してそのすべてのモニタのモニタ依存関係の設定を置換するか、特定のサーバを監視するモニタのみを選択して、フィルタで入力したサーバの値に一致するモニタ・インスタンスのみのしきい値設定を置換します。

### 置換または検索と置換

置換メソッドでは、フィールドの値を検索してその値を新しい値に置換します。たとえば、【**モニタの実行設定**】パネルの【**頻度**】チェック・ボックスを選択して、頻度の値を 10 分から 15 分に更新することで、選択したモニタに対してモニタの実行頻度の標準設定を変更します。

検索と置換メソッドでは、特定の設定とプロパティ値を検索して、入力した設定または値を含むオブジェクトのみを置換します。文字列、値、または正規表現パターンを検索して、その文字列のみを置換できます。置換はフィルタ条件に一致する場合にのみ実行されます。たとえば、現在使用されてい

ないサーバ名が名前の値に含まれるすべてのモニタを検索し、その古いサーバを示す文字列を、更新されたサーバを示す新しい文字列で置換します。

## しきい値設定

**ヒント:** GSAR で [しきい値の設定] を変更する方法では間違っただしきい値名が表示されることがあるため、しきい値を置換するには [変更の適用] 機能を使用することをお勧めします。 [「テンプレート変更の適用」\(891ページ\)](#) を参照してください。

モニタのしきい値の設定を置換する場合、標準設定では次のすべてを共有する設定のみが置換されます。

- 同じ条件 (「エラー条件」, 「警告条件」, または「良好条件」)
- 同じスケジュールの設定
- 同じ演算子タイプ (< <=, > >=, ==, !=, 含む, !含む) を使用

**注:** < (より小さい) と <= (より小さいか等しい) は, > (より大きい) と >= (より大きい) か等しい) と同じ演算子タイプとみなされます。

使用された演算子と設定されたスケジュールに関係なく、条件 (「エラー条件」, 「警告条件」, または「良好条件」) が同じすべての既存のしきい値設定を上書きするオプションもあります。このオプションは [カテゴリの上書き] と呼ばれ、ウィザードの [タイプの選択] で [モニタ] を選択した場合に、[しきい値の設定] パネルのウィザードの [変更の入力] ページに表示されます。

たとえば、すべての CPU モニタの「エラー条件」のしきい値を 85% より大きい設定に変更とします。ウィザードで、[タイプの選択] ページの [モニタ], [サブタイプの選択] ページの [CPU] を選択し、[変更の入力] ページの [しきい値の設定] パネルを展開します。

「新規エラー条件」の状態に 85% より大きい条件を選択して [カテゴリの上書き] オプションを選択すると、すべての CPU モニタの既存の「エラー条件」の設定がすべて上書きされ、ウィザードの完了時に 85% より大きい値に変更されます。

このオプションをクリアしたままにすると、ウィザードで選択した 85% より大きい「エラー条件」の設定は、> (より大きい) と >= (より大きい) か等しい) 演算子を使用してすべての CPU モニタに同じスケジュールを設定した「エラー条件」の設定のみと置換されます。

しきい値の設定の詳細については、[「状態のしきい値の設定」\(267ページ\)](#) を参照してください。

## タスク

### グローバル検索と置換の実行方法

このタスクでは、[グローバル検索と置換] ウィザードを使用してオブジェクトのグローバル検索と置換を実行する方法について説明します。

### 1. グローバル検索と置換ウィザードの実行の開始

グローバル置換を実行するモニタ・ツリーの SiteScope ルート、グループ、モニタのいずれかを右クリックします。プリファレンス・オブジェクトを置換するには、SiteScope ルートを右クリックします。警告オブジェクトを置換するには、SiteScope ルート、または関連グループかモニタ・オブジェクトを右クリックします。コンテキスト・メニューから **【グローバル検索と置換】** を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、後述の「UI の説明」の項を参照してください。

### 2. SiteScope の選択（SAM のみで）

**注:** この手順は SAM から **【グローバル検索と置換】** ウィザードにアクセスする場合にのみ適用できます。

**【SiteScope の選択】** ページで、検索と置換を実行する 1 つ以上の SiteScope を選択します。

### 3. オブジェクト・タイプの選択

**【タイプの選択】** ページと **【サブタイプの選択】** ページで、置換を実行するオブジェクトと、必要に応じてサブタイプを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[【タイプの選択】 ページ \(103ページ\)](#)および [【サブタイプの選択】 ページ \(104ページ\)](#)を参照してください。

**例：**すべての CPU モニタのしきい値境界を変更する場合は、オブジェクト・タイプとして **【モニタ】** を選択します。

SiteScope の選択	<b>タイプの選択</b>
▶ タイプの選択	置換を実行するオブジェクト タイプを選択します。
サブタイプの選択	<input checked="" type="radio"/> モニタ
置換モード	<input type="radio"/> グループ
変更の入力	<input type="radio"/> プリファレンス
影響を受けるオブジェクト	
サマリの確認	
サマリ	

特定のモニタ・タイプとして **【CPU】** を選択します。

SiteScope の選択	<b>サブタイプの選択</b>
タイプの選択	置換を実行するタイプを選択します。
▶ サブタイプの選択	<input checked="" type="checkbox"/> CPU
置換モード	
変更の入力	
影響を受けるオブジェクト	
サマリの確認	
サマリ	

#### 4. オブジェクトの検索と置換

**【置換モード】** ページで、置換のタイプを選択します。**【置換】** を選択してオブジェクトをグローバルに置換するか、**【検索と置換】** を選択してオブジェクトの特定のインスタンスを置換します。必要に応じて、**【詳細フィルタ】** ダイアログ・ボックスを開き、オブジェクトのプロパティを使用してフィルタできます。このダイアログ・ボックスで、置換操作を実行するオブジェクトを選択します。**【変更の入力】** ページで、置換するプロパティまたは値を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「**【置換モード】 ページ (104ページ)**」および「**【変更の入力】 ページ (105ページ)**」を参照してください。

**例：特定のサーバのモニタ実行の頻度の低減。**

自社の特定のサーバでのモニタ実行の頻度を減らすには，[変更の入力] ページの[モニタ設定] パネルで選択内容をフィルタして，指定したサーバを監視しているモニタのみが表示されるようにします。

SiteScope の選択  
タイプの選択  
サブタイプの選択  
置換モード  
▶ 変更の入力  
影響を受けるオブジェクト  
サマリの確認  
サマリ

### 変更の入力

実行する変更を入力します。マークされたプロパティが入力された値で置換されます。

一般設定

モニタの実行設定

モニタ設定

☐ サーバ:

SiteScope Server
サーバの参照
リモートサーバの追加

[モニタの実行設定] ページで，指定したサーバを監視する新しい頻度として，1日1回を入力します。

SiteScope の選択  
タイプの選択  
サブタイプの選択  
置換モード  
▶ 変更の入力  
影響を受けるオブジェクト  
サマリの確認  
サマリ

### 変更の入力

実行する変更を入力します。マークされたプロパティが入力された値で置換されます。

一般設定

モニタの実行設定

モニタ設定

☒ 頻度:

10
分

☐ エラー時頻度:

秒

☐ エラーを検証
☐ モニタのスケジュール:

毎日、全日

☐ 更新時に実行結果を表示



**例：**指定した電子メール・アドレスに警告メッセージを送信する警告アクションの設定。

警告を受信するように設定した電子メール・アドレスの1つが変更された場合は、変更された電子メール・アドレスを更新します。[タイプの選択] ページで [警告アクション] をオブジェクト・タイプとして選択し、[置換モード] ページで [検索と置換] を選択します。

SiteScope の選択 タイプの選択 サブタイプの選択 ▶ 置換モード 変更の入力 影響を受けるオブジェクト サマリの確認 サマリ	<h3>置換モード</h3> <p>フィールドを新しい値で置換する場合は、[置換] を選択します。フィールドを含む文字列を検索して新しい値で置換する場合は、[検索と置換] を選択します。</p> <p> <input type="radio"/> 置換  <input checked="" type="radio"/> 検索と置換         </p>
--	---

[変更の入力] ページで、[次を検索:] フィールドに古い電子メール・アドレス、[次で置換:] フィールドに新しい電子メール・アドレスを入力します。

SiteScope の選択 タイプの選択 サブタイプの選択 置換モード ▶ 変更の入力 影響を受けるオブジェクト サマリの確認 サマリ	<h3>変更の入力</h3> <p>実行する変更を入力します。マークされたプロパティが入力された値で置換されます。</p> <p>次を検索: <input type="text"/> 次で置換: <input type="text"/></p> <p> <input type="button" value="一般設定"/> <input type="button" value="▼"/> </p> <p> <input type="button" value="モニタの実行設定"/> <input type="button" value="▼"/> </p> <p> <input type="button" value="依存関係"/> <input type="button" value="▼"/> </p>
--	--

## 5. 影響を受けるオブジェクトのチェック

「**影響を受けるオブジェクト**」ページで影響を受けるオブジェクトを表示し、必要に応じて置換操作対象のオブジェクトをクリアまたは選択します。必要に応じて、「影響を受けるオブジェクトをフィルタ」ダイアログ・ボックスを開いてオブジェクトのプロパティでフィルタできます。このダイアログ・ボックスで、置換操作を実行するオブジェクトを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[「影響を受けるオブジェクト」ページ](#) (108ページ)

**例：特定のサーバのモニタ実行の頻度の低減。**

会社の特定のサーバで、モニタを実行する頻度を低減するとします。

〔置換モード〕 ページ, 〔変更の入力〕 ページの〔置換〕を選択した場合、指定したサーバを監視する新しい頻度として1日1回を入力します。

SiteScope の選択

タイプの選択

サブタイプの選択

置換モード

▶ 変更の入力

影響を受けるオブジェクト

サマリの確認

サマリ

### 変更の入力

実行する変更を入力します。マークされたプロパティが入力された値で置換されます。

一般設定

モニタの実行設定

☒ 頻度:  分

☐ エラー時頻度:  秒

☐ エラーを検証

☐ モニタのスケジュール:

☐ 更新時に実行結果を表示

影響を受けるオブジェクトが〔影響を受けるオブジェクト〕 ページに表示されます。

SiteScope の選択

タイプの選択

サブタイプの選択

置換モード

変更の入力

▶ 影響を受けるオブジェクト

サマリの確認

サマリ

### 影響を受けるオブジェクト

リストされているオブジェクトを選択またはクリアして、置換を実行するオブジェクトを絞り込んでください。

☒ SiteScope

☒ SIS11.2
 

☒ Test
 

☒ CPU Monitor

HP SiteScope (11.30)

102/1392 ページ

【影響を受けるオブジェクトをフィルタ】 ページの選択を、指定したサーバを監視するモニタのみを含むようにフィルタします。

影響を受けるオブジェクトをフィルタ

一般設定

モニタの実行設定

モニタ設定

☒ サーバ:

SiteScope Server

サーバの参照

リモート サーバの追加

6. 置換したオブジェクトの確認

【サマリの確認】 ページで、置換操作の結果を確認し、【完了】をクリックしてウィザードを完了します。【サマリ】 ページで変更のサマリを表示して、正常に実行された変更と発生したエラーを参照できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[【サマリの確認】 ページ](#) (109ページ)および「[【サマリ】 ページ](#) (110ページ)を参照してください。

UI の説明

【SiteScope の選択】 ページ

このウィザード・ページでは、置換を実行する SiteScope を選択できます。

**注:** このページは、システム可用性管理 管理で作業しているときのみ表示されます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
< <b>【SiteScope マシン】</b> >	検索と置換を実行する 1 つ以上の SiteScope を選択します。 <b>注:</b> バージョン 9.0 以降を実行し、接続状態の設定を SAM から変更できる SiteScope のみが表示されます。

【タイプの選択】 ページ

このウィザード・ページでは、置換を実行するオブジェクト・タイプを選択できます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>&lt;オブジェクト・タイプ&gt;</b>  (警告, 警告アクション, グループ, モニタ, プリファレンス, レポート)	各置換操作に対して1つのオブジェクト・タイプのみ選択できます。選択したノードで利用可能なオブジェクトのタイプのみが表示されます。  SAM 管理で「グローバル検索と置換」を実行するときに、前のページで選択した少なくとも1つの SiteScope に、グループ, モニタ, 警告, 警告アクション, プリファレンスが存在する場合にのみ表示されます。

[サブタイプの選択] ページ  
このウィザード・ページでは、置換を実行するオブジェクト・タイプのプロパティを選択できます。  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>&lt;オブジェクト・タイプ・プロパティ&gt;</b>	オブジェクト・タイプのプロパティを表示します。たとえば、オブジェクト・タイプとして「モニタ」を選択した場合は、選択した SiteScope のモニタ・タイプがすべて表示されます。  <b>注:</b> このページは、ウィザードの「 <a href="#">[タイプの選択] ページ</a> 」(103ページ) ページで「グループ」, 「警告」, 「レポート」をオブジェクト・タイプとして選択した場合は表示されません。

[置換モード] ページ  
このウィザード・ページでは、置換のタイプ (グローバル置換またはフィルタ条件に基づいた置換) を選択できます。  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>置換</b>	すべての一致するオブジェクトを新しい文字列または値とグローバルに置換します。
<b>検索と置換</b>	文字列または正規表現に一致するプロパティの対象オブジェクトを検索し、一致するパターンのみを置換値と置換する場合に選択します。  この置換メソッドには特定の設定とプロパティ値の検索が含まれ、入力した設

UI 要素	詳細
	<p>定または値を含むオブジェクトのみを置換します。値の一部のみを選択して、その文字列のみを置換できます。</p> <p><b>注:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>このオプションを選択した場合、値に文字列を含めることができる設定のみが<b>「変更の入力」</b> ページの設定領域で利用可能で、検索と置換アクションに選択できます。</li> <li>この設定は、置換する対象の選択と値の指定に使用します。置換する値ではなく選択オブジェクトを制限する方法である<b>「詳細フィルタ」</b> オプションとは異なります。</li> </ul> <p><b>例:</b> 現在使用されていないサーバ名が名前の値に含まれるすべてのモニタを検索し、その古いサーバを示す文字列を、更新されたサーバを示す新しい文字列で置換します。</p>

### 「変更の入力」 ページ

このウィザード・ページでは、グローバル置換の置換対象を選択できます。ウィザードには、前のページで選択したオブジェクト・タイプの変更可能な設定とプロパティのみが表示されます。フィルタ条件は、**「タイプ」** ページ、**「サブタイプ」** ページ、**「詳細フィルタ」** ページの選択内容から作成されます。

<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>サブタイプのプロパティの表示方法は、SiteScope でモニタ、警告、プリファレンスなどを編集するときのプロパティの表示方法とは異なることがあります。</li> </ul> <p><b>例:</b> <b>「電子メールのプリファレンス」</b> は<b>「グローバル検索と置換」</b> ユーティリティではドロップダウン・リストではなくテキスト・ボックスとして表示され、<b>「依存対象」</b> プロパティは<b>「グローバル検索と置換」</b> ユーティリティでは表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>Server</b> プロパティは、モニタが次のグループから選択された場合にのみ使用できます。CPU、ディスク・スペース、メモリ、Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ、Web サーバ、サービス・モニタ。その他のモニタの場合、<b>「サブタイプの選択」</b> ページで特定のモニタのサブタイプを選択することによってのみサーバ属性を変更できます。たとえば、Web サーバ・モニタで CPU モニタを選択している場合は、サーバ・プロパティを使用できます。このグループ以外のモニタも選択している場合、サーバ・プロパティは使用できません。</li> <li><b>SAM 管理内で SiteScope をお使いの方へ:</b> 置換操作対象に選択した SiteScope のバージョンがすべて同じでない場合、SiteScope のサブタイプ間</li> </ul>
--------------	---

	<p>でプロパティが一致しない場合があります。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>すべての URL シーケンス・モニタが同数のステップ (x) で構成されているわけではない場合、GSAR を使用してそれらの URL シーケンス・モニタの値を置換すると、ステップ数が x 未満であるモニタに無関係の値が格納されることがあります。</li></ul>
--	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します (ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。


UI 要素	詳細
次を検索/次で置換	<p>〔置換モード〕 ページで <b>〔検索と置換〕</b> オプションを選択した場合、テキスト・ボックス <b>〔次を検索〕</b> と <b>〔次で置換〕</b> がこのページの上部に追加されます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li><b>〔次を検索〕</b> ボックスに、置換する設定またはプロパティの検索文字列、値、または正規表現パターンを入力します。</li><li><b>〔次で置換〕</b> ボックスに、すべての一致するパターンで変更する文字列または値を入力します。</li></ul> <p><b>注:</b> <b>〔モニタの実行設定〕</b> で <b>〔頻度〕</b> を選択した場合、<b>〔次を検索〕</b> と <b>〔次で置換〕</b> テキスト・ボックスに入力する値は秒単位で入力する必要があります。たとえば、頻度が 10 分のモニタを検索して頻度を 20 分に変更するとします。<b>〔次を検索〕</b> テキスト・ボックスに「600」と入力し、<b>〔次で置換〕</b> テキスト・ボックスに「1200」と入力します。</p> <p>フィルタ条件に合うオブジェクトが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。フィルタ条件を再度選択します。</p>
<設定領域>	<p>この領域には、選択したオブジェクトの設定が含まれています。これらの設定の詳細については、選択したオブジェクトの設定ページを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>〔置換モード〕 ページで <b>〔検索と置換〕</b> を選択した場合、設定領域で設定のみ選択します。<b>〔次を検索〕</b> / <b>〔次で置換〕</b> ボックスに置換する古い値と新しい値を入力します。</li><li>〔置換モード〕 ページで <b>〔置換〕</b> を選択した場合、設定領域で設定と新しい値を選択します。</li></ul> <p>一部の領域の詳細については、次を参照してください。</p> <p>〔しきい値の設定〕 領域</p> <ul style="list-style-type: none"><li>〔しきい値の設定〕 領域は、<b>〔タイプの選択〕</b> ページで <b>〔モニタ〕</b> を選択して、<b>〔サブタイプの選択〕</b> ページで 1 つのモニタを選択した場合のみ表示されます。<b>〔サブタイプの選択〕</b> ページで複数のモニタを選択し、いずれかのモニタにしきい値の定義が含まれていない場合、〔しきい値の設定〕 領域は</li></ul>

UI 要素	詳細
	<p>表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>【カテゴリの上書き】</b> オプションは、<b>【タイプの選択】</b> ページで <b>【モニタ】</b> を選択した場合のみ表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ このオプションを選択すると、選択したモニタ・インスタンスの同じしきい値条件（「<b>エラー条件</b>」，「<b>警告条件</b>」，または「<b>良好条件</b>」）のしきい値設定を、ここで置換操作として入力した設定で上書きできます。</li> <li>・ このオプションがクリアされている場合、ここで入力した設定によって置換されるのは、モニタ・インスタンスで、同じ演算子タイプ（&lt;=, &gt;=, !=, ==, 含む, doesNotContain）と設定済みスケジュールが使用されている設定のみです。条件が同じで演算子タイプまたはスケジュールが異なるその他の設定はそのままとなり、変更されません。このオプションの詳細と例については、<a href="#">「しきい値設定」(97ページ)</a>を参照してください。</li> </ul> </li> </ul> <p>フィルタ設定領域</p> <p><b>【タイプの選択】</b> ページで <b>【警告】</b> を選択した場合、<b>【フィルタ設定】</b> の <b>【モニタ タイプの一致】</b> フィールドは表示されず、ウィザードで値を置換できません。</p> <p>サーバ設定領域</p> <p><b>【サーバ設定】</b> 領域は、<b>【タイプの選択】</b> ページで <b>【モニタ】</b> を選択して、<b>【サブタイプの選択】</b> ページで1つのモニタを選択した場合のみ表示されます。<b>【サブタイプの選択】</b> ページで複数のモニタを選択した場合で、なおかつ、それらのモニタの一部が同じファミリに属していない場合、<b>【サーバ設定】</b> 領域は表示されません（各モニタ・ファミリと、各ファミリに属するモニタについては下記を参照してください）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ SAP モニタ : SAP CCMS, SAP CCMS 警告, SAP Java Web アプリケーション・サーバ, SAP パフォーマンス, SAP ワーク・プロセス。</li> <li>・ Server モニタ : CPU, ディスク・スペース, メモリ, Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ, サービス, UNIX リソース, Web サーバ。</li> <li>・ SNMP モニタ : Cisco, F5 Big-IP, ネットワーク帯域幅, SNMP by MIB。</li> <li>・ URL モニタ : URL, URL リスト, URL カウンタ, URL シーケンス。</li> <li>・ Windows Counter モニタ : ASP, Citrix, ColdFusion, Microsoft Hyper-V, Microsoft IIS Server, Microsoft SQL Server, Microsoft Windows Media, Real Monitor。</li> </ul>

## 「影響を受けるオブジェクト」 ページ

このウィザード・ページでは、変更を選択したオブジェクトを表示できます。ページには、ツリー形式で選択オブジェクトが表示されます。「影響を受けるオブジェクト」ツリーのオブジェクトは、置換操作にクリアまたは選択できます。


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
	<b>フィルタ</b> :必要に応じて、クリックしてダイアログ・ボックスを開き、選択をさらに絞り込みます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">「影響を受けるオブジェクトをフィルタ」ダイアログ・ボックス</a> 」(108ページ)を参照してください。
<b>&lt; 「影響を受けるオブジェクト」 ツリー &gt;</b>	<p>「影響を受けるオブジェクト」ツリーには、ウィザードの前のページで選択したフィルタ条件に一致するすべてのオブジェクトが含まれます。</p> <p>置換操作が必要かどうかに応じて、オブジェクトを選択またはクリアします。</p> <p><b>注:</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>• SAM 管理で「グローバル検索と置換」を使用している場合、選択した各 SiteScope のツリーが表示されます。</li><li>• 表示されるオブジェクトは、ユーザにオブジェクトの変更権限があるかどうかによって異なります。</li><li>• SAM 管理では、権限は BSM の「権限管理」（「管理」&gt;「プラットフォーム」&gt;「ユーザと権限」）で設定します。</li><li>• SiteScope スタンドアロンでは、権限は「プリファレンス」&gt;「ユーザ管理プリファレンス」で設定します。</li><li>• 「置換モード」ページで「検索と置換」を選択した場合、置換はフィルタ条件に一致する場合にのみ実行されます。「置換」を選択した場合、置換はすべての選択オブジェクトで実行されます。</li></ul>

## 「影響を受けるオブジェクトをフィルタ」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、オブジェクト・タイプのみでなく、特定の設定に基づいてオブジェクトを選択できます。たとえば、危険域の定義済みカテゴリがあるすべての警告を選択して、その警告の任意の設定を置換できます。また、特定のモニタまたはグループに設定した依存関係があるすべてのグループを選択して、そのグループの任意の設定を置換することもできます。



アクセスするには、「[「\[影響を受けるオブジェクト\] ページ」 \(108ページ\)](#)」の **[フィルタ]**  ボタンをクリックします。

**注:** このオプションは置換の選択の絞り込みのみに使用し、置換の対象は指定しません。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。


UI 要素	詳細
<設定領域>	選択したオブジェクトに関する設定領域が表示されます。これらの設定の詳細については、選択したオブジェクトの設定ページを参照してください。プロパティを選択し、選択オブジェクトをフィルタする値を入力します。

[サマリの確認] ページ

このウィザード・ページでは、置換操作を実行するオブジェクトをプレビューできます。SAM 管理で複数の SiteScope で作業している場合、各 SiteScope のテーブルが表示され、そのテーブルの上に SiteScope の名前が表示されます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>グローバル置換で影響を受けるオブジェクト数が、テーブルの上に表示されます。</li><li>各テーブル・列は、列タイトルを右クリックすると昇順または降順に並べ替えられます。上矢印または下矢印は、並べ替え順序を示します。</li><li>このページで <b>[適用]</b> をクリックすると、置換操作は元に戻せません。</li></ul>
-------	---

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
	列タイトルの上矢印と下矢印をクリックして、列の並べ替え順序を変更します。 <b>標準設定値：</b> <b>[完全名]</b> 列は、昇順のアルファベット順です。
完全名	値が置換されるサーバ名、グループ、モニタ名、モニタのプロパティのツリーを表示します。
<プロパティ>	置換操作の結果変更された <b>[変更の入力]</b> ページで選択したボックス名。



UI 要素	詳細
以前の値	置換操作の結果として変更される現在の値。  <b>注:</b> 置換される値がクリアされていたチェック・ボックスで、現在は値が選択されている場合、チェック・ボックスの以前の値（クリアされていた値）は表示されない可能性があります。
新規値	[変更の入力] ページで入力した新しい値。
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	変更が適用されるリモート・サーバと比較して、モニタ設定プロパティが正しいかどうかを検証します。  <b>標準設定値:</b> 選択されている  <b>注:</b> このオプションを選択すると、リモート接続のために変更を行うのに時間がかかります。



## [サマリ] ページ

[サマリ] ページでは、正常に適用された変更とエラーが発生した変更がレポートされます。ページには、テーブル形式で変更が表示されます。SAM 管理で複数の SiteScope で作業している場合、各 SiteScope のテーブルが表示され、そのテーブルの上に SiteScope 名が表示されます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>置換操作で実行した変更は元に戻せません。</li> <li>グローバル置換で影響を受けるオブジェクト数が、テーブルの上に表示されます。</li> <li>各テーブル・列は、列タイトルを右クリックすると昇順または降順に並べ替えられます。上矢印または下矢印は、並べ替え順序を示します。</li> </ul>
-------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。


UI 要素	詳細
	列タイトルの上矢印と下矢印をクリックして、列の並べ替え順序を変更します。  <b>標準設定値:</b> [完全名] 列は、昇順のアルファベット順です。
	結果のレポートを PDF ファイルで開きます。  <b>注:</b> このオプションは SAM 管理から [グローバル検索と置換] を使用する場合にのみ使用できます。

UI 要素	詳細
	結果のレポートを CSV 形式ファイルで開きます。 <b>注：</b> このオプションは SAM 管理から [グローバル検索と置換] を使用する場合にのみ使用できます。
	<b>印刷：</b> テーブルを印刷するときにクリックします。サマリの各テーブルにこのアイコンが表示されます。
完全名	値が置換されるサーバ名，グループ，モニタ名，モニタのプロパティのツリーを表示します。
<プロパティ>	置換操作の結果変更された [変更の入力] ページで選択したボックス名。
以前の値	グローバル置換操作で置換された値。
新規値	グローバル置換操作の結果となる新しい値。
適用	ウィザードを閉じます。

## 第14章: SiteScope ツール

SiteScope には、監視環境のテストに便利な多数の診断ツールがあります。これらのツールでは、モニタの設定前に問題を特定してモニタの設定を容易にできます。また、モニタの設定後に問題のトラブルシューティングや診断を行うこともできます。

### アクセス方法

- **【ツール】** コンテキストを選択します。**【ツール】** メニューのオプションが左側の表示枠に表示されます (SiteScope の管理者、または「**ツールを使用**」権限が付与されたユーザの場合)。
- また、特定のモニタの設定または編集時にも、一部のツールが利用可能です (SiteScope の管理者、または「**モニタ・ツールを使用**」権限を付与されたユーザのみ)。モニタの設定または編集時にツールが利用可能な場合 (「[診断ツールを使用したモニタ設定のテスト](#)」(1050ページ)を参照)、次の方法でツールにアクセスできます。
  - 新規モニタの設定時に新規モニタのダイアログ・ボックスで、または既存のモニタの設定時にモニタの**【プロパティ**  タブで、**【ツールを使用】** ボタンをクリックします。
  - 既存のモニタのテスト・ツールの実行中に、SiteScope ダッシュボードのツールバーで**【ツール】** ボタンをクリックします。この操作で、入力にモニタの既存のデータを使用したツールが開いて実行され、**【結果】** 表示枠にテスト結果が表示されます。

## 学習事項

### SiteScope ツールの概要

これらのツールを使用して、監視対象となるシステムのさまざまな要求やクエリを作成し、アクションの詳細な結果を表示します。要求には、ネットワーク接続のテストや、外部のデータベースまたはサービスにアクセスするためのログイン認証の検証などがあります。

特定のモニタ・タイプを設定する場合に使用して、容易にモニタ設定ができるようにするツールもあります。データをツールのフィールドに入力し、SiteScope でデータをテストします。SiteScope でデータのテストが完了したら、テスト済みデータをモニタ設定フォームに直接適用できます。たとえば、DNS モニタを設定する前に DNS ツールを使用してドメイン名を IP アドレスに変換できます。名前の変換後、SiteScope でそのデータを新規モニタに適用できます。

利用可能な SiteScope ツールのリストとツールの説明については、「[【ツール】メニュー](#)」(56ページ)を参照してください。

## タスク

モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法  
このタスクでは、SiteScope ツールを使用して、モニタの設定やトラブルシューティングをサポートする手順について説明します。

### 1. 前提条件

- 左側の表示枠にある [ツール] コンテキストのツールを表示および使用するには、SiteScope 管理者ユーザ、または「**ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。
- 特定のモニタの設定時に利用可能なツールを使用するには、SiteScope 管理者ユーザ、または「**モニタ・ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。

### 2. モニタの追加と設定

【新規作成】 > 【モニタ】を選択して、[新規モニタ] ダイアログ・ボックスから新しいモニタを追加します。モニタの設定をサポートするツールが使用できる場合は、新規モニタのダイアログ・ボックスの下部にある [ツールを使用] ボタンをクリックします。

### 3. テストの設定と実行


必要な情報をツールのダイアログ・ボックスに入力し、ツールを実行します。サーバ側の検証エラーが結果の表示枠に表示されます。

### 4. モニタのフィールドへのテスト済みデータの適用

設定データのテストが正常に完了したら、[Apply to New Monitor] ボタン（既存のモニタを編集している場合は [モニタに適用] ボタン）をクリックして、SiteScope でデータをモニタ設定に適用します。

### 5. ツールを使用したモニタ・プロパティの編集またはテスト（任意指定）

SiteScope ツール（利用可能な場合）を使用して、既存のモニタの設定プロパティを編集またはテストすることもできます。

- モニタの設定プロパティを編集するには、モニタの [プロパティ] タブの [ツールを使用] ボタンをクリックし、前の 2 手順を実行します。
- ツールを開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール]  ボタンをクリックします。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。結果をファイルに保存するには、[ファイルに保存] ボタンをクリックします。

## ログ分析ツールの使用方法 - 使用例のシナリオ

このタスクは、ログ・ファイル・モニタの設定時のログ分析ツールの使用に関係する手順を説明します。

管理者は、モニタ対象のログに記述されている最も一般的な問題や状況のログ・ファイル・モニタを作成します。状況を選択して対応するログ・ファイル・モニタを作成した後、選択した状況に対応する行がログに追加されるとすぐにモニタが実行されます。

#### 1. 前提条件

- 左側の表示枠にある [ツール] コンテキストのツールを表示および使用するには、管理者は SiteScope 管理者ユーザ、または「**ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。
- 特定のモニタの設定時に利用可能なツールを使用するには、管理者は SiteScope 管理者ユーザ、または「**モニタ・ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。

#### 2. 分析するログのコピー

管理者はローカルの SiteScope マシンに分析するログをコピーします。

#### 3. そのログでログ分析ツールを実行

- a. 管理者は [ツール] > [共通ユーティリティ ツール] > [ログ分析ツール] を選択します。
- b. [ログ分析ツール] ダイアログ・ボックスで、管理者は次を入力します。
  - **ファイルの場所** : ローカルの SiteScope サーバにコピーされたログの場所。同時に複数ファイルを分析するには、そのファイルを指定したフォルダにコピーし、分析対象のログ・ファイルのファイル名と一致する正規表現を作成します。
  - **メッセージの位置** : パターンのために分析するメッセージの左側にあるブロックの数（空白で区切られている）。たとえば、次のログ構造で、関心があるログ・エントリの部分は 7 番目の空白（日付形式内の空白は日付形式の一部であるため含まれません）の後に開始するメッセージです。

```
2010-11-02 11:49:02,738 [SiteScope Main Thread] (SiteScopeHeartbeatManager.java:53) INFO -  
The Heartbeat Scheduler was started.2010-11-02 11:49:02,786 [SiteScope Main Thread]  
(ServiceController.java:82) INFO - Registering service:Host DNS Resolution Service
```

- **パターン内の日付の位置** : 日付が配置されているテキストのブロックの順序。上記の例で、日付はテキストの最初のブロックに含まれています。
  - **日付形式** : 上記の例で、日付形式は標準設定に従います。標準設定には空白が含まれます。
  - 管理者は [ツールの実行] をクリックします。
- [ログ分析ツール] ダイアログ・ボックスの [結果] ボックスには、ログで検出された正

正規表現パターンとパターンのインスタンスの数が表示されます。

結果	
* 新規のログ ファイル モニタを作成します	
メッセージパターン	発生数
Starting SiteScope....*	12
preferences initialize.*	6
Starting SiteScope... 123.*	4
preferences initialize.* sdf	2
The Heartbeat Scheduler was started.	1
Registering service: Host DNS Resolution Service	1
Registering service: Monitor History Event Sink Service	1
Registering service: Alert Action Execution Counter Registry Service	1
Registering service: Alert Open Status Registry Service	1
	1
Starting SiteScope... 789	1
Initializing configuration layer.	1
Configuration layer initialize successfully.	1
Initializing preferences.	1

- c. 管理者は関連するパターンを選択して、**「新規ログ ファイル モニタの作成」** ボタンをクリックします。開いた**「グループの選択」** ダイアログ・ボックスで、管理者は既存のグループを選択するか、または**「新規グループ」** ボタンをクリックして、新しいグループを作成できます。

**「内容の照合」** ボックスに表示された正規表示が選択された状態で**「新規ログ ファイル モニタ」** ダイアログ・ボックスが開きます。

- d. そのダイアログ・ボックスで、管理者は分析する「本物の」ログへのパスを含み、ログ・ファイル・モニタを実行するために必要な残りの情報を入力します。
- e. 管理者は**「保存」** をクリックして新規ログ・ファイル・モニタを保存します。

#### 4. 結果

ログ・ファイル・モニタは選択された正規表現を含む監視対象ログ・ファイルに追加された特定の入力を監視します。モニタ設定によって、管理者またはユーザは、その他の方法ではさらに深刻な事態が発生するまで放置されていたかもしれない状況を把握することができます。

モニタ・ツリーの選択されたグループに管理者が作成した新規ログ・ファイル・モニタ・ツールがリストされます。

ユーザインタフェースの詳細については、**「ログ分析ツール」** (131ページ)を参照してください。

ログ・ファイル・モニタの詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の**「ログ・ファイル・モニタ」**を参照してください。

# ヒント / トラブルシューティング

## 注意事項および制限事項


SiteScope クライアントで SiteScope サーバと異なるマルチバイトのロケールを使用する場合の文字セットの問題を避けるには、<SiteScope ルート ディレクト>\groups\master.config ファイルの **\_httpCharset** 設定の値を **UTF-8** に設定します。標準設定では、\_httpCharset の値は空で、標準設定のサーバのロケールが使用されます。

# データベース接続ツール

このツールでは、SiteScope と外部の ODBC または JDBC 互換データベース間の接続をテストおよび検証できます。この診断ツールでは、次の点がチェックされます。

- 指定したデータベース・ドライバが検出およびロードできる
- データベースに接続できる
- 任意指定の SQL クエリを実行して結果を表示できる
- データベースの接続とリソースを閉じることができる

このツールは、データベース・モニタ、データベース警告、データベース・ログ記録の設定に必要な接続パラメータ値を検証する場合に便利です。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>【ツール】コンテキスト &gt; 【データベース ツール】 &gt; 【データベース接続ツール】を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。</li><li>データベース・カウンタ・モニタ、データベース・クエリ・モニタ、DB2 JDBC モニタ、テクノロジ・データベース統合モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。<ul style="list-style-type: none"><li>新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの【プロパティ】タブで、【ツールを使用】ボタンをクリックします。</li></ul></li><li>既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの【ツール】 ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は【結果】表示枠に表示されます。</li></ul>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>テスト中に例外またはエラーが発生した場合、トラブルシューティングに役立つ推奨アクションとともにその情報が出力されます。</li><li>データベース接続ツールを使用して、データベース・クエリ・モニタまたは</li></ul>



	テクノロジー・データベース統合モニタにプロパティを適用する場合、資格情報データを手動で入力する必要があります（資格情報プロファイルを選択すると資格情報データは失われます）。
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」 (113ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a></li> <li>• <a href="#">「[ツール] メニュー」 (56ページ)</a></li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
データベース接続 URL	<p>モニタの設定時に使用するデータベース接続 URL。Oracle 軽量ドライバを使用する場合、データベース接続 URL の形式は jdbc:oracle:thin:@ &lt;サーバ名または IP アドレス&gt;:&lt;ポート&gt;:&lt;database sid&gt; のようになります。</p> <p><b>例：</b>ポート 1521 を使用しているマシンの ORCL データベースに接続するには、「jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL」と入力します。前の例のようにコロン記号 (:) を含める必要があります。一般的なデータベース接続 URL のほかの例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」を参照してください。</p> <p><b>注：</b>Windows 認証を使用してデータベースにアクセスする場合、接続 URL として「jdbc:mercury:sqlserver:// &lt;サーバ名または IP アドレス&gt;:1433;DatabaseName= &lt;データベース名&gt;;AuthenticationMethod=type2」を、データベース・ドライバとして「com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver」を入力します。現在ログオンしている Windows ユーザの資格情報（SiteScope サービスを実行中のアカウント）を使用してデータベースへの接続が確立されるように、<b>【ユーザ名】</b> および <b>【パスワード】</b> ボックスは空のままにします。</p>
データベースドライバ	<p>SiteScope で使用する JDBC または ODBC ドライバ。jar ファイル、または .class ファイルが含まれるライブラリは、<b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \WEB-INF\lib</b> ディレクトリにインストールする必要があります。</p> <p>jdbc:odbc:orders 以外のデータベースを使用するには、ドライバ・ファイルを適切なディレクトリにインストールして SiteScope で使用できるようにする必要があります。</p> <p><b>標準設定値：</b> sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver</p> <p><b>例：</b>一般的なデータベース・ドライバ文字列の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを</p>

UI 要素	詳細
	参照してください。
資格情報	<p>指定したデータベースでアクセス用の名前およびパスワードが必要な場合に資格情報を許可するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>ユーザ名およびパスワードを使用</b> : 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。【ユーザ名】ボックスにユーザ名を、【パスワード】ボックスにパスワードを入力してデータベースにアクセスします。</li> <li>・ <b>事前定義された資格情報を選択</b> : データベース用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します（標準設定のオプション）。【資格情報プロファイル】ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、【資格情報の追加】をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、<a href="#">「資格情報のプリファレンスの設定方法」(571ページ)</a>を参照してください。</li> </ul>
クエリ	データベースで実行する SQL クエリ（任意指定）。SQL クエリ文字列を入力しない場合、ドライバがロードされてデータベースへの接続がテストされますが、クエリは実行されません。
結果セットの最大カラム数	SQL クエリを入力した場合にクエリ結果セットに表示される最大列数。 標準設定値 : 10
結果セットの最大行数	SQL クエリを入力した場合にクエリ結果セットに表示される最大行数。 標準設定値 : 10
ツールの実行	接続テストを実行します。接続結果は【結果】表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## 例

次に、成功したデータベース接続から SQL クエリで返されるデータの例を示します（1 行のみ）。

サーバ名	group ID	フレーム・インデックス	フレーム ID	設定名前	設定行	行チャンク	チャンク値
10.0.0.157	master.	1	_config	_database	1	1	200

サーバ名	group ID	フレーム・インデックス	フレーム ID	設定名前	設定行	行チャンク	チャンク値
	config			Max サマリ			

## データベース情報ツール

このツールでは、データベース・サーバ・メタデータ（製品およびドライバのバージョン、SQL 互換性レベル情報、サポートされている SQL 機能など）を表示できます。

アクセス方法	<p>[ツール] コンテキスト &gt; [データベース ツール] &gt; [データベース情報ツール] を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。</p>
重要な情報	<p>データベース・ドライバやユーザ名によって、表示される情報が大幅に変わります。</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">SiteScope ツール</a>」(112ページ)</li> <li>「<a href="#">[ツール] メニュー</a>」(56ページ)</li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
データベース接続 URL	<p>モニタの設定時に使用するデータベース接続 URL。Oracle 軽量ドライバを使用する場合、データベース接続 URL の形式は jdbc:oracle:thin:@&lt;サーバ名または IP アドレス&gt;:&lt;ポート&gt;:&lt;データベース SID&gt; です。</p> <p><b>例：</b>ポート 1521 を使用しているマシンの ORCL データベースに接続するには、「jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL」と入力します。前の例のようにコロン（:）とアットマーク（@）記号を含める必要があります。一般的なデータベース接続 URL のほかの例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」を参照してください。</p>
データベースドライバ	<p>SiteScope で使用する JDBC または ODBC ドライバ。jar ファイル、または .class ファイルが含まれるライブラリは、&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt; \WEB-INF\lib ディレクトリにインストールする必要があります。</p> <p>jdbc:odbc:orders 以外のデータベースを使用するには、ドライバ・ファイルを適切なディレクトリにインストールして SiteScope で使用できるようにする必要があります。</p> <p><b>標準設定値：</b> sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver</p>


UI 要素	詳細
	<b>例：</b> 一般的なデータベース・ドライバ文字列の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。
資格情報	<p>指定したデータベースでアクセス用の名前およびパスワードが必要な場合に資格情報を許可するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>ユーザ名およびパスワードを使用</b> :手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。【ユーザ名】ボックスにユーザ名を、【パスワード】ボックスにパスワードを入力してデータベースにアクセスします。</li><li>・ <b>事前定義された資格情報を選択</b> : データベース用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します（標準設定のオプション）。【資格情報プロファイル】ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、【資格情報の追加】をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、<a href="#">「資格情報のプリファレンスの設定方法」(571ページ)</a>を参照してください。</li></ul>
ツールの実行	ツールを実行し、データベース情報を表示します。テスト結果は【結果】表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## DNS ツール

このツールでは、ドメイン・ネーム・サーバにある名前を参照してドメイン名に対応する IP アドレスを表示できます。また、ドメインのネーム・サーバの情報も表示されます。

このユーティリティを使用して、DNS サーバからサーバの正しいアドレスが返されることを確認できます。また、このユーティリティでは、外部ドメインのアドレスを参照できることを確認できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 【ツール】コンテキスト &gt; 【ネットワーク ツール】 &gt; 【DNS ツール】を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。</li><li>・ DNS モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。</li><li>・ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの【プロパティ】タブで、【ツールを使用】ボタンをクリックします。</li></ul>
--------	---

	<ul style="list-style-type: none"><li>既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの <b>「ツール」</b>  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は <b>「結果」</b> 表示枠に表示されます。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」 (113ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li><a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a></li><li><a href="#">「 [ツール] メニュー」 (56ページ)</a></li></ul>


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
DNS サーバ	DNS サーバの IP アドレスまたはホスト名。空のままにすると、ローカル DNS サーバが使用されます。
解決するホスト名	IP アドレスに変更するドメイン名。
ツールの実行	テストを実行します。ツールによって要求が <b>「DNS サーバ」</b> ボックスに入力した DNS サーバに送信され、 <b>「解決するホスト名」</b> ボックスに入力したホスト名に対応する IP アドレスが表示されます。テスト結果は <b>「結果」</b> 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## イベント・ログ・ツール

このツールでは、Windows イベント・ログの一部をローカルまたはリモート・サーバで表示できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li><b>「ツール」</b> コンテキスト &gt; <b>「オペレーティング システム ツール」</b> &gt; <b>「イベント ログ ツール」</b> を選択します（<b>「ツールを使用」</b> 権限が必要です）。</li><li>Microsoft Windows イベント・ログ・モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または <b>「モニタ・ツールを使用」</b> の権限が付与されたユーザの場合）。</li><li>新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの <b>「プロパティ」</b> タブで、<b>「ツール</b></li></ul>
--------	---

	<p><b>を使用</b> ボタンをクリックします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの<b>「ツール」</b> ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は<b>「結果」</b> 表示枠に表示されます。</li> </ul>
<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>データベース・ドライバやユーザ名によって、表示される情報が大幅に変わります。</li> <li>このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<p><a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」 (113ページ)</a></p>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a></li> <li><a href="#">「[ツール] メニュー」 (56ページ)</a></li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
<b>Server</b>	<p>イベント・ログを監視するサーバ。サーバのリスト（SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます）からサーバを選択します。または、<b>「サーバの参照」</b> ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか、<b>「リモート サーバの追加」</b> をクリックして新しいサーバを追加します。</p> <p><b>標準設定値</b> : SiteScope サーバ（SiteScope がインストールされているサーバ）</p>
<b>サーバの参照</b>	<p>監視対象のサーバを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>サーバの参照</b> : ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。</li> <li><b>サーバ名の入力</b> : 監視対象サーバがネットワークで認識されていない、または<b>「リモート サーバ」</b> で設定されていないために、監視対象サーバが<b>「サーバ」</b> リストに表示されない場合、監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。<b>「サーバ名の入力」</b> ボックスで入力したマシン名の先頭に、2つの円記号 ("\\") が自動的に追加されます。</li> </ul> <p><b>注</b> : ドメインの権限が付与されているか、Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については、<a href="#">「リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定」 (479ページ)</a>を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
リモート サーバの追加	リモート・サーバを追加および設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」(484ページ)</a> を参照してください。
ログ名	表示するログ・ファイルのタイプを選択します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• Application</li><li>• ディレクトリ・サービス</li><li>• DNS</li><li>• ファイル・レプリケーション・サービス</li><li>• セキュリティ</li><li>• システム</li></ul> <b>標準設定値</b> : システム
表示イベント数	該当のイベント・ログの表示エントリ数。ログの最新のエントリが最初に表示されます。 <b>標準設定値</b> : 10
ツールの実行	テストを実行し、ログ・エントリのリストを更新します。ログ・エントリは [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## FTP ツール

このツールでは、FTP サーバにアクセスして SiteScope（FTP クライアントとして機能）と FTP サーバのやり取りを表示できます。たとえば、FTP サーバが正常に機能していないことを示す警告を SiteScope から受信した場合、まずこのツールを使用して問題を特定します。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>• [ツール] コンテキスト &gt; [Web ツール] &gt; [FTP ツール] を選択します（「<b>ツールを使用</b>」権限が必要です）。</li><li>• FTP モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または「<b>モニタ・ツールを使用</b>」権限が付与されたユーザの場合）。</li><li>• 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[<b>ツールを使用</b>] ボタンをクリックします。</li></ul>
--------	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの「<b>ツール</b>」ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は「<b>結果</b>」表示枠に表示されます。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」(113ページ)</a>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「SiteScope ツール」(112ページ)</a></li> <li><a href="#">「[ツール] メニュー」(56ページ)</a></li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>基本 FTP 設定</b>	
<b>FTP サーバ</b>	<p>テストする FTP サーバの IP アドレスまたは名前。</p> <p><b>例：</b> 206.168.191.22 または ftp.thiscompany.com</p>
<b>ファイル</b>	<p>取得するファイル名。</p> <p><b>例：</b> \pub\docs\mydoc.txt</p>
<b>ユーザ名</b>	FTP サーバにログオンするために使用する名前。
<b>パスワード</b>	FTP サーバにログオンするために使用するパスワード。
<b>ファイルのエンコード</b>	<p>監視するファイルの内容で、SiteScope を実行するサーバとは別のエンコーディングを使用している場合、使用するエンコーディングを入力します。これは、SiteScope が使用するコード・ページが対象ファイルで使用する文字セットをサポートしていない場合に必要となる可能性があります。ここで選択することで、エンコードされたファイルの内容を SiteScope で正確に照合および表示できます。</p> <p><b>標準設定値：</b> windows-1252</p>
<b>パッシブ モード</b>	SiteScope では、パッシブ FTP 接続を使用します。通常これは、ファイアウォール経由で FTP サーバにアクセスする場合に必要です。
<b>HTTP プロキシ設定</b>	
<b>HTTP プロキシ</b>	FTP テストにプロキシ・サーバを使用する場合のプロキシ名または IP アドレス。



UI 要素	詳細
プロキシのユーザ名	プロキシ・サーバにログインするために使用する名前。
プロキシ パスワード	プロキシ・サーバにログインするために使用するパスワード。
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果が【結果】表示枠に表示されていることを確認します。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

例


次に、FTP ツールのサンプル出力を示します。このサンプルでは、FTP サーバで問題なくログオンが許可され、サーバが実行されて要求が受け入れられています。要求されたファイルをサーバで特定できなかったために障害が発生しています。file.txt. 欠落しているファイルを置換するか、ファイルの場所を確認すればこの問題は簡単に解決します。

Received:220 public Microsoft FTP Service (Version 2.0).  
Sent:USER anonymous  
Received:331 Anonymous access allowed, send identity (e-mail name) as password.  
Sent:PASS anonymous  
Received:230 Anonymous user logged in.  
Sent:PASV  
Received:227 Entering Passive Mode (206,168,191,1,5,183).  
Connecting to server 206.168.191.1 port 1463  
Sent:RETR file.txt  
Received:550 file.txt:The system cannot find the file specified.  
Sent:QUIT  
Received: 221

# LDAP 認証状態ツール

このツールでは、Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）サーバで単純な認証を実行してユーザを認証できるかどうかを確認できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 【ツール】 コンテキスト &gt; 【データベース ツール】 &gt; 【LDAP 認証状態ツール】 を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。</li><li>・ LDAP モニタや Active Directory レプリケーション・モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。</li></ul>
--------	---

	<ul style="list-style-type: none"> <li>新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの「プロパティ」タブで、「ツールを使用」ボタンをクリックします。</li> <li>既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの「ツール」 ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は「結果」表示枠に表示されます。</li> </ul>
関連タスク	「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」(113ページ)
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>「SiteScope ツール」(112ページ)</li> <li>「[ツール] メニュー」(56ページ)</li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
セキュリティ プリンシパル	<p>サービスの呼び出し側を認証するプリンシパルの ID を指定するための、環境プロパティの名前を保持する定数。プリンシパルの形式は、認証スキームによって異なります。このプロパティを指定しない場合は、サービス・プロバイダによって動作が決定されます。次の形式を使用します。</p> <p><code>uid=testuser,ou=TEST,o=mydomain.com。</code></p> <p>注 :SiteScope では、次の 1 つ以上の文字がユーザ名に使用されているユーザはサポートされません。等号記号 (=) , セミコロン (;) , 引用符 (") 。</p>
セキュリティ資格情報	<p>サービスの呼び出し側を認証するプリンシパルの資格情報を指定するための、環境プロパティの名前を保持する定数。プロパティの値は、認証スキームによって異なります。たとえば、ハッシュ化されたパスワード、クリア・テキスト・パスワード、鍵、証明書などになります。このプロパティを指定しない場合は、サービス・プロバイダによって動作が決定されます。</p>
LDAP サービス・プロバイダ	<p>使用するサービス・プロバイダの設定情報を指定するための、環境プロパティの名前を保持する定数。プロパティの値には URL 文字列が含まれます。このプロパティは、アプレット・パラメータ、システム・プロパティ、リソース・ファイルで指定できます。これらのソースで指定しない場合は、サービス・プロバイダによって標準設定が決定されます。</p> <p>例 : <code>ldap://&lt;somehost&gt;:389</code></p>
オブジェクト クエリ	<p>標準設定のユーザ dn オブジェクト以外の LDAP オブジェクトを参照するためのオブジェクト・クエリ。LDAP フィルタを使用する場合、このテキスト・ボッ</p>

UI 要素	詳細
	<p>クスに有効なオブジェクト・クエリを入力する必要があります。検索フィルタの詳細については、後述の説明を参照してください。</p> <p><b>例：</b>上記で入力した <b>dn</b> オブジェクトに関連付けられている電子メール・アドレスをチェックするためのメール・オブジェクトを入力します。</p>
<b>LDAP フィルタ</b>	<p>フィルタ条件を使用して LDAP を検索します。LDAP フィルタの構文は、論理演算子が引数の前にくる前置表記法の論理式になります。</p> <p><b>例：</b>項目 <b>sn=Freddie</b> は、<b>sn</b> 属性の属性値が <b>Freddie</b> になる必要があることを意味しています。</p> <p>複数の項目をフィルタ文字列に含めるには、(<b>sn=Freddie</b>) のように各項目を括弧で囲み、&amp; (結合演算子) などの論理演算子で結合して論理式を作成します。</p> <p><b>例：</b>フィルタの構文 (&amp; (<b>sn=Freddie</b>) (<b>mail=*</b>)) では、Freddie の <b>sn</b> 属性と任意の <b>mail</b> 属性がある LDAP エントリが要求されます。</p>
<b>ツールの実行</b>	<p>テストを実行します。LDAP 認証テストの結果は【結果】表示枠に表示されます。</p>
<b>ファイルに保存</b>	<p>結果をファイルに保存します。</p>

## リンク・チェック・ツール

このツールを使用すると、Web ページの内部リンクおよび外部リンクをすべて検証して、リンクが使用できるかどうかを確認できます。また、Web ページの可用性、サイズ、コンテンツ・タイプ、ページを取得するのに要する平均時間などの URL 固有のパラメータをチェックします。

ツールを実行するたびに、【結果】表示枠に結果が表示されます。結果を Excel または PDF ファイルにエクスポートできます。

<b>アクセス方法</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>・【ツール】コンテキスト &gt; 【Web ツール】 &gt; 【リンク チェック ツール】を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。</li><li>・リンク・チェック・モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。</li><li>・新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの【プロパティ】タブで、【ツールを使用】ボタンをクリックします。</li></ul>
---------------	---

	<ul style="list-style-type: none"> <li>既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの「<b>ツール</b>」ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は「<b>結果</b>」表示枠に表示されます。</li> </ul>
<b>重要な情報</b>	データ・タイプに応じて、テーブル内のデータを昇順または降順に並べ替えることができます。または、時間、サイズ、タイプ、内部データ、外部データ、カウントでフィルタできます。
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」(113ページ)</a>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「SiteScope ツール」(112ページ)</a></li> <li><a href="#">「[ツール] メニュー」(56ページ)</a></li> </ul>

## 「リンク チェック ツール」 パネル







ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>メイン設定</b>	
<b>URL</b>	<p>リンク・チェックの起点となる URL。リンク・ツールは、この URL のページを取得して、そのページにあるすべてのリンクの URL を読み取ります。サイトにあるすべてのリンクのチェックが完了するまで処理を続行します。このツールは、他のサーバへのリンクをチェックしますが、それらのサーバへのすべてのリンクをチェックするわけではありません。</p> <p><b>例:</b> http://demo.thiscompany.com</p>
<b>一時停止 (ミリ秒)</b>	<p>各リンク・チェック間の遅延時間 (ミリ秒)。値を大きくするとリンク・チェックに要する合計時間が長くなりますが、サーバにかかる負荷は小さくなります。</p> <p><b>標準設定値:</b> 15 ミリ秒</p>
<b>タイムアウト (秒)</b>	<p>ページのダウンロードを開始してからタイムアウトするまでツールが待機する時間 (秒単位)。この期間を経過すると、URL モニタはエラーを記録し、エラー・ステータスであることをレポートします。</p> <p><b>標準設定値:</b> 5 秒</p>
<b>最大リンク数</b>	このツールがチェックするリンクの最大数。リンクの最大数に達すると、モニ

UI 要素	詳細
	<p>タは停止し、チェックしたリンクの結果をレポートします。サイトが大規模で、サイトにあるすべてのリンクをチェックする場合は、この値を大きくします。</p> <p><b>標準設定値 : 100</b></p>
<b>モニタ実行の結果データを使用</b>	<p>選択すると、最後にモニタが実行されたときのリンク・チェックの結果データが表示されます。</p> <p><b>注 :</b> ダッシュボードからツールが実行された場合にのみ、このチェック・ボックスを選択できます ( [ツール] パネルから実行された場合は、選択できません ) 。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されている</p>
<b>認証設定</b>	
<b>認証ユーザ名</b>	URL にアクセスするためのユーザ名 (必要な場合) 。
<b>認証パスワード</b>	URL にアクセスするためのパスワード (必要な場合) 。
<b>プロキシ設定</b>	
<b>HTTP プロキシ</b>	プロキシ・サーバを使用して URL にアクセスする場合の HTTP プロキシ・サーバのドメイン名とポート。
<b>プロキシ サーバのユーザ名</b>	このプロキシ・サーバで URL へのアクセスに名前が必要な場合に使用するプロキシ・サーバ・ユーザ名。技術的な注記 : これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。
<b>プロキシ サーバのパスワード</b>	<p>このプロキシ・サーバで URL へのアクセスに名前が必要な場合に使用するプロキシ・サーバ・パスワード。</p> <p><b>注 :</b> これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。</p>
<b>ツールの実行</b>	<p>テストを実行し、結果を [結果] 表示枠に表示します。URL 内の各リンクは、情報とともに別の行に表示されます。詳細については、<a href="#">「 [結果] パネル」 (130ページ)</a>を参照してください。</p>

## [結果] パネル

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>Excel または PDF にエクスポート</b> : リンク・チェックの結果を Excel または PDF ファイルにエクスポートして保存できます。
	 <p><b>フィルタの編集</b> : テーブルに表示されているデータをフィルタできます。</p> <p><b>演算子</b> : 下矢印をクリックして演算子を選択します (= 等しい, != 等しくない, &lt; より小さい, &lt;= 以下, &gt; より大きい, &gt;= 以上, ln - 入力した値を含む)。</p> <p><b>現在のフィルタを適用</b> : 緑色のチェックをクリックして、フィルタを適用します。</p> <p><b>現在のフィルタをクリア</b> : ごみ箱をクリックして、フィルタをクリアします。</p>
	<b>表示列を変更</b> : テーブルに表示する列を選択できます。 [状態] および [時間] 列は常に表示されます。
<b>状態</b>	<p>URL 内のリンクの状態。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>ok</b></li> <li> <b>エラー</b></li> </ul> <p>状態がエラーの場合、エラーに関する説明が表示されます。 たとえば, bad request, unauthorized, unable to connect, timed out reading です。</p>
<b>サイズ (KB)</b>	リンクから利用できる Web ページのサイズ。
<b>時間</b>	URL 内のリンクの応答時間。
<b>予測時間 (秒)</b>	予測時間 (秒)。
<b>内容のタイプ</b>	URL 内のリンクのコンテンツ・タイプ。
<b>URL</b>	リンクの URL。ハイパーリンクをクリックして、リンク・ページを開きます。

UI 要素	詳細
ソース・ページ	リンクのソース・ページ。ハイパーリンクをクリックして、ソース・ページを開きます。
外部	リンクが外部 (yes) であるか、内部 (no) であるかを示します。
カウント	URL ページに到達するリンクの数。

## ログ分析ツール

このツールによって、ファイル内で繰り返しパターンを示すためにログ・ファイルをスキャンできます。ツールがパターンをリストアップしたら、ツールでログ内のそのパターンを監視するための SiteScope ログ・ファイル・モニタを作成できます。

アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [共通ユーティリティ ツール] > [ログ分析ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>分析するログの構造に一貫性がない場合は、このツールを使用できません。</li><li>ログ分析ツールで検出されたパターンのログ・ファイル・モニタを作成した後で、新しいモニタがモニタ・ツリーにリストされます。</li><li>分析するテキストが配置されているログ・ファイル内の場所をログ分析ツールログ・ファイルに通知するには、正規表現または分析するテキストの前にあるテキストのブロック数を指定できます。</li></ul> <b>制限事項:</b> 分析するログ・ファイルのサイズは、10 MB を超えないようにしてください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li><a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」 (113ページ)</a></li><li><a href="#">「ログ分析ツールの使用方法 - 使用例のシナリオ」 (113ページ)</a></li></ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li><a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a></li><li><a href="#">「[ツール] メニュー」 (56ページ)</a></li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
ログ分析ツール領域	

UI 要素	詳細
<b>SiteScope サーバ上のフォルダの場所</b>	分析対象のログ・ファイルが配置されている SiteScope サーバ上のフォルダのパスを入力します。
<b>ファイル名</b>	<p>分析対象のログ・ファイル名を入力します。同時に複数ファイルを分析するには、そのファイルを指定したフォルダにコピーし、分析対象のログ・ファイルのファイル名と一致する正規表現を作成します。</p> <p><b>例：</b> error123.log と error345.log を同時に分析するには /error/ と入力します。</p>
<b>正規表現を使用します</b>	<p>正規表現または分析するテキストの前にあるテキストのブロック数を指定できます。</p> <p>正規表現を使用してログ・ファイルで分析するテキストを検索するには、このオプションを選択します。</p>
<b>正規表現</b>	<p>分析するテキストを検索するためにツールが使用する正規表現を入力します。正規表現は、スラッシュ (/) の間に入力する必要があります。</p> <p>このフィールドは <b>「正規表現を使用します」</b> オプションを選択した場合にのみ有効になります。</p> <p><b>例：</b> 正規表現の例については、<a href="#">「正規表現の例」(133ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>メッセージ開始前のブロック数</b>	<p>ログ・ファイルには多数の情報が含まれます。ログ分析ツールは、メッセージのパターンを探します（たとえば、INFO または ERROR 後のメッセージ）。</p> <p>このフィールドは <b>「正規表現を使用します」</b> オプションを選択した場合は無効です。</p> <p>分析対象のメッセージが開始する場所をツールに示すには、分析するメッセージの先頭の前の、ログの各行に現れる空白によって区切られるテキスト（文字列）のブロック数を指定する必要があります。日付形式に空白が含まれる場合には日付の空白を無視します（以下の <b>「日付形式」</b> を参照してください）。</p> <p><b>注：</b> 一貫した構造を持たないログはこのツールで分析できません。</p>
<b>日付があるブロックの順番</b>	<p>左からカウントした、日付が配置されるテキストのブロックの順序を入力します。最初のブロックの数は 1 です。</p> <p>このフィールドは <b>「正規表現を使用します」</b> オプションを選択すると無効になります。</p>
<b>日付形式</b>	ログで使用される日付形式を選択します。



UI 要素	詳細
	<b>標準設定形式 : yyyy-mm-dd HH:mm:ss,SSS</b>
<b>ツール・タイムアウト (秒単位)</b>	タイムアウトの前にログ分析ツールを待機する時間 (秒単位)。 <b>標準設定値 :30 秒</b>
<b>ツールの実行</b>	テストを実行します。すべての繰り返しメッセージ・パターンのリストは [結果] ボックスに表示されます。
<b>結果領域</b>	
<b>新規ログ・ファイル・モニタの作成</b>	パターンを選択しボタンをクリックして [グループの選択] ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスで既存のグループを選択するか、または [新規グループ] ボタンをクリックして新しいグループを作成できます。 [内容の照合] ボックスに表示された正規表示が選択された状態で [新規ログ ファイル モニタ] ダイアログ・ボックスが開きます。
<b>メッセージ・パターン</b>	ログで検出されたパターンのリストが表示されます。 リストはパターンの発生数の順に並べられます。
<b>発生数</b>	各パターンのインスタンス数が表示されます。 リストはパターンの発生数の順に並べられます。

## 正規表現の例

次の構造を持つログで、正規表現

`\d*-\d*-\d*\s\d*.*,\d*\s\(\w.*\)\s\(\w.*\)\s\w.*\s-\s`

を使用します。ここで、**d** は数字、**w** はワード、**s** はスペース、**\*** は任意の文字を示します。

```
2010-11-02 11:49:02,738 [SiteScope Main Thread] (SiteScopeHeartbeatManager.java:53) INFO - The
Heartbeat Scheduler was started.
2010-11-02 11:49:02,786 [SiteScope Main Thread] (ServiceController.java:82) INFO - Registering
service:Host DNS Resolution Service
2010-11-02 11:49:02,951 [SiteScope Main Thread] (ServiceController.java:82) INFO - Registering
service:Monitor History Event Sink Service
2010-11-02 11:49:03,035 [SiteScope Main Thread] (ServiceController.java:82) INFO - Registering
service:Alert Action Execution Counter Registry Service
2010-11-02 11:49:03,035 [SiteScope Main Thread] (ServiceController.java:82) ERROR - Connection Error
while trying to connect
2010-11-02 11:49:03,037 [SiteScope Main Thread] (ServiceController.java:82) INFO - Registering
```

```
service:Alert Open Status Registry Service
2010-11-02 11:49:03,277 [SiteScope Main Thread] (SiteScopeSupport.java:655) INFO
```

次の構造を持つログで、正規表現


`\d*\s\w*\s\w*\s\w*\s*\d*\s\w*\s`

を使用します。ここで、**d** は数字、**w** はワード、**s** はスペース、**\*** は任意の文字を示します。

```
123 Error starts *****12**** - The Heartbeat Scheduler was started.
123 Error starts *****23**** - Registering service:Host DNS Resolution Service
123 Error starts *****34**** - Registering service:Monitor History Event Sink Service
123 Error starts *****45**** - Registering service:Alert Action Execution Counter Registry Service
123 Error starts *****45**** - Registering service:Alert Action Execution Counter Registry Service
```

## メールの送受信ツール

このツールでは、ネットワークを使用してメール・サーバをチェックし、メール・サーバで要求が受け入れられているかどうかや、メッセージの送受信ができるかどうかを確認できます。SMTP を使用して標準的なメール・メッセージを送信し、次に POP ユーザ・アカウントを使用してそのメッセージを取得します。SiteScope によって送信される各メッセージには、不正なメッセージを取得していないかや、誤った肯定読み取りを返していないかをチェックするための一意の鍵が含まれています。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>「ツール」</b> コンテキスト &gt; <b>「メール ツール」</b> &gt; <b>「メールの送受信ツール」</b> を選択します（<b>「ツールを使用」</b> 権限が必要です）。</li><li>・ メール・モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または <b>「モニタ ツールを使用」</b> 権限が付与されたユーザの場合）。</li><li>・ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの <b>「プロパティ」</b> タブで、<b>「ツールを使用」</b> ボタンをクリックします。</li><li>・ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの <b>「ツール」</b>  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は <b>「結果」</b> 表示枠に表示されます。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</a> (113ページ)
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「SiteScope ツール」</a> (112ページ)</li><li>・ <a href="#">「[ツール] メニュー」</a> (56ページ)</li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>基本メール設定</b>	
<b>アクション</b>	<p>実行するアクションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>送信と受信</b> : テスト・メッセージを SMTP サーバに送信して POP3 または IMAP4 サーバから受信し、メール・サーバが起動および動作していることを確認できます（標準設定のオプション）。</li> <li>・ <b>受信のみ</b> : 以前に送信したメッセージの受信用メール・サーバ（POP3 または IMAP4）をチェックします。このチェックは、以前に送信したメッセージの内容を照合して行われます。</li> <li>・ <b>送信のみ</b> : 受信用メール・サーバでメッセージが受信されたかどうかをチェックします。</li> </ul>
<b>送信元電子メールサーバ (SMTP)</b>	<p>テスト・メール・メッセージを送信する SMTP メール・サーバのホスト名。</p> <p>例 : mail.thiscompany.com</p>
<b>送信先アドレス</b>	<p>テスト・メッセージを送信するメール・アドレス。</p>
<b>受信プロトコル</b>	<p>受信用メール・サーバで使用するプロトコル。次のオプションのいずれかを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>IMAP4</b> では、メール受信のために IMAP4 メール・サーバを使用します。</li> <li>・ <b>IMAP4S</b> では、メール受信のためにセキュア IMAP4 メール・サーバを使用します。</li> <li>・ <b>POP3</b> では、メール受信のために POP3 メール・サーバを使用します。</li> <li>・ <b>POP3S</b> では、メール受信のためにセキュア POP3 メール・サーバを使用します。</li> </ul> <p>標準設定値 : POP3</p>
<b>電子メール受信サーバ</b>	<p>テスト・メッセージを受信する POP メール・サーバのホスト名。これは、テスト・メッセージを送信したメール・サーバと同じにすることができます。</p> <p>例 : mail.thiscompany.com</p>
<b>電子メール受信サーバのユーザ名</b>	<p>POP ユーザ・アカウント名。このアカウントにテスト電子メール・メッセージが送信され、アカウントにログインしてメッセージが受信されたことが確認されます。このアカウントのほかのメールは検出されません。このアカウントには、個人用メール・アカウントまたは別の既存のアカウントを使用できます。</p> <p>注 : サーバからのメッセージを自動的に受信して削除する電子メール・リー</p>

UI 要素	詳細
	ダーを使用する場合、メールの送受信ツールでメール・メッセージが表示されずにエラーがレポートされる可能性があります。
電子メール サーバパスワード	必要な場合に使用するテスト・メール・アカウントのパスワード。
内容が一致するもののみ受信	<p>受信メッセージの内容を照合するためのテキスト文字列。受信メッセージにこのテキストが含まれていない場合、メールの送受信でエラーがレポートされます。これは、受信専用オプション（Subject:MySubject など）が対象となります。検索では大文字と小文字は区別されます。</p> <p>HTML タグはテキスト・ドキュメントの一部であるため、検索するテキストに HTML タグが含まれている場合は HTML タグも対象となります（「&lt; B&gt; Hello&lt; /B&gt; World」など）。これは、XML ページにも当てはまります。</p> <p>文字列をスラッシュで囲んで正規表現による照合を実行できます。最後のスラッシュの後に i を付けると、照合で大文字と小文字が区別されません。たとえば、"/href=Doc\d+\.html/" や "/href=doc\d+\.html/i" のようになります。</p> <p>特定のテキスト部分を保存して状態の一部として表示する場合、正規表現に括弧を使用します（例：/Temperature:(\d+)/）。これにより、ページに表示されるときに該当の温度が返されます。</p>
詳細メール設定	
タイムアウト (秒)	<p>メール・メッセージの受信を待機する秒数。この秒数を超えるとタイムアウトになります。</p> <p><b>標準設定値</b> :300 秒</p>
POP チェックの遅延 (秒)	<p>SiteScope によってテスト・メッセージが送信された直後に、メール・アカウントにログインしてメッセージが受信されたことが確認されます。メッセージが受信されていない場合、SiteScope では再チェック前に自動的に 10 秒間待機します。待機時間は、このボックスに別の秒数を指定して調整できます。</p> <p><b>標準設定値</b> :10 秒</p>
SMTP ユーザ	メッセージの送信前に SMTP サーバが認証を必要とする場合、SMTP 認証に必要なユーザ名。
SMTP パスワード	SMTP 認証用パスワード（必要な場合）。
NTLM 認証	電子メール・サーバで NTLM 認証が使用される場合の NTLM のバージョン（バージョン 1 または 2）。

UI 要素	詳細
	<b>標準設定値</b> : なし
<b>SMTP SSL/TLS</b>	電子メールを SSL / SMTP サーバ経由でセキュアに送信されます。選択されると、モニタはすべての SSL/TLS を送信します。  <b>注</b> : <b>【カスタム SMTP ポート】</b> で別のポートを指定しない限り、標準設定で、SMTP メール・サーバのポート 465 を経由してメールが送信されます。（下記を参照）。  <b>標準設定値</b> : 選択されていない
<b>カスタム SMTP ポート</b>	電子メールをユーザ指定ポート経由で送信できます。このボックスが空のままの場合、メール送信用の標準設定ポート（SMTP メール・サーバの場合は 465）が使用されます。
<b>詳細表示</b>	送受信テストの詳細が表示されます。
<b>ツールの実行</b>	テストを実行します。メール・サーバのテスト結果が <b>【結果】</b> 表示枠に表示されていることをチェックします。
<b>ファイルに保存</b>	結果をファイルに保存します。

## ネットワーク状態ツール

このツールでは、現在のネットワーク・インタフェースの統計情報がレポートされ、アクティブなネットワーク接続が表示されます。この情報は、ネットワーク・インタフェースの状況を判断するのに役立つ場合があります。また、ネットワーク接続が開いたまま残されていたり、接続が閉じられることなく次々と開かれていくといった暴走状態などの問題を追跡できます。


<b>アクセス方法</b>	<b>【ツール】</b> コンテキスト > <b>【ネットワーク ツール】</b> > <b>【ネットワーク状態ツール】</b> を選択します（ <b>「ツールを使用」</b> 権限が必要です）。
<b>重要な情報</b>	このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</a> (113ページ)
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">「SiteScope ツール」</a> (112ページ)</li><li>• <a href="#">「【ツール】メニュー」</a> (56ページ)</li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
ツールの実行	ネットワーク状態ツールを実行し、ネットワーク情報をレポートします。データは【結果】表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## ニュース・サーバ・ツール

このツールを使用して、ニュース・サーバにアクセスし、SiteScope（ニュース・クライアントとして機能）とニュース・サーバの間の NNTP 相互通信を表示できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 【ツール】 コンテキスト &gt; 【アプリケーション ツール】 &gt; 【ニュース サーバ ツール】 を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。</li><li>・ ニュース・モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。</li><li>・ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの【プロパティ】タブで、【ツールを使用】ボタンをクリックします。</li><li>・ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの【ツール】 ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は【結果】表示枠に表示されます。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」(113ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「SiteScope ツール」(112ページ)</a></li><li>・ <a href="#">「【ツール】メニュー」(56ページ)</a></li></ul>


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
ニュース サーバ	ニュース・サーバの名前。形式は次のとおりです。 news.sitescope.com または news.sitescope.com:7777

UI 要素	詳細
ニュース グループ	ニュース・グループ名（任意指定）。複数のニュース・グループ名はカンマ（「,」）で区切ります。
ユーザ名	上記で指定したニュース・サーバへのアクセスに名前およびパスワードが必要な場合に使用するユーザ名。
パスワード	上記で指定したニュース・サーバへのアクセスに名前およびパスワードが必要な場合に使用するパスワード。
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は【結果】表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## パフォーマンス・カウンタ・ツール

このツールを使用して、Windows ネットワーク内の特定のマシンのパフォーマンス・カウンタをチェックできます。このツールは、SiteScope の一部として供給される **perfex.exe** 実行ファイルへのインタフェースを提供します。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・【ツール】コンテキスト &gt; 【オペレーティング システム ツール】 &gt; 【パフォーマンス カウンタ ツール】を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。</li> <li>・CPU モニタ、ダイナミック・ディスク領域モニタ、メモリ・モニタ、Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタを設定または表示するときにも使用できます（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。</li> <li>・新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの【プロパティ】タブで、【ツールを使用】ボタンをクリックします。</li> <li>・既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの【ツール】ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は【結果】表示枠に表示されます。</li> </ul>
重要な情報	このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。

関連タスク	「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」(113ページ)
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>「SiteScope ツール」(112ページ)</li> <li>「[ツール] メニュー」(56ページ)</li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
<b>パフォーマンス・カウンタ・ツール</b>	
<b>Server</b>	<p>監視する Windows パフォーマンス・カウンタのオブジェクトが実行されているサーバ。サーバのリスト (SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます) からサーバを選択します。または, [サーバの参照] ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか, [Microsoft Windows リモート サーバを追加] をクリックして新しいサーバを追加します。</p> <p><b>標準設定値:</b> SiteScope サーバ (SiteScope がインストールされているサーバ) 管理ユーザ・アカウント / パスワード</p> <p>クエリ対象のマシンの管理ユーザ名とパスワードを入力してください。この入力が必要になるのは, 接続しようとしているドメインまたはワークグループのパフォーマンス・カウンタにアクセスする管理権限を持たないアカウントで SiteScope 実行中の場合だけです。</p> <p>パスワードを入力する必要があることをテストで示された場合は, パフォーマンス・カウンタ・レジストリへのアクセス権限がリモート・マシンに必要です。</p> <p><b>ヒント:</b> [カウンタ オブジェクト] のドロップダウン・リストに「(利用可能なカウンタ オブジェクトなし このユーザ名とパスワードを使用)」というメッセージが表示されており, ユーザ名とパスワードを入力してない場合は, 次のどれかを実行して, 設定対象としているリモート・マシンのレジストリへのアクセスを可能にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ローカルの管理権限を持つリモート・マシンに対する SiteScope Windows リモート接続をセットアップします。</li> <li>自分のリモート・マシンへのアクセス権を持つユーザとして SiteScope サービスを実行します。</li> </ul>
<b>サーバの参照</b>	<p>[HP SiteScope サーバの検索] ダイアログ・ボックスが開き, 監視対象のサーバを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>サーバの参照:</b> ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン</li> </ul>



UI 要素	詳細
	<p>ン・リストからサーバを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>サーバ名の入力</b>: 監視対象サーバがネットワークで認識されていない、または [リモート サーバ] で設定されていないために、監視対象サーバが [サーバ] リストに表示されない場合、監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。[サーバ名の入力] ボックスで入力したマシン名の先頭に、2つの円記号 ("\\") が自動的に追加されます。</li> </ul> <p><b>注</b>: ドメインの権限が付与されているか、Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については、<a href="#">「リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定」(479ページ)</a>を参照してください。</p>
リモート サーバの追加	<p>[リモート サーバの追加] ダイアログ・ボックスが開き、追加するリモートのタイプ (Windows または UNIX) を選択して設定の詳細を入力できます。</p> <p>Microsoft Windows リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」(484ページ)</a>を参照してください。</p> <p>UNIX リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[新規 UNIX リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」(501ページ)</a>を参照してください。</p>
Counters	<p>個々のパフォーマンス・カウンタおよび選択したカウンタ・オブジェクトの対応する値を表示する、カウンタ・オブジェクトを選択します。</p>
ツールの実行	<p>ツールを実行し、個々の Windows パフォーマンス・カウンタおよび選択したカウンタ・オブジェクトの対応する値を表示します。この情報は [結果] 表示枠に表示されます。</p>
ファイルに保存	<p>結果をファイルに保存します。</p>
<b>結果</b>	
カウンタ名	<p>パフォーマンス・カウンタ名。</p>
カウンタ値	<p>パフォーマンス・カウンタ・オブジェクトの値。</p>
カウンタの詳細	<p>パフォーマンス・カウンタの詳細。</p>
PERF タイプ	<p>カウンタ・タイプの詳細。</p>

## Ping ツール

このツールでは、往復時間とパスが表示されます。このツールによってパケットが別の場所に送信され、送信者に返されます。ネットワークに問題がある場合、ping を使用して別の場所に到達できるかどうかわかります。Ping ツールでは、現在のサーバから別の場所に ping を行います。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>・ [ツール] コンテキスト &gt; [ネットワーク ツール] &gt; [Ping ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。</li><li>・ Ping モニタやポート・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。</li><li>・ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。</li><li>・ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール]  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」(113ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「SiteScope ツール」(112ページ)</a></li><li>・ <a href="#">「[ツール] メニュー」(56ページ)</a></li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
解決するホスト名	ping するホストのドメイン名または IP アドレス。 例: demo.thiscompany.com または 206.168.112.53
ツールの実行	ドメイン名または IP アドレスに Ping します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## プロセス・ツール

このツールでは、SiteScope がインストールされているサーバで実行中のプロセスが表示されます。これは、重要なプロセスが利用可能であることを確認する場合に便利です。

アクセス方法	〔ツール〕 コンテキスト > 〔オペレーティング システム ツール〕 > 〔プロセス ツール〕 を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」 (113ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a></li><li>・ <a href="#">「〔ツール〕メニュー」 (56ページ)</a></li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
Server	<p>監視対象プロセスが実行されているサーバ。サーバのリスト（SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます）からサーバを選択します。または、〔サーバの参照〕 ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか、〔リモート サーバの追加〕 をクリックして新しいサーバを追加します。</p> <p><b>標準設定値：</b> SiteScope サーバ（SiteScope がインストールされているサーバ）</p>
サーバの参照	<p>〔HP SiteScope サーバの検索〕 ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のサーバを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>サーバの参照：</b> ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。</li><li>・ <b>サーバ名の入力：</b>監視対象サーバがネットワークで認識されていない、または〔リモート サーバ〕 で設定されていないために、監視対象サーバが〔サーバ〕 リストに表示されない場合、監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。〔サーバ名の入力〕 ボックスで入力したマシン名の先頭に、2つの円記号 ("\\") が自動的に追加されます。</li></ul> <p><b>注：</b>ドメインの権限が付与されているか、Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については、<a href="#">「リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定」 (479ページ)</a>を参照してください。</p>
リモート サーバ	〔リモート サーバの追加〕 ダイアログ・ボックスが開き、追加するリモートの

UI 要素	詳細
の追加	タイプ（Windows または UNIX）を選択して設定の詳細を入力できます。  Microsoft Windows リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(484ページ)を参照してください。  UNIX リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規 UNIX リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(501ページ)を参照してください。
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は「結果」表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## 正規表現ツール

このツールを使用すると、正規表現の照合を実行できます。

アクセス方法	<a href="#">[ツール] コンテキスト</a> > <a href="#">[共通ユーティリティ ツール]</a> > <a href="#">[正規表現ツール]</a> を選択します（「 <a href="#">ツールを使用</a> 」権限が必要です）。
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</a> (113ページ)
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>「<a href="#">SiteScope ツール</a>」(112ページ)</li><li>「<a href="#">[ツール] メニュー</a>」(56ページ)</li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
テキスト	正規表現の照合を実行する文字列または値を含むテキストの一部をコピーして、このボックスに貼り付けます。  正規表現を効率よく作成するには、照合する対象データまたはパターンに先行する内容をすべて含めます。たとえば、Web ページの内容を照合するための正規表現を作成する場合は、「 <a href="#">URL ツール</a> 」(157ページ)を使用して HTTP ヘッダを含む HTTP の内容全体を取得します。
正規表現	入力したテキストの一部を照合するには、正規表現をスラッシュ（//）で囲ん

UI 要素	詳細
	で入力します。  <b>注：</b> 復帰改行および行送りが含まれる複数行の内容の場合、表現の最後に s 検索修飾子を追加して内容を 1 行のテキストとして扱うことを検討してください。  <b>例：</b> /value:\W[\d]{2,6}/s
ツールの実行	テストを実行します。照合テストの結果は「結果」表示枠に表示されます。正規表現に問題がある場合、エラー・メッセージが表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。


## 解析された括弧および一致文字列テーブル

本項で説明するテーブルには、正規表現内の括弧のペアによって保持された値または逆参照として要求される一致が表示されます。表現に括弧が含まれていない場合、このテーブルは空です。解析された括弧テーブルには次の列があります。

UI 要素	詳細
左から数えた括弧の数	左から数えた、正規表現内の括弧で区切られたパターンが表示されます。
一致テキスト	左側の列に表示された、括弧でマークされたパターンに一致したテキストが表示されます。
スラッシュの間と完全一致	テーブルの下にあるテキスト領域。「 <b>検索対象となるテキスト</b> 」ボックスに入力された内容全体がそのまま表示されます。このなかで正規表現内のパターンに一致した内容が、通常は青いフォントで強調表示されます。これは、.*パターンのようなワイルドカード表現を使用して、一致する内容が多すぎる場合などに起こり得る問題を表示するのに便利です。また、内容に重複したパターンがあるという問題を明らかにすることもできます。この場合、内容の必要な部分に一致させるために別の固有パターンを表現に追加する必要があります。

## サービス・ツール

このツールでは、SiteScope がインストールされているサーバ上で実行中のサービスが表示されます。これは、重要なサービスが利用可能であることを確認する場合に便利です。リモート UNIX マシンが定義されている場合、ドロップダウン・メニューに表示されます。

<b>アクセス方法</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>「ツール」</b> コンテキスト &gt; <b>「オペレーティング システム ツール」</b> &gt; <b>「サービス ツール」</b> を選択します（<b>「ツールを使用」</b> 権限が必要です）。</li> <li>・ サービス・モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または <b>「モニタ・ツールを使用」</b> 権限が付与されたユーザの場合）。</li> <li>・ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの <b>「プロパティ」</b> タブで、<b>「ツールを使用」</b> ボタンをクリックします。</li> <li>・ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの <b>「ツール」</b>  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は <b>「結果」</b> 表示枠に表示されます。</li> </ul>
<b>重要な情報</b>	このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</a> (113ページ)
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <a href="#">「SiteScope ツール」</a> (112ページ)</li> <li>・ <a href="#">「[ツール] メニュー」</a> (56ページ)</li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

<b>UI 要素</b>	<b>詳細</b>
<b>Server</b>	<p>監視対象サービスが実行されているサーバ。（SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示される）サーバのリストからサーバを選択します。または、<b>「サーバの参照」</b> ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか、<b>「リモート サーバの追加」</b> をクリックして新しいサーバを追加します。</p> <p><b>標準設定値</b> :SiteScope サーバ（SiteScope がインストールされているサーバ）</p>
<b>サーバの参照</b>	<p><b>「HP SiteScope サーバの検索」</b> ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のサーバを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>サーバの参照</b> : ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。</li> <li>・ <b>サーバ名の入力</b> :監視対象サーバがネットワークで認識されていない、または <b>「リモート サーバ」</b> で設定されていないために、監視対象サーバが</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p>【サーバ】リストに表示されない場合、監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。【<b>サーバ名の入力</b>】ボックスで入力したマシン名の先頭に、2つの円記号 ("\\") が自動的に追加されます。</p> <p><b>注：</b>ドメインの権限が付与されているか、Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については、「<a href="#">リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定</a>」(479ページ)を参照してください。</p>
リモート サーバの追加	<p>【リモート サーバの追加】ダイアログ・ボックスが開き、追加するリモートのタイプ（Windows または UNIX）を選択して設定の詳細を入力できます。</p> <p>Microsoft Windows リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">【新規 Microsoft Windows リモート サーバ】 / 【Microsoft Windows リモート サーバの編集】ダイアログ・ボックス</a>」(484ページ)を参照してください。</p> <p>UNIX リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">【新規 UNIX リモート サーバ】 / 【UNIX リモート サーバの編集】ダイアログ・ボックス</a>」(501ページ)を参照してください。</p>
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は【結果】表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## SiteScope ログ・グラバ・ツール

このツールを使用すると、SiteScope のログ・ファイルと設定ファイルを収集できます。さらに、次のデータを収集できます。

- SiteScope のスレッド・ダンプ
- システムコマンド（netstat や dir など）の実行結果
- JVM に関する情報
- Windows イベント・ログ・エントリ

標準設定の設定ファイル（**default.loggrabber.conf.xml**）を使用するか、独自の設定ファイルを作成して、たとえば SiteScope 設定のスケジュール・バックアップを作成できます。

**注:** <SiteScope のルート・ディレクトリ>\tools\LogGrabberSiteScope フォルダにある **LogGrabber.bat** スクリプト（UNIX の場合は **LogGrabber.sh**）を実行することにより、SiteScope ログ・グラバ・ツールを手動で使用できます。このモードでは、次の設定ファイルを1つのパラメータとして使用する必要があります：**LogGrabber.bat full.loggrabber.conf.xml**。


このツールは、スクリプト警告から使用する場合と、スクリプト・モニタから使用場合があります。前者の場合、たとえば、CPU の使用率が 90% を超えているか、またはログに重大なエラーが見つかったときに、トラブルシューティング用のデータを収集する、後者の場合、スケジューラを使用して定期データを収集するといった指定が可能です。設定ファイルの名前は、スクリプトで1つのパラメータとして送信する必要があります。

アクセス方法	<a href="#">[ツール] コンテキスト</a> > <a href="#">[共通ユーティリティ ツール]</a> > <a href="#">[SiteScope ログ グラバ ツール]</a> を選択します (「 <a href="#">ツールを使用</a> 」権限が必要です)。
重要な情報	SiteScope 設定には、エンコードされたパスワードなど大切なデータが含まれていることがあるので、 <a href="#">[SiteScope ログ グラバのダウンロード実行結果]</a> 権限 ( <a href="#">[プリファレンス]</a> > <a href="#">[ユーザ管理プリファレンス]</a> > <a href="#">[権限]</a> > <a href="#">[その他]</a> ) では、信頼されていないユーザには付与しないことを確認してください。ユーザ権限の詳細については、 <a href="#">「権限」 (757ページ)</a> を参照してください。
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」 (113ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a></li> <li>• <a href="#">「[ツール] メニュー」 (56ページ)</a></li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
<b>SiteScope ログ・グラバ・ツール領域</b>	
設定ファイル	使用する設定ファイルを選択します。 <b>標準設定値</b> : default.loggrabber.conf.xml
フォルダ	実行時の変更をチェックするフォルダおよびファイルを選択します。
ツールの実行	ツールを実行します。結果は <b>[結果]</b> ボックスに表示されます。
<b>結果</b>	
ファイルのダウンロード	最後の実行結果を含むファイルをダウンロードできます。 <b>注</b> : 実行結果ファイルをダウンロードするには、「 <a href="#">ログ・グラバのダウンロード実行結果</a> 」権限が必要です。
ファイル	結果ファイルをすべて表示します (.zip 形式)。クリックしてファイルを開き、選択したファイルの結果をダウンロードします。



UI 要素	詳細
サイズ	結果ファイルのサイズ。
最終更新日	結果ファイルが最後に更新された日時。
	<b>Excel または PDF にエクスポート</b> : 収集したログ・ファイルの結果を Excel または PDF ファイルにエクスポートして保存できます。

## SNMP ブラウザ・ツール

このツールは、SNMP エージェントの MIB の詳細を提供します。SNMP エージェントの接続プロパティの検証や、SNMP エージェントのカウンタの詳細情報の取得に使用できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ [ツール] コンテキスト &gt; [SNMP ツール] &gt; [SNMP ブラウザ ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。</li> <li>・ Cisco Works モニタ, F5 Big-IP モニタ, MIB による SNMP モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者, または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。</li> <li>・ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで, 既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで, [ツールを使用] ボタンをクリックします。</li> <li>・ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには, SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより, ツールが開き, モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。</li> </ul>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ このツールは, 特定のエージェント上にあるすべての OID を横断し, &lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \templates.mib ディレクトリの MIB 情報を使用してテーブルの OID, カウンタ名, タイプ, 値を表示します。</li> <li>・ MIB モニタによる SNMP の作成時に templates.mib ディレクトリに MIB ファイルを追加した後 MIB ファイルのドロップダウン・ボックス内のリストに MIB が表示されていない場合は, 『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』にある「MIB による SNMP モニタ」の MIB コンパイルのトラブルシューティング手順を参照してください。</li> </ul>
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」(113ページ)</a>

関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">SiteScope ツール</a>」 (112ページ)</li> <li>「<a href="#">[ツール] メニュー</a>」 (56ページ)</li> </ul>
------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
<b>SNMP 設定</b>	
<b>Server</b>	SNMP エージェントが実行されている、監視対象のデバイスのホスト名または IP アドレス。
<b>ポート</b>	SNMP エージェントが監視するポート。 <b>標準設定値</b> : 161
<b>MIB ファイル</b>	表示する MIB。[すべての MIB] を選択した場合、MIB 横断時に取得されたすべてのデータが表示されます。特定の MIB を選択した場合、その MIB 内の OID のみが表示されます。この MIB のリストを更新または拡張するには、新しい MIB ファイルを < <b>SiteScope のルート・ディレクトリ</b> > \templates.mib ディレクトリに置きます。 <b>標準設定値</b> : すべての MIB
<b>開始 OID</b>	このモニタのカウンタを選択する場合に、このオプションを使用します。モニタが SNMP エージェントのツリーの取得を試みるときは、ここで入力した OID 値から開始します。標準設定値は 1 で、一般的に使用され、ほとんどのアプリケーションに適用できます。1 から開始する OID を処理しないアプリケーションから値の取得を試みる場合のみ、このボックスを編集します。標準設定値 1 でカウンタを取得できない場合は、別の値の入力が必要になることもあります。
<b>SNMP 接続設定</b>	
<b>タイムアウト (秒)</b>	すべての SNMP 要求 (再試行を含む) が完了するまで SiteScope が待機する合計時間 (秒単位)。 <b>標準設定値</b> : 5 秒
<b>再試行回数</b>	SiteScope が SNMP GET 要求を失敗とみなすまで各 SNMP GET 要求を再試行する回数。 <b>標準設定値</b> : 1
<b>コミュニティ</b>	バージョン 1 または 2 接続で SNMP エージェントに接続するときに使用するコミュニティ文字列。

UI 要素	詳細
	標準設定値 : public
SNMP のバージョン	<p>ツールがエージェントへの接続時に使用する SNMP のバージョン。SiteScope は SNMP バージョン 1, バージョン 2, バージョン 3 をサポートしています。V3 を選択すると, 下に表示されるフィールドにバージョン 3 設定を入力できます。</p> <p>標準設定値 : V1</p>
認証アルゴリズム	<p>バージョン 3 接続に使用する認証アルゴリズム。</p> <p>標準設定値 : MD5</p> <p>注 : このフィールドは, [SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
ユーザ名	<p>バージョン 3 接続のユーザ名。</p> <p>注 : このフィールドは, [SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
パスワード	<p>バージョン 3 接続の認証に使用するパスワード。</p> <p>注 : このフィールドは, [SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
プライバシー アルゴリズム	<p>SNMP バージョン 3 の認証に使用されるプライバシー・アルゴリズム (DES, 128 ビット AES, 192 ビット AES, 256 ビット AES)。プライバシーが必要ない場合は空白のままにします。</p> <p>標準設定値 : DES</p> <p>注 : このフィールドは, [SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
プライバシー パスワード	<p>バージョン 3 接続の DES プライバシー暗号化で使用するパスワード。プライバシーが必要ない場合は空白のままにします。</p> <p>注 : このフィールドは, [SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
コンテキスト名	<p>この接続に使用するコンテキスト名。これは SNMP V3 にのみ適用されます。</p> <p>注 : このフィールドは, [SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
コンテキスト エンジン ID	<p>この接続に使用するコンテキスト・エンジン ID を表す 16 進文字列。これは SNMP V3 にのみ適用されます。</p> <p>注 : このフィールドは, [SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
ツールの実行	<p>テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。</p>

UI 要素	詳細
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## SNMP ツール

このツールでは、SNMP 管理情報ベース (MIB) に問い合わせて OID のセットを取得できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>「ツール」</b> コンテキスト &gt; <b>「SNMP ツール」</b> &gt; <b>「SNMP ツール」</b> を選択します ( <b>「ツールを使用」</b> 権限が必要です )。</li><li>・ SNMP モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または <b>「モニタ・ツールを使用」</b> 権限が付与されたユーザの場合)。</li><li>・ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの <b>「プロパティ」</b> タブで、 <b>「ツールを使用」</b> ボタンをクリックします。</li><li>・ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの <b>「ツール」</b>  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は <b>「結果」</b> 表示枠に表示されます。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」 (113ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a></li><li>・ <a href="#">「<b>「ツール」</b> メニュー」 (56ページ)</a></li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
ホスト名	問い合わせる SNMP MIB をホストするサーバの IP アドレス。
ポート	SNMP エージェントからのデータを要求するときに使用するポート。 <b>標準設定値</b> : 161
オブジェクト ID	オブジェクト ID 設定を選択します。 <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>一般的に使用される値</b> : ドロップダウン・リストから、オブジェクト ID ニーモニックを選択します。(標準設定値として設定される</li></ul>

UI 要素	詳細
	<p><b>system.sysDescr</b> を持つ標準設定オプション。)</p> <p>SNMP オブジェクトのインデックスを入力します。OID の値は、スカラ値またはインデックス（配列もしくはテーブル）値のいずれかです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>スカラ OID の場合、インデックス値を 0 に設定する必要があります。</li> <li>インデックス値またはテーブル値の場合、必要な値を含む要素にインデックス（正の整数）を指定する必要があります。[一般的に使用される値] のインデックス値が ifSpecific.ifInOctets に設定されます。</li> </ul> <p><b>標準設定値 : 0</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>その他の値 :</b> 取得する SNMP 値のオブジェクト識別子 (OID) を入力します。OID により、どの値をデバイスから取得するかが指定されます。</li> </ul> <p><b>例 :</b> 1.3.6.1.2.1.4.3</p> <p><b>ヒント :</b> デバイスとの基本的な接続性のトラブルシューティングを行うには、または、SNMP エージェントがアクティブであることを確認するには、その他のオブジェクトを見つけることができない場合はドロップダウン・リストから <b>system.sysDescr</b> オブジェクトを選択します。</p> <p><b>注 :</b> SiteScope では SNMP のバージョン 1.0, 2.0, 3.0 がサポートされています。</p> <p>エラー・メッセージ「エラー - noSuchName」を受け取った場合は、SiteScope は、デバイスに接触できましたが、与えられた OID は、デバイスにとって既知ではありません。値を取得するデバイスに有効な OID を指定する必要があります。</p> <p>監視するデバイスの MIB ファイルがある場合は、*.mib（または *.my）ファイルを、&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\templates.mib サブディレクトリにコピーし、MIB ヘルプ・ユーティリティを使用して MIB を編集し、デバイスの各 OID を参照します。MIB ヘルパ・ツールを使用するには、<b>【ツール】 &gt; 【MIB ブラウザ】</b> を選択して、接続の詳細を入力します。新しい MIB ファイルを SiteScope にコピーした後、SiteScope を再起動する必要があります。参照先の MIB ファイルをドロップダウン・リストで選択します。参照ボタンをクリックし、選択した MIB ファイルから OID を表示します。指定サーバ上の選択した MIB を表すツリーが表示されます。このツリーを参照して、監視する OID を探せます。</p> <p>デバイスを監視するために SiteScope の MIB ヘルパで MIB ファイルを参照する必要はありません。MIB ヘルパは、デバイス上にある OID を探すためのだけのツールとして提供されていますが、利用できる唯一のツールというわけではありません。Web 上でその他の代替ツールを探せます (MG-SOFT, iReasoning など)。</p>


UI 要素	詳細
取得するレコード数	取得する OID レコード数。 標準設定値 : 1
SNMP 接続設定	
タイムアウト (秒)	SiteScope での SNMP 要求に対する待機時間 (秒単位)。 標準設定値 : 5 秒
再試行回数	SiteScope においてモニタが失敗したとみなされるまでに許される SNMP 要求試行の回数。 標準設定値 : 1
コミュニティ	SNMP デバイスのコミュニティ文字列。  コミュニティ文字列は、SNMP デバイスのセキュリティのレベルを指定します。コミュニティ文字列としては、ほとんどのデバイスで <b>public</b> が使用されます。ただし、監視対象にするデバイスには、アクセスするためには、別のコミュニティ文字列が必要な場合があります。  特定のコミュニティ経由で SNMP エージェントを監視する場合は、必ず SNMP エージェントに該当コミュニティを熟知させておく必要があります。たとえば、Windows 2003 のサーバを public コミュニティ経由で監視する場合は、SNMP エージェント内で、このコミュニティが必ず設定されている必要があります。設定されていないと、モニタがエージェントに接続できません。 標準設定値 : public 注 : このフィールドは、バージョン 1 または 2 の接続だけに有効です。
SNMP のバージョン	監視する SNMP ホストで使用される SNMP のバージョン。SiteScope では SNMP のバージョン 1, 2, 3 がサポートされています。 標準設定値 : V1
認証アルゴリズム	SNMP V3 に使用される認証アルゴリズム。[MD5] , [SHA] , または [なし] を選択できます。 注 : このフィールドは、[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。
ユーザ名	SNMP バージョン 3 を使用している場合に認証に使用するユーザ名。 注 : このフィールドは、[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。
パスワード	SNMP バージョン 3 を使用している場合に認証に使用するパスワード。

UI 要素	詳細
	注：このフィールドは，[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。
プライバシー アルゴリズム	SNMP バージョン 3 の認証に使用されるプライバシー・アルゴリズム（DES，128 ビット AES，192 ビット AES，256 ビット AES）。  標準設定値：DES  注：このフィールドは，[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。
プライバシー・パスワード	SNMP V3 の認証に使用するプライバシー・パスワード。プライバシーが必要な場合は空白のままにします。  注：このフィールドは，[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。
コンテキスト名	SNMP V3 のコンテキスト名。  注：このフィールドは，[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。
コンテキスト・エンジン ID	SNMP V3 のコンテキスト・エンジン ID。  注：このフィールドは，[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は[結果]表示枠に表示されます。
結果	
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## SNMP トラップ・ツール

このツールでは，SiteScope の SNMP リスナで受信される SNMP トラップを表示できます。このツールは，すでに 1 つ以上の SNMP トラップ・モニタを作成している場合にのみ有効になります。SNMP トラップ・モニタを作成することで，SiteScope の SNMP トラップ・ログが有効になります。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ [ツール] コンテキスト &gt; [SNMP ツール] &gt; [SNMP トラップ ツール] を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。</li> <li>・ SNMP トラップ・モニタまたはテクノロジー SNMP トラップ統合モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者，または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。</li> <li>・ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで，既存のモニタを設定する場合はモニタの[プロパティ]タブで，[ツールを使用] ボタンをクリックします。</li> </ul>
--------	--

	<ul style="list-style-type: none"><li>既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの <b>[ツール]</b>  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は <b>[結果]</b> 表示枠に表示されます。</li></ul>
重要な情報	SNMP トラップ・ログがアクティブでない場合、 <b>「SNMP トラップの受信がアクティブではありません」</b> というメッセージがツール・ページの上部に表示されます。
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」 (113ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li><a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a></li><li><a href="#">「 [ツール] メニュー」 (56ページ)</a></li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
内容の照合	<p>SNMP トラップ・ログ内のエントリの照合に使用するオプションのテキスト文字列または正規表現。内容の照合は、OID、コミュニティ、エージェントなどのログの列のデータに対して実行できます。</p> <p>SiteScope の SNMP トラップ・ログの SNMP トラップは、<b>[SNMP トラップ ログ]</b> テーブルに表示されます。検索条件と一致するトラップ数が、ページの下部にある <b>[SNMP トラップ ログ]</b> テーブルのタイトルに表示されます。</p>
表示するトラップ数	<p>表示する SNMP トラップ数。トラップ数は、平均トラップ長に基づいて計算されます。トラップ・テキストが平均よりも長いまたは短い場合、表示されるトラップ数は選択した値と異なる場合があります。SiteScope が受信した最新の SNMP トラップが最初に表示されます。</p> <p><b>標準設定値 : 10</b></p>
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は <b>[結果]</b> 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## トレース・ルート・ツール

このツールは、2つの場所を結ぶネットワーク経路を調べるためのツールで、経路上の各ホップに到達するまでの時間を示します。ネットワークに問題があれば、多くの場合にトレースルートを使用す



ることで問題が生じている箇所を絞り込むことができます。このツールは、サーバから別の場所までのトレースルートを実行します。

このユーティリティを使用して、ホストの接続性を確認し、ホストがインターネットに接続する方法を決定できます。サーバから指定したホストへの経路を決定することもできます。これにより、インターネットのほかの場所にあるホストへの接続を試みる場合に、パケット損失が発生している可能性のある箇所を確認できます。

アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [ネットワーク ツール] > [トレース ルート ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。
重要な情報	このツールでは、Windows プラットフォームでのみトレースルートを実行できます。UNIX の場合、SiteScope プロセスを停止し、トレースルート・ユーティリティのパス (/usr/sbin/traceroute など) を [インフラストラクチャ プリファレンス] の [トレースルート コマンド] ボックスに追加してから SiteScope を再起動する必要があります。
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」 (113ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a></li><li>• <a href="#">「 [ツール] メニュー」 (56ページ)</a></li></ul>


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
解決するホスト名	解決するほかの場所のドメイン名または IP アドレス。  例：demo.thiscompany.com または 206.168.112.53
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## URL ツール

このツールを使用すると、Web サーバから項目を取得できます。URL には接続するサーバと返す項目を指定します。SiteScope には要求した URL の内容が表示されるため、このツールは URL 内容のチェック機能としても使用できます。このユーティリティを使用して、特定の URL が Web サーバからアクセスできることを確認できます。また、ページが返されるまでにかかる時間の確認にも使用できます。

--	--

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>「ツール」</b> コンテキスト &gt; <b>「Web ツール」</b> &gt; <b>「URL ツール」</b> を選択します（<b>「ツールを使用」</b> 権限が必要です）。</li> <li>• URL モニタ, URL 内容モニタ, Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者, または <b>「モニタ・ツールを使用」</b> 権限が付与されたユーザの場合）。</li> <li>• 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで, 既存のモニタを設定する場合はモニタの <b>「プロパティ」</b> タブで, <b>「ツールを使用」</b> ボタンをクリックします。</li> <li>• 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには, SiteScope ダッシュボード・ツールバーの <b>「ツール」</b>  ボタンをクリックします。これにより, ツールが開き, モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は <b>「結果」</b> 表示枠に表示されます。</li> </ul>
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」 (113ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a></li> <li>• <a href="#">「「ツール」メニュー」 (56ページ)</a></li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>メイン設定</b>	
<b>URL</b>	<p>テストする URL。</p> <p><b>例:</b> http://demo.company.com</p>
<b>内容の照合</b>	<p>返されたページまたはフレーム・セット内でチェックするテキスト文字列。ページにこのテキストが含まれていない場合, 内容の照合は失敗します。検索では大文字と小文字は区別されます。HTML タグはテキスト・ドキュメントの一部であるため, 検索するテキストに HTML タグが含まれている場合はその HTML タグを含める必要があります ("<b>&lt; B&gt;</b> Hello<b>&lt; /B&gt;</b> World" など)。</p>
<b>エラーの内容の照合</b>	<p>返されたページまたはフレーム・セット内でチェックするテキスト文字列。ページにこのテキストが含まれている場合, テストはエラー状況を示します。検索では大文字と小文字は区別されます。</p>
<b>タイムアウト (秒)</b>	<p>ページのダウンロードが完了するまでの待機時間 (秒単位)。この時間を超えると, タイムアウトになります。この期間を経過すると, URL モニタはエラーを記録し, エラー・ステータスであることをレポートします。</p>

UI 要素	詳細
	<p>【画像を取得】または【フレームを取得】オプションを選択している場合、SiteScope はページが完全にダウンロードされたとみなされるまでこれらの項目が取得されるのを待機します。</p> <p><b>標準設定値</b> :60 秒</p>
再試行回数	<p>修復可能なエラーが発生した場合に SiteScope が要求を再試行する回数 (0 ~ 10)。要求のタイムアウトは修正可能なエラーです。</p> <p><b>標準設定値</b> : 0</p>
<b>HTTP 設定</b>	
要求ヘッダ	<p>HTTP クライアントによってサーバに送信されるヘッダ要求行。ヘッダは改行で分けられていなければなりません。HTTP1.1 要求ヘッダの標準のリストは <a href="http://www.w3.org/Protocols/rfc2616/rfc2616-sec14.html#sec14">http://www.w3.org/Protocols/rfc2616/rfc2616-sec14.html#sec14</a> にあります。</p> <p><b>注</b> : このフィールドは、オプションですが、要求ヘッダがないと予期しない動作となる Web ページもあります (無限リダイレクトを実行する、間違ったコンテンツを供給するなど)。</p>
URL 内容のエンコード	<p>内容の書き込みに使用するエンコーディング。エンコーディングは次のいずれからでも検出できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>HTTP headers :Content-Type : text/html; charset=UTF-8</li> <li>HTML メタ・タグ : &lt;meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=US-ASCII"&gt;</li> <li>XML:&lt;?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?&gt;</li> </ul> <p>ドロップダウン・リストからエンコーディング・タイプを選択します。</p> <p><b>例</b> : UTF-8, UTF-16, US-ASCII, ISO-8859-1</p> <p><b>標準設定値</b> : サーバ応答からのエンコーディング</p>
POST データ	<p>POST 要求のための URL の場合、name=value ペアのように POST 変数を 1 行に 1 つずつ入力します。</p> <p>このオプションは、ユーザがフォームを送信したときに発生した要求と同じ要求を実行してフォームが正常に機能するかどうかを確認するために使用されます。また、正しいフォームの応答が受信されていることを確認する方法については、【<b>内容の照合</b>】項目を参照してください。</p> <p>この項目が空白の場合、GET 要求が実行されます。</p> <p>POST データは、クッキー・データを送信するために使用できます。要求でクッキーを送信するには、Set-cookie: cookieName=cookieValue の形式を使用</p>

UI 要素	詳細
	<p>します。</p> <p>POST のコンテンツ・タイプを変更するには、次の形式を使用します。 Content-Type : application/my-format</p> <p>POST データの値を置換するには、次のような行を <b>master.config</b> ファイルに追加します。</p> <pre>_private=_name=mysecret _value=rosebud _private=_name=mypassword _privateValue=sesame</pre> <p>POST データで次のような形式を使用します。</p> <pre>s username=\$private-mysecret\$  s password=\$private-mypassword\$ </pre> <p>SiteScope によって <b>master.config</b> の値が POST データに代入されます。</p>
POST データ エンコード	<p>POST データをエンコードするかどうかを指定します。次のオプションから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>コンテンツ タイプを使用する</b> : コンテンツ・タイプ・ヘッダによって POST データをエンコードします。ヘッダが urlencoded に一致する場合エンコードし、それ以外はエンコードしません。</li> <li>・ <b>URL のエンコードを強制する</b> : 常に POST データをエンコードします。</li> <li>・ <b>URL のエンコードを強制しない</b> : POST データをエンコードしません。</li> </ul>
リダイレクト時にエラーにする	<p>URL がリダイレクトされると、エラーが発生します（および、エラーが通知されます）。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>
HTTP バージョン	<p>スタイル要求ヘッダに使用する SiteScope の HTTP バージョン（1.1 または 1.0）。</p> <p><b>標準設定値</b> : 1.1</p>
画像を取得	<p>SiteScope には、要求した URL にリンクするグラフィック、ロゴなどの画像が表示されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>
フレームを取得	<p>SiteScope には、要求した URL にリンクするフレームの HTML コードが表示されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>

UI 要素	詳細
<b>Winlnet を使用する</b>	<p>Winlnet がこのモニタの代替 HTTP クライアントとして使用されます。</p> <p>次の場合に Java (Apache) の代わりに Winlnet を使用する場合は、このオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>監視中のサーバにアクセスするために必要な特定のテクノロジーを、Apache HTTP クライアントがサポートしていない場合。たとえば、ケルベロス認証が Apache ライブラリによってサポートされておらず、Winlnet によってサポートされている場合。また、Winlnet は、SSL v3 などの信頼されるクライアント側を証明しますが、Apache はしません。</li> <li>このモニタの実行を試み、Apache サーバがエラーを返した場合。Winlnet を使用することで、これらのエラーが解決される場合があります。</li> </ul> <p><b>標準設定値:</b> 選択されていない</p> <p><b>注:</b> Winlnet の機能は Windows バージョンの SiteScope でのみ使用できます。Winlnet 機能のトラブルシューティングについては、<a href="#">「URL ツール」(157ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>プロキシ設定</b>	
<b>HTTP プロキシ</b>	URL へのアクセスに使用する HTTP プロキシ・サーバのアドレスまたはドメイン名とポート。
<b>プロキシ サーバのユーザ名</b>	プロキシ・サーバにログオンするために使用する名前。
<b>プロキシ サーバのパスワード</b>	プロキシ・サーバにログオンするために使用するパスワード。
<b>プロキシ NTLM V2</b>	プロキシでユーザ・ログオンの認証に NTLM (Windows NT LAN Manager) バージョン 2 を使用します。
<b>認証設定</b>	
<b>資格情報</b>	<p>指定した URL でアクセス用の名前とパスワードが必要な場合に資格情報を許可するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>ユーザ名およびパスワードを使用:</b> 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。[ユーザ名] ボックスにユーザ名を、[パスワード] ボックスにパスワードを入力して URL にアクセスします。</li> <li><b>事前定義された資格情報を選択:</b> URL 用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します (標準設定のオプション)。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リ</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p>ストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、<b>「資格情報の追加」</b>をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、<b>「資格情報のプリファレンス」</b> (569ページ)を参照してください。</p>
<p><b>プリエンプティブ認証</b></p>	<p>SiteScope がターゲット URL を要求する場合、認証資格情報を送信するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>グローバル・プリファレンスを使用：</b> [一般プリファレンス] ページの <b>「プリエンプティブ認証」</b> で指定されている設定を SiteScope が使用するよう選択します。 </li> <li> <b>最初の要求を認証：</b> 認証先 URL に対して、SiteScope によって作成される最初の要求でユーザ名とパスワードが送信されるよう選択します。 <p><b>注：</b> URL でユーザ名とパスワードが必要とされない場合には、このオプションのために URL でエラーが発生する可能性があります。</p> </li> <li> <b>要求された場合に認証：</b> サーバでユーザ名とパスワードの要求があった場合に、2 番目の要求でユーザ名とパスワードが送信されるよう選択します。 <p><b>注：</b> URL でユーザ名とパスワードが必要とされない場合には、このオプションが使用される場合があります。</p> </li> </ul> <p>すべてのオプションで、このモニタ・インスタンスのために入力された <b>「ユーザ名」</b> と <b>「パスワード」</b> が使用されます。ユーザ名とパスワードが個々のモニタに指定されない場合には、[一般プリファレンス] ページの <b>「メイン」</b> セクションで指定されている <b>「標準設定の認証ユーザ名」</b> と <b>「標準設定の認証パスワード」</b> が使用されます（指定されている場合）。</p> <p><b>注：</b> プリエンプティブ認証はユーザ名とパスワードを送信するかどうかや、どのユーザ名とパスワードを送信するのかを制御しません。</p>
<p><b>クライアント側証明書</b></p>	<p>ターゲット URL にアクセスするためにクライアント側証明書を使用する必要がある場合の証明書ファイル。普通、これは .pfx (.p12) タイプ証明書で、通常はパスワードを要求します。 <b>「クライアント側証明書パスワード」</b> ボックスに証明書のパスワードを入力します。</p> <p><b>注：</b> クライアント側証明書ファイルは、 &lt;SiteScopeのルート・ディレクトリ&gt;\templates.certificatesディレクトリにコピーする必要があります。</p>
<p><b>クライアント側証明書パスワード</b></p>	<p>クライアント側証明書を使用しており、その証明書がパスワードを要求する場合のパスワード。</p>
<p><b>認証 NTLM ドメ</b></p>	<p>URL へのアクセスが求められる場合の Windows NT LAN Manager (NTLM) のド</p>


UI 要素	詳細
イン	メイン。
HTTPS に対して信頼されていない証明書を許容	セキュア HTTP (HTTPS) を使用してターゲット URL にアクセスしており、SiteScope が必要とされるサーバ証明書を持っていない場合には、このオプションを選択するか、または関連する証明書をインポートできます。サーバ証明書のインポートの詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「URL モニタ」の SSL 接続を参照してください。
HTTPS に対して無効な証明書を許容	セキュア HTTP (HTTPS) を使用してターゲット URL にアクセスしており、SiteScope に無効なサーバ証明書がある場合にはこのオプションを選択します。現在の日付が証明書チェーンで指定されている日付範囲内ではない場合、この状態が発生する可能性があります。
NTLM V2	アクセス先の URL が NTLM バージョン 2 を使用する認証を必要とする場合に選択します。
TLS より SSL を優先	<p>アクセス先の URL が TLS を使用する認証を処理できない場合に選択します。このオプションにより、暗号化されたハンドシェイク・メッセージが SSL を使用して送信されます。</p> <p><b>注：</b>FIPS 140-2 では TLS を使用した認証が必須であるため、SiteScope が FIPS 140-2 モードで実行されている場合、このオプションは（選択している場合は）無視されます。FIPS 140-2 の詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（&lt;SiteScope ルート・ディレクトリ&gt;\sisdocs\doc_lib\Get_Documentation.htm）の「SiteScope の安全な稼動」セクションを参照してください。</p>
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は【結果】表示枠に表示されます。結果には、URL 取得の統計情報と URL 内容のテキスト表現が含まれます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## Web サービス・ツール

このツールを使用すると、SOAP (Simple Object Access Protocol) に対応する Web サービスの可用性や安定性のチェック、または実際の SOAP 応答の表示を行うことができます。失敗した Web サービス要求の診断や、特定の Web サービス・モニタで使用する照合文字列の選択にも便利です。Web サービス・テストは、SOAP 要求をサーバに送信し、HTTP 応答コードをチェックしてサービスが応答していることを確認します。実際の SOAP 応答が表示されますが、返されたメッセージについてそれ以上の検証は行われません。



SOAP は、あるオペレーティング・システム下で実行されているプログラムが同じまたは別のオペレーティング・システム下で実行されている別のプログラムと通信する手段です（Linux ベースのプログラムと通信する Windows 2003 プログラムなど）。SOAP は分散環境のサービスとの情報交換に HTTP（Hypertext Transfer Protocol）と XML（Extensible Markup Language）を使用します。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>• <b>「ツール」</b> コンテキスト &gt; <b>「Web ツール」</b> &gt; <b>「Web サービス ツール」</b> を選択します（<b>「ツールを使用」</b> 権限が必要です）。</li><li>• Web サービス・モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または <b>「モニタ・ツールを使用」</b> 権限が付与されたユーザの場合）。</li><li>• 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの <b>「プロパティ」</b> タブで、<b>「ツールを使用」</b> ボタンをクリックします。</li><li>• 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの <b>「ツール」</b>  ボタンをクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は <b>「結果」</b> 表示枠に表示されます。</li></ul>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• 次の仕様の機能が現在サポートされています。WSDL 1.2, SOAP 1.1, XML Schema 2001 に基づく Simple Type および Complex Type, HTTP (S) プロトコルのみを使用した SOAP バインディングです。SOAP with Attachments はサポートされていません。</li><li>• SOAP および WSDL テクノロジは進化しています。そのため、WSDL ドキュメントによっては正確に解析されない場合があります。また、SOAP 要求によっては、やり取りできない Web サービス・プロバイダがある場合もあります。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</a> (113ページ)
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">「SiteScope ツール」</a> (112ページ)</li><li>• <a href="#">「[ツール] メニュー」</a> (56ページ)</li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>WSDL 設定</b>	
WSDL の場所	次のいずれかの WSDL の場所を選択します。



UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ファイル</b>: 使用する WSDL ファイルを選択します。このリストには、<b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\templates.wsdl/*.wsdl</b> を検索して見つかったファイルが反映されます。WSDL ファイルには拡張子 <b>.wsdl</b> が必要です。</li> <li>• <b>URL</b>: テストする Web サービスの URL を入力します。</li> </ul>
<b>データの取得</b>	メソッド引数に指定した WSDL ファイルを取得して分析します。結果のページには、使用できる測定値が表示されます。
<b>サービス名</b>	呼び出すサービスの名前。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。
<b>ポート名</b>	呼び出すポートの名前。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。
<b>メソッド名</b>	呼び出すメソッドの名前。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。
<b>メソッド名前空間</b>	SOAP 要求内のメソッドの XML 名前空間。初期セットアップ時、この値が WSDL ファイルから抽出されます。
<b>スキーマ名前空間</b>	SOAP 要求内のスキーマの XML 名前空間。初期セットアップ時、この値が WSDL ファイルから抽出されます。
<b>SOAP アクション</b>	Web サービスへの SOAP 要求のヘッダに含まれる SOAP アクションの URL。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。
<b>引数の名前</b>	<p>前述の指定したメソッドへの引数とそのタイプ。Specify simple type parameters in the format 単形式 parm-name(parm-type) = value で純型パラメータを指定します。 &lt;param-name&gt; および &lt;param-type&gt; は、WSDL ファイルのサービス・メソッド仕様と完全に一致させる必要があります。&lt;value&gt; は &lt;param-type&gt; と一致させる必要があります。一致させないと、要求は失敗します。空白が埋め込まれた文字列は、二重引用符 (灯) で囲みます。各パラメータは、各valueの最後に復帰改行を追加して別個の行に置く必要があります。</p> <p><b>例</b>: stockSymbol (string) = MERQ numShares (int) = 10</p> <p>Complex Type パラメータは、1 つの長い文字列として表現する必要があります (改行は読みやすくする目的にのみ使用します)。</p>


UI 要素	詳細
	<pre>stocksymbol[COMPLEX] = &lt;stocksymbol xmlns:xsd="http://www.w3.org/2001/XMLSchema" xmlns:soapenc="http://schemas.xmlsoap.org/soap/encoding/" xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance" xmlns:fw100="urn:ws-stock" xsi:type="fw100:getQuote"&gt; &lt;ticker xsi:type="xsd:string"&gt;MERQ &lt;/ticker&gt; &lt;/stocksymbol&gt;</pre> <p><b>注：</b> SiteScope は入力パラメータ・リストに対する検証を行わないため、Complex Type 値が有効で適切な形式の XML 文字列であることを確認してください。複合型パラメータの内部にはキャリッジ・リターンを入れないでください。最終位置にだけ入れてください。</p> <p>Web サービス・メソッドがパラメータを取り込まない場合、テキスト・ボックスは空のままにします。</p>
<b>ユーザ定義 SOAP XML の使用</b>	<p>【<b>ユーザ SOAP XML</b>】ボックスの XML を使用します。これにより、手動で定義した XML を使用できます。</p>
<b>ユーザ SOAP XML</b>	<p>WSDL ファイルから抽出された、選択した Web サービスの SOAP XML が表示されます。標準設定の XML を変更し、【<b>ユーザ定義 SOAP XML の使用</b>】チェック・ボックスを選択すると、このボックスに手動で定義した XML を使用できます。</p>
<b>メイン設定</b>	
<b>要求のスキーマ</b>	<p>要求のスキーマ。現在 SiteScope でサポートされているのは SOAP のみです。</p>
<b>タイムアウト (秒)</b>	<p>Web サービス要求が完了するまで SiteScope が待機する合計時間 (秒単位)。 <b>標準設定値 :30 秒</b></p>
<b>.NET SOAP の使用</b>	<p>Web サービスが Microsoft .NET に基づいている場合に選択します。</p>
<b>内容の照合</b>	<p>返されたページまたはフレーム・セット内でチェックするテキスト。ページにこのテキストが含まれていない場合、ツールから内容の一致はないというメッセージが表示されます。</p> <p>HTML タグはテキスト・ドキュメントの一部であるため、検索するテキストに HTML タグが含まれている場合は HTML タグも対象となります。これは、XML ページにも当てはまります。</p>

UI 要素	詳細
	<p><b>例 :</b> "&lt; B&gt; Hello&lt; /B&gt; World"</p> <p>文字列をスラッシュで囲んで正規表現による照合を実行することもできます。最後のスラッシュの後に i を付けると、検索では大文字と小文字が区別されません。</p> <p><b>例 :</b> /href=Doc\d+\.html/ または /href=doc\d+\.html/i</p> <p>特定のテキスト部分を保存して状態の一部として表示する場合、Perl 正規表現に括弧を使用します。</p> <p><b>例 :</b> /Temperature:(\d+)</p> <p><b>注 :</b> 検索では大文字と小文字は区別されます。</p>
<b>HTTP 設定</b>	
<b>Web サービス サーバ URL</b>	チェックする Web サービス・サーバの URL が表示されます。
<b>HTTP ユーザ エージェント</b>	SOAP 要求の HTTP ユーザ・エージェント。
<b>HTTP コンテンツ タイプ</b>	HTTP 要求のコンテンツ・タイプ。
<b>プロキシ設定</b>	
<b>HTTP プロキシ</b>	URL へのアクセスに使用できるプロキシ・サーバ (任意指定)。HTTP プロキシ・サーバのドメイン名およびポートを入力します。
<b>プロキシ サーバ のユーザ名</b>	<p>このプロキシ・サーバで URL へのアクセスに名前およびパスワードが必要な場合に使用するユーザ名。</p> <p><b>注 :</b> これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。</p>
<b>プロキシ サーバ のパスワード</b>	<p>このプロキシ・サーバで URL へのアクセスに名前とパスワードが必要な場合に使用するパスワード。</p> <p><b>注 :</b> これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。</p>
<b>ログイン設定</b>	
<b>NTLM ドメイン</b>	Web サービスで、資格情報の一部として (後述のユーザ名およびパスワードと

UI 要素	詳細
	ともに) NTLM/チャレンジ・レスポンス認証が必要な場合の NTLM ドメイン。
認証ユーザ名	<p>Web サービスへのアクセスにユーザ名およびパスワードが必要な場合に使用するユーザ名（基本，ダイジェスト，NTLM 認証）。ユーザ名を入力します。</p> <p>または，このエントリを空白のままにし，[一般プリファレンス] ページの [標準設定の認証ユーザ名] ボックスにユーザ名を入力できます。共通の認証資格情報を定義する場合は，この代替の方法を使用します。</p>
認証パスワード	<p>Web サービスへのアクセスにユーザ名およびパスワードが必要な場合に使用するパスワード（基本，ダイジェスト，NTLM 認証）。パスワードを入力します。</p> <p>または，このエントリを空白のままにし，[一般プリファレンス] ページの [標準設定の認証パスワード] ボックスにパスワードを入力できます。共通の認証資格情報を定義する場合は，この代替の方法を使用します。</p>
ツールの実行	<p>テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。</p> <p>テストから返されるステータス値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• OK</li> <li>• 不明なホスト名</li> <li>• サーバに到達できません</li> <li>• サーバに接続できません</li> <li>• 読み込みのタイムアウト</li> <li>• 内容の照合エラー</li> <li>• ドキュメントが移動しました</li> <li>• 許可されていません</li> <li>• 禁止されています</li> <li>• 見つかりません</li> <li>• プロキシ認証が必要</li> <li>• サーバ・エラー</li> <li>• 実装されていません</li> <li>• サーバが使用中です</li> </ul>
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

## XSL 変換ツール

このツールを使用すると、XML ファイルまたは出力の変換に使用可能なユーザ定義の XSL ファイルをテストできます。これには、Web アプリケーションから取得した、パフォーマンス・メトリックス・データが含まれるファイルなどがあります。XSL 変換の使用は、参照可能な XML モニタで XML データを使用できるように許容可能な形式に処理するために必要になる場合があります。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>「ツール」</b> コンテキスト &gt; <b>「共通ユーティリティ ツール」</b> &gt; <b>「XSL 変換 ツール」</b> を選択します（<b>「ツールを使用」</b> 権限が必要です）。</li><li>・ XML 測定値モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または <b>「モニタ・ツールを使用」</b> 権限が付与されたユーザの場合）。</li><li>・ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの <b>「プロパティ」</b> タブで、<b>「ツールを使用」</b> ボタンをクリックします。</li><li>・ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの <b>「ツール」</b> ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は <b>「結果」</b> 表示枠に表示されます。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」 (113ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a></li><li>・ <a href="#">「[ツール] メニュー」 (56ページ)</a></li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
メイン設定	
XML URL	変換の入力である XML ファイルの URL。
XSL ファイル	テストする XSL ファイルへのパス。これは、SiteScope のルート・フォルダへの相対パスです。  <b>例：</b> <SiteScope のルート・ディレクトリ>\templates.applications\XmlApp1.xsl

UI 要素	詳細
<b>認証設定</b>	
<b>認証ユーザ名</b>	対象 XML ファイルへのアクセスに認証が必要な場合、内容へのアクセスに必要なユーザ名。
<b>認証パスワード</b>	対象 XML ファイルへのアクセスに認証が必要な場合、内容へのアクセスに必要なパスワード。
<b>プロキシ サーバ</b>	対象 XML 内容へのアクセスにプロキシ・サーバを使用する場合、プロキシ・サーバ・アドレス。
<b>プロキシ・サーバのユーザ名/プロキシ・サーバのパスワード</b>	対象 XML 内容へのアクセスにプロキシを使用する場合、プロキシの使用に必要なユーザ名およびパスワード。
<b>ツールの実行</b>	テストを実行します。テスト結果は「結果」表示枠に表示されます。
<b>ファイルに保存</b>	結果をファイルに保存します。

## 第15章: SiteScope 公開 API

SiteScope 公開 API を使用すると、SiteScope ユーザ・インタフェースを使用しなくても、さまざまなシナリオを自動的に実行できます。たとえば、次のことが可能になります。

- テンプレートのインポート、エクスポート、およびデプロイ。
- モニタ、グループ、警告の有効化、無効化または削除。
- SiteScope からのデータの取得。

SiteScope API は SOAP ベースで、Axis、WSIF など既知の Web サービス呼び出しフレームワークまたは任意のクライアント・アプリケーションによって呼び出すことができます。これにより、大規模な環境の管理および自動化と、複雑なビジネス・ロジックの実装のための強力なツールのセットが提供されます。

## 学習事項

### SiteScope 公開 API の概要

SiteScope 公開 API は、設定 API とデータ取得 API という 2 つのコア・カテゴリに分けることができます。

- 設定 API はテンプレート管理、デプロイメントおよび実行中のモニタを担います。また、ダウンタイムや廃止に対処する強力な管理ツールも提供します。
- データ取得 API により、履歴モニタの実行データと VMware 調整トポロジ・データの取得が可能になります。

SiteScope API のサンプルは、<SiteScope のインストール・ディレクトリ>\examples\integrations\api ディレクトリにあります。

API の例には次の内容が含まれます。

- **lib** フォルダ - SiteScope API を使用して起動するため、および独自のクライアント・アプリケーションの構築のために必要なすべての jar ファイル
- **bin** フォルダ - スクリプト (\*.bin, \*.sh) が提示された例を実行します
- **src** フォルダ - SiteScope API の使用方法を示すコードのサンプル
- **doc** フォルダ - すべての利用可能な公開 SiteScope API メソッドとデータ構造の Java ドキュメント (JavaDoc 形式)

### API リファレンス・ガイド

SiteScope に含まれている API の詳細については、次のガイドを参照してください。

- 『HP SiteScope API Reference』。SiteScope API パッケージの、例外、スナップショット、およびエラー・コードを含む、完全なリストが掲載されています。ガイドを開くには、<SiteScope インストール>\examples\integrations\api\doc で利用可能な **javadoc.zip** ファイルの内容を抽出し、

**index.html** ファイルをダブルクリックします。

- 『HP SiteScope 設定 API とデータ取得 API リファレンス』。SiteScope 設定 API とデータ取得 API のパッケージに関する詳細情報を含んでおり、SiteScope API 呼び出しの設定についての使用例シナリオを提供します。このガイドは <SiteScope インストール>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_API\_Reference.pdf で利用できます。

## SiteScope 設定 API

SiteScope 設定 API では、SiteScope テンプレート、グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ、サーバの状況、タグの検索 / フィルタおよび設定を操作するためのサービスを提供します。

SiteScope 設定 API では次の操作がサポートされています。

SiteScope オブジェクト	アクション
テンプレート	<ul style="list-style-type: none"> <li>テンプレートの管理（テンプレートの作成 / 削除、テンプレート・コンテナの作成 / 削除、テンプレートのインポート / エクスポート、テンプレートをインポートし、指定したパス内にすでに存在する場合は上書き、すべてのテンプレートのスナップショットを取得）</li> <li>テンプレートのデプロイメント（モニタ、グループ、警告、リモート・サーバ作成）、デプロイメントの詳細を返す単一デプロイメントのデプロイ</li> <li>テンプレート変更の適用（グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ）、ルートなしでデプロイされたテンプレートの更新（新規変数で単一モニタのみの更新）</li> </ul>
グループ	グループの有効化 / 無効化、グループの削除、特定の条件によるグループの検索
モニタ	モニタの有効化 / 無効化、モニタの削除、モニタの実行、特定の条件によるモニタの検索
警告	警告の有効化 / 無効化
リモート・サーバ	リモート・サーバの作成（Windows および UNIX）、リモート・サーバのプリファレンスの削除
状態	SiteScope サーバの状態（アクティブ監視、起動）に関する統計情報の取得
タグ	タグの作成、タグの値の追加、タグの詳細の編集、タグの値（名前、詳細）の編集、タグの削除
設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope 設定の取得</li> </ul>



SiteScope オブジェクト	アクション
	<ul style="list-style-type: none"> <li>SSH キーファイルのリモート SiteScope マシンへのインポート</li> </ul>

タスクの詳細については、「[SiteScope 設定 API 呼び出しの使用方法](#)」(174ページ)を参照してください。

使用例のシナリオについては、「[SiteScope API 呼び出しの使用方法 - 使用例のシナリオ](#)」(174ページ)を参照してください。

SiteScope に含まれている SiteScope 設定 API の詳細については、『HP SiteScope 設定 API とデータ取得 API リファレンス』（<SiteScope インストール>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_API\_Reference.pdf で利用可能）を参照してください。

### SiteScope データ取得 API

SiteScope API では次のデータ取得アクションがサポートされています。

SiteScope オブジェクト	アクション
getData	指定したクエリ・パラメータと合致するモニタ実行の履歴メトリクス・データを取得します。
getDataWithTopology	<p>指定したクエリ・パラメータと現在 SiteScope 上で実行している VMware モニタによって収集されたVMware 調整トポロジに合致する、履歴メトリクス・データを取得します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>特定の時間間隔、証明書、およびフィルタ（モニタ・タイプ、名前など）をサポートします</li> <li>（履歴）メトリクス・データを含んでいる一般データの統合とともに送信された XML に類似する XML を返します</li> </ul>
getMonitorTypesWithMetricNames	<p>ユーザに表示権限があるこの SiteScope インスタンスのすべてのモニタをスキャンします。また、モニタ・タイプごとにメトリクス名が付属したそれらのタイプのリストを返します。メトリクス名のリストは、各タイプのすべてのモニタをまとめたものです（繰り返しの出現は排除されます）。</p> <p><b>enabledMonitorsOnly</b> が true の場合、有効化されているモニタのみをスキャンします。<b>enabledMonitorsOnly</b> が false の場合、SiteScope インスタンスのすべての（有効化/無効化されている）モニタをスキャンします。</p>

これらの API のデータは SiteScope の日次ログから取得されます。

**注:** データ取得 API は制限された量の履歴データ（最大20MB）のクエリ向けです。リアルタイム

に近い SiteScope データの消費については、一般データの統合を使用します。詳細については、[「一般データ統合ブリファレンス」\(694ページ\)](#)を参照してください。

タスクの詳細については、[「データ取得 API の使用方法」\(175ページ\)](#)を参照してください。

SiteScope に含まれている SiteScope データ取得 API の詳細については、『HP SiteScope 設定 API とデータ取得 API リファレンス』（<SiteScope インストール>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_API\_Reference.pdf で利用可能）を参照してください。

## タスク

### SiteScope 設定 API 呼び出しの使用方法

このタスクでは、API 呼び出しの使用方法について説明します。API 呼び出しを使用すると、SiteScope ユーザ・インタフェースを使用しなくても、さまざまなシナリオを自動的に実行できます。

**ヒント:** API 呼び出しの使用例のシナリオについては、[「SiteScope API 呼び出しの使用方法 - 使用例のシナリオ」\(174ページ\)](#)を参照してください。

1. 独自の Java プロジェクトを作成します。
2. すべての SiteScope クライアント jar をプロジェクトに追加します（この jar は <SiteScope インストール>\examples\integrations\api\lib にあります）。
3. <SiteScope インストール>\examples\integrations\api\src にある **SiteScopeCommandLineUtil.java** ファイルを使用して SiteScope に接続します。**createConnection** メソッド・セクションで、ログインに必要な次の情報を入力します。

```
// SiteScope connection properties creation
SiteScopeConnectionPropertiesForExternal props = new
SiteScopeConnectionPropertiesForExternal(hostName, port, login, password, isUseSSL);
// SiteScope API Connector creation
SiteScopeExternalAPIConnector siteScopeExternalAPIConnector = new
SiteScopeExternalAPIConnector();
// Get the API instance using connection properties
IAPIConfiguration apiConfiguration = siteScopeExternalAPIConnector.getAPIConfiguration
(props);
```

4. 必要な API メソッドを実行します。例 :apiConfiguration.getConfigurationsSnapshotEx(login, password);

### SiteScope API 呼び出しの使用方法 - 使用例のシナリオ

SiteScope API を使用すると、SiteScope ユーザ・インタフェースを使用しなくても、さまざまなシナリオを自動的に実行できます。たとえば、テンプレートの作成とデプロイ、モニタ、グループ、警告の有効化と無効化、モニタ、グループ、リモート・サーバの削除を行うことができます。

## 1. 初期セットアップ

SiteScope のインストール

**createTemplateContainer** API メソッドを使用して、テンプレート・コンテナを作成します（一度だけ実行）。

## 2. テンプレートの作成またはインポート

SiteScope ユーザ・インタフェースでテンプレートを作成するか、または **importTemplate** API メソッドを使用してテンプレートをインポートします。

## 3. テンプレートのデプロイとモニタの実行

**deploySingleTemplateWithConnectToServer** API メソッドを使用して、リモート・サーバ用のテンプレートをデプロイします。

**getConfigSnapshotEx** API メソッドを使用して、デプロイしたすべてのモニタ、グループ、警告を取得します。

**runExistingMonitorEx** API メソッドを使用して、デプロイしたモニタを実行します。

## 4. ダウンタイム

**disableAlertEx**, **disableMonitorEx**, または **disableGroupFullPathEx** API メソッドを使用して、ダウンタイム期間の警告、モニタ、またはグループを無効化します。

## 5. 廃止

**deleteGroupEx**, **deleteMonitorEx**, または **deleteRemote** API メソッドを使用して、グループ、モニタ、またはリモート・サーバを削除します。

## データ取得 API の使用方法

- SiteScope のスタンドアロン・モードで実行する場合（SiteScope が BSM サーバに接続していない場合）、**【プリファレンス】 > 【インフラストラクチャ プリファレンス】 > 【一般設定】**で、**【スタンドアロン デプロイメントでトポロジの収集を有効化】**チェック・ボックスを選択します。これにより、SiteScope がトポロジをバックグラウンドで収集できるようになり、要求が実行されると収集なくなります。この変更を有効にするには、SiteScope を再起動する必要があります。
- 必要に応じて、次のデータ取得設定を変更できます（これらの変更を有効にするには、SiteScope を再起動する必要があります）。
  - トポロジ解決頻度（分）**：監視対象サーバのトポロジをチェックする間の待機時間（分単位）。これは、非ダイナミック・モニタのみに適用されます。ダイナミック・モニタに対しては、ユーザ・インタフェースでインスタンスごとに頻度を設定可能です。モニタ実行中にこの時間を超過すると、SiteScope のスタンドアロン・モードで実行している場合はトポロジは SiteScope に保存されます。SiteScope が BSM と統合しているとトポロジは再び BSM の RTSM で作成されます。標準設定の値は 60 分。
  - データ取得 API の単一要求のサイズ (MB)**：単一のデータ取得 API 要求で日次ログからデータをフェッチするために割り当てられたメガバイト単位のメモリの最大サイズ。要求を処理するために日次ログから非常に大量のデータをロードすると、データに割り当てられたメモリ

が SiteScope の利用可能なメモリ・プールの範囲外のために、SiteScope でのパフォーマンスに悪影響を与える可能性があります。標準設定の値は 20 MB です。

- **データ取得 API の要求の合計サイズ (MB):** 同時実行のデータ取得 API 要求すべてで日次ログからデータをフェッチするために割り当てられたメガバイト単位のメモリの最大サイズ。要求を処理するために日次ログから非常に大量のデータをロードすると、データに割り当てられたメモリが SiteScope の利用可能なメモリ・プールの範囲外のために、SiteScope でのパフォーマンスに悪影響を与える可能性があります。標準設定の値は 100 MB です。
- 削除されたモニタをデータ取得 API の結果に含めるには、**「データ取得 API の結果に削除されたモニタを含める」** オプションを **【プリファレンス】 > 【一般プリファレンス】 > 【一般設定】** で選択します。

3. データ取得 API でデータを取得する対象のモニタ・タイプを指定するときに、モニタの「Topaz 名」を使用する必要があります。

モニタ・タイプのクエリを指定するときに使用するモニタの Topaz 名のリストを次に示します。

モニタ表示名	モニタの Topaz 名
Active Directory レプリケーション (Active Directory ソリューション・テンプレートのみから作成)	Active Directory レプリケーション
Amazon Web Services	AmazonCloudWatch
Apache サーバ	Apache
BAC 統合設定	BAC 統合設定
BAC 統合統計モニタ	BAC 統合統計モニタ
BroadVision アプリケーション・サーバ	BroadVision
CheckPoint	CheckPoint
Cisco Works	Cisco Works
Citrix	Citrix MetaFrame Presentation Server
ColdFusion サーバ	MS ColdFusion サーバ
COM+ サーバ	COM+

モニタ表示名	モニタの Topaz 名
コンポジット	コンポジット
接続統計モニタ	接続統計モニタ
CPU	CPU
カスタム	カスタム・モニタ
カスタム・データベース	カスタム・データベース・モニタ
カスタム・ログ・ファイル	カスタム・ログ・モニタ
カスタム WMI	カスタム WMI モニタ
データベース・カウンタ	DatabaseCounter
データベース・クエリ	SQL クエリ
DB2 JDBC	DB28x
DHCP	DHCP
ディレクトリ	ディレクトリ
DNS	DNS
ダイナミック・ディスク・スペース	ダイナミック・ディスク・スペース
ダイナミック・モニタリング統計	ダイナミック・モニタリング統計
eBusiness トランザクション	Ebus チェーン・モニタ
F5 Big-IP	F5
ファイル	ファイル
フォーミュラ・コンポジット	帯域幅
FTP	FTP モニタ

モニタ表示名	モニタの Topaz 名
Generic Hypervisor	Generic Hypervisor
HAProxy	HAProxy モニタ
SiteScope サーバの状況	サーバ負荷の状況モニタ
HP iLO	HP iLO
HP NonStop イベント・ログ	NonStop イベント・ログ
HP NonStop リソース	NonStop リソース
HP サービス・マネージャ	HP インシデント
IPMI	IPMI
JMX	JMX モニタ
KVM	KVM
LDAP	LDAP モニタ
ライセンス使用状況モニタ	ライセンス使用状況
リンク・チェック	リンク・モニタ
ログ・イベント・チェッカー	ログ・イベント状況モニタ
ログ・ファイル	ログ・モニタ
メール	電子メール・モニタ
MAPI	mapimon
memcached 統計モニタ	memcached 統計
メモリ	メモリ
Microsoft A/V アーカイブ・サーバ	Microsoft Lync Server 2010 アーカイブ・サーバ

モニタ表示名	モニタの Topaz 名
Microsoft A/V Conferencing サーバ	Microsoft Lync Server 2010 A/V Conferencing モニタ
Microsoft ASP サーバ	MS Active Server Pages
Microsoft Director サーバ	Microsoft Lync Server 2010 Director モニタ
Microsoft Edge サーバ	Microsoft Lync Server 2010 Edge モニタ
Microsoft Exchange 2007 のメッセージ・トラフィック	Microsoft Exchange 2007 のメッセージ・トラフィック
Microsoft Exchange	Microsoft Exchange 2007
Microsoft Exchange Base	Microsoft Exchange Base
Microsoft Front End サーバ	Microsoft Lync Server 2010 Front End モニタ
Microsoft Hyper-V	HyperVMonitor
Microsoft IIS サーバ	MS IIS サーバ
Microsoft Mediation サーバ	Microsoft Lync Server 2010 Mediation モニタ
Microsoft Monitoring と CDR サーバ	Microsoft Lync Server 2010 監視および CDR モニタ
Microsoft Registrar サーバ	Microsoft Lync Server 2010 Registrar モニタ
Microsoft SQL Server	MS SQL Server
Microsoft Windows イベント・ログ	Microsoft Windows イベント・ログ
Microsoft Windows Media Server	MS Winodws Media Server
Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ	参照可能な NT カウンタ

モニタ表示名	モニタの Topaz 名
Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ	Windows パフォーマンス
Microsoft Windows リソース	Windows リソース
Microsoft Windows サービス・ステート	Windows サービス・ステート
モニタ負荷チェッカー	モニタ負荷モニタ
マルチ・ログ	マルチ・ログ
NetScout イベント	NetScout イベント
ネットワーク帯域幅	ネットワーク帯域幅モニタ
ニュース	NNTP
Oracle 10g アプリケーション・サーバ	Oracle10gAS
Oracle データベース	Oracle
Oracle 9i アプリケーション・サーバ	Oracle9iAS HTTP サーバ
Ping	Ping
ポート	ポート
Radius	Radius
Real Media Server	Real Media Server
SAP CCMS	CCMS SAP
SAP CCMS 警告	SAP CCMS 警告
SAP Java Web アプリケーション・サーバ	SAP Java Web アプリケーション・サーバ
SAP パフォーマンス	SAP パフォーマンス
SAP Work Processes	SAP Work Processes



モニタ表示名	モニタの Topaz 名
スクリプト	スクリプト
サービス	サービス
Siebel アプリケーション・サーバ	Siebel アプリケーション・サーバ
Siebel ログ	Siebel ログ
Siebel Web サーバ	Siebel Web サーバ
SNMP	SNMP
MIB による SNMP	MIB による SNMP モニタ
SNMP トラップ	SNMP トラップ
Solaris ゾーン	Solaris ゾーン
状況の SSL 証書の状態	SSL 証書の状態
SunONE Web サーバ	SunONE
Sybase	Sybase
システム・ログ	システム・ログ・モニタ
テクノロジー・データベース統合	EMS データベース
テクノロジー・ログ統合	EMS・ログ・モニタ
Tuxedo	Tuxedo
UDDI サーバ	UDDI サーバ
UNIX リソース	UNIX リソース
URL	URL モニタ
URL コンテンツ	URL コンテンツ
URL リスト	URL リスト

モニタ表示名	モニタの Topaz 名
URL シーケンス	URL シーケンス・モニタ
VMware データストア	VMware データストア・モニタ
VMware ホスト CPU	VMware ホスト CPU モニタ
VMware ホスト メモリ	VMware ホスト・メモリ・モニタ
VMware ホスト・ネットワーク	VMware ホスト・ネットワーク・モニタ
VMware ホスト状態	VMware ホスト状態モニタ
VMware ホスト・ストレージ	VMware ホスト・ストレージ・モニタ
VMware パフォーマンス	VMware
Web スクリプト	Web スクリプト
Web サーバ	Web サーバ
Web サービス	テクノロジー Web サービス
Web サービス	Web サービス
WebLogic アプリケーション・サーバ	BEA WebLogic 6.0
WebSphere アプリケーション・サーバ	WebSphere
WebSphere MQ の状態	MQStatusMonitor
WebSphere パフォーマンス・サブレット	WebSphereServlet
XML メトリクス	XML メトリクス

## ヒント / トラブルシューティング

SiteScope API 呼び出し - 注意事項および制限事項

- ほとんどの API のメソッドでは、メソッド呼び出しの一部として SiteScope ユーザおよびパスワードが要求されます。これらのメソッドを使用する前に、**【プリファレンス】 > 【インフラストラ**

**クチャ プリファレンス】 > 【カスタム設定】**で**【コントロールされたアクセス】**プロパティを **true** に変更します。ユーザおよびパスワードは、平文でも暗号化してもかまいません。文字列を暗号化するには、**< SiteScope インストール > \tools\AutoDeployment\encrypt\_password.bat** を使用します。

- ユーザ名およびパスワードを持たないすべての API メソッドは SiteScope の今後のバージョンでは廃止されます。ユーザおよびパスワード認証を使用する類似の API メソッドの名前はすべて変更され、ほかのパラメータで同じメソッド名を使用しないように、Ex サフィックスが付きます (enableGroupEx など)。
- SiteScope ユーザのアクセス・レベルはメソッドの動作に影響します。たとえば、getConfigurationSnapshot と getFullConfigurationSnapshot を呼び出す場合、返されるマップにはユーザがアクセス権限を持つエンティティのみが含まれます。
- 以前のバージョンの API で作成されたアプリケーションを使用するには、\_accessControlled=false を設定し、廃止された API を使用します。このような廃止されたメソッドは今後のバージョンではサポートされないため、セキュリティ保護されたバージョンの API メソッドを使用するようにアプリケーションを移行する必要があります。
- \_accessControlled=true と設定して廃止された形式のメソッドを使用したり、\_accessControlled=false と設定してセキュリティ保護されたメソッドを使用すると例外が発生します。
- .bat ファイル (UNIX の場合は .sh ファイル) はサンプル専用であり、実運用のスクリプトを目的とはしていません。スクリプトは、要件に合わせて変更できます。
- 特殊文字は、パラメータ値ではサポートされていません。
- **【プリファレンス】 > 【ユーザ管理プリファレンス】 > 【権限】 > 【警告】**で**【警告を一時的に無効化】**権限が選択されていない場合、警告無効化 API はサポートされていません。
- サーバ上で一部の API 操作を無効にすることができます。これは、API を使用して設定をリモートで変更できないように、読み取り専用モードをサポートしています。

## 第16章: SiteScope モバイル・アプリケーション

SiteScope はコンピュータから離れている間、監視対象の IT インフラストラクチャを追跡できる無料でダウンロード可能なアプリケーションを提供します。SiteScope モバイル・アプリケーションは、スマートフォン・デバイスの使用を通じて SiteScope へのチーム・アクセスを提供することにより、企業の従業員と情報を結びます。

**ヒント:** YouTube で SiteScope iPhone アプリケーションの使用に関するガイドとナレーション付きの説明を見ることができます。 <http://www.youtube.com/watch?v=cLawpqlk0ss&feature=plcp>。

### 学習事項

モバイル・アプリケーションでサポートされる SiteScope の機能

SiteScope モバイル・アプリケーションにより、SiteScope スタッフはオフィス外で 24 時間 365 日のモバイルアクセスが可能になり、次のことを行えます。

- ・ 組織の監視対象アプリケーションに関連する問題について電子メール通知を受け取り、修正アクション（モニタの再実行、モニタ・レポートの表示、警告の確認、関連する警告の有効化/無効化、確認ログの表示）を実行できます。
- ・ グループおよびモニタの状態を確認して、可用性に関する問題を事前に検証できます。これにより、その問題が業務に影響を与える前に解決できます。
- ・ 検索を行ってモニタ統計にアクセスし、その検索結果にアクション（モニタ詳細の表示、モニタの有効化/無効化、モニタの実行、警告アクションの設定）を実行して、問題を軽減できます。
- ・ モニタ、グループ、警告に関する一時的なレポートを作成できます。このレポートには、時間の経過に伴う監視対象のサーバとアプリケーションのパフォーマンスに関する情報が表示されます。
- ・ 選択したモニタとグループをお気に入りリストに追加します。
- ・ データ間の階層関係を失うことなく 1 つのビューで、ご使用の IT インフラストラクチャで監視されているすべてのパフォーマンス状態を表示するには、Multi-View を使用します。

モバイル・デバイスでの SiteScope 使用の詳細については、SiteScope モバイル・アプリケーションのヘルプを参照してください。SiteScope モバイル・アプリケーションで利用可能な機能の使用方法に関するその他の情報については、SiteScope ヘルプの関連トピックを参照してください。

サポートされるデバイス

SiteScope モバイル・アプリケーションは次のデバイスでサポートされます。

- **iPhone, iPad, または iPod touch** : SiteScope iPhone モバイル・アプリケーションは, iPhone App Store (<http://itunes.apple.com/us/app/hp-sitescope/id410294629?mt=8#>) から入手できます。SiteScope iPhone アプリケーションのデモ・ムービーについては, <http://www.youtube.com/watch?v=MULAm0322nl>を参照してください。
- **Android 携帯電話およびタブレット** : SiteScope Android モバイル・アプリケーションは Android Market から利用可能です ([https://market.android.com/details?id=com.hp.sitescope.mobile.android&feature=search\\_result&rdid=com.hp.sitescope.mobile.android&rdot=1&pli=1](https://market.android.com/details?id=com.hp.sitescope.mobile.android&feature=search_result&rdid=com.hp.sitescope.mobile.android&rdot=1&pli=1))

SiteScope モバイル・アプリケーションは次のバージョンの SiteScope でサポートされます。

- SiteScope 10.13 以降 (Linux の場合はパッチ SIS\_108, Windows の場合は SIS\_110)。
- SiteScope 11.01 以降 (Linux の場合は SIS\_00114, Windows の場合は SIS\_00116)。
- SiteScope 11.10 以降。

## タスク

モバイル・デバイスに送信される警告の設定方法

<SiteScope のルート・ディレクトリ>\templates.mail フォルダ内の **MobileAppMail** テンプレートを 사용합니다。このテンプレートには電子メールからアプリケーションを開くために使用できるリンクが含まれています。

モバイル・デバイスに送信されるメール・テンプレートに HTML コンテンツを含める方法

<SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルで, \_defaultMailAlertContentType プロパティの値を =text/html に設定します。

モバイル・デバイスで SiteScope をセキュア・モードで使用方法

【プリファレンス】 > 【インフラストラクチャ プリファレンス】 > 【カスタム設定】で, 【コントロールされたアクセス】プロパティを true に変更します。変更しないと, SiteScope のユーザ名とパスワードが無視されます。

## ヒント / トラブルシューティング

注意事項および制限事項

- モバイル・デバイスが正確なローカル時刻に設定されていることを確認します。
- 一時的に無効になっているモニタ (SiteScope ユーザ・インタフェースでまたはモバイル・デバイスから無効化されていたかどうかに関係なく) は, サーバ時間に依拠してモニタの詳細サマリに表示されます。

- モバイル・デバイスから SiteScope ユーザ・アカウントを削除すると、そのアカウントのお気に入り保存されたモニタまたはグループも削除されます。
- SiteScope ユーザ・アカウント設定を変更すると（たとえば、プロファイルのプロトコルを http から https に変更、または SiteScope ポートの変更）、そのプロファイルに関連するすべてのモニタがお気に入りリストに表示されなくなります。
- レポートの生成時にメモリ・リソースの不足メッセージを受信した場合は、（実行中のアプリケーションを閉じるなどによって）モバイル・デバイスのメモリ容量を空けてください。HP SiteScope の [iPhone Settings] または [Android Settings] の **[Minimum memory for reports (MB)]** スライダを動かして、SiteScope レポートに必要なメモリを増加または減少できます。
- 3G シグナルを使用して SiteScope にモバイル・アプリケーションを接続できず、ワイヤレス・ネットワーク（WiFi）を使用して接続できる場合は、SiteScope ポートを 80 に変更するようにしてください。サービス・プロバイダでは（標準設定の SiteScope ポート、8080 など）一部のポートをブロックする場合があります。

## 第17章: 正規表現

SiteScope では、テキスト・コンテンツの照合に正規表現を利用します。いくつかの SiteScope モニタでは、モニタの要求またはアクションによって返されるテキストの内容を照合できます。この章では、SiteScope モニタで正規表現を使用してテキスト・コンテンツを照合する方法について説明します。

正規表現は、Awk や Perl などのスクリプト言語や、Emacs, Visual C++, Java などのプログラミング環境で使用するために開発されたテキスト解析ツールに付けられた名前です。正規表現自体はプログラミング言語ではありません。ただし、文字や記号の特殊な組み合わせを数多く使用するため、一部のプログラミング言語よりも理解しづらくなっている場合があります。このような特殊文字（メタ文字と呼ばれます）のさまざまな組み合わせによって、正規表現は、より大きなテキストに含まれている特定のテキストを解析および抽出するための非常に強力な柔軟性のあるツールとなります。

モニタの【**内容の照合**】テキスト・ボックスに正規表現を使用すると、実行時にモニタに返されるテキストが SiteScope によって解析され、正規表現で定義したパターンに一致する内容が検索されます。このドキュメントでは、SiteScope モニタの内容を照合するために正規表現で 사용되는構文とメタ文字の概要について説明します。

### 正規表現の定義

SiteScope の内容を照合するための要素は、スラッシュ (/) 文字です。SiteScope モニタの【**内容の照合**】テキスト・ボックスのエントリは、正規表現として認識されるようにスラッシュで囲む必要があります。たとえば、/website/ という表現をモニタの【**内容の照合**】ボックスに入力すると、SiteScope によって、モニタで受信したテキスト・コンテンツから website というリテラル・テキスト文字列が検索されます。一致するテキスト文字列がない場合、モニタによってエラー・ステータスがレポートされます。一致するテキスト文字列がある場合、他のモニタ・ステータスのしきい値に対応する条件もすべて満たしていれば、モニタによって良好ステータスが返されます。スラッシュでエントリを区切らずにテキストまたはほかの文字を【**内容の照合**】ボックスに入力すると、SiteScope では、エントリは無視されるか、内容の照合エラーとしてレポートされます。

また、SiteScope の正規表現では、正規表現を囲むスラッシュ内に括弧 ( ) を追加できます。これは非常に便利な機能です。括弧は「後方参照」を作成するために使用されます。後方参照として、SiteScope では括弧間で一致したテキストが保持され、モニタの詳細のページの【**ステータス**】フィールドにそのテキストが表示されます。これは、内容の照合のトラブルシューティングに役立ちます。この方法を使用して、一致した値のあるモニタから別のモニタに、または URL シーケンス・モニタのあるステップから同じトランザクションの次のステップに渡すこともできます。また、括弧は次に示すように選択肢の範囲を定義するためにも使用されます。

通常、SiteScope 内で内容を照合する正規表現を作成する場合、反復的な手法が適しています。次に、正規表現を作成して内容を照合する場合の一般的な手順とガイドラインを示します。

- モニタするデータの 1 つのサンプルに一致するリテラル文字を使用して正規表現を作成します。  
例: /value:1022.5/.

- ・ 繰り返しリテラル文字を文字クラスおよびメタ文字に置き換えて、リテラルをパターンへと標準化していきます。たとえば、前述の例のリテラルは、4つの数値、小数点、もう1つの数値に一致する `/value:\s\d\d\d\d\d\d/` になります。
- ・ 照合するデータのパターンが変わる可能性がある場合を考えます。予測されるまたは可能性のある対象データの変動に合わせてパターンを調整します。前の例の `/value:\s\d\d\d\d\d\d/` という表現は `/value:\s\d{1,8}\.\d{1,2}/` のようになります。このパターンでは、小数点前の数値の数と小数点後の数値の数の変動に対応できます。このパターンでは、小数点が存在することを想定しています。ここで使用されている文字クラスの詳細については、次項を参照してください。
- ・ 照合するリテラル文字列またはパターンがコンテンツ内に複数回出現する可能性がある場合を考えます。照合するコンテンツより前に出現する一意のコンテンツを指定してから正規表現のパターンを追加します。これにより、監視するコンテンツが照合される前に一意のコンテンツが式で照合されます。この例のパターンでは、最初のいくつかのエントリが `/value:numbers/` のようになるパターンに一致します。静的コンテンツに一致するリテラルをパターンに追加すると、特定のデータの範囲が定まり、確実に対象データに対して照合を実行できるようになります。たとえば、照合するデータが Open Queries というテキストの後にある場合、`/Open Queries[\s\W]{1,5}value:\s\d{1,8}\.\d{1,2}/` のように、介在するコンテンツのパターンとともにこのリテラルをパターンに追加できます。

## 文字列リテラルの照合

正確な文字列またはリテラル文字列の検索と照合は、正規表現でのパターン照合の最も単純な形式です。リテラルの照合では、正規表現はワード・プロセッシング・アプリケーションの検索/置換と同様に動作します。前述の例では、Web site というテキストと照合しました。正規表現 `/Buy Now/` は、文字 `Buy Now` が空白も含めてこの順序で含まれるテキストがモニタに返された場合に成功します。

標準設定では、正規表現は大文字と小文字を区別したリテラルです。つまり、英数字以外の文字を含めて、大文字と小文字、および順序で内容が表現と一致する必要があります。たとえば、修飾子のない `/Website/` の正規表現は、内容に完全に一致する文字列 `Website` が含まれる場合のみに成功し、ページに含まれる内容が `website`、`WEBSITE`、または `Web site` の場合は失敗します（最後の例では、2つの単語の間に正規表現にはない空白があるため失敗します）。

この場合は、正規表現で使用する特別な「予約済み」メタ文字である特定の英数字以外の文字をリテラルに照合できます。一部のメタ文字は、正規表現で照合する重要なリテラルと競合する場合があります。たとえば、ピリオドやドット記号 (`.`)、アスタリスク (`*`)、ドル記号 (`$`)、バックスラッシュ (`\`) は正規表現内で特別な意味を持ちます。これらの文字のいずれかが検索する特定のテキスト・パターンの主要部分である場合、正規表現プロセスでこれらの文字を特別なメタ文字としてではなくリテラル文字として扱うように「エスケープ」する必要があります。文字をメタ文字ではなくリテラルとして強制的に解釈させるには、その文字の前にバックスラッシュを追加します。

### 例 - リテラル文字列の照合

たとえば、Web ページで文字列 `4.99` を検索する場合に、`/4.99/` という正規表現を作成したとします。この場合、文字列 `4.99` が一致しますが、ピリオド文字は特別な意味を持つため、`4599` や `4Q99` のような文字列も一致します。正規表現でピリオドをリテラルとして解釈させるには、次のようにピ



リオドをスラッシュでエスケープします。/4\.99/。文字の前にバックスラッシュのエスケープ文字を追加することで、正規表現プロセスでバックスラッシュに続く文字をリテラルとして強制的に解釈させることができます。通常、句読点やその他の英数字以外の文字を照合する場合は、常にこの構文を使用します。

代替の使用

代替を使用して、複数の文字列のいずれかが内容に含まれる either/or 照合を構成できます。代替文字は垂直パイプ記号 ("|") です。

垂直パイプは、正規表現で代替文字を区切るために使用されます。たとえば、正規表現 /(e-mail|e-mail|contact us)/ は、垂直パイプで区切られた 3 つの文字列のいずれかが内容に含まれる場合に成功します。ここでは、代替の区切りに括弧が使用されています。この例では、一致する必要のある代替の外側にはパターンがありません。これに対して、/(e-mail|e-mail|contact) us/ のように正規表現を記述することもできます。この場合、括弧に囲まれた 3 つの代替のいずれかの直後に空白スペースと単語 us が続く場合にのみ、照合は成功します。これは前の例よりも制限がありますが、括弧によって代替が内部の 3 つの単語に限定されていることもわかります。代替の 1 つ以上が見つかったも次の単語が「us」でない場合は、照合は失敗します。

メタ文字を使用したパターンの照合

照合が必要なテキストが正確にわからない場合や、テキスト・パターンがセッションや日によって変わることはよくあります。正規表現には、パターンの定義や文字のカテゴリ全体の照合に使用する特殊なメタ文字が多くあります。正規表現は、単なるリテラルの英数字文字の照合だけでなく、非英数字文字の照合にも使用できます。このため、正規表現では検索する内容に非英数字文字が存在することを考慮することが重要です。つまり、正規表現を作成するときには、ピリオド、カンマ、ハイフン、引用符などの文字や、空白も考慮する必要があります。

本項の内容

- ・ [「正規表現で使用するメタ文字」 \(189ページ\)](#)
- ・ [「文字クラスの定義」 \(190ページ\)](#)
- ・ [「数量詞の使用」 \(191ページ\)](#)

正規表現で使用するメタ文字

メタ文字	詳細
\s	汎用的な空白（つまり Space キー）を照合する。このメタ文字は、数量詞と組み合わせ、照合対象の単語間に発生する可変の空白数の位置を照合する場合に特に便利です。
\S	空白以外の文字を照合する。\\S は大文字です。一方、小文字の \\s は空白の照

メタ文字	詳細
	合に使用します。
.	ピリオド（ドット文字）。通常、これはすべての文字を照合します。SiteScope では、ドットは独自形式の文字クラスとみなされるため、文字クラスの角括弧内に含めないでください。
\n	行送り文字を照合する。
\r	復帰改行文字を照合する。
\w	空白以外の文字を照合する。文字クラス [A-Za-z0-9_] で照合するものと同じです。\\w メタ文字は、アンダースコア文字を照合しますが、ほかの句読点（ハイフン、カンマ、ピリオドなど）は照合しません。
\\W	\\w（小文字）で照合する文字以外の文字を照合する。句読点と非英数字文字（~!@#\$%^&*()+=[]{};: &lt;br>と行送り文字、復帰改行、空白を含む）を照合する場合に特に便利です。\\w で照合される単語構成要素とみなされるアンダースコア文字は照合しません。
\\d	数字のみを照合する。これは、[0-9] 文字クラスに相当します。
\\D	非数字文字（\\d で照合しない文字）とほかの文字を照合する。\\W と似ていますが、英文字も照合します。SiteScope では、通常これは数字に遭遇するまでのすべて（複数行を含む）を照合します。
\\b	照合に際し、\\b で指示した位置に単語の境界（通常は空白）が必要であることを示す。
\\B	指示した位置に単語の境界があってはならないことを示す。

## 文字クラスの定義

文字クラスは、重要で非常に便利な正規表現構成です。文字クラスには、正規表現内の特定の位置で検出される可能性がある特定の文字セットを定義します。文字クラスを使用するのは、1つの位置で照合する文字の範囲を定義する場合、または数量詞を追加して複数の文字や複数行を広く照合する場合などです。

文字クラスは、文字とメタ文字の任意の組み合わせを角括弧 [] で囲んで形成します。文字クラスでは、照合対象となる「いずれか、またはすべて」の文字のグループを作成します。文字クラス外のリテラルやメタ文字とは異なり、文字クラス内の文字やメタ文字の物理的な並びは検索や照合の順序に影響しません。たとえば、クラス [ABC0123abc] は [0123abcABC] と同じ内容を照合します。

ハイフンを使用して文字または数字の範囲を示すことで、文字クラスをさらに効率化できます。たとえば、クラス [0-9] には 0 から 9 までのすべての数字が含まれます。クラス [a-z] には a から z までのすべての小文字が含まれます。ハイフンを使用して、より限定的なクラスを作成することもできます。たとえば、[e-tE-T] は E から T までの大文字または小文字を照合し、[0-5] は 0 から 5 までの数字のみを照合します。

キャレット文字 (^) を文字クラス内で否定として使用すると、特定の文字を内容の照合から除外できます。

文字クラスの例

例	詳細
[a-zA-Z]	文字 a から文字 z までの任意の英文字（大文字と小文字の両方）を照合する。複数の文字を照合するには、後述のように文字クラスの後に数量詞を付加します。
[0-9]	0 から 9 までの任意の数字を照合する。複数の数字を照合するには、後述のように文字クラスの後に数量詞を付加します。
[0-9A-Za-z]	アンダースコアを除く、任意の英数字文字を照合する。
[\w\s]	英数字文字または空白、あるいはその両方を照合する。

数量詞の使用

正規表現に、文字をカウントするオプションとして使用できるメタ文字のもう 1 つのセットです。これにより、内容の照合機能を大幅に強化して柔軟性を高めることができます。数量詞は、前述のメタ文字と文字クラスの後に付加して、先行する照合文字またはメタ文字を照合する位置を指定します。たとえば、正規表現 /(contact|about)\s+us/ では、メタ文字 \s が空白を照合します。プラス記号の数量詞を \s の後に付けると、単語 contact（または about）と us の間に少なくとも 1 文字以上の空白が必要であることを示します。

次の表では、正規表現で使用できる数量詞について説明します。数量詞は、その直前にある 1 文字に適用されます。文字クラスと併用する場合、数量詞は文字クラスの閉じ角括弧の外側に置きます。例 :[a-z]+ や [0-9]\* のように指定します。

数量詞	詳細
?	疑問符は、先行する文字または文字クラスが 1 回だけ出現する可能性があることを示す。ただしこれは任意指定であり、指示した位置に出現しなくてもかまいません。

数量詞	詳細
*	アスタリスクでは、任意の数の先行する文字または文字クラスが指定した位置に出現する必要がある。これには、0 以上の一致が含まれます。  <b>注:</b> この数量詞を、ドット (.) メタ文字または \W メタ文字を含む文字クラスと組み合わせると、想定より多くの内容が取得されて正規表現エンジンが SiteScope サーバの利用可能な CPU 時間を使い切ってしまう可能性があるため、注意してください。
+	プラス記号は、先行する文字または文字クラスが少なくとも 1 回出現する必要があることを示す。
{min,max}	波括弧は、数量詞の範囲指定に使用する。範囲列挙子の数字はカンマで区切ります。この構成では、先行する文字または文字クラスの出現回数が <b>min</b> 列挙子で指定した回数以上、 <b>max</b> 列挙子で指定した値以下である必要があります。少なくとも <b>min</b> 列挙子で指定した回数出現すれば、照合は成功します。ただし、照合は <b>max</b> 列挙子で指定した回数か、それ以上一致が検出されなくなるまで続行されます。

SiteScope での内容の照合は、HTTP 応答全体に対して実行されます。これには、通常はブラウザでは表示できない HTTP ヘッダも含まれます。HTTP ヘッダには通常、数字のシーケンスと組になった単語を含む、複数行のテキストが含まれます。これにより、数字や文字の小さいセットなどの単純な内容に対する照合以外では、照合が失敗することがあります。失敗を避けるには、照合対象のテキストの近くにある固有の文字シーケンスを特定し、可能ならばそれをリテラルとして正規表現に含めます。

## 検索モード修飾子

SiteScope で使用する正規表現では、表現を区切るスラッシュの外側に任意指定の修飾子が含まれていることがあります。閉じるスラッシュの後にある修飾子は、照合の実行方法に影響します。たとえば、**i** 検索修飾子が追加された `/website/i` という正規表現では、照合内容での検索は大文字と小文字が区別されません。この場合、`website`、`Website`、`WEBSITE` や、`WEBSITE` でさえも一致します。

**i** 修飾子を除き、一部のメタ文字と文字クラスによって検索モード修飾子を上書きできます。特にドット (.) と \W メタ文字は、**m** および **s** 修飾子を上書きし、これらの修飾子があっても複数行にわたって内容を照合します。

複数の修飾子を追加するには、正規表現の閉じるスラッシュの後に修飾子を連結して追加します。例: `/matchpattern/ic` は **i** および **c** 修飾子を結合します。

正規表現照合モード修飾子

モード修飾子	詳細
/i	大文字と小文字の区別を無視する。これにより、大文字と小文字に関係なく検索が行われます。これは、Web ページのテキスト内容内で一致を検索する場合に特に便利なオプションです。
/c	一致したパターンが、検索する内容に出現してはならないことを示す。これは「補集的」照合であり、パターンが検出されるとエラーが返され、パターンが検出されないと成功します。
/m	途中にある復帰改行や行送りを無視せずに複数行を照合する。この修飾子を使用した場合でも、行送りや復帰改行は、 <code>[\w\W]*</code> や <code>[\s\S\n\r]*</code> などの文字クラスを使用して考慮する必要があります。この修飾子を使用すると、 <code>*</code> は復帰改行や行送りを照合しません。
/s	途中にある復帰改行および行送り文字を無視して内容を 1 行とみなす。この修飾子を使用した場合、 <code>[\w\W]*</code> 文字クラスと <code>*</code> パターンのどちらも行送りや復帰改行をまたいで照合を行います。

内容の照合値の保持

URL モニタや URL シーケンス・モニタなど、一部のモニタには、ログに記録され、エラー・ステータスしきい値の設定に使用できる内容の照合値があります。正規表現構文で使用される括弧 `/()` (照合パターン) には、内容の照合値に保持されるテキストを判断するというもう 1 つの目的があります。この機能を使用して、URL モニタまたは URL シーケンス・モニタのエラーしきい値を判断するために、内容の照合値をしきい値として直接使用します。

たとえば、内容の照合表現が次のような場合を例に挙げます。

`/Copyright (\d*)/`

URL リクエストによってモニタに返される内容に次の文字列が含まれているとします。

... Copyright 2007 by HP

一致した結果、保持される内容の照合値は、次のようになります。

2007

次に、モニタ設定ページ下部の `error-if` オプションの下で、`error-if` 条件をステータスの標準設定 `!= 200` から内容の照合に変更し、関係演算子を `!=` に指定し、値を `2008` に指定できます。これにより、文字列 `Copyright` の年が `2008` 以外の場合は、モニタからエラーがレポートされるようにこのモニタのエラーしきい値が設定されます。このメカニズムは、Web ページの内容が不正に変更されていないかどうかを監視するために利用できます。

Web ページにあるほかの URL へのリンクの確認は、URL シーケンス・モニタの作成において重要な部分です。Web ページのリンクの URL テキストを照合するには、次の正規表現を使用できます。

```
/a href="?([:\w\s\d\.]*)"?/i
```

この表現は、href="protocol://path/URLname.htm" を多数の URL と照合します。疑問符修飾子を使用することによって、HREF= 属性を囲む引用符の指定は任意になります。i 修飾子により、照合パターンの大文字と小文字は区別されません。

内容の照合から保持または記憶された値は、URL シーケンス・モニタの後続ステップで参照され、入力値として使用できます。シーケンス・ステップ間での値の保持または受け渡しに使用する構文については、「「URL シーケンス・モニタ」」の「**Match content**」を参照してください。

# SiteScope の日付変数

SiteScope では、特別に定義された変数を使用して、現在の日付または時刻を照合する表現を作成します。これらの変数を内容の照合フィールドで使用すると、日付が記述された内容を検出できます。一般の日付変数は、日付形式の部分を照合するのに便利です。言語または国に固有の日付変数を使用すると、ISO コードに基づき、月と曜日の名称に使用される言語を自動的に特定の国に拡張できます。

## 本項の内容

- ・ [「一般の日付変数」\(194ページ\)](#)
- ・ [「言語または国に固有の日付変数」\(195ページ\)](#)
- ・ [「「モニタ URL またはファイル・パスの特殊置換」」\(196ページ\)](#)

## 一般の日付変数

次の表は、一般変数を示します。

変数	値の範囲
\$hour\$	0 - 23
\$minute\$	0 - 59
\$month\$	1 - 12
\$day\$	1 - 31
\$year\$	1000 - 9999
\$shortYear\$	00 - 99
\$weekdayName\$	Sun ~ Sat

変数	値の範囲
\$fullWeekdayName\$	Sunday - Saturday
\$0hour\$	00 - 23
\$0minute\$	00 - 59
\$0day\$	01 ~ 31 (2桁の日付形式)
\$0month\$	01 ~ 12 (2桁の月形式)
\$monthName\$	Jan ~ Dec (英語の3文字の月形式)
\$fullMonthName\$	January - December
\$ticks\$	1970年1月1日の午前0時から経過したミリ秒数。

たとえば、内容の照合検索表現を次のように定義します。

/Updated on \$0month\$\/\$0day\$\/\$shortYear\$\/

リクエストによって返された内容に次の文字列が含まれているとします。

Updated on 06/01/98

この表現は、モニタが1998年6月1日に実行されると一致します。返された内容に現在のシステム日付と一致する文字列が含まれていない場合、または日付形式が指定した形式と異なる場合、照合は失敗します。

時間を現在時刻より前または後にする場合は、表現に **\$offsetMinutes=mmmm\$** を追加できます。これにより、置換を行う前に現在時刻が **mmmm** 分間ずらされます（時間を遡るには負の数値を指定できます）。

たとえば、現在の日付が2007年6月1日だとすると、検索表現は次のようになります。

/\$offsetMinutes=1440\$Updated on \$0month\$\/\$0day\$\/\$shortYear\$\/

この場合、一致する内容文字列が次のようになります。

Updated on 06/02/07

**注:** 日付がシステム日付の1日後になっています。

言語または国に固有の日付変数

次の表は、国際標準の曜日および月の名称の照合で使用する SiteScope の特殊変数を示します。LL と CC という文字は、ISO 639 言語コード文字（2文字）と ISO 3166 国コード文字（2文字）のプレースホルダです（詳細については、表の下の説明を参照）。これらのコードに関する情報は、一般公開さ



れている多くの Web サイトで入手できます。

変数	値の範囲
\$weekdayName_LL_CC\$	指定した言語 (LL) および国 (CC) の曜日の省略名称 (表の下の説明を参照)
\$fullWeekdayName_LL_CC\$	指定した言語 (LL) および国 (CC) の曜日の正式名称
\$monthName_LL_CC\$	指定した言語 (LL) および国 (CC) の月の省略名称
\$fullMonthName_LL_CC\$	指定した言語 (LL) および国 (CC) の月の正式名称

CC : 大文字 2 文字で表記する ISO-3166 国コード。たとえば、ドイツは DE、フランスは FR、中国は CN、日本は JP、ブラジルは BR のように表します。

LL : 小文字 2 文字で表記する ISO-639 言語コード。たとえば、ドイツ語は de、フランス語は fr、中国語は zh、日本語は ja、ポルトガル語は pt のように表します。

たとえば、内容の照合表現を次のように定義します。

```
/$fullWeekdayName_fr_FR$/i
```

リクエストによって返された内容に次の文字列が含まれているとします。

```
mercredi
```

この表現は、モニタが土曜日に実行されると一致します。

国に固有の言語のバリエーションを考慮する必要がない場合は、国コードを含めずに前述の任意の変数を使用できます。例：

```
/$fullWeekdayName_fr$/
```

上の表現は、/\$fullWeekdayName\_fr\_FR\$/ と同じ内容を照合するために使用できます。

### 「モニタ URL またはファイル・パスの特殊置換」

SiteScope の日付変数は、正規表現の一部として内容を照合するのに便利です。日付変数は、特定のモニタに URL またはファイル・パスを動的に作成するために、特殊置換としても使用できます。これは、システムの日付情報に基づいて URL またはファイル・パスが自動的に更新される、日付が記述されたファイルとディレクトリを監視するのに役立ちます。SiteScope は、日付が記述されたログ・ファイルを作成するアプリケーションの一例です。ログ・ファイル名には部分的に、File2001\_05\_01.log のように何らかの形式で年月日が含まれます。

この例に基づき、新しいファイルが毎日作成されます。通常、当日のファイルの作成、サイズ、または内容をモニタするには、モニタのファイル・パスまたは URL を毎日手動で変更する必要があります。SiteScope の日付変数と特殊置換を使用すると、SiteScope は当日のログ・ファイルのファイル・パスを自動的に更新できます。ファイルの命名に使用されるパターンを把握することによって、シス



テム日付のプロパティの一部をファイル・パスに代入する正規表現に似た特殊置換文字列を作成できます。

次の例はファイル・モニタにある当日のログ・ファイルの絶対ファイル・パスであるとしします。

```
D:/Production/Webapps/Logs/File2001_05_01.log
```

翌日のログ・ファイルは、次のようになります。

```
D:/Production/Webapps/Logs/File2001_05_02.log
```

次の構文を使用して、モニタで使用するファイル・パスを自動的に更新する特殊置換表現を作成できます。

```
s/D:\Production\Webapps\Logs\File$year$_$0month$_$0day$.log/
```

置換の表現は、小文字の `s` で開始し、スラッシュ `/.../` で囲む必要があります。ファイル・パスの一部として含まれるスラッシュは、上に示すようにバックスラッシュ (`\`) 文字を追加してエスケープする必要があります。SiteScope 日付変数は、アンダースコア文字で区切ります。SiteScope では、モニタを実行するたびにシステム時刻のプロパティをチェックし、ファイルにアクセスする前に該当する値がファイル・パスまたは URL に代入されます。

特殊置換をサポートする SiteScope モニタ・タイプは、次のとおりです。

- e ビジネス・トランザクション・モニタ
- ファイル・モニタ
- FTP モニタ
- ログ・ファイル・モニタ
- URL モニタ
- URL シーケンス・モニタ
- Web サーバ・モニタ

特殊置換の構文は正規表現で使われる置換構文に似ていますが、同じではありません。内容の照合の正規表現では SiteScope の日付変数をすべて使用できるのに対し、特殊置換は内容の照合表現の一部として使用できません。

## ログ・ファイル監視の例

SiteScope のログ・ファイル・モニタとファイル・モニタ では、ほかのアプリケーションで作成されたファイルのエントリがチェックされます。これらのファイルは、サードパーティ製のアプリケーションで作成したデータ・ファイルであったり、自分の環境用に特別に設計されたカスタム・システムで作成したログであったりします。ログまたはファイルが既知の予測可能な形式で記述されている場合、新しいエントリを定期的にチェックし、内容の特定の文字列と照合するように SiteScope を設定できます。ログ・ファイルのエントリの例とエントリのチェックに使用できる単純な正規表現パターンを次に示します。これらの例をそのまま使用するか、特定のケースに合わせて変更できます。

**注:** SiteScope では、正規表現をすべて 1 行で入力する必要があります。次に示す例には、この

ページ内に収めるために複数行にわたって記述されているものもあります。

本項の内容

- ・「ログ・ファイルのパスの検索」(198ページ)
- ・「カンマで区切られた値の照合」(199ページ)
- ・「空白で区切られた値の照合」(199ページ)
- ・「テキストまたは数値の行の数値の照合と保持」(200ページ)
- ・「整数と浮動小数点数（正または負）の照合」(200ページ)
- ・「日付と時刻を含むログ・エントリの照合」(200ページ)

ログ・ファイルのパスの検索

UNIX と Windows オペレーティング・システムとでは、ファイル名の大文字と小文字（「N」と「n」）の取り扱いに互換性がありません。Windows オペレーティング・システムでは大文字と小文字が区別されず、ファイルの検索時には大文字と小文字が無視されます。UNIX オペレーティング・システムでは大文字と小文字が区別され、名前の文字の大小の違いは常に重要です。UNIX オペレーティング・システム上のパス名の検索で正規表現を使用する場合にログ・ファイル・エラーを避けるには、パス表現の大文字と小文字を変更するマーカを使用します。

マーカ	詳細
\$L	\$L マーカと \$E マーカの間の文字を小文字に変更できる。
\$U	\$U マーカと \$E マーカの間の文字を大文字に変更できる。
\$E	大文字と小文字の変更に使用する終了マーカ。

例：

次のパス表現を定義するとします。

```
s/\tmp/logs/arcv.log.$weekdayName$/
```

Linux マシン上の /tmp/logs/arcv.log.tue ログ・ファイルの場合、SiteScope が tmp/logs/arcv.log.Tue を検出しようとし、Linux では大文字と小文字が区別されるため、ログ・ファイル・エラーが表示されます。

この問題を解決するには、パス表現を次のように定義します。

```
s/\tmp/logs/arcv.log.$L$weekdayName$$E/
```

モニタ \$L から \$E の間にある文字を小文字 /tmp/logs/arcv.log.tue に変換します。

反対に、SiteScope でマーカ間の文字を大文字に変更できるようにするには、\$U と \$E を使用します。たとえば、次のパス表現を定義するとします。

```
s/\tmp\logs\arcv.log.$L$weekdayName$$E/
```

モニタは、パスを /tmp/logs/arcv.log.TUE に変換します。

パス表現では、\$L と \$U を複数回使用できます。また同じ表現で両方を使用できます。

例:

```
s/\tmp\logs-$L$weekdayName$$E\arcv.log.$U$weekdayName$$E/
```

上記はパスを /tmp/logs-tue/arcv.log.TUE に変換します。

```
s/\tmp.$L$monthName$$E\logs-$L$weekdayName$$E\arcv.log.$U$weekdayName$$E/
```

上記はパスを /tmp.mar/logs-tue/arcv.log.TUE に変換します。

### カンマで区切られた値の照合

カンマで区切られた数値と文字列のログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
new,open,changed,12,alerts  
new,open,changed,13,alerts  
new,open,changed,13,alerts  
new,open,changed,14,alerts
```

カンマで区切られた数値と文字列のログ・ファイル・エントリに一致する正規表現を次に示します。

```
/([\w\d]+,[\w\d]+,[\w\d]+,[\w\d]+,[\w\d]+)[\n\r]?/
```

**注:** このファイル・エントリにアンダースコアやコロンなどの句読点が含まれる場合、[\w\d] クラス・パターンにその文字を明示的に追加してください。たとえば、コロンを含めるには、[\w\d] パターンのそれぞれを [\w\d:] に変更します。

### 空白で区切られた値の照合

空白で区切られた文字列と数値のログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
requests 12 succeeded 12 failed  
requests 12 succeeded 12 failed  
requests 11 succeeded 11 failed  
requests 12 succeeded 12 failed  
requests 10 succeeded 10 failed
```

空白で区切られた文字列と数値のログ・ファイル・エントリに一致する正規表現の例を次に示します。

```
/([\w\d]+\s+[\w\d]+\s+[\w\d]+\s+[\w\d]+\s+[\w\d]+)[\n\r]?/
```

**注:** + 文字を使用すると、照合パターンで 1 行に指定した数のシーケンス含めることができます。この例では、ログ・ファイル内で 5 つの単語または数値が含まれる行に一致します。このシーケンスにアンダースコアやコロンなどの句読点が含まれる場合、`[\w\d]` クラス・パターンにその文字を明示的に追加してください。たとえば、コロンを含めるには、`[\w\d]` パターンのそれぞれを `[\w\d:]` に変更します。

テキストまたは数値の行の数値の照合と保持

カンマで区切られた数字と文字が混在する文字列のログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
request handle number 12.56, series 17.5, sequence reported 97.45, 15.95 and 19.51
request handle number 15.96, series 27.5, sequence reported 107.45, 25.95 and 19.52
request handle number 11.06, series 36.5, system codes 9.45, 35.95 and 19.53
log reference number 12.30, series 17.5, channel reset values 100.45, 45.95 and 19.54
```

カンマで区切られた数字と文字が混在する文字列のログ・ファイル・エントリに一致し 10 進数のデータを保持する正規表現の例を次に示します。

```
/[,\w\s]+(\d+\.?\d+)[,\w\s]+(\d+\.?\d+)[,\w\s]+(\d+\.?\d+)[,\w\s]+
(\d+\.?\d+)[,\w\s]+(\d+\.?\d+)[\n\r]?/
```

**注:** このファイル・エントリにアンダースコアやコロンなどの句読点が含まれる場合、`[\w\s]` クラス・パターンにその文字を明示的に追加してください。たとえば、テキスト・シーケンスに現れるコロンを含めるには、`[\w\s]` パターンのそれぞれを `[:,\w\s]` に変更します。

整数と浮動小数点数（正または負）の照合

一連の正または負の整数と浮動小数点数によるログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
12.1987 -71 -199.1 145 -1.00716
13.2987 -72 -199.2 245 -1.00726
14.3987 -73 -199.3 345 -1.00736
15.4987 -74 -199.4 445 -1.00746
```

5 つの正または負の整数と浮動小数点数によるログ・ファイル・エントリに一致する正規表現の例を次に示します。各エントリの数値は 1 つまたは複数の空白で区切られている必要があります。

```
/(-?\d+\.?\d{0,})[\s]+(-?\d+\.?\d{0,})[\s]+(-?\d+\.?\d{0,})[\s]+
(-?\d+\.?\d{0,})[\s]+(-?\d+\.?\d{0,})[\n\r]?/
```

日付と時刻を含むログ・エントリの照合

多くのログ・ファイルには一定の形式の日付と時刻が各エントリに含まれます。カンマで区切られた文字列に加えて日付と時刻の情報を含むログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
20/04/2003 14:29:22,ERROR,request failed
20/04/2003 14:31:09,INFO,system check complete
20/04/2003 14:35:46,INFO,new record created
```

カンマで区切られた文字列の前に日付と時刻の情報を含むログ・ファイル・エントリに一致する正規表現の例を次に示します。次の例では、SiteScope が稼動しているサーバのシステム・クロックによって示された同じ年月日に作成されたエントリのみ的一致するために SiteScope の日付変数を使用しています。

```
/$0day$\/$0month$\/$year$\s+\d+:\d+:\d+,[\w\d]+,[\w\d]+/
```

次の例では、SiteScope が稼動しているサーバのシステム・クロックによって示された同じ年月日および同じ時間内に作成された、より限定されたエントリのみ的一致するために SiteScope の日付変数を使用しています。

```
/$0day$\/$0month$\/$year$\s+$0hour$:\d+:\d+,[\w\d]+,[\w\d]+/
```

## 正規表現の使用時に発生する問題

本項では、正規表現の使用時に発生する問題について説明します。

本項の内容

- ・「\* 構成子を使用すると、内容の任意のページに膨大な一致結果が表示される」(201ページ)
- ・「テキストの照合は、JavaScript などのクライアント側スクリプトを含む URL の（スクリプトからのブラウザの出力ではなく）スクリプトのコード行に対して行われる」(202ページ)
- ・「要求した最小一致が満たされるとすぐに正規表現の照合が成功する」(202ページ)
- ・「英数字以外の内容を考慮するのを忘れる」(202ページ)
- ・「過剰なメタ文字の使用は問題となる可能性がある」(202ページ)
- ・「正規表現構文の例」(203ページ)

\* 構成子を使用すると、内容の任意のページに膨大な一致結果が表示される

\* 構成子を使用することで、SiteScope で使用される正規表現照合エンジンが SiteScope サーバで利用可能なすべての CPU サイクルを占有してしまうことがわかっています。この問題が発生すると、SiteScope は機能しなくなります。そのため、原因となっている正規表現を使用するモニタが実行されるたびに再起動する必要が生じ、この表現が修正されるまでこの状況が続きます。

**注:** 正規表現の照合は、SiteScope モニタの要求に応じて返されるテキストの内容全体に対して実行されます。これには、ブラウザ・ウィンドウには通常表示されない（たとえば【表示】>【ソース】オプションでは表示されない）HTTP ヘッダが含まれます。つまり、ブラウザ・ビューに表示されないほかの情報を考慮する必要があることを意味します。これには、インター

ネット検索エンジンおよびクライアント側スクリプトで使用される META タグのテキストが含まれます。

テキストの照合は、JavaScript などのクライアント側スクリプトを含む URL の（スクリプトからのブラウザの出力ではなく）スクリプトのコード行に対して行われる

つまり、スクリプトによって計算された値で Web ページ上のテキストが動的に書き込まれるか置換されると、この内容を正規表現で照合できない可能性があります。スクリプトによってテキストの変更のみが実行されると、スクリプト・コードに表示される、対応するテキスト文字列と照合できる可能性があります。さらに問題なのは、ブラウザで特定の条件が満たされるかどうかを確認しようとすると、ユーザのアクションに関係なく、一致するテキスト文字列がスクリプトの内容に表示されるということです。

要求した最小一致が満たされるとすぐに正規表現の照合が成功する

1つの一致があると、それ以降の照合は行われません。そのため、正規表現は繰り返されるテキスト・パターンの出現数を数えるのには適していません。たとえば、項目のカatalog・リストが含まれる Web ページを確認するとします。各項目の横には Buy Now! というリンクがあり、少なくとも5つの項目が表示されることを確認する場合、/Buy Now!/ という正規表現では、最初の Buy Now! にしか一致しません。同様に、正規表現でメイン・ブラウザ画面上の catalog という単語を検索する場合、HTML ヘッダ・セクションの META タグとしてその単語が表示されていたり、照合しようとした項目の前に、サイト・ナビゲーション・メニューにあるハイパーリンクとして内容に表示されていたりすると、照合が成功してしまいます。

英数字以外の内容を考慮するのを忘れる

正規表現は、存在する文字および存在する可能性のある文字すべてを考慮して記述する必要があります。これには、空白文字、行送り、および復帰改行が含まれます。通常、1つの単語をリテラル照合する場合にはこれは問題になりません。不明な数の空白文字やその他の英数字以外の文字で区切られ、かつ複数行にわたる可能性のある複数の単語との照合を作成する必要があるときは、難しい場合があります。[s\n\r]+ 文字クラスは、表現内で使用される単語と単語の間に使用すると便利な場合があります。一見単純そうな照合の失敗につながる可能性がある、パターンやピリオド、カンマ、ハイフンなどの特殊文字が、照合しようとしている内容の形式に含まれていないかを必ず確認してください。

過剰なメタ文字の使用は問題となる可能性がある

場合によっては、. または \W メタ文字に過度な量の数量詞を組み合わせると、リテラル文字列と照合しようとした内容が正規表現のほかの部分で取得され、照合が失敗する可能性があります。たとえば、ハイパーリンク・アンカー参照の URL 内容を照合する場合は、/a href="([\W\w\s]\*)"/ を使用できます。ただし、モニタでこの正規表現のチェックを行うと、最初に一致したパターン /a href="... が取得され、続いてそのページ上の最後の引用符までの複数行のテキストが一致します。ほかの一意の終了区切り文字を使用しないと、[\W\w\s]\* クラスと数量詞の組み合わせは過剰になります。期待される文字のクラスを絞り込むには、/a href="?(?:[^\W\w\s\d\.]\*)"/ という構文がより適切です。

正規表現構文の例

正規表現で使用する構文の例を次に示します。

表現の例	詳細
<code>/CUSTID\s?=\s? ([A-Z0-9]{20,48})/</code>	この例では、20 文字以上の数字と大文字（スペースと非英数字は使用しない）で構成される ID 文字列を照合します。 <code>\s?</code> 構成子により、等号記号のどちら側でも空白文字を使用できます。文字クラスを括弧で囲むと、SiteScope では、内容の照合値としてこの値（最大 48 文字）が保持され、一致した値がモニタの詳細状態列に表示されます。
<code>/a href="? ([:\w\s\d\.]*)"?/i</code>	この例では、HTML ハイパーリンク内の URL 文字列を照合します。 <code>"?</code> 構成子により、URL 文字列のいずれの端の引用符も任意となります。括弧を使用すると、SiteScope では、この値が内容の照合値として保持され、値はモニタの状態に表示されます。 <code>i</code> 修飾子は、検索時に大文字と小文字を同等に扱うことを示します。
<code>/"[^"]*" /</code>	この例では、引用符で囲まれたテキスト・シーケンスを照合します。否定のキャレット（ <code>^</code> ）を使用して、引用符以外のすべての文字の文字クラスを定義します。

プログラミング言語やスクリプト言語と同様に、ほとんどの場合、特定の照合を達成するための正規表現の構成には、複数の方法があります。正規表現の正しい作成方法は 1 つだけではありません。必要な結果が得られるまで、必要に応じて正規表現のテストと変更を行ってください。

## 第3部: 統合

SiteScope は、広範な HP ソフトウェアおよびサードパーティ製製品と統合できます。統合可能な製品として、HP Business Service Management (BSM) , HP Operations Manager (HPOM) , HP Network Node Manager i (NNMi) , HP LoadRunner, HP Performance Center, HP Operations Orchestration (OO) , HP Application Lifecycle Management (ALM) , HP Diagnostics, HP Continuous Delivery Automation (CDA) , Amazon CloudWatch などがあります。

SiteScope 統合の詳細については、[「統合の概要」\(205ページ\)](#)を参照してください。

利用可能なさまざまな統合、各統合によって得られるもの、およびそれらの統合がどのように機能するかについては、[「他のアプリケーションとの統合」\(208ページ\)](#)を参照してください。

このリリースでサポートされる HP ソフトウェアのバージョンについては、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「SiteScope サポート・メトリクス」の項を参照してください。



## 第18章: 統合の概要

SiteScope は、次のアプリケーションと統合することができます。

### HP Business Service Management

SiteScope は、HP Business Service Management (BSM) のデータ・コレクタとして使用できます。BSM は、エンドユーザ、ビジネス・プロセスおよびシステムに関するデータを受信し、そのデータをレポートや分析で使います。すべてのモニタまたは選択したモニタのみについて、BSM に送信する SiteScope 監視データを設定できます。詳細については、「[BSM サーバとの接続](#)」(216ページ)を参照してください。

### HP Operations Manager

SiteScope は HP Operations Manager 製品と連携できるため、エージェントレスとエージェント・ベースのインフラストラクチャ管理を組み合わせることが可能です。

- **イベント統合** SiteScope は HP Operations Agent を使用してイベント・データを Operations Manager (HPOM) または BSM の 操作管理 に転送します。このため、IT 運用の状況に関してより包括的で詳細な全容を把握できます。
- **メトリクス統合:**
  - Performance Manager (HPOM のレポート・コンポーネント) で使用するメトリクスを報告するため、SiteScope は、HP Operations エージェントを使用して、SiteScope で収集されたメトリクス・データのデータ・ストレージとして機能します。
  - BSM の 操作管理 のパフォーマンス・グラフ作成で使用するためのメトリクスを報告するために、SiteScope は BSM のプロファイル・データベース (推奨されるオプション) または HP Operations Agent のいずれかを使用します。

詳細については、SiteScope ヘルプの『HP Operations Manager 製品との統合』を参照してください。[HP Software Integrations](#) で、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます。

(Windows の場合 : <http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>;

UNIX の場合 : <http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>) 。

**ヒント:** SiteScope と BSM および HPOM 製品との統合を使用と設定に関するベスト・プラクティスとトラブルシューティングについては、「[BSM と Operations Manager アプリケーションとの統合](#)」を参照してください。

### HP Network Node Manager i (NNMi)

SiteScope は HP Network Node Manager i (NNMi) (ネットワーク監視に使用するイベント・コンソール) のデータ・コレクタとして使用できます。SiteScope は NNMi が監視しているシステムのアプリケーション側を監視し、SNMP トラップを使用して SiteScope モニタから NNMi にイベント・データを転送します。SiteScope はメトリクス・データを NNMi にレポートすることもできます。詳細に

については、SiteScope ヘルプの「NNMi との統合」を参照してください。 [HP Software Integrations](#) では、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます  
(<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=483>)。

#### HP LoadRunner/HP Performance Center

SiteScope を HP LoadRunner または HP Performance Center のインストールで使用して、ユーザが LoadRunner または Performance Center アプリケーションで SiteScope を定義して使用できるようにすることができます。SiteScope は、ネイティブ LoadRunner および Performance Center のモニタを補足する追加のモニタを提供します。SiteScope を LoadRunner または Performance Center と統合するには、HP SiteScope for Load Testing セットアップ・タイプがインストールされている必要があります。詳細については、「[HP の負荷テスト製品との統合](#)」(247ページ)を参照してください。

#### HP Operations Orchestration (OO)

HP Operations Orchestration (OO) SiteScope 統合によって、OO 管理者は SiteScope の特定のイベントまたは警告を OO フローの実行に関連付けることができます。管理者は、OO Studio で SiteScope 操作 (SiteScope API 呼び出しを使用) を使用して OO フローを構築します。たとえば、OO の管理者は、新規サーバが追加されたときに自動的に SiteScope にモニタを生成するフローを作成し、サーバが廃止されたときにモニタを削除できます。詳細については、OO ドキュメント・セットの『HP Operations Orchestration SiteScope Integration Guide』を参照してください。

#### HP Application Lifecycle Management (ALM) (ALM)

SiteScope は HP Application Lifecycle Management (ALM) と統合して、実運用環境から監視データとテンプレートを共有し、負荷テストのエンジニアによるパフォーマンス・テストやアプリケーションのデプロイメントの計画を可能にします。詳細については、BSM ヘルプの BSM アプリケーション管理ガイドの「Application Lifecycle Management 統合」ページを参照してください。

#### HP Diagnostics

HP Diagnostics では SiteScope を使用してアプリケーション・サーバを監視します。SiteScope がこれらのアプリケーション・サーバに関するデータを Diagnostics に転送し、アプリケーション・サーバのデプロイ先であるインフラストラクチャ・コンポーネントに関する洞察を得ることができます。Diagnostics ではデータをレポートやグラフで表示します。詳細については、SiteScope ヘルプの「Integrating SiteScope with HP Diagnostics」を参照してください。 [HP Software Integrations](#) では、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます  
(<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=665>)。

#### Amazon CloudWatch

SiteScope は SiteScope モニタ測定データを Amazon CloudWatch サービスに報告するのに使用できます。この統合を行うと、AWS がホストするアプリケーションの監視用に SiteScope を使用しているユーザは、SiteScope 測定値を Amazon CloudWatch サービスに報告できます。SiteScope 測定値データは、AWS の AutoScaling、報告、警告に使用できます。詳細については、「[Amazon CloudWatch 統合プリファレンス](#)」(669ページ)を参照してください。

## 汎用データ統合

SiteScope を使用して、XML ファイルを受信可能な他のアプリケーションにデータを転送できます。これらのファイルには、SiteScope のグループ、モニタ、測定値のステータスに関する情報が含まれています。詳細については、[「一般データ統合プリファレンス」](#) (694ページ)を参照してください。

## 汎用イベント統合

SiteScope を使用して、サードパーティ製のアプリケーションまたは管理コンソールにイベントを転送できます。送信されたイベントには、イベントをトリガした状態の変更など、モニタとその測定値に関する情報が含まれています。詳細については、[「一般イベント統合プリファレンス設定」](#) (699ページ)を参照してください。

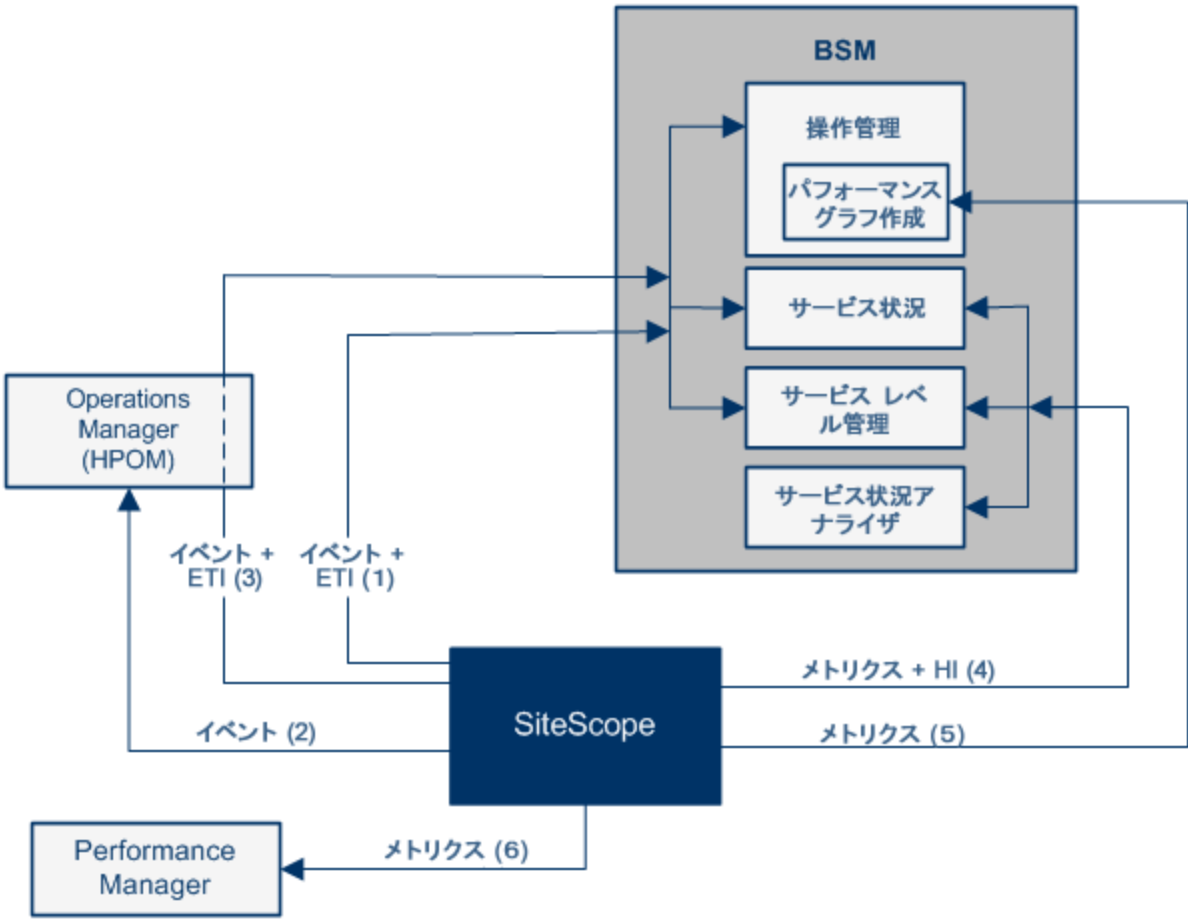
利用可能なさまざまな統合、各統合によって得られるもの、およびそれらの統合がどのように機能するかについては、[「他のアプリケーションとの統合」](#) (208ページ)を参照してください。

# 第19章: 他のアプリケーションとの統合

次の項に示すように、SiteScope をさまざまな異なるアプリケーションと統合できます。

- 「『BSM と Operations Manager 製品との統合』」 (208ページ)
- 「『他の HP 製品との統合』」 (213ページ)

## 「BSM と Operations Manager 製品との統合」



統合	統合の結果	統合の仕組み	詳細情報
(1) SiteScope イベント→ BSM イベントおよび状	イベント管理ファウン デーション・ライセンス を保有している場合は、 SiteScope メトリックの	SiteScope が BSM の 操作管 理 のデータ・コレクタと して設定されていると、 HP Operations Agent テクノ	<ul style="list-style-type: none"><li>• SiteScope ヘルプにある『BSM と HPOM との統合についてのベ スト・プラクティス』ガイド</li><li>• SiteScope ヘルプにある「HP</li></ul>

統合	統合の結果	統合の仕組み	詳細情報
状況インジケータ。	<p>ステータスの変更に対応するイベントおよび警告が、操作管理のイベント・ブラウザに表示されます。</p> <p>SiteScope イベントに対応するイベント・タイプ・インジケータ (ETI) が存在する場合は、(イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有しているかどうかに関係なく) サービス状況 や サービス・レベル管理 などの BSM アプリケーションにある関連 CI のステータスに、状況インジケータが影響を及ぼします。</p>	<p>ロジを使用して、SiteScope メトリックのステータスの変更に関するデータと警告が SiteScope から 操作管理 に送信されます。</p>	<p>Operations Manager 製品との統合」 (「エンドツーエンド・フロー」)</p> <p><b>注:</b> <a href="#">HP ソフトウェア統合</a> サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます (Windows の場合 : <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39</a>; UNIX の場合 : <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628</a>)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>操作管理 (OMi) ライセンス構造の詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「ライセンス」を参照してください。</li> </ul>
(2) SiteScope イベント→ HPOM イベント。	<p>SiteScope メトリックのステータスの変更によって生成されたイベントおよび警告は、HPOM に表示されます。</p>	<p>イベントを HPOM にレポートするように SiteScope が設定されていると、HP Operations Agent テクノロジを使用して、SiteScope メトリックのステータスの変更に関するデータと警告が SiteScope から HPOM に送信されます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope ヘルプにある『BSM と HPOM との統合についてのベスト・プラクティス』ガイド</li> <li>SiteScope ヘルプにある「HP Operations Manager 製品との統合」 (「エンドツーエンド・フロー」)</li> </ul> <p><b>注:</b> <a href="#">HP ソフトウェア統合</a> サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます (Windows の場合 : <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39</a>; UNIX の場合 : <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628</a>)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>操作管理 (OMi) ライセンス構造の詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「ライセンス」を参照してください。</li> </ul>
(3) SiteScope イベント→ HPOM イベント。	<p>イベント管理ファウンデーション・ライセンス</p>	<p>イベントを HPOM にレポートするように SiteScope が</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope ヘルプにある『BSM と HPOM との統合についてのベスト・プラクティス』ガイド</li> </ul>

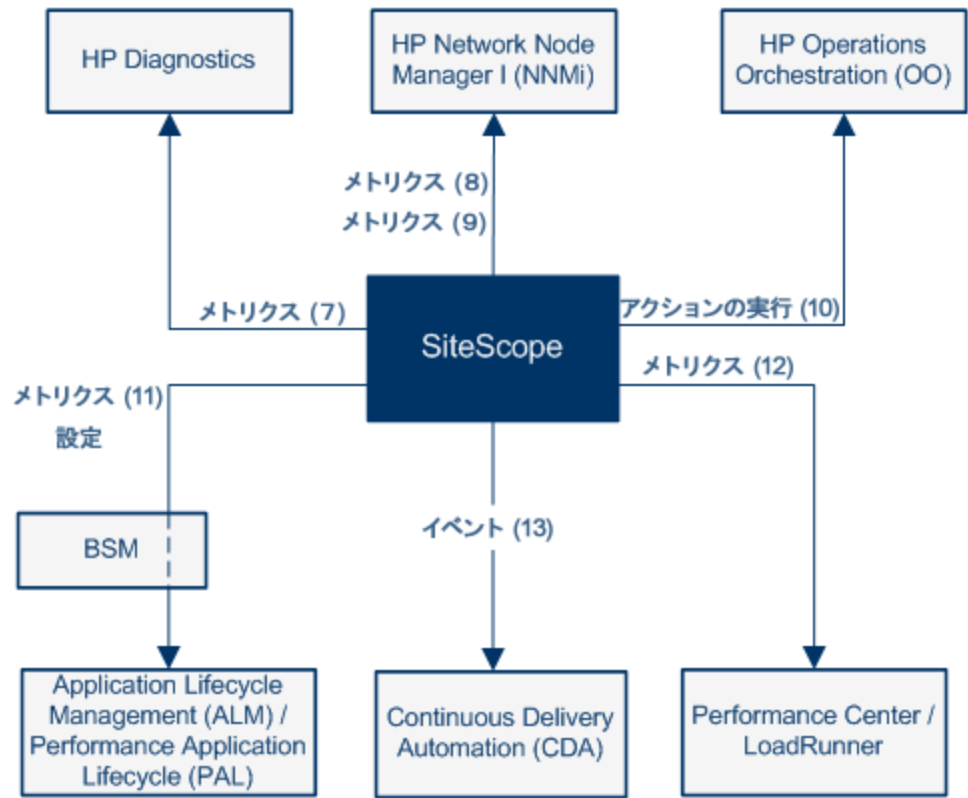
統合	統合の結果	統合の仕組み	詳細情報
ベント→ HPOM を使 用した BSM イベントお よび状況イン ジケー タ。	<p>を保有している場合は、SiteScope メトリックのステータスの変更によって生成されたイベントおよび警告が、HPOM を使用して、操作管理 に送信されます。</p> <p>SiteScope イベントに対応するイベント・タイプ・インジケータ (ETI) が存在する場合は、(イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有しているかどうかに関係なく) サービス状況 や サービス・レベル管理 などの BSM アプリケーションにある関連 CI のステータスに、状況インジケータが影響を及ぼします。</p>	<p>設定されていると、HP Operations Agent テクノロジを使用して、SiteScope メトリックのステータスの変更に関するデータと警告が SiteScope から HPOM に送信されます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope ヘルプにある「HP Operations Manager 製品との統合」(「エンドツーエンド・フロー」)</li> <li>注: HP ソフトウェア統合サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます (Windows の場合 : <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39</a>; UNIX の場合 : <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628</a>)</li> <li>操作管理 (OMi) ライセンス構造の詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「ライセンス」を参照してください。</li> </ul>
(4) SiteScope メ トリック→ BSM メト リックおよ び状況イン ジケータ。	<p>SiteScope メトリックに状況インジケータが割り当てられている場合は、サービス状況、サービス・レベル管理 および Service Health Analyzer などの BSM アプリケーションにある関連 CI のステータスに、これらの状況インジケータが影響を及ぼします。</p> <p>SiteScope メトリックに状況インジケータが割り当てられている場合は、サービス状況 および サービス・レベル管理 などの BSM アプリケーションにある関連 CI のステータスに、これらの状況インジケータが影響を及ぼします。SiteScope メトリックは、Service Health Analyzer でも使用されます。</p>	<p>メトリックは HTTP/HTTPS 経由で SiteScope から BSM に送信されます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope ヘルプにある『BSM と HPOM との統合についてのベスト・プラクティス』ガイド</li> <li>「BSM と通信するための SiteScope の設定方法」(228ページ)</li> </ul>

統合	統合の結果	統合の仕組み	詳細情報
<b>(5)</b> <b>SiteScope メトリック→パフォーマンス・グラフ作成 (BSM)。</b>	<p>SiteScope でメトリック・データが収集され、データ・ソースに記録されます。データ・ソースは、有効になっている統合によって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>BSM 統合のみが有効になっている場合は、プロファイル・データベースにデータが記録されます。</li> <li>BSM と HP Operations Manager の両方のメトリック統合が有効になっている場合は、SiteScope ホストにインストールされた HP Operations Agent データ・ストアにデータが記録されます。</li> </ul> <p>操作管理 のパフォーマンス・グラフ作成でユーザがグラフを作成または設計する場合、SiteScope の監視対象の選択済み CI のデータ・ソースから、メトリック・データがパフォーマンス・グラフ作成によって収集され、グラフが作成されます。</p>	<p>使用されるデータ・ソース:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>プロファイル・データベース :SiteScope はメトリクス・データを BSM のプロファイル・データベースにレポートします。このデータ・ソースを使用するには、SiteScope が BSM サーバに接続され、BSM へのモニタ・メトリックのレポートが有効化されている必要があります。</li> <li>HP Operations Agent :SiteScope では、メトリック・データをパフォーマンス・グラフ作成で使用可能にするため HP Operations Agent が使用されます。SiteScope でメトリックをレポートできるようにするには、SiteScope サーバに Agent がインストールされ、レポートするインスタンスごとにメトリックのレポートが有効化されている必要があります。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope ヘルプにある『BSM と HPOM との統合についてのベスト・プラクティス』ガイド</li> <li>SiteScope ヘルプにある「HP Operations Manager 製品との統合」(「エンドツーエンド・フロー」)</li> </ul> <p><b>注:</b> <a href="#">HP ソフトウェア統合</a> サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます (Windows の場合 :  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39</a>;  UNIX の場合 :  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628</a>)</p>
<b>(6)</b> <b>SiteScope メトリック→Performance Manager グラフ (HPOM)。</b>	<p>SiteScope でメトリック・データが収集され、SiteScope ホストにインストールされている Operations Agent のデータ・ストアに記録されます。</p> <p>Performance Manager のユーザがグラフを描くか設計する場合、SiteScope の監視対象の Performance Manager で選択したノードに対応する Operations Agent データ</p>	<p>SiteScope では、メトリック・データを Operations Manager (Performance Manager) で使用可能にするため HP Operations Agent が使用されます。SiteScope でメトリックをレポートできるようにするには、HP Operations Agent が SiteScope サーバにインストールされている必要があります。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope ヘルプにある『BSM と HPOM との統合についてのベスト・プラクティス』ガイド</li> <li>SiteScope ヘルプにある「HP Operations Manager 製品との統合」(「エンドツーエンド・フロー」)</li> </ul> <p><b>注:</b> <a href="#">HP ソフトウェア統合</a> サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます (Windows の場合 :  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39</a>;  UNIX の場合 :</p>

統合	統合の結果	統合の仕組み	詳細情報
	タ・ストアから、メトリックス・データが Performance Manager に よって収集され、グラフが描かれます。		<a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628</a> )



「他の HP 製品との統合」



統合	統合の結果	統合の仕組み	詳細情報
<b>(7) SiteScope メトリック→ HP Diagnostics データ。</b>	SiteScope でメトリックが HP Diagnostics に転送され、Diagnostics が監視するアプリケーション・サーバのパフォーマンスに関するより包括的な情報が表示されます。このメトリックから、アプリケーション・サーバのデプロイ先であるインフラストラクチャ・コンポーネントに関する洞察を得ることができます。	Diagnostics 統合ブリファレンスを使用して、SiteScope でメトリックが HP Diagnostics に転送されます。	SiteScope ヘルプにある「Integrating SiteScope with HP Diagnostics」（エンドツーエンド・フロー）  <b>注：</b> HP ソフトウェア統合サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます（ <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=665">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=665</a> ）

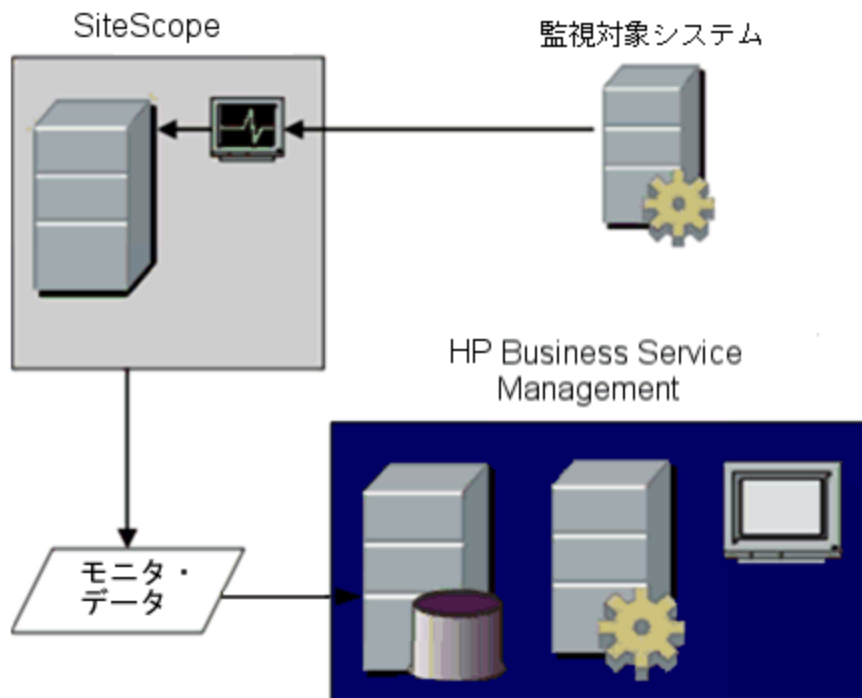
統合	統合の結果	統合の仕組み	詳細情報
<b>(8) SiteScope イベント→NNMi。</b>	SiteScope - NNMi イベント統合では、SiteScope でイベント（警告によって生成されたイベント）を SiteScope モニタから転送でき、イベント・データが NNMi インシデント・コンソールに表示されます(SiteScope 11.10 および NNMi 9.10 以降が必要です)。	SNMP トラップは SiteScope から NNMi に送信されます。SNMP トラップは、NNMi インシデントに変換されます。変換されたインシデントから、NNMi コンソール・ユーザは（NNMi サーバに送信された SNMP トラップの URL を使用して）そのモニタのコンテキストで SiteScope を起動できます。	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope ヘルプにある「NNMi との統合」（エンドツーエンド・フロー）  <b>注:</b> HP ソフトウェア統合サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます  (<a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=483">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=483</a>)</li> <li>YouTube で SiteScope と NNMi の統合に関するガイドとナレーション付きの説明を見ることができます。  <a href="https://www.youtube.com/watch?v=21VSL3_I7oM">https://www.youtube.com/watch?v=21VSL3_I7oM</a></li> </ul>
<b>(9) SiteScope メトリック→NNMi。</b>	SiteScope - NNMi メトリック統合により、SiteScope でメトリック・データ（メトリックのステータスの変更および警告）を SiteScope モニタから NNMi に転送できます。(SiteScope 11.10 および NNMi 9.10 以降が必要です)。	HP NNMi - HP SiteScope システム・メトリック統合では、汎用データ統合を使用して SiteScope モニタで収集されたシステム・メトリック・データを使用して、NNM iSPI Performance for Metrics の Network Performance Server (NPS) を設定します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope ヘルプにある「NNMi との統合」（エンドツーエンド・フロー）  <b>注:</b> HP ソフトウェア統合サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます  (<a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=483">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=483</a>)</li> <li>YouTube で SiteScope と NNMi の統合に関するガイドとナレーション付きの説明を見ることができます。  <a href="https://www.youtube.com/watch?v=21VSL3_I7oM">https://www.youtube.com/watch?v=21VSL3_I7oM</a></li> </ul>
<b>(10) Operations Orchestration (OO) での SiteScope 関連アクションの実行。</b>	HP Operations Orchestration (OO) と SiteScope の統合では、HP SiteScope に統合された OO フローを管理者が構築できます。	管理者は、OO Studio で SiteScope 操作（SiteScope API 呼び出しを使用）を使用して OO フローを構築します。たとえば、新規サーバが追加されたときに自動的に SiteScope にモニタを生成するフローを作成し、サーバが廃止されたときにモニタを削除できます。	OO ドキュメントの『HP Operations Orchestration - SiteScope Integration Guide』
<b>(11) SiteScope メトリックおよび設定→ALM/PAL。</b>	SiteScope はアプリケーション・ライフサイクル管理（ALM : Application	SiteScope 関連データ（メトリック、テンプレート、トポロジ）を BSM から ALM（およ	<ul style="list-style-type: none"> <li>「HP Application Lifecycle Management との統合」(250ページ)</li> <li>BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「Application Lifecycle</li> </ul>

統合	統合の結果	統合の仕組み	詳細情報
	Lifecycle Management) / パフォーマンス・アプリケーション・ライフサイクル (PAL : Performance Application Lifecycle) と統合し、実運用環境の監視データとテンプレートを共有することで、負荷テストを行うエンジニアがパフォーマンス・テストとアプリケーションのデプロイメントを計画できます。	びその逆) にエクスポートできます。データを ALM にエクスポートすることによってスクリプトや実稼働環境に似た負荷テストを計画することが可能になります。また、データを ALM からインポートすることでスクリプトやすでにテスト済みの SiteScope 設定を使用できます。この操作は、BSM の [Application Lifecycle Management Integration] ページから実行します。	Management 統合」 ページ
(12) SiteScope メトリック→ LoadRunner / Performance Center。	SiteScope によって収集されたパフォーマンス・メトリックは、HP LoadRunner, HP Performance Center などの負荷テスト解析製品やソリューションで利用できます。	SiteScope を LoadRunner または Performance Center と統合するには、HP SiteScope for Load Testing セットアップがインストールされている必要があります。統合は、それぞれの負荷テスト製品で設定する必要があります。	<ul style="list-style-type: none"> <li>「HP の負荷テスト製品との統合」 (247 ページ)</li> <li>『HP LoadRunner Controller ユーザーズ・ガイド』 (HP ソフトウェア統合サイト (<a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=599">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=599</a>) から利用可能)</li> <li>『HP Performance Center Administrator Guide』 (HP ソフトウェア統合サイト (<a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=587">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=587</a>) から利用可能)</li> </ul>
(13) SiteScope イベント→ CDA (Continuous Delivery Automation)。	HP Continuous Delivery Automation (CDA) は SiteScope と統合して SiteScope モニタをデプロイし、そのモニタからイベントを受け取ります。CDA ユーザー・インタフェースでは、受け取ったイベントを基にして状態を監視できます。	SiteScope では、CDA 用に特別に設定されたアウトオブボックス・テンプレートを使用して、イベントが CDA に転送されます。テンプレートは、[ブリファレンス] > [共通イベントマッピング] から使用できます。	<ul style="list-style-type: none"> <li>「SiteScope 一般イベント統合の設定方法」 (700ページ)</li> <li>HP Continuous Delivery Automation のドキュメント</li> </ul>

## 第20章: BSM サーバとの接続

SiteScope は、Business Service Management (BSM) のデータ・コレクタとして使用できます。BSM では、エンドユーザ、ビジネス・プロセス、システムのデータを使用します。BSM に対するデータ・コレクタとして設定する場合、SiteScope モニタによって収集されるメトリックおよびトポロジ・データを BSM に渡して分析およびレポートに使用できます。監視データは、すべてのモニタの監視データ、または選択したモニタの監視データのみを送信できます。

次に、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして使用した図を示します。



**注:** BSM 統合を HP Operations Agent を使用する統合と混同しないでください。HP Operations Agent は、(BSM の Operation Management の) パフォーマンス・グラフ作成または Performance Manager (HPOM のレポート・コンポーネント) でメトリック・データを表示する際に必要です。HP Operations Agent を使用してメトリックを収集する方法の詳細については、SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」を参照してください。[HP ソフトウェア統合](http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39)サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます (Windows の場合: <http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>, UNIX の場合: <http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>)。

BSM には システム可用性管理 (SAM) ページが含まれるため、1 つ以上の SiteScope サーバの SiteScope モニタ設定を中央コンソールで管理できます。BSM 統合をアクティブにすると、SAM 管理または SiteScope スタンドアロン・ユーザ・インタフェースを通じて SiteScope を管理するかどうかに関係なく、SiteScope データが BSM にフローします。

このリリースでサポートされる BSM バージョンについては、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「SiteScope サポート・メトリクス」の項を参照してください。

**ヒント:** BSM および HPOM へのメトリック・データのレポートのベスト・プラクティスおよびトラブルシューティングについては、SiteScope ヘルプにある『BSM とHPOM との統合についてのベスト・プラクティス』ガイドの「BSM と Operations Manager アプリケーションとの統合」を参照してください。

## トラブルシューティング / 制限事項

### 本項の内容

- ・「BSM へのデータのレポート」(217ページ)
- ・「データ・フローの問題をトラブルシューティングするためのデータ削減メカニズムの無効化」(218ページ)
- ・「モニタに設定されたホスト名ではなく IP アドレスを報告」(218ページ)
- ・「その他のトラブルシューティング」(218ページ)

### BSM へのデータのレポート

- ・ SiteScope は、数値メトリック値のみ BSM に報告します。文字列値を含むメトリックは報告しません。
- ・ BSM SaaS ユーザに @ 記号などの特殊文字が含まれている場合、HP SaaS 環境に SiteScope を登録することはできません。BSM ユーザ・アカウントには、英字や数字のみを含める必要があります。
- ・ 監視のデプロイメントやネットワーク通信の複雑さによっては、SiteScope が一時的に BSM サーバと通信できなくなることがあります。SiteScope の状況の監視には、BSM サーバへの接続およびデータ転送を監視する複数のモニタが含まれています。

SiteScope が BSM サーバに接続できない場合、SiteScope は引き続き監視データ・ファイルをローカルに記録して保存します。データ・ファイル数が指定したしきい値を超えると、SiteScope は構文 <SiteScope のルート・ディレクトリ>\cache\persistent\topaz\data<インデックス>.old を使用してデータ・ファイルをキャッシュ・フォルダに保存します。また、ハートビートサンプルを bus\_<インデックス>.old ファイルに、設定サンプルを config\_<インデックス>.old ファイルに保存します。保持する data.old フォルダの数を設定するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルの \_topazMaxOldDirs プロパティを変更します。

**注:** 標準設定では、データ・ファイル数のしきい値が 1,000 ファイルに設定されています。この設定を変更するには、master.config ファイルの \_topazMaxPersistenceDirSize プロパティを変更します。

SiteScope とエージェント・サーバ間の接続が復旧したら、これらのフォルダから **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\cache\persistent\topaz\data** フォルダに手動でファイルをコピーする必要があります。

大量のアップロード・データによるシステムの過負荷を避けるため、これらのファイルはデータ・フォルダが空の場合にのみコピーすることをお勧めします。**data.old** フォルダの数が指定したしきい値（標準設定は 10 フォルダ）を超えると、最も古いフォルダが削除されます。

## データ・フローの問題をトラブルシューティングするためのデータ削減メカニズムの無効化

SiteScope は、標準設定では、SiteScope から BSM へのサンプルのロードを最大 80% 削減するデータ削減メカニズムを使用しています。このメカニズムは、モニタを実行するたびに同じサンプルを繰り返し読み込む代わりに、読み込むデータが変更されたときだけ特殊なサンプルを送信することによって実現されます。

**注:** SiteScope ハートビート・サンプル (**ss\_heartbeat**) は、SiteScope が正常に機能しており、BSM との統合が問題なく動作していることを示します。ハートビート・サンプルは、SiteScope がデータ削減モードになっているときのみ送信されます（その場合、サンプルは毎分送信されます）。

データ・フローの問題をトラブルシューティングするためにデータ削減メカニズムを無効化することもできます。それには、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config** ファイルの **\_topazEnforceUseDataReduction** プロパティを「false」に設定します。ただし、この標準設定を変更することはお勧めしません。

## モニタに設定されたホスト名ではなく IP アドレスを報告

DNS 逆引きが設定されていないか、監視されるリモート・サーバで誤動作している場合、SiteScope は、モニタに設定されているホスト名の代わりに、ホストの IP アドレスを BSM に報告します。

**回避策:** BSM に IP アドレスではなくホスト名を送信するようにモニタに強制するには、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config** ファイルの **\_disableHostDNSResolution** プロパティを「true」に設定します。

## その他のトラブルシューティング

SiteScope と BSM 間のメトリック統合、CI トポロジ・レポート、CI ダウンタイムに関する問題の追加トラブルシューティングについては、SiteScope ヘルプにある『BSM とHPOM との統合についてのベスト・プラクティス』ガイドの「SiteScope の統合の問題に対するトラブルシューティング」を参照してください。

## 接続の設定

SiteScope および BSM 間の接続を有効にするには、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定する必要があります。これには、SiteScope を BSM の [SAM 管理] ページに追加する作業も含まれます。このタスクの詳細については、「[BSM と通信するための SiteScope の設定方法](#)」(228ページ)を参照してください。

BSM へのデータの報告に関するトラブルシューティングの詳細については、「[BSM サーバとの接続](#)」(216ページ)を参照してください。

## SiteScope と BSM 間通信のためのセキュア接続の使用

セキュア接続を使用してデータを SiteScope から BSM サーバへ転送できます。ルート認証局で署名された証明書を BSM サーバにインストールしている場合、SiteScope サーバで必要な追加設定はありません。

BSM サーバに自己署名証明書があり、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、「[クライアント証明書またはセキュア接続が必要な BSM サーバに接続するための SiteScope の設定 \(企業のセキュリティのために推奨\)](#)」(229ページ)に説明されている手順を実行する必要があります。

## SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更

SiteScope のデータの報告先となるゲートウェイ・サーバを変更できます。通常、これは、コンポーネントが複数のサーバにインストールされている BSM デプロイメントでの作業にのみ適用されます (BSM ゲートウェイ・サーバがデータ処理サーバとは異なるマシン上にインストールされている分散デプロイメントの場合)。

この変更方法の詳細については、「[SiteScope のデータの送信先となるゲートウェイ・サーバの変更 - オプション](#)」(230ページ)を参照してください。

## SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合

データを BSM にレポートする SiteScope にモニタ・インスタンスを追加すると、そのモニタによって、RTSM (Run-time Service Model) に、対応する構成アイテム (CI) が作成されます。構成アイテムの詳細については、BSM ヘルプにある RTSM Administration Guide の概要の項を参照してください。

RTSM を設定する SiteScope モニタには、実際のモニタおよびモニタの作成先となるグループがあります。

- RTSM では、実際のモニタ・インスタンスはモニタ CI として表されます。モニタ CI は対応する SiteScope モニタ・インスタンスからデータを受信し、SiteScope モニタ測定値に割り当てられて



いる状況インジケータ (HI) やイベント・タイプ・インジケータ (ETI) とともにそのデータを使用して、主要なパフォーマンス・インジケータの状態を計算します。これらのインジケータには、CI の状況の詳細ビューが表示されます。インジケータの詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「Health Indicators and KPIs - Overview」を参照してください。

- RTSM では、SiteScope グループはグループ CI として表され、実行しているモニタで作成されたモニタ CI から KPI ステータスを受信します。

## モニタ・タイプおよびトポロジ・レポート

モニタのタイプおよび選択したモニタのオプションに応じて、さまざまなレベルのトポロジ・データが SiteScope から RTSM に報告されます。次の場合、SiteScope によってトポロジが転送されて CI が作成または更新されます。

- モニタのデータ取得の結果として初めて CI が SiteScope で作成されたとき（その CI が RTSM に存在しているかどうかは関係ありません）。
- CI のプロパティに変更があったとき。

これにより、モニタからの CI の更新によって RTSM が過負荷になることを防止できます。

固有のモニタを使って作業する場合、トポロジを選択しないと、統合に必要なデータを使用してトポロジが事前設定されます。

モニタのタイプは次のとおりです。

- **テクノロジー統合モニタ**: これらのモニタでは、選択および編集するモニタのトポロジ設定スクリプトに基づいてデータがレポートされます。報告されるデータは、BSM と密接に統合されています。カスタム・トポロジを作成するか、定義済みスクリプトを使用して、関連するデータを転送できます。これらのモニタの詳細や、トポロジ設定の操作方法の詳細については、「[テクノロジー統合モニタのトポロジ設定](#)」(393ページ)を参照してください。

- **サポート対象環境のモニタ**: これらのサポート対象環境では、SiteScope は、モニタの作成時またはその設定の変更時にディスカバリ・プローブのように機能します。トポロジ・レポートが有効化されると、SiteScope によってアプリケーションのトポロジが自動的に検出され、関連する CI およびモニタ CI で RTSM が設定されます。サポート対象環境の詳細およびリストについては、「[検出されたトポロジの BSM へのレポート](#)」(224ページ)を参照してください。

サポート対象環境のモニタのカスタム・トポロジを作成できます（ただし、「[測定値ごとに CI をレポートするモニタ](#)」(245ページ)の説明にあるように CI タイプがメトリックごとに存在するモニタは除きます）。トポロジの作成の詳細については、「[トポロジ・レポートの設定方法](#)」(233ページ)を参照してください。

- **標準設定でトポロジ データがレポートされないモニタ**: SiteScope にはホストまたはサーバを報告しないモニタがあるため、監視する CI タイプを事前に知ることができません。BSM へのレポート時にこれらのモニタのトポロジ・データを含めるには、CI タイプを選択して CI タイプのキー属性を定義し、モニタ・タイプに関連するメトリックスを特定のインジケータにマップする必要があります。これにより、SiteScope によって RTSM にモニタの CI が作成され、モニタの CI データが BSM に転送されます。標準設定のトポロジが定義されていないモニタのリストについては、「[初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ](#)」(245ページ)を参照してください。これらの



モニタのトポロジを作成する方法の詳細については、[「トポロジ・レポートの設定方法」\(233 ページ\)](#)を参照してください。

## モニタおよびCI間の関係の作成

SiteScope モニタ CI および RTSM の既存の CI 間の関係を作成することもできます。この関係を使用すれば、SiteScope から転送されるトポロジで CI が作成されていない場合でも、モニタは関連付けられている CI に HI ステータスを渡すことができます。

これらの関係は SiteScope または SAM 管理内で作成できます。詳細については、[「RTSM での SiteScope モニタと既存の CI 間の関係の作成 - オプション」\(231 ページ\)](#)のタスクの手順を参照してください。

## RTSM 内の CI のエイジング

RTSM では、長期間活動のない CI はデータベースから削除されます。SiteScope データから作成された CI も、このエイジング・ポリシーの影響を受けます。エイジング・ポリシーが、SiteScope が BSM に送信した CI 上で動作しないように、SiteScope が BSM に送信するデータを同期します。同期されると、これらの CI のデータが更新され、CI の活動が作成されます。

トポロジの同期間隔の設定の詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「トポロジ設定」を参照してください。エイジング・メカニズムの詳細については、BSM ヘルプにある『モデリング・ガイド』の「CI の作業」を参照してください。

### 注:

- 測定値のフィールドのマッピングを使用する EMS 統合モニタによって作成された総合的なモニタおよびグループは、同期に関係なくエイジング・プロセスの影響を受けます。
- エイジングが有効な場合、EMS 統合モニタの CI が RTSM から削除されないようにするために、SiteScope のハード同期時に EMS トポロジが再送信されます。また、プロパティ `reportEmsCIsAsPartOfAntiAging=true` を **< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config** ファイルに追加することで、エイジング対策プロセスの一環としてトポロジの再送信を有効化できます。
- RTSM から CI を削除する場合、（[統合プリファレンス] で）SiteScope の再同期またはハード同期を実行するか、SiteScope が再起動して RTSM の CI が元に戻るまで待機する必要があります。これは、SiteScope によって未変更の CI が 2 回送信されることを回避する SiteScope の CI キャッシュに起因します。詳細については、BSM 統合プリファレンスに関する項を参照してください。

## システム可用性管理のインジケータ割り当て管理

**注:** 本項は、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続するユーザのみを対象としています。

インジケータにマップされる SiteScope の測定値が、SAM 管理のインジケータ割り当てリポジトリで保存および管理されます。リポジトリには、次の利点があります。

- BSM では、測定値のマッピングを中央管理できます。これにより、大量の SiteScope およびモニタを管理しやすくなります。インジケータ割り当てリポジトリは、[システム可用性管理] の [メトリクスとインジケータ] タブから編集できます。
- モニタ・タイプごとに異なる SiteScope モニタからインジケータに測定値をマッピングできます。特定のモニタ・タイプのインジケータ割り当てを作成、編集、削除できます。
- 新しいインジケータ割り当てが追加される場合、またはインジケータ割り当てリポジトリで既存の割り当てが変更される場合、BSM に接続されるすべての SiteScope にこれらの変更が適用されます。これにより、SiteScope で作成された新しいモニタ・インスタンスのインジケータが、中央管理されている最新の割り当てに対応するようになります。現在のバージョンの SiteScope に含まれている標準設定の割り当てに戻すには、モニタ・プロパティの [HP 統合設定] > [インジケータ設定] セクションの [標準設定にセット] ボタンをクリックします。

**注:** ローカルの SiteScope サーバでのインジケータ割り当てを変更する（モニタ測定値のマッピングが変更された）場合：

- SiteScope によって更新されたマッピングがダウンロードされた場合は、これらの割り当ては中央管理されている割り当てによって上書きされません。
  - 割り当てがインジケータ割り当てリポジトリから削除された場合、ローカル割り当ては自動的に削除されません。また、SiteScope により BSM に古いインジケータの値を送信し続けます。この場合、モニタ測定値に対してほかのインジケータ割り当てを選択する必要があります。
  - インジケータがインジケータ・リポジトリから削除された場合、そのマッピングを使用するモニタ・メトリックに対して別のインジケータ割り当てを選択する必要があります。
- 以前の SiteScope の測定値をインジケータにマッピングすることで、以前のバージョンの SiteScope との互換性が確保されます。
  - SiteScope でハード同期が実行されると、すべてのインジケータのマッピングが BSM からダウンロードされます。

中央管理されているインジケータの割り当てを SAM 管理で編集する方法の詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「インジケータ割り当ての設定」を参照してください。

## SiteScope 測定値のインジケータへの割り当て

**注:** 本項は、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続するユーザのみを対象としています。

モニタ・インスタンスの設定時に、測定値をインジケータにマッピングすることもできます。SiteScope モニタの測定値は、次のようなモニタ・タイプに基づいてインジケータにマッピングされます。

- サポート対象環境のモニタおよび定義済みトポロジがあるモニタの場合、標準設定で測定値にインジケータが割り当てられています。これらのモニタの詳細については、[「モニタ・タイプおよ](#)

[びトポロジ・レポート](#) (220ページ)を参照してください。標準設定のインジケータ割り当てについては、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「インジケータ・マッピングの整合」を参照してください。

- 定義済みトポロジがない SiteScope モニタの場合、さまざまな CI タイプにリンクする可能性があります。1つのマッピングを設定できないため、標準設定のインジケータのマッピングはありません。これらのモニタでは、モニタにリンクする CI タイプの適切なインジケータに測定値をマッピングできます。定義済みトポロジがないモニタのリストについては、[「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」](#) (245ページ)を参照してください。

SiteScope で標準設定の測定値のマッピングを変更できます。インジケータのマッピングがローカルの SiteScope で変更されている場合、SiteScope によって BSM から最新のマッピングがダウンロードされても、これらのマッピングは中央管理されているリポジトリのマッピングで上書きされません。これにより、次のことが可能になります。

- モニタ・インスタンスのインジケータまたはモニタの一部の測定値の上書き。
- テンプレートの標準設定でないインジケータを設定する。カスタム・トポロジの CI タイプおよび測定値のマッピングは、テンプレートの変数では設定できません（これらは、テンプレートで事前に定義しておく必要があります）。
- 警告用のインジケータの設定:トリガされた警告の CI タイプは、グループの警告やメトリックごとに CI タイプをレポートするモニタ（[「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」](#) (245ページ)を参照）の警告の設定時に毎回わかっているわけではないので、警告のインジケータおよびインジケータ状態を手動で入力できます。詳細については、[「HP Operations Manager 統合設定」](#) (1260ページ)を参照してください。

インジケータへの SiteScope 測定値のマッピングの詳細については、[「インジケータのモニタへのマッピング」](#) (234ページ)を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「インジケータ設定」](#) (310ページ)を参照してください。

### 状況インジケータが作成されるタイミング

- SiteScope のイベントは、SiteScope のモニタ測定値の状態の変更とトリガされた警告に基づきます。最初のイベントが CI に到着後イベントが作成されます。詳細については、『HP Operations Manager 製品との統合』を参照してください。[HP ソフトウェア統合](#)サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます（Windows の場合：  
<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>, UNIX の場合：  
<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>）。
- メトリックスは、モニタのトポロジが RTSM にレポートされる時点で作成されます。詳細については、[「検出されたトポロジの BSM へのレポート」](#) (224ページ)を参照してください。

### ディスカバリ・スクリプトとパッケージ・マネージャ

**注:** 本項は、Business Availability Center / BSM 8.00 以降を統合するユーザを対象としています。トポロジ・データを前のバージョンの BSM と統合する場合、SiteScope では、SiteScope サーバに保存されている従来のスクリプトが使用されます。

SiteScope がディスカバリ・プローブとして機能できるようにするスクリプトは、BSM サーバの SiteScope パッケージに保存されています。アプリケーションのトポロジを検出するように SiteScope が設定されている場合、SiteScope によって BSM サーバから適切なスクリプトがダウンロードされます。アプリケーションの監視時にこのスクリプトを使用してディスカバリが実行されます。

SiteScope パッケージには、スクリプトのほかにビューやエンリッチメントなど、SiteScope に関連する RTSM リソースが含まれています。BSM のこのパッケージには、**【管理】 > 【RTSM 管理】 > 【管理】 > 【パッケージ マネージャ】** からアクセスできます。パッケージはファクトリ・パッケージです。つまり、パッケージの用意済みの設定で SiteScope でのディスカバリを実行できます。パッケージを使った作業の詳細については、BSM ヘルプにある『モデリング・ガイド』の「Package Administration」を参照してください。

**注:** 上級ユーザは、パッケージ内のトポロジ・スクリプトを変更できます。SiteScope パッケージでは、SiteScope と データフロー管理 で共有している可能性のあるほかのパッケージのスクリプトが使用されます。パッケージのスクリプトへの変更は、データフロー管理 にも影響する可能性があります。

BSM へのトポロジのレポート方法に影響するトポロジ・スクリプトを変更すると、それらのトポロジを使用するすべてのアプリケーション（BSM のアプリケーションや 操作管理 など）に影響を与える可能性があります。

## トポロジ・スクリプト・プロパティ・ファイル

証明書のあるセキュアな BSM インストールで作業する場合は、**< SiteScope のルート ディレクトリ > \discovery\discovery\_agent.properties** ファイルに次の行を挿入しなければならない場合があります。appilog.agent.Probe.BasicAuth.Realm=authRealm.

ここで、authRealm は基本認証領域の変数です。所定の URL がどの領域に属しているかを調べるには、Web ブラウザで URL を開いてポップアップ・ボックスの最初の行を確認します。

**注:** **discovery\_agent.properties** を変更した場合、SiteScope を再起動して変更を有効にする必要があります。

## トポロジ・レポートの制限

BSM に報告できる SiteScope のグループおよびモニタの詳細の文字数は 600 文字に制限されます。グループまたはモニタの詳細の文字数が 600 文字よりも多い場合、SiteScope によって最初の 600 文字まで詳細が切り捨てられます。

# 検出されたトポロジの BSM へのレポート

SiteScope は、ディスカバリ・プローブとして機能でき、選択した環境の監視対象エンティティの階層を検出できます。これらの階層は、SiteScope から BSM にレポートされるトポロジで表されます。トポロジ内の CI は、SiteScope によって監視されるホスト、サーバ、アプリケーションに対応しており、BSM の RTSM に作成されます。モニタおよび測定値の CI も作成され、SiteScope によってそのス

データが BSM にレポートされます。CI 間の関係は、SiteScope によってレポートされるトポロジで定義されます。

この機能を有効にするには、モニタ・インスタンスの作成時または設定時に **【HP 統合設定】** パネルの **【モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート】** オプションを選択します。このオプションがクリアされている場合、RTSM で作成された CI は自動的に削除されることはありません。CI に活動がない場合、最終的にエージングによってデータベースから削除されます。または、手動で削除する必要があります。

【トポロジ設定】ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「トポロジ設定」を参照してください。

トポロジ・レポートに関連する問題のトラブルシューティングについては、『BSM と HPOM との統合についてのベスト・プラクティス』ガイドの「BSM トポロジの問題」を参照してください。

## サポート対象環境

SiteScope および BSM 間の直接接続は、選択した環境および特定のバージョンの BSM でのみ使用できます。SiteScope では、次の各モニタについて、個別のトポロジをレポートします（これらのモニタのドキュメントについては、SiteScope ヘルプの『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』で利用可能なこれらのモニタのドキュメントを参照してください）。

環境 / モニタ・タイプ	モニタ
ノード・トポロジをレポートするモニタ	<p>ノード、コンピュータ、その他の一部の子 CI タイプの派生物など、事前定義した CI タイプを使って BSM にトポロジ・データを転送できる（テクノロジー統合モニタおよび次の表に示すサポート対象環境以外）ホストまたはサーバのステータスをレポートするすべてのモニタが含まれます。トポロジ・レポートが有効化されている場合は、SiteScope によってモニタ CI とともにトポロジが BSM に転送されます。このオプションの詳細については、<a href="#">「HP 統合設定」(303ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>注：</b> 監視する CI タイプを事前に知ることができないため、ホストやサーバのステータスを監視しないモニタは含まれません。ホスト・データのないモニタのリストについては、<a href="#">「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」(245ページ)</a>を参照してください。</p>
データベース環境	<p>（Business Availability Center バージョン 8.00 以降を統合する場合に利用可能）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「データベース・カウンタ・モニタ」</li> <li>・ 「データベース・クエリ・モニタ」</li> <li>・ 「DB2 JDBC モニタ」</li> <li>・ 「Microsoft SQL Server モニタ」</li> <li>・ 「Oracle データベース・モニタ」</li> </ul>

環境 / モニタ・タイプ	モニタ
ビッグデータ環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>「Hadoop モニタ」</li> <li>「HP Vertica JDBC モニタ」</li> </ul>
ERP / CRM アプリケーション環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>「SAP CCMS モニタ」</li> <li>「SAP ワーク・プロセス・モニタ」</li> <li>「Siebel アプリケーション・サーバ・モニタ」</li> <li>「Siebel Web サーバ・モニタ」</li> </ul>
サーバ環境	(BSM 9.0 以降を統合する場合に利用可能) 「ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ」
SOA 環境	「Web サービス・モニタ」
仮想化環境	(Business Availability Center / BSM 8.02 以降を統合する場合に利用可能) <ul style="list-style-type: none"> <li>「Solaris ゾーン・モニタ」</li> <li>「VMware Datastore Monitor」</li> <li>「VMware ホスト・モニタ」</li> <li>「VMware パフォーマンス・モニタ」</li> </ul>
Web サーバ環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>「Microsoft IIS サーバ・モニタ」</li> <li>WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタ (「JMX モニタ」を使用)</li> <li>「WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ」</li> </ul>

## CI のダウンタイム

**注:** 本項は、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続するユーザのみを対象としています。

ダウンタイムは、BSM から [プラットフォーム管理] の [ダウンタイムの管理] ページを使用して、定義および管理します。ダウンタイム設定の詳細については、BSM ヘルプにある BSM プラットフォーム管理ガイドの「ダウンタイムの管理」を参照してください。

SiteScope は、SiteScope のモニタまたは測定値 CI が、BSM によってダウンタイムであることが検出された CI に直接リンクしている場合、ダウンタイムによる影響を受けます。SiteScope は、SiteScope グループ CI にリンクしているビジネス・アプリケーション CI、ビジネス・サービス CI、インフラストラクチャ・サービス CI、または CI 収集がダウンタイムにある場合も、ダウンタイムによる影響を受けます。



現在ダウタイム状態にある CI の影響を受けるモニタは、すぐにはダウタイム状態にはなりません。モニタがダウタイム状態になるまでの時間は次の 2 つのパラメータに影響されます。

- SiteScope から BSM にダウタイムの要求が送られる間隔（ダウタイム取得頻度の標準設定の値は 15 分）。これは、SiteScope の **【プリファレンス】 > 【インフラストラクチャ プリファレンス】 > 【一般設定】 > 【BSM ダウタイム取得頻度（分）】** で変更できます。
- SiteScope ダウタイム キャッシュの BSM における更新間隔（標準設定の値は 5 分）。これは、BSM の **【管理】 > 【プラットフォーム】 > 【セットアップと保守】 > 【インフラストラクチャ設定】** で変更できます。**【アプリケーション】 > 【エンド ユーザ / システム可用性管理】** を選択します。**【ダウタイム】** テーブルで、**【SiteScope ダウタイム キャッシュ更新間隔（分）】** を見つけます。この値を必要なキャッシュ更新間隔に変更します。

ダウタイム時に SiteScope で実行されるアクションは、BSM でのダウタイムの設定によって異なります。ダウタイムは次の情報に対して実行できます。

- **警告**: ダウタイムに関連付けられている CI に対して警告は送信されません。
- **レポート**: レポートが更新されず、CI のダウタイムが表示されます。
- **KPI**: 問題の CI に関連付けられている KPI は更新されず、CI がダウタイムであることがサービス状況に表示されます。
- **監視**: ダウタイムに関連付けられているすべての CI に対して SiteScope 監視が停止します。

ダウタイムになっているモニタは、SiteScope ダッシュボードの **【サマリ】** 列に "disabled by <Downtime Name> from BSM" と表示されます。モニタに関連付けられていて、現在実行中のダウタイムの詳細は、**【モニタの有効化 / 無効化】** パネルの **【Monitor Downtime】** テーブルに表示されます。詳細については、[「モニタの有効化/無効化」\(316ページ\)](#)を参照してください。

モニタが現在ダウタイムになっている CI の影響を受けていて、モニタの関連付けられている警告にダウタイムが適用されている場合、ダウタイムの詳細は **【関連する警告の有効化 / 無効化】** パネルの **【Associated Alerts Downtime】** テーブルに表示されます。詳細については、[「関連する警告の有効化/無効化」\(318ページ\)](#)を参照してください。

## 注意事項および制限事項

- SiteScope から BSM にダウタイムの要求が行われると、設定されているダウタイム期間（最長で 24 時間）にわたってダウタイム状態になります。レコードは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\audit.log** に書き込まれます。このファイルには、新しいダウタイム、既存のダウタイムへの変更、削除されたダウタイムが含まれます。
- SiteScope が BSM 9.00 以降に接続されると、ダウタイム・メカニズムは初期設定で有効化されます。標準設定を変更するには、SiteScope の **【プリファレンス】 > 【インフラストラクチャ プリファレンス】 > 【一般設定】** の **【ダウタイム メカニズムの有効化】** チェック・ボックスをクリアします。
- SAP, Siebel, SOA トポロジではダウタイムはサポートされていません（Application Management for Siebel/SAP ライセンスがインストールされているかどうかは無関係）。
- 測定値ごとの CI をレポートするモニタでは、測定値に接続されている CI がダウタイムにある場合、測定値がダウタイムに属するモニタに送信されます。これは、**「VMware パフォーマンス・**

モニタ」および「Solaris ゾーン・モニタ」に適用されます。

- 
- ダウンタイム情報は、システム可用性管理 のレポートには含まれません。
- SiteScope が BSM 9.10 に接続されると、SiteScope プロファイル上のダウンタイムが、SiteScope プロファイル・モニタおよび測定値によって監視されているホストまたはソフトウェア要素上のダウンタイムにアップグレードされます。
- CI ダウンタイムに関連する追加のトラブルシューティングについては、『BSM と HPOM との統合 についてのベスト・プラクティス・ガイド』の「BSM CI ダウンタイムの問題」を参照してください。

## BSM と通信するための SiteScope の設定方法

このタスクでは、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして使用するために設定する方法について説明します。

### 1. 前提条件

- SiteScope を BSM と統合するには、SiteScope 管理者ユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。
- データを収集する特定の IT インフラストラクチャ・リソースの緻密な計画を立てる準備をします。指定したインフラストラクチャ・コンポーネントの影響を受けるビジネス・プロセスの情報を含めます。たとえば、SiteScope モニタの実行先となるアプリケーション・サーバ上で実行されている Business Process Monitor が監視しているビジネス プロセスなどです。
- スマート・カード認証が BSM で設定されていて、SiteScope を BSM と統合する場合、SiteScope スマート・カード認証を BSM クライアント証明書を認証するよう設定する必要があります。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』(<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm)の「スマート・カード認証」を参照してください。

**注:** SiteScope を BSM 9.x と接続する際には、**HP0prInf**, **HP0prMss**, **HP0prOra**, **HP0prJEE** コンテンツ・パックが必要です（コンテンツ・パックは標準設定でインストールされているため、通常は特別な操作は必要ありません）。コンテンツ・パックがない場合は、BSM ヘルプにある BSM プラットフォーム管理ガイドの「コンテンツ・パックの作成および管理方法」にある説明に従って、インポートする必要があります。

### 2. SiteScope のダウンロードおよびインストール

BSM で、**【管理】 > 【プラットフォーム】 > 【セットアップと保守】**に移動し、**【ダウンロード】**をクリックします。SiteScope インストール・ファイル（Windows または Solaris 用）をダウンロードしてローカル・ドライブまたはネットワーク・ドライブに保存します。



SiteScope データ・コレクタを実行するマシンに SiteScope をインストールします。複数のプラットフォームで複数の SiteScope を実行できます。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』(<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm) の「SiteScope のインストール」の項を参照してください。

### 3. HP Operations Agent の SiteScope サーバへのインストールと設定

- a. HP Operations Agent 11.14 は SiteScope リリース・メディアのルート・ディレクトリからインストールします。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』(<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm) の「SiteScope のインストール」の項を参照してください。
- b. SiteScope 設定ツールを使用して HP Operations Agent を設定します。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』(<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm) の「設定ツール」の項を参照してください。

### 4. インストールした SiteScope の BSM への接続

BSM で、**[管理] > [システム可用性管理]** に移動し、SiteScope を SAM 管理に追加します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの **[新規 SiteScope]** ページを参照してください。

- ログ記録オプションを変更するには、モニタのプロパティ・ページの **[HP 統合設定]** パネルで、特定のモニタを編集して関連するオプションを選択します。詳細については、**「HP 統合設定」(303ページ)**を参照してください。[グローバル検索と置換] ウィザードを使用して、統合を確立する前に作成したモニタのログ記録オプションを更新できます。このウィザードの詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの **[グローバル検索と置換]** ウィザードを参照してください。
- BSM に登録する前に SiteScope で作成されたモニタは、ログ記録オプションが **[BSM への測定値レポートを無効化する]** に設定されます。BSM にレポートするデータ・コレクタとして SiteScope を設定した後に SiteScope で作成された新しいモニタの場合、標準設定では監視データのログは BSM に記録されます。

#### 注:

- BSM からアクセスできない SiteScope を使って作業する場合（HP Software-as-a-Service など）、接続するには SAM 管理で空のプロファイルの作成し、SiteScope で BSM 用の統合プリファレンスを作成する必要があります。タスクの詳細については、**「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」(676ページ)**を参照してください。
- 高負荷下で作業している場合は、初めて BSM に接続する前に全モニタを一時停止します。

### 5. クライアント証明書またはセキュア接続が必要な BSM サーバに接続するための SiteScope の設定（企業のセキュリティのために推奨）

BSM サーバがセキュア接続を必要とする場合、次の適切な手順を実行する必要があります。

- セキュア接続を必要とする BSM サーバの詳細については、[「セキュア接続が必要な BSM サーバに SiteScope を接続する方法」\(233ページ\)](#)を参照してください。
- クライアント証明書を必要とする BSM サーバについては、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定」を参照してください。

## 6. SiteScope のデータの送信先となるゲートウェイ・サーバの変更 - オプション

SiteScope のデータの報告先となるゲートウェイ・サーバを変更できます。一般に、これは、複数のサーバにコンポーネントがインストールされている BSM デプロイメントで作業している場合にのみ当てはまります。

- SiteScope の [BSM 統合プリファレンス] で、[**Business Service Management マシン名/IP アドレス**] ボックスに必要なゲートウェイ・サーバ名または IP アドレスを入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「BSM 統合プリファレンス」\(674ページ\)](#)を参照してください。
- [SAM] で、[**分散設定**] でゲートウェイ・サーバ名の SiteScope 設定を更新します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの [新規 SiteScope] / [SiteScope の編集] ページを参照してください。

**注:** この機能は、特定の BSM インストールにすでに登録されている SiteScope のゲートウェイ・サーバを変更する場合にのみ使用できます。新しい SiteScope を追加する場合や、異なる BSM システムに SiteScope を接続する場合には、この機能は使用できません。

## 7. SiteScope の監視構造の作成

- a. デプロイするモニタを整理するためのグループおよびサブグループを作成し、これらのグループにモニタを作成します。モニタの設定時に、必要に応じて BSM のデータのログ記録とトポロジ設定が設定されていることを確認します。

監視構造の作成の詳細については、[「基本的な監視構造の作成」\(69ページ\)](#)を参照してください。

- b. メトリクス、イベント、およびトポロジ・データを BSM に送信するよう SiteScope を設定します。

さらに、SiteScope はメトリクス・データを SiteScope ホスト上にインストールされている HP Operations Agent のデータ・ストアに格納できます。また、オペレーション管理のパフォーマンス・グラフ作成で使用するためのメトリクス・データのグラフ作成を行う場合に、BSM のプロファイル・データベースに格納することもできます。

**ヒント:** BSM のプロファイル・データベースはより強固で拡張性の高いデータ・ソースで、HP Operations Integration の設定を必要としないため、推奨されるオプションです。

- **メトリクスとトポロジ** (従来式の SiteScope-BSM 統合を使用)。詳細については、[「HP 統合設定」\(303ページ\)](#)を参照してください。
- **イベントとメトリクス** (BSM で HP Operations Agent/プロファイル DB を使用)。詳細については、SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」を参照してください。[HP ソフトウェア統合](#)サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます (Windows の場合 : <http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>; UNIX の場合 : <http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>) 。

## 8. RTSM での SiteScope モニタと既存の CI 間の関係の作成 - オプション

この関係を作成して、(SiteScope から転送されるトポロジで CI が作成されていない場合でも) モニタは関連付けられている CI に HI ステータスを渡すことができます。

- SiteScope でモニタ・インスタンスを編集する場合は、**「HP 統合設定」**で **「CI タイプ」** オプションを手動で選択して、SiteScope モニタ CI と既存の CI 間の関係をカスタマイズできます。サポート対象環境のモニタと、定義済みトポロジがあるモニタの CI タイプは標準設定で定義されています。タスクの詳細については、[「CI タイプの選択」\(234ページ\)](#)を参照してください。
- SAM 管理で、RTSM の既存の CI プロパティ・データを使用する**モニタ・デプロイメント・ガイド**を使用して、SiteScope のモニタ、グループ、リモート・サーバをデプロイします。RTSM に監視対象の CI と作成したモニタ間の monitored by 関係を作成します。概念の詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「モニタ・デプロイメント・ウィザード」を参照してください。

定義が完了したら、SiteScope とそのグループ、およびモニタが CI として RTSM に追加され、関連する監視ビューに自動的に関連付けられます。これらは、このビューから別のビューに追加できます。SAM 管理でモニタを編集する場合、**「HP 統合設定」**を使用して、既存の CI にモニタを関連付けることができます。たとえば、CPU が監視されているマシンを表す既存の論理 CI に CPU モニタを関連付けることができます。

SiteScope のデータは、サービス状況およびサービス・レベル管理で使用できます。

## 9. SiteScope メトリックのインジケータへのマップ - オプション

SiteScope で、標準設定のインジケータのメトリックのマッピングがないモニタのマッピングを追加、または既存のマッピングを修正できます (サポート対象環境のモニタおよび初期設定でメトリックにマップされたインジケータがあるモニタ)。

タスクの詳細については、[「インジケータのモニタへのマッピング」\(234ページ\)](#)を参照してください。

## 10. BSM の権限の割り当て

BSM で、**「管理」** > **「プラットフォーム」** > **「ユーザおよび権限」**に移動し、**「ユーザ管理」**をクリックします。

定義されているユーザごとに、SAM レポートおよびカスタム・レポートの SiteScope グループとそのサブグループを表示できる権限を割り当てます。詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「ユーザ管理操作」の項を参照してください。

権限の適用方法の詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「SiteScope へのアクセスと権限モデルの作成」を参照してください。

## 11. 接続設定の変更 - オプション

接続を作成したら、変更する設定に応じて SiteScope または BSM のいずれかで設定を変更できます。

- BSM で、**【管理】 > 【システム可用性管理】**を選択します。SiteScope のリストで、関連する SiteScope を右クリックして、コンテキスト・メニューから **【SiteScope の編集】**を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの **【新規 SiteScope】 / 【SiteScope の編集】** ページを参照してください。
- SiteScope で、**【プリファレンス】** コンテキストを開き、**【統合プリファレンス】**を選択します。BSM の統合プリファレンスを編集します。ユーザ・インタフェースの詳細については、**「BSM 統合プリファレンス」(674ページ)**を参照してください。

### ヒント:

- BSM への接続をセキュリティで保護するには (BSM ユーザ名とパスワードは認証に使用されないため)、SiteScope に基本認証を設定するか、双方向の SSL を使用することをお勧めします。BSM を基本認証を使用するように設定すると、SiteScope の **【認証ユーザ名】** フィールドと **【認証パスワード】** フィールドに入力したものと同一ユーザ名とパスワードが、BSM へのデータとトポロジのレポートにも使用されます。BSM が基本認証を使用するように設定されていない場合、送信された資格情報は無視されます。
- SiteScope サーバから BSM に送信される前にデータを圧縮するには、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config** ファイルで **\_topazCompressDataInGzip=true** を設定します。有効化すると、SiteScope モニタ (ss\_monitor\_t) および SiteScope メトリック (ss\_t) サンプルが、GZIP 圧縮されてから BSM (ここで展開される) に送信されます。データ圧縮は、SiteScope が BAC / BSM 8.05 以降にレポートされる場合にのみ利用できます。

## Run-time Service Model にバルク・データを送信するための SiteScope の設定

SiteScope の結果を zip ファイルに圧縮して、または圧縮しないで BSM の Run-time Service Model (RTSM) に送信することができます。この要求には、送信される結果が圧縮された形式であるか圧縮されていない形式であるかを RTSM に指示するパラメータが含まれています。

SiteScope の結果を圧縮された形式で送信するには、次の操作を実行します。

1. 次のファイルを開きます。<SiteScope ルート・ディレクトリ>\discovery\discovery\_agent.properties。
2. appilog.agent.probe.send.results.zipped で始まる行を見つけます。この行がない場合は、ファイルに追加します。
3. この値を **=true** に変更します。
4. SiteScope を再起動します。SiteScope の結果は圧縮されてから RTSM に送信されます。

## セキュア接続が必要な BSM サーバに SiteScope を接続する方法

このタスクでは、BSM サーバでセキュア接続が必要な場合に SiteScope および BSM 間のセキュリティ保護された通信を有効にする手順について説明します。

1. SiteScope でセキュア接続を使用する準備をします。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）のセキュア接続を使用するように SiteScope を設定する方法について説明した項を参照してください。
2. SiteScope のユーザ・インタフェースで「証明書管理」を使用して CA または BSM サーバ証明書を SiteScope にインポートします。タスクの詳細については、「[証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法](#)」(551ページ)を参照してください。

**注:** 証明書内のマシン名は、システム可用性管理 管理の「新規 SiteScope」ページで使用されている名前と完全に同じ名前（大文字と小文字を区別）を持つ完全修飾ドメイン名である必要があります。

3. BSM で、「管理」>「システム可用性管理」を選択し、「新規 SiteScope」ボタンをクリックして、SiteScope インスタンスを追加します。「新規 SiteScope」ページで、次の設定が構成されているかどうか確認します。
  - **分散設定:** 「ゲートウェイ サーバ名/IP アドレス」に適切なサーバ名とポート（初期設定 443）が設定されているかどうか確認します。
  - **プロファイル設定:** 「BSM フロント エンドは HTTPS を使用します」チェック ボックス（BSM 9.20 より前のバージョンでは、「Web サーバで SSL を使用する」チェック ボックス）を選択します。

## トポロジ・レポートの設定方法

**注:** インジケータ・マッピングの編集または測定値へのマッピングの追加は、CI とインジケータに精通している上級ユーザのみが行うようにしてください。

このタスクでは、モニタのトポロジ設定を設定する方法について説明します。また、CI タイプの選択または変更の方法、インジケータへの測定値のマッピング方法についても説明します。

## 1. 前提条件

- BSM でクライアント証明書が必要な場合は、SiteScope のトポロジのディスカバリ・エージェントを設定して、トポロジを BSM サーバに報告する必要があります。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「BSM サーバがクライアント証明書を必要とするとき SiteScope でトポロジ・ディスカバリ・エージェントを設定する方法」を参照してください。
- モニタ CI データとともにホスト・トポロジを SiteScope から BSM に転送するには、モニタ・プロパティの **[HP 統合設定]** パネルの **[モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート]** オプションを選択する必要があります。サポート対象環境のモニタと標準設定で CI タイプが定義されているモニタの場合、このオプションは標準設定で選択されています。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「BSM 統合データとトポロジ設定」\(305ページ\)](#)を参照してください。

## 2. CI タイプの選択

標準設定でトポロジを報告するモニタの場合（モニタに関連付けられている CI タイプは **[CI タイプ]** リストの丸括弧内に表示されます）、標準設定の選択を使用することも、CI タイプを変更してキー属性を入力し、標準設定の選択を上書きすることもできます。

標準設定でトポロジを報告しないモニタの場合、**[BSM 統合データとトポロジ設定]** セクションでモニタの **[CI タイプ]** を選択し、CI タイプのキー属性の値を入力します。標準設定ではトポロジが報告されていないモニタのリストについては、[「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」\(245ページ\)](#)を参照してください。

**注:** CI タイプが測定値ごとのモニタ（モニタのリストについては、[「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」\(245ページ\)](#)を参照）では、CI タイプを変更することはできません。また、CI キー属性は表示されません。

**ヒント:** モニタのトポロジ設定を変更してから 10 分以内に BSM を再起動した場合、SiteScope の再同期を実行することをお勧めします。これを行うには、**[プリファレンス]** > **[統合プリファレンス]** > **[BSM 統合]** > **[BSM プリファレンス利用可能操作]** を選択し、**[再同期化]** をクリックします。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「BSM 統合データとトポロジ設定」\(305ページ\)](#)を参照してください。

## 3. インジケータのモニタへのマッピング

CI タイプが選択されている場合、**[インジケータ設定]** セクションのテーブルは、選択した CI タイプのインジケータ設定が表示されるようにフィルタされます。サポート対象環境のモニタおよび定義済みトポロジがあるモニタの場合、標準設定で測定値にインジケータがマッピングされています。新しい測定値のマッピングを追加することも、既存のマッピングの設定を編集



することもできます。

標準設定のインジケータの測定値のマッピングがないモニタの場合、モニタにリンクする CI タイプの適切なインジケータに測定値をマッピングできます。標準設定のインジケータ割り当てについては、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「インジケータ・マッピングの整合」を参照してください。

概念の詳細については、「[SiteScope 測定値のインジケータへの割り当て](#)」(222ページ)を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[インジケータ設定](#)」(310ページ)を参照してください。

4. イベントおよび測定値が BSM に報告される場合の影響を与える BSM サービス状況のプリファレンスの選択（任意指定）

SiteScope のイベントと測定値は BSM のサービス状況に影響を与えるため、両方のデータ・タイプがレポートされる場合は、影響を与えるサービス状況のプリファレンスを選択します。

【HP 統合設定】の【BSM サービス状況プリファレンス】セクションのプリファレンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[BSM サービス状況プリファレンス](#)」(314ページ)を参照してください。

このプリファレンスは次の場合のみに関連します。

- BSM と Operations Manager 統合の両方がアクティブな場合。
- Operations Manager イベント統合が、HPOM サーバではなく BSM サーバに接続されている場合。
- モニタの【HP 統合設定】で次の設定を行います。
  - 【BSM 統合データとトポロジ設定】セクションでは、【**モニタの状態およびメトリックのレポートを有効にする**】または【**モニタの状態としきい値のあるメトリックのレポートを有効にする**】を設定します。
  - 【HP Operations Manager 統合設定】セクションでは、【**イベント送信**】を設定します。

**注:**

- プリファレンスでは、【**統合プリファレンス**】>【**HP Operations Manager 統合**】>【**HP Operations Manager 統合メイン設定**】で、【**BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します (グローバル・プリファレンス)**】を選択して、新しく作成された各モニタをグローバルに設定することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[HP Operations Manager 統合メイン設定](#)」(688ページ)を参照してください。
- 使用するプリファレンスの選択に関する詳細については、「[SiteScope と BSM との統合](#)」を参照してください。

5. 結果

トポロジの設定が済んだら、【**保存**】をクリックします。SiteScope によって RTSM にモニタの

CI が作成され、モニタの CI データが BSM に転送されます。

## カスタム・モニタ用のトポロジ・レポートの設定方法

このタスクでは、トポロジ設定の設定方法、CI タイプの選択または変更の方法、カスタム・モニタ・タイプ用のインジケータへの測定値のマッピング方法について説明します。

### 1. 前提条件

BSM でクライアント証明書が必要な場合は、SiteScope のトポロジのディスカバリ・エージェントを設定して、トポロジを BSM サーバに報告する必要があります。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「BSM サーバがクライアント証明書を必要とするとき SiteScope でトポロジ・ディスカバリ・エージェントの設定方法」を参照してください。

### 2. CI タイプの選択

【HP 統合設定】の【BSM 統合データとトポロジ設定】セクションで、トポロジ・レポートを設定して SiteScope が CI を BSM にレポートする方法を定義します。

次のタイプの CI トポロジ・データを報告できます。

- **ユーザ定義 CI タイプ・トポロジ。**【CI タイプ】リストで CI タイプを選択し、選択した CI タイプのキー属性値を定義します。キー属性値の詳細については、[「<CI タイプのキー属性>」\(309ページ\)](#)を参照してください。
- **カスタム・トポロジ・スクリプト**【カスタム トポロジ設定】オプションを選択して、CI を BSM にレポートする方法を定義するトポロジ・スクリプトを作成します。自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している場合にのみこのオプションを選択します。タスクの詳細については、[「カスタム・モニタ用のカスタム・トポロジの設定方法」\(238ページ\)](#)を参照してください。
- モニタのトポロジを報告しない場合は、モニタ CI のみを報告することを選択できます。【CI タイプ】リストで、**なし (標準設定)**を選択します。これは標準設定です。

**注:** カスタム・モニタのトポロジを報告しない場合でも、カスタム CI ヒントを持つ CI にそのメトリックをマップして、メトリックをユーザ・インターフェースでインジケータにマップする場合は、次を実行する必要があります。

- 【カスタム トポロジ設定】オプションを選択します。
- 【データ処理スクリプト】ボックスで、次の（空）スクリプトを入力します。

```
from java.lang import *
from java.util import *
from appilog.common.system.types.vectors import ObjectStateHolderVector
from appilog.common.system.types import ObjectStateHolder
```



```
def DiscoveryMain(Framework):  
    OSHVResult = ObjectStateHolderVector()  
    return OSHVResult
```

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「BSM 統合データとトポロジ設定」 \(305ページ\)](#)を参照してください。

### 3. インジケータのモニタへのマッピング

インジケータの選択したCIタイプ用のメトリックへのマップ

- CIタイプが選択されている場合、**「インジケータ設定」** セクションのテーブルは、選択したCIタイプのインジケータ設定が表示されるようにフィルタされます。新しい測定値のマッピングを追加することも、既存のマッピングの設定を編集することもできます。
- **「カスタム トポロジ設定」** が選択されている場合、HI 割り当てで使用した HI を使用するインジケータ・マッピングを設定します（[「HI 割り当ての定義」 \(239ページ\)](#)参照）。

通常のモニタの場合とは異なり、カスタム・モニタのカスタム・トポロジ・スクリプトを作成するときに**「インジケータ設定」**でCIタイプを編集できます。インジケータ設定を追加する場合は、**「CI タイプ」** リストからCIタイプを選択します。これにより、そのCIタイプに適したインジケータがSiteScopeに表示されます。

**注:** 同じメトリックに一致する別のCIタイプを持つ複数のインジケータ・マッピングを定義しないでください。

- CIタイプで**「なし (標準設定)」**を選択した場合、インジケータ・マッピングは使用できません。

概念の詳細については、[「SiteScope 測定値のインジケータへの割り当て」 \(222ページ\)](#)を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「インジケータ設定」 \(310ページ\)](#)を参照してください。

### 4. イベントおよび測定値がBSMに報告される場合の影響を与えるBSMサービス状況のプリファレンスの選択（任意指定）

SiteScope のイベントと測定値はBSMのサービス状況に影響を与えるため、両方のデータ・タイプがレポートされる場合は、影響を与えるサービス状況のプリファレンスを選択します。

**「HP 統合設定」**の**「BSM サービス状況プリファレンス」**セクションのプリファレンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「BSM サービス状況プリファレンス」 \(314ページ\)](#)を参照してください。

このプリファレンスは次の場合のみに関連します。

- BSM と Operations Manager 統合の両方がアクティブな場合。
- Operations Manager イベント統合が、HPOM サーバではなく BSM サーバに接続されている場合。

- モニタの [HP 統合設定] で次の設定を行います。
  - [BSM 統合データとトポロジ設定] セクションでは、**「モニタの状態およびメトリックのレポートを有効にする」**または**「モニタの状態としきい値のあるメトリックのレポートを有効にする」**を設定します。
  - [HP Operations Manager 統合設定] セクションでは、**「イベント送信」**を設定します。

**注:**

- プリファレンスでは、**「統合プリファレンス」 > 「HP Operations Manager 統合」 > 「HP Operations Manager 統合メイン設定」**で、**「BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します (グローバル・プリファレンス)」**を選択して、新しく作成された各モニタをグローバルに設定することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、**「HP Operations Manager 統合メイン設定」 (688ページ)**を参照してください。
- 使用するプリファレンスの選択の詳細については、『BSM と HPOM との統合についてのベスト・プラクティス・ガイド』の「SiteScope と BSM との統合」を参照してください。

## 5. 結果

トポロジの設定が済んだら、**「保存」**をクリックします。SiteScope によって定義に従ってトポロジが作成され、モニタ・データが BSM に転送されます。

# カスタム・モニタ用のカスタム・トポロジの設定方法

このタスクでは、カスタム・トポロジ・スクリプトでカスタム・モニタを作成する手順を説明します。

1. CI Resolver TQL の変更 (SiteScope がバージョン 9.20 より前の BSM に接続されている場合のみ)
  - a. BSM で、**「管理」 > 「プラットフォーム」 > 「インフラストラクチャ設定」**を選択します。
    - **「アプリケーション」**を選択します。
    - **「エンド ユーザ / システム可用性管理」**を選択します。
    - **「エンド ユーザ / システム可用性管理 - SiteScope CI Resolver 設定」**で、**「TQL クエリ」**パラメータの値が**「SiteScope によって監視される CI」**であるか確認します。もしそうであるなら、**「OMiAutoView」**に変更します。
  - b. BSM を再起動して変更を適用します。

**注:** この TQL では、CI 数が多いモデルはサポートされていません (このモデルでは、パフォーマンスに問題が発生する場合があります)。

## 2. HI 割り当ての定義

HI 割り当てを定義して、HI を CI に割り当てる必要があります。この割り当てでは、HI がキャプチャするデータ・サンプル、およびそのデータ・サンプルに従って HI の状態を計算するのに使用するビジネス・ルールも定義されます。

サービス状況の HI 割り当ての詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「状況インジケータの割り当てページ」を参照してください。SLM の HI 割り当ての詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「状況インジケータの割り当てページ」を参照してください。

HI 割り当てを定義するには、次の手順を実行します。

- a. BSM で、**[管理] > [サービス状況] / [サービス レベル管理] > [割り当て] > [状況インジケータの割り当て]** を選択します。
- b. 左側の表示枠にある CI タイプ階層から、トポロジ・スクリプトでレポートを行う CI タイプを選択します。その CI タイプに割り当てたインジケータが、インジケータ表示枠に表示されます。インジケータを選択すると、その詳細が右側の表示枠に表示されます。
- c. 新規 HI 割り当てを作成します。割り当ての作成方法の詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「KPI または HI 割り当ての定義方法」を参照してください。
  - **[条件]** エリアの **[Monitored By]** プロパティで、このモニタで報告された CI とほかのモニタで報告された同じタイプの CI とを識別できる値を入力します。割り当ての条件は、トポロジ・スクリプトでレポートする CI に対応している必要があります（[「カスタム・トポロジ・スクリプトの作成」](#) (243 ページ) を参照）。

**ヒント:** CI が **[Monitored By]** プロパティで値「SiteScope」を持つことをお勧めします。そして、この CI とほかのモニタが報告した同じタイプの CI との識別ができるように、一意の値を持つことをお勧めします。この場合、CI で **注** プロパティを使用することをお勧めします。

- モニタのトポロジ・スクリプトを作成する際は、レポートする CI でこの値を持つ `monitored_by` 属性を入力します。トポロジ・スクリプトの詳細については、[「カスタム・トポロジ・スクリプトの作成」](#) (243 ページ) を参照してください。
- HI 計算に使用するビジネス・ルールを選択します。**[SiteScope Worst Status Rule]** を使用することをお勧めします。また、**[SiteScope Consecutive Worst Status Rule]** または **[SiteScope Best Status Rule]** も使用できます。
- セレクタで、次のように入力します。
  - `eti_id = (バイナリ) <<状況インジケータ・タイプ ID>>`
  - `ci_id = (バイナリ) <<CI ID>>`
  - `sampleType = (String) ss_t`

カスタム・モニタはメトリック・サンプル (`ss_t`) を送信します。メトリック・サンプルは、割り当てで使用される HI と同じ `eti_id`、そして CI と同じ CI ID を含みます。

例：サービス状況での CI タイプ・コンピュータのインジケータ

Edit Health Indicator Assignment for CI Type: Computer

Define a Health Indicator Assignment. When a condition is filled, Health Indicators are assigned to any CI that meets the condition.

Assignment Settings

ID:

89e213de-7c5e-454a-b874-5d99ee78a8a8

\* Name:

my custom log monitor assignment

Description:

Condition

\* Monitored by:

Site Scope

Property Name

Operator

Value

Note

Equals

my custom log monitor

Health Indicator Configurations

Health Indicator

Business Rule

CPU Load

SiteScope Worst Status Rule

Host Disk Utilization

SiteScope Worst Status Rule

例：サービス状況でのインジケータ設定およびセクタ設定

状況インジケータ設定を定義します

状況インジケータ

状況インジケータ:

CPU ロード

ビジネス ルール:

SiteScope 最低ステータス ルール

優先度:

0

ビジネス ルール パラメータ

generateEvents:

偽

Tooltip show all measurements:

false

(String)

データのタイムアウトなし:

900

秒

\* [CI タイプのプロパティ] リストからプロパティをドラッグするか、フィールドの編集中に Ctrl + i を押して、選択したプロパティに値を設定できます。

セクタ

\*

フィールド名	オペレータ	タイプ	値
AND			
eti_id	=	Binary	<<Health Indicator Typ...
ci_id	=	Binary	<<CI ID>>
sampleType	=	String	ss_f

式のサマリ:

AND       [eti\_id = <<Health Indicator Type ID>>]

AND       [ci\_id = <<CI ID>>]

AND       [sampleType = ss\_f]

\* [CI タイプのプロパティ] リストからプロパティをドラッグするか、フィールドの値の編集中に Ctrl + i を押して、選択したプロパティに値を設定できます。

CI タイプのプロパティ

一般プロパティ

バイナリ

Calculated ID

ブール

Allow CI Update

Change Is New

Enable Aging

Is Candidate For Deletion

Node Is Complete

Node Is Desktop

Node Is Route

Node Is Virtual

Operation Is New

Store KPI History For Over Ti...

Test Is New

Track Configuration Changes

整数

Actual Deletion Period

Deletion Candidate Period

MemorySize

SwapMemorySize

文字列

BiosAssetTag

BiosSerialNumber

BiosUuid

CalculatedLocation

CI Type

City

CodePage

Container

Country or Province

Created By

DefaultGatewayIpAddress

Description

Digest

DiscoveredContact

DiscoveredDescription

DiscoveredLocation

3. カスタム・モニタの定義

SiteScope でカスタム・モニタを作成し、[メイン設定]、[詳細設定]、[タイムアウト設定] セクションでモニタ設定に必要なデータを追加します。次のカスタム・モニタを選択できます。「カスタム・モニタ」、「カスタム・データベース・モニタ」、「カスタム・ログ・ファイル・モニタ」、「カスタム WMI モニタ」。

これらのモニタの設定の詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください。

HP SiteScope (11.30) 241/1392ページ

## 例：カスタム・ログ・ファイル・モニタの設定

ログ ファイル モニタ設定

メイン設定

サーバ:

SiteScope Server

サーバの参照

リモートサーバの追加

\* ログ ファイルのパス:

\* 警告の実行:

ログ エントリが一致するたび

\* 最初から確認:

毎回

内容の照合:

/([a-z])=([0-9]+),\*([a-z])\*=([0-9]),\*([a-z])\*=([0-9]),\*([a-z])\*=([0-9]),\*([a-z])\*=([0-9])/

ツールを開く

詳細設定

ログ ファイルのエン...

windows-1252

ルール ファイルのパス:

照合値のラベル:

:1, val1, disk2,val2,disk3,val3,disk4,val4,disk5,val5

☐ マルチライン一致
 ☐ サーバサイド プロセス
 ☐ ファイルが見つからない場合、エラーにしない

タイムアウト設定

☐ タイムアウトの有効化
 ☐ タイムアウトの後、ファイルの末尾から読み込みを続行します

タイムアウトの後のス...

Warning

タイムアウト (秒単位):

60

例で使用された完全な文字列は：

**内容の照合：** /([a-z])=([0-9]+),\*([a-z])\*=([0-9]),\*([a-z])\*=([0-9]),\*([a-z])\*=([0-9]),\*([a-z])\*=([0-9])/

**照合値のラベル：** disk1,val1,disk2,val2,disk3,val3,disk4,val4,disk5,val5

### 4. データ処理スクリプトの作成

「カスタム モニタ設定」パネルの「データ処理スクリプト」セクションで、収集したデータを処理するためのスクリプトを入力します。

このスクリプトでは、**setCIHint** メソッドを使用して、複数のメトリックに対してCI 解決のヒントを指定します。ヒントで使用する形式の詳細については、「[CI 解決のヒントの形式](#)」(398ページ)を参照してください。

**注:** サンプル・データ処理スクリプトはこの PDF に添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、**【表示】** > **【ナビゲーション パネル】** > **【添付**

**ファイル**】を選択して、**Custom\_Monitor\_Data\_Processing\_Script.txt** を選択します。

テンプレート・モードで、サンプル・データ処理スクリプトのあるカスタム・モニタを含むテンプレートで作業する場合、変数 SERVER\_NAME も定義する必要があります。テンプレートをデプロイするとき、サーバ名の値を入力する必要があります。

## 5. カスタム・トポロジ・スクリプトの作成

【HP 統合設定】パネルで、トポロジ・スクリプトを作成して CI を BSM にレポートする方法を定義します。

- a. 【BSM 統合データとトポロジ設定】セクションで、**【カスタム トポロジ スクリプト】** オプションを選択して、HI 割り当てで定義された CI を報告するカスタム・トポロジ・スクリプトを作成します。

CI の monitored\_by 属性については SiteScope を入力する必要があります。これは **「HI 割り当ての定義」** (239ページ) の HI 割り当てで使ったのと同じ値です。

**注:** サンプル・カスタム・トポロジ・スクリプトはこの PDF に添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、**【表示】 > 【ナビゲーションパネル】 > 【添付ファイル】** を選択して、**Custom\_Monitor\_Topology\_Script.txt** を選択します。

例で、<IP Address>、<name>、および <Server DNS name> を適切な値に置き換えます。

**ヒント:** モニタのトポロジ設定を変更してから 10 分以内に BSM を再起動した場合、SiteScope の再同期を実行することをお勧めします。これを行うには、**【プリファレンス】 > 【統合プリファレンス】 > 【BSM 統合】 > 【BSM プリファレンス利用可能操作】** を選択し、**【再同期化】** をクリックします。

- b. 【インジケータ 設定】セクションで、**「HI 割り当ての定義」** (239ページ) の手順の HI 割り当てで使った HI を使用する HI マッピングを設定します。

**注:** 同じメトリックに一致する別の CI タイプを持つ複数のインジケータ・マッピングを定義しないでください。SiteScope でのインジケータ・マッピングの詳細については、**「インジケータのモニタへのマッピング」** (234ページ) を参照してください。または、BSM の **【管理】 > 【システム可用性管理】 > 【メトリクスとインジケータ】** でマッピングを定義して、**【変更の適用】** をクリックします。マッピングは SiteScope にダウンロードされ、ユーザ・インターフェースに表示されます。BSM のマッピングの定義の詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「インジケータ割り当ての作成および管理方法」を参照してください。



例：コンピュータ CIタイプのインジケータ・マッピング

インジケータ 設定

測定値パターン	CI タイプ	インジケータ
/[a-z].*/	Computer	ホスト ディスク使用率
*	ConfigurationItem	レガシー システム
123	Computer	CPU 負荷

\*注: インジケータ設定はユーザによって変更されました

6. 結果の表示

BSM で HI 割り当てを設定し、SiteScope でトポロジ・スクリプトを含むモニタ設定をした後、モニタを実行できます。モニタの実行が完了した後、BSM のサービス状況で結果を表示できます。

このモニタの報告されたCIを表示するビューを作成することをお勧めします。モニタを保存してモニタが実行した後、作成したビューのBSM のサービス状況で結果を表示できます。

例：サービス状況 でこのモニタについてレポートされるCIに対して作成されたビュー

MyBSMアプリケーション

名前	状態	ビジネスの影響	確認	システム
my custom log monitor	-	-	-	システム パフォーマンス
vmammd147	✖			✖

例：サービス状況 での監視対象マシンについてのインジケータの状態結果

CPU Utilization on SiteScope 447 (SiteScope Monitor)

KPIに関する状況インジケータ

KPI	状況インジケータ	状態	値
✖ システム パフォーマンス	CPU 負荷	⚠ ビジー	0.0
	ホスト ディスク使用率	✖ 危険域	N/A

詳細 - ホスト ディスク使用率

ステータス:	危険域
計算ルール:	最悪の子ルール
保留ステータス開始日:	2012/6/15 13:10
測定値	c - 70.0



## 初期設定でトポロジ・データをレポートしない モニタ

次に、ホストまたはサーバのステータスを監視しないモニタのリストを示します。

**注:** これらのモニタで CI 情報を BSM にレポートするには、CI タイプを選択して必要な CI のキー属性を入力し、モニタにリンクしている CI タイプに関連するインジケータを選択する必要があります。タスクの詳細については、「[トポロジ・レポートの設定方法](#)」(233ページ)を参照してください。

- コンポジット・モニタ
- カスタム・ログ / データベース / WMI モニタ
- ディレクトリ・モニタ
- ダイナミック JMX モニタ
- e ビジネス・トランザクション・モニタ
- ファイル・モニタ
- フォーミュラ・コンポジット・モニタ
- HP NonStop イベント・ログ・モニタ
- JMX モニタ (WebLogic を監視していない)
- リンク・チェック・モニタ
- ログ・ファイル・モニタ
- マルチ・ログ・モニタ
- スクリプト・モニタ
- SNMP トラップ・モニタ
- システム・ログ・モニタ
- URL モニタ
- URL 内容モニタ
- URL リスト・モニタ
- URL シーケンス・モニタ
- XML メトリクス・モニタ

## 測定値ごとに CI をレポートするモニタ

次のモニタは、測定値ごとの CI をレポートします。これらのモニタには複数の CI があるため、これらのモニタの CI は変更できず、これらのモニタ・タイプのインジケータ・マッピングは BSM からのみ (【SAM 管理】 > 【メトリックとインジケータ】 タブで) 変更できます。

- SAP CCMS モニタ
- SAP ワーク・プロセス・モニタ
- Siebel アプリケーション・サーバ・モニタ
- Siebel Web サーバ・モニタ
- Solaris ゾーン・モニタ
- VMware ホスト CPU モニタ
- VMware ホスト・メモリ・モニタ
- VMware ホスト・ネットワーク・モニタ
- VMware ホスト状態モニタ
- VMware ホスト・ストレージ・モニタ
- VMware パフォーマンス・モニタ

**注:** モニタのカスタム・トポロジ・ノードを定義し、そのホスト名を指定することができます。この BSM に接続している SiteScope にリモート・サーバがある場合、リモート・サーバの環境に応じて、この CI の CI タイプは自動的に **Unix** または **Windows** に変わります。

## 第21章: HP の負荷テスト製品との統合

SiteScope によって収集されたパフォーマンス・メトリックは、HP LoadRunner、HP Performance Center などの負荷テスト解析製品やソリューションで利用できます。負荷テスト・シナリオを実行するときは、場合によってはアプリケーションを実行するシステムから利用できるソフトウェアおよびハードウェアのさまざまなパフォーマンス測定値と、テスト中のアプリケーションの動作を、相互に関連付ける必要があります。

### 学習事項

#### 本項の内容

- 「サポートされる SiteScope インストール/ライセンス・エディション」(247ページ)
- 「サポートされる LoadRunner/Performance Center バージョン」(247ページ)
- 「SiteScope と SiteScope for Load Testing の違い」(248ページ)

#### サポートされる SiteScope インストール/ライセンス・エディション

LoadRunner または Performance Center との統合は次のいずれかを使用した場合にサポートされます。

- Premium, Ultimate または System Collector エディション・ライセンスを使用した通常の SiteScope インストール。
- SiteScope for Load Testing ライセンスを使用した SiteScope for Load Testing インストール。これは、SiteScope for Load Testing インストール直後にアクティブ化される無償の非 IP ロック・ライセンスです。このライセンスは、25 個の OS インスタンスおよび 25 個の URL の制限付きで提供されます。

SiteScope エディションおよびライセンスの詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「SiteScope エディション」および「SiteScope ライセンス」の項を参照してください。

#### サポートされる LoadRunner/Performance Center バージョン

本リリースでサポートされている LoadRunner と Performance Center のバージョンの一覧については、次の HP 統合サイトを参照してください。

- HP Performance Center:<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=599>
- HP LoadRunner:<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=587>

**注:** アクセスには HP Passport ログインが必要です（HP Passport に登録するには、<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html> にアクセスしてください）。

## SiteScope と SiteScope for Load Testing の違い

LoadRunner または Performance Center を使用する場合は、製品で利用可能なネイティブ・ソリューションを介するか、SiteScope を介して、パフォーマンス・データ収集オプションを選択できます。SiteScope では、さまざまな場合について、多くの監視オプションが用意されており、システムおよびアプリケーションのパフォーマンスのカバレッジが拡大されます。

SiteScope for Load Testing は、負荷テスト・シナリオ用に最適化されており、LoadRunner と Performance Center のユーザを対象としている、SiteScope のインストール・オプションです。このインストール・タイプでは、製品環境の監視は意図されていません。したがって、通常の SiteScope インストールで利用可能な一部のオプションは、SiteScope for Load Testing では使用できません。

通常の SiteScope と SiteScope for Load Testing には、主として次の違いがあります。

詳細	SiteScope for Load Testing	SiteScope
SiteScope モニタの最小実行頻度	1 秒*	15 秒
標準設定の実行頻度（新規モニタ作成時に利用可能）	5 秒*	10 分
SiteScope レポート	利用不可	利用可能
解析	利用不可	利用可能
BSM との統合	サポートされていません	サポート
*SiteScope for Load Testing モニタの最小実行頻度と標準設定の実行頻度は、API 実行の場合のみ適用されます。		

**注:** SiteScope と LoadRunner または Performance Center の統合は、SiteScope ではなく、それぞれの負荷テスト製品で設定する必要があります。詳細については、『HP LoadRunner Controller ユーザーズ・ガイド』の「監視環境の設定方法 - ワークフロー」、 「モニタ・ユーザ・インタフェースの設定」、 「SiteScope リソース監視」、 および『HP Performance Center Administrator Guide』の「Adding Hosts」を参照してください。

## ヒント / トラブルシューティング

- SiteScope と LoadRunner の統合を有効化するには、SiteScope でのユーザ認証を無効にする必要があります。詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」 \(744ページ\)](#)を参照してください。
- 通常の SiteScope インストールで LoadRunner または Performance Center を使用するには、**【プリファレンス】 > 【インフラストラクチャ プリファレンス】 > 【サーバ設定】 の【最小限のモニタ実行間隔（秒）】**の値を 1（秒）に設定して、間隔の検証エラーを回避する必要があります。

- SiteScope for Load Testing と BSM の統合はサポートされていません。
- SiteScope for Load Testing では、ダッシュボード・モニタ履歴表示はサポートされていません。
- SiteScope と LoadRunner の統合で、LoadRunner 12.00 より前のバージョンを使用した場合、ユーザ認証はサポートされません。

## 第22章: HP Application Lifecycle Management との統合

SiteScope 関連のデータを、BSM から Application Lifecycle Management (ALM) へ、またはその逆の方向にエクスポートすることができます。データを ALM にエクスポートすることによってスクリプトや実稼働環境に似た負荷テストを計画することが可能になります。また、データを ALM からインポートすることでスクリプトやすでにテスト済みの SiteScope 設定を使用できます。

### アクセス方法

BSM では、**【管理】 > 【統合】 > 【Application Lifecycle Management 統合】** を選択します。

## 学習事項

### 本項の内容

- [「BSM \(SiteScope\) から ALM へのデータのエクスポート」\(250ページ\)](#)
- [「ALM から BSM \(SiteScope\) へのデータのインポート」\(250ページ\)](#)

### BSM (SiteScope) から ALM へのデータのエクスポート

単一のアプリケーション向けの SiteScope 設定データをエクスポートできます。エクスポートされたデータには、SiteScope メトリクス、テンプレート、およびテンプレート・データに関する情報が含まれます。これらの情報を運用と開発の間で共有することは、ALM でのスクリプトおよび負荷テストの計画に役立つため、実稼働環境により近い計画を生み出すことができます。

### ALM から BSM (SiteScope) へのデータのインポート

SiteScope 設定テンプレートを含んでいる ALM からデータをインポートできます。これらの情報を運用と開発の間で共有することにより、すでにテスト済みで微調整された SiteScope 設定を使用できるようになります。インポートされた SiteScope 設定テンプレートは、BSM に登録された SiteScope ごとに SiteScope テンプレート・ツリーに保存されます。**AutoSyncContainer** という標準設定のディレクトリが **SiteScope** ルート・フォルダに作成されます。また、テンプレートがインポートされるアプリケーションごとに、アプリケーション名が付いたサブディレクトリが作成されます。

## タスク

### データを BSM から ALM へエクスポートする方法

詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「Application Lifecycle Management 統合」ページを参照してください。

## ALM から BSM (SiteScope) へのデータのインポート方法

## 1. 前提条件

- SiteScope 管理者ユーザはユーザ名とパスワードが設定されている必要があります (これらを空白のままにすることはできません)。
- LW-SSO を使用して統合されているすべての HP ソフトウェア・アプリケーションのパスフレーズ文字列は同一である必要があります。SiteScope の **[プリファレンス]** > **[一般プリファレンス]** > **[LW SSO 設定]** の **[LW SSO Init 文字列]** が BSM の文字列と一致することを確認してください。

## 2. Performance Center で、パフォーマンス・テストを設計および作成します。詳細については、『HP ALM Performance Center ユーザおよび管理者ガイド』のパフォーマンス・テストの設計方法に関するタスクを参照してください。

## 3. .zip ファイルを SiteScope 設定を含んでいる ALM からインポートします。

- a. BSM では、**[管理]** > **[統合]** > **[Application Lifecycle Management 統合]** > **[ALM からインポート]** を選択します。
- b. **[ファイルの選択]** ボックスで、インポートする .zip ファイルへのパスを入力します。または **[参照]** をクリックして必要な .zip ファイルを参照できるダイアログ・ボックスを開きます。  
インポートのための .zip ファイル作成の詳細については、ALM ドキュメントを参照してください。
- c. **[コンテンツのアップロード]** をクリックして、選択された .zip ファイルのコンテンツをアップロードします。アップロードの状態が表示されます。

## 注:

- 以前に ALM からデータをインポートしていた場合、データは削除され最新の .zip ファイルと置き換えられます。以前にインポートされたテンプレートへの変更を失わないようにするには、テンプレートの名前を変更します。
- 同期したテンプレートからすでにモニタをデプロイ済みの場合で、必要なテンプレートを含んでいない別の .zip パッケージをインポートすると、これらのモニタで、削除されることになるテンプレートとのリンクが解除されません。

詳細については、BSM ヘルプにある「Application Lifecycle Management 統合」ページを参照してください。

## 4. SiteScope で変更を編集してテンプレートに適用する - オプション

インポートされた SiteScope 設定テンプレートは、BSM に登録された各 SiteScope 内の次の場所にコピーされます。

**テンプレート > SiteScope のルート・フォルダ > AutoSyncContainer > < アプリケーション名 >**

テンプレートに変更を加えて、そのテンプレートを手動でデプロイできます。テンプレートのデプロイの詳細については、[「テンプレートのデプロイ」\(861ページ\)](#)を参照してください。

**ヒント:** インポートされたテンプレートを変更する場合、次回の ALM からのデータのインポート時に変更内容が上書きされることがないように、そのテンプレートの名前を変更することを推奨します。

テンプレート変更適用ウィザードを使用してテンプレートへの変更を適用することも可能です。詳細については、[「テンプレート変更の適用」\(891ページ\)](#)を参照してください。



## 第4部: モニタとグループ

グループ・コンテナでは、作成したモニタ・インスタンスを整理できます。作成したモニタ・インスタンスは、SiteScope モニタ・グループ・コンテナ内に追加する必要があります。詳細については、[「SiteScope のグループの作成」\(254ページ\)](#)を参照してください。

SiteScope モニタは、エンタープライズ・ビジネス・システムで使用する多種多様なシステムおよびアプリケーションへの接続や照会を自動的に行うツールです。さまざまなモニタ・タイプがあり、システムごとに固有のアクションを実行する汎用的な機能が装備されています。1つのモニタ・タイプのインスタンスを1つ以上作成し、SiteScope にIT インフラストラクチャの特定の要素をどのように監視するかを指示できます。詳細については、[「SiteScope のモニタの作成」\(261ページ\)](#)を参照してください。

カスタム・モニタを作成して、標準 SiteScope モニタの機能を拡張できます。これを行うには、所定の SiteScope モニタでサポートされない環境の独自のソリューションを作成します。詳細については、[「カスタム・モニタの作成」\(328ページ\)](#)を参照してください。

ベースラインを作成したり、時間帯または日付に基づいて特定のしきい値をスケジュールしたりできます。ベースラインによって、アプリケーションの通常のパフォーマンスを把握でき、またパフォーマンスの問題が単独のインシデントなのか、重大なパフォーマンス低下傾向の兆候なのかを判別できます。詳細については、[「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」\(335ページ\)](#)を参照してください。

また、計算済みメトリック（既存の SiteScope メトリックに対して算術関数や論理演算を実行して生成されるメトリック）に基づいてしきい値を設定することもできます。詳細については、[「計算済みメトリックの作成」\(369ページ\)](#)を参照してください。

SiteScope には、IT 環境で変更が発生するたびにカウンタを追加、削除することで、長期間にわたって自動更新されるさまざまなダイナミック・モニタが用意されています。詳細については、[「ダイナミック・モニタリング・メカニズム」\(381ページ\)](#)を参照してください。

SiteScope には、XML ドキュメントを監視する機能も含まれています。詳細については、[「XML ドキュメントの監視」\(384ページ\)](#)を参照してください。

### ヒント:

- 特定の SiteScope モニタのモニタ設定の詳細（サポートされているバージョンやプラットフォーム、およびモニタに設定できるカウンタまたはメトリックのリストを含む）については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』のモニタ・タイプに関する説明を参照してください。
- モニタの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、[「SiteScope 公開 API」\(171ページ\)](#)を参照してください。

## 第23章: SiteScope のグループの作成

グループ・コンテナは、モニタのデプロイメントおよび関連する警告を自分の環境や組織で管理可能かつ効果的にするために作成します。また、同じような警告を生成する必要があるモニタのグループを作成すると便利です。

### アクセス方法

【**モニタ**】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope コンテナまたは既存のモニタ・グループを右クリックして、【**新規作成**】>【**グループ**】を選択します。

## 学習事項

### 本項の内容

- [「SiteScope グループの概要」\(254ページ\)](#)
- [「既存のグループのコピーまたは移動」\(255ページ\)](#)
- [「グループの警告とレポートの作成」\(255ページ\)](#)

### SiteScope グループの概要

グループを作成することでグループに環境を反映させることができます。また、SiteScope のモニタを整理することもできます。グループは複数のモニタの集まりです。グループには URL モニタなどのいずれかのタイプのモニタや、特定のトランザクションに関連する Web サーバ、URL、ネットワーク・パラメータなどの Web 環境の特定の部分を追跡する複数の異なるモニタが含まれる場合があります。

作成する各 SiteScope モニタのインスタンスは、最上位レベルのグループまたはほかのグループ・コンテナ内にネストされたサブグループのいずれかである SiteScope グループに属する必要があります。

たとえば、システムで実行されている多数のプロセスを監視する場合、それらのプロセスのすべてを「**プロセス**」という名前の 1 つのグループに含めることができます。リモート・モニタを使用して複数のマシンのプロセスを監視する場合は、監視する各リモート・マシンの名前を付けた複数のサブグループで「**プロセス**」と呼ばれるプライマリ・グループを作成できます。

新規モニタを追加するときには、既存のグループに追加するか、モニタのグループを先に作成しておく必要があります。グループは個別に SiteScope に追加できます。またはテンプレートを使用して、複数のモニタと一緒にグループをデプロイできます。テンプレートの詳細については、[「テンプレートの作成」\(792ページ\)](#)を参照してください。

複数のグループ・オブジェクトに対して一括操作を実行するには、モニタとグループの管理機能を使用します。この機能では、複数の SiteScope オブジェクトに対してグループ内のモニタの移動、コピー、削除、実行、モニタの有効化/無効化、関連付けられた警告アクションの有効化/無効化を実行

できます。詳細については、「[複数のグループやモニタに対するアクションの実行](#)」(90ページ)を参照してください。

**注:** グループを使った作業では、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、「[SiteScope 公開 API](#)」(171ページ)を参照してください。

### 既存のグループのコピーまたは移動

グループの作成に加え、既存のグループを SiteScope ツリー内の新しい場所へコピーまたは移動できます。グループをコピーまたは移動すると、グループの設定とグループ内のすべてのモニタが複製されます。通常、グループをコピーまたは移動した後に、グループおよびグループ内の各モニタの設定プロパティを編集し、モニタに一意のシステムまたはアプリケーションを指定する必要があります。指定しない場合、グループ内のモニタでは元のグループの監視アクションが複製されます。

**ヒント:** 冗長な監視につながるグループのコピーを実行する代わりに、テンプレートを使用して共通するグループおよびモニタ設定パターンをより効率的に複製します。テンプレートを使った作業の詳細については、「[テンプレートの作成](#)」(792ページ)を参照してください。

#### 注:

- SiteScope 内のグループ識別の問題を回避するには、オブジェクト名を親グループ内で一意にする必要があります。グループをまったく同じ名前のグループが含まれている別のグループにコピーまたは移動すると、SiteScope によって、コピーまたは移動したグループの名前の最後に自動的にサフィックス（数字）が追加されます。
- モニタ・グループをそのサブグループに移動またはコピーすることはできません。

### グループの警告とレポートの作成

グループを作成したら、そのグループに警告とレポートを作成できます。標準設定で、グループの警告とレポートはグループ内のすべてのモニタに関連付けられます。

警告は、グループ・コンテナに警告定義を追加して作成します。つまり、グループのいずれかのモニタで、警告に定義された状態カテゴリ（エラー、警告など）がレポートされると、グループ警告が起動されます。[警告ターゲット] 選択ツリーを使用して、グループ内の 1 つ以上のモニタを除外するようにグループ警告を設定できます。このトピックの詳細については、「[SiteScope 警告の設定](#)」(1231ページ)を参照してください。

グループ・レポートは、グループ・コンテナにレポート定義を追加して作成します。[レポート対象のモニタおよびグループ] 選択ツリーを使用して、グループ内の 1 つ以上のモニタを除外するようにグループ・レポートを設定できます。このトピックの詳細については、「[レポート](#)」(1310ページ)を参照してください。


グループを削除すると、SiteScope によって適用されるモニタ・アクションが削除され、グループに関連付けられている警告アクションが無効化されます。

# タスク

## グループの管理方法

### 1. SiteScope グループとサブグループの作成

実装するモニタ階層に従ってグループを作成します。たとえば、場所、サーバ・タイプ、ネットワーク・リソースなどのグループを作成できます。

- **新しいグループを作成する。** グループを作成する SiteScope またはグループ・コンテナを右クリックして、**【新規作成】** > **【グループ】** を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、後述の「UI の説明」の項を参照してください。
- **既存のグループをコピーまたは移動してグループを作成する。**
  - コピーするグループを右クリックし、**【コピー】** をクリックします。グループ・コンテナのコピー先のモニタ・ツリー内で右クリックして、**【貼り付け】** をクリックします。
  - 移動するグループを右クリックし、**【切り取り】** をクリックします。グループ・コンテナの移動先のモニタ・ツリー内で右クリックして、**【貼り付け】** をクリックします。
  - 複数のモニタとグループをターゲット・グループに移動またはコピーするには、モニタ・ツリー・ツールバーの **【モニタとグループの管理】**  ボタンをクリックします。コピーまたは移動するオブジェクトを選択して **【コピー】** / **【切り取り】** をクリックします。宛先グループを選択して **【貼り付け】** をクリックします。詳細については、「[複数のグループやモニタに対するアクションの実行](#)」(90ページ)を参照してください。

### 2. グループの詳細に URL リンクを追加 - オプション

グループの詳細情報を追加し、ハイパーリンクの HTML タグを含めると、SiteScope ダッシュボードから URL にアクセスできるようになります。

- a. ハイパーリンクを追加するには、選択したグループの **【プロパティ】** タブを開きます。
- b. **【一般設定】** パネルを展開し、**【グループの詳細】** フィールドに URL を入力します。例: `<a href="http://www.hp.com">My Link</a>`。
- c. **【ダッシュボード】** タブをクリックします。選択したグループの **【詳細】** フィールドに URL が表示されます。URL を開くには、グループの **【詳細】** フィールドをクリックしてからリンクをクリックします。

**ヒント:** ダッシュボードでセルのすべての内容が表示されるように行の高さを自動的に調整するには、**【ダッシュボードの設定】** で **【折り返しテキスト】** オプションを選択します。詳細については、「[【ダッシュボードの設定】ダイアログ・ボックス](#)」(1060ページ)を参照してください。

### 3. モニタ・インスタンスの作成

グループに追加するモニタ・インスタンスを選択します。

タスクの詳細については、[「モニタを作成、デプロイする方法」\(270ページ\)](#)を参照してください。

#### 4. グループの依存関係の設定 - オプション

グループの依存関係を設定し、このグループ内のモニタの実行を、別のモニタの状態に依存させることができます。

概念の詳細については、[「グループの依存関係の監視」\(264ページ\)](#)を参照してください。

**例：**【依存対象】ボックスで選択したモニタで、【依存条件】ボックスで選択した条件がレポートされるかぎり、設定するグループ内のモニタは通常どおりに実行されます。この例では、設定するグループは、「Service」モニタで「正常」という状態がレポートされる場合にのみ有効になります。

The screenshot shows a dialog box titled '依存関係' (Dependency). Inside, there are two fields: '依存:' (Dependency) and '依存条件:' (Dependency Condition). The '依存:' field contains the text 'Service: HTTP on SiteScope Server' and has a small icon to its right. The '依存条件:' field contains the text '正常' (Normal) and has a dropdown arrow to its right.

#### 5. グループ警告の設定 - オプション

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスが変化したときに通知を送信する警告を作成します。

グループの警告を作成するには、グループを右クリックして、**【新規作成】 > 【警告】**を選択します。各警告スキームに1つ以上の警告アクションを作成できます。**【新規警告】**ダイアログ・ボックスで**【新規警告アクション】**をクリックすると、**【警告アクション】**ウィザードが起動します。

タスクの詳細については、[「警告の設定方法」\(1235ページ\)](#)を参照してください。

#### 6. グループ・レポートの設定 - オプション

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

グループのレポートを作成するには、グループを右クリックして、**【レポート】**をクリックします。レポート・タイプを選択し、レポート設定を指定します。

タスクの詳細については、[「SiteScope レポートの作成」\(1311ページ\)](#)を参照してください。

#### 7. 結果

モニタ、警告、レポートを含むモニタ・グループが、モニタ・ツリーに追加されます。

## UI の説明

### [新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス

[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックスでは、SiteScope の新規グループ、または既存のモニタ・グループのサブグループを定義できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>Only a SiteScope administrator user, or a user granted the appropriate permissions can edit, refresh, or disable groups.ユーザ権限の詳細については、<a href="#">「権限」(757ページ)</a>を参照してください。</li><li>コンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、モニタは削除できません。依存関係があるモニタ・グループを削除するには、各依存関係の[警告ターゲット]と[レポートのターゲット]からモニタ・グループを削除してから、モニタ・グループを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるグループ・モニタは削除できます。</li><li>グループを使った作業では、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、<a href="#">「SiteScope 公開 API」(171ページ)</a>を参照してください。</li></ul>
-------	--


[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックスに含まれている要素は次のとおりです。

### 一般設定

UI 要素	詳細
グループ名	<p>グループの内容、またはグループに追加されたモニタの目的を説明する名前。 &lt;host_name&gt;, &lt;business_unitresource_name&gt;, &lt;resource_type&gt; など。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"><li>グループ名には、<b>sitescope</b> を使用することはできません。また、`;"&amp; &lt;&gt;`の各文字を含めることもできません。</li><li>グループ名では大文字と小文字が区別されます。つまり、それぞれの名前の大文字と小文字の構成が異なる場合は、同じ名前のグループを複数使用できます。</li></ul>
グループの詳細	<p>グループの詳細。テキスト・スタイルの一般的な HTML タグ (&lt;BR&gt;, &lt;HR&gt;, &lt;B&gt; など) とハイパーリンクを含めることができます。詳細は、SiteScope ダッシュボードでグループのプロパティを表示または編集するときのみ表示されます。ハイパーリンクの追加の詳細については、<a href="#">「グループの詳細に URL リンクを追加 - オプション」(256ページ)</a>を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
	<p><b>注：</b>このフィールドでは、JavaScript、iframes、frames やその他の高度な機能はサポートされていません。このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードなど）を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• タグ <b>:script, object, param, frame, iframe</b>。</li> <li>• <b>on</b> で始まる属性を含むタグは拒否される。例: <b>onhover</b>。</li> <li>• 値に <b>javascript</b> が指定された属性。</li> </ul>
ソース・テンプレート	グループがテンプレートから作成された場合、ソース・テンプレートのパスを表示する。古いバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートをデプロイして使用している場合、ソース・テンプレートのパスを入力して、ルート・グループをソース・テンプレートに手動で関連付けることができます。
クリア	ルート・グループに関連付けられているソース・テンプレートを削除する。

## 依存関係

UI 要素	詳細
依存対象	<p>このモニタ・グループの実行の依存の対象とするモニタ。</p> <p>【<b>依存対象</b>】  ボタンをクリックして【依存の対象モニタの選択】ダイアログ・ボックスを開き、依存関係を作成するモニタを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">【依存対象モニタの選択】ダイアログ・ボックス</a>」(324ページ)を参照してください。</p> <p>概念の詳細については、「<a href="#">グループの依存関係の監視</a>」(264ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定</b> :モニタ・グループに依存関係は設定されません。</p>
依存条件	<p>現在のモニタ・グループが通常どおりに実行されるために、<b>依存の対象モニタ</b>が満たす必要のある<b>依存条件</b>。選択した条件が満たされない場合、【<b>依存対象</b>】ボックスで選択したモニタは自動的に無効になります。条件は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 良好</li> </ul>



UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"><li>エラー</li><li>利用可能</li></ul>

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。  概念の詳細については、 <a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」(78 ページ)</a> を参照してください。
タグの追加	〔新規タグ〕ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「〔新規タグ〕 / 〔タグの編集〕ダイアログ・ボックス」(87ページ)</a> を参照してください。



## 第24章: SiteScope のモニタの作成

SiteScope では、設定済みのモニタとカスタム・モニタを使用して、インフラストラクチャのコンポーネントからデータ・サンプルを収集します。これらは、さまざまなシステムやアプリケーションに接続してクエリするツールです。監視するリモート・サーバからデータを収集するようにモニタを設定します。

### アクセス方法

【**モニタ**】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、グループを右クリックして【**新規作成**】>【**モニタ**】を選択します。

## 学習事項

### 本項の内容

- ・ [「モニタ・タイプ」](#) (261ページ)
- ・ [「リモート・サーバの監視」](#) (264ページ)
- ・ [「グループの依存関係の監視」](#) (264ページ)
- ・ [「状態のしきい値の設定」](#) (267ページ)

### モニタ・タイプ

SiteScope モニタは、その可用性と、その機能を反映したカテゴリを示すクラスに従ってグループ化されます。SiteScope エージェントに新規モニタを追加するように選択すると、製品のインタフェースにそのエージェントについて利用可能なモニタ・タイプのリストがアルファベット順に、カテゴリで分類されて表示されます。モニタのカテゴリの可用性は、モニタのクラスによって決まります。

**注:** 各モニタにアクセスするには、ユーザ権限と資格情報が必要となります。必要な権限と資格情報、および各モニタで使用する対応プロトコルの詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「モニタの権限と資格情報」を参照してください。

本項では、モニタのクラスとカテゴリのリスト形式について説明します。各モニタのカテゴリに含まれるモニタのリストを確認するには、[「モニタ・カテゴリ・リスト」](#) (277ページ)を参照してください。

### 標準モニタ

標準モニタ・カテゴリは、SiteScope の一般ライセンスで利用可能なモニタのカテゴリです。これらのモニタのカテゴリには、汎用的なモニタのカテゴリが数多く含まれています。

- ・ **アプリケーション・モニタ**: このカテゴリのモニタは、サードパーティ・アプリケーションを監視します。SiteScope では、これらのモニタを使用して監視対象アプリケーションにアクセスし、

データを取得できます。

- **ビッグ・データ** : このカテゴリのモニタでは、ビッグ・データ・プラットフォームを監視し、ビッグ・データ・インフラストラクチャの状況やパフォーマンスをリアルタイムに表示して、その洞察を得ます。
- **データベース・モニタ** : このカテゴリのモニタは、さまざまなタイプのデータベース・アプリケーションを監視します。特定のデータベース・アプリケーションのデータにアクセスするモニタと、どのデータベース・アプリケーションの監視でも設定可能な汎用モニタがあります。
- **汎用モニタ** : このカテゴリのモニタは、異なるタイプの環境を監視します。これらのモニタは、設定に応じてネットワーク、アプリケーション、データベースを監視できます。
- **メディア・モニタ** : このカテゴリのモニタは、メディア・ファイルとストリーム・データを再生するアプリケーションを監視します。
- **ネットワーク・モニタ** : このカテゴリのモニタは、ネットワークの状況と可用性を監視します。
- **サーバ・モニタ** : このカテゴリのモニタは、サーバの状況と可用性を監視します。
- **仮想化とクラウド・モニタ** : このカテゴリのモニタは仮想化された環境とクラウド・インフラストラクチャを監視します。
- **Web トランザクション・モニタ** : このカテゴリのモニタは、Web ベースのアプリケーションを監視します。

### カスタマイズ可能モニタ

カスタム・モニタは、インフラストラクチャ・システムおよびアプリケーションの可用性とパフォーマンスの追跡するための標準の SiteScope モニタの機能を拡大します。カスタム・モニタを使用すると、所定の SiteScope モニタでサポートされない環境の独自のソリューションを展開できます。

データを収集する独自のモニタを作成して、収集したデータを処理してメトリクスを作成するスクリプトを定義できます。カスタム・モニタが実行されるたびに、メトリクスを更新してスクリプトで定義されたメトリクスのステータスを返します。

カスタム・モニタを HP Live Network にパブリッシュして、ほかの SiteScope ユーザーと共有できます。カスタム・モニタの使用に関する詳細は、[「カスタム・モニタの作成」\(328ページ\)](#)を参照してください。

### ダイナミック・モニタ

ダイナミック・モニタは、ユーザの IT 環境の変化に合わせて SiteScope の監視設定を自動的に調整します。

SiteScope には、時間の経過に伴い自動的に更新されるさまざまな動的モニタが用意されています。これにより、仮想マシンが別のホスト・システムに移動した際に、カウンタとしきい値が追加および削除されます。また、監視データ履歴に基づいてしきい値が動的に変更されるベースライン設定もサポートされています。

該当するダイナミック・モニタを次に示します。

- ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ
- ダイナミック JMX モニタ
- 汎用ハイパーバイザ・モニタ
- Hadoop モニタ
- HP Vertica JDBC モニタ
- KVM モニタ
- VMware データストア・モニタ
- VMware ホスト・モニタ

### 統合モニタ

統合モニタは、サードパーティ製のドメイン・マネージャまたはアプリケーション（通常、Enterprise Management Systems（EMS））のデータをキャプチャして BSM に転送するために使用されます。

これらのモニタ・タイプには、追加のライセンスが必要です。また、ほかの HP 製品の一部としてのみ使用できます。統合モニタ機能の詳細については、[「統合モニタの概要」\(388ページ\)](#)を参照してください。

### ソリューション・テンプレート・モニタ

ソリューション・テンプレート・モニタは、特定のアプリケーションや環境向けに新しい監視機能を有効にする特殊なクラススのモニタです。これらのモニタ・タイプは、ソリューション・テンプレートの一部としてほかの標準モニタ・タイプと一緒に自動的にデプロイされ、設定のベスト・プラクティスを取り込んだ監視ソリューションを提供します。ソリューション・テンプレートはデプロイ後、ほかのモニタ・タイプと同じ手順を使用して編集または削除できます。詳細については、[「ソリューション・テンプレートのデプロイ」\(910ページ\)](#)を参照してください。

SiteScope には、標準の SiteScope モニタ・タイプとソリューション固有のモニタを含む次のソリューション・テンプレートが用意されています。

- Active Directory（グローバル・カタログあり/なし）
- AIX ホスト
- Hadoop
- HP Quality Center
- HP サービス・マネージャ
- HP Vertica
- JBoss Application Server
- Linux ホスト（OS）
- Microsoft Exchange
- Microsoft IIS サーバ
- Microsoft Lync サーバ

- Microsoft SharePoint
- Microsoft SQL Server
- Microsoft Windows Host
- .NET
- Oracle データベース
- SAP アプリケーション・サーバ
- Siebel アプリケーション/ゲートウェイ/Web サーバ (UNIX および Windows 用)
- VMware キャパシティ管理
- VMware ホスト CPU/メモリ/ネットワーク/状態/ストレージ
- VMware Host For Performance Troubleshooting
- WebLogic アプリケーション・サーバ
- WebSphere アプリケーション・サーバ

### リモート・サーバの監視

リモート・サーバ上で実行されているサービスおよびアプリケーションを監視するための要件は、環境のアプリケーションやネットワーク・ポリシーに応じて変わります。一部の SiteScope モニタでは、インターネット・プロトコルを使用して Web システムおよびアプリケーションをテストします。それ以外の SiteScope モニタでは、ネットワーク・ファイル・システム・サービスおよびコマンドを使用してリモート・サーバの情報を監視します。

SiteScope モニタによるリモート・システムへの接続方法の詳細については、[「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」\(480ページ\)](#)および[「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定」\(499ページ\)](#)を参照してください。

### グループの依存関係の監視

1つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタから重複して警告が通知されるのを防ぐには、1つのモニタを選択してシステムの基本的な可用性をチェックし、次にそのシステムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。これにより依存関係が作成され、選択したモニタの状態に応じてモニタ・グループを実行できます。

テンプレートで依存関係を作成するとき、[依存関係] パネルで、依存関係モニタへの完全パスまたは相対パスを入力できます。テンプレートの変更をパブリッシュするときに、SiteScope が依存関係を無視するようにすることもできます。

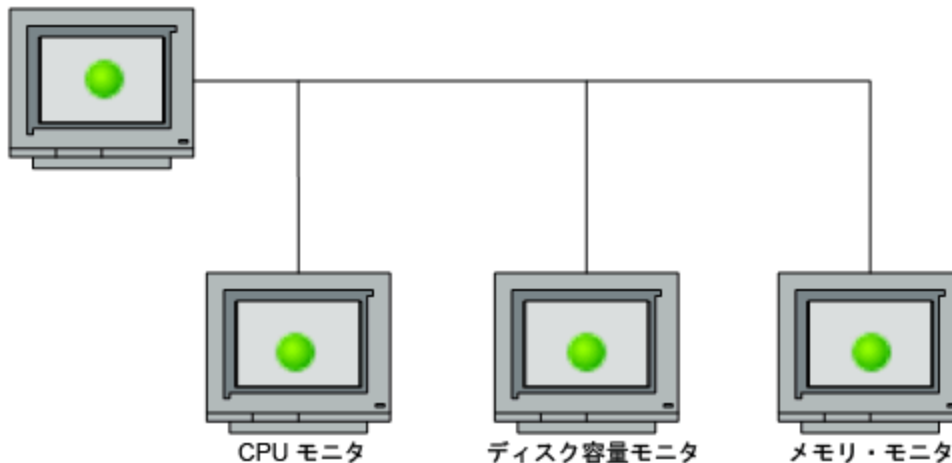
依存関係の設定の詳細については、[「依存対象」\(264ページ\)](#)および[「依存条件」\(266ページ\)](#)を参照してください。

### 依存対象

別のモニタのステータスに応じてモニタを実行するには、このオプションを使用します。このオプションを使用して、1つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタから重複して警告が通知されるのを防ぐことができます。単純なシステム・モニタを1つ作成してシステムの基本的な可用

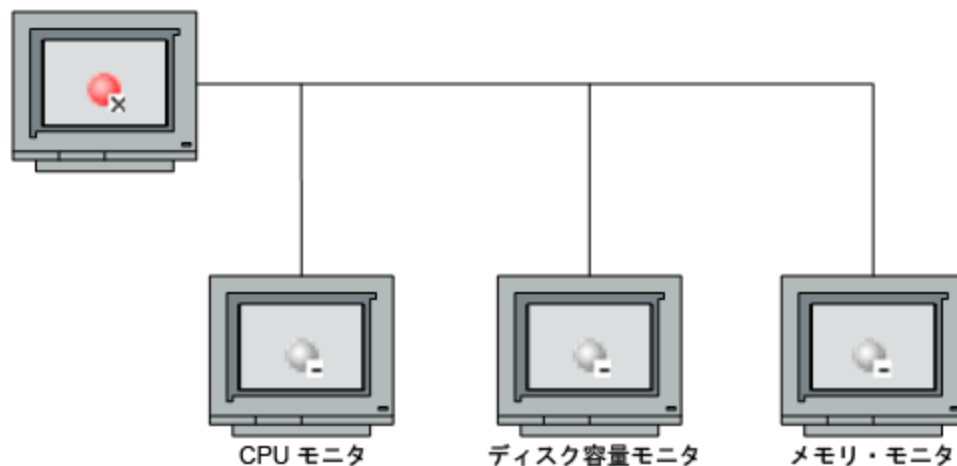
性（システムのハートビート）をチェックし、次にそのシステムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。次の図は、3つのシステム・モニタがサービス・モニタ・インスタンスに依存している依存関係の例を示しています。

サービス・モニタ



詳細テスト・モニタをハートビート・モニタのステータスに依存させるには、ハートビート・モニタを選択します。依存する側のモニタは、依存条件が満たされている場合に実行されます。ハートビート・モニタが対象システムが利用不可になったことを検出すると、依存関係によって自動的にほかのモニタが無効になります。この結果、ほかのモニタで生成されていた警告が無効になるという影響があります。次の図は、依存先のモニタがエラー条件をレポートしたためにモニタが無効になった例を示しています。

サービス・モニタ



標準設定では、モニタ・インスタンスに依存関係は設定されません。別のモニタの状態に応じてモニタを実行するには、依存の対象となるモニタが含まれる SiteScope ツリーでノードを展開し、必要なモニタの横にあるチェック・ボックスを選択します。モニタの依存関係を削除するには、必要なチェック・ボックスをクリアします。

## 依存条件

別のモニタの状態に応じてモニタを実行するように選択した場合（**【依存対象】**設定を使用），このオプションを使用して，現在のモニタを正常に実行するために必要な**【依存対象】**モニタの状態カテゴリまたは条件を選択します。

次の状態カテゴリがあります。

- 良好
- エラー
- 利用可能
- 利用不可

設定対象のモニタは，**【依存対象】**ボックスで選択したモニタがこのボックスで選択した条件をレポートしている場合，正常に実行されます。**【利用不可】**を選択して，**【依存対象】**のモニタがこの状態をレポートすると，現在のモニタは無効になりません。

たとえば，「正常」を選択すると，このモニタは**【依存対象】**ボックスで選択したモニタが「正常」状態をレポートしている場合に有効になります。**【依存対象】**ボックスで選択したモニタがこの設定で選択した条件以外のカテゴリまたは条件をレポートすると，現在のモニタは自動的に無効になります。**「【依存対象】(264ページ)」**の例を参照してください。

## テンプレート・モニタおよびグループを設定するときの依存関係

テンプレートを使ってモニタやグループをデプロイする場合，モニタおよびグループの依存関係もパブリッシュされます。これによってユーザが手動で操作しなくても，テンプレートがグループやモニタをツリーの正しい位置に自動的に書き込んだり，依存関係をいくつでも自動的に作成したりできるようになります。

テンプレート・モニタの依存関係に変更が必要な場合，テンプレートを一度更新するだけで，各モニタを個別に更新しなくても，デプロイされたすべてのグループに変更がパブリッシュされます。詳細については，**「テンプレート変更の適用」(891ページ)**を参照してください。

または，ソース・テンプレートで選択されたモニタやグループに対する依存関係設定によってデプロイされたテンプレート・オブジェクトの依存関係設定が上書きされたくない場合は，**【依存関係】**パネルの**【変更をパブリッシュするときに，依存関係を無視する】**チェック・ボックスを選択します。デプロイされたオブジェクトにテンプレート変更がパブリッシュされた場合，選択されたテンプレート・モニタおよびグループに対する依存関係は無視され，デプロイされたオブジェクトの既存の依存関係が保持されます。

テンプレートを設定する場合，現在のテンプレートの一部ではない既存のモニタに対してモニタおよびグループ依存関係を作成できます。これによって，テンプレート内でツリー構造を再作成する手間を省くことができます。これは，モニタまたはグループ・テンプレートの**【依存対象】**ボックスで，モニタ・ツリーに完全パスまたは相対パスを入力することによって行います。

たとえば，次のように入力します。

- 完全パス：  
<グループ名>\<グループ名>\<モニタ名>

• 相対パス:

..\.\<グループ名>\<モニタ名>

**テンプレートの依存関係の推奨事項:**

使用例	テンプレートの依存関係の推奨事項
すべての依存対象モニタがハートビート・モニタ・グループに含まれている。	依存対象モニタへのフル・パスを使用します。
指定したホストのテンプレートが同じ構造でデプロイされている。  指定したホストにモニタ・グループ（基本的なシステム・モニタ・テンプレートやアプリケーション・テンプレートなど）とハートビート・モニタ・グループがあり、どちらもそのホスト・グループに含まれている。	依存対象モニタへの相対パスを使用します。
テンプレートの依存関係内（SiteScope 11.20 の前に存在）。	テンプレート内の <b>「依存対象」</b> ボタンを使用します（依存対象モニタはデプロイされている必要はありません）。
自己管理依存関係。	モニタの依存関係がモニタ・ビューで設定されている場合、デプロイ済みグループのテンプレートの変更をパブリッシュするときに上書きされないように、 <b>「変更をパブリッシュするときに、依存関係を無視します」</b> オプションを使用します。

状態のしきい値の設定

モニタを設定する場合、モニタのパフォーマンスしきい値が静的しきい値（自分で設定する特定のしきい値）によって決まるのか、履歴トランザクション・データに基づくベースラインを使用して計算されるのかを決定できます。

**ヒント:** 現在のモニタ読み取りがモニタの以前の実行から大幅にそれる場合に、データ・ボラティリティを示すには、手動でしきい値を設定する代わりにベースラインを使用して SiteScope でしきい値を計算すると便利です。詳細については、[「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」\(335ページ\)](#)を参照してください。

レポートされた各モニタ・インスタンスのステータスを判別するロジック条件を設定して、しきい値を手動で設定できます。ステータスは、対象システムに対するモニタ・アクションから返された結果またはメトリックと、そのモニタに設定したしきい値との比較に基づいています。

モニタ・インスタンスごとにステータスのしきい値基準を設定して、**「エラー」**、**「警告」**、**「良好」** のステータスを判別できます。各ステータスのしきい値は、メトリック・パラメータ、ロジック



比較演算, メトリック値で構成され, 必要に応じて指定できます。パラメータと値はモニタ・タイプに応じて異なります。たとえば, CPU モニタのメトリック・パラメータは CPU utilization (%) です。

状態の条件ごとに状態のしきい値基準を1つ以上設定できます。ほとんどのモニタ・タイプには, 3つの状態の条件のそれぞれについて標準設定が1つ含まれています。モニタの標準設定のしきい値は, 最初にモニタを設定するときに表示されます。モニタが利用可能でない場合, **【利用不可な場合】** ドロップダウン・リストのユーザ定義に基づいて状態が割り当てられます。モニタの状態は, **正常**, **警告**, **エラー**だけでなく, **利用不可**になることもあります。警告は, 可用性または状態, あるいはその両方に従って起動されます。

ダイナミック・モニタ (ディスク領域や VMware ホスト) では, 実際の現在のカウンタに変換されるすべての正規表現パターンのしきい値を表示できます。パターンにより, モニタは関連するダイナミック環境コンポーネントでカウンタを用いて自動的にモニタ自体を設定できます。詳細については, 『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「VMware ホスト・モニタ」を参照してください。

#### 本項の内容

- [「スケジュール」 \(268ページ\)](#)
- [「しきい値のステータスの影響」 \(268ページ\)](#)
- [「複数のしきい値の設定」 \(269ページ\)](#)
- [「トポロジを BSM にレポートするときのインジケータ・マッピング」 \(269ページ\)](#)

#### スケジュール

しきい値に対するモニタの実行結果をチェックするタイミングを定義する場合, モニタ・インスタンスの状態を判別するスケジュールを選択できます。これは, モニタ実行の結果としきい値のチェックを特定の日または時間のみに制限する場合に便利です。たとえば, 業務時間中に収集した結果のみに基づいたモニタの状態を必要とする場合があります。しきい値のスケジュール期間外の時間, モニタには**【標準設定の状態】**ボックスに事前定義された状態が割り当てられます。標準設定では, モニタ実行の結果は**【毎日, 全日】**スケジュールに基づいて, しきい値に対しチェックされます。

#### しきい値のステータスの影響

ステータスが変化すると, 次のような影響があります。

- イベントが通知され, モニタまたはモニタが属するグループに関連付けられた警告が起動されます。たとえば, システムが利用不可になったことをモニタが検出した場合, 状態は**正常**から**エラー**に変化し, これがエラー警告への起因となります。
- モニタ間の依存関係の状態に影響する可能性があります。たとえば, **エラー**状態になる変化をモニタが検出すると, それが起因となり, そのシステムに依存するほかの1つ以上のモニタが無効になる場合があります。依存関係の設定の詳細については, [「グループの依存関係の監視」 \(264ページ\)](#)を参照してください。
- SiteScope ダッシュボードのモニタのステータスに影響する可能性があります。ダッシュボードの**【現在の状態】**タブで SiteScope データを表示中に, モニタ・ツリーを掘り下げてモニタ, 測定値の状態, 可用性を表示できます。SiteScope ダッシュボードには, 色付けされた状態と状態アイコン



ンが表示されます。ダッシュボードのユーザ・インタフェースでの測定値の状態と可用性の詳細については、[「SiteScope ダッシュボード - \[現在の状態\] ビュー」 \(1066ページ\)](#)を参照してください。

### 複数のしきい値の設定

3つの設定のいずれかに複数のしきい値条件が定義されている場合、個別のしきい値基準の結果は論理 OR 関係として組み合わせられます。1つの状態設定について、条件の1つ以上が満たされる場合（「エラー条件」設定に対して2つの条件がある場合など）、モニタの状態は対応する状態の条件に設定されます。複数の状態の条件設定について状態の条件が満たされる場合、モニタの状態は最も高い値を持つ状態の条件に設定されます。

たとえば、ある条件が「エラー条件」として選択され、別の条件が「警告条件」として選択された場合、状態は「エラー」としてレポートされます。これは「エラー」の値が最も高く、「警告」の値が次に高く、「正常」の値が最も低いからです。

### トポロジをBSMにレポートするときのインジケータ・マッピング

SiteScope がBSMに対してデータをレポートする際に、構成アイテム (CI) の状況の詳細ビューがインジケータによって表示されます。インジケータの詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「Health Indicators, KPIs, and KPI Domains」を参照してください。

モニタ測定値のしきい値を設定すると、定義済みトポロジと標準設定のマッピングが存在するモニタは、その測定値状態に標準設定で割り当てられるインジケータ状態と重要度値を持つようになります。

- 各インジケータは、複数の状態を持つことができます。たとえば、CPU 負荷を測定する場合、インジケータ状態は「ボトルネック」や「ビジー」になる可能性があります。一方、メモリ負荷を測定する場合は、インジケータ状態が「ページング」や「メモリ不足」になる可能性があります。
- インジケータ重大度は、インジケータ状態に対応した重大度です。使用できるインジケータ重大度レベルは、致命的、重大、軽微、警告、正常域、および不明です。

インジケータ状態は、その測定値に関連付けられているインジケータの状態に存在する利用可能な重大度のうちの最も近い重大度に従って測定値状態に割り当てられます。選択された重大度は、SiteScope しきい値に示されます。

#### 例：

- メモリ・モニタの使用済みパーセントを測定する場合、「エラー」しきい値内の重大度「重大」に測定値がマップされます。これは、インジケータ「メモリ負荷」には、重大度「致命的」を使用できないためです。
- Ping モニタの往復時間を測定する場合、「警告」しきい値内の最も近い重大度レベルは「重大」です。これは、このインジケータ状態には重大度レベル「軽微」が存在しないためです。

しきい値「正常」は、常に重大度レベル「正常域」にマップされます。

インジケータ状態と重大度の関連付けは、ローカル SiteScope サーバでは変更できません。

モニタの [HP 統合設定] パネルで異なるインジケータ・マッピングを選択した場合、そのインジケータ状態と重大度値は [しきい値の設定] で更新されます。

**注:** [インジケータ状態および重大度] ボックスが空の場合、自動的に割り当てられる [常に (標準設定)] の場合を除き、測定値は [サービス状況] で色付けされません。

標準設定のインジケータ割り当て (マッピング) は、SAM 管理のインジケータ割り当て設定に保存されます。詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「インジケータ割り当ての設定」を参照してください。

インジケータ割り当て設定での割り当てに変更があると、SiteScope はその変更を検出し、更新された割り当てをダウンロードします。ローカル SiteScope サーバ上のインジケータ割り当てが変更された場合、これらの割り当てがインジケータ割り当て設定によって上書きされることはありません。ユーザ・インタフェースで選択した状態が標準設定値と同じ場合のインジケータ状態についても同様です。

**注:**

- 重複するしきい値が設定された場合 (たとえば、エラー条件 cpu utilization > 80% およびエラー条件 cpu utilization > 90%), 最も近いしきい値にマップされたインジケータ状態と重大度値が送信されます。この例では、実際の測定値が 95% の場合、エラー条件 cpu utilization > 90% にマップされたインジケータ値が送信されます。これは、しきい値が数値の場合にのみ該当します。
- インジケータ状態と重大度は、SiteScope レポートには表示されません。

[「参照情報: モニタ」 \(276 ページ\)](#)

## タスク

モニタを作成、デプロイする方法

このタスクでは、モニタのデプロイに関する手順を説明します。

### 1. 前提条件

- モニタを設定する前に、モニタ用に取得する必要があるセットアップ要件とユーザ権限があるかどうかを確認します。詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』で個別のモニタのヘルプを参照してください。
- モニタは、モニタ・ツリー内のグループで作成する必要があります。タスクの詳細については、『[SiteScope グループとサブグループの作成](#) (256 ページ)』を参照してください。

**注:** SiteScope でリモート・サーバのデータを監視するには、リモート・サーバを設定する必要があります。Windows リモート・サーバを設定する方法の詳細については、『[リモー](#)

ト Windows サーバを監視するための SiteScope の設定」(479ページ)を参照してください。  
UNIX リモート・サーバを設定する方法の詳細については、「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定」(499ページ)を参照してください。

## 2. モニタ・インスタンスの作成

- a. 新しいモニタ・インスタンスを作成するには、モニタ・インスタンスの追加先のグループを右クリックし、**【新規作成】 > 【モニタ】**を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「**新規モニタ・ダイアログ・ボックス**」(274ページ)を参照してください。

**注:** 既存のモニタ・インスタンスをモニタ・ビュー内のグループにコピーまたは移動して、新しいモニタ・インスタンスを作成することもできます。詳細については、「**SiteScope オブジェクトのコピーと移動**」(93ページ)を参照してください。

- b. **【新規モニタ】**ダイアログ・ボックスから追加するモニタを選択し、そのモニタの設定を行います。モニタ設定の詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』で個別のモニタのヘルプを参照してください。
- c. モニタに影響するほかのプロパティを設定できます。例：
  - **【モニタの実行設定】** パネルでは、モニタ・インスタンスに定義されたアクションの実行を SiteScope が試みる頻度を設定できます。特定の日または一定のスケジュールでモニタを実行する場合は、範囲スケジュールを設定することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「**モニタの実行設定**」(294ページ)を参照してください。
  - **【依存関係】** パネルでは、モニタの依存関係を設定することにより、このモニタの実行をほかのモニタのステータスに依存させることができます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「**依存関係**」(296ページ)を参照してください。

### 例：

設定されているモニタは、**【依存対象】**ボックスで選択したモニタが**【依存条件】**ボックスで選択した条件をレポートしている間は通常どおり実行されます。この例では、「**Service**」のモニタが「**正常**」の状態をレポートした場合にのみ、設定されているモニタが有効になります。

The screenshot shows a window titled '依存関係' (Dependencies). Inside, there are two labels: '依存:' (Dependency) and '依存条件:' (Dependency Condition). The '依存:' field contains the text 'Service: HTTP on SiteScope Server'. The '依存条件:' field is a dropdown menu currently showing '正常' (Normal).

- **【計算済みメトリクス】** パネルでは、1つ以上のモニタの複数のメトリック間の関係を計算するように、計算済みメトリックを手動で設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「**計算済みメトリクスの設定**」(373ページ)を参照してください。
- **【しきい値の設定】** パネルでは、レポートされた各モニタ・インスタンスのステータス

を判別するロジック条件を手動で設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[しきい値の設定](#)」(298ページ)を参照してください。

あるいは、ベースラインを使用して1つ以上のモニタのしきい値を設定することもできます。タスクの詳細については、「[ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法](#)」(336ページ)を参照してください。

#### 例：

次に、ディスク領域モニタのしきい値の標準設定を示します。

標準しきい値の追加
標準しきい値の削除

エラー条件

✱ ✕

条件	演算子	値	スケジュール
virtual memory used %	>	98	毎日、全日
virtual memory used %	==	'n/a'	毎日、全日

警告条件

✱ ✕

条件	演算子	値	スケジュール
virtual memory used %	>	95	毎日、全日

良好条件

✱ ✕

条件	演算子	値	スケジュール
always(default)			

使用中パーセントが95より小さいディスク領域は正常な状態です。使用中パーセントが95よりも大きく98よりも小さいディスク領域は警告状態です。使用中パーセントが98より大きい「n/a」のディスク領域はエラー状態です。

- **【ログ設定】** パネルでは、選択したモニタ・インスタンスの専用のログ・ファイルを作成し、そのファイルを表示できます。また、perfex プロセスのデバッグを有効にすることもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[ログ設定](#)」(322ページ)を参照してください。
- **【タグの検索/フィルタ】** パネルでは、キーワード検索/フィルタ・タグを定義し、1つ以上のモニタに割り当て、そのタグを使用して表示を検索、フィルタします。これにより、確認するモニタのみが表示されます。詳細については、「[SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ](#)」(78ページ)を参照してください。
- ほかの共通モニタ・プロパティの詳細については、「[共通モニタ設定](#)」(290ページ)を参照してください。



### 3. モニタの警告の設定 - オプション

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスが変化したときに通知を送信する警告を作成します。

モニタの警告を作成するには、モニタを右クリックして **新規作成** > **警告** を選択します。各警告スキームに1つ以上の警告アクションを作成できます。**新規警告** ダイアログ・ボックスで **新規警告アクション** をクリックすると、**警告アクション** ウィザードが起動します。

タスクの詳細については、[「SiteScope 警告の設定」\(1231ページ\)](#)を参照してください。

**注:**

- 特定のグループおよびモニタに関連付けられている警告を無効化するには、モニタの **プロパティ** タブにある **関連する警告の有効化/無効化** パネルの SiteScope ツリーを使用するか、またはダッシュボードの **関連する警告の有効化/無効化**  アイコンをクリックしてから該当する無効化オプションを選択します。この操作で無効化できるのは、特定のモニタから発生するトリガのみです。警告が複数のモニタに割り当てられている場合、ほかのモニタの警告は影響を受けず、引き続き動作します。**プロパティ** タブから関連する警告が無効化された場合でも、**警告** タブの警告は有効な状態のままです。
- SiteScope ツリーをフィルタして、有効化または無効化された警告に関連付けられているすべてのグループおよびモニタを表示するには、ツリー・ツールバーの **フィルタ**  ボタンをクリックし、**フィルタ オプション** セクションの **関連する警告の有効化/無効化** リストから **有効** または **無効** を選択します。このフィルタの結果は、モニタ・ツリーに表示されます。

#### 4. モニタ・レポートの設定 - オプション

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

モニタのレポートを作成するには、モニタを右クリックして **レポート** をクリックします。レポート・タイプを選択し、レポート設定を指定します。

タスクの詳細については、[「SiteScope レポートの作成」\(1311ページ\)](#)を参照してください。

#### 5. 解析の設定 - 任意指定

SiteScope でビジネス・モニタの潜在的な問題を予測し、重要なアプリケーションの問題が発生する前にユーザに警告するように解析を設定します。解析では、根本原因解析に役立つ詳細情報を提供して問題解決を促進することもできます。

詳細については、[「予測解析の設定」\(1368ページ\)](#)を参照してください。

#### 6. 結果

**プロパティ** タブで指定した設定内容で、モニタ・ツリーのモニタ・グループにモニタが追加されます。

# UI の説明

## 新規モニタ・ダイアログ・ボックス

【新規モニタ】ダイアログ・ボックスでは、モニタ・グループで新規モニタを定義できます。  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
クイック検索	<p>【クイック検索】ボックスにモニタ名を入力します。検索に役立つ次の設定を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>すべて：すべての列で一致を検索します。</li><li>モニタ：【モニタ】列のみで一致を検索します。</li><li>カテゴリ：【カテゴリ】列のみで一致を検索します。</li><li>大文字小文字を区別する：大文字小文字を区別して一致を検索します。</li><li>大文字小文字を区別しない：大文字小文字を区別しないで一致文字列を検索します。</li><li>ワイルドカードの使用：検索にワイルドカード文字を使用できます。たとえば、文字列を表すアスタリスクのワイルドカード（*），または1文字のみを表す疑問符のワイルドカード（?）を使用します。</li><li>先頭から照合：検索テキストに一致するモニタ・カテゴリを先頭から検索します。</li><li>完全に一致：検索テキストに完全に一致するモニタ・カテゴリを検索します。</li><li>部分的に一致：名前の一部に検索テキストを含むモニタ・カテゴリを検索します。</li></ul>
最近使用されたモニタ	<p>最近選択された5つのモニタを表示します。選択したモニタ・タイプの新規モニタを作成するには、リンクをクリックします。</p> <p>注：モニタを新たに選択すると、表示されるモニター一覧が変更される可能性があります。</p>
モニタ	<p>SiteScope モニタのリストが表示されます。モニタ・リンクをクリックしてリストからモニタを選択します。灰色で表示されたリンクからはモニタを使用できません。</p> <p>列ヘッダをクリックして、リスト上のモニタを並べ替えることができます。矢印で並べ替え順序が示されます（昇順または降順）。</p>

UI 要素	詳細
	<p>【モニタ】の見出しの右側の矢印をクリックしリンクからモニタ選択してモニタを選択することもできます。あるいは、【（カスタム ...）】を選択し、さまざまな条件を使用してモニタ・フィルタをカスタマイズできます。</p>
カテゴリ	<p>モニタ・カテゴリのリストが表示されます。</p> <p>列ヘッダをクリックして、リスト上のカテゴリを並べ替えることができます。矢印で並べ替え順序が示されます（昇順または降順）。</p> <p>カテゴリ別に選択するには、【カテゴリ】の見出しの右側にある矢印をクリックして、次に詳細を示すリストからモニタ・カテゴリを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• （すべて） - これは標準設定です。</li><li>• （カスタム ...） - さまざまな条件を使用してカテゴリ・フィルタをカスタマイズできます。</li><li>• Application</li><li>• カスタマイズ可能</li><li>• データベース</li><li>• 汎用</li><li>• 統合</li><li>• Media</li><li>• ネットワーク</li><li>• Server</li><li>• 仮想化とクラウド</li><li>• Web トランザクション</li></ul> <p>各カテゴリのモニタについては、<a href="#">「モニタ・カテゴリ・リスト」</a> (277ページ) を参照してください。</p>
可用性	<p>モニタの可用性状態（利用可能 / 不可）を表示します。</p> <p>列ヘッダをクリックして、可用性状態を並べ替えることができます。矢印で並べ替え順序が示されます（昇順または降順）。あるいは、【可用性】の見出しの右側の矢印をクリックし状況を選択して示すことができます。</p>

その他の関連 UI ページ: [「SiteScope モニタのユーザ・インタフェース」](#) (290ページ)



## ヒント / トラブルシューティング

### 一般的な注意事項および制限事項

- モニタは SiteScope グループでのみ作成できます。
- SiteScope 管理者ユーザ、または適切な権限を付与されたユーザのみがモニタを作成、編集、更新、無効化、確認できます。ユーザ権限の詳細については、[「権限」 \(757ページ\)](#)を参照してください。
- モニタを削除するときにグループがハング状態のままにならないようにするには（他のモニタがこのグループにデプロイされていない場合）、次の SiteScope APIConfiguration メソッドを使用して、グループのいずれかにモニタが存在しないかどうかを確認します。

APIConfiguration#getGroupsConfigurationSnapshot(String[], boolean, String, String)

- モニタにコンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、そのモニタは削除できません。依存関係があるモニタを削除するには、各依存関係の**「警告ターゲット」**と**「レポートのターゲット」**からモニタを削除してから、モニタを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるモニタは削除できます。
- **「モニタの詳細」**フィールドでは、<BR>、<HR>、<B>などの、テキスト・スタイルの最も一般的なタグとハイパーリンクを含む HTML タグ（HTML バージョン 3.2）をサポートしています。JavaScript/iframes/frames またはその他の高度な機能はサポートしていません。
- モニタの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、[「SiteScope 公開 API」 \(171ページ\)](#)を参照してください。
- スケジュールされている次の実行時までにはモニタのアクションが完了しなかった場合、トラブルシューティング情報については、[「スキップされるモニタ・イベント」 \(1130ページ\)](#)を参照してください。

## 参照情報:モニタ

SiteScope モニタのほかの参照情報については、次の項を参照してください。

- [「モニタ・カテゴリ・リスト」 \(277ページ\)](#)
- [「Windows 環境にインストールされた SiteScope のみでサポートされているモニタ」 \(281ページ\)](#)
- [「Windows Management Instrumentation \(WMI\) をサポートしているモニタ」 \(281ページ\)](#)
- [「EC2 上にインストールされていない SiteScope から Amazon EC2 インスタンスのモニタリングをサポートするサーバ・モニタ」 \(282ページ\)](#)
- [「SiteScope の監視に使用されるポート」 \(283ページ\)](#)
- [「廃止された SiteScope モニタのリスト」 \(288ページ\)](#)



## モニタ・カテゴリ・リスト

このセクションには、各モニタ・カテゴリの SiteScope モニタを表示します。各モニタ・タイプの使用と設定の詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』のモニタ・タイプに関する説明を参照してください。

- [「アプリケーション・モニタ」\(277ページ\)](#)
- [「ビッグ・データ」\(278ページ\)](#)
- [「カスタマイズ可能モニタ」\(278ページ\)](#)
- [「データベース・モニタ」\(279ページ\)](#)
- [「汎用モニタ」\(279ページ\)](#)
- [「統合モニタ」\(279ページ\)](#)
- [「メディア・モニタ」\(279ページ\)](#)
- [「ネットワーク・モニタ」\(280ページ\)](#)
- [「サーバ・モニタ」\(280ページ\)](#)
- [「仮想化とクラウド・モニタ」\(281ページ\)](#)
- [「Web トランザクション・モニタ」\(281ページ\)](#)

### アプリケーション・モニタ

- Active Directory Replication Monitor
- Apache Server Monitor
- BroadVision Application Server Monitor
- Check Point Monitor
- Cisco Works Monitor
- Citrix Monitor
- ColdFusion Server Monitor
- COM+ Server Monitor
- F5 Big-IP Monitor
- HAProxy Monitor
- Mail Monitor
- MAPI Monitor
- Memcached Statistics Monitor
- Microsoft ASP Server Monitor
- Microsoft Exchange Monitor
- Microsoft Exchange Base Monitor
- Microsoft Exchange 2000\*/2003\*/2007 Message Traffic Monitor (\*Deprecated)

- Microsoft Exchange 5.5 Message Traffic Monitor (Deprecated)
- Microsoft Exchange 2003 Mailbox Monitor (Deprecated)
- Microsoft Exchange 2003 Public Folder Monitor (Deprecated)
- Microsoft IIS Server Monitor
- News Monitor
- Oracle 9i Application Server Monitor
- Oracle 10g Application Server Monitor
- Radius Monitor
- SAP CCMS Monitor
- SAP CCMS Alerts Monitor
- SAP Java Web Application Server Monitor
- SAP Performance Monitor
- SAP Work Processes Monitor
- Siebel Application Server Monitor
- Siebel Log File Monitor
- Siebel Web Server Monitor
- SunONE Web Server Monitor
- Tuxedo Monitor (Deprecated)
- UDDI Monitor
- WebLogic Application Server Monitor
- Web Server Monitor
- WebSphere Application Server Monitor
- WebSphere MQ Status Monitor
- WebSphere Performance Servlet Monitor

#### ビッグ・データ

- Hadoop Monitor
- HP Vertica JDBC Monitor

#### カスタマイズ可能モニタ

- Custom Monitor
- Custom Database Monitor
- Custom Log File Monitor
- Custom WMI Monitor

### データベース・モニタ

- Database Counter Monitor
- Database Query Monitor
- DB2 JDBC Monitor
- LDAP Monitor
- Microsoft SQL Server Monitor
- Oracle Database Monitor
- Sybase Monitor (Deprecated)

### 汎用モニタ

- Composite Monitor
- Directory Monitor
- Dynamic JMX Monitor
- File Monitor
- Formula Composite Monitor
- JMX Monitor
- Log File Monitor
- Multi Log Monitor
- Script Monitor
- Syslog Monitor
- Web Service Monitor
- XML Metrics Monitor

### 統合モニタ

- HP OM Event Monitor
- HP Service Manager Monitor
- NetScout Event Monitor
- Technology Database Integration Monitor
- Technology Log File Integration Monitor
- Technology SNMP Trap Integration Monitor
- Technology Web Service Integration Monitor

### メディア・モニタ

- Microsoft Lync Server 2010 Monitors (Microsoft 音声ビデオ会議サーバ, Microsoft アーカイブ・サーバ, Microsoft Director サーバ, Microsoft エッジ・サーバ, Microsoft フロント・エンド・

サーバ, Microsoft 仲介サーバ, Microsoft 監視および CDR サーバ, Microsoft Registrar サーバ)

- Microsoft Windows Media Player Monitor (Deprecated)
- Microsoft Windows Media Server Monitor
- Real Media Player Monitor (Deprecated)
- Real Media Server Monitor

## ネットワーク・モニタ

- DNS Monitor
- FTP Monitor
- Microsoft Windows Dial-up Monitor (Deprecated)
- Network Bandwidth Monitor
- Ping Monitor
- Port Monitor
- SNMP Monitor
- SNMP Trap Monitor
- SNMP by MIB Monitor

## サーバ・モニタ

- Browsable Windows Performance Counter Monitor
- CPU Monitor
- Disk Space Monitor (Deprecated)
- DHCP Monitor
- Dynamic Disk Space Monitor
- HP iLO (Integrated Lights-Out) Monitor
- HP NonStop Event Log Monitor
- HP NonStop Resources Monitor
- IPMI Monitor
- Memory Monitor
- Microsoft Windows Event Log Monitor
- Microsoft Windows Performance Counter Monitor
- Microsoft Windows Resources Monitor
- Microsoft Windows Services State Monitor
- Service Monitor
- UNIX Resources Monitor

## 仮想化とクラウド・モニタ

- Amazon Web Services Monitor
- Generic Hypervisor Monitor
- KVM Monitor
- Microsoft Hyper-V Monitor
- Solaris Zones Monitor
- VMware Datastore Monitor
- VMware Host Monitors (VMware ホスト CPU, VMware ホスト・メモリ, VMware ホスト・ネットワーク, VMware ホスト状態, および VMware ホスト・ストレージ)
- VMware Performance Monitor

## Web トランザクション・モニタ

- e-Business Transaction Monitor
- Link Check Monitor
- URL Monitor
- URL Content Monitor
- URL List Monitor
- URL Sequence Monitor
- Web Script Monitor

## Windows 環境にインストールされた SiteScope のみでサポートされているモニタ

Windows バージョンで実行している SiteScope のみでサポートされているモニタのリストを次に示します。関連性がある場合は、モニタは任意のプラットフォーム/オペレーティング・システムで実行中のリモート・サーバを監視できます。

- 「MAPI モニタ」
- 「Microsoft Exchange モニタ」
- 「Microsoft Exchange ベース・モニタ」

## Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ

Windows Management Instrumentation (WMI) 方式のデータ収集をサポートするモニタのリストについては、[「リモート Windows 監視用の WMI サービスの設定」\(496ページ\)](#)を参照してください。

## EC2 上にインストールされていない SiteScope から Amazon EC2 インスタンスのモニタリングをサポートするサーバ・モニタ

プライベート・カスタマ・ネットワークにデプロイされた SiteScope を使用して Amazon EC2 のインスタンスのモニタリングをサポートされているプロファイル。

プロトコル	Windows	UNIX	Amazon セキュリティ・グループ内の必須構成	OS 内の必須構成
NetBIOS	サポート	サポートされていません	443, 445 tcp ポートを有効にします。	Windows Firewall 内の着信要求を有効にします。
WMI	サポートされていません	サポートされていません	なし	なし
SSH	サポート	サポート	22 tcp ポートを有効にします。	標準 sshd を設定します。
Telnet	サポートされていません	サポート	telnet ポートを有効にします。	

次に、EC2 の外から Amazon EC2 のインスタンスのモニタリングをサポートする SiteScope サーバ・モニタのリストを示します。

- ・ 「CPU モニタ」
- ・ 「ディレクトリ・モニタ」
- ・ 「ディスク容量モニタ（廃止）」
- ・ 「ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ」
- ・ 「ファイル・モニタ」
- ・ 「HP Vertica JDBC モニタ」
- ・ 「ログ・ファイル・モニタ」
- ・ 「メモリ・モニタ」
- ・ 「Microsoft ASP サーバ・モニタ」
- ・ 「Microsoft Hyper-V モニタ」
- ・ 「Citrix モニタ」
- ・ 「Microsoft IIS サーバ・モニタ」
- ・ 「Microsoft SQL Server モニタ」
- ・ 「Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ」
- ・ 「Microsoft Windows Media Server モニタ」
- ・ 「Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ」
- ・ 「Microsoft Windows サービス・ステート・モニタ」
- ・ 「Real Media Server モニタ」
- ・ 「スクリプト・モニタ」
- ・ 「サービス・モニタ」

- 「ColdFusion サーバ・モニタ」
- 「Siebel ログ・ファイル・モニタ」
- 「Syslog モニタ」
- 「Web サーバ・モニタ」

## SiteScope の監視に使用されるポート

次の表に、SiteScope 監視に通常使用されるネットワーク・ポートを示します。多くの場合、環境のセキュリティ要件に応じて代替ポートを設定できます。

**注:** perfex (Windows アプリケーションに接続するSiteScopeの内部アプリケーション) をサポートするすべてのモニタは、ポート135と、その他のポートを使用することができます。

モニタ・タイプ	使用されるポート
「Apache サーバ・モニタ」	Apache サーバ管理ページで指定されたポート。 サーバ設定ファイルで変更可能。
「BroadVision アプリケーション・サーバ・モニタ」	監視対象の BroadVision サーバごとに、ORB (Object Request Broker) ポート番号を使用。
「Check Point モニタ」	SNMP モニタ: 標準設定では、ポート 161。 変更可能。
「Cisco Works モニタ」	Cisco Works のリソースは、通常、サーバの設定によってポート 161 または 162 (SNMP) よりアクセス可能。
「Citrix モニタ」	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
「ColdFusion サーバ・モニタ」	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
「CPU モニタ」	ローカル CPU の場合、ポートは不要。  各リモート・サーバ上の CPU の場合 (Windows ベースのシステム): ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。  各リモート・サーバ上の CPU の場合 (Solaris/Linux ベースのシステム): ポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
「データベース・クエリ・モニタ」	変更可能。ODBC または JDBC ドライバおよび DB 設定によって異なる。

モニタ・タイプ	使用されるポート
「DB2 JDBC モニタ」	標準設定では、ポート 50000。変更可能。
「DHCP モニタ」	標準設定では、ポート 68。
「ディレクトリ・モニタ」	ローカル・ディレクトリの場合、ポートは不要。  各リモート・サーバ上のディレクトリの場合 (Windows ベースのシステム) :ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。  各リモート・サーバ上のディレクトリの場合 (Solaris/Linux ベースのシステム) :ポート 22 (SSH) , 23 (telnet) , または 513 (rlogin) 。
「ディスク容量モニタ (廃止)」 「ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ」	ローカル・ディスク領域の場合、ポートは不要。  各リモート・サーバ上のディスク領域の場合 (Windows ベースのシステム) :ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。  各リモート・サーバ上のディスク領域の場合 (Solaris/Linux ベースのシステム) :ポート 22 (SSH) , 23 (telnet) , または 513 (rlogin) 。
	diskperf -yは、有効でなければならないこと、およびモニタリングされるクライアントは、リブートを必要とすることに注意してください。
「DNS モニタ」	標準設定では、ポート 53。
「F5 Big-IP モニタ」	SNMP を使用。変更可能。
「ファイル・モニタ」	ローカル・ディスク。ポートは不要。  各リモート・サーバ上のファイルの場合 (Windows ベースのシステム) :ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。  各リモート・サーバ上のファイルの場合 (Solaris/Linux ベースのシステム) :ポート 22 (SSH) , 23 (telnet) , または 513 (rlogin) 。
「FTP モニタ」	標準設定では、ポート 21。変更可能。



モニタ・タイプ	使用されるポート
Generic Hypervisor Monitor	ポート 22 (SSH) , 23 (telnet) , または 513 (rlogin) 。
「HAProxy モニタ」	標準設定では, ポート 80。変更可能。
「HP Vertica JDBC モニタ」	標準設定では, ポート 5433。変更可能。
「KVM モニタ」	ポート 22 (SSH) , 23 (telnet) , または 513 (rlogin) 。
「LDAP モニタ」	標準設定では, ポート 389。変更可能。
「リンク・チェック・モニタ」	標準設定では, ポート 80。変更可能。
「ログ・ファイル・モニタ」	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS) 。
	Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH) , 23 (telnet) , または 513 (rlogin) 。
「メール・モニタ」	POP3 ではポート 110, SMTP ではポート 25, IMAP ではポート 143。
「MAPI モニタ」	MAPI では, 動的に割り当てられた 1024 より後のポートで NSPI (Name Service Provider Interface) を使用して, クライアント・ディレクトリ検索を実行します。
「メモリ・モニタ」	Solaris/Linux ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS) , Windows ベースのシステムではポート 22 (SSH) , 23 (telnet) , または 513 (rlogin) 。
「memcached 統計モニタ」	標準設定では, ポート 11211。変更可能。
「Microsoft Exchange ベース・モニタ」	<p>「Test-ImapConnectivity」カウンタが選択されている場合, モニタはポート 993 (SSL) または 143 (プレーン・テキスト / TLS) を使用して Exchange Server の IMAP4 サービスをチェックします。</p> <p>「Test-PopConnectivity」カウンタが選択されている場合, モニタはポート 995 (SSL) または</p>

モニタ・タイプ	使用されるポート
	110 (プレーン・テキスト / TLS) を使用して Exchange Server の POP3 サービスをチェックします。
「Microsoft Lync Server 2010 モニタ」 (Microsoft 音声ビデオ会議サーバ, Microsoft アーカイブ・サーバ, Microsoft Director サーバ, Microsoft エッジ・サーバ, Microsoft フロント・エンド・サーバ, Microsoft 仲介サーバ, Microsoft 監視および CDR サーバ, Microsoft Registrar サーバ)	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
「Microsoft Hyper-V モニタ」	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
「Microsoft IIS サーバ・モニタ」	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
「Microsoft SQL Server モニタ」	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
「Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ」	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
「Microsoft Windows Media Server モニタ」	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
「Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ」	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
「Microsoft Windows リソース・モニタ」	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
「マルチ・ログ・モニタ」	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。  Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
「ネットワーク帯域幅モニタ」	ポートは不要で, ローカル・マシンのみを監視。
「ニュース・モニタ」	標準設定では, ポート 144。変更可能。
「Oracle データベース・モニタ」	変更可能。対象となる DB によって異なる。標準設定では, ポート 1521。

モニタ・タイプ	使用されるポート
「Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタ」 「Oracle 10g アプリケーション・サーバ・モニタ」	変更可能。Webcaching 管理ページで指定されたポート。
「Ping モニタ」	標準設定では、ポート 7。
「ポート・モニタ」	任意のポートを監視。
「Radius モニタ」	<p>現在、パスワード認証プロトコル（PAP）認証をサポートするが、チャレンジ・ハンドシェイク認証プロトコル（CHAP）および Microsoft チャレンジ・ハンドシェイク認証プロトコル（MS-CHAP）はサポートしない。Radius サーバは、PAP リクエストを受け付けるように設定する必要がある。</p> <p>標準設定では、ポート 1645。Radius 仕様の最近の変更では、このポートは 1812 に変更。モニタは変更可能。</p>
「Real Media Server モニタ」	ポート 137, 138, 139（NetBIOS）。
「SAP CCMS モニタ」	SAP クライアント・ソフトウェア（SAP Front End）を使用して、特定の SAP トランザクションを実行。そのため、SAP と同じポートを使用。
「スクリプト・モニタ」	<p>Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139（NetBIOS）。</p> <p>Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22（SSH）、23（telnet）、または 513（rlogin）。</p>
「サービス・モニタ」	<p>Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139（NetBIOS）。</p> <p>Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22（SSH）、23（telnet）、または 513（rlogin）。</p>
「SNMP モニタ」	標準設定では、ポート 161。変更可能。
「SNMP トラップ・モニタ」	トラップの受信には、ポート 162 を使用。変更可能。

モニタ・タイプ	使用されるポート
「SunONE Web サーバ・モニタ」	対象 SunONE サーバの stats-xml ファイルの URL。ポートは変更可能。
「Sybase モニタ（廃止）」	Adaptive Server Enterprise Monitor Server に接続するには、SiteScope が稼働しているマシン上に Sybase Central クライアントが必要。ポート番号は、Sybase クライアントと同じ。
「Syslog モニタ」	Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22（SSH）、23（telnet）、または 513（rlogin）。
「Tuxedo モニタ（廃止）」	Tuxedo ワークステーション・リスナの標準設定では、ポート 65535。変更可能。
「URL モニタ」	通常はポート 80。変更可能。
「Web サーバ・モニタ」	Windows ベースのシステムではポート 137、138、139（NetBIOS）。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22（SSH）、23（telnet）、または 513（rlogin）。
「Web サービス・モニタ」	変更可能。
「WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタ」	Oracle WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタでは、Java JMX インタフェースを使用。ポートは変更可能。
「WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ」	IBM WebSphere 管理者のコンソールと同じポートを使用。
「WebSphere パフォーマンス・サーブレット・モニタ」	WebSphere パフォーマンス・サーブレット。ポートは変更可能。

## 廃止された SiteScope モニタのリスト

SiteScopeの最近のバージョンでは、多数のモニタが廃止されてサポートされなくなりました。次の表に、廃止されたモニタと、代わりに使用できるそれぞれのモニタ（存在する場合）を示します。

廃止されたモニタ	推奨される代替モニタ
Active Directory パフォーマンス	なし

廃止されたモニタ	推奨される代替モニタ
Asset	なし
Astra Load Test	「Web スクリプト・モニタ」
DB2	「DB2 JDBC モニタ」
ディスク領域	「ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ」
Dynamo	なし
iPlanet アプリケーション・サーバ	「SunONE Web サーバ・モニタ」
IPlanet サーバ	「SunONE Web サーバ・モニタ」
IPlanet Web サーバ	「SunONE Web サーバ・モニタ」
Microsoft Exchange 2003 のメール・ボックス Microsoft Exchange 2003 のパブリック・フォルダ Microsoft Exchange 5.5, 2000, 2003 のメッセージ・トラフィック	「Microsoft Exchange モニタ」 「Microsoft Exchange ベース・モニタ」
Microsoft Windows ダイアルアップ	なし
Microsoft Windows Media Player	なし
ネットワーク	「ネットワーク帯域幅モニタ」
Quick Test Pro	「Web スクリプト・モニタ」
Real Media Player モニタ	なし
RTSP	なし
SAP	「SAP パフォーマンス・モニタ」
SAP Portal	「SAP CCMS モニタ」
SilverStream サーバ	なし
Sybase	なし

廃止されたモニタ	推奨される代替モニタ
Tuxedo	なし
WebLogic 5.x アプリケーション・サーバ	なし

## SiteScope モニタのユーザ・インタフェース

### 本項の内容

- ・ [「新規モニタ・ダイアログ・ボックス」 \(274ページ\)](#)
- ・ [「共通モニタ設定」 \(290ページ\)](#)
  - ・ [「一般設定」 \(292ページ\)](#)
  - ・ [「モニタの実行設定」 \(294ページ\)](#)
  - ・ [「依存関係」 \(296ページ\)](#)
  - ・ [「計算済みメトリクスの設定」 \(373ページ\)](#)
  - ・ [「しきい値の設定」 \(298ページ\)](#)
  - ・ [「HP 統合設定」 \(303ページ\)](#)
  - ・ [「イベント マッピング設定」 \(315ページ\)](#)
  - ・ [「モニタの有効化/無効化」 \(316ページ\)](#)
  - ・ [「関連する警告の有効化/無効化」 \(318ページ\)](#)
  - ・ [「タグの検索 / フィルタ」 \(320ページ\)](#)
  - ・ [「ベースライン設定」 \(321ページ\)](#)
  - ・ [「ログ設定」 \(322ページ\)](#)
- ・ [「\[依存対象モニタの選択\] ダイアログ・ボックス」 \(324ページ\)](#)
- ・ [「\[テンプレートの選択\] ダイアログ・ボックス」 \(325ページ\)](#)
- ・ [「\[テンプレート ツリーにコピー\] ダイアログ・ボックス」 \(326ページ\)](#)

## 共通モニタ設定

共通モニタ設定を使用して、新規モニタを設定できます。

--	--

アクセス方法	<p>【モニタ】コンテキストを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新規モニタの場合: モニタ・ツリーで、グループを右クリックして【新規作成】&gt;【モニタ】を選択し、【新規モニタ】ダイアログ・ボックスからモニタを選択します。右側の表示枠で、【プロパティ】タブをクリックします。</li> <li>既存のモニタの場合: モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、【プロパティ】タブをクリックします。</li> </ul>
関連タスク	<a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」(270ページ)</a>
関連情報	<a href="#">「モニタ・ツリー」(30ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
【プロパティ】 タブ	<p>モニタの【プロパティ】タブにある次の設定パネルは、すべてのモニタで共通です。特定の SiteScope モニタの設定の詳細については、そのモニタ・タイプのユーザ・インタフェース・ページを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「一般設定」(292ページ)</a></li> <li>&lt;モニタ名&gt; のモニタ設定。モニタ設定と、各モニタの設定方法の詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』で個別のモニタを参照してください。</li> </ul> <div style="background-color: #f0f0f0; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p><b>注:</b> このフィールドでは、次の特殊文字を使用することはできません: " ' &gt; &lt;.</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「モニタの実行設定」(294ページ)</a></li> <li><a href="#">「依存関係」(296ページ)</a></li> <li><a href="#">「計算済みメトリクスの設定」(373ページ)</a></li> <li><a href="#">「しきい値の設定」(298ページ)</a></li> <li><a href="#">「HP 統合設定」(303ページ)</a> (SiteScope が BSM と統合されている場合、または Operations Manager (HPOM) と統合されている場合で、イベント統合または測定値統合が有効になっている場合にのみ表示されます)</li> <li><a href="#">「イベント マッピング設定」(315ページ)</a> (SiteScope が HPOM と統合されており、イベント統合が有効になっている場合、または【統合プリファレンス】で一般イベント統合が設定されている場合にのみ表示されます)</li> <li><a href="#">「モニタの有効化/無効化」(316ページ)</a></li> <li><a href="#">「関連する警告の有効化/無効化」(318ページ)</a></li> </ul>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <a href="#">「タグの検索 / フィルタ」</a> (320ページ)</li> <li>・ <a href="#">「ベースライン設定」</a> (321ページ)</li> <li>・ <a href="#">「ログ設定」</a> (322ページ)</li> </ul> <p><b>注：</b> [モニタを CI にリンクする] 設定パネルは SiteScope 11.00 で削除され、その機能は [HP 統合設定] 表示枠のカスタム・トポロジのレポート機能に置き換わりました。</p>
<b>検証 &amp; 保存</b>	<p>設定を保存する前に、モニタ対象のローカルとリモート・サーバのモニタ設定が正しいかを検証します。SiteScope がリモート・サーバへの接続に失敗した場合、または設定に無効なプロパティがある場合、検証は失敗してエラー・メッセージが表示されます。</p> <p><b>ヒント：</b> [保存] の代わりに [検証 &amp; 保存] を使用すると、パフォーマンスはあまり速くなりません。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要があるためです。テンプレート変更適用やグローバル検索と置換などのバルク操作では、[保存] オプションのみの使用を推奨します。</p>
<b>保存</b>	<p>設定のローカル検証を実行して、設定を保存します（リモート・サーバのモニタ設定が正しいかどうかは検証しません）。</p> <p><b>ヒント：</b> [検証 &amp; 保存] の代わりに [保存] を使用すると、パフォーマンスが速くなります。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要がないためです。テンプレート変更適用やグローバル検索と置換などのバルク操作では、[保存] オプションのみの使用を推奨します。</p> <p><b>注：</b> カスタマイズ可能なモニタ・タイプを保存する場合、[保存] は [検証 &amp; 保存] と同じ影響をもたらします。SiteScope は、設定を保存する前に、モニタ設定が正しいかどうかをローカルと監視するリモート・サーバの両方で検証します。</p>

## 一般設定

「一般設定」パネルでは、モニタ・インスタンスの名前と詳細を作成できます。

<b>アクセス方法</b>	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして [一般設定] を選択します。</p>
<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ モニタの詳細フィールドに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードな</li> </ul>



	<p>ど)を修正する修正アクションが実行されます悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ダッシュボードでセルのすべての内容が表示されるように行の高さを自動的に調整するには、[ダッシュボードの設定] で <b>[折り返しテキスト]</b> オプションを選択します。詳細については、「<a href="#">[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス</a>」(1060ページ)を参照してください。</li> <li>すべての表示枠で共通のボタンについては、「<a href="#">共通モニタ設定</a>」(290ページ)を参照してください。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」</a> (270ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>名前</b>	<p>監視の対象となる要素またはシステムを示す名前。ビュー・フィルタの作成とカテゴリの割り当てをより効果的にするため、すべてのモニタに有益な命名規則を使用します。</p> <p><b>例:</b> &lt;hostname:resource_type&gt; または &lt;business_unit resource_name monitored_element&gt;</p> <p><b>標準設定値:</b> このフィールドが空の場合は、監視の対象となるホスト、システム、URL に基づいた標準設定の名前、またはモニタ・タイプに対して定義された標準設定の名前が SiteScope によって作成されます。名前の自動作成操作でエスケープ文字が検出されると、プロンプトが表示され、ユーザは有効なモニタ名を手動で入力するよう求められます。</p>
<b>モニタの詳細</b>	<p>モニタを説明する追加情報。テキスト・スタイルの一般的な HTML タグ (&lt;BR&gt;, &lt;HR&gt;, &lt;B&gt; など) を含めることができます。詳細は、SiteScope ダッシュボードでモニタのプロパティを表示または編集するときのみ表示されます。</p> <p>また、HTML タグを含めることにより、SiteScope ダッシュボードから URL へのアクセスも行えます。ハイパーリンクを追加するには、URLを入力します (Windows のリモート環境では UNC パスがサポートされます)。例: &lt;a href="http://www.hp.com"&gt;My Link&lt;/a&gt;。この URL は、SiteScope ダッシュボードで選択したモニタの <b>[詳細]</b> フィールドに表示されます。</p> <p><b>注:</b> このフィールドでは、JavaScript, iframes, frames やその他の高度な機能はサポートされていません。このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>タグ <code>:script</code>, <code>object</code>, <code>param</code>, <code>frame</code>, <code>iframe</code>。</li> <li><code>on</code> で始まる属性を含むタグは拒否される。例: <code>onhover</code>。</li> <li>値に <code>javascript</code> が指定された属性。</li> </ul>
レポートの詳細	<p>モニタの動作をわかりやすくするための、このモニタの任意の詳細です。この詳細は、管理レポートの各棒グラフに表示されます。</p> <p><b>例:</b> ネットワーク・トラフィックまたはメイン・サーバ応答時間。</p> <p><b>注:</b> このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードなど）を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>タグ <code>:script</code>, <code>object</code>, <code>param</code>, <code>frame</code>, <code>iframe</code>。</li> <li><code>on</code> で始まる属性を含むタグは拒否される。例: <code>onhover</code>。</li> <li>値に <code>javascript</code> が指定された属性。</li> </ul>

## モニタの実行設定

【モニタの実行設定】パネルでは、モニタの実行を設定できます。

アクセス方法	<p>【<b>モニタ</b>】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、【<b>プロパティ</b>】タブをクリックして【<b>モニタの実行設定</b>】を選択します。</p>
重要な情報	<p>すべての表示枠で共通のボタンについては、<a href="#">「共通モニタ設定」(290ページ)</a>を参照してください。</p>
関連タスク	<p><a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」(270ページ)</a></p>
関連情報	<p><a href="#">「スケジュール・プリファレンス」(723ページ)</a></p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
頻度	<p>SiteScope によってモニタ・インスタンスに定義されたアクションの実行が試みられる頻度。各モニタの実行でモニタの状態が更新されます。ドロップダウン・リストを使用して、秒、分、時間、日のいずれかの増分を指定します。</p>

UI 要素	詳細
	<p><b>標準設定値</b> : 10 分</p> <p><b>最小値</b> :15 秒</p> <p><b>注</b> : テンプレートでこの設定を指定する場合、変数の値は秒単位でのみ設定できます。</p>
<b>エラー頻度</b>	<p>エラー条件をレポートしたモニタの監視間隔。</p> <p><b>例</b> : 通常は 10 分間隔でモニタを実行し、エラーが検出された場合は 2 分間隔で実行するように指定できます。モニタの状態がエラーでなくなると、モニタは <b>【頻度】</b> 設定で指定した実行間隔に戻ります。</p> <p><b>注</b> :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>モニタの実行頻度を高くすると、モニタで生成される警告数に影響を与えます。</li> <li>テンプレートでこの設定を指定する場合、変数の値は秒単位でのみ設定できます。</li> </ul>
<b>エラーの検証</b>	<p>エラーが検出された場合、モニタを自動的に再実行します。最初のエラーが誤った警告でなかったことを確認するために通常の実行がエラーを返した直後にモニタを実行します。エラーが再度返された場合には、モニタ実行の結果としてレポートされ、次の実行はモニタ・スケジュールに従って発生します。</p> <p>モニタがエラー状態のときにモニタ・スケジュールを変更するには、<b>【エラー頻度】</b> の設定を確認します。これは特に大規模な SiteScope 環境の場合には、<b>【エラーの検証】</b> よりも優先され推奨される設定です。</p> <p>エラーの検証によるモニタの実行で返された状態が、エラーを検出した元のスケジュールの実行の状態を上書きします。検証の実行によるデータが最初のエラー状態と異なる場合、重要なパフォーマンス・データが失われる可能性があります。</p> <p><b>ヒント</b> : このオプションは小規模な監視環境のみで使用することをお勧めします。複数のモニタが同時にエラーを検証するようにスケジュールされている場合、監視が大幅に遅くなる可能性があります。</p>
<b>モニタのスケジュール</b>	<p>特定の日または固定スケジュールでのみモニタを実行する場合の範囲スケジュール。<b>【スケジュール プリファレンス】</b> で作成された範囲スケジュールがドロップダウン・リストに表示されます。モニタのスケジュールの作成の詳細については、<a href="#">「スケジュール・プリファレンス」(723ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 毎日、全日</p> <p><b>注</b> : <b>【しきい値の設定】</b> でしきい値のスケジュールを選択した場合、少なくとも</p>


UI 要素	詳細
	も 1 つのしきい値のスケジュールがモニタの実行スケジュールと重なる必要があります（モニタの実行スケジュールの少なくとも 1 分がしきい値のスケジュールのいずれかに含まれている必要があります）。
更新時に実行結果を表示	<p>モニタの設定が変更されるたびに、モニタが実行されます。モニタの実行結果がポップアップ・ダイアログ・ボックスに表示されます。</p> <p><b>注：</b>更新された実行結果は、モニタの適切な [ダッシュボード] ビューに常に表示されます。</p>

## 依存関係

[依存関係] パネルでは、モニタの実行を別のモニタの状態に依存させる依存関係を作成できます。

アクセス方法	<p><b>[モニタ]</b> コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、<b>[プロパティ]</b> タブをクリックして<b>[依存関係]</b>を選択します。</p>
重要な情報	<p>すべての表示枠で共通のボタンについては、<a href="#">「共通モニタ設定」(290ページ)</a>を参照してください。</p>
関連タスク	<p><a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」(270ページ)</a></p>
関連情報	<p><a href="#">「グループの依存関係の監視」(264ページ)</a></p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
依存対象	<p><b>[依存対象]</b>  をクリックして<b>[依存の対象モニタの選択]</b> ダイアログ・ボックスを開き、モニタの実行を依存させるモニタを選択します。<b>[依存の対象モニタの選択]</b> ダイアログ・ボックスの詳細については、<a href="#">「[依存対象モニタの選択] ダイアログ・ボックス」(324ページ)</a>を参照してください。</p> <p>1 つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタからの過剰な警告を避ける場合に、このオプションを使用します。</p> <p><b>例：</b>システムの基本的な可用性をチェックするシステム・モニタを作成して、システムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。基本的な可用性をチェックするモニタの状態に依存するように、詳細テスト・モニタを設定します。</p>

UI 要素	詳細
	<p>システム・モニタによって対象システムが利用不可になったことが検出されると、依存関係によってほかのモニタが自動的に無効になります。また、依存するモニタによって生成される警告も無効になります。</p> <p><b>標準設定値</b> :モニタ・インスタンスに設定された依存関係はありません。</p> <p><b>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。</b> <b>「変更をパブリッシュするときに、依存関係を無視します」</b>を選択したときは、このフィールドはクリアされ、使用できません。</p>
<p><b>依存条件</b></p>	<p><b>「依存対象」</b>設定を使用してモニタを別のモニタの状態に依存させた場合、このオプションを使用して、現在のモニタが通常どおりに実行されるように<b>「依存対象」</b>のモニタの状態の条件を選択します。</p> <p>次の状態カテゴリがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 良好</li> <li>• エラー</li> <li>• 利用可能</li> <li>• 利用不可</li> </ul> <p>設定対象のモニタは、<b>「依存対象」</b>ボックスで選択したモニタがこのボックスで選択した条件をレポートしている場合、正常に実行されます。</p> <p><b>例</b> : <b>「正常」</b>を選択して、<b>「依存対象」</b>ボックスで選択したモニタが<b>「正常」</b>の状態をレポートする場合にのみこのモニタが有効になるようにします。<b>「依存対象」</b>ボックスで選択したモニタが<b>「正常」</b>以外のカテゴリまたは条件をレポートした場合、現在のモニタは自動的に無効になります。モニタがエラーを検出した場合に依存するモニタを有効にすることもできます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 正常</p>
<p><b>依存関係をパブリッシュするときに、依存関係を無視します</b> (テンプレート・モードのみで利用可能です)</p>	<p>デプロイしたオブジェクトにテンプレート変更がパブリッシュされた場合、選択したテンプレート・グループに対する依存関係は無視され、デプロイしたオブジェクトの既存の依存関係が保持されます。詳細については、<b>「テンプレート・モニタおよびグループを設定するときの依存関係」</b> (266ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>注</b> : 選択すると、<b>「依存対象」</b>フィールドがクリアされ使用できません。</p>

## しきい値の設定



「しきい値の設定」パネルでは、各モニタ・インスタンスのレポートされた状態を決定する条件を設定できます。状態の結果は、特定の期間中に対象システムのモニタ・アクションによって返された結果または測定値に基づきます。

各モニタ・インスタンスの状態のしきい値条件は、「エラー条件」、「警告条件」、「良好条件」の状態の条件に設定できます。許容可能または予測されるしきい値の範囲を構築するための比較を提供するためにベースラインを使用してモニタしきい値を設定することもできます。詳細については、「[状態のしきい値の設定](#)」(267ページ)を参照してください。

アクセス方法	<p>「<b>モニタ</b>」コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、「<b>プロパティ</b>」タブをクリックして「<b>しきい値の設定</b>」を選択します。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>モニタ・インスタンスごとの各状態の条件に、複数の状態のしきい値条件を適用できます。1つのモニタ・インスタンスに、「<b>エラー</b>」状態を決定する1つ以上の条件、「<b>警告</b>」状態を決定する1つ以上の条件、「<b>正常</b>」状態を示す1つ以上の条件を設定できます。ほとんどのモニタ・タイプには、3つの状態の条件のそれぞれについて標準設定が1つ含まれています。</li> <li>ベースラインしきい値を設定する場合、ベースラインの計算中とベースラインがアクティブになった後に、特定のしきい値条件のみ変更できます。許可されているしきい値の変更の詳細については、「<a href="#">しきい値の設定の変更</a>」(303ページ)を参照してください。</li> <li>「グローバル検索と置換」で作業している場合、しきい値の設定の置換を選択すると、「<b>カテゴリの上書き</b>」オプションが表示されます。このオプションを選択すると、選択したモニタ・インスタンスのすべてのしきい値の設定が、置換操作に入力した設定で上書きされます。このオプションがクリアされている場合にしきい値の設定の置換を選択すると、入力した設定がモニタ・インスタンスの既存のしきい値の設定に追加されます。</li> <li>利用不可の状態に対して警告を定義した場合、監視対象のシステムまたはアプリケーションが利用できない場合に2つの警告が送信されます。その一方は利用不可の警告、もう一方はモニタが利用できない場合に状態の割り当てを表示する警告です（正常、警告、エラーのいずれか）。</li> <li>すべての表示枠で共通のボタンについては、「<a href="#">共通モニタ設定</a>」(290ページ)を参照してください。</li> </ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">モニタを作成、デプロイする方法</a>」(270ページ)</li> <li>「<a href="#">ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法</a>」(336ページ)</li> <li>「<a href="#">計算済みメトリクスの式の作成方法</a>」(371ページ)</li> <li>「<a href="#">組み合わせられたしきい値の計算済みメトリクスの設定方法</a>」(372ページ)</li> </ul>

関連情報	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」 (335ページ)</a>
------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<p><b>新規:</b>「エラー」, 「警告」, 「正常」状態を決定する追加しきい値を作成します。各しきい値に対してメトリクスと演算子を選択し、メトリクスの値を入力します。</p> <p>標準設定では、モニタを最初に設定するときに「エラー」状態の2つのしきい値と、「警告」と「正常」状態の1つのしきい値が表示されます。</p>
	<p><b>削除:</b>選択したしきい値を削除します。</p>
<b>使用不能な場合</b>	<p>モニタが使用不能な場合、次のオプションから状態を割り当てます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>モニタの状態をしきい値に応じて設定:</b> しきい値に応じてモニタの新しい状態を取得します。</li> <li>・ <b>モニタの状態を「正常」に設定:</b> モニタが使用不能な場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「正常」に設定されます</li> <li>・ <b>モニタの状態を「警告」に設定:</b> モニタが使用不能な場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「警告」に設定されます</li> <li>・ <b>モニタの状態を「エラー」に設定:</b> モニタが使用不能な場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「エラー」に設定されます</li> </ul> <p><b>注:</b> モニタ・インスタンスには「利用不可」の状態および「正常」, 「警告」, または「エラー」の状態を設定できます。可用性、状態、または可用性と状態の両方（警告の設定により異なる）に応じて警告が起動されます。詳細については、<a href="#">「SiteScope 警告の設定」 (1231ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>標準設定の状態</b>	<p>モニタ・インスタンスのしきい値条件を満たさない場合のモニタの状態（「正常」, 「警告」, または「エラー」）。</p> <p><b>標準設定値:</b> 正常</p>
<b>内部エラーの場合</b>	<p>設定または内部エラーが発生した場合、次のオプションからモニタの状態を割り当てます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>モニタの状態をしきい値に応じて設定:</b> 設定または内部エラーが発生した場合、モニタの状態が現在のしきい値に応じて設定されます（標準設定）。エラーがいつ発生したか（およびしきい値が古いデータ、更新されたデータ、またはその両方に基いているかどうか）を確認する方法はないため、しきい値に依存すると信頼性が低くなります。たとえば、モニタが実行されなかった場合でも現在の状態を維持し、しきい値が不適切に定義された場合に</li> </ul>



UI 要素	詳細
	<p>状態が変更され、リモートが実際には接続されていない場合に使用不能として誤った警報を誘発する可能性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>モニタの状態を「エラー」に設定</b> : 設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「エラー」に設定されます。</li> <li>・ <b>モニタの状態を「警告」に設定</b> : 設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「警告」に設定されます。</li> <li>・ <b>モニタの状態を「正常」に設定</b> : 設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「正常」に設定されます。</li> <li>・ <b>モニタを利用不可として扱う</b> : 設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「利用不可」として扱われます。</li> </ul>
<b>Add Default Thresholds</b>	<p>しきい値の標準設定を適切な状態カテゴリのモニタ・インスタンスに追加します。標準設定のしきい値は、<b>[(default)]</b> ラベルで示されます。標準設定のしきい値は、<b>[条件]</b> フィールドから条件を選択（標準設定の条件を選択できます）した後でのみ編集できます。標準設定のしきい値の条件が変更されると、<b>[(default)]</b> ラベルは削除されます。</p>
<b>Remove Default Thresholds</b>	<p>モニタ・インスタンスからしきい値の標準設定（<b>[(default)]</b> ラベルで示される）を削除します。追加した後に変更した標準設定は削除されません。</p>
<b>しきい値プレビュー</b>	<p>「しきい値プレビュー」ダイアログ・ボックスが開き、静的カウンタおよび実際の現在のカウンタに変換される正規表現パターンのしきい値のプレビューを表示します。パターンによって、モニタは関連するダイナミック環境コンポーネントでカウンタとしきい値を用いて自動的にモニタ自体を設定できます（現在 VMware ホスト・モニタで使用できます）。</p> <p>テーブルには、パターンから変換される現在のカウンタごとに<b>インジケータ状態および重大度</b>の値も表示されます（この値は、<b>[しきい値の設定]</b>のパターンに対しては利用できません）。</p> <p>ダイナミック・モニタの詳細については、<a href="#">「ダイナミック・モニタリング・メカニズム」 (381ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>例</b> : パターン <code>./VirtualMachine/./cpu/usage.average\[\]/</code> は、現在監視対象となっている VM ごとに平均の CPU 使用しきい値の条件を表示します。</p>
<b>エラー条件</b>	<p>「エラー」状態をレポートするモニタ・インスタンスの条件。</p>
<b>条件</b>	<p>モニタ・インスタンスの状態を決定するメトリクス・パラメータ。メトリクスのリストは、設定しているモニタのタイプに基づいて動的に更新されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 多くのモニタ・タイプに存在し、モニタ・タイプごとに異なる標</p>



UI 要素	詳細
オペレータ	<p>準設定のメトリクス。多くの標準設定のメトリクスの場合、対応する編集不可の演算子と値の標準設定ボックスがあります。</p> <p>モニタ・インスタンスの状態を決定する測定値のメトリクス。次の演算子を利用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>&gt;=</b> : より大きいか等しい</li> <li>• <b>&gt;</b> : より大きい</li> <li>• <b>==</b> : 等しい</li> <li>• <b>!=</b> : 等しくない</li> <li>• <b>&lt;=</b> : より小さいか等しい</li> <li>• <b>&lt;</b> : より小さい</li> <li>• <b>contains</b> : 入力した値を含む</li> <li>• <b>!contains</b> : 入力した値を含まない</li> </ul> <p><b>注</b> : 現在のモニタ読み取りが以前の実行から大幅にそれる場合に、データ・ボラティリティを示すには、ベースラインを使用して状態のしきい値を設定します。詳細については、「<a href="#">ベースラインを使用したモニタしきい値の設定</a>」(335 ページ)を参照してください。</p>
値	<p>メトリクス・パラメータに適用可能な値。</p> <p><b>注</b> :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• モニタにアクティブなベースラインがある場合、そのメトリクスは編集不可で「<a href="#">パーセンタイル テーブル</a>」ボタンが表示されます。ベースラインしきい値を変更するには、ボタンをクリックしてパーセンタイル・テーブルで現在のパーセンタイル値を変更します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">パーセンタイル範囲マッピング・テーブル</a>」(353 ページ)を参照してください。</li> <li>• ベースラインしきい値条件のメトリクスの値、演算子、スケジュールは変更できません。</li> </ul>
スケジュール	<p>しきい値に対するモニタの実行結果を確認する時期を定義する場合の、モニタ・インスタンスの状態を決定する範囲スケジュール。たとえば、特定の日またはピーク時間のみでしきい値に対するモニタの実行結果を確認する場合に役立ちます。「<a href="#">スケジュール プリファレンス</a>」で作成された範囲スケジュールがドロップダウン・リストに表示されます。モニタのスケジュールの作成の詳細については、「<a href="#">スケジュール・プリファレンス</a>」(723 ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 毎日、全日</p>

UI 要素	詳細
	<p><b>注：</b>しきい値のスケジュールを選択した場合、少なくとも1つのしきい値のスケジュールが【モニタの実行設定】の【<b>モニタのスケジュール</b>】と重なる必要があります（モニタの実行スケジュールの少なくとも1分がしきい値のスケジュールのいずれかに含まれている必要があります）。</p>
Indicator State and Severity	<p>インジケータの状態（「ボトルネック」など）と、そのインジケータ状態に対応する重大度（「致命的」など）。</p> <p>各インジケータは、複数の状態を持つことができます。たとえば、CPU 負荷を測定する場合、インジケータ状態は「ボトルネック」や「ビジー」になる可能性があります。一方、メモリ負荷を測定する場合は、インジケータ状態が「ページング」や「メモリ不足」になる可能性があります。</p> <p>インジケータ状態と重大度レベルは、その測定値に関連付けられているインジケータの状態に存在する使用可能な重大度のうちの最も近い重大度に従って測定値状態にマップされます。インジケータ状態と重大度値は、【HP 統合設定】パネルで異なるインジケータ・マッピングが選択された場合に更新されます。</p> <p>インジケータ・マッピングの詳細については、<a href="#">「トポロジを BSM にレポートするときのインジケータ・マッピング」(269ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 【<b>Indicator State and Severity</b>】カラムを表示するためには、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続する必要があります。</li> <li>• インジケータ状態と重大度値は、SiteScope レポートには表示されません。</li> <li>• 【<b>インジケータ状態および重大度</b>】ボックスが空の場合、自動的に割り当てられる【常に（標準設定）】の場合を除き、測定値は【サービス状況】で色付けされません。</li> <li>• ダイナミック・モニタの現在のカウンタごとに【<b>Indicator State and Severity</b>】値を表示するには（これらは正規表現パターンから変換された実際のカウンタ）、【<b>しきい値プレビュー</b>】ボタンをクリックします。インジケータ状態および重大度値は【しきい値プレビュー】ダイアログ・ボックスの実際のカウンタごとに表示されます。</li> <li>• インジケータ状態と重大度の関連付けは、ローカル SiteScope サーバでは変更できません。</li> <li>• 特定の測定値としきい値に関連付けられた、同一の重大度のインジケータ状態が複数存在する場合、（BSM のサービス状況 CI インジケータ・リポトリで設定されている）標準の状態が採用されます。標準の状態が未定義の場合は、任意の状態が選ばれます。たとえば、【Host Disk Utilization】インジケータが、空き領域（MB）測定値にマッピングされ、そのインジケータに【Higher than normal】と【Lower than normal】という（どちらも標準で定</li> </ul>

UI 要素	詳細
	義されたものではない) 重大度が「致命的」の状態が2つある場合、これらの状態のどちらか1つがこのしきい値に割り当てられたインジケータ状態として使用できるようになります。
警告条件	「警告」状態をレポートするモニタ・インスタンスの条件。各しきい値に対して測定値と演算子を選択し、メトリクスの値を入力します。
良好条件	「正常」状態をレポートするモニタ・インスタンスの条件。各しきい値に対して測定値と演算子を選択し、メトリクスの値を入力します。

## しきい値の設定の変更

モニタ・インスタンスのベースラインの状態に応じて、しきい値条件を変更できます。

モニタのベースラインの状態	しきい値条件の変更	しきい値条件の追加/削除
ベースライン未処理	任意のしきい値の条件を変更できます。	可能
計算プロセス/ アクティブ化プロセス中	静的しきい値の測定値のみ変更できます。 たとえば、エラー条件 CPU >= 70 毎日、全日の場合、70 の値のみを別の値に変更できます。	不可
ベースライン処理済み	<ul style="list-style-type: none"><li>静的しきい値の条件を変更できます。</li><li>ベースラインしきい値のみのパーセンタイル値を変更できます。</li></ul>	静的しきい値のみ可能

## HP 統合設定

【HP 統合設定】パネルでは、SiteScope と統合されたアプリケーションにモニタが転送するデータを制御できます。

アクセス方法	【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、【プロパティ】タブをクリックして【HP 統合設定】を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>【HP 統合設定】パネルが表示されるのは、SiteScope が BSM と統合されている場合か、SiteScope が Operations Manager (HPOM) と統合されてイベ</li></ul>

	<p>ントまたは測定値の統合が有効に設定されている場合だけです。EMS 統合モニタには表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• カスタム・トポロジを使用できるのは、SiteScope がバージョン 9.00 以降の BSM に接続されている場合だけです。</li><li>• インジケータ設定が行えるのは、SiteScope がバージョン 9.00 以降の BSM または HPOM に接続されている場合だけです。</li><li>• HP Operations Manager の統合設定が行えるのは、HPOM 統合が設定され、SiteScope が HPOM に接続されている場合だけです。HPOM 統合の設定の詳細については、<a href="#">「HP Operations Manager 統合プリファレンス」</a> (687ページ) を参照してください。</li><li>• すべての表示枠で共通のボタンについては、<a href="#">「共通モニタ設定」</a> (290ページ) を参照してください。</li></ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」</a> (270ページ)</li><li>• <a href="#">「BSM と通信するための SiteScope の設定方法」</a> (228ページ)</li></ul>
関連情報	<a href="#">「統合プリファレンス」</a> (669ページ)

## BSM 統合データとトポロジ設定

このセクションでは、モニタ・インスタンスの BSM ログ記録オプションとトポロジ・レポート設定を選択できます。

<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>BSM ログ記録オプションを使用できるのは、BSM 統合が有効に設定されている場合だけです。</li> <li>BSM 9.2x にアップグレード後、ステータスの変更をレポートするように設定されたモニタは BSM の サービス状況 に影響しなくなります（システム・モニタ・ビューを除く）。これが発生するのは、測定値-インジケータ・マッピングと関連しないモニタごとにステータス変更イベントのサンプルが送信されるためです。サービス状況 でステータス変更イベントのサンプルを使用している場合には、次を実行してください。</li> <li>これらのイベントの SLM がない場合メトリック・レポートに切り替えます。</li> <li>サービス状況 と SLM の両方がステータス変更イベントのサンプルに使用されている場合には、ステータス変更イベントのサンプルに加えて SiteScope 11.x へのアップグレードとイベント・レポートへの切り替えを推奨します。</li> <li>BSM でイベント管理が導入されたため、<b>「状態の変更をレポート」</b> オプションが削除されました。このオプションは、<b>「プリファレンス」</b> &gt; <b>「インフラストラクチャ プリファレンス」</b> &gt; <b>「カスタム設定」</b> で <b>「モニタのステータスの送信を BSM 9.x のみに許可」</b> プロパティを <b>=true</b> に変更することによって、後方互換性を有効化します。</li> <li>BSM ログ記録の選択は、このモニタの BSM へのレポートに関連するデータの量と、BSM データベースでこのデータに使用できる領域に基づいて行う必要があります。</li> <li>テンプレート・モードで作業しているときは、カスタム・トポロジへの変更の適用はサポートされません（BSM のモニタのカスタム・トポロジに影響しません）。デプロイされたテンプレート・モニタのトポロジ設定を修正するには、代わりに<b>「グローバル検索と置換」</b>を使用します。詳細については、<a href="#">「グローバル検索と置換」 (96ページ)</a>を参照してください。</li> <li>トポロジ・レポートに関連する問題のトラブルシューティングについては、SiteScope ヘルプにある『BSM と HPOM との統合についてのベスト・プラクティス』ガイドの「BSM トポロジの問題」を参照してください。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」 (270ページ)</a></li> <li><a href="#">「BSM と通信するための SiteScope の設定方法」 (228ページ)</a></li> <li><a href="#">「トポロジ・レポートの設定方法」 (233ページ)</a></li> </ul>

関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>「統合プリファレンス」 (669ページ)</li><li>「BSM サーバとの接続」 (216ページ) (BSM 統合データのレポートに関する問題について)</li></ul>
------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<b>BSM ログ記録オプション</b>	
<b>BSM へのメトリックのレポートを無効にする</b>	このモニタの状態情報または測定値が BSM に転送されることを防ぐか、BSM へのモニタのレポートを一時的に無効にします。
<b>モニタの状態およびメトリックのレポートを有効にする</b>	モニタを実行するたびにすべての監視データを BSM に送信します。このオプションは最大のデータ転送読み込みを可能にします。 <b>標準設定値</b> :選択されている
<b>モニタの状態のレポートを有効にする (メトリックなし)</b>	モニタを実行するたびに、モニタ・カテゴリ（「エラー」、「警告」、「正常」）、状態の文字列、およびその他の基本的なデータのみを送信します。特定のパフォーマンス・カウンタでの情報は含まれません。 <b>注</b> :このオプションがサポートされるのは、サービス状況ではなく、レガシ SLM との後方互換性に対してのみです。
<b>モニタの状態としきい値のあるメトリックのレポートを有効にする</b>	しきい値（「エラー条件」、「警告条件」、「良好条件」など）が設定されたこれらのメトリクス・カウンタのみについて、モニタ・データを BSM に送信します。データはモニタを実行するたびに送信されます。
<b>トポロジ設定</b>	
<b>モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート</b>	SiteScope はモニタおよび関連 CI のトポロジ・データを BSM の RTSM（Run-time Service Model）にレポートします。SiteScope から転送されるデータは、モニタ・タイプによって異なります。このオプションを使用すると、SiteScope で次のことが行えます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>サポートされる環境のグループからアプリケーションを監視するモニタのトポロジを検出し、特定の CI データを転送します。サポートされる環境の詳細およびリストについては、<a href="#">「検出されたトポロジの BSM へのレポート」</a> (224ページ)を参照してください。</li> <li>ホストを監視するモニタのコンピュータ・CI データをレポートします（SiteScope は各監視対象ホストの Computer CI タイプを送信します）。このオプションが選択されている場合、モニタでは BSM の RTSM に CI としてホストを含めるトポロジが作成されます。</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>ユーザ定義の CI タイプとキー属性値に基づいて CI データをレポートします。</li> </ul> <p>オプションがクリアされると、モニタおよび関連 CI のトポロジ・データは BSM にレポートされず、およびインジケータ設定セクションは使用できない状態になります。</p> <p>SiteScope から RTSM にデータをレポートする方法の詳細については、<a href="#">「SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合」(219ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>注：</b> SiteScope が BSM に接続された状態で（イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有しており）、イベント送信が有効になっていると、ホストは操作管理経由で BSM にレポートされます。</p> <p><b>標準設定値：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>サポートされる環境のモニタ、および標準設定で CI タイプが定義されるモニタの場合に選択されています。</li> <li>標準設定でトポロジが定義されていないモニタの場合は選択されていません。これらのモニタのリストについては、<a href="#">「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」(245ページ)</a>を参照してください。</li> </ul>
<b>CI タイプ</b>	<p>BSM の RTSM にデータをレポートするために使用される、モニタのトポロジ。このモニタ・インスタンスと BSM の RTSM 内の既存の論理構成アイテム・タイプ (CIT) をリンクできます。このリンク（関係）により、モニタでは KPI 状態をリンク先の CI に渡せます。</p> <p>CI タイプは次のことを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>Default (&lt;CI type&gt;)：</b> モニタの標準設定の CI タイプ（ほとんどのモニタでは、標準設定の CI タイプは Computer）。標準設定の CI タイプが Computer でないモニタのリストについては、<a href="#">「検出されたトポロジの BSM へのレポート」(224ページ)</a>を参照してください。</li> </ul> <p>CI タイプには、BusinessApplication, BusinessService, DB2, InfrastructureService, JBoss AS, Node, Oracle, Oracle iAS, SQL Server, Sybase, Unix, WebLogic AS, WebSphere AS, Windows があります。</p> <p>SiteScope 11.23（またはそれ以降）が BSM 9.23（またはそれ以降）と統合されている場合に、汎用的な実行中のソフトウェア CI タイプに対するサポートが追加されました。この CI タイプは、データベース、アプリケーション・サーバ、Web サーバなどの、あらゆる子孫 CI タイプと一致することが可能です（子孫 CI タイプの完全なリストは、RTSM のドキュメントを参照してください）。</p>



UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Default (Multiple)</b> : モニタに複数の CI があります（これは CI タイプが測定値ごとに存在する場合）。これらのモニタの CI タイプは固定されていて変更できません。これらのモニタのリストについては、<a href="#">「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」(245ページ)</a>を参照してください。</li> <li>• <b>None</b> : モニタ・インスタンスが CI タイプにリンクしていません。これらのモニタのリストについては、<a href="#">「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」(245ページ)</a>を参照してください。RTSM ビューから CI タイプを選択し、このモニタ・インスタンスにリンクできます。ビューの選択およびビューを使った作業の詳細については、BSM ヘルプにある『『モデリング・ガイド』』の「CI セレクタを使った作業」を参照してください。</li> </ul> <p><b>注 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• この設定がアクティブになるのは、<b>「モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート」</b> が選択されている場合だけです。</li> <li>• CI タイプを選択すると、インジケータ設定テーブルがフィルタされ、選択した CI タイプにのみ存在するマッピングが表示されます。</li> </ul>
<b>&lt;CI タイプのキー属性&gt;</b>	<p>モニタ・インスタンスに選択した CI タイプに従って、CI タイプのキー属性が表示されます。選択した CI タイプのキー属性値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>サーバ</b> : 選択した CI のコンテナ CI。この属性は、DB2, JBoss AS, Oracle, Oracle iAS, SQL Server, Sybase, WebLogic AS, WebSphere AS, および Windows CI タイプに必要です。</li> <li>• <b>名前</b> : CI の名前 (BusinessApplication, BusinessService, Computer, DB2, InfrastructureService, JBoss AS, Oracle, Oracle iAS, SQL Server, Sybase, WebLogic AS, および WebSphere AS CI タイプ用)。</li> <li>• <b>組織タイプ</b> : 組織内のレベルを識別するために使用される識別子。この属性は、BusinessApplication, BusinessService, および InfrastructureService CI タイプに必要です。</li> <li>• <b>組織名</b> : 組織の名前。この属性は、BusinessApplication, BusinessService, および InfrastructureService CI タイプに必要です。</li> </ul> <p><b>注 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• この設定がアクティブになるのは、<b>「モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート」</b> が選択されている場合だけです。</li> <li>• CI キー属性は、CI タイプが測定値ごとのモニタの場合は表示されません。これらのモニタのリストについては、<a href="#">「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」(245ページ)</a>を参照してください。</li> <li>• SiteScope 11.23 以降にアップグレードする際、<b>「組織タイプ」</b> フィールド</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p>にスペルミスや不正なパラメータ定義などのエラーがあると、SiteScope はビジネス要素 CI を持っているモニタのカスタム・トポロジを更新できません。このフィールドは空の値になります。</p> <p><b>回避策:</b> アップグレードの実行後、ドロップ・ダウン・リストから必要な組織タイプを選択します。</p>





## インジケータ設定


このセクションには、SiteScope モニタ・タイプの測定値と、その測定値の割り当て先である状況インジケータ (HI) およびイベント・タイプ・インジケータ (ETI) が表示されます。インジケータは、モニタのトポロジが BSM の RTSM に報告されるときに、構成アイテム (CI) の状況の詳細ビューを提供します。インジケータ設定テーブルはフィルタされ、選択した CI タイプのみに存在するモニタ・インスタンスのマッピングが表示されます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>インジケータ設定が使用できるのは Operations Manager イベント統合または BSM 統合が有効で、かつ次の条件が満たされている場合になります。</li> <li><b>【モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート】</b> 設定が <b>【BSM 統合データとトポロジ設定】</b> セクションで選択されている。</li> <li>モニタに標準設定の測定値とインジケータのマッピングがある。標準設定のインジケータ・マッピングを持たないモニタのリストについては、<a href="#">「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」(245ページ)</a>を参照してください。</li> <li>(CI タイプが <b>Default (Multiple)</b> として表示される) 測定値ごとの CI タイプをレポートするモニタのインジケータ・マッピングは、<b>【インジケータ設定】</b> パネルで追加したり削除することができません。これらのモニタ・タイプに対するマッピングは、BSM (<b>【SAM 管理】 &gt; 【メトリックとインジケータ】</b> タブ) でのみ追加したり削除できます。これらのモニタのリストについては、<a href="#">「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」(245ページ)</a>を参照してください。</li> <li>SiteScope 内のインジケータ割り当てテーブルには、BSM 内のインジケータ割り当てリポジトリには存在しない割り当てが含まれることがあります。これは BSM 内で不正に定義されたマッピングは、SiteScope にダウンロードされる際に検証されないためです (一方 BSM では検証されるため、表示されます)。</li> <li>CI およびインジケータ に関する十分な知識がある上級ユーザ以外は、インジケータのマッピングの編集や、測定値へのマッピングの追加は行わないでください。</li> </ul>
-------	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>インジケータ・マッピング・テーブルのいずれかの設定を修正すると、これを示す注がテーブルの下に表示されます。</li> </ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」(270ページ)</a></li> <li><a href="#">「トポロジ・レポートの設定方法」(233ページ)</a></li> </ul>
関連情報	<a href="#">「SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合」(219ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

	<p><b>新規:</b> モニタ・タイプに基づいて、モニタ・インスタンスに測定値とインジケータのマッピングを追加できます。</p> <p><b>注:</b> このボタンは複数の CI タイプを持つモニタに対して使用できません (<a href="#">「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」(245ページ)</a>を参照)。これらのモニタに対するインジケータ・マッピングは、BSM (<a href="#">【SAM 管理】</a> &gt; <a href="#">【メトリックとインジケータ】</a> タブ) でのみ追加できます。</p>
	<p><b>削除:</b> 選択されている測定値とインジケータのマッピングを削除します。</p> <p><b>注:</b> このボタンは複数の CI タイプを持つモニタに対して使用できません (<a href="#">「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」(245ページ)</a>を参照)。これらのモニタに対するインジケータ・マッピングは、BSM (<a href="#">【SAM 管理】</a> &gt; <a href="#">【メトリックとインジケータ】</a> タブ) でのみ削除できます。</p>
	<p><b>標準設定にセット:</b> モニタ・タイプの測定値とインジケータ・マッピングを、現在のバージョンの SiteScope に含まれている標準設定のマッピングにリセットします。インジケータ・マッピングは、BSM のシステム可用性管理 (SAM) の中央リポジトリに格納されます。SiteScope では、SAM でマッピングが変更されていないかを 5 分ごとにチェックし、変更されている場合は最新のマッピングをダウンロードします。</p> <p>ローカル SiteScope サーバ上でインジケータ・マッピングが変更された場合、これらのマッピングは、トポロジが次回 BSM にレポートされるときに、中央管理されているマッピングによって上書きされません。</p> <p>中央管理されているマッピングの変更の詳細については、BSM ヘルプにある『BSM アプリケーション管理ガイド』の「状況インジケータの概要」を参照してください。</p>
	<p><b>下へ移動:</b> 選択したインジケータ・マッピングをリスト内で下方向へ移動することにより、インジケータ・マッピングのソート順を変更できます。マッピングの順序をローカルに変更する場合は、SAM 管理内のインジケータ・リポジトリからマッピング変更がダウンロードされる際にローカルのマッピング順序が上</p>

	書きされることはありません。
	<b>上へ移動:</b> 選択したインジケータ・マッピングをリスト内で上方向へ移動することにより、インジケータ・マッピングの並べ替え順序を変更できます。マッピングの順序をローカルに変更する場合は、SAM管理内のインジケータ・リポジトリからマッピング変更がダウンロードされる際にローカルのマッピング順序が上書きされることはありません。
<b>測定値パターン</b>	測定値名を表示またはモニタ・インスタンスのインジケータにマッピングされた測定値名に基づいて正規表現パターンを表示します。既存のマッピングを変更、または新規作成できます。同じ正規表現に複数のCIタイプが存在する場合は、別々の行にそれらが表示されます。正規表現の使用の詳細については、 <a href="#">「正規表現」(187ページ)</a> を参照してください。  <b>注:</b> 使用可能な測定値のリストは、設定しているモニタのタイプに基づいて動的に更新されます。多くのモニタ・タイプに存在し、それぞれのモニタ・タイプで異なる標準設定の測定値。
<b>CI タイプ</b>	モニタ・インスタンスに選択したCIタイプを表示します（インジケータ設定テーブルがフィルタされ、選択したCIタイプにのみ存在するマッピングが表示される）。  <b>注:</b> このフィールドは編集できません。
<b>インジケータ</b>	測定値のインジケータ・マッピングを表示します。ドロップダウン・リスト内で、状況インジケータは区分線の上に表示され、イベント・タイプ・インジケータは区分線の下に表示されます。

## HP Operations Manager 統合設定

このセクションでは、HP Operations Agent にイベントを送信し、測定値をレポートするように SiteScope を設定できます。イベントを HPOM および BSM の 操作管理 に送信したり、測定値を Performance Manager（HPOM のレポート・コンポーネント）および 操作管理 のパフォーマンス・グラフ作成にレポートするには、エージェントが必要です。モニタ・インスタンスのイベントの送信に使用するイベント・プリファレンス・マッピングも選択できます。

<b>重要な情報</b>	これらの設定が行えるのは、HP Operations Agent がインストールされて HPOM サーバに接続されており、かつイベント/測定値統合が [Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合だけです。
<b>関連タスク</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」(270ページ)</a></li> <li>・ <a href="#">「HPOM または BSM 用の共通イベント・マッピングの設定方法」(557ページ)</a></li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope がイベントを HPOM または操作管理に送信できるようにする方法や SiteScope が HP Operations Agent を使用してメトリクスをレポートできるようにする方法の詳細については、SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」を参照してください。<a href="#">HP ソフトウェア統合サイト</a>では、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます。:</li> </ul> <p>Windows の場合:  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39</a>  UNIX の場合:  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628</a></p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「統合プリファレンス」(669ページ)</a></li> <li><a href="#">「共通イベント・マッピング」(556ページ)</a></li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

HP Operations Agent へのメトリックのレポート	<p>HPOM および 操作管理 (BSM の) がデータの収集元として使用できる HP Operations Agent に対して、SiteScope からモニタ・インスタンスの測定値をレポートできます。</p> <p><b>注:</b> モニタ測定値がエージェントに送信されるのは、[Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで測定値統合が有効に設定されている場合だけです。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「HP Operations Manager 統合メイン設定」(688ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値:</b> 測定値統合が有効になっている場合、選択済み（有効でない場合、この設定は行えません）。</p>
イベント送信	<p>モニタ・インスタンスのカウンタ/測定値の状態（<b>正常</b>、<b>警告</b>、<b>エラー</b>、<b>利用不可</b>）に変更があった場合にHPOM または 操作管理 (BSM) へのイベント送信を有効にします。状態の変更は、モニタのしきい値の設定で指定されているカウンタまたは測定値にのみ適用されます。</p> <p><b>注:</b> この設定が行えるのは、HP Operations Agent がインストールされて HPOM または BSM サーバに接続されており、かつイベント統合が [Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合だけです。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「HP Operations Manager 統合メイン設定」(688ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値:</b> イベント統合が有効になっている場合、選択済み（有効でない場合、この設定は行えません）。</p>
最初のイベントを手動で送信	<p>BSM に接続されている SiteScope で新しいモニタを作成すると、BSM にトポロジがレポートされる前に最初のイベントがトリガされる可能性があります。この際、このイベントは サービス状況 パースペクティブから消失します（操作</p>

	<p>管理イベント・ブラウザには引き続き表示されます)。このオプションは、次のイベントが送信されるのを待機するのを避ける場合に選択してください。モニタの測定値がその状態変更条件を満たしていても、イベントは次のモニタ実行時に再送信されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p> <p><b>注 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>このオプションは、モニタの実行後、自動的に無効になります。</li> <li>この設定は、[グローバル検索と置換] を使用してグローバルに行えます。</li> </ul>
--	--

## BSM サービス状況プリファレンス

このセクションによって、SiteScope イベントとメトリックスの両方がBSM にレポートされるときにBSM のサービス状況 に影響を与えるプリファレンスを設定できます。

<b>重要な情報</b>	<p>この設定を使用できるのは次の場合に限ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>BSM および Operations Manager 統合の両方がアクティブで、同じ BSM サーバに接続されている (HPOM サーバの代わりに BSM サーバが使用されます)。</li> <li>モニタの [HP 統合設定] で次の設定を行います。 <ul style="list-style-type: none"> <li>BSM 統合データとトポロジ設定で: <b>[モニタの状態およびメトリックのレポートを有効にする]</b> または <b>[モニタの状態としきい値のあるメトリックのレポートを有効にする]</b> , および</li> <li>HP Operations Manager 統合設定で: <b>[イベント送信]</b> を設定します。</li> </ul> </li> </ul> <p><b>注 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>[イベント送信]</b> だけが選択されている場合、<b>[次の要因に影響される BSM サービス状況]</b> プリファレンスは <b>[イベント]</b> に設定されます。</li> <li><b>[モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート]</b> だけが選択されている場合、<b>[次の要因に影響される BSM サービス状況]</b> プリファレンスは <b>[メトリックス]</b> に設定されます。</li> <li>両方が選択されている場合、<b>[メトリックス]</b> が標準設定のプリファレンスとなります。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」(270ページ)</a></li> <li><a href="#">「トポロジ・レポートの設定方法」(233ページ)</a></li> <li>SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」にある「SiteScope を使用して HPOM または操作管理にイベントを送信する方法」</li> </ul>



	<p><a href="#">HP ソフトウェア統合</a>で、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます。</p> <p>Windows の場合：  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39</a></p> <p>UNIX の場合：  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=62">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=62</a></p>
--	---

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

<p><b>次の要因に影響される BSM サービス状況</b></p>	<p>SiteScope イベントおよびメトリックスの両方がサービス状況 にレポートされるときに BSM のサービス状況 に影響を与えるプリファレンス（イベントまたはメトリックス）を選択します（SiteScope イベントおよびメトリックス両方のインジケータがCIに影響を与えるため）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>メトリクス</b>：選択すると、各 SiteScope メトリックは BSM で CI に影響します（SiteScope によってレポートされるステータス変更イベントはサービス状況 で CI に全く影響しません）。</li> <li>・ <b>イベント</b>：選択されると、ステータス変更イベントは BSM のサービス状況の CI に影響します（監視対象の CI の SAM レポートはこれまで通りメトリックスに基づいています）。</li> </ul> <p>使用するプリファレンスの選択の詳細については、SiteScope ヘルプの「Integration with BSM と HPOM との統合についてのベスト・プラクティス」の「SiteScope と BSM との統合」を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b>:メトリックス</p> <p><b>注</b>：Operations Manager 統合の設定時に作成されたすべての新しいモニタにグローバル標準設定プリファレンス（イベントまたはメトリックス）も設定できます。詳細については、<a href="#">「HP Operations Manager 統合メイン設定」(688ページ)</a>の「BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します(グローバル・プリファレンス)」を参照してください。</p>
-------------------------------------	--

## イベント マッピング設定

【イベント マッピング設定】パネルは、モニタ・インスタンスのイベント送信時に使用される属性値に対して、SiteScopeのランタイム・データをマッピングするためのテンプレートを選択する場合に使用されます。

<p><b>アクセス方法</b></p>	<p>【<b>モニタ</b>】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、【<b>プロパティ</b>】タブをクリックして【<b>イベント マッピング設定</b>】を選択します。</p>
<p><b>重要な情報</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 【イベント マッピング設定】パネルを利用できるのは、HP Operations</li> </ul>

	<p>Agent がインストールされて HPOM または BSM サーバに接続されており、かつイベント統合が [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合や [統合プリファレンス] で一般イベント統合が設定されている場合になります。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「HP Operations Manager 統合プリファレンス」</a> (687ページ)を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>すべての表示枠で共通のボタンについては、<a href="#">「共通モニタ設定」</a> (290ページ)を参照してください。</li> </ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」</a> (270ページ)</li> <li><a href="#">「SiteScope 一般イベント統合の設定方法」</a> (700ページ)</li> </ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「一般イベント統合プリファレンス設定」</a> (699ページ)</li> <li><a href="#">「HTTP プリファレンス」</a> (603ページ)</li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
イベント・マッピング	<p>必要なイベント・マッピング・テンプレートを選択するか、標準設定のマッピングを使用します。[新規] または [編集] をクリックして [共通イベントマッピング] ダイアログ・ボックスを開き、新しいイベント・プリファレンスを設定するか、既存のイベント・プリファレンスを変更します。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[新規イベントマッピング] / [イベントマッピングの編集] ダイアログ・ボックス」</a> (560ページ)を参照してください。</p> <p><b>注：</b>ここでイベント・マッピングを編集すると、このテンプレートを使用しているすべてのモニタのイベント・パターンが変更されます。特定のモニタによって別の属性をレポートするためには、新しいイベント・マッピングを作成することをお勧めします。</p>

## モニタの有効化/無効化

[モニタの有効化/無効化] パネルでは、選択したモニタの状態（有効/無効）を設定できます。

アクセス方法	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で [プロパティ] タブをクリックして [モニタの有効化/無効化] を選択します。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>モニタの詳細フィールドに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティ</li> </ul>



	<p>がチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードなど）を修正する修正アクションが実行されます悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>モニタのダウンタイム・テーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、選択したモニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受ける場合にのみ表示されます。詳細については、「<a href="#">CI のダウンタイム</a>」(226ページ)を参照してください。</li> <li>カスタム・モニタを含んでいるテンプレートに対して変更を適用すると、モニタは変更が適用される前に一時的に無効になり、変更の適用の完了後に、有効な状態に復歸します。</li> <li>すべての表示枠で共通のボタンについては、「<a href="#">共通モニタ設定</a>」(290ページ)を参照してください。</li> </ul>
関連タスク	<a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」</a> (270ページ)
関連情報	<a href="#">「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」</a> (1063ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されず）。

UI 要素	詳細
モニタを有効化	<p>モニタがすでに無効になっている場合、モニタを有効にします。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
モニタを無効化	<p>モニタを無効にします。モニタが無効化されている場合、SiteScope では、引き続きモニタの【頻度】設定に基づいてモニタの実行をスケジュールしますが、モニタ・アクションは実行されません。モニタの実行がスケジュールされていても、SiteScope によってモニタのデータ・ログ・エントリが記録されますが、この場合は測定値データの代わりにモニタの状態が無効であるという報告が記録されます。</p>
次の時間設定でモニタを無効化： <期間>	<p>モニタを無効にしておく期間。【秒】，【分】，【時間】，または【日】を選択して、適用する無効化期間を定義します。</p>
1 回限りのスケジュールに基づいてモニタを無効化： <時間> ~ <時間>	<p>モニタを将来のある期間だけ一時的に無効にします。1 日より長い期間に設定できます。</p> <p>次の形式で無効化期間の開始時間と終了時間を入力または選択します。 hh:mm:ss mm/dd/yyyy。</p>

UI 要素	詳細
無効化の説明	モニタ・グループ表示にモニタの状態の一部として表示される省略可能な説明テキスト。無効化状態のテキストには、どの無効化オプションがモニタに適用されているかを示す文字列も含まれます。たとえば、「手動で無効化されています」は、 <b>【モニタを無効化】</b> オプションを使用してモニタが無効にされたことを示します。
モニタのダウンタイム・テーブル （このテーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、選択したモニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受ける場合にのみ表示されます。詳細については、 <a href="#">「CI のダウンタイム」 (226ページ)</a> を参照）。	
ダウンタイム名	[BSM Downtime] ウィザードで設定されたダウンタイムの名前。
ダウンタイムの詳細	[BSM Downtime] ウィザードで入力されたダウンタイムの詳細。
現在オカレンスの終了日	現在発生しているダウンタイムが終了する予定日時。

## 関連する警告の有効化/無効化

【関連する警告の有効化/無効化】パネルでは、関連付けられている警告の状態（有効/無効）を設定できます。

アクセス方法	<b>【モニタ】</b> コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で <b>【プロパティ】</b> タブをクリックして <b>【関連する警告の有効化/無効化】</b> を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>モニタの詳細フィールドに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードなど）を修正する修正アクションが実行されます悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。</li> <li>関連付けられた警告のダウンタイム・テーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、モニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受け、かつモニタの関連付けられた警告にダウンタイムが適用される場合にのみ表示されます。詳細については、<a href="#">「CI のダウンタイム」 (226ページ)</a> を参照してください。</li> <li>すべての表示枠で共通のボタンについては、<a href="#">「共通モニタ設定」 (290ページ)</a> を参照してください。</li> </ul>

	<a href="#">シ</a> を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">モニタを作成, デプロイする方法</a>」(270ページ)</li> <li>「<a href="#">警告の設定方法</a>」(1235ページ)</li> </ul>
関連情報	「 <a href="#">SiteScope 警告の設定</a> 」(1231ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
関連付けられたすべての警告を有効化	<p>このモニタに関連付けられた警告がすでに無効になっている場合は、その警告を有効にします。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
関連する警告を無期限に無効化	<p>このラジオ・ボタンをクリアして警告定義を更新するまで、警告の条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されないようになります。</p> <p><b>注</b>：このオプションを使用すると、一時的な条件に対応するために警告が無効になっている場合、予想される警告機能が失われる場合があります。後でこの状態を確認し、必要に応じて警告定義を手動で有効にしてください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
次の時間設定で関連付けられたすべての警告を無効化	<p>関連付けられた警告を無効にしておく期間。[秒]，[分]，[時間]，または[日]を選択して、適用する無効化期間を定義します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
1 回限りのスケジュールに基づいて関連付けられたすべての警告を無効化：開始<時刻> ~ 終了<時刻>	<p>関連付けられた警告を将来のある期間だけ一時的に無効にします。1 日より長い期間に設定できます。</p> <p>次の形式で無効化期間の開始時間と終了時間を入力します。 hh:mm:ss mm/dd/yyyy。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
無効化の説明	省略可能な説明テキスト。
<b>関連付けられた警告のダウンタイム・テーブル</b> （このテーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、モニタが現在ダウンタイム中の CI の影	

UI 要素	詳細
	響を受け、かつモニタに関連付けられた警告にダウンタイムが適用される場合にのみ表示されます。詳細については、 <a href="#">「CI のダウンタイム」 (226ページ)</a> を参照。
ダウンタイム名	【BSM Downtime】ウィザードで設定されたダウンタイムの名前。
ダウンタイムの詳細	【BSM Downtime】ウィザードで入力されたダウンタイムの詳細。
現在オカレンスの終了日	現在発生しているダウンタイムが終了する予定日時。

## タグの検索 / フィルタ

【タグの検索 / フィルタ】パネルでは、キーワード / フィルタ・タグを定義し、それを1つ以上のモニタに割り当て、そのタグを使用して表示を検索またはフィルタできます。

SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。

アクセス方法	【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で【プロパティ】タブをクリックして【 <a href="#">タグの検索/フィルタ</a> 】を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</li> <li>【プリファレンス】コンテキスト（【プリファレンス】 &gt; 【<a href="#">タグの検索/フィルタ</a>】）で既存のタグを編集できます。このトピックの詳細については、<a href="#">「タグの検索 / フィルタ」 (730ページ)</a>を参照してください。</li> <li>すべての表示枠で共通のボタンについては、<a href="#">「共通モニタ設定」 (290ページ)</a>を参照してください。</li> </ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」 (270ページ)</a></li> <li><a href="#">「タグの検索 / フィルタを使用してビューをフィルタする方法」 (80ページ)</a></li> </ul>
関連情報	<a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」 (78ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	タグが作成されている場合は、タグの名前と値が表示されます。モニタに割り当てるタグまたはタグの値を選択します。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。
タグの追加	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(87ページ)を参照してください。

## ベースライン設定

[ベースライン設定] パネルには、選択したモニタのベースラインの状態が表示されます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で[プロパティ] タブをクリックして[ベースライン設定]を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>ベースライン設定は、しきい値設定を更新するためのダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用するモニタには使用できません。</li><li>すべての表示枠で共通のボタンについては、「<a href="#">共通モニタ設定</a>」(290ページ)を参照してください。</li></ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li><a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」</a> (270ページ)</li><li><a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」</a> (336ページ)</li></ul>
関連情報	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」</a> (335ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
ベースラインの状態	モニタのベースライン状態。次の状態があります。 <ul style="list-style-type: none"><li><b>ベースライン設定するモニタが選択されていません</b>：ベースライン設定するモニタが選択されていません。</li><li><b>ベースラインの計算中</b>：SiteScope でベースラインを計算中です。</li><li><b>計算に失敗</b>：SiteScope でベースラインを計算できませんでした。</li><li><b>計算済み、アクティブでない</b>：モニタのベースラインが計算されましたが、まだアクティブ化されていません。</li></ul>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>ベースラインの有効化</b>: SiteScope でベースラインをアクティブ化しています。</li> <li>・ <b>アクティベーションが失敗しました</b>: SiteScope でベースラインをアクティブ化できませんでした。</li> <li>・ <b>アクティブ化されたベースライン</b>: モニタのベースラインがアクティブ化されました。</li> </ul> <p>ベースラインの状態が「<b>ベースライン設定するモニタが選択されていません</b>」以外の場合は、<b>「ベースライン モード」</b> チェック・ボックスが選択されています。</p> <p>ベースラインしきい値の使用の詳細については、<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」 (335ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>ベースラインの削除</b>	<p>ベースラインしきい値を削除します。ベースラインしきい値が削除され、静的しきい値を使用してしきい値が作成されます。ベースラインを計算した後に（計算が失敗した場合でも）ベースラインを計算するには、ベースラインを削除する必要があります。</p> <p>このトピックの詳細については、<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」 (335ページ)</a>を参照してください。</p>

## ログ設定

【ログ設定】パネルでは、各モニタ・インスタンスに指定したログ・レベルで専用のログ・ファイルを作成し、表示できます。

<b>アクセス方法</b>	<p><b>【モニタ】</b> コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、<b>【プロパティ】</b> タブをクリックして<b>【ログ設定】</b>を選択します。</p>
<b>関連タスク</b>	<p><a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」 (270ページ)</a></p>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <a href="#">「【ログ ファイル】 ページ」 (1163ページ)</a></li> <li>・ <a href="#">「ログ・プリファレンス」 (710ページ)</a></li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>このモニタ用の</b>	

UI 要素	詳細
別個のログを有効化	<p>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\logs\monitor_runs フォルダにある当該モニタ・インスタンスの専用ログ・ファイルへのログ・データの送信を有効化します。このフォルダには、モニタ・インスタンスごとに1つのファイルが格納されます。ログ・ファイル名の形式は、次のように、SiteScope ツリーのモニタ・パスに応じて決まります :SiteScope_&lt;モニタ・グループ&gt;_&lt;モニタ名&gt;.log。各モニタを起動すると、このログ・ファイルが <a href="#">[ログファイル] ページ</a> (1163ページ) に表示されます。詳細については、<a href="#">「[ログファイル] ページ」 (1163ページ)</a> を参照してください。</p> <p>このオプションを無効にすると、選択したモニタのログ・データは専用のモニタ・ログ・ファイルに送信されません。その場合でも、ログ・データは、汎用ログ・ファイル (<b>error.log</b> や <b>RunMonitor.log</b> など) には送信され、他のすべてのモニタのログ・データといっしょに格納されます。</p> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>このモニタ（およびモニタ・インスタンス・ログが有効化されている他のすべてのモニタ）のセパレート・ログを有効化する場合は、<a href="#">[プリファレンス] &gt; [ログ プリファレンス]</a> で <a href="#">[モニタのセパレート ログを無効化]</a> チェック・ボックスをクリアする必要があります（標準設定ではクリアされています）。モニタのセパレート・ログ・オプションが <a href="#">[ログ プリファレンス]</a> で無効になっていると、モニタ・インスタンスのログを有効化したとき <a href="#">[ログ設定]</a> パネルに警告が表示されます。その場合は、まず、<a href="#">[ログ プリファレンス]</a> で <a href="#">[モニタのセパレート ログを無効化]</a> チェック・ボックスをクリアする必要があります。</li> <li>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\logs\monitor_runs フォルダには、モニタ・インスタンスの最後の実行時に生成されたログ・データが格納されます。モニタ・インスタンスのログ・データ履歴は汎用ログ・ファイルに格納されます。</li> </ul>
ログ・レベル	<p><a href="#">[DEBUG]</a> , <a href="#">[INFO]</a> , <a href="#">[WARN]</a> , <a href="#">[ERROR]</a> , または <a href="#">[FATAL]</a> を選択します。選択したログ・レベルによって、選択したモニタ・インスタンス専用のログ・ファイルと汎用のログ・ファイルの両方に送信される、このモニタ・インスタンスのログ・メッセージが決まります。ログ・レベルの詳細については、<a href="#">「ログ・レベル」 (324ページ)</a> を参照してください。</p> <p>ログ・レベルは、<a href="#">[このモニタ用の別個のログを有効化]</a> が有効になっている場合のみ選択できます。<a href="#">[このモニタ用の別個のログを有効化]</a> が無効になっている場合、すべてのモニタのログ・レベルは <b>log4j.properties</b> ファイルによって決まります。</p>
perfex プロセス用のデバッグを	<p>perfex プロセスのデバッグを有効にします。perfex プロセスの詳細については、<a href="#">「[Perfex プロセス プール] ページ」 (1169ページ)</a> を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
有効化	perfex プロセスのデバッグは、 <b>「このモニタ用の別個のログを有効化」</b> が有効になっている場合のみ有効化できます。
ログの表示	クリックするとログが表示されます。ログは、選択したログ・レベルのデータが存在する場合のみ表示されます。


## ログ・レベル

ログ・レベルは階層構造になっています。すなわち、一部のログ・レベルの出力は他のログ・レベルの出力も包含します。次の図を参照してください。

各ログ・レベルで出力されるメッセージ	DEBUG	INFO	WARN	ERROR	FATAL
DEBUG	X	X	X	X	X
INFO		X	X	X	X
WARN			X	X	X
ERROR				X	X
FATAL					X







## 「依存対象モニタの選択」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、別のモニタの状態に基づいてこのモニタまたはモニタ・グループを実行するように設定できます。

アクセス方法	<b>「モニタ」</b> コンテキストを選択します。モニタ・ツリーでモニタを選択し、 <b>「プロパティ」</b> タブをクリックします。 <b>「依存関係」</b> タブを展開し、 <b>「依存対象」</b>  をクリックします。依存関係を作成するモニタを選択します。
関連タスク	<a href="#">「モニタを作成、デプロイする方法」 (270ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「グループの依存関係の監視」 (264ページ)</a></li><li>・ <a href="#">「モニタ・ツリー」 (30ページ)</a></li></ul>



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	個々の SiteScope サーバを表します。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない）を表します。 モニタ・グループまたはサブグループにグループ警告が設定されている場合、グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。
	SiteScope モニタ（有効/無効）を表します。 モニタに警告が設定されている場合、モニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。
	SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる利用可能な状況モニタの集合を表します。 <b>親</b> : SiteScope.




## 「テンプレートの選択」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、モニタ・グループにデプロイするテンプレートを選択できます。

アクセス方法	「 <b>モニタ</b> 」コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、テンプレートのデプロイ先のグループを右クリックして、「 <b>テンプレートのデプロイ</b> 」または「 <b>CSV を使用してテンプレートをデプロイ</b> 」を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>子オブジェクト（サブグループ、モニタ、変数、リモート・サーバ）がまったく含まれていないテンプレートは、テンプレート・ツリーに表示されません。</li><li>ソリューション・テンプレートは「テンプレートの選択」ダイアログ・ボックスには表示されず、「テンプレート」コンテキストからのみデプロイできます。詳細については、「<a href="#">SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法</a>」(916ページ)を参照してください。</li></ul>
関連タスク	「 <a href="#">テンプレートを使用した監視構造の作成方法</a> 」(804ページ)
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>「<a href="#">テンプレート変更の適用</a>」(891ページ)</li><li>「<a href="#">ソリューション・テンプレートのデプロイ</a>」(910ページ)</li><li>「<a href="#">モニタ・ツリー</a>」(30ページ)</li></ul>

- [「テンプレート・ツリー」 \(42ページ\)](#)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。






UI 要素	詳細
	SiteScope ルート・グループを表します。
	テンプレート・コンテナを表します。テンプレート・コンテナは、デプロイメントの設定テンプレートの整理に使用されます。展開するとテンプレートが表示されます。
	SiteScope オブジェクトのデプロイ用のテンプレート設定を表します。デプロイするテンプレートを選択します。CTRL または SHIFT キーを使用すると複数のテンプレートを選択できます。

## [テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートまたはテンプレート・グループに SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ）とその内容（モニタ、警告、レポート）をコピーできます。

アクセス方法	モニタ・ツリーまたはリモート・サーバ・ツリーで、テンプレートにコピーするオブジェクトを右クリックして、 <b>「テンプレートにコピー」</b> を選択します。 [テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックスで、テンプレート・オブジェクトのコピー先を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• テンプレートにまだグループが含まれていない場合、グループとその内容をテンプレートにコピーできます。</li> <li>• サーバ・モニタをテンプレートにコピーすると、SiteScope によってサーバ名が <code>\$\$SERVER_LIST\$\$</code> 変数で置換されます。 <b>ヒント:</b> モニタをテンプレートにコピーした後にテンプレートにリモート・サーバを作成し、<code>\$\$SERVER_LIST\$\$</code> 変数をこのリモート・サーバで置換することをお勧めします。</li> <li>• Web スクリプト・モニタはテンプレート・モードではサポートされていません。</li> </ul>
関連タスク	<a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」 (804ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">「モニタ・ツリー」 (30ページ)</a></li> <li>• <a href="#">「テンプレート・ツリー」 (42ページ)</a></li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	個々の SiteScope サーバを表します。
	テンプレート・コンテナを表します。テンプレート・コンテナは、デプロイメントの設定テンプレートの整理に使用されます。  テンプレート・コンテナにはテンプレートのみを格納できます。
	SiteScope オブジェクトのデプロイ用のテンプレート設定を表します。  テンプレート・グループ（テンプレートにまだグループが含まれていない場合）またはリモート・サーバをテンプレート・グループにコピーできます。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない）を表します。  テンプレート・グループまたはモニタをテンプレート・グループにコピーできます。  モニタ・グループまたはサブグループにグループ警告が設定されている場合、グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。

## 第25章: カスタム・モニタの作成

カスタム・モニタは、インフラストラクチャ・システムおよびアプリケーションの可用性とパフォーマンスの追跡するための標準の SiteScope モニタの機能を拡大します。カスタム・モニタを使用すると、所定の SiteScope モニタでサポートされない環境の独自のソリューションを展開できます。これにより、既存のモニタでは不可能な柔軟性が得られます。

**ヒント:** YouTube で WMI カスタム・モニタの使用に関するガイドとナレーション付きの説明を見ることができます。

- カスタム WMI モニタの作成プロセスとパッケージング - <http://www.youtube.com/watch?v=bB6NITGdd88>
- カスタム WMI モニタ・データの処理スクリプト - <http://www.youtube.com/watch?v=Glw3JVnunWE>

### アクセス方法

【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、グループを右クリックして【新規作成】>【モニタ】の順に選択し、いずれかのカスタム・モニタを選択します（「[カスタム・モニタのリスト](#)」(330ページ)を参照）。

## 学習事項

### カスタム・モニタの概要

カスタム・モニタは次の用途に使用できます。

- **既存のモニタでは使用できないデータの収集**

データを収集するカスタマイズした独自のモニタを作成し、収集したデータの結果を処理して新しいメトリックを作成できます。

- **収集したデータの処理**

収集したデータは、モニタで定義したスクリプトを使用して処理されます。モニタが実行されるたびに、収集したデータの結果を抽出および処理し、スクリプトに定義されたメトリックのステータスを更新して返します。

たとえば、データベースから収集されたデータに基づくメトリックを定義でき、それに数値演算を実行できます。スクリプトの作成時には、独自にまたはサードパーティが開発した Java コードを使用して、データを処理できます。

**ヒント:**

- すべてのカスタム・モニタのサンプル・スクリプトは、サンプル・コンテンツ・パッケージから利用できます。このパッケージは <SiteScope のインストール・ディレクトリ

> >\examples\

**monitors\custom** フォルダにあります。**CustomMonitorSamplePackage.zip** には SiteScope 11.20 が含まれています。**CustomMonitorsExamples\_11\_21.zip** には、動的クエリを使用したカスタム・データベース・モニタ、コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードを使用して作成したマニフェスト・ファイル、テンプレート・メール、テンプレート・メールの件名ファイルが含まれています。これらのスクリプトを使用するには、カスタム・モニタ内容パッケージをインポートし、カスタム・モニタ・テンプレートをデプロイする必要があります。詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の個別のカスタム・モニタの「カスタマイズ可能なモニタのインポートおよび使用方法」を参照してください。

- スクリプトで利用できるメソッドおよびクラスの詳細については、『HP SiteScope Custom Monitor API Reference』を参照してください(<**SiteScope インストール・ディレクトリ**>\examples\monitors\custom\doc\javadoc.zip から利用可能)。

- ・ **ローカル・マシンでのカスタム・モニタのリモート・デバッグ**

リモート・デバッグ・サーバを使用すると、カスタム・モニタ・スクリプトをオフラインでデバッグできます。これにより、データ処理段階でコードの完成およびスクリプト内部のデバッグ済みデータの確認を行えるため、スクリプト開発プロセスが簡易化されます。詳細については、「[ローカル・マシンでのカスタム・モニタのデバッグ](#)」(333ページ)を参照してください。

- ・ **データの動的な収集 (クエリ・ベースのカスタム・モニタ用)**

動的に定義したクエリをデータ処理スクリプトに含めることができます。これらのクエリは、スクリプトの実行前に実行される事前定義のクエリとは異なり、スクリプトの実行時に実行されます。

動的に実行されるクエリには、監視対象のエンティティ・データ・ストアにない値（たとえば、タイムスタンプ）に基づくクエリ、前回のクエリ結果または計算に基づくクエリを作成でき、クエリに変数を含めることができるという利点があります。詳細については、「[動的クエリを使用したデータ処理スクリプト](#)」(332ページ)を参照してください。

- ・ **結果の表示方法のカスタマイズ**

結果の表示方法を決めることができます。たとえば、結果のデータをメガバイト単位で表示するか、キロバイト単位で表示するか。

モニタを作成した後、次の操作が可能です。

- ・ **新規メトリックスのしきい値の定義**

一部のメトリックはスクリプトの実行中にのみ定義され、そのしきい値を事前に定義することはできません。スクリプトを初めて実行してメトリックが定義されると、それに対してしきい値を定義できます。これにより、標準のモニタよりもより詳細なデータ処理操作が可能になります。

メトリックはスクリプトの実行間で変化する場合がありますことに注意してください。たとえば、メトリック名で変数が使用される場所など。モニタの実行後存在しないメトリックを使用するしきい値は、自動的に削除されます。

・ **ほかのSiteScope ユーザとのモニタの共有**

モニタを作成したら、そのモニタをテンプレートにエクスポートし、モニタが外部の jar またはクラスに依存している場合はそれらを追加して、内容パッケージを作成します。コンテンツ・パッケージの作成の詳細については、[「コンテンツ・パッケージの作成」\(837ページ\)](#)を参照してください。

作成したコンテンツ・パッケージは特定のユーザに送ったり、[HP Live Network](#) (<https://hpln.hp.com/group/sitescope>) (英語サイト) コミュニティにパブリッシュして、他の SiteScope ユーザと共有することができます。詳細については、[「HP Live Network での SiteScope コンテンツの共有」\(906ページ\)](#)を参照してください。

他の SiteScope ユーザと知識を共有することによって、対象とする SiteScope モニタの範囲が拡大します。さらに、SiteScope のリリース・サイクル以外の新規モニタの開発について情報を得ることができます。

本項の内容

- ・ [「カスタム・モニタのリスト」\(330ページ\)](#)
- ・ [「トポロジ報告」\(331ページ\)](#)
- ・ [「インジケータ設定」\(331ページ\)](#)
- ・ [「データ処理スクリプト」\(331ページ\)](#)
- ・ [「動的クエリを使用したデータ処理スクリプト」\(332ページ\)](#)
- ・ [「ローカル・マシンでのカスタム・モニタのデバッグ」\(333ページ\)](#)
- ・ [「ヒント/トラブルシューティング」\(333ページ\)](#)

カスタム・モニタのリスト

モニタ名	詳細
「カスタム・モニタ」	カスタム Java または Javascript コードを使用してデータを収集するスクリプトを作成することによって、独自のモニタを作成できます。そして、データを処理してメトリクスを作成できます。
「カスタム・データベース・モニタ」	データを収集するクエリ（静的または動的に定義）を作成することによって、独自のデータベース・モニタを作成できます。そして、収集したデータを処理するスクリプトを作成して、メトリックを作成できます。
「カスタム・ログ・ファイル・モニタ」	テキスト語句または正規表現のフォームで一致をスキャンする独自のログ・ファイル・モニタを作成できます。そして、収集したデータを処理するスクリプトを作成して、メトリックを作成できます。
「カスタム WMI モニタ」	データを収集する WMI Query Language (WQL) クエリ（静的または動的に定義）

モニタ名	詳細
タ」	を作成することによって、独自の WMI モニタを作成できます。そして、収集したデータを処理するスクリプトを作成して、メトリックを作成できます。

カスタム・モニタの詳細については、SiteScope モニタ・リファレンスの個別のモニタを参照してください。

## トポロジ報告

SiteScope が、モニタおよび関連する CI トポロジ・データを BSM の RTSM に報告するには、カスタム・モニタの [HP 統合設定] パネルで **[モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート]** を選択し、[BSM 統合データとトポロジ設定] セクションでトポロジ・レポートの設定を行います。これによって、SiteScope が CI を BSM に報告する方法が定義されます。

次のタイプの CI トポロジ・データを報告できます。

- ・ ユーザ定義 CI タイプ・トポロジ。CI タイプを選択し、選択した CI タイプのキー属性値を定義します。キー属性値の詳細については、[「<CI タイプのキー属性>」\(309ページ\)](#)を参照してください。
- ・ カスタム・トポロジ・スクリプトCI を BSM に報告する方法を定義するトポロジ・スクリプトを作成します。自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している場合にのみこのオプションを選択します。タスクの詳細については、[「カスタム・モニタ用のカスタム・トポロジの設定方法」\(238ページ\)](#)を参照してください。
- ・ モニタのトポロジを報告しない場合は、モニタ CI のみを報告することを選択できます。

トポロジ報告設定の設定の詳細については、[「カスタム・モニタ用のトポロジ・レポートの設定方法」\(236ページ\)](#)を参照してください。

## インジケータ設定

[HP 統合設定] の [インジケータ設定] セクションのテーブルに、選択した CI タイプのインジケータ設定が表示されます。インジケータは、モニタのトポロジが BSM の RTSM に報告されるときに、CI の状況の詳細ビューを提供します。新しい測定値のマッピングを追加することも、既存のマッピングの設定を編集することもできます。タスクの詳細については、[「トポロジ・レポートの設定方法」\(233ページ\)](#)を参照してください。

## データ処理スクリプト

作成したスクリプトで、独自にまたはサードパーティが開発した Java コードを使用できます。モニタ・ストレージに Java オブジェクトを保存できます。

スクリプトで利用できるメソッドおよびクラスの詳細については、『HP SiteScope Custom Monitor API Reference』を参照してください（<SiteScope インストール・ディレクトリ>\examples\monitors\custom\doc\javadoc.zip から利用可能）。

アクセス方法、モニタ・ストレージおよびメトリック名を含むモニタ設定プロパティの詳細については、個別のカスタム・モニタの「スクリプトに表示されるモニタ設定パラメータへのアクセス方法」（『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』）を参照してください。

**注:** テンプレート・モードで作業するとき、データ処理スクリプトでテンプレート変数を使用できます。

## サンプル・スクリプト

各カスタム・モニタの「**データ処理スクリプト**」ボックスで SiteScope はサンプル・データ処理スクリプトを提供します。それを使用するには、スクリプトをアンコメントする必要があります。

すべてのカスタム・モニタのサンプル・スクリプトは、<SiteScope のインストール・ディレクトリ>\examples\monitors\custom\ フォルダの CustomMonitorSamplePackage.zip および CustomMonitorsExamples\_11\_21.zip から利用できます。これらのスクリプトを使用するには、カスタム・モニタ内容パッケージをインポートして、カスタム・モニタ・テンプレートをデプロイする必要があります。詳細については、個別のカスタム・モニタの「カスタム・モニタの作成方法」（『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』）を参照してください。

## スクリプト・ログ・ファイル

SiteScope はスクリプト・デバッグのために使用できるカスタム・モニタ・ログを備えています。ログ・ファイル（custom\_monitor.log）は <SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\custom\_monitors にあります。このログは、スクリプトの実行からの情報、警告、エラー、デバッグ・メッセージに使用できます。

## 動的クエリを使用したデータ処理スクリプト

**注:** 本項は、カスタム・データベース・モニタおよびカスタム WMI モニタにのみ該当します。

クエリ・ベースのカスタム・モニタを作成する場合、動的に定義されたクエリをデータ処理スクリプトに含めることができます。動的クエリは、スクリプトの実行前に実行される事前定義のクエリとは異なり、スクリプトの実行中に実行されます。動的に定義されたクエリの構文と構造は、クエリ・テーブルに事前定義されたクエリと同じです。

動的に定義されたクエリを使用すると、次の利点があります。

- ・ 監視対象エンティティのデータ・ストアに存在しない値に基づいてクエリを作成できます。たとえば、timestamp などがあります。
- ・ 以前のクエリ結果に基づいてクエリを作成できます。
- ・ クエリに変数を含めることができます。

## 動的クエリを使用したモニタ実行のフロー

動的クエリを使用したカスタム・モニタを実行する場合、次の順序のフローになります。

1. クエリ・テーブルに事前定義されたクエリがモニタで実行され、返されたデータがスクリプト・エンジンに渡されます。
2. スクリプト・エンジンで、スクリプトの実行が開始します。
3. スクリプトでクエリが検出されると、スクリプト・エンジンによりクエリがモニタに渡されて実行され、スクリプトの実行が停止します。



4. モニタにより監視対象エンティティでクエリが実行され、データがスクリプト・エンジンに返されます。
5. スクリプト・エンジンで、スクリプトの実行が再開します。

### 動的クエリを使用したサンプル・スクリプト

動的クエリを含むデータ処理スクリプトのサンプルについては、サンプル・コンテンツ・パッケージを参照してください。これは、**<SiteScope のインストール・ディレクトリ**

**>\examples\monitors\custom** フォルダの **CustomMonitorsExamples\_11\_21.zip** にあります。これらのサンプル・スクリプトを使用するには、カスタム・モニタ・コンテンツ・パッケージをインポートし、カスタム・モニタ・テンプレートをデプロイする必要があります。詳細については、個別のカスタム・モニタの「カスタム・モニタの作成方法」（『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』）を参照してください。

### ローカル・マシンでのカスタム・モニタのデバッグ

リモート・デバッグ・サーバを使用すると、カスタム・モニタ・スクリプトをオフラインでデバッグできます。これにより、データ処理段階でコードの完成およびスクリプト内部のデバッグ済みデータの確認を行えるため、スクリプト開発プロセスが簡易化されます。オフライン・デバッグでは、デバッグ対象システムに対して接続を開かなくても、システム・コードのリモート実行を完全にシミュレートすることができます。その結果、リモート・マシンの CPU とメモリ・リソースへの影響が最小限に抑えられます。

オフライン・デバッグを実行するには、Custom Monitor Debugger Eclipse プロジェクトをローカル・マシンにインストール、設定する必要があります。デバッガ・プロジェクトは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\examples\monitors\custom\CustomMonitorDebuggingEclipseProject** または HP Live Network から利用できます。

詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』で個別のカスタム・モニタの「オフラインでのカスタム・モニタのデバッグ方法」を参照してください。

## タスク

SiteScope モニタ・リファレンスの該当するカスタム・モニタの「タスク」の項を参照してください。

## ヒント / トラブルシューティング

### 一般的なヒント / 制限事項

- ユーザ定義の Java パッケージやインポートされた Java パッケージに、既存の SiteScope Java パッケージまたは標準 Java パッケージと同じ名前が付いていると、SiteScope はユーザ定義の Java パッケージまたはインポートされた Java パッケージを無視します。
- カスタム・モニタ測定値を数値ではなく文字列で設定した場合、[管理レポート] の [測定値サ

マリ] テーブル内の最大値および平均値は「n/a」と表示されます。測定値タイプを変更した場合も同様です（たとえば、測定値を数値で設定した後、文字列の値に変更したか、または、その逆の場合）。

- テンプレートを使用してカスタム・モニタをデプロイした場合、[デプロイメント値] ダイアログ・ボックスの[リモート サーバでモニタ プロパティを検証] チェック・ボックスをクリアしても何も変わりません。テンプレート内のモニタ設定プロパティは、テンプレートのデプロイ先のリモート・サーバに対してチェックする必要があるためです。
- カスタム・モニタを含むテンプレートに変更を適用する場合は、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [カスタム モニタ設定] の[バブリッシュが変更されている間、カスタム モニタを無効にします] オプション（デフォルトで選択された状態）を使用することをお勧めします。モニタは、変更がなされた後、変更が適用され有効な状態に保存されるまで、一時的に無効になります。
- ベースラインを使って状態のしきい値を設定することは、ユーザ定義の測定値ではサポートされていません。
- `_scriptSandboxRuntimePermissions` プロパティを<SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルに追加し、許可する jar ファイルを指定することで、レジストリから JVM セキュリティを削除せずにサードパーティ jar ファイルを使用できます。たとえば、署名付きライブラリ `jopcagtbase.jar` および `jopcagtmsg.jar` を使用して、次のようにパラメータを設定できます。`_scriptSandboxRuntimePermissions=loadLibrary.jopcagtbase,loadLibrary.jopcagtmsg`。

使用可能なランタイム権限の種類については、[Java API マニュアル](#)

(<http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/RuntimePermission.html>) を参照してください。

## カスタム・モニタのトラブルシューティング

- モニタのエラー（スクリプトのエラーを含む）は、他のすべてのモニタと同じように SiteScope ログに書き込まれます。`error.log` ファイルと `RunMonitor.log` ファイルを確認します。
- スクリプトのエラーメッセージは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\custom\_monitors 内の `custom_monitor.log` ファイルに表示されます。このログは、スクリプトの実行からの情報、警告、エラー、デバッグ・メッセージに使用できます。

ログ・レベルを `DEBUG` モードに変更するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\conf\core\Tools\log4j\PlainJava\log4j.properties で、次のパラグラフの `${loglevel}` を `DEBUG` に変更します。

```
# Custom monitors category
log4j.category.CustomMonitor=${loglevel},custom.monitor.appender
log4j.additivity.CustomMonitor=false を
```

- クエリ・ベースのカスタム・モニタの場合：データ処理スクリプト内からの動的クエリの実行に失敗すると、例外が発生します。

## 第26章: ベースラインを使用したモニタしきい値の設定

ベースラインを作成することにより、アプリケーションの通常のパフォーマンスを把握できます。アプリケーションの通常のパフォーマンスを把握すれば、またパフォーマンスの問題が単独のインシデントなのか、全体的なトレンドの兆候なのかを判別できます。本項では、ベースラインに関する情報を提供し、ベースラインを使用してモニタしきい値を設定する方法について説明します。

### 学習事項

#### ベースラインの概要

ベースラインによって、アプリケーションの通常のパフォーマンスを把握でき、またパフォーマンスの問題が単独のインシデントなのか、重大なパフォーマンス低下傾向の兆候なのかを判別できます。ベースライン・データは、ある期間のモニタ・パフォーマンス・メトリックスから収集され、許容可能な、または期待するしきい値範囲を設定するための比較に使用されます。モニタのパフォーマンスが一定の値の範囲を超えた場合（または、空きディスク容量の場合のように範囲に達しない場合）、モニタはエラーまたは警告を通知することがあります。許容可能なモニタのしきい値範囲は、現在のパフォーマンスがベースラインからどの程度離れているかによって決まります。

ベースラインは、新規のメトリック・データの受信に伴い、定期的に更新されます。

#### ベースラインの計算

SiteScope でベースラインの計算を開始できるようにするには、ベースライン・データの収集に使用するグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。ベースラインしきい値データの収集に使用するスケジュールを選択することもできます。これにより、SiteScope がベースラインの計算のデータを収集する期間を特定の曜日や時間に限定できます。たとえば、ピーク業務時間中に収集した結果のみに基づいたモニタの状態を必要とする場合があります。

順守レベルを選択してベースラインの計算の値がしきい値に影響する範囲を決定し、すべてのモニタ測定値のしきい値の限度を設定することもできます。詳細については、[「ベースライン順守レベル」\(344ページ\)](#)および[「良好な限度とエラー限度」\(345ページ\)](#)を参照してください。

ベースライン・エンジンはデータ収集期間中にモニタから集めた測定値を使って各スケジュールに対するベースラインを計算します。SiteScope はパーセンタイル・アルゴリズムを使ってベースライン計算を行います。その際、パーセンタイル値はベースラインの値を決定するのに使われます。ベースラインしきい値の計算方法の詳細については、[「ベースラインしきい値」\(346ページ\)](#)を参照してください。

#### ベースラインのアクティブ化

ベースラインを計算したら、[\[ベースラインのアクティブ化\]](#) ダイアログ・ボックスで計算したモニ

タのサマリを確認し、ベースライン・データを分析できます。このダイアログ・ボックスには、ベースライン計算の対象となったすべてのモニタ・インスタンス、ベースライン計算日、ベースラインしきい値が適用された場合にモニタに生成されるエラー状態および警告状態の数の減少幅が表示されます。SiteScope でモニタに対するベースラインを計算できない場合、計算が失敗した理由が表示されます。

各モニタ測定値の現在のしきい値、ベースラインしきい値、過去 24 時間におけるすべてのベースライン関連のモニタ測定値の履歴データのグラフも表示されます。グラフには注釈ツールが含まれており、表示中のグラフのスナップショットに注釈を追加して、重要な領域を強調表示できます。注釈付きのグラフは、保存、印刷、電子メールによる送信が可能です。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[注釈ツール](#)」(358ページ)を参照してください。

ベースライン・データを確認したら、ベースラインしきい値設定をアクティブ化できます。これにより、ベースライン値が選択したモニタのしきい値に適用されます。「**データが十分ではありません。**」が理由で失敗したモニタのベースラインを、収集した限定的な測定値のサンプルを使用してアクティブ化することもできます。

ベースラインをアクティブ化した後にしきい値設定を元に戻すことはできないため、ベースラインしきい値をアクティブ化する前に、現在のモニタ設定の保存が必要かどうか検討してください。

ベースラインをアクティブ化すると、各モニタの「しきい値の設定」パネルにベースラインしきい値が表示されます。ベースライン値は、測定値に対して収集された履歴サンプルと当日の測定結果に従って毎日再計算されます。また、それに応じてベースラインしきい値が再計算、更新されます。

選択したコンテキストで、各モニタのベースラインの状態とベースラインの状態の説明を表示するベースライン・サマリ・レポートをいつでも作成できます。

## タスク

### ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法

このタスクでは、ベースラインを使用したモニタしきい値の設定に関する手順を説明します。

#### 1. ベースライン設定プリファレンスの設定（任意指定）

「インフラストラクチャ プリファレンス」のグローバル SiteScope ベースライン設定の値を表示、定義できます。これには、計算とアクティブ化の優先設定、ベースライン計算に含める履歴データの日数、エラー限度の計算に使用するオフセットが含まれます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[ベースライン設定](#)」(654ページ)を参照してください。

#### 2. ベースラインの計算

ベースラインを計算するモニタ測定値のしきい値を定義します。

- a. ベースライン設定するモニタ・インスタンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[ベースライン計算対象のモニタの選択](#)」(349ページ)を参照してください。

- b. ベースライン・データの収集に使用する1つ以上のスケジュール範囲を選択するか、標準設定のスケジュール（毎日、全日）を受け入れます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[スケジュール](#)」(350ページ)を参照してください。
- c. ベースライン計算の値が、すべてのモニタ測定値のしきい値にどの程度影響するかを判断するためのグローバル・ベースライン順守レベルを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[順守レベル](#)」(350ページ)を参照してください。
- d. また、「[順守レベルの微調整 / 限度の設定](#)」ボタンをクリックして次を実行できます。
  - モニタ測定値のベースライン順守レベルを個々に微調整する。
  - 各モニタ測定値の良好な限度を定義する。この限度内の測定値は、既存のベースライン・パーセンタイルに応じてエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態にはなりません。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[順守レベルの微調整 / 限度の設定\] ダイアログ・ボックス](#)」(351ページ)を参照してください。
- e. 「[計算](#)」をクリックしてベースラインしきい値の計算を実行します。

**例：** [ベースラインの計算] ダイアログ・ボックス - ユーザ権限に応じてユーザによる表示が許可されているモニタのみが表示されます



遵守レベルの微調整/限度の設定

静的カウンタ付きモニタ

リセット

モニタ名:測定値名	警告のパーセンタイル			エラーのパーセンタイル			良好な限度
	低	中	高	低	中	高	
CPU : utilizationPercentage	110	93	90	120	98	95	

ブラウザ可能なモニタ

リセット

モニタ名:測定値名	警告のパーセンタイル			エラーのパーセンタイル			良好な限度
	低	中	高	低	中	高	
ブラウザ可能なすべてのモニタの測定値	110	93	90	120	98	95	

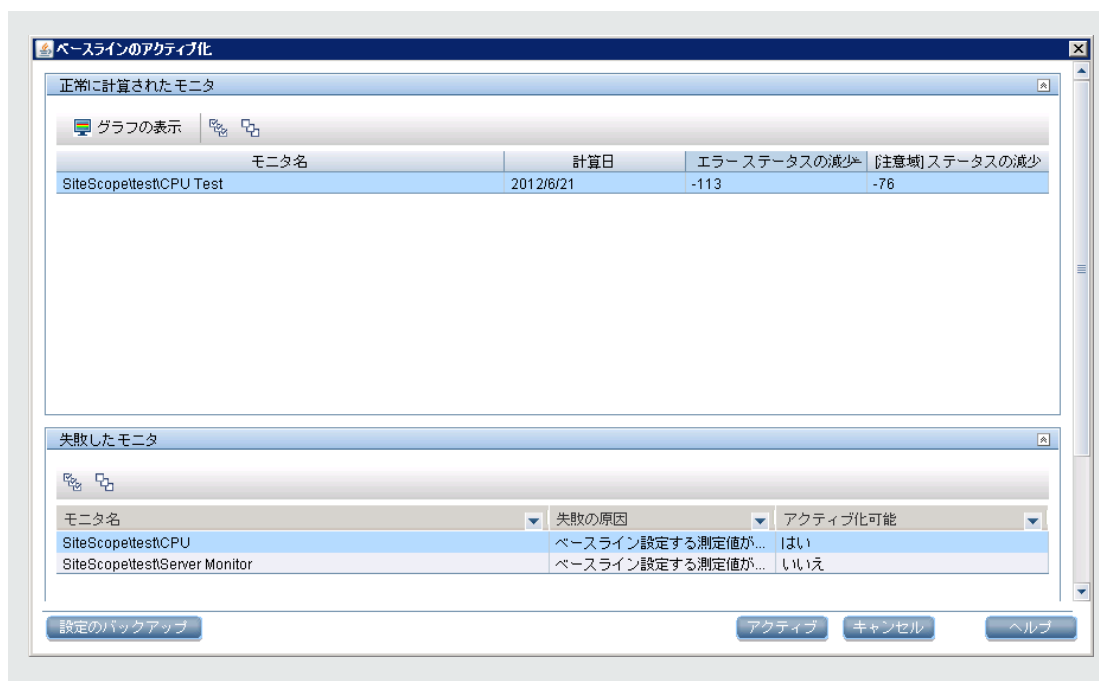
保存

キャンセル

ヘルプ

3. ベースライン設定の確認
- 【ベースラインのアクティブ化】ダイアログ・ボックスで、計算されたモニタとベースライン・データのサマリを確認します。ユーザ権限に応じてユーザの表示が許可されているモニタのみが表示されます。
- ユーザ・インタフェースの詳細については、 「[【ベースラインのアクティブ化】ダイアログ・ボックス](#)」 (365ページ)を参照してください。

**例：**【ベースラインのアクティブ化】ダイアログ・ボックス - ユーザ権限に応じてユーザによる表示が許可されているモニタのみが表示されます



#### 4. ベースライン・モニタ測定値グラフの表示

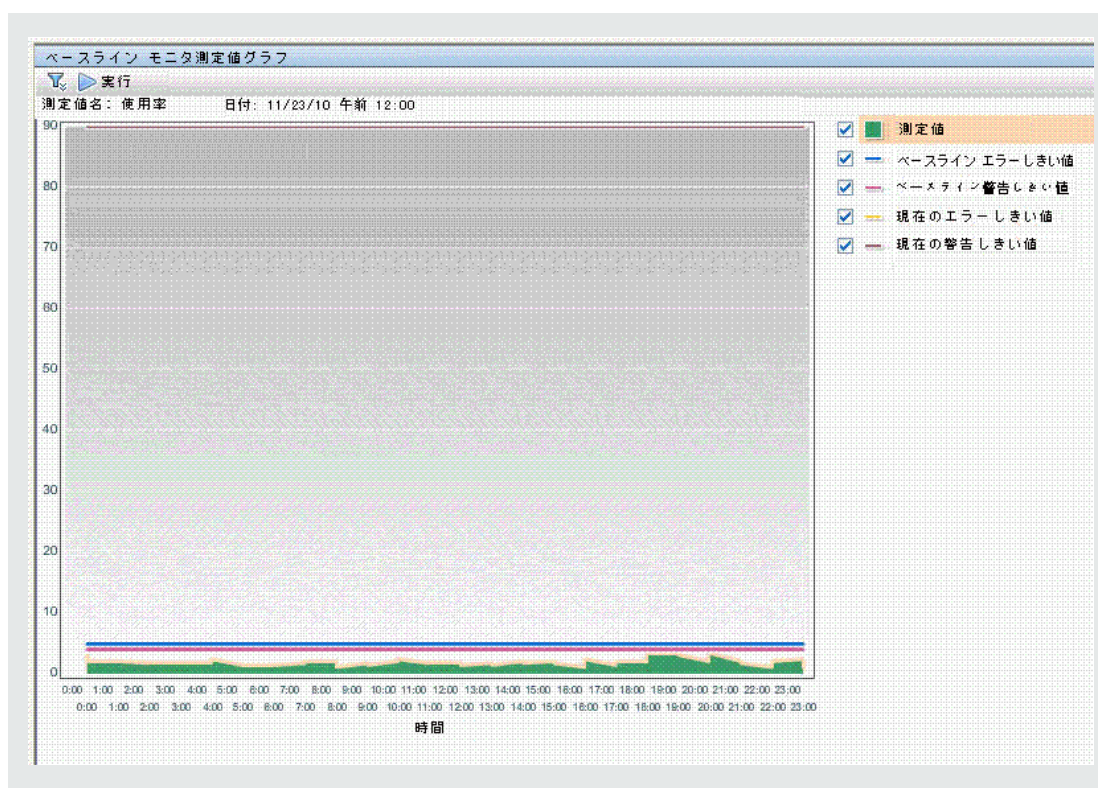
各モニタのベースライン処理済み測定値のグラフを表示して、選択した日付のベースライン・データを分析できます。表示しているグラフのスナップショット作成に注釈ツールを使用して、重要な領域を強調表示することもできます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[「\[ベースライン モニタ測定値グラフ\] ダイアログ・ボックス」 \(355ページ\)](#)」を参照してください。

**注:** グラフに表示されるデータは測定値データの集計であるため、時間帯はデータが収集された時間を正確に反映していない可能性があります。

**例:** ベースライン・モニタ測定値グラフ





## 5. ベースライン設定のアクティブ化

ベースラインを使用してしきい値を設定するモニタを選択し、**「アクティブ」**をクリックします。計算に成功したベースラインのすべてのモニタと、「データが十分ではありません」という理由で失敗したモニタ（**「アクティブ化可能」**列で**「はい」**と表示）を選択できます。モニタしきい値はベースライン計算に応じて設定され、しきい値の設定を超えた場合に状態を変更するように設定されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[「ベースラインのアクティブ化」ダイアログ・ボックス](#)」(365ページ)を参照してください。

**注:** 現在のモニタしきい値の設定に戻す場合は、ベースライン設定をアクティブ化する前に現在のモニタ設定を保存するオプションを選択します。

## 6. 「ベースラインの状態レポート」でベースラインのプロパティを表示

選択したコンテキストの各モニタに関する情報を示す、一時的なレポートを作成できます。この情報には各モニタのベースラインの状態とベースラインの状態の詳細が含まれます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[「ベースラインの状態レポート」](#)」(363ページ)を参照してください。

モニタの**「ベースライン設定」**で、モニタのベースラインの状態を追跡することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[「ベースライン設定」](#)」(321ページ)を参照してください。

**例：ベースラインの状態レポート**

ベースラインの状態レポート

サマリー

2個のモニタの合計です。  
1個のモニタにアクティブ化されたベースラインがあります。  
1個のモニタはベースラインが設定されていません。

詳細

モニタ名	モニタタイプ	ベースラインの状態	ベースラインの状態の詳細
SiteScopeTestCPU Test	CPU	ベースライン設定する...	
SiteScopeTestisallytest	CPU	アクティブ化されたベ...	

7. ベースラインしきい値の表示と変更
- 「しきい値の設定」でベースラインしきい値を表示し、しきい値が生成されたパーセンタイル値を変更することでしきい値を手動で微調整できます。
- ユーザ・インタフェースの詳細については、「しきい値の設定」(298ページ)を参照してください。

**例：モニタのベースラインしきい値設定**

しきい値の設定

利用不可な場合:

モニタの状態をしきい値に応じて設定

標準設定の状態:

良好

内部エラーの場合:

モニタの状態をしきい値に応じて設定

標準しきい値の追加

標準しきい値の削除

エラー条件

\*

×

条件	演算子	値	スケジュール
percent used	==	'n/a'	毎日、全日
percent used	==	100	毎日、全日

警告条件

\*

×


条件	演算子	値	スケジュール
percent used	>=	1	毎日、全日

良好条件

\*

×

条件	演算子	値	スケジュール
always(default)	<	1	

この例では、**【エラー条件】**の**【使用済みパーセント (%)】**のしきい値が  $\geq 42.81$  で、**【警告条件】**の**【使用済みパーセント (%)】**のしきい値が  $\geq 40.77$  です（これらの値は両方とも編集できません）。しきい値を変更するには、しきい値が生成されたパーセンタイル値を変更する必要があります。パーセンタイル値を変更した後の新しいしきい値を確認できるように、**【パーセンタイル テーブル】**  ボタンをクリックして、各パーセンタイル範囲にマップされているしきい値を表示するパーセンタイル・テーブルを開きます。

**注：****【エラー条件】**の**【使用済みパーセント (%)】**  $> 90$  のしきい値がエラー限度です。既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートしない場合でも、この測定値の値はエラーの状態とみなされます。たとえば、ベースラインしきい値が「**エラー条件**」の**【使用済みパーセント (%)】**  $\geq 96$  に更新された場合、計算されたベースライン・エラーしきい値の 96 を超えなくても、90 よりも大きいすべての測定値がエラー状態になります。このトピックの詳細については、「[良好な限度とエラー限度](#)」(345ページ)を参照してください。

## ヒント / トラブルシューティング

### 注意事項および制限事項

- ベースライン機能を使用してモニタのしきい値を設定できるのは、SiteScope の管理者または「**モニタを追加、編集、または削除します**」の権限か「**モニタの編集または削除のみ**」の権限を持つユーザのみです。また、設定できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。編集権限があるかどうかに関係なく、すべてのユーザがベースラインの状態レポートを表示できます。
- ベースライン計算プロセス中は、しきい値または測定値の追加や削除、モニタのコピーや移動を行うことはできません（モニタのベースラインがアクティブ化されるまで）。
- 参照可能なモニタのベースラインをアクティブにした後でそれらのモニタに対してしきい値測定値の追加、編集、または削除を行った場合は、ベースライン・モニタとしてそのモニタの計算とアクティブ化を再度行う必要があります。
- アクティブ化されたベースラインと一緒にグループやモニタをコピーまたは移動する場合、ベースラインしきい値がほかのグループやモニタ・オブジェクトと一緒にコピーまたは移動されることはありません。
- ベースラインの削除プロセスが完了する前に SiteScope が再起動された場合、再起動後にプロセスは続行されないため、ベースラインの削除プロセスを再度実行する必要があります。
- ベースラインの計算またはアクティブ化プロセスが完了する前に SiteScope が再起動された場合、再起動後に自動的にプロセスが続行されます。ほかのベースラインの状態（**計算済み**、**アクティブでない**、**アクティベーションが失敗しました**、**計算に失敗**、**アクティブ化されたベースライン**）を持つモニタは、再起動による影響を受けません。
- ベースラインを計算する前に、モニタを有効にして、SiteScope がベースラインを計算するのに十分なデータを蓄積できるだけの期間、モニタを実行できるようにします。この期間は、**【プリ**

ファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [ベースライン設定] の [ベースライン設定に必要な最小日数] 設定と [ベースライン設定に必要な最小サンプル数] 設定によって異なります。詳細については、[「ベースライン設定」\(654ページ\)](#)を参照してください。モニタに十分なデータがなくてもベースラインを計算してアクティブ化できますが、計算が不正確になる可能性があります。

- 参照可能なモニタにカウンタのセットを定義し、これらのカウンタを使用してモニタを一定期間実行した後、カウンタを変更して（既存のカウンタの削除や新規カウンタの追加など）ベースラインを計算しようとする、計算結果が不正確になる可能性があります。この原因として、すでに存在しない可能性があるカウンタ用の古いデータが新しいデータと矛盾することが考えられます。モニタの作成時点から変更されていないカウンタでも、計算が不正確になる可能性があります。この問題を避けるため、ベースラインの計算に必要な最小日数の間はモニタの参照可能なカウンタを変更しないでください。
- しきい値をベースラインを使用して作成したか手動で作成したかに関係なく、しきい値関連のプロパティは [グローバル検索と置換] を使用して変更できます。ただし、[グローバル検索と置換] を使用してモニタのベースラインしきい値をアクティブ化することはできません。
- ベースラインの計算中とベースラインのアクティブ化後は、特定のベースラインしきい値の変更のみがサポートされます。[グローバル検索と置換] を使用してしきい値関連のプロパティを変更する場合にも、同じ制限が適用されます。許可されているしきい値の変更の詳細については、[「しきい値の設定の変更」\(303ページ\)](#)を参照してください。
- メモリ消費量は、ベースラインを使用して設定されたモニタのしきい値ごとに増加します。メモリ消費量を削減するには、[ベースライン設定] で **[累積されたベースラインデータをディスクに保存する間隔]** 設定を設定できます。詳細については、[「ベースライン設定」\(654ページ\)](#)を参照してください。

## 追加情報 : Understanding Baseline Calculations

### 本項の内容

- [「ベースライン順守レベル」\(344ページ\)](#)
- [「良好な限度とエラー限度」\(345ページ\)](#)
- [「ベースラインしきい値」\(346ページ\)](#)
- [「SiteScope でのしきい値の計算方法」\(346ページ\)](#)
- [「SiteScope によるエラー限度の計算方法」\(347ページ\)](#)

### ベースライン順守レベル

しきい値の決定に使用するベースライン順守レベルを選択できます。これは、ベースライン計算の値がすべてのモニタ測定値のしきい値に与える影響の範囲を示します。[高]、[中]、[低]のいずれかを選択できます。順守レベルが高いほど、しきい値の範囲がモニタ測定値のベースライン値に近くなります。反対に、順守レベルが低いほど、しきい値の範囲がモニタ測定値のベースライン値から離れます。

順守レベルの選択に加え、モニタ測定値ごとに別個の順守パーセンタイルを設定して、個別のモニタ測定値の順守レベルを微調整することもできます。順守レベルは、測定値がいつエラーまたは警告になるかを決定する測定値である順守パーセンタイルに基づきます。参照可能なモニタ測定値の場合、設定できる順守パーセンタイルは1セットのみで、これがすべての参照可能なモニタに使用されます。

順守レベルを手動で微調整するには、しきい値の作成方法を理解する必要があります。このトピックの詳細については、「[ベースラインしきい値](#)」(346ページ)を参照してください。

## 良好な限度とエラー限度

良好な限度とエラー限度を設定すると、ベースラインしきい値の使用時に不必要なエラーや警告の発生を防止するのに役立ちます。モニタ測定値ごとの良好な限度と参照可能なモニタ・カウンタを手動で設定できます。SiteScope では、モニタ測定値ごとにエラー限度が自動的に設定されます。

**注:** 良好な限度を設定するには、ベースラインしきい値の作成方法を理解することが重要です。このトピックの詳細については、「[ベースラインしきい値](#)」(346ページ)を参照してください。

### 良好な限度

これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態とみなされない測定値です。たとえば、CPU 使用率が常に 3% 未満である低負荷のシステムがあるとします。これらの測定値に基づいて、SiteScope は 5% のエラーしきい値を持つベースラインしきい値を計算する可能性があります。これは CPU 負荷エラーの正確な指標ではないため、誤ったエラーの生成を避けるために良好な限度として 70% の CPU 使用率を定義することができます。CPU 使用率がこの限度を下回っているかぎり、(ベースライン・エラーしきい値を上回っている) モニタはエラー状態になりません。

良好な限度は、「順守レベルの微調整/限度の設定」ダイアログ・ボックスの「良好な限度」で設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[「順守レベルの微調整 / 限度の設定」ダイアログ・ボックス](#)」(351ページ)を参照してください。

### エラー限度

これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態とみなされる測定値です。測定値がある期間にわたって徐々に増加した場合（少しずつ発生するメモリ・リークなど）に発生することがあります。ベースラインしきい値は、測定値の平均が増加するのにあわせて毎日再計算されて更新されるため、測定値が新しいしきい値を上回る（下回る）ことはありません。

この問題を解決するために、SiteScope ではモニタ測定値ごとにエラー限度が自動的に設定されます。このために、モニタ測定値が指定した値を超えるとベースラインに関係なくエラーを誘発する制限が設定されます。たとえば、SiteScope が CPU 使用率 80% のエラー限度を設定すると、計算したベースライン・エラーしきい値を超えていなくても、CPU 使用率 80% を超える値はエラー状態になります。



エラー限度の計算方法の詳細については、「[ベースラインしきい値](#)」(346ページ)を参照してください。

### ベースラインしきい値

各順守レベルのベースライン計算で使用されるパーセンタイル値の微調整や、「[良好な限度とエラー限度](#)」(345ページ)の設定には、次のことを理解することが重要です。

- しきい値のタイプ
- しきい値のメトリックへの適用方法
- ベースラインしきい値および限度の計算でのメトリックの使用方法

ベースラインしきい値は、ベースラインが計算される前のモニタの測定値ごとに、モニタ設定に対して動的に追加または更新されます。ベースラインしきい値は、ベースライン・データの収集用に選択したスケジュールごとに追加されます。

一般に、しきい値にはベースラインしきい値と静的しきい値の2タイプがあります。ベースラインしきい値には、測定値がいつエラーまたは警告状態になるかを決定するのに使用するパーセンタイル値が設定され、静的しきい値には実際の固定値が設定されます。ベースラインしきい値のメトリックには、測定方向に応じて  $\geq$  または  $\leq$  の条件があります。

ベースラインしきい値は、次の2つの条件が満たされた場合にメトリックに対して変更、追加、削除されます。

- 測定値をベースラインの計算で利用できる。ベースラインの計算で使用するには、測定値は数値で、方向を持っている必要があります。ベースラインの計算に使用できない測定値の例として、URL 404 エラー・コードがあります（数値ですが方向がありません）。
- ベースラインの計算に先だって、測定値にスケジュールおよび状態カテゴリ（正常、警告、エラー）に定義された静的しきい値がある。

これらの条件を順守していないメトリックは（メトリックに定義されているしきい値という点では）影響を受けず、ベースラインはこれらのメトリックに対して計算されません。

### SiteScope でのしきい値の計算方法

SiteScope では、ベースラインの計算時に、各スケジュールのベースラインしきい値の測定値ごとにパーセンタイル値を作成します。SiteScope は、極端なメトリックを調整するために、標準設定で最も極端なサンプルの2%を破棄し（「ノイズ」メトリックとみなされます）、残りのメトリックに対してパーセンタイルを計算します。たとえば、サーバ上のほとんどのモニタ実行結果がCPU使用率20%以下と1回だけのピーク値50%を示している場合、このピーク値はベースラインの決定には使用されません。測定値サンプルから破棄するパーセンテージは、[ベースライン設定]で変更できます。

ベースライン・エンジンは、しきい値の計算にスライディング・ウィンドウ法を使用します。つまり、データ・サンプルが新しいほど、古いサンプルよりもベースライン計算に与える影響が大きく、一定期間が経過すると（標準設定では30日間）、履歴データは使用されなくなります。計算に含める日数は[ベースライン設定]で設定できます。

ベースライン設定の詳細については、「[インフラストラクチャ・プリファレンス](#)」(622ページ)を参照してください。

### SiteScope によるエラー限度の計算方法

SiteScope では、各測定値のエラー限度の作成にパーセンタイル値を使用します。これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がない場合でも、エラー状態とみなされる測定値です。詳細については、「[良好な限度とエラー限度](#)」(345ページ)を参照してください。

SiteScope では、次のいずれかの方法でエラー限度を計算します。

- 測定値に特定のスケジュールの静的エラーしきい値がある場合、ベースラインしきい値のパーセンタイル値が実際の値に対して計算され、この値が次のように静的しきい値の値と比較されます。
- 静的エラーしきい値がベースラインしきい値より極端な場合、静的エラーしきい値がその測定値のエラーしきい値の上限として使用されます。

#### 例：

静的エラーしきい値が 100% の CPU 使用率で、計算されたベースラインしきい値が 67% の CPU 使用率の場合、静的エラーしきい値（100% の CPU 使用率）がエラー限度として使用されます。

- ベースラインしきい値が静的エラーしきい値より極端な場合、オフセット値が使用されます。オフセットは、SiteScope によってベースラインしきい値に加算（または測定値の方向によってはベースラインしきい値から減算）されるパーセンテージの値で、結果値がその測定値のエラー限度として使用されます。オフセット値は、[インフラストラクチャ プリファレンス] の [ベースライン設定] パネルで決定できます。

#### 例：

スケジュールの静的エラーしきい値が 60% の CPU 使用率で、計算されたベースラインしきい値が 65% の CPU 使用率の場合、エラー限度は次のように計算されます。  
 $65\% \text{ の CPU 使用率} \times 130\% \text{ (標準設定のオフセット値 0.3 を使用)} = 84.5\% \text{ の CPU 使用率}$

- ベースラインを計算する前に特定のスケジュールの測定値にエラーしきい値がなく（測定値にエラーしきい値ではなく警告しきい値または良好しきい値がある）、[ベースライン設定] で [エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラーの上限の作成を自動化する] オプションが選択されている場合、ベースラインしきい値のパーセンタイル値が実際の値に対して計算され、オフセット値がベースラインしきい値に加算またはベースラインしきい値から減算（測定値の方向による）されます。結果値は、測定値のエラー限度として使用されます。

**注:** 次の場合にはエラー限度は作成されません。

- ・ ベースラインを計算する前に特定のスケジュールの測定値にエラーしきい値がない（たとえば、測定値にエラーしきい値ではなく警告しきい値または良好しきい値がある）、さらに
- ・ **「エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラーの上限の作成を自動化する」** オプションが選択されていない場合。

オフセット値の定義とエラー限度の作成の自動化の詳細については、[「インフラストラクチャ・プリファレンス」 \(622ページ\)](#)を参照してください。

# ベースラインしきい値のユーザ・インタフェース

## 本項の内容

- ・ [「\[ベースラインの計算\] ダイアログ・ボックス」 \(348ページ\)](#)
- ・ [「\[順守レベルの微調整 / 限度の設定\] ダイアログ・ボックス」 \(351ページ\)](#)
- ・ [「パーセンタイル範囲マッピング・テーブル」 \(353ページ\)](#)
- ・ [「\[設定のバックアップ\] ダイアログ・ボックス」 \(354ページ\)](#)
- ・ [「\[ベースライン モニタ測定値グラフ\] ダイアログ・ボックス」 \(355ページ\)](#)
- ・ [「注釈ツール」 \(358ページ\)](#)
- ・ [「\[ベースラインの削除\] ダイアログ・ボックス」 \(363ページ\)](#)
- ・ [「ベースラインの状態レポート」 \(363ページ\)](#)
- ・ [「\[ベースラインのアクティブ化\] ダイアログ・ボックス」 \(365ページ\)](#)

## [ベースラインの計算] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ベースラインの計算に含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方の選択、ベースライン・データ収集の時間範囲スケジュールの選択、モニタ測定サンプル値がしきい値にどの程度影響するかを判断するための順守レベルの選択と微調整、ベースラインしきい値の計算を実行できます。

アクセス方法	<b>「モニタ」</b> コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope コンテナ、グループ、またはモニタを右クリックして、 <b>「ベースライン設定」</b> > <b>「計算」</b> を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ ベースライン機能を使用してモニタのしきい値を設定できるのは、SiteScope の管理者または<b>「モニタを追加、編集、または削除します」</b>の権限か<b>「モニタの編集または削除のみ」</b>の権限を持つユーザのみです。また、</li></ul>



	<p>設定できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。ユーザに権限がないグループ内のモニタは、ダイアログ・ボックスに表示されません。ユーザ権限の詳細については、「<a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a>」(744ページ)を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ベースラインしきい値の計算に必要な時間は、SiteScope サーバの処理速度とベースライン設定で選択したモニタ数に左右されます。計算プロセスを完了する前に SiteScope を再起動する必要がある場合、再起動後に自動的にプロセスが続行されます。</li> <li>SiteScope でベースラインを計算するために必要なデータを蓄積するのに十分と思われる期間、モニタが実行されるようにします。この期間は、[インフラストラクチャ プリファレンス] の [ベースライン設定に必要な最小日数] および [ベースライン設定に必要な最小サンプル数] 設定に応じて変わります。詳細については、「<a href="#">インフラストラクチャ・プリファレンス</a>」(622ページ)を参照してください。ベースラインは、モニタに十分なデータがなくても計算およびアクティブ化できますが、計算は正確でない可能性が高くなります。</li> </ul>
関連タスク	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」</a> (336ページ)
関連情報	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」</a> (335ページ)

### ベースライン計算対象のモニタの選択

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<b>&lt;利用可能なグループまたはモニタ、あるいはその両方のリスト&gt;</b>	<p>ベースラインしきい値の計算に含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方。リストには、現在選択されているコンテナ、およびユーザの許可されているグループ・リストに含まれるすべての子コンテナが表示されます。</p> <p><b>標準設定値：</b>現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。</p> <p><b>注：</b>次の場合、モニタ・インスタンスは選択できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ベースラインがすでにアクティブ化されている。この場合、選択チェック・ボックスは表示されません。</li> <li>SiteScope に同じ名前の別のモニタがある（ファイル・パス、グループ名、モニタ名が同一）。この場合、モニタ名の横に「<b>名前の重複</b>」と表示されます。</li> </ul>

## スケジュール

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>スケジュール範囲名</b>	<p>ベースラインしきい値データの収集に使用するスケジュール範囲。これによって、ベースラインの計算に使用する監視データの収集期間を特定の日または時間に制限できます。作成されるベースラインしきい値は、同じスケジュール範囲期間のみ有効になります。表示される範囲スケジュールは、<b>「スケジュールプリファレンス」</b>で作成されます。範囲スケジュールの作成の詳細については、<b>「スケジュール・プリファレンス」</b> (723ページ)を参照してください。</p> <p><b>注:</b> CTRL または SHIFT キーを使用すると複数の範囲を選択できます。</p> <p><b>標準設定値:</b> スケジュール範囲が選択されていない場合、ベースラインしきい値データは全日、毎日収集されます。</p>

## 順守レベル

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

<b>詳細</b>	<p>ベースライン計算で使用されるモニタ測定サンプル値がしきい値にどの程度影響するかを判断する順守レベルを選択できます。順守レベルは、測定値がエラーまたは警告であるかを判断するためにすべてのモニタ測定値に適用されるパーセンタイル値に基づいています。また、個々のモニタ測定値の順守レベルを微調整したり、良好な限度を設定することもできます。</p> <p><b>アクセスするには、次の手順を実行します。</b> モニタ・ツリーで SiteScope コンテナ、グループ、またはモニタを右クリックして、<b>「ベースライン設定」</b> &gt; <b>「計算」</b> を選択します。<b>「順守レベル」</b> パネルを展開します。</p>
<b>関連タスク</b>	<b>「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」</b> (336ページ)
<b>関連情報</b>	<b>「追加情報 :Understanding Baseline Calculations」</b> (344ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>低</b>	<p>しきい値の更新に使用される値は、ベースラインによって計算される値からより遠くなります。極端な測定値によるベースラインへの影響に対する許容度が高い場合はこのオプションを選択します。</p>

UI 要素	詳細
中	しきい値の更新に使用される値は、ベースラインによって計算される値から中間範囲にあります（標準設定）。
高	しきい値の更新に使用される値は、ベースラインによって計算される値により近くなります。極端な測定値によるベースラインへの影響に対する許容度が低い場合はこのオプションを選択します。
順守レベルの微調整 / 限度の設定	<p>「[順守レベルの微調整/限度の設定] ダイアログ・ボックス」が開きます。このダイアログ・ボックスでベースラインの順守レベルを微調整し、選択したコンテキスト内の任意のモニタ・タイプの任意の測定値に良好な限度を定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">「[順守レベルの微調整 / 限度の設定] ダイアログ・ボックス」 (351ページ)</a>」を参照してください。</p>

## 「[順守レベルの微調整 / 限度の設定] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスには、選択されたコンテキストにおいて各モニタ測定値の順守レベルおよび良好な限度（設定されている場合）で、ベースライン計算で使用されるパーセンタイル値が表示されます。任意のモニタ・タイプの任意の測定値のベースライン順守レベルを微調整し、良好な限度を設定できます。

アクセス方法	<p>「<b>モニタ</b>」コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope コンテナ、グループ、またはモニタを右クリックして、「<b>ベースライン設定</b>」 &gt; 「<b>計算</b>」を選択します。「<b>順守レベル</b>」パネルを展開して、「<b>順守レベルの微調整 / 限度の設定</b>」ボタンをクリックします。</p>
重要な情報	<p>順守レベルのパーセンタイル値は 100% より大きく設定できます。これにより、収集したサンプル測定値に基づいて、しきい値レベルを設定されたレベルより高くできます。たとえば、収集した CPU 使用率の測定値の範囲が 10% ~ 60% で、CPU 使用率が 80% を超えるエラーのみを取得するには、「<b>エラーのパーセンタイル</b>」の「低」の値を、エラーしきい値レベルを望ましいレベルまで上げるパーセンタイルに設定します。この場合は、パーセンタイルを 134%（CPU 使用率 60% * 134% = CPU 使用率 80.4%）に設定します。</p>
関連タスク	<p><a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」 (336ページ)</a></p>
関連情報	<p><a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」 (335ページ)</a></p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>リセット</b> : モニタ測定値の標準設定のエラーおよび警告しきい値の順守レベル値を元に戻し、良好な限度を削除します。
	<b>すべて選択</b> : 表示されているすべてのモニタ測定値を選択します。
	<b>選択を解除</b> : 選択範囲を解除します。
<b>モニタ名: 測定値名</b>	選択されているコンテキストの各モニタのベースライン計算で使用する測定値を表示します。また、ブラウズ可能なモニタすべての測定値を代表する1つの測定値が（リストの最後に）表示されます。
<b>警告のパーセンタイル</b>	警告ベースラインしきい値の計算に使用される順守レベル「低」, 「中」, 「高」のパーセンタイル値を表示します。このトピックの詳細については、 <a href="#">「ベースライン順守レベル」 (344ページ)</a> を参照してください。  <b>標準設定値</b> : 「低」 110, 「中」 93, 「高」 90
<b>エラーのパーセンタイル</b>	エラー・ベースラインしきい値の計算に使用される順守レベル「低」, 「中」, 「高」のパーセンタイル値を表示します。このトピックの詳細については、 <a href="#">「ベースライン順守レベル」 (344ページ)</a> を参照してください。  <b>標準設定値</b> : 「低」 120, 「中」 98, 「高」 95
<b>良好な限度</b>	各モニタ測定値タイプの良好な限度の実際の値を表示します。これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態とみなされない測定値です。このトピックの詳細については、 <a href="#">「良好な限度とエラー限度」 (345ページ)</a> を参照してください。  <b>標準設定値</b> : 値なし
<b>ブラウズ可能なすべてのモニタの測定値</b>	参照可能なすべてのモニタの測定値の警告およびエラー・ベースラインしきい値の計算に使用される順守レベル「低」, 「中」, 「高」のパーセンタイル値を表示します。  <b>警告の標準設定値</b> : 「低」 110, 「中」 93, 「高」 90  <b>エラーの標準設定値</b> : 「低」 120, 「中」 98, 「高」 95

## パーセンタイル範囲マッピング・テーブル

このテーブルには、各パーセンタイル範囲にマップされている実際の値が表示されます。SiteScope ではパーセンタイル値を使用してベースラインのエラーしきい値と警告しきい値を定義します。このテーブルを使用して、パーセンタイル値に対応する実際の値を表示し、パーセンタイル値を手動で変更します。

<b>アクセス方法</b>	<p>【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、ベースラインがアクティブ化されているモニタを選択します（モニタにアクティブ化されたベースラインがあるかどうかは、グループまたはモニタを右クリックして【ベースライン設定】&gt;【状態レポート】を選択すると確認できます）。モニタの【しきい値の設定】を展開し、【パーセンタイル テーブル】 ボタンをクリックします。</p>
<b>重要な情報</b>	<p>このテーブルは、ベースラインがアクティブ化されているモニタのみで使用できます。</p>
<b>関連タスク</b>	<p><a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」 (336ページ)</a></p>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」 (335ページ)</a></li> <li>• <a href="#">「しきい値の設定」 (298ページ)</a></li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>パーセンタイル範囲</b>	<p>ベースライン・エラーおよび警告しきい値の定義に使用する実際の値に相關するパーセンタイル範囲。SiteScope のプリファレンス（【プリファレンス】&gt;【インフラストラクチャ プリファレンス】&gt;【ベースライン設定】）で、テーブルに表示されるパーセンタイル範囲の数値を設定できます。</p> <p><b>注：</b> 左の値は含まれず、右の値は含まれます。つまり、33 ~ 100 というパーセンタイル範囲の場合、33 より大きくて（33 は含まない）100 までのすべての値が範囲に含まれます。33 は前の範囲に含まれ、100.01 は次の範囲に含まれます。</p>
<b>実際の値</b>	<p>パーセンタイル範囲にマップされる実際の値。</p>
<b>現在のパーセンタイル</b>	<p>ベースラインしきい値の定義に使用する実際の値に相關するパーセンタイル値。</p> <p><b>注：</b></p>

UI 要素	詳細												
	<div><ul style="list-style-type: none"><li>現在のパーセンタイルは 100% より大きい値に設定できます。これにより、収集したサンプル測定値に基づいて、しきい値レベルを設定されたレベルより高くできます。たとえば、収集した CPU 使用率の測定値の範囲が 10% ~ 60% で、CPU 使用率が 80% を超えるエラーのみを取得するには、エラーしきい値レベルを望ましいレベルまで上げるパーセンタイルにパーセンタイル値を設定します。この場合は、パーセンタイルを 134% (CPU 使用率 60% * 1.34 = CPU 使用率 80.4% ) に設定します。</li><li>SiteScope はパーセンタイル範囲を次のように計算します。<ul style="list-style-type: none"><li>100% 未満の範囲では、パーセンタイルが各範囲のサンプルの量を表します。これにより、80 番目のパーセンタイルは、CPU 使用率の値の 80% に等しいかそれより小さい範囲になります。</li><li>100% を超える範囲 :110 番目のパーセンタイルは、100 番目のパーセンタイル<math>\times 1.1</math> (66.42 <math>\times</math> 1.10 = 73.06) として計算されます。120 番目のパーセンタイルは、100 番目のパーセンタイル<math>\times 1.2</math> (66.42 <math>\times</math> 1.2 = 79.7) として計算されます。</li></ul></li></ul></div> <div><div>パーセンタイル範囲マッピングテーブル - utilizationPercentage</div><div><div>パーセンタイル マッピング</div><table><thead><tr><th>パーセンタイル範囲</th><th>実際の値</th></tr></thead><tbody><tr><td>0 - 80</td><td>0</td></tr><tr><td>80 - 100</td><td>1</td></tr><tr><td>100 - 110</td><td>1.1</td></tr><tr><td>110 - 120</td><td>1.2</td></tr><tr><td>120 - 130</td><td>1.3</td></tr></tbody></table><div><div>現在のパーセンタイル</div><div>新しいパーセンタイル値を入力してください</div><div>90</div></div><div><div>OK</div><div>キャンセル</div><div>ヘルプ</div></div></div></div>	パーセンタイル範囲	実際の値	0 - 80	0	80 - 100	1	100 - 110	1.1	110 - 120	1.2	120 - 130	1.3
パーセンタイル範囲	実際の値												
0 - 80	0												
80 - 100	1												
100 - 110	1.1												
110 - 120	1.2												
120 - 130	1.3												

[設定のバックアップ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ベースラインしきい値をアクティブ化する前に現在のモニタのしきい値設定を保存できます。設定を元に戻すには、設定ツールを使用します。設定ツールの詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）を参照してください。

<b>アクセス方法</b>	<b>【モニタ】</b> コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、 <b>【ベースライン設定】 &gt; 【レビューと有効化】</b> を選択します。 <b>【設定のバックアップ】</b> ボタンをクリックします。
<b>重要な情報</b>	ベースラインをアクティブ化するとしきい値設定の変更は元に戻せないため、バックアップ設定を作成してからベースライン設定をアクティブ化してください。
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」 (336ページ)</a>
<b>関連情報</b>	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」 (335ページ)</a>

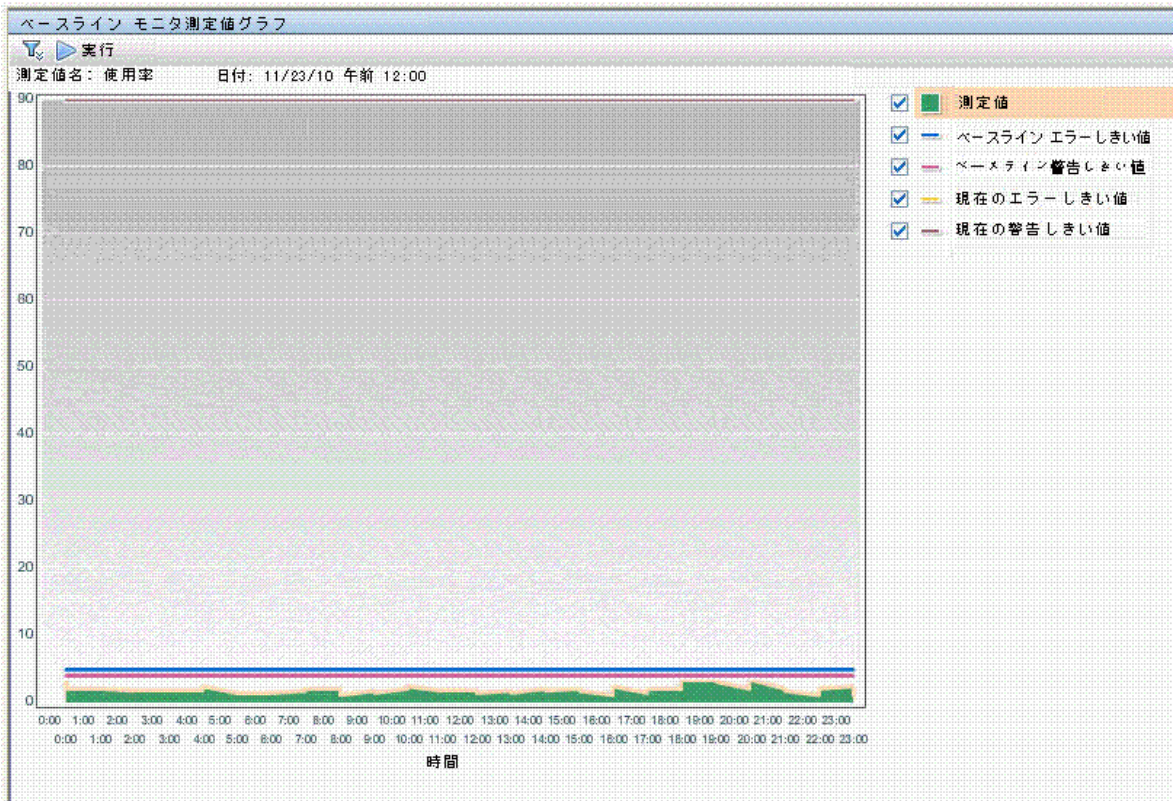
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>ターゲット ディレクトリを入力してください</b>	バックアップ設定ファイルの保存先ディレクトリ、または標準設定の SiteScope インストール・ディレクトリを使用します。 <b>標準設定値</b> : C:\SiteScope
<b>バックアップ・ファイル名を入力してください</b>	設定バックアップ・ファイルの名前。標準設定で、ファイルには、次の形式で名前が付けられます。SiteScope_<MM_DD_YYYY>_<HH_MM_SS>。SiteScope では、バックアップ・ファイルは指定した場所に zip 形式で保存されます。 <b>例</b> : SiteScope__11_05_2008_08_24_06

## 「ベースライン モニタ測定値グラフ」 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスには、モニタのすべての測定値のグラフが測定値ごとに表示されます。グラフを表示する標準設定の日付は、エラー減少が最大の日です。各グラフには、現在の警告およびエラーしきい値、ベースライン警告およびエラーしきい値、ベースライン関連のモニタ測定値すべての 24 時間分 (00:00 ~ 23:59) の履歴データが表示されます。








アクセス方法	【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、【ベースライン設定】>【レビューと有効化】を選択します。【正常に計算されたモニタ】パネルで、ベースライン・データが計算されたモニタを選択して、【ビュー グラフ】ボタンをクリックします。
重要な情報	モニタ測定値グラフに表示されるデータは測定値データの集計で、その期間にはデータが収集された時間が正確に反映されていない場合があります。
関連タスク	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」 (336ページ)</a>
関連情報	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」 (335ページ)</a>

グラフ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細



UI 要素	詳細
	<b>注釈ツール</b> : 表示しているグラフのスナップショットを作成します。また、スナップショットに図形や線を描画したりテキストを追加したりして、グラフの重要な領域を強調表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「注釈ツール」 (358ページ)</a> を参照してください。
	<b>【折りたたみ】 レポート・フィルタ</b> : クリックしてレポート・フィルタの折りたたみ / 展開を行います。  <b>ヒント</b> : 折りたたみ可能なレポート・フィルタが閉じると、アイコンのツールチップにフィルタで行った選択に関する詳細が表示されます。
 実行(R)	<b>実行</b> : レポート設定を指定した後で、 <b>【実行】</b> をクリックして、日付リンクに表示される日付のレポートを実行します。
<b>Historic date &lt; 日付リンク &gt;</b>	カレンダーを開いてモニタ測定値グラフを作成する日付を選択できます。カレンダーには次のボタンがあります。 <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>戻す</b>: 前に選択したレポート日に戻ります。</li><li>・ <b>現在</b>: カレンダーで今日の日付を選択します。</li><li>・ <b>OK</b>: 選択した日付の日付リンクを更新してカレンダーを閉じます。</li><li>・ <b>キャンセル</b>: 変更せずにカレンダーを閉じます。</li></ul>

## グラフの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。


UI 要素	詳細
<b>&lt; 凡例 &gt;</b>	グラフで使用されている色分けを説明します。
<b>測定値名</b>	グラフの上に表示される測定値の名前。
<b>日付</b>	グラフが生成された日付と時刻。
<b>&lt; データ ポイント &gt;</b>	選択されているモニタ測定値を「時間」軸上に2時間区分で表示します。 <b>ヒント</b> : 測定値。
<b>&lt; 測定値タイプ &gt;</b>	モニタの測定値タイプを表示します。


UI 要素	詳細
> <y 軸>	
時間 <x 軸>	レポートを生成するときに指定した日付の時間区分単位 (0 ~ 24 時間)。
ベースライン エラーしきい値	エラーの状態を判断するベースラインしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタのエラー・ベースライン・ステータスのしきい値を超えます。これは、赤の実線でグラフに表示されます。
ベースライン警告しきい値	警告の状態を判断するベースラインしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタの警告ベースライン・ステータスのしきい値を超えます。これは、オレンジ色の実線でグラフに表示されます。
現在のエラーしきい値	エラーの状態を判断するしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタのエラー・ステータスのしきい値を超えます。これは、黒の点線でグラフに表示されます。
現在の警告しきい値	警告の状態を判断するしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタの警告ステータスしきい値を超えます。これは、青の点線でグラフに表示されます。

## 注釈ツール

このツールを使用して、表示しているレポートのスナップショットに注釈を追加し、重要な領域を強調表示できます。注釈ツールは、ベースライン・モニタ測定値グラフを表示しているときに使用できます。注釈オプションを使用してスナップショットをカスタマイズできます。

注釈メニュー・バーの要素で次を行うことができます。











- スナップショットの外観を変更します。
- 注釈レポートを保存、印刷、電子メールで送信します。
- スナップショットに追加された注釈のテキストの外観をカスタマイズします。これらの要素は、**[テキスト・ツール]**  ボタンが選択されているときのみ有効になります。


アクセス方法	ページの右側にある <b>[注釈]</b>  ボタンをクリックします。
重要な情報	注釈ツールを使用するには、マシンに Sun JRE プラグイン 1.6.0_x (推奨される最新バージョン) がインストールされている必要があります。プラグインがマシンにインストールされていない場合は、インストールを促すメッセージが表示されます。

関連情報	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」 (335ページ)</a>
------	--

注釈オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>パン ツール</b> : スナップショットに移動します。
	<b>選択ツール</b> : スナップショットの特定の領域を選択します。
	<p><b>図形ツール</b> : スナップショットに図形を追加します。図形ツール・ボタンをクリックすると、次の図形ボタンが有効になります。</p> <ul style="list-style-type: none"><li> <b>四角形</b> : スナップショットの特定の領域を四角形でマークします。</li><li> <b>塗りつぶした四角形</b> : スナップショットの特定の領域を塗りつぶした四角形でマークします。</li><li> <b>楕円形</b> : スナップショットの特定の領域を楕円形でマークします。</li><li> <b>塗りつぶした楕円形</b> : スナップショットの特定の領域を塗りつぶした楕円形でマークします。</li><li> <b>角丸四角形</b> : スナップショットの特定の領域を角丸四角形でマークします。</li><li> <b>塗りつぶした角丸四角形</b> : スナップショットの特定の領域を塗りつぶした角丸四角形でマークします。</li></ul> <p><b>カスタマイズ</b> : このボタンを選択すると、インタフェースの次の各部分を使用して線の外観をカスタマイズできます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li><b>線の種類</b> : 追加する線の種類を、次のいずれかから選択します。<ul style="list-style-type: none"><li>実線</li><li>点線</li></ul></li><li><b>線の幅</b> : 注釈内の線の幅をピクセル単位で選択します。</li></ul>
	<b>線ツール</b> : 線ツールが有効になります。このツールは、選択したスナップショットの領域を線でマークします。













UI 要素	詳細
	<p><b>カスタマイズ:</b> このボタンを選択すると、インタフェースの次の各部分を使用して線の外観をカスタマイズできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>線の種類:</b> 追加する線の種類を、次のいずれかから選択します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 標準の線</li> <li>• エンドポイント付きの線</li> <li>• 矢印付きの線</li> </ul> </li> <li>• <b>線の種類:</b> 追加する線の種類を、次のいずれかから選択します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 実線</li> <li>• 点線</li> </ul> </li> <li>• <b>線の幅:</b> 注釈内の線の幅をピクセル単位で選択します。</li> </ul>
	<p><b>テキスト・ツール:</b> スナップショットにテキストを追加します。</p> <p><b>例:</b> レポートの特定の領域をマークしている線の上に「これは問題のあるトランザクションです」という構文を追加します。</p>
<p><b>境界線と塗りつぶしの色</b></p>	<p>該当の四角形を選択して、注釈の境界線と塗りつぶしの色を選択します。次の四角形を使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>上の四角形:</b> 線ツールで生成され、塗りつぶされていない図形に表示される線の色を選択します。</li> <li>• <b>下の四角形:</b> 図形を塗りつぶす色を選択します。</li> </ul> <p>どちらの四角形をクリックしても、色を選択する次のタブを含むダイアログ・ボックスが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Swatches</li> <li>• HSB</li> <li>• RGB</li> </ul>
<p><b>不透明度</b></p>	<p>不透明度バーをスライドして、注釈内で選択した図形の線、テキスト行、または図形の色の濃さのレベルを選択します。</p> <p><b>注:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 不透明度が高いほど、より暗く表示されます。不透明度が低いほど、より明るく表示されます。</li> <li>• このフィールドは、図形ツール、ライン・ツール、またはテキスト・ツール</li> </ul>

UI 要素	詳細
	ル・ボタンのいずれかが選択された場合に有効です。

注釈メニュー・バー

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
	<b>保存</b> ：スナップショットをローカル・マシンに保存します。 <b>注</b> ： <ul style="list-style-type: none"><li>スナップショットは .png 形式で保存されます。</li><li>【マイ ドキュメント】ディレクトリまたはそのサブ・ディレクトリに保存する場合，【新規フォルダ】 アイコンは選択できません。</li></ul>
	<b>すべて選択</b> ：スナップショットに追加されたすべての注釈を選択します。
	<b>選択項目のクリア</b> ：すべての注釈をクリアします。
	<b>元に戻す</b> ：スナップショットに対して実行した最新のアクションを元に戻します。
	<b>やり直し</b> ：スナップショットに対して実行した最新のアクションのロール・バックをキャンセルします。
	<b>ズーム・イン</b> ：スナップショット・ビューを拡大します。
	<b>ズーム・アウト</b> ：スナップショット・ビューを縮小します。
	<b>初期サイズの復元</b> ：スナップショットを初期サイズに戻します。
	<b>印刷</b> ：スナップショットを印刷します。
	<b>電子メール送信</b> ：電子メールでスナップショットを送信します。

UI 要素	詳細
	<p><b>リポジトリに保存:</b> スナップショットをレポート・マネージャにアップロードします。レポート・マネージャの詳細については、BSM ヘルプで『BSM ユーザ・ガイド』の「レポート・マネージャの概要」を参照してください。</p> <p><b>注:</b> このオプションは、SiteScope から注釈ツールにアクセスしているときには使用できません。</p>
	<p><b>ヘルプ:</b> 現在表示しているページのヘルプをオンライン・ドキュメントで表示します。</p>
	<p><b>太字:</b> テキストを太字にします。</p> <p><b>注:</b> このフィールドは、[テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
	<p><b>斜体:</b> テキストを斜体にします。</p> <p><b>注:</b> このフィールドは、[テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
	<p><b>下線:</b> テキストに下線を引きます。</p> <p><b>注:</b> このフィールドは、[テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
	<p><b>アンチエイリアス:</b> テキストまたは注釈行のピクセルの読み込みを調整し、滑らかに表示されるようにします。</p> <p><b>注:</b> このフィールドは、[テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
<フォント ファミリー>	<p>レポート内のテキストのフォントを選択します。</p> <p><b>注:</b> このフィールドは、[テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
<フォント サイズ>	<p>レポート内のフォントのサイズを選択します。</p> <p><b>注:</b> このフィールドは、[テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>

## [ベースラインの削除] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ベースラインを削除するグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択できます。モニタのしきい値ベースラインを再計算するには、まずモニタの既存のベースライン計算を削除する必要があります。

アクセス方法	【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、 <b>[ベースライン設定] &gt;&gt; [削除]</b> を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者または「 <b>モニタを追加、編集、または削除します</b> 」または「 <b>モニタの編集のみ</b> 」権限を付与されたユーザのみがベースラインを削除でき、さらに、削除できるのはユーザの許可されているグループ・リストにあるモニタのベースラインのみです。ユーザに権限がないグループ内のモニタは、ダイアログ・ボックスに表示されません。ユーザ権限の詳細については、 <a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」(744ページ)</a> を参照してください。
関連タスク	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」(336ページ)</a>
関連情報	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」(335ページ)</a>


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<グループまたはモニタ、あるいはその両方のリスト>	ベースラインしきい値計算を削除するグループまたはモニタ、あるいはその両方。リストには、現在選択されているコンテナ、およびユーザの許可されているグループ・リストに含まれるすべての子コンテナのすべてのグループまたはモニタ、あるいはその両方が表示されます。  <b>標準設定値</b> : 現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。

## ベースラインの状態レポート

このレポートには、選択されたコンテキストのすべてのモニタのベースラインの状態に関する情報が表示されます。

ベースラインの状態レポート			
サマリー			
2 個のモニタの合計です。			
1 個のモニタにアクティブ化されたベースラインがあります。			
1 個のモニタはベースラインが設定されていません。			
詳細			
モニタ名	モニタ タイプ	ベースラインの状態	ベースラインの状態の詳細
SiteScopeTestCPU Test	CPU	ベースライン設定する...	
SiteScopeTestSallytest	CPU	アクティブ化されたベ...	

<b>アクセス方法</b>	<p>【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、【ベースライン設定】&gt;【状態レポート】を選択します。</p>
<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>これは一時的なレポートです。後で使用するために SiteScope 設定データに保存されるものではありません。</li> <li>列ヘッダをクリックして、モニタ・タイプを昇順または降順で並べ替えることができます。並べ替え順序の方向を示す矢印が表示されます。</li> <li>下向き矢印  をクリックして、フィルタ基準とするモニタ・タイプまたはベースラインの状態を選択すると、モニタ・タイプおよびベースラインの状態の表示をフィルタできます。フィルタをクリアするには、【(すべて)】を選択します。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<p><a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」(336ページ)</a></p>
<b>関連情報</b>	<p><a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」(335ページ)</a></p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>モニタ名</b>	<p>コンテキストによって異なる SiteScope モニタの名前とパス。</p> <p>注：レポートには、ユーザにアクセス権限があるグループまたはサブグループのモニタのみが表示されます。</p>
<b>モニタ・タイプ</b>	SiteScope モニタのタイプ。
<b>ベースラインの状態</b>	<p>モニタのベースライン状態。次の状態があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>ベースライン設定するモニタが選択されていません</b>：ベースライン設定するモニタが選択されていません。</li> <li><b>ベースラインの計算中</b>：SiteScope でベースラインを計算中です。</li> <li><b>計算に失敗</b>：SiteScope でベースラインを計算できませんでした。</li> <li><b>計算済み、アクティブでない</b>：モニタのベースラインが計算されました</li> </ul>



UI 要素	詳細
	<p>が、まだアクティブ化されていません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>ベースラインの有効化</b>: SiteScope でベースラインをアクティブ化していません。</li> <li>・ <b>アクティベーションが失敗しました</b>: SiteScope でベースラインをアクティブ化できませんでした。</li> <li>・ <b>アクティブ化されたベースライン</b>: モニタのベースラインがアクティブ化されました。</li> </ul>
<b>ベースラインの状態の詳細</b>	<p>次の状態のモニタの追加の詳細情報を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>ベースラインの計算中</b>: モニタのベースラインの計算ステージを表示します。</li> <li>・ <b>計算に失敗</b>: ベースラインの計算が失敗した原因を表示します（「データが十分ではありません」、「ベースライン設定する測定値がありません」）。SiteScope でベースライン期間のデータを蓄積するのに十分な期間モニタが実行された後、自動ベースライン計算では十分なデータがないために失敗したモニタが標準設定で選択されます。詳細については、「<a href="#">【ベースラインのアクティブ化】ダイアログ・ボックス</a>」(365ページ)を参照してください。</li> </ul>
<b>更新</b>	計算プロセス中にクリックすると、状態レポートのデータが更新されます。




## 【ベースラインのアクティブ化】ダイアログ・ボックス



このダイアログ・ボックスには、計算されたモニタのベースライン・データのサマリが表示され、現在のモニタ設定の保存、ベースライン測定値グラフの表示、失敗した操作の表示、ベースラインしきい値設定のアクティブ化を行えます。SiteScope でベースラインを計算できないモニタについては、失敗の原因が表示されます。

<b>アクセス方法</b>	<p>【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、<b>【ベースライン設定】 &gt; 【レビューと有効化】</b>を選択します。</p>
<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ベースライン機能を使用してモニタのしきい値を設定できるのは、SiteScope の管理者または「<b>モニタを追加、編集、または削除します</b>」の権限か「<b>モニタの編集または削除</b>」の権限を持つユーザのみです。また、設定できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。ユーザに権限がないグループ内のモニタは、ダイアログ・ボックスに表示されません。ユーザ権限の詳細については、「<a href="#">ユーザ管理ブリファレンス</a>」(744ページ)を参照してください。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在のモニタ設定に戻すには、バックアップ設定を作成してからベースライン設定をアクティブ化する必要があります。</li> <li>ベースラインしきい値のアクティブ化に必要な時間は、SiteScope サーバの処理速度とベースライン設定で選択したモニタ数に左右されます。アクティブ化プロセスを完了する前に SiteScope を再起動する必要がある場合、SiteScope の再起動後に自動的にプロセスが実行されます。</li> </ul>
関連タスク	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」 (336ページ)</a>
関連情報	<a href="#">「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定」 (335ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>正常に計算されたモニタ</b>	
 グラフの表示	<b>ビュー・グラフ</b> : モニタのすべての測定値のベースライン・データがグラフで表示されます。詳細については、 <a href="#">「[ベースライン モニタ測定値グラフ] ダイアログ・ボックス」 (355ページ)</a> を参照してください。
	<b>すべて選択</b> : 表示されているモニタがすべて選択されます。
	<b>選択を解除</b> : 選択範囲を解除します。
<b>モニタ名</b>	ベースライン設定に選択された SiteScope モニタの名前。
<b>計算日</b>	ベースラインが計算された日付。
<b>エラー ステータスの減少</b>	<p>ベースラインしきい値が適用された場合のモニタのエラー・ステータス数の減少。負の数は、提案されたベースラインしきい値が適用された場合、モニタのエラー・ステータス数の増加を示します。</p> <p><b>例</b>: CPU 使用率のしきい値の状態をエラー条件 <math>\geq 65\%</math> に手動で設定し、CPU モニタに5つのエラー状態（そのうち3つのエラーは <math>65\% \sim 70\%</math> のデータ・サンプル、2つのエラーは <math>70\%</math> を超えるもの）があるとして、SiteScope でベースラインを使用してしきい値を計算し、しきい値がエラー条件 <math>\geq 70\%</math> に設定されている場合、<b>「エラー ステータスの減少」</b>は3になります。</p> <p><b>注</b>: <b>「エラー ステータスの減少」</b>の値は、計算日に収集されたデータに基づいています。</p> <p><b>ヒント</b>: 計算日から3日以上経過している場合、ベースラインを再計算することをお勧めします。</p>

UI 要素	詳細
警告のステータスの減少	<p>ベースラインしきい値が適用された場合のモニタの警告ステータス数の減少。負の数は、提案されたベースラインしきい値が適用された場合のモニタの警告ステータス数の増加を示します。</p> <p><b>例：</b>CPU 使用率のしきい値の状態を警告条件 <math>\geq 55\%</math> に手動で設定し、CPU モニタに3つの警告の状態（そのうち2つの警告は <math>55\% \sim 60\%</math> のデータ・サンプル、1つの警告は <math>60\%</math> を超えるもの）があるとしします。SiteScope でベースラインを使用してしきい値を計算し、しきい値が警告条件 <math>\geq 60\%</math> に設定されている場合、[警告のステータスの減少] は2になります。</p> <p><b>注：</b>[警告のステータスの減少] の値は、計算日に収集されたデータに基づいています。</p> <p><b>ヒント：</b>計算日から3日以上経過している場合、ベースラインを再計算することをお勧めします。</p>
<b>失敗したモニタ</b>	
	<b>すべて選択：</b> 表示されているすべての失敗したモニタを選択します。
	<b>選択を解除：</b> 選択範囲を解除します。
モニタ名	SiteScope でベースラインを計算できなかったモニタの名前。
失敗の原因	<p>SiteScope でモニタのベースライン値を計算できなかった原因。次のような変更があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>データが十分ではありません：</b>モニタの実行期間が、有意なベースラインしきい値を得られるデータの収集期間としては十分ではありませんでした。この期間は、[インフラストラクチャ プリファレンス] の [ベースライン設定に必要な最小日数] および [ベースライン設定に必要な最小サンプル数] 設定に応じて変わります。ベースライン設定の詳細については、<a href="#">「ベースライン設定」 (654ページ)</a> を参照してください。 </li> <li> <b>ベースライン設定する測定値がありません：</b>モニタに、ベースライン計算に使用できる測定値がありません。ベースラインをアクティブ化するモニタを選択できません。 </li> <li> <b>リクエストされたスケジュールのサンプルがありません：</b>指定された範囲スケジュールで収集されたデータ・サンプルがありません。ベースラインをアクティブ化するモニタを選択できません。 </li> <li> <b>不明：</b>ベースライン計算の失敗の原因が不明です。ベースラインをアクティブ化するモニタを選択できません。 </li> </ul>

UI 要素	詳細
アクティブ化可能	<p>モニタのベースライン計算が失敗した場合でも、ベースラインをアクティブ化できることを示します。</p> <p>「データが十分ではありません。」という理由以外でベースライン計算が失敗した場合、「いいえ」が表示されます。</p> <p>「データが十分ではありません。」という理由でベースライン計算が失敗した場合、「はい」が表示されます。SiteScope ではベースラインを計算するために収集された限定的な測定値サンプルが使用されます。</p>

## 第27章: 計算済みメトリックの作成

計算済みメトリックスは、既存の SiteScope メトリックスで算術関数または論理演算子を実行することによって算出されたメトリックスです。計算済みメトリックスは、[\[しきい値の設定\]](#) パネルに表示され、そのメトリックスに基づいてしきい値を設定することができますようになります。

たとえば、モニタ・インスタンスにの2つ以上の既存メトリックスの平均を計算して、計算済みメトリックスを作成できます。次にその平均が特定の数値を超えた場合に警告をトリガするしきい値を設定します。

### アクセス方法

**[モニタ]** コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、**[プロパティ]** タブをクリックして**[計算済みメトリックスの設定]** パネルを選択します。

## 学習事項

### 本項の内容

- ・ [「計算済みメトリックの概要」](#) (369ページ)
- ・ [「計算済みメトリックの例」](#) (370ページ)
- ・ [「動的モニタの計算済みメトリックス」](#) (370ページ)

### 計算済みメトリックの概要

計算済みメトリックを使用して、次の作業を行います。

- ・ コンスタントに変化していてステータスしきい値を定義するのが困難なメトリックを分析する。
- ・ 通常の SiteScope メトリックに基づいて、新しい算術メトリックまたは論理メトリックを定義する。
- ・ 設定済みの演算子 (sum, average, minimum, maximum, frequency, previous) を使用してモニタ・メトリックを操作できるようにする。
- ・ 特定の SiteScope メトリックのビジネス影響度を高める。

新しい計算済みメトリックを作成するには、メトリック、演算子、値で構成される式を作成します。式の作成中いつでも式の有効性をチェックできます。式内のメトリック、演算子、値を区別できるように、これらには個別の色が付いています。

また、テンプレート・モニタ・インスタンスの作成時に計算済みメトリックを作成することもできます。テンプレート・モニタの作成の詳細については、[「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」](#) (804ページ)を参照してください。

計算済みメトリックの結果は、SiteScope によって計算され、SiteScope ダッシュボードやモニタのステータス・サマリに表示されます。

### 計算済みメトリックの例

#### 例 1 :

Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタのページ数 / 秒に対するページ読み取り数 / 秒のパーセンテージを計算する場合。次の式を使用して、Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタの計算済みメトリックを作成します。

```
(<<Memory:Page Reads/sec>> / <<Memory:Pages/sec>>)*100
```

#### 例 2 :

CPU モニタの最大 CPU 使用率を計算する場合。次の式を使用して、CPU モニタの計算済みメトリックを作成します。

```
#max(<<CPU Utilization # 1>>, <<CPU Utilization # 2>>, <<CPU Utilization # 3>>, <<CPU Utilization # 4>>)
```

#### 例 3 :

vCenter 環境の最大使用率を確認する場合。次の計算済みメトリックの式を作成します。

```
#max(<</labm3esx01/HostSystem/cpu/coreUtilization.average*/>>)
```

### 動的モニタの計算済みメトリクス

ダイナミック・モニタでは、監視対象メトリックを指定するメトリック・パターンに基づいて、メトリックとしきい値が自動的に更新されます。計算済みメトリックの式を作成する場合、ダイナミック・モニタの設定パターンに含まれる正規表現のみを使用できます。

たとえば、ダイナミック・ディスク・スペース・モニタでは、サーバ上で現在使用中のディスク容量を追跡します。ダイナミック・モニタリングを設定すると、ディスクがサーバに追加されたりサーバから削除されたときにメトリクスとしきい値が自動的に更新されます。そのため、一度モニタを設定すれば、あとは何もしなくてもディスクとファイル・システムの変更が検出されます。

平均や合計などの一般的な関数に基づきダイナミック・モニタの計算済みメトリクスを設定できます。

#### 例 :

すべてのディスクの合計空き容量を計算するには、次のように `./*/MB free/` から作成されたすべてのメトリクスの合計となる計算済みメトリクスの式を作成します。

```
SUM(<<./*/MB free/>>)
```

**注:** 関数の一部ではない計算済みメトリクス（つまり、1つの結果のみを返す計算済みメトリクス）につき1つの正規表現のみを使用できます。

ダイナミック・モニタの詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「VMware ホスト・モニタ」を参照してください。

## タスク

### 計算済みメトリクスの式の作成方法

#### 1. 前提条件

- 計算済みメトリック機能を使用できるのは、SiteScope の管理者または「**モニタを追加、編集、または削除します**」の権限か「**モニタを編集または削除**」の権限を持つ SiteScope ユーザのみです。また、使用できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。ユーザにモニタ・グループに対する権限がない場合、それらのモニタは「計算済みメトリクスの設定」パネルに表示されません。ユーザ権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。
- 計算済みメトリックを設定して算術関数を実行するには、選択したメトリックの以前の値が少なくとも1つは必要です。たとえば、モニタの以前の実行が少なくとも1つはないと、以前の関数を計算することはできません。

#### 2. 計算済みメトリックの式の作成

- 計算済みメトリックの式を作成するモニタを選択し、モニタ・プロパティの「計算済みメトリクスの設定」パネルを開きます。ユーザ・インターフェースの詳細については、「[計算済みメトリクスの設定](#)」(373ページ)を参照してください。
- メトリック、演算子、値が含まれるように計算済みメトリックの式を設定します。

メトリックまたは演算子を「**式**」フィールドに挿入するには、メトリックまたは演算子をダブルクリックするか、「**式**」フィールドにドラッグ・アンド・ドロップします。また、「**式**」フィールドに手動で入力することもできます。選択したメトリックまたは演算子は、「**式**」フィールドに紫色で表示されます。

  - メトリクス:** メトリックのリストは、設定しているモニタのタイプに基づいて動的に更新されます。たとえば、ディスク容量モニタの場合、利用可能なメトリックは、<<使用中パーセント>> と <<MB 空き領域>> です。
  - 演算子:** メトリックと値の関係を定義します。演算子には、関数が含まれます。演算子の詳細については、「[演算子](#)」(375ページ)を参照してください。
  - 値:** メトリック・パラメータに適用される数値または数式。関係演算またはブール演算の場合、1 または 0 を入力します。SiteScope 関数の場合、演算子の括弧内に値を入力します。たとえば、7, 9, 11 の平均を計算する場合、#Average(7, 9, 11) のように、これらの数値を演算子の括弧内に入力します。

**注:**

- 次のような計算済みメトリックの式は計算できません。
  - 数値が0 で除算される。
  - 非数値文字列が数値で除算される。たとえば、ライセンス使用状況モニタの <<オーバーライセンス・ステータス>>/100 という式は、<<オーバーライセンス・ステータス>> が数値でないため、計算できません。

このような計算済みメトリックの場合、該当する計算済みメトリックのダッシュボードの [サマリ] 列に n/a が表示されます。

計算済みメトリックの式の作成時に利用できる演算の詳細については、「[利用可能なデータ処理演算](#)」(400ページ)を参照してください。

- 式にはネストされた関数を含めることができます（例：#average(#max(<<アクセス許可>>.length,<<ディレクトリ存在>>.length),2)）。
- モニタの場合、ダッシュボードの [サマリ] 列には、モニタによってレポートされた最新の測定値の結果が表示されます。モニタ・タイプによっては、複数の測定値が含まれていることがあります。モニタ・グループの場合、サマリにはグループ内のモニタの数や、エラー状態を報告したモニタの数（存在する場合）が表示されます。
- JavaScript エンジンの制限のため、計算済みメトリックの式に  $2^{52}$  より大きな値を含めることはできません。詳細については、<http://ecma-international.org/ecma-262/5.1/> を参照してください。

### 3. 式の有効性のチェック - 任意指定

式内のメトリック、演算子、値を区別できるように、これらには個別の色が付いています。メトリックまたは演算子に何らかの文字が欠落している場合、メトリックまたは演算は黒色のままになります。

式の作成中いつでも **[検証]** をクリックして式の有効性をチェックできます。

### 組み合わせられたしきい値の計算済みメトリックスの設定方法

しきい値で利用できる論理式を含む計算済みメトリックを作成できます。

これを行うには、[計算済みメトリックの新規作成] / [計算済みメトリックの編集] ダイアログ・ボックスの **[式]** フィールドに2つの計算済みメトリックを設定し、これらの2つの計算済みメトリックの間に演算子を挿入します。




**例:**

```
(utilization cpu#11==3)&(utilization cpu#12==5)
```



# UI の説明


## 計算済みメトリックスの設定

UI 要素	詳細
	<b>新規</b> : [計算済みメトリックの新規作成] / [計算済みメトリックの編集] ダイアログ・ボックスで新しい計算済みメトリックを作成できます。詳細については、「 <a href="#">[計算済みメトリックの新規作成] / [計算済みメトリックの編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(373ページ)を参照してください。
	<b>削除</b> : 選択した計算済みメトリックを削除します。
	<b>編集</b> : 選択した計算済みメトリックを編集できます。詳細については、「 <a href="#">[計算済みメトリックの新規作成] / [計算済みメトリックの編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(373ページ)を参照してください。
<b>名前</b>	計算済みメトリックを表す名前。
<b>式</b>	計算済みメトリックを定義します。式には、メトリック、演算子、値が含まれます。詳細については、「 <a href="#">[計算済みメトリックの新規作成] / [計算済みメトリックの編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(373ページ)を参照してください。
<b>詳細</b>	計算済みメトリックの動作をわかりやすくするための、計算済みメトリックの詳細（任意指定）。

[計算済みメトリックの新規作成] / [計算済みメトリックの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい計算済みメトリックの作成や既存の計算済みメトリックの編集ができます。

UI 要素	詳細
<b>[計算済みメトリック] パネル</b>	
<b>名前</b>	計算済みメトリックを表す名前。名前は、ほかの計算済みメトリックの名前と区別できるように一意である必要があります。  名前を入力しない場合、標準設定では、Calculated Metric という名前の後に計算済みメトリックの番号が続きます。たとえば、すでにモニタの計算済みメ

UI 要素	詳細
	<p>リックが存在している場合、そのモニタの追加の計算済みメトリックを作成すると、追加の計算済みメトリックの標準設定の名前は Calculated Metric 2 となります。</p> <p><b>注：</b>このフィールドでは、特殊文字 (" ' &gt; &lt; ) を使用することはできません。</p>
詳細	計算済みメトリックの動作をわかりやすくするための、計算済みメトリックの詳細（任意指定）。
式	計算済みメトリックの式には、メトリック、演算子、値が含まれます。
検証	<p>【式】フィールドの式の構文の有効性をチェックします。式が有効な場合、<b>[ok test]</b>  アイコンが表示されます。式が無効な場合、式を計算できないことを示す【エラー】ダイアログ・ボックスが開きます。</p>
クリア	【式】フィールドの式を削除します。
メトリックス	<p>【式】フィールドに挿入するメトリック。メトリックのリストは、設定しているモニタのタイプに基づいて動的に更新されます。たとえば、ディスク容量モニタの場合、利用可能なメトリックは、&lt;&lt;使用中パーセント&gt;&gt; と &lt;&lt;MB 空き領域&gt;&gt; です。</p> <p>メトリックを【式】フィールドに挿入するには、メトリックをダブルクリックするか、メトリックを【式】フィールドにドラッグ・アンド・ドロップします。また、【式】フィールドにメトリックを手動で入力することもできます。選択したメトリックは、【式】フィールドに紫色で表示されます。メトリックに何らかの文字が欠落している場合、メトリックは黒色のままになります。【検証】をクリックすると、強調表示されます。</p>
演算子	<p>演算子は、メトリックと値の関係を定義します。演算子には、関数が含まれます。演算子の詳細については、<a href="#">「演算子」(375ページ)</a>を参照してください。</p> <p>演算子を【式】フィールドに挿入するには、演算子をダブルクリックするか、演算子を【式】フィールドにドラッグ・アンド・ドロップします。また、【式】フィールドに演算子を手動で入力することもできます。選択した演算子は、【式】フィールドに青色で表示されます。演算子に何らかの文字が欠落している場合、演算子は黒色のままになります。【検証】をクリックすると、強調表示されます。</p>
統合パネル	
監視対象エンティティ	現在の計算済みメトリックの監視対象エンティティの名前を表示します。SiteScope が Business Service Management (BSM) に接続されている場合、統

UI 要素	詳細
	<p>合パネルには BSM にレポートされた CI が表示されます。監視対象のエンティティの詳細については、「<a href="#">監視対象エンティティ</a>」(377ページ)を参照してください。</p> <p><b>注：</b> [HP 統合設定] パネルの [CI タイプ] フィールドで CI を選択している場合、この CI タイプは、[計算済みメトリック] 統合パネルに監視対象エンティティとして表示されます。[HP 統合設定] パネルの詳細については、「<a href="#">HP 統合設定</a>」(303ページ)を参照してください。</p>

## 演算子

次のような演算子があります。

- **算術演算子：** +, -, \*, /, (, ).
- **ブール演算子：**

	論理	バイナリ
および	&	&&
または		
not	~	!

**注:** 式の最後で演算子 | の後にゼロ（つまり、|0）を使用して、式が true なのか、false なのかを判別できます。たとえば、メトリック <<使用率 cpu #1>> がメトリック <<使用率 cpu #2>> よりも大きい場合、(<<使用率 cpu #1>> > <<使用率 cpu #2>>)|0 で返される結果は 1 になります。これは、式が true であることを示します。式が false の場合、返される結果は 0 になります。

- **関係演算子：** <, >, ==, !=, <=, >=.
- **JavaScript 文字列オブジェクト・メソッド：**

.length	.charAt()	.concat()	.indexOf()	.lastIndexOf()
.match()	.replace()	.search()	.split()	.slice()
.substr()	.substring()	toLowerCase()	.toUpperCase()	.valueOf()

- **SiteScope 関数：**
  - **#Average()** - カンマで区切られた、数式の一連の数値または値の平均値を計算します。たとえば、#Average(value 1, value 2, value 3) は、value 1, value 2, value 3 の平均を計算します。

この関数は、Java バージョン 7 が各クライアント側ユーザ・ステーションにインストールされている場合にのみ機能します。

- **#Frequency()** - モニタの実行頻度の値（秒）を返します。たとえば、モニタの実行頻度が 1 分に設定されている場合、`#frequency()` で返される結果は 60.0 になります。
- **#longToDate()** - 数値形式のタイムスタンプを判読可能な通常形式に変換します。この関数は、数値 (Long) を受け取ると、2 番目のパラメータの日付形式に準拠した日付文字列に変換します (`#longToDate(Long, Date Format)`)。返されるタイムスタンプは、1970 年 1 月 1 日 00:00:00.000 GMT からのミリ秒の数値です。たとえば、SiteScope サーバ・マシンの GMT が +6 に設定されている場合、「開始日」は、1970 年 1 月 1 日 06:00:00.000 になります。
- **#Max()** - カンマで区切られた、数式の一連の数値または値の最大値を返します。たとえば、`#Max(value 1, value 2, value 3)` は、value 1, value 2, value 3 の最大値を計算します。  
この関数は、Java バージョン 7 が各クライアント側ユーザ・ステーションにインストールされている場合にのみ機能します。
- **#maxMetric()** - 最大値があるメトリックの名前を返します。これは、式に正規表現が含まれている場合にのみ機能します。  
たとえば、メトリック `<<Zone/l2sun23-z1/mem/%memory>>` の値がメトリック `<<Zone/l2sun23-z2/mem/%memory>>` の値よりも大きい場合、`#maxMetric(<<Zone/l2sun23-z1/mem/%memory>>,<<Zone/l2sun23-z2/mem/%memory>>)` は `<<Zone/l2sun23-z1/mem/%memory>>` (このメトリックの値ではない) を返します。  
この関数は、ダイナミック・モニタでのみ機能します。
- **#Min()** - カンマで区切られた、数式の一連の数値または値の最小値を返します。たとえば、`#Min(value 1, value 2, value 3)` は、value 1, value 2, value 3 の最小値を計算します。  
この関数は、Java バージョン 7 がインストールされている場合にのみ機能します。
- **#minMetric()** - 最小値があるメトリックの名前を返します。これは、式に正規表現が含まれている場合にのみ機能します。  
たとえば、メトリック `<<Zone/l2sun23-z1/mem/%memory>>` の値がメトリック `<<Zone/l2sun23-z2/mem/%memory>>` の値よりも小さい場合、`#minMetric(<<Zone/l2sun23-z1/mem/%memory>>,<<Zone/l2sun23-z2/mem/%memory>>)` は `<<Zone/l2sun23-z1/mem/%memory>>` (このメトリックの値ではない) を返します。  
この関数は、ダイナミック・モニタでのみ機能します。
- **#Previous()** - モニタの以前の実行のメトリックの値を返します。たとえば、メモリ・モニタの前の実行の空き領域 (MB) 値が 7828 MB で、現在の実行の値が 7821 MB の場合、`#previous(<<MB free>>)` で返される結果は 7828.0 になります。
- **#Sum()** - カンマで区切られた、数式の一連の数値または値の合計を返します。たとえば、`#Sum(value 1, value 2, value 3)` は、value 1, value 2, value 3 の合計を計算します。

この関数は、Java バージョン 7 が各クライアント側ユーザ・ステーションにインストールされている場合にのみ機能します。





- **#valueOf()** - メトリックの値を返します。メトリックは、山括弧なしで括弧内に挿入する必要があります。  
たとえば、`#valueOf(#maxMetric(/./cpu*1/) + "cpuClick")` という式を入力します。正規表現 `(/./cpu*1)` の値が `VM1/cpuBla1` である場合、返される値は `VM1` になります。
- **#numberOfRuns()** - 「sample」という名前のモニタ・プロパティから取得したモニタ実行の連続番号 1,2,3 を返します。これにより、各実行でメトリックの 2 つの状態を切り替えることができます。例: `(#numberOfRuns()/2 + "").indexOf('.')`。

監視対象エンティティ

ほとんどの SiteScope モニタは 1 つの監視対象 CI を BSM にレポートします。この CI は、監視対象エンティティとして **監視対象エンティティ** フィールドに自動的に表示されます。メトリックごとに個別の CI をレポートするモニタの場合、次の表に基づいて計算済みメトリックが CI に接続されます。

**注:** 特定の監視対象エンティティで計算済みメトリックを作成した後で、その計算済みメトリックに別の監視対象エンティティを選択することはできません。その場合、計算済みメトリックを削除してから、目的の監視対象エンティティで新しい計算済みメトリックを作成する必要があります。

モニタ名	CI タイプ
ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ	常にコンピュータ。
SAP CCMS モニタ	SAP システム <b>注:</b> SAP CCMS モニタが BSM に接続されていない場合、またはこのモニタ・タイプの有効化に必要なライセンスがない場合、 <b>監視対象エンティティ</b> フィールドに <code>NODE</code> が表示されます。
SAP ワーク・プロセス・モニタ	SAP ABAP アプリケーション・サーバ <b>注:</b> SAP ワーク・プロセス・モニタが BSM に接続されていない場合、またはこのモニタ・タイプの有効化に必要なライセンスがない場合、 <b>監視対象エンティティ</b> フィールドに <code>NODE</code> が表示されます。
Siebel Web サーバ・モニタ	Siebel Web サーバ拡張機能 <b>注:</b> Siebel Web サーバ拡張機能モニタが BSM に接続されていない場合、また

モニタ名	CI タイプ
	はこのモニタ・タイプの有効化に必要なライセンスがない場合、 <b>【監視対象エンティティ】</b> フィールドに <b>NODE</b> が表示されます。
Siebel アプリケーション・サーバ・モニタ	<p>Siebel アプリケーション・サーバ</p> <p><b>注:</b> Siebel アプリケーション・サーバ・モニタが BSM に接続されていない場合、またはこのモニタ・タイプの有効化に必要なライセンスがない場合、<b>【監視対象エンティティ】</b> フィールドに <b>NODE</b> が表示されます。</p>
Solaris ゾーン・モニタ	<p><b>通常モードの場合:</b></p> <p><b>【監視対象エンティティ】</b>  ボタンをクリックして、監視対象エンティティ・ツリーから監視対象エンティティを選択する必要があります。</p> <p><b>テンプレート・モードの場合:</b></p> <p>計算済みメトリックに自由な正規表現が含まれている場合、<b>【監視対象エンティティ】</b> フィールドに「監視対象エンティティは正規表現によって設定されています」というメッセージが表示されます。つまり、監視対象エンティティは、テンプレートのデプロイメント時に自動的に計算されます。ただし、<b>【監視対象エンティティ】</b>  ボタンをクリックして、監視対象エンティティ・ツリーから監視対象エンティティを選択することはできません。</p> <p>計算済みメトリックに自由な正規表現が含まれていない場合、監視対象エンティティ・ツリーから監視対象エンティティを選択する必要があります。</p> <p>自由な正規表現の詳細については、<a href="#">「自由な正規表現」(378ページ)</a>を参照してください。</p>
VMware パフォーマンス・モニタ	<p>計算済みメトリックに自由な正規表現が含まれている場合、<b>【監視対象エンティティ】</b> フィールドに「監視対象エンティティは正規表現によって設定されています」というメッセージが表示されます。つまり、監視対象エンティティは、計算済みメトリックの結果として自動的に計算されます。ただし、<b>【監視対象エンティティ】</b>  ボタンをクリックして、監視対象エンティティ・ツリーから監視対象エンティティを選択することはできません。</p> <p>計算済みメトリックに自由な正規表現が含まれていない場合、監視対象エンティティ・ツリーから監視対象エンティティを選択する必要があります。</p> <p>自由な正規表現の詳細については、<a href="#">「自由な正規表現」(378ページ)</a>を参照してください。</p>
VMware ホスト・モニタ	<p>計算済みメトリックに自由な正規表現が含まれている場合、<b>【監視対象エンティティ】</b> フィールドに「監視対象エンティティは正規表現によって設定されています」というメッセージが表示されます。つまり、各計算済みメトリックの監視対象エンティティは、計算済みメトリックの結果として自動的に計算されます。ただし、<b>【監視対象エンティティ】</b>  ボタンをクリックして、監視対象エンティティ・ツリーから監視対象エンティティを選択することはできません。</p> <p>計算済みメトリックに自由な正規表現が含まれていない場合、監視対象エンティティ・ツリーから監視対象エンティティを選択する必要があります。</p> <p>自由な正規表現の詳細については、<a href="#">「自由な正規表現」(378ページ)</a>を参照してください。</p>
VMware データストア・モニタ	<p>計算済みメトリックに自由な正規表現が含まれていない場合、監視対象エンティティ・ツリーから監視対象エンティティを選択する必要があります。</p> <p>自由な正規表現の詳細については、<a href="#">「自由な正規表現」(378ページ)</a>を参照してください。</p>

#### 自由な正規表現

自由な正規表現は、関数内にない正規表現です。正規表現の詳細については、[「正規表現」\(187ページ\)](#)を参照してください。

次に、自由な正規表現の例を示します。 `/*VirtualMachine/.*/cpu/usagemhz.average[]`

これは、次のように4つの異なる計算済みメトリックに計算されます。

```
labm3esx01/VirtualMachine/sisqavm01/cpu/usagemhz.average[]  
labm3esx01/VirtualMachine/sisqavm02/cpu/usagemhz.average[]  
labm3esx01/VirtualMachine/sisqavm03/cpu/usagemhz.average[]  
labm3esx01/VirtualMachine/sisqavm04/cpu/usagemhz.average[]
```

これらの各計算済みメトリックには、次のように仮想マシン名に応じた独自の監視対象エンティティがあります。

```
sisqavm01  
sisqavm02  
sisqavm03  
sisqavm04
```

## ヒント / トラブルシューティング

### トラブルシューティングおよび制限事項

- カスタム・モニタの場合、[\[計算済みメトリックスの設定\]](#) パネルは表示されません。データ処理スクリプト内にカスタム・モニタの計算済みメトリックを作成できます。
- テンプレート・モニタ・インスタンスの作成時に計算済みメトリックを作成できます。テンプレート・モニタの作成の詳細については、[「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」\(804ページ\)](#)を参照してください。
- ダッシュボードに表示できるモニタごとの計算済みメトリック数を制限できます（標準設定は100）。ダイナミック・モニタの場合、すべてのダイナミック・モニタの正規表現が SiteScope によって評価された後にモニタごとの計算済みメトリック数が計算されます。モニタごとの計算済みメトリックの最大数は、[\[プリファレンス\] > \[インフラストラクチャ プリファレンス\] > \[計算済みメトリックスの設定\]](#) で変更できます。詳細については、[「計算済みメトリックスの設定」\(648ページ\)](#)を参照してください。

**注:** 計算済みメトリックの最大数を減らして、そのモニタにすでに設定されている計算済みメトリック数よりも少なくすると、そのモニタのダッシュボードや計算済みメトリック・テーブルに表示される計算済みメトリック数が計算済みメトリックの新しい最大数になり、エラーが **RunMonitor.log** に書き込まれます。

- 算術カウンタ機能は廃止され、代わりに計算済みメトリックスが使用されるようになりました。以前のバージョンの SiteScope で算術カウンタを作成し、SiteScope のアップグレードを実行した場合、[\[計算済みメトリックス\]](#) パネルでカウンタを再作成してから算術カウンタを削除する必要があります。

あります。

- メトリクスを伴わないサーバで CPU モニタを実行すると、SiteScope ダッシュボードに表示される計算済みのメトリクスの結果が n/a になります。その後、メトリクスを伴うサーバを選択してモニタを再度実行しても、計算済みのメトリクスの結果は n/a のままです。メトリックのあるモニタの計算済みメトリックの結果を取得するには、そのモニタの新しい計算済みメトリックを作成する必要があります。



## 第28章: ダイナミック・モニタリング・メカニズム

弾力性のある、または動的な設定は、ご使用の IT 環境に発生している変更に基づいて SiteScope 監視設定を自動的に調節する方法です。SiteScope は、時間の経過とともに、システム内での変更が発生するとき（たとえば、ディスク/MBean がサーバで追加または削除されるとき、データストアと仮想ディスクが VMware データセンターで追加または削除されるとき、または仮想マシンが 1 つのホスト・システムから別のシステムに移動するとき）にカウンタを追加したり削除したりすることによって、自身を自動的に更新するさまざまな動的モニタを提供します。また、しきい値条件として使用されるカウンタ・パターンを選択することもできます。この方法では、カウンタの更新時にしきい値も自動的に更新されます。

### 学習事項

本項の内容

- [「動的モニタのリスト」 \(381ページ\)](#)
- [「ダイナミック・モニタリング・メカニズム」 \(381ページ\)](#)
- [「動的モニタの計算済みメトリクス」 \(383ページ\)](#)

動的モニタのリスト

次のダイナミック・モニタが SiteScope で利用できます。

<ul style="list-style-type: none"><li>• 「ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ」</li><li>• 「ダイナミック JMX モニタ」</li><li>• 「汎用ハイパーバイザ・モニタ」</li><li>• 「Hadoop モニタ」</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• 「HP Vertica JDBC モニタ」</li><li>• 「KVM モニタ」</li><li>• 「VMware Datastore Monitor」</li><li>• 「VMware ホスト・モニタ」</li></ul>
--	---

タスクの詳細、UI の説明、およびヒントとトラブルシューティングの詳細については、『SiteScope Monitor Reference ガイド』の特定のダイナミック・モニタを参照してください。

### ダイナミック・モニタリング・メカニズム

ダイナミック・モニタリング・メカニズムは次のように機能します。

#### • カウンタ・パターンの定義

モニタによるカウンタの動的更新を有効にするには、正規表現を使用して監視するカウンタ・パターンを定義します。SiteScope では、パターン照合に Perl 正規表現を使用します。たとえば、

/cpu.\* / または cpu と入力すると、名前に cpu が含まれるカウンタがこのパターンに一致し、カウンタ・リストに追加されます。

**例：**

**ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ** : /.\*platform.\*/MB free/ というパターンを入力すると、ファイル・システム名に platform という単語を含むディスクの空き領域 (MB) カウンタが取得されます。

**ダイナミック JMX, Hadoop・モニタ** : /java.lang/ClassLoading/.\*/ というパターンを入力すると、TotalLoadedClassCount, UnloadedClassCount, LoadedClassCount, ObjectName など、JMX アプリケーションのすべての ClassLoading カウンタがモニタによって取得されます。

**KVM/汎用ハイパーバイザ・モニタ** : [/.\*Domains Information/.\*/Used Memory/] というパターンを入力すると、すべての VM の Used Memory カウンタが取得されます。

**VMware データストア・モニタ** : /.\*.\*/accessible/ というパターンを入力すると、すべてのデータストアでアクセスできるカウンタが取得されます。

**VMware ホスト・モニタ** : /.\*VirtualMachine/.\*/cpu/usage.average\[ \]/ というパターンを入力すると、すべての VM の usage.average[] カウンタが取得されます。

**・ 更新頻度の設定**

モニタ・レベルで動的更新メカニズムの頻度も設定します。これは、SiteScope で、サーバから取得されたカウンタを更新する頻度です。この設定により、モニタ・タイプに適した頻度で更新メカニズムを実行できます。更新頻度は、[モニタの実行設定] で設定したモニタの実行頻度より少なくすることはできません。たとえば、モニタが 10 分おきに実行する場合、動的な更新頻度は 10 分間以上にする必要があります。

**・ カウンタ・パターンをしきい値条件として使用**

しきい値の条件として使用されるカウンタ・パターンを選択することもできます。この方法では、カウンタの更新時にしきい値も自動的に更新されます。たとえば、上記のダイナミック JMX の例では、/java.lang/ClassLoading/.\*/ カウンタ・パターンに基づいてエラーしきい値を設定できます。

しきい値リストには、カウンタ・パターン・テーブルで定義したカウンタ・パターン（検出された最終的なカウンタではありません）が常に含まれます。このリストの値は、カウンタ・パターン・テーブルに変更が加えられると更新されます。

**・ 更新メカニズム**

更新するたびに、サーバに接続し、次のように正規表現で指定したパターンに一致する各カウンタの状態を自動的に更新します。

- ・ 正規表現によって定義されたパターンに合致するカウンタを追加し、各カウンタの状態を更新します。
- ・ [更新後に存在しなくなったカウンタを表示し続ける] オプションがクリアされると、存在しないカウンタを削除します（エラーが不必要にログに記録されることを回避します）。このオプションが選択されていると（標準設定）、カウンタは追加のみされ、削除されません。

- ・ カウンタ・パターンを使用してしきい値を定義した場合も、しきい値はパターンに合致するサーバ上で利用可能なカウンタに応じて追加または削除されます。

このように、関連するダイナミック環境コンポーネントでカウンタを用いて自動的にモニタ自体が設定されます。

モニタのパターンに一致するカウンタと、静的カウンタが存在しない場合は、モニタにカウンタが必要なため変更内容は保存されません。

**注:** 正規表現を使用せずに静的カウンタを定義すると、カウンタはサーバ上で利用できなくなってもモニタから削除されません。

### 動的モニタの計算済みメトリクス

計算済みメトリクスは、既存の SiteScope メトリクスで算術関数または論理演算子を実行することによって算出されたメトリクスです。計算済みメトリクスは、**「しきい値の設定」**パネルに表示され、そのメトリクスに基づいてしきい値を設定することができるようになります。たとえば、モニタ・インスタンスにの2つ以上の既存メトリクスの平均を計算して、計算済みメトリクスを作成できます。次にその平均が特定の数値を超えた場合に警告をトリガするしきい値を設定します。計算済みメトリクスの詳細については、**「計算済みメトリックの作成」** (369ページ)を参照してください。

ダイナミック・モニタに対する計算済みメトリクスの式を作成する場合、静的メトリクス（パターンを使用せず、通常で計算済みメトリクスを使用可能）と、ダイナミック・モニタの設定済みパターンの一部となる正規表現を使用できます。

たとえば、ダイナミック・ディスク・スペース・モニタでは、サーバ上で現在使用中のディスク容量を追跡します。ダイナミック・モニタリングを設定すると、ディスクがサーバに追加されたりサーバから削除されたときにメトリクスとしきい値が自動的に更新されます。そのため、一度モニタを設定すれば、あとは何もしなくてもディスクとファイル・システムの変更が検出されます。

平均や合計などの一般的な関数に基づきダイナミック・モニタの計算済みメトリクスを設定できます。

#### 例:

すべてのディスクの合計空き容量を計算するには、次のように **./\*/MB free/** から作成されたすべてのメトリクスの合計となる計算済みメトリクスの式を作成します。

```
SUM(<<./*/MB free/>>)
```

**注:** 関数の一部ではない計算済みメトリクス（つまり、1つの結果のみを返す計算済みメトリクス）につき1つの正規表現のみを使用できます。

# 第29章: XML ドキュメントの監視

SiteScope の内容の照合は、ネットワーク化された情報システムと内容の監視において重要な機能です。内容の照合機能を持つ SiteScope モニタでは、基本的な内容の照合は Perl 正規表現を使用して実行できます。

SiteScope には、XML ドキュメントを横断してドキュメント内容を照合する機能も含まれています。たとえば、URL モニタと Web サービス・モニタを使用して XML 内容照合文字列を組み込み、XML 要素名、XML 要素の属性、要素の内容を照合することができます。この機能を使用して、XML ベースの Web ページ、SOAP または XML-RPC ドキュメント、さらに WAP 対応デバイスにサービスを提供する WML ページまでチェックできます。

## 学習事項

### XML ドキュメントの内容の照合

XML 内容照合文字列の構文には、XML ドキュメントの階層構造が反映されます。「xml」で始まる内容照合文字列は、XML ドキュメント内の要素名として認識されます。要素名は、ルート要素との関係の順にピリオドで区切られて追加されます。たとえば、weather.xml というドキュメントでは、ルート要素は <weather> です。この要素には、<area>、<skies>、<wind>、<forecast> などの名前を持つ子要素があります。これらの XML 要素の内容またはその属性にアクセスするには、xml.weather.area のような構文を使用します。

特定の内容または値が存在することをチェックするには、テストする内容を持つ要素名の後に等号記号を追加し、続いて内容の値を追加します。ドキュメント内に 1 つの要素名の複数インスタンスが存在する場合、その要素の特定のインスタンスをチェックするには、ドキュメント内の要素の順序を示す数値を角括弧で囲んで追加します（例については、次の表を参照してください）。また、複数の要素または値をテストするには、個々の検索文字列をカンマで区切ります。次の表では、XML ドキュメント内の内容の照合に使用する構文の例を示します。

内容の照合の例	詳細
xml.weather.temperature	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに <temperature> 要素が <b>1 つ以上</b> 含まれる場合、成功します。<temperature> 要素の内容がモニタから返されます。<weather> ノード内で <temperature> 要素が検出されない場合、エラーが返されます。
xml.weather.temperature=20	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに、値が 20 と等しい <temperature> 要素が <b>1 つ以上</b> 含まれる場合、成功します。一致が検出された場合、モニタから <temperature> 要素の内容は返

内容の照合の例	詳細
	<b>されません。</b> <weather> ノード内で <temperature> 要素が検出されない場合、または値 20 が含まれる <temperature> 要素がない場合、エラーが返されます。
xml.weather.forecast. [confidence]	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに、confidence という名前の属性を持つ <forecast> 要素が含まれる場合、成功します。一致が検出された場合、モニタから confidence 属性の値が返されます。<weather> ノード内で <forecast> 要素が検出されない場合、または confidence 属性が検出されない場合、エラーが返されます。
xml.weather.forecast[3]. [confidence]=50	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに3つ以上の <forecast> 要素があり、3 番目の <forecast> 要素に値が 50 の confidence 属性がある場合、成功します。<weather> ノード内にある <forecast> 要素が3 個未満の場合、または confidence 属性の値が 50 以外の場合、エラーが返されます。
xml.weather.temperature=20, xml.weather.skies=rain	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに、内容が 20 と等しい <temperature> 要素が <b>1 つ以上</b> あり、 <b>かつ</b> 、いずれかの <weather> ノードに内容が rain と等しい <skies> 要素が <b>1 つ以上</b> 含まれる場合、成功します。いずれかの照合が失敗した場合、エラーが返されます。
xml.wml.card.p.table.tr.td. anchor=Home Page	WML ドキュメントの指定されたパスにある <anchor> 要素の内容をチェックします。テーブル・セルが含まれるいずれかの <card> ノードに内容が "Home Page" と等しい <anchor> 要素が <b>1 つ以上</b> ある場合、成功します。

## モニタ設定での XML 内容照合値

URL モニタのようなモニタには、SiteScope モニタのデータ・ログに記録される内容照合値があり、モニタのエラー状態や警告状態のしきい値設定にも使用できます。XML 名の値はモニタの内容照合値として保存されます。

たとえば、内容照合表現が xml.weather.temperature で、ドキュメントがファイル weather.xml の内容だった場合、内容照合値は 46 になります。

次に、モニタの [詳細オプション] セクションでエラー状態、警告状態、正常状態のしきい値を設定すると、特定のしきい値を内容の照合から返された値と比較できます。

たとえば、気温の値を監視していて、気温が 72 度を下回ったら警告を受け取る場合、モニタのステータスしきい値を次のように設定できます。

エラー条件	内容の照合 < < 72
警告条件	内容の照合 = 72
良好条件	内容の照合 > > 72

このように設定すると、モニタは温度要素の内容をチェックして、エラーおよび警告しきい値と比較します。前述の例では、温度の値が 46 度で 72 度を下回っているため、モニタのステータスはエラーになります。

## 第5部: 統合モニタ

統合モニタは、サードパーティ製のドメイン・マネージャまたはアプリケーション（通常、Enterprise Management Systems（EMS））のデータをキャプチャして BSM に転送するために使用されます。これらのモニタ・タイプには、追加のライセンスが必要です。また、ほかの HP 製品の一部としてのみ使用できます。

本項の内容：

- ・ 統合モニタの概要。統合モニタのカテゴリ、統合モニタのリスト、モニタで収集されたデータを BSM で認識できる形式にマップするためのフィールド・マッピング・スクリプト、イベント・ハンドラの構造、トポロジを BSM にレポートするためのトポロジ・スクリプト、統合モニタをデプロイし既存の統合モニタを SiteScope から BSM Connector に移行するための手順が含まれています。詳細については、「[統合モニタの概要](#)」(388ページ)を参照してください。
- ・ 時間ベースのメトリック・データを収集する汎用統合モニタの設定方法。詳細については、「[メトリック・データを収集する統合モニタの設定](#)」(410ページ)を参照してください。
- ・ 共通イベントまたはレガシー・イベント・ベースのデータを収集する汎用統合モニタの設定方法。共通イベント・データは、サードパーティ製のドメイン・マネージャまたはアプリケーションから収集されたイベントを BSM 9.x に統合するために使用されます。レガシー・イベントは、BAC 8.x 以前の特定のイベントに関するデータを収集するために使用されます（後方互換用）。詳細については、「[イベント・データを収集する統合モニタの設定](#)」(447ページ)を参照してください。
- ・ チケット発行システムからインシデントおよびイベントを収集する汎用統合モニタの設定方法。チケット・データ・タイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、BSM に統合され、サービス状況およびサービス・レベル管理で表示できます。詳細については、「[チケット発行データを収集する統合モニタの設定](#)」(466ページ)を参照してください。
- ・ データのレポートなしで、SiteScope テクノロジ統合モニタで検出されたトポロジをレポートする方法。詳細については、「[データなしのトポロジのレポート](#)」(474ページ)を参照してください。
- ・ Network Node Manager（NNM）から BSM へのイベント・データの転送方法。詳細については、「[Network Node Manager の統合](#)」(476ページ)を参照してください。

**注:** 統合モニタは、次のような場合に作成を行うときに使用できます。

- ・ SiteScope 11.13 以前を使用している場合。
- ・ SiteScope 11.2x が BSM 9.13 以前に接続されている場合。
- ・ SiteScope 11.2x が BSM 9.2x に接続されると、HP Service Manager および NetScout イベント・モニタのみが使用できます。残りの EMS 機能はより多くの機能とサードパーティ・データの適用範囲を提供する無料の HP アプリケーションである BSM Connector に移動されました。HP はすべてのサードパーティ・データの統合で BSM Connector を使用することを推奨します。BSM Connector は BSM 9.20 以降のみで動作します。BSM Connector の詳細については、BSM ヘルプにある『BSM アプリケーション管理ガイド』を参照してください。



# 第30章: 統合モニタの概要

統合モニタは、SiteScope データ・コレクタによって実行され、サードパーティ製のドメイン・マネージャまたはアプリケーション（通常、Enterprise Management Systems（EMS））のデータをキャプチャして BSM に転送するために使用されます。データを収集して BSM にデータを転送する場合、次の 2 つのレベルの設定があります。

- **必須** : 監視対象システムを適切にマッピングして必要なデータ・サンプルを収集するようにモニタを設定する必要があります。イベント、測定値、チケットの形式は関係ありません。[フィールドのマッピング] 設定でデータ・タイプを選択し、対応するスクリプトをテキスト・エディタで編集して、監視対象システムのフィールドのマッピングを行います。
- **任意** : データをトポロジにマッピングして、BSM の適切な CI 階層に転送することもできます。これにより、モニタから BSM 内の必要な CI に状態を正確にレポートでき、製品の別のアプリケーションで使用できるようになります。トポロジ設定は、作成するトポロジのタイプに応じてロードされるトポロジ・スクリプトを使用して行います。

**注:** SiteScope テクノロジ統合モニタによって検出されたトポロジのみを、データのレポートなしで、SiteScope によって報告できます。詳細については、[「データなしのトポロジのレポート」 \(474ページ\)](#)を参照してください。

## 学習事項

本項の内容

- [「統合モニタのカテゴリ」 \(388ページ\)](#)
- [「フィールド・マッピングのデータ・タイプ」 \(389ページ\)](#)

### 統合モニタのカテゴリ

統合モニタは、2 つのカテゴリに分類できます。アプリケーション固有のモニタと汎用統合モニタです。

カテゴリ	詳細
アプリケーション固有のモニタ	これらの統合モニタは、特定の EMS アプリケーションで使用するよう設計されています。これらのモニタは、必須フィールドのマッピングおよびトポロジ設定を使用して事前に定義されています。該当するモニタを次に示します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• 「HP OM イベント・モニタ」</li><li>• 「HP Service Manager モニタ」</li><li>• 「NetScout イベント・モニタ」</li></ul>



カテゴリ	詳細
	<p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope が BSM バージョン 9.00 以降に接続されている場合（SiteScope 11.20 にアップグレードされた以前のバージョンの SiteScope でモニタが作成されている場合は除きます），HP OM イベント・モニタは使用できません。イベント管理ファウンデーション・ライセンスを所有していて、Operations Manager と BSM の間で設定している場合は、OM イベントを HPOM サーバから BSM 9.00 に転送できます。</li> <li>NetScout イベント・モニタでは、トポロジ設定は使用できません。</li> </ul>
汎用統合モニタ	<p>データベース、ログ・ファイル、SNMPトラップ、Web サービス・インタフェースからデータを抽出できる大部分の EMS アプリケーションで使用するよう設計されたテクノロジー統合モニタ。これらのモニタのフィールドのマッピングおよびトポロジ設定は、適切なスクリプトをロードし、モニタの作成時に別のテキスト・エディタで編集して設定する必要があります。該当するモニタを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「テクノロジー・データベース統合モニタ」</li> <li>「テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ」</li> <li>「テクノロジー SNMP トラップ統合モニタ」</li> <li>「テクノロジー Web サービス統合モニタ」</li> </ul> <p><b>注：</b> 汎用統合モニタは、SiteScope がバージョン 9.20 より前の BSM に接続されている場合に、サードパーティ統合との後方互換のために使用されます。SiteScope が BSM 9.20 以降に接続されている場合、新しいすべてのサードパーティ・データ統合には BSM Connector をお勧めします。BSM コネクタは、テクノロジー統合モニタに比べ、収集可能なサードパーティ・データの種類の点において、より優れた機能性と包括性を提供します。BSM Connector の詳細については、BSM ヘルプにある『BSM アプリケーション管理ガイド』を参照してください。</p>

統合モニタの詳細については、SiteScope ヘルプにある『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「統合モニタ」の項を参照してください。

## フィールド・マッピングのデータ・タイプ

統合モニタでは、フィールドのマッピング・スクリプトを使用して、収集するデータを BSM で認識できる形式に適切にマッピングします。特定の環境のニーズに合ったカスタム設定を作成するためのベースとして、SiteScope に同梱されているフィールドのマッピング・スクリプトを使用します。統合モニタを設定する場合、データ・タイプを選択して必要なスクリプトをロードし、BSM に転送するデータが収集されるようにこのスクリプトを編集します。

- 汎用統合モニタの場合、必要に応じてマッピングを設定およびカスタマイズできます。フィールドのマッピングのタイプを選択する場合、付属のスクリプト・エディタを使用するか、スクリプ

トを任意のテキスト・エディタにコピーして変更を行い、フィールドのマッピングのテキスト・ボックスに再度コピーできます。

- アプリケーション固有のモニタの場合、マッピングはモニタの設定時に編集できないため、設定済みの統合マッピングを使用することをお勧めします。

次のサンプル・スクリプトのタイプを選択できます（汎用統合モニタを設定する場合）。

データ タイプ	詳細
メトリックス	<p>時間ベースのデータを収集する場合に使用します。測定値データ・タイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、一般的な SiteScope データとして BSM に統合され、SiteScope データを表示できるすべてのコンテキスト（サービス状況、サービス・レベル管理、SAM、ユーザ・レポートなど）で表示できます。詳細については、「<a href="#">メトリック・データを収集する統合モニタの設定</a>」(410ページ)を参照してください。</p> <p>フィールド・マッピング・スクリプトのカスタマイズの詳細については、「<a href="#">測定値サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング</a>」(410ページ)を参照してください。</p>
イベント	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>共通イベント</b>: サードパーティ製のドメイン・マネージャまたはアプリケーションから収集されたイベントを BSM 9.x に統合するために使用されます。レガシー EMS イベントとは異なり、共通イベント統合では、Operations Manager イベント・サブシステムおよびサービス状況コンソールのイベントを管理できます。さらに、共通イベント・チャネルは、データを報告することなく BSM にトポロジを報告するオプションを提供します。詳細については、「<a href="#">共通イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法</a>」(458ページ)を参照してください。</li> <li>• <b>レガシー イベント</b>: BAC 8.x 以前の特定のイベントに関するデータを収集するために使用されます（後方互換用）。イベント・データ・タイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、UDX フレームワークを使用して BSM に統合され、UDX データを表示できるコンテキスト（イベント・ログ、サービス状況、トレンド・レポート）で表示できます。BSM API を使用してデータにアクセスすることもできます。詳細については、「<a href="#">レガシー・イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法</a>」(462ページ)を参照してください。</li> </ul> <p>フィールド・マッピング・スクリプトのカスタマイズの詳細については、「<a href="#">イベント・サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング</a>」(447ページ)を参照してください。</p> <p><b>注:</b> EMS アプリケーションによって送信されるイベントは、イベントのサンプルです。それらのイベントは、BSM の操作管理 イベントと同じではありません。</p>

データ タイプ	詳細
チケット	<p>チケット・システムからインシデントおよびイベントを収集する場合に使用します。チケット・データ・タイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、BSM に統合され、サービス状況およびサービス・レベル管理で表示できます。詳細については、「<a href="#">チケット発行データを収集する統合モニタの設定方法</a>」(470ページ)を参照してください。</p> <p>フィールド・マッピング・スクリプトのカスタマイズの詳細については、「<a href="#">チケット発行サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング</a>」(466ページ)を参照してください。</p>

## トラブルシューティング / 制限事項

本項では、SiteScope 統合モニタを使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- 「[統合モニタのログ](#)」(391ページ)
- 「[その他のログおよびトラブルシューティングの問題](#)」(392ページ)
- 「[トラブルシューティングの追加情報](#)」(392ページ)

### 統合モニタのログ

統合モニタのアクティビティ・ログの次の場所に保存されます。<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\

RunMonitor.log と <SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\bac\_integration\bac\_integration.log

ログ・ファイルにレポートする情報のレベルとタイプを変更するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\conf\core\

Tools\log4j\PlainJava\log4j.properties ファイルのログ・ファイル設定を変更します。ログ記録メカニズムを次のように設定できます。

- ログに記録された情報を、標準設定の詳細度よりも低いまたは高い状態でレポートする。
- 統合モニタから BSM に送信されるすべてのサンプルをログに記録する。
- 外部 EMS システムから受信したすべてのイベントをログに記録する。

**ログの設定を変更するには、次の手順を実行します。**

1. **log4j.properties** ファイルをテキスト・エディタで開きます。
2. 統合モニタから BSM に送信されるサンプルをログに記録するように指定するには、次の手順を実行します。
  - a. ファイルの次の行を特定します。

```
log4j.category.EmsSamplePrinter=${loglevel}, integration.appender
log4j.additivity.EmsSamplePrinter=false
```

- b. **log4j.category.EmsSamplePrinter** の引数を **\${loglevel}** から **DEBUG** に次のように変更します。  

```
log4j.category.EmsSamplePrinter=DEBUG, integration.appender
```
- c. ファイルを保存します。変更が有効になるまで数秒かかる場合があります。  
この結果は **bac\_integration.log** ファイルに記録されます。
3. 外部 EMS システムから受信したすべてのイベントをログに記録するように指定するには、次の手順を実行します。
  - a. ファイルの次の行を特定します。  

```
log4j.category.EmsEventPrinter=${loglevel}, monitors.appender  
log4j.additivity.EmsEventPrinter=false
```
  - b. 次のように、**log4j.category.EmsEventPrinter** の引数を **\${loglevel}** から **DEBUG** に変更します。  

```
log4j.category.EmsEventPrinter=DEBUG, monitors.appender
```
  - c. ファイルを保存します。変更が有効になるまで数秒かかる場合があります。結果のログは、**RunMonitor.log** ファイルに保存されます。

#### その他のログおよびトラブルシューティングの問題

- **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\error.log** および **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\bac\_integration\bac\_integration.log** でエラーを探します。
- サンプルが作成され、SiteScope から送信されているが、BSMサービス状況、イベント・ログ、または SiteScope レポートに表示されない場合、**<BSM ルート・ディレクトリ>\log\mercury\_wde\** ディレクトリにある **wde.logl** および **loader.logl** ファイルで **ERROR** または **WARN** の文字列を検索して、フィールドや値の欠落が原因でサンプルが削除されていないか確認します。
- **<BSM のルート・ディレクトリ>\conf\core\Tools\log4j\EJB\ble.properties** ファイルでサービス状況のログ・レベルを上げて、サービス状況 でサンプルが受信中であることを確認します。次のパラメータを特定し、ログ・レベルの状態を **DEBUG** に変更します。

```
log4j.category.Trinity.BLE_SAMPLES=DEBUG, trinity.samples.appender
```

結果のログは、**<BSM ルート・ディレクトリ>\log\EJBContainer\TrinitySamples.log** に保存されます。

**ヒント:** 問題の原因を特定したら、システムが過負荷にならないようにログ・レベルを標準設定にすることをお勧めします。

#### トラブルシューティングの追加情報

トラブルシューティングの追加情報は、[HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報](https://softwaresupport.hp.com/group/software-support/search-result)

(<https://softwaresupport.hp.com/group/software-support/search-result>) (技術情報にログオンするには HP Passport ID が必要) およびマニュアルの次の各項にあります。

- テクノロジ・データベース統合モニタのトラブルシューティングについては、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「テクノロジ・データベース統合モニタ」を参照してください。

- ・ テクノロジ・ログ・ファイル・モニタのトラブルシューティングについては、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「テクノロジ・ログ・ファイル統合モニタ」を参照してください。
- ・ テクノロジ SNMP トラップ・モニタのトラブルシューティングについては、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「テクノロジ SNMP トラップ統合モニタ」を参照してください。
- ・ Web サービス統合モニタのトラブルシューティングについては、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「テクノロジ Web サービス統合モニタ」を参照してください。

## テクノロジ統合モニタのトポロジ設定

BSM にトポロジをレポートするには、統合モニタ対応の追加設定不要のトポロジ・スクリプトを選択できます。これは、統合モニタの作成時に「トポロジ設定」パネルで行います。

Jython 言語は、トポロジ・スクリプトの開発用です。Jython の使用方法の詳細については、<http://www.jython.org> および <http://www.python.org> を参照してください。

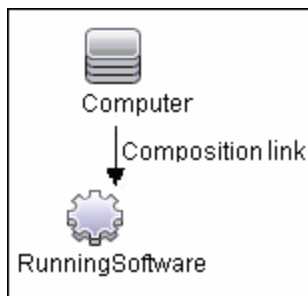
### トポロジの選択

汎用統合モニタで作業するときは、次のトポロジ設定（選択するフィールド・マッピング・タイプに応じて使用できるトポロジ・スクリプト）から選択できます。

- ・ **コンピュータ**: コンピュータ CI でトポロジを作成します。[共通イベント] データ・タイプの専用です。



- ・ **コンピュータ - 実行中のソフトウェア**: コンピュータ CI とそれに接続する実行中のソフトウェア CI を持つトポロジを、Composition 関係によって作成します。[共通イベント] データ・タイプの専用です。サードパーティ・システムからイベント・データを取得するコンピュータ - 実行中のソフトウェア統合に対応して作成されるトポロジを、次の図に示します。



- ・ **カスタム**: 事前定義のトポロジ・スクリプトではなく個々の CI に転送するデータを取得する場合は、トポロジを独自に作成します。すべてのフィールド・マッピング・タイプに使用できます。  
[カスタム] は、Jython 言語を熟知している場合にだけ選択します。これは、トポロジ・スクリ

プトがロードされず、自分で Jython 言語でトポロジ・スクリプトを作成する必要があるためです。事前定義のスクリプトから始めることをお勧めします。

**ヒント:** トポロジ設定を選択したときは、データをレポートしないで、SiteScope テクノロジ統合モニタによって検出されたトポロジだけをレポートさせることができます。タスクの詳細については、「[データなしのトポロジのレポート](#)」(474ページ)を参照してください。

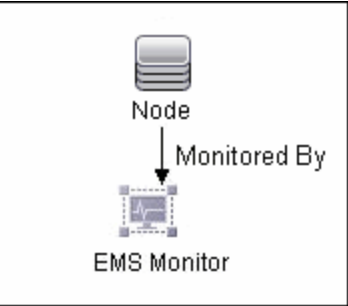
レガシー・トポロジ・スクリプト

次のレガシー・トポロジ・スクリプトがあります。

- ・ [「ノード・トポロジ」](#) (394ページ)
- ・ [「ノード-実行中のソフトウェア・トポロジ」](#) (394ページ)
- ・ [「チケット」](#) (395ページ)

ノード・トポロジ

自分に接続する EMS モニタ CI を持つノード CI を、Monitored By 関係によって作成します。EMS モニタ CI は、ステータスをノード CI に伝搬します。



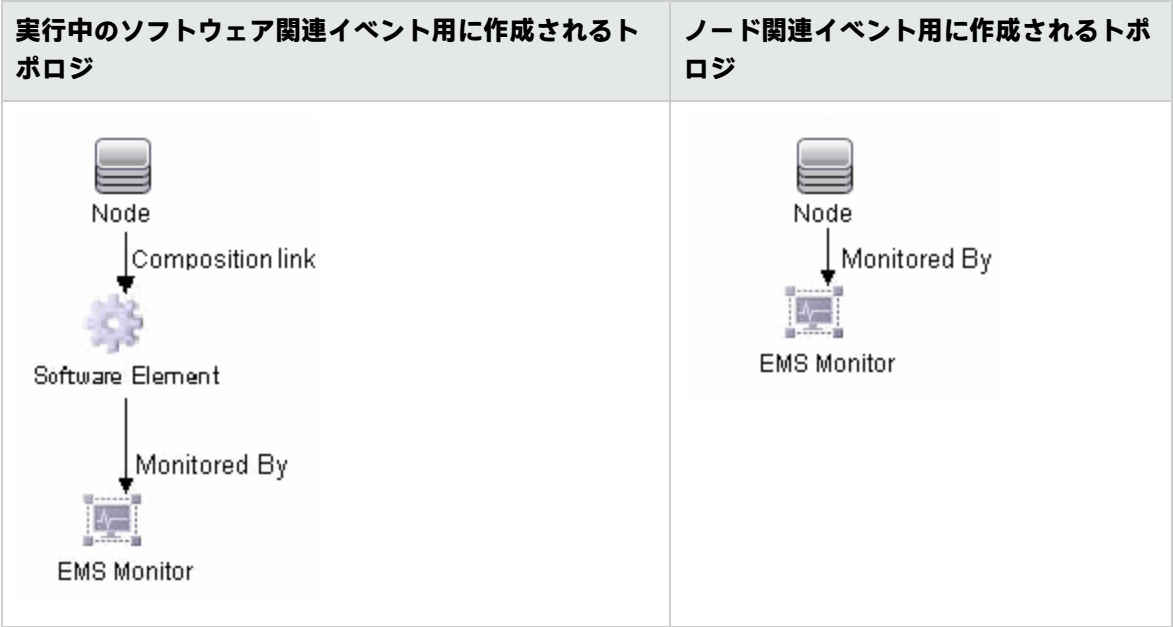
ノード - 実行中のソフトウェア・トポロジ

ノード CI を持つトポロジと、それに接続する実行中のソフトウェア CI を、Composition 関係によって、および、ノード CI と実行中のソフトウェア CI のどちらかに接続可能な EMS モニタ CI を、Monitored By 関係によって作成します。

この統合タイプでは、サードパーティ・システムから取得できるデータには、次の 2 タイプがあります :実行中のソフトウェアに関連するイベントおよびノードに関連するイベント。

次の表に、それぞれのイベント・タイプ用に作成されたトポロジを示します。

実行中のソフトウェア関連イベント用に作成されるトポロジ	ノード関連イベント用に作成されるトポロジ



どのイベントが実行中のソフトウェアに関連付けられ、どれがノードに関連付けられるかを、次のようにトポロジ・スクリプトを編集して設定できます。

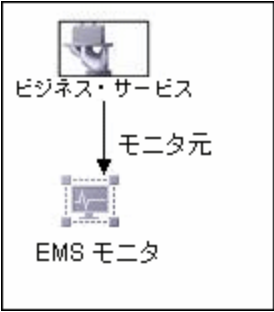
トポロジ・スクリプトの次の文字列を検索します。

**if (subject != "system"):**

変数 **subject** は、イベント中の「subject」フィールドを表します。値 **system** は、ノードに関連するとみなされ、実行中ソフトウェア CI に転送されないデータを表す値の一例です。

**チケット**

自分に接続する EMS モニタを持つ Business Service CI を、Monitored By 関係によって作成します。EMS モニタ CI から Business Service CI に状態が伝搬されます。【チケット】データ・タイプの専用です。



レガシーの統合タイプの詳細については、[HP ソフトウェア統合サイト](#)の【統合】タブの BSM セクションにある「Understanding Node, Tickets, or Node - Running Software Integration Types」の項を参照してください。



## トポロジ・スクリプトの編集

トポロジを設定するには、統合モニタの作成時に [トポロジ設定] パネルに表示されるトポロジ・スクリプトを編集できます。添付のスクリプト・エディタを使用できますし、あるいは、その他のスクリプト・エディタを使用できます。

必要な情報であらかじめ設定されている事前定義トポロジの1つを選択できます。次に、独自のトポロジを作成する場合に使用するスクリプトの編集ガイドラインを示します。

## スクリプト編集に関する一般的なガイドライン

- Jython 言語は、スペースやタブの影響を受けます。Jython 言語の詳細については、<http://wiki.python.org/moin/HowToEditPythonCode> を参照してください。
- 事前定義トポロジ・スクリプトの import セクションはそのまま残し、そこに追加するだけにしてください。
- スクリプトの本文は必須で、次のように構成されています。

```
def DiscoveryMain(Framework)
```

この本文の機能には、Object State Holder Vector (OSHV) の結果を作成する役割があります。これには、CI や CI 関係データ、受信サンプルを CI にマップする方法が保持されています。

- サンプルの到着時に組み込みの「ログ機能」を使用してトポロジ・スクリプトをデバッグします。これを行うには、ログ・ファイルにレポートする情報のレベルとタイプを変更します。
  - a. たとえば、トポロジ・スクリプトの `system_lib` 文の前に `logger import` 文を追加します。

```
import logger
...
import system_lib
```

- b. **<SiteScopeのルート・ディレクトリ>/conf/core/Tools/log4j/PlainJava/bac\_integration.properties** にあるログ・ファイルの設定を変更します。

**bac\_integration.properties** ファイルをテキスト・エディタで開き、ファイルにある次の行を特定します。

```
# Jython logger
log4j.category.PATTERNS_DEBUG=${loglevel}, discovery.appender
```

次のように、**log4j.category.PATTERNS\_DEBUG** から **\${loglevel}** に **DEBUG** 変更します。

```
log4j.category.PATTERNS_DEBUG=DEBUG, discovery.appender
```

- c. ファイルを保存します。変更が有効になるまで数秒かかる場合があります。  
デバッグ・データは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>/log/discovery.log** ファイルに書き込まれます。



## 統合モニタに個別に関連するガイドライン

- フィールド・マッピングを使用するとき、フィールド・マッピング・フィールドをトポロジ・スクリプトの入力として使用できます。たとえば、共通イベント・マッピングを使用するときは、次の方法で [Category] フィールドの値にアクセスできます。

```
category = Framework.getDestinationAttribute("Category");
```

さらに、group0、group1 など、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタからの「モニタ変数」の値、またはテクノロジー・データベース統合モニタ内のデータベース列の名前、またはその他の統合モニタ内のその他の変数にアクセスできます。たとえば、次の方法で、変数 group1 の値にアクセスできます。

```
group1 = Framework.getDestinationAttribute("group1")
```

- スクリプト内の EMS モニタ CI にレポートする場合、各 CI に複数の EMS モニタ CI をリーフ・ノードとして持たせないでください。
- レガシー・イベント・スクリプトの場合、次のをスクリプトの最終行に表示させる必要があります。

```
Framework.setUserObject("result_object",monitoredCiType)  
return OSHVResult
```

変数 monitoredCiType は、イベントを受信する EMS モニタ CI によって監視される CI のタイプです。

取得する 1 つのイベントに対して複数の EMS モニタ CI をスクリプトで作成した場合、どの CI がイベントに属し、状態を渡すのかを決定する必要があります。これを行うには、適切な値を monitoredCiType に割り当てます。たとえば、実行中のソフトウェア CI 用の EMS モニタ CI と、ノード CI 用の EMS モニタ CI をスクリプトで作成した場合、イベントからノード CI に状態が渡されるには、変数 monitoredCiType の値を “node” にしておきます。

## 追加マニュアル

トポロジ・スクリプトの一般的な内容については、BSM ヘルプの RTSM Developer Reference Guide の「Create Jython Code」や「Developing Jython Adapters」を参照してください。

トポロジ・スクリプトで利用できる Java クラスについては、BSM ヘルプにある RTSM Developer Reference Guide の「HP Data Flow Management API Reference」を参照してください。

## 注意事項および制限事項

- SiteScope 10.x の EMS トポロジのスクリプトは、SiteScope が BSM 9.00 に接続されている場合でも SiteScope では以前のコンテンツ言語の形式で表示されます。たとえば、ホスト CI タイプはノードではなくスクリプト内に表示されます。
- SiteScope が 9.00 より前のバージョンの BSM に接続されている場合、[コンピュータ]、[コンピュータ - 実行中のソフトウェア]、[ノード]、および [ノード - 実行中のソフトウェア] の

代わりに、[ホスト]、[ホスト - ソフトウェア要素] トポロジ・スクリプト・テンプレートがモニタのトポロジ・スクリプト・リストに表示されます。

## フィールド・マッピングの構造

フィールド・マッピングには、データが統合モニタに到着したときの処理方法の指示が含まれています。フィールド・マッピングを構成する指示は、イベント・ハンドラにグループ化されます。イベント・ハンドラは、特定のデータに関連する指示が含まれる独立したセクションです。各イベント・ハンドラには、**一致条件**があります。SiteScope は、この条件に基づいて到着イベントに特定のイベント・ハンドラを使用するかどうかを決定できます。

イベントまたはメトリック・データが統合モニタに到着すると、フィールドのマッピングの各イベント・ハンドラの**一致条件**が、表示されている順序で繰り返しテストされます。一致するハンドラが検出された場合、モニタはそのハンドラの指示を使用してイベントを処理し、ハンドラに定義されたアクション（BSM への転送や破棄など）を実行します。最初に一致すると、それ以降のセクションはチェックされません。一致がない場合、イベントは破棄されます。

イベント・ハンドラ以外にも、フィールドのマッピングには統合モニタ・エンジン全体に影響を与える特別なエントリが含まれています。これらの値は [\$DEFAULT\_PARAMETERS\$] セクションにグループ化されます。このセクションでは、すべてのハンドラで共通するタグの標準設定値が定義されます。フィールドのマッピングのこのセクションで任意のタグを設定できます。これは、一致するイベント・ハンドラで上書きされないかぎり、レポートされる値の作成に使用されます。受信イベントごとに、一致するイベント・ハンドラの前にこのイベント・ハンドラが必ず実行されます。

イベント・ハンドラの構造の詳細については、[「イベント・ハンドラの構造と構文」 \(399ページ\)](#)を参照してください。

## CI 解決のヒントの形式

CI 解決のヒントには次の形式を使用できます。

形式	詳細	例
ノードおよび子孫 CI タイプのコンテキストに存在しないスタンドアロン CI	たとえば、ビジネス・アプリケーション、ビジネス・サービス、または Siebel Enterprise。CI 解決のヒントは CI 名である必要があります。	myBusinessService というビジネス・サービス CI の場合、CI 解決のヒントは次のようになります。  MeasurementCIHint(1) ="myBusinessService".  注：CI 名は、RTSM 内で一意である必要があります。
ノード・トポロ	CI 解決のヒントは完全修飾ドメイン名または	IP アドレス 12.34.56.78 の

形式	詳細	例
ジョよび子孫 CI タイプ	ノードの IP アドレスである必要があります。	ノードを報告する場合、CI 解決のヒントは次のよう になります。  "12.34.56.78" または  "<MachineName>"
ノードおよび子 孫 CI タイプの コンテキストに存 在する CI	実行中のソフトウェア、ノード要素、ネット ワーク・エンティティから継承する CI タイプに 属する CI など。ノードまたは子孫 CI および @@ で区切られているノードまたは子孫 CI に接続さ れている CI の両方のヒントで次のように指定す る必要があります。	ノードまたは子孫 CI に接続 されている Oracle データ ベース CI の場合、CI 解決の ヒントの形式は次のよう になります。  "<oraclesid>:<product name>@@<fqdnhostname>"  。

## イベント・ハンドラの構造と構文

次に、イベント・ハンドラの構造を示します。

[name]一致条件  
アクション・ディレクティブ  
タグ

**一致条件**、**アクション・ディレクティブ**、および追加ディレクティブの名前は、ドル記号 (\$) で開始します。タグの名前はドル記号で開始されません。

フィールドのマッピングではコメントを使用できます。コメントは、#, !, または ; のいずれかの文字で開始します。これらの文字から行末までがコメントになります。

**注:** フィールドのマッピングを使った作業では、スクリプトで定義した必須フィールドおよび任意フィールドのみを使用します。詳細については、次項の表を参照してください。

### 本項の内容

- ・ [「一致条件」 \(400ページ\)](#)
- ・ [「利用可能なデータ処理演算」 \(400ページ\)](#)
- ・ [「条件式」 \(405ページ\)](#)
- ・ [「アクション・ディレクティブ」 \(405ページ\)](#)
- ・ [「\[name\]一致条件アクション・ディレクティブタグ」 \(399ページ\)](#)
- ・ [「統合モニタのフィールドのマッピングの例」 \(406ページ\)](#)

一致条件

一致条件は有効なブール式である必要があります。式には、次の表で定義されている演算子と関数の呼び出しが含まれています。式では、ドル記号 (\$) 表記を使用して、処理されるデータのコンテンツにアクセスできます。たとえば、受信データが SNMP トラップの場合、そのエンタープライズ OID に \$oid としてアクセスできます。モニタ固有の名前については、関連するモニタ・タイプのドキュメントを参照してください。

- ・「テクノロジー・データベース統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- ・「テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- ・「テクノロジー SNMP トラップ統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- ・「テクノロジー Web サービス統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

**注:** 一致条件の式は、4,000 文字に制限されています。

一致条件の形式は次のようになります。

\$MATCH=Boolean expression

このブール式は、「[利用可能なデータ処理演算](#)」(400ページ)に示す式の 1 つを組み合わせたものです。式の値 (**true** または **false**) によって、イベント・ハンドラがイベントの処理に使用されるかどうかが決まります。

利用可能なデータ処理演算

フィールド・マッピングで使用される言語は、簡易バージョンの Java プログラミング言語であり、次の演算のみ可能です。

式と関数	詳細
+	文字列の連結。  例："trap type is " + \$trap
<, <=, >, >=, ==, !=	式が数値として正しいかどうかチェックします。数値とともに使用できます。  例：\$MATCH=\$numberOfLines == 100
&&,	前述のブール式を結合するために使用されます。  例：\$MATCH=\$status.equals("ERROR")    (\$numberOfLines == 100)
true, false	定数のブール値。

式と関数	詳細
	<p><b>例 :</b> \$MATCH=true</p>
boolean contains (String str)	<p>この文字列に、指定された文字の値のシーケンスが含まれている場合にのみ true を返します。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#contains(java.lang.CharSequence)">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#contains(java.lang.CharSequence)</a> を参照してください。</p> <p><b>例 :</b> MonitorName=\$group0.contains("monitor")?\$group0:\$group0 + "monitor"</p>
boolean endsWith (String suffix)	<p>この文字列が、指定されたサフィックスで終了しているかテストします。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#endsWith(java.lang.String)">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#endsWith(java.lang.String)</a> を参照してください。</p> <p><b>例 :</b> MonitorName=\$group1.endsWith("Operations")?\$group1:\$group1 + "Operations"</p>
boolean equals (String anotherString)	<p>この文字列を別の文字列と比較します。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#equals(java.lang.Object)">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#equals(java.lang.Object)</a> を参照してください。</p> <p><b>例 :</b></p> <p>\$MATCH= "ERROR".equals(\$status)</p> <p>または</p> <p>\$MATCH= \$status.equals("ERROR")</p>
boolean equalsIgnoreCase (String anotherString)	<p>大文字と小文字を区別せずに、2つの文字列を比較します。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#equalsIgnoreCase%28java.lang.String%29">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#equalsIgnoreCase%28java.lang.String%29</a> を参照してください。</p> <p><b>例 :</b></p> <p>\$MATCH= "ERROR".equalsIgnoreCase(\$status)</p> <p>または</p> <p>\$MATCH= \$status.equalsIgnoreCase("ERROR")</p>
boolean exists(String property)	<p>処理されるイベントのプロパティが存在しているかどうか、およびその値が空ではないかどうかチェックされます。</p> <p><b>例 :</b> \$MATCH=exist(\$status)</p>

式と関数	詳細
String getToken (String str, String delimiterRegular Expression,int zeroBasedTokenIndex )	<p>指定された区切り文字（正規表現形式）に従って入力文字列を分割し、指定されたゼロベースのインデックスに従って結果の文字列のいずれかを返します。</p> <p><b>例</b> : getToken(\$var, "/", 1) will produce "y" if \$var equals "x/y/z"</p>
int indexOf (String str)	<p>指定した部分文字列の最初エントリの、この文字列に含まれるインデックスを返します。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#indexOf(int)">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#indexOf(int)</a> を参照してください。</p> <p><b>例</b> : Severity=\$group0.lastIndexOf("Critical")&gt;-1?"Critical" : "Normal"</p>
int indexOf (String str, int fromIndex)	<p>指定した部分文字列の最初エントリの、この文字列に含まれるインデックスを指定した部分から返します。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#indexOf(java.lang.String,%20int)">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#indexOf(java.lang.String,%20int)</a> を参照してください。</p> <p><b>例</b> : Severity=\$group0.indexOf("Critical",3)&gt;-1?"Critical" : "Normal"</p>
boolean isDouble (String number)	<p>入力文字列が倍精度浮動小数点数に変換できるかどうかチェックされます。</p> <p><b>例</b> : \$MATCH=isDouble(\$size)</p>
boolean isEmpty()	<p>空の文字列（length() == 0）がテストされます。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#isEmpty()">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#isEmpty()</a> を参照してください。</p> <p><b>例</b> : Description=\$group1.isEmpty()?\$group0 : \$group1</p>
boolean isInt (String number)	<p>入力文字列が整数に変換できるかどうかチェックされます。</p> <p><b>例</b> : \$MATCH=isInt(\$size)</p>
int lastIndexOf (String str, int fromIndex)	<p>指定した部分文字列の最初エントリの、この文字列に含まれるインデックスを返します。指定したインデックスから後方に検索が行われます。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#lastIndexOf(java.lang.String,%20int)">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#lastIndexOf(java.lang.String,%20int)</a> を参照してください。</p> <p><b>例</b> : Severity=\$group0.lastIndexOf("Critical",2)&gt;-1?"Critical" : "Normal"</p>

式と関数	詳細
int lastIndexOf (String str)	<p>指定した部分文字列の最も右にあるエントリの、この文字列に含まれるインデックスを返します。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#lastIndexOf(java.lang.String)">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#lastIndexOf(java.lang.String)</a> を参照してください。</p> <p>例 : Severity=\$group0.lastIndexOf("Critical")&gt;-1?"Critical" : "Normal"</p>
int length()	<p>この文字列の長さを返します。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#length()">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#length()</a> を参照してください。</p> <p>例 : Description=\$group1.length() &lt;10 ?\$group0+\$group1 :\$group1</p>
boolean matches (String regex)	<p>文字列が、指定された<b>正規表現</b>に一致するかどうか識別されます。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#matches(java.lang.String)">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#matches(java.lang.String)</a> を参照してください。</p> <p>例 : Severity=\$group0.matches("(.*Critical.*)")?"Critical" : "Normal"</p>
double parseDouble (String number)	<p>文字列を数値に変換する場合に使用します。入力文字列は、有効な整数または浮動小数点数である必要があります。</p> <p><b>注</b> : 数値に変換できない文字列に対してこの関数を呼び出すと、エラーが発生して受信データが削除されます。</p> <p>例 : \$MATCH=parseDouble(\$size) &gt; 10</p>
int parseInt (String number)	<p>文字列を数値に変換する場合に使用します。入力文字列は、有効な整数または浮動小数点数である必要があります。</p> <p><b>注</b> : 数値に変換できない文字列に対してこの関数を呼び出すと、エラーが発生して受信データが削除されます。</p> <p>例 : \$MATCH=parseInt(\$size) &gt; 10</p>
String resolveHostIP (String hostName)	<p>DNS 解決を実行し、サーバからその IP アドレスを求めます。</p> <p>DNS 解決が失敗した場合、この関数では unknown host という値が返されます。</p> <p>例 : target_ip=resolveHostIP(\$host)</p>
String resolveHostName (String hostIP)	<p>DNS 解決を実行し、IP アドレスから完全修飾ドメイン名を求めます。</p> <p>DNS 解決が失敗した場合、この関数は元の入力ホスト名を返します。</p>

式と関数	詳細
	<p><b>例 :</b> target_name=resolveHostName(\$host)</p>
boolean startsWith (String prefix)	<p>この文字列が、指定されたプレフィックスで開始しているかテストします。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#startsWith(java.lang.String)">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#startsWith(java.lang.String)</a> を参照してください。</p> <p><b>例 :</b> MonitorName=\$group1.startsWith("Operations")?\$group1:"Operations"+\$group1</p>
boolean startsWith (String prefix, int offset)	<p>指定したインデックスで開始しているこの文字列の部分文字列が、指定したプレフィックスで開始しているかテストします。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#startsWith(java.lang.String,%20int)">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#startsWith(java.lang.String,%20int)</a> を参照してください。</p> <p><b>例 :</b> MonitorName=\$group1.startsWith("Operations",2)?\$group1:"Operations" + \$group1</p>
long str_to_seconds (String dateTime, String format)	<p>2 番目の文字列の形式を使用して、最初の文字列に保持されたタイムスタンプ（秒単位、1970 年 1 月 1 日以降）が計算されます。</p> <p>\$time で指定した yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS 形式の日付が現在の時刻よりも新しい場合は true になります。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/text/SimpleDateFormat.html">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/text/SimpleDateFormat.html</a> を参照してください。</p> <p><b>例 :</b> \$MATCH=str_to_seconds (\$time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS") &gt; time()</p> <p><b>注 :</b> 時間を表すために次の記号が使用されます。</p> <p>年 - `y`, 月 - `M`, 日 - `d`, 時間 - `H`, 分 - `m`, 秒 - `s`</p>
String substring (int beginIndex)	<p>この文字列の部分文字列である新しい文字列を返します。部分文字列は、指定されたインデックスの文字からこの文字列の終わりまでです。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#substring(int)">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#substring(int)</a> を参照してください。</p> <p><b>例 :</b> Title=\$group0.substring(2)</p>
String substring (int beginIndex, int endIndex)	<p>この文字列の部分文字列である新しい文字列を返します。</p> <p>詳細については、<a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#substring(int,%20int)">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#substring(int,%20int)</a> を参照してください。</p>



式と関数	詳細
	例 : Title=\$group0.substring(2,9)
int time()	1970 年 1 月 1 日以降の現在の時刻が秒単位で返されます。 例 : \$MATCH=\$timeStampField > (time()-600) 値 \$timeStampField が 10 分前よりも新しい (秒単位, 1970 年 1 月 1 日以降) 場合は true になります。
String toLowerCase()	標準設定のロケールのルールを使用して, この文字列のすべての文字を小文字に変換します。 例 : Title=\$group0.toLowerCase()
String toUpperCase()	標準設定のロケールのルールを使用して, この文字列のすべての文字を大文字に変換します。 詳細については, <a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#toUpperCase()">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#toUpperCase()</a> を参照してください。 例 : Title=\$group0.toUpperCase()
String trim()	先頭と末尾の空白を取り除いた文字列のコピーを返します。 詳細については, <a href="http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#trim()">http://download.oracle.com/javase/7/docs/api/java/lang/String.html#trim()</a> を参照してください。 例 : Category=\$group3.trim()

## 条件式

サポートされる 1 つの条件式は ? 演算子です。この演算子を使用して, 3 つの式を 1 つにまとめることができます例:

<Conditional part> ? <if true part> :<if false part>

## アクション・ディレクティブ

アクション・ディレクティブの形式は次のようになります。

\$ACTION= SEND または DISCARD

TOPAZ\_BUS\_POST は, SEND に相当し, 後方互換のためにのみ使用されます。

アクション・ディレクティブの値によって, イベントが処理されて BSM に転送されるか, 破棄されるかが決まります。この値は, ハンドラ的一致条件が肯定値 (**true**) として評価された場合にのみ有効になります。次の表に, さまざまなアクションの効果を示します。

アクション	詳細	対象
SEND(event)	イベントを BSM のバスおよびデータベースに送信します。	BSM
SEND(ss_t)	測定値を SiteScope データとして RTSM に送信します。	BSM
DISCARD	BSM にデータを送信しません。	除外するイベント

**注:** 測定値マッピング SEND(ss\_t) を使用すると、データは SiteScope データとして BSM データベースに送信され、データベースに保存されます。測定値マッピングの詳細については、「[メトリック・サンプルのフィールドのマッピングの設定](#)」(411ページ)を参照してください。

## タグ

ディレクティブに加えて、イベント・ハンドラにはタグが含まれます。各タグは、BSM に転送される場合のフィールドを表します。タグの値は、イベントが統合モニタに到着したときに評価できます。

一般的なタグの形式は次のとおりです。

name[:type]=value

<name> は、スペースやドル記号 (\$) のない任意の文字列です。<type> で、BSM に報告されるとき  
のフィールドのタイプを指定します。タイプは、**INT**、**DOUBLE** または **STRING** のいずれかになります。  
標準設定のタイプは **STRING** です。利用可能なデータ処理演算については、「[利用可能なデータ  
処理演算](#)」(400ページ)を参照してください。

タグを定義して、BSM に転送するイベントをカスタマイズできます。したがって、これらのイベント  
を生成する外部アプリケーションからさらに多くの値を取得できます。たとえば、モニタで、警告の  
テキスト説明が含まれるデータベースのテーブル列 (AlertText) からデータを取得する場合、イベン  
ト・ハンドラのセクションに次の行を追加してこのデータを BSM に送信できます。

```
[event handler]
$MATCH=true
$ACTION=SEND(event)
text=$AlertText
```

**注:** タグを追加する場合、必ず **\$MATCH** と **\$ACTION** の後に追加します。

## 統合モニタのフィールドのマッピングの例

### 例 1 :汎用イベント・ハンドラ

```
[post them all]
$MATCH=true
$ACTION=SEND(event)
severity:INT=SEVERITY_INFORMATIONAL
```

```
szAlarmText:STRING="post them all handler received an event"
```

ハンドラの **\$MATCH** ディレクティブは **true** に設定されます。これにより、すべてのイベントがこのハンドラに一致し、BSM のバスに送信されます。

## 例 2 : 重大度ごとに異なるイベント・ハンドラ

```
[Error Handler]
$MATCH= $status.equals("ERROR")
$ACTION=SEND(event)
severity:INT=SEVERITY_CRITICAL
[Info Handler]
$MATCH= $status.equals("INFO")
$ACTION=SEND(event)
severity:INT=SEVERITY_INFORMATIONAL
[post them all]
$MATCH=true
$ACTION=SEND(event)
severity:INT=SEVERITY_INFORMATIONAL
```

この例では、**Error Handler** イベント・ハンドラに対して受信イベントが照合されます。ハンドラの条件が true の場合（状態フィールドの値が **ERROR** の場合）、severity というフィールドがあり、その値が **SEVERITY\_CRITICAL** であるイベントは BSM に送信されます。イベントは、1つのハンドラにのみ一致します。最初の一致で処理が停止されるため、セクションでイベントが一致すると、次のハンドラによって処理されることはありません。

最初のハンドラでイベントが一致しない場合、2 番目のハンドラが処理対象になり、そのハンドラの照合（**INFO** 状態が検索されます）を使用して 2 番目のハンドラのアクションを実行する必要があるかどうか判断されます。イベントが 2 番目のハンドラに一致しない場合、最後に 3 番目の汎用ハンドラが評価されます。

# テクノロジー統合モニタを BSM Connector に移行する方法

SiteScope の既存のテクノロジー統合モニタを BSM Connector に移行できます。エクスポートでは、SiteScope のテクノロジー統合モニタをダウンロードし、BSM Connector にインポートできるように BSM Connector 形式に変換します。インポートされたこのようなポリシーは、そのままの状態を維持することも、BSM Connector でさらにカスタマイズすることもできます。BSM Connector で使用できるようにテクノロジー統合モニタをエクスポートすれば、BSM Connector ですべてのサードパーティを統合できるようになります。

**注:** [BSM Connector にエクスポート] ポリシーの機能は、BSM Connector 9.22 以降が BSM バージョン 9.20 以降と統合される場合にのみ関係します。

## サポートされている SiteScope テクノロジー統合モニタ

SiteScope でエクスポートできるのは、メトリック、共通イベント、またはレガシー・イベントのフィールド・マッピング・データ・タイプの次のテクノロジー統合モニタのみです。

- テクノロジ・データベース統合モニタ
- テクノロジ・ログ・ファイル統合モニタ
- テクノロジ Web サービス統合モニタ

**注:** テクノロジ SNMP トラップ統合モニタ、HP OM イベント・モニタ、HP Service Manager モニタ、NetScout イベント・モニタでは、[BSM Connector にエクスポート] ポリシーはサポートされていません。

### BSM Connector ポリシーへのテクノロジー統合モニタの移行

1. SiteScope で、BSM Connector に移行するテクノロジー統合モニタをエクスポートします。
  - a. SiteScope で、エクスポートするテクノロジー統合モニタのモニタ・プロパティを開き、**[BSM Connector にエクスポート]** パネルを展開します。
  - b. [BSM Connector にエクスポート] パネルで、**[エクスポート]** ボタンをクリックし、ポリシー・ファイルを保存するクライアント・ファイル・システムのフォルダを選択して、**[開く]** をクリックします。
  - c. エクスポート・プロセスが実行され、ポップアップ・メッセージに結果（成功 / エラー）が表示されます。

エラーの場合、詳細なエラー・メッセージが **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\error.log** に書き込まれます。

SiteScope モニタがポリシー・データとヘッダ・ファイルに変換されます。クライアント・マシンの選択した場所に次の形式でファイルが保存されます。

- <policy\_id>\_data (ポリシー・データ・ファイル)
- <policy\_id>\_header.xml (ヘッダ・ファイル)

policy\_id は、新しいポリシーに生成された UUID です。

2. 生成されたポリシー・ファイルを BSM Connector システムに転送します。
3. 移行した統合モニタを BSM Connector にインポートします。

BSM Connector のポリシー・インポート・メカニズムを使用して、ポリシー・データ・ファイルとヘッダ・ファイルを BSM Connector マシンにインポートします。詳細については、BSM Connector のオンライン・ヘルプ・システム（BSM Connector ユーザ・インタフェースのツールバーから利用可能）を参照してください。

ファイルをインポートしたら、ほかのポリシーと同様に BSM Connector でポリシーをアクティブ化できます。

## 統合モニタのデプロイ方法

**注:** 次の場所で作業しているときに統合モニタをデプロイできます。

- BSM をレポートするスタンドアロン SiteScope。
- SAM 管理で直接。

統合を設定するための手順は、キャプチャするサンプル・データのタイプ（測定値、イベント、またはチケット）、およびデータをトポロジにマップするかどうか（BSM 内の適切な CI 階層にデータを転送することが目的）によって異なります。

### 測定値サンプルの収集

測定値データを BSM に転送するために [測定値] フィールド・マッピング・データ・タイプを選択し、次のトポロジ・スクリプトから選択します。

- **コンピュータ - モニタ** : SiteScope ではこのデータをノード CI の子孫であるコンピュータ CI にレポートします。タスクの詳細については、[「コンピュータ - モニタ・トポロジを使ってメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法」 \(414ページ\)](#)を参照してください。
- **カスタム** : 独自のトポロジを作成できます。タスクの詳細については、[「カスタム・トポロジを使用して測定値データを収集する統合モニタの設定方法」 \(421ページ\)](#)を参照してください。
- **トポロジなし** : トポロジを送信しない場合に選択します（ただし、データはまだ送信される）。タスクの詳細については、[「ノー・トポロジでメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法」 \(433ページ\)](#)を参照してください。

### イベント・サンプルの収集

サードパーティのドメイン・マネージャまたはアプリケーションから収集されたイベントを BSM に統合するために [共通イベント] または [レガシー イベント] フィールド・マッピング・データ・タイプを選択します。レガシー EMS イベントとは異なり、共通イベント統合では、Operations Manager イベント・サブシステムおよびサービス状況コンソールのイベントを管理できます。さらに、共通イベント・チャンネルは、データを報告することなく BSM にトポロジを報告するオプションを提供します。

- 共通イベント統合を使用するタスクの詳細については、[「共通イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法」 \(458ページ\)](#)を参照してください。
- レガシー・イベント統合を使用するタスクの詳細については、[「レガシー・イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法」 \(462ページ\)](#)を参照してください。

### チケット・サンプルの収集

チケット発行データを BSM に転送するために、[チケット] フィールド・マッピング・データ・タイプを選択します。

サードパーティのチケット発行システムからインシデントおよびイベントを収集するタスクの詳細については、[「チケット発行データを収集する統合モニタの設定方法」 \(470ページ\)](#)を参照してください。

## 第31章: メトリック・データを収集する統合モニタの設定

汎用統合モニタを設定する場合、時間ベースのデータを収集するメトリック・データ・タイプを選択できます。メトリック・データ・タイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、一般的な SiteScope データとして BSM に統合され、SiteScope データを表示できるすべてのコンテキストで表示できます。

### 測定値サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング

統合モニタとそのフィールドのマッピング・スクリプトを設定して、Enterprise Management Systems (EMS) や自動サポート・システムなどの管理アプリケーションのメトリック・データをキャプチャできます。

統合モニタは、モニタの設定のユーザ・インタフェースでカスタマイズするフィールドのマッピングによって異なります。マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

特定の EMS アプリケーション (HP OM, HP Service Center, NetScout など) で使用するように設計された統合モニタは、フィールドのマッピング・スクリプトを編集しなくても設定できます。このマッピングは HP によって事前に定義されているため、特別なカスタマイズが必要な場合以外は変更する必要はありません。これらのフィールドのマッピング・スクリプトの編集の詳細については、デプロイするモニタのユーザ・インタフェースの各ページにあるフィールドのマッピング要素の説明を参照してください。

テクノロジー統合モニタ (テクノロジー SNMP トラップ・モニタ, テクノロジー・ログ・ファイル・モニタ, およびテクノロジー・データベース・モニタ) の場合、データ・タイプを選択する必要があります。必要なスクリプトのテンプレートはフィールドのマッピングのテキスト・ボックスに直接ロードされます。組織のニーズに合わせてフィールドのマッピング・スクリプトを編集する必要があります。テクノロジー Web サービス統合モニタのフィールドのマッピングもカスタマイズする必要があります。

測定値データを BSM に転送するために **[Metrics]** データ・タイプを選択したときに、トポロジ設定を使用して BSM に統合する場合は、次の事前定義されたトポロジ・スクリプトから選択できます。

- **コンピュータ - モニタ** : SiteScope トポロジ (モニタ) を送信する場合に選択します。これは標準設定です。SiteScope ではこのデータをノード CI の子孫であるコンピュータ CI にレポートします。
- **トポロジなし** : トポロジを送信しない場合に選択します (ただし、データはまだ送信される)。

- **カスタム**: 独自のトポロジを作成できます。自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している場合にのみこのオプションを選択します。

トポロジ設定の選択の詳細については、「[テクノロジー統合モニタのトポロジ設定](#)」(393ページ)を参照してください。

**注:** SiteScope は、BSM で定義された統合により作成されたモニタ CI のインジケータ定義を使用します（コンピュータ CI タイプに適用）。別の ETI がモニタのフィールド・マッピングで指定された場合、それにより標準設定のインジケータ定義が上書きされます。

## メトリック・サンプルのフィールドのマッピングの設定

メトリックのデータ・タイプを使用して、外部システムによって収集されたメトリックを抽出し、BSM にインポートします。

統合モニタのフィールド・マッピングを設定するときに「**メトリック**」データ・タイプを選択してメトリック・スクリプトをロードします。次に、「**フィールドのマッピング**」テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。変更が完了したら、その内容を「**フィールドのマッピング**」テキスト・ボックスにコピーします。

イベント・ハンドラの構造と構文の詳細については、「[イベント・ハンドラの構造と構文](#)」(399ページ)を参照してください。

CI 解決のヒントの形式については、「[CI 解決のヒントの形式](#)」(398ページ)を参照してください。

### 注:

本項の内容

- 「[メトリック・スクリプトの必須値](#)」(411ページ)
- 「[メトリック・スクリプトの任意値](#)」(412ページ)
- 「[メトリック・スクリプトの例](#)」(413ページ)

メトリック・スクリプトの必須値

次の表に、メトリック・スクリプトの必須値を示します。

フィールド名	タイプ	詳細	例
TimeStamp	DOUBLE	1970 年 1 月 1 日以降の秒単位のタイムスタンプ。	TimeStamp:DOUBLE=time()
Quality	INT	品質（SiteScope での名	Quality:INT= QUALITY_ERROR

フィールド名	タイプ	詳細	例
		称) : 利用可能な値は, QUALITY_ERROR, QUALITY_WARNING, QUALITY_GOOD です。	
MonitorName	STRING	論理モニタ名。	MonitorName="NT cpu Monitor"
MonitorState	STRING	モニタの状態 (N/A, Good, Error など)。	MonitorState="Received " + \$count + " events"
MonitorType	STRING	モニタ・タイプ。	MonitorType="System Monitor"
TargetName	STRING	該当のモニタの対象 (ホスト・マシンの名前など)。	TargetName=\$Device
MeasurementName (N)	STRING	N 番目のメトリックの名前。	MeasurementName(1)="CPU Temperature"
Value(N)	DOUBLE	N 番目のメトリックの値。	Value (1):DOUBLE=\$CPUTemperature

## メトリック・スクリプトの任意値

次の表に、メトリック・スクリプトの任意値を示します。

フィールド名	タイプ	詳細	例
MeasurementETI	STRING	ETI の表示名。  注 : BSM 9.00 を使用する場合、統合フィールド・マッピングに関連するインジケータ名を追加するか (追加しない場合、代わりにシステム KPI が使用される)、SAM システム可用性管理でインジケータを設定します。詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「インジ	MeasurementETI(1) = "インジケータの表示名"



フィールド名	タイプ	詳細	例
		「データ割り当ての設定」を参照してください。	
Measurement CI Hint	STRING	<p>監視対象の CI を特定し、測定値をそれらの CI に関連付ける場合に使用する CI 解決のヒント: SiteScope では、モニタの内部 ID に基づく形式で用意済みの CI 解決のヒントを送信します。</p> <p>EMS 測定値フィールド・マッピングでは、次の場合、カスタム CI 解決のヒントを送信する必要が生じることがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>カスタム・トポロジ・スクリプトを使用したモニタ CI のないカスタム・トポロジの送信する場合。</li> <li>サードパーティの測定値を転送し、既存のトポロジにそれらを接続することのみが必要な場合。この場合、フィールド・マッピングを作成し、CI 解決のヒントを提供し、統合モニタの「トポロジ設定」で「トポロジなし」を選択します。</li> </ul> <p>CI 解決のヒントは、「<a href="#">フィールド・マッピングの構造</a>」(398ページ)で説明されているように BSM で認識可能な形式で指定する必要があります。</p>	MeasurementCIHint (1)= "SCDAM038.testlab"

### メトリック・スクリプトの例

**注:** メトリック・スクリプトの例はこの PDF に添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、**【表示】 > 【ナビゲーション パネル】 > 【添付ファイル】**を選択して、**Metrics\_Script\_Example.txt** を選択します。

このスクリプトで複数のメトリックを指定する場合は、各メトリックについて個別のサンプルが送られます。

**注:** 各ファイルについて複数のメトリックを指定する場合は、メトリックに連続した番号を付け

る必要があります。

失敗した場合は **RunMonitor.log** にエラーが表示されますが、エラーはモニタの状態に影響しません。

## コンピュータ - モニタ・トポロジを使ってメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法

このタスクでは、コンピュータ - モニタ・トポロジ・スクリプトを使って EMS メトリクス・フローを設計および実装する手順について説明します。トポロジはモニタされた By リンクによって SiteScope モニタ CI に接続されたコンピュータ CI を記述します。

**注:** このタスクの例については、[「例 - コンピュータ - モニタ・トポロジを使用した測定値フローの作成」\(418ページ\)](#)を参照してください。

### 1. BSM 統合の設定

SiteScope と BSM を統合します。詳細については、[「BSM と通信するための SiteScope の設定方法」\(228ページ\)](#)を参照してください。

### 2. SiteScope の選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- SAM システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「[システム可用性管理] ページ」を参照してください。

### 3. 統合モニタのグループの作成

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[新規 SiteScope グループ\] ダイアログ・ボックス」\(258ページ\)](#)を参照してください。

**ヒント:** 統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM に報告されるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

### 4. 統合モニタの追加

モニタを設定して、統合モニタの構成に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- 「HP OM イベント・モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「HP Service Manager モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「NetScout イベント・モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

次の汎用統合モニタを選択できます（汎用統合モニタは BSM 9.1x 以前のバージョンでのみサポートされます。BSM 9.2x の新しいすべてのサードパーティ・データ統合では、BSM ヘルプの『BSM アプリケーション管理ガイド』の説明に従って BSM Connector を使用します）。

- 「テクノロジー・データベース統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「テクノロジー SNMP トラップ統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「テクノロジー Web サービス統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

## 5. トポロジ・フローの計画

開始する前に、次のことを計画します。

- 使用するモニタとメトリックのタイプ。
- トポロジでレポートするコンピュータ CI 上に作成する HI。
- 標準設定の HI の大半については、すでに HI および KPI の割り当てがあるため、新しいものを作成する必要はありません。
- HI にマップするメトリック。

## 6. モニタのフィールド マッピングの編集

マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

- a. [フィールドのマッピング] パネルで、[Metrics] フィールド・マッピング・スクリプトを選択し、[ファイルのロード] をクリックします。
- b. スクリプト値を対応するフィールド・マッピング・グループにマップします。そこでデータを抽出するエンティティ（データベース、ログ・ファイル、SNMP トラップ、Web サービス）に表示されます。
  - 必須スクリプト値については、「[メトリック・スクリプトの必須値](#)」(411ページ)を参照してください。

- 。任意指定のスクリプト値については、[「メトリック・スクリプトの任意値」](#) (412ページ) を参照してください。

**注:** 統合フィールド・マッピングは、統合によって作成された各モニタ CI が、単一の監視対象の CI (Computer など) に確実に接続されるような方法で設定する必要があります。複数のコンピュータ CI に接続されたモニタ CI を作成することは避けてください。そのためには、**[MonitorName]** の一部として **[TargetName]** フィールドの値を使用することをお勧めします。例:

推奨:

```
MonitorName="Disk usage on " + $group0  
TargetName=$group0
```

回避:

```
MonitorName="Disk usage on my computer"  
TargetName=$group0
```

- c. インジケータ・マッピング・フィールドは SiteScope または SAM 管理の **[フィールドのマッピング]** パネルで設定できます。詳細については、次のステップを参照してください。

**注:** **[フィールドのマッピング]** 設定は、**[トポロジ設定]** パネルの **[データなしのレポートトポロジ]** チェック・ボックスが選択されている場合は、使用できません。データなしのトポロジ・レポートの詳細については、[「データなしのトポロジのレポート」](#) (474ページ) を参照してください。

## 7. メトリックのインジケータへのマップ

メトリックから HI へのマッピングを定義します。インジケータ・マッピングの定義方法は2つあります。

- 。 **[システム可用性管理 (SAM) 管理]** で、このオプションはモニタ・タイプに対して一般的なマッピングを作成するとき、または、マッピングの測定値に対して正規表現を使用する場合に使います。詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「インジケータ割り当ての作成および管理方法」と「**[新規モニタの作成]** ダイアログ・ボックス」の各項を参照してください。
- 。 テクノロジ統合モニタの **[フィールドのマッピング]** で、このオプションはよりシンプルな場合に使用します。たとえば、正規表現なしでメトリックと HI 間のマッピングを定義する場合などです。詳細は、前のステップ ([「モニタのフィールドマッピングの編集」](#) (415ページ)) を参照してください。

### メトリックからインジケータへのマップ:

- a. **[SAM 管理]** を使ってインジケータ・マッピングを定義する場合、**MonitorType** 値に対して **[SAM 管理]** のインジケータ・マッピングで使ったモニタ名を **[フィールドのマッピング]** パネルに入力します。
- b. **MeasurementETI(x)** 値に対して **[SAM 管理]** でメトリックとインジケータ間のマッピングを

すでに定義してある場合、このフィールドは [フィールドのマッピング] パネルで設定できません (コメント・アウトしたままにします)。あるいは、コメントせずに、コンピュータ CI で定義された要件に適合する既存のインジケータのうち、いずれか1つのラベル (表示名) を入力します。たとえば、CPU 使用率を監視する測定値に対しては、「CPU Load」とします。

- c. SiteScope は CI ヒントを自動的に設定するため、**MeasurementCIHint(x)** の値は設定できません (コメント・アウトしたままにします)。

## 8. トポロジ・スクリプトの選択

統合モニタの [トポロジ設定] セクションでは、トポロジ・スクリプト・リストから **[コンピュータ - モニタ]** を選択します。トポロジ・スクリプトを入力する必要はありません。

**注:** **[コンピュータ - モニタ]** トポロジ統合では、RTSM に追加されるノードの名前または IP アドレスが DNS 解決を介してアクセス可能である必要があります。TargetName フィールドで指定したノード CI を RTSM に正常に分布するには、SiteScope で DNS サービスを介してノードの完全修飾ドメイン名および IP アドレスを解決できる必要があります。

## 9. SAM レポートを使用する場合のグループ権限の割り当て

メトリック・フィールド・マッピングで汎用統合モニタを設定した場合、定義された各ユーザにシステム可用性管理 レポートとカスタム・レポートで SiteScope グループおよびそのサブグループを表示する権限を割り当てる必要があります。詳細については、BSM ヘルプで BSM プラットフォーム管理ガイドの権限についてのセクションを参照してください。

## 10. フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション

[トポロジ設定] パネルで、**[スクリプトのテスト]** をクリックして、モニタの実行前にスクリプトをテストします。次の内容がテストされます。

- フィールドのマッピングおよびトポロジ・スクリプトの構文を確認します。
- マッピング結果を表示します。
- トポロジ・スクリプトが設定されている場合は、トポロジ結果を表示します。

## 11. 統合結果の表示

SiteScope でメトリック割り当てを定義して、モニタを設定すると (フィールド・マッピングおよびトポロジ・スクリプトを含む)、以下のアプリケーションで結果を表示できるようになります。

**「サービス状況」で:**

- a. BSM で、**[アプリケーション] > [サービス状況] > [トップ ビュー]** を選択します。
- b. ドロップ・ダウン・リストで次のように選択します。
  - **[システム ハードウェア モニタリング]** でコンピュータ CI の状態を表示する。
  - **[システム モニタ]** 表示でモニタとその状態を表示する。

**「SAM レポート」で:**

SAM レポートで統合のデータを表示することもできます。さまざまなレポートで、グラフに表示するデータのフィルタを指定します。

フィールド・マッピングで定義した以下の値を含めるためにフィルタを設定します（「[モニタのフィールドマッピングの編集](#)」(415ページ)を参照）:

- **ターゲット**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [TargetName] フィールドに定義した値を選択します。
- **モニタ・タイプ**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [MonitorType] で定義した値を選択します。
- **モニタ・タイトル/モニタ名**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [MonitorName] で定義した値を選択します。
- **測定値**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [MeasurementName(x)] で定義した値を選択します。

## 例 - コンピュータ - モニタ・トポロジを使用した測定値フローの作成

この例では、コンピュータ - モニタ・トポロジ・スクリプトを使用して、さまざまなディスクを監視するサードパーティのシステムから測定値サンプルをキャプチャして BSM に転送する、統合モニタを作成する方法を説明します。

**注:** この例に関連するタスクについては、「[コンピュータ - モニタ・トポロジを使ってメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法](#)」(414ページ)を参照してください。

### 1. 設計ステージ

ログ・ファイルに書き込むサードパーティ・アプリケーションがあるとします。このアプリケーションでは、さまざまなコンピュータのディスク利用率をログに書き込みます。

このアプリケーションはログ・ファイルに書き込むため、SiteScope での統合用にテクノロジー・ログ・ファイル統合モニタを作成します。[測定値] フィールド・マッピングおよび[コンピュータ - モニタ] トポロジ・スクリプトを使用し、「Host Disk Utilization」インジケータを選択します。既存の割り当てが存在しているため、この HI および KPI 用の割り当てを作成する必要はありません。

ログ・ファイル内のエントリ:

- labamrnd42,disk,d,65,warning
- labamrnd42,disk,d,70,warning
- labamrnd42,disk,d,70,warning

2. SAM 管理で測定値をインジケータにマップする

【BSM】 > 【管理】 > 【System Availability Management】 > 【Metrics and Indicators】 で新規モニタ・タイプを作成します。

新規モニタの追加

\* モニタ名:

My Disk Usage

モニタ表示名:

My Disk Usage

モニタ カテゴリ:

Custom

保存

キャンセル

ヘルプ

【My Disk Usage】はモニタ・タイプ，【Custom】はカテゴリです。  
次に、モニタの新規インジケータ・マッピングを定義します。

新規割り当て

My Disk Usage Monitor

メトリックパターン: /.\*disk.\*utilization.\*/

☐ 標準設定割り当て

CIタイプツリー

インジケータ

詳細 - ホスト ディスク使用率

ビューの参照

検索

ConfigurationItem

BusinessElement

CICollection

Dynamic Node Factory

InfrastructureElement

Application Resource

ApplicationSystem

CommunicationEndpoint

DatacenterResource

NetworkEntity

Node

ClusterResourceGroup

Computer

Net Device

NodeElement

RunningSoftware

UDDI Registry

Location

Monitor

Party

インジケータ

ホスト ディスク使用率

メモリ割り当て使用レベル

ファイアウォールサービス

パフォーマンス解析 (Configuration)

バッチ ジョブサービス

ノード ステータス (Node)

ネットワーク ファイル共有使用レベル

セキュリティで保護されたログイン

スワップ使用レベル

スレッド

カーネル処理使用状況

インタフェース 破棄率

インタフェース 使用率

インタフェース エラー率

イベント ログ記録サービス

イベント ストーム (Node)

WebServer サービス

VMRename

VMRemoval

VMMigration

VMCreation

ホスト リソース

詳細 - ホスト ディスク使用率

一般

名前: HostDiskUtilization

タイプ: 状況インジケータに関連するイ

説明: ディスクの使用率レベル

アプリケーション: サービス状況と SLM の両方

単位:

状態

表示名	ステータス	アイコン
正常域 (標準設...	正常域	
正常域より低	注意域	
正常域より非...	注意域	
正常域より高	注意域	
注意域	注意域	
正常域より非...	警戒域	
危険域	危険域	

テーブルを保存すると、次のように表示されます。



### 3. フィールド・マッピングの定義

**注:** 使用するフィールド・マッピング・スクリプトはこの PDF に添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、【表示】 > 【ナビゲーション パネル】 > 【添付ファイル】を選択して、**Metrics\_Computer\_Monitor\_Topology\_Field\_Mapping.txt** を選択します。

フィールド・マッピング・スクリプトで、【**MonitorType**】値が【My Disk Usage】と表示されます（SAM 管理のインジケータ・マッピングで定義されたように）。

測定値は、インジケータ・マッピングで定義した正規表現と一致しています。

MeasurementName(1)="disk " + \$group2 + " utilization".

マッピングは、SAM 管理ですでに定義したため、**MeasurementETI(1)** はコメントアウトされています。

SiteScope がヒントを自動的に設定するため、**MeasurementCIHint(1)** はコメントアウトされています。

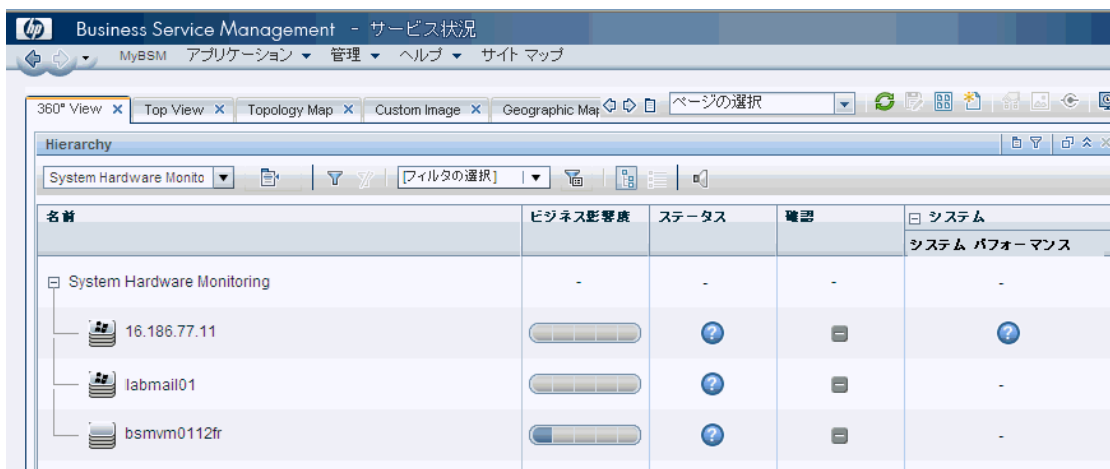
### 4. トポロジ・スクリプトの選択

統合モニタの【トポロジ設定】セクションで、トポロジ・スクリプト・リストから【**コンピュータ - モニタ**】スクリプトを選択します。

### 5. 統合結果の表示

BSM で【**アプリケーション**】 > 【**サービス 状況**】を選択し、【System Hardware Monitoring】ビューで監視中のターゲット・コンピュータ (labamrnd42) を表示します。





監視対象マシンのインジケータ・ステータスの結果は、次のようになります。

cpu1 (SiteScope Monitor) ▾			
KPI に関する状況インジケータ			
KPI	状況インジケータ	状態	値
システム パフォーマンス	ホスト ディスク使用率 ▾	✖ 致命的	N/A

## カスタム・トポロジを使用して測定値データを収集する統合モニタの設定方法

このタスクでは、カスタム・トポロジ・フローを使用した測定値サンプル用統合の作成に関連する手順について説明します。

**注:** このタスクの例については、[「例 - カスタム・トポロジを使用した測定値フローの作成」\(425ページ\)](#)を参照してください。

1. CI Resolver TQL の変更 (SiteScope がバージョン 9.20 より前の BSM に接続されている場合のみ)
  - a. BSM で、**[管理] > [プラットフォーム] > [インフラストラクチャ設定]** を選択します。
    - **[アプリケーション]** を選択します。
    - **[エンド ユーザ / システム可用性管理]** を選択します。
    - **[エンド ユーザ / システム可用性管理 - SiteScope CI Resolver 設定]** で、**[TQL クエリ]** パラメータの値が **[SiteScope によって監視される CI]** であるか確認します。もしそうであるなら、**[OMiAutoView]** に変更します。
  - b. BSM を再起動して変更を適用します。

**注:** この TQL では、CI 数が多いモデルはサポートされていません（このモデルでは、パフォーマンスに問題が発生する場合があります）。

## 2. BSM 統合の設定

SiteScope と BSM を統合します。詳細については、[「BSM と通信するための SiteScope の設定方法」\(228ページ\)](#)を参照してください。

## 3. SiteScope の選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- SAM システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「[システム可用性管理] ページ」を参照してください。

## 4. 統合モニタのグループの作成

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[新規 SiteScope グループ\] ダイアログ・ボックス」\(258ページ\)](#)を参照してください。

**ヒント:** 統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM に報告されるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

## 5. 統合モニタの追加

モニタを設定して、統合モニタの構成に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- 「HP OM イベント・モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「HP Service Manager モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「NetScout イベント・モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

次の汎用統合モニタを選択できます（汎用統合モニタは BSM 9.1x 以前のバージョンでのみサポートされます。BSM 9.2x の新しいすべてのサードパーティ・データ統合では、BSM ヘルプの『BSM アプリケーション管理ガイド』の説明に従って BSM Connector を使用します）。

- 「テクノロジー・データベース統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

- 「テクノロジー SNMP トラップ統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「テクノロジー Web サービス統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

## 6. モニタのフィールドマッピングの編集

マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

- a. [フィールドのマッピング] パネルで、[Metrics] フィールド・マッピング・スクリプトを選択し、[ファイルのロード] をクリックします。
- b. ss\_t サンプル・ファイルに入れて送信する詳細を入力します。
  - [MeasurementETI] 値には、以前に「[カスタム・トポロジを使用して測定値データを収集する統合モニタの設定方法](#)」(421ページ)で選択した HI のラベルを入力します。
  - [MeasurementCIHint] に CI のヒントを入力します。このヒントは、BSM 内の CI リゾルバが、このサンプルを添付する CI を認識するために役立ちます。  
測定スクリプトの値の詳細については、「[メトリック・サンプルのフィールドのマッピングの設定](#)」(411ページ)を参照してください。

**注:** [フィールドのマッピング] 設定は、[トポロジ設定] パネルの [データなしのレポート トポロジ] チェック・ボックスが選択されている場合は、使用できません。データなしのトポロジ・レポートの詳細については、「[データなしのトポロジのレポート](#)」(474ページ)を参照してください。

## 7. トポロジ・フローの設計

カスタム・トポロジ・フローの設計戦略を策定するときは、次の点を考慮する必要があります。

### • トポロジに対する CI

BSM にレポートするエンティティを検討します。これらのエンティティについては、BSM のサービス状況でデータをレポートしたり状況ステータスを表示したりすることが必要な場合もあります。

たとえば、データベースに書き込む TPA というサードパーティ・アプリケーションがあるとします。このデータベースのエントリには、さまざまなコンピュータの CPU とネットワークの利用率に関するパフォーマンス・データが含まれます。この場合、通常は、コンピュータ CI を BSM にレポートするトポロジを作成します。

### • これらの CI のレポート対象データ

これらの CI に関連するデータの内容およびこのデータを CI に添付する方法を検討します。レポートするデータには、いずれの状況インジケータ (HI) が関連するでしょうか。該当するインジケータがない場合は、新規 HI の作成を検討します。いずれの KPI または HI の割り当てによって、必要な HI および KPI が作成されるでしょうか。該当する割り当てが存在しない場合は、独自の割り当てを作成することを検討します。

## 8. カスタム・トポロジ・スクリプトの作成

最後の作業として、トポロジ・スクリプトを作成します。このスクリプトは、CI を BSM にレポートする方法を定義します。トポロジスクリプトの詳細については、「[テクノロジー統合モニタのトポロジ設定](#)」(393ページ)を参照してください。

CI の `monitored_by` 属性には、この統合の識別子を入力します。これは「[カスタム・トポロジを使用して測定値データを収集する統合モニタの設定方法](#)」(421ページ)の HI 割り当てで使用したのと同じ値です。

### 注:

- フィールド・マッピングを使用するとき、フィールド・マッピング・フィールドをトポロジ・スクリプトの入力として使用できます。たとえば、共通イベント・マッピングを使用するときは、次の方法で [Category] フィールドの値にアクセスできます。

```
category = Framework.getDestinationAttribute("Category")
```

- さらに、`group0`、`group1` など、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタからの「モニタ変数」の値、またはテクノロジー・データベース統合モニタ内のデータベース列の名前、またはその他の統合モニタ内のその他の変数にアクセスできます。たとえば、次の方法で、変数 `group1` の値にアクセスできます。

```
group1 = Framework.getDestinationAttribute("group1")
```

**ヒント:** トポロジの問題をトラブルシューティングするには、『BSM と HPOM との統合についてのベスト・プラクティス・ガイド』の「BSM トポロジの問題」を参照してください。

## 9. SAM レポートを使用する場合のグループ権限の割り当て

測定値フィールド・マッピングを含む汎用統合モニタを設定する場合は、定義されているユーザごとに、SiteScope グループおよびそのサブグループを SAM レポートおよびカスタム・レポート内で表示する権限を割り当てる必要があります。詳細については、BSM ヘルプ で BSM プラットフォーム管理ガイド の権限についてのセクションを参照してください。

## 10. フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション

[トポロジ設定] パネルで、[スクリプトのテスト] をクリックして、モニタの実行前にスクリプトをテストします。次の内容がテストされます。

- フィールドのマッピングおよびトポロジ・スクリプトの構文を確認します。
- マッピング結果を表示します。
- トポロジ・スクリプトが設定されている場合は、トポロジ結果を表示します。

## 11. 統合結果の表示

BSM に HI および KPI の割り当てを設定し、SiteScope にモニタを設定すれば（フィールド・マッピングおよびトポロジ・スクリプトを含む）、結果を表示できます。

- BSM のサービス状況またはサービス・レベル管理アプリケーションでの統合結果を表示するビューを RTSM に作成します。ビューは「[カスタム・トポロジ・スクリプトの作成](#)」(424 ページ) で定義したトポロジを示します。

ビューの作成についての詳細は、BSM ヘルプにある『モデリング・ガイド』の「Modeling Studio Page」を参照してください。

SLM の統合も定義した場合は、統合結果を SLM レポートに表示できます。SLM およびレポートの詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「Working with the Service Level Management Application」を参照してください。

- 統合データは、システム可用性管理 レポートにも表示できます。さまざまなレポートで、グラフに表示するデータのフィルタを指定します。

「[モニタのフィールド マッピングの編集](#)」(423 ページ) のフィールド・マッピングで定義した次の値を含めるようにフィルタを設定します。

- **ターゲット**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [TargetName] フィールドに定義した値を選択します。
- **モニタ・タイプ**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [MonitorType] で定義した値を選択します。
- **モニタ・タイトル/モニタ名**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [MonitorName] フィールドに定義した値を選択します。
- **測定値**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [MeasurementName(x)] で定義した値を選択します。

## 例 - カスタム・トポロジを使用した測定値フローの作成

この例では、カスタム・トポロジ・スクリプトを使用して、さまざまな Oracle データベースを監視するサードパーティのシステムから測定値サンプルをキャプチャして BSM に転送する、統合モニタを作成する方法を説明します。このスクリプトでは、独自のトポロジを作成できます。

**注:** この例に関連するタスクについては、「[カスタム・トポロジを使用して測定値データを収集する統合モニタの設定方法](#)」(421 ページ)を参照してください。

### 1. 設計ステージ

My Oracle Monitoring というアプリケーションがあるとします。このアプリケーションは、さまざまなコンピュータで稼動している Oracle データベースからの測定値をログ・ファイルに書き込みます。

このアプリケーションはログ・ファイルに書き込むため、統合用にテクノロジー・ログ・ファイル統合モニタを作成します。レポートするトポロジは Oracle CI を含んでおり、これらの CI 上に HI を作成します。関心のある 1 つのインジケータと 1 つの測定値に注目します。

ログ・ファイル内のエントリ:

- amrnd153,27,1,good
- amrnd153,82,1,warning
- amrnd153,80,1,warning

SiteScope のテクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ:

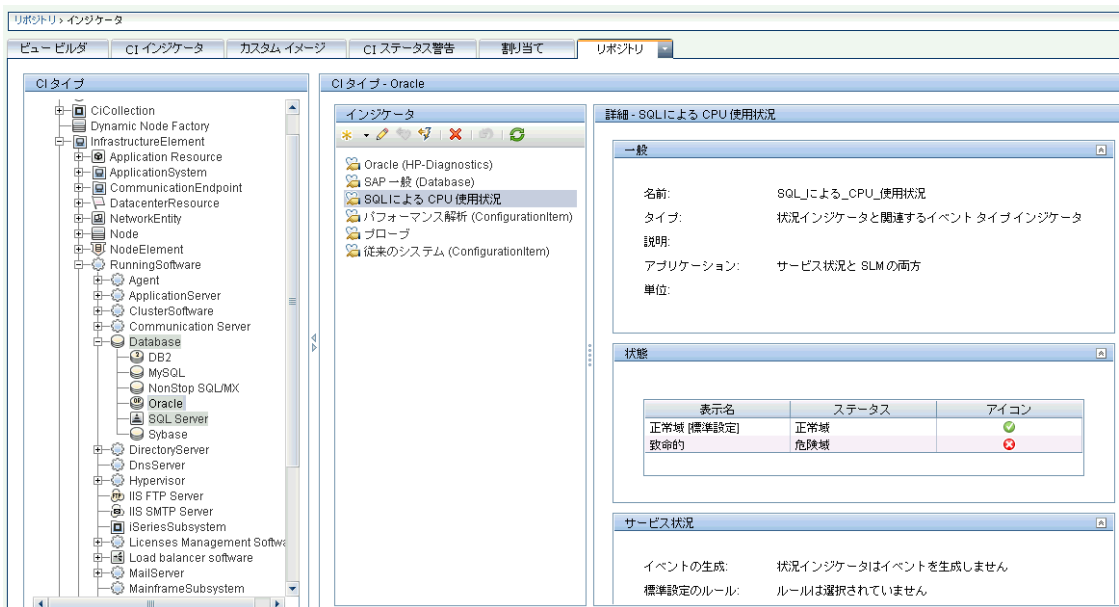
テクノロジー ログ ファイル統合モニタ設定	
サーバ:	SiteScope Server <input type="button" value="サーバの参照"/> <input type="button" value="リモートサーバの追加"/>
*ログファイルパス名:	c:\ems\OracleLog.txt
*内容一致:	/(*),(*),(*),(*)/ <input type="button" value="ツールを開く"/>
	<input type="checkbox"/> ファイルが見つからない場合、エラーにしない
ログファイルのエンコード:	windows-1252
警告の実行:	ログエントリが一致するたび
	<input type="checkbox"/> データなしのレポートトポロジ
EMSの時間差:	0 日数
モニタの実行設定	
フィールドのマッピング	
トポロジ設定	
依存関係	
しきい値の設定	
利用不可な場合:	モニタの状態をしきい値に応じて設定
標準設定の状態:	良好
内部エラーの場合:	根据 閾値設置 监控器 状态
<input type="button" value="標準しきい値の追加"/> <input type="button" value="標準しきい値の削除"/>	
エラー条件	

## 2. インジケータの選択

BSMで、【管理】 > 【サービス状況】 > 【リポジトリ】 > 【インジケータ】 を選択します。

「My Oracle Monitoring」アプリケーションの場合は、「SQL (データベース)による CPU 使用状況」インジケータを使用します。このインジケータは、SQL および Oracle の使用状況をレポートします。





このインジケータは、Oracle CI タイプ（レポートされるCI）上に定義されており，ログから読み取られる測定値を対象としています。この測定値は，Oracle で使用する CPU の量を示します。

3. HI 割り当ての定義

BSM で，【管理】>【サービス状況】>【割り当て】>【状況インジケータの割り当て】を選択し，インジケータの割り当てを作成します。

Define a Health Indicator Assignment. When a condition is filled, Health Indicators are assigned to any CI that meets the condition.

**Assignment Settings**

ID: d1489bdb-c4e9-40fd-a643-01b40c240569

Name: My Oracle HI assignment

Description:

**Condition**

Monitored by: My Oracle Monitoring integration

Property Name	Operator	Value
---------------	----------	-------

**Health Indicator Configurations**

Health Indicator	Business Rule
CPU Usage by SQL	SiteScope Worst Status Rule

Copy Cancel Help

【**Monitored by**】プロパティで、手動で「My Oracle Monitoring integration」を入力します。この値は、この統合によってレポートされる Oracle CI を、レポートされるほかの Oracle CI と区別するために役立ちます。これにより、この統合によってレポートされる Oracle CI のみに「SQL による CPU 使用状況」インジケータが割り当てられます。

この割り当てのインジケータを編集すると、次の画面が表示されます。



割り当て: SQL による CPU 使用状況 の状況インジケータの編集

状況インジケータ設定を定義します

状況インジケータ

\* 状況インジケータ: SQLによる CPU 使用状況

\* ビジネス ルール: SiteScope 最低ステータス ルール

\* 優先度: 0

ビジネス ルールパラメータ

generateEvents: 偽

Tooltip show all measurements: false (String)

データのタイムアウトなし: 900 秒

\* [CI タイプのプロパティ] リストからプロパティをドラッグするか、フィールドの編集中に Ctrl + i を押して、選択したプロパティに値を設定できます。

セレクタ

フィールド名	オペレータ	タイプ	値
AND			
eti_id	=	Binary	<<Health Indicator Type ID>>
ci_id	=	Binary	<<CI ID>>
smampleType	=	String	ss_t

式のサマリ:

```

[eti_id = <<Health Indicator Type ID>>]
AND
[ci_id = <<CI ID>>]
AND
[smampleType = ss_t]

```

\* [CI タイプのプロパティ] リストからプロパティをドラッグするか、フィールドの値の編集中に Ctrl + i を押して、選択したプロパティに値を設定できます。

CI タイプのプロパティ

一般プロパティ

バイナリ

Calculated ID

ブール

Allow CI Update

Change Is New

Enable Aging

Is Candidate For Deletion

Operation Is New

Store KPI History For Over Ti...

Test Is New

Track Configuration Changes

整数

Actual Deletion Period

BusinessCriticality

Collection Interval

Deletion Candidate Period

文字列

BPI Monitor Type

BPI Server Name

CI Type

City

Container

Country or Province

Created By

Custom Data Units

Data Units

Description

Digest

Display Label

Documents

External ID

Global Id

Name

Note

Origin

Owner Tenant

State

Svsystem

保存 キャンセル ヘルプ

「SQL による CPU 使用状況」インジケータは、SiteScope のワースト・ステータス・ルールを使用して計算されます。このセレクタは、現在の CI および ETI と同じ ci\_id および eti\_id を持つ ss\_t タイプ（測定値データ・タイプ）のサンプルが、この Oracle CI 上で、このインジケータによってキャプチャされることを定義します。ほかのサンプルはキャプチャされない必要があります。

#### 4. KPI 割り当ての定義

標準設定のインジケータを使用したため、Oracle CI 上に既存の サービス状況 KPI 割り当てが存在しており、KPI 割り当てを作成する必要はありません。

BSM で【管理】>【サービス状況】>【割り当て】>【KPI 割り当て】を選択し、CI タイプ・ツリーで【Oracle】を選択して【Oracle KPI Assignment】を選択します。

CI タイプ: Oracle の KPI 割り当ての編集

KPIの割り当てを定義します。条件が指定されている場合は、KPIやショートカットメニューは条件を満たす任意のCIに割り当てられます。

割り当ての設定

ID:

d48ea3ba-533f-44e7-8908-179179588472

\* 名前:

Oracle KPIs Assignment

説明:

KPI Assignments for Oracle Health Indicators

条件

モニタ元:

プロパティ名

演算子

値

KPI 設定

\*

KPI	計算基準	関連する状況インジケータ	ビジネス ルール
ソフトウェアパフォーマンス	HI と子 KPI	データベース オブジェクト ステータス	ワーストステータス ルール
ソフトウェアの可用性	HI と子 KPI	SQL による CPU 使用状況, 標準	ワーストステータス ルール

ショートカットメニュー

保存

キャンセル

ヘルプ

[ソフトウェア パフォーマンス] KPI を選択します。



この KPI と関連付けられているインジケータの 1 つは、使用した「SQL による CPU 使用状況」インジケータです。

## 5. フィールド・マッピングの設定

**注:** 使用するフィールド・マッピング・スクリプトはこの PDF に添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、**【表示】 > 【ナビゲーション パネル】 > 【添付ファイル】** を選択して、**Metrics\_Custom\_Topology\_Field\_Mapping.txt** を選択します。

フィールド・マッピング・スクリプトで、新しいモニタ・タイプが定義されたことを確認できます。My Oracle が定義されたことを確認できます。

モニタ名は My Oracle mon on \$group0 であり、ここで \$group 0 は、Oracle データベースを稼働しているターゲット・コンピュータでもあります。

測定名は oracle cpu usage であり、その値はログ・ファイルから取得されます。送信される値の品質はログ・ファイルに書き込まれた内容に依存します。

測定値のマッピング先の ETI は、「SQL による CPU 使用状況」です。

CI ヒントは、< < Oracle sid > > @@ < < コンピュータ名 > > の形式をしています。CI ヒントは、BSM 内の CI リゾルバが、このデータ・サンプルを添付する CI を検索するために役立ちます。

## 6. カスタム・トポロジ・スクリプトの作成

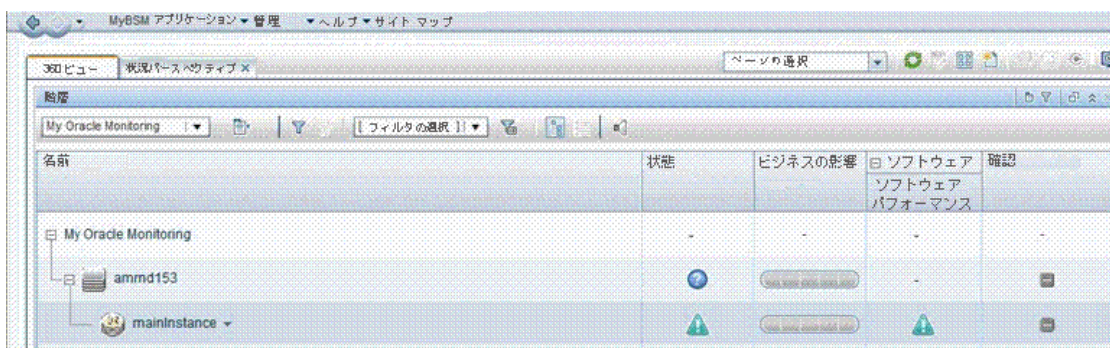
**注:** 使用するカスタム・トポロジ・スクリプトはこの PDF に添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、**【表示】 > 【ナビゲーション パネル】 > 【添付ファイル】** を選択して、**Metrics\_Custom\_Topology\_Script.txt** を選択します。

カスタム・スクリプトで、次を確認できます。

- system\_lib.createNode(Framework) によって、データベースを実行しているノードが作成されます。
- modeling.createDatabaseOSH によって、Oracle CI が作成されます。
- mainInstance は、使用した Oracle の SID です。
- My Oracle Monitoring integration は、インジケータ割り当てで指定した条件である monitored\_by 属性です（「[HI 割り当ての定義](#)」(427ページ)を参照）。

## 7. 統合結果の表示

BSM で、**【アプリケーション】 > 【サービス状況】** を選択し、この統合用のビューを手動で作成します。たとえば、ここでは、「My Oracle Monitoring」というビューを作成しました（「System Software Monitoring」ビューにも表示）。



監視対象マシンのインジケータ・ステータスの結果は、次のようになります。



状態および値は、フィールド・マッピングで割り当てた状態および値と同じです。

## ノー・トポロジでメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法

このタスクでは、**ノー・トポロジ**・スクリプトを使って、EMS メトリック・フローを設計および実装する手順について説明します。

統合モニタを使って BSM にすでに存在するトポロジのためのメトリック・サンプルを送信するには、このフローを使います。このフローでは、トポロジを送信せずにデータが送信されます。

SiteScope

**注:** このタスクの例については、「例 - トポロジを使用しない測定値フローの作成」(438ページ)を参照してください。

1. CIResolver TQL の変更 (SiteScope がバージョン 9.20 より前の BSM に接続されている場合のみ)
  - a. BSM で、**【管理】 > 【プラットフォーム】 > 【インフラストラクチャ設定】** を選択します。
    - **【アプリケーション】** を選択します。
    - **【エンド ユーザ / システム可用性管理】** を選択します。

- **【エンド ユーザ / システム可用性管理 - SiteScope CI Resolver 設定】**で、**【TQL クエリ】**パラメータの値が**【SiteScope によって監視される CI】**であるか確認します。もしそうであるなら、**【OMiAutoView】**に変更します。

- b. BSM を再起動して変更を適用します。

**注:** この TQL では、CI 数が多いモデルはサポートされていません（このモデルでは、パフォーマンスに問題が発生する場合があります）。

## 2. インジケータの選択

CI の状態を表示するには、CI 状況に関するきめの細かい指標を規定する HI が必要です。通常は、BSM のサービス状況でこの HI を表示します。この HI は、サービス・レベル管理 (SLM) でも使用されます。HI の詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「Health Indicators and KPIs - Overview」を参照してください。

**注:** 整合性を高めるために、あらかじめ設定されている HI を使用することをお勧めします。独自の HI は、ニーズを満たす既存の HI が見つからない場合のみ作成してください。

既存の HI を選択するか、新規 HI を作成するには、次の手順を実行します。

- a. BSM で、**【管理】 > 【サービス状況/サービス レベル管理】 > 【リポジトリ】 > 【インジケータ】**を選択します。
- b. CI タイプを選択します。
- c. 要件を満たす既存の HI がすでにあるかどうかを確認します。ない場合は、新規 HI を作成します。HI の作成方法の詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「How to Create or Edit an ETI or HI Template in the Indicator Repository」の項を参照してください。
- d. 新規 HI を作成する場合は、変更を SiteScope に適用します。BSM で、**【管理】 > 【System Availability Management】 > 【メトリクスとインジケータ】**を選択し、**【変更の適用】**をクリックします。変更は、5 分以内に SiteScope に伝搬されます。

## 3. HI 割り当ての定義

HI の選択後に、HI 割り当てを定義して、HI を CI に割り当てる必要があります。この割り当てでは、HI がキャプチャするデータ・サンプル、およびそのデータ・サンプルに従って HI の状態を計算するのに使用するビジネス・ルールも定義されます。

HI の割り当ての詳細については、BSM ヘルプの BSM アプリケーション管理ガイドを参照してください。

HI 割り当てを定義するには、次の手順を実行します。

- a. BSM で、**【管理】 > 【サービス状況】 / 【サービス レベル管理】 > 【割り当て】 > 【状況インジケータの割り当て】**を選択します。
- b. CI タイプを選択します。
- c. 新規 HI 割り当てを作成します。割り当ての作成方法の詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「KPI または HI 割り当ての定義方法」を参照してください。

い。

- **【条件】** エリアの **【Monitored By】** プロパティで統合の一意の値を入力します。これにより、この統合によってレポートされる CI と、この統合によってレポートされない、同じタイプのほかの CI を区別できます。
- **「インジケータの選択」(434ページ)** で選択した HI を選択します。
- HI 計算に使用するビジネス・ルールを選択します。「SiteScope ワースト状態ルール」を使用することをお勧めします。「SiteScope 連続ワースト状態ログ」または「SiteScope ベスト状態ルール」も使用できます。
- セレクタで、次のように入力します。
  - eti\_id = (バイナリ) <<状況インジケータ・タイプ ID>>
  - ci\_id = (バイナリ) <<CI ID>>
  - sampleType = (String) ss\_t

統合モニタでは、測定値サンプル (ss\_t) が送信されます。このサンプルには、お使いの ETI と同じ eti\_id、および CI の ID と同じ CI ID が含まれています。

**「モニタのフィールドマッピングの編集」(437ページ)** でのモニタのフィールド・マッピング・エントリに従って、サンプルの eti\_id が SiteScope によって送信されます。

ci\_id は、BSM 内の CI リゾルバによって検索されます。このため CI を検索するために、**「モニタのフィールドマッピングの編集」(437ページ)** でのモニタのフィールド・マッピング・エントリに従って、サンプルで SiteScope によって送信される CI ヒントを使用します。

測定値サンプルのフィールド・マッピングの詳細については、**「メトリック・サンプルのフィールドのマッピングの設定」(411ページ)** を参照してください。

#### 4. 各 CI タイプに対する KPI 割り当ての定義

適切な KPI 割り当てがあるかどうか確認し、ない場合は作成します。この割り当てはどの KPI を CI のどの HI に割り当てるかを決定します。

標準設定の HI のいずれかを使用する場合は、その HI に対応する標準設定の KPI 割り当てがすでに存在しているため、KPI 割り当てを作成する必要はありません。

KPI の割り当ての詳細については、BSM ヘルプの BSM アプリケーション管理ガイドを参照してください。

KPI 割り当てを作成するには、次の手順を実行します。

- a. BSM で、**【管理】 > 【サービス状況】 > 【リポジトリ】 > 【インジケータ】** を選択します。
- b. CI のタイプを選択します。
- c. 新規 KPI 割り当てを作成します。詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「KPI または HI 割り当ての定義方法」を参照してください。
- d. KPI 割り当てで、関連 HI は **「インジケータの選択」(434ページ)** で選択したものである必要があります。

**注:** サービス・レベル管理 (SLM) で統合結果の表示も行う場合は、サービス・レベ

ル・アグリーメント (SLA) を定義する必要があります。SLA の詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「[Agreements Manager] ページ」を参照してください。

## 5. BSM 統合の設定

SiteScope と BSM を統合します。詳細については、[「BSM と通信するための SiteScope の設定方法」\(228ページ\)](#)を参照してください。

## 6. SiteScope の選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- SAM システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「[システム可用性管理] ページ」を参照してください。

## 7. 統合モニタのグループの作成

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[新規 SiteScope グループ\] ダイアログ・ボックス」\(258ページ\)](#)を参照してください。

**ヒント:** 統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM に報告されるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

## 8. 統合モニタの追加

モニタを設定して、統合モニタの構成に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- 「HP OM イベント・モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「HP Service Manager モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「NetScout イベント・モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

次の汎用統合モニタを選択できます（汎用統合モニタは BSM 9.1x 以前のバージョンでのみサポートされます。BSM 9.2x の新しいすべてのサードパーティ・データ統合では、BSM ヘルプの『BSM アプリケーション管理ガイド』の説明に従って BSM Connector を使用します）。

- 「テクノロジー・データベース統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファ



レンス・ガイド』を参照してください)

- ・「テクノロジー SNMP トラップ統合モニタ」(詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください)
- ・「テクノロジー Web サービス統合モニタ」(詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください)

## 9. モニタのフィールド マッピングの編集

マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

- a. [フィールドのマッピング] パネルで、[Metrics] フィールド・マッピング・スクリプトを選択し、[ファイルのロード] をクリックします。
- b. ss\_t サンプル・ファイルに入れて送信する詳細を入力します。
  - [MeasurementETI] 値には、前に「インジケータの選択」(434ページ) で選択した HI のラベルを入力します。
  - [MeasurementCIHint] に CI のヒントを入力します。このヒントは、BSM 内の CI リゾルバが、このサンプルを添付する CI を認識するために役立ちます。  
測定スクリプトの値の詳細については、「メトリック・サンプルのフィールドのマッピングの設定」(411ページ)を参照してください。

**注:** [フィールドのマッピング] 設定は、[トポロジ設定] パネルの [データなしのレポート トポロジ] チェック・ボックスが選択されている場合は、使用できません。データなしのトポロジ・レポートの詳細については、「データなしのトポロジのレポート」(474ページ)を参照してください。

## 10. ノー・トポロジ・フローの計画

ノー・トポロジ・フローの設計戦略を計画するときは、以下の点を考慮する必要があります。

### ・ トポロジに対する CI

ノー・トポロジのオプションを使用するため、EMS モニタを使ってデータをレポートする RTSM にすでに CI を持っているかもしれません。

### ・ これらの CI のレポート対象データ

これらの CI に関連するデータの内容およびこのデータを CI に添付する方法を検討します。レポートするデータには、いずれの状況インジケータ (HI) が関連するでしょうか。該当するインジケータがない場合は、新規 HI の作成を検討します。いずれの KPI または HI の割り当てによって、必要な HI および KPI が作成されるでしょうか。該当する割り当てが存在しない場合は、独自の割り当てを作成することを検討します。

たとえば、CPU 使用率およびネットワーク使用率についてのデータを持っている場合、コンピュータ CI タイプに定義された「CPU Load」および「Interface Utilization」HI を使用し、システム・パフォーマンス KPI を使用することができます。ご自分のニーズに合った HI と KPI 割り当てがあるかどうかを確認し、それらを作成することを検討します。

## 11. SAM レポートを使用する場合のグループ権限の割り当て

測定値フィールド・マッピングを含む汎用統合モニタを設定する場合は、定義されているユーザごとに、SiteScope グループおよびそのサブグループを SAM レポートおよびカスタム・レポート内で表示する権限を割り当てる必要があります。詳細については、BSM ヘルプ で BSM プラットフォーム管理ガイド の権限についてのセクションを参照してください。

## 12. 統合結果の表示

BSM で HI および KPI 割り当てを設定し、SiteScope でモニタを設定したら（フィールド・マッピングを含む）、結果を表示できます。

- BSM のサービス状況またはサービス・レベル管理アプリケーションでの統合結果を表示するビューを RTSM に作成します。表示は自分が表示したい CI を記述している必要があります。ビューの作成についての詳細は、BSM ヘルプにある『モデリング・ガイド』の「Modeling Studio Page」を参照してください。

SLM に対しても統合を定義した場合は、SLM レポートで統合結果を表示できます。SLM およびレポートの詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「Working with the Service Level Management Application」を参照してください。

- 統合データは、システム可用性管理 レポートにも表示できます。さまざまなレポートで、グラフに表示するデータのフィルタを指定します。

手順 9 のフィールド・マッピングで定義した次の値を含めるようにフィルタを設定します。

- **ターゲット**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [TargetName] フィールドに定義した値を選択します。
- **モニタ・タイプ**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [MonitorType] で定義した値を選択します。
- **モニタ・タイトル/モニタ名**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [MonitorName] で定義した値を選択します。
- **測定値**: 統合モニタ・フィールド・マッピングの [MeasurementName(x)] で定義した値を選択します。

## 例 - トポロジを使用しない測定値フローの作成

この例では、トポロジなしのフローを使用して、さまざまな Oracle データベースを監視するサードパーティのシステムから測定値サンプルをキャプチャして BSM に転送する、統合モニタを作成する方法を説明します。このフローは、トポロジが BSM にすでに存在しており、CI をレポートする必要がない場合に、測定値サンプルを送信するために使用されます。

**注:** この例に関連するタスクについては、「[ノー・トポロジでメトリック・データを収集するための統合モニタの設定方法](#)」(433 ページ)を参照してください。

## 1. 設計ステージ

My Oracle Monitoring というアプリケーションがあるとします。このアプリケーションは、さまざまなコンピュータで稼動している Oracle データベースからのさまざまな測定値をログ・ファイルに書き込みます。

このアプリケーションはログ・ファイルに書き込むため、統合用にテクノロジー・ログ・ファイル統合モニタを作成する必要があります。測定値は、すでに RTSM に存在している Oracle CI に割り当てられます。したがって、CI をレポートする必要はありません。データは、CI 上の HI に割り当てられます。関心のある 1 つのインジケータと 1 つの測定値に注目します。

ログ・ファイル内のエントリ:

- amrnd153,27,1,good
- amrnd153,82,1,warning
- amrnd153,80,1,warning

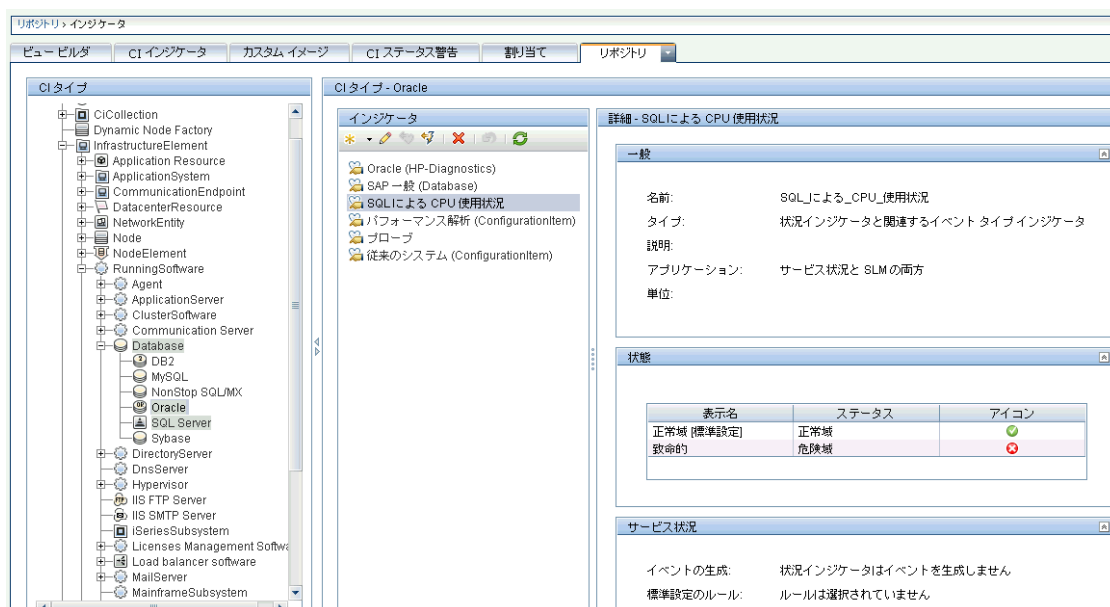
## SiteScope のテクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ:

テクノロジー ログ ファイル統合モニタ設定	
サーバ:	SiteScope Server <input type="button" value="サーバの参照"/> <input type="button" value="リモートサーバの追加"/>
*ログファイルパス名:	c:\ems\OracleLog.txt
*内容一致:	/(*),(*),(*),(*)/ <input type="button" value="ツールを開く"/>
ログファイルのエンコード:	<input type="checkbox"/> ファイルが見つからない場合、エラーにしない windows-1252
警告の実行:	ログ エントリが一致するたび
	<input type="checkbox"/> データなしのレポート トポロジ
EMS の時間差:	0 日数
モニタの実行設定	
フィールドのマッピング	
トポロジ設定	
依存関係	
しきい値の設定	
利用不可な場合:	モニタの状態をしきい値に応じて設定
標準設定の状態:	良好
内部エラーの場合:	根据 阈值设置 监控器 状态
<input type="button" value="標準しきい値の追加"/> <input type="button" value="標準しきい値の削除"/>	
エラー条件	

## 2. インジケータの選択

BSMで、【管理】 > 【サービス状況】 > 【リポジトリ】 > 【インジケータ】 を選択します。

「My Oracle Monitoring」アプリケーションの場合は、「SQL (データベース)による CPU 使用状況」インジケータを使用します。このインジケータは、SQL および Oracle の使用状況をレポートします。



このインジケータは、Oracle CI タイプ上に定義されており、ログから読み取られる測定値を対象としています。この測定値は、Oracle で使用する CPU の量を示します。

### 3. HI 割り当ての定義

BSM で、【管理】>【サービス状況】>【割り当て】>【状況インジケータの割り当て】を選択し、インジケータの割り当てを作成します。

割り当て条件は、インジケータを定義する Oracle CI と一致する（この統合に属さないほかの Oracle CI とは一致しない）必要があります。インジケータ割り当てで、「SQL による CPU 使用状況」インジケータを選択します。

この割り当てのインジケータを編集すると、次の画面が表示されます。

割り当て: SQL による CPU 使用状況 の状況インジケータの編集

状況インジケータ設定を定義します

状況インジケータ

\* 状況インジケータ: SQLによる CPU使用状況

\* ビジネス ルール: SiteScope 最低ステータス ルール

\* 優先度: 0

ビジネス ルールパラメータ

generateEvents: 偽

Tooltip show all measurements: false (String)

データのタイムアウトなし: 900 秒

\* [CI タイプのプロパティ] リストからプロパティをドラッグするか、フィールドの編集集中に Ctrl + i を押して、選択したプロパティに値を設定できます。

セレクタ

フィールド名	オペレータ	タイプ	値
AND			
eti_id	=	Binary	<<Health Indicator Type ID>>
ci_id	=	Binary	<<CI ID>>
smampleType	=	String	ss_t

式のサマリ:

```

[eti_id = <<Health Indicator Type ID>>]
AND
[ci_id = <<CI ID>>]
AND
[smampleType = ss_t]

```

\* [CI タイプのプロパティ] リストからプロパティをドラッグするか、フィールドの値の編集集中に Ctrl + i を押して、選択したプロパティに値を設定できます。

CI タイプのプロパティ

一般プロパティ

バイナリ

Calculated ID

ブール

Allow CI Update

Change Is New

Enable Aging

Is Candidate For Deletion

Operation Is New

Store KPI History For Over Ti...

Test Is New

Track Configuration Changes

整数

Actual Deletion Period

BusinessCriticality

Collection Interval

Deletion Candidate Period

文字列

BPI Monitor Type

BPI Server Name

CI Type

City

Container

Country or Province

Created By

Custom Data Units

Data Units

Description

Digest

Display Label

Documents

External ID

Global Id

Name

Note

Origin

Owner Tenant

State

Svsystem

保存 キャンセル ヘルプ

「SQL による CPU 使用状況」インジケータは、SiteScope のワースト・ステータス・ルールを使用して計算されます。このセレクタは、現在の CI および ETI と同じ ci\_id および eti\_id を持つ ss\_t タイプ（測定値データ・タイプ）のサンプルが、この Oracle CI 上で、このインジケータによってキャプチャされることを定義します。ほかのサンプルはキャプチャされない必要があります。

#### 4. KPI 割り当ての定義

標準設定のインジケータを使用したため、Oracle CI 上に既存の サービス状況 KPI 割り当てが存在しており、KPI 割り当てを作成する必要はありません。

BSM で **【管理】** > **【サービス状況】** > **【割り当て】** > **【KPI 割り当て】** を選択し、CI タイプ・ツリーで **【Oracle】** を選択して **【Oracle KPI Assignment】** を選択します。

**【Monitored by】** プロパティで、手動で「My Oracle Monitoring integration」を入力します。この値は、この統合によってレポートされる Oracle CI を、レポートされるほかの Oracle CI と区別

するために役立ちます。これにより、この統合によってレポートされる Oracle CI のみに「SQL による CPU 使用状況」インジケータが割り当てられます。

CI タイプ: Oracle の KPI 割り当ての編集

KPI の割り当てを定義します。条件が指定されている場合は、KPI やショートカットメニューは条件を満たす任意の CI に割り当てられます。

割り当ての設定

ID:

d48ea3ba-533f-44e7-8908-179179588472

\* 名前:

Oracle KPIs Assignment

説明:

KPI Assignments for Oracle Health Indicators

条件

モニタ元:

プロパティ名	演算子	値
--------	-----	---

KPI 設定

KPI	計算基準	関連する状況インジケータ	ビジネス ルール
ソフトウェアパフォーマンス	HI と子 KPI	データベース オブジェクト ステータス	ワーストステータス ルール
ソフトウェアの可用性	HI と子 KPI	SQL による CPU 使用状況、標準	ワーストステータス ルール

ショートカットメニュー

保存

キャンセル

ヘルプ

【ソフトウェア パフォーマンス】 KPI を選択します。



この KPI と関連付けられているインジケータの 1 つは、使用した「SQL による CPU 使用状況」インジケータです。



## 5. フィールド・マッピングの定義

**注:** 使用するフィールド・マッピング・スクリプトはこの PDF に添付されたテキスト・ファイルで利用可能です。添付ファイルを表示するには、【表示】 > 【ナビゲーションパネル】 > 【添付ファイル】を選択して、**Metrics\_No\_Topology\_Field\_Mapping.txt** を選択します。

フィールド・マッピング・スクリプトで、新しいモニタ・タイプが定義されたことを確認できます。My Oracle が定義されたことを確認できます。

モニタ名は My Oracle mon on\$group0 であり、ここで \$group 0 は、Oracle データベースを稼働しているターゲット・コンピュータでもあります。

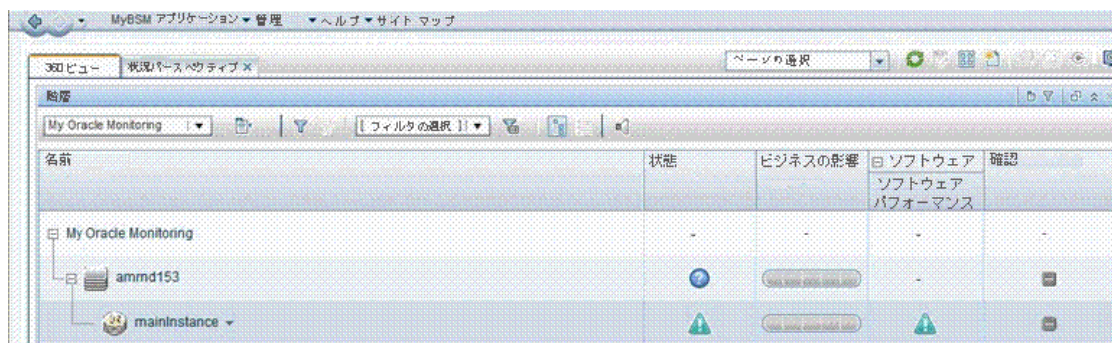
測定名は oracle cpu usage であり、その値はログ・ファイルから取得されます。送信される値の品質はログ・ファイルに書き込まれた内容に依存します。

測定値のマッピング先の ETI は、「SQL による CPU 使用状況」です。

CI ヒントは、< < Oracle sid > > @@ < < コンピュータ名 > > の形式をしています。CI ヒントは、BSM 内の CI リゾルバが、このデータ・サンプルを添付する CI を検索するために役立ちます。

## 6. 統合結果の表示

BSM で、【アプリケーション】 > 【サービス状況】を選択し、この統合用のビューを手動で作成します。たとえば、ここでは、「My Oracle Monitoring」というビューを作成しました（「System Software Monitoring」ビューにも表示）。



監視対象マシンのインジケータ・ステータスの結果は、次のようになります。

状況インジケータ - Windows Internet Explorer			
mainInstance (Oracle) ▾			
KPI に関連する状況インジケータ			
<div> <div></div> <div></div> </div>			
KPI	状況インジケータ	状態	値
ソフトウェア パフォーマンス	SQL による CPU 使用状況 ▾	高	80.0

状態および値は、フィールド・マッピングで割り当てた状態および値と同じです。

## 第32章: イベント・データを収集する統合モニタの設定

汎用統合モニタを設定する場合、イベント・データ・タイプを選択して、共有イベントベースまたはレガシー・イベントベースのデータを収集できます。共通イベント・データは、サードパーティ製のドメイン・マネージャまたはアプリケーションから収集されたイベントを BSM 9.x に統合するために使用されます。レガシー・イベントは、BAC 8.x 以前の特定のイベントに関するデータを収集するために使用されます（後方互換用）。

### トラブルシューティング / 制限事項

#### 一般的な注意事項 / 制限事項

本項では、統合モニタのフィールド・マッピングに関するトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

- イベント・サンプルの場合、レポートされる EMS モニタの `monitor_id` は、次のように作成されます。
  - イベント サンプルおよび **【コンピュータ】** トポロジの場合の `monitor_id` :  
**< target\_name >**
  - イベント サンプルおよび **【コンピュータ - 実行中のソフトウェア】** トポロジ（件名が **system** でない）の場合の `monitor_id` :  
**<件名（実行中のソフトウェアの名前）>**
  - イベント サンプルおよび **【コンピュータ - 実行中のソフトウェア】** トポロジ（件名が **system**）の場合の `monitor_id` :  
**< target\_name >**
- XML 特殊文字（", ' , < , > , &）を使用すると、BSM でこれらのサンプルに関して問題が発生するため、`monitor_id` の作成に使用されるフィールドではこれらの文字を使用しないでください。

### イベント・サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング

統合モニタとそのフィールドのマッピング・スクリプトを設定して、Enterprise Management Systems (EMS) や自動サポート・システムなどの管理アプリケーションのイベント・データをキャプチャできます。

統合モニタは、モニタの設定のユーザ・インタフェースでカスタマイズするフィールドのマッピングによって異なります。マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

特定の EMS アプリケーション（HP OM, HP Service Center, NetScout など）で使用するよう設計された統合モニタは、フィールドのマッピング・スクリプトを編集しなくても設定できます。このマッピングは HP によって事前に定義されているため、特別なカスタマイズが必要な場合以外は変更する必要はありません。これらのフィールドのマッピング・スクリプトの編集の詳細については、デプロイするモニタのユーザ・インタフェースの各ページにあるフィールドのマッピング要素の説明を参照してください。

テクノロジー統合モニタ（テクノロジー SNMP トラップ・モニタ、テクノロジー・ログ・ファイル・モニタ、およびテクノロジー・データベース・モニタ）の場合、データ・タイプを選択する必要があります。必要なスクリプトのテンプレートはフィールドのマッピングのテキスト・ボックスに直接ロードされます。組織のニーズに合わせてフィールドのマッピング・スクリプトを編集する必要があります。テクノロジー Web サービス統合モニタのフィールドのマッピングもカスタマイズする必要があります。

【**共通イベント**】または【**レガシー イベント**】フィールド・マッピング・データ・タイプを選択すると、サードパーティのドメイン・マネージャまたはアプリケーションから収集されたイベントを BSM 9.x に統合できます。レガシー EMS イベントとは異なり、共通イベント統合では、操作管理 イベント・サブシステムおよびサービス状況コンソールのイベントを管理できます。さらに、共通イベント・チャンネルは、データを報告することなく BSM にトポロジを報告するオプションを提供します。

イベント・データを BSM に転送するために【**共通イベント**】データ・タイプを選択したときに、トポロジ設定を使用して BSM に統合する場合は、次の事前定義されたトポロジ・スクリプトから選択できます。

- **コンピュータ**: コンピュータ CI を持つトポロジを作成する場合に選択します。
- **コンピュータ - 実行中のソフトウェア**: コンピュータ CI および、Composition 関係によってこの CI に接続された実行中のソフトウェア CI を持つトポロジを作成する場合に選択します。
- **カスタム**: 取得したデータをコンピュータ CI または実行中のソフトウェア CI ではなく特定の CI に送信する場合は、独自のトポロジ・スクリプトの作成を選択します。自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している場合にのみこのオプションを選択します。

イベント・データを BSM に転送するために【**レガシー イベント**】データ・タイプを選択したときに、トポロジ設定を使用して BSM に統合する場合は、次のトポロジ・スクリプトから選択できます。

- **ノード**: Monitored By 関係によって接続された EMS モニタ CI を持つノード CI を作成します。
- **ノード - 実行中のソフトウェア**: Composition 関係で接続されたノード CI および実行中のソフトウェア CI を持つトポロジと、Monitored By 関係でノード CI または実行中のソフトウェア CI に接続できる EMS モニタ CI を作成します。
- **カスタム**: 取得したデータをコンピュータ CI または実行中のソフトウェア CI ではなく特定の CI に送信する場合は、独自のトポロジ・スクリプトの作成を選択します。トポロジ・スクリプトを自作する必要があるため、Jython 言語を十分理解している必要があります。

**注:**

- EMS アプリケーションによって送信されるイベントは、イベントのサンプルです。それらのイベントは、BSM の 操作管理 イベントと同じではありません。
- SiteScope の 11.10 以前のバージョンを BSM 9.00 に接続している場合、モニタのトポロジ・スクリプトでは**ホスト・アプリケーション**のトポロジ・スクリプトは使用できません。**ホスト・アプリケーション**をレポートする既存の統合（BSM 8.x に接続されている SiteScope で作成）のみ、引き続き BSM 9.00 にレポートします。このスクリプト・タイプを使用して新しい統合を作成することはできません。
- SiteScope は、BSM で定義された統合により作成されたモニタ CI のインジケータ定義を使用します（コンピュータ CI タイプに適用）。別の ETI がモニタのフィールド・マッピングで指定された場合、それにより標準設定のインジケータ定義が上書きされます。

トポロジ設定の選択の詳細については、「[テクノロジー統合モニタのトポロジ設定](#)」(393ページ)を参照してください。

**注:** フィールドのマッピングを使った作業では、スクリプトで定義した必須フィールドおよび任意フィールドのみを使用します。詳細については、各データ・タイプの表を参照してください。

## 共通イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定

イベントのデータ・タイプは、外部システムによって収集されたイベントを抽出し、BSM にインポートするために使用されます。統合モニタのフィールドのマッピングを設定するときに**【共通イベント】**データ・タイプを選択してイベント・スクリプトをロードします。次に、**【フィールドのマッピング】**テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。変更が完了したら、その内容を**【フィールドのマッピング】**テキスト・ボックスにコピーします。

イベント・ハンドラの構造と構文の詳細については、「[イベント・ハンドラの構造と構文](#)」(399ページ)を参照してください。

CI 解決のヒントの形式については、「[CI 解決のヒントの形式](#)」(398ページ)を参照してください。

### 本項の内容

- [「共通イベント・スクリプトの必須値」](#) (449ページ)
- [「データなしのトポロジを報告する場合の必須値」](#) (450ページ)
- [「共通イベント・スクリプトの任意値」](#) (451ページ)
- [「共通イベント・スクリプトの例」](#) (452ページ)

### 共通イベント・スクリプトの必須値

次の表に、共通イベント・スクリプトの必須値を示します。対応するフィールド・マッピング・グループに、データの抽出元にするログ・ファイルに表示される値をマップします。

フィールド名	詳細
タイトル	イベントのサマリ。
重大度	イベントの重大度。利用可能な値は、[正常域]、[注意域]、[警戒域]、[重要警戒域]、および[危険域]です。
SourceHint	監視アプリケーションと、対応するプローブ/エージェント（イベントに作成に関与）の情報。

### データなしのトポロジを報告する場合の必須値

次の値は、SiteScope テクノロジ統合モニタによって検出されたトポロジだけを、データのレポートなしで報告する場合に必須です。

トポロジ・スクリプト	フィールド名	詳細
<ul style="list-style-type: none"> <li>コンピュータ</li> <li>コンピュータ - 実行中のソフトウェア</li> </ul>	target_name	<p>イベントを生成したホストまたはマシンの名前。手動で追加するか、次の方法で取得できます。</p> <pre>Framework.getDestinationAttribute("&lt;someAttribute&gt;")</pre> <p><b>例：</b></p> <p>テクノロジ・ログ・ファイル統合モニタ :Framework.getDestinationAttribute("group0")。ここで、group0 は、最初のパターン照合グループの値です。</p> <p>テクノロジ・データベース統合モニタ :Framework.getDestinationAttribute("NAME")。ここで、NAME はデータベース列の名前です。</p> <p>テクノロジ Web サービス統合モニタ :Framework.getDestinationAttribute(滴ost")。ここで、HOST は SOAP 要求の &lt;key&gt;Host&lt;/key&gt; のキーです。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>コンピュータ</li> <li>コンピュータ - 実行中のソフトウェア</li> </ul>	target_ip	<p>ホストまたはマシンの IP。手動で追加するか、次の方法で計算できます。</p> <pre>HostIPCacheManager.getIPByHostName(target_name)</pre> <p>ここで、target_name は有効なホストまたはマシンを表します。次のコードを使用することもできます。</p> <pre>HostIPCacheManager.getIPByHostName("&lt;someAttribute&gt;")</pre>
コンピュータ - 実行中のソフトウェア	name	<p>実行中のソフトウェアの名前。手動で追加するか、次の方法で取得できます。</p> <pre>Framework.getDestinationAttribute("&lt;someAttribute&gt;")</pre>

## 共通イベント・スクリプトの任意値

次の表に、共通イベント・スクリプトの任意値を示します。対応するフィールド・マッピング・グループに、データの抽出元にするログ・ファイルに表示される値をマップします。

フィールド名	詳細
CiHint	イベントに関連する CI の情報。CI 解決のヒントで使用する形式の詳細については、「 <a href="#">フィールド・マッピングの構造</a> 」(398ページ)を参照してください。
EtiHint	次の形式のイベント・タイプ・インジケータのヒント。 [ETI 名]:[ETI 値]:[測定値]  <b>例</b> :CPULoad:Critical:50  BSM インジケータの詳細については、BSM 文書ライブラリにある『BSM ユーザ・ガイド』の「Health Indicators and KPIs」を参照してください。
ComponentCi	CI のサブコンポーネントを識別するために使用される情報。この CI サブコンポーネントは、選択した CI について BSM のサービス状況で集計された状態の計算に使用されます。  複数のコンポーネントからのイベントで HI にデータが設定される場合、このフィールドにコンポーネント名を指定すると、HI 状態を適切に計算できます。  <b>例</b> : 2 個の CPU (cpu #1 と cpu #2 ) を含むコンピュータ CI がある場合、両方の CPU からのイベントが同じ CPU ロード HI に送信されます。標準設定では、これらのイベントが互いに上書きして正しくない HI 状態が作成されます。この状態は、ComponentCi に値 "cpu #1" および "cpu #2" を設定して、この 2 イベント間の集計された状態を HI 状態とすることにより回避できます。
HostHint	イベントに関連する CI をホストしているノード・タイプの CI の情報。このフィールドは、ノード CI を含むトポロジを報告する場合必須です。
詳細	イベントを説明する追加情報。
カテゴリ	イベントが属している論理グループの名前。イベント・カテゴリは、HPOM のメッセージ・グループと似ています。  <b>例 (ログ・ファイルより)</b> :データベース, セキュリティ, ネットワーク
サブカテゴリ	イベントが属している論理サブグループ (カテゴリ) の名前。  <b>例 (ログ・ファイルより)</b> :Oracle (データベース), アカウント (セキュリティ), ルータ (ネットワーク)

フィールド名	詳細
キー	<p>発生したイベントのタイプを表す一意の文字列。管理対象の環境で両方のイベントが同じ状況を表している場合、2つのイベントのキーが同じになることがあります。同じキーを持つイベントは、重複であると扱われます。</p> <p><b>例 (ログ・ファイルより)</b> :foohost:barhost:CPULoad:Critical</p>
CloseKey	<p><b>Key</b> 属性が CloseKey パターン式と一致するすべてのイベントを閉じるためのイベントを送信できるようにします。必要に応じて、ワイルドカード (*) を使用できます。</p> <p><b>例 (ログ・ファイルより)</b> :barhost:CPULoad&lt;*&gt;</p>
LogOnly	<p>このフィールドを使用すると、履歴イベント・ブラウザに直接向かうイベントを、閉じたイベントとして送信できるようになります。このようなイベントは完全に処理されますが (CI 解決, HI の更新など), <b>[Life Cycle State]</b> が最初から <b>[closed]</b> に設定されます。CI 解決の詳細については, BSM 文書ライブラリにある『BSM ユーザ・ガイド』の「CI 解決」を参照してください。</p> <p>この属性に「True」が設定される典型的なイベントの例としては, 状況インジケータが「正常域」状態または「良好」状態にリセットされるイベントや, 前の問題が解消されたことを示すイベント (問題が別のイベントに報告された) が挙げられます。</p> <p>利用可能な値は,</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>True</b> :すべてのイベントのログを到着時に自動的に記録します。</li> <li>• <b>False</b> :イベントは自動的にログに記録されません。</li> <li>• <b>True for normal severity</b> :重大度が [正常域] のイベントのみを自動的にログに記録します。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> :False</p>
属性	
#cma1= #cma2= #cma3= #cma4= #cma5=	<p>これらの属性は, イベント内の任意のカスタム属性を送信するために使用されます。</p> <p><b>注</b> :サポートされるのは, 事前定義されたカスタム・マッピング属性だけです。カスタム属性名 (cma1 ~ cma5) は変更できず, 新しいカスタム属性名を追加することもできません。</p>

### 共通イベント・スクリプトの例

次の例では, ログ・ファイル内に表示される, 対応するフィールド・マッピング・グループ



(\$group<#>) にスクリプト値がマップされている, 共通イベント・スクリプトのセクションを示します。

```
[ $DEFAULT_PARAMETERS$ ]
#####
# NOTE:the following fields are mandatory #
#####
# Brief summary of the event
Title=$group0
# Severity of the event.利用可能な値は, "Normal", "Warning", "Minor", "Major",
and "Critical"
Severity=$group2
# Information about the monitoring application and the corresponding probe/agent that
is responsible for creating the event
# If the field is left empty then it will be auto filled with SiteScope@@
[SiteScope Node FQDN]
SourceHint=$group8
#####
注:the following fields are optional #
# An unfilled field must remarked with '#' #
#####
# Information about a CI that is related to the event.For more information, see
"Preferences" > "Common Event Mappings" > "New/Edit Event Mapping Dialog Box" in the
SiteScope documentation
CiHint=$group6
# Event Type Indicator hint in the format:[ETI Name]:[ETI Value]:[Metric Value].
例 : CPUload:Critical:50
EtiHint=$group5
# Information used to identify a subcomponent of a CI.This CI subcomponent is used
to calculate an aggregated status within BSM Service Health for selected CIs
#ComponentCi=
```

## レガシー・イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定

イベントのデータ・タイプは, 外部システムによって収集されたイベントを抽出し, BSM にインポートするために使用されます。統合モニタのフィールド・マッピングを設定するときに **レガシー イベント** データ・タイプを選択してイベント・スクリプトをロードします。次に, **フィールドのマッピング** テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け, 設定を変更します。変更が完了したら, その内容を **フィールドのマッピング** テキスト・ボックスにコピーします。

イベント・ハンドラの構造と構文の詳細については, [「イベント・ハンドラの構造と構文」](#) (399ページ)を参照してください。

CI 解決のヒントの形式については、「[フィールド・マッピングの構造](#)」(398ページ)を参照してください。

#### 本項の内容

- 「[レガシー・イベント・スクリプトの必須値](#)」(454ページ)
- 「[レガシー・イベント・スクリプトの任意値](#)」(455ページ)
- 「[条件式の例 1](#)」(457ページ)
- 「[条件式の例 2](#)」(457ページ)
- 「[イベント・スクリプトの例](#)」(457ページ)

#### レガシー・イベント・スクリプトの必須値

次の表に、レガシー・イベント・スクリプトの必須値を示します。

フィールド名	タイプ	詳細	例
time_stamp	DOUBLE	1970 年 1 月 1 日以降の秒単位のタイムスタンプ。	time_stamp:DOUBLE=str_to_seconds(\$time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS").  time_stamp:DOUBLE=int time()  int time() の詳細については、「 <a href="#">利用可能なデータ処理演算</a> 」(400ページ)を参照してください。
severity	INT	事前に設定された次のいずれかの重大度になります（該当の整数に基づきます）。 0:SEVERITY_UNKNOWN 1:SEVERITY_INFORMATIONAL 2:SEVERITY_WARNING 3:SEVERITY_MINOR 4:SEVERITY_MAJOR 5:SEVERITY_CRITICAL	severity:INT=SEVERITY_MINOR
target_name	STRING	イベントを生成したデバイスまたはホスト・マシンの名前。	target_name=\$hostName  target_name=String resolveHostName(String hostIP)

フィールド名	タイプ	詳細	例
			String resolveHostName (String hostIP) の詳細については、「 <a href="#">利用可能なデータ処理演算</a> 」(400ページ)を参照してください。
状態	STRING	イベントの状態（外部 EMS での名称）。	status="OPEN" status="ASSIGNED" status="CLOSED"
subject	STRING	イベントの対象（CPU, SAP アプリケーション, ハード・ディスクなど）。イベント・ソースを表す中/高レベルの階層です。	subject="DISK"
instance	STRING	イベントを生成した対象のインスタンス（D:\ など）。イベント・ソースを表す最下位レベルの階層です。	instance="E:\\"
description	STRING	イベントのテキスト説明。	description="free space on drive e is below 10%"
data_source	STRING	イベントを生成したシステム。	data_source="HP OVO"

### レガシー・イベント・スクリプトの任意値

次の表に、レガシー・イベント・スクリプトの任意値を示します。

フィールド名	タイプ	詳細	例
target_ip	STRING	イベントを生成したデバイスまたはホスト・マシンの IP。	target_ip=\$IPString
object	STRING	イベント・ソースを表す階層の任意レベル。	object="OS"

フィールド名	タイプ	詳細	例
event_id	STRING	該当のイベントの一意の識別子。	event_id=\$id
logical_group	STRING	該当のイベントの論理グループ。	logical_group="error messages"
monitor_group	STRING	該当のイベントをレポートしたモニタ・グループ。	monitor_group="log monitors on \\hostname"
orig_severity_name	STRING	重大度（外部 EMS での名称）。	orig_severity_name="Cleared"
acknowledged_by	STRING	該当のイベントを確認したユーザの名前。	acknowledged_by=\$username
owner	STRING	該当のイベントを所有するユーザの名前。	owner="admin"
value	DOUBLE	イベントの数値を転送するために使用されます。	value=\$thresholdViolated
attr1	STRING	予備データ・スロット。	attr1=\$history
attr2	STRING	予備データ・スロット。	attr2=\$moreHistory
attr3	STRING	予備データ・スロット。	attr3="Design"
attr4	STRING	予備データ・スロット。	attr4=\$MonitorOutput
attr5	STRING	長い文字列用の予備データ・スロット。	attr5=\$Longhistory

## イベント・サンプルのホスト DNS 解決

BSM 統合では、ノード CI の作成に使用するフィールドに FQDN（完全修飾ドメイン名）と有効な IP アドレスの両方が必要です。

FQDN、IP アドレス、またはその両方がわからない場合、フィールドのマッピングで次の関数を使用して名前を解決し、統合のソースからアクセスできます。

```
target_name=resolveHostName($SomeHost)
```

```
target_ip=resolveHostIP($SomeHost)
```

**注:** 変数 \$SomeHost は、統合のソースの変数で置換される必要があります。

次の場合これらの関数は必要ありません。

- 統合でアクセスするソースから FQDN, IP アドレス, またはその両方を取得できる。この場合, **target\_name=** の値 (FQDN) と **target\_ip=** の値を, 関数を使用せずに入力します。
- SiteScope サーバで, 統合でアクセスするソースからサーバの FQDN, IP アドレス, またはその両方を解決できない。この場合, 関数で有効な値を生成できない可能性があります。

### 条件式の例 1

```
severity:INT=$var6.equals("red") ?SEVERITY_CRITICAL
: SEVERITY_INFORMATIONAL
```

この例では, 6 番目の変数バインドの値が文字列 red と比較されます。変数バインドが文字列 red に等しい場合は severity タグの値が SEVERITY\_CRITICAL に設定され, 等しくない場合は SEVERITY\_INFORMATIONAL に設定されます。

### 条件式の例 2

```
severity:INT=$var6.equals("red") ?SEVERITY_CRITICAL :
$var6.equals("green") ?SEVERITY_INFORMATIONAL :$var6.equals("yellow")
? SEVERITY_MINOR :SEVERITY_WARNING
```

この例では, 条件演算子を連結して連鎖的に決定が行われます。6 番目の変数バインドに文字列 red が保持されている場合, severity タグの値は SEVERITY\_CRITICAL になります。6 番目の変数バインドに文字列 green が保持されている場合, severity タグの値は SEVERITY\_INFORMATIONAL になります。変数バインドに文字列 yellow が保持されている場合, タグの値は SEVERITY\_MINOR になります。前述の条件に 1 つも該当しない場合, タグの値は SEVERITY\_WARNING になります。

### イベント・スクリプトの例

次の例では, 状態が "OPEN" のイベントと, ユーザによってクリアされたイベントの 2 つのタイプのイベントが送信されます。データは, \$ 表記を使用して受信イベント・フィールドから取得されます。ほかのすべてのイベントは, 最後のハンドラによって破棄されます。

```
[$DEFAULT_PARAMETERS$]
#####
# NOTE:the following parameters are mandatory #
#####
time_stamp:DOUBLE=str_to_seconds($time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS")
severity:INT= SEVERITY_UNKNOWN
target_name=$Device
status=$Status
```

```
subject="EMS X Events"
instance=$target
description=$description
data_source="EMS X"

#send an open event with the value in value fields and with the event id
[OPEN events]
$MATCH="OPEN".equals($Status)
$ACTION=SEND(event)
value:DOUBLE=parseDouble($threshold)
event_id=$uid

#send clear events with the event id and acknowledging username
[clear events]
$MATCH="CLEAR".equals($Status)
$ACTION=SEND(event)
event_id=$uid
acknowledged_by=$ClearedBy

[event sink]
$MATCH=true
$ACTION=DISCARD
```

## 共通イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法

このタスクは共通イベント統合の設定に関連する手順を説明します。共通イベント統合は、特定のイベントのデータを収集したり、データを BSM の 操作管理 イベント・サブ・システム、サービス状況コンソール、サービス・レベル管理 で利用可能にするために使用されます。

### 1. 統合方法の計画

統合モニタのタイプを確認します。EMS システムから BSM で表示する情報のタイプを検討します。いずれかの特定の統合モニタが組織のニーズを満たすかどうか、または汎用統合モニタ（テクノロジー・ログ・ファイル、データベース、SNMP トラップ、Web サービス）が必要かどうかを判別します。

概念の詳細については、[「統合モニタの概要」\(388ページ\)](#)を参照してください。

### 2. BSM 統合の設定

SiteScope と BSM を統合します。詳細については、[「BSM と通信するための SiteScope の設定方法」\(228ページ\)](#)を参照してください。

### 3. HP Operations Manager のイベント統合の設定

イベント統合の設定手順を実行します。詳細については、「HP Operations Manager 製品との SiteScope の統合」の「SiteScope を使用して HPOM または OMi にイベントを送信する方法」を参照してください。[HP ソフトウェア統合](#)サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます（Windows の場合：

<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>, UNIX の場合：

<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>）。

**注:**

- HP Operations Manager 統合メイン設定パネルで **「イベント送信の有効化」** を選択する必要があります（「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する」の手順）。この手順は標準 SiteScope モニタへのイベント送信でのみ必要です。統合モニタ用のイベントは、**「共通イベント」** サンプル・マッピング・スクリプトを使用するように統合モニタが設定されていれば、自動的に送信されます。
- 「モニタ・インスタンスと警告のイベントの送信を有効化 / 無効化」の手順は、統合モニタのイベントを送信する場合、関係ありません。
- [HP Operations Manager 測定値統合] パネルで **「HP Operations Manager 測定値統合の有効化」** チェック・ボックスを選択する必要はありません。

#### 4. SiteScope サーバの選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- SAM システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「[システム可用性管理] ページ」を参照してください。

#### 5. 統合モニタのグループの作成

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[新規 SiteScope グループ\] ダイアログ・ボックス」 \(258ページ\)](#)を参照してください。

**ヒント:** 統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM に報告されるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

#### 6. 統合モニタの追加

モニタを設定して、統合モニタの構成に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- 「HP OM イベント・モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「HP Service Manager モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

- ・「NetScout イベント・モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

次の汎用統合モニタを選択できます（汎用統合モニタは BSM 9.1x 以前のバージョンでのみサポートされます。BSM 9.2x の新しいすべてのサードパーティ・データ統合では、BSM ヘルプの『BSM アプリケーション管理ガイド』の説明に従って BSM Connector を使用します）。

- ・「テクノロジー・データベース統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- ・「テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- ・「テクノロジー SNMP トラップ統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- ・「テクノロジー Web サービス統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

## 7. モニタのフィールド マッピングの編集

マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

- a. [フィールドのマッピング] パネルで、[共通イベント] フィールド・マッピング・スクリプトを選択し、[ファイルのロード] をクリックします。テンプレート・スクリプトが [フィールドのマッピング] ボックスに表示されます。
- b. 対応するフィールド・マッピング・グループに、データの抽出元にするログ・ファイルに表示されるスクリプト値をマッピングすることにより、スクリプトを編集して、BSM に転送する監視対象アプリケーションから SiteScope でデータを取得できるようにします。ファイルの構造およびシンタックスの詳細については、[「イベント・ハンドラの構造と構文」\(399 ページ\)](#) を参照してください。

必須スクリプト値については、[「共通イベント・スクリプトの必須値」\(449 ページ\)](#) を参照してください。

任意指定のスクリプト値については、[「共通イベント・スクリプトの任意値」\(451 ページ\)](#) を参照してください。

**注:** [フィールドのマッピング] 設定は、[トポロジ設定] パネルの [データなしのレポート トポロジ] チェック・ボックスが選択されている場合は、使用できません。データなしのトポロジ・レポートの詳細については、[「データなしのトポロジのレポート」\(474 ページ\)](#) を参照してください。

## 8. トポロジ・スクリプトへのデータのマップ-オプション（トポロジを BSM に報告する場合は必須）

[トポロジ設定] パネルで、BSM の適切な CI 階層にデータを転送するためのトポロジ・スクリプトを選択します。



- **コンピュータ**: コンピュータ CI を持つトポロジを作成する場合に選択します。

**注:** コンピュータ CI に関する情報は、**[HostHint]** フィールドから取得されます。

- **コンピュータ - 実行中のソフトウェア**: コンピュータ CI および、Composition 関係によってこの CI に接続された実行中のソフトウェア CI を持つトポロジを作成する場合に選択します。

**注:** ノード CI に関する情報は **[HostHint]** フィールドから取得され、実行中のソフトウェア CI の名前は **[Category]** フィールドから取得されます。

- **カスタム**: 独自のトポロジ・スクリプトを作成する場合に選択します

トポロジ設定を編集します。トポロジ・スクリプトは、BSM の RTSM 内の必要な CI にデータを転送するために必要な値で設定されます概念の詳細については、[「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」\(393ページ\)](#)を参照してください。

**注:**

- フィールド・マッピングを使用するとき、フィールド・マッピング・フィールドをトポロジ・スクリプトの入力として使用できます。たとえば、共通イベント・マッピングを使用するときは、次の方法で **[Category]** フィールドの値にアクセスできます。

```
category = Framework.getDestinationAttribute("Category");
```

- さらに、group0, group1 など、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタからの「モニタ変数」の値、またはテクノロジー・データベース統合モニタ内のデータベース列の名前、またはその他の統合モニタ内のその他の変数にアクセスできます。たとえば、次の方法で、変数 group1 の値にアクセスできます。

```
group1 = Framework.getDestinationAttribute("group1")
```

## 9. フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション

[トポロジ設定] パネルで、**[スクリプトのテスト]** をクリックして、モニタの実行前にスクリプトをテストします。次の内容がテストされます。

- フィールドのマッピングおよびトポロジ・スクリプトの構文を確認します。
- マッピング結果を表示します。
- トポロジ・スクリプトが設定されている場合は、トポロジ結果を表示します。

このテストでは、BSM にイベントもトポロジも転送しません。

## 10. 結果

サードパーティのシステムで収集されて統合モニタで処理されると、共通イベントが生成され、SiteScope によって **<SiteScope ルート・ディレクトリ>\logs** ディレクトリの **HPSiteScopeOperationsManagerIntegration.log** ファイルにそのイベント・データが書き込まれます。各イベントはログの個別の行に書き込まれます。ログ・ファイル・ポリシーにより、このファイルを読み取り、BSM に送信されるイベント・メッセージを作成するようにエージェン

トに指示が出されます。

イベントは、オペレーション管理の操作管理 イベント・ブラウザで参照できます（イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有している場合）。BSM のインストールに操作管理が含まれていない場合は、CI の状態に影響するイベントをサービス状況 の状況インジケータを使って確認できます。

## レガシー・イベントのデータを収集する統合モニタの設定方法

このタスクでは、特定のイベントのデータを収集するために使用されるレガシー・イベントの統合を設定する手順および BSM のサービス状況、イベント・ログ・レポート、トレンド・レポートで、このデータを使用できるようにする手順について説明します。

### 1. 統合方法の計画

統合モニタのタイプを確認します。EMS システムから BSM で表示する情報のタイプを検討します。いずれかの特定の統合モニタが組織のニーズを満たすかどうか、または汎用統合モニタ（テクノロジー・ログ・ファイル、データベース、SNMP トラップ、Web サービス）が必要かどうかを判別します。

概念の詳細については、「[統合モニタの概要](#)」(388ページ)を参照してください。

### 2. BSM 統合の設定

SiteScope と BSM を統合します。詳細については、「[BSM と通信するための SiteScope の設定方法](#)」(228ページ)を参照してください。

**注:** [レガシー イベント] サンプル・マッピング・スクリプトを使用するように統合モニタが設定されている場合は、HP Operations Manager のイベント統合を設定する必要はありません。

### 3. SiteScope サーバの選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- SAM システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある『BSM ユーザ・ガイド』の「[システム可用性管理] ページ」を参照してください。
- [EMS 統合管理] で、[新規統合] または [統合の編集] ボタンをクリックします。[統合の編集] ダイアログ・ボックスで、システム可用性管理 パネルのリンクをクリックして、SiteScope サーバを選択できる [SAM 管理] ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「[統合の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

#### 4. 統合モニタのグループの作成

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規 SiteScope グループ\] ダイアログ・ボックス](#)」(258ページ)を参照してください。

**ヒント:** 統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM に報告されるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

#### 5. 統合モニタの追加

モニタを設定して、統合モニタの構成に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- 「HP OM イベント・モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「HP Service Manager モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「NetScout イベント・モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

次の汎用統合モニタを選択できます（汎用統合モニタは BSM 9.1x 以前のバージョンでのみサポートされます。BSM 9.2x の新しいすべてのサードパーティ・データ統合では、BSM ヘルプの『BSM アプリケーション管理ガイド』の説明に従って BSM Connector を使用します）。

- 「テクノロジー・データベース統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「テクノロジー SNMP トラップ統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「テクノロジー Web サービス統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

#### 6. モニタのフィールド マッピングの編集

マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

- a. [フィールドのマッピング] パネルで、[レガシー イベント] フィールド・マッピング・スクリプトを選択し、[ファイルのロード] をクリックします。
- b. 対応するフィールド・マッピング・グループに、データの抽出元にするログ・ファイルに表示されるスクリプト値をマッピングすることにより、スクリプトを編集して、BSM に転送する監視対象アプリケーションから SiteScope でデータを取得できるようにします。ファイルの構造およびシンタックスの詳細については、「[イベント・ハンドラの構造と構文](#)」(399

[ページ](#) を参照してください。

必須スクリプト値については、[「レガシー・イベント・スクリプトの必須値」](#) (454ページ) を参照してください。

スクリプトの任意指定値については、[「レガシー・イベント・スクリプトの任意値」](#) (455ページ) を参照してください。

**注:** [フィールドのマッピング] 設定は、[トポロジ設定] パネルの **「データなしのレポート トポロジ」** チェック・ボックスが選択されている場合は、使用できません。データなしのトポロジ・レポートの詳細については、[「データなしのトポロジのレポート」](#) (474ページ) を参照してください。

7. トポロジ・スクリプトへのデータのマップ - オプション (トポロジを BSM に報告する場合は必須)

[トポロジ設定] パネルで、BSM の適切な CI 階層にデータを転送するためのトポロジ・スクリプトを選択します。

- **ノード :Monitored By** 関係によって接続された EMS モニタ CI を持つノード CI を作成する場合に選択します。
- **ノード - 実行中のソフトウェア :Composition** 関係で接続されたノード CI および実行中のソフトウェア CI を持つトポロジ、および **Monitored By** 関係でノード CI または実行中のソフトウェア CI に接続できる EMS モニタ CI を作成する場合に選択します。

**注:** コンピュータ CI に関する情報は **[HostHint]** フィールドから取得され、実行中のソフトウェア CI の名前は **[カテゴリ]** フィールドから取得されます。

- **カスタム** :独自のトポロジ・スクリプトを作成する場合に選択します

トポロジ設定を編集します。トポロジ・スクリプトは、BSM の RTSM 内の必要な CI にデータを転送するために必要な値で設定されます概念の詳細については、[「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」](#) (393ページ) を参照してください。

**注:**

- フィールド・マッピングを使用するとき、フィールド・マッピング・フィールドをトポロジ・スクリプトの入力として使用できます。たとえば、レガシー・イベント・マッピングを使用するときは、次の方法で **[Subject]** フィールドの値にアクセスできます。

```
subject = Framework.getDestinationAttribute("Subject")
```

- さらに、group0, group1 など、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタからの「モニタ変数」の値、またはテクノロジー・データベース統合モニタ内のデータベース列の名前、またはその他の統合モニタ内のその他の変数にアクセスできます。たとえば、次の方法で、変数 group1 の値にアクセスできます。

```
group1 = Framework.getDestinationAttribute("group1")
```

## 8. フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション

[トポロジ設定] パネルで, [スクリプトのテスト] をクリックして, モニタの実行前にスクリプトをテストします。次の内容がテストされます。

- フィールドのマッピングおよびトポロジ・スクリプトの構文を確認します。
- マッピング結果を表示します。
- トポロジ・スクリプトが設定されている場合は, トポロジ結果を表示します。

このテストでは, BSM にイベントもトポロジも転送しません。

## 9. BSM での EMS 統合アプリケーションの設定

モニタの設定に加え, BSM の EMS 統合アプリケーションの設定が必要になります。詳細については, BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドで, 「How to Integrate Data from Third-Party Sources (EMS Data) into HP Business Service Management」 の 「Create an EMS integration (for Event or Ticket Samples)」 にある残りの手順を参照してください。

**注:** 測定値統合を設定する場合, BSM の [SAM 管理] にアクセスし, 新しい統合を設定する必要はありません。モニタを作成して, [レポート トポロジ] オプションを選択するだけです。

## 10. 結果

サードパーティのシステムで収集されて統合モニタで処理されると, イベントが生成されて < SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs ディレクトリの

**HPSiteScopeOperationsManagerIntegration.log** ファイルにそのイベント・データが書き込まれます。各イベントはログの個別の行に書き込まれます。ログ・ファイル・ポリシーにより, このファイルを読み取り, BSM に送信されるイベント・メッセージを作成するようにエージェントに指示が出されます。

イベントは, サービス状況, システム可用性管理 イベント・ログ, およびトレンド・レポートで参照できます。

## 第33章: チケット発行データを収集する統合モニタの設定

汎用統合モニタを設定する場合、チケット発行システムからインシデントおよびイベントを収集するチケット・データ・タイプを選択できます。チケット・データ・タイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、BSM に統合され、サービス状況およびサービス・レベル管理で表示できます。

### トラブルシューティング / 制限事項

#### 一般的なトラブルシューティング / 制限事項

本項では、統合モニタのフィールド・マッピングに関するトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

- チケット・サンプルおよびチケット・トポロジの場合、レポートされる EMS モニタの monitor\_id は次のとおりです。

`<data_source>_<target_name>`

- XML 特殊文字 (" , ' , < , > , &) を使用すると、BSM でこれらのサンプルに関して問題が発生するため、monitor\_id の作成に使用されるフィールドではこれらの文字を使用しないでください。

### チケット発行サンプルの統合モニタ・フィールドのマッピング

統合モニタとそのフィールドのマッピング・スクリプトを設定して、Enterprise Management Systems (EMS) や自動サポート・システムなどの管理アプリケーションのイベント・データおよびメトリック・データをキャプチャできます。

統合モニタは、モニタの設定のユーザ・インタフェースでカスタマイズするフィールドのマッピングによって異なります。マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

特定の EMS アプリケーション (HP OM, HP Service Center, NetScout など) で使用するように設計された統合モニタは、フィールドのマッピング・スクリプトを編集しなくても設定できます。このマッピングは HP によって事前に定義されているため、特別なカスタマイズが必要な場合以外は変更する必要はありません。これらのフィールドのマッピング・スクリプトの編集の詳細については、デプロイするモニタのユーザ・インタフェースの各ページにあるフィールドのマッピング要素の説明を参照してください。

テクノロジー統合モニタ（テクノロジー SNMP トラップ・モニタ、テクノロジー・ログ・ファイル・モニタ、およびテクノロジー・データベース・モニタ）の場合、データ・タイプを選択する必要があります。必要なスクリプトのテンプレートはフィールドのマッピングのテキスト・ボックスに直接ロードされます。組織のニーズに合わせてフィールドのマッピング・スクリプトを編集する必要があります。テクノロジー Web サービス統合モニタのフィールドのマッピングもカスタマイズする必要があります。

【**チケット**】を選択し、トポロジ設定を使用して BSM に統合する場合、次のトポロジ・スクリプトを選択できます。【**チケット**】または【**カスタム**】（自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している場合にかぎります）。

トポロジ設定の選択の詳細については、「[テクノロジー統合モニタのトポロジ設定](#)」(393ページ)を参照してください。

**注:** フィールドのマッピングを使った作業では、スクリプトで定義した必須フィールドおよび任意フィールドのみを使用します。詳細については、各データ・タイプの表を参照してください。

## チケット・サンプルのフィールドのマッピングの設定

チケットのデータ・タイプは、外部システムによって収集されたイベントを抽出し、BSM にインポートするために使用されます。

統合モニタのフィールド・マッピングを設定するには、次の手順を実行します。

1. 【**チケット**】データ・タイプを選択して、チケット・スクリプトをロードします。
2. 【**フィールドのマッピング**】テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。
3. その内容を【**フィールドのマッピング**】テキスト・ボックスにコピーします。

イベント・ハンドラの構造と構文の詳細については、「[イベント・ハンドラの構造と構文](#)」(399ページ)を参照してください。

### 本項の内容

- ・「[チケット・スクリプトの必須値](#)」(467ページ)
- ・「[チケット・スクリプトの任意値](#)」(469ページ)
- ・「[条件式の例](#)」(470ページ)
- ・「[チケット・スクリプトの例](#)」(470ページ)

### チケット・スクリプトの必須値

次の表に、チケット・スクリプトの必須値を示します。



フィールド名	タイプ	詳細	例
time_stamp	DOUBLE	1970 年 1 月 1 日以降の秒単位のタイムスタンプ。	time_stamp:DOUBLE=str_to_seconds(\$time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS").
severity	INT	事前に設定された次のいずれかの重大度になります（該当の整数に基づきます）。 SEVERITY_UNKNOWN SEVERITY_INFORMATIONAL SEVERITY_WARNING SEVERITY_MINOR SEVERITY_MAJOR SEVERITY_CRITICAL	4".equals(\$severity) ? "Low" : ("3".equals(\$severity) ? "Average" : ("2".equals(\$severity) ? "High" : ("1".equals(\$severity) ? "Critical" : :"Unknown"))))
target_name	STRING	チケットを生成したエンティティ（通常はサービス）の名前。	target_name="mail service"（ここに静的文字列を入力しないでください。チケットから動的に取得する必要があります）
data_source	STRING	チケットを生成したシステム。	data_source="ticketing"（この文字列は、HP ServiceCenter 統合ではなく汎用テクノロジー統合モニタ用に編集する必要があります）
ticket_id	STRING	チケットの ID。	ticket_id=112233
ticket_state	STRING	チケット・システムで定義したインシデント・ライフサイクルの状態。	"Open" / "Closed"
ticket_type	STRING	チケット・システムで定義したインシデントのタイプ。	"Incident"
orig_severity_name	STRING	重大度（外部 EMS での名称）。	orig_severity_name ="Cleared"



## チケット・スクリプトの任意値

スクリプトには、チケット・スクリプトで利用できる任意値を説明するためのコメントが含まれています。次の表に、チケット・スクリプトの任意値を示します。

フィールド名	タイプ	詳細	例
subject	STRING	イベント・ソースを表す中/高レベルの階層。	CPU, SAP application, hard disk
instance	STRING	イベントを生成した対象のインスタンス。イベント・ソースを表す最下位レベルの階層です。	D:\\
object	STRING	チケット・ソースを表す階層の任意レベル。	object="OS"
logical_group	STRING	該当のチケットの論理グループ。	logical_group="error messages"
monitor_group	STRING	該当のチケットをレポートしたモニタ・グループ。	monitor_group="log monitors on \\hostname"
elapsed_time	STRING	チケットの経過時間。	
orig_severity_name	STRING	チケット・システムで定義した重大度の名前。	
attr1	STRING	予備データ・スロット。	attr1=\$history
attr2	STRING	予備データ・スロット。	attr2=\$moreHistory
attr3	STRING	ビジネス・サービスを所有する組織の名前（ビジネス・サービス統合トポロジ・フローで使用する場合）。	Attr3="XYZ Inc"
attr4	STRING	ビジネス・サービスを所有する組織のタイプ（ビジネス・サービス統合トポロジ・フローで使用する場	Attr4="department"

フィールド名	タイプ	詳細	例
		合)。	
attr5	STRING	長い文字列用の予備データ・スロット。2000 文字までの値に使用します。	attr5=\$Longhistory

条件式の例

この例はチケット・サンプルの重大度を設定します。チケット・システムで使用されているステータス項と BSM で使用されているステータス項で照合を行います。

```
4".equals($severity) ?"Low" :("3".equals($severity) ?"Average" :
("2".equals($severity) ?"High" :("1".equals($severity) ?"Critical" :
"Unknown"))))
```

チケット・スクリプトの例

```
[$DEFAULT_PARAMETERS$]
time_stamp:DOUBLE=$time_stamp
ticket_id=$ticket_id
ticket_state=$ticketStatus
severity:INT=$severity
target_name=$target_name
data_source="ticketing"
ticket_type="Incident"
orig_severity_name="4".equals($severity) ?"Low" :("3".equals($severity)
? "Average" :("2".equals($severity) ?"High" :("1".equals($severity)
? "Critical" :"Unknown"))))
```

# チケット発行データを収集する統合モニタの設定方法

このタスクでは、サードパーティのチケット発行システムからインシデントおよびイベントを収集し、データ・サンプルを BSM にインポートするように SiteScope を設定する手順について説明します。

1. 統合方法の計画

統合モニタのタイプを確認します。EMS システムから BSM で表示する情報のタイプを検討します。いずれかの特定の統合モニタが組織のニーズを満たすかどうか、または汎用統合モニタ（テクノロジ・ログ・ファイル、データベース、SNMP トラップ、Web サービス）が必要かどうか

かを判別します。

概念の詳細については、[「統合モニタの概要」\(388ページ\)](#)を参照してください。

## 2. BSM 統合の設定

SiteScope と BSM を統合します。詳細については、[「BSM と通信するための SiteScope の設定方法」\(228ページ\)](#)を参照してください。

## 3. SiteScope サーバの選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- SAM システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「[システム可用性管理] ページ」を参照してください。
- [EMS 統合管理] で、[新規統合] または [統合の編集] ボタンをクリックします。[統合の編集] ダイアログ・ボックスで、[システム可用性管理] パネルのリンクをクリックして、SiteScope サーバを選択できる [SAM 管理] ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「[統合の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

## 4. 統合モニタのグループの作成

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[新規 SiteScope グループ\] ダイアログ・ボックス」\(258ページ\)](#)を参照してください。

**ヒント:** 統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM に報告されるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

## 5. 統合モニタの追加

モニタを設定して、統合モニタの構成に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- 「HP OM イベント・モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「HP Service Manager モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- 「NetScout イベント・モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

次の汎用統合モニタを選択できます（汎用統合モニタは BSM 9.1x 以前のバージョンでのみサポートされます。BSM 9.2x の新しいすべてのサードパーティ・データ統合では、BSM ヘルプの『BSM アプリケーション管理ガイド』の説明に従って BSM Connector を使用します）。

- ・「テクノロジー・データベース統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- ・「テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- ・「テクノロジー SNMP トラップ統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）
- ・「テクノロジー Web サービス統合モニタ」（詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』を参照してください）

## 6. モニタのフィールドマッピングの編集

マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

- a. [フィールドのマッピング] パネルで、[**チケット**] フィールド・マッピング・スクリプトを選択し、[**ファイルのロード**] をクリックします。
- b. 対応するフィールド・マッピング・グループに、データの抽出元にするログ・ファイルに表示されるスクリプト値をマッピングすることにより、スクリプトを編集して、BSM に転送する監視対象アプリケーションから SiteScope でデータを取得できるようにします。

必須スクリプト値については、「[チケット・スクリプトの必須値](#)」(467ページ)を参照してください。

任意指定のスクリプト値については、「[チケット・スクリプトの任意値](#)」(469ページ)を参照してください。

**注:** [フィールドのマッピング] 設定は、[トポロジ設定] パネルの [**データなしのレポート トポロジ**] チェック・ボックスが選択されている場合は、使用できません。データなしのトポロジ・レポートの詳細については、「[データなしのトポロジのレポート](#)」(474ページ)を参照してください。

## 7. トポロジ・スクリプトへのデータのマップ-オプション（トポロジを BSM に報告する場合は必須）

[トポロジ設定] パネルで、BSM の適切な CI 階層にデータを転送するためのトポロジ・スクリプトを選択します。

- ・ **チケット**: Monitored By 関係によって接続された EMS モニタ CI を持つ Business Service CI を作成する場合に選択します。EMS モニタ CI から Business Service CI に状態が伝搬されます。

**注:** トポロジ・スクリプトには、EMS モニタ CI（統合によって作成されるトポロジの最下位リーフ）が含まれている必要があります。

- ・ **カスタム**: 独自のトポロジ・スクリプトを作成する場合に選択します

トポロジ設定を編集します。トポロジ・スクリプトは、BSM の RTSM 内の必要な CI にデータを転送するために必要な値で設定されます

**注:**

- フィールド・マッピングを使用するとき、フィールド・マッピング・フィールドをトポロジ・スクリプトの入力として使用できます。たとえば、レガシー・イベント・マッピングを使用するときは、次の方法で [Subject] フィールドの値にアクセスできます。

```
subject = Framework.getDestinationAttribute("Subject")
```

- さらに、group0, group1 など、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタからの「モニタ変数」の値、またはテクノロジー・データベース統合モニタ内のデータベース列の名前、またはその他の統合モニタ内のその他の変数にアクセスできます。たとえば、次の方法で、変数 group1 の値にアクセスできます。

```
group1 = Framework.getDestinationAttribute("group1")
```

## 8. フィールド・マッピング・スクリプトのテスト - オプション

[トポロジ設定] パネルで、[スクリプトのテスト] をクリックして、モニタの実行前にスクリプトをテストします。次の内容がテストされます。

- フィールドのマッピングおよびトポロジ・スクリプトの構文を確認します。
- マッピング結果を表示します。
- トポロジ・スクリプトが設定されている場合は、トポロジ結果を表示します。

## 9. BSM での EMS 統合アプリケーションの設定

モニタの設定に加え、BSM の EMS 統合アプリケーションの設定が必要になります。詳細については、[HP ソフトウェア統合サイト](#)にある「How to Integrate Data from Third-Party Sources (EMS Data) into HP Business Service Management」の「Create an EMS integration (for Event or Ticket Samples)」で残りの手順を参照してください。

**注:** 測定値統合を設定する場合、BSM の [SAM 管理] にアクセスし、新しい統合を設定する必要はありません。モニタを作成して、[レポート トポロジ] オプションを選択するだけです。

## 10. 結果

サードパーティのシステムで収集されて統合モニタで処理されると、イベントが生成されて

< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs ディレクトリの

**HPSiteScopeOperationsManagerIntegration.log** ファイルにそのイベント・データが書き込まれます。各イベントはログの個別の行に書き込まれます。ログ・ファイル・ポリシーにより、このファイルを読み取り、BSM に送信されるイベント・メッセージを作成するようにエージェントに指示が出されます。

イベントは、サービス状況、システム可用性管理 イベント・ログ、およびトレンド・レポートで参照できます。

## 第34章: データなしのトポロジのレポート

SiteScope テクノロジ統合モニタによって検出されたトポロジのみを、データのレポートなしで、SiteScope でレポートできます。

### タスク

データなしでトポロジをレポートする方法

このタスクでは、データを送信することなく SiteScope テクノロジ統合モニタにより検出されたトポロジのレポートを有効化する方法について説明します。

#### 1. テクノロジ統合モニタの設定

- a. テクノロジ統合モニタを設定する場合、[トポロジ設定] パネルで **[データなしでトポロジをレポート]** チェック・ボックスを選択します。

**注:** このオプションが選択されている場合、[フィールド・マッピング] 領域は利用できません。

- b. 次のオプションからトポロジ・スクリプトを選択します。
  - **コンピュータ**: コンピュータ CI を持つトポロジを作成する場合に選択します。
  - **コンピュータ - 実行中のソフトウェア**: コンピュータ CI のあるトポロジを親 CI として作成するよう選択し、それに基づいて [ソフトウェア CI を実行] を選択します。
  - **カスタム**: 取得したデータをコンピュータ CI または実行中のソフトウェア CI ではなく特定の CI に送信する場合は、独自のトポロジ・スクリプトの作成を選択します。
- c. モニタによって検出されたデータを、トポロジ設定の関連する属性にマッピングします。BSM のみにトポロジをレポートするには、トポロジ・スクリプトを必要な値で特別に設定します。

必須スクリプト値については、[「共通イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定」\(449ページ\)](#)を参照してください。

**注:**

- **コンピュータ** および **コンピュータ - 実行中のソフトウェア** は、データ・タイプ・フローなしのレポート・トポロジで利用可能な、最初からすぐに利用可能なトポロジ・スクリプトです。
- **コンピュータ** および **コンピュータ - 実行中のソフトウェア**・スクリプトは、SiteScope が BSM バージョン 9.x 以降に接続されている場合にのみ利用できます。

**注:** テクノロジ・ログ・ファイル統合モニタ、またはテクノロジ・データベース統合モ

ニタのデータベース名のカラム, または他の統合モニタの他の変数から group0, group1 のような「モニタ変数」の値にアクセスできます。たとえば, 次の方法で, 変数 group1 の値にアクセスできます。

```
group1 = Framework.getDestinationAttribute("group1")
```

## 2. スクリプトのテスト - オプション

〔トポロジ設定〕パネルで, 〔**スクリプトのテスト**〕をクリックして, モニタの実行前にスクリプトをテストします。トポロジ結果が表示されます。

このテストでは, BSM にトポロジを転送しません。

## 第35章: Network Node Manager の統合

BSM は、HP Network Node Manager (NNM) からイベントを受け取ることができます。Network Node Manager (NNM) からのイベント・データを転送するには、BSM に転送するイベントごとにスクリプトを実行するように NNM を設定します。次のいずれかのアクションを実行するスクリプトを記述し、NNM と関連付けることができます。

- NNM データをログ・ファイルに書き込む
- SNMP トラップと NNM データと一緒に SiteScope サーバに送信する

スクリプトでデータをログに書き込む場合は、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタを使用してデータを読み取り、BSM に転送します。SNMP トラップを SiteScope サーバに送信するスクリプトを使用する場合は、SNMP トラップを受信して BSM に転送するように設定したテクノロジー SNMP トラップ統合モニタを使用します。

### 学習事項

Network Node Manager データをエクスポートするスクリプト

使用するスクリプトは、NNM からのデータをコマンド・ライン引数として受け取り、データを BSM に転送できるように処理する必要があります。次の各項では、NNM データのエクスポートに使用可能なスクリプト例について説明します。

#### ログ・ファイルへの書き込みを行うサンプル・スクリプト

次の Perl スクリプトは、コマンド・ラインからデータを受け取り、ログ・ファイル統合モニタで解析可能なカンマ区切りベクトル値としてログ・ファイルに書き込みます。

```
#!/usr/bin/perl
open LOG, ">>log1.log" or die;
print LOG (join ' ', @ARGV) . "\n";
close LOG;
```

#### SNMP トラップ・データを送信するサンプル・スクリプト

次の Perl スクリプトは、コマンド・ラインからデータを受け取り、テクノロジー SNMP トラップ統合モニタでキャッチ可能な SNMP トラップ内のメッセージとして送信します (Network Node Manager で生成された SNMP データを使用)。第 1 パラメータとしてトラップの送信先となるホスト名を、第 2 パラメータとして警告の文字列記述を受け取ります。

```
#!/usr/bin/perl
$host = $ARGV[0];
$message = $ARGV[1];
system("snmptrap $host \"\" 6 0 5 system.sysDescr.0 \" \" .\"octetstringascii $message\"");
```



## タスク

### Network Node Manager でのイベントの設定方法

要求されたイベント用のスクリプトを NNM で実行するように NNM 7.x を設定するには、次の手順を実行します。

**注:** それ以降のバージョンの NNM と NNMi については、NNMi のドキュメントを参照してください。

1. **［オプション］** メニューから、**［イベント設定］** を選択します。
2. **［イベント設定］** ダイアログから要求されたエンタープライズおよびイベントを選択します。
3. **［編集］** > **［イベント］** > **［イベントの変更］** ダイアログ・ボックス > **［アクション］** タブを選択します。
4. **［自動アクションのコマンド］** テキスト・ボックスにスクリプトのコマンド・ラインを入力します。NNM 変数を使用してコマンド・ラインにデータを渡すこともできます。
5. **［OK］** をクリックして **［イベントの変更］** ダイアログを閉じます。
6. **［イベント設定］** ダイアログの **［ファイル］** メニューから **［保存］** を選択します。

## 第6部: リモート・サーバ

監視するリモート・サーバからデータを収集するようにモニタを設定します。つまり、リモート環境で実行されているシステムとサービスを SiteScope で監視できるように、リモート・サーバを選択し、接続プロパティを設定します。

本項の内容：

- リモートの Windows および UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法（「[リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定](#)」(479ページ), 「[リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定](#)」(499ページ)）。
- Windows Management Instrumentation (WMI) を使用してリモートの Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法（「[リモート Windows 監視用の WMI サービスの設定](#)」(496ページ)）。
- UNIX 監視用にアダプタ・ファイルを作成しカスタマイズする方法（「[オペレーティングシステム・アダプタを使用した拡張 UNIX 監視](#)」(509ページ)）。
- SiteScope でリモート・サーバへの接続時に IPv4 アドレスより IPv6 アドレスが優先されるようにする方法（「[SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化](#)」(517ページ)）。
- リモート監視用にセキュア・シェル (SSH) 接続を使用する方法（「[セキュア・シェル \(SSH\) を使用したリモート監視の設定](#)」(523ページ)）。

## 第36章: リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定

資格情報やプロトコルなどの接続プロパティを設定するには、[Microsoft Windows リモート サーバ] オプションを使用します。これにより SiteScope は、リモート環境で実行されているシステムやサービスを監視できるようになります。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。同じホスト・マシンに対して複数のリモート・サーバを作成することもできます。

### アクセス方法

[**リモート サーバ**] コンテキストを選択する。リモート・サーバ・ツリーで、[**Microsoft Windows リモート サーバ**] コンテナをクリックします。

## 学習事項

### リモート・サーバの概要

SiteScope では、監視するサーバへの接続を確立できる必要があります。

また、Microsoft Windows リモート・マシンの Windows パフォーマンス・レジストリにアクセスしたり、リモート・ユーザとして UNIX リモート・マシンでコマンド・ライン・ツールを実行するには、アカウント権限を持つユーザとして認証されている必要があります。

リモート Windows サーバの監視では、サポートされているオペレーティングシステムがリモート・サーバ上で実行していることが必要です (下記のサポートされているオペレーティング・システムのリストを参照)。

リモート Windows サーバの監視でサポートされているオペレーティング・システム

リモート Windows サーバを設定する場合、次のオペレーティング・システムがサポートされます。

- Windows Server 2003, 2003 R2
- Windows Server 2008, 2008 R2
- Windows Server 2012, 2012 R2

## タスク

リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法

このタスクでは、リモート Windows サーバのデータを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。

1. 前提条件（Windows Server 2008, 2008 R2, 2012 および 2012 R2 リモート・サーバの場合）
  - SiteScope の管理者または「**リモート・サーバを追加、編集、または削除します。**」権限が付与されたユーザのみが、[リモートサーバ] ページを表示、編集できます。ユーザ権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。
  - SiteScope では、ユーザ・アカウント制御 (UAC) が有効、無効のどちらの場合も、Microsoft Windows Server 2008/2008 R2/2012/2012 R2 のリモート・サーバの監視が可能です。UAC が有効な場合、WMI または NetBIOS プロトコルの使用時に perfex モニタ (CPU、メモリ、ディスク・スペース、Microsoft Windows リソース、Microsoft Windows イベント・ログ、Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ、サービス、Microsoft IIS サーバ、Microsoft SQL サーバなど) でのアクセスの問題やデータ取得に関する問題を回避するためにリモート・サーバ上で次のレジストリ変更を行う必要があります。
    - i. [スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックし、「regedit」と入力して ENTER キーを押します。
    - ii. 次のレジストリ・サブキーを見つけてクリックします。HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Policies\System
    - iii. LocalAccountTokenFilterPolicy レジストリ・エントリが存在しない場合、次の手順を実行します。
      - [編集] メニューで、[新規] > [DWORD 値] を選択します。
      - 「LocalAccountTokenFilterPolicy」と入力し、ENTER キーを押します。
    - iv. LocalAccountTokenFilterPolicy を右クリックし、[修正] をクリックします。
    - v. [値のデータ] ボックスで、「1」と入力し、[OK] をクリックします。
    - vi. レジストリ・エディタを終了します。
  - リモートで Windows Server 2008 または 2012 マシンを監視するには、接続するリモート・サーバ上の Windows ファイアウォールの設定でリモート イベントのログ管理の例外を有効化する必要があります。さもないと、セッション・ハンドルを使おうとすると、呼び出しの結果が RPC\_S\_SERVER\_UNAVAILABLE エラーになります。
2. SiteScope でリモート Windows サーバのデータを監視できるようにする

SiteScope でリモート Windows サーバのデータを監視するには、次のいずれかの手順を行う必要があります。

・ **サーバごとに個別のリモート Windows サーバ接続プロファイルを定義します。**

リモート Windows サーバ・データの監視には、リモート・サーバへの認証されたアクセス権が必要です。Windows サーバ接続プロファイルは、SiteScope がリモート・サーバにログオンし、そのリモート・マシンで Windows パフォーマンス・レジストリにアクセスするために必要なアドレスとログイン資格情報を提供します。

Windows サーバ接続プロファイルを使用してリモート・サーバにログオンするには、次のいずれかを行います。

- 管理者権限を持つユーザとしてリモート・サーバにログオンします。
- リモート・サーバに、そのサーバの SiteScope 接続プロファイルで使用している接続方法とログイン権限に対応するユーザ・アカウントを作成または変更します。

・ **リモート・サーバへのアクセスを SiteScope に許可するドメイン・アクセス権限を設定します。**

SiteScope Windows 用の では自動的にサーバのリストが生成され、ローカル・ドメインに表示されます。サーバにはモニタ・タイプを指定する必要があり、これらのサーバは、モニタ・タイプのサーバ・リストに表示されます。SiteScopeWindows で実行している では、サーバごとに個別の接続プロファイルを作成しなくても、このリストを使用してリモート Windows サーバを監視できる場合があります。

ドメイン権限を設定するには、次のいずれかの方法を使用します。

- **SiteScope サービスを Domain Admin グループのユーザとして実行されるように設定します。**

インストール時の標準設定では、SiteScope 「ローカル・システム・アカウント」として実行されるように設定されています。ただし、「ローカル・システム・アカウント」には十分な権限が設定されていない場合があるため、SiteScope サービスはドメイン管理権限付きのユーザとしてログオンするよう設定することをお勧めします（ローカル・システム・アカウントはドメイン環境においてドメイン管理者ユーザ権限を持ち、非ドメイン環境においてビルトインの管理者ユーザ権限を持ちます）。これにより、SiteScope にドメイン内のサーバ・データを監視するためのアクセス権限が付与されます。

SiteScope サービスのユーザ・アカウントを変更するには、次の手順を実行します。

- A. **【管理ツール】** で **【サービス】** を開き、サービスのリストから **【SiteScope】** を選択します。**【SiteScopeのプロパティ】** ダイアログ・ボックスが開きます。
- B. **【ログオン】** タブをクリックし、**【ログオン】** 領域で、リモート・サーバにアクセス可能なアカウントを入力します。
- C. **【OK】** をクリックして設定を保存し、**【SiteScope のプロパティ】** ダイアログ・ボックスを閉じます。
- D. **SiteScope** を右クリックします。**【停止】** をクリックして、SiteScope のサービスを停止します。

E. **【開始】** をクリックします。これで、SiteScope サービスで新しいアカウントが使用されます。

- **SiteScope が実行されているサーバを、Active Directory の Domain Admin グループに追加します (Windows 2003 以降の場合)。**

このオプションでは、SiteScope サービスは、ローカル・システム・アカウントとしてログオンするように設定されますが、SiteScope が実行されているマシンはドメイン管理権限を持つグループに追加されます。

- **非管理者アクセスを許可するように、ドメイン内のすべてのマシンのレジストリ・アクセス権を編集します。**

このオプションを使用するには、監視する各リモート・マシンでレジストリを変更する必要があります。したがって、ドメインのサーバ・リストにドメインのすべてのマシンが含まれていても、接続プロファイルなしで監視できるのは、レジストリが変更されたりリモート・マシンのみです。

**注:** SiteScope サービスがドメイン・ユーザとして実行するように設定すると、SiteScope はすべての Windows 関連の認証にこのアカウントを使用します。このアカウントがこのドメイン全体で必要な権限を持っていることを確認する必要があります。

### 3. リモート監視用のユーザ権限を設定する

SiteScope がリモートの Windows マシンでパフォーマンス測定値を収集するには、リモート・マシンにアクセスする権限が SiteScope に必要です。

**注:**

- Microsoft のベスト・プラクティスでは、ユーザではなくグループに権限を与えることを推奨しています。
- レジストリを変更する前にレジストリをバックアップしてください。

SiteScope マシンでユーザ権限を設定するには、次の手順を実行します。

- a. SiteScope マシンで、**【スタート】 > 【ファイル名を指定して実行】** を選択します。[名前] テキスト・ボックスに「**Regedt32.exe**」と入力します。[レジストリ エディタ] ダイアログ・ボックスが開きます。
- b. **【HKEY\_LOCAL\_MACHINE】** ウィンドウで、**【SOFTWARE】 > 【Microsoft】 > 【Windows NT】 > 【CurrentVersion】 > 【Perflib】** を選択します。
- c. レジストリ・エディタのツールバーで**【編集】** をクリックし、**【アクセス許可】** を選択します。[Perflib のアクセス許可] ダイアログ・ボックスが開きます。
- d. [名前] 表示枠で、SiteScope がリモート・マシンへのアクセスに使用するユーザを選択します。[アクセス許可] 表示枠で、**【読み取り】** の**【許可】** チェック・ボックスを選択します。[OK] をクリックして設定を保存し、[Perflib のアクセス許可] ダイアログ・ボックスを閉じます。
- e. **【HKEY\_LOCAL\_MACHINE】** ウィンドウで、**【SYSTEM】 > 【CurrentControlSet】 >**

- [Control] > [SecurePipeServers] > [winreg] を選択します。レジストリ・エディタのツールバーで [セキュリティ] をクリックし、[アクセス許可] を選択します。[winreg のアクセス許可] ダイアログ・ボックスが開きます。
- f. [名前] 表示枠で、SiteScope がリモート・マシンへのアクセスに使用するユーザを選択します。[アクセス許可] 表示枠で、[読み取り] の [許可] チェック・ボックスを選択します。[OK] をクリックして設定を保存し、[winreg のアクセス許可] ダイアログ・ボックスを閉じます。
  - g. レジストリ・エディタのツールバーで、[レジストリ] をクリックし、[終了] を選択して設定を保存し、終了します。
  - h. SiteScope マシンを再起動します。
4. Windows リモート・サーバの設定を行ってテストする
- a. リモート・サーバ・ツリーでリモート Windows サーバを設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規 Microsoft Windows リモート サーバ\] / \[Microsoft Windows リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(484ページ)を参照してください。


**注:**

- リモート Windows サーバに SiteScope での SSH 監視を設定する場合、「[リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法](#)」(532ページ)を参照してください。
- リモート・サーバから管理データを収集する接続方法として、[メイン設定] の [接続方式] フィールドで WMI を選択した場合、WMI サービスがリモート・マシンに設定されている必要があります。タスクの詳細については、「[リモート監視用の WMI サービスの設定方法](#)」(497ページ)を参照してください。
- ローカルホスト・マシン (SiteScope が実行されているマシン) にある監視用の WMI 接続方法のタイプを設定する場合、[資格情報] セクションで [ユーザ名] および [パスワード] は空白のままにする必要があります。
- NetBIOS 接続方式を使用するときリモート監視対象サーバの名前としてリテラルの IPv6 アドレスを指定する場合、IPv6 アドレスを次のようにカスタマイズする必要があります。

1. すべてのコロン (「:」) 文字をダッシュ (「-」) 文字に置き換える。
2. 「**ipv6-literal.net**」というテキストを IP アドレスの最後に付加する。

たとえば、IPv6 アドレス: 2004:DB8:2a:1005:230:48ff:fe73:982d  
は次のようになります。2004-DB8-2a-1005-230-48ff-fe73-982d.ipv6-literal.net

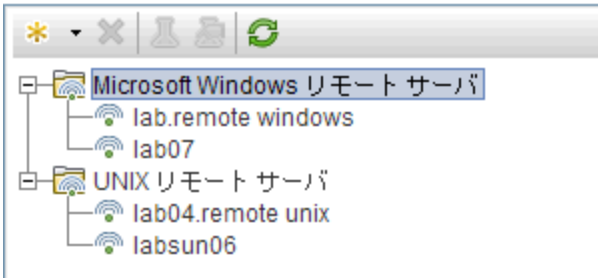
また、WMI 接続方法 (サポートされている場合) に切り替ええると、IPv6 アドレスを変更する必要がなくなります。

- b. SiteScope 用の Microsoft Windows リモート・サーバの定義を行ったら、該当するサーバの [テスト]  ボタンをクリックして接続をテストします。

**注:** リモート・カウンタを表示するときに【コンピュータに接続できません】というエラー・メッセージが表示された場合は、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/search/>) を参照してください。

5. 結果

リモート・サーバ・ツリーにある Windows リモート・サーバのリストにサーバが追加されます。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。



**注:** リモート・サーバの SiteScope 監視に関するトラブルシューティングと制限事項の詳細については、「[ヒント / トラブルシューティング](#)」(490ページ)を参照してください。

UI の説明


[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>サーバがモニタから参照されている場合は、リモート・サーバのリストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの【モニタ設定】パネルにある【サーバ】ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。</li><li>リモート・サーバのパスワードは、空白（スペース）と以下の特殊文字をサポートしています。 \ " &amp;   &gt; &lt; ^</li><li>テンプレート・モードで Microsoft Windows リモート・サーバを設定する場合、メソッド値は、下記の通り、大文字と小文字を一致させて入力しなければなりません。さもないと検証は適切に動作しません。NetBIOS, WMI, ssh (または SSH)</li></ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li><a href="#">「リモート・サーバ・ツリー」</a> (41ページ)</li><li><a href="#">「リモート・サーバのプロパティ・ページ」</a> (546ページ)</li></ul>

含まれている要素は次のとおりです。



UI 要素	詳細
保存	<p>リモート・サーバの設定が正しいかどうかを確認せずに、設定を保存します。</p> <p><b>ヒント:</b> <b>【保存 &amp; テスト】</b> の代わりに <b>【保存】</b> を使用すると、パフォーマンスが速くなります。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要がないためです。</p>
保存 & テスト	<p>設定を保存して、リモート・サーバの設定が正しいかどうかを検証します。SiteScope がリモート・サーバへの接続に失敗した場合、または設定に無効なプロパティがある場合、エラー・メッセージが表示されます。</p> <p><b>ヒント:</b> <b>【保存】</b> の代わりに <b>【保存 &amp; テスト】</b> を使用すると、パフォーマンスが遅くなります。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要があるためです。</p>
一般設定	
名前	<p>SiteScope で認識されるリモート・マシンの名前。この名前は、接続プロファイルを使用できるモニタの <b>【サーバ】</b> リストに表示されます。</p> <p><b>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>このリモート・サーバを必要とする各テンプレート・モニタに対して、テンプレート・モニタの <b>【サーバ】</b> ボックスにこの同じ値を入力する必要があります。</li> <li>名前が一意でない場合はデプロイメントが失敗します。</li> </ul>
詳細	<p>リモート Window サーバの詳細。このテキストは、リモートのプロパティを編集する場合にのみ表示されます。</p>
メイン設定	
Server	<p>監視対象サーバの実 IP アドレスまたは UNC 名。ネットワーク・アドレス変換 (NAT) は、リモート・ホスト定義を必要とする SiteScope モニタではサポートされていません。IP アドレスまたはホストを使ってモニタを設定する場合、SiteScope は、外部 IP (実際の IP) または内部 IP (NAT) のどちらが使用されているかを判別できません。NAT 環境でサーバを監視するには、ファイアウォール内に SiteScope を配置することをお勧めします。URL モニタ、またはその他の同様のモニタなど、ホスト固有の情報を収集しないモニタでは、バーチャル IP を使用できます。</p> <p>SiteScope サーバでホスト・ファイル、DNS、または WINS/DNS 統合を使用してこの一般名を IP アドレスに変換できる場合は、IP ホスト名も使用できます。</p> <p>同じホスト・マシンに複数のリモート・サーバを作成できます。たとえば、</p>

UI 要素	詳細
	<p>NetBIOS プロトコルを使用する 1 つのリモート・サーバと、WMI を使用する同じホスト・マシンの別のリモート・サーバを作成し、[一般設定] で一意の名前を指定できます。</p> <p>同時に複数のサーバを設定するときに同じログイン資格情報を使用するには、サーバ名またはアドレスをカンマ (,)、セミコロン (;)、または空白で区切って入力します。例: \\server1,\\server2,\\。</p> <p><b>注:</b> プロファイルを追加した後に接続をテストするには、Windows リモート・サーバのリストで [テスト]  ボタンをクリックします。</p> <p><b>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。</b> リモート・サーバ名を表すテンプレート変数名、たとえば、%%host%%。これにより、テンプレートのデプロイ時に変数に必要な情報の入力を求められたときに各サーバを入力できます。変数にサーバ名を入力するたびに、そのサーバのモニタ・インスタンスが作成され、リモート・サーバ・ツリーにサーバが追加されます。ホスト名がその時点でサーバ名と一致しない場合、モニタは失敗します。</p> <p>モニタ・テンプレートをデプロイするリモート・サーバが [リモートサーバ] にすでに存在する場合、モニタ・テンプレート内でそのサーバを参照できます。そのためには、SiteScope にアクセス可能なサーバを識別するシステム変数 \$\$SERVER_LIST\$\$ を参照します。詳細については、<a href="#">「変数の構文」(801 ページ)</a>を参照してください。</p>
資格情報	<p>リモート Windows サーバのユーザ名とパスワードを指定するオプションを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>ユーザ名およびパスワードを使用:</b> 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>ユーザ名:</b> リモート・サーバのユーザ名を入力するか、ユーザ・ログイン名を表すテンプレート変数 (%%user%% など) を使用します。 <p><b>注:</b> サーバが SiteScope マシンと同じドメイン内にある場合、ユーザ・ログイン名の前にドメイン名を追加します。例: &lt;ドメイン&gt;\&lt;ユーザ名&gt;。ドメイン内またはドメイン外のマシンにローカル・マシンのログイン・アカウントを使用する場合、ユーザ・ログイン名の前にそのマシン名を追加します。例: &lt;マシン名&gt;\&lt;ユーザ名&gt;。</p> </li> <li> <b>パスワード:</b> リモート・サーバのパスワードまたは SSH 鍵ファイルのパスフレーズを入力するか、パスワードを表すテンプレート変数 (%%password%% など) を使用します。公開鍵/秘密鍵ベースの認証の SSH 認証を使用する場合、ID ファイルのパスフレーズをここに入力します。 </li> </ul> </li> </ul>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>事前定義された資格情報を選択</b> : サーバの事前に定義されたユーザ名とパスワードを SiteScope で自動的に指定する場合は、このオプションを選択します (標準設定)。<b>「資格情報プロファイル」</b> ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、<b>「資格情報の追加」</b> をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、<b>「資格情報のプリファレンス」</b> (569ページ)を参照してください。</li> </ul>
トレース	<p>従属サーバへのメッセージと従属サーバからのメッセージを追跡して、SiteScope の <b>RunMonitor.log</b> ファイルに記録します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
メソッド	<p>Windows サーバ・リソースを監視する接続タイプを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>NetBIOS</b> : Microsoft Windows ネットワークの標準設定のサーバ間通信プロトコル。  <b>注</b> : NetBIOS 接続が使用され、<b>「トレース」</b> オプションが選択されている場合は、Windows プラットフォーム上の SiteScope を、リモート・サーバからパフォーマンス・カウンタ・データにアクセスするために必要な管理セキュリティ権限を持つアカウントで実行する必要があります。監視する複数のサーバが異なるドメインに存在する場合、異なるポリシーで管理されている場合、または SiteScope の実行に使用しているアカウントとは異なる固有のログインを必要とする場合は、リモート・サーバ・ビューの <b>「Microsoft Windows リモート サーバ」</b> オプションでこれらのサーバへの接続を定義する必要があります。</li> <li>• <b>SSH</b> :セキュア・シェル。Microsoft Windows ネットワークにインストールできる、よりセキュアな通信プロトコル。通常、エージェントレスな Windows SSH を使用していない場合、この接続方法では接続先の各サーバに SSH ライブラリをインストールする必要があります。Windows SSH (エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用) をサポートするモニタのリストについては、<b>「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」</b> (528ページ)を参照してください。SSH の要件の詳細については、<b>「セキュア・シェル (SSH) を使用したリモート監視の設定」</b> (523ページ)を参照してください。</li> <li>• <b>WMI</b> :Windows Management Instrumentation。NetBIOS よりセキュアな通信プロトコルで、パフォーマンス・データの収集に perfmon を使用する Windows サーバ・モニタをサポートします。WMI をサポートするモニタのリストについて、および WMI サービスをリモート監視用に設定する方法の詳細については、<b>「リモート Windows 監視用の WMI サービスの設定」</b> (496</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p><a href="#">ページ</a>)を参照してください。</p> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>WMI 接続方法で設定されたりリモート・サーバは、WMI をサポートしないモニタの設定時には、利用可能なリモート・サーバのリストに表示されません。</li> <li>ローカルホスト・マシン（SiteScope が実行されているマシン）にある Windows サーバのリソースを監視するための WMI 接続方法のタイプを設定する場合、[資格情報] セクションで <b>ユーザ名</b> および <b>パスワード</b> は空白のままにする必要があります。</li> </ul>
<b>Remote server encoding</b>	<p>リモート・サーバのオペレーティング・システムのバージョンで、SiteScope が稼動するサーバと異なる文字エンコードが使用される場合の、リモート・サーバのエンコード。このエンコードによって、エンコードされた内容を SiteScope で適切に表示できます。</p> <p><b>標準設定値：</b> Cp1252 エンコーディング</p>
<b>詳細設定</b>	
<b>SSH ポート番号</b>	<p>リモート SSH サーバで監視するポート。</p> <p><b>標準設定値：</b> 22</p>
<b>最大接続数</b>	<p>SiteScope でこのリモートに許可されている開いた接続数。この接続を使用するように設定されたモニタが多数ある場合、開いた接続数を、潜在的なボトルネックを避けるのに十分な数に設定します。</p> <p><b>標準設定値：</b> 3</p> <p><b>注：</b>この設定はリモート・サーバの実行テストには適用されません。テストでは常に新しい接続を作成します。</p>
<b>接続キャッシュの無効化</b>	<p>このリモートの接続キャッシュを無効にします。標準設定では、SiteScope キャッシュで接続が開かれます。</p> <p><b>標準設定値：</b> 選択されていない</p>
<b>SSH 認証方式</b>	<p>SSH 接続に使用する認証方法を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>パスワード：</b>パスワードを使用して認証します（標準設定）。</li> <li><b>鍵ファイル：</b>公開鍵/秘密鍵認証を使用して認証します。このオプションを選択すると、SiteScope では認証にファイル <b>&lt;SiteScope のルート・ディレ</b></li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p>クトリ &gt; \groups\identity の秘密鍵を使用します。対応する公開鍵がリモート・ホストの <b>authorized_keys</b> ファイルに含まれている必要があります。</p> <p>SSH の要件の詳細については、<a href="#">「セキュア・シェル (SSH) を使用したリモート監視の設定」 (523ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>SSH 接続の鍵ファイル</b>	<p>この接続の秘密鍵を含むファイルのパスと名前。標準設定の鍵ファイルは、<b>&lt; SiteScope の ルート・ディレクトリ &gt; \groups\identity</b> です。この設定は、認証方法が鍵ファイルの場合にのみ適用されます。</p>
<b>SSH バージョン 2 のみを使用</b>	<p>SiteScope で強制的に SSH プロトコルのバージョン 2 のみを使用します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>SSH Keep Alive メカニズム</b>	<p>SSH バージョン 2 のセッションに Keep Alive メカニズムを使用します。このオプションは、統合 Java クライアントを使用する場合にのみ適用されます。SSH keepalive パケットは 55 秒ごとに送信されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH</b>	<p>プリインストールされた SiteScope Windows SSH ファイルを使用します。SiteScope SSH ファイルを使用して Windows SSH をサポートするモニタのリストについては、<a href="#">「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」 (528ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>タグの検索/フィルタ</b>	
<b>タグの追加</b>	<p>[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」 (87ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>&lt;タグ名と値&gt;</b>	<p>SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、<a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」 (78ページ)</a>を参照してください。</p>

その他の関連 UI ページ: [「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 \(546ページ\)](#)

## ヒント / トラブルシューティング

本項では、リモート・サーバを使った作業でのトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- 「リモート Windows サーバの監視の一般的な問題」(490ページ)
- 「Windows サーバ監視で推奨されるネットワーク設定」(491ページ)
- 「Windows リモート・サーバのテスト時のエラー・コードについて」(491ページ)
- 「リモート Windows サーバでの Microsoft Windows イベント・ログ・アクセス」(491ページ)
- 「SiteScope Perfex を使用したリモート Windows 接続の不正な資格情報を使用します。」(493ページ)
- 「SiteScope がリモート・レジストリにアクセスしようとしたときに返されたデータの表示」(493ページ)
- 「NETBIOS を介して接続するリモート・ホストのシステム・リソース表示時に使用するシステム・エンコーディング」(495ページ)

### トラブルシューティングおよび制限事項

#### リモート Windows サーバの監視の一般的な問題

リモート Windows サーバの SiteScope 監視のセットアップとトラブルシューティングに関して、次の追加情報があります。

- PERFMON を使用してリモート・マシンに接続する場合。PERFMON を使用して接続できない場合、リモート・サーバ上の SiteScope アカウントに付与されているユーザ・アクセス権に関して問題がある可能性があります。SiteScope でサーバ統計を監視できるようにするには、特定の管理権限が必要です。
- NetBIOS 方式を使用して複数の Windows リモート・サーバを同じホスト・マシンに対して設定すると、接続は失敗します。これは、Windows では、複数のユーザ名を使用した同じユーザによるサーバまたは共有リソースへの複数接続が許可されていないためです（システム・エラー 1219）。
- セキュリティ上の理由から、SiteScope に管理者アカウントの全権限の使用が許可されない場合があります。SiteScope に制限付きの監視アクセス権を付与するには、Windows の特定のレジストリ・キーを編集します。リモート・マシンからレジストリへのアクセスの制限の詳細については、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/q153183/>) を参照してください。
- スタンドアロン・サーバ、または SiteScope サーバで表示可能になっているドメイン以外のサーバを監視する必要がある場合、**【ログイン】**ボックスにマシン名、スラッシュ (/)、ログイン名の順番で入力してください。例: loneserver\sitescope。
- リモートで Windows Server 2008 または 2012 マシンを監視するには、接続するリモート・サーバ上の Windows ファイアウォールの設定でリモート イベントのログ管理の例外を有効化する必要があります。さもないと、セッション・ハンドルを使おうとすると、呼び出しの結果が RPC\_S\_

SERVER\_UNAVAILABLE エラーになります。

**注:**

- Windows オペレーティング・システムでのパフォーマンス・データのセキュリティ確保の詳細については、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/q146906/>) を参照してください。
- パフォーマンス・モニタ・カウンタに関する問題のトラブルシューティングの詳細については、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/152513/>) を参照してください。

### Windows サーバ監視で推奨されるネットワーク設定

Windows ベースのサーバを監視する際、「システム エラー: 53 - ネットワーク パスが見つかりません。」のようなネットワーク関連エラーを避けるために、WINS が有効ではないネットワークでは NetBIOS over TCP/IP を無効にすることをお勧めします。

1. **【ネットワーク接続】**を開きます。
2. 設定するネットワーク接続を右クリックし、**【プロパティ】**をクリックします。
3. **【一般】**タブで、**【インターネット プロトコル (TCP/IP)】**をクリックし、**【プロパティ】**をクリックします。
4. **【詳細設定】**をクリックし、**【WINS】**タブをクリックして、**【NetBios over TCP/IP を無効にする】**オプションを選択します。

### Windows リモート・サーバのテスト時のエラー・コードについて

**問題:**

リモート・サーバのテスト結果で、わかりやすいエラー・コードが状態文字列に含まれていない。

**解決方法:**

Windows ネットワーク・メッセージを説明し、問題解決情報を提供するには、net helpmsg コマンドを使用します。

次を実行します。

```
net helpmsg <エラー・コード番号>
```

たとえば、「net helpmsg 53」と入力すると「ネットワーク パスが見つかりません。」と表示されます。

### リモート Windows サーバでの Microsoft Windows イベント・ログ・アクセス

**問題:**

リモート Windows イベント・ログの表示時、またはリモート Windows マシンの監視に関する通知の受信時に、次のメッセージが表示される。



イベント ID (XXXX) (ソース XXXX 内) に関する説明が見つかりませんでした。次の文字列が含まれています。  
処理が正常に完了しました。

**原因：**

必要なレジストリ・キー（および参照ファイル）がリモート・コンピュータに存在しない場合、SiteScope はデータに形式を設定できず、データを汎用的な形式で表示します。

**解決方法：**

必要なレジストリ・エントリと DLL ファイルを、イベント・ビューア・アプリケーションを実行するリモート・コンピュータにコピーする必要があります。

**リモート・レジストリ・エントリと DLL ファイルをローカル SiteScope マシンで取得するには、次の手順を実行します。**

1. SiteScope でイベントを正しく取得できないリモート・マシンのエントリを、イベント・ビューアで見つけます。ソース、イベント ID、記述の情報を書き留めます。例：

ソース :MSEExchangeSA, イベント ID :5008, 説明 :メッセージ追跡ログ・ファイル  
C:\exchsrvr\tracking.log\20020723.log を削除しました。

2. レジストリ設定 **HKEY\_LOCAL\_MACHINE\System\CurrentControlSet\Services\EventLog\Application** を開き、ソースをクリックします（例 : MSEExchangeSA など）。
3. **EventMessageFile** をクリックして、その DLL が存在するデータを書き留めます（C:\EXCHSRVR\bin\madmsg.dll など）。
4. リモートで DLL を見つけて、SiteScope マシンにコピーします。次のいずれかの方法でコピーできます。
  - BackOffice リソース・キット第 2 版の **Initlog.exe** ユーティリティを使用して、必要なレジストリ・エントリを Exchange Server コンピュータからリモート・コンピュータにコピーします。Exchange Server コンピュータの管理者権限を持つアカウントで Windows にログオンしている場合、このユーティリティを使用して必要な DLL ファイルをコピーすることもできます（Microsoft の記事 Q184719 を参照してください）。
  - FTP、電子メールなどを使用してファイルをローカル・ドライブにコピーします。
5. SiteScope は、ステップ 3 の **EventMessageFile** フィールドのデータを使用して、ローカル・マシンのどこに DLL があるかを判別します。このステップと同じフォルダ構造を作成して、ファイルをそのディレクトリに置く必要があります。  
  
または、ディレクトリ構造を c:\Windows\System32 のように変更し（SiteScope は標準設定ではリモート・マシン上の ADMIN\$ を参照します）、DLL をそのフォルダに置きます。ただし、この構造と DLL は両方のマシンに存在する必要があります。これを行う場合、ステップ 3 でレジストリを更新して、DLL が存在するディレクトリを反映する必要があります。



SiteScope Perfex を使用したリモート Windows 接続の不正な資格情報を使用します。

**問題:**

SiteScope は特定のリモートに指定された資格情報を無視して、SiteScope サービスを開始するために使用される資格情報を使用して、perfex ベースのモニタ (CPU, メモリ, および Windows モニタなど) に対してモニタリング・コマンドおよびアクションを実行しようとします。

**解決方法:**

perfex ベースのモニタがリモート・サーバで正しく動作するには、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルの \_perfexOptions= プロパティに -optionalSetupConnection を追加する必要があります。その他の文字列がすでにこのプロパティに追加されている場合は、1つの空白文字を区切り文字として使用します。

**例:**

```
_perfexOptions=-wrmUiTimeout 300 -optionalSetupConnection
```

SiteScope がリモート・レジストリにアクセスしようとしたときに返されたデータの表示

SiteScope がリモート・レジストリにアクセスしようとしたときに返されたデータを表示するには、次の手順に従います。

1. SiteScope サーバでコマンド・ウィンドウを開きます。
2. ディレクトリを <SiteScope のルート・ディレクトリ>\tools に変更します。
3. コマンド・ラインから次のように入力します。

```
perfex \\MACHINE -u username -p password -d -elast "Application"
```

このコマンドでは、Application ログ内のエントリ数を返します。例:

```
DEBUG: perfex debugging on

-----
MODE: elast
LOGNAME: Application
START RECORD: 0
MACHINE: ¥¥g11nvm46
OLDEST RECORD=1
NUMBER OF RECORDS=1847
Next Record: 1848
```

4. 探しているイベントを見つけるには、最後の 10 個か 12 個程度のイベントだけを表示します。この例では、コマンドは次のようになります。

```
perfex \\MACHINE -u username -p password -d -elog "Application" 2355 | more
```

5. 必要なエントリが見つかるまで各エントリを確認します。次回ステップ3のコマンドを使用するときに検索しやすいように、レコードIDを書き留めておきます。
6. この出力には、SiteScope が受信するデータが表示されています。今回の例では、通常は次のようなデータが返されます。

```
Type:情報
Time:02:00:24 08/01/102
Source:MSExchangeMTA
ID:298
Category:1
Record:2342
Machine:EX-SRV
FILE=C:\EXCHSRVR\res\mtamsg.dll
REMOTE FILE=
String 835050d is:MTA
Next String 835054d is:OPERATOR
Next String 83505dd is:34
Next String 835060d is:0
Next String 835062d is:
File:C:\EXCHSRVR\res\mtamsg.dll
Remote Path:
calling FormatMessage()
Formatted Message 142 bytes long
Raw message is:The most current routing information has been loaded by the MTA, and a text
copy was saved in the fileGWART0.MTA.[MTA OPERATOR 34 0] (12) Message:The most current
routing information has been loaded by the MTA, and a text copy was saved in the file
GWART0.MTA.[MTA OPERATOR 34 0] (12)
```

ファイル・パスはリモート・ファイルが検出された場所です。DLL を WINDOWS\SYSTEM にコピーした場合、ファイルとリモート・ファイル・パスは次のようになります。

```
Type:情報
Time:03:15:00 08/01/102
Source:MSExchangeIS Public
ID:1221
Category:6
Record:2350
Machine:EX-SRV
FILE=C:\WINNT\SYSTEM32\mdbmsg.dll
REMOTE FILE=\\ex-srv\ADMIN$\SYSTEM32\mdbmsg.dll
String 835054d is:0
```

```
Next String 835056d is:  
File:C:\WINNT\SYSTEM32\mdbmsg.dll  
Remote Path:\\ex-srv\ADMIN$\SYSTEM32\mdbmsg.dll  
LOADING LIB REMOTE:\\ex-srv\ADMIN$\SYSTEM32\mdbmsg.dllcalling  
FormatMessage()Formatted Message 89 bytes long  
Raw message is:The database has 0 megabytes of free spaceafter online defragmentation  
has terminated.Message:The database has 0 megabytes of free space afteronline  
defragmentation has terminated.
```

NETBIOS を介して接続するリモート・ホストのシステム・リソース表示時に使用するシステム・エンコーディング

この制限は、受信したデータの表示にリモート・ホストのエンコーディングを使用するすべてのサーバ・モニタに影響します。

SiteScope は、NETBIOS を介して接続するリモート・ホストのシステム・リソース情報を表示する際に、標準設定のシステム・エンコーディングを使用します。[リモート サーバのエンコード] フィールド (リモート・サーバの [メイン設定] で指定可能) は使用されません。たとえば、システム・エンコーディングが ASCII でリモートのエンコーディングが Unicode の場合、ASCII 文字は正しく表示され、Unicode 記号はサポートされません。

#### WMI の問題

WMI 問題のヒントおよびトラブルシューティングについては、[「リモート Windows 監視用の WMI サービスの設定」\(496ページ\)](#) を参照してください。

## 第37章: リモート Windows 監視用の WMI サービスの設定

SiteScope では、Windows Management Instrumentation (WMI) を使用して、Windows リモートサーバ上のデータを監視できます。WMI は、Windows サーバで実行しているリモート・サーバから管理データを収集する、NetBIOS よりも安全な通信方法です。

WMI を使用すると、パフォーマンス・ライブラリのオブジェクトのシステム・カウンタ・データにアクセスできます。これは、Perfmon ユーティリティに表示されるパフォーマンス・データと同じデータです。

### 学習事項

WMI をサポートしているモニタ

WMI 方式のデータ収集をサポートしているモニタは次のとおりです。

- 「Citrix モニタ」
- 「ColdFusion サーバ・モニタ」
- 「CPU モニタ」
- 「ディスク容量モニタ (廃止)」
- 「ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ」
- 「メモリ・モニタ」
- 「Microsoft Lync Server 2010 モニタ」 (Microsoft 音声ビデオ会議サーバ、Microsoft アーカイブ・サーバ、Microsoft Director サーバ、Microsoft エッジ・サーバ、Microsoft フロント・エンド・サーバ、Microsoft 仲介サーバ、Microsoft 監視および CDR サーバ、Microsoft Registrar サーバ)
- 「Microsoft ASP サーバ・モニタ」
- 「Microsoft Hyper-V モニタ」
- 「Microsoft IIS サーバ・モニタ」
- 「Microsoft SQL Server モニタ」
- 「Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ」
- 「Microsoft Windows Media Server モニタ」
- 「Microsoft Windows リソース・モニタ」
- 「Microsoft Windows サービス・ステート・モニタ」
- 「Real Media Server モニタ」
- 「サービス・モニタ」

## タスク

### リモート監視用の WMI サービスの設定方法

このタスクでは、WMI を使用してリモート Windows サーバのデータを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。WMI プロトコルをサポートするモニタのリストについては、「[WMI をサポートしているモニタ](#)」(496ページ)を参照してください。

**注:** このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、「[リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定](#)」(479ページ)を参照してください。

#### 1. 前提条件

SiteScope が Windows マシンにインストールされている必要があります。

#### 2. リモート・サーバに WMI サービスを設定する

SiteScope で WMI を使用してリモート・マシンのパフォーマンス測定値を収集する場合、次の要件があります。

- ・ リモート・マシンで WMI サービスが実行されている必要があります。詳細については、『Windows Management Instrumentation』マニュアル ([http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa826517\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa826517(VS.85).aspx)) (英語サイト) を参照してください。
- ・ WMI リモート・サーバにログオンするユーザには、WMI 名前空間 `root\CIMV2` からリモートで統計情報を読み取る権限が必要です。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/295292> を参照してください。
- ・ 監視ユーザは、ターゲット・サーバ上の Performance Monitor Users グループに追加されている必要があります。また、DCOM リモート起動およびアクティベーションの権限を持っている必要があります (<http://msdn.microsoft.com/en-us/library/Aa393266.aspx> を参照)。

WMI サービスの問題に関するトラブルシューティングの詳細については、「[ヒント / トラブルシューティング](#)」(498ページ)を参照してください。

#### 3. SiteScope への WMI プリファレンス設定の設定 (任意指定)

【プリファレンス】 > 【一般プリファレンス】 > 【WMI プリファレンス】では、ローカル・ホスト・マシンの Windows サーバ・リソースを監視するための接続タイプと WMI タイムアウト値を設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[WMI プリファレンス](#)」(598ページ)を参照してください。

#### 4. モニタの設定

WMI をサポートするモニタを追加し、モニタ設定を行います。

**注:** ローカルホスト・マシン (SiteScope が実行されているマシン) にある Windows サーバのリソースを監視するための WMI 接続方法のタイプを設定する場合、【資格情報】セクションで【ユーザ名】および【パスワード】は空白のままにする必要があります。

## ヒント / トラブルシューティング

### WMI の制限事項

WMI 使用時に 4000 を超えるモニタを使用することはお勧めしません。

カウンタまたはオブジェクトがリソース間で共有されていると、SiteScope はカウンタのデータを受信できず、クエリは失敗します。同じクエリでほかのカウンタが参照されている場合、それらのカウンタのデータも受信できません。詳細とトラブルシューティング情報については、<http://support.microsoft.com/kb/836802> を参照してください。

### WMI がカウンタを取得できない

場合によっては、perfmon ではカウンタが値 0 を示しているのに WMI では同じカウンタが n/a を示すことがあります。perfmon ユーティリティを使用して選択できないカウンタは、このように動作します。perfex がこれらのカウンタの値を取得できるのは、perfmon をバイパスしてレジストリ経由でカウンタにアクセスしているためです。

### WMI データが同期されない

WMI データは、Perfmon ユーティリティと同期されている必要があります。WMI データが同期されていない場合、次の操作を実行します。

1. WMI サービスが対象マシンで開始していることを確認します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa826517\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa826517(VS.85).aspx) を参照してください。
2. 名前空間 **root\CIMV2** が、SiteScope WMI リモート・サーバで指定したユーザにリモート・アクセスできるように設定されていることを確認します。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/295292> を参照してください。
3. 対象マシンで、コマンド **perfmon** を実行し、必要な perfmon オブジェクトが表示されることを確認します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa645516\(VS.71\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa645516(VS.71).aspx) を参照してください。

これらのライブラリを再構築する方法の詳細については、<http://support.microsoft.com/?kbid=300956> を参照してください。

4. 対象マシンで、コマンド **perfmon /wmi** を実行し、必要な perfmon オブジェクトが表示されることを確認します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa645516\(VS.71\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa645516(VS.71).aspx) を参照してください。

必要な perfmon オブジェクトが表示されない場合、コマンド **perfmon wmiadap /f** を実行します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa394528\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa394528(VS.85).aspx) を参照してください。

## 第38章: リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定

資格情報やプロトコルなどの接続プロパティを設定するには、[UNIX リモート サーバ] オプションを使用します。これにより SiteScope は、リモート環境で実行されているシステムやサービスを監視できるようになります。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。同じホスト・マシンに対して複数のリモート・サーバを作成することもできます。

**ヒント:** SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタを使用して、SiteScope を拡張し、標準設定ではサポートされていないUNIX のバージョンに接続してリモートで監視できます。詳細については、「[オペレーティングシステム・アダプタを使用した拡張 UNIX 監視](#)」(509 ページ)を参照してください。

### アクセス方法

[**リモート サーバ**] コンテキストを選択する。リモート・サーバ・ツリーで、[**UNIX リモート サーバ**] コンテナをクリックします。

## 学習事項

### UNIX リモート・サーバの概要

SiteScope では、各リモート UNIX サーバにエージェント・ソフトウェアをインストールしなくても、各サーバで実行されているシステムとサービスを監視して特定の統計情報（CPU、ディスク領域、メモリ、プロセスなど）を取得できます。UNIX モニタの構成時に表示するサーバを選択すると、SiteScope によって、リスト内のサーバ・アドレスごとに新しいリモート接続プロファイルが作成されます。

## タスク

### リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法

このタスクでは、リモート UNIX サーバのデータを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。

1. SiteScope でリモート UNIX サーバのデータを監視できるようにする
  - SiteScope の管理者または「**リモート・サーバを追加、編集、または削除します。**」権限が付与されたユーザのみが、[リモート サーバ] ページを表示、編集できます。ユーザ権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744 ページ)を参照してください。

- ・ リモート UNIX サーバ・データの監視には、リモート・サーバへの認証されたアクセス権が必要です。UNIX サーバ接続プロファイルは、SiteScope がリモート・サーバにログオンするために必要なアドレスとログイン資格情報を提供します。



UNIX サーバ接続プロファイルを使用してリモート・サーバにログオンするには、次のいずれかを行います。

- 管理者権限を持つユーザとしてリモート・サーバにログオンします。
- リモート・サーバに、そのサーバの SiteScope 接続プロファイルで使用している接続方法とログイン権限に対応するユーザ・アカウントを作成または変更します。

SiteScope が監視対象とするリモート UNIX サーバごとに個別のリモート UNIX サーバ接続プロファイルを定義する必要があります。

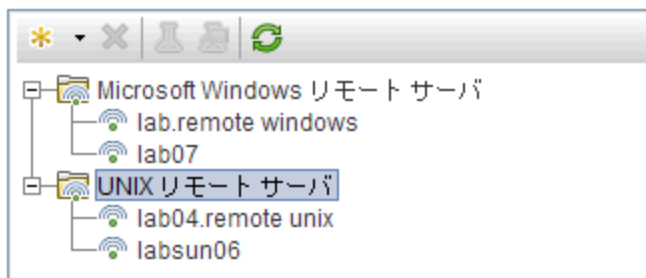
## 2. UNIX リモート・サーバの設定を行ってテストする

- a. リモート・サーバ・ツリーでリモート UNIX サーバを設定します。
- b. 該当するサーバの設定をテストします。

- サーバへの接続をテストするには、**【テスト】**  ボタンをクリックします。
- リモート・ホストで実行されているコマンドをテストし、定義したユーザの権限をチェックするには、**【詳細テスト】**  ボタンをクリックします。

## 3. 結果

リモート・サーバ・ツリーにある UNIX リモート・サーバのリストにサーバが追加されます。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。



**注:** リモート・サーバの SiteScope 監視に関するトラブルシューティングと制限事項の詳細については、[「ヒント/トラブルシューティング」\(508ページ\)](#)を参照してください。

Sun Fire ILOM X64 サーバ上でセキュア・シェル (SSH) ログインを監視するよう SiteScope を設定する方法

このタスクでは、Sun Fire ILOM X64 リモート・サーバの SSH ログインを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。



1. Sun Fire X64 ILOM リモート・サーバを作成します。  
    **【リモート サーバ】 > 【新規 UNIX リモート サーバ】** を選択し、次の設定でリモート・サーバを設定します。
  - **メイン設定:**
    - **オペレーティング・システム:** Sun Fire X64 ILOM
    - **メソッド:** SSH
  - **詳細設定:**
    - **接続キャッシュの無効化:** 選択されている。このリモートの接続キャッシュを無効にします。

リモート UNIX サーバのデータを監視する SiteScope の設定の詳細については、上記のタスクを参照してください。
2. 『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「スクリプト・モニタ」の説明に従ってスクリプト・モニタを作成し、以下を選択します。
  - **サーバ:** 前の手順で設定された Sun Fire X64 ILOM リモート・サーバを選択します。
  - **リモート スクリプト コマンド ファイル:** sun-ilom.txt。
3. モニタを保存して実行します。

## UI の説明



[新規 UNIX リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス

<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>• リモート・サーバがほかのモニタから参照されている場合、リモート・サーバのリストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの【モニタ設定】パネルにある【サーバ】ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。</li><li>• HTTP は、リモート・サーバへの接続方法としてサポートされなくなりました。</li><li>• リモート・サーバのパスワードは、空白（スペース）と以下の特殊文字をサポートしています。\" &amp;   &gt; &lt; ^</li><li>• テンプレート・モードでリモート・サーバを設定する場合、<b>メソッド</b>と<b>オペレーティング・システム</b>値は、下記の通り、大文字と小文字を一致させて入力しなければなりません。さもないと検証は適切に動作しません。<ul style="list-style-type: none"><li>• <b>メソッド:</b> telnet, http, rlogin, または ssh</li></ul></li></ul>
--------------	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>オペレーティング・システム</b>: AIX, CentOSLinux, FreeBSD, HP, HP-UX, HP64, Linux, MacOSX, OPENSERVEN, RHESLinux, SCO, SGI, Sun, SunOS, ILOM, Tru64, Tru64_4.x, UbuntuLinux。</li> </ul>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <a href="#">「リモート・サーバ・ツリー」 (41ページ)</a></li> <li>・ <a href="#">「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 (546ページ)</a></li> </ul>

含まれている要素は次のとおりです。

<b>UI 要素</b>	<b>詳細</b>
<b>保存</b>	<p>リモート・サーバの設定が正しいかどうかを確認せずに、設定を保存します。</p> <p><b>ヒント:</b> <b>【保存 &amp; テスト】</b> の代わりに <b>【保存】</b> を使用すると、パフォーマンスが速くなります。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要がないためです。</p>
<b>保存 &amp; テスト</b>	<p>設定を保存して、リモート・サーバの設定が正しいかどうかを検証します。SiteScope がリモート・サーバへの接続に失敗した場合、または設定に無効なプロパティがある場合、エラー・メッセージが表示されます。</p> <p><b>ヒント:</b> <b>【保存】</b> の代わりに <b>【保存 &amp; テスト】</b> を使用すると、パフォーマンスが遅くなります。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要があるためです。</p>
<b>一般設定</b>	
<b>名前</b>	SiteScope で認識されるリモート・マシンの名前。この名前は、接続プロファイルを使用できるモニタの <b>【サーバ】</b> リストに表示されます。
<b>詳細</b>	リモート UNIX サーバの説明。このテキストは、リモートのプロパティを編集する場合にのみ表示されます。
<b>メイン設定</b>	
<b>Server</b>	<p>監視対象サーバの実 IP アドレスまたはホスト名。ネットワーク・アドレス変換 (NAT) は、リモート・ホスト定義を必要とする SiteScope モニタではサポートされていません。IP アドレスまたはホストを使ってモニタを設定する場合、SiteScope は、外部 IP (実際の IP) または内部 IP (NAT) のどちらが使用されているかを判別できません。NAT 環境でサーバを監視するには、ファイアウォール内に SiteScope を配置することをお勧めします。URL モニタ、またはその他の同様のモニタなど、ホスト固有の情報を収集しないモニタでは、バーチャル IP を使用できます。</p>

UI 要素	詳細
	<p>同時に複数のサーバを設定するときに同じログイン資格情報を使用するには、サーバ名またはアドレスをカンマ (,)、セミコロン (;)、または空白で区切って入力します。</p> <p><b>例：</b>ほかのサーバへの接続に NetBIOS を使用している場合、 「serveraddress1,serveraddress2,serveraddress3」のようにサーバ・アドレスをカンマで区切った文字列を入力します。</p> <p>フォームへのほかの必要な入力完了すると、SiteScope によって、リスト内のサーバ・アドレスごとに新しいリモート接続プロファイルが作成されます。</p> <p><b>注：</b>ホストを追加した後に接続をテストするには、UNIX サーバのリストが表示されているテーブルで <b>【テスト】</b>  ボタンをクリックします。この場合、テストされるのはサーバへの接続のみです。リモート・ホストでのコマンドの実行結果を表示するテストを実行するには、<b>【詳細テスト】</b>  ボタンをクリックします。このテストにより、定義済みユーザの権限を確認できます。</p> <p><b>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。</b> リモート・サーバ名を表すテンプレート変数名、たとえば、%%host%% を入力します。変数にサーバ名を入力するたびに、そのサーバのモニタ・インスタンスが作成され、リモート・サーバ・ツリーにサーバが追加されます。</p> <p>モニタ・テンプレートをデプロイするリモート・サーバが <b>【リモートサーバ】</b> にすでに存在する場合、モニタ・テンプレート内でそのサーバを参照できます。そのためには、SiteScope にアクセス可能なサーバを識別するシステム変数 <code>\$\$SERVER_LIST\$\$</code> を参照します。詳細については、<a href="#">「変数の構文」(801ページ)</a>を参照してください。</p>
資格情報	<p>リモート UNIX サーバのユーザ名とパスワードを指定するオプションを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>ユーザ名およびパスワードを使用：</b>手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。</li> <li>・ <b>ユーザ名：</b>リモート・サーバのユーザ名を入力するか、ユーザ・ログイン名を表すテンプレート変数 (%%user%% など) を使用します。</li> <li>・ <b>パスワード：</b>リモート・サーバのパスワードまたは SSH 鍵ファイルのパスフレーズを入力するか、パスワードを表すテンプレート変数 (%%password%% など) を使用します。公開鍵/秘密鍵ベースの認証の SSH 認証を使用する場合、ID ファイルのパスフレーズをここに入力します。</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>事前定義された資格情報を選択</b> : サーバの事前に定義されたユーザ名とパスワードを SiteScope で自動的に指定する場合は、このオプションを選択します (標準設定)。<b>「資格情報プロファイル」</b> ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、<b>「資格情報の追加」</b> をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、<b>「資格情報のプリファレンス」 (569ページ)</b> を参照してください。</li> </ul>
トレース	<p>リモート・サーバとの間でやり取りされるメッセージを追跡して、<b>RunMonitor.log</b> ファイルに記録します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>
オペレーティング・システム	<p>リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システム。これは、リモート・サーバから正しい情報を取得するために必要な情報です。リストからオペレーティング・システムを選択します。</p> <p>UNIX リモート・サーバを設定する場合、次のオペレーティング・システムがサポートされます。AIX, CentOS, FreeBSD, HP iLO, HP-UX, HP/UX, HP/UX 64 ビット, Linux, MacOSX, NonStopOS, OPENSERVEN, Red Hat Enterprise Linux, SCO, SGI Irix, Solaris Zones, Sun Fire X64 ILOM, Sun Solaris, SunOS, Tru64 5.x, Tru64 4.x 以前 (Digital), Ubuntu Linux。リストに含まれていないバージョンの UNIX を実行しているサーバについては、<b>「オペレーティングシステム・アダプタを使用した拡張 UNIX 監視」 (509ページ)</b> を参照してください。</p> <p><b>注 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>「接続キャッシュの無効化」</b> オプションは Sun Fire X64 ILOM 用として選択されている必要があります。その他のすべてのリモートのタイプはキャッシュで正常に動作します。</li> <li>・ Sun Fire X64 ILOM オペレーティング・システムは、スクリプト・モニタの設定時のみで利用可能です。</li> </ul>
メソッド	<p>UNIX サーバ・リソースを監視するための接続タイプを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>Rlogin</b> : Rlogin プロトコルを使用して、リモート・サーバにログインします。rlogin にパスワードを要求するように、またはパスワードなしでアクセスできるように (rsh と同様)、リモート・サーバを設定できます。SiteScope ではどちらもサポートされています。</li> <li>・ <b>SSH</b> : セキュリティが強化された通信プロトコルであるセキュア・シェルを使用してリモート・サーバにログインします。UNIX のバージョンによっては、ソフトウェアとセットアップが追加で必要になることがあります。</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p>Solaris の場合、SSH アクセス方法を使用するには、SiteScope マシンに SSH クライアントがインストールされ、監視するサーバに SSH サーバがインストールされている必要があります。SiteScope が実行されるマシンの SSH クライアントへのパスは、<code>/usr/local/bin/ssh</code> または <code>/usr/bin/ssh</code> である必要があります。SSH の要件の詳細については、「<a href="#">セキュア・シェル (SSH) を使用したリモート監視の設定</a>」(523ページ)を参照してください。</p> <p>SSH を使用するには、デジタル証明書が接続先の各サーバにインストールされている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Telnet</b> : Telnet を使用してリモート・サーバにログインします。Telnet は、リモート UNIX サーバへの接続に広く使用される方法です。telnet にパスワードを要求するように、またはパスワードなしでアクセスできるように (rsh と同様)、リモート・サーバを設定できます。SiteScope ではどちらもサポートされています。</li> </ul>
プロンプト	リモート・システムがコマンドを処理できるときのプロンプト出力です。
ログイン・プロンプト	システムがログインの入力を待っているときのプロンプト出力。
パスワード・プロンプト	システムがパスワードの入力を待っているときのプロンプト出力。
二次プロンプト	<p>リモート・サーバへ Telnet 接続されたために、リモート・サーバが接続に関する詳細情報を要求する場合の二次プロンプト。複数のプロンプト文字列はカンマ (,) で区切ります。</p> <p>例: リモート・サーバによっては、Telnet 接続でリモート・サーバから接続でエミュレートするターミナル・タイプの入力を要求される場合があります。この場合、二次プロンプトとして「Terminal type?」と入力します。二次プロンプトへの応答は、後述の【二次応答】ボックスに入力します。</p>
二次応答を隠す	<p>二次応答をアスタリスクの背面に隠します。その後、このチェック・ボックスをクリアすると、隠されたデータは削除されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
二次応答	該当リモート・サーバとの接続を確立するために必要な二次プロンプトへの応答。複数の応答はカンマ (,) で区切ります。
シェル環境の初期化	セッションの初めに実行するシェル・コマンド。複数のコマンドはセミコロン (;) で区切ります。このオプションでは、Telnet または SSH セッションを初

UI 要素	詳細
	<p>期化した直後に、リモート・マシンで実行するシェル・コマンドを指定します。これらのコマンドは、SiteScope リモートごとのシェルのカスタマイズに使用できます。例として次のような場合があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>リモート・シェルには、SiteScope スクリプトを実行するための正確なパスが設定されていない場合があります。コマンド <code>export PATH=\$PATH:/usr/local/sbin</code> を指定すると、リモート・マシンの現在のシェルの PATH にディレクトリ <b>/usr/local/bin</b> が追加されます。</li> <li>リモート・シェルでは、疑似ターミナルが正しく初期化されない場合があります。以下のコマンドを入力すると、ターミナル幅が 1024 文字に増えます。<code>stty cols 1024;\${SHELL}</code></li> </ul> <p><b>注:</b> シェル呼び出し後のコマンドは実行されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>リモート Telnet サーバがコマンド・ラインを正確にエコー・バックしない場合があります。これにより、コマンド・ラインのエコーに依存するモニタが正常に動作しなくなる可能性があります。以下のコマンドを入力すると、リモート・ターミナルが強制的にエコーされます。<code>stty echo</code></li> <li>特定の UNIX シェルは、SiteScope と併用すると動作が不規則になることが判明しています。これには、<code>bash</code>、<code>ksh</code>、<code>csch</code> が含まれます。以下のコマンドを入力すると、SiteScope 接続のシェルが <code>sh</code> に変更されます。<code>/bin/sh</code></li> <li>UNIX リソース・モニタを有効にして、リモート Solaris サーバを監視するときに Network Interface オブジェクト・カウンタを取得するには、次のコマンドを入力する必要があります。<code>/bin/bash</code>。これにより、モニタは <b>vnet*</b>、<b>eri*</b>、<b>qfe*</b>、<b>ce*</b>、<b>bge*</b>、<b>xge*</b> および <b>e1000g*</b> ネットワーク・アダプタ (NIC) のカウンタを取得できるようになります。</li> </ul>
<b>Remote server encoding</b>	<p>リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システムのバージョンが、SiteScope が稼働するサーバとは異なる文字エンコーディングを使用する場合、リモート・サーバのエンコーディングを設定します。このエンコードによって、エンコードされた内容を SiteScope で適切に表示できます。</p> <p><b>標準設定値:</b> Cp1252 エンコーディング</p>
<b>HP NonStop シェル設定</b>	
<b>シェル選択プロンプト</b>	<p>(NonStopOS のみ) システムがシェルの選択を待っているときのプロンプト出力。</p> <p><b>標準設定値:</b> &gt;</p>
<b>シェル名</b>	<p>(NonStopOS のみ) 実行するシェル名。</p>

UI 要素	詳細
	標準設定値 : OSS
<b>詳細設定</b>	
<b>SSH ポート番号</b>	<p>リモート SSH サーバで監視するポート。</p> <p>標準設定値 : 22</p>
<b>最大接続数</b>	<p>SiteScope でこのリモートに許可されている開いた接続数。この接続を使用するように設定されたモニタが多数ある場合、開いた接続数を、潜在的なボトルネックを避けるのに十分な数に設定します。</p> <p>標準設定値 : 3</p> <p>注 : この設定はリモート・サーバの実行テストには適用されません。テストでは常に新しい接続を作成します。</p>
<b>SSH 認証方式</b>	<p>SSH 接続に使用される認証方法を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>パスワード</b> : パスワードを使用して認証します (標準設定)。</li> <li>・ <b>鍵ファイル</b> : 公開鍵/秘密鍵認証を使用して認証します。このオプションを選択すると、SiteScope では認証にファイル &lt; <b>SiteScope の ルート・ディレクトリ</b> &gt; \groups\identity の秘密鍵を使用します。対応する公開鍵がリモート・ホストの <b>authorized_keys</b> ファイルに含まれている必要があります。SSH の要件の詳細については、<a href="#">「セキュア・シェル (SSH) を使用したリモート監視の設定」 (523ページ)</a>を参照してください。</li> </ul>
<b>接続キャッシュの無効化</b>	<p>このリモートの接続キャッシュを無効にします。標準設定では、SiteScope キャッシュで接続が開かれます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>注 : このオプションは Sun Fire X64 ILOM 用として選択されている必要があります。その他のすべてのリモートのタイプはキャッシュで正常に動作します。</p>
<b>SSH 接続の鍵ファイル</b>	<p>この接続の秘密鍵を含むファイルのパスと名前。標準設定の鍵ファイルは、&lt; <b>SiteScope の ルート・ディレクトリ</b> &gt; \groups\identity です。この設定は、認証方法が鍵ファイルの場合にのみ適用されます。</p>
<b>SSH バージョン 2 のみを使用</b>	<p>SiteScope で強制的に SSH プロトコルのバージョン 2 のみを使用します。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
<b>SSH Keep Alive</b>	<p>SSH バージョン 2 のセッションに Keep Alive メカニズムを使用します。このオ</p>

UI 要素	詳細
メカニズム	<p>プシオンは、統合 Java クライアントを使用する場合にのみ適用されます。SSH keepalive パケットは 55 秒ごとに送信されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>タグの検索/フィルタ</b>	
<タグ名と値>	<p>SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、<a href="#">「タグの検索 / フィルタを使用してビューをフィルタする方法」 (80ページ)</a>を参照してください。</p>
タグの追加	<p>〔新規タグ〕 ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「〔新規タグ〕 / 〔タグの編集〕 ダイアログ・ボックス」 (87ページ)</a>を参照してください。</p>

その他の関連 UI ページ: [「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 \(546ページ\)](#)

## ヒント / トラブルシューティング

### リモート UNIX サーバのトラブルシューティング

- ・ リモート UNIX サーバが英語ロケールに設定されていない

**問題** :標準設定で英語ロケールまたは英語言語に設定されていない UNIX リモート・サーバを使用すると、ファイル・モニタとディレクトリ・モニタで問題が発生する可能性があります。

**解決方法** :「LANG=C; export LANG」を、問題が発生している UNIX リモート・サーバの〔**シェル環境の初期化**〕プロパティに追加します。

- ・ UNIX リソース・モニタが英語以外のロケールのすべてのカウンタを取得していない

**問題** :UNIX リソース・モニタは、Linux オペレーティング・システムで稼働している UNIX リモート・サーバの監視時に、ファイル・システムまたは inode キャッシュ・オブジェクトのカウンタを取得できません。

**解決方法** :export LANG=en\_EN.UTF-8 を UNIX リモート・サーバの〔**シェル環境の初期化**〕フィールドに入力します。



# 第39章: オペレーティングシステム・アダプタを使用した拡張 UNIX 監視

SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタを使用して、SiteScope を拡張し、標準設定でサポートされている UNIX のプラットフォームおよびそれ以外のプラットフォームに接続してリモートで監視できます。そのためには、監視する UNIX の特定のプラットフォームがサポートされるようにアダプタ・ファイルを設定します。

SiteScope では、UNIX オペレーティング・システムの各種プラットフォームを稼働するサーバからさまざまなシステム・リソース情報を取得するために必要なコマンドを、アダプタ・ファイルを使用して記述します。これらのアダプタ・ファイルはプレーン・テキストで記述され、<SiteScope のルート・ディレクトリ>/templates.os ディレクトリに保存されます。SiteScope に含まれている標準設定の UNIX アダプタのリストについては、「[SiteScope に含まれている UNIX アダプタ](#)」(509ページ)を参照してください。

ご使用の環境の特定のシステム要件に合わせて既存のアダプタ・ファイルを変更できます。あるいは、アダプタ・ファイルを独自に作成できます。

## 学習事項

SiteScope に含まれている UNIX アダプタ

SiteScope で提供される標準設定の UNIX アダプタは、次のとおりです。

ファイル名	詳細
<b>AIX.config</b>	IBM AIX のアダプタ・ファイル
<b>CentOS.config</b>	CentOS Linux のアダプタ・ファイル
<b>Digital.config</b>	Digital Tru64 UNIX (Pre 4.x) のアダプタ・ファイル
<b>FreeBSD.config</b>	FreeBSD 3.x のアダプタ・ファイル
<b>HP.config /HP-UX.config</b>	Hewlett-Packard HP/UX のアダプタ・ファイル
<b>HP64.config</b>	Hewlett-Packard HP/UX 64 ビットのアダプタ・ファイル
<b>ILO.config</b>	Hewlett-Packard Integrated Lights-Out のアダプタ・ファイル

ファイル名	詳細
<b>Linux.config</b>	Linux (Red Hat など) のアダプタ・ファイル
<b>MacOSX.config</b>	Apple Macintosh OS X のアダプタ・ファイル
<b>NonStopOS.config</b>	Hewlett-Packard NonStop オペレーティング・システムのアダプタ・ファイル
<b>OPENSERVR.config</b>	SCO OpenServer のアダプタ・ファイル
<b>RedHatEnterpriseLinux.config</b>	Red Hat ES Linux のアダプタ・ファイル
<b>SCO.config</b>	SCO UNIXWare のアダプタ・ファイル
<b>SGL.config</b>	Silicon Graphics Irix のアダプタ・ファイル
<b>Sun.config / SunOS.config</b>	Sun Microsystems Solaris のアダプタ・ファイル
<b>Tru64.config</b>	Compaq Tru64 UNIX 5.x のアダプタ・ファイル
<b>Ubuntu.config</b>	Ubuntu Linux のアダプタ・ファイル

### アダプタ・ファイルの形式

<SiteScope のルート・ディレクトリ>/templates.os ディレクトリに、SiteScope のリモート監視でサポートされている各 UNIX プラットフォームのアダプタ・ファイルがあります。これらのファイルには、SiteScope の標準設定ファイル形式が使用されます。

最初の設定グループ（最初の # 記号行の前の設定）にプラットフォームが記述されます。

```
id=yourPlatform
name=your Platform Name
```

id は、OS を示す SiteScope 内部の ID です。この ID は一意である必要があります。スペースを含まない英数字を使用できます。

**ヒント:** アダプタ・ファイルの名前を ID 名として使用することをお勧めします。たとえばアダプタ・ファイルの名前が linux.config の場合、ID は linux になります。

name は、リモート・サーバを追加または編集するときに **オペレーティング・システム** のドロップダウン・リストに表示する名前です。

テンプレート・ファイルの残りの部分には、# 文字の行で区切ってコマンドを 1 つずつ表す設定のグループが含まれています。たとえば、次の設定はディスク・スペース・コマンドを表します。

```
id=disks
command=/usr/bin/df -k
mount=6
name=1
```

各パラメータの内容は次のとおりです。

id=disks は、SiteScope でコマンドを検索するときに使用される ID です。これは、SiteScope コマンド・セットの1つであることが必要です（「[アダプタ・コマンド・リスト](#)」(511ページ)を参照）。このエントリでは大文字と小文字が区別されます。

例：

command=/usr/bin/df -k は、ディスクについての情報を取得するために usr/bin/df -k コマンドが実行されることを意味します。

mount=6 と name=1 は、マウント名が列 6 にあり、マウントまたはファイル・システムの名前が列 1 にあることを意味します。データ名はコマンドごとに異なり、後述のようにドキュメント化されています。

これを次のコマンド出力に適用します。

```
Filesystem kbytes used avail capacity Mounted on /proc 0 0 0 0%/proc /dev/dsk/c0t3d0s0 73049 42404
23341 65% /
```

disks コマンドにより、(/dev) で始まらない行では、ファイル・システムの名前として列 1 (/dev/dsk/c0t3d0s0) 、マウント名として列 6 ("/") の読み取りが自動的にスキップされます。

## アダプタ・コマンド・リスト

SiteScope が正常に動作するには、次の各コマンドの設定が必要です。各コマンド記述には、ID、コマンド、データの読み取り元を指定する1つ以上のフィールド、および（ヘッダ行など）特定の行を排除するためにコマンド出力のフィルタに使用する修飾子セット（任意指定）が必要です。

後述の変数 column は、データが表示される列の数を意味します。列はスペースで区切られたデータ・セットです。

さらに、コマンド記述に任意で適用できる特定のフィールドがあります。詳細については、「[任意のアダプタ・コマンドの詳細](#)」(514ページ)を参照してください。

### 本項の内容

- 「[ディスク一覧表示](#)」(512ページ)
- 「[ディスク情報](#)」(512ページ)
- 「[メモリ](#)」(512ページ)
- 「[ページ障害](#)」(513ページ)
- 「[CPU 使用率](#)」(513ページ)
- 「[プロセス・リスト](#)」(513ページ)
- 「[プロセス・リストと詳細](#)」(514ページ)

- [「ログ・ファイル・プロセス」 \(514ページ\)](#)
- [「任意のアダプタ・コマンドの詳細」 \(514ページ\)](#)

## ディスク一覧表示

ID	詳細	使用場所	フィールド
disks	システムにあるファイル・システムのリストを返します。/usr/bin/df -k コマンドは、このデータを取得する標準的な方法です。返された行で /dev で始まらないものは自動的にスキップされます。	ディスク容量モニタ	<b>name</b> : ファイル・システムの名前の列。  <b>mount</b> : マウントの名前の列。

## ディスク情報

ID	詳細	使用場所	フィールド
disk	引数としてディスクを使用し、ディスクの合計、空き、使用済みパーセントを返します。	ディスク容量モニタ	<b>total</b> : ファイル・システムの合計容量（キロバイト）の列。  <b>free</b> : ファイル・システムの空き容量（キロバイト）の列。

## メモリ

ID	詳細	使用場所	フィールド
メモリ	スワップ領域の使用済み量と利用可能な量。	メモリ・モニタ	<b>swapUnit</b> : バイト数を計算するために使用済み、空き、または合計スワップ領域に適用される乗数。  <b>used</b> : 使用済みのスワップ領域の量。  <b>free</b> : 空いているスワップ領域の量。  <b>total</b> : 合計スワップ領域の量。  <b>注</b> : 読み込む必要があるのは、used, free, total フィールドのうちの2つのみです。残りは計算されます。

## ページ障害

ID	詳細	使用場所	フィールド
pageFault	1 秒あたりのページ障害の数。複数のページ障害行に一致した場合は、合計されます。	メモリ・モニタ	<p><b>pageFaults</b> : ページ障害の数の列。</p> <p><b>inPageFaults</b> : ページ読み込み障害の数の列。</p> <p><b>outPageFaults</b> : ページ書き出し障害の数の列。</p> <p><b>units</b> : ページング・データの pages (標準設定), pages/sec, または k/sec units。</p> <p><b>pageSize</b> : 単位が k/sec の場合, <b>pageSize</b> を使用してページ数が計算されます。それ以外では無視されます。</p> <p><b>注</b> : データが 1 列の場合は <b>pageFaults</b>, ページ障害データが 2 列の場合は <b>inPageFaults</b> と <b>outPageFaults</b> を使用します。</p> <p><b>inPageFaults</b> と <b>outPageFaults</b> は、合計ページ障害数を出すために合計されます。</p>

## CPU 使用率

ID	詳細	使用場所	フィールド
cpu	CPU の待ち % とアイドル % を返します。	CPU モニタ	<p><b>idle</b> : CPU のアイドル %。</p> <p><b>wait</b> : CPU の待ち % (任意指定)。</p>

## プロセス・リスト

ID	詳細	使用場所	フィールド
process	プロセス名が長いプロセスのリスト。通常これは /usr/bin/ps -ef です。	サービス・モニタ	<b>name</b> : プロセスの名前の列。

## プロセス・リストと詳細

ID	詳細	使用場所	フィールド
processDetail	プロセスのサイズを表示するプロセスのリスト。通常これは /usr/bin/ps -el です。	サービス・モニタ ( [Check Memory] オプションは有効)	<b>name</b> :プロセスの名前の列。 <b>size</b> :プロセスのサイズの列。 <b>pageSize</b> :システム上のページ・サイズ (任意指定)。標準設定は 8192 です。

## ログ・ファイル・プロセス

ID	詳細	使用場所	フィールド
fileExists	ログ・ファイルが存在するかチェックします。	ログ・ファイル・モニタ (Windows または Linux)	<b>一致</b> :ログ・エントリ内で一致するテキスト。
filesize	ファイルの変更があったか確認するためにファイル・サイズを返します。	ログ・ファイル・モニタ (Windows または Linux)	<b>size</b> :コマンド出力内のサイズ・カラムの値。
テール	ローカル・ファイル処理のためのファイル・コンテンツを読み取ります (サーバ側処理にはサポートされません)。	ログ・ファイル・モニタ (Windows または Linux)	
一致	perl または awk でサーバ側処理を実行します。	ログ・ファイル・モニタ (Linux 上)	

## 任意のアダプタ・コマンドの詳細

次のフィールドは、コマンド記述に任意で適用できます。

## プロセス・リストと詳細

ID	詳細
startLine	コマンドがデータ検索を開始する行番号。
endLine	コマンドがデータ検索を終了する行番号。
skipLine	一致したら行をスキップするパターン。
matchLine	一致したらその行のデータを検索するパターン。
startMatch	一致したらデータを検索するコマンドを起動するパターン。
endMatch	一致したらデータを検索するコマンドを終了するパターン。
reverseLines	true の場合、コマンド・ラインは逆転され後ろから前に読み取られます。これは、コマンドの最後にデータがあり、読み取りを開始するときに操作しづらい場合に便利です。

フィールド名に `fieldnameColumnName=COLUMN` という形式がある場合、アダプタはヘッダ（最初の行）から `COLUMN` を検索し、データを含む列を記録し、それらの設定を使用して `fieldname` フィールドを読み取ります。これは、列幅が異なり、データにスペースが使用されている場合に便利です。

次のコマンド出力から `my data` 情報を読み取る場合の例を示します。

```
MEM NAME DESC12K my data some of my data
```

コマンド記述の名前フィールドを次のように指定します。

```
nameColumnName=NAME
```

アダプタは、ヘッダ行を読み取り、`NAME` を検出し、前の列が終了した場所（この場合は `MEM`）と指定した列が終了する場所（`NAME`）を記録し、それを使用して、（この場合では）文字の列 6 ~ 22 を読み取ります。

`ColumnName` の実際の読み取りの例を参照するには、サポートされている UNIX プラットフォームの `process` および `processDetail` コマンドを参照してください。このメソッドを使用して、プロセス名とプロセスのサイズが取得されます。

## タスク

### アダプタの追加方法

このタスクでは、UNIX の特定のバージョンにアダプタを追加する手順について説明します。

1. サポートを追加する UNIX プラットフォームが、SiteScope の標準設定でサポートされている UNIX プラットフォームのいずれかに類似する場合、その UNIX プラットフォームのアダプタ・ファイルのコピーを作成し、使用するアダプタの出発点として使用します。

2. SiteScope で接続する UNIX プラットフォームのコマンド・ライン要件に適合するように、アダプタ・ファイルを変更します。
3. アダプタ・ファイルを<SiteScope のルート・ディレクトリ>/templates.os ディレクトリに保存します。ファイル名には、.config 拡張子を使用する必要があります。
4. SiteScope サービスを再起動します。
5. 新しいアダプタ・ファイルを追加したインストール SiteScope を開きます。
6. 左側の表示枠で **リモート サーバ** をクリックして、リモート・サーバ・ビューを表示します。
7. リモート・サーバ・ツリーで、**UNIX リモート サーバ** を右クリックして、**新規 UNIX リモート サーバ** を選択します。**新規 UNIX リモート サーバ** ダイアログ・ボックスが開きます。
8. **オペレーティング システム** ボックスで、作成した UNIX アダプタの名前を選択します。
9. **[OK]** をクリックすると、SiteScope で新しいアダプタ・ファイルを使用して、リモート・サーバから該当するデータの取得が試行されます。
10. 1 つ以上のサーバ接続プロファイルがアダプタを使用するように設定した後にアダプタ・ファイルを変更する場合、アダプタをテストするには、**UNIX リモート サーバ** の **詳細テスト** オプションを使用できます。リモート・サーバを追加したら、**詳細テスト** には、リモートで SiteScope が実行されるコマンドの出力と、SiteScope による出力の解析が表示されます。

特定のテンプレートを変更するのに必要な作業量は、新しい UNIX プラットフォームが、サポートされている UNIX プラットフォームとどの程度異なるかによります。



## 第40章: SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化

SiteScope では、標準設定で IPv4 アドレスを使用してリモート・サーバに接続します。ご使用の環境でホスト名が IPv6 アドレスに解決されるようにする場合は、リモート・サーバに接続するとき、SiteScope で IPv4 アドレスよりも IPv6 アドレスを優先する動作を有効化する必要があります。IPv6 を使用することにより、IPv4 が抱えている多くの問題（アドレスの枯渇、セキュリティ、自動構成、拡張性など）が解決されます。

### 学習事項

#### ホスト名から IPv6 への解決の概要

IPv6 のサポートのレベルは、SiteScope がインストールされているオペレーティング・システムによって異なります。Windows Server 2008 では、IPv6 の全機能がサポートされ、標準設定でインストールおよび有効化されます。その結果、SiteScope を Windows Server 2008 以降にインストールすると、ほとんどの SiteScope モニタで IPv6 がサポートされます。Windows Server 2003 での IPv6 のサポートは限られており、多くのコア・サービスおよびネットワーキング・コンポーネントではサポートされていません。また、SiteScope が IPv6 の完全サポートを提供する UNIX オペレーティング・システムにインストールされると、IPv6 が完全にサポートされます。

ホスト名が IPv6 に解決されるように環境を設定するには、SiteScope の [インフラストラクチャ設定] で **[IP バージョン 6 アドレスを優先]** オプションを選択します。このオプションが選択されている場合、IPv6 が IPv4 より優先されるには、次の条件を満たす必要があります。

- リモート・サーバにホスト名が指定されている。IP アドレスが指定されている場合、使用される IP バージョンは IP アドレスによって判断されるため、IPv6 の優先設定はホストには何の効果もありません。
- ホスト名が IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方に解決される。ホスト名が IPv4 アドレスのみに解決される場合は、IPv4 アドレスが使用されます。

#### 注:

- ホスト名が指定されていて、ホスト名が IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方に解決されるが、モニタで IPv6 がサポートされていない場合、モニタは機能しません。この問題の解決方法の詳細については、[「IPv4 と IPv6 の混合環境での作業」\(518ページ\)](#)を参照してください。IPv6 をサポートするモニタのリストについては、[「IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ」\(519ページ\)](#)を参照してください。
- NetBIOS 接続方式を使用するときリモート監視対象サーバの名前としてリテラルの IPv6 アドレスを指定する場合、IPv6 アドレスを次のようにカスタマイズする必要があります。

1. すべてのコロン (「:」) 文字をダッシュ (「-」) 文字に置き換える。

2. 「**ipv6-literal.net**」というテキストを IP アドレスの最後に付加する。

たとえば, IPv6 アドレス : 2004:DB8:2a:1005:230:48ff:fe73:982d  
は次のようになります。2004-DB8-2a-1005-230-48ff-fe73-982d.ipv6-literal.net

また, WMI 接続方法 (サポートされている場合) に切り替えると, IPv6 アドレスを変更する  
必要がなくなります。

IPv4 と IPv6 の混合環境での作業

IPv4 と IPv6 の両方が使用される混合環境で作業する場合, DNS サーバから IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方がホスト名に返されることがあります。解決された各ホスト名にどちらの IP アドレスを使用するかを SiteScope で指定するには, 次の手順を実行します。

- **[IP バージョン 6 アドレスを優先]** オプションを選択し, 次のいずれかを実行します (IPv4 プロトコルを使用するホストの場合)。
  - 指定したリモート・サーバのホスト名の代わりに IP アドレスを入力します。
  - リモート・サーバで使用する IP アドレスにホスト名が解決されるように DNS サーバを設定します。これを行うには, 指定したホストの DNS サーバから IPv6 アドレスを削除します。
- **[IP バージョン 6 アドレスを優先]** オプションをクリアし, 次を実行します (IPv6 プロトコルを使用するホストの場合)。
  - 指定したリモート・サーバのホスト名の代わりに IP アドレスを入力します。
  - 指定したリモート・サーバで使用する IP アドレスにホスト名が解決されるように DNS サーバを設定します。これを行うには, 指定したホストの DNS サーバから IPv4 アドレスを削除します。

サポートされているプロトコル

Windows および UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope で IPv6 を使用する場合, 次のプロトコルがサポートされています。

ターゲット	Windows プラットフォームにインストールされた SiteScope	UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope
Windows	NetBios WMI	SSH
UNIX	サポートされていません	SSH

注:

- SiteScope Windows プラットフォームにインストールされた では、Windows マシンのみを監視できます。
- NetBIOS と WMI は、SiteScope が Windows プラットフォームにのみインストールされている場合にサポートされます。
- SSH は SiteScope が UNIX マシンにインストールされている場合のみサポートされます。UNIX 上で SSH を使用して実行される SiteScope の IPv6 をサポートする Windows ベースのモニタのリストについては、[「IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ」 \(519ページ\)](#)を参照してください。

IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ

次に、IPv6 がサポートされているモニタを示します。チェック・マークは、そのモニタが SiteScope で IPv6 アドレスを別にカスタマイズする必要があることを示します。

IPv6 アドレスをサポートするモニタ	別の設定が必要	UNIX 上で SSH を使用して実行される SiteScope での IPv6 をサポートする Windows ベースのモニタ
「Cisco Works モニタ」		
「Citrix モニタ」	✓	✓
「ColdFusion サーバ・モニタ」	✓	✓
「CPU モニタ」	✓	✓
「カスタム・データベース・モニタ」		
「データベース・カウンタ・モニタ」		
「データベース・クエリ・モニタ」		
「DB2 JDBC モニタ」		
「ディスク容量モニタ（廃止）」		✓
「ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ」		✓
「F5 Big-IP モニタ」		

IPv6 アドレスをサポートするモニタ	別の設定が必要	UNIX 上で SSH を使用して実行される SiteScope での IPv6 をサポートする Windows ベースのモニタ
「HAProxy モニタ」	✓	
「ログ・ファイル・モニタ」	✓	✓
「memcached 統計モニタ」		
「メモリ・モニタ」	✓	✓
「Microsoft ASP サーバ・モニタ」	✓	✓
「Microsoft Hyper-V モニタ」		✓
「Microsoft IIS サーバ・モニタ」	✓	✓
「Microsoft Lync Server 2010 モニタ」 (Microsoft 音声ビデオ会議サーバ, Microsoft アーカイブ・サーバ, Microsoft Director サーバ, Microsoft エッジ・サーバ, Microsoft フロント・エンド・サーバ, Microsoft 仲介サーバ, Microsoft 監視および CDR サーバ, Microsoft Registrar サーバ)	✓	
「Microsoft SQL Server モニタ」	✓	✓
「Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ」	✓	✓
「Microsoft Windows Media Server モニタ」	✓	
「Microsoft Windows リソース・モニタ」	✓	✓
「Microsoft Windows サービス・ステート・モニタ」	✓	✓
「ネットワーク帯域幅モニタ」		
「Oracle データベース・モニタ」		
「Ping モニタ」		

IPv6 アドレスをサポートするモニタ	別の設定が必要	UNIX 上で SSH を 使用して実行され る SiteScope での IPv6 をサポートす る Windows ベー スのモニタ
「ポート・モニタ」		
「Real Media Server モニタ」	✓	✓
「サービス・モニタ」	✓	✓
「SNMP モニタ」		
「MIB による SNMP モニタ」		
「SNMP トラップ・モニタ」		
「テクノロジー SNMP トラップ統合モニタ」		
「UNIX リソース・モニタ」		
「URL モニタ」	✓	
「URL 内容モニタ」	✓	
「URL リスト・モニタ」	✓	
「URL シーケンス・モニタ」	✓	
「Web サービス・モニタ」	✓	

## タスク

SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法

このタスクでは、リモート・サーバに接続するときに IPv4 アドレスより IPv6 アドレスが優先されるように SiteScope を設定する方法について説明します。

## 1. SiteScope での IPv6 アドレスの優先の有効化

【プリファレンス】 > 【インフラストラクチャ プリファレンス】 > 【サーバ設定】で、【IP バージョン 6 アドレスを優先】を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「サーバ設定」\(634ページ\)](#)を参照してください。

### 注:

- この設定の変更を有効にするには、SiteScope を再起動する必要があります。
- ホスト名が指定されていて、ホスト名が IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方に解決されるが、モニタで IPv6 がサポートされていない場合、モニタは機能しません。この問題の解決方法の詳細については、[「IPv4 と IPv6 の混合環境での作業」\(518ページ\)](#)を参照してください。

## 2. リモート監視対象サーバの名前として IPv6 アドレスをカスタマイズ（特定のモニタのみ）

IPv6 アドレス指定を使用する場合、一部のモニタには追加のカスタマイズ要件（制限）があります。

追加の IPv6 アドレス・カスタマイズが必要なモニタについては、[「IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ」\(519ページ\)](#)を参照してください。

# 第41章: セキュア・シェル (SSH) を使用したリモート監視の設定

SiteScope では多数のセキュリティ機能をサポートしています。その1つに、セキュア・シェル (SSH) 接続を使用したリモート・サーバ監視のサポートがあります。SSH を使用してサーバに接続し、自動的にコマンドを送信できます。これにより、サーバでそのコマンドを実行してからサーバを切断できます。これは自動化された処理とスクリプトの作成に役立ちます。

## 学習事項

### 本項の内容

- 「SSH の概要」(523ページ)
- 「統合された Java SSH クライアント」(524ページ)
- 「SSH 接続オプション」(525ページ)
- 「SSH を使用したリモート Windows サーバの監視」(526ページ)
- 「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」(528ページ)
- 「SSH ガイドライン」(529ページ)

### SSH の概要

セキュア・ソケット・シェルとも呼ばれるセキュア・シェル (SSH) は、UNIX ベースのコマンド・インタフェースで、リモート・コンピュータに安全にアクセスするためのプロトコルです。SSH は、Web やその他のサービスをリモート制御するためにネットワーク管理者によって広く使用されています。SSH コマンドは暗号化されており、いくつかの点でセキュアです。クライアント/サーバ接続の両端ではデジタル証明書を使用して認証され、パスワードは暗号化によって保護されています。セキュア・シェル・クライアント・マシンによって、リモート・マシンの SSH デモンまたはサーバが要求されます。

SSH を使用した SiteScope での監視には、次の基本要件があります。

1. SSH を使用して SiteScope で監視されるサーバに SSH デモン (またはサーバ) がインストールされており稼働していること。
2. Java SSH クライアントを統合した SiteScope サーバ。SiteScope には、Java と SiteScope アプリケーション・コード専用の言語で記述された SSH クライアントが含まれています。詳細については、「[統合された Java SSH クライアント](#)」(524ページ)を参照してください。

**注:** MindTerm は、SSH 接続に使用できる唯一の接続クライアントです。

## 統合された Java SSH クライアント

リモート UNIX または Windows サーバとの接続にセキュア・シェル (SSH) を使用する必要がある場合、接続を確立し、データを転送するには、SiteScope から SSH クライアントにアクセスする必要があります。この項では、SiteScope による監視で SSH を使用する場合のクライアント設定および問題をいくつか紹介します。

SiteScope では、Java で記述された SSH クライアントが SiteScope アプリケーションに統合されています。このクライアントにより、SSH を使用してサーバに接続するときに SiteScope で使用される必要なシステム・リソースが大幅に削減されます。Java クライアントでは、SSH バージョン 1 (SSH1) とバージョン 2 (SSH2) の両方のプロトコル、およびパスワード・ベースと鍵ベースの両方の認証がサポートされています。クライアントの SiteScope 設定は、UNIX、Linux、Windows の SiteScope で同じになります。

### 統合された SSH クライアントを使った作業

SSH1 と SSH2 はいずれもセキュア・シェル・プロトコルですが、2つの異なるプロトコルとみなされ、相互に互換性はありません。SSH1 にセキュリティの脆弱性が検出されたため、SSH2 が現行標準とみなされています。ほとんどの SSH ソフトウェアでは、両方のプロトコルがサポートされています。SSH 接続の要求には SSH1 ではなく、SSH2 を必ず使用してください。SSH クライアントと SSH ホスト間の通信に同じプロトコル・バージョンを使用するように、SSH クライアントと SSH ホストを設定する必要があります。多くの場合、SSH クライアントと SSH ホストの間で最低の共通基準とみなされる SSH1 が、接続に使用される標準設定のバージョンになります。

SSH2 接続を強制的に使用するには、次の 2 通りの方法があります。

- SSH2 接続要求のみを受け入れるように、すべての SSH デモンまたはサーバを設定する。  
これは最も安全な方法ですが、各サーバのインストールおよびアクティブ化時に設定されていない場合は最も時間がかかります。
- SSH2 のみを要求するように、SiteScope サーバの SSH クライアントを設定する。  
変更が必要なのは、SiteScope サーバのクライアントのみです。統合された Java SSH クライアントの場合、これはリモート・サーバ設定ページの [詳細設定] セクションの設定で制御されます。SiteScope マシンで変更を行うほうが、多数のリモート SSH サーバを再設定するより簡単な場合があります。

### 鍵ベース認証の設定

SSH セキュリティのもう一つの要素は、認証です。SiteScope に統合された SSH クライアントは、2つの認証オプションのいずれかを使用するように設定できます。

- パスワード認証 : パスワード認証は、SiteScope で SSH 接続に使用される標準設定の方法です。
- 鍵ベース認証 : 鍵ベース認証では、パズフレーズと公開鍵および秘密鍵認証の使用によってセキュリティが強化されます。

SSH リモート・サーバで鍵ベース認証を使用するには、まず公開鍵と秘密鍵のペアを作成する必要があります。公開鍵はリモート・サーバに置かれ、秘密鍵は SiteScope マシンに保管されます。Cygwin OpenSSH と OpenSSH for Windows のいずれにも、ssh-keygen と呼ばれる鍵生成ツールが含まれています。ssh-keygen ツールでは、プロトコル・バージョン 1 とバージョン 2 の両方の鍵を作成できま



す。SSH 接続の鍵ベース認証を設定する方法の詳細については、[「鍵ベース認証の設定方法」\(542 ページ\)](#)を参照してください。

内部 Java ライブラリ・クライアントを使用して UNIX または Windows リモート・サーバを設定する場合は、MindTerm と呼ばれる鍵生成ツールを使用して、RSA (バージョン 1 とバージョン 2) と DSA (バージョン 2) の公開鍵 / 秘密鍵ペアを作成します。

## SSH 接続オプション

次の表に、現在 SiteScope でサポートされている SSH 接続オプションの概要を示します。SSH 接続の設定と管理の詳細については、[「SSH ガイドライン」\(529ページ\)](#)を参照してください。

### Windows プラットフォームにインストールされた SiteScope の場合：

ターゲット	SiteScope クライアント・オプション	関連する接続先サーバ	コメント
Windows	Java SSH クライアントを統合した SiteScope	SSH サーバ (Cygwin OpenSSH)	<ul style="list-style-type: none"> <li>エージェントレス SSH。RemoteNTSSH パッケージは、エージェントレス SSH をサポートするモニタには不要です。エージェントレス SSH をサポートするモニタのリストについては、<a href="#">「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」(528ページ)</a>を参照してください。</li> <li>SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH。リモート・サーバのホーム・ユーザ・ディレクトリに RemoteNTSSH パッケージがインストールされている必要があります。詳細については、<a href="#">「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」(540ページ)</a>を参照してください。</li> </ul>
UNIX/ Linux	Java SSH クライアントを統合した SiteScope	SSH ホスト・デーモン (独自開発または OpenSSH の sshd)	

**UNIX または Linux プラットフォームにインストールされた SiteScope の場合：**

ターゲット	SiteScope クライアント・オプション	関連する接続先サーバ	コメント
Windows	<ul style="list-style-type: none"> <li>Java SSH クライアントを統合した SiteScope</li> <li>SSH クライアント (/usr/local/bin/ssh または usr/bin/ssh)</li> </ul>	SSH サーバ (Cygwin OpenSSH)	<ul style="list-style-type: none"> <li>エージェントレス SSH。RemoteNTSSH パッケージは、エージェントレス SSH をサポートするモニタには不要です。エージェントレス SSH をサポートするモニタのリストについては、<a href="#">「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」(528ページ)</a>を参照してください。</li> <li>SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH。リモート・サーバのホーム・ユーザ・ディレクトリに RemoteNTSSH パッケージがインストールされている必要があります。詳細については、<a href="#">「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」(540ページ)</a>を参照してください。</li> </ul>
UNIX/ Linux	<ul style="list-style-type: none"> <li>Java SSH クライアントを統合した SiteScope</li> <li>SSH クライアント (/usr/local/bin/ssh または usr/bin/ssh)</li> </ul>	SSH ホスト・デーモン (独自開発または OpenSSH の sshd)	

## SSH を使用したリモート Windows サーバの監視

SiteScope が Windows 間の接続と Windows ネットワークでの監視に使用する標準設定のリモート接続方法は、NetBIOS です。NetBIOS には、接続が容易になるという利点もありますが、いくつか不利な点もあります。たとえば、ネットワーク・セキュリティにおいて比較的脆弱であること、リモート実行スクリプトをサポートしていないことなどです。リモート・サーバ上でコマンドを実行するに

は、スクリプトにリモート・サーバの UNC 構文を使用してリモート・マシンへのコマンドを記述し、そのスクリプトをローカルで実行する必要があります。その場合でも、NetBIOS ではリモート・サーバから一部のパラメータを返しません。(SiteScope では Windows Management Instrumentation (WMI) プロトコルもサポートしています。このプロトコルは、Windows サーバで稼働しているリモート・サーバからデータを収集する場合に NetBIOS よりもセキュアな通信プロトコルです。詳細については、「[リモート Windows 監視用の WMI サービスの設定](#)」(496ページ)を参照)。

SiteScope では、SSH を使用したリモート Windows サーバの監視をサポートしています。このテクノロジーは、リモート・サーバに SSH サーバとしてインストールされた Cygwin (<http://www.cygwin.com/> (英語サイト) で入手可能) 製の OpenSSH バイナリでテストされています。また、F-Secure から利用可能なサーバでもテストされています。SourceForge (<http://sshwindows.sourceforge.net/> (英語サイト) で入手可能) で利用可能な OpenSSH for Windows (以前の Network Simplicity の「OpenSSH on Windows」) も使用できます。

2つのパッケージの比較概要を次に示します。

OpenSSH パッケージ	利点	不利な点
Cygwin OpenSSH	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Windows マシンで Windows または UNIX 形式のスクリプトにアクセス可能。</li> <li>2. UNIX 形式のシステム・ツールとユーティリティにアクセス可能。</li> <li>3. SiteScope から Windows リモートまたは UNIX リモート、あるいはその両方としてリモート・サーバにアクセス可能。</li> </ol>	複雑なセットアップ手順。
OpenSSH for Windows	単純なセットアップ手順。	Windows コマンド、スクリプト、ユーティリティにのみアクセス可能。

**注:**

- OpenSSH for Windows と Cygwin SSH の実装は互換性がありません。この2つは同じマシンにインストールしないでください。
- 複数のバージョンの Cygwin ユーティリティまたは複数の SSH サーバが1台のマシンにインストールされている場合、SSH 接続の動作を妨げる競合が発生する可能性があります。「エントリ・ポイントが見つかりません」のようなエラー・メッセージは、このような競合を示唆するものです。このエラーの可能性を確認するには、マシンで **cygwin1.dll** の複数のコピーを検索します。この問題を解決するには、ユーティリティのすべてのバージョンを削除して、1つのバージョンのみ再インストールすることが必要な場合があります。

リモート Windows サーバを SSH 監視用に設定する方法の詳細については、「[リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法](#)」(532ページ)を参照してください。

(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した)  
Windows SSH をサポートするモニタ

次に、エージェントレス Windows SSH、または SiteScope のリモート Windows SSH ファイルを使用した Windows SSH がサポートされているモニタの一覧を示します。SiteScope の SSH ファイルを使用した Windows SSH がサポートされたすべてのモニタでは、UNIX プラットフォーム上で実行している SiteScope に対応しています。

モニタ	SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した Windows SSH のサポート	エージェントレス Windows SSH のサポート
「Citrix モニタ」	✓	✓
「ColdFusion サーバ・モニタ」	✓	✓
「CPU モニタ」	✓	✓
「ディレクトリ・モニタ」	✓	
「ディスク容量モニタ (廃止)」	✓	✓
「ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ」	✓	✓
「ログ・ファイル・モニタ」	✓	
「メモリ・モニタ」	✓	✓
「Microsoft Lync Server 2010 モニタ」	✓	✓
「Microsoft ASP サーバ・モニタ」	✓	✓
「Microsoft Hyper-V モニタ」	✓	✓
「Microsoft IIS サーバ・モニタ」	✓	✓
「Microsoft SQL Server モニタ」	✓	✓
「Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ」	✓	

モニタ	SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した Windows SSH のサポート	エージェントレス Windows SSH のサポート
「Microsoft Windows Media Server モニタ」	✓	✓
「Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ」	✓	
「Microsoft Windows リソース・モニタ」	✓	✓
「Microsoft Windows サービス・ステート・モニタ」	✓	
「マルチ・ログ・モニタ」	✓	
「Real Media Server モニタ」	✓	✓
「スクリプト・モニタ」	✓	
「サービス・モニタ」	✓	

## SSH ガイドライン

- SSH プロトコルには、バージョン 1 とバージョン 2 の 2 つの異なるバージョンがあります。バージョン 1 とバージョン 2 は異なるプロトコルで、互換性はありません。そのため、SSH クライアントと SSH ホストで同じプロトコル・バージョンを使用するように設定して通信できるようにする必要があります。多くの場合、SSH バージョン 1 (SSH1) が標準設定です。SSH バージョン 1 にはいくつかのセキュリティの脆弱性が発見されています。また、SSH1 プロトコルの開発は終了しており、SSH2 が現在の標準とみなされています。

**ヒント:** すべての SSH 接続に SSH バージョン 2 (SSH2) を使用することをお勧めします。

- SiteScope が FIPS 140-2 モード (暗号化モジュールを認定するために使用される米国政府のコンピュータ・セキュリティ標準) で実行するように設定されている場合、すべての SSH 接続に SSH2 を使用する必要があります。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』(<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm) の「共通基準認定」の項を参照してください。
- インストールした SSH ユーティリティとライブラリのリリース・バージョン番号は、使用する SSH プロトコルのバージョンとは異なります。たとえば、OpenSSH リリース 3.5 は SSH1 と SSH2 プロトコルの両方をサポートしています。リリース・バージョン 3.5 のライブラリでは SSH バージョン 2 のみをサポートしています。

ジョン 3.5 のプロトコルを使用するということではありません。OpenSSH ソフトウェアは SSH1 か SSH2 のいずれかを使用するように設定する必要があります。

- SSH 接続を使用して SiteScope リモート監視を設定した後に、その設定を変更するか、環境内のリモート・サーバにデプロイした SSH デモンまたはサーバ・ソフトウェアにアップグレードした場合、SiteScope が稼動しているマシンと監視されているリモート・サーバ間の SSH 接続を再設定することが必要になる可能性があります。
- SSH 接続を使用するモニタを 1000 個以上作成することはお勧めできません（モニタの実行頻度、接続数などに標準設定のパラメータ設定を使用した場合）。SSH を使用するモニタを 1000 個以上実行する必要がある場合は、SiteScope サーバを 1 台追加してください。

## ヒント / トラブルシューティング

本項では、SSH を使用して監視する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- [「SiteScope リモート SSH ファイルを使用した Windows SSH が機能しない」 \(530ページ\)](#)
- [「Windows SSH ベースのモニタでのスキップ \(Red Hat Linux 5\)」 \(530ページ\)](#)
- [「エージェントレス Windows SSH が機能しない」 \(530ページ\)](#)
- [「エージェントレス SSH がカウンタを取得できない」 \(531ページ\)](#)
- [「Error:"resize:unknown character exiting"」 \(531ページ\)](#)

SiteScope リモート SSH ファイルを使用した Windows SSH が機能しない

SiteScope SSH ファイルを使用した Windows SSH の監視の前提条件を満たしていることを確認します。詳細については、[「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」 \(540ページ\)](#)を参照してください。

Windows SSH ベースのモニタでのスキップ (Red Hat Linux 5)

Red Hat Linux 5 プラットフォームで実行されている Windows SSH ベースのモニタでスキップが発生した場合、**opt/SiteScope/java/lib/security/java.security** ファイルで次の変更を行う必要があります。

```
"securerandom.source=file:/ dev/urandom"
```

から次へ変更

```
「securerandom.source=file:///dev/urandom」
```

エージェントレス Windows SSH が機能しない

SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用して Windows SSH が機能せず、エージェントレス Windows SSH がない場合は、次を実行します。

- perfmon が正常に機能していることを確認します。対象マシンで、コマンド **perfmon** を実行し、必要な perfmon オブジェクトが表示されることを確認します。これらのライブラリを再構築する方法の詳細については、<http://support.microsoft.com/?kbid=300956> を参照してください。

- ・ コマンド・ラインで次のコマンドを入力し、リモート・マシンで typeperf コマンドが機能していることを確認します。

```
typeperf "\Processor(_Total)\% Processor Time"
```

詳細については、<http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc753182.aspx> を参照してください。

エージェントレス SSH がカウンタを取得できない

場合によっては、perfmon ではカウンタが値 0 を示しているのに SSH では同じカウンタが n/a を示すことがあります。perfmon ユーティリティを使用して選択できないカウンタは、このように動作します。SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した SSH がこれらのカウンタの値を取得できるのは、perfmon をバイパスしてレジストリを通じてカウンタにアクセスしているためです。

Error:"resize:unknown character exiting"

SiteScope で SSH を使用して接続を作成できない場合、**error.log** または **runMonitor.log** に "resize: unknown character exiting" に類似するサーバ・エラー・メッセージが含まれている場合、これは、無効な bash 関連のコマンドが原因である可能性があります。SiteScope では、基本的な bash 環境のみがサポートされています。通常、bash コマンドはユーザの標準設定ディレクトリの下に **.bashrc** ファイルにあります。

## リモート UNIX サーバでの SSH 監視の設定方法

Solaris または Linux の SiteScope では、SSH を使用したリモート監視をサポートしています。このタスクでは、リモート UNIX サーバでの SiteScope を使用した SSH 監視の設定に関する手順を説明します。

**注:** UNIX 環境で監視するリモート・サーバの SSH ホストの設定は非常に複雑で、このドキュメントではそのすべては説明されていません。OpenSSH デモンのインストールに関する推奨リソースとして、<http://sunfreeware.com/introduction.html> (英語サイト) (Solaris の場合) と [http://docs.redhat.com/docs/en-US/Red\\_Hat\\_Network\\_Satellite/5.4/html/Reference\\_Guide/sect-Reference\\_Guide-Monitoring-RHN\\_Monitoring\\_Daemon\\_rhnmd.html#sect-Reference\\_Guide-RHN\\_Monitoring\\_Daemon\\_rhnmd-Configuring\\_SSH](http://docs.redhat.com/docs/en-US/Red_Hat_Network_Satellite/5.4/html/Reference_Guide/sect-Reference_Guide-Monitoring-RHN_Monitoring_Daemon_rhnmd.html#sect-Reference_Guide-RHN_Monitoring_Daemon_rhnmd-Configuring_SSH) (英語サイト) (Redhat Linux の場合) があります。

### 1. 前提条件

UNIX 環境で SiteScope を使用して SSH 監視を行う場合、リモート UNIX サーバには次の設定要件があります。

- ・ SiteScope によるモニタの対象とする各リモート・サーバに、セキュア・シェル・デーモンまたはサーバ (sshd) をインストールする必要があります。
- ・ リモート・サーバ上の SSH デーモンが実行されており、該当する通信ポートが開いている必要があります。たとえば、SSH の標準設定ではポート番号 22 です。

- SiteScope が実行されているサーバに SSH クライアントがインストールされている必要があります。SiteScope の統合された Java SSH クライアントは、この要件を満たします。

## 2. SSH 接続の確認

SiteScope が稼働中のマシンから、モニタの対象とするリモート・マシンとの間の SSH クライアント - サーバ間接続を検証します。SiteScope で SSH を使用してリモート・サーバ接続をセットアップする前に、SiteScope アプリケーションの外部で SSH 接続をチェックします。たとえば、SiteScope を Solaris or Linux で実行している場合、次のコマンド・ラインを使用して、サーバ <remotehost> に SSH2 を使用した SSH 接続を要求します。

```
ssh -2 <リモートホスト>
```

通常は、使用されている SSH プロトコルのバージョンを示すテキスト情報が返されます。また、現在のユーザの認証が試行されます。異なるユーザとしてログインを要求するには、`-l username` スイッチを使用します。

## 3. リモート・サーバに接続するように統合された Java SSH クライアントを設定

リモート・サーバで SSH サーバまたはデーモンを設定したら、リモート・サーバへの接続に SiteScope で使用する統合 Java SSH クライアントを設定する必要があります。

### a. SSH 接続の認証オプションを選択する:

- パスワード認証: パスワード認証は、SiteScope で SSH 接続に使用される標準設定の方法です。
- 鍵ベース認証: 鍵ベース認証では、パスフレーズと公開鍵と秘密鍵による認証の使用によってセキュリティが強化されます。鍵ベース認証の設定の詳細については、[「鍵ベース認証の設定方法」\(542ページ\)](#)を参照してください。

### b. SSH2 接続を使用する必要がある場合は、(Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバの [詳細設定] ダイアログ・ボックスで) **[SSH バージョン 2 のみを使用]** チェックボックスを選択して、SSH2 接続を使用するように SiteScope java クライアントを設定します。

## 4. SSH 接続方法を使用するための UNIX リモートの設定

SSH 接続を確認したら、SSH を接続方法として使用するために、SiteScope で UNIX リモート設定を作成または設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[新規 UNIX リモート サーバ\] / \[UNIX リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス」\(501ページ\)](#)を参照してください。

# リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法

このタスクでは、リモート Windows サーバでの SiteScope を使用した SSH 監視の設定に関する手順を説明します。



## 1. SSH サーバのインストールと設定

SiteScope を接続する各リモート・サーバで SSH サーバをインストールして設定します。SSH 機能を可能にする、一般に入手可能な2つのソフトウェア・パッケージがあります。

- <http://www.cygwin.com/> (英語サイト) から入手可能な Cygwin 環境。タスクの詳細については、[「Windows での Cygwin OpenSSH のインストール」 \(534ページ\)](#)を参照してください。
- OpenSSH for Windows で入手可能な Windows 用の OpenSSH。タスクの詳細については、[「OpenSSH for Windows のインストール」 \(539ページ\)](#)を参照してください。

**注:** これらのセットアップは、SSH デーモンまたはサーバを実行する各サーバで実行する必要があります。

## 2. プリインストール SiteScope SSH ファイルを使用した Windows SSH 監視の有効化 (任意指定)

使用しているモニタに応じて、リモート・サーバの監視にプリインストールされた SiteScope SSH ファイルまたはエージェントレス Windows SSH を使用できます (サポートされているモニタのリストについては、[「\(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した\) Windows SSH をサポートするモニタ」 \(528ページ\)](#)を参照してください)。

- **プリインストール SiteScope リモート Windows SSH ファイルの使用:** プリインストール SSH ファイルを使用したりリモート・サーバの SSH 監視を有効にするには、各リモート・サーバに SiteScope リモート Windows SSH ファイルをインストールして、一般的に使用されるサーバ監視機能を有効にする必要があります。タスクの詳細については、[「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」 \(540ページ\)](#)を参照してください。
- **エージェントレス SSH:** エージェントレス Windows SSH を使用する場合は、リモート Windows サーバに SiteScope リモート Windows SSH ファイルをインストールする必要はありません。

**ヒント:** モニタがプリインストール SiteScope SSH ファイルとエージェントレス Windows SSH をサポートしている場合、エージェントレス Windows SSH の使用をお勧めします。

## 3. リモート・サーバに接続するように統合された Java SSH クライアントを設定

リモート・サーバで SSH サーバまたはデーモンを設定したら、(Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバの [詳細設定] ダイアログ・ボックスで) SiteScope がリモート・サーバへの接続に使用する統合された Java SSH クライアントを設定する必要があります。

### a. SSH 接続の認証オプションを選択する:

- **パスワード認証:** パスワード認証は、SiteScope で SSH 接続に使用される標準設定の方法です。
- **鍵ベース認証:** 鍵ベース認証では、パスフレーズと公開鍵と秘密鍵による認証の使用によってセキュリティが強化されます。鍵ベース認証の設定の詳細については、[「鍵ベース認証の設定方法」 \(542ページ\)](#)を参照してください。

- b. SSH2 接続を使用する必要がある場合は、(Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバの [詳細設定] ダイアログ・ボックスで) **[SSH バージョン 2 のみを使用]** チェックボックスを選択して、SSH2 接続を使用するように SiteScope java クライアントを設定します。

#### 4. SSH 接続方法を使用するための Windows リモートの設定

SiteScope とリモート・サーバ間の SSH 接続を確認したら、次のように SiteScope で Windows リモート・サーバを設定します。

- [メイン設定] で、接続方法として **[SSH]** を選択します。その後、SSH 接続を使用するようにモニタを設定できます。
- プリインストール SiteScope SSH ファイルを使用したリモート・サーバの SSH 監視を有効にするには、[詳細設定] パネルで **[プリインストールされた SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH]** が選択されていることを確認します (これが標準設定です)。
- エージェントレス Windows SSH を使用して監視するには、[詳細設定] パネルで **[プリインストールされた SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH]** チェックボックスをクリアします。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[新規 Microsoft Windows リモート サーバ\] / \[Microsoft Windows リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス」\(484ページ\)](#)を参照してください。

## Windows での Cygwin OpenSSH のインストール

このタスクでは、Windows サーバでの Cygwin OpenSSH サーバのインストールと設定に関する手順を説明します。

### 注:

- このタスクは高度なタスクのうちの1つです。詳細については、[「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」\(532ページ\)](#)を参照してください。
- 次の手順は、マシンにほかの Cygwin または SSH ユーティリティがインストールされておらず、マシンでインターネット・アクセスが可能なことを前提としています。
- SSH デーモンのインストールと実行に使用されるユーザ・ログイン・アカウントには、必要なプログラムのインストール、いくつかのファイル・オプションの設定、Windows サービスの制御に対する適切な権限が必要です。SiteScope で従属サーバの接続に使用するアカウントである必要はありませんが、SiteScope でサーバを監視する前にそのアカウントを Cygwin インストールで設定する必要があります。

### サポートされているバージョン

Cygwin 1.7.x (Cygwin の最新認定バージョンは 1.7.7)

**Windows サーバで Cygwin OpenSSH サーバをインストールして設定するには、次の手順を行います。**

1. 次の定義を使用して新しいシステム環境変数を作成します。CYGWIN = ntsec tty。
2. 文字列 ;C:\cygwin\bin を PATH 変数に追加します。変数への変更を保存します。
3. Cygwin セットアップ・プログラムを一時フォルダにダウンロードします。例 :C:\temp。セットアップ・プログラムは、Cygwin で利用可能な異なるパッケージとコンポーネントの選択、ダウンロード、インストールに使用します。
4. ダウンロードしたセットアップ・プログラムを実行して、ダウンロード元の選択を促すメッセージが表示されたら **[Install from Internet]** オプションを選択します。**[次へ]** をクリックして次に進みます。
5. 選択を促すメッセージが表示されたら、Cygwin パッケージをインストールするルート・インストール・ディレクトリを選択します。このディレクトリに SSH デーモンと関連ファイルがインストールされます。例 :C:\cygwin。 **[次へ]** をクリックして次に進みます。
6. 選択を促すメッセージが表示されたら、Cygwin インストール・ファイルを保存する一時ディレクトリを選択します。例 :C:\temp。 **[次へ]** をクリックして次に進みます。
7. 選択を促すメッセージが表示されたら、 **[Internet Connection]** オプションを選択します。通常は **[Direct Connection]** を使用できます。 **[次へ]** をクリックして次に進みます。
8. 選択を促すメッセージが表示されたら、選択リストを使用してファイルを取得するための適切なミラー・サイトを選択します。 **[次へ]** をクリックして次に進みます。
9. セットアップ・プログラムによってそのミラー・サイトにあるパッケージが確認され、パッケージ・カテゴリの階層ツリーが表示されます。ダウンロードするパッケージを表示して選択するには、カテゴリ名の左側にあるプラス記号 (+) をクリックしてパッケージ・ツリーを展開します。ダウンロードとインストールに選択したパッケージのバージョン番号が **[New]** 列に表示されます。特定のパッケージのバージョン番号が表示されない場合、そのパッケージはダウンロードもインストールもされていません。パッケージをダウンロード用に選択するには、パッケージ名の左側にある **[スキップ]** をクリックします。

**注:** 標準設定でダウンロードに選択されている可能性のある開発ツール (Devel) とデータベース・ツール (Database) の多くは SSH デーモンの実行には不要で、ダウンロード時間とインストール領域を削減するために選択解除できます。

ダウンロードとインストールに次の各パッケージを選択します。

- **[Admin]** 分岐から **[cygrunsrv]**
- **[Doc]** 分岐から **[cygwin-doc]**
- **[Shells]** 分岐から **[pdksh]**
- **[Net]** 分岐から **[openssh]** と **[openssl]**
- **[Editors]** 分岐から選択した任意の UNIX 形式のテキスト・エディタ (例: **[vim]** または **[emacs]** )

選択を促すメッセージに従い、クリックしてファイルをダウンロードします。

10. 指定したインストール・オプションに応じて、Cygwin セットアップで、選択したパッケージがダウンロードされてインストールされます。Cygwin ターミナル・ウィンドウへのショートカットをデスクトップまたは [Program Start] メニューに追加するかどうかの選択を促すメッセージが表示される場合があります。クリックして次に進み、インストールを完了します。
11. Cygwin セットアップが完了したら、デスクトップ・ショートカットまたは [Program Start] メニューの [Cygwin] をクリックして Cygwin ターミナル・ウィンドウを開きます。

**注:** Windows システムのユーザ・プロファイルによっては、ターミナル・ウィンドウで開かれる標準設定のディレクトリがルート Cygwin インストール・ツリー内でない場合があります。pwd コマンドを使用して現在のディレクトリを表示します。通常は、コマンド文字列 `cd /` を入力すると、標準設定では Windows の `C:\cygwin` ディレクトリの Cygwin ルートにディレクトリが変更されます。

標準設定の Cygwin グループ・ファイルを、マシンとネットワークで使用しているグループ名で更新します。標準設定の Cygwin グループ・ファイルを、サーバとドメインで定義したグループで更新するには、mkgroup ユーティリティを使用します。コマンドの使用例を次に示します。

```
mkgroup -l >> ../etc/group mkgroup -d >> ../etc/group
```

**注:**

- Cygwin にドメインとローカル・グループ・アカウントの両方を認識させるには、mkgroup ユーティリティをローカル・ユーザ (-l オプション) に対して 1 回、ドメイン・ユーザ (-d オプション) に対して 1 回の計 2 回実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、>, だけではなく >> の構文を使用してください。
- ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、/etc/group ファイルを手動で編集 (ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用) して重複するグループ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、監視に不要なグループ・エントリや、このマシンへのアクセスを禁止するグループ・エントリも削除します。

標準設定の Cygwin ユーザ (passwd) ファイルを、ローカル・マシンで定義したユーザと、このマシンの Cygwin にアクセスを許可する個々のドメイン・ユーザで更新します。標準設定の Cygwin ユーザ・ファイルの更新には、mkpasswd ユーティリティを使用します。

コマンドの使用例を次に示します。

```
mkpasswd -l >> ../etc/passwd mkpasswd -d -u username >> ../etc/passwd (domain users)
```

**注:**

- 標準設定では、Cygwin は SYSTEM と呼ばれるローカル・ユーザとして OpenSSH デーモンを実行するように設定されています。Cygwin にドメインとローカル・マシン・ユーザ・アカウントの両方を認識させるには、すべてのローカル・ユーザの追加に -l オプション、個々のドメイン・ユーザの追加に -d と -u オプションを使用して mkpasswd を実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、>, だけではなく >> の構文を使用してく

ださい。

- ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、`/etc/passwd` ファイルを手動で編集（ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用）して重複するユーザ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、個々のユーザの標準設定の `/home` パスとシェルも変更します。SiteScope で使用するユーザ・アカウントの `/home/sitescopeaccount/` ディレクトリに RemoteNTSSH パッケージをインストールする場合に、この変更が必要な可能性があります。

12. `cd /bin` と入力して、アクティブ・ディレクトリを `/bin` ディレクトリに変更します。

13. 次のコマンド・ライン（末尾の空白とピリオドを含む）を入力して、Windows コマンド (CMD) シェルを示す `/bin` ディレクトリへのシンボリック・リンクを作成します。

```
ln -s /cygdrive/c/winnt/system32/cmd.exe .
```

14. いくつかの Cygwin ファイルとディレクトリの権限と所有権を変更することをお勧めします。また、SSH デーモンのログ・ファイルを作成することもお勧めします。Cygwin ターミナル・コマンド・ラインに次のコマンド・ラインを入力し、各コマンド・ラインの入力後に Enter キーを押します。

```
cd /  
chmod -R og-w .  
chmod og+w /tmp  
touch /var/log/sshd.log
```

**注:**

- 空白を含めた正確な構文が必要です。
- ファイルとディレクトリの権限が矛盾していたり不正に割り当てられていたりしていると、SSH デーモンが開始できない、または SiteScope をリモート・サーバに接続してコマンドまたはスクリプトを実行できない可能性があります。

15. 次のコマンドを入力して、SSH デーモンを Windows サービスとして実行するように設定します。

```
ssh-host-config -y
```

CYGWIN= プロンプトが表示されたら、この操作の最初に設定した環境変数に一致させるため `ntsec tty` と入力します。通常、これにより、サーバの再起動が必要な場合に SSH デーモンまたはサービスを自動的に再起動するように設定されます。

16. 次のコマンドを使用して、SSH デーモンの暗号鍵とファイルを設定します。

```
ssh-user-config -y.
```

入力を促すメッセージが表示されたら、いくつかのキーストア・ファイルに必要なパスフレーズを入力します。プログラムから、確認のためにパスフレーズを再入力するように求められます。

17. SSH デーモンで使用するために、いくつかのファイルとフォルダの所有権を変更する必要があります。これらのファイルの権限がグループまたは「世界」レベルのユーザによって変更または実行可能な場合、プログラムは正常に実行できません。これらのファイルへのアクセスを制限するために、次のコマンド文字列を入力します。

```
chown SYSTEM:Users /var/log/sshd.log /var/empty /etc/ssh_h*
chmod 755 /var/empty
```

18. **【プログラム】 > 【管理ツール】 > 【サービス】** パネルを使用し、CYGWIN sshd サービスの開始と停止を実行して、インストールされていることを確認します。

**注:** Cygwin には、SSH デーモンを開始するサーバ・ユーティリティが含まれています。ただし、Windows の **【サービス】** パネルを使用した場合はサーバを起動できる場合でも、この方法ではサーバの起動に失敗する多数の状況があります。

19. SiteScope で監視し、ために使用するユーザ・アカウント用の標準設定のシェルまたはコマンド環境を設定します。選択したシェルは、SSH 接続を使用してリモート実行できるスクリプトまたはコマンドのタイプに影響を与えます。UNIX 形式のテキスト・エディタを使用して、**/etc/passwd** ファイルを編集します。使用する SiteScope ログイン・アカウントのエントリを検索し、次に示すように、**/bin/bash** のシェルを、使用するシェルに変更します。通常、これがそのアカウント・エントリ行の最後のエントリです。
  - SiteScope で Windows コマンド・シェルを使用してリモート・サーバとやり取りする場合、標準設定のシェル・エントリを **/bin/cmd** に変更します。Windows 形式のバッチ・ファイルとスクリプトを使用する予定の場合はこのオプションを使用します。この前の操作手順で説明したように、**/bin** ディレクトリの Windows **cmd.exe** カーネルへのシンボリック・リンクを含める必要もあります。
  - SiteScope で Cygwin UNIX シェルを使用してリモート Windows サーバとやり取りする場合、標準設定のシェル・エントリを **/bin/pdksh** に変更します。SiteScope SSH クライアントでは Cygwin の標準設定の **bash** シェルを正確に解析できない可能性があります。また、リモート UNIX サーバ接続を、Cygwin SSH デーモンに接続するこの (Windows) サーバに設定する必要もあります。

変更点をファイルに保存します。

20. **/etc/profile** ファイル内の **PATH** と標準設定のプロンプト・コマンドを編集して、Cygwin で特定のファイルを検索して SiteScope でリモート・シェルからの出力を解析できるようにします。UNIX 形式のテキスト・エディタを使用して、**/etc/profile** ファイルを編集します。ファイルの上部にある **PATH** 定義エントリを検索します。例：

```
PATH=/usr/local/bin:/usr/bin:/bin:$PATH
```

このエントリを次のように変更します。

```
PATH=.:usr/local/bin:/usr/bin:/bin:$PATH
```

21. 標準設定のプロンプト・コマンドを変更するには、**/etc/profile** ファイルを編集して、次のようなセクションを検索します。



```
;;
sh | -sh | */sh \
sh.exe | -sh.exe | */sh.exe )
#Set a simple prompt
PS1='$ '
;;
```

このエントリのすぐ下に、次を追加します。

```
;;
pdksh | -pdksh | */pdksh \
pdksh.exe | -pdksh.exe | */pdksh.exe )
#Set a simple prompt
PS1='> '
;;
```

22. 変更点をファイルに保存します。
23. アクティブ・ディレクトリを、SiteScope の監視用に作成した、ユーザのホーム・ディレクトリに変更します。

これらの変更を加えて SSH デーモンを起動すると、SSH クライアントを使用してサーバに接続できます。

**注:** `mkpasswd -l/etc/passwd` コマンドを実行するとき（新規ユーザの追加時など）は常に `/etc/passwd` ファイルを再編集して、そのユーザの標準設定のシェルが SiteScope で使用するアカウントに必要な値に設定されるようにします。

## OpenSSH for Windows のインストール

このタスクでは、Windows サーバでの OpenSSH サーバのインストールと設定に関する手順を説明します。

OpenSSH for Windows パッケージは、Cygwin SSH パッケージの代替パッケージで、インストールがより簡単です。その他の多くの製品と同じく、Cygwin 製品と Open SSH for Windows は変更される可能性があります。その影響として、一部のバージョンの Cygwin SSH サーバではによる SiteScope の監視に必要なデータが返されない場合があります。OpenSSH for Windows パッケージでこの問題を解決できる場合は、Cygwin パッケージの代わりにこのパッケージを使用します。

**注:** このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、[「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」\(532ページ\)](#)を参照してください。

**Windows サーバで OpenSSH for Windows サーバをインストールして設定するには、次の手順で行います。**

1. OpenSSH for Windows パッケージをダウンロードしてインストールします。
2. コマンド・プロンプトを開いてインストール・ディレクトリ（標準設定のインストール・パスは `C:\Program Files\OpenSSH`）を変更します。
3. アクティブ・ディレクトリを `OpenSSH\bin` ディレクトリに変更します。

- 標準設定のグループ・ファイルを、マシンとネットワークで使用しているグループ名で更新する必要があります。標準設定の OpenSSH グループ・ファイルを、サーバとドメインで定義したグループで更新するには、**mkgroup** ユーティリティを使用します。コマンドの使用例を次に示します。

```
mkgroup -l >> ..\etc\group mkgroup -d >> ..\etc\group
```

**注:**

- OpenSSH にドメインとローカル・グループ・アカウントの両方を認識させるには、**mkgroup** ユーティリティをローカル・ユーザ (-l オプション) に対して 1 回、ドメイン・ユーザ (-d オプション) に対して 1 回の計 2 回実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、>、だけでなく >> の構文を使用してください。
- ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、`/etc/group` ファイルを手動で編集（ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用）して重複するグループ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、不要なグループ・エントリや、このマシンへのアクセスを禁止するグループ・エントリも削除します。

- 標準設定の OpenSSH ユーザ (`passwd`) ファイルを、ローカル・マシンで定義したユーザと、このマシンの SSH サーバにアクセスを許可するドメイン・ユーザで更新する必要があります。標準設定のユーザ・ファイルの更新には、**mkpasswd** ユーティリティを使用します。コマンドの使用例を次に示します。

```
mkpasswd -l >> ..\etc\passwd  
mkpasswd -d -u username >> ..\etc\passwd
```

**注:**

- OpenSSH にドメインとローカル・マシン・ユーザ・アカウントの両方を認識させるには、すべてのローカル・ユーザの追加に -l オプション、個々のドメイン・ユーザの追加に -d と -u オプションを使用して **mkpasswd** ユーティリティを実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、>、だけでなく >> の構文を使用してください。
- ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、`/etc/passwd` ファイルを手動で編集（ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用）して重複するユーザ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、個々のユーザの標準設定の `/home` パスとシェルを変更します（次の指示を参照）。

- 【プログラム】 > 【管理ツール】 > 【サービス】 パネルを使用し、**OpenSSH Server** サービスを開始して、インストールされていることを確認します。

## SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール

このタスクでは、操作中の SSH パッケージに応じて、各リモート Windows サーバに SiteScope リモート Windows ファイルをインストールする手順を説明します。



**注:**

- このタスクは高度なタスクのうちの1つです。詳細については、[「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」\(532ページ\)](#)を参照してください。
- SiteScope リモート Windows ファイルは、エージェントレス SSH をサポートするリモート Windows サーバ・モニタにインストールする必要はありません。エージェントレス SSH をサポートするモニタのリストについては、[「\(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した\) Windows SSH をサポートするモニタ」\(528ページ\)](#)を参照してください。

Cygwin インストールで SiteScope SSH ファイルをインストールする場合:

1. SSH を使用して SiteScope で監視する各マシンの **<インストール・ドライブ>:\cygwin\home** ディレクトリ内に **\sitescope\_login\_account\_name** ディレクトリが存在することを確認します。**sitescope\_login\_account\_name** を、SSH サーバを使用しているマシンへの接続に使用するユーザ・アカウント名に置き換えます。
2. Windows で SSH を使用する利点の1つは、SSH デーモンを実行しているリモート・サーバで SiteScope からスクリプトを実行できる点です。リモート・スクリプトの実行にスクリプト・モニタを使用できるようにするには、**/home/sitescope\_login\_account\_name** ディレクトリに **scripts** サブディレクトリを作成します。SiteScope スクリプト・モニタで実行するために作成したスクリプトは、このディレクトリ内に置く必要があります。
3. SiteScope がインストールされているマシンで、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\tools** ディレクトリにある **RemoteNTSSH.zip** ファイルを検索します。

**注: RemoteNTSSH.zip** の .exe および .dll ファイルのすべてで実行可能権限が必要です。コマンド **chmod +x \*** を使用して、関連するファイルへの実行可能権限を取得します。

4. このファイルを、SSH サーバまたはデーモン・ソフトウェアをインストールした各リモート Windows サーバの **<インストール・ドライブ>:\cygwin\home\sitescope\_login\_account\_name** ディレクトリにコピーします。
5. **RemoteNTSSH.zip** ファイルをリモート・サーバで展開します。zip ファイルの内容を **<インストール・ドライブ>:\cygwin\home\sitescope\_login\_account\_name** ディレクトリに移動します。この操作で **<インストール・ドライブ>:\cygwin\home\sitescope\_login\_account\_name\scripts** サブフォルダが作成されます。このサブフォルダには、SiteScope スクリプト・モニタで実行できるスクリプトを保持します。

**注: RemoteNTSSH.zip** ファイルが SiteScope 11.10 より前のバージョンからのものの場合、監視対象のすべてのリモート・サーバで **<SiteScope 11.10 のルート>\tools** ディレクトリから zip ファイルを再インストールする必要があります。

6. リモート・サーバで CYGWIN sshd サービスを開始します。

## OpenSSH for Windows インストールで SiteScope SSH ファイルをインストールする場合:

1. SiteScope がインストールされているマシンで、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\tools** ディレクトリにある **RemoteNTSSH.zip** ファイルを検索します。
2. このファイルを、インストール済みの SSH サーバを使用してマシンにログオンした後に自動的にユーザを移動する、ユーザ・ホーム・ディレクトリにコピーします。このディレクトリは、SSH サーバまたはデーモン・ソフトウェアをインストールした各リモート Windows サーバのディレクトリです。
3. リモート・サーバの **RemoteNTSSH.zip** ファイルをユーザ・ホーム・ディレクトリに展開します。この操作で **<ユーザ・ホーム・ディレクトリ>\scripts** サブフォルダが作成されます。このサブフォルダには、SiteScope スクリプト・モニタで実行できるスクリプトを保持します。

**注:** **RemoteNTSSH.zip** ファイルが SiteScope 11.10 より前のバージョンからのものの場合、監視対象のすべてのリモート・サーバで **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\tools** ディレクトリから zip ファイルを再インストールする必要があります。

4. リモート・サーバで OpenSSH Server サービスを開始します。

## 鍵ベース認証の設定方法

このタスクでは、SSH リモート・サーバに鍵ベース認証を設定する手順について説明します。SiteScope SSH 鍵をリモート・サーバにコピーするか、またはリモート・サーバからリモート・サーバ鍵を取得して SiteScope にコピーします。

SSH リモート・サーバで鍵ベース認証を使用するには、まず公開鍵と秘密鍵のペアを作成する必要があります。公開鍵はリモート・サーバに置かれ、秘密鍵は SiteScope マシンに保管されます。Cygwin OpenSSH と OpenSSH for Windows のいずれにも、ssh-keygen と呼ばれる鍵生成ツールが含まれています。ssh-keygen ツールでは、プロトコル・バージョン 1 とバージョン 2 の両方の鍵を作成できます。

**ヒント:** 各マシンでファイルを生成して、そのファイルを SiteScope マシンにコピーするのはなく、SiteScope サーバで 1 つの鍵ファイルを保持して、そのファイルをリモート・サーバにコピーすることをお勧めします。

### SiteScope サーバでの鍵の作成

**SiteScope サーバで公開鍵または秘密鍵のペアを作成するには、次の手順を実行します。**

1. SiteScope サーバでコマンド・ウィンドウを開き、MindTerm を起動する次のコマンドを実行します。

< SiteScope のルート・ディレクトリ > \java\bin\java -jar c:\< SiteScope のルート・ディレクトリ > \WEB-INF\lib\mindterm.jar

2. MindTerm で、[File] > [Create Keypair] > [DSA (または RSA)] を選択します。また、OpenSSH .pub 形式も選択します。
3. 鍵ペアは、< ユーザのホーム・ディレクトリ > \mindterm ディレクトリに書き込まれます。
4. 秘密鍵 (末尾が \*.pub でないファイル) を、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups ディレクトリにコピーします。
5. identity.pub ファイルをリモート・マシンの < ユーザのホーム・ディレクトリ > /.ssh ディレクトリにコピーし、ファイル名を authorized\_keys (SSH2 の場合は authorized\_keys2) に変更します。異なる鍵ファイルを使って多数のユーザがサーバに接続することを許可する場合は、identity.pub の内容を既存の authorized\_keys/authorized\_keys2 ファイルに追加することもできます。
6. リモート・マシンの < ユーザのホーム・ディレクトリ > /.ssh ディレクトリでコマンド chmod 744 authorized\_keys を実行し、User に authorized\_keys ファイルの読み取り、書き込み、実行の権限があり、Group と Other に読み取り権限があることを確認します。
7. 鍵ファイル認証と内部 Java ライブラリを使用して、リモート・サーバの SiteScope でリモート接続を作成します。

公開鍵をリモート・マシンの < ユーザのホーム・ディレクトリ > /.ssh/authorized\_keys ファイルに配置します。

秘密鍵を < SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups ディレクトリに置き、名前を変更した identity で指定します。これにより、ファイル・パスをリモート・サーバの [詳細設定] で指定しなくても、SiteScope が自動的に秘密鍵を取得できます。または、秘密鍵をその他の SiteScope ディレクトリや、SiteScope の外側に配置することもできます。

MindTerm から生成される鍵は、Openssh 形式になります。

**注:** サーバの鍵と MindTerm の鍵が同じレベルであることを確認する必要があります。たとえば、サーバの鍵が 768 ビットで MindTerm の鍵が 1024 ビットだと、認証手順は失敗します。

サーバで使用されているレベルを調べるには、次の手順を実行します。

1. リモート・サーバの sshd サービスを停止します。Red Hat Linux サーバの場合は、次のコマンドを実行します。

```
/etc/rc.d/init.d/sshd stop
```

2. リモート・サーバでデバッグ・モードで sshd サービスを起動します。Red Hat Linux サーバの場合は、次のコマンドを実行します。

```
/usr/sbin/sshd -d
```

Generating 768 bit RSA keyに似た出力が表示されます。

**注:** SiteScope で [SSH 接続の鍵ファイル] ボックスを使用する場合、入力した情報の末尾

にスペースがあると、「不明なエラー (-1)」による失敗の原因になります。問題を修正するには、末尾のスペースを削除します。

**openSSH 鍵を SEC SSH 形式に変換するには、次の手順を実行します。**

1. MindTerm で RSA 鍵 (openSSH 鍵ペア) を作成します。
2. リモート・サーバで次のコマンドを実行して、openSSH 鍵を SEC SSH 形式に変換します。  
`ssh-keygen -e -f <公開鍵>`
3. openSSH 形式の秘密鍵を SiteScope サーバに置いたままにします。

**注:** 鍵ベース認証を使用する場合、提供する鍵ファイルはバージョン 2 の秘密鍵にする必要があります。

UNIX リモート・サーバでの鍵の作成と SiteScope サーバへのコピー

**リモート・マシンの鍵を取得し、SiteScope に配置して接続を設定するには、次の手順を実行します。**

1. ルート権限を持つユーザとして UNIX リモート・サーバにログインします。
2. 秘密 / 公開 RSA 鍵のペアをプロトコル・バージョン 1 で生成するには、次のコマンドを実行します。

```
$> ssh-keygen -t rsa
```

バージョン 2 の鍵ペアを生成する場合は、次のコマンドを実行します。

```
$> ssh-keygen -t dsa
```

出力は次のようになります。

```
Enter file in which to save the key (~/.ssh/id_rsa):
```

```
Enter passphrase* (empty for no passphrase):
```

```
Enter same passphrase again:
```

ここで、パスフレーズは秘密鍵ファイルをデコードするために使用されるパスワードで、空白のままにすることができます。

識別情報は ~/.ssh/id\_rsa に保存され、公開鍵は ~/.ssh/id\_rsa.pub (プロトコル・バージョン 1)、または ~/.ssh/id\_dsa および ~/.ssh/id\_dsa.pub (プロトコル・バージョン 2) に保存されます。

3. 対応する公開鍵がリモート・ホストの許可されたファイルに含まれている必要があります。生成された公開鍵の内容をこのファイルに追加します (authorized\_keys ファイルの標準設定の場所は ~/.ssh ディレクトリです)。

これを行うには次のコマンドを実行します。

```
$> chmod 700 .ssh
```

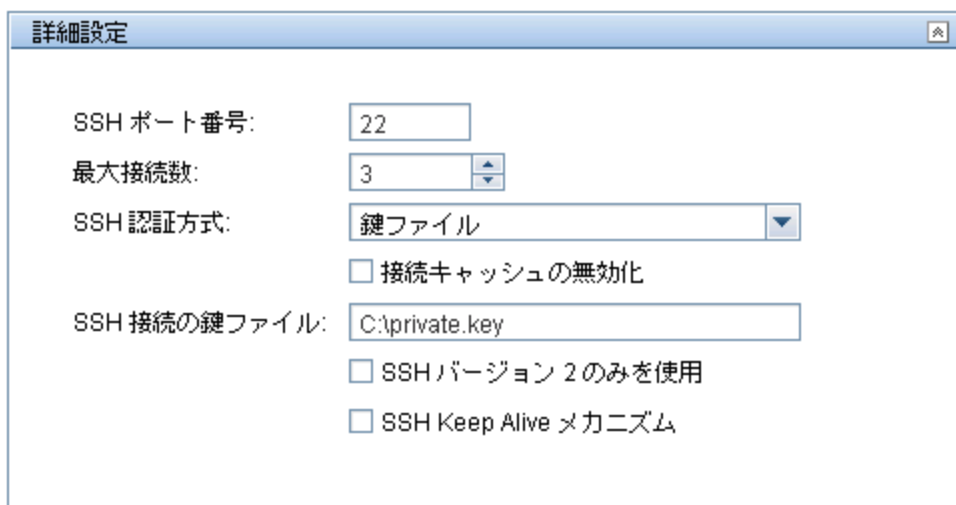
```
$> cd .ssh
```

```
$> touch authorized_keys (for ver.2: touch authorized_keys2)
```

```
$> chmod 600 authorized_keys (for ver.2: chmod 600 authorized_keys2)
```

```
$> cat id_rsa.pub >> authorized_keys (for ver.2: cat id_dsa.pub >> authorized_keys2)
$> rm id_rsa.pub (for ver.2: rm id_dsa.pub)
```

4. 識別用のファイルと秘密鍵を SiteScope マシンにコピーします。
5. SiteScope で、次の情報を [メイン設定] で指定して新しい UNIX リモート・サーバを作成します。
  - **ユーザ名**: これは、リモート・サーバに接続するユーザの名前にする必要があります。
  - **パスワード**: パスワードは、生成された秘密鍵のパスフレーズです。
  - **接続方式**: SSH:
6. [詳細設定] を次のように設定します。



The screenshot shows a dialog box titled '詳細設定' (Detailed Settings) with the following fields and options:

- SSH ポート番号: 22
- 最大接続数: 3
- SSH 認証方式: 鍵ファイル (dropdown menu)
- ☐ 接続キャッシュの無効化
- SSH 接続の鍵ファイル: C:\private.key
- ☐ SSH バージョン 2 のみを使用
- ☐ SSH Keep Alive メカニズム


7. リモート・サーバの接続をテストします。







# 第42章: リモート・サーバのプロパティ・ページ

このページには、ネットワーク環境に設定されたリモート・サーバに関する情報が表示されます。このページを使用して、リモート・サーバのプロファイルを追加、編集、削除できます。

アクセス方法	[リモート サーバ] コンテキストを選択する。リモート・サーバ・ツリーで、[Microsoft Windows リモート サーバ] または [UNIX リモート サーバ] コンテナをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>SiteScope の管理者または「リモート・サーバを追加、編集、または削除します。」権限が付与されたユーザのみが、[リモート サーバ] ページを表示、編集できます。ユーザ権限の詳細については、「<a href="#">ユーザ管理ブリファレンス</a>」(744ページ)を参照してください。</li><li>サーバがモニタから参照されている場合は、リモート・サーバのリストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの[モニタ設定] パネルにある[サーバ] ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。</li><li>同じホスト・マシンに複数のリモート・サーバを作成できます。</li></ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li>「<a href="#">リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法</a>」(480ページ)</li><li>「<a href="#">リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定方法</a>」(499ページ)</li></ul>
関連情報	「 <a href="#">リモート・サーバ・ツリー</a> 」(41ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/新規 Unix リモート・サーバ:</b> リモート・サーバを設定してツリーに追加できる [新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [新規 Unix リモート サーバ] ダイアログ・ボックスを開きます。詳細については、「 <a href="#">[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(484ページ)または「 <a href="#">[新規 UNIX リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(501ページ)を参照してください。

UI 要素	詳細
	<b>リモート・サーバの編集</b> : 選択したリモート・サーバのプロパティを編集できます。
	<b>リモート・サーバの削除</b> : 選択したサーバをツリーから削除します。
	<b>テスト</b> : 1 つ以上のサーバとの接続をテストします。 <ul style="list-style-type: none"> <li>単一のリモート・サーバとの接続をテストする場合、テスト結果はポップアップ・ウィンドウに表示されます。</li> <li>複数のリモート・サーバとの接続をテストする場合は、SiteScope を引き続き使用できるように、テストはバックグラウンドで実行されます。テスト結果は、<b>[サーバ統計] &gt; [ログ ファイル] &gt; [その他のログ]</b> の <b>remotes_multi_test.log</b> に表示されます。</li> </ul>
	<b>詳細テスト</b> : UNIX リモート・サーバの実行コマンドの結果を表示するテストを実行します。このテストにより、定義済みユーザの権限を確認できます。
	<b>すべて選択</b> : すべてのリストされたリモート・サーバを選択します。
	<b>選択を解除</b> : 選択範囲を解除します。
<b>&lt;リモート・サーバ・リスト&gt;</b>	SiteScope で設定されたリモート・サーバのリストを表示します。リモート・サーバをダブルクリックすると、選択したリモート・サーバ・タイプの <b>[リモートサーバの編集]</b> ページが開きます。
<b>名前</b>	SiteScope で認識されるリモート・サーバの名前。
<b>Server</b>	監視対象のリモート・サーバの IP アドレスまたは名前。同じホスト名のリモート・サーバを 2 つ作成できます。
<b>状態</b>	リモート・サーバの接続状態。SiteScope がリモート・サーバに接続できない場合、接続失敗の理由が示されます。
<b>最新のテスト</b>	リモート・サーバ接続が最後にテストされた日時。
<b>オペレーティングシステム</b>	リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システム。
<b>メソッド</b>	サーバ・リソース (NetBIOS, WMI, SSH for Windows, Rlogin, Telnet, SSH for UNIX) を監視する接続タイプ。
<b>詳細</b>	リモート・サーバの作成時または編集時に割り当てられたリモート・サーバの詳細。
<b>関連モニタ</b>	各リモート・サーバで使用するモニタ数。各リモート・サーバで使用する

UI 要素	詳細
	モニタ数によってテーブルを並べ替えて、未使用のリモート・サーバを削除できます（関連モニタが0のリモート・サーバがその後削除可能になります）。



## 第7部: プリファレンス

プリファレンス・メニューは、SiteScope で使用できる大部分の管理タスクに関連する特定のプロパティと設定を設定できるプリファレンス・タイプを表します。

SiteScope 内で次のプリファレンス・タイプを設定できます。

- 「証明書管理」 (550ページ)
- 「共通イベント・マッピング」 (556ページ)
- 「資格情報のプリファレンス」 (569ページ)
- 「電子メール・プリファレンス」 (577ページ)
- 「イベント・コンソール・プリファレンス」 (584ページ)
- 「一般プリファレンス」 (590ページ)
- 「HTTP プリファレンス」 (603ページ)
- 「高可用性プリファレンス」 (611ページ)
- 「インフラストラクチャ・プリファレンス」 (622ページ)
- 「統合プリファレンス」 (669ページ)
- 「ログ・プリファレンス」 (710ページ)
- 「ページャ・プリファレンス (廃止)」 (717ページ)
- 「スケジュール・プリファレンス」 (723ページ)
- 「タグの検索 / フィルタ」 (730ページ)
- 「SNMP プリファレンス」 (734ページ)
- 「ユーザ管理プリファレンス」 (744ページ)

プリファレンスに関連するその他のセクション:

- 「SiteScope での多言語化」 (773ページ)
- 「認証方法」 (779ページ)

## 第43章: 証明書管理

リモート・サーバの監視時に、対象サーバが自己署名証明書を使用している場合、その証明書を信頼されたキーストアに追加する必要があります。セキュアな接続を使用して URL、WebSphere アプリケーション・サーバ、VMware ベースのサーバを監視している場合、[証明書管理] ページで自己署名証明書を管理できます。

**注:** その場合でも、必要であれば keytool による方法を使用して証明書をインポートできます。証明書の手動インポートの詳細については、各モニタ・タイプのドキュメントを参照してください。

### アクセス方法

[プリファレンス] > [証明書管理] を選択します。

- 証明書の詳細を表示するには、証明書をダブルクリックします（[証明書の詳細] ダイアログ・ボックスを開きます）。
- 証明書を追加するには、[証明書のインポート] ボタンをクリックします（[証明書のインポート] ダイアログ・ボックスを開きます）。

**注:** [証明書管理] ページを表示するには、SiteScope の管理者であるか、「証明書リストの表示」権限を付与されたユーザである必要があります。[証明書管理] ページで証明書を管理するには、「証明書リストの編集」権限が必要です。このトピックの詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」\(744ページ\)](#)を参照してください。

## 学習事項

### 証明書管理の利点

- 標準の JVM ツール (keytool) を使用して証明書を管理する必要がありません。これにより、SiteScope マシンに対するデスクトップとシェル・セッションの要件が不要になります。
- 視覚的なキーストア管理（証明書の追加と削除）が可能になり、証明書変更操作をするたびに SiteScope を再起動しなくても動的にキーストアを再読み込みできます。
- モニタは使用するキーストアと関連付けられています。URL モニタ、WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ、VMware モニタの場合、次のキーストアが使用されます。**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\java\lib\security\cacerts**。ほかのキーストアは無視されます。
- 自己生成した認証局 (CA) 証明書を使用してすべてのサーバ証明書に署名する場合、CA 証明書を 1 回だけインポートする必要があります。

## タスク

### 証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法


このタスクでは、証明書管理を使用して自己署名証明書をインポートする手順について説明します。

#### 1. 前提条件

- 証明書管理を使用すると、SiteScopeURL、WebSphere アプリケーション、および VMware モニタのセキュア接続の設定時に必要となるサーバ証明書をインポートできます。
- [証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope 管理者ユーザ、または「[証明書リストの表示 / 編集](#)」権限を持つユーザのみです。ユーザ権限の詳細については、「[権限](#)」(757ページ)を参照してください。

#### 2. サーバ証明書のインポート

監視している Web サーバのプレフィックスが https:// の場合、その接続はセキュアで暗号化されており、サーバ証明書のインポートが必要です。

- a. [プリファレンス] > [証明書管理] を選択し、[証明書のインポート]  ボタンをクリックします。[ファイル] または [ホスト] を選択し、ソース・サーバの詳細を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[証明書のインポート\] ダイアログ・ボックス](#)」(552ページ)を参照してください。
- b. [読み込み済み証明書] テーブルから、インポートするサーバ証明書を選択して、[インポート] をクリックします。インポートした証明書が [証明書管理] ページに一覧表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[証明書管理\] ページ](#)」(551ページ)を参照してください。

#### 3. モニタのプロパティの設定

必要なサーバ証明書をインポートしたら、セキュアな接続を使用するモニタを作成できます。

## UI の説明

### [証明書管理] ページ

このページを使用して、SiteScope URL、WebSphere アプリケーション、および VMware の各モニタで使用する証明書を管理します。[証明書管理] ページでは、キーストアの内容を追加、削除、更新できます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されません）。

UI 要素	詳細
	<b>証明書のインポート</b> : [証明書のインポート] ダイアログ・ボックスが開きます。証明書が [証明書管理] のキーストア・リストに追加されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[証明書のインポート] ダイアログ・ボックス」 (552ページ)</a> を参照してください。
	<b>証明書の削除</b> : 選択した証明書が [証明書管理] のキーストア・リストから削除されます。
	<b>証明書リストの再読み込み</b> : リモート・サーバの <SiteScope のルート・ディレクトリ> \java\lib\security\cacerts ファイルからキーストア証明書を再読み込みします。これにより、SiteScope を再起動しなくても、キーストアの変更を手動で再読み込みできます。
	<b>すべて選択</b> : 表示されているすべての証明書を選択します。
	<b>選択を解除</b> : 選択を解除します。
<証明書>	インポートしたサーバ証明書のリストが表示されます。証明書をダブルクリックすると、[証明書の詳細] ダイアログ・ボックスが開き、証明書のプロパティと値が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[証明書の詳細] ダイアログ・ボックス」 (554ページ)</a> を参照してください。
別名	証明書の別名。 <b>注</b> : インポート後の証明書の別名は変更できません（証明書のインポート操作時にのみ変更できます）。
発行者	証明書の発行者名。
次まで有効	証明書の有効期限の日時。
バージョン	証明書のバージョン番号。

## [証明書のインポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスを使用して、SiteScope URL モニタ、WebSphere アプリケーション・モニタ、VMware パフォーマンス・モニタで使用する証明書を [証明書管理] のキーストア・リストに追加します。[証明書管理] ページでは、キーストアの内容を追加、削除、更新できます。

アクセス方法	<p>【プリファレンス】 &gt; 【証明書管理】を選択します。【証明書のインポート】ボタンをクリックします。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>【証明書管理】ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「証明書リストの表示/編集」の権限を持つユーザのみです。</li> <li>列の並べ替え順序を変更するには、列・タイトルの矢印をクリックします。列が昇順または降順に並べ替えられていることを示す、小さい上向きまたは下向き矢印が表示されます。</li> </ul>
関連タスク	<p><a href="#">「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」(551ページ)</a></p>
関連情報	<p><a href="#">「証明書管理」(550ページ)</a></p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>ソースの選択</b>	
ホスト	このオプションを選択して、ホスト・サーバから証明書を追加します。監視対象サーバの実 IP アドレスまたはホスト名を入力します。
ポート	<p>ホスト・マシンのポート番号（【ホスト】オプションが選択されている場合にのみ利用可能）。</p> <p><b>標準設定のポート値：443</b></p>
ロード	【ホスト】フィールドで指定したマシンの証明書を読み込みます。証明書は【読み込み済み証明書】テーブルに表示されます。
ファイル	このオプションを選択して、ファイルから証明書を追加します。
選択	証明書のインポート元のファイルに移動して、【開く】をクリックします。必要な証明書を【証明書管理】のリストに追加します。
<b>読み込み済み証明書</b>	
	<b>すべて選択</b> : 表示されているすべての証明書を選択します。
	<b>選択を解除</b> : 選択を解除します。

UI 要素	詳細
別名	証明書の別名。証明書の別名を変更するには、証明書のインポート操作時に [別名] 列に新しい別名を入力します。  注：証明書をインポートした後に別名を変更することはできません。
発行者	証明書の発行者名。
次まで有効	証明書の有効期限の日時。
バージョン	証明書のバージョン番号。
インポート	[読み込み済み証明書] テーブルからインポートするサーバ証明書を選択して、 [インポート] をクリックします。インポートした証明書が [証明書管理] ページに表示されます。

## [証明書の詳細] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスには、選択したサーバ証明書のプロパティと値が表示されます。

アクセス方法	[プリファレンス] > [証明書管理] を選択します。[証明書管理] ページで 証明書をダブルクリックします。
重要な情報	[証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、 SiteScope の管理者、または「証明書リストの表示/編集」の権限を持つユーザのみです。
関連タスク	<a href="#">「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」(551ページ)</a>
関連情報	<a href="#">「証明書管理」(550ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
別名	証明書の別名。
証明書のプロパティ	
フィンガープリント	証明書のフィンガープリント。

UI 要素	詳細
タイプ	証明書のタイプ。
バージョン	証明書のバージョン番号。
発行者プリンシパル	証明書の発行者名。
シリアル番号	証明書のシリアル番号。
署名アルゴリズム名	証明書の署名アルゴリズムの名前。
次から有効	証明書の有効期間の開始日時。
次まで有効	証明書の有効期限の日時。

## 第44章: 共通イベント・マッピング

このページは、イベントのマッピングと設定を定義するために使用されます。このページでは、SiteScope ランタイム・データと送信するイベントの属性値間のマッピングを設定できます。共通イベント・マッピングは、Operations Manager イベント統合と汎用イベント統合、および SiteScope イベント・コンソールの設定に使用されます。

### アクセス方法

[プリファレンス] > [共通イベント マッピング] を選択して [共通イベント マッピング] ページを開きます。

**注:** 共通イベント・マッピングを表示するには、SiteScope の管理者であるか、「**共通イベント・マッピングの表示**」権限が付与されたユーザである必要があります。共通イベント・マッピングを作成または編集するには「**共通イベント マッピングを追加, 編集, または削除**」権限が必要です。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

## 学習事項

### 共通イベント・マッピングの概要

イベントが Operations Manager (HPOM) または 操作管理 内の BSM に直接送信されるように SiteScope を設定できます。これを行うには、[共通イベント マッピング] を使用して、SiteScope ランタイム・データと、HPOM または BSM ゲートウェイ・サーバに送信されるイベント属性値間のイベント・マッピング・インスタンスを作成します。共通イベント・マッピングはイベントを SiteScope イベント・コンソールに送信する際に使用され、その他の管理コンソールにイベントを送信するために汎用イベント統合を設定する際にも使用されます。

イベントのトリガ条件に一致すると、イベント・テンプレートを使用して、SiteScope ランタイム・データがイベント属性にマッピングされます。これらの属性にはイベント・サブシステムに渡される値があり、この値を使用して対応するイベントが作成されます（たとえば、テンプレートによってランタイム・データが HPOM または BSM のイベントに変換されます）。その後、イベントが HPOM、BSM、または指定した管理コンソールに送信されます。

このためには、モニタや警告に関連付けられている標準設定のイベント・マッピングを使用するか、別のイベント・マッピング（存在する場合）を選択します。または、[共通イベント マッピング] で新しいイベント・マッピングを作成することもできます。あるいは、警告の場合、その警告をトリガしたモニタに関連付けられたイベント・マッピング・テンプレートを使用できます。HPOM または BSM のイベントに対するイベント・マッピング作成の詳細については、「[HPOM または BSM 用の共通イベント・マッピングの設定方法](#)」(557ページ)を参照してください。



SiteScope は、HP CDA イベント・マッピング・テンプレート、CDA (Continuous Delivery Automation) 用に特別に設定されるアウトオブボックス・テンプレートを含みます。CDA はポリシーベースのプラットフォームで、混合クラウド環境でのインフラストラクチャ・プロビジョニングを提供します。CDA は SiteScope と統合して SiteScope モニタをデプロイし、そのモニタからイベントを受け取ります。CDA ユーザ・インタフェースでは、受け取ったイベントを基にして状態を監視できます。CDA の詳細については、CDA のドキュメントを参照してください。

イベントが Operations Manager サーバに直接報告されるように SiteScope を設定する詳細については、SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」の「SiteScope を使用して HPOM または 操作管理にイベントを送信する方法」を参照してください。 [HP ソフトウェア統合サイト](#)では、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます (Windows の場合:

<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>, UNIX の場合:

<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>)。

汎用イベント統合を使用したイベント・マッピングの作成と、管理コンソールへのイベントの報告の詳細については、「[SiteScope 一般イベント統合の設定方法](#)」(700ページ)を参照してください。

SiteScope イベント・コンソールのイベント・マッピングの設定方法の詳細については、「[イベント・コンソール](#)」(1102ページ)を参照してください。

イベント・マッピングの属性プロパティの詳細については、「[警告、テンプレート、イベントで利用可能なプロパティ](#)」(1295ページ)を参照してください。

**ヒント:** SiteScope のバージョン 11.00 以前および BSM のバージョン 9.00 以前からアップグレードする場合は、すべての既存のイベント統合を無効にし、新しい統合を設定することをお勧めします。アップグレード後に統合が機能しても、イベントは BSM イベント・ブラウザでのみ使用されます。

## タスク

### HPOM または BSM 用の共通イベント・マッピングの設定方法

このタスクでは、[共通イベント マッピング] を使用してモニタと警告のイベント・マッピングを設定する方法について説明します。これは、SiteScope ランタイム・データと送信されるイベントの属性値との間のマッピングです。

#### 1. 前提条件

- イベント・マッピングを作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「**共通イベント・マッピングを追加、編集、または削除します**」の権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。
- 警告またはモニタ・インスタンスの設定時にイベント・マッピングを選択するには、HP Operations Agent をインストールして HPOM または BSM サーバに接続し、[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス ( [プリファレンス] > [統合プリファレンス] >

[**HP Operations Manager 統合**] ) でイベント統合を有効にする必要があります。詳細については、SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」の「SiteScope を使用して HPOM または 操作管理 にイベントを送信する方法」を参照してください。[HP ソフトウェア統合](#)サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます（Windows の場合：<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>、UNIX の場合：<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>）。

## 2. 警告またはモニタ・インスタンスの設定

トリガ時にイベント・システムの関連するイベントを作成する、警告またはモニタ・インスタンスを設定します。

SiteScope 警告の作成タスクの詳細については、[「SiteScope 警告の設定」](#) (1231ページ)を参照してください。

モニタ・インスタンスの作成タスクの詳細については、[「モニタを作成、デプロイする方法」](#) (270ページ)を参照してください。

イベント・コンソールの警告アクションの設定に関するタスクの詳細については、[「イベント・コンソールを設定、管理する方法 \(SiteScope 管理者\)」](#) (1108ページ)を参照してください。

## 3. 警告、イベント・コンソール、またはモニタ・インスタンスのイベント・マッピングの設定

イベント・マッピングを設定して、警告またはモニタ・インスタンスに対応するイベント属性にマッピングします。警告またはモニタのタイプごとに複数のマッピングを作成できます。

- ・ [警告] タブ > [新規警告] / [警告の編集] > [HP Operations Manager 統合設定] > [イベント マッピング] から警告を設定します。
- ・ モニタの [プロパティ] タブ > [イベント マッピング設定] からモニタ・インスタンスを設定します。
- ・ イベント・コンソール警告アクションを [警告] タブ ( [新規警告] または [警告の編集] > [警告時のアクション] > [イベント コンソール] > [イベント マッピング] ) から設定できます。

各警告またはモニタ・インスタンスで、既存のイベント・マッピングを選択することも、[共通イベント マッピング] で新しいイベント・マッピングを作成することもできます。ユーザー・インタフェースの詳細については、[「\[新規イベント マッピング\] / \[イベント マッピングの編集\] ダイアログ・ボックス」](#) (560ページ)を参照してください。

### 注:

- ・ イベント・マッピング設定は、SiteScope が HPOM と統合されており、イベント統合が有効である ( [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスの [HP Operations Manager 統合メイン設定] パネルで [イベント送信の有効化] が選択されている) 場合、または [統合プリファレンス] で [汎用イベント統合] が設定されている場合にのみ使用できます。

- 共通イベント・マッピングがモニタまたは警告アクションで参照されている場合、その共通イベント・マッピングは削除できません。マッピングを削除するには、モニタまたは警告で参照されているイベント・マッピングを変更する必要があります。

4. 結果

トリガされる警告またはモニタの測定値状態の変更に対応するイベントは、HPOM Console で表示できるほか、イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有していれば BSM の 操作管理 でも表示できます。BSM のインストールに 操作管理 が含まれていない場合は、CI の状態に影響するイベントを サービス状況 の状況インジケータを使って確認できます。

SiteScope イベント・コンソールで、トリガされるイベント・コンソール警告に対応するイベントを見ることができます。詳細については、[「イベント・コンソール」 \(1102ページ\)](#)を参照してください。





SiteScope イベント・コンソールのイベント・マッピングの設定方法


SiteScope イベント・コンソールのイベント・マッピングの設定方法の詳細については、[「イベント・コンソール」 \(1102ページ\)](#)を参照してください。

UI の説明

[共通イベント マッピング] ページ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。



UI 要素	詳細
	<b>新規イベント・マッピング</b> : 新規イベント・マッピングが作成されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」 (560ページ)</a> を参照してください。
	<b>イベント・マッピングの編集</b> : イベント・マッピングの編集ができるようになります。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」 (560ページ)</a> を参照してください。
	<b>イベント・マッピングの削除</b> : 選択したイベント・マッピングが [共通イベント マッピング] のリストから削除されます。
	<b>すべて選択</b> : 表示されているイベントがすべて選択されます。

UI 要素	詳細
	<b>選択を解除</b> :選択を解除します。
<b>標準設定</b>	<p>【標準設定】の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>標準設定モニタ・イベント・マッピングの編集</b> : [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスでは、標準設定のモニタのイベント・マッピング設定を変更できます。</li> <li>・ <b>標準設定警告イベント・マッピングの編集</b> : [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスでは、標準設定の警告のイベント・マッピング設定を変更できます。</li> <li>・ <b>標準設定コンソール・イベント・マッピングの編集</b> : [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスでは、SiteScope イベント・コンソールの標準設定のイベント・マッピング設定を変更できます。</li> </ul> <p>ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">【新規イベント マッピング】 / 【イベント マッピングの編集】 ダイアログ・ボックス</a>」(560ページ)を参照してください。</p>
<b>タイトル</b>	<p>新規イベントを作成する場合に設定プロファイルに割り当てるタイトルの文字列。</p> <p>HP CDA イベント・マッピング・テンプレートは、標準設定で共通イベント・マッピングに含まれています。このテンプレートは CDA (Continuous Delivery Automation) によって使用されます。詳細については、「<a href="#">共通イベント・マッピングの概要</a>」(556ページ)を参照してください。</p>
<b>詳細</b>	イベントの作成時または編集時に割り当てられたマッピングの詳細。

## 【新規イベント マッピング】 / 【イベント マッピングの編集】 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい共通イベント・マッピングの作成や既存のマッピングの編集ができます。これらは、SiteScope ランタイム・データとイベントを送信するために使用される属性値間のマッピングになります。共通イベント・マッピングは、Operations Manager イベント統合、汎用イベント統合、および SiteScope イベント・コンソールの設定に使用されます。

<b>アクセス方法</b>	1. <b>【プリファレンス】 &gt; 【共通イベント マッピング】</b> を選択します。
---------------	---

	<p>2. [共通イベント マッピング] ページで、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>[新規イベント マッピング]  ボタンをクリックするか、</li> <li>既存のイベントを選択して、[イベント マッピングの編集]  ボタンをクリックします。</li> </ol> <p>次の場合にもこのダイアログ・ボックスにアクセスします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>[警告] タブ, [新規警告] / [警告の編集] &gt; [HP Operations Manager 統合設定] &gt; [イベント マッピング] から警告を設定する場合。</li> <li>モニタの [プロパティ] タブ, [イベント マッピング設定] からモニタ・インスタンスを設定する場合。</li> <li>イベント・コンソール警告アクションを [警告] タブ ( [新規警告] または [警告の編集] &gt; [警告時のアクション] &gt; [イベント コンソール] &gt; [イベント マッピング] ) から設定する場合。</li> </ul>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope の管理者、または「共通イベント・マッピングを追加、編集、または削除します」の権限を付与されたユーザのみが、共通イベント・マッピングを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、「<a href="#">ユーザ権限</a>」(746ページ)を参照してください。</li> <li>共通イベント・マッピングがモニタまたは警告アクションで参照されている場合、その共通イベント・マッピングは削除できません。マッピングを削除するには、モニタまたは警告で参照されているイベント・マッピングを変更する必要があります。</li> <li>長い説明を入力した場合や、共通イベント・マッピングのフィールドを変更した結果、フィールド名が長くなりすぎた場合には、SiteScope でイベントを送信できないことがあります。</li> <li>カスタム・マッピング属性値にアポストロフィ (') は使用しないでください。たとえば、'&lt;&lt;alertName&gt;&gt;' ではなく、&lt;&lt;alertName&gt;&gt; を使用します。</li> </ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「HPOM または BSM 用の共通イベント・マッピングの設定方法」</a> (557ページ)</li> <li><a href="#">「SiteScope 一般イベント統合の設定方法」</a> (700ページ)</li> <li>SiteScope イベント・コンソールのイベント・マッピングの設定方法の詳細については、「<a href="#">イベント・コンソール</a>」(1102ページ)を参照してください。</li> <li>SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」にある「SiteScope を使用して HPOM または操作管理にイベントを送信する方法」<a href="#">HP ソフトウェア統合</a>サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます。: Windows の場合: <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39</a></li> </ul>

	UNIX の場合 : <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628</a>
関連情報	<a href="#">「共通イベント・マッピング」(556ページ)</a>

## メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	共通イベントの識別に使用する名前。
詳細	共通イベントの詳細。

### [共通イベント モデル設定] - [一般] タブ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
一般	
タイトル	<p>イベントで表示される項目を説明するわかりやすいテキスト。タイトルには、到達したしきい値（またはほかのトリガ条件）や現在の値の情報が含まれている必要があります。</p> <p><b>標準設定値：</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>メトリクスの状態変更の場合 : Metric '&lt;&lt;metric&gt;&gt;' changed status from '&lt;&lt;oldStatus&gt;&gt;' to '&lt;&lt;newStatus&gt;&gt;'</li><li>警告の場合 : Alert '&lt;&lt;alertName&gt;&gt;' was fired on monitor '&lt;&lt;fullMonitorName&gt;&gt;' status change</li><li>コンソール・イベントの場合 : コンソール・イベントは、モニタ '&lt;&lt;fullMonitorName&gt;&gt;' で生じた警告 '&lt;&lt;alertName&gt;&gt;' が原因でトリガされました。</li></ul> <p><b>ヒント：</b>通常、テキストはイベント・ブラウザに 1 行で表示されるため、最も関連する情報を最初に配置することをお勧めします。</p>
詳細	<p>イベントを説明する追加情報。</p> <p><b>標準設定値：</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>メトリクスの状態変更の場合 : Metric '&lt;&lt;metric&gt;&gt;' crossed</li></ul>

UI 要素	詳細
	<p>'&lt;&lt;thresholdCrossed&gt;&gt;' with value '&lt;&lt;metricValue&gt;&gt;'</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>警告の場合: Monitor '&lt;&lt;fullMonitorName&gt;&gt;' changed status from '&lt;&lt;oldStatus&gt;&gt;' to '&lt;&lt;newStatus&gt;&gt;'</li> <li>コンソール・イベントの場合: Monitor '&lt;&lt;fullMonitorName&gt;&gt;' changed status from '&lt;&lt;oldStatus&gt;&gt;' to '&lt;&lt;newStatus&gt;&gt;'</li> </ul>
重大度	<p>イベントに関連する項目の重大度。重大度レベルは、「不明」、「正常域」、「警告」、「軽微」、「重大」、または「致命的」です。</p> <p><b>標準設定値:</b> &lt;&lt;severity&gt;&gt;。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>メトリクスの状態変更と警告の場合: (【プリファレンス】 &gt; 【統合プリファレンス】 &gt; 【HP Operations Manager 統合】 の) 【HP Operations Manager 統合詳細設定】 パネルの重大度マッピングから取得されます。</li> <li>コンソール・イベントの場合: イベント・コンソール・プリファレンスの重大度マッピングから取得されます。詳細については、「<a href="#">【重大度マッピングのプリファレンス】ダイアログ・ボックス</a>」(588ページ)を参照してください。</li> </ul>
カテゴリ	<p>モニタ・タイプごとにイベントを編成およびグループ化するために使用される値。</p> <p><b>標準設定値:</b> &lt;&lt;monitorType&gt;&gt;</p> <p><b>例:</b> データベース, アプリケーション, J2EE</p>
サブカテゴリ	<p>同じのカテゴリを持つイベントを編成およびグループ化するために使用される値。</p> <p><b>標準設定値:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>メトリクスの状態変更の場合: &lt;&lt;metric&gt;&gt;</li> <li>警告の場合: &lt;&lt;fullMonitorName&gt;&gt;</li> <li>コンソール・イベントの場合: &lt;&lt;fullMonitorName&gt;&gt;</li> </ul> <p><b>例:</b> Oracle</p>
ログのみ	<ul style="list-style-type: none"> <li><b>False</b> が選択されると、イベントは【イベントの履歴】ビューまたはイベント履歴ログ・ファイルに書き込まれません。</li> <li><b>True</b> が選択されると、HPOM / OMi の履歴イベント・ブラウザまたは SiteScope イベント・コンソールの【イベントの履歴】ビューに直接向かうイベントを、閉じたイベントとして送信できるようになります。このような</li> </ul>



UI 要素	詳細
	<p>イベントは完全に処理されますが、<b>Life Cycle State</b> が [close from the beginning] に設定されます。これらのイベントは HPOM / OMi 履歴イベント・ブラウザ / SiteScope イベント・コンソールに表示されません。</p> <p>典型的な例として、インジケータが通常または正常な状態にリセットされるイベントや、前の問題が解消されたことを示すイベント（問題が別のイベントにレポートされた）が挙げられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>正常域の重大度に対して True</b> を選択すると、SiteScope から HPOM / SiteScope イベント・コンソール / 外部アプリケーションに転送されるすべてのメッセージが、その重大度が正常域の場合、（<b>アクティブ</b> メッセージ・ブラウザではなく）<b>確認済み</b> メッセージ・ブラウザ / コンソールに送信されます。これにより、<b>アクティブ</b> メッセージ・ブラウザが正常域の重大度メッセージで不必要に乱雑にならなくなります。</li> </ul> <p><b>標準設定値：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ メトリクスの状態変更の場合 : False</li> <li>・ 警告の場合 : False</li> <li>・ コンソール・イベントの場合 : 正常域の重大度に対して True（モニタに対してトリガされたイベントが（モニタの状態が正常に変更するときに生じる）正常域の重大度にあることを意味します）の場合、閉じたイベント（履歴ログと [イベントの履歴] ビューで利用可能）として直接履歴に送信または書き込まれます。</li> </ul>
<b>イベント・タイプ・インジケータ</b>	<p>イベントとインジケータ間のリンク。これにより、イベントが送信されるとインジケータの情報が更新されるようになります。</p> <p><b>標準設定値：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ メトリクスの状態変更の場合 : &lt;&lt;etiType&gt;&gt;:&lt;&lt;etiValue&gt;&gt;:&lt;&lt;metricValue&gt;&gt;</li> <li>・ 警告の場合 : &lt;&lt;etiType&gt;&gt;:&lt;&lt;etiValue&gt;&gt;</li> <li>・ コンソール・イベントの場合 : 値なし</li> </ul> <p><b>メトリックの状態の変更の例：</b> CPU Load:High:90</p> <p><b>注：</b> インジケータを更新する場合、このフィールドは必須です。この属性のテンプレート値の変更はお勧めできません。</p>
<b>関連</b>	
<b>キー</b>	<p>発生したイベントのタイプを表す一意の文字列。管理対象の環境で両方のイベントが同じ状況を表している場合、2つのイベントのキーが同じになることがあります（2つのイベントは重複します）。重複イベントの数（[Number of Duplicates] の数）が増加すると重複イベントは破棄されます。</p>



UI 要素	詳細
	<p><b>標準設定値 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>メトリクスの状態変更の場合 :  <code>&lt;&lt;siteScopeHost&gt;&gt;&lt;&lt;monitorUUID&gt;&gt;&lt;&lt;metric&gt;&gt;&lt;&lt;etiValue&gt;&gt;&lt;&lt;severity&gt;&gt;</code></li> <li>警告の場合 :  <code>&lt;&lt;siteScopeHost&gt;&gt;&lt;&lt;monitorUUID&gt;&gt;&lt;&lt;alertName&gt;&gt;&lt;&lt;etiValue&gt;&gt;</code></li> <li>コンソール・イベントの場合 :  <code>&lt;&lt;siteScopeHost&gt;&gt;&lt;&lt;monitorUUID&gt;&gt;&lt;&lt;alertName&gt;&gt;&lt;&lt;severity&gt;&gt;</code></li> </ul> <p><b>メトリックの状態の変更の例 :</b></p> <p>labmachine1:OMEventIntegration:CPU Utilization on SiteScope Server:utilization:Good</p>
<b>終了キー条件を送信</b>	<p>クローズ・キー・パターンがイベント・サブシステムで評価できるようになります。選択する場合、次の <b>[Close key pattern]</b> ボックスにパターンを入力します。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されている</p>
<b>Close key pattern</b>	<p>(このボックスは、<b>[終了キー条件を送信]</b> を選択した場合にのみ使用できます。) 送信するイベントによって、この式に一致するキー属性を持つすべてのイベントが自動的に閉じるようになります。このフィールドの値は <b>[キー]</b> フィールドと同じにすることをお勧めします。</p> <p><b>注 :</b> SiteScope のイベント統合ポリシーでは、クローズ・キー・パターンの最後に必ず "&lt;*&gt;" が追加されます。"&lt;" および "&gt;" 記号はログ・ファイル・ポリシーでは解析できないため、このボックスでは使用できません。</p> <p><b>標準設定値 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>メトリクスの状態変更の場合 :  <code>&lt;&lt;siteScopeHost&gt;&gt;&lt;&lt;fullgroupid&gt;&gt;&lt;&lt;monitorName&gt;&gt;&lt;&lt;metric&gt;&gt;</code></li> <li>警告の場合 : <code>&lt;&lt;siteScopeHost&gt;&gt;&lt;&lt;monitorUUID&gt;&gt;&lt;&lt;alertName&gt;&gt;</code></li> <li>コンソール・イベントの場合 :  <code>&lt;&lt;siteScopeHost&gt;&gt;&lt;&lt;monitorUUID&gt;&gt;&lt;&lt;alertName&gt;&gt;</code></li> </ul> <p><b>メトリックの状態の変更の例 :</b></p> <p>labmachine1:OMEventIntegration:CPU Utilization on SiteScope Server:utilization&lt;*&gt;</p>
<b>詳細パラメータ</b>	
<b>CI hint</b>	イベントに関連する CI の情報。この属性は、イベント処理で正しい関連 CI (関

UI 要素	詳細
	<p>連 CI の RTSM ID) を検出できるようにヒントを提供するために使用されます。</p> <p><b>標準設定値 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• &lt;&lt;ciHint&gt;&gt;。このフィールドの値は、SiteScope が BSM と HPOM のどちらに接続されているかによって異なります。このフィールドは編集できません。</li> <li>• コンソール・イベントの場合 : &lt;&lt;targetHost&gt;&gt;</li> </ul>
ホスト・ヒント	<p>イベントをトリガされたモニタによって監視されているターゲット・ホスト。値は、HPOM 内のレガシー・ノード属性に変換されます。HPOM 内にこのノードが存在しない場合、イベントは消失します。</p> <p><b>標準設定値 :</b> &lt;&lt;targetHost&gt;&gt;</p> <p><b>例 :</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IPv4 : 15.15.12.13,</li> <li>• DNS : host1.hp.com</li> </ul>
ソース・ヒントを生成中	<p>監視アプリケーションと、対応するプローブ/エージェント（イベントに作成に参与）の情報。</p> <p><b>標準設定値 :</b> SiteScope@@&lt;&lt;siteScopeHost&gt;&gt;</p> <p><b>例 :</b> SiteScope@@host1.hp.com</p>
属性	
<属性のリスト>	<p>利用可能な属性変数のリストが表示されます。属性を追加するには、選択したテキスト・ボックスに <b>属性</b> リストの属性をドラッグするか、選択した属性をコピーするセルを選択し、Ctrl キーを押しながら I キーをクリックします。</p> <p>利用可能な属性変数の詳細については、<a href="#">警告、警告テンプレート、およびイベントのプロパティ</a> (1295ページ) を参照してください。</p>



#### [共通イベント モデル設定] - [カスタム属性] タブ

このタブを使用して、カスタム属性を追加します。カスタム属性を使用して、ほかの共通イベント属性にないイベントの追加情報を提供できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 定義する属性名が一意であることと、出荷時の属性のリストに存在していないことを確認してください。</li> <li>• カスタム属性は、キーと値で構成されます（両方とも文字列です）。値には任意の文字列を使用できます。この値は、ほかの値のように共通イベント・</li> </ul>
-------	---

	<p>マッピングで使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事前定義されたカスタム・マッピング属性 (cma1-cma5) の名前は変更できません。</li> </ul>
--	---

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<p>イベントの新しいカスタム属性を作成できるようになります。各イベントのカスタム属性の数に制限はありません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>新規のキー</b> : テーブルに新しい行が追加され、属性の名前と値を追加できるようになります。</li> <li><b>既知のキー</b> : 既知のキーを選択できるサブメニューがオプションとして開きます。関連するキーを選択できます。[Name/Value] テーブルで新しい行が開き、選択したキーの名前が [Name] 列に表示されます。対応する [Value] 列にキーの値を入力できます。</li> </ul>
	<p><b>カスタム属性の削除</b> : 選択したカスタム属性がテーブルから削除されます。</p>
<b>Name and Value</b>	<p>各イベントのカスタム属性の数に制限はありません。カスタム属性を使用して、ほかの共通イベント属性にない、またはほかの属性に含まれていないイベントの追加情報を表示できます。各カスタム属性は、[名前] と [値] のペアです。[名前] フィールドに属性の名前を入力し、[値] フィールドに属性の値を入力します。</p> <p>この機能は、複数のカスタムが製品の1つのインスタンスを使用している環境を管理する場合に使用できます。1つのカスタム属性オブジェクトで複数のカスタムを処理できます。</p> <p><b>例</b> : 名前 = "cma1" ; 値 = "XYZ Company"</p>
<b>属性</b>	
<b>&lt;属性のリスト&gt;</b>	<p>利用可能な属性変数のリストが表示されます。属性を追加するには、選択したボックスに [属性] リストの属性をドラッグするか、選択した属性をコピーするセルを選択し、Ctrl キーを押しながら I キーをクリックします。</p> <p>利用可能な属性変数の詳細については、<a href="#">「警告、警告テンプレート、およびイベントのプロパティ」 (1295ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定コンソール・イベント・マッピング</b> :</p> <p>次の属性は、標準設定コンソール・イベント・マッピング・テンプレートの [カスタム属性] タブに含まれています。このテンプレートは、標準設定では</p>

UI 要素	詳細
	<p>共通イベント・マッピングに含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>&lt;&lt;monitorServiceId&gt;&gt;</b>: モニタのサービス ID の値を入力して、SiteScope イベントからイベント・コンソールに送信されるサービス名をカスタマイズできます。これは、SiteScope モニタが HPOM サービス名と関連する場合に便利です。</li> <li>• <b>&lt;&lt;monitorDrilldownURL&gt;&gt;</b>: イベントがトリガされたモニタへのイベントでハイパーリンクを作成します。</li> <li>• <b>&lt;&lt;unifiedConsoleUrl&gt;&gt;</b>: 統合コンソールのイベント・コンソールへのイベントでハイパーリンクを作成します。</li> </ul> <p><b>HP CDA イベント・マッピング:</b></p> <p>次の属性は、HP CDA イベント・マッピング・テンプレートの [カスタム属性] タブに含まれています。このテンプレートは、標準設定では共通イベント・マッピングに含まれています (CDA の詳細については、<a href="#">「共通イベント・マッピングの概要」 (556ページ)</a>を参照)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>&lt;&lt;TemplateDeployPath&gt;&gt;</b>: モニタがデプロイされたテンプレート・グループの完全パスを表示します。</li> <li>• <b>&lt;&lt;monitorServiceId&gt;&gt;</b>: モニタのサービス ID の値を入力して、SiteScope イベントから HPOM に送信されるサービス名をカスタマイズできます。これは、SiteScope モニタが HPOM サービス名と関連する場合に便利です。</li> <li>• <b>&lt;&lt;monitorDrilldownURL&gt;&gt;</b>: モニタ URL へのイベントでハイパーリンクを作成します。</li> <li>• <b>&lt;&lt;newStatus&gt;&gt;</b>: メトリックの現在の状態。</li> </ul>

## 第45章: 資格情報のプリファレンス

【資格情報のプリファレンス】では、SiteScope リソースの資格情報を中央管理できます。SiteScope モニタ、テンプレート、およびリモート・ホストのユーザ名とパスワードを資格情報プロファイルとして一度入力すると、これらのリソースの設定時に SiteScope によって自動的にその情報が設定されます。

### アクセス方法

【プリファレンス】 > 【資格情報のプリファレンス】を選択します。

資格情報プロファイルを表示または編集するには、【新規資格情報プロファイル】 / 【資格情報プロファイルの編集】 ボタンをクリックします。

**注:** 資格情報のプリファレンスを表示するには、SiteScope の管理者であるか、「資格情報リストの表示」権限が付与されたユーザである必要があります。資格情報のプリファレンスを作成または編集するには「資格情報プリファレンスを追加、編集、または削除」権限が必要です。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

## 学習事項

### 資格情報のプリファレンスの利点

【資格情報のプリファレンス】では、次の作業ができます。

- 資格情報の作成および管理。1つの中心的な場所から資格情報を追加、変更、および削除できます。
- 資格情報の更新。リソースの資格情報の期限が切れている場合や更新が必要な場合、資格情報プロファイルを更新すれば、SiteScope のリソースのすべての利用形態に変更が適用されます。これにより、SiteScope のリソースのすべての利用形態を検索して手動で更新する必要がなくなります。
- ユーザ資格情報の保護。【資格情報のプリファレンス】で保存したすべてのパスワードは暗号化されます。管理者、または「資格情報のプリファレンスの追加、編集、または削除」権限を付与されたユーザのみが、資格情報を変更できます。
- 資格情報プロパティによる検索と置換。【グローバル検索と置換】を使用して資格情報をほかの資格情報に置換します。
- 資格情報設定がある SiteScope へのモニタのコピー。複数の SiteScope が BSM に接続されている場合、モニタをほかの SiteScope にコピーすることもできます（【SAM Administration】を介してのみ使用できます）。モニタをコピーする SiteScope に資格情報プロファイルが存在しない場合、その SiteScope に資格情報プロファイルが作成されます。

サポートされているモニタ

[資格情報のプリファレンス] を使用して、次のモニタの資格情報を保存できます。

モニタのカテゴリ	モニタ
Application	<ul style="list-style-type: none"><li>「COM+ サーバ・モニタ」</li><li>「SAP CCMS モニタ」</li><li>「SAP CCMS 警告モニタ」</li><li>「SAP Java Web アプリケーション・サーバ・モニタ」</li><li>「SAP パフォーマンス・モニタ」</li><li>「SAP ワーク・プロセス・モニタ」</li><li>「Siebel アプリケーション・サーバ・モニタ」</li><li>「WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ」</li></ul>
データベース	<ul style="list-style-type: none"><li>「データベース・カウンタ・モニタ」</li><li>「DB2 JDBC モニタ」</li><li>「Oracle データベース・モニタ」</li></ul>
Server	<ul style="list-style-type: none"><li>「HP NonStop イベント・ログ・モニタ」</li><li>「IPMI モニタ」</li></ul>
Web トランザクション	<ul style="list-style-type: none"><li>「URL モニタ」</li><li>「URL 内容モニタ」</li><li>「URL リスト・モニタ」</li></ul>
仮想化とクラウド	<ul style="list-style-type: none"><li>「VMware Datastore Monitor」</li><li>「VMware ホスト・モニタ」</li><li>「VMware パフォーマンス・モニタ」</li></ul>

## タスク

### 資格情報のプリファレンスの設定方法

このタスクでは、ユーザ認証が必要な SiteScope オブジェクトの資格情報の設定および管理の手順について説明します。

#### 1. 前提条件

資格情報を作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「**資格情報プリファレンスを追加、編集、または削除します**」の権限を付与されたユーザである必要があります。

ユーザ権限の詳細については、「[権限](#)」(757ページ)を参照してください。

#### 2. 資格情報プロファイルの作成

ユーザ認証が必要な SiteScope リソースごとに、[資格情報のプリファレンス] で資格情報プロファイルを設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[資格情報のプリファレンス\] ページ](#)」(573ページ)を参照してください。

サポートされているモニタのリストについては、「[サポートされているモニタ](#)」(570ページ)を参照してください。

#### 3. 資格情報プロファイルを使用する SiteScope リソースの設定

資格情報プロファイルがある SiteScope リソースを設定する場合、リソースの設定領域にある **[資格情報]** ボックスでプロファイルを選択します。

- モニタ設定時のユーザ・インタフェースの詳細については、そのモニタのモニタ設定を参照してください。
- リモート・サーバの設定時のユーザ・インタフェースの詳細については、次の [メイン設定] を展開してください。
  - 「[\[新規 Microsoft Windows リモート サーバ\] / \[Microsoft Windows リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(484ページ)
  - 「[\[新規 UNIX リモート サーバ\] / \[UNIX リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(501ページ)

#### 4. 資格情報プロファイルの更新

リソースの資格情報が変更された場合、資格情報プロファイルを更新するだけでよく、リソースのすべての利用形態を検索して SiteScope の各リソースを個別に更新する必要はありません。プロファイルを変更するには、[資格情報のプリファレンス] でプロファイルを選択して **[資格情報プロファイルの編集]** をクリックし、必要な変更を行います。

**注:** 資格情報プロファイルがモニタで参照されている場合、その資格情報プロファイルは削除できません。プロファイルを削除するには、各依存関係からプロファイルを削除する必要があります。

#### 5. 結果

SiteScope では、[資格情報のプリファレンス] で入力した資格情報を使用してリソースのログインとパスワードが認証されます。



## UI の説明

### [資格情報のプリファレンス] ページ

このページでは、SiteScope リソースの資格情報を中央管理できます。このページでは、SiteScope モニタ、テンプレート、リモート・ホストの設定に使用する資格情報を追加、更新、および削除できます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>新規資格情報プロファイル</b> ：新規資格情報プロファイルが作成されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規資格情報プロファイル] / [資格情報プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(574ページ)を参照してください。
	<b>資格情報プロファイルの編集</b> ：資格情報プロファイルを編集できるようになります。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規資格情報プロファイル] / [資格情報プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(574ページ)を参照してください。
	<b>資格情報プロファイルの削除</b> ：選択した資格情報プロファイルが[資格情報プリファレンス] から削除されます。
	<b>すべて選択</b> ：表示されている資格情報プロファイルがすべて選択されます。
	<b>選択を解除</b> ：選択を解除します。
<b>名前</b>	新規資格情報プロファイルを作成する場合に設定プロファイルに割り当てる名前の文字列。
<b>ログイン</b>	該当の資格情報プロファイルを使用するリソースにアクセスするためのユーザ名。
<b>詳細</b>	資格情報プロファイルの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

# ヒント / トラブルシューティング

## 一般的な注意事項 / 制限事項

- モニタをほかの古いバージョンの SiteScope にコピーする場合、資格情報設定は SiteScope にコピーされません。
- 資格情報プロファイルがモニタまたはリモート・ホストで参照されている場合、その資格情報プロファイルは削除できません。資格情報プロファイルを削除するには、各依存関係から資格情報プロファイルを削除する必要があります。
- テンプレート・リモート・ホストまたはテンプレート・モニタで使用している資格情報が削除されている場合、欠落している資格情報を [資格情報のプリファレンス] に追加するか、リソースの資格情報をテンプレート・オブジェクトに手動で入力してからテンプレートをデプロイする必要があります。



## 資格情報プロファイルの監視

ユーザ資格情報が期限切れまたは変更された場合、これらの資格情報を使用しているモニタが機能しなくなり、状態が [エラー] になります。この状況を回避するには、認証をチェックする資格情報プロファイルごとにモニタを作成し、そのモニタ・タイプのすべてのモニタがテスト・モニタに依存するようにします。

たとえば、IPMI モニタ IPMI\_test\_credentials を作成し、サーバのログインとパスワードを手動で設定します。IPMI モニタの設定時に、[依存関係] パネルの [依存対象] ボックスに「IPMI\_test\_credentials」と入力し、[依存条件] として [利用可能] を選択します。IPMI\_test\_credentials モニタが何らかの理由により使用できなくなった場合、IPMI モニタは自動的に無効になります。

# [新規資格情報プロファイル] / [資格情報プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規資格情報プロファイルの作成や既存のプロファイルの編集ができます。資格情報プロファイルを使用して、SiteScope リソースの認証資格情報を保存および管理します。

アクセス方法	<p>[プリファレンス] &gt; [資格情報のプリファレンス] を選択します。[資格情報のプリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• [新規資格情報プロファイル]  ボタンをクリックするか、</li><li>• 既存の資格情報プロファイルを選択して [資格情報プロファイルの編集]  ボタンをクリックします。</li></ul>
重要な情報	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>• SiteScope の管理者、または「<b>資格情報プリファレンスを追加、編集、または削除します</b>」権限を付与されたユーザのみが、資格情報のプリファレンスを作成または変更できます。</li> <li>• このページは、ユーザ権限に応じてビュー・モードまたは編集モードで開きます。</li> </ul> <p>ユーザ権限の詳細については、「<a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a>」(744ページ)を参照してください。</p>
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「資格情報のプリファレンスの設定方法」</a> (571ページ)
<b>関連情報</b>	<a href="#">「資格情報のプリファレンス」</a> (569ページ)

## メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>名前</b>	資格情報プロファイルのわかりやすい名前。 <b>最大文字数</b> : 50 文字
<b>ドメイン</b>	資格情報のドメイン。接続時に、次の形式でドメインがログインに追加されます。 <ドメイン>\<ログイン>
<b>ログイン</b>	該当の資格情報プロファイルを使用するリソースにアクセスするためのユーザ名。
<b>パスワード</b>	<p>該当の資格情報プロファイルを使用するリソースにアクセスするためのパスワード。</p> <p>すべての SiteScope パスワードは、3DES (TDES (Triple Data Encryption Algorithm) と呼ばれます) を使用して暗号化されます。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』 (&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\sisdocs\doc_lib\Get_Documentation.htm) の「SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化」を参照してください。</p>
<b>パスワードの確認</b>	[パスワード] ボックスで入力したパスワードの確認。これは、新規資格情報を作成するときや、既存の資格情報のパスワードを変更するときに使用されます。

## 詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (&lt;BR&gt;, &lt;HR&gt;, および &lt;B&gt; タグなど) を使用して, 表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p><b>注:</b> このボックスに入力した HTML コードは, 有効性とセキュリティがチェックされ, コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると, フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• タグ <b>:script, object, param, frame, iframe</b>。</li><li>• <b>on</b> で始まる属性を含むタグは拒否される。例: <b>onhover</b>。</li><li>• 値に <b>javascript</b> が指定された属性。</li></ul>

## タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します (ラベルのない要素は山括弧内に表示されず)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>SiteScope オブジェクト (グループ, モニタ, リモート・サーバ, テンプレート, プリファレンス・プロファイル) を検索およびフィルタするために, キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合, このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され, 必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については, <a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」 (78 ページ)</a>を参照してください。</p>
タグの追加	<p>〔新規タグ〕 ダイアログ・ボックスを開き, 新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については, <a href="#">「〔新規タグ〕 / 〔タグの編集〕 ダイアログ・ボックス」 (87 ページ)</a>を参照してください。</p>

# 第46章: 電子メール・プリファレンス

SiteScope が外部電子メール・サーバと通信するために必要な設定を行うには、このページを使用します。電子メール・プリファレンスは、SiteScope がイベント警告を電子メール・メッセージとして送信するために使用する標準設定です。

## アクセス方法

[**プリファレンス**] > [**電子メール プリファレンス**] を選択します。

**注:** SiteScope の管理者、または「**電子メール、ページャ、HTTP、SNMP リストを表示**」権限を付与されたユーザのみが、電子メール・プリファレンスを表示できます。電子メール・プリファレンスを作成または編集するには、「**電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスを追加、編集、または削除します**」権限が必要です。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

## 学習事項

### 電子メール・プリファレンスの概要

[**電子メール プリファレンス**] ページには、電子メール警告メッセージを受信者に送信するために定義したカスタムの電子メール受信者プロファイルが表示されます。電子メール受信者プロファイルを1つ以上の電子メール警告に関連付けるには、該当する警告定義を編集します。







電子メールは、SiteScope によって問題が検出されたときに（SiteScope インタフェースに表示される視覚的なアイコンと状態メッセージに加えて）イベント警告を送信するための標準設定のメディアです。[**電子メール プリファレンス**] は、SiteScope が電子メール警告やその他の SiteScope メッセージを送信する際に使用する SMTP メール・サーバ、受信者アドレスなどの設定（SiteScopeによってSSL SMTP サーバ経由で電子メールを安全に送信できるようにするなど）を指示するために使用します。

## UI の説明

### [電子メール プリファレンス] ページ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。



UI 要素	詳細
	<b>新規電子メール受信者</b> : 新規の電子メール受信者プロファイルを作成します。

UI 要素	詳細
	ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(579ページ)を参照してください。
	<b>電子メール受信者の編集</b> : 電子メール受信者プロフィールを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(579ページ)を参照してください。
	<b>電子メール受信者の削除</b> : 選択した電子メール受信者プロフィールを「電子メール プリファレンス」から削除します。
	<b>電子メール受信者のテスト</b> : 電子メール・アドレスにメッセージを送信できるかどうかをテストします。「電子メール」ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、「 <b>テスト</b> 」をクリックします。
	<b>すべて選択</b> : 表示されている電子メール受信者プロフィールをすべて選択します。
	<b>選択を解除</b> : 選択を解除します。
<b>標準設定</b>	<p>「標準設定」の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>編集</b>: 「電子メール プリファレンスの標準設定」ダイアログ・ボックスが開き、「新規電子メール受信者」ダイアログ・ボックスに表示された標準設定を変更できます。この設定の詳細については、「<a href="#">[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス</a>」(581ページ)を参照してください。</li> <li><b>テスト</b>: 選択したアドレスに電子メールを送信できるかどうかをテストします。選択可能な受信者のリストからテストする電子メール受信者を選択するか、「<b>電子メール アドレス</b>」ボックスに電子メール・アドレスを入力します。</li> </ul>
<b>名前</b>	新規電子メール受信者を作成する場合に設定プロフィールに割り当てる名前の文字列。
<b>詳細</b>	プロフィールの作成時または編集時に割り当てられた設定プロフィールの詳細。
<b>電子メール</b>	警告の送信先の電子メール・アドレス。

UI 要素	詳細
有効	電子メール警告の状態。状態が「いいえ」の場合、これらの電子メール・アドレスへの電子メール警告の送信は停止されます。

## 〔新規電子メール受信者〕 / 〔電子メール受信者の編集〕 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規電子メール受信者プロファイルの作成や既存のプロファイルの編集ができます。SiteScope では、電子メール受信者プロファイルを使用して電子メール警告を送信します。

アクセス方法	<p>〔プリファレンス〕 &gt; 〔電子メール プリファレンス〕 を選択します。〔電子メール プリファレンス〕 ページで、次のいずれかの操作を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 〔新規電子メール受信者〕  ボタンをクリックするか、</li><li>・ 既存の電子メール受信者プロファイルを選択して 〔電子メール受信者の編集〕  ボタンをクリックします。</li></ul>
重要な情報	SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスの追加、編集、または削除」の権限を付与されたユーザのみが、電子メール・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、「 <a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a> 」(744ページ)を参照してください。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「電子メール・プリファレンス」</a> (577ページ)</li><li>・ <a href="#">「〔電子メール プリファレンスの標準設定〕 ダイアログ・ボックス」</a> (581ページ)</li></ul>

### メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	表示されているプロファイルの識別に使用する電子メール受信者プロファイル定義の名前。
詳細	

UI 要素	詳細
	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (&lt;BR&gt;, &lt;HR&gt;, および &lt;B&gt; タグなど) を使用して, 表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p><b>注:</b> ここに入力した HTML コードは, 有効性とセキュリティがチェックされ, コード (長くなったため切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると, フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• タグ: <b>script</b>, <b>object</b>, <b>param</b>, <b>frame</b>, <b>iframe</b>。</li><li>• <b>on</b> で始まる属性を含むタグは拒否される。例: <b>onhover</b>。</li><li>• 値に <b>javascript</b> が指定された属性。</li></ul>
電子メールの送信先	<p>警告の送信先の電子メール・アドレス。</p> <p><b>例:</b> test@mycompany.com</p> <p>複数の電子メール・アドレスは, カンマで区切って入力できます。</p> <p><b>例:</b> test@mycompany.com, sysadmin@thiscompany.com</p> <p><b>注:</b> 「<a href="#">[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス</a>」(581 ページ) で <b>SMTP SSL</b> が選択されている場合, 電子メールは SSL SMTP サーバ経由でセキュアに送信できます。</p>
無効	<p>設定された電子メール・アドレスへの電子メール警告の送信が停止されます。この電子メール設定が含まれる警告すべてを編集せずに, 特定の電子メールを一時的に無効にする場合, このオプションを使用します。</p>

## 詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
テンプレート	電子メール警告設定を定義するテンプレート。設定を定義した後は, 1 つの警告がユーザとページャに送信されます。ページャには <b>ShortMail</b> テンプレートを使用します。
スケジュール	電子メールをいつ有効にするかを指定します。ドロップダウン・メニューに設定されたスケジュールから, より厳密なスケジュールを選択することもできま



UI 要素	詳細
	す。 <b>標準設定値</b> : 毎日, 全日

## タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<b>&lt;タグ名と値&gt;</b>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。  概念の詳細については、 <a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」(78 ページ)</a> を参照してください。
<b>タグの追加</b>	〔新規タグ〕ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「<b>[新規タグ]</b> / <b>[タグの編集]</b> ダイアログ・ボックス」(87ページ)</a> を参照してください。

# 〔電子メールプリファレンスの標準設定〕ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、電子メール受信者の標準設定値を設定できます。

<b>アクセス方法</b>	〔プリファレンス〕 > 〔電子メール プリファレンス〕を選択します。〔電子メール プリファレンス〕ページで〔標準設定〕 > 〔編集〕をクリックします。
<b>重要な情報</b>	SiteScope の管理者、または「 <b>電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスの追加、編集、または削除</b> 」の権限を付与されたユーザのみが、電子メール・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、 <a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」(744ページ)</a> を参照してください。
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「電子メール・プリファレンス」(577ページ)</a></li><li>・ <a href="#">「<b>[新規電子メール受信者]</b> / <b>[電子メール受信者の編集]</b> ダイアログ・</a></li></ul>

[ボックス」 \(579ページ\)](#)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
電子メール・サーバのドメイン名	SiteScope が電子メール・メッセージの送信時に使用する SMTP メール・サーバのドメイン名。  例 : mail.thiscompany.com  メール・サーバのドメイン名がわからない場合は、システム管理者に問い合わせてください。
管理者の電子メール・アドレス	SiteScope が状態メッセージを送信する宛先の電子メール・アドレス。  例 : sysadmin@thiscompany.com
毎日の状態	SiteScope は、要約した状態メッセージを管理者の電子メール・アドレスに毎日送信します。この電子メールは、毎日午前 7:07 に生成するようにスケジュール設定されます。送信する電子メールの件名には、「SiteScope の毎日の状態」が含まれます。電子メールの内容には、アクティブなモニタとグループの数、該当する SiteScope メイン・ページへの URL リンク、および SiteScope インストールのバージョン番号が含まれます。
SiteScope 開始 / 再開	SiteScope では、SiteScope の再起動ごとに短いメッセージを送信します。再起動は、モニタ実行の問題を示唆している場合があります。詳細については、 <a href="#">「SiteScope サーバの状況モニタ」 (1129ページ)</a> を参照してください。  注 : SiteScope は 1 日に 1 回自動的に再起動しなくなりました。
送信元電子メール・アドレス	SiteScope で生成されるメールの送信元アドレスとして使用する電子メール・アドレス。電子メール・アドレスを指定すると、SiteScope から送信された電子メールの参照や並べ替えが容易になる場合があります。何も入力しないと、 <b>「送信元電子メール アドレス」</b> は、メールの実際の送信元アドレスと同じになります。  例 : sitescope@mycompany.com  注 : 使用するメール・サーバが NTLM 認証を必要な場合（後述）、ここで入力する電子メール・アドレスは有効な電子メール・アドレスである必要があります。
バックアップ電子メール・サーバ・ドメイン名	SiteScope がプライマリ・メール・サーバに到達できない場合に使用する SMTP メール・サーバのドメイン名。バックアップ・メール・サーバのドメイン名がわからない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

UI 要素	詳細
	例 : gateway.mycompany.com。
ログイン	SMTP サーバで要求されるユーザ名。このユーザ名は、プライマリとバックアップの両方のメール・サーバに使用します。  注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。
パスワード	SMTP サーバで要求されるパスワード。このパスワードは、プライマリとバックアップの両方のメール・サーバに使用します。  注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。
NTLM 認証	ドロップダウン・リストから、次の NTLM 認証オプションを選択します。  <ul style="list-style-type: none"> <li>なし : メール・サーバで NTLM 認証が不要な場合に選択します。</li> <li>NTLMv1 : メール・サーバで NTLM バージョン 1 を使用した認証が必要な場合に選択します。</li> <li>NTLMv2 : メール・サーバで NTLM バージョン 2 を使用した認証が必要な場合に選択します。</li> </ul> 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。  標準設定値 : なし
タイムアウト (秒)	SMTP サーバからの応答を待機する時間 (秒単位)。タイムアウト期間内にプライマリ・メール・サーバからの応答を受信しなかった場合、SiteScope はバックアップ・メール・サーバの使用に切り替わります。  標準設定値 : 60 秒
SMTP SSL	SSL SMTP サーバ経由で電子メールを安全に送信できるようになります。選択すると、すべてのメールが SiteScope によって SSL 経由で送信されます。ただし、独自の SMTP メール設定があるメール・モニタおよびメールの送受信ツールはこの限りではありません。  注 : [カスタム SMTP ポート] で別のポートを指定しない限り、標準設定で、SMTP メール・サーバのポート 465 を経由してメールが送信されます。(下記を参照)。  標準設定値 : 選択されていない
カスタム SMTP ポート	電子メールをユーザ指定ポート経由で送信できます。このボックスが空のままの場合、メール送信用の標準設定ポート (SMTP メール・サーバの場合は 465) が使用されます。

## 第47章: イベント・コンソール・プリファレンス

イベント・コンソール・プリファレンスでは、SiteScope 管理者は、各ユーザ・グループが確認する必要のあるイベントに集中できるようにフィルタを設定できます。たとえば、NOC オペレータはステータスまたは優先順位でフィルタされたイベントを確認したり、アプリケーション・サポート担当者は、特定のサーバ・モニタに関連付けられたイベントのみを確認したりということが可能です。

詳細については、「[イベント・コンソール](#)」(1102ページ)を参照してください。

### アクセス方法

[[プリファレンス](#)] > [[イベント コンソール プリファレンス](#)] を選択します。

## タスク

### イベント・フィルタの設定方法

このタスクでは、イベント・コンソールに表示されるイベントを決定するフィルタの設定手順について説明します。

#### 1. 前提条件

SiteScope の管理者、または「[イベント コンソール プリファレンスの表示](#)」権限を付与されたユーザのみが、イベント・コンソール・プリファレンスを表示、編集できます。権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

#### 2. (特定のユーザまたはユーザ・グループの要件に基づいた) イベント・フィルタの設定


- a. [[プリファレンス](#)] > [[イベント コンソール プリファレンス](#)] を選択し、[\[イベント フィルタの新規作成\]](#) / [\[イベント フィルタの編集\]](#) をクリックして [\[イベント フィルタの新規作成\]](#) / [\[イベント フィルタの編集\]](#) ダイアログ・ボックスを開きます。
- b. [\[一般設定\]](#) 表示枠でフィルタの名前と説明を入力します。
- c. [\[イベント フィルタ\]](#) 表示枠の [\[設定\]](#) 領域で、フィルタで使用するイベント属性値を選択します。詳細については、「[\[イベント フィルタの新規作成\]](#) / [\[イベント フィルタの編集\]](#) [ダイアログ・ボックス](#)」(586ページ)を参照してください。

**注:** イベント属性のグループ（[\[状態\]](#)，[\[重大度\]](#)，[\[割り当て先\]](#)，[\[ライフサイクルの状態\]](#)，[\[優先順位\]](#)）ごとに、少なくとも1つのチェック・ボックスが選択されている必要があります。

- d. (任意指定) イベントのタイトル、詳細、カテゴリ、サブカテゴリ、ターゲットでフィルタ

することもできます。これを行うには、イベント属性を照合する正規表現を該当のボックスに入力します。

3. 結果

ユーザは、**「フィルタ」**  ボタンをクリックし、いずれかの事前定義フィルタを選択して、イベント・コンソールのイベントをフィルタできます。詳細については、**「イベント・コンソール」** (1102ページ)を参照してください。

UI の説明



[イベント コンソール プリファレンス] ページ - [イベント フィルタ]  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>イベント・フィルタの新規作成</b> : イベント・コンソールに送信されたイベントを表示するフィルタを新規作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <b>「[イベントフィルタの新規作成] / [イベントフィルタの編集] ダイアログ・ボックス」</b> (586ページ)を参照してください。
	<b>イベント・フィルタの編集</b> : 選択したイベント・フィルタの編集ができるようになります。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <b>「[イベントフィルタの新規作成] / [イベントフィルタの編集] ダイアログ・ボックス」</b> (586ページ)を参照してください。
	<b>イベント・フィルタの削除</b> : 選択したイベント・フィルタをイベント・コンソール・プリファレンスから削除します。
	<b>すべて選択</b> : 表示されているすべてのイベント・フィルタを選択します。
	<b>選択を解除</b> : 選択を解除します。
標準設定	<p>[標準設定] の横にある矢印をクリックし、<b>「重大度設定の編集」</b>を選択します。[重大度マッピングのプリファレンス] ダイアログ・ボックスが開き、イベントに関する重大度のマッピングの標準設定を変更できます (<b>「[共通イベントモデル設定] - [一般] タブ」</b> (562ページ)の「重大度」を参照してください)。</p> <p>[重大度マッピングのプリファレンス] ダイアログ・ボックスの詳細について</p>

UI 要素	詳細
	は、 <a href="#">「[重大度マッピングのプリファレンス] ダイアログ・ボックス」 (588 ページ)</a> を参照してください。
名前	イベント・コンソールのイベント・フィルタに割り当てられている名前文字列。
詳細	イベント・フィルタの詳細。プロパティを編集、表示する場合にのみ表示されます。

## 「イベント フィルタの新規作成」 / 「イベント フィルタの編集」 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、定義した基準を満たす SiteScope イベント・コンソール・イベントのみを表示するカスタム・イベント・フィルタを作成できます。

アクセス方法	<p>「<a href="#">プリファレンス</a>」 &gt; 「<a href="#">イベント コンソール プリファレンス</a>」を選択します。 「<a href="#">イベント コンソール プリファレンス</a>」ページの「<a href="#">イベント フィルタ</a>」セクションで、次のいずれかの操作を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">イベント フィルタの新規作成</a>」 ボタンをクリックして、新しいイベント・フィルタを作成する。</li> <li>「<a href="#">イベント フィルタ</a>」セクションで既存のイベント・フィルタを選択して、「<a href="#">イベント フィルタの編集</a>」 ボタンをクリックする。</li> </ul>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope の管理者、または「<a href="#">イベント コンソール プリファレンスの表示</a>」権限を付与されたユーザのみが、イベント・コンソール・プリファレンスを表示、編集できます。権限の詳細については、「<a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a>」(744ページ)を参照してください。</li> <li>「<a href="#">タイトル</a>」, 「<a href="#">詳細</a>」, 「<a href="#">カテゴリ</a>」, 「<a href="#">サブカテゴリ</a>」, 「<a href="#">ターゲット</a>」フィールドで使用されている正規表現がどのイベントにも一致しない場合、イベント・コンソールにイベントの一覧が表示されます。正規表現ツールを使用して正規表現を確認できます。詳細については、「<a href="#">正規表現ツール</a>」(144ページ)を参照してください。</li> </ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">イベント・コンソール・プリファレンス</a>」(584ページ)</li> <li>「<a href="#">イベント・コンソール</a>」(1102ページ)</li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>一般設定</b>	
<b>名前</b>	イベント・コンソールのイベント・フィルタに割り当てられている名前文字列。
<b>詳細</b>	イベント・フィルタの詳細。プロパティを編集、表示する場合にのみ表示されます。
<b>イベント・フィルタ</b>	
<b>設定</b>	<p>次の各グループから少なくとも1つの設定を選択して、イベント・フィルタを作成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>状態:</b> コンソール・イベントに対応する、SiteScope のモニタしきい値ステータス。ステータスは、[良好]、[エラー]、[警告] です。</li> <li>・ <b>重大度:</b> イベントに関連するオカレンスの重大度。重大度レベルは、「不明」、「正常域」、「注意域」、「警戒域」、「重要警戒域」、または「危険域」です。</li> <li>・ <b>割り当て先:</b> 問題を解決するユーザ。この値は、[自分]、[その他]、[なし] です。</li> <li>・ <b>ライフサイクルの状態:</b> イベントのライフサイクルを表すために使用される状態。値は、[オープン]、[進行中]、[解決済み]、[クローズ] です。</li> <li>・ <b>優先順位:</b> 選択したイベントに割り当てられた重要度。値は、[なし]、[最低]、[低]、[中]、[高]、[最高] です。</li> </ul> <p><b>注:</b> 重大度のマッピングは、SiteScope 内のモニタしきい値ステータスを、コンソール・イベントの重大度レベルに関連付けます。必要に応じて、<b>[プリファレンス] &gt; [イベント コンソール プリファレンス] &gt; [標準設定] &gt; [重大度設定の編集]</b> の [重大度マッピングのプリファレンス] ダイアログ・ボックスでイベント重大度マッピングをカスタマイズできます。詳細については、<a href="#">「[重大度マッピングのプリファレンス] ダイアログ・ボックス」(588ページ)</a> を参照してください。</p>
<b>タイトル</b>	タイトルでイベントをフィルタするには、タイトルを照合する正規表現を入力します。
<b>詳細</b>	詳細でイベントをフィルタするには、詳細を照合する正規表現を入力します。
<b>カテゴリ</b>	カテゴリでイベントをフィルタするには、カテゴリを照合する正規表現を入力

UI 要素	詳細
	します。
サブカテゴリ	サブカテゴリでイベントをフィルタするには、サブカテゴリを照合する正規表現を入力します。
ターゲット	ターゲットでイベントをフィルタするには、ターゲットを照合する正規表現を入力します。

## 〔重大度マッピングのプリファレンス〕 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、イベントの重大度マッピングをカスタマイズできます。重大度のマッピングは、SiteScope 内のモニタしきい値ステータスを、コンソール・イベントの重大度レベルに関連付けます。重大度のマッピングの標準設定を使用するかまたはマッピングをカスタマイズすることができます。

アクセス方法	〔プリファレンス〕 > 〔イベント・コンソール管理〕 > 〔標準設定〕 > 〔重大度設定の編集〕を選択します。〔重大度マッピングのプリファレンス〕ダイアログ・ボックスで、必要なイベント・マッピングを設定します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「イベント コンソール プリファレンスの表示」権限を付与されたユーザのみが、イベント・コンソール・プリファレンスを表示、編集できます。権限の詳細については、「 <a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a> (744ページ)」を参照してください。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">[共通イベント モデル設定] - [一般] タブ</a> (562ページ)」の「重大度」についての説明</li> <li>「<a href="#">イベント・コンソール・プリファレンス</a> (584ページ)」</li> <li>「<a href="#">イベント・コンソール</a> (1102ページ)」</li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
エラー	<p>SiteScope の各モニタ・インスタンスのエラー・ステータスのしきい値とコンソール・イベントの重大度レベルとのマッピング。</p> <p><b>標準設定値 : 危険域</b></p>



UI 要素	詳細
注意域	SiteScope の各モニタ・インスタンスの警告ステータスのしきい値とコンソール・イベントの重大度レベルとのマッピング。  標準設定値 : 警戒域
良好	SiteScope の各モニタ・インスタンスの良好ステータスのしきい値とコンソール・イベントの重大度レベルとのマッピング。  標準設定値 : 正常域
利用不可	SiteScope の各モニタ・インスタンスの利用不可ステータスのしきい値とコンソール・イベントの重大度レベルとのマッピング。  標準設定値 : 不明

## 第48章: 一般プリファレンス

このページでは、SiteScope のライセンス情報のほかに、一般的な表示機能、任意指定の機能、アクセス・オプションを入力および表示できます。また、SSH、WMI、JDBC、LW-SSO（認証）、ダッシュボードを設定することもできます。

**注:** 多言語化の問題に関連する一般プリファレンスの詳細については、[「SiteScope での多言語化」\(773ページ\)](#)を参照してください。

### アクセス方法

[プリファレンス] > [一般プリファレンス] を選択します。

**注:** 一般プリファレンスを表示するには、SiteScope の管理者であるか、「**一般プリファレンスの表示**」権限が付与されたユーザである必要があります。一般プリファレンスを編集するには、「**一般プリファレンスの編集**」権限が必要です。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

## 学習事項

### 標準設定の認証資格情報の使用

このセクションを使用して、特定のアプリケーションおよびシステムにログインするために SiteScope で使用する標準設定の認証資格情報を入力できます。このユーザ名およびパスワードは、次の条件を満たす場合に使用されます。

- ほかの認証資格情報が個々のモニタの設定時に入力されていない。
- 認証先アプリケーションまたはシステムで認証資格情報が必要である。URL モニタ、URL シーケンス・モニタ、Web サービス・モニタでこの機能を使用できます。

### モニタ・プロセスの一時停止

大規模で複雑な監視環境の場合、大量のモニタが実行されて SiteScope の負荷が高くなり、応答が遅くなる可能性があります。これは、一部のモニタで過度に監視が行われるように設定されていることや、システムが過負荷になっていることなどが原因になります。監視アクションによって SiteScope のパフォーマンスが下がっている場合、監視アクションを一時停止して設定を変更することをお勧めします。モニタを一時停止して、大規模な設定操作（一括の検索置換など）の完了に要する時間を削減できます。[**全モニタを一時停止**] オプションには、次の機能があります。

### Web スクリプト・モニタのファイル・ディレクトリ

Web スクリプト・モニタでは、VuGen スクリプトを実行してパフォーマンスと Web アプリケーションのデータ内容を監視します。モニタで使用する VuGen スクリプトは、これらのスクリプト用の標


準設定ディレクトリ（< SiteScope のルート・ディレクトリ > \templates.webscripts）に保存することも、一般プリファレンスで別のディレクトリを定義することもできます。

**注:** Web スクリプト・モニタは、SiteScope に直接アクセスしているユーザのみが使用できます。BSM の SAM管理を使用して SiteScope にアクセスしているユーザは使用できません。

## UI の説明

### 検索オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
Find	<p>プリファレンス設定の特定の文字列を検索できます。検索文字列をボックスに入力します。文字をボックスに入力すると、検索フィルタが自動的に実行され、最初の一致結果が強調表示されます。一致がない場合、ボックスが赤色で表示されます。</p> <p>この検索では、各設定ラベルの最初の単語の文字列が自動的に検索されます。設定ラベルのほかの場所の文字列をチェックするには、検索文字列の前にアスタリスクのワイルドカード (*) を入力します。</p> <p>疑問符のワイルドカード (?) を使用して、1 文字のみを表すこともできます。</p> <p>[Find] ボックスをクリアするには、 ボタンをクリックします。</p>
Find Next	検索文字列に一致する次の文字列を検索します。
Find Previous	検索文字列に一致する前の文字列を検索します。
Highlight	検索フレーズに一致するすべての文字列を強調表示します。
Match Case	<p>入力したとおりのフィルタ文字列が検索されます。このオプションをクリアすると、フィルタ文字列の大文字と小文字は区別されません。</p> <p><b>標準設定値 :</b>選択されていない</p>

## 一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>VuGen スクリプトパスのルート</b>	<p>Web スクリプト・モニタで使用する VuGen スクリプトの zip ファイルを保存するディレクトリ。ここで入力したディレクトリのファイルが Web スクリプト・モニタの設定時に利用可能なスクリプトのリストに表示されます。ここで値を入力しない場合、標準設定のディレクトリ <b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt; \templates.webscripts</b> ファイルがモニタの設定時に表示されます。</p> <p>モニタを使った作業の詳細については、「Web スクリプト・モニタ」を参照してください。</p>
<b>標準設定の認証ユーザ名</b>	<p>リモート・システムの認証に使用する標準設定のユーザ名。&lt;ユーザ名&gt;と&lt;ドメイン&gt;\&lt;ユーザ名&gt;のどちらも有効な形式です。モニタの設定時に別のユーザ名を明示的に入力しないかぎり、SiteScope ではこのユーザ名が使用されます。</p>
<b>標準設定の認証パスワード</b>	<p>リモート・システムの認証に使用する標準設定のパスワード。モニタの設定時に別のパスワードを明示的に入力しないかぎり、SiteScope では URL, URL シーケンス, Web サービスのモニタ・タイプにこのパスワードが使用されます。</p>
<b>プリエンティブ認証</b>	<p>SiteScope で認証先 URL が要求されたときに、標準設定のユーザの資格情報を認証するために使用されるオプションが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>最初の要求を認証</b>: 認証先サーバに対して、SiteScope によって作成される最初の要求でユーザ名とパスワードが送信されます。</li> <li>• <b>要求された場合に認証</b>: サーバでユーザ名とパスワードの要求があった場合に、2 番目の要求でユーザ名とパスワードが送信されます。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b>: 最初の要求を認証</p>
<b>SiteScope 再起動スケジュール</b>	<p>SiteScope の再起動のスケジュールを選択できます（[オフ]，[開始後 24 時間ごと]，または[時間指定スケジュールプリファレンス]でスケジュールを定義できます）。スケジュールの定義の詳細については、「<a href="#">時間指定スケジュール・ページ</a>」(725ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b>: オフ</p>
<b>ファイルごとのバックアップ数</b>	<p>保持する SiteScope 設定ファイルのバックアップ数が表示されます。この機能は、重要なモニタ、警告、一般的な SiteScope 設定情報の保持に役立ちます。この数は、保持するファイルごとのバックアップ数を表します。SiteScope で</p>

UI 要素	詳細
	<p>は、filename.bak.1, filename.bak.2, filename.bak.# の命名規則が使用されます。ここで1 は最新のバックアップ・ファイルになります。</p> <p><b>例：</b>一般的な SiteScope 設定情報が含まれるファイルを &lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\groups にバックアップできます。</p> <p><b>標準設定値：</b>1</p>
<b>ロケール固有の日付と時間</b>	<p>特定のロケール、国、文化に該当する形式で日付と時間が表示されます。別のロケール設定を使用するには、目的のロケールのコードが含まれるように SiteScope 設定ファイルを変更し、[一般プリファレンス] 設定でこのオプションを選択します。このタスクの実行方法の詳細については、<a href="#">「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」(775ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値：</b>選択済み（標準設定は米国形式です）</p>
<b>国際化対応版</b>	<p>国際化対応文字セットが有効になります。このオプションを選択すると、すべての文字エンコーディングが SiteScope によってサポートされます。このオプションを使用して、複数のソースおよびオペレーティング・システムの文字エンコーディング（外国語の Web ページなど）を SiteScope で同時に処理できます。</p> <p>選択しない場合、SiteScope がインストールされているオペレーティング・システムの標準設定の文字セットのみがサポートされます。すべての URL モニタ・タイプ、ログ・ファイル・モニタ、ファイル・モニタはこのかぎりではありません。これらのモニタ・タイプでは、[国際化対応版] オプション設定に関係なく複数の文字エンコーディングがサポートされます。このタスクの実行方法の詳細については、<a href="#">「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」(775ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値：</b>選択されている</p>
<b>全モニタを一時停止</b>	<p>すべてのモニタの実行が一時停止されます。監視インフラストラクチャ全体の設定を変更する場合に使用します。監視を再アクティブ化するには、このオプションをクリアします。</p> <p><b>注：</b>このオプションでは、該当の SiteScope インストールで現在定義されているすべてのモニタが無効になります。モニタの一時停止を設定してからこのオプションをクリアしてモニタを再有効化する場合、モニタの一時停止アクションの前に無効化されていた個々のモニタは元の無効化された状態が維持されます。</p> <p>このオプションを使用すると、レポートに影響する可能性があります。監視が一時停止されている間に実行されたモニタでは、レポートでその期間が空白で</p>

UI 要素	詳細
	<p>表示される場合があります。</p> <p><b>警告</b> :SiteScope でモニタが一時停止になっていることは、現在インタフェースには表示されません。[全モニタを一時停止] オプションが有効になっている場合、「SiteScope は[一時停止] モードです; モニタは現在一切起動していません。」というメッセージが表示されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>

## ライセンス

[ライセンス] パネルでは、インストールされているすべてのライセンスのエディション、ステータス、容量タイプの詳細を確認できます。SiteScope にライセンス・ファイルをインポートしたり、Community を使用する場合に 30 日間無償の試用版を試すこともできます。

アクセス方法	[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [ライセンス] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope を使用するには、有効なライセンスが必要です。SiteScope には、通常の SiteScope インストールを実行した後に自動的にアクティブになる Community エディションのライセンスが付属しています。SiteScope の一部の機能を有効にします。期間に制限はありません。完全な SiteScope の機能を入手するには、商用版ライセンスを購入する必要があります。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、<a href="#">HP SiteScope 製品ページ</a>の「お問い合わせ」リンクを使用してください。ライセンスを所有している場合にライセンス・キー・ファイルが必要な場合は、<a href="#">HP Licensing for Software Portal</a>を使用してください。</li> <li>SiteScope 11.30 にアップグレード後、[ライセンス] パネルが現在のライセンスにより更新されるまでしばらくの時間がかかる場合があります。</li> <li>SiteScope for Load Testing インストールのライセンスを Premium エディションにアップグレードする場合は、次の変更を行って Premium エディションの完全な機能を入手する必要があります。             <ol style="list-style-type: none"> <li>[プリファレンス] &gt; [インフラストラクチャ プリファレンス] &gt; [カスタム設定] を選択し、次のプロパティの値を設定します。                 <ul style="list-style-type: none"> <li>disableRepeatedSchedules=false</li> <li>disableReports=false</li> <li>MultiViewDashboardEnabled=true</li> </ul> </li> <li>SiteScope を再起動します。</li> </ol> </li> </ul>

	<p><b>注:</b> <code>_disableRepeatedSchedules=true</code>, <code>_disableReports=true</code>, <code>_MultiViewDashboardEnabled=false</code> プロパティを <b>&lt;SiteScope ルート・ディレクトリ&gt;\groups\master.config</b> ファイルから削除し, SiteScope を再起動することもできます。</p>
関連情報	<p>『SiteScope デプロイメント・ガイド』（&lt;SiteScope ルート・ディレクトリ&gt;\sisdocs\doc_lib\Get_Documentation.htm）の「SiteScope ライセンスとエディション」の項を参照してください。</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<< ライセンス・サマリ >>	<p>アクティブな SiteScope エディションと、容量タイプのサマリ（可用性や使用状況）を表示します。</p> <p>次のようなエディションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>コミュニティ</b>：このエディションは、通常の SiteScope インストールですぐに利用できます。SiteScope の一部の機能を有効にします。期間に制限はなく無料で利用できます。このライセンスには、最大 25 個のオペレーティング・システム・インスタンス（OSi）と 25 個の URL を監視できる容量が備わっていますが、その容量は固定されていて増やすことはできません。 </li> <li> <b>試用版</b>：30 日の試用期間 SiteScope の完全な機能を有効にします（ライセンスには残り日数が表示されます）。Community エディションからアクティブ化した場合、試用版には最大 25 個の OS インスタンス、25 個の URL、10 個のトランザクションを監視できる容量が含まれます。 </li> <li> <b>プレミアム/アルティメット</b>：SiteScope の完全な機能を有効にします（プレミアム・エディションでサポートされる統合には違いがあります）。これらのエディションではすべての容量タイプ（OSi, URL, トランザクション）がサポートされます。数量はユーザが決定します。 </li> <li> <b>システム・コレクタ</b>：HPOM アプリケーションで SiteScope モニタを使用できるようにする HP Operations Manager 統合に含まれる SiteScope のバージョン。このエディションは、OS インスタンスのみを監視する場合に利用できます（数量はユーザが決定できます）。 </li> <li> <b>Load Testing</b>：このエディションは、LoadRunner または Performance Center アプリケーションでユーザが SiteScope モニタを定義および使用できるようにする HP LoadRunner/Performance Center に付属する SiteScope のバージョンで、HP SiteScope for Load Testing セットアップ・タイプのインストール後に自動的にアクティブ化されます。このライセンスには、最大 25 個の OS インスタンスと 25 個の URL を監視できる容量が備わっていますが、その容 </li> </ul>



UI 要素	詳細
	<p>量は固定されていて増やすことはできません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>フェールオーバー</b>: プライマリ SiteScope サーバが停止した場合に SiteScope Failover の機能を有効にします。SiteScope Failover のインストール後にフェールオーバー・ライセンスをインポートする必要があります (フェールオーバー・ライセンスは Premium, Ultimate および System Collector エディションに無償で付属しています)。         </li> </ul> <p>このライセンスには、次の容量タイプを含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>OSI (Operating System Instance)</b>: URL タイプ, Web スクリプト, Web サービス, リンク・チェック, XML メトリック, 無償のモニタを除く, 大部分のモニタで使用されます。このライセンス・モデルは, 監視対象のホストまたはオペレーティング・システムのインスタンス数に基づいて計算されます。SiteScope は, このホストを監視しているモニタ数に関係なく, 監視対象ホストごとに1つの OS インスタンスを消費します。OS インスタンスは異なるエディション間で集計されません。これは, 各エディション・タイプで OS インスタンス・ライセンスのコストが異なるためです。ただし, OS インスタンスは, 同一エディションの異なる OS ライセンス間で集計されます (たとえば, それぞれが OS インスタンスを含む複数の Premium エディション・ライセンスがある場合)。         </li> <li> <b>URL</b>: すべての URL タイプ・モニタ, Web サービス, リンク・チェック, XML メトリック・モニタで使用されます。監視対象 URL または URL ステップごとに1つの URL ライセンス・インスタンスを消費します。URL ライセンスはすべてのエディション間で集計されます。ただし, 独自の URL ライセンスがあるコミュニティ, 試用版, Load Testing エディションは対象外となります。         </li> <li> <b>トランザクション</b>: VuGen スクリプト・トランザクションを監視するために Web スクリプト・モニタで使用されます。監視対象トランザクションごとに1つのトランザクション・ライセンス・インスタンスを消費します。トランザクション・ライセンスはすべてのエディション間で集計されます。ただし, トランザクション監視をサポートしないコミュニティおよび Load Testing エディションは対象外となります。         </li> </ul>
ライセンス・ファイル	SiteScope ライセンス・ファイルのパスを入力するか, <b>[選択]</b> ボタンをクリックしてライセンス・ファイルを選択します。
インポート	選択したライセンス・ファイルからライセンスがインポートされます。
ライセンスの削除	選択したライセンスが削除されます。
Trial License	30 日間の無料の試用版ライセンスをアクティブ化します。これにより,



UI 要素	詳細
	SiteScope の完全な機能を使用できるようになります。
<b>インストールされているライセンス</b>	
<b>アクティブなライセンスのみを表示</b>	アクティブなライセンスのみをテーブル内に含める場合に選択します。
<b>エディション : 容量タイプ</b>	<p>インストールされているエディションのライセンスを容量タイプごとにグループ化して表示します。展開 (+) アイコンをクリックすると、選択した容量タイプのすべてのライセンスが表示されます。SiteScope エディションおよび容量タイプの説明については、<a href="#">「&lt; ライセンス・サマリ &gt;」</a> (595ページ)を参照してください。</p> <p>詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』(&lt;SiteScope ルート・ディレクトリ&gt;\sisdocs\doc_lib\Get_Documentation.htm) の「SiteScope ライセンス」の項を参照してください。</p>
<b>容量</b>	<p>各容量タイプの合計容量。</p> <p>【OSI (合計)】 / 【URL (合計)】 / 【トランザクション (合計)】を展開すると、各ライセンス・エディションの選択した容量タイプの合計容量を確認できます。</p> <p>注：【トランザクション】容量タイプは、コミュニティ、システム・コレクタ、または Load Testing エディションでは利用できません。【URL】容量タイプは、システム・コレクタ・エディションでは利用できません。</p>
<b>使用済み</b>	<p>各容量タイプで使用されているインスタンスの合計数。</p> <p>【OSI (合計)】 / 【URL (合計)】 / 【トランザクション (合計)】を展開すると、選択した容量タイプの各エディションで使用されているインスタンスの合計数を確認できます。</p>
<b>残り</b>	<p>各容量タイプの未使用インスタンスの合計数。</p> <p>【OSI (合計)】 / 【URL (合計)】 / 【トランザクション (合計)】を展開すると、選択した容量タイプの各エディションで利用できるインスタンスの合計数を確認できます。</p>
<b>失効</b>	<p>各容量タイプの最初に期限切れになるライセンスの有効期限。</p> <p>【OSI (合計)】 / 【URL (合計)】 / 【トランザクション (合計)】を展開すると、選択した容量タイプの各エディションの有効期限を確認できます。</p>
<b>状態</b>	<p>ライセンスのステータス（【アクティブ】，【期限切れ】，【一時停止】）。一度にアクティブにできるライセンスは1つのみです。</p>

SSH プリファレンス

このパネルでは、リモート・コンピュータに安全にアクセスするためのプリファレンスを設定できます。

アクセス方法	[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [SSH プリファレンス] を選択します。
--------	---

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
SSH V2 接続タイムアウト (秒)	SiteScope で正常な応答を待機する合計秒数。この時間を超えると、接続が自動的に閉じます。 標準設定値 :30 秒
SSH V2 ハンドシェイク タイムアウト (秒)	ハンドシェイク・タイムアウト (秒単位)。 標準設定値 :30 秒
SSH V2 キー交換タイムアウト (秒)	SiteScope で SSH 鍵交換を待機する合計秒数。 標準設定値 :30 秒
SSH V2 認証段階タイムアウト (秒)	SiteScope で SSH 認証を待機する合計秒数。 標準設定値 :30 秒

WMI プリファレンス

このパネルでは、Windows Management Instrumentation (WMI) を使用してリモート・コンピュータにアクセスするためのプリファレンスを設定できます。WMI では、NetBIOS よりも安全な通信を使用して Windows サーバ上で動作するリモート・サーバからデータを収集できます。

アクセス方法	[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [WMI プリファレンス] を選択します。
関連タスク	<a href="#">「リモート Windows 監視用の WMI サービスの設定」 (496ページ)</a>
重要な情報	<a href="#">「Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ」 (281ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
SiteScope NT ローカル ホスト・メソッド	ローカルホスト・マシンにある Windows サーバのリソースを監視するための接続方法のタイプ (NetBIOS または WMI)。  標準設定値 : NetBIOS
WMI クエリ・タイムア ウト (秒単位)	各モニタの実行の WMI クエリ タイムアウト (秒単位)。このボックス が空のときは、タイムアウトが 120 秒になります。  標準設定値 :120 秒

ダッシュボード・モニタ履歴表示オプション

このパネルでは、[モニタ履歴の設定] を設定して、すべてのモニタおよびモニタ・グループのモニタ履歴を表示できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [ダッシュボード モニタ履歴表示オプション] を選択します。
重要な情報	[ダッシュボード レイアウト] では、選択した条件に一致するモニタのみが表示されるように、フィルタを使用してさらにモニタを絞り込むことができます。プリファレンスは、[ダッシュボード フィルタ] 設定で保存されます。詳細については、 <a href="#">「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ」 (1048ページ)</a> を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
モニタ履歴 ビューを有効に する	ダッシュボードのモニタ履歴が有効になります。このオプションが有効になっている状態で無効にすると、履歴ビューに表示されていたすべてのビュー・データが削除されます。  標準設定値 :選択されていない
次の期間中にモ ニタ履歴データ を収集	過去の実行を表示するタイム・フレーム。古い実行は削除されます。この設定は、ダッシュボードのフィルタリングより優先されます。ダッシュボード・フィルタ設定を変更する方法については、 <a href="#">「モニタ履歴の設定」 (1060ページ)</a> を参照してください。  標準設定値 : 過去 1 時間

UI 要素	詳細
モニタ実行のステータスを収集	必要な実行の状態が表示されます。ほかの状態の実行は削除されます。この設定は、ダッシュボードのフィルタリングより優先されます。 標準設定値 : 任意
表示する実行の最大数	メモリの保持するデータの行数。 標準設定値 : 100000 最小値 : 1000

JDBC グローバル・オプション

このパネルでは、SiteScope のデータベース・ログ機能、データベース接続ツールやデータベース情報ツール、データベース警告、データベース・モニタ（Oracle データベース、データベース・カウンタ、データベース・クエリ、DB2 JDBC、テクノロジ・データベース統合）にグローバルな JDBC オプションを適用できます。

アクセス方法	〔プリファレンス〕 > 〔一般プリファレンス〕 > 〔JDBC グローバル オプション〕 を選択します。
--------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
接続タイムアウト	新しい SQL 接続の作成を待機する時間（秒/分/時/日）。すべての SQL ドライバにこの機能があるわけではありません。SQL ドライバでこの機能がサポートされていない場合、このパラメータは無視されます。  標準設定値：5 分
ドライバ・トレース・ログ・ファイル	データベース・ドライバのトラブルシューティングに使用するドライバ・トレース・ログ・ファイルが作成されます。ログ・ファイルを作成するには、ドライバ・トレース・ファイルの完全パスまたは UNC 名を入力します（e:\mydir\myfile.log など）。  注：記録先ログ・ファイルには、ログイン情報、テーブル名、クエリなどが含まれます。  ヒント：このオプションはトラブルシューティングのみに使用することをお勧めします（標準設定では空です）。

LW SSO 設定

このパネルでは、SiteScope の Lightweight シングル・サインオン（LW-SSO）認証の文字列を変更できます。

アクセス方法	〔プリファレンス〕 コンテキスト > 〔一般プリファレンス〕 > 〔LW SSO 設定〕 を選択します。
--------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
LW SSO Init 文字	

UI 要素	詳細
列	<p>HP の Lightweight シングル・サインオン (LW-SSO) で統合されるすべての信頼されたアプリケーションで使用される共有文字列が含まれている必要があります。</p> <p><b>ヒント:</b> パスフレーズ・パラメータは少なくとも 12 文字使用することをお勧めします。サロゲート・ブロック, FFFE, および FFFF を除く任意の Unicode 文字を使用できます。</p> <p><b>注:</b> SiteScope の標準設定のパスフレーズ文字列は安全ではありません。安全な文字列を使用するには, SiteScope の標準設定のパスフレーズ値を変更して, LW-SSO を使用して統合されるすべての HP ソフトウェア・アプリケーションのパスフレーズ値を変更します。</p> <p>LW-SSO の詳細については, <a href="#">「SiteScope で LW-SSO 文字列を変更する方法」(783ページ)</a>を参照してください。</p>

# 第49章: HTTP プリファレンス

HTTP プリファレンスを使用して、SiteScope が HTTP コネクタと通信するのに必要な設定を行うことができます。この設定は、データとイベントのレポートだけではなく、HTTP プリファレンスを使用するモニタでも使用されます。SiteScope では、SiteScope HTTP 受信者を使用して HTTP ベースのネットワーク管理システムと統合し、サードパーティのアプリケーションと管理コンソールに一般イベント・データを送信します。

## アクセス方法

[プリファレンス] > [HTTP プリファレンス] を選択します。

- 新しい HTTP 受信者を作成するには、[新規 HTTP 受信者] ボタンをクリックします。
- 既存の受信者を編集するには、[HTTP 受信者の編集] ボタンをクリックします。

注: HTTP プリファレンスを表示するには、SiteScope の管理者であるか、「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP リストを表示」権限を付与されたユーザである必要があります。HTTP プリファレンスを作成または編集するには、「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が必要です。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

## タスク

関連タスク: 「[SiteScope 一般イベント統合の設定方法](#)」(700ページ)

## UI の説明

[HTTP プリファレンス] ページ

[HTTP プリファレンス] ページには、データをホストに送信するための定義済みカスタム HTTP 受信者またはテンプレートが表示されます。接続タイプを設定するときに、HTTP 受信者を[一般イベント統合]のコネクタに関連付けることができます。詳細については、「[一般イベント統合プリファレンス設定](#)」(699ページ)を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>新規 HTTP 受信者</b> : 新規 HTTP 受信者が作成されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規 HTTP 受信者] / [HTTP 受信者の編集] ダイア</a>


UI 要素	詳細
	<a href="#">ログ・ボックス</a> (604ページ)を参照してください。
	<b>HTTP 受信者の編集</b> :HTTP 受信者の編集ができるようになります。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規 HTTP 受信者] / [HTTP 受信者の編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(604ページ)を参照してください。
	<b>HTTP 受信者の削除</b> :選択した HTTP 受信者が [HTTP プリファレンス] から削除されます。  <b>注</b> : HTTP 受信者が一般イベント統合から参照されている場合、その受信者は削除できません。HTTP 受信者を削除するには、一般イベント統合の HTTP 受信者を変更する必要があります。
	<b>HTTP 受信者をテストします</b> :HTTP 受信者にメッセージを送信できるかどうかをテストします。[HTTP 受信者をテストします] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。
	<b>すべて選択</b> : 表示されているすべての HTTP 受信者を選択します。
	<b>選択を解除</b> :選択を解除します。
<b>名前</b>	新規 HTTP 受信者の作成時に割り当てられる名前の文字列。
<b>詳細</b>	HTTP 受信者の作成時または編集時に割り当てられた詳細。
<b>URL</b>	データまたはイベント報告、および HTTP プリファレンスを使用するモニタで使われるエンドポイント URL。

## [新規 HTTP 受信者] / [HTTP 受信者の編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規 HTTP 受信者の作成や既存受信者の編集ができます。

<b>アクセス方法</b>	<p>[プリファレンス] &gt; [HTTP プリファレンス] を選択します。[HTTP プリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ [新しい HTTP 受信者]  ボタンをクリックするか、</li> </ul>
---------------	---



	<ul style="list-style-type: none"><li>既存の HTTP 受信者プロファイルを選択して <b>[HTTP 受信者の編集]</b>  ボタンをクリックします。</li></ul>
重要な情報	SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスの追加、編集、または削除」の権限が付与されたユーザのみが、[HTTP プリファレンス] を作成または変更できます。このトピックの詳細については、「 <a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a> 」(744ページ)を参照してください。
関連タスク	<a href="#">「SiteScope 一般イベント統合の設定方法」</a> (700ページ)
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li><a href="#">「HTTP プリファレンス」</a> (603ページ)</li><li><a href="#">「一般イベント統合プリファレンス設定」</a> (699ページ)</li></ul>

## 一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	新規 HTTP 受信者の作成時に割り当てられる名前文字列。
詳細	<p>HTTP 受信者の詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (&lt;BR&gt;, &lt;HR&gt;, および &lt;B&gt; タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p><b>注：</b> このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>タグ : <b>script</b>, <b>object</b>, <b>param</b>, <b>frame</b>, <b>iframe</b>。</li><li><b>on</b> で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : <b>onhover</b>。</li><li>値に <b>javascript</b> が指定された属性。</li></ul>

## HTTP プリファレンス設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細

UI 要素	詳細
URL	<p>すべての HTTP メッセージを受信するアプリケーションのエンドポイント URL。</p> <p>セキュリティ保護された接続 (SSL) の場合, 「https」と入力します。</p> <p><b>構文:</b> http または https:// &lt; 受信側のサーバの完全修飾ドメイン名 &gt; : &lt; データを受信するポート番号 &gt; / &lt; パス &gt;</p>
要求ヘッダ	<p>HTTP クライアントによってサーバに送信されるヘッダ要求行。ヘッダは改行で分けられていなければなりません。HTTP1.1 要求ヘッダの標準のリストは <a href="http://www.w3.org/Protocols/rfc2616/rfc2616-sec14.html#sec14">http://www.w3.org/Protocols/rfc2616/rfc2616-sec14.html#sec14</a> にあります。</p> <p><b>注:</b> このフィールドは、オプションですが、要求ヘッダがないと予期しない動作となる Web ページもあります (無限リダイレクトを実行する, 間違ったコンテンツを供給するなど)。</p>
URL 内容のエンコード	<p>SiteScope がサーバ応答から正しいエンコーディングを取得します。ここに表示された標準設定値は編集してはいけません。</p> <p><b>標準設定値:</b> サーバ応答からのエンコーディング</p>
POST データ エンコード	<p>POST データをエンコードするかどうかを指定します。次のオプションから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>コンテンツ タイプを使用する:</b> コンテンツ・タイプ・ヘッダによって POST データをエンコードします。ヘッダが urlencoded に一致する場合エンコードし, それ以外はエンコードしません。</li> <li>• <b>URL のエンコードを強制する:</b> 常に POST データをエンコードします。</li> <li>• <b>URL のエンコードを強制しない:</b> POST データをエンコードしません。</li> </ul>
HTTP バージョン	<p>スタイル要求ヘッダに使用する SiteScope の HTTP バージョン (1.1 または 1.0)。</p> <p><b>標準設定値:</b> 1.1</p>
WinInet を使用する	<p>WinInet がこのモニタの代替 HTTP クライアントとして使用されます。</p> <p>次の場合に Apache の代わりに WinInet を使用する場合は, このオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 監視中のサーバをアクセスするために必要な特定のテクノロジーを, Apache HTTP クライアントがサポートしていない場合。たとえば, ケルベロス認証が Apache ライブラリによってサポートされておらず, WinInet によってサポートされている場合。また, WinInet は, 信頼されるクライアント側を証</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p>明しますが, Apache はしません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>このモニタの実行を試み, Apache サーバがエラーを返した場合。Winlnet を使用することで, これらのエラーが解決される場合があります。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>注</b> : Winlnet の機能は Windows バージョンの SiteScope でのみ使用できます。</p>
リダイレクトでエラー	<p>URL がリダイレクトされると, エラーが発生します (および, エラーが通知されます)。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>
要求タイムアウト (秒)	<p>HTTP 要求 (再試行を含む) の完了までの待機時間 (ミリ秒単位)。タイムアウト値 0 は, 無制限のタイムアウトとして解釈されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 120</p>
接続タイムアウト (秒)	<p>接続が確立するまでの待機時間 (秒単位)。値 0 は, タイムアウトを使用しないことを示します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 120</p>
再試行回数	<p>SiteScopeが要求を失敗とみなすまで各 HTTP 要求を再試行する回数。</p> <p><b>標準設定値</b> : 3</p>
要求された場合の認証	<p>選択した場合, Web サーバ・ユーザ名とパスワードを使用して認証 (要求時) が行われます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されている</p>

## Web サーバのセキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
資格情報	<p>指定した URL でアクセス用の名前とパスワードが必要な場合に資格情報を許可する際に使用するオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>ユーザ名およびパスワードを使用</b> : 手動でユーザの資格情報を入力する場合に, このオプションを選択します。【ユーザ名】ボックスにユーザ名を, 【パスワード】ボックスにパスワードを入力して URL にアクセスします。</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>事前定義された資格情報を選択</b> : URL 用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します（標準設定のオプション）。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、<a href="#">「資格情報のプリファレンス」(569ページ)</a>を参照してください。</li> </ul>
<b>プリエンプティブ認証</b>	<p>SiteScope がターゲット URL を要求する場合、認証資格情報を送信するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>グローバル・プリファレンスを使用</b> : [一般プリファレンス] ページの [プリエンプティブ認証] で指定されている設定を SiteScope が使用するよう選択します。</li> <li>・ <b>最初の要求を認証</b> : 認証先 URL に対して、SiteScope によって作成される最初の要求でユーザ名とパスワードが送信されるよう選択します。  <b>注</b> : URL でユーザ名とパスワードが必要とされない場合には、このオプションのために URL でエラーが発生する可能性があります。</li> <li>・ <b>要求された場合に認証</b> : サーバでユーザ名とパスワードの要求があった場合に、2 番目の要求でユーザ名とパスワードが送信されるよう選択します。  <b>注</b> : URL でユーザ名とパスワードが必要とされない場合には、このオプションが使用される場合があります。</li> </ul> <p>すべてのオプションで、このモニタ・インスタンスのために入力された [ユーザ名] と [パスワード] が使用されます。ユーザ名とパスワードが個々のモニタに指定されない場合には、[一般プリファレンス] ページの [メイン] セクションで指定されている [標準設定の認証ユーザ名] と [標準設定の認証パスワード] が使用されます（指定されている場合）。</p> <p><b>注</b> : プリエンプティブ認証はユーザ名とパスワードを送信するかどうかや、どのユーザ名とパスワードを送信するのかを制御しません。</p>
<b>クライアント側証明書</b>	<p>ターゲット URL にアクセスするためにクライアント側証明書を使用する必要がある場合の証明書ファイル。普通、これは .pfx (.p12) タイプ証明書で、通常はパスワードを要求します。[クライアント側証明書パスワード] ボックスに証明書のパスワードを入力します。</p> <p><b>注</b> : クライアント側証明書ファイルは、&lt;SiteScopeのルート・ディレクトリ&gt;\templates.certificatesディレクトリにコピーする必要があります。</p> <p><b>標準設定値</b> : なし</p>

UI 要素	詳細
クライアント側証明書パスワード	クライアント側証明書を使用しており、その証明書がパスワードを要求する場合のパスワード。 <b>標準設定値</b> : 空
認証 NTLM ドメイン	URL へのアクセスが求められる場合の Windows NT LAN Manager (NTLM) のドメイン。 <b>標準設定値</b> : 空
HTTPS に対して信頼されていない証明書を許容	セキュア HTTP (HTTPS) を使用してターゲット URL にアクセスしており、SiteScope が必要とされるサーバ証明書を持っていない場合には、このオプションを選択するか、または関連する証明書をインポートできます。サーバ証明書のインポートの詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「URL モニタ」の SSL 接続を参照してください。 <b>標準設定値</b> : 選択されていない
HTTPS に対して無効な証明書を許容	セキュア HTTP (HTTPS) を使用してターゲット URL にアクセスしており、SiteScope に無効なサーバ証明書がある場合にはこのオプションを選択します。現在の日付が証明書チェーンで指定されている日付範囲内ではない場合、この状態が発生する可能性があります。 <b>標準設定値</b> : 選択されていない
NTLM V2	アクセス先の URL が NTLM バージョン 2 を使用する認証を必要とする場合に選択します。 <b>標準設定値</b> : 選択されていない

## プロキシ・サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アドレス	プロキシ・サーバのアドレス（該当する場合）。
ユーザ名	このプロキシ・サーバで URL へのアクセスにユーザ名が必要な場合に使用するプロキシ・サーバ・ユーザ名。 <b>注</b> : これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。

UI 要素	詳細
パスワード	<p>このプロキシ・サーバで URL へのアクセスにユーザ名が必要な場合に使用するプロキシ・サーバ・パスワード。</p> <p>注: これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。</p>

## タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されず）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、<a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」</a> (78 ページ)を参照してください。</p>
タグの追加	<p>【新規タグ】ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「【新規タグ】 / 【タグの編集】ダイアログ・ボックス」</a> (87ページ)を参照してください。</p>

## 第50章: 高可用性プリファレンス

「高可用性プリファレンス」ページでは SiteScope Failover プロファイルを管理できます。このページでは、プライマリ SiteScope ユーザ・インタフェースからアクセスするか、SiteScope Failover ユーザ・インタフェースからアクセスするかに応じて、異なるコマンドが提供されます。

**注:** SiteScope Failover 設定はプロファイルに保存されます。SiteScope Failover ユーザ・インタフェースでは、プロファイルを作成し、変更することができます。プライマリ SiteScope ユーザ・インタフェースでは、プロファイルのテストまたは削除のみを実行できます。

### アクセス方法

「**プリファレンス**」 > 「**高可用性プリファレンス**」を選択します。

**注:** SiteScope の管理者、または「**高可用性プリファレンスを表示**」権限を付与されたユーザのみが、高可用性プリファレンスを表示できます。高可用性プリファレンスを編集するには、「**高可用性プリファレンスを編集**」権限が必要です。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

## 学習事項

### 高可用性プリファレンスの概要

高可用性プリファレンスは、SiteScope Failover 動作を設定するために使用されます。SiteScope Failover は、システムに障害が発生した場合、または一時的にサービスが停止している場合、SiteScope システム（プライマリ・システムと呼ばれる）の機能を自動的に担うように設計された SiteScope の個別のインストールです。SiteScope インスタンスが別の SiteScope インストールのフェールオーバーとして機能するようにするには、別途フェールオーバー・ライセンスが必要です（フェールオーバー版ライセンスは追加の費用なしで Premium, Ultimate および System Collector のエディションに付属しています）。







SiteScope Failover では、次の機能を提供します。

- ・プライマリ SiteScope サーバから SiteScope Failover サーバへの監視設定の定期的な自動ミラー化。
- ・プライマリ SiteScope サーバの可用性の自動監視。
- ・プライマリ SiteScope の可用性に基づくミラー化されたモニタの自動有効化または無効化。

SiteScope Failover のインストールおよび管理の詳細については、『HP SiteScope Failover Guide』（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）を参照してください。

# UI の説明

[高可用性プリファレンス] ページ  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<p><b>新規フェイルオーバー・プロファイル:</b> [新しいフェイルオーバー プロファイル] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 「<a href="#">[新規フェイルオーバー プロファイル] / [フェイルオーバー プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス</a>」 (613ページ)を参照してください。</p> <p><b>注:</b> これは SiteScope Failover サーバのみで利用可能です。</p>
	<p><b>プロファイルの編集</b> [フェイルオーバー プロファイルの編集] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 「<a href="#">[新規フェイルオーバー プロファイル] / [フェイルオーバー プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス</a>」 (613ページ)を参照してください。</p> <p><b>注:</b> これは SiteScope Failover サーバのみで利用可能です。</p>
	<p><b>プロファイルの削除:</b> 選択したプロファイルが [高可用性プリファレンス] から削除されます。これは、プライマリ SiteScope または SiteScope Failover のいずれかから実行できます。削除するときリモート SiteScope（プライマリ SiteScope 上の場合は SiteScope Failover など）にアクセスできない場合は、ローカル SiteScope からのみ削除されます。この場合、リモート SiteScope ユーザ・インタフェースからプロファイルを手動で削除する必要があります。</p> <p><b>ヒント:</b> プロファイルを削除するのではなく、無効化することができます。 [フェイルオーバー プロファイルの編集] ダイアログ・ボックスの [メイン設定] &gt; [プロファイル] を参照してください。</p>
	<p><b>すべて選択:</b> 表示されているすべてのプロファイルを選択します。</p>
	<p><b>選択を解除:</b> 選択を解除します。</p>
標準設定	<p>プライマリ SiteScope サーバで、 [標準設定] の横にある矢印をクリックして、次を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li> <b>テスト:</b> プロファイルをテストし、リモート SiteScope Failover へのア</li></ul>



UI 要素	詳細
	<p>クセスを確認します。</p> <p>SiteScope Failover サーバで、<b>【標準設定】</b>の横にある矢印をクリックして、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• <b>テスト</b>: <b>【高可用性のテスト】</b> ダイアログ・ボックスを表示します。このダイアログ・ボックスでは、<b>【電子メールの送信先】</b> フィールドに電子メール・アドレスを入力し、<b>【テスト通知の送信】</b> をクリックすることで、通知受信者の電子メール・アドレスを先にテストできます。受信者は、メールで通知を受信したことを確認することで、その後の通知が正しく配信されることを確認できます。</li><li>次に、<b>【テスト】</b> ボタンをクリックすると、プロファイル进行测试して、プライマリ SiteScope へのアクセスを確認できます。</li><li>• <b>編集</b>: Failover サーバから電子メール通知を送信するために使用する標準設定を変更します。この設定の詳細については、<a href="#">「【標準設定のフェイルオーバー サーバ設定】ダイアログ・ボックス」</a> (620ページ)を参照してください。</li></ul>
<b>プロファイル・タイプ</b>	プライマリ SiteScope または SiteScope Failover サーバのどちらの <b>【高可用性プリファレンス】</b> ページにアクセスしているかを示します。
<b>リモート・ホスト</b>	プライマリ SiteScope サーバでは、リモート・ホストは SiteScope Failover ホストです。SiteScope Failover ホストでは、リモート・ホストはプライマリ SiteScope ホストです。
<b>有効</b>	プロファイルが有効かどうかを示します（ <b>【はい】</b> / <b>【いいえ】</b> ）。プロファイルを無効化または有効化するには、SiteScope Failover ユーザ・インタフェースからプロファイルにアクセスしてください。

## 【新規フェイルオーバー プロファイル】 / 【フェイルオーバー プロファイルの編集】 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規高可用性プロファイルの作成や既存のプロファイルの編集ができます。

<b>アクセス方法</b>	<b>【プリファレンス】</b> > <b>【高可用性プリファレンス】</b> を選択します。 <b>【高可用性プリファレンス】</b> ページで、次の操作を実行します。
---------------	---

	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>【新規プロファイル】</b>  ボタンをクリックするか、</li><li>・ 既存のプロファイルを選択して、 <b>【プロファイルの編集】</b>  ボタンをクリックします。</li></ul> <p><b>注：</b> このダイアログ・ボックスは SiteScope Failover サーバのみで利用可能です。</p>
<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ SiteScope Failover のインストールおよび設定の詳細については、HP SiteScope Failover Guide (&lt;SiteScope ルート・ディレクトリ&gt;\sisdocs\doc_lib\Get_Documentation.htm) を参照してください。</li><li>・ SiteScope の管理者、または「<b>高可用性プリファレンスを編集</b>」権限を付与されたユーザのみが、高可用性プリファレンスを作成または変更できます。このトピックの詳細については、「<a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a>」(744ページ)を参照してください。</li><li>・ SiteScope Failover では、LW-SSO 認証方法が必要です。「<a href="#">認証方法</a>」(779ページ)を参照してください。</li></ul>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「高可用性プリファレンス」</a> (611ページ)</li><li>・ <a href="#">「【標準設定のフェイルオーバー サーバ設定】ダイアログ・ボックス」</a> (620ページ)</li></ul>

## メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>ホスト</b>	<p>SiteScope Failover サーバのプライマリ・サーバとなるサーバの名前または IP アドレスを入力します。</p> <p>SiteScope Failover は、プライマリ SiteScope の可用性を確認し、監視設定をプライマリ SiteScope からミラー化します。</p> <p><b>注：</b> SSL 環境の場合、プライマリ SiteScope のホスト名が、サーバ証明書で使用されているホスト名と同じであることを確認します（名前の大文字と小文字は区別されます）。同じでないと SSL エラーで接続に失敗します。</p>
<b>ポート</b>	<p>上記で指定したプライマリ SiteScope サーバのホストのユーザ・インタフェースのポートを入力します。</p> <p><b>標準設定値：</b> 8080</p>


UI 要素	詳細
セキュア接続	<p>SiteScope Failover サーバで SSL を有効化します。SSL の使用には次の要件があります。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・プライマリ SiteScope および SiteScope Failover の両方で SSL が有効になっているか、または両方で無効になっている必要があります。つまり、一方で SSL を使用し、もう一方で標準プロトコルを使用することはできません。</li><li>・上記の [ポート] フィールドには SSL 固有のポートを指定する必要があります。</li><li>・プロファイルを作成する前に、SiteScope Failover ホストに証明書がインポート済みである必要があります。</li></ul> <p>詳細については、『HP SiteScope Failover Guide』の「Add Certificates to SSL-Enabled SiteScope Failover」を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
プロファイルを無効にしました	<p>プロファイルを無効にします。このプロファイルでは、SiteScope Failover のこのインスタンスを使用して、プライマリのすべての監視およびミラー化を停止します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>

## 実行設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
プライマリが利用可能な頻度 (秒)	<p>プライマリ SiteScope サーバの可用性を確認する頻度を選択します。15 ~ 10000 の範囲の整数を指定します。</p> <p><b>標準設定値</b> :60 秒</p>
ミラー頻度 (分)	<p>プライマリ SiteScope サーバから SiteScope Failover サーバに設定データをコピーする頻度を選択します。15 ~ 10000 の範囲の整数を指定します。この設定により、プライマリ SiteScope サーバの監視設定への同じ更新および変更を使用して SiteScope Failover サーバを同期された状態に維持します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 240 分 (4 時間)</p>
一時停止 (分)	<p>プライマリ SiteScope サーバが予定されたシャットダウンを開始する場</p>

UI 要素	詳細
	<p>合, SiteScope Failover サーバをアクティブ・モードに自動的に切り替えるときの遅延を選択します。0 ~ 20 の範囲の整数を入力します。予定されたシャットダウンは次のいずれかの場合に実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• スケジュールされた再起動が発生した</li> <li>• ユーザ・インタフェースを使用して要求された再起動が発生した</li> </ul> <p><b>標準設定値 :3 分</b></p>
スケジュール	<p>プライマリ SiteScope の可用性のミラー化および確認のスケジュールを選択します。ここでスケジュールを選択するには、<b>[プリファレンス]</b> &gt; <b>[スケジュール プリファレンス]</b> &gt; <b>[フェイルオーバー スケジュール プリファレンス]</b> でスケジュールが指定されている必要があります。</p> <p>時間指定スケジュールを選択した場合、スケジュールによって決定されたミラー化が実行されます。上記の<b>[ミラー頻度 (分)]</b>設定は無視されます。たとえば、時間指定スケジュールで毎日午前 6:00 時にミラー化が実行されるように指定されている場合、<b>[ミラー頻度 (分)]</b>設定とは関係なく、ミラー化は午前 6:00 時に実行されます。</p> <p>時間指定スケジュールでは、プライマリ SiteScope の可用性のミラー化の頻度には影響しません。頻度は<b>[プライマリが利用可能な頻度 (秒)]</b>設定で決まります。</p> <p>範囲スケジュールを選択した場合、上記の<b>[プライマリが利用可能な頻度 (秒)]</b>および<b>[ミラー頻度 (分)]</b>設定で指定された頻度と併用されます。たとえば、プロファイルに次の値が設定されていると想定します。</p> <p>スケジュール:午後 1 時 ~ 5 時の間に有効になる範囲スケジュール          プライマリが利用可能な頻度 (秒):3600 秒          ミラー頻度 (分):240 分</p> <p>結果として実行される可用性のミラー化および確認:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 午後 時に可用性の確認</li> <li>1 午後 時にミラー化</li> <li>2 午後 時に可用性の確認</li> <li>3 午後 時に可用性の確認</li> <li>4 午後 時に可用性の確認</li> <li>5 午後 時に可用性の確認</li> <li>5 午後 時にミラー化</li> </ul>
最終ミラー化時間	最新のミラー化操作の日時。

UI 要素	詳細
次のミラー化時間	指定されたプロファイルの <b>「プライマリが利用可能な頻度 (秒)」</b> 値および <b>「スケジュール」</b> 値に基づく次回にスケジュールされているミラー化操作の日時。
	<p>クリックすると、プライマリ SiteScope のミラー化が開始されます。</p> <p>SiteScope Failover インスタンスはミラー化操作が完了すると再起動されます。再起動したら、Web ブラウザを更新するか、またはブラウザを SiteScope Failover の URL にリダイレクトします。</p> <p>ミラー化すると、プライマリ SiteScope のすべてのグループのコピーが SiteScope Failover インスタンスのモニタのコンテキストに表示されます。SiteScope Failover がアクティブ化されるまでこの状態は無効化されます。</p>

## 通知設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
電子メール (プライマリ復帰時)	<p>一定期間利用不可になった後、プライマリ SiteScope サーバが利用可能になったときに通知を受信する 1 つ以上の電子メール・アドレスを入力します。複数のエントリはカンマ (,) で区切ります。</p> <p><b>注:</b> 「<a href="#">[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス</a>」 (581 ページ) で <b>SMTP SSL</b> が選択されている場合、電子メールは SSL SMTP サーバ経由でセキュアに送信されます。</p>
電子メール (プライマリ使用不可時)	<p>SiteScope Failover がアクティブになったときに通知を受信する 1 つ以上の電子メール・アドレスを入力します。</p> <p><b>注:</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>プライマリ SiteScope で予定されているシャットダウンが実行され、<b>「一時停止」</b> フィールドの値で指定されている時間内に復旧した場合は、SiteScope Failover はアクティブになりません。</li><li>「<a href="#">[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス</a>」 (581 ページ) で <b>SMTP SSL</b> が選択されている場合、電子メールは SSL SMTP サーバ経由でセキュアに送信されます。</li></ul>

## 詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>バックアップの数</b>	プライマリ SiteScope 設定でのバックアップの数。 <b>標準設定値</b> : 2
<b>ミラーの設定</b>	ミラー方法を説明する事前定義の設定。 <b>標準設定値</b> : 標準設定
<b>BSM 統合の無効化</b>	SiteScope Failover で BSM へのレポートが必要ない場合は、選択します。 <b>注</b> : この設定の変更を有効にするには、SiteScope Failover を再起動する必要があります。 <b>標準設定値</b> : 選択されていない
<b>*.dyn ファイルをマージ・バックする</b>	選択した場合、SiteScope Failover がアクティブになり、プライマリ SiteScope に戻った場合、*.dyn ファイルを送信します。  SiteScope では、.dyn というサフィックスの内部ファイルを使用して、連続モニタ実行回数およびモニタ状態に基づくデータを保存します。一部のモニタ・タイプでは、アクティブな SiteScope Failover がモニタ実行を引き継ぐ場合、*.dyn ファイルにデータが含まれていることが重要です。プライマリ SiteScope が復旧した場合に、アクティブな SiteScope Failover の *.dyn データをプライマリ SiteScope *.dyn ファイルにマージ・バックするように選択できます。これにより、すべてのモニタ実行（プライマリとフェールオーバーの両方）がデータに反映されます。  この設定は、Microsoft Windows Event Log モニタに適用されます。ログ・ファイル・モニタおよびその他のモニタ・タイプ。 <b>標準設定値</b> : 選択されていない
<b>マージ・バック設定</b>	選択した場合、SiteScope Failover がアクティブになり、プライマリ SiteScope に戻った場合、設定データを送信します。  最後のミラー化操作後にプライマリ SiteScope で実行された変更は、マージ・バック設定で上書きされるため、これらの変更は失われます。この情報が失われるリスクを減らすために、ミラー化操作間の間隔をできる限り短くスケジュールすることをお勧めします。  SiteScope は、マージ・バック設定を実行する前に、 <b>&lt;SiteScope ルート・ディ</b>

UI 要素	詳細
	<p><b>レクトリ&gt;\high_availability\snapshots</b>のフォルダにプライマリ SiteScope の既存の設定をバックアップします。このフォルダ名は、バックアップ操作の時間によって決まります。バックアップした設定を復元するには、<b>restore.bat</b> (Unix の場合は <b>restore.sh</b>) というスクリプトを実行し、SiteScope を再起動します。バックアップは、30 日後に期限切れになります。</p> <p><b>例：</b>最後のミラー化操作が午前 10 時に実行されました。午前 11 時にプライマリ SiteScope に障害が発生し、午後 3 時に復旧しました。マージ・バック設定の結果、午前 10 時～11 時のプライマリ SiteScope の設定データの変更が失われました。午前 10 時～11 時にプライマリ SiteScope で行われた変更を該当するバックアップ・ファイルから復元できます。これを行うと、午前 11 時～午後 3 時に SiteScope Failover で行われた変更がアクティブなプライマリ SiteScope から失われます。ただし、これらの変更も <b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\high_availability\snapshots</b> にバックアップされているため、復元できます。</p> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• SiteScope Failover のモニタを変更する場合にのみマージ・バック設定を実行してください。これは、プライマリ SiteScope と SiteScope Failover 間で発生する可能性のあるデータの不一致を回避するためです。</li> <li>• マージ・バックは事前に有効にする必要はありません。プライマリ SiteScope が停止している場合でも SiteScope Failover で有効にできます。</li> <li>• すべてのマージ・バック操作は、障害発生後にプライマリ SiteScope を再起動するときに行われ、その間は SiteScope Failover がアクティブ・モードになります。技術的な理由（ネットワークの問題で SiteScope Failover が無効または利用不可になっているなど）でマージ・バック操作をリアルタイムに実行できない場合、その時点だけでなくその後もマージ・バック操作を実行することはできません。これは、プライマリ SiteScope と SiteScope Failover 間で発生する可能性のあるデータの不一致を回避するためです。</li> </ul> <p><b>標準設定値：</b>選択されていない</p>
<p><b>日常のログ・ファイルをマージ・バックする</b></p>	<p>選択した場合、SiteScope Failover が復旧し、プライマリ SiteScope に戻った場合、日次ログ・ファイルを送信します。これらのファイルはレポートに使用されます。</p> <p><b>標準設定値：</b>選択されていない</p>

# [標準設定のフェイルオーバー サーバ設定] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、通知の標準設定値を設定できます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス] &gt; [高可用性プリファレンス] を選択します。[高可用性プリファレンス] ページで [標準設定] &gt; [編集] をクリックします。</p> <p>注：このダイアログ・ボックスは SiteScope Failover サーバのみで利用可能です。</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>「高可用性プリファレンス」(611ページ)</li><li>「[新規フェイルオーバー プロファイル] / [フェイルオーバー プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」(613ページ)</li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
電子メール・サーバのドメイン名	<p>SiteScope が電子メール・メッセージの送信時に使用する SMTP メール・サーバのドメイン名。</p> <p>例：mail.thiscompany.com</p> <p>メール・サーバのドメイン名がわからない場合は、システム管理者に問い合わせてください。</p> <p>注：「[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス」(581ページ)で <b>SMTP SSL</b> が選択されている場合、電子メールは SSL SMTP サーバ経由でセキュアに送信されます。</p>
送信元電子メール・アドレス	<p>SiteScope で生成されるメールの送信元アドレスとして使用する電子メール・アドレス。電子メール・アドレスを指定すると、SiteScope から送信された電子メールの参照や並べ替えが容易になる場合があります。何も入力しないと、[送信元電子メール アドレス] は、メールの実際の送信元アドレスと同じになります。</p> <p>例：sitescope@mycompany.com</p> <p>注：使用するメール・サーバが NTLM 認証を必要な場合（後述）、ここで入力する電子メール・アドレスは有効な電子メール・アドレスである必要があります。</p>
ログイン	<p>SMTP サーバで要求されるユーザ名。このユーザ名は、プライマリとバック</p>



UI 要素	詳細
	<p>アップの両方のメール・サーバに使用します。</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>
パスワード	<p>SMTP サーバで要求されるパスワード。このパスワードは、プライマリとバックアップの両方のメール・サーバに使用します。</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>
NTLM 認証	<p>ドロップダウン・リストから、次の NTLM 認証オプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>なし:</b> メール・サーバで NTLM 認証が不要な場合に選択します。</li> <li>• <b>NTLMv1:</b> メール・サーバで NTLM バージョン 1 を使用した認証が必要な場合に選択します。</li> <li>• <b>NTLMv2:</b> メール・サーバで NTLM バージョン 2 を使用した認証が必要な場合に選択します。</li> </ul> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>標準設定値:</b> なし</p>
タイムアウト (秒)	<p>SMTP サーバからの応答を待機する時間 (秒単位)。タイムアウト期間内にプライマリ・メール・サーバからの応答を受信しなかった場合、SiteScope はバックアップ・メール・サーバの使用に切り替わります。</p> <p><b>標準設定値:</b> 60 秒</p>
通知の件名	<p>プライマリ SiteScope が利用不可である場合に送信される電子メール通知の件名フィールド・テンプレートを選択します。</p> <p><b>標準設定値:</b> 標準設定テンプレート</p> <p><b>注:</b> このテンプレートはカスタマイズまたはローカライズできます。このテンプレートは &lt; <b>SiteScope Failover のインストール・ディレクトリ</b> &gt; \templates.ha\mail.subject にあります。</p>
通知テンプレート	<p>プライマリ SiteScope が利用不可である場合に送信される電子メール通知のテンプレートを選択します。</p> <p><b>標準設定値:</b> 標準設定テンプレート</p> <p><b>注:</b> このテンプレートはカスタマイズまたはローカライズできます。このテンプレートは &lt; <b>SiteScope Failover のインストール・ディレクトリ</b> &gt; \templates.ha\mail にあります。</p>

# 第51章: インフラストラクチャ・プリファレンス

インフラストラクチャ・プリファレンスでは、SiteScope の実行方法を決定する SiteScope グローバル設定値を表示、定義できます。

## アクセス方法

[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] を選択します。

**注:** インフラストラクチャ・プリファレンスを表示するには、SiteScope の管理者であるか、「インフラストラクチャ プリファレンスの表示」権限が付与されたユーザである必要があります。インフラストラクチャ・プリファレンスを編集するには、「インフラストラクチャ プリファレンスの編集」権限が必要です。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

## 学習事項

### インフラストラクチャ・プリファレンスの概要

インフラストラクチャ・プリファレンスは、[一般設定]，[サーバ設定]，[モニタ設定]，[モニタ スキップの設定]，[動的監視設定]，[計算済みメトリクスの設定]，[カスタム モニタ設定]，[警告設定]，[Multi-View の設定]，[テンプレート設定]，[永続性設定]，[レポート設定]，[ベースライン設定]，[解析処理]，[イベント コンソールの設定]，[カスタム設定] のカテゴリで並べ替えられグループ化されます。

インフラストラクチャ・プリファレンスで設定値を編集したら、すべての入力データの形式が正しいかどうかSiteScope によって検証され、SiteScope の再起動が必要な場合は警告が表示されます。[インフラストラクチャ プリファレンス] ページから SiteScope を再起動できます。

**注:** <SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルから、インフラストラクチャ設定を表示、定義することもできます。

## UI の説明


### 本項の内容

- 「[検索オプション](#)」(623ページ)
- 「[一般設定](#)」(624ページ)
- 「[サーバ設定](#)」(634ページ)

- ・ [「モニタ設定」 \(636ページ\)](#)
- ・ [「モニタ設定をスキップ」 \(646ページ\)](#)
- ・ [「動的監視設定」 \(647ページ\)](#)
- ・ [「計算済みメトリクスの設定」 \(648ページ\)](#)
- ・ [「カスタム モニタ設定」 \(648ページ\)](#)
- ・ [「警告設定」 \(649ページ\)](#)
- ・ [「Multi-View の設定」 \(650ページ\)](#)
- ・ [「テンプレート設定」 \(651ページ\)](#)
- ・ [「永続性設定」 \(652ページ\)](#)
- ・ [「レポート設定」 \(653ページ\)](#)
- ・ [「ベースライン設定」 \(654ページ\)](#)
- ・ [「解析処理」 \(657ページ\)](#)
- ・ [「イベント・コンソールの設定」 \(662ページ\)](#)
- ・ [「カスタム設定」 \(663ページ\)](#)

検索オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
Find	<p>プリファレンス設定の特定の文字列を検索できます。検索文字列をボックスに入力します。文字をボックスに入力すると、検索フィルタが自動的に実行され、最初の一致結果が強調表示されます。一致がない場合、ボックスが赤色で表示されます。</p> <p>この検索では、各設定ラベルの最初の単語の文字列が自動的に検索されます。設定ラベルのほかの場所の文字列をチェックするには、検索文字列の前にアスタリスクのワイルドカード (*) を入力します。</p> <p>疑問符のワイルドカード (?) を使用して、1 文字のみを表すこともできます。</p> <p>[Find] ボックスをクリアするには、 ボタンをクリックします。</p>
Find Next	検索文字列に一致する次の文字列を検索します。
Find Previous	検索文字列に一致する前の文字列を検索します。
Highlight	検索フレーズに一致するすべての文字列を強調表示します。
Match Case	入力したとおりのフィルタ文字列が検索されます。このオプションをクリアす

UI 要素	詳細
	<p>ると、フィルタ文字列の大文字と小文字は区別されません。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>

## 一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>信頼されていない SSL 証明書を許可</b>	<p>SSL の使用時に SiteScope で信頼されていない証明書を許可できるようになります。このオプションを使用しない場合、キーストア・ファイルで指定した証明書、または登録済みの CA 証明書に繋がる信頼チェーンがある証明書のみが許可されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_sslAcceptAllUntrustedCerts</code></p>
<b>BSM ダウンタイム取得頻度 (分)</b>	<p>BSM にダウンタイムの要求を行う間の SiteScope の待機時間 (分単位)。</p> <p><b>標準設定値</b> :15 分</p>
<b>データ取得 API の単一要求のサイズ (MB)</b>	<p>単一のデータ取得 API 要求で日次ログからデータをフェッチするために割り当てられたメガバイト単位のメモリの最大サイズ。</p> <p>要求を処理するために日次ログから非常に大量のデータをロードすると、データに割り当てられたメモリが SiteScope の利用可能なメモリ・プールの範囲外のために、SiteScope でのパフォーマンスに悪影響を与える可能性があります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 20 MB</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_dataAcquisitionAPISingleRequestSizeMB</code></p>
<b>データ取得 API の合計要求サイズ (MB)</b>	<p>同時実行されるすべてのデータ取得 API 要求で日次ログからデータを取得するために割り当てられた最大メモリ・サイズ (メガバイト単位)。</p> <p>要求を処理するために日次ログから非常に大量のデータをロードすると、データに割り当てられたメモリが SiteScope の利用可能なメモリ・プールの範囲外のために、SiteScope でのパフォーマンスに悪影響を与える可能性があります。</p>

UI 要素	詳細
	<p><b>標準設定値</b> : 100 MB</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _dataAcquisitionAPITotalRequestsSizeMB</p>
<b>Microsoft Windows リソース・モニタ用のデフォルト収集メソッド</b>	<p>〔モニタ設定〕の〔収集の方法〕フィールドで〔グローバル設定を使用する〕オプションが選択されている場合に、Microsoft Windows リソース・モニタに使用されるデフォルト収集メソッド (pdh またはレジストリ)。詳細については、「Microsoft Windows リソース・モニタの設定」を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : pdh</p>
<b>ホスト解決要求間の遅延 (ミリ秒)</b>	<p>DNS サーバへの連続した呼び出し間の遅延 (ミリ秒)。</p> <p><b>標準設定値</b> : 0 ミリ秒</p>
<b>外部コマンドでプロセスを破壊</b>	<p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>
<b>cmd.exe での引用符文字を無効化</b>	<p>特定の作業で cmd.exe を実行するときに、引用符付きのパラメータを使用しません。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>プロパティ名</b> : _disableDoubleQuotesInTemplates</p>
<b>DNS 名前タグ</b>	<p>DNS</p> <p><b>標準設定値</b> : Name;:,Nombre;:,Navn;:,Nome;:,Nom ;,Nom\u00FF:</p> <p><b>プロパティ名</b> : _dnsNameTags</p>
<b>DNS サーバタグ</b>	<p>DNS</p> <p><b>標準設定値</b> : Server;:,Servidor;:,Serveur;:,Serveur\u00FF:</p> <p><b>プロパティ名</b> : _dnsServerTags</p>
<b>標準のしきい値を確認しない</b>	<p>ユーザが選択したしきい値に対してモニタ結果がチェックされます。標準設定の SiteScope モニタしきい値に対するチェックは行われません。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されている</p> <p><b>プロパティ名</b> : _noCheckDefaultThresholds</p>
<b>電子メールの文</b>	<p>SiteScope の電子メール・プリファレンスおよび電子メール警告で生成される</p>

UI 要素	詳細
字セット	<p>電子メールの文字セット。</p> <p><b>標準設定値</b> : 値が入力されないと、UTF-8 が使用されます。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _mailCharSet</p>
電子メールの件名の文字セット	<p>SiteScope の電子メール・プリファレンスおよび電子メール警告で生成される電子メールの件名の文字セット。</p> <p><b>標準設定値</b> : 値が入力されないと、UTF-8 が使用されます。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _mailSubjectCharSet</p>
ダウタイム メカニズムの有効化	<p>SiteScope を BSM に接続する際に、CI ダウタイム・メカニズムを有効にします。BSM によって停止中と検知される CI に SiteScope モニタ、測定値、グループ、またはプロファイル CI が直接リンクしている場合、SiteScope はダウタイムによって影響を受けます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されている</p> <p><b>プロパティ名</b> : _downtimeEnable</p>
BSM への資格情報のレポートを有効化	<p>選択すると、ホストの資格情報が SiteScope から BSM に送信されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>プロパティ名</b> : _sendCredentials</p>
スタンドアロン・デプロイメントでトポロジの収集を有効化	<p>スタンドアロン・モードでの実行中に SiteScope でトポロジの収集を有効化します (SiteScope が BSM サーバに接続されていない場合)。データ取得 API を使用する場合は、この設定を有効にしてください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _CollectTopologyInStandaloneMode</p>
vCenter からの VM 設定の取得頻度 (時間)	<p>VM 設定データを vCenter から取得して、キャッシュに保存する頻度。これにより、vCenter 内の IP またはホスト名の変更などの VM の変更が可能になります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 4 時間</p> <p><b>プロパティ名</b> : _vmwareRetrieveConfFrequencyHours</p>
データ取得 API の結果に削除さ	<p>データ取得 API の結果に、削除されたモニタに関するデータを含めます。</p>

UI 要素	詳細
れたモニタを含める	<p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_dataAcquisitionAPIIncludeDeletedMonitorsData</code></p>
LDAP バイナリ属性	<p>SiteScope では、設定要求および応答の際、既知のすべてのバイナリ LDAP 属性の名前を使用します（これは LDAP クエリの出力の形式に影響を与えます）。</p> <p>標準設定値 : <code>audio, auditingPolicy, authorityRevocationList, cACertificate, certificateRevocationList, crossCertificatePair, dSASignature, extensionData, javaSerializedData, jpegPhoto, msExchIMACL, msExchMailboxGuid, msExchMailboxSecurityDescriptor, mSMQDigests, mSMQSignCertificates, objectGUID, objectSid, personalSignature, photo, replicationSignature, thumbnailLogo, thumbnailPhoto, userCertificate, userParameters, userPassword, x500UniqueIdentifier</code></p> <p>プロパティ名 : <code>_ldapBinaryAttributes</code></p>
有効化されているモニタのみログに記録	<p>SiteScope では、無効になっているモニタ・モニタの実行は、日次ログ・ファイルに記録されません。このオプションは、管理レポートとクイック・レポートにも影響します。選択されていると、無効になっているモニタは、管理レポートとクイック・レポートに含まれません。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_onlyLogEnabledMonitors</code></p>
プールごとの最大アイドルスレッド数	<p>スレッド・プールあたりのアイドル・スレッドの最大数。</p> <p>標準設定値 : 100</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_threadPoolMaxIdle</code></p>
プール内のスレッドの最長アイドル時間（ミリ秒）	<p>SiteScope によってアイドル・スレッド・プールが消去されるまでの待機時間（ミリ秒単位）。</p> <p>標準設定値 : 600000 ミリ秒（10 分）</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_threadPoolMaxIdleTime</code></p>
perfex プロセスの最大アイドル時間（分）	<p>SiteScope によってアイドル perfex プロセスが消去されるまでの待機時間（ミリ秒単位）。クリーニング・プロセスにより、SiteScope マシンのメモリ・フットプリントが改善されます。</p>

UI 要素	詳細
	<p><b>標準設定値</b> : 60 分</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_perfexProcessMaxIdleTime</code></p>
<b>プールあたりの最大プロセス数</b>	<p>プロセス・プールあたりの最大プロセス数。</p> <p><b>標準設定値</b> : 200</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_processPoolMaxPerPool</code></p>
<b>データ統合サンプルのキューの最大サイズ</b>	<p>データ統合サンプルのキューの上限。この制限に達すると、古いサンプルが破棄されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 1000</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_dataSamplesQueueMaxSize</code></p>
<b>SSH 接続の最大試行数</b>	<p>SSH 接続を確立するための試行回数の最大値です。</p> <p><b>標準設定値</b> : 1</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_numberOfRepeatExecForSSHConnection</code></p>
<b>更新間でのモニタの遅延（ミリ秒）</b>	<p>起動してからすでに実行されているモニタが再度実行されるまでの待機時間（ミリ秒単位）。</p> <p><b>標準設定値</b> : 1000 ミリ秒</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_monitorDelayBetweenRefresh</code></p>
<b>NT SSH タイムアウト（秒）</b>	<p>リモート Windows サーバへの SSH 接続を待機するタイムアウト時間（秒単位）。</p> <p><b>標準設定値</b> : 60 秒</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_NTSSTimeout</code></p>
<b>ポートを開こうとする回数</b>	<p>予約ポートを開こうとする最大回数。rloginおよび rsh リモート・アクセス・メソッドの 811 ~ 1024 の範囲を使用します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 25</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_localPortRetryCount</code></p>
<b>Telnet 接続の再</b>	<p>Telnet 接続を繰り返し試行する最大数。</p>



UI 要素	詳細
試行回数	<p>標準設定値 : 1</p> <p>プロパティ名 : <code>_numberOfRepeatExecForTelnetConnection</code></p>
キューが最大サイズに達したときに破棄するサンプル数	<p>キューの最大サイズに達した場合に破棄するサンプルの数です。</p> <p>標準設定値 : 500</p> <p>プロパティ名 : <code>_dataSamplesQueueDiscardSamples</code></p>
数値形式	<p>文字列表現に変換するときの数値の形式。</p> <p>0 記号は数値を示し、数値が存在しない場合は 0 が表示されます。</p> <p># 記号は数値を示し、数値が存在しない場合は何も表示されません。</p> <p>例 :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>000000.00 形式の場合 : <ul style="list-style-type: none"> <li>-1234.567 は -001235.57 と書き込まれます</li> <li>1.1 は 000001.10 と書き込まれます</li> </ul> </li> <li>#.##### 形式の場合 : <ul style="list-style-type: none"> <li>-1234.567 は -1234.567 と書き込まれます</li> <li>1234 は 1234 と書き込まれます</li> </ul> </li> <li>#.000000 形式の場合 : <ul style="list-style-type: none"> <li>-1234.567 は -1234.567000 と書き込まれます</li> </ul> </li> </ul> <p>注 : 0.0000000000 形式を入力すると、PID 番号、ユーザ ID、プロセス ID など、数値に似たすべての値が四捨五入された形式で書き込まれます。レポート実運用システムでは、数値と数値に似た値を区別することはできません。</p> <p>標準設定値 : <code>###</code></p> <p>プロパティ名 : <code>_noScientificNotation</code></p>
perfex タイムアウト (秒)	<p>perfex によって接続が作成されるまで、またはモニタが実行されるまで待機するタイムアウト時間 (秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 120 秒</p> <p>プロパティ名 : <code>_perfexTimeout</code></p>
PowerShell 実行コマンド	<p>64 ビット・バージョンの Windows Server 2003 または Windows Server 2008 上で Microsoft Exchange モニタの使用を有効にするには、次の処理を行います (32 ビット・アプリケーションは 64 ビット・バージョンの Windows Server</p>

UI 要素	詳細
	<p>2003 または 2008 を使用しているコンピュータ上で system32 フォルダにアクセスできないため)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• (Windows 2003 の場合) <a href="http://support.microsoft.com/?scid=kb;en-us;942589">http://support.microsoft.com/?scid=kb;en-us;942589</a> から入手できる Microsoft ホットフィックスを適用する (Microsoft ベースのモニタを使用している場合は不要)。</li> <li>• PowerShell 実行コマンドを入力する。例: C:\Windows\Sysnative\WindowsPowerShell\v1.0\powershell.exe</li> </ul> <p>Microsoft Exchange ベースのモニタを使用している場合は、(Microsoft ホットフィックスをインストールせずに) PowerShell 実行コマンドの入力も必要となることがあります。</p> <p><b>注：</b> Windows 2003 の標準設定では Symlink Sysnative を使用できません。</p> <p><b>標準設定値：</b> PowerShell</p>
<b>PowerShell pool: アクティブ・プロセスの最大数 (キーあたり)</b>	<p>キー (接続) あたりのアクティブ状態の PowerShell プロセスの最大数です。</p> <p><b>標準設定値：</b> 20</p> <p><b>注：</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名：</b> _powerShellPoolMaxActive</p>
<b>PowerShell pool: アイドル・プロセスの最大数 (キーあたり)</b>	<p>キー (接続) あたりのアイドル状態の PowerShell プロセスの最大数です。</p> <p><b>標準設定値：</b> 8</p> <p><b>注：</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名：</b> _powerShellPoolMaxIdle</p>
<b>PowerShell pool: プロセスの最大数</b>	<p>プール内に同時に存在可能な PowerShell プロセス (アイドル・プロセスとアクティブ・プロセスすべて) の最大数です。</p> <p><b>標準設定値：</b> 20</p> <p><b>注：</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名：</b> _powerShellPoolMaxTotal</p>
<b>PowerShell pool: 新規またはアイドル・プロセスが利用可能になるまでの最大待</b>	<p>新規またはアイドル状態の PowerShell プロセスが使用可能になるまでのミリ秒単位の最大待機時間です。</p> <p><b>標準設定値：</b> 1000 ミリ秒 (1 秒)</p> <p><b>注：</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>

UI 要素	詳細
機時間 (ミリ秒)	プロパティ名: <code>_powerShellPoolMaxWait</code>
PowerShell pool: プロセスの最小アイドル時間 (ミリ秒)	<p>オブジェクトがアイドル時間により退出対象となる前に、プール内でアイドル状態を保持できるミリ秒単位の最小時間です。負 (-) の数に設定されると、アイドル時間のみが原因でオブジェクトがプールから削除されることはありません。この設定は、<b>[PowerShell プール: 退出の実行間の時間 (ミリ秒)]</b> &gt;0 でない限り効果はありません。</p> <p>標準設定値: 300000 ミリ秒 (5 分)</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_powerShellPoolMinEvictableIdleTimeMillis</code></p>
PowerShell pool: 退出の実行間の時間 (ミリ秒)	<p>アイドル状態の PowerShell プロセスをクローズするための退出スレッドの実行間隔 (ミリ秒)。負 (-) の数が設定されると、退出スレッドは起動されません。</p> <p>標準設定値: 900000 ミリ秒 (15 分)</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_powerShellPoolTimeBetweenEvictionRunsMillis</code></p>
マルチスレッドでサーバのタイムアウトを待機するプロセス	<p>選択すると、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているか、またはプロセスをプールに戻すために回答を待機しているプロセスごとに、別のスレッドが開かれます。多数のサーバがダウンしている場合にこの設定を行うと、スレッド・カウントと使用されるメモリが増えます。この設定をクリアすると (推奨)、SiteScope はこれらのプロセスの管理にスレッドを 1 つだけ使用します。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
プロセス プール 強制終了タイムアウト (ミリ秒)	<p>SiteScope によって応答のないプロセスが強制終了されるまでの待機時間 (ミリ秒単位)。これにより、すべてのタイムアウトでプロセスが強制終了されることを回避できます。</p> <p>標準設定値: 60000 ミリ秒 (最大でも 180000 ミリ秒にすることをお勧めします)</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_processPoolKillTimeout</code></p>
クイック検索自	自動フィルタが実行されるまでの時間。-1 に設定されている場合、検索を実行

UI 要素	詳細
<b>動フィルタ遅延 (ミリ秒)</b>	<p>するには、Enter キーを押す必要があります。クイック検索の詳細については、<a href="#">「クイック検索」(76ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 800 ミリ秒</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>
<b>回帰的 '依存対象'</b>	<p>モニタの <b>「依存対象」</b> ボックスで回帰を可能にします。これは、依存関係のため親グループが無効化されたとき、サブグループが無効化されることを意味します。標準設定では、依存関係が無効化されることによって、直接のグループのみが影響を受けます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_dependsOnRecursive</code></p>
<b>OA メトリッククラスに VMware パフォーマンス モニタのメトリックスを報告する</b>	<p>VMware パフォーマンス・モニタでは、メトリック・クラスに従って、ESX ホスト・サーバ、VM、またはリソース・プール・ターゲットの各メトリックスを特定のテーブルに報告します。すべての VMware パフォーマンス・モニタ・メトリックスを1つのテーブルに報告するには、このチェック・ボックスをクリアします。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されている</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_omReportNewVmwareMetricClasses</code></p>
<b>リモート サーバの表示名を BSM に送信</b>	<p>リモート・サーバのホスト名の代わりにリモート・サーバの表示名が BSM に送信されます。この設定は、DNS 解決が無効な場合に使用することをお勧めします。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_sendRemoteServerDisplayNameToBAC</code></p>
<b>SiteScope のスリープ遅延 (ミリ秒)</b>	<p>メイン・スレッドでのスリープ間隔の時間 (ミリ秒単位)。</p> <p><b>標準設定値</b> : 180 ミリ秒</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_monitorProcessCheckDelay</code></p>
<b>SiteScope ツリー更新レート (秒)</b>	<p>SiteScope ツリーの更新間の待機時間 (秒単位)。最小値は 30 秒です。</p> <p><b>標準設定値</b> : 60 秒</p>

UI 要素	詳細
	<b>プロパティ名</b> : _sisTreeRefreshRateSecs
<b>エラー発生時のスリープ間隔 (ミリ秒)</b>	<p>【エラーの検証】オプションを使用してモニタを再実行するまでに待機する時間 (ミリ秒単位)。</p> <p><b>標準設定値</b> : 5000 ミリ秒</p> <p><b>プロパティ名</b> : _verifySleepDuration</p>
<b>SSH 接続の再試行回数</b>	<p>SSH 接続を確立するための試行回数の最大値です。</p> <p><b>標準設定値</b> : 1</p>
<b>SSH プロンプトタイムアウト (ミリ秒)</b>	<p>最初のコマンドを実行する前に SiteScope が SSH 接続プロンプトの完了を待機する時間 (ミリ秒単位)。</p> <p><b>標準設定値</b> : 3000 ミリ秒</p> <p><b>プロパティ名</b> : _waitSshPromptTimeout</p>
<b>タイムアウト プロキシ クエリ ドライバ リスト</b>	<p>タイムアウトの問題を持つデータベース・ドライバのカンマ区切りのリスト。ここにリストされたドライバによって処理されたデータベース・クエリは、モニタの【クエリ タイムアウト】フィールドに指定されているタイムアウトを超えています。これらのドライバは、モニタに基づくタイムアウトを使用して個別にクエリされます。</p> <p><b>標準設定値</b> : org.postgresql.Driver</p> <p><b>プロパティ名</b> : _timeoutProxiedDrivers</p>
<b>プールからアイドル SSH 接続をクリーンする期間 (分)</b>	<p>SSH 接続プールからアイドル SSH 接続をクリーンする時間 (分単位)。</p> <p><b>標準設定値</b> : 10 分</p> <p><b>プロパティ名</b> : _SSHConnectionIdleCleanTimeMinutes</p>
<b>タイムゾーン オフセット</b>	<p>グリニッジ標準時 (GMT) のタイム・ゾーン・オフセット (時間単位) を手動で設定します。正と負、整数と非整数の両方の値を入力できます。</p> <p><b>標準設定値</b> : -999 (オフセットなし)</p> <p><b>例</b> : 米国東部 (EST) の場合、タイム・ゾーン・オフセットは GMT -5 になり、値 5 を入力します。中央ヨーロッパの場合、タイム・ゾーン・オフセットは GMT +2 になり、値 -2 を入力します。</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _timeZoneOffset</p>

UI 要素	詳細
<b>トポロジ解決頻度 (分)</b>	<p>監視対象サーバのトポロジをチェックする間の待機時間（分単位）。これは、非ダイナミック・モニタのみに適用されます。ダイナミック・モニタに対しては、ユーザ・インターフェースでインスタンスごとに頻度を設定可能です。</p> <p>モニタ実行中にこの時間を超えると、次のようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ スタンドアロンの SiteScope の場合、トポロジが SiteScope に保存される。</li> <li>・ SiteScope が BSM と統合されている場合、モニタによって BSM の RTSM にトポロジが再作成される。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> :120 分</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_topologyResolvingFrequencyInMinutes</code></p>
<b>トレースルートコマンド</b>	<p>（Unix の場合）プラットフォームの標準設定を上書きするトレースルート・コマンドへのパス。</p> <p><b>標準設定値</b> : 値なし</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_tracerouteCommand</code></p>
<b>SSH 接続プロンプトを待機する</b>	<p>SiteScope は、最初のコマンドの実行を開始する前に、SSH 接続プロンプトの終了を待機します。この設定は、SSH リモート・サーバの起動プロンプトが長い場合に選択してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_readUntilPromptFound</code></p>

## サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>標準設定の資格情報の名前</b>	<p>リモート接続に対して標準設定の資格情報の名前を使用します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 値なし</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_defaultServiceCredentialsName</code></p>
<b>ホスト名の上書き</b>	<p>BSM の SiteScope ホスト名が上書きされます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 値なし</p>

UI 要素	詳細
	<b>プロパティ名</b> : _sisHostNameOverride
<b>プロセスの強制終了</b>	<p>SiteScope プロセスが停止すると子プロセスが強制終了されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されている</p> <p><b>プロパティ名</b> : _killProcesses</p>
<b>モニタ プロセスの最大数</b>	<p>プロセス・プール内のモニタ・プロセスの最大数。</p> <p><b>標準設定値</b> : 100</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _maxMonitorProcesses</p>
<b>実行中モニタの最大数</b>	<p>キュー内の実行中モニタ・プロセスの最大数。</p> <p><b>標準設定値</b> : 400</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _maxMonitorsRunning</p>
<b>最小限のモニタ実行間隔 (秒)</b>	<p>最小限のモニタ頻度。この頻度に満たない頻度を指定してモニタを作成しようとすると、検証エラーが表示されます。</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 15</p> <p><b>プロパティ名</b> : _monitorMinInterval</p>
<b>IP バージョン 6 アドレスを優先</b>	<p>ホストが IPv6 と IPv4 の両方に解決された場合、IPv6 が使用されます。SiteScope の IPv6 のサポートの詳細については、<a href="#">「SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化」 (517ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>プロパティ名</b> : _preferIPv6Address</p>
<b>SiteScope ハートビート再開タイムアウト (分)</b>	<p>ハートビート・イベントが検出されなくなってから SiteScope が再起動するまでの最大時間 (分単位)。</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 5 分</p>

UI 要素	詳細
	<b>プロパティ名</b> : _heartbeatRestartTimeout
<b>SiteScope 再起動 タイムアウト (分)</b>	SiteScope が再起動するための最大時間。 <b>標準設定値</b> :15 分 <b>プロパティ名</b> : _restartTimeout
<b>SiteScope シャット ダウン タイム アウト (秒)</b>	SiteScope でシャットダウンを待機するタイムアウト時間 (秒単位)。 <b>標準設定値</b> :60 秒 <b>プロパティ名</b> : _shutdownTimeout
<b>起動スクリプト</b>	SiteScope の起動で使用するプラットフォームや手順に関係なく, SiteScope を 起動するときは必ずこのスクリプトが実行されます。(空 = なし) <b>標準設定値</b> : 値なし <b>プロパティ名</b> : _startupScript

## モニタ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>追加エラー トー クン</b>	サーバ出力の解析時に失敗の兆候として処理されるキーワードの追加のリス ト。 <b>標準設定値</b> : 失敗しました。*エラー コード: <b>プロパティ名</b> : _scriptMonitorErrorMsgs2
<b>追加イベント・ ログ名</b>	Microsoft Windows イベント・ログ・モニタで別のログ名を入力して, 標準ロ グ以外のイベント・ログを監視できます。 <b>標準設定値</b> : 値なし <b>プロパティ名</b> : _additionalEventLogNames
<b>追加イベント・ タイプ</b>	Microsoft Windows イベント・ログ・モニタで別のイベント・タイプ・カテゴ リを入力して, 標準アプリケーション, システム, セキュリティ・ログ以外の イベント・タイプを監視できます。 <b>標準設定値</b> : 値なし



UI 要素	詳細
	<b>プロパティ名</b> :_additionalEventTypes
<b>URL 専用モニタのすべての要求ヘッダを許可する</b>	<p>URL 専用モニタのすべての要求ヘッダを許可します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p> <p><b>プロパティ名</b> :_urlOtherHeader=</p> <p>URL 専用モニタのすべての要求ヘッダを許可する</p> <p>選択すると、URL 専用モニタのすべての要求ヘッダ・タイプが許可されるようになります。含めることのできる要求ヘッダ・タイプは次のとおりです。 Custom-Content, Custom-Header, Content-Type, Host, User-Agent, Set-Cookie, Method, Protocol, Action, および sslgetOptions。この設定をクリアした場合は、カスタム・ヘッダのみが許可されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>プロパティ名</b> : _allowAllRequestHeaders</p>
<b>参照可能な EXE タイムアウト (ミリ秒)</b>	<p>カウンタ情報の取得やモニタの実行を待機する最大時間（ミリ秒単位）。この設定は、SAP, Sybase, DB2 JDBC のモニタなど、実行可能な参照可能モニタにのみ適用されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 45000</p> <p><b>プロパティ名</b> : _browsableExeTimeout</p>
<b>ブラウズ可能モニタ - エラー時にすべてのカウンタの状態を BSM に送信</b>	<p>参照可能なモニタの状態がエラーになっている場合、エラー発生カウンタ数とその現在の値のリストのみが SiteScope から BSM に送信されます。エラーになっていない場合（モニタの状態が正常な場合）、すべてのカウンタ名と値が SiteScope から BSM に送信されます。</p> <p>選択すると、エラー時でもすべてのカウンタ（エラーのカウンタと正常な状態のカウンタ）とその値が SiteScope から BSM に送信されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p> <p><b>プロパティ名</b> : _isSendStatusOfAllBrowsableCountersToBAC</p>
<b>100% で発生する CPU エラー</b>	<p>対象マシンの CPU 使用率が 100% に達すると、CPU モニタは標準設定エラー状態に切り替わります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p> <p><b>プロパティ名</b> : _cpuEnableErrorAt100</p>
<b>CPU 最大単位数</b>	<p>CPU モニタによってサポートされる最大 CPU 単位数。</p>

UI 要素	詳細
	<p>標準設定値 : 16</p> <p>プロパティ名 : <code>_cpuMaxProcessors</code></p>
DB 最大カラム数	<p>DB モニタによって処理される最大列数。</p> <p>標準設定値 : 10</p> <p>プロパティ名 : <code>_databaseMaxColumns</code></p>
DB 最大行数	<p>DB モニタによって処理される最大行数。</p> <p>標準設定値 : 1</p> <p>プロパティ名 : <code>_databaseMaxRows</code></p>
DB 値の最大長	<p>DB モニタによって処理されるデータの最大の長さ（文字数）。</p> <p>標準設定値 : 200</p> <p>プロパティ名 : <code>_databaseMaxSummary</code></p>
新しいモニタの標準設定頻度（秒）	<p>モニタ・インスタンスの実行用にすべての新規モニタに設定される標準設定の頻度（モニタ・インスタンスの頻度値を別々に手動で設定していない場合が対象）。</p> <p>標準設定値 : SiteScope では 600 秒（10 分）。SiteScope for Load Testing では 5 秒。</p> <p>プロパティ名 : <code>_defaultMonitorRunFrequency</code></p>
標準精度	<p>モニタによって処理される浮動小数点値の標準精度。</p> <p>標準設定値 : 0（無効）</p> <p>プロパティ名 : <code>_defaultPrecision</code></p>
動的 JMX 接続プール:プールの最大アクティブ接続（キー単位）	<p>接続プールで同時に開くことのできるキーあたりの最大アクティブ接続数。（接続プールは、キーごとのプールのセットです。キーは、JMX URL、ユーザ、パスワードを組み合わせたものです）。</p> <p>標準設定値 : 10</p>
動的 JMX 接続プール:プールの最大アイドル接続（キー単位）	<p>接続プール内のアイドル状態の接続の最大数（キー単位）。（接続プールは、キーごとのプールのセットです。キーは、JMX URL、ユーザ、パスワードを組み合わせたものです）。この値を超えた場合、超過の数の接続が接続プールに保持されず終了します。</p>

UI 要素	詳細
	標準設定値 : 5
動的 JMX 接続 プール : 最小退出 可能アイドル時 間 (ミリ秒)	退出スレッドが退出させる前に接続をアイドル状態にする必要のある最小時間。接続がアイドル状態となる実際の時間は、退出スレッドが実行されるタイミングに影響を受けます (動的 JMX 接続プール : 接続タイムアウトの待機 (ミリ秒) ] を参照してください)。  標準設定値 : 1800000 ミリ秒 (30 分)
動的 JMX 接続 プール : 退出の実 行間の時間 (ミ リ秒)	アイドル接続を閉じるための退出スレッド間のインターバル。  標準設定値 : 600000 ミリ秒 (10 分)
動的 JMX 接続 プール : プール全 体の接続総数	JMX 接続プールに使用できる動的 JMX 接続の総数 (すべてのキー)。この値を超えた場合、超過の数の接続が終了します。  標準設定値 : 500
動的 JMX 接続 プール : 接続タイ ムアウトの待機 (ミリ秒)	タイムアウト前に JMX 接続プールからの接続を待機する時間  標準設定値 : 60000 ミリ秒 (1 分)
最終行の読み取 りを空にする	スクリプト・モニタの出力に空行の最終行が含まれます。  標準設定値 : 選択されていない  プロパティ名 : _enable_script_monitor_non_empty_last_line_reading
有効化/無効化時 に詳細の記入を 必須にする	警告またはモニタを有効化 / 無効化するときに、詳細の追加を必須フィールドとして設定できます。  標準設定値 : 選択されていない  プロパティ名 : _enableDisableDescriptionMandatory
JDBC ログ記録の 有効化	リンク・チェック・モニタの JDBC 検索結果ログ記録が有効になります。  標準設定値 : 選択されていない  プロパティ名 : _linkMonitorJdbcEnabled
スクリプト モニ タ エラー トーク	サーバ出力の解析時に失敗の兆候として処理されるキーワードのリスト。

UI 要素	詳細
ン	<p>標準設定値 : 見つかりません, 拒否されました, そのようなファイルまたはディレクトリは実行できません</p> <p>プロパティ名 : <code>_scriptMonitorErrorMsgs</code></p>
保存するイベントログメッセージ	<p>警告の診断テキストと同時に保存する Microsoft Windows イベント・ログの詳細の数。</p> <p>標準設定値 : 10</p> <p>プロパティ名 : <code>_eventLogMessagesToSave</code></p>
依存モニタを持つハートビート・モニタの強制再実行	<p>ハートビート・モニタのステータスがエラーではなく, 依存モニタのステータスがエラーになっているときにハートビート・モニタを強制的に再実行します。これは, ハートビート・モニタが問題の原因ではない (ハートビート・モニタが現在エラーになっていない) ことを確認するためのものです。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p> <p>プロパティ名 : <code>_runOkDependsOnError</code></p>
FTP コンテンツ一致最大量	<p>FTP データ内容の照合に使用する最大バッファ・サイズ。</p> <p>標準設定値 : 50000</p> <p>プロパティ名 : <code>_ftpContentMatchMax</code></p>
FTP ダウンロード制限	<p>各ファイルから照合のためにダウンロードする最大バイト数。</p> <p>標準設定値 : -1 (制限なし)</p> <p>プロパティ名 : <code>_ftpDownloadLimit</code></p>
FTP 最大スレッド数	<p>同時 FTP ワーカ・スレッド最大数。</p> <p>標準設定値 : 1</p> <p>プロパティ名 : <code>_ftpMaxThreads</code></p>
HTTP 内容一致表示制限	<p>URL モニタの内容一致を表示するための最大バイト数。</p> <p>標準設定値 : 150</p> <p>プロパティ名 : <code>_urlContentMatchDisplayMax</code></p>
HTTP 内容一致制限	<p>URL モニタの内容一致を確認するための最大バイト数。</p> <p>標準設定値 : 50000</p>

UI 要素	詳細
	<b>プロパティ名</b> : _urlContentMatchMax
<b>初期モニタ遅延 (秒)</b>	<p>SiteScope の再起動後にモニタの更新がランダムにスケジュールされる時間 (秒単位)。</p> <p>次の実行がすぐに行われるようにモニタの頻度を変更すると (たとえば, モニタが 5 分以内に実行されない場合, 頻度を 5 分より小さい値に変更します), SiteScope によって次の実行が指定した期間でランダムにスケジュールされます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 600 秒</p> <p><b>プロパティ名</b> : _initialMonitorDelay</p>
<b>JMX スレッド・プールのコア・サイズ</b>	<p>アイドル状態でも JMX タスクに対して作成できる, JMX プールに保持するスレッド数。</p> <p><b>標準設定値</b> : 10</p>
<b>JMX スレッド・プールのアイドル時間 (秒)</b>	<p>コアの数よりスレッドの数の方が大きい場合、これは、タイムアウト前に超過のアイドルスレッドが新しい JMX タスクを待機する最大時間になります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 30 秒</p>
<b>JMX スレッド・プールの最大サイズ</b>	<p>プール内で許容されるスレッドの最大数。プールのスレッド数がコアより多く、最大よりも少なく、キューがフルの場合は、プールの最大スレッド数に達するまで JMX タスク用に新しいスレッドが作成されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 200</p>
<b>JMX スレッド・プールのキュー・サイズ</b>	<p>キューに追加できる JMX タスクの最大数。コア・スレッドが現在ビジーの場合、最大キュー・サイズに達するまで、新しいタスクがキューに追加されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 400</p>
<b>メール添付ファイルのコンテンツとして Base64 をサポート</b>	<p>メール・モニタに対してメール添付ファイルのデータ内容送信エンコードとして Base64 がサポートされます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _mailAttachmentBase64Support</p>
<b>選択されるブラ</b>	参照可能ツリーから選択される参照可能カウンタの最大数。この値よりもカウ

UI 要素	詳細
ウズ可能カウンタの最大数	<p>ンタ数が多くなるようにモニタを作成または編集する場合、この値のカウンタ数までしか保存されません。</p> <p><b>注：</b> 参照可能なモニタがテンプレートに表示される場合、選択したパターンと一致するカウンタ数は &lt; <b>SiteScope のルート・ディレクトリ</b> &gt; \groups\master.config ファイルの <b>_maxCountersForRegexMatch</b> パラメータによって制限されます。デプロイの間、パターンに一致するカウンタ数がこの値を超えると、この値までのカウンタ数だけが保存されます。そのため、この設定と同じ値と <b>_maxCountersForRegexMatch</b> パラメータを使用することをお勧めします。これらの両パラメータの標準設定値は 1000 です。</p> <p><b>標準設定値：</b> 1000</p> <p><b>プロパティ名：</b> _browsableContentMaxCounters</p>
アプリケーション モニタの最大カウンタ	<p>アプリケーション・モニタに選択できるカウンタの最大数。</p> <p><b>標準設定値：</b> 100</p> <p><b>プロパティ名：</b> _ApplicationMonitorMaxCounters=100</p>
MIB モニタによる SNMP に対する最大カウンタ	<p>[MIB による SNMP] モニタでサポートされるカウンタの最大数。</p> <p><b>標準設定値：</b> 32</p> <p><b>プロパティ名：</b> _maxSNMPbyMIBCounters</p>
最大 Windows パフォーマンス カウンタ モニタ カウンタ数	<p>Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタのインスタンスごとのカウンタの最大数。</p> <p><b>標準設定値：</b> 8</p> <p><b>プロパティ名：</b> _NTCounterMonitorMaxCounters</p>
Microsoft Windows Media Server モニタ サービス名	<p>Microsoft Windows Media Server モニタを使用して監視するサービス名。</p> <p><b>標準設定値：</b> Windows Media サービス (Windows Media Station Service や Windows Media Unicast Service など)</p> <p><b>プロパティ名：</b> _counterObjectsWindowsMediaMonitor</p>
MQ サーバ CCSID	<p>SiteScope の標準設定の WebSphere MQ サーバ CCSID</p> <p><b>標準設定値：</b> 値なし</p> <p><b>プロパティ名：</b> _mqServerCCSID=</p>
MS Media Player	<p>Media Player アカウントが 17999 エラーで停止する場合、このオプションを選</p>

UI 要素	詳細
<b>9 アカウント ブロック</b>	<p>択して、アカウント・ディレクトリ・パスを [MS Media Player 9 アカウント ディレクトリ] ボックスに追加します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p> <p><b>プロパティ名</b> : _MediaPlayer9AccountBlocked</p>
<b>MS Media Player 9 アカウント ディレクトリ</b>	<p>Media Player モニタで 17999 エラーが発生した場合、Media Player アカウント・ディレクトリを入力します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 値なし</p> <p><b>例</b> :C:\Documents and Settings\&lt;ユーザ&gt;\Local Settings\Application Data\Microsoft\Windows Media\9.0</p> <p><b>プロパティ名</b> : _MediaPlayer9AccountBlockedDir</p>
<b>ネットワーク帯域幅モニタ整合性確認</b>	<p>ネットワーク帯域幅モニタに対して整合性確認が実行されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p> <p><b>プロパティ名</b> : _performNetworkBandwidthSanityCheck</p>
<b>Perfex オプション</b>	<p>perfex 設定を微調整するために使用するオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>-wrmTimeout 300</b> : 高負荷ネットワーク環境に多数のカウンタを含む Microsoft Windows リソース・モニタを作成しているときに、タイムアウトするまでの待機時間（秒単位）。</li> <li>• <b>-optionalSetupConnection</b> : このオプションは、認証時に ImpersonateLoggedOnUser Microsoft API を perfex で強制的に使用します。セキュアな接続を使用して監視する場合に、リモート・ワークステーションに接続するための任意指定の方法を SiteScope で設定できるようにします。詳細については、<a href="#">「セキュア・シェル (SSH) を使用したリモート監視の設定」 (523ページ)</a>を参照してください。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> : -wrmUiTimeout 300</p> <p><b>プロパティ名</b> : _perfexOptions</p>
<b>Real Media Server モニタ サービス名</b>	<p>Real Media Server モニタを使用して監視するサービス名。</p> <p><b>標準設定値</b> : RMServer</p> <p><b>プロパティ名</b> : _counterObjectsRealMonitor</p>
<b>スクリプトの実行に perfex ツー</b>	<p>スクリプトの実行に perfex ツールを使用します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>

UI 要素	詳細
ルを使用	プロパティ名 : <code>_scriptRunThroughPerfex</code>
スクリプト モニタ出力制限	<p>スクリプト・モニタの起動後にスクリプトの出力から保存する行数。</p> <p>標準設定値 : 25</p> <p>プロパティ名 : <code>_scriptMonitorLinesToSave</code></p>
スクリプト モニタ置換文字列	<p>リモート・スクリプトのパラメータ・タグであるスペース区切りの文字列のリストが保存されます。スクリプト・モニタの実行時に、スクリプト・コマンドのパラメータ・タグがモニタのプリファレンスの実際のパラメータ値に置換されます。</p> <p>標準設定値 : \$ %</p> <p>プロパティ名 : <code>_scriptMonitorReplacementChars</code></p> <p>例 : スクリプト・コマンドが <code>test \$ %</code>, 置換文字が <code>\$ %</code>, パラメータが <code>Param1 Param2</code> である場合, コマンド <code>test Param1 Param2</code> がモニタで実行されます。</p>
同時実行 DNS モニタ	<p>同時に実行できる DNS モニタの最大数。これは、<b>roundTripTime</b> カウンタを使用する場合にのみ関係します。NSLookup 操作で、オペレーティング・システムをロードし、値を変更できます。</p> <p>標準設定値 : 0 (0 は、同時に実行できる DNS モニタの数に制限がないことを意味します)</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_maxDnsMonitorsRunning</code></p>
SNMP モニタの最大数	<p>指定の時間に実行できる SNMP モニタの最大数。</p> <p>標準設定値 : 10</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_snmpMonitorMaximum</code></p>
SNMP セッション終了タイムアウト (ミリ秒)	<p>SNMP セッションを閉じる前に SiteScope が待機する最大時間 (ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 30000</p> <p>プロパティ名 : <code>_maxSNMPCloseSessionTimeMillis</code></p>
SNMP トラップエンコーディン	<p>SNMP トラップ モニタの SNMP トラップ エンコーディング (トラップの送受信に使用)。空 = ISO8859-1。</p>



UI 要素	詳細
グ	<p>標準設定値 : ISO8859-1</p> <p>プロパティ名 : <code>_snmpTrapEncoding</code></p>
SNMP トラップ モニタ ログ制限	<p>SNMP トラップ・モニタに対して SNMP トラップ・ログに記録される最大行数。このボックスは、SNMP トラップ・モニタ・ページの [警告の実行] が [すべての SNMP トラップの確認後に一度のみ] に設定されている場合にのみ入力します。</p> <p>注 : 制限を高く設定すると、<b>SiteScope.log</b> または <b>RunMonitor.log</b> のサイズが増加する可能性があります。</p> <p>標準設定値 : 1000</p> <p>プロパティ名 : <code>_SNMPTrapMonitorDetailsMax</code></p>
DNS Java ライブ ラリを使用	<p>標準の perfix 設定を使用せずに、Java DNS 機能をアクティブにします。DNS 応答時間は perfix 応答よりも速い場合があります。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_useDNSJava</code></p>
MIB による SNMP に対する 要求シーケンス を使用する	<p>[MIB による SNMP] モニタに対して新しい要求モードを有効にします。このオプションを使用すると、SiteScope はリモート・サーバに対して、モニタからの OID カウンタごとに個別の要求を実行します。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_sequenceSNMP</code></p>
Web スクリプト・モニタの キュー・サイズ	<p>Web スクリプト・モニタのキューのサイズ。</p> <p>標準設定値 : 20 (最大値 : 40)</p> <p>プロパティ名 : <code>_maxWebScriptMonitorsRunning</code></p>
キュー内に待機 中の Web スクリ プト・モニタの タイムアウト (秒)	<p>タイムアウトするまでの Web スクリプト・モニタのキュー内の待機時間 (秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 120 秒</p> <p>プロパティ名 : <code>_webScriptMonitorsWaitingInQueueTimeout</code></p>
Web Service モ ニタの最大読み 取り長 (バイ	<p>Web サーバ・モニタのログ・ファイルから読み取る最大データ量 (バイト単位)。</p> <p>標準設定値 : 50000 バイト</p>

UI 要素	詳細
ト)	プロパティ名: <code>_maxAmountToRead</code>
Web サービス モニタのタイムアウト (秒)	<p>Web Server モニタが実行される最大時間 (秒単位)。</p> <p><b>標準設定値</b> :30 秒</p> <p><b>プロパティ名</b> :<code>webServiceTimeout=30</code></p>
Web サービス モニタは共通コンテンツ マッチを使用する	<p>Web サービス・モニタの内容照合動作は、SiteScope 10.12 で変更されました。この設定により、SiteScope 10.12 以前に定義された Web サービス・モニタは正しい値を照合するようになりました。これは、Web サービス・モニタが、内容照合が使用されるほかのモニタと同じように動作することを意味します。古い内容照合動作に戻すには、この設定をクリアしてください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>

## モニタ設定をスキップ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
スキップ モニタの無効化期間 (秒)	<p>モニタの最大スキップ数 ( [ <b>モニタの最大スキップ数</b> ] で定義されます) を超えてからモニタが無効化される期間 (秒単位)。</p> <p><b>標準設定値</b> :360 秒</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_monitorDisablePeriodOnSkip</code></p>
モニタの最大スキップ数	<p>モニタが無効化されるまでのモニタの最大連続スキップ数。</p> <p><b>標準設定値</b> : 10</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_maxMonitorSkips</code></p>
スキップ後モニタが無効なった場合に管理者に電子メールを送信	<p>モニタの最大連続スキップ数を超えてモニタが無効化された場合、SiteScope から管理者に電子メールが送信されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_emailSkipNotification</code></p>

UI 要素	詳細
スキップされるモニタをシャットダウン	<p>モニタが最大数を超過してスキップした場合、SiteScope がエラーを出力してシャットダウンします。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p> <p><b>プロパティ名</b> : _shutdownOnSkips</p>

## 動的監視設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
ダイナミック・モニタリング・コア・スレッド・プール・サイズ	<p>新しいダイナミック・モニタ用に作成するプールのスレッド数でチェック・タスクが変更されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 5</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _dynamicMonitoringCoreThreadPoolSize</p>
ダイナミック・モニタリング最大キュー・サイズ	<p>新しいダイナミック・モニタの最大数により、キューに追加できるチェック・タスクが変更されます。コア・スレッドがビジーの場合、最大キュー・サイズに達するまで、新しいタスクがキューに追加されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 5000</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _dynamicMonitoringMaxQueueSize</p>
ダイナミック・モニタリングの最大スレッド・プール・サイズ	<p>新しいダイナミック・モニタ用に作成するプールのスレッドの最大数でチェック・タスクが変更されます。これらの余分のスレッドは、すべてのコア・スレッドがビジーで、最大キュー・サイズに達した場合にのみ作成されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 30</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _dynamicMonitoringMaxThreadPoolSize</p>

## 計算済みメトリクスの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
計算済みメトリックの最大数	<p>モニタに対して作成できる計算済みメトリックの最大数。</p> <p><b>標準設定値</b> : 100</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _customCalculatedCounters</p>

## カスタム モニタ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
ネットワーク アクセスを許可	<p>カスタム・モニタが、データ処理スクリプトまたはスクリプトから呼び出される Java コードからほかのサーバにネットワーク接続を開く必要がある場合、この設定を有効にします。ネットワーク・アクセスをブロックするには、この選択をクリアしてください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _customMonitorAllowNetworkAccess</p>
パブリッシュが変更されている間、カスタム・モニタを無効にします	<p>変更の適用を実行する間、デプロイされたカスタム・モニタを無効にします。モニタは、変更がなされた後、変更が適用され有効な状態に保存されるまで、一時的に無効になります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されている</p> <p><b>プロパティ名</b> : _disableForPublish</p>
カスタム・モニタのデバッグを有効化	<p>カスタム・モニタのデバッグ・ログをリモート・デバッグ・サーバに送信できるようにします。モニタ設定で、特定のカスタム・モニタ・インスタンスに対してもカスタム・モニタのデバッグを有効にする必要があります。</p> <p>&lt;SiteScope&gt;\logs\custom_monitors\custom_monitor.log</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>

UI 要素	詳細
	<b>プロパティ名</b> : _customMonitorEnableDebugging
<b>カウンタの最大数</b>	<p>単一のカスタム・モニタに作成できるカウンタの最大数。</p> <p><b>標準設定値</b> : 1000</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _customMonitorMaxNumOfCounters</p>
<b>クエリの最大数</b>	<p>クエリ・ベースのカスタム・モニタに対するクエリ・テーブルに追加できるクエリの最大数。</p> <p><b>標準設定値</b> : 10</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _customMonitorMaxNumOfQueries</p>
<b>モニタの実行ごとにクラスと jar を再ロード</b>	<p>変更されたクラスや jar ファイルがないかモニタを実行するたびに確認し、それらを再ロードします。このオプションを有効にすると、モニタの初回実行後に jar やクラスを追加または変更した場合に、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>注</b> : このオプションはパフォーマンスに影響するため、スクリプトの開発時にのみ使用し、実運用段階ではオフにしてください。</p> <p><b>プロパティ名</b> : _customMonitorReloadClassLoaderFiles</p>

## 警告設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>警告試行時の遅延 (秒)</b>	<p>Post 警告の送信を試行する間の待機時間 (秒単位)。</p> <p><b>標準設定値</b> : 120 秒</p> <p><b>プロパティ名</b> : _postAttemptDelay</p>
<b>警告スレッドの最大数</b>	<p>プール内の警告スレッドの最大数。</p> <p><b>標準設定値</b> : 100</p>

UI 要素	詳細
	プロパティ名 : _threadPoolAlertMaxThreads
Post アクションの最大実行数	Post 警告の送信を試行する最大数。 標準設定値 : 4 プロパティ名 : _postAttempts
最大スクリプト警告プロセス数	同時に実行できるスクリプト警告プロセスの最大数。 標準設定値 : 25 プロパティ名 : _maxScriptAlertProcesses
サウンド警告の最大の長さ (ミリ秒)	サウンド警告音の最長時間 (ミリ秒単位)。 標準設定値 : 0 プロパティ名 : _AudioSleepTime
ページの遅延 (秒)	(ページ警告は廃止されています。この設定は、後方互換性の目的にのみ保持されています。) ページ信号間の遅延 (ページ警告を使用の場合)。 標準設定値 : 5 プロパティ名 : _delayBetweenPages

## Multi-View の設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
設定変更の更新頻度 (秒)	Multi-View での設定変更の更新間の待機時間 (秒単位)。設定データには、グループまたはモニタの追加、削除、移動、およびグループまたはモニタ名の変更が含まれます。  注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。  標準設定値 : 60 秒 (これは入力可能な最小値でもあります)
ランタイム データの更新頻度 (秒)	Multi-View でのランタイム・データの更新間の待機時間 (秒単位)。ランタイム・データには、モニタまたはグループのステータスの変更

UI 要素	詳細
	<p>および有効化 / 無効化情報が含まれます。</p> <p><b>注：</b>この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>標準設定値：</b>5 秒（これは入力可能な最小値でもあります）</p>
<b>Multi-View の最大数</b>	<p>同時に開ける Multi-View の最大数。開いている Multi-View の最大数に達すると、そのことをユーザに示すポップアップ・ウィンドウが表示され、他の Multi-View を開くことはできません。</p> <p>この数はキャッシュの頻度によって変わります。キャッシュをクリアする間隔を増やすと同時に開けるビューの数が減ります。</p> <p><b>注：</b>この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>標準設定値：</b>20（1 ~ 20 の値である必要があります）</p>
<b>前回の使用時からビュー・キャッシュをクリアするまでの間隔（秒）</b>	<p>ビューの前回の使用時からキャッシュをクリアするまでの待機時間（秒単位）。</p> <p>この数は同時に開ける Multi-View の数に影響します。キャッシュをクリアする間隔を増やすと同時に開けるビューの数が減ります。</p> <p><b>注：</b>この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>標準設定値：</b>120 秒（最小値は 5 秒）</p>

## テンプレート設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する</b>	<p>テンプレート内にグループを作成せずに、テンプレートの直下にモニタを追加できるようになります。</p> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</li> <li>テンプレートの直下に追加されたモニタは、テンプレート変更適用ウィザードではサポートされません。</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p><b>標準設定値:</b> 選択されていない</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_allowTemplateMonitorDirectlyUnderTemplate</code></p>

## 永続性設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>永続差異ファイルあたりの最大変更数</b>	<p>各永続差異ファイルに保持される、永続的変更の最大数。</p> <p><b>標準設定値:</b> 51</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_PersistencyMaxChangesInDeltaFile</code></p>
<b>永続履歴項目の最大数</b>	<p>永続的に保持される履歴項目の最大数。</p> <p><b>標準設定値:</b> 1000</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_PersistencyMaxHistoryItems</code></p>
<b>最大永続履歴サイズ</b>	<p>永続的履歴の最大サイズ（バイト単位）。</p> <p><b>標準設定値:</b> 20000</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_PersistencyMaxHistorySize</code></p>
<b>永続差異ファイルの最大数</b>	<p>永続的に保持される差異ファイルの最大数。この数に達すると、すべての永続オブジェクトを使用して新しいスナップショット（.ssf）ファイルが作成されます。古い .ssf ファイルは、履歴フォルダに移動されます。</p> <p><b>標準設定値:</b> 100</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_PersistencyMaxDeltaFiles</code></p>
<b>最大一時ディレクトリ サイズ</b>	<p>一時ディレクトリの最大サイズ（キロバイト単位）。</p> <p><b>標準設定値:</b> 10000</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_tempDirMaxSize</code></p>



## レポート設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
レポートの標準設定時間（時間）	クイック・レポートまたは警告レポートの監視データを含める標準設定期間。 <b>標準設定値</b> : 1 時間 <b>プロパティ名</b> : _quickReportDefaultTimePeriod
レポートに alert.log.old を含める	alert.log.old ファイルが警告レポートに含まれます。 <b>標準設定値</b> : 選択されている <b>プロパティ名</b> : _includeAlertLogOld
モニタ履歴レポートの最大エラー数	モニタ履歴レポートに表示される最大エラー数。 <b>標準設定値</b> : 100 <b>プロパティ名</b> : _maxReportErrors
履歴レポートの最大サンプル数	履歴レポートの最大サンプル数（読み取り数または行数）。 <b>標準設定値</b> : 100 <b>プロパティ名</b> : _reportMaxBuckets
モニタ履歴レポートの最大警告数	モニタ履歴レポートに表示される最大警告数。 <b>標準設定値</b> : 100 <b>プロパティ名</b> : _maxReportWarnings
レポートで詳細なサンプリングアルゴリズムを使用	レポートのサンプル間の時間が、レポートされたすべてのモニタ頻度の最小値として定義されます。 <b>標準設定値</b> : 選択されていない <b>プロパティ名</b> : _useReportAdvancedSamplingAlgorithm

## ベースライン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>アクティベーション スレッドの優先順位</b>	<p>アクティベーション・スレッドに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ~ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。</p> <p><b>標準設定値:</b> 1 (低い優先順位)</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_baseliningActivationThreadPriority</code></p>
<b>エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラーの上限の作成を自動化する</b>	<p>モニタのエラーのしきい値が定義されていない場合、エラーの上限のオフセット値を使用して、ベースラインしきい値が自動的に作成されます。</p> <p><b>標準設定値:</b> 選択されている</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_baseliningAutomateUpperBoundCreation</code></p>
<b>計算スレッドの優先順位</b>	<p>計算スレッドに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ~ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースライン計算の完了が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。</p> <p><b>標準設定値:</b> 1 (低い優先順位)</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_baseliningCalculationThreadPriority</code></p>
<b>失敗した解析ハンドラ スレッドの優先順位</b>	<p>失敗した解析スレッド・ハンドラに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ~ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースライン計算の完了が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。</p> <p><b>標準設定値:</b> 1 (低い優先順位)</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_baseliningFailedParsingHandlerThreadPriority</code></p>

UI 要素	詳細
今日の日を計算に含める	<p>現在の日のデータをベースライン計算に含めるかどうかを指定します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_baseliningCalculationIncludesToday</code></p>
ベースライン・データをディスクに保存する間隔 (分)	<p>メモリに累積されるベースライン・データのディスクへの保存を SiteScope が行う間隔 (分単位)。間隔が短いほどメモリの消費量が少なくなりますが、失敗による脆弱性が増加し、パフォーマンスも低下します。</p> <p><b>標準設定値</b> :30 分</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_baseliningSaveAccumulatedDataIntervalMinutes</code></p>
計算に含める最大日数	<p>ベースライン計算に含める履歴データの日数。数値が高いほどベースライン結果の精度は高くなりますが、計算時間が長くなり、使用するディスク領域も増加します。この値よりも古いデータは計算に含まれません。計算モデルの詳細については、<a href="#">「ベースラインしきい値」 (346ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :30 日</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_baseliningDaysToIncludeInCalculation</code></p>
パーセンタイル範囲の最大数	<p>パーセンタイル範囲マッピング・テーブルに表示されるパーセンタイル範囲の数が制限されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :8</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_baseliningMaxNumberOfPercentilesRanges</code></p>
ベースライン設定に必要な最小日数	<p>SiteScope でベースラインを計算するためにモニタで実行する必要のある最小日数。</p> <p><b>標準設定値</b> :14 日</p> <p><b>最小値</b> : 1 (1 より小さい値を入力した場合、標準設定値が使用されます)。</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_baseliningMinimumNumberOfDays</code></p>

UI 要素	詳細
ベースライン設定に必要な最小サンプル数	<p>SiteScope でベースラインを計算するために必要な最小サンプル数。</p> <p><b>標準設定値</b> : 2016 (2 週間周期で実行中で 10 分ごとに実行されるモニタに対して生成されるサンプルの数)</p> <p><b>最小値</b> : 1 (1 より小さい値を入力した場合、標準設定値が使用されます)。</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_baseliningMinimumNumberOfSamples</code></p>
エラーの上限の計算に使用するオフセット	<p>エラー限度の計算に使用するオフセット値。次の場合、ベースラインのしきい値はこの値に乘じられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ [エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラーの上限の作成を自動化する] オプションが選択されている (下記参照)。</li> <li>・ 最も上限に近い現在のエラーしきい値が、計算されたベースラインのしきい値よりも低い。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> : 0.3</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_baseliningUpperBoundOffset</code></p>
解析のチャンクサイズ	<p>ログ・ファイル・パーサによって同時に処理されるモニタの数。数値が高いほどベースライン計算は早くなりますが、使用されるファイル・ハンドラの数が増加します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 100</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_baseliningParsingChunkSize</code></p>
解析スレッドの優先順位	<p>解析スレッドに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ~ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースライン計算の完了が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 1 (低い優先順位)</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_baseliningParsingThreadPriority</code></p>
破棄したサンプル	<p>ベースライン計算に含まれない最も上限に近いサンプルのパーセンタイル</p>

UI 要素	詳細
ルのパーセンタ イル	<p>(「ノイズ」とみなされる測定値のサンプル)。</p> <p><b>標準設定値</b> : 2.0</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_baseliningNoiseMarginPercentile</code></p>

## 解析処理

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
有効化された解 析	<p>SiteScope の予測解析メカニズムを有効化します。この設定がクリアされると、解析計算エンジンが停止して、ユーザ・インタフェースで解析が無効化されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されている</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_analyticsEnableDisableCalculation</code></p>
自動タグ作成	<p>SiteScope はビジネス・モニタに割り当てる各分析構成に対して自動的に解析タグの値を生成します。タグの値は <code>analytics_&lt;monitor_name&gt;</code> の形式となり、同じ名前のモニタが複数ある場合は丸括弧で囲まれた数字が後に付きます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されている</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_enableAnalyticsAutoTagging</code></p>
ベースライン計 算 :core thread pool size	<p>解析ベースライン計算スレッド・プールで作成するスレッドの最大数。すべてのコア・スレッドがビジー状態で、最大キュー・サイズに到達した場合にのみ、追加スレッドが（最大数を上限として）作成されます。</p> <p>スレッド・プールの詳細については、Oracle Java のドキュメント (<a href="http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/util/concurrent/ThreadPoolExecutor.html">http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/util/concurrent/ThreadPoolExecutor.html</a>) を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 1</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_analyticsBaselineCalculatorThreadPoolSize</code></p>

UI 要素	詳細
ベースライン計算:最大キュー・サイズ	<p>スレッド・プールが最大容量のときにキューに追加できる解析ベースライン計算タスクの最大数。</p> <p>スレッド・プールの詳細については、Oracle Java のドキュメント (<a href="http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/util/concurrent/ThreadPoolExecutor.html">http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/util/concurrent/ThreadPoolExecutor.html</a>) を参照してください。</p> <p><b>標準設定値:</b> 5000</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> _analyticsBaselineCalculatorMaxQueueSize</p>
ベースライン計算:最大スレッド・プール・サイズ	<p>解析ベースライン計算スレッド・プールのスレッドの最大数。すべてのコア・スレッドがビジー状態で最大キュー・サイズに到達した場合にのみ、コア数より多くのスレッドが作成されます。</p> <p>スレッド・プールの詳細については、Oracle Java のドキュメント (<a href="http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/util/concurrent/ThreadPoolExecutor.html">http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/util/concurrent/ThreadPoolExecutor.html</a>) を参照してください。</p> <p><b>標準設定値:</b> 1</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> _analyticsBaselineCalculatorMaxThreadPoolSize</p>
ベースライン計算:スレッドごとのモニタ	<p>単一のスレッドで実行されるモニタ・ベースライン計算の最大数。数が大きいほど、より大きな物理メモリが必要になります。数が小さいほど、計算が長くなります。</p> <p><b>標準設定値:</b> 100</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> _analyticsBaselineCalculationMonitorPerThread</p>
ベースライン計算のデータ期間 (ミリ秒)	<p>解析ベースライン計算が実行される履歴データの期間 (ミリ秒単位)。この値よりも古いデータは、計算から除外されます。</p> <p><b>標準設定値:</b> 2592000000 ミリ秒 (1 か月に等しい)</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> _analyticsBaselineCalculationPeriod</p>
ベースライン計算の頻度 (ミリ秒)	<p>ベースライン計算が実行される頻度です。</p> <p><b>標準設定値:</b> 604800000 ミリ秒 (1 週間)</p>

UI 要素	詳細
秒)	<p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_analyticsBaselineTaskRepeatPeriod</code></p>
ベースライン結果のエージング期間 (ミリ秒)	<p>SiteScope データから作成されるベースライン結果が非アクティブの状態になって、保存先から削除されるまでの期間。</p> <p><b>標準設定値:</b> 432000000 ミリ秒 (5 日)</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_analyticsBaselineResultAgingPeriod</code></p>
ベースライン・スリープの係数	<p>この係数は平均値からの標準偏差の数です。メトリックが平均値<math>\bar{x}</math> (この係数によって乗じられた) ベースラインの標準偏差の値を超えるか下回ると、そのメトリックは異常な値と見なされます。</p> <p>標準設定では、メトリックの平均値からの標準偏差に<math>\bar{x}</math> 3 の係数を乗じて、ベースライン・スリープが計算されます。</p> <p>つまり、標準偏差の 3 倍の値を平均値にプラスした値を超えるか、標準偏差の 3 倍の値を平均値からマイナスした値を下回ると、メトリックは異常な値と見なされます。</p> <p><b>標準設定値:</b> 3</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_analyticsBaselineBandWidth</code></p>
相関処理計算: core thread pool size	<p>解析相関処理計算スレッド・プールで作成するスレッド数。すべてのコア・スレッドがビジー状態で、最大キュー・サイズに到達した場合にのみ、追加スレッドが (最大数を上限として) 作成されます。</p> <p>スレッド・プールの詳細については、Oracle Java のドキュメント (<a href="http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/util/concurrent/ThreadPoolExecutor.html">http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/util/concurrent/ThreadPoolExecutor.html</a>) を参照してください。</p> <p><b>標準設定値:</b> 5</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_analyticsCorrelationCalculatorThreadPoolSize</code></p>
相関処理計算: 最大キュー・サイズ	<p>スレッド・プールが最大容量のときにキューに追加できる解析相関計算タスクの最大数。</p> <p>スレッド・プールの詳細については、Oracle Java のドキュメント (</p>

UI 要素	詳細
	<p><a href="http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/util/concurrent/ThreadPoolExecutor.html">http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/util/concurrent/ThreadPoolExecutor.html</a>) を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 5000</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_analyticsCorrelationCalculatorMaxQueueSize</code></p>
<b>相関処理計算 : 最大スレッド・プール・サイズ</b>	<p>解析相関計算スレッド・プールのスレッドの最大数。すべてのコア・スレッドがビジー状態で最大キュー・サイズに到達した場合にのみ、コア数より多くのスレッドが作成されます。</p> <p>スレッド・プールの詳細については、Oracle Java のドキュメント (<a href="http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/util/concurrent/ThreadPoolExecutor.html">http://docs.oracle.com/javase/7/docs/api/java/util/concurrent/ThreadPoolExecutor.html</a>) を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 30</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_analyticsCorrelationCalculatorMaxThreadPoolSize</code></p>
<b>相関処理のデータ保存期間 (時間)</b>	<p>解析相関処理計算が実行される履歴データの期間 (時間単位)。この値よりも古いデータは、計算から除外されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 10 時間</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_analyticsCorrelationCalculationTimePeriod</code></p>
<b>相関処理結果のエイジング期間 (ミリ秒)</b>	<p>新しい解析アラートが出された場合に、相関処理計算が古いものとみなされ再計算される状態になるまでのミリ秒単位の期間。</p> <p><b>標準設定値</b> : 3600000 (1 時間)</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_analyticsCorrelationAgingMillis</code></p>
<b>相関処理スコアのしきい値 (%)</b>	<p>上回った場合に 2 つのメトリックが相関しているとみなされる値 (パーセンテージ)。この値よりも低いスコアを伴う 2 つのメトリックは、相関しているとみなされません。スコアにより、[相関処理結果] パネルおよび解析アラートに表示される結果が決まります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 60</p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>



UI 要素	詳細
	<p><b>プロパティ名:</b> _analyticsCorrelationScoreThreshold</p>
除外されたモニタ・タイプ	<p>解析に使用できないモニタ・タイプをリストします（通常はシステム・モニタ）。必要に応じて、このリストでモニタ・タイプを追加または削除できます。このリストにモニタ・タイプを追加する場合は、<a href="#">「データ取得 API の使用方法」(175ページ)</a>に記載されているモニタの「topaz 名」を使用する必要があります。</p> <p><b>標準設定値:</b> AmazonCloudWatch, CPU, Disk Space, Memory, Ping, Composite, DHCP, Directory, DNS, Dynamic Disk Space, File, FTP Monitor, Generic Hypervisor, HP iLO, NonStop Resources, IPMI, KVM, HyperVMonitor, NT Dialup, Browsable NT Counters, Dynamic Microsoft Windows Resources, Windows Services State, Network Bandwidth Monitor, Port;SAP Performance, Service, SNMP, SNMP by MIB Monitor, SNMP Trap, Unix Resources, VMware Datastore Monitor, VMware Host CPU Monitor, VMware Host Memory Monitor, VMware Host Network Monitor, VMware Host State Monitor, VMware Host Storage Monitor, Vmware, Radius, Solaris Zones, Siebel Log, HAProxy Monitor, DatabaseCounter, Log Event Health Monitor, Monitor Load Monitor, BAC Integration Statistics, Health Server Load Monitor, BAC Integration Configuration, SSL Certificates Status, Connection Statistics Monitor, Dynamic Monitoring Statistics, License Usage</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> _analyticsNotSupportedMonitorTypes</p>
ターゲット・モニタの最大数	<p>相関処理マッチング用に指定されるモニタのターゲットとして指定される可能性のあるモニタの最大数。</p> <p><b>標準設定値:</b> 700</p> <p><b>注:</b> この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>プロパティ名:</b> _analyticsMaxMonitors</p>
すべてのベースライン計算を停止	<p>選択されている場合、すべてのベースライン計算を停止します。ユーザ・インタフェースでの解析へのアクセスを中断せずにバックグラウンド計算を一時的に停止するために使用します。この設定をクリアするとベースライン計算を再開します。</p> <p><b>標準設定値:</b> 選択されていない</p> <p><b>プロパティ名:</b> _analyticsCorrelationAndBaselineCalculationStop</p>

## イベント・コンソールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
イベント コンソールを有効にする	<p>選択すると、イベント・コンソールの警告アクションからトリガされた新規イベントがイベント・コンソール内に表示されます。この設定がクリアされると、イベント・コンソールの警告アクションから新しいイベントがトリガされません。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されている</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_eventConsoleEnabled</code></p>
イベント コンソール UI のログ作成を有効にする	<p>イベント・コンソール・ユーザ・インタフェースからエラーを SiteScope サーバ上の <code>event_console_ui.log</code> に送信できるようになります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されている</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_eventConsoleUiLoggingEnabled</code></p>
履歴イベントの最大数	<p>サーバ・ログから取得してイベント・コンソールの [イベント履歴] ビューに表示できる履歴イベントの最大数。この値は 5000 を超えることができません。表示限度に達すると、最も古いイベントが [イベント履歴] ビューから削除されます。ただし、それらのイベントは引き続き <code>event_console_history.log</code> ファイルで利用できます (イベントがログ・ファイルから削除されることはありません)。保存される履歴ファイルの数は 40 (1 日あたり 1 つ) です。41 日目に達すると、最も古いファイルが削除されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 1000</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_eventConsoleMaxHistorcalEvents</code></p>
取得する LDAP ユーザの最大数	<p>イベント・コンソールにユーザ・リストをロードしたときに LDAP サーバから取得する LDAP ユーザの最大数。この値は 1000 を超えることはできません。</p> <p><b>注</b> : このユーザ数を超える Active Directory ドメインが存在すると、ユーザの電子メール・アドレスを手動で入力した場合でも、LDAP サーバから取得された結果に含まれていない LDAP ユーザにはイベントを割り当てることはできません。</p> <p><b>標準設定値</b> : 400</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_eventConsoleMaxLdapUsers</code></p>
ライブ・イベン	

UI 要素	詳細
トの最大数	<p>サーバ上に保管され、イベント・コンソールに表示されるライブ・イベントの最大数（この値は 5000 を超えることはできません）。この限度に達すると、最も古いイベントが自動的に閉じられ、[イベントの履歴] ビューに表示されます。さらに、これらのイベントの特定を可能にする (CLOSED BY AUTOMATIC PURGE) メッセージとともに <b>event_console_history.log</b> に書き込まれます。イベントがログ・ファイルから削除されることはありません。log4j.properties ファイルを使用して、保存できるログ・ファイルの数を設定できます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 1000</p> <p><b>プロパティ名</b> : _eventConsoleMaxLiveEvents</p>
取得する履歴イベントの時間数	<p>イベント・コンソールの [イベント履歴] ビューに表示される、サーバ・ログから取得する履歴イベントの時間数の最大数。この値は 168 時間（1 週間）を超えることはできません。</p> <p><b>標準設定値</b> : 48 時間</p> <p><b>プロパティ名</b> : _eventConsoleMaxHistoryHours</p>

## カスタム設定

この表では、より一般的に使用される一部のカスタム設定を示します。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
コントロールされたアクセス	<p>SiteScope をセキュア・モードで使用します。SiteScope がセキュア・モードのときに自動テンプレート・デプロイメントを使用するには、<a href="#">「XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ」(875ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : true</p> <p><b>プロパティ名</b> : _accessControlled</p>
シーズナリティの解析最小データ日数	<p>シーズナリティを計算するためのベースラインに必要なデータの最小日数。データ日数がこの値より低い場合、シーズナリティの計算は発生しません。</p> <p><b>標準設定値</b> : 4</p> <p><b>プロパティ名</b> : _analyticsMinDataDaysForSeasonality</p>

UI 要素	詳細
シーズナリティの解析最小固有値 (なし)	<p>シーズナリティを計算するためのベースラインに必要な最小データ・ポイント数。データ・ポイント数がこの値より低い場合、シーズナリティの計算は発生しません。</p> <p><b>標準設定値:</b> 10</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_analyticsMinDistinctValuesNoForSeasonality</code></p>
トレンドの解析最小固有値 (なし)	<p>トレンドを計算するためのベースラインに必要な最小データ・ポイント数。データ・ポイント数がこの値より低い場合、トレンドの計算は発生しません。</p> <p><b>標準設定値:</b> 10</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_analyticsMinDistinctValuesNoForTrend</code></p>
バケットの長さでの解析最小サンプル	<p>バケット (内部アルゴリズムの用語) を計算に取り入れる場合に、そのバケットが持たなければならない最小データ・ポイント数。</p> <p><b>標準設定値:</b> 2</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_analyticsMinSamplesInBucketLength</code></p>
ベースラインの解析最小サンプル (なし)	<p>計算するベースラインに必要な最小データ・ポイント数。データ・ポイント数がこの値より低い場合、ベースラインの計算は発生しません。</p> <p><b>標準設定値:</b> 50</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_analyticsMinSamplesNoForBaseline</code></p>
シーズナリティの解析最小サンプル (なし)	<p>計算するシーズナリティに必要な最小データ・ポイント数。データ・ポイント数がこの値より低い場合、シーズナリティの計算は発生しません。</p> <p><b>標準設定値:</b> 50</p> <p><b>プロパティ名:</b> <code>_analyticsMinSamplesNoForSeasonality</code></p>
トレンドの解析最小サンプル (なし)	<p>トレンドの計算を有効にするための最小サンプル数。このパラメータは内部アルゴリズムに影響を及ぼします。HP ソフトウェア・サポートに相談せずにこの値を変更することはお勧めしません。</p> <p><b>標準設定値:</b> 5</p>

UI 要素	詳細
	<b>プロパティ名</b> : _analyticsMinSamplesNoForTrend
<b>解析異常値削除の係数</b>	<p>異常値削除を実行すべきかを検証するために使用される標準偏差の数（異常値とは予測分析ベースライン・スリープ外のデータです）。このパラメータは内部アルゴリズムに影響を及ぼします。HP ソフトウェア・サポートに相談せずにこの値を変更することはお勧めしません。</p> <p><b>標準設定値</b> : 3</p> <p><b>プロパティ名</b> : _analyticsOutlierRemovalCoef</p>
<b>解析異常値削除の信頼度の微分しきい値</b>	<p>異常値削除を実行すべきかのしきい値を設定するために使用される標準偏差の数（異常値とは予測分析ベースライン・スリープ外のデータです）。このパラメータは内部アルゴリズムに影響を及ぼします。HP ソフトウェア・サポートに相談せずにこの値を変更することはお勧めしません。</p> <p><b>標準設定値</b> : 4</p> <p><b>プロパティ名</b> : _analyticsOutlierRemovalConfidenceDiffThres</p>
<b>解析異常値削除の最小信頼度</b>	<p>この最小値を下回った場合、異常値（予測分析ベースライン・スリープ外のデータ）が結果から削除されます。このパラメータは内部アルゴリズムに影響を及ぼします。HP ソフトウェア・サポートに相談せずにこの値を変更することはお勧めしません。</p> <p><b>標準設定値</b> : 95</p> <p><b>プロパティ名</b> : _analyticsOutlierRemovalMinConfidence</p>
<b>解析シーズンの有意性のしきい値</b>	<p>検出されたシーズンが使用されているシーズンリティの有意性。このパラメータは内部アルゴリズムに影響を及ぼします。HP ソフトウェア・サポートに相談せずにこの値を変更することはお勧めしません。</p> <p><b>標準設定値</b> : 0.03</p> <p><b>プロパティ名</b> : _analyticsOutlierRemovalMinConfidence</p>
<b>解析トレンドの有意な P 値</b>	<p>トレンドが存在すると推定される統計 P 値。このパラメータは内部アルゴリズムに影響を及ぼします。HP ソフトウェア・サポートに相談せずにこの値を変更することはお勧めしません。</p> <p><b>標準設定値</b> : 0.001</p>

UI 要素	詳細
	<b>プロパティ名</b> : <code>_analyticsTrendSignificantPValue</code>
解析トレンドの有意な R 二乗値	<p>トレンドが存在すると推定される統計 R 二乗値。このパラメータは内部アルゴリズムに影響を及ぼします。HP ソフトウェア・サポートに相談せずにこの値を変更することはお勧めしません。</p> <p><b>標準設定値</b> : 0.7</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_analyticsTrendSignificantRSquare</code></p>
自動デプロイメント チェックの頻度 (秒)	<p><b>persistence\autodeployment</b> ディレクトリの自動テンプレート・デプロイメント xml ファイルがデプロイされる間隔 (秒単位)。詳細については、<a href="#">「XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ」 (875ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 120</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_autoDeploymentCheckFrequency</code></p>
スクリプト・パラメータのカスタム・モニタの最大数	<p>テーブルで許可されるパラメータの最大数。最大行に達すると、他の行を追加できなくなります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 10</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_customMonitorMaxNumOfScriptParams</code></p> <p><b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>
一般イベント統合の zip へのデータ保存	<p>.zip ファイルとしてデータをキャッシュに保存するかどうかを示します。SiteScope では、統合の ID から名前を付けたフォルダを作成し、このフォルダ内に、サンプル・キャッシュ・ファイルごとに 1 つのファイルを次の形式で作成します</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <code>(&lt;numberOfEvents&gt;EC_&lt;time-stamp&gt;.&lt;CacheSuffix&gt;</code></li> <li>• <code>&lt;numberOfEvents&gt;EC_&lt;time-stamp&gt;.&lt;CacheSuffix&gt;.zipped</code> (圧縮されたファイルの場合)</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> : true</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_genericEventIntegrationGDSaveZipped</code></p>
一般イベント統合のキャッシュ・ファイル再送信の間隔 (分)	<p>キャッシュ・ファイルの再送信間の間隔。</p> <p><b>標準設定値</b> : 5 分</p> <p><b>プロパティ名</b> :</p>

UI 要素	詳細
	<code>_genericEventIntegrationGDIntervalMinutes</code>
一般イベント統合の削除対象 ファイル数	<p>キャッシュ・フォルダが最大サイズに到達した場合、SiteScope では、この値に従って、キャッシュから X 個のファイルを削除します。この値が -1 の場合、SiteScope では、キャッシュ・フォルダ内のファイルの半数を削除します（古いファイルから先に削除）。</p> <p><b>標準設定値</b> : -1</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_genericEventIntegrationGDFileCountToDelete</code></p>
一般イベント統合の最大 キャッシュ・サイズ (MB)	<p>キャッシュの最大サイズ (MB 単位) を示します。キャッシュがこの値に到達した場合、SiteScope では、キャッシュからファイルを削除します（動作は、 <code>_genericEventIntegrationGDFileCountToDelete</code> パラメータに依存）。</p> <p><b>標準設定値</b> : 10 MB（この値は整数の必要あり）</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_genericEventIntegrationGDCacheMaxSizeMB</code></p>
Microsoft Windows Event Log モニタ WMI クエリ時間範囲 (初回実行時)	<p>Microsoft イベント・ログ・モニタが WMI 接続タイプを使用中、大量のログ項目を持つ Windows リモート・サーバからデータを取得するのに失敗した場合は、最初のモニタ実行のクエリ時間範囲を変更します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 168 時間 (7 日)</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_ntEventLogWMIQueryHourRangeFirstRun</code></p>
拡張ファイルを持つコンテン ツ・パッケージのコピーのみ を保存	<p>カスタム・モニタのないテンプレート (CPU モニタのみのテンプレートなど) を含むコンテンツ・パッケージは、<b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\packages\imported</b> フォルダに保存されなくなりました。必要に応じてこの設定を上書きし、このプロパティを <b>true</b> に変更することでパッケージのコピーを保存できます。</p> <p><b>標準設定値</b> : false</p> <p><b>プロパティ名</b> : <code>_saveCopyOfContentPackageWithExtendedFilesOnly</code></p>

UI 要素	詳細
スクリプト・モニタのシンボリック・リンクの許可	<p>リモート UNIX サーバ上でスクリプトを実行する場合に、シンボリック・リンクのサポートを有効にします。有効にすると、UNIX をリモートで監視するようにスクリプト・モニタを設定した際に、使用可能なスクリプトのリストにシンボリック・リンクが表示されます。</p> <p><b>標準設定値 :</b> false</p> <p><b>プロパティ名 :</b> _scriptMonitorAllowSymbolicLink</p>
Siebel 接続コマンド	<p>Siebel サーバに接続するためのコマンドをカスタマイズできます。詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「Siebel アプリケーション・サーバ・モニタ」を参照してください。</p> <p><b>標準設定値 :</b> \$PARAM_PATH\$/srvmgr /g \$PARAM_GATEWAY\$ /e \$PARAM_ENTERPRISE\$ /s \$SERVER\$ /u \$PARAM_USERNAME\$ /p \$PARAM_PASSWORD\$ /k %%%</p> <p><b>プロパティ名 :</b> _siebelConnectCommand</p>
システム・ログの正規表現との一致	<p>Syslog モニタ用に正規表現の文字列を結合する方法を指定できます。</p> <p><b>標準設定値 :</b> /^[0-9A-Za-z]*[0-9:9\.\,]+[ ]+[ ]+[{process}]: {message}\$/</p> <p><b>プロパティ名 :</b> _sysLogMatchRegExp</p>
プールの VMware 最大アイドル接続数	<p>プール内のアイドル状態の接続の最大数。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 60</p> <p><b>プロパティ名 :</b> _vmWareConncectionPoolMaxIdlePervCenterKey</p>
VMware 接続のプール内のアクティブ接続数	<p>プール内のアクティブな接続の最大数。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 60</p> <p><b>プロパティ名 :</b> _vmWareConnectionPoolMaxSizePervCenterKey</p>
VMware 接続のタイムアウト (分)	<p>接続タイムアウト (分)。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 30</p> <p><b>プロパティ名 :</b> _vmWareConnectionTimeOut</p>



## 第52章: 統合プリファレンス

「統合プリファレンス」インタフェースを使用すると、統合インスタンスを作成して、SiteScope が監視データを次のアプリケーションに報告できるようになります。

- **Amazon CloudWatch**

統合の詳細については、「[Amazon CloudWatch 統合プリファレンス](#)」(669ページ)を参照してください。

- **HP Business Service Management**

統合の詳細については、「[BSM 統合プリファレンス](#)」(674ページ)を参照してください。

- **Diagnostics**

統合の詳細については、「[Diagnostics 統合プリファレンス](#)」(681ページ)を参照してください。

- **HP Operations Manager**

統合の詳細については、「[HP Operations Manager 統合プリファレンス](#)」(687ページ)を参照してください。

- **汎用データ統合 (測定値)**

統合の詳細については、「[一般データ統合プリファレンス](#)」(694ページ)を参照してください。

- **汎用イベント統合**

統合の詳細については、「[一般イベント統合プリファレンス設定](#)」(699ページ)を参照してください。

## Amazon CloudWatch 統合プリファレンス

このダイアログ・ボックスでは、新しい Amazon CloudWatch の統合の作成や既存のデータ統合の編集ができます。これにより、AWS がホストするアプリケーションの監視用に SiteScope を使用しているカスタマは、SiteScope メトリックを Amazon CloudWatch サービスに報告できます。

### アクセス方法

「**プリファレンス**」 > 「**統合プリファレンス**」を選択します。「統合プリファレンス」ページで次を実行します。

- 「**新規統合**」ボタンをクリックして「**Amazon CloudWatch 統合**」を選択する。
- 既存の Amazon CloudWatch 統合を選択して「**統合の編集**」をクリックする。

**注:** 統合プリファレンスを表示するには、SiteScope の管理者であるか、「**統合プリファレンスの表示**」権限が付与されたユーザである必要があります。統合プリファレンスを作成または編集するには、「**統合プリファレンスの編集**」権限が必要です。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

## 学習事項

### Amazon CloudWatch 統合の概要

Amazon CloudWatch は、Amazon Web Services (AWS) クラウド・リソースを監視する Web サービスで、Amazon EC2 から開始します。Amazon CloudWatch では、CPU 使用率、ディスクの読み取りおよび書き込み回数、ネットワーク・トラフィックといった測定値を含む、リソース使用率、稼働パフォーマンス、全体的なデマンド・パターンの「見える化」が実現されています。

この統合を行うと、AWS がホストするアプリケーションの監視用に SiteScope を使用しているユーザは、SiteScope 測定値を Amazon CloudWatch サービスに報告できます。Amazon Web Services モニタを実行した後、SiteScope はデータを Amazon CloudWatch に報告します。このデータは、AWS の AutoScaling、レポート機能、警告に使用できます。モニタ設定の詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「Amazon Web Services モニタ」を参照してください。

SiteScope が Amazon CloudWatch にデータをレポートできるようにするには、[Amazon CloudWatch 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックスを使用して統合を設定する必要があります。

## UI の説明

### Amazon CloudWatch - 一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	SiteScope インタフェースでこの統合の識別に使用する名前。 <b>注 :</b> このフィールドは必須です。
詳細	統合の詳細。これには、SiteScope からのデータを受信するアプリケーションに関する情報が含まれる場合があります。この詳細は、SiteScope の [統合プリファレンス] ページにのみ表示されます。

### Amazon CloudWatch - 統合プリファレンスの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
Namespace	対象とするサービスに対応する名前空間。このフィールドは必須です。 <b>注 :</b>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"><li>「AWS/」で始まる名前空間を指定することはできません。「AWS/」で始まる名前空間は、Amazon CloudWatch にメトリックを送信する他の Amazon Web サービス製品用に予約されています。</li><li>名前空間は最大 250 文字に制限されています。</li></ul> <b>標準設定値</b> : HP/SiteScope
エンコーディング	受信側のアプリケーションが使用するエンコーディング。 <b>標準設定値</b> : UTF-8
レポート間隔 (秒)	SiteScope がデータの送信を終了してから SiteScope 次にデータの送信を開始するまでの時間間隔 (秒単位)。このフィールドは必須です。 <b>標準設定値</b> :60 秒
時刻同期の間隔 (分)	SiteScope サーバと SiteScope データを受信するサーバの時刻を同期化するために、SiteScope ではサーバに登録されている時刻を定期的に報告できます。受信側サーバは、SiteScope から送信されたデータ・サンプルの時刻を自分のサーバの時刻と同期化し、SiteScope データとアプリケーション自体の SiteScope データの時刻が一致するようにします。  SiteScope が、SiteScope サーバの時刻を SiteScope のデータを受信するサーバに報告する間隔を分単位で選択します。 <b>標準設定値</b> :10 分
要求タイムアウト (秒)	サーバとの接続が確立されるまでのタイムアウト (秒単位)。値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。 <b>注</b> :このフィールドは必須です。 <b>標準設定値</b> :120 秒
接続タイムアウト (秒)	データを待機するソケットのタイムアウト (秒単位)。タイムアウト値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。このフィールドは必須です。 <b>標準設定値</b> :120 秒
再試行回数	SiteScope が接続の確立を試みる回数。 <b>標準設定値</b> : 3
統合を無効にする	SiteScope は、データをサーバに転送しません。統合プリファレンス設定はそのまま残ります。統合を一時的に無効にする場合に使用します。

UI 要素	詳細
	<b>標準設定値</b> :選択されていない

#### Amazon CloudWatch - セキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>AWS Access Key ID</b>	サービス要求に対して責任がある当事者として一意に特定するための英数字トークン。この ID は、AWS 秘密アクセス・キーに対応します。
<b>AWS Secret Key</b>	AWS アカウントに登録する際に AWS が割り当てる秘密キー。要求認証用。
<b>地域</b>	測定値の取得または保存に使用する Amazon EC2。  Amazon EC2 は、現在次の各地域で使用できます。US 東部（北バージニア州）、US 西部（オレゴン州）、US 西部（北カリフォルニア州）、EU（アイルランド）、アジア太平洋（シンガポール）、アジア太平洋（シドニー）、アジア太平洋（東京）、南米（サンパウロ）、および AWS GovCloud。
<b>地域の取得</b>	〔地域の取得〕ダイアログ・ボックスを開くと、測定値の取得または保存に使用する Amazon EC2 の地域を選択できます。

#### Amazon CloudWatch - プロキシ・サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>NTLM V2 プロキシ</b>	プロキシで NTLM バージョン 2 を使用した認証が必要な場合に選択します。 <b>標準設定値</b> :選択されていない
<b>アドレス</b>	プロキシ・サーバ・アドレス（必要な場合）。
<b>ユーザ名</b>	プロキシ・サーバのユーザ名。
<b>パスワード</b>	指定したサーバのパスワード。

Amazon CloudWatch - レポート・タグ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>SiteScope では、ここで選択したタグを使用して受信側のアプリケーションに転送するデータを決定します。統合ごとに少なくとも1つのタグを選択する必要があります。受信側のアプリケーションにデータを転送するグループ、サブグループ、モニタについても同じタグを選択する必要があります。</p> <p>オブジェクトに対して統合タグを選択すると、そのタグがオブジェクトの子に伝搬されます。この統合タグでグループにタグ付けすると、そのすべてのサブグループとモニタが状態を受信側のアプリケーションに報告します。</p> <p><b>例：</b>Integration_ACWというタグを作成して、ここで選択します。受信側のアプリケーションに状態を報告する各グループ、モニタ、または両方に、オブジェクトの【<b>タグの検索/フィルタ</b>】設定でこのタグを選択します。</p> <p><b>注：</b>統合プリファレンスごとに複数のタグを選択できます。報告するオブジェクトに対して複数の統合タグを選択できます。</p>
タグの追加	<p>【新規タグ】ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">【新規タグ】 / 【タグの編集】ダイアログ・ボックス</a>」(87ページ)を参照してください。</p> <p><b>ヒント：</b>統合タグの作成時には単語Integration_&lt;integration identifier&gt;を使用します。これは、このタグは、SiteScope用に作成されるその他のすべての検索 / フィルタ・タグとともに表示されるためです。これにより、グループまたはモニタのどちらの統合を有効にするかを選択するためのタグを識別することができます。</p>

ヒント / トラブルシューティング

注意事項および制限事項

- SiteScope は Amazon CloudWatch のみに数値カウンタを報告できます。最少 1 文字で最大 255 文字である必要があります。
- Amazon CloudWatch では、カウンタの名前に ASCII 以外の文字を含めることはできません。そのため、カウンタの名前に英語以外の文字が含まれていると、Amazon ですべてのモニタのカウンタが拒否されます。
- Amazon CloudWatch は大きすぎるまたは小さすぎる指数の値を切り捨てます。126 (1 x 10^126) より大きい 10 進指数の値、-130 (1 x 10^-130) より小さい値は切り捨てられます。

- Amazon CloudWatch 統合は、一度の要求で 20 メトリックを超えて Amazon CloudWatch サービスに送信することはできません。
- Amazon CloudWatch にメトリックを表示できるのは最大で 15 分です。
- 選択したレポート・タグには、タグ値の詳細が含まれている必要があります。
- 標準設定のレポート・タグ（モニタ・デプロイメント・ウィザード・グループから）が使用される場合、SiteScope はメトリックを Amazon CloudWatch サービスに送信できません。
- Amazon CloudWatch サービスに報告された SiteScope メトリックを削除することは現在のところできません。結果として、更新されずに 2 週間たつとメトリックは自動的に Amazon から削除されます。
- 標準設定では、SiteScope は AWS がホストするアプリケーションからデータを 2 分間隔で取得します。`_amazonCloudWebServiceMonitorPeriod` プロパティ（および分単位の値）を **< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config** ファイルに追加することによって、Amazon からデータを受信する期間をカスタマイズできます。たとえば、`_amazonCloudWebServiceMonitorPeriod=10` は SiteScope が最後の 10 分間のメトリクスの平均値を取得することを意味します。

## BSM 統合プリファレンス

このダイアログ・ボックスでは、BSM 統合設定を変更できます。さらに、SiteScope にアクセスできないときに SAM 管理で作成されたプロファイルに対して新規の BSM 統合を作成できます。

### アクセス方法

【**プリファレンス**】>【**統合プリファレンス**】を選択します。【統合プリファレンス】ページで次を実行します。

- 【**新規統合**】ボタンをクリックして、【**BSM 統合**】を選択します。
- または、既存の BSM 統合を選択して【**統合を編集します**】ボタンをクリックします。

**注:** 統合プリファレンスを表示するには、SiteScope の管理者であるか、「**統合プリファレンスの表示**」権限が付与されたユーザである必要があります。統合プリファレンスを作成または編集するには、「**統合プリファレンスの編集**」権限が必要です。このトピックの詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」\(744ページ\)](#)を参照してください。

## 学習事項

### 本項の内容

- 「[BSM 統合プリファレンスの概要](#)」(675ページ)
- 「[SiteScope と BSM 間通信のためのセキュア接続の使用](#)」(675ページ)
- 「[SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更](#)」(676ページ)
- 「[BSM に送信された SiteScope データの圧縮](#)」(676ページ)

## BSM 統合プリファレンスの概要

SiteScope 監視データのログを BSM に記録できるようにするには、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定する必要があります。これには、SiteScope を BSM の [システム可用性管理 (SAM) 管理] ページに追加する作業も含まれます。SiteScope が追加され、接続が確立されたら、[統合プリファレンス] ページに、[SAM 管理] の [新規 SiteScope] ページに入力した関連設定を含む [BSM 統合プリファレンス] が表示されます。

統合プリファレンスは次の用途に使用します。

- 利用可能な統合設定を変更する。
- BSM への全データのログ記録を無効にする。これには、トポロジ・レポートが含まれます。
- 空の SiteScope プロファイルに対して統合を作成する。[SAM 管理] に SiteScope を追加したときに SiteScope から BSM にアクセスできなかった場合は (HP Software-as-a-Service で作業している場合など)、**アクセス不可プロファイル**を持つ SiteScope を SAM 管理に追加します。その後、[統合プリファレンス] で接続と統合を設定します。このタスクの詳細については、[「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」\(676ページ\)](#)を参照してください。

接続先の BSM サーバが、SiteScope のデータ報告先の BSM サーバと異なるマシンにある場合、SiteScope の [統合プリファレンス] の [メイン設定]、または [SAM 管理] の [新規 SiteScope] ページの [分散設定] で、両方のサーバについて接続情報を指定する必要があります。

## SiteScope と BSM 間通信のためのセキュア接続の使用

セキュア接続を使用してデータを SiteScope から BSM サーバへ転送できます。ルート認証局で署名された証明書を BSM サーバにインストールしている場合、SiteScope サーバで必要な追加設定はありません。BSM サーバに自己署名証明書があり、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、適切な以下の手順を実行する必要があります。

- セキュア接続を必要とする BSM サーバの詳細については、[「セキュア接続が必要な BSM サーバに SiteScope を接続する方法」\(233ページ\)](#)を参照してください。
- クライアント証明書を必要とする BSM サーバについては、『SiteScope デプロイメント・ガイド』(<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm) の「クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定」を参照してください。

### 注:

- これらの設定は、BSM マシンにインストールされている証明書がルート認証局 (CA) によって署名されていない場合にのみ指定する必要があります。たとえば、Verisign のように認証局が署名した証明書を使用している場合、これらの設定を変更する必要はありません。
- ほかの SiteScope モニタで使用しているキーストア・ファイルに自己署名証明書をインポートできますが、必須ではありません。BSM サーバの証明書のキーストアは、個別に作成できます。



## SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更

SiteScope のデータの報告先となるゲートウェイ・サーバを変更できます。一般に、これは、複数のサーバにコンポーネントがインストールされている BSM デプロイメントで作業している場合にのみ当てはまります。この変更を行うには、[統合プリファレンス] ページの [Business Service Management マシン名 / IP アドレス] ボックスに必要なゲートウェイ・サーバの名前または IP アドレスを入力します。また、SiteScope 設定を [SAM 管理] の [ゲートウェイ サーバ] の名前で更新する必要があります。

**注:** この機能は、特定の BSM インストールにすでに登録されている SiteScope のゲートウェイ・サーバを変更する場合にのみ使用できます。新しい SiteScope を追加する場合や、異なる BSM システムに SiteScope を接続する場合には、この機能は使用できません。

## BSM に送信された SiteScope データの圧縮

標準設定で、データが SiteScope サーバから BSM に送信される時には圧縮されずに送信されます。SiteScope モニタ (ss\_monitor\_t) および SiteScope メトリック (ss\_t) サンプルのデータ圧縮を有効にするには、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルでプロパティ **compressDataInGzipFormat** を **true** に設定します。この設定を有効にすると、BSM (ここで解凍される) に送信される前に SiteScope データは gzip に圧縮されます。データ圧縮を使用できるのは、SiteScope が BAC 8.05 以降、または BSM 9.01 以降に報告されるときのみであることに注意してください。

## タスク

### アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法

このタスクでは、SiteScope から BSM にアクセスできない場合 (HP Software-as-a-Service での作業時など) に、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定する手順について説明します。

#### 1. BSM への SiteScope プロファイルの追加

BSM で、SAM [管理] の [新規] SiteScope ページで [アクセス不能なプロファイル] を選択して SiteScope の空のプロファイルを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプの『BSM ユーザ・ガイド』の [新規 SiteScope] / [SiteScope の編集] ページを参照してください。

#### 2. BSM サーバへの接続パラメータの指定

SiteScope で、新しい BSM の統合プリファレンスを [統合プリファレンス] に追加します。BSM 統合の値を入力します。統合を追加する場合、[利用可能なプロファイルの取得] ボタンをクリックし、BSM で作成した空のプロファイルを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「BSM 統合のメイン設定」\(677ページ\)](#)を参照してください。

#### 3. SiteScope と BSM 間通信のためのセキュア接続の設定



BSM サーバに自己署名証明書があり、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、適切な以下の手順を実行する必要があります。

- セキュア接続を必要とする BSM サーバの詳細については、[「セキュア接続が必要な BSM サーバに SiteScope を接続する方法」\(233ページ\)](#)を参照してください。
- クライアント証明書を必要とする BSM サーバについては、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定」を参照してください。

関連タスク：[「BSM と通信するための SiteScope の設定方法」\(228ページ\)](#)，[「トポロジ・レポートの設定方法」\(233ページ\)](#)

## UI の説明

BSM 統合のメイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>Business Service Management マシン名/IP アドレス</b>	この SiteScope を接続する BSM サーバのマシン名または IP アドレス。 <b>注:</b> このフィールドは必須です。
<b>SiteScope エージェント・マシンの場所</b>	BSM に接続している SiteScope サーバの場所。この特定の SiteScope サーバの場所を容易に識別できる任意の値を指定できます。 <b>注:</b> このフィールドは必須です。
<b>Business Service Management へのログ記録をすべて無効にする</b>	SiteScope の BSM へのメトリックスおよびデータの送信を停止します。ログ記録とデータ・フローを有効にするには、チェック・ボックスをクリアします。 <b>注:</b> <ul style="list-style-type: none"><li>• この操作ではトポロジのレポートは無効化されません。</li><li>• SiteScope がデータを BSM に送信するよう設定されていて、ご使用の SiteScope ライセンス・エディション（Premium，Ultimate，または System Collector）の有効期限が切れている場合、SiteScope は（トポロジも含む）すべてのデータの BSM への送信を停止します。SiteScope はライセンスの有効期限が切れると自動的に BSM へのログ記録を無効化するため、SiteScope ライセンスを更新するときに、ログ記録と BSM へのデータ・フローを有効</li></ul>

UI 要素	詳細
	<p>化するにはこのチェック・ボックスをクリアする必要があります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>&lt;プロフィール&gt;</b>	<p>SiteScope によって収集されたデータを BSM を使用して格納する SiteScope プロファイル。</p> <p><b>注</b> : プロファイルは BSM の SAM Administration で事前に設定されている必要があります。</p>
<b>利用可能なプロフィールの取得</b>	<p>利用可能なプロフィールのリストが表示されます。このボタンは、SAM Administration で作成された空のプロファイル（アクセス不可プロフィール）に SiteScope を登録する場合のみ使用します。</p>
<b>Business Service Management ユーザ名</b>	<p>BSM 管理者レベルのユーザのユーザ名。</p>
<b>Business Service Management ユーザ・パスワード</b>	<p>指定したユーザのパスワード。</p>

## Web サーバのセキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>認証ユーザ名</b>	<p>BSM サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするユーザ名。</p>
<b>認証パスワード</b>	<p>BSM サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするパスワード。</p>
<b>SSL を使用 (HTTPS プロトコル)</b>	<p>HTTPS プロトコルが使用されるように BSM サーバを設定する場合に選択します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>

## プロキシ・サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アドレス	プロキシ・サーバ・アドレス（必要な場合）。
ユーザ名	プロキシ・サーバのユーザ名。
パスワード	指定したサーバのパスワード。

## トポロジ報告設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
トポロジの再同期化の時間間隔（日）	SiteScope で BSM のトポロジ・データと同期化する日数。 SiteScope が BSM に報告するトポロジ情報は、この時間間隔に達した後の SiteScope の再起動時に同期化されます。 <b>標準設定値</b> :7 日 <b>最小値</b> : 1 日 <b>注</b> : SiteScope で作成されて RTSM に格納されているすべてのトポロジは、エージング・プロセスの対象です。エージングを避けるには、 <a href="#">「SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合」(219ページ)</a> を参照してください。
標準トポロジ・プローブ・ドメイン	SiteScope トポロジ・プローブの標準設定のドメイン。 <b>標準設定値</b> :DefaultDomain <b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。
トポロジ受信者ポート	BSM で使用するトポロジ受信者ポート。 <b>標準設定値</b> : 80 <b>注</b> : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。
トポロジ受信者 SSL ポート	BSM で使用するトポロジ受信者 SSL ポート。 <b>標準設定値</b> : 443

UI 要素	詳細
	<p><b>注：</b>この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>
トポロジ・アンチエージング・オフセット (分)	<p>アンチエージング・プロセスを実行する、分単位の午前 0 時からのオフセット。アンチエージングの詳細については、<a href="#">「SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合」(219ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値：</b>0</p> <p><b>注：</b>この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p><b>例：</b>午前 1:30 にアンチエージングを実行するには、90 のオフセットを入力します。</p>

## BSM プリファレンス利用可能操作

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
リセット	<p>SiteScope サーバからすべての BSM 関連の設定を削除します。すべての SiteScope 設定が BSM から削除されます。また、対応するプロファイルから SiteScope エージェントを解除するメッセージが、適切な BSM サーバに送信されます。</p> <p><b>注：</b>現在の設定のリセットを選択した場合、SiteScope の BSM への再接続に異なるプロファイルを作成または使用する必要があります。BSM では、以前使用された接続プロファイルを選択することはできません。</p>
再同期化	<p>SiteScope からすべての設定データを強制的に BSM に再送信します。このデータは、すべてのグループとモニタ定義で構成されます。再同期化では、SiteScope からすべてのトポロジ・データも強制的に BSM に再送信します。</p> <p><b>注：</b>BSM 9.10 以降にアップグレードする場合は、<b>「トポロジの再同期化の時間間隔」</b>値に基づいてトポロジ・データが BSM に送信されるのを待機せず、SiteScope を手動で再同期することをお勧めします。</p>
厳密な再同期化	<p>SiteScope からすべての設定データとトポロジ・データを強制的に BSM に再送信します。また、設定データの場合、BSM からこの SiteScope プロファイルの既存のモニタおよびグループ・データを削除します。</p>

## ヒント / トラブルシューティング

### 注意事項および制限事項

- BSM への接続をセキュリティで保護するには (BSM ユーザ名とパスワードは認証に使用されないため)、SiteScope に基本認証を設定するか、双方向の SSL を使用することをお勧めします。BSM を基本認証を使用するように設定すると、SiteScope の **【標準設定の認証ユーザ名】** フィールドと **【標準設定の認証パスワード】** フィールド ( **【プリファレンス】** > **【一般プリファレンス】** > **【一般設定】** ) に入力したものと同一ユーザ名とパスワードが、BSM へのデータとトポロジの両方を報告するのにも使用されます。BSM が基本認証を使用するように設定されていない場合、送信された資格情報は無視されます。
- 標準設定で、データが SiteScope サーバから BSM に送信される時には圧縮されずに送信されます。データ圧縮の有効化の詳細については、[「BSM に送信された SiteScope データの圧縮」 \(676 ページ\)](#) を参照してください。

### トラブルシューティング

BSM へのデータの報告に関するトラブルシューティングについては、[「BSM サーバとの接続」 \(216 ページ\)](#) を参照してください。

## Diagnostics 統合プリファレンス

SiteScope は Diagnostics にデータを転送して、Diagnostics が監視するアプリケーション・サーバに関する包括的な情報を表示できるようにします。このデータから、アプリケーション・サーバのデプロイ先であるインフラストラクチャ・コンポーネントに関する洞察を得ることができます。

たとえば、MIB による SNMP モニタからのデータを統合すると、アプリケーション・サーバが実行されているインフラストラクチャに関する問題の判別に役立ちます。SiteScope はグループ、モニタ、測定値に関するデータを転送します。Diagnostics は、SiteScope から送信されたデータを読み込み、レポートやグラフで表示できます。

### アクセス方法

**【プリファレンス】** > **【統合プリファレンス】** を選択します。**【統合プリファレンス】** ページで次を実行します。

- **【新規統合】** ボタンをクリックして **【Diagnostics 統合】** を選択する。
- 既存の Diagnostics 統合を選択して **【統合の編集】** ボタンをクリックする。

**注:** 統合プリファレンスを表示するには、SiteScope の管理者であるか、**「統合プリファレンスの表示」** 権限が付与されたユーザである必要があります。統合プリファレンスを作成または編集するには、**「統合プリファレンスの編集」** 権限が必要です。このトピックの詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」 \(744ページ\)](#) を参照してください。

## 学習事項

### Diagnostics の測定単位

SiteScope では、SiteScope モニタと Diagnostics のメトリックスおよびメトリックに使用する測定単位のマッピングを制御するファイル <SiteScope のルート・ディレクトリ>/conf/ integration/data\_integration\_uom.xml を生成します。Diagnostics は、認識できる測定単位にデータが関連付けられている場合にのみ、SiteScope からのデータを受け入れます。SiteScope の単位は、監視対象のソースから取得され、場合によっては該当する Diagnostics の測定単位にマップする必要があります。SiteScope モニタで使用される測定単位は、監視対象のデータのタイプに応じて異なります。たとえば、CPU モニタに使用する測定単位はパーセンテージで、ディスク領域モニタに使用する測定単位はバイト数です。したがって、SiteScope から送られる監視データに使用する測定単位が Diagnostics で認識されるように、必要に応じて XML ファイルを変更することをお勧めします。

Diagnostics にデータを報告する新しいモニタを SiteScope に追加する場合、[Diagnostics 統合プリファレンス] を編集して、[UOM XML の生成] ボタンをクリックすることをお勧めします。SiteScope は、現在デプロイされているモニタと対応する測定値のリストを生成します。このリストは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>/conf/ integration/data\_integration\_uom.xml ファイルと結合されており、XML ファイル内の手動で変更されていない値のみが更新されています。XML ファイル内に手動で変更された値がある場合、その値は更新されず、保持されます。この測定単位に関する情報の結合は、[UOM XML の生成] ボタンをクリックするか、SiteScope を再起動するたびに行われます。

SiteScope が Diagnostics に転送する統合ファイルに含まれる XML タグ、要素、属性の詳細なリファレンスについては、「[一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報](#)」(704ページ)を参照してください。

## タスク

### SiteScope を HP Diagnostics と統合する方法

SiteScope を Diagnostics と統合するエンドツーエンド・フローについては、SiteScope ヘルプにある「Integrating SiteScope with HP Diagnostics」を参照してください。[HP Software Integrations](#) では、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます (<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=665>)。

## UI の説明

### Diagnostics 統合 - 一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	SiteScope インタフェースでこの統合の識別に使用する名前。 <b>注:</b> このフィールドは必須です。
詳細	統合の詳細。SiteScope からデータを受信する Diagnostics サーバの情報が含まれる場合があります。この詳細は、SiteScope の [統合プリファレンス] ページにのみ表示されます。

### Diagnostics 統合 - プリファレンス設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
受信者 URL	SiteScope データを受信する Diagnostics サーバの URL。サーバ、Diagnostics でデータを受信するポート、パスを含む完全な URL を指定する必要があります。パスには常に <b>/metricdata/siteScopeData</b> を含める必要があります。  セキュリティ保護された接続 (SSL) の場合、「https」と入力します。 <b>構文:</b> http または https://<受信サーバの完全修飾名>:<ポート番号受信データ>/ <b>metricdata/siteScopeData</b> <b>例:</b> http://DiagnosticsServer1.hp.net:2006/metricdata/siteScopeData
エンコーディング	Diagnostics アプリケーションで使用するエンコーディング。 <b>標準設定値:</b> UTF-8
レポート間隔 (秒)	SiteScope が Diagnostics サーバへデータの送信を終了してから、SiteScope が次にデータを送信するまでの時間間隔 (秒単位)。この時間間隔はデータが送信されない時間間隔のため、サーバ間の通信遅延を防ぐことができます。 <b>標準設定値:</b> 60 秒

UI 要素	詳細
<b>時刻同期の間隔 (分)</b>	<p>SiteScope サーバの時刻と Diagnostics サーバの時刻を同期化するために、SiteScope ではサーバに登録されている時刻を定期的に報告します。その後、Diagnostics は、SiteScope から送信されたデータ・サンプルの時刻を自分のサーバの時刻と同期化し、SiteScope データと Diagnostics データの時刻が一致するようにします。</p> <p>SiteScope から Diagnostics に SiteScope サーバの時刻を報告する頻度を、分単位で選択します。</p> <p><b>標準設定値</b> :10 分</p>
<b>GZIP 圧縮</b>	<p>Diagnostics サーバに送信するサンプル・データを圧縮します。データが圧縮されていると、データ送信にかかる時間が短縮されるためパフォーマンスが向上します。Diagnostics アプリケーションで圧縮データを処理できます。送信するデータ量に応じて、このフィールドを選択またはクリアします。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>追加のデータを含める</b>	<p>クリアすると、SiteScope によって次の SiteScope オブジェクトの状態が報告されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• グループ</li> <li>• モニタ</li> <li>• カウンタ</li> </ul> <p>選択した場合、これらのオブジェクトの状態が、各オブジェクトの説明を含む状態文字列と一緒に報告されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p> <p><b>ヒント</b> :追加データを含めるとパフォーマンスが低下し、状態文字列は標準設定で送信される状態データを繰り返すため、含めないことをお勧めします。</p>
<b>リダイレクトでエラー</b>	<p>接続先 URL がリダイレクトされると、SiteScope からエラーが返されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>要求タイムアウト (秒)</b>	<p>データを待機するソケットのタイムアウト (秒単位)。タイムアウト値 0 は、無制限のタイムアウトとして解釈されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :120 秒</p>
<b>接続タイムアウト (秒)</b>	<p>接続が確立されるまでのタイムアウト (秒単位)。値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。</p> <p><b>標準設定値</b> :120 秒</p>



UI 要素	詳細
再試行回数	SiteScope が接続の確立を試みる回数。 標準設定値 : 3
要求された場合の認証	SiteScope は、要求された場合、ユーザ名およびパスワードの資格情報を送信します。クリアすると、SiteScope は資格情報を転送しません。 標準設定値 : 選択されている
統合を無効にする	SiteScope は、データを Diagnostics サーバに転送しません。統合プリファレンス設定はそのまま残ります。統合を一時的に無効にする場合に使用します。 標準設定値 : 選択されていない
UOM XML の生成	<SiteScope root directory>/conf/ integration/data_integration_uom.xml ファイルと結合する測定単位 XML ファイルを生成します。このファイルにより、Diagnostics で SiteScope データを読み取り、適切な測定単位をデータに適用できます。Diagnostics にデータを報告するモニタ・インスタンスを追加する場合、このボタンをクリックすることをお勧めします。data_integration_uom.xml ファイルの値を手動で変更した場合、その値は変更されたまま残り、この結合ファイルでは更新されません。また、SiteScope の再起動時にも常にこの結合ファイルが生成され、XML ファイルが更新されます。詳細については、 <a href="#">「Diagnostics の測定単位」 (682ページ)</a> を参照してください。

Diagnostics 統合 - Web サーバのセキュリティ設定  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
認証ユーザ名	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするユーザ名。
認証パスワード	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするパスワード。

Diagnostics 統合 - プロキシ・サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アドレス	プロキシ・サーバ・アドレス（必要な場合）。
ユーザ名	プロキシ・サーバのユーザ名。
パスワード	指定したサーバのパスワード。

Diagnostics 統合 - レポート・タグ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されま  
す）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>SiteScope では、ここで選択したタグを使用して Diagnostics に転送するデータ を決定します。統合ごとに複数のタグを選択できます。Diagnostics にデータを 転送するグループ、サブグループ、モニタに対して、タグを選択する必要があります。</p> <p>オブジェクトに対して統合タグを選択すると、そのタグがオブジェクトの子に 伝搬されます。この統合タグでグループにタグ付けすると、そのすべてのサブ グループとモニタが状態を Diagnostics に報告します。</p> <p><b>例：</b> Diagnostics_Integration1 というタグを作成して、ここで選択します。 Diagnostics に状態を報告する各グループ、モニタまたは両方に、<b>「タグの検索 /フィルタ」</b> 設定でこのタグを選択します。</p>
タグの追加	<p>〔新規タグ〕 ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加で きる。ユーザ・インタフェースの詳細については、<b>「<a href="#">[新規タグ] / [タグの 編集] ダイアログ・ボックス</a>」</b> (87ページ)を参照してください。</p> <p><b>ヒント：</b> 統合タグの作成時には、単語 Integration を使用します。統合タグは、 SiteScope に対して作成されたほかのすべての検索 / フィルタ・タグと一緒に 表示されるため、グループやモニタで統合を有効にする際に選択するタグを識 別しやすくなります。</p>

## HP Operations Manager 統合プリファレンス

HP Operations 統合を使用すれば、SiteScope で共通イベントやメトリック・データを HPOM および BSM 製品に送信できます。HP Operations 統合では、HP Operations Agent を使用して、SiteScope のサーバとモニタの可視性を BSM の HPOM と 操作管理 に提供します。HP Operations Agent は、SiteScope サーバにインストールされていて、設定されている必要があります。エージェントのインストールの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「SiteScope のインストール」の項を参照してください。

### アクセス方法

【**プリファレンス**】 > 【**統合プリファレンス**】を選択します。【統合プリファレンス】ページで次を実行します。

- ・ 【**新規統合**】 ボタンをクリックして 【**HP Operations Manager 統合**】 を選択する。
- ・ または、既存の HPOM 統合を選択して 【**統合の編集**】 ボタンをクリックします。

**注:** 統合プリファレンスを表示するには、SiteScope の管理者であるか、「**統合プリファレンスの表示**」権限が付与されたユーザである必要があります。統合プリファレンスを作成または編集するには、「**統合プリファレンスの編集**」権限が必要です。このトピックの詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」\(744ページ\)](#)を参照してください。

## 学習事項

### HP Operations Manager 統合の概要

SiteScope のサーバとモニタの可視性 BSM の Operations Manager (HPOM) と 操作管理 に提供するには、HP Operations Agent をインストールし、SiteScope サーバに設定する必要があります。HP Operations Agent は、イベントを HPOM 管理サーバと 操作管理 に送信します。HP Operations Agent は、SiteScope で収集された測定値データのデータ・ストレージとしても機能します。HP Operations Agent を HPOM/BSM サーバに接続し、HP Operations Manager とのイベント統合または測定値統合を有効にする必要があります。

- ・ **イベント統合** : SiteScope イベントがトリガされるのは、SiteScope モニタ・メトリック状態（正常 / 警告 / エラー）に変化があったとき、または SiteScope 警告がトリガされたときです。HP Operations Agent が監視しているログ・ファイルにイベントが書き込まれると、SiteScope はイベントを送信します。HP Operations Agent はデータを読み取ってイベントに変換し、HPOM/BSM サーバに転送します。
- ・ **測定値統合** : SiteScope は、HPOM (Performance Manager) と OMi (パフォーマンス・グラフ作成) で使用できるようにメトリック・データを HP Operations Agent にレポートします。Operations Manager とのメトリックス統合は、HP Operations Agent と HPOM サーバまたは BSM サーバとの接続状態に関係なく、有効化されます。これは、メトリックスがエージェントによっ

て収集されるためです。

**注:** BSM のパフォーマンス・グラフ作成のデータ・ソースとして HP Operations Agent がサポートされていますが、将来はパフォーマンス・グラフ作成のエージェントのサポートを終了する予定であるため、代わりにデータ・ソースとして BSM のプロファイル・データベースを使用することをお勧めします。詳細については、SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」を参照してください。 [HP ソフトウェア統合](#)で、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます。

Windows の場合：  
<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>

UNIX の場合：  
<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>

タスク

SiteScope を HP Operations Manager 製品と統合する方法

SiteScope がイベントを HPOM または OMi に送信できるようにする方法や SiteScope が HP Operations Agent を使用してメトリクスをレポートできるようにする方法の詳細については、SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」を参照してください。 [HP ソフトウェア統合](#)で、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます。

Windows の場合：  
<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>

UNIX の場合：  
<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>

UI の説明

HP Operations Manager 統合メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
接続設定	
HP Operations Agent インストール・パス	SiteScope マシンの HP Operations Agent インストールへのパス。 <ul style="list-style-type: none"><li>Windows プラットフォームでは、インストール・パスは、レジストリ内の HP Operations Agent <b>InstallDir</b> キーから自動的に解決され、このフィールドに表示されます。標準設定パスは、<b>C:\Program Files\HP\HP BTO Software\</b>です。キーが見つからない場合、このフィールドは空のままとなります。エージェントのインストール・パスを手動で入力する必要があります。</li></ul>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>UNIX プラットフォームの場合標準設定の <b>/opt/OV</b> パスに HP Operations Agent がインストールされているかどうか SiteScope によって確認されます。このパスに存在しない場合、このフィールドは空のままとなります。エージェントのインストール・パスを手動で入力する必要があります。</li> </ul> <p>手動で別のパスを入力した場合、SiteScope によって見つかった標準設定のインストール・パスを復元するには、<b>【パスの解決】</b> ボタンをクリックします。</p>
<b>HP Operations Manager/BSM サーバ</b>	<p>接続する HPOM / BSM サーバの名前または IP アドレスを入力します。エージェントと HPOM / BSM ホスト・マシンを接続するには、<b>【接続】</b> ボタンをクリックします。</p> <p>BSM 分散環境に接続している場合、BSM ゲートウェイ・サーバ名または IP アドレスを入力します。BSM ゲートウェイ・サーバがロード・バランサの背後にある場合は次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>BSM データ/トポロジ統合の場合 : ユーザ用に設定されるロード・バランサの名前または IP アドレスを入力します。</li> <li>OM イベント統合 (BSM での 操作管理) の場合 : データ・コレクタ用に設定されるロード・バランサの名前または IP アドレスを入力します。</li> </ul> <p>タスクの詳細については、SiteScope ヘルプにある『HP Operations Manager 製品との統合』の「SiteScope を使用して HPOM または 操作管理 にイベントを送信する方法」&gt;「BSM が分散環境にインストールされている場合や、BSM ゲートウェイ・サーバがロード・バランサの背後にある場合に、接続要求がデータ処理サーバに渡されるように設定する」を参照してください。<a href="#">HP ソフトウェア統合</a>で、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます。</p> <p>Windows の場合 :  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39</a></p> <p>UNIX の場合 :  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628</a></p> <p>接続に問題がある場合は、問題の分析を実行してエージェントおよび証明書要求の状態をチェックするために<b>【分析】</b> ボタンをクリックします。</p> <p>接続要求が送信された後、HPOM / BSM サーバは証明書要求を承諾する必要があります (このクライアントを自動的に受け入れるように HPOM / BSM サーバが設定されていない場合)。</p> <p>HPOM / BSM サーバで証明書要求が承諾された後、<b>【ポリシーのインストール】</b> をクリックし、設定済みのログ・ファイル・ポリシー・ファイルを HP Operations Agent 上にインストールし、承認します。</p> <p><b>注 :</b> HPOM/BSM サーバ上で証明書要求が承諾された後は、SiteScope から接続の遮断または別の HPOM/BSM サーバへの接続の変更を行うことはできません</p>

UI 要素	詳細
	ん。サポートが必要な場合には、HPOM/BSM 管理者に問い合わせてください。
<b>構成設定</b>	
<b>イベント送信の有効化</b>	SiteScope から HPOM/BSM サーバへのイベントの送信を有効にします。 <b>標準設定値</b> :選択されていない
<b>BSM に直接接続する</b>	BSM 内の 操作管理 にエージェントを接続する時には、SiteScope サーバにインストールして有効化した場合はノード・ディスカバリ・ポリシーを自動的に非アクティブ化するように選択します。  このオプションが選択されると: <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>「ノード ディスカバリ ポリシーを有効にする」</b> オプションは使用できないため、ノード・ディスカバリ・ポリシーは SiteScope サーバにインストールして有効化した場合には無効になります。</li> <li>・ <b>「BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します (グローバル プリファレンス)」</b> オプションが自動的に選択されます。</li> </ul> このオプションがクリアされると: <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>「ノード ディスカバリ ポリシーを有効にする」</b> オプションが自動的に選択されます。</li> <li>・ <b>「BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します (グローバル プリファレンス)」</b> オプションが自動的にクリアされます。</li> </ul> <b>標準設定値</b> :選択されている
<b>BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します (グローバル・プリファレンス)</b>	SiteScope イベントおよびメトリックスの両方がサービス状況 にレポートされる時に BSM の サービス状況 に影響を与えるグローバル・プリファレンスの標準設定 (SiteScope イベントおよびメトリックスの両方が CI に影響を与えるため)。これは BSM および Operations Manager 統合の両方がアクティブで、同じ BSM サーバに接続されている時に限り関係します (HPOM サーバの代わりに BSM サーバが使用されます)。  選択される場合には、 <b>「イベント」</b> オプションは、( <b>「HP 統合設定」</b> > <b>「BSM サービス状況プリファレンス」</b> で) 作成された新しいモニタごとに標準設定のプリファレンスとして設定されます。選択されない場合には、 <b>「メトリックス」</b> がデータを BSM にレポートするための標準設定のプリファレンスです。  使用するプリファレンスの選択の詳細については、『Integration with BSM and HPOM Best Practices』ガイドの「SiteScope と BSM との統合」を参照してください。

UI 要素	詳細
	<p><b>標準設定値</b> :選択されている</p> <p><b>注</b> :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>このオプションは <b>「BSM に直接接続する」</b> が選択されると自動的に選択されます。</li> <li>この設定は, <b>「HP 統合設定」</b> &gt; <b>「BSM サービス状況プリファレンス」</b> で個々のモニタ・インスタンスに設定されたプリファレンスをオーバーライドしません。</li> </ul>
<b>ノード・ディスカバリ・ポリシーを有効にする</b>	<p>SiteScope は SiteScope サーバでノード・ディスカバリ・ポリシー (インストールされている場合) を有効にします。このオプションは <b>「BSM に直接接続する」</b> がクリアされると自動的に選択されます。ノード・ディスカバリの詳細については, SiteScope ヘルプにある『HP Operations Manager 製品との統合』の「ディスカバリ・スクリプトと HPOM イベントを表示するためのドリル・ダウン・ユーザ」を参照してください。 <a href="#">HP ソフトウェア統合</a> で, 本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます。</p> <p>Windows の場合 :  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39</a>  UNIX の場合 :  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628</a></p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>HP Operations Manager へのテンプレートのエクスポートを有効にする</b>	<p>SiteScope からすべてのテンプレートをエクスポートすることと, それらをポリシーとして HPOM にインポートすることができます (SiteScope と HPOM が同じシステムにインストールされている場合のみ)。これらは, あとで割り当て, HPOM からデプロイすることができます。HPOM とのテンプレート統合の詳細については, SiteScope ヘルプにある『HP Operations Manager 製品との統合』の「HPOM からのテンプレートの中央管理」を参照してください。 <a href="#">HP ソフトウェア統合</a> で, 本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます。</p> <p>Windows の場合 :  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39</a>  UNIX の場合 :  <a href="http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628">http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628</a></p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>



## HP Operations Manager 統合詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>イベント統合設定</b>	
<b>テスト・メッセージ</b>	<p>HP Operations Agent が HPOM / BSM サーバに接続されていて、メッセージを送信できることをチェックします。HPOM / BSM サーバに送信するテスト・メッセージを入力し、<b>［テスト メッセージ送信］</b> ボタンをクリックします。</p> <p><b>注：</b> このテストを実行するためには、<b>opcmsg</b> ログ・ポリシーのデプロイ、承認、およびインストールを手動で行うか、あるいはイベント統合をアクティブ化した後で行う必要があります。</p>
<b>テスト・イベント送信</b>	<p>テスト・イベントを HPOM / BSM サーバに送信します。</p>
<b>重大度のマッピングの標準設定</b>	
<p>重大度のマッピングは、HPOM/BSM 内の重大度を、SiteScope 内のモニタしきい値状態に関連付けます。SiteScope が BSM に接続されていない場合、または、インジケータ状態と重大度の値がない場合に SiteScope によってトリガされるイベントで送信されます。重大度のマッピングの標準設定を使用するかまたはマッピングをカスタマイズすることができます。</p>	
<b>エラー</b>	<p>SiteScope および HPOM/BSM サーバの各モニタ・インスタンスのエラー状態のしきい値間のマッピング。</p> <p><b>標準設定値：</b> 危険域</p>
<b>注意域</b>	<p>SiteScope および HPOM/BSM サーバの各モニタ・インスタンスの警告状態のしきい値間のマッピング。</p> <p><b>標準設定値：</b> 警戒域</p>
<b>良好</b>	<p>SiteScope および HPOM/BSM サーバの各モニタ・インスタンスの正常状態のしきい値間のマッピング。</p> <p><b>標準設定値：</b> 正常域</p>
<b>利用不可</b>	<p>SiteScope および HPOM/BSM サーバの各モニタ・インスタンスの利用不可状態のしきい値間のマッピング。</p>



UI 要素	詳細
	<b>標準設定値</b> : 不明
<b>標準重大度を使用します</b>	<p>選択されると、標準設定のマッピングは次の場合に送信されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>トリガされた警告によって作成されたイベント。</li> <li>SiteScope が BSM に接続されていない時。</li> <li>インジケータの状態と重大度の値が欠落している場合。たとえば、定義済みのトポロジを持たないモニタの使用時。</li> </ul> <p><b>注</b> :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope が BSM に接続される時（またグローバルな重大度マッピングの標準設定が送信できない）、このオプションは使用できません。</li> <li>標準設定で、警告状態は軽微（警告ではない）にマップされます。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>

## HP Operations Manager 測定値統合

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>HP Operations Manager 測定値統合の有効化</b>	<p>HPOM および BSM レポート製品がデータの収集元として使用できる HP Operations Agent に対して、SiteScope から測定値をレポートできます。</p> <p><b>注</b> : モニタ・プロパティ（<b>[HP 統合設定]</b> &gt; <b>[HP Operations Manager 統合設定]</b>）で <b>[HP Operations Agent へのメトリックのレポート]</b> を選択して、HP Operations Agent にデータを送信する各モニタ・インスタンスを有効にする必要があります。詳細については、<a href="#">「HP 統合設定」(303ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>
<b>新規モニタのメトリック・レポートの有効化</b>	<p>新規作成されたすべてのモニタのメトリックを HP Operations Agent に報告するように SiteScope を有効化します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>

UI 要素	詳細
特定モニタのメトリック レポートの有効化	すべての既存のメモリ、CPU、ディスク領域、Windows リソース・モニタに対して、各モニタ・インスタンスのモニタ・プロパティで <b>[HP Operations Agent へのメトリックのレポート]</b> を選択することなく、自動的に測定値のレポートを有効にします。

## 一般データ統合プリファレンス

一般統合を使用して、直接統合が存在しないアプリケーションにデータ（メトリック）を転送する新しい一般データの統合を作成します。アプリケーションは SiteScope が転送する XML ファイルを受信できる必要があります。これらのファイルには、SiteScope のグループ、モニタ、測定値の状態に関する情報が含まれています。

### アクセス方法

【プリファレンス】 > 【統合プリファレンス】を選択します。【統合プリファレンス】ページで次を実行します。

- ・【新規統合】ボタンをクリックし、【データ統合】を選択する。
- ・または、既存のデータ統合を選択して【統合の編集】ボタンをクリックする。

**注:** 統合プリファレンスを表示するには、SiteScope の管理者であるか、「**統合プリファレンスの表示**」権限が付与されたユーザである必要があります。統合プリファレンスを作成または編集するには、「**統合プリファレンスの編集**」権限が必要です。このトピックの詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」\(744ページ\)](#)を参照してください。

## 学習事項

### HTTP 要求を使用したデータの配信

受信側のアプリケーションは、SiteScope からのデータを受信できるようになっている必要があります。つまり、アプリケーションは SiteScope サーバからの HTTP 要求を受信し、受信した XML ファイルを復号化できる必要があります。

HTTP 要求には次のヘッダが含まれています。

Content-Type : text/xml

XML ファイルの内容を zip 圧縮するように選択した場合、HTTP 要求には次のヘッダが含まれます。

Content-Type : text/xml

Content-Encoding : gzip

データを zip 圧縮するかどうかは、SiteScope に統合を作成するときに [データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックスで選択します。データを zip 圧縮するように選択した場合、SiteScope が送信したファイルをアプリケーションで展開する必要があります。

時刻同期

SiteScope が時刻同期 XML ファイルを個別に転送できるようにして、SiteScope サーバの時刻をアプリケーションのサーバと同期できます。このファイルは、SiteScope での統合作成時に [データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックスの [時刻同期の間隔] フィールドで選択した間隔で、データ XML と同じように送信されます。このフィールドに値を入力すると、SiteScope はサーバの日付スタンプを、指定した間隔でデータを受信するアプリケーションに転送します。このオプションの詳細については、次の [データ統合プリファレンスの設定] の [時刻同期の間隔 (分)] フィールドを参照してください。この XML ファイルの内容の詳細については、[「一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報」 \(704ページ\)](#)を参照してください。

UI の説明

データ統合 - 一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	SiteScope インタフェースでこの統合の識別に使用する名前。 <b>注 :</b> このフィールドは必須です。
詳細	統合の詳細。これには、SiteScope からのデータを受信するアプリケーションに関する情報が含まれる場合があります。この詳細は、SiteScope の [統合プリファレンス] ページにのみ表示されます。

データ統合 - プリファレンスの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
受信者 URL	SiteScope データを受信するアプリケーション・サーバの URL。これは、サーバ、ポート、パスを含む完全な URL である必要があります。  セキュリティ保護された接続 (SSL) の場合、「https」と入力します。 <b>構文 :</b> http または https://<受信サーバの完全修飾名>:<ポート番号受信データ>/<path>

UI 要素	詳細
エンコーディング	受信側のアプリケーションが使用するエンコーディング。 <b>標準設定値</b> : UTF-8
レポート間隔 (秒)	データの送信を終了してからSiteScope次にデータの送信を開始するSiteScopeまでの時間間隔 (秒単位)。 <b>標準設定値</b> :60 秒
時刻同期の間隔 (分)	SiteScope サーバと SiteScope データを受信するサーバの時刻を同期化するために、SiteScope ではサーバに登録されている時刻を定期的に報告できます。受信側のサーバは、SiteScope から送信されたデータ・サンプルの時刻を自分のサーバの時刻と同期化し、SiteScope データとアプリケーション自身のデータの時刻が一致するようにします。  SiteScope が、SiteScope サーバの時刻を SiteScope のデータを受信するサーバに報告する間隔を分単位で選択します。 <b>標準設定値</b> :10 分
GZIP 圧縮	受信側のサーバに送信するサンプル・データを圧縮します。データが圧縮されていると、データ送信にかかる時間が短縮されるためパフォーマンスが向上します。送信するデータの量と受信側のアプリケーションが圧縮データを処理できるかどうかに応じて、このフィールドを選択またはクリアします。 <b>標準設定値</b> :選択されていない
追加のデータを含める	クリアすると、SiteScope によって次の SiteScope オブジェクトの状態が報告されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ グループ</li> <li>・ モニタ</li> <li>・ カウンタ</li> </ul> 選択した場合、これらのオブジェクトの状態が、各オブジェクトの説明を含む状態文字列と一緒に報告されます。 <b>標準設定値</b> :選択されていない <b>ヒント</b> :追加データを含めるとパフォーマンスが低下し、状態文字列は標準設定で送信される状態データを繰り返すため、含めないことをお勧めします。
リダイレクトでエラー	接続先 URL がリダイレクトされると、SiteScope からエラーが返されます。 <b>標準設定値</b> :選択されていない

UI 要素	詳細
要求タイムアウト (秒)	サーバとの接続が確立されるまでのタイムアウト (秒単位)。値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。 標準設定値 :120 秒
接続タイムアウト (秒)	データを待機するソケットのタイムアウト (秒単位)。タイムアウト値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。 標準設定値 :120 秒
再試行回数	SiteScope が接続の確立を試みる回数。 標準設定値 : 3
要求された場合の認証	SiteScope は、要求された場合、ユーザ名およびパスワードの資格情報を送信します。クリアすると、SiteScope は資格情報を転送しません。 標準設定値 :選択されている
統合を無効にする	SiteScope は、データをサーバに転送しません。統合プリファレンス設定はそのまま残ります。統合を一時的に無効にする場合に使用します。 標準設定値 :選択されていない

データ統合 - Web サーバのセキュリティ設定  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
認証ユーザ名	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするユーザ名。
認証パスワード	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするパスワード。

データ統合 - プロキシ・サーバ設定  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細

UI 要素	詳細
アドレス	プロキシ・サーバ・アドレス（必要な場合）。
ユーザ名	プロキシ・サーバのユーザ名。
パスワード	指定したサーバのパスワード。

## データ統合 - レポート・タグ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<b>&lt;タグ名と値&gt;</b>	<p>SiteScope では、ここで選択したタグを使用して受信側のアプリケーションに転送するデータを決定します。統合ごとに少なくとも 1 つのタグを選択する必要があります。受信側のアプリケーションにデータを転送するグループ、サブグループ、モニタについても同じタグを選択する必要があります。</p> <p>オブジェクトに対して統合タグを選択すると、そのタグがオブジェクトの子に伝搬されます。この統合タグでグループにタグ付けすると、そのすべてのサブグループとモニタが状態を受信側のアプリケーションに報告します。</p> <p><b>例：</b>Integration_metricsというタグを作成して、ここで選択します。受信側のアプリケーションに状態を報告する各グループ、モニタ、または両方に、オブジェクトの <b>【タグの検索/フィルタ】</b> 設定でこのタグを選択します。</p> <p><b>注：</b>統合プリファレンスごとに複数のタグを選択できます。報告するオブジェクトに対して複数の統合タグを選択できます。</p>
<b>タグの追加</b>	<p>【新規タグ】ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「【新規タグ】 / 【タグの編集】ダイアログ・ボックス」(87ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>ヒント：</b>統合タグの作成時には単語Integration_&lt;integration identifier&gt;を使用します。これは、このタグは、SiteScope用に作成されるその他のすべての検索 / フィルタ・タグとともに表示されるためです。これにより、グループまたはモニタのどちらの統合を有効にするかを選択するためのタグを識別することができます。</p>

## 一般イベント統合プリファレンス設定

一般イベント統合を使用して、直接統合が存在しないサードパーティのアプリケーションまたは管理コンソールに SiteScope イベントを転送する新しい一般イベント統合を作成します。送信されたイベントには、イベントをトリガした状態の変更など、モニタとその測定値に関する情報が含まれています。

SiteScope では、HTTP ベースのネットワーク管理システムとの統合および管理コンソールへの汎用イベントの送信に SiteScope HTTP 受信者を使用します。

### アクセス方法

【**プリファレンス**】 > 【**統合プリファレンス**】を選択します。【統合プリファレンス】ページで次を実行します。

- ・【**新規統合**】ボタンをクリックして【**一般イベント統合**】を選択する。
- ・既存の一般イベント統合を選択して【**統合の編集**】ボタンをクリックする。

**注:** 統合プリファレンスを表示するには、SiteScope の管理者であるか、「**統合プリファレンスの表示**」権限が付与されたユーザである必要があります。統合プリファレンスを作成または編集するには、「**統合プリファレンスの編集**」権限が必要です。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

## 学習事項

### 汎用イベントの形式

サードパーティ製のアプリケーションまたは管理コンソールに転送されるイベント属性の形式は、イベント・マッピング・テンプレートを使用して決定されます。このテンプレートでは、イベントのトリガ時に送信されるイベント属性値に SiteScope ランタイム・データをマッピングします。汎用イベント統合では、カスタム属性との共通イベント・マッピングを使用します。イベント・マッピングの詳細については、「[共通イベント・マッピング](#)」(556ページ)を参照してください。

### 複数のターゲット宛先

汎用イベント統合を使用すると、複数のイベント統合を設定できます。これは、HPOM 管理サーバへの統合または BSM の操作管理への統合のいずれか 1 つのみをサポートする Operations Manager 統合とは異なります。

### HTTP 要求を使用した配信

受信側のアプリケーションは、SiteScope からのイベントを受信できるようになっている必要があります。つまり、アプリケーションは SiteScope サーバからの HTTP 要求を受信し、受信した XML を HTTP 応答を通じて復号化する必要があります。HTTP コネクタと通信するために SiteScope で必要とする設定は、【新しい HTTP 受信者】または【HTTP 受信者の編集】ダイアログ・ボックスで設定

します

HTTP 要求（イベントを送信する）には次のヘッダが含まれています。

Content-Type : text/xml

XML ファイルの内容を zip 圧縮するように選択した場合、HTTP 要求には次のヘッダが含まれます。

Content-Type : text/xml

Content-Encoding : gzip

イベントを zip 圧縮するかどうかは、SiteScope に統合を作成するときに [一般イベント統合プリファレンス] ダイアログ・ボックスで選択します。イベントを zip 圧縮するように選択した場合、SiteScope が送信したファイルをアプリケーションで展開できる必要があります。

## 保証付きイベント配信のサポート

汎用イベント統合では、保証付きイベント配信をサポートしています。つまり、SiteScope でイベントを送信できない場合（ネットワークに問題がある、受信者に接続できないなど）、SiteScope では、イベントの再送信を試行するか、後で送信するためにイベントを保存します。これにより、イベントを最初に宛先に配信できない場合の情報の損失が防止されます。

**【プリファレンス】 > 【インフラストラクチャ プリファレンス】 > 【カスタム設定】** または **< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config** ファイルで保証付きイベント配信設定を変更できます。

- **一般イベント統合の zip へのデータ保存** : .zip ファイルとしてデータをキャッシュに保存するかどうかを示します。
- **一般イベント統合のキャッシュ・ファイル再送信の間隔（分）** : キャッシュ・ファイルの再送信間隔の間隔。
- **一般イベント統合の削除対象ファイル数** : キャッシュ・ホルダが最大サイズに達すると、SiteScope は指定された数のファイルをキャッシュから削除します。
- **一般イベント統合の最大キャッシュ サイズ（MB）** : SiteScope がキャッシュからファイルを削除するまでのキャッシュの最大サイズ（メガバイト単位）。

これらの設定の詳細については、[「カスタム設定」\(663ページ\)](#)の上記のプロパティを参照してください。

## タスク

### SiteScope 一般イベント統合の設定方法

このタスクでは、サードパーティ・アプリケーションまたは管理コンソールにイベントが転送できるように、SiteScope を設定する手順について説明します。これらのファイルには、SiteScope のグループ、モニタ、測定値の状態に関する情報が含まれています。

#### 1. 前提条件

SiteScope の管理者になっているか次のユーザ権限を持つ必要があります。



- ・ **共通イベント・マッピングを追加、編集、削除**： イベント・マッピングの作成または変更が必要です。
- ・ **電子メール、ページャ、HTTP および SNMP のプリファレンスを追加、編集、削除**： HTTP プリファレンスの変更が必要です。

ユーザ権限の詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」\(744ページ\)](#)を参照してください。

## 2. HTTP のプリファレンスの設定

**【プリファレンス】 > 【統合プリファレンス】 > 【HTTP プリファレンス】**を選択します。そして、SiteScope でイベントまたはデータを管理コンソールに送信するときに使用する HTTP 設定を設定します。この場合、イベントまたはデータをエンドポイント URL に送信するために SiteScope で使用される HTTP 受信者を作成する必要があります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「【新規 HTTP 受信者】 / 【HTTP 受信者の編集】 ダイアログ・ボックス」\(604ページ\)](#)を参照してください。

## 3. 一般イベント統合を設定します。

**【プリファレンス】 > 【統合プリファレンス】**を選択し、**【新規統合】**をクリックした後**【一般イベント統合】**を選択します。

- a. **【一般設定】** パネルで統合の名前と詳細を入力します。
- b. **【一般イベント統合プリファレンス】** パネルで、イベント受信用のコネクタ・インタフェースを選択します。
- c. **【レポート タグ】** パネルで、レポート・タグを選択します（これは後述の手順 5 で使用）。SiteScope はこれを使用して、メトリック状態の変更によってイベントがトリガされたとき、どのタグがこの設定された統合を報告するかを決めます。このタグのあるすべてのモニタは、この統合経由でイベントを報告します。

統合ごとに少なくとも1つのタグを選択する必要があります。

これらの設定の詳細については、下記の「UI の説明」の項を参照してください。

## 4. モニタ・インスタンスの設定およびイベント・マッピングの選択

モニタ・インスタンスを設定します。モニタ・プロパティの**【イベント マッピング設定】**パネルで、イベント・マッピング・テンプレートを選択するか、新規イベント・マッピングを作成します。このテンプレートには、SiteScope 実行時データとイベント送信に使用される属性値の間のマッピングが含まれます。イベントは、メトリック・ステータスの変更イベントがトリガされたとき管理コンソールに送信されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「【新規イベントマッピング】 / 【イベントマッピングの編集】 ダイアログ・ボックス」\(560ページ\)](#)を参照してください。

CDA（Continuous Delivery Automation）との統合時に HP CDA イベント・マッピング・テンプレートを使用できます。CDA とは、ハイブリッド・クラウド環境でインフラストラクチャ・プロビジョニングを可能にするポリシー・ベースのプラットフォームのことです。CDA は SiteScope と統合して SiteScope モニタをデプロイし、そのモニタからイベントを受け取ります。CDA ユーザ・インタフェースでは、受け取ったイベントを基にして状態を監視できます。

**注:** イベント・マッピング・リストを使用できるのは、SiteScope が HPOM 統合され、イベント統合が有効にされている場合か、または、[一般イベント統合] が [プリファレンス] で設定された場合だけです。「**共通イベント・マッピングを追加、編集、または削除します**」権限がある場合、このリストを編集できます。

#### 5. モニタのレポート・タグの選択

モニタ・プロパティの [タグの検索/フィルタ] パネルで、メトリック・ステータスの変更イベントをトリガする各モニタ・インスタンス用のレポート・タグ (手順 3c で選択されている) を 1 つ以上選択します。SiteScope では、選択したタグを使用して、メトリクス状態変更イベントがトリガされたときに受信側アプリケーションに転送するデータを決定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「タグの検索 / フィルタ」\(320ページ\)](#)を参照してください。

#### 6. 保証付きイベント配信設定の設定 (任意指定)

SiteScope がイベントを送信できない場合 (たとえば、ネットワークの問題があったり、受信者がダウンしている場合など)、SiteScope はイベントの送信を再試行するか、今後の送信のためにイベントを保存します。

[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [カスタム設定] で、次の設定を使用して、保証付きイベント配信設定の値を決めることができます。

- **一般イベント統合の zip へのデータ保存:** .zip ファイルとしてデータをキャッシュに保存するかどうかを示します。
- **一般イベント統合のキャッシュ・ファイル再送信の間隔 (分):** キャッシュ・ファイルの再送信間隔の間隔。
- **一般イベント統合の削除対象ファイル数:** キャッシュ・ホルダが最大サイズに達すると、SiteScope は指定された数のファイルをキャッシュから削除します。
- **一般イベント統合の最大キャッシュ サイズ (MB):** SiteScope がキャッシュからファイルを削除するまでのキャッシュの最大サイズ (メガバイト単位)。

これらの設定の詳細については、[「カスタム設定」\(663ページ\)](#)を参照してください。

#### 7. 結果とトラブルシューティング

モニタの測定値状態に変更があると、イベント・マッピング・テンプレートの形式に基づいてイベントが作成されます。イベントはコネクタ・インスタンスに送信されます (これは、すべての HTTP メッセージを受信するアプリケーションのエンドポイント URL です)。

送信が成功したイベントの詳細は、`generic_event_integration.log` ファイルに表示されます (このファイルは [サーバ統計情報] > [ログ ファイル] から利用可能)。

イベント・エラー・データは `error.log` ファイルに書き込まれます。このファイルは <SiteScope ルート・ディレクトリ>\logs ディレクトリにあります。

エラーが発生した場合は、SiteScope で <SiteScope ルート・ディレクトリ>\conf\core\Tools\log4j\PlainJava\log4j.properties.debug ファイルをデバッグ・モードで開きま

す。そして、一般イベント統合文字列を <SiteScope ルート・ディレクトリ>\conf\core\Tools\log4j\PlainJava\log4j.properties ファイルにコピーします。

## UI の説明

### 一般イベント統合 - 一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	SiteScope インタフェースでこの統合の識別に使用する名前。 <b>注 :</b> このフィールドは必須です。
詳細	統合の詳細。これには、SiteScope からのデータを受信するアプリケーションに関する情報が含まれる場合があります。この詳細は、SiteScope の [統合プリファレンス] ページにのみ表示されます。

### 一般イベント統合 - プリファレンス設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
コネクタ	イベントの受信に使用されるターゲット・インスタンス。【プリファレンス】>【HTTP プリファレンス】で設定されているコネクタのリストから選択します。詳細については、「 <a href="#">[HTTP プリファレンス] ページ</a> 」(603ページ)を参照してください。
統合を無効にする	統合を無効にし、イベントは受信者に送信されません。この統合の設定は保持され、統合が有効にされると再度使用することができます。 <b>標準設定値 :</b> 選択されていない
GZIP 圧縮	受信側サーバに送信する前にイベントを圧縮します。データ送信時間が短縮するため、データを圧縮するとパフォーマンスが向上します。このオプションの使用方法は、送信対象となるデータの量と、受信側アプリケーションが圧縮データを処理できるかどうかに依存します。 <b>標準設定値 :</b> 選択されていない

一般イベント統合 - レポート・タグ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されま  
す）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>タグは、イベントをトリガするモニタ・インスタンスを、特定のイベント統合 に関連付けることに使用されます。このタグのあるすべてのモニタは、この統 合経由でイベントを報告します。</p> <p>SiteScope では、ここで選択したタグを使用して受信側アプリケーションに転 送するイベントを決定します。統合ごとに少なくとも 1 つのタグを選択する必 要があります。</p> <p><b>例：</b>Integration_events というタグを作成して、ここで選択します。受信側アプ リケーションに報告する各モニタ・インスタンスに対して <b>【タグの検索/フィ ルタ】</b> 設定で、このタグを選択します。</p> <p><b>【タグの検索/フィルタ】</b> では、メトリクス状態変更イベントをトリガする際 の各モニタ・インスタンスに1つまたは複数の報告タグを選択します。</p> <p>SiteScope では、選択したタグを使用して、メトリクス状態変更イベントがト リガされたときに受信側アプリケーションに転送するデータを決定します。</p> <p><b>注：</b>統合プリファレンスごとに複数のタグを選択できます。報告するオブジェ クトに対して複数の統合タグを選択できます。</p>
タグの追加	<p><b>【新規タグ】</b> ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加で きる。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「【新規タグ】 / 【タグの 編集】 ダイアログ・ボックス」 (87ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>ヒント：</b>統合タグの作成時には単語Integration_&lt;integration identifier&gt;を使用し ます。これは、このタグは、SiteScope用に作成されるその他のすべての検索/ フィルタ・タグとともに表示されるためです。これにより、グループまたはモ ニタのどちらの統合を有効にするかを選択するためのタグを識別することがで きます。</p>

一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの  
参照情報

SiteScope で一般データまたは Diagnostics の統合のデータを転送するときには、XML ファイルが使用  
されます。この XML ファイルの要素と属性について次に説明します。統合の作成の詳細について  
は、[「一般データ統合プリファレンス」 \(694ページ\)](#)および [「Diagnostics 統合プリファレンス」 \(681  
ページ\)](#)を参照してください。

## 本項の内容

- [「データの XML 要素および属性表」 \(705ページ\)](#)
- [「時刻同期 XML」 \(707ページ\)](#)

## データの XML 要素および属性表

親要素	要素の説明	属性	詳細
パフォーマンス・モニタ	XML の親要素。 この要素内のすべての group 要素を含む。	collectorHost collector	SiteScope ホスト  データを収集するアプリケーション（常に SiteScope）
group	SiteScope グループを表す。group および monitor 要素の親要素。	name	ユーザによって定義されたグループ名
		desc（任意指定）	グループの詳細（入力されている場合）
		previousName（任意指定）	グループの以前の名前（ある場合）
monitor	SiteScope モニタを表す。counter 要素の親要素。	type	モニタ・タイプ（[新規モニタ] ダイアログ・ボックスに表示される）
		name	ユーザによって定義されたモニタ名
		target	監視対象のリモート・サーバ
		targetIP	監視されるリモート・サーバの IP アドレス
		time	測定の時刻
		quality	モニタのしきい値によって判断される状態  利用可能な値： <ul style="list-style-type: none"> <li>• 0: データなし（しきい値が定義されていない）</li> <li>• 1: 情報（正常）</li> </ul>

親要素	要素の説明	属性	詳細
			<ul style="list-style-type: none"> <li>2: 警告</li> <li>3: 危険域</li> </ul>
		previousName (任意指定)	モニタの以前の名前 (ある場合)
		desc (任意指定)	モニタの詳細 (入力されている場合)
		sourceTemplateName	モニタがテンプレートまたはソリューション・テンプレートから作成された場合のソース・テンプレート名
		statusDesc	この属性は入力されなくなりました。これは後方互換のためのみに利用されます。
カウンタ	モニタによって収集された測定値を表す。	name	カウンタ名
		value	カウンタ値
		quality	カウンタのしきい値によって判断されるカウンタの状態  利用可能な値: <ul style="list-style-type: none"> <li>0: データなし (しきい値が定義されていない)</li> <li>1: 情報 (正常)</li> <li>2: 警告</li> <li>3: 危険域</li> </ul>
		desc (任意指定)	モニタの詳細 (入力されている場合)
		status (任意指定)	この属性の値が0と表示される場合、カウンタは使用できない。カウンタが利用可能な場合、この属性は SiteScope から送信されず、XML には含まれない。

親要素	要素の説明	属性	詳細
			<b>利用可能な値</b> :0: カウンタは使用できない
		units (任意指定)	カウンタの測定値の単位 (関連する場合)


## 時刻同期 XML

データ統合を作成するときに **時刻同期の間隔** フィールドに値を入力すると、SiteScope サーバの時刻と受信側アプリケーションの時刻を同期化するために、SiteScope によってこの XML が送信されます。

親要素	要素の説明	属性	属性の説明
performanceMonitors	XML の親要素。	collectorHost	SiteScope ホスト
		collector	データを収集するアプリケーション (常に SiteScope)
timeStamp	SiteScope サーバの時刻を提供します。	timestamp	タイムスタンプ。1970 年 1 月 1 日から経過した秒数として計算されます。





## [統合プリファレンス] ページ

このページでは、SiteScope を BSM、HPOM、Diagnostics などのアプリケーションに統合する場合に設定を行うことができます。


<b>アクセス方法</b>	<p>[<a href="#">プリファレンス</a>] &gt; [<a href="#">統合プリファレンス</a>] を選択します。</p> <p>設定する統合プリファレンスのタイプを選択できる [<a href="#">統合プリファレンスのタイプ</a>] ダイアログ・ボックスを開くには、[<a href="#">新規統合</a>]  ボタンをクリックします。</p>
<b>重要な情報</b>	<p>SiteScope の管理者、または「<a href="#">統合プリファレンスの編集</a>」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、「<a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a>」(<a href="#">744ページ</a>)を参照してください。</p>
<b>関連タスク</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">BSM と通信するための SiteScope の設定方法</a>」(<a href="#">228ページ</a>)</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法</a>」(676ページ)</li> </ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">統合プリファレンス</a>」(669ページ)</li> <li>「<a href="#">BSM サーバとの接続</a>」(216ページ)</li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>新規統合</b> :SiteScope の新規統合を作成します。
	<p><b>統合の編集</b> :SiteScope の既存の統合を編集できます。選択した統合タイプに応じた統合の編集ダイアログ・ボックスが開きます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>Amazon CloudWatch 統合</b> :AWS によってホストされているアプリケーションの監視に SiteScope を使用しているユーザが、任意の SiteScope 測定値を Amazon CloudWatch サービスに報告できるようにします。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">Amazon CloudWatch 統合プリファレンス</a>」(669ページ)を参照してください。</li> <li><b>BSM 統合</b> :SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するために使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">BSM 統合プリファレンス</a>」(674ページ)を参照してください。</li> <li><b>データ統合</b> :一般データの統合を作成するために使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">一般データ統合プリファレンス</a>」(694ページ)を参照してください。</li> <li><b>Diagnostics 統合</b> :Diagnostics 統合を作成するために使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">Diagnostics 統合プリファレンス</a>」(681ページ)を参照してください。</li> <li><b>HP Operations Manager 統合</b> :イベントとレポート・メトリックを HPOM サーバおよび BSM サーバに送信するように SiteScope を設定する場合に使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">HP Operations Manager 統合プリファレンス</a>」(687ページ)を参照してください。</li> <li><b>一般イベント統合</b> :Diagnostics 統合を作成するために使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">一般イベント統合プリファレンス設定</a>」(699ページ)を参照してください。</li> </ul>
	<b>統合の削除</b> :[統合プリファレンス] から選択した統合を削除します。
	<b>すべて選択</b> :表示されたすべての統合を選択します。



UI 要素	詳細
	<b>選択を解除</b> :選択を解除します。
<b>SiteScope のデタッチ</b>	<p>(ショートカット・メニューからのみ利用可能) SiteScope を LoadRunner 統合からデタッチします。この操作で、現在の LoadRunner 統合を SiteScope 側から削除できます。SiteScope がアタッチされている場合は、モニタを LoadRunner ユーザ・インタフェースから定義できます。</p> <p><b>注</b> :これは、SiteScope が LoadRunner と統合されている場合にのみ使用できます。</p>
<b>統合名</b>	新規統合プリファレンスの作成時に統合に割り当てられる名前の文字列。
<b>統合の詳細</b>	統合プリファレンスの作成時または編集時に割り当てられた統合の詳細。

## 第53章: ログ・プリファレンス

このページでは、SiteScope ログ・プリファレンスを設定できます。システム可用性を効果的に監視するには、必要な間隔の間、監視データを記録して保存する必要があります。SiteScope ログ・プリファレンスでは、監視データの蓄積と保存を制御します。

### アクセス方法

[**プリファレンス**] > [**ログ プリファレンス**] を選択します。

#### 注:

- ログ・プリファレンスを作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「**ログ・プリファレンスの編集**」権限を付与されたユーザである必要があります。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。
- ログ・プリファレンスの変更は、SiteScope を再起動しないと反映されません。

## 学習事項

### 本項の内容

- 「[ログ・プリファレンスの概要](#)」(710ページ)
- 「[SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造](#)」(711ページ)

### ログ・プリファレンスの概要

ログ・プリファレンスを使用すると、SiteScope サーバに蓄積して保持する監視データの量を選択できます。また、監視データを外部データベースにエクスポートするように SiteScope を設定できます。

標準設定では、SiteScope はモニタ結果、警告データ、エラー・データや、モニタから返されたその他の測定値をログ・ファイルに保存します。監視データの結果の場合、日付が記述されたログ・ファイルが24時間の監視期間ごとに作成されます。このデータはタブ区切りテキストとして保存されます。SiteScope はこのログ・ファイルを使用して、時間の経過に伴うシステムの可用性とパフォーマンスの管理レポートを作成します。

データ・ログを長期間保存していると問題が生じる場合があります。ただし、ログ・ファイルを保持する日数やデータ・ログ・ファイルの最大サイズを設定することで、SiteScope がローカル・ファイル・システムに保存するログ情報の量を制限できます。外部データベース・アプリケーションに監視データを送信することもできます。これにより SiteScope サーバで必要なデータ・ストレージ容量を削減でき、監視データをほかのレポート・ツールでも使用できるようになります。

**注:** SiteScope 管理レポートを作成するには、必要なレポート期間の監視ログ情報が SiteScope

サーバのファイル・システムで使用する必要があります。管理レポートの作成の詳細については、「[管理レポート](#)」(1343ページ)を参照してください。

## SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造

データベース・ログインが有効な場合、監視データは **SiteScopeLog** という 1 つのテーブルに格納されます。各データベース・レコードの先頭 9 フィールドは、すべてのモニタで同じです。次の 10 フィールドには、データを提供するモニタの種類に応じて異なる測定値が含まれます。テーブルのすべてのフィールドは、VARCHAR(255) データ型を使用します。ログ・データベース・レコードのフィールド説明とその標準設定のフィールド名を、次の表に示します。

フィールド名	データ例	詳細
datex	1999-01-20 11:54:54	第 1 フィールドには、モニタを実行した日付が含まれます。
サーバ名	demo.sitescope.com	第 2 フィールドには、SiteScope を実行しているサーバの名前が含まれます。
class	URLMonitor	第 3 フィールドには、モニタのタイプが含まれます。
sample	23	第 4 フィールドには、このモニタのサンプル数が含まれます。
category	正常	第 5 フィールドには、モニタのカテゴリ名が含まれます。
groupName	URL	第 6 フィールドには、モニタのグループ名が含まれます。
monitorName	ホーム・ページ	第 7 フィールドには、モニタの名前が含まれます。
状態	1.01 秒	第 8 フィールドには、モニタの状態が含まれます。
monitorID	10	第 9 フィールドには、モニタの ID が含まれます。
value1, value2, ... value10	(変数)	第 10 から第 19 フィールドには、[Log Columns] ページで記述したモニタ固有のデータが含まれます（「 <a href="#">モニタ固有のログ列の内容</a> 」(1185ページ)を参照してください）。最初の変数フィールド（value1）が、ログ・ファイルの列 7 に表示される値に対応します。

フィールド名	データ例	詳細
		注: フィールド名は, SiteScope モニタ設定に応じて動的に変わります。データベースに記録されるデータについてフィールド名のリストを手動で生成するには, <a href="#">「データベースにログ記録されるデータのフィールド名の生成方法」(712ページ)</a> を参照してください。

データベース・ログ記録に使用する SQL ステートメントを変更するには, **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config** ファイルのパラメータ `_logJdbcInsertSiteScopeLog=` を編集します。insert ステートメントを call ステートメントに置き換えると, ストアド・プロシージャを呼び出せます。たとえば, `call logit(?,?,?)` は, `logit` というストアド・プロシージャを呼び出して, 最初の 3 つのパラメータを渡します。

## タスク

データベースにログ記録されるデータのフィールド名の生成方法

モニタのフィールド名は SiteScope モニタ設定に応じて動的に変化するため, データベースに書き込んではいけません。

**ヒント:** [「モニタ固有のログ列の内容」\(1185ページ\)](#)の静的モニタ・フィールドのリストを確認します。

このタスクでは, フィールド名を手動で生成する手順について説明します。

### 1. Tomcat サーバが使用しているポートのチェック

**< SiteScope のルート・ディレクトリ > \Tomcat\conf\server.xml** を開いて文字列 **<Connector port=** を検索し, このバージョンの Tomcat が使用しているポートを判別します。

### 2. 新規一般データ統合の作成

SiteScope で, **[プリファレンス] > [統合プリファレンス]** を選択し, **[新規統合]** ボタンをクリックして **[データ統合]** を選択します。 [「一般データ統合プリファレンス」\(694ページ\)](#)の説明に従って, 新規データ統合を作成します。

- [データ統合プリファレンスの設定]** パネルで, **[受信者 URL]** ボックスに, Tomcat サーバの URL を入力して, 前の手順から同じポート番号を使用します。(次の URL 形式を使用します。 `http:// <Tomcat サーバ> : <データを受信するポート番号> / <受信者パス>`。  
ここで, **<受信者パス>** は, **<Tomcat のルート・ディレクトリ> \webapps** フォルダ下でサンプルを取得する場所です。
- [レポートタグ]** パネルで, 統合のタグ名と値を追加し, それをタグ・ツリーで選択します。

### 3. モニタのレポート・タグの選択

カウンタ名が必要な各関連モニタの [タグの検索/フィルタ] パネルで、前の手順で追加したのと同じレポート・タグを選択します。SiteScope では、選択したタグを使用して受信側のアプリケーションに転送するデータを決定します。

4. モニタの実行

カウンタ名が必要なモニタを実行します。

5. 結果

モニタが実行されると、SiteScope では、列名と値が XML 形式で Tomcat サーバに転送されます。この XML ファイルは、<Tomcat のルート・ディレクトリ>\webapps フォルダにあり、パスは手順 2a で指定したパスです。

例：

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" standalone="yes"?>
<performanceMonitors collectorHost="JBROWN" collector="SiteScope">
  <group desc="" name="g">
    <monitor quality="1" time="1321445972863" targetIP="16.53.61.95" target="My_Lab_Machine" type="Memory"
      previousName="Memory on My_Lab_Machine" name="Memory on My_Lab_Machine">
      <counter quality="0" value="0" name="percent used"/>
      <counter quality="0" value="3953" name="MB free"/>
      <counter quality="0" value="0.0" name="pages/sec"/>
      <counter quality="1" value="0" name="swap space used %"/>
      <counter quality="0" value="3953" name="swap space MB free"/>
      <counter quality="0" value="16" name="physical memory used %"/>
      <counter quality="0" value="3390" name="physical memory MB free"/>
    </monitor>
  </group>
</performanceMonitors>
```

UI の説明

SiteScope ログ・ファイル・プリファレンス

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
日次ログ保存日数	監視データを保持する日次ログ・ファイルの数。SiteScope では、1 日に 1 回、保持するよう指定した数を超えて作成されたログを削除します。  標準設定値：40  注： <ul style="list-style-type: none"><li>指定したログ数または最大ログ・サイズに関係なく、常に最新の 2 つのログ（当日分と前日分）が保持されます。</li><li>長期間監視データ・ログを保持すると、設定したモニタの総数や 1 日あたり</li></ul>

UI 要素	詳細
	<p>のモニタ実行頻度によっては、SiteScope サーバでデータ・ストレージ上の問題が発生することがあります。 &lt; <b>SiteScope のルート・ディレクトリ</b> &gt; \logs ディレクトリにあるログ・ファイルのサイズを監視して、データ蓄積速度を見積り、必要に応じてこの設定やサーバ・リソースを調整する必要があります。</p>
<b>ログ サイズの上限 (MB)</b>	<p>すべての監視ログの最大サイズ。SiteScope では、1 日に 1 回、すべての監視ログの合計サイズをチェックし、最大サイズを超えた古いログがあれば削除します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 0 (ログ・サイズをチェックしない)</p>
<b>モニタのセパレート・ログを無効化</b>	<p>このオプションを選択すると、モニタのログ・データはモニタ専用のログ・ファイルには送信されませんが、汎用のログ・ファイル (<b>error.log</b> や <b>RunMonitor.log</b> など) には送信され、他のすべてのモニタのログ・データといっしょに格納されます。詳細については、<a href="#">「ログ設定」(322ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>

## データベースログ記録プリファレンス

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>データベース接続 URL</b>	<p>データベース接続への URL。データベース接続を作成する最も簡単な方法は、ODBC を使用してデータベースへの名前付き接続を作成する方法です。</p> <p><b>例</b> : 最初に、ODBC コントロール・パネルを使用して SiteScopeLog という接続を作成します。次に、接続 URL として「jdbc:odbc:SiteScopeLog」と入力します。</p> <p><b>Windows 認証使用時の注意事項</b> : Windows 認証を使用してデータベースにアクセスする場合は、次のように入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>データベース接続 URL</b> : jdbc:mercury:sqlserver://&lt;server name or IP address&gt;:1433;DatabaseName=&lt;database name&gt;;AuthenticationMethod=type2</li> <li>・ <b>データベース ドライバ</b> : com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver</li> <li>・ <b>データベース・ユーザ名 / データベース・パスワード</b> : SiteScope サービスの実行元であるアカウントの Windows ユーザの資格情報を使用してデータベ</li> </ul>

UI 要素	詳細
	スへの接続が確立されるように、これらのボックスは空のままにします。
データベース ドライバ	<p>SiteScope でデータベースへの接続に使用するデータベース・ドライバ。このドライバは JDBC ドライバである必要があります。SiteScope で別のドライバを使用するには、そのドライバも &lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\WEB-INF\lib ディレクトリにインストールし、パスとファイル名をこのボックスに入力する必要があります。</p> <p><b>標準設定値:</b> sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver</p>
データベース ユーザ名	<p>データベースにログオンするためのユーザ名。Microsoft SQL Server を使用する場合は、ここを空白のままにし、ODBC 接続の設定時に Windows 認証を選択します。Windows 認証の場合、SiteScope は SiteScope サービスのログイン・アカウントを使用して接続するため、ユーザ名を指定できません。</p> <p><b>Windows 認証使用時の注意事項:</b> SiteScope を実行するユーザには、接続するデータベースへのアクセス権が必要です。SiteScope をローカル・システム・アカウントで実行している場合、サーバの名前を使用して接続が試みられます。</p>
データベース パスワード	<p>データベースにログオンするためのパスワード。Microsoft SQL Server を使用する場合は、ここを空白のままにし、ODBC 接続の作成時に Windows 認証を選択します。Windows 認証の場合、SiteScope は SiteScope サービスのログイン・アカウントを使用して接続するため、パスワードを指定できません。</p>
バックアップ・データベース接続 URL	<p>バックアップ・データベースへの URL。プライマリ・データベースが利用不可になった場合に、SiteScope データベース・ログ記録のフェールオーバーを可能にするには、このオプションを使用します。</p> <p><b>注:</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 同じデータベース・テーブル定義、データベース・ドライバ、ユーザ名、パスワードが両方のデータベース接続に適用されます。</li><li>• データベース・ログ記録プリファレンスへの変更を保存したら、変更を有効にするために SiteScope サービスを停止して再起動する必要があります。</li></ul>

## ヒント / トラブルシューティング

### トラブルシューティング - データベース・ログ記録

データベース・ログ記録がアクティブになり、正しく動作している場合は、データベースに **SiteScopeLog** というテーブルが作成されていること、モニタを実行するたびにそのテーブルにレ

コードが追加されることを確認します。データは、フラット・ファイル形式の単独のテーブルとしてデータベースに送信されます。

**SiteScopeLog** テーブルが作成されていないか、空の場合、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\RunMonitor.log** ファイルと **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\Error.log** ファイルに、**jdbc** データベース・ログ記録が正しく動作している場合、**RunMonitor.log** に次のような一連のメッセージが出力されていることを確認します。

```
jdbc log, reconnect seconds=600
jdbc log, loading, driver=sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver
jdbc log, connecting, url=jdbc:odbc:SiteScopeLog,
jdbc log, logged in
jdbc log, checking log table
jdbc log, created log table
jdbc log, prepare insert, 19, INSERT INTO SiteScopeLog...
jdbc log, connected
```

これらのエントリがログ・ファイルに表示されない場合、データベース・インタフェースまたはデータベース接続の設定に問題があります。入力した [データベース接続 URL] もチェックする必要があります。このパラメータでは大文字と小文字が区別されます。接続 URL のスペルと大文字/小文字をチェックし、テキスト・ボックスの先頭や末尾に空白文字がないことを確認します。

データベース・ログ記録に関するその他の情報については、[HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報](https://softwaresupport.hp.com/group/softwaresupport/search-result) (https://softwaresupport.hp.com/group/softwaresupport/search-result) も参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。



## 第54章: ページャ・プリファレンス（廃止）

このページは、個別またはグループにページャ警告を送信するために SiteScope が使用する、ページャ受信者プロファイルと設定の定義に使用します。現在定義されているすべてのページャ受信者プロファイルが表示されます。ページャ警告は、電子メールにすぐにアクセスできない可能性のあるシステム管理者に自動通知を送信する場合、または警告エスカレーションを送信するかオフィスにいない可能性のあるサポート担当者に通知する場合に使用できます。

**注:** ページャ・プリファレンスは廃止されたため、次のバージョンの SiteScope ではサポートが削除される予定です。後方互換のために、このプリファレンス・タイプは、プロパティ `enableDeprecatedAlertActions=pager` を **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config** ファイルに追加することで有効にすることができます。値は、大文字と小文字の区別がなく、その他の値が並んでいる場合コンマで区切ります。

### アクセス方法

[プリファレンス] > [ページャ プリファレンス] を選択します。

**注:** SiteScope の管理者、または「**電子メール、ページャ、HTTP、SNMP リストを表示**」権限を付与されたユーザのみが、ページャ・プリファレンスを表示できます。ページャ・プリファレンスを作成または編集するには、「**電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスを追加、編集、または削除します**」権限が必要です。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

## 学習事項

### ページャ・プリファレンスの概要

ページャ・プリファレンスは、SiteScope での外部電子ページャ・サービスとの通信に必要な設定を行うために使用できます。SiteScope から電子ページャに警告を送信するために使用する標準設定です。







[ページャ プリファレンス] ページには、定義済みのカスタム・ページャ受信者プロファイルが表示されます。これらのプロファイルは、適切な警告定義を編集することで1つ以上のページャ警告に関連付けることができます。

ページャ受信者プロファイルは、[新規ページャ受信者] または [ページャ受信者の編集] ページで定義します。推奨ページャ接続オプションは [モデム間接続] です。この接続を使用する場合、メッセージが正常に送信されたことを SiteScope で確認し、通信に関する問題を記述したメッセージを受け取ることができます。別の接続オプションでは、通常はプッシュホン・ダイヤルを使用して自動音

声応答システムにメッセージを送信します。プッシュホン・ダイアル方式は数字のメッセージに制限され、ページャ・サービスが正常にメッセージを受け取ったことを SiteScope で確認できません。

## UI の説明



[ページャ プリファレンス] ページ  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>新規ページャ受信者</b> :新しいページャ受信者プロファイルを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(719ページ)を参照してください。
	<b>ページャ受信者の編集</b> :ページャ受信者プロファイルを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(719ページ)を参照してください。
	<b>ページャ受信者の削除</b> :[ページャ プリファレンス] から選択したページャ受信者プロファイルを削除します。  <b>注</b> : ページャ受信者プロファイルが警告アクションから参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。プロファイルを削除する前に、警告の受信者を変更する必要があります。
	<b>ページャ受信者のテスト</b> :ページャにメッセージを送信できるかどうかをテストします。[ページャのテスト] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、 <b>[テスト]</b> をクリックします。ページャ・メッセージに追加するプレフィックスを入力できます。メッセージを数字ページャに送信する場合、32 桁以内で入力します。
	<b>すべて選択</b> : 表示されたすべてのページャ受信者プロファイルを選択します。
	<b>選択を解除</b> :選択を解除します。
<b>標準設定</b>	<p>[標準設定] の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li><b>編集</b> : [ページャ プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックスが開き、[新規ページャ受信者] ダイアログ・ボックスに表示された標準設定を変更できます。この設定の詳細については、「<a href="#">[新規ページャ受信者] /</a></li></ul>

UI 要素	詳細
	<p><a href="#">[ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス</a> (719ページ)を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>テスト:</b> [ページャのテスト] ダイアログ・ボックスが開き、標準設定のページャにメッセージを送信できるかどうかをテストできます。[メッセージ] ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。ページャ・メッセージに追加するプレフィックスを入力できます。メッセージを数字ページャに送信する場合、32 桁以内で入力します。</li> </ul>
名前	新規ページャ受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
詳細	プロファイルの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

## [新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規ページャ受信者プロファイルの作成や、既存のプロファイルの編集ができます。SiteScope では、ページャ警告の送信にページャ受信者プロファイルを使用します。

アクセス方法	<p>[プリファレンス] &gt; [ページャ プリファレンス] を選択します。[ページャ プリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [新規ページャ受信者]  ボタンをクリックするか、</li> <li>• または、既存のページャ・プロファイルを選択して [ページャ受信者の編集]  ボタンをクリックします。</li> </ul>
重要な情報	<p>SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザのみが、[ページャ プリファレンス] を作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、<a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」</a> (744ページ)を参照してください。</p>
関連情報	<a href="#">「ページャ・プリファレンス (廃止)」</a> (717ページ)

## メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	新規ページャ受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
モデム・ポート	<p>モデムから SiteScope サーバに接続する通信ポート。Solaris または Linux の SiteScope の場合、モデムのパスとデバイス名を入力します。Microsoft Windows プラットフォームでは、SiteScope は RS-232C タイプのシリアル・ポートと USB モデム・ポートの両方に COM ポート番号を使用します。</p> <p>USB タイプのモデムを使用している場合、SiteScope で USB モデムを使用できるように USB ポートに関連付けられた COM ポートを選択します。USB モデム用の COM ポート番号を確認するには、<b>【設定】 &gt; 【ネットワークとダイヤルアップ接続】</b> メニューを使用します。目的のモデムを右クリックして、<b>【プロパティ】</b> をクリックします。そのモデムに関連付けられた COM ポート番号がプロパティに表示されます。</p> <p><b>標準設定値 : COM1</b></p>
接続速度 (ビット/秒)	<p>ドロップダウン・リストからページャ・サービスへの接続に使用するモデムの速度。</p> <p><b>標準設定値 : 1200 ビット/秒</b></p>
ページャ接続オプション	<p>ページャ・サービスにメッセージを送信するオプション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>モデム間接続 (推奨)</b> : 英数字ページャを所有し、英数字ページャ・サービスを使用する場合に選択します。</li> <li>・ <b>ダイヤルしてメッセージを入力します</b> : 直通電話番号にダイヤルしてページを送信する場合に選択します。</li> <li>・ <b>ダイヤルし、コマンドを入力してからメッセージを入力します</b> : 直通電話番号を所有し、ページを送信する前にコマンドを入力する必要がある場合に選択します。</li> <li>・ <b>ユーザ定義モデム接続</b> : ページャに上記のいずれの接続も使用できない場合に選択します。</li> </ul> <p>選択したオプションで必要な情報の詳細については、次の表を参照してください。</p>

## ページャ接続オプション

選択したページャ接続オプションで、次の必要な情報を入力します。

UI 要素	詳細
モデム番号	ページャ・サービス・モデムに英数字ページを送信する場合に使用する電話番号。
モデムの PIN 番号	英数字ページャの PIN 番号の末尾 7 桁。英数字ページャ・サービスを使用する場合、英数字ページをページャ・サービス・モデムに送信するために使用する電話番号を入力する必要があります。この番号はページャ・サービスにより提供されます。ページャ・サービスでは、この番号を TAP/IXO 番号と呼ぶ場合があります。
電話番号	<p>通常の電話からダイアルする場合と同じ電話番号。外線にダイアルする番号などの、必要に応じて使用する番号も含まれます。番号を見やすくするためにハイフンを使用できます。電話番号の一部を区切るには、カンマを使用します。各カンマで、残りの番号にダイアルする前にモデル・スクリプトによって数秒間一時停止されます。</p> <p><b>例:</b> オフィスからページャにダイアルするときに外線番号 9 をダイアルする必要がある場合、「9, 555-6789」と入力します。</p>
ページ送信コマンド	タッチ・トーン電話からダイアルする場合と同じページ・コマンド。
ユーザ定義モデム・コマンド	<p>ダイアル先の電話番号、必要に応じた追加の番号、\$message を含む全体のモデム・コマンド。SiteScope によって、各警告に指定したメッセージに \$message が置き換えられます。</p> <p><b>例:</b> ページャの会社の番号が 123-4567、ページャの PIN が 333-3333、ページャ会社によって各コマンドの後に # キーの入力が指定されている場合、コマンドは次のようになります。</p> <p>ATDT 123-4567,,333-3333#,,,\$message#</p> <p><b>注:</b> UNIX で実行している SiteScope の場合、<b>[Modem Path]</b> ボックスにモデムのデバイス・パスを入力します。Solaris を使用してデバイスのリストを参照するには、ls /dev/term/* コマンドを使用します。</p>
無効	<p>このユーザのページャを含むすべての警告を編集せずに、特定のページャを一時的に無効にします。</p> <p><b>標準設定値:</b> 選択されていない</p>

## 詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
スケジュール	<p>ページャの設定を有効にする日時を指定します。ドロップダウン・リストから、より制限されたスケジュールを選択できます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 毎日, 全日</p>
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (&lt;BR&gt;, &lt;HR&gt;, および &lt;B&gt; タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p><b>注</b> : このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• タグ : <b>script</b>, <b>object</b>, <b>param</b>, <b>frame</b>, <b>iframe</b>。</li> <li>• <b>on</b> で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : <b>onhover</b>。</li> <li>• 値に <b>javascript</b> が指定された属性。</li> </ul>

## タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します (ラベルのない要素は山括弧内に表示されません)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>SiteScope オブジェクト (グループ, モニタ, リモート・サーバ, テンプレート, プリファレンス・プロファイル) を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、<a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」 (78 ページ)</a>を参照してください。</p>
タグの追加	<p>〔新規タグ〕 ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」 (87 ページ)</a>を参照してください。</p>

## 第55章: スケジュール・プリファレンス

SiteScope モニタ、警告、レポートは、標準設定で1日24時間、週7日、1年365日有効になっています。モニタが有効な間は、個別のモニタ設定で指定した更新頻度に従ってモニタが実行されます。たとえば、30秒ごとにモニタを実行するように設定している場合、SiteScope によって終日30秒ごとにモニタの実行が試みられます。SiteScope がエラー状態を検出すると、時刻に関係なくモニタに関連付けられた警告がトリガされます。

場合によっては、単一イベントまたは特定の時刻に対応する特定の SiteScope アクションを有効にすると便利です。たとえば、サーバの負荷が一般的に軽い場合に、1日1回のみリンク・チェック・モニタを実行するようなタイプのスケジュールをモニタに使用できます。このようなスケジュールを実行するには、時間指定スケジュールを使用します。

モニタの対象のサーバおよびシステムを担当する個人またはグループのスケジュールに基づいて、特定の SiteScope アクションを無効にすることもできます。定義した期間に従ってモニタを有効または無効にするように SiteScope に指示するには、範囲スケジュールを使用します。

### アクセス方法

1. **「プリファレンス」** > **「スケジュール プリファレンス」** を選択して、**「スケジュール プリファレンス」** ページを開きます。
2. **「スケジュール プリファレンス」** ツールバーで **「新規スケジュール」** ボタンをクリックし、**「新規時間指定スケジュール」** または **「新規時間範囲スケジュール」** を選択します。

#### 注:

- スケジュール・プリファレンスを表示するには、SiteScope の管理者、または「**スケジュール・リストの表示**」権限が付与されたユーザである必要があります。スケジュール・プリファレンスを作成または編集するには、「**スケジュール・プリファレンスを追加、編集、または削除します**」権限が必要です。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。
- スケジュール・プロファイルが警告アクション、レポート、モニタ、モニタしきい値から参照されている場合は、スケジュール・プロファイルを削除できません。プロファイルを削除するには、各依存関係からプロファイルを削除する必要があります。

## 学習事項

### 本項の内容

- 「[時間指定スケジュール](#)」(724ページ)
- 「[範囲スケジュール](#)」(724ページ)



## 時間指定スケジュール

時間指定スケジュールでは、モニタを週単位で実行する特定の時間を設定できます。時間指定スケジュールは週の終わりにリセットされ、毎週繰り返されます。時間指定スケジュールは、スケジュールで指定した各時間に 1 回だけ実行するモニタをトリガします。

時間指定スケジュールは、モニタ・インスタンスに明示的に関連付けられるまで非アクティブです。時間指定スケジュールをモニタに関連付けるには、スケジュールを設定するモニタの「**モニタの実行設定**」表示枠の「**モニタのスケジュール**」フィールドを使用します。

**注:** モニタが警告に関連付けられる方法によって、時間指定スケジュールが間接的に警告に関連付けられます。時間指定スケジュールで無効にしたモニタに関連付けられている警告は、そのモニタが無効な間は実質的に利用不可になります。ただし、警告が同じスケジュールで制御されないほかのモニタに関連付けられている場合、そのモニタがエラー状態を報告すると警告はトリガされます。

## 範囲スケジュール

範囲スケジュールを使用して、SiteScope で特定のモニタを有効または無効にする時間範囲を指定できます。モニタに有効な時間範囲を指定（そのモニタの「**モニタの実行設定**」表示枠の「**モニタのスケジュール**」フィールドを使用）した場合、SiteScope ではその時間範囲内のモニタのみ実行します。たとえば、月曜日から金曜日の午前 8 時～午後 9 時の範囲を作成した場合、その範囲スケジュールが関連付けられたモニタは、その時間内のみ実行されます。

範囲スケジュールは、複数の管理者が呼び出しに応じる場合、それぞれの勤務シフトの時間に実行するモニタに異なるページ警告を関連付けるために一般的に使用されます。スケジュールによって、個人の勤務スケジュールに合わない時間帯にページ警告を送信することを避けられます。

範囲スケジュールのプリファレンスは、モニタ・インスタンスに明示的に関連付けられるまでは非アクティブです。範囲スケジュールのプリファレンスをモニタに関連付けるには、モニタの設定ページの「**モニタの実行設定**」表示枠を使用します。

**注:** モニタが警告に関連付けられる方法によって、範囲スケジュールが間接的に警告に関連付けられます。範囲スケジュールで無効にしたモニタに関連付けられている警告は、そのモニタが無効な間は実質的に利用不可になります。ただし、警告が同じスケジュールで制御されないほかのモニタに関連付けられている場合、そのモニタがエラー状態を報告すると警告はトリガされます。

## UI の説明

- ・ [「時間指定スケジュール・ページ」 \(725ページ\)](#)
- ・ [「範囲スケジュールのユーザ・ページ」 \(726ページ\)](#)



## 時間指定スケジュール・ページ

このページは、SiteScope モニタおよび警告の操作を特定の時間でのみ実行するようにカスタマイズするために使用します。

### 一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	時間指定スケジュールの名前。この名前は、製品の表示での時間指定スケジュールの識別に使用されます。
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (&lt;BR&gt;, &lt;HR&gt;, および &lt;B&gt; タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p><b>注：</b> このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードなど）を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• タグ :<b>script</b>, <b>object</b>, <b>param</b>, <b>frame</b>, <b>iframe</b>。</li><li>• <b>on</b> で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : <b>onhover</b>。</li><li>• 値に <b>javascript</b> が指定された属性。</li></ul>

### 時間指定スケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<曜日>	<p>曜日の横にあるボックス内の、モニタを実行する時間。時間指定スケジュールの時間の値は、それぞれの標準日の 24 時間以内に制限されています。1 日に複数の時間を入力するには、時間をカンマ (,) で区切ります。</p> <p><b>例：</b> 01,02:30,23:30 では、午前 1:00、午前 2:30、午後 11:30 にモニタを実行します。</p>

## 関連エンティティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	該当するスケジュールの下で実行されている各エンティティ（モニタ、警告アクション）の名前を一覧表示します。たとえば、モニタ・スケジュールを編集して、該当するスケジュールの下で実行されているモニタを表示する場合に有効です。
エンティティタイプ	モニタ、警告アクション、SiteScope の再起動などのエンティティ・タイプ。
パス	エンティティ・タイプのパス。

## タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されず）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。  概念の詳細については、 <a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」(78 ページ)</a> を参照してください。
タグの追加	〔新規タグ〕ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「〔新規タグ〕 / 〔タグの編集〕ダイアログ・ボックス」(87ページ)</a> を参照してください。

## 範囲スケジュールのユーザ・ページ

このページは、モニタおよび警告のSiteScope操作を特定の時間範囲内でのみ実行するようにカスタマイズするために使用します。

**注:** SiteScope Failover を使用する場合、追加のテーブル（フェイルオーバー・スケジュール・ブ

リファレンス) が一般スケジュール・プリファレンス・テーブルの下に表示されます。追加のテーブルは、プライマリ SiteScope の可用性のミラー化および確認に使用されるスケジュールを含みます。

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	範囲スケジュールの名前。
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (&lt;BR&gt;, &lt;HR&gt;, および &lt;B&gt; タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p><b>注：</b> このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• タグ: <b>script</b>, <b>object</b>, <b>param</b>, <b>frame</b>, <b>iframe</b>。</li><li>• <b>on</b> で始まる属性を含むタグは拒否される。例: <b>onhover</b>。</li><li>• 値に <b>javascript</b> が指定された属性。</li></ul>

範囲スケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<曜日>	<p>モニタを実行する日と時間。範囲スケジュールの時間の値は、それぞれの標準日の 24 時間以内に制限されています。【有効】を選択すると、指定した時間範囲内にのみモニタが実行され、【無効】を選択すると、適用可能な日の指定した時間範囲外のすべての時間でモニタを実行します。</p> <p><b>注：</b> 範囲スケジュールには 24 時間の形式のみ使用します。</p> <p><b>例：</b> 木曜日の午後 6:00 から翌朝の午前 8:00 までモニタを無効にするには、木曜日の【開始】に「18」, 【終了】に「24」を入力し、金曜日の【開始】に「0」, 【終了】に「8」を入力します。木曜日のスケジュールで【開始】に「18」, 【終了】に「8」を入力した場合、スケジュールは無効になります。</p>

UI 要素	詳細
	<p>1 日に複数の時間を入力するには、時間をカンマ (,) で区切ります。たとえば、午前 2 時 ~ 午前 3 時と午前 7 時 ~ 午前 8 時に無効にするには、<b>【開始】</b> ボックスに「2:00,7:00」、<b>【終了】</b> ボックスに「3:00,8:00.」と入力します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 有効 (時間の値の指定なし) 詳細については、次の表を参照してください。</p>

## 曜日

設定の有効化 (有効 / 無効)	表示期間 (開始 / 終了)	スケジュールの効果
有効	<b>【開始】</b> および <b>【終了】</b> 時間の値が指定済み	<b>【開始】</b> および <b>【終了】</b> の時間範囲内でのみモニタが実行されます。
有効	(時間の値の指定なし)	適用可能な日のすべての時間でモニタが実行されます。これが 24 時間稼働の標準設定です。
無効	<b>【開始】</b> および <b>【終了】</b> 時間の値が指定済み	適用可能な日の <b>【開始】</b> および <b>【終了】</b> の時間範囲外のすべての時間でモニタが実行されます。
無効	(時間の値の指定なし)	適用可能な日のすべての時間でモニタが無効になります。

## フェイルオーバー・スケジュール・プリファレンス

**注:** このテーブルは SiteScope Failover サーバのみで利用可能です。

このテーブルは、プライマリ SiteScope の可用性のミラー化および確認に使用されるスケジュールを含みます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	<p>フェイルオーバー・プロファイル・ダイアログ・ボックスの実行設定で選択されるフェイルオーバー・スケジュールの名前。詳細については、「<a href="#">【新規フェイルオーバー プロファイル】 / 【フェイルオーバー プロファイルの編集】 ダイアログ・ボックス</a>」(613ページ)を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (&lt;BR&gt;, &lt;HR&gt;, および &lt;B&gt; タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p><b>注:</b> このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>タグ: <b>script</b>, <b>object</b>, <b>param</b>, <b>frame</b>, <b>iframe</b>。</li> <li><b>on</b> で始まる属性を含むタグは拒否される。例: <b>onhover</b>。</li> <li>値に <b>javascript</b> が指定された属性。</li> </ul>

### タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します (ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	<p>SiteScope オブジェクト (グループ, モニタ, リモート・サーバ, テンプレート, プリファレンス・プロファイル) を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、<a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」 (78 ページ)</a>を参照してください。</p>
タグの追加	<p>〔新規タグ〕ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「〔新規タグ〕 / 〔タグの編集〕ダイアログ・ボックス」 (87 ページ)</a>を参照してください。</p>

## 第56章: タグの検索 / フィルタ

SiteScope で定義した検索 / フィルタ・タグを管理するには、タグの検索/フィルタのプリファレンスを使用します。1 つ以上のモニタにキーワード・タグを割り当て、それらのタグをオブジェクトとしてフィルタに使用できます。このページで、タグを追加、編集、削除できます。

タグは、<tag> 属性を使用して警告テンプレートでも使用できます。詳細については、「[警告、テンプレート、イベントで利用可能なプロパティ](#)」(1295ページ)を参照してください。

**ヒント:** フィルタとタグを使用したモニタの管理および追跡については、YouTube のガイド付きのデモ (<http://hpsw.co/r5D4GxA>) を参照してください。

### アクセス方法

[プリファレンス] > [タグの検索/フィルタ] を選択します。

## タスク

### 検索/フィルタ・タグを使用したモニタのフィルタ方法

このタスクでは、タグの定義、1 つ以上のモニタへのタグの割り当て、タグを使用した表示内容の検索とフィルタを実行するための手順について説明します。

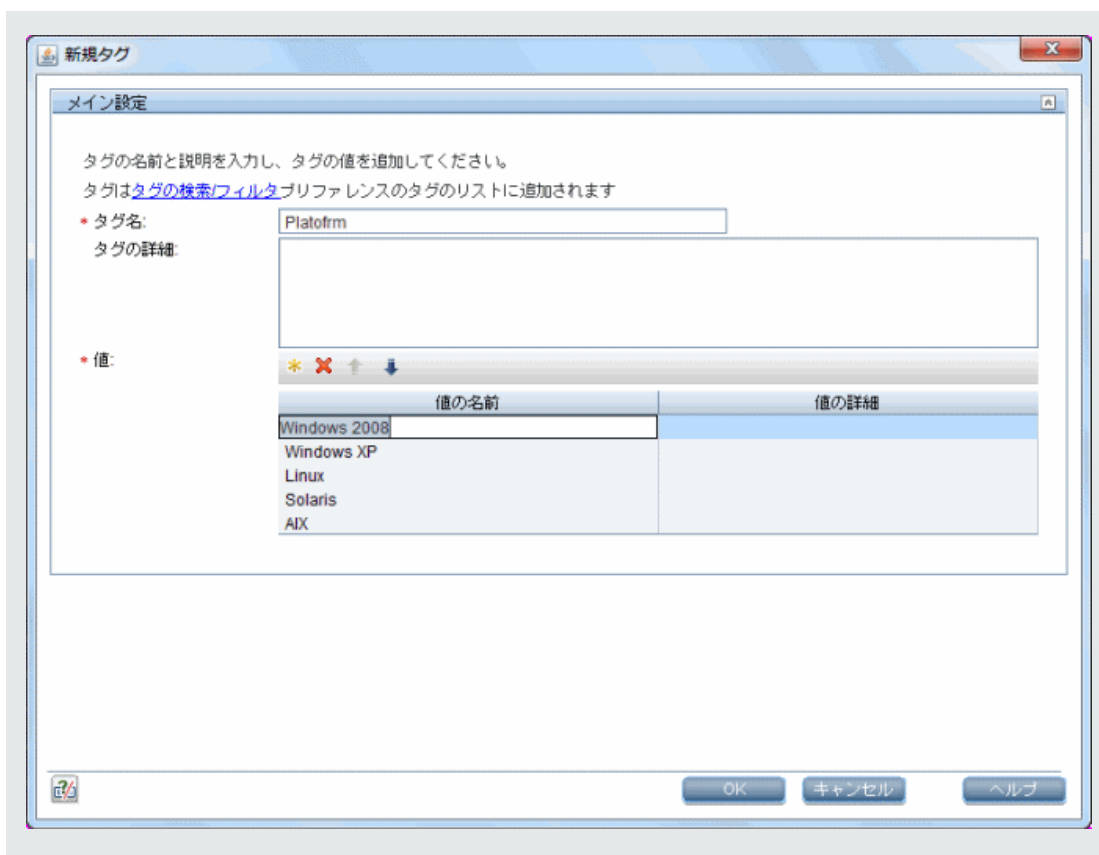
#### 1. 前提条件:

[タグの検索/フィルタ] を表示するには、SiteScope の管理者であるか、「**タグの表示**」権限が付与されたユーザである必要があります。[タグの検索/フィルタ] を作成または編集するには、「**タグを追加、編集、または削除します**」権限が必要です。ユーザ権限の詳細については、「[権限](#)」(757ページ)を参照してください。

#### 2. 検索/フィルタ・タグを作成します。

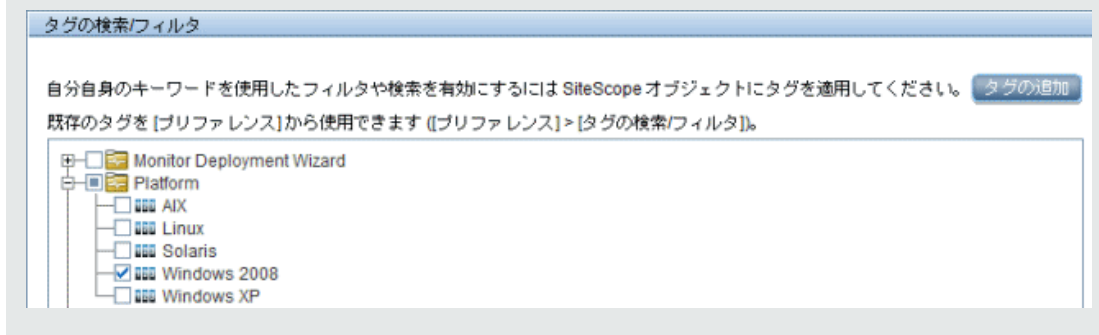
[プリファレンス] > [タグの検索/フィルタ] で、表示のフィルタ処理に使用するタグを作成します。タグとその値を定義します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規タグ\] / \[タグの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(87ページ)を参照してください。

**例:** モニタが実行されているオペレーティング・システムの種類を示すタグを作成します。タグ Operating Systems には、Windows 2008, Windows XP, AIX, Solaris, Linux などの値を設定します。




3. タグの検索 / フィルタの SiteScope モニタへの設定。
  - a. SiteScope モニタ・ツリーで、タグを付けるモニタを選択します。
  - b. [プロパティ] タブで、[タグの検索/フィルタ] パネルを展開し、タグとその値をモニタに割り当てます。
  - c. このタグと値を割り当てるすべてのモニタについて、同じ操作を繰り返します。

**例：**特定のプラットフォーム上で実行されているモニタのみを表示するフィルタを定義するには、適切な Platform タグ値を選択してモニタに割り当てます。






4. タグをオブジェクトとしてフィルタに使用。



- Multi-View の場合：
  - i. SiteScope Multi-View を開き、Multi-View のドロップダウン リストで **タグ** を選択します。
  - ii. タグまたはタグ値をドリル・ダウンすると、選択したタグが割り当てられているモニタのみを表示できます。たとえば、Platform タグに AIX タグ値が割り当てられているモニタのみに表示を絞り込むことができます。Multi-View の使用の詳細については、[「Multi-View」 \(1080ページ\)](#)を参照してください。
- SiteScope ダッシュボード の場合：
  - i. モニタ・コンテキスト・メニューで、**フィルタ**  ボタンの横にある矢印をクリックし、表示するタグ値を含むフィルタを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[新規フィルタ\] / \[フィルタの編集\] ダイアログ・ボックス」 \(82ページ\)](#)を参照してください。
  - ii. **タグ** フィールドにタグの値を入力するか、**参照** ボタンをクリックし、タグ・リストからフィルタするタグの値を選択します。**フィルタ タグ** のユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[フィルタ タグ\]ダイアログ・ボックス」 \(87ページ\)](#)を参照してください。
  - iii. フィルタを作成すると、選択したタグの値が割り当てられたモニタのみがツリーに表示されます。

## UI の説明

[タグの検索/フィルタ] ページ  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>新規タグ</b> :新しい検索 / フィルタ・タグを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」 (87ページ)</a> を参照してください。
	<b>タグの編集</b> : 検索/フィルタ・タグを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」 (87ページ)</a> を参照してください。
	<b>タグの削除</b> : タグの検索/フィルタのプリファレンスから選択したタグを削除します。 <b>注</b> : SiteScope オブジェクトで参照されている場合、検索/フィルタ・タグまた



UI 要素	詳細
	はタグの値は削除できません。削除するには、すべての SiteScope オブジェクトからタグまたはタグの値を削除する必要があります。
	<b>すべて選択</b> : 表示されたすべての検索 / フィルタ・タグを選択します。
	<b>選択を解除</b> : 選択を解除します。
<b>名前</b>	新しい検索/フィルタ・タグの作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
<b>詳細</b>	検索/フィルタ・タグの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

## 第57章: SNMP プリファレンス

SNMP プリファレンスは、SiteScope での外部の SNMP ホストまたは管理コンソールとの通信に必要な設定を行うために使用します。これらは、SNMP トラップ警告で使用する標準設定の SNMP パラメータです。

### アクセス方法

[**プリファレンス**] > [**SNMP プリファレンス**] を選択します。

**注:** SNMP プリファレンスを表示するには、SiteScope の管理者であるか、「**電子メール、ページャ、HTTP、SNMP リストを表示**」権限を付与されたユーザである必要があります。SNMP プリファレンスを作成または編集するには、「**電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスを追加、編集、または削除します**」権限が必要です。このトピックの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

## 学習事項

### SNMP プリファレンスの概要

SNMP プリファレンスでは、管理コンソールにデータを送信するときに SiteScope SNMP トラップ警告によって使用される設定を定義できます。また、SNMP トラップ受信者プロファイルの定義、および複数のローカル・アドレスやポートの同時リスンが可能です。SiteScope では、SiteScope SNMP トラップ警告タイプを使用して、SNMP ベースのネットワーク管理システムと統合します。







[SNMP プリファレンス] ページには、トラップをホストに送信するための定義済みカスタム SNMP トラップ・プロファイルまたはテンプレートが表示されます。SNMP トラップ・プロファイルは、適切な警告定義を編集することで 1 つ以上の SNMP トラップ警告に関連付けることができます。

SNMP トラップ・モニタを使用して、トラップが SiteScope に送信されたかどうかを確認できます。詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「SNMP トラップ・モニタ」を参照してください。

**注:** テンプレートのエクスポートおよびインポート・フローには、SNMP トラップのプリファレンスは含まれません。そのため、SNMP トラップのプリファレンスへの参照が含まれるテンプレートをエクスポートおよびインポートする場合、手動でこれらのプリファレンスを作成し、インポートされたテンプレートで SNMP トラップを更新する必要があります。

# UI の説明





SNMP トラップ プリファレンスを送信  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
	<b>新規 SNMP トラップ</b> : 新しい SNMP トラップ・プロファイルを作成します。 ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[SNMP トラップの送信] / [SNMP トラップの受信] ダイアログ・ボックス</a> 」(737ページ)を参照してください。
	<b>SNMP トラップの編集</b> : SNMP トラップ・プロファイルを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[SNMP トラップの送信] / [SNMP トラップの受信] ダイアログ・ボックス</a> 」(737ページ)を参照してください。
	<b>SNMP トラップの削除</b> : [SNMP プリファレンス] から選択した SNMP トラップ・プロファイルを削除します。  <b>注</b> : SNMP トラップ・プロファイルが警告アクションから参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。SNMP トラップ・プロファイルを削除する前に、警告の SNMP トラップを変更する必要があります。
	<b>SNMP トラップのテスト</b> : SNMP トラップにメッセージを送信できるかどうかをテストします。[SNMP トラップのテスト] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。
	<b>すべて選択</b> : 表示されたすべての送受信 SNMP トラップ・プロファイルを選択します。
	<b>選択を解除</b> : 選択を解除します。
標準設定	<p>[標準設定] の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>編集: [SNMP トラップ プリファレンス標準設定] ダイアログ・ボックスが開き、[新規 SNMP トラップ] ダイアログ・ボックスに表示された標準設定を変更できます。この設定の詳細については、「<a href="#">[SNMP トラップの送信] / [SNMP トラップの受信] ダイアログ・ボックス</a>」(737ページ)を参照してください。</li><li>テスト: [SNMP トラップのテスト] ダイアログ・ボックスが開き、標準設</li></ul>

UI 要素	詳細
	<p>定の SNMP トラップにメッセージを送信できるかどうかをテストできます。 [SNMP トラップのテスト] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、 [テスト] をクリックします。</p> <p><b>注：</b> SNMP トラップのテストではすべての varbind を含む完全なトラップは送信しません。設定されたトラップ OID とメッセージのみを含む SNMP トラップを送信します。</p>
名前	新規 SNMP トラップ・プロファイルの作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
ホスト	すべての SNMP トラップ・メッセージを受信するマシンのドメイン名または IP アドレス。
ポート	トラップの送信先の SNMP ポート。
詳細	プロファイルの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

## SNMP トラップ・プリファレンスの受信



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>新規 SNMP トラップ：</b> 新しい SNMP トラップ・プロファイル受信者を作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[SNMP トラップの送信] / [SNMP トラップの受信] ダイアログ・ボックス</a> 」(737ページ)を参照してください。
	<b>SNMP トラップの編集：</b> SNMP トラップ受信者プロファイルを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[SNMP トラップの送信] / [SNMP トラップの受信] ダイアログ・ボックス</a> 」(737ページ)を参照してください。
	<b>SNMP トラップの削除：</b> [SNMP プリファレンス] から選択した SNMP トラップ・プロファイルを削除します。
	<b>すべて選択：</b> 表示されたすべての送受信 SNMP トラップ・プロファイルを選択します。

UI 要素	詳細
	<b>選択を解除</b> :選択を解除します。
<b>名前</b>	新規 SNMP トラップ受信者プロファイルの作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
<b>ホスト</b>	すべての SNMP トラップ・メッセージを受信するマシンのドメイン名または IP アドレス。
<b>ポート</b>	トラップの送信先の SNMP ポート。
<b>詳細</b>	プロファイルの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

## 〔SNMP トラップの送信〕 / 〔SNMP トラップの受信〕 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規 SNMP トラップ・プロファイルの作成や既存プロファイルの編集ができます。また、SNMP トラップ受信者プロファイルの作成または既存プロファイルの編集、および、複数のローカル・アドレスやポートの同時リスンが可能です。SNMP トラップ受信者セッションに v3 プロパティがある場合でも、SNMP v1, v2 の各トラップのリスンと受信が可能です。

<b>アクセス方法</b>	<p>〔<b>プリファレンス</b>〕 &gt; 〔<b>SNMP プリファレンス</b>〕を選択します。SNMP トラップのプリファレンス・ページで、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>〔SNMP トラッププリファレンスを受信/送信〕部の<b>新規 SNMP トラップ</b> ボタンをクリックして、SNMP トラップの送受信用の新規プロファイルを作成するか、または、</li> <li>〔SNMP トラッププリファレンスを受信/送信〕部の既存トラップを選択し、<b>SNMP トラップの編集</b> ボタンをクリックします。</li> </ul>
<b>重要な情報</b>	<p>SiteScope の管理者、または「<b>電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンスの追加、編集、または削除</b>」の権限を付与されたユーザのみが、SNMP プリファレンスを作成または変更できます。このトピックの詳細については、「<a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a>」(744ページ)を参照してください。</p>
<b>関連情報</b>	<p><a href="#">「SNMP プリファレンス」</a> (734ページ)</p>

本項の内容

- [「SNMP トラップ・プリファレンスを送信」 \(738ページ\)](#)
- [「SNMP トラッププリファレンスを受け取る」 \(741ページ\)](#)
- [「タグの検索/フィルタ」 \(743ページ\)](#)

## SNMP トラップ・プリファレンスを送信

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
一般設定	
名前	新規 SNMP 受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (&lt;BR&gt;, &lt;HR&gt;, および &lt;B&gt; タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p><b>注：</b> このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードなど）を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• タグ <code>:script, object, param, frame, iframe</code>。</li><li>• <code>on</code> で始まる属性を含むタグは拒否される。例: <code>onhover</code>。</li><li>• 値に <code>javascript</code> が指定された属性。</li></ul>
Preferences Settings: メイン設定領域	
送信先ホスト	<p>すべての SNMP トラップ・メッセージを受信するマシンのドメイン名または IP アドレス。このマシンでトラップ・メッセージを受信するには、SNMP コンソールが実行されている必要があります。</p> <p><b>例</b> :snmp.mydomain.com または 206.168.191.20。</p>
SNMP ポート	<p>トラップの送信先の SNMP ポート。</p> <p><b>標準設定値</b> : 162</p>
Preferences Settings: 【SNMP 接続設定】 領域	
タイムアウト (秒)	<p>SNMP トラップ要求（再試行を含む）の完了までの待機時間（ミリ秒単位）。</p> <p><b>標準設定値</b> : 5</p>

UI 要素	詳細
再試行回数	<p>SiteScope が SNMP トラップの GET 要求を失敗とみなすまで各 SNMP GET 要求を再試行する回数。</p> <p><b>標準設定値 : 1</b></p>
コミュニティ	<p>トラップの送信に使用される標準設定の SNMP コミュニティ名。コミュニティ文字列は、SNMP 管理コンソールで使用されるコミュニティ文字列と一致する必要があります。</p> <p><b>標準設定値 : public</b></p>
SNMP のバージョン	<p>使用する標準設定の SNMP プロトコル・バージョン番号。現在、SNMP V1 および V2c がサポートされています。</p> <p><b>標準設定値 : V1</b></p>
認証アルゴリズム	<p>SNMP V3 に使用される認証アルゴリズム。[MD5] , [SHA] , または [なし] を選択できます。</p> <p><b>注 :</b> このフィールドは、[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
ユーザ名 :	<p>SNMP バージョン 3 を使用している場合に認証に使用するユーザ名。</p> <p><b>注 :</b> このフィールドは、[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
パスワード	<p>SNMP バージョン 3 を使用している場合に認証に使用するパスワード。</p> <p><b>注 :</b> このフィールドは、[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
プライバシー アルゴリズム	<p>SNMP バージョン 3 に使用されるプライバシー・アルゴリズム (DES, 128 ビット AES, 192 ビット AES, 256 ビット AES) 。</p> <p><b>標準設定値 : DES</b></p> <p><b>注 :</b> このフィールドは、[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
プライバシー パスワード	<p>SNMP V3 の認証に使用するプライバシー・パスワード。プライバシーがない場合は空白のままにします。</p> <p><b>注 :</b> このフィールドは、[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
コンテキスト名	<p>SNMP V3 のコンテキスト名。</p> <p><b>注 :</b> このフィールドは、[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。</p>
コンテキスト エ	<p>SNMP V3 のコンテキスト・エンジン ID。</p>

UI 要素	詳細
エンジン ID	注：このフィールドは，[SNMP V3] を選択した場合にのみ使用できます。
Preferences Settings: [詳細設定] 領域	
SNMP トラップ ID	<p>送信するトラップのタイプを選択します。共通する条件に複数の定義済み ID タイプがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>一般 SNMP トラップ ID：ドロップダウン・リストから一般 SNMP タイプを選択します。</li> <li>企業固有 SNMP トラップ ID：企業固有の SNMP ID タイプを使用するには、ボックスに特定のトラップ・タイプの番号を入力します。</li> </ul> <p>注：SiteScope を NNMi と統合する場合は，[企業固有 SNMP トラップ ID] を選択し，1 を入力する必要があります。SiteScope は各 SNMP バージョンで異なる通知 ID を送信します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>SNMP V1 : .1.3.6.1.4.1.11.15.1.4</li> <li>SNMP V2 : .1.3.6.1.4.1.11.15.1.4.1</li> </ul>
SNMP オブジェクト ID	<p>コンソールに対し，メッセージを送信したオブジェクトを識別します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事前設定 SNMP オブジェクト ID：ドロップダウン・リストから，いずれかの定義済みオブジェクトを選択します。</li> <li>その他の SNMP オブジェクト ID：別のオブジェクト ID を使用するには，ボックスにほかのオブジェクト ID を入力します。</li> </ul> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope バージョン 11.20 以降では，記録されたすべてのトラップに，ドット（「.」）で始まるオブジェクト ID が割り当てられます。たとえば，oid=.1.3.6.1.2.1.0.1.3.6.1.4.1.11.2.17.1 のようになります。</li> <li>SiteScope を NNMi と統合する場合は，[事前設定 SNMP オブジェクト ID] を選択し，リストから [HP SiteScope イベント] を選択します。</li> </ul>
システム OID を SNMP トラップにプレフィックスとして追加します	<p>標準設定のシステム OID（1.3.6.1.2.1）をすべての SNMP トラップ OID にプレフィックスとして追加します。プレフィックスを使用しない場合は，このチェック・ボックスをクリアします。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
SNMP ソース	<p>SNMP トラップ・ソース：SiteScope サーバまたは監視対象サーバ。</p> <p>標準設定値：監視対象ホスト</p>



UI 要素	詳細
	<p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>コンポジット・モニタ, e ビジネス・トランザクション・モニタ, フォーミュラ・コンポジット・モニタ, SNMPトラップ・モニタ, URL リスト・モニタには, ターゲット・リモート・サーバがありません。</li> <li>カスタム・モニタ, カスタム・データベース・モニタ, DHCP モニタ, Microsoft NetScout イベント・モニタ, テクノロジ SNMP トラップ統合モニタ, テクノロジ Web サービス統合モニタは, 監視対象ホストとして SiteScope ホストをレポートします。</li> <li>一部のモニタは, 監視対象ホストとしてターゲット・リモートをレポートしますが, 次のモニタの場合, ターゲット・リモートを手動で入力する必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>データベース・カウンタ・モニタ: <b>[データベース マシン名]</b> フィールドが空の場合, 監視対象ホストとして SiteScope ホストをレポートします。</li> <li>データベース・クエリ・モニタ: <b>[データベース マシン名]</b> フィールドが空の場合, 監視対象ホストとして SiteScope ホストをレポートします。</li> <li>WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタ: <b>[ターゲット]</b> フィールドが空の場合, WebLogic が監視対象ホストとして実行されているサーバのアドレスをレポートします。</li> <li>WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ: <b>[ターゲット]</b> フィールドが空の場合, 監視対象ホストとして監視するサーバの名前をレポートします。UNIX サーバで, サーバの完全パスを入力します。</li> </ul> </li> </ul>

タグの検索/フィルタについては, [「タグの検索/フィルタ」\(743ページ\)](#)を参照してください。

SNMP トラップ プリファレンスを受け取る

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>一般設定</b>	
<b>名前</b>	新規 SNMP 受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。

UI 要素	詳細
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (&lt;BR&gt;, &lt;HR&gt;, および &lt;B&gt; タグなど) を使用して, 表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p><b>注:</b> このボックスに入力した HTML コードは, 有効性とセキュリティがチェックされ, コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると, フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• タグ: <b>script</b>, <b>object</b>, <b>param</b>, <b>frame</b>, <b>iframe</b>。</li><li>• <b>on</b> で始まる属性を含むタグは拒否される。例: <b>onhover</b>。</li><li>• 値に <b>javascript</b> が指定された属性。</li></ul>
プリファレンス設定	
ホスト	<p>次のようにホスト・オプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• <b>ホスト:</b> ローカル SNMP アドレスの IP アドレスのホスト名を選択して, ドロップダウン・リストからバインドする。</li><li>• <b>その他:</b> バインドするローカル SNMP アドレスの IP アドレスのホスト名を入力する。</li></ul>
ポート	<p>トラップの収集には, UDP ポート を使用。</p> <p><b>標準設定値:</b> 162</p>
V3 トラップ設定	
ユーザ名	SNMP 認証用のユーザ名。
認証タイプ	使用する SNMP 認証のタイプ ( [MD5] , [SHA] , または [なし] ) 。
認証パスワード	SNMP 認証用のパスワード。
プライバシー・タイプ	SNMP 認証用プライバシー・プロトコル (DES, 128 ビット AES, 192 ビット AES, 256 ビット AES) 。
プライバシー・パスワード	SNMP 認証用のプライバシー・パスワード。
コンテキスト・	SNMP コンテキスト・エンジン ID。

UI 要素	詳細
エンジン ID	

タグの検索/フィルタについては、[「タグの検索/フィルタ」\(743ページ\)](#)を参照してください。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。  概念の詳細については、 <a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」(78ページ)</a> を参照してください。
タグの追加	〔新規タグ〕ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「〔新規タグ〕 / 〔タグの編集〕ダイアログ・ボックス」(87ページ)</a> を参照してください。

## 第58章: ユーザ管理プリファレンス

SiteScope ユーザ・アカウントは「ユーザ管理プリファレンス」ページで管理します。このページでは、SiteScope へのアクセスが許可されているユーザを管理できます。

**注:** ユーザ管理プリファレンスは、SiteScope に直接アクセスしているユーザのみが使用でき、BSM の SAM 管理を使用して SiteScope にアクセスしているユーザは使用できません。SiteScope 権限と BSM の相互関係の詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「Accessing SiteScope and Building Permissions Model」を参照してください。

### アクセス方法

「**プリファレンス**」>「**ユーザ管理プリファレンス**」を選択します。

#### 注:

- 現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「**ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します**」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「**ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します**」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。
- 管理者アカウントは標準設定のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。ほかのアカウントを作成するには、ユーザ・ログイン名およびログイン・パスワードを含めるように最初に管理者アカウント・プロファイル編集する必要があります。SiteScope によって提供されるデータは、すべてのユーザに完全な管理権限を付与せずに複数のユーザが利用できるようにすることができます。

## 学習事項

### ユーザ・プロファイルの概要

クライアント・サーバ・ベースのアーキテクチャとして、複数のユーザが単一の SiteScope ユーザ・プロファイルに同時にアクセスできます。さまざまな対象者に異なる表示および編集権限を提供する複数の SiteScope ユーザ・アカウントを定義できます。たとえば、モニタの状態とレポートの表示を可能にし、モニタ設定または警告の追加や編集はできないようにするユーザ・プロファイルを作成できます。

ユーザ・プロファイルによって、SiteScope へのアクセスは正しいユーザ名とパスワードを入力したユーザに制限されます。必要に応じて、LDAP データベースにクエリが送信されユーザ認証が処理されることもあります。これによって、セントラル・リポジトリに全 SiteScope ユーザの認証情報（ユーザ名とパスワード）を保管して、LDAP サーバを使用してユーザの資格情報を検証することに

よって、外部の LDAP サーバからユーザを管理できます。詳細については、[「LDAP 認証と承認」\(782 ページ\)](#)を参照してください。

ユーザ・プロファイルには、次の2つの主要コンポーネントがあります。

- ユーザ認証情報とアクセス権限
- アクション権限

該当するユーザ・プロファイル・コンテナで各ユーザ・プロファイルにこれらの設定を指定します。SiteScope ユーザ・プロファイルの作成の詳細については、[「SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法」\(747ページ\)](#)を参照してください。

## ユーザ・タイプとユーザ・ロール・タイプ

SiteScope は、次のユーザ・タイプとユーザ・ロール・タイプを提供します。

### ユーザ・タイプ:

- **管理者**: SiteScope には標準で1人の管理者が設定されます。管理者は、SiteScope ですべてを表示および変更できます。[ユーザ管理プリファレンス] ページでほかのユーザの作成やユーザ・プロファイルの変更が許可されているなど、その他にも管理者には特別なプロパティがあります。管理者アカウントは、無効にすることも削除することもできません。
- **パワー・ユーザ (スーパー・ユーザ)**: これはユーザ管理権限が付与された正規ユーザです。パワー・ユーザは、管理者以外のユーザを作成、編集、削除できます。自分のアカウントも編集できますが、削除はできません。管理者とパワー・ユーザは、いずれもパワー・ユーザを作成できます。パワー・ユーザは複数存在する場合があります。このユーザ・タイプを有効化する方法の詳細については、[「\[新規ユーザプロファイル\] / \[ユーザプロファイルの編集\] ダイアログ・ボックス」\(754ページ\)](#)を参照してください。
- **正規ユーザ**: 正規ユーザは、自分自身を含め、どのユーザも作成、削除、編集できません。管理者またはパワー・ユーザが正規ユーザに定義したすべての権限があります。標準設定で、正規ユーザには（[ユーザ管理プリファレンス]にある）「**ユーザ・プリファレンスの追加、編集、削除**」以外のすべての権限が付与されます。そのため、ユーザが表示できるのは、自分のユーザ・プロパティおよび権限が付与されているルート・グループに制限されます。正規ユーザは、ほかのユーザの設定や権限を表示または編集できません。
- **<ユーザ・ロール>から継承**: ユーザ・ロールの割り当て先である選択したユーザの [ユーザ・タイプ] フィールドに表示されます。詳細については、以下のユーザ・ロール・タイプを参照してください。
- **統合ビューア**: 標準設定では、SiteScope は HPOM イベントからのドリルダウンに使用する統合ビューア・ユーザを提供します。これは、表示権限と、グループとモニタをリフレッシュする権限が与えられた正規ユーザです。詳細については、SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」を参照してください。[HP ソフトウェア統合サイト](#)では、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます（Windows の場合：  
<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>, UNIX の場合：  
<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>）。

**ユーザ・ロール・タイプ**: 外部の LDAP サーバを使用する時に SiteScope ユーザのグループを管理するために使用されます。

- **スーパー・ユーザ・ロール**: これはユーザ管理権限（「**ユーザ・プリファレンスの追加, 編集, 削除**」）が付与された正規ユーザ・ロールです。このタイプのユーザは、管理者以外のユーザを作成、編集、削除できます。自分のユーザ・ロールも編集できますが、削除できません。管理者とパワー・ユーザは、いずれもスーパー・ユーザ・ロールを作成できます。スーパー・ユーザ・ロールは複数存在する場合があります。
- **正規ユーザ・ロール**: このタイプのユーザは、自分自身を含め、どのユーザも作成、削除、編集できません。管理者またはパワー・ユーザが正規ユーザに定義したすべての権限があります。標準設定で、正規ユーザには（「**ユーザ管理プリファレンス**」にある）「**ユーザ・プリファレンスの追加, 編集, 削除**」以外のすべての権限が付与されます。そのため、ユーザが表示できるのは、自分のユーザ・プロパティおよび権限が付与されているルート・グループに制限されます。正規ユーザ・ロールは、ほかのユーザの設定や権限を表示または編集できません。正規ユーザ・ロールは複数存在する場合があります。

**注:**（「**ユーザ プロファイル**」ダイアログ・ボックスの「**ユーザ ロールを割り当てる**」フィールドで）ユーザ・ロールをユーザ・プロファイルに割り当てると、選択したユーザの「**ユーザ・タイプ**」フィールドに「**<ユーザ ロール>から継承**」が表示されます。このユーザはユーザ・ロールと同じ権限を継承します。

LDAP サーバ使用時にユーザ・ロール・タイプを有効化する方法の詳細については、[「SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする方法」\(784ページ\)](#)を参照してください。

LDAP 認証の詳細については、[「LDAP 認証と承認」\(782ページ\)](#)を参照してください。

## ユーザ権限

SiteScope ユーザ・アカウントを設定するときに、SiteScope の管理者またはパワー・ユーザは、さまざまなユーザに必要な権限を設定できます。権限により、ユーザがアクセスできる SiteScope の領域が制限され、SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、警告、レポート、プリファレンス、リモート・サーバ、テンプレート、ダッシュボードなど）に対して実行できるアクションのタイプが制御されます。

**注:** 標準設定で、正規ユーザは自分のユーザ・プロパティおよび権限が付与されているルート・グループのみを表示できます。正規ユーザに「**ユーザ・プリファレンスの追加, 編集, 削除**」権限が付与されている場合（その結果、このユーザはパワー・ユーザになります）、ユーザは自分の設定と権限の編集、およびほかのユーザの設定と権限の作成および変更ができます。

SiteScope ではユーザ権限が拡張されました。各プリファレンス・タイプに特定の表示、編集、テスト権限があり、リモート・サーバには表示、編集、テスト権限があります。これによって、管理者またはパワー・ユーザは、選択したユーザのアクセスを特定のプリファレンス・タイプおよびリモート・サーバ・プロパティに制限できます。ユーザに特定のプリファレンスの表示権限がない場合、そのプリファレンスのタブは使用できません。

特定の権限と権限の間に依存関係があることを理解しておくことは、アクション・タイプの権限を選択する場合に重要です。編集権限とテスト権限は、常に対応する表示権限に依存します。たとえば、「リモート・サーバを追加、編集、削除」権限または「リモート・サーバのテスト」権限を選択する場合、「リモート・サーバを表示」権限が自動的に選択されます。反対に、「リモート・サーバを表示」権限をクリアすると、「リモート・サーバを追加、編集、削除」権限と「リモート・サーバのテスト」権限が自動的にクリアされます。

ユーザ権限は、[新規ユーザ・プロファイル] / [ユーザ・プロファイルの編集] ダイアログ・ボックスの[権限] パネルで設定します。SiteScope ユーザ権限の詳細については、「[\[新規ユーザプロファイル\] / \[ユーザプロファイルの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(754ページ)を参照してください。

パスワード要件パラメータ

パスワード要件を設定するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ> \groups\master.config で次のパラメータを設定します。

パラメータ	詳細
_adminMinimumLength = x	パスワードの長さは x 文字以上で指定する必要があります。
_adminRequireAlpha = (1,0)	<ul style="list-style-type: none"><li>• 0: パスワードに英字を含める必要はありません。</li><li>• 1: パスワードに英数字を含める必要があります。</li></ul>
_adminRequireNumber = (1,0)	<ul style="list-style-type: none"><li>• 0: パスワードに数字を含める必要はありません。</li><li>• 1: パスワードに数字を含める必要があります。</li></ul>
_adminRequirePunctuation = (1,0)	<ul style="list-style-type: none"><li>• 0: パスワードに句読点を含める必要はありません。</li><li>• 1: パスワードに句読点を含める必要があります。</li></ul>

タスク

SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法

このタスクでは、SiteScope ユーザ・プロファイルの作成に関する手順を説明します。


1. 前提条件

SiteScope ユーザ管理設定および権限を作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「ユーザ プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザでなければなりません。標準設定では、正規ユーザは「ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限を有していません。



ユーザ権限の詳細については、「[\[新規ユーザ プロファイル\] / \[ユーザ プロファイルの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(754ページ)を参照してください。

## 2. SiteScope ユーザ・プロファイルの作成

- a. [ユーザ管理プリファレンス] ページで、[新規ユーザ]  ボタンの横の矢印をクリックし、[新規ユーザ] を選択します。
- b. [メイン設定] パネルで、ユーザ名、ログイン名、およびパスワードを入力して、このユーザ・プロファイルでアクセス可能なグループを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規ユーザ プロファイル\] / \[ユーザ プロファイルの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(754ページ)を参照してください。

## 3. ユーザへの権限の割り当て - オプション

[権限] パネルでこのユーザに付与された権限を選択するか、または標準設定の権限（「**ユーザ権限を追加、編集、または削除します**」を除きすべての権限が付与）を使用します。

[OK] をクリックします。新しいユーザ・プロファイルがユーザ管理プリファレンス・リストに追加されます。

## 4. SiteScope へのログイン

新しいユーザ・プロファイルを使用して SiteScope にログインします。詳細については、「[SiteScope へのログイン](#)」(18ページ)を参照してください。

**注:** SiteScope のログイン・パスワードは大文字と小文字が区別されます。

SiteScope はダッシュボード・ビューに開き、関連するユーザ権限はそのユーザに帰属します。

## 5. ユーザのパスワードの変更 - オプション

- a. ユーザ・パスワードを変更するには、[ユーザ管理プリファレンス] ページでユーザ・プロファイルを右クリックし、[ユーザの編集] を選択します。
- b. [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックスに新しいパスワードを入力し、確認します。詳細については、「[\[新規ユーザ プロファイル\] / \[ユーザ プロファイルの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(754ページ)を参照してください。

新しいパスワードがパスワード設定ルールに従っていない場合はエラー・メッセージが表示され、パスワードは変更されません。パスワード設定ルールについては、「[パスワード要件パラメータ](#)」(747ページ)を参照してください。







関連タスク: 「[SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする方法](#)」(784ページ), 「[LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法](#)」(786ページ)

# UI の説明

## [ユーザ管理プリファレンス] ページ

このページでは、さまざまな対象者に異なる表示および編集権限を提供する複数のユーザ・アカウントを作成できます。



UI 要素	詳細
	<p><b>新規作成</b>: ボタンの横にある矢印をクリックして選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>新規ユーザ</b>: 新しいユーザ・プロフィールを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス</a>」(754ページ)を参照してください。</li> <li>• <b>新規ユーザ ロール</b>: 新しいユーザ・ロール・プロフィールを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">[新規ユーザ ロール プロファイル] / [ユーザ ロール プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス</a>」(768ページ)を参照してください。</li> </ul>
	<p><b>編集</b>: 選択したユーザまたはユーザ・ロール・プロフィールを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス</a>」(754ページ)および「<a href="#">[新規ユーザ ロール プロファイル] / [ユーザ ロール プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス</a>」(768ページ)を参照してください。</p>
	<p><b>ユーザ / ユーザ ロールの削除</b>: 選択したユーザまたはユーザ・ロール・プロフィールを削除します。</p>
	<p><b>ユーザ・ロールへコピー</b>: 既存の SiteScope ユーザ権限を新しいユーザ・ロールにコピーできます。</p> <p><b>注</b>: SiteScope ユーザはこれまで同様 LDAP サーバでユーザ・ログインとセキュリティ・グループを割り当てられる必要があります (LDAP ユーザは SiteScope にログオンするために固有の LDAP ユーザ名とパスワードを持っています)。</p>
	<p><b>すべて選択</b>: すべてのリストされたユーザとユーザ・ロール・プロフィールを選択します。</p>
	<p><b>選択を解除</b>: 選択を解除します。</p>
<b>標準設定</b>	<p><b>[標準設定]</b> の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>編集</b>: 標準設定の LDAP 認証設定を変更できる [ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックスを開きます。</li> <li>• <b>テスト</b>: LDAP サーバへの接続とユーザの認証をテストします。</li> <li>• <b>許可された LDAP ユーザを CSV として保存</b>: SiteScope へのログオン権限を持っているすべての LDAP ユーザのリストを CSV ファイルに保存できます。詳細については、「<a href="#">[CSV ファイル] ダイアログ・ボックスの SiteScope</a>」</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p><a href="#">LDAP ユーザの保存 :</a> (770ページ)を参照してください。</p> <p><b>注 :</b> このオプションは SiteScope 管理者でのみ使用できます。</p>
<b>表示名</b>	<p>〔表示ユーザ名〕または〔表示されたユーザ ロール名〕ボックスに提供されたユーザまたはユーザ・ロール・プロファイルのタイトル。</p> <p><b>注 :</b> ユーザ・プロファイルを設定する時、ユーザ名が提供されないと、〔ログイン名〕値が代わりに使用されます。</p>
<b>ログイン名 / ユーザ・ロール・コンテキスト</b>	<p>ユーザ・プロファイルのログイン名とユーザ・ロールの LDAP コンテキストを表示します。</p>
<b>ログインを無効にする</b>	<p>ログイン状態を表示します。チェック・ボックスがクリアされていると、このユーザ・プロファイルを使用した SiteScope へのアクセスは有効です。チェック・ボックスが選択されていると、このユーザ・プロファイルを使用した SiteScope へのアクセスは許可されません。</p>
<b>ユーザ・タイプ</b>	<p>ユーザのタイプ。さまざまなユーザ・タイプの詳細については、<a href="#">「ユーザ・タイプとユーザ・ロール・タイプ」</a> (745ページ)を参照してください。</p>

その他のユーザ管理 UI ページ:

- ・ [「\[ユーザ管理設定\] ダイアログ・ボックス」](#) (751ページ)
- ・ [「\[新規ユーザ プロファイル\] / \[ユーザ プロファイルの編集\] ダイアログ・ボックス」](#) (754ページ)
- ・ [「\[新規ユーザ ロール プロファイル\] / \[ユーザ ロール プロファイルの編集\] ダイアログ・ボックス」](#) (768ページ)
- ・ [「\[CSV ファイル\] ダイアログ・ボックスの SiteScope LDAP ユーザの保存 :](#) (770ページ)
- ・ [「\[ユーザの許可されているグループを選択\] ダイアログ・ボックス」](#) (771ページ)

## ヒント / トラブルシューティング

### アップグレードの注意事項 / 制限事項

- ・ SiteScope のユーザ・プリファレンス権限は、SiteScope で Business Availability Center バージョン 8.00 以前にレポートされる場合、SAM 管理ではサポートされません。
- ・ SiteScope の 10.10 以前のバージョンからアップグレードすると、権限値は次のように判断されま

- す。
- すべてのプリファレンス・タイプに「<プリファレンス・タイプ>の表示」権限が標準設定で選択される（SiteScope の以前のバージョンでは対応するプリファレンス権限がなかったため）。
  - すべてのプリファレンス・タイプの「<プリファレンス・タイプ>の編集」権限は、SiteScope の以前のバージョンの「プリファレンスの編集」権限に従って判断される。
  - すべてのプリファレンス・タイプの「<プリファレンス・タイプ>のテスト」権限は、SiteScope の以前のバージョンの「プリファレンスのテスト」権限に従って判断される。

ユーザ・アカウントの注意事項 / 制限事項

- 管理者アカウントは、SiteScope へのアクセス時に使用される標準設定のアカウントです。つまり、SiteScope が実行されているサーバ・アドレスとポート番号を要求するユーザは、標準設定で管理者アカウントにログインされます。このアカウントとその権限の使用を制限するには、ユーザ名とログイン・パスワードを含めるように管理者アカウント・プロフィールを編集する必要があります。SiteScope によって SiteScope にアクセスする前にログイン・ダイアログが表示されます。  
ユーザ名とログイン・パスワードを含めるように統合ビューア・アカウント・プロフィールを変更することを推奨します。
- ユーザ・ログイン名とパスワードを必要としない名前付きユーザ・アカウントを作成できます。これを作成するには、標準形式の新しいユーザ・プロフィールを作成し（「表示ユーザ名」を指定する）、[ログイン名]と[パスワード]ボックスは空白にします。この設定では、ユーザが SiteScope にアクセスしようとする、認証ダイアログが表示されます。[ログイン名]と[パスワード]ボックスを空白のままにして[ログイン]ボタンをクリックすると、この名前付きユーザとして認証されます。このユーザは、SiteScope ユーザ・インタフェースの右側上に **guest（ゲスト）**として表示されます。
- SiteScope 設定の不正な変更を防ぐため、正規ユーザ・アカウントの権限を制限する必要があります。
- ユーザ・ログイン名とパスワードは必ず英語の文字でなければなりません。

[ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、標準設定の LDAP ユーザ管理設定を設定できます。





アクセス方法	[プリファレンス] > [ユーザ管理プリファレンス] を選択します。[ユーザ管理プリファレンス] ツールバーで、[標準設定] > [編集] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• SiteScope の管理者または「ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します」権限が付与されたユーザのみが、LDAP ユーザ管理設定および権限を作成または変更できます。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プ</li></ul>

	<p><b>リファレンスを追加、編集、または削除します</b> 権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>LDAP サーバを設定する際には LDAP サーバ管理者に問い合わせることをお勧めします。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする方法</a>」(784ページ)</li> <li>「<a href="#">LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法</a>」(786ページ)</li> </ul>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a>」(744ページ)</li> <li>「<a href="#">[ユーザ管理プリファレンス] ページ</a>」(748ページ)</li> </ul>

## LDAP ユーザ管理設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>LDAP 認証の有効化</b>	<p>SiteScope ユーザを認証するために外部の LDAP サーバを使用できます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>LDAP サーバ URL</b>	<p>SiteScope 固有のパスワードではなく、一元化された LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスするための該当する LDAP サーバの URL。この SiteScope へのアクセスのパスワード認証は LDAP によって実行できます。</p> <p><b>例</b> : ldap://ldap.mydomain.com:389 または ldaps://ldap.mydomain.com:636 (SSL 接続を使用する時)。</p>
<b>LDAP 資格情報</b>	<p>LDAP サーバ認証資格情報を提供するオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>ユーザ名およびパスワードを使用</b> :手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。[<b>ユーザ名</b>] ボックスと [<b>パスワード</b>] ボックスに、LDAP サーバにアクセスするために使用されるユーザ名とパスワードを入力します。これによって、SiteScope は LDAP で検索クエリを実行できます。ユーザは LDAP の管理者、または LDAP の検索権限を付与されているユーザでなければなりません。</li> </ul> <p><b>例</b> : ユーザ名は [Domain]/[user_name] または [user_name]@[Domain] の形式にできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>事前定義された資格情報を選択</b> : LDAP サーバ用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します (標準設定のオプション)。[<b>資格情報プロファイル</b>] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[<b>資格情報の</b></li> </ul>

UI 要素	詳細
	<b>追加</b> をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、 <a href="#">「資格情報のプリファレンス」 (569ページ)</a> を参照してください。
<b>すべての LDAP ユーザの表示権限の有効化</b>	指定された LDAP コンテキストですべてのユーザに対して（特定の SiteScope ユーザ・ロールに割り当てられていないユーザに対しても）表示権限を有効にします。  <b>標準設定値</b> :選択されていない
<b>LDAP コンテキスト</b>	
	<b>新規 LDAP コンテキスト</b> :LDAP コンテキスト・テーブルの一番下に新しい行を追加します。これにより新しい LDAP コンテキストを追加できます。
	<b>LDAP コンテキストの削除</b> :選択した LDAP コンテキストを削除します。
	<b>上へ移動</b> : 選択した LDAP コンテキストを上へ移動することによって LDAP コンテキストの順序を変更できます。
	<b>下へ移動</b> : 選択した LDAP コンテキストを下へ移動することによって LDAP コンテキストの順序を変更できます。
<b>コンテキスト</b>	LDAP 内を検索するためにコンテキストの LDAP ルート・ノードを表示します。 <b>例</b> : DC=ldap,DC=server (DC はドメイン・コンポーネント)。 <b>注</b> : これらの設定をするときには LDAP サーバ管理者に問い合わせることをお勧めします。

## LDAP ユーザ管理の詳細設定



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
LDAP ユーザ管理の詳細設定のすべての標準設定値はアクティブ・ディレクトリ・システムに関連します。異なるサーバ・タイプを使用している場合には、関連する設定値について LDAP サーバ管理者に問い合わせください。	
<b>LDAP ユーザの</b>	LDAP ユーザ・ロール名に使用されるクエリ値。

UI 要素	詳細
objectClass	標準設定値 : user
LDAP ユーザ識別属性名	ログイン識別属性を持つ LDAP ユーザに使用されるクエリ値。 標準設定値 : sAMAccountName
LDAP グループの objectClass	LDAP グループに使用されるクエリ値（ロール・コンテキスト）。 標準設定値 : Group
LDAP アクティベーション キーの ID 属性	サイレント・ログイン認証用の LDAP 同一属性。このフィールドはアクティベーション・キー認証設定と使用した場合に限り使用されます。LDAP ユーザを識別するために一意の属性を入力する、または空白のままにしておくことができます。この場合 <b>userPrincipalName</b> 属性が使用されます。  アクティブ・キーを使用したサイレント・ログインの詳細については、 <a href="#">「LDAP 認証と承認」(782ページ)</a> の「サイレント認証」を参照してください。

## 「新規ユーザ プロファイル」 / 「ユーザ プロファイルの編集」 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しいユーザ・プロファイルを作成または既存のプロファイル編集できます。

アクセス方法	<p>「<b>プリファレンス</b>」 &gt; 「<b>ユーザ管理プリファレンス</b>」を選択します。「ユーザ管理プリファレンス」ページで、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 「<b>新規ユーザ</b>」  ボタンの横にある矢印をクリックして、「<b>新規ユーザ</b>」を選択する、または</li><li>・ 既存のユーザ・プロファイルを選択して、「<b>編集</b>」  ボタンをクリックします。</li></ul>
重要な情報	<p>現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「<b>ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します</b>」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「<b>ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します</b>」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。</p>

関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">「SiteScope ユーザ・プロフィールの作成方法」 (747ページ)</a></li><li>• <a href="#">「SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする方法」 (784ページ)</a></li></ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」 (744ページ)</a></li><li>• <a href="#">「 [ユーザ管理プリファレンス] ページ」 (748ページ)</a></li></ul>



## メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
表示ユーザ名	ユーザ・プロフィールのタイトル。タイトルはユーザのリストに表示されます。タイトルを入力しない場合は、 <b>[ログイン名]</b> の値が表示名として使用されます。
ログイン名	<p>このプロフィールを使用して SiteScope にアクセスするための SiteScope ログイン名。</p> <p>または、関連する LDAP セルに値を入力して、LDAP 認証を使用して SiteScope にログインできます。</p> <p><b>使用できる文字:</b>英数字。</p> <p><b>注:</b> ユーザ・プロフィールの作成時に使用可能な文字以外の文字を入力してもエラーにはなりません。ただし、そのログイン名を使用して SiteScope にログインすることはできません。</p>
パスワード	<p>このユーザが SiteScope にログインするためのパスワード。</p> <p>ユーザ認証に LDAP を使用する場合、ここにパスワードを入力する必要はありません。ユーザ・アカウントにログインする場合、ユーザは <b>[SiteScope ログイン]</b> ダイアログ・ボックスに LDAP パスワードを入力します。</p> <p>パスワード要件の詳細については、<a href="#">「パスワード要件パラメータ」 (747ページ)</a> を参照してください。</p> <p>すべての SiteScope パスワードは、3DES (TDES (Triple Data Encryption Algorithm) と呼ばれます) を使用して暗号化されます。TDES 鍵は SiteScope に保存されますが、変更はできません。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』 (&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\sisdocs\doc_lib\Get_Documentation.htm) の「SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化」を参照してください。</p> <p><b>注:</b></p>


UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope のログイン・パスワードは大文字と小文字が区別されます。</li> <li>次のいずれかの特殊文字をパスワードで使用しているユーザの場合、サイレント・ログインはサポートされません。・（アポストロフィ）, “（二重引用符）または /（バックスラッシュ）。</li> </ul>
パスワードの確認	<p>[パスワード] ボックスで入力したパスワードの確認。このパスワードは、新しいユーザ・プロファイルを作成するとき、または既存のユーザ・プロファイルのパスワードを変更するときに使用されます。</p>
LDAP サービスプロバイダ	<p>SiteScope 固有のパスワードではなく、一元化された LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスするための該当する LDAP サーバの URL。この SiteScope へのアクセスのパスワード認証は LDAP によって実行できます。</p> <p>各 LDAP サービス・プロバイダのホスト名/IP アドレスをセミコロン (;) で区切って入力することにより、複数の LDAP サービス・プロバイダを指定できます。SiteScope は、指定された LDAP サービス・プロバイダのリストを読み取り、そのリストから使用できるプロバイダを探します。</p> <p><b>例:</b> ldap://ldap.mydomain.com:389。</p> <p><b>注:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>この場合も、ユーザには定義された SiteScope ログイン名が必要です。</li> <li>ユーザは、LDAP を使用して SiteScope にアクセスできますが、LDAP サーバでユーザに割り当てられたユーザ・ログインとセキュリティ・プリンシパルが必要です。</li> </ul>
LDAP セキュリティ・プリンシパル	<p>LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスするとき、このユーザのセキュリティ・プリンシパル。</p> <p><b>例:</b> uid=testuser,ou=TEST,o=this-company.com</p> <p><b>注:</b> LDAP サーバでは、ユーザを特殊文字で定義できます。ただし、SiteScope では、ユーザ名に等号記号 (=), セミコロン (;), 引用符 (") を含むユーザはサポートされていません。等号記号 (=), セミコロン (;), 引用符 (")。無効な文字を含むユーザ名では SiteScope にログオンできません。</p>
ユーザ・ロールを割り当てる	<p>ユーザにユーザ・ロールと同じ権限を割り当てるように選択します。リストには、SiteScope に定義されたすべてのユーザ・ロール名が表示されます。ユーザ・ロールを選択すると、<b>「ログインを無効にする」</b>、<b>「許可されているグループ」</b>、および<b>「権限」</b>設定を選択に使用できなくなります。</p> <p>ユーザ・ロールの作成の詳細については、<b>「<a href="#">新規ユーザ ロール プロファイル</a>」 / <a href="#">「ユーザ ロール プロファイルの編集」</a> ダイアログ・ボックス</b> (768ページ)</p>



UI 要素	詳細
	<p><a href="#">シ</a>を参照してください。</p> <p><b>例:</b> 「<b>ユーザ プリファレンスを追加, 編集, または削除します</b>」 権限を使用して Super User Role が作成され, このロールがユーザに割り当てられていると, ユーザはスーパー・ユーザ権限を継承します (ユーザ・タイプは Inherited from Super User Role と表示されます)。</p>
<b>ログインを無効にする</b>	<p>このユーザ名とパスワードを使用した SiteScope へのアクセスを無効にします。このユーザ・プロファイルを使用したアクセスを有効にするには, チェック・ボックスをクリアします。</p>
<b>許可されているグループ</b>	<p>このユーザ・プロファイルでアクセスできるグループのリストを表示します。</p> <p><b>新規</b>  ボタンをクリックして [ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックスを開き, グループを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については, 「<a href="#">[ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックス</a>」 (771ページ) を参照してください。</p> <p>グループへのユーザ・アクセスを削除するには, グループを選択し, <b>[削除]</b>  ボタンをクリックします。リスト内のすべてのグループを削除することはできません。</p> <p><b>標準設定値:</b> すべてのグループにアクセスできるように SiteScope ノードが選択されます。</p> <p><b>注:</b> このフィールドは管理者の設定では表示されません。</p>

## 権限

ユーザのアクション権限を決定できます。権限を付与するには, 権限または権限グループの左側にあるチェック・ボックスを選択します。

<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>管理者にはすべての権限があり, またこれらの権限は変更できないため, 管理者のアカウントに [権限] パネルは表示されません。</li> <li>現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは, SiteScope の管理者か「<b>ユーザ・プリファレンスを追加, 編集, または削除します</b>」権限が付与されたユーザのみです。</li> <li>[権限] パネルのすべての権限が標準設定で選択されます。ただし, 「<b>ユーザ・プリファレンスを追加, 編集, または削除します</b>」権限は, SiteScope 管理者が付与する必要があります。</li> <li>権限グループの左側に表示される  アイコンは, そのルート・グループ内</li> </ul>
--------------	--

	に含まれる権限で選択されていない権限があることを示します。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>「<a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a>」(744ページ)</li> <li>「<a href="#">[ユーザ管理プリファレンス] ページ</a>」(748ページ)</li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>グループ</b>	
グループを追加、編集、または削除します	<p>新しいグループの追加、既存のモニタ・グループの名前変更、コピー、削除ができます。詳細については、<a href="#">「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」</a>(258ページ)を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
グループのリフレッシュ	<p>スケジュールに関係なく、グループ内のすべてのモニタをリフレッシュまたは強制的に実行できます。詳細については、<a href="#">「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」</a>(258ページ)を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
グループの無効化	<p>グループを無効化できます。詳細については、<a href="#">「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」</a>(1063ページ)を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
<b>モニタ</b>	
モニタを追加、編集、または削除します	<p>新しいモニタの追加、既存のモニタ設定の編集、およびモニタの削除ができます。詳細については、<a href="#">「モニタとグループ」</a>(253ページ)を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p> <p>注：このオプションと【<b>モニタの編集（新規モニタ作成不可）</b>】オプションの両方が選択された場合は、このオプションが優先されます。</p>
モニタを編集または削除	<p>新しいモニタの作成が可能でなくても、既存のモニタ設定の編集または削除ができます。このオプションを選択した場合、【<b>モニタを追加、編集、または削除します</b>】オプションをクリアする必要があります。クリアしないと、【<b>モニタを追加、編集、または削除します</b>】オプションが優先され新しいモニタを使用できません。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p> <p>注：このオプションを選択すると、テンプレート・モードでの作業時に新しい</p>

UI 要素	詳細
	警告を作成できない状態が解除されます。ただし、 <b>【テンプレートを追加、編集、または削除します】</b> もクリアされている場合を除きます。
<b>モニタをリフレッシュします</b>	<p>スケジュールに関係なく、個々のモニタをリフレッシュまたは強制的に実行できます。詳細については、<b>「モニタとグループ」(253ページ)</b>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>モニタの確認</b>	<p>確認機能を使用して、グループの詳細ページにモニタの状態についてコメントできます。詳細については、<b>「モニタの状態の確認」(1049ページ)</b>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>モニタの無効化</b>	<p>グループ内のモニタを無効化できます。<b>「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」(1063ページ)</b>。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>警告</b>	
<b>警告リストの表示</b>	<p>警告リスト・ページに、現在設定されている警告定義のリストを表示できます。これは、警告を編集、テスト、無期限に無効化するために必要なルート権限です。詳細については、<b>「SiteScope 警告ページ」(1253ページ)</b>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>警告を追加、編集、または削除します</b>	<p>新しい警告の追加、既存の警告の編集または削除ができます。このオプションは、「<b>警告リストの表示</b>」権限に依存します。警告の追加または編集の詳細については、<b>「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」(1256ページ)</b>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>警告アクションは警告アクション・プリファレンスの権限によって制御されないため、この権限は「<b>電子メール、ページャ、および SNMP のリストの表示</b>」権限には依存しません。</li> <li>このオプションと「<b>警告を編集または削除</b>」オプションの両方が選択された場合は、このオプションが優先されます。</li> </ul>

UI 要素	詳細
警告を編集または削除	<p>新しい警告を作成できない状態で既存の警告設定の編集または削除ができます。このオプションは、「警告リストの表示」権限に依存します。このオプションを選択した場合、【警告を追加、編集、または削除します】オプションをクリアする必要があります。選択しない場合、【警告を追加、編集、または削除します】が優先され、ユーザは新しい警告を作成できます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p> <p><b>注</b> : このオプションを選択すると、テンプレート・モードでの作業時に新しい警告を作成できない状態が解除されます。ただし、【テンプレートを追加、編集、または削除します】もクリアする場合を除きます。</p>
警告のテスト	<p>既存の警告定義をテストできます。このオプションは、「警告リストの表示」権限に依存します。詳細については、<a href="#">「SiteScope 警告ページ」(1253ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
警告を無期限に無効化	<p>1つ以上の警告を無期限に無効化または有効化できます。このオプションは、「警告リストの表示」権限に依存します。詳細については、<a href="#">「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」(1256ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
警告を一時的に無効化	<p>1つ以上の警告を一時的に無効化または有効化できます。詳細については、<a href="#">「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」(1256ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
レポート	
管理レポートの生成	<p>定期管理レポートを手動で作成できます。詳細については、<a href="#">「管理レポート」(1343ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
管理レポートを追加、編集、または削除します	<p>新しいレポート定義の追加、既存のレポート定義の編集または削除ができます。詳細については、<a href="#">「管理レポート」(1343ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
クイック・レポートの生成	<p>一時的な SiteScope 管理レポートを作成できます。詳細については、<a href="#">「クイック・レポート」(1348ページ)</a>を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
	標準設定値 :選択されている
警告レポートの生成	<p>一時的なクイック警告レポートを作成できます。詳細については、<a href="#">「警告レポート」 (1356ページ)</a>を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
モニタ・サマリ・レポートの生成	<p>モニタの参照フォームおよびモニタ・サマリ・レポートを使用できます。詳細については、<a href="#">「モニタ・サマリ・レポート」 (1352ページ)</a>を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
サーバ中心のレポートを作成	<p>サーバ中心のレポートを作成できます。詳細については、<a href="#">「サーバ中心のレポート」 (1362ページ)</a>を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
リモート・サーバ	
リモート・サーバのリストを表示	<p>SiteScope で設定されているリモート・サーバのリストを表示できます。これは、リモート・サーバを編集またはテストするために必要なルート権限です。詳細については、<a href="#">「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 (546ページ)</a>を参照してください。</p> <p>このオプションが選択されていない場合、次のエンティティは表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>「リモート サーバ」</b> コンテキストのリモート・サーバ・ツリーおよびリモート・サーバ・ページ。</li> <li>・ <b>「モニタ」</b> コンテキストの<b>「リモート サーバの追加」</b> ボタン。</li> </ul> <p>標準設定値 :選択されている</p>
リモート・サーバを追加、編集、または削除します	<p>リモート・サーバを SiteScope に追加したり、リモート・サーバ設定を編集したりできます。このオプションは、<b>「リモート・サーバのリストを表示」</b> 権限に依存します。詳細については、<a href="#">「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 (546ページ)</a>を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>リモート・サーバの接続をテストできます。このオプションは、<b>「リモート・サーバのリストを表示」</b> 権限に依存します。詳細については、<a href="#">「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 (546ページ)</a>を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
	標準設定値 :選択されている
<b>一般プリファレンス</b>	
一般プリファレンスの表示	<p>一般プリファレンスを表示できます。これは、一般プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、<a href="#">「一般プリファレンス」 (590 ページ)</a>を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
一般プリファレンスの編集	<p>一般プリファレンスを編集できます。このオプションは、「一般プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、<a href="#">「一般プリファレンス」 (590 ページ)</a>を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
<b>インフラストラクチャ・プリファレンス</b>	
インフラストラクチャ・プリファレンスの表示	<p>インフラストラクチャ・プリファレンスを表示できます。これは、インフラストラクチャ・プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、<a href="#">「インフラストラクチャ・プリファレンス」 (622 ページ)</a>を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
インフラストラクチャ・プリファレンスの編集	<p>インフラストラクチャ・プリファレンスを編集できます。このオプションは、「インフラストラクチャ・プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、<a href="#">「インフラストラクチャ・プリファレンス」 (622 ページ)</a>を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
<b>統合プリファレンス</b>	
統合プリファレンスの表示	<p>統合プリファレンスを表示できます。これは、統合プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、<a href="#">「[統合プリファレンス] ページ」 (707 ページ)</a>を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
統合プリファレンスの編集	<p>統合プリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「統合プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、<a href="#">「[統合プリファレンス] ページ」 (707 ページ)</a>を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>

UI 要素	詳細
<b>高可用性プリファレンス</b>	
高可用性プリファレンスを表示	<p>高可用性プリファレンスを表示できます。これは、高可用性プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、<a href="#">「高可用性プリファレンス」 (611ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
高可用性プリファレンスを編集	<p>高可用性プリファレンスを編集できます。このオプションは、「高可用性プリファレンスを表示」権限に依存します。詳細については、<a href="#">「高可用性プリファレンス」 (611ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>ログ・プリファレンス</b>	
ログ・プリファレンスの表示	<p>ログ・プリファレンスを表示できます。これは、ログ・プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、<a href="#">「ログ・プリファレンス」 (710ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
ログ・プリファレンスの編集	<p>ログ・プリファレンスを編集できます。このオプションは、「ログ・プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、<a href="#">「ログ・プリファレンス」 (710ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンス</b>	
電子メール、ページャ、HTTP および SNMP のリストを表示	<p>電子メール、ページャ、HTTP および SNMP プロファイル・リストを表示できます。これは、電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスを編集またはテストするために必要なルート権限です。</p> <p>詳細については、<a href="#">「[電子メール プリファレンス] ページ」 (577ページ)</a>、<a href="#">「[HTTP プリファレンス] ページ」 (603ページ)</a>、<a href="#">「SNMP プリファレンス」 (734ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
電子メール、ページャ、HTTP、SNMP のプリファレンス	<p>電子メール、ページャ、HTTP、および SNMP のプリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「電子メール、ページャ、HTTP、SNMP リストを表示」権限に依存します。</p> <p>詳細については、<a href="#">「[電子メール プリファレンス] ページ」 (577ページ)</a>、</p>



UI 要素	詳細
を追加、編集、または削除します	<p>「<a href="#">[HTTP プリファレンス] ページ</a>」(603ページ), 「<a href="#">SNMP プリファレンス</a>」(734ページ)を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
電子メール、ページ、HTTP、SNMP のプリファレンスをテスト	<p>電子メール, , HTTP, SNMP などの外部サービスとの通信のプリファレンス設定をテストできます。このオプションは, 「<b>電子メール、ページ、HTTP、SNMP リストを表示</b>」権限に依存します。</p> <p>詳細については, 「<a href="#">[電子メールプリファレンス] ページ</a>」(577ページ), , 「<a href="#">[HTTP プリファレンス] ページ</a>」(603ページ), 「<a href="#">SNMP プリファレンス</a>」(734ページ)を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
<b>共通イベント・マッピング</b>	
共通イベント・マッピングの表示	<p>共通イベント・マッピングを表示できます。これは, 共通イベント・マッピングを編集するために必要なルート権限です。詳細については, 「<a href="#">共通イベント・マッピング</a>」(556ページ)を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
共通イベント・マッピングを追加、編集、または削除します	<p>共通イベント・マッピングを編集できます。このオプションは, 「<b>共通イベント・マッピングの表示</b>」権限に依存します。詳細については, 「<a href="#">共通イベント・マッピング</a>」(556ページ)を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
<b>スケジュール・プリファレンス</b>	
スケジュール・リストの表示	<p>スケジュール・プリファレンスを表示できます。これは, スケジュール・プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については, 「<a href="#">スケジュール・プリファレンス</a>」(723ページ)を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
スケジュール・プリファレンスを追加、編集、または削除します	<p>スケジュール・プリファレンスを作成または編集できます。このオプションは, 「<b>スケジュール・リストの表示</b>」権限に依存します。詳細については, 「<a href="#">スケジュール・プリファレンス</a>」(723ページ)を参照してください。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>
<b>ユーザ管理プリファレンス</b>	



UI 要素	詳細
ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します	<p>SiteScope 管理者以外のユーザによるユーザ・プリファレンスの編集および削除が可能になります。パワー・ユーザは自分のアカウントを削除できません。この権限のないユーザには、[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックスが読み取り専用として表示され、現在のユーザが権限を持つ設定およびルート・グループが表示されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>資格情報のプリファレンス</b>	
資格情報リストの表示	<p>資格情報のプリファレンスを表示できます。これは、資格情報のプリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、「<a href="#">[資格情報のプリファレンス] ページ</a>」(573ページ)を参照してください。</p> <p>このオプションが選択されていない場合、次のエンティティは表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ [プリファレンス] コンテキストの <b>[資格情報のプリファレンス]</b> タブ。</li> <li>・ [リモート サーバ] および [モニタ] コンテキストの <b>[資格情報の追加]</b> ボタン。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
資格情報プリファレンスを追加、編集、または削除します	<p>資格情報のプリファレンスを作成、編集、または削除できます。このオプションは、「資格情報リストの表示」権限に依存します。詳細については、「<a href="#">[資格情報のプリファレンス] ページ</a>」(573ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>証明書管理</b>	
証明書リストの表示	<p>[証明書管理] ページを表示できます。これは、証明書管理を編集するために必要なルート権限です。詳細については、「<a href="#">証明書管理</a>」(550ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
証明書リストの編集	<p>証明書管理を使用して証明書を管理できます。このオプションは、「証明書リストの表示」権限に依存します。詳細については、「<a href="#">証明書管理</a>」(550ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>タグ</b>	

UI 要素	詳細
<b>タグの表示</b>	<p>定義されたタグのリストを確認するための新規タグ/SiteScope タグの編集ダイアログ・ボックスを表示できます。これは、タグを編集するために必要なルート権限です。詳細については、<a href="#">「タグの検索 / フィルタ」 (730ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>タグを追加、編集、または削除します</b>	<p>検索/フィルタ・タグとタグ値を追加、編集、削除できます。このオプションは、「タグの表示」権限に依存します。詳細については、<a href="#">「タグの検索 / フィルタ」 (730ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>テンプレート</b>	
<b>テンプレートの表示</b>	<p>モニタ・ツリーにあるテンプレートを表示できます。これは、テンプレートを編集するために必要なルート権限です。詳細については、<a href="#">「テンプレート・ツリー」 (42ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>テンプレートを追加、編集、または削除します</b>	<p>テンプレートを追加、編集、削除できます。このオプションは、「テンプレートの表示」権限に依存します。詳細については、<a href="#">「テンプレート・ツリー」 (42ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>ダッシュボード</b>	
<b>お気に入りの編集</b>	<p>SiteScope ダッシュボード・ビューのお気に入りのビュー・リストに、項目を追加または削除できます。詳細については、<a href="#">「[ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックス」 (1065ページ)</a>および <a href="#">「[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス」 (1062ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>レイアウトの編集</b>	<p>ユーザは SiteScope ダッシュボードでフィールドを永久に無効にできます。たとえば、監視対象サーバの IP アドレスを特定のユーザに表示しない場合には、ダッシュボードで Target 列を永久に非表示にできます。この権限を持たないユーザは無効になっている列を見ることができません。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>モニタ履歴の表</b>	<p>モニタの最近の履歴レポートを表示できます。詳細については、<a href="#">「SiteScope</a></p>



UI 要素	詳細
示	<p><a href="#">ダッシュボード - 【モニタ履歴】ビュー</a> (1075ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>イベント・コンソール</b>	
イベント・コンソール・プリファレンスの表示	<p>イベント・コンソール・プリファレンスを表示、編集できます。詳細については、<a href="#">「イベント・コンソール・プリファレンス」</a> (584ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
割り当てられたイベントの管理	<p>ユーザに割り当てられたイベントを管理できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Assign event to a user:</b> <a href="#">「【イベントの詳細】ダイアログ・ボックス」</a> (1124ページ)を使用して、割り当て済みのイベントの割り当ておよび割り当て解除を行うことができます。</li> <li>• <b>Edit event details:</b> <a href="#">「【イベントの詳細】ダイアログ・ボックス」</a> (1124ページ)を使用して、ユーザに現在割り当てられているイベントの属性を更新できます。この権限には、<a href="#">【割り当てユーザ】</a>属性の更新機能は含まれません。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> :すべての権限が選択されている</p>
割り当てられていないイベントの管理	<p>ユーザに割り当てられていないイベントを管理できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Assign event to a user:</b> <a href="#">「【イベントの詳細】ダイアログ・ボックス」</a> (1124ページ)を使用して、現在割り当てられていないイベントを割り当てることができます。</li> <li>• <b>Edit event details:</b> <a href="#">「【イベントの詳細】ダイアログ・ボックス」</a> (1124ページ)を使用して、ユーザに現在割り当てられていないイベントの属性を更新できます。この権限には、<a href="#">【割り当てユーザ】</a>属性の更新機能は含まれません。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> :すべての権限が選択されている</p>
<b>その他</b>	
ツールを使用	<p>ツール・コンテナにある SiteScope ツールを使用して、モニタ設定に関する問題のトラブルシューティングおよび診断を行えます。詳細については、<a href="#">「SiteScope ツール」</a> (112ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
ログの表示	<p>警告によって送信された SiteScope モニタでレポートされた未処理のデータ、</p>

UI 要素	詳細
	<p>およびその他の SiteScope ログを表示できます。詳細については、<a href="#">「SiteScope ログ・ファイル」 (1154ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>サーバ統計の表示</b>	<p>SiteScope サーバのパフォーマンス, 安定性, 状況の分析, およびボトルネックのデバッグに使用できる SiteScope の内部データを表示できます。詳細については、<a href="#">「SiteScope サーバ統計」 (1153ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>モニタ・ツールを使用</b>	<p>特定のモニタ・タイプを設定または編集するときに SiteScope ツールを使用できます。モニタ・タイプに診断ツールが使用できる場合は、グループの詳細ページで、そのモニタのダッシュボード・ツールバーの【<b>ツール</b>】 ボタンが有効になります。詳細については、<a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>注</b> :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 診断ツールによって、機密のシステム情報が表示される場合があります。</li> <li>・ このオプションは、「<b>ツールを使用</b>」権限に依存します。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>SiteScope ログ・グラバのダウンロード実行結果</b>	<p>SiteScope ログ・グラバのダウンロード実行結果をダウンロードすることができます。SiteScope ログ・グラバ・ツールの詳細については、<a href="#">「SiteScope ログ・グラバ・ツール」 (147ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>注</b> : SiteScope ログ・グラバの実行結果ファイルによって、エンコードされたパスワードなど、機密の設定情報が表示される場合があるため、この権限は、信頼されていないユーザには付与しません。</p>

## [新規ユーザ ロール プロファイル] / [ユーザ ロール プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス


このダイアログ・ボックスでは、新しいユーザ・ロール・プロファイルを作成または既存のユーザ・ロール・プロファイルを編集できます。ユーザ・ロールは、外部の LDAP サーバを使用するときに SiteScope ユーザのグループを管理するために使用されます。


--	--

アクセス方法	<p>【プリファレンス】 &gt; 【ユーザ管理プリファレンス】を選択します。【ユーザ管理プリファレンス】ページで、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・【新規ユーザ】  ボタンの横にある矢印をクリックして、【新規ユーザロール】を選択する、または</li> <li>・既存のユーザ・ロール・プロファイルを選択して、【編集】  ボタンをクリックします。</li> </ul>
重要な情報	<p>現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスの編集」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。</p>
関連タスク	<p><a href="#">「SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする方法」 (784ページ)</a></p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」 (744ページ)</a></li> <li>・ <a href="#">「【ユーザ管理プリファレンス】 ページ」 (748ページ)</a></li> </ul>

## メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
表示されたユーザ・ロール名	<p>ユーザ・ロール・プロファイルのタイトル。タイトルはユーザのリストに表示されます。</p>
ユーザ・ロール・コンテキスト	<p>LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスする時の、このユーザのセキュリティ・グループ。ユーザ・ロール・コンテキストは SiteScope が LDAP 内を検索するために使用するプロパティです。</p> <p>例：uid=testuser,ou=TEST,o=this-company.com</p>
ログインを無効にする	<p>このユーザ名とパスワードを使用した SiteScope へのアクセスを無効にします。このユーザ・ロール・プロファイルを使用したアクセスを有効にするには、チェック・ボックスをクリアします。</p>
許可されているグループ	<p>このユーザ・ロール・プロファイルでアクセスできるグループのリストを表示します。新規  ボタンをクリックして【ユーザの許可されているグループを選択】ダイアログ・ボックスを開き、グループを選択します。ユーザ・インタ</p>

UI 要素	詳細
	<p>フェースの詳細については、「<a href="#">「[ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックス」 (771ページ)</a>」を参照してください。</p> <p>グループへのユーザ・アクセスを削除するには、グループを選択し、<b>[削除]</b>  ボタンをクリックします。リスト内のすべてのグループを削除することはできません。</p> <p><b>標準設定値</b> :すべてのグループにアクセスできるように SiteScope ノードが選択されます。</p> <p><b>注</b> : このフィールドは管理者の設定では表示されません。</p>

## 権限

ユーザのロール権限を決定できます。権限を付与するには、権限または権限グループの左側にあるチェック・ボックスを選択します。

たとえば、スーパー・ユーザ・ロールを作成するには、「**ユーザ プリファレンスを追加、編集、または削除します**」権限を選択します。このタイプのユーザは、管理者以外のユーザを作成、編集、削除できます。自分のユーザ・ロールも編集できますが、削除できません。管理者とパワー・ユーザは、いずれもスーパー・ユーザ・ロールを作成できます。スーパー・ユーザ・ロールは複数存在する場合があります。

各権限のリストと説明については、「[「\[新規ユーザ プロファイル\] / \[ユーザ プロファイルの編集\] ダイアログ・ボックス」 \(754ページ\)](#)」を参照してください。

## [CSV ファイル] ダイアログ・ボックスの SiteScope LDAP ユーザの保存:

このダイアログ・ボックスによって、SiteScope 管理者は SiteScope にログオンする権限を持っているすべての LDAP ユーザのリストを CSV ファイルに保存できます。

アクセス方法	<p><b>[プリファレンス] &gt; [ユーザ管理プリファレンス]</b> を選択します。<b>[ユーザ管理プリファレンス]</b> ツールバーで、<b>[標準設定] &gt; [許可された LDAP ユーザを CSV として保存]</b> を選択します。</p>
重要な情報	<p>SiteScope の管理者または「<b>ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します</b>」権限が付与されたユーザのみが、LDAP ユーザ管理設定および権限を作成または変更できます。標準設定で、正規ユーザには「<b>ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します</b>」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。</p>

関連タスク	<a href="#">「SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする方法」 (784ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」 (744ページ)</a></li><li>・ <a href="#">「 [ユーザ管理プリファレンス] ページ」 (748ページ)</a></li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
CSV ファイル	SiteScope にログオンできる LDAP ユーザを保存する CSV ファイル名。このファイルには、ユーザ・ロール名、LDAP グループ（ロール・コンテキスト）、およびユーザ同一属性（ログイン）の 3 列が含まれます。
選択	ボタンをクリックして、既存の CSV ファイルを選択する、または LDAP ユーザのリストを保存する新しいファイル名を入力します。






## 「ユーザの許可されているグループを選択」 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ユーザのアクセスを許可するグループ、サブグループまたは両方を選択できます。個々のグループまたはサブグループの横にあるボックスを選択して、そのグループへのアクセスを可能にします。標準設定では、すべてのグループへのアクセスが許可されています。ユーザ・アクセスをいくつかのグループに制限するには、SiteScope ノードのチェック・ボックスをクリアして、アクセスを可能にする SiteScope ノードの下のグループを個別に選択します。

アクセス方法	<a href="#">「プリファレンス」</a> > <a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」</a> を選択します。 <a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」</a> ページで、 <a href="#">「新規ユーザ」</a> をクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「<b>ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します</b>」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「<b>ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します</b>」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。</li><li>・ グループが選択されている場合は、グループの各サブグループも許可されているグループのリストに追加されます。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする方法」 (784ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」 (744ページ)</a></li></ul>

	<ul style="list-style-type: none"><li>• 「<a href="#">[ユーザ管理プリファレンス] ページ</a>」 (748ページ)</li></ul>
--	---

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	個々の SiteScope サーバを表します。 <b>標準設定値</b> : 現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない）を表します。 モニタ・グループまたはサブグループに警告が設定されている場合、グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。 モニタ・グループまたはサブグループに管理レポートが設定されている場合、グループ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。
	SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる利用可能な状況モニタの集合を表します。



## 第59章: SiteScope での多言語化

SiteScope は多言語化 (I18N) 環境で使用できます。

### 学習事項

多言語ユーザ (MLU) インタフェースのサポート

SiteScope ユーザ・インタフェースは、Web ブラウザで次の言語で表示できます。

言語	Web ブラウザの言語設定
ブラジル・ポルトガル語	ポルトガル語 (ブラジル) [pt-BR]
オランダ語	オランダ語 [nl]
英語	英語
フランス語	フランス語 [fr]
ドイツ語	ドイツ語 [de]
イタリア語	イタリア語 [it]
韓国語	韓国語 [ko]
日本語	日本語 [ja]
ロシア語	ロシア語 [ru]
簡体中国語	中国語 (中国) [zh-cn] , 中国語 (シンガポール) [zh-sg]
スペイン語	スペイン語 [es]

SiteScope の表示方法を指定するには、ブラウザの言語設定オプションを使用します。言語設定の選択は、ユーザのローカル・マシンだけに影響があり、SiteScope マシンや同じ SiteScope へのほかのユーザ・アクセスには影響しません。ユーザ・インタフェースの表示言語の設定の詳細については、[「特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示方法」 \(776ページ\)](#)を参照してください。

**注:** 言語は、SiteScope へのログオン時に決定されます。ログインした後でブラウザの言語設定

を変更しても、ログアウトしてログインしなおさないと有効にはなりません。

多言語化がサポートされているモニタ

次のモニタは多言語化がサポートされています。認定されているモニタは、アスタリスク (\*) で示しています。

Windows オペレーティング・システムでサポートされているモニタ

- \*CPU モニタ
- データベース・カウンタ・モニタ
- \*データベース・クエリ・モニタ
- \*ディスク容量モニタ
- \*DNS モニタ
- \*e ビジネス・トランザクション・モニタ
- \*ファイル・モニタ
- \*FTP モニタ
- リンク・チェック・トランザクション・モニタ
- \*ログ・ファイル・モニタ
- \*メモリ・モニタ
- Microsoft IIS サーバ・モニタ
- Microsoft SQL Server モニタ
- Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ
- Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ
- Microsoft Windows リソース・モニタ
- Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタ
- \*Oracle 10g アプリケーション・サーバ・モニタ
- \*Oracle データベース・モニタ
- \*Ping モニタ
- \*ポート・モニタ
- \*スクリプト・モニタ
- \*サービス・モニタ
- SNMP モニタ
- SNMP トラップ・モニタ
- UDDI モニタ
- \*URL モニタ

- URL 内容モニタ
- URL リスト・モニタ
- URL シーケンス・モニタ
- \*VMware パフォーマンス・モニタ
- Web スクリプト・モニタ

UNIX オペレーティング・システムでサポートされているモニタ

- CPU モニタ
- データベース・クエリ・モニタ
- ディスク容量モニタ
- ログ・ファイル・モニタ
- ポート・モニタ
- スクリプト・モニタ
- サービス・モニタ
- UNIX リソース・モニタ
- URL モニタ
- URL 内容モニタ
- URL シーケンス・モニタ

## タスク

SiteScope の英語以外のロケールの設定方法

このタスクでは、SiteScope を英語以外のロケールに設定する手順について説明します。

### 1. ロケールの版の設定変更

モニタ・ツリーで、**[プリファレンス]** > **[一般プリファレンス]** > **[一般設定]** を選択します。**[国際化対応版]** を選択し、**[保存]** をクリックします。SiteScope を再起動します。これにより、SiteScope が複数の文字セットに対応するようになります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、**「一般プリファレンス」(590ページ)**の「一般設定」を参照してください。

### 2. 新しいロケールの時間と日付の設定

SiteScope の新しいロケールの時間と日付を設定できます。

- a. **< SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config** をテキスト・エディタで開きます。
- b. `_localeCountry=` というエントリを見つけ、大文字 2 文字の ISO-3166 国コードを割り当てます。例: `_localeCountry=US`。国コードのリストは、一般公開されている多くの Web サイトで入手できます。

- c. `_localeLanguage=` というエントリを見つけ、小文字 2 文字の ISO-639 言語コードを割り当てます。例: `_localeLanguage=en`。言語コードのリストは、一般公開されている多くの Web サイトで入手できます。
  - d. ファイルを保存し、SiteScope を再起動します。
3. 特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示  
SiteScope ユーザ・インタフェースを表示する言語設定を選択します。  
このタスクの実行方法の詳細については、「[特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示方法](#)」(776ページ)を参照してください。
  4. 結果  
SiteScope が複数の外国語の文字セットに対応するように設定されます。時間と日付の設定はロケール固有の形式で表示され、ユーザ・インタフェースは外国語で表示されます。

### 特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示方法

このタスクでは、SiteScope ユーザ・インタフェースを表示する言語設定を選択する方法を説明します。

**注:** サポートされている言語のリストについては、「[多言語ユーザ \(MLU\) インタフェースのサポート](#)」(773ページ)を参照してください。

1. ローカル・マシンに必要な言語のフォントがインストールされていない場合はインストールします。フォントがインストールされていない言語を Web ブラウザで選択すると、SiteScope ユーザ・インタフェースでは、ローカル・マシンの標準設定の言語が使用されます。  
たとえば、ローカル・マシンの標準設定の言語が英語である場合に、日本語を使用するように Web ブラウザを設定するとします。日本語のフォントがローカル・マシンにインストールされていない場合、SiteScope ユーザ・インタフェースは英語で表示されます。
2. Internet Explorer を使用する場合、ローカル・マシンで Web ブラウザを次のように設定します。
  - a. SiteScope のユーザ・インタフェースを表示する言語を選択します。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/306872/ja-jp>を参照してください。
  - b. 手順 4 に進みます。
3. FireFox を使用する場合、ローカル・マシンで Web ブラウザを次のように設定します。
  - a. **【ツール】 > 【オプション】 > 【詳細】**を選択します。**【言語を編集】**をクリックします。**【言語】** ダイアログ・ボックスが開きます。
  - b. SiteScope を表示する言語を選択します。  
使用する言語がダイアログ・ボックスにない場合は、**【追加する言語を選択...】** リストを展開して**【追加】**をクリックします。
  - c. **【上へ移動】**をクリックして、選択した言語を最初の行に移動します。
  - d. **【OK】**をクリックして設定を保存し、**【言語】** ダイアログ・ボックスを閉じます。

4. SiteScope ウィンドウ上部の【ログアウト】をクリックします。SiteScope が更新され、選択した言語でユーザ・インタフェースが表示されます。

## ヒント / トラブルシューティング

本項では、多言語環境で SiteScope を使用する作業に関連する次の問題のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- 「一般的な制限事項」(777ページ)
- 「多言語ユーザ・インタフェースに関する問題」(777ページ)
- 「データベース環境に関する問題」(778ページ)
- 「リモート UNIX サーバが英語ロケールに設定されていない」(778ページ)

### 一般的な制限事項

- ユーザ名、パスワード、および URL は必ず英語の文字になります。
- SiteScope がインストールされているマシン (SiteScope マシン) と監視対象マシンのロケールを同じにする必要があります。標準設定のロケールは英語です。
- SiteScope マシンでは、英語と英語以外のロケールを使用できます。たとえば、監視対象マシンでドイツ語のロケールがサポートされている場合、SiteScope マシンではドイツと英語がサポートされます。英語以外のロケールの設定の詳細については、「[SiteScope の英語以外のロケールの設定方法](#)」(775ページ)を参照してください。
- Web スクリプト・モニタをデプロイする場合、スクリプト名とトランザクション名も英語の文字にする必要があります。
- Red Hat ES4 のスクリプト・モニタでは、英語以外の言語のパラメータはサポートされていません。
- SiteScope は、リモート UNIX マシンから取得された日付の解析に常に「en\_US」ロケールを使用します (たとえば、ファイル・モニタの実行中など)。UNIX マシンの標準設定のロケールが en\_US でない場合、このマシンの UNIX リモートの定義で「[シェル環境の初期化](#)」フィールドに「LANG=C; export LANG」が含まれている必要があります。
- SiteScope 管理レポートでは英語以外のラベルはサポートされていません。
- SiteScope を英語以外のオペレーティング・システムにインストールした場合は、SiteScope 強化ツールを使用して TLS を使用するように SiteScope を設定できません。この場合、『SiteScope デプロイメント・ガイド』(<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm) の付録に記載されている手動の手順を使用します。

### 多言語ユーザ・インタフェースに関する問題

- 言語パックをインストールする必要はありません。表示されるすべての言語は SiteScope 多言語ユーザ・インタフェース (MLU) に統合されています。
- Web ブラウザの言語が変更されても、データは入力された言語で残されます。ローカル・マシン

で Web ブラウザの言語を変更しても、モニタの定義および設定の言語は変更されません。

- サンプル・テンプレート、ソリューション・テンプレート、ビュー、および状況モニタなど、SiteScope インストールに含まれているエンティティの名前は英語のみです。
- インストール・ウィザードのユーザ・インタフェースではフランス語はサポートされていません。
- ユーザ・インタフェースに選択されている言語が日本語の場合、SiteScope ヘルプ を日本語で表示できます。[このページのヘルプ] または [SiteScope ヘルプ] を選択すると、日本語で表示されます。この機能を有効化するには、ソフトウェア・パッチをインストールする必要があります。詳細については、[HP Software サポート](http://www.hp.com/go/hpsoftwaresupport) (<http://www.hp.com/go/hpsoftwaresupport>) にお問い合わせください。
- [ヘルプ] ドロップダウン・リストのほかのリンク（[トラブルシューティング & ナレッジ ベース]、[HP ソフトウェア サポート]、[HP ソフトウェア Web サイト] など）も、選択したユーザ・インタフェース言語で表示されます。

#### データベース環境に関する問題

- Oracle データベースで新規の Oracle インスタンスを作成する場合は、インスタンスの文字セットを指定する必要があります。データ・ディクショナリ内のデータを含め、文字データはすべてインスタンスの文字セットを使って格納されます。
- データベース・クエリ・モニタが Oracle データベースに接続するには、Oracle のユーザ名とパスワードが英字のみを含んでいる必要があります。

#### リモート UNIX サーバが英語ロケールに設定されていない

- 標準設定で英語ロケールまたは英語言語に設定されていない UNIX リモート・サーバを使用すると、ファイル・モニタとディレクトリ・モニタで問題が発生する可能性があります。**回避策**：問題のある UNIX リモート・サーバの [シェル環境の初期化] プロパティに "LANG=C; export LANG" を追加します。

UNIX リソース・モニタが英語以外のロケールのすべてのカウンタを取得していない

- **問題** :UNIX リソース・モニタは、Linux オペレーティング・システムで稼働している UNIX リモート・サーバの監視時に、ファイル・システムまたは inode キャッシュ・オブジェクトのカウンタを取得できません。

**解決方法** :export LANG=en\_EN.UTF-8 を UNIX リモート・サーバの [シェル環境の初期化] フィールドに入力します。

## 第60章: 認証方法

SiteScope の認証は認証方法の概念に基づいています。各方法は特定の認証サービスに照らし合わせて認証を処理します。常に SiteScope で設定できる認証サービスは1つだけです。

SiteScope にログインするための標準設定の認証方法は SiteScope 内蔵認証サービスです。さらに、SiteScope は次のシングル・サインオン方式をサポートします。ライトウェイト・シングル・サインオン (LW-SSO) および Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)。

### 学習事項

#### 認証方法の概要

SiteScope 内蔵認証サービスは、SiteScope にログインするための標準設定の認証方法です。ログイン・ページで SiteScope のユーザ名とパスワードを入力すると、資格情報が SiteScope によって保管および検証されます。

SiteScope は、シングル・サインオン (SSO) もサポートしています。これは、一度ログインしたユーザであれば、再びログインせずに複数のソフトウェア・システムのリソースにアクセスできるようにするアクセス制御方法の1つです。設定されたソフトウェア・システムのグループに属するアプリケーションは、認証されていることを信用しているため、アプリケーションから別のアプリケーションに移動するときにさらに認証処理を行う必要がありません。

SiteScope は、次の SSO 認証方法をサポートします。

- **ライトウェイト・シングル・サインオン (LW-SSO)** : これは SiteScope の標準設定のシングル・サインオン認証方法です。LW-SSO は、SiteScope に組み込まれており、認証処理を行う外部マシンは不要です。SiteScope のインストール後、LW-SSO を使用して統合されているすべての HP ソフトウェア・アプリケーションについて、標準設定のパスフレーズ文字列を直ちに変更する必要があります。SiteScope の SSO 標準設定値の変更の詳細については、[「SiteScope で LW-SSO 文字列を変更する方法」\(783ページ\)](#)を参照してください。

制限事項、セキュリティの警告、および一般的な参照情報を含む LW-SSO の詳細情報については、[「LW-SSO 認証」\(779ページ\)](#)を参照してください。

- **Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)** : Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用して認証を設定できます。これによって認証情報 (ユーザ名とパスワード) を保管するために外部の LDAP サーバを使用できます。SiteScope は LDAP サーバを使用してユーザの資格情報を検証します。ユーザ管理プリファレンスを使用して LDAP 認証を有効または無効にします。詳細については、[「LDAP 認証と承認」\(782ページ\)](#)を参照してください。

#### LW-SSO 認証

LW-SSO は、一度ログインしたユーザであれば、再びログインせずに複数のソフトウェア・システムのリソースにアクセスできるようにするアクセス制御方法の1つです。設定されたソフトウェア・シ

システムのグループに属するアプリケーションは、認証されていることを信用しているため、アプリケーションから別のアプリケーションに移動するときにさらに認証処理を行う必要がありません。

本項の情報は、LW-SSO バージョン 2.4 に適用されます。

#### LW-SSO トークンの期限

LW-SSO トークンの期限の数値により、アプリケーションのセッションの有効性が判断されます。そのため、期限の数値は、アプリケーションのセッション期限の数値と同じか、またはそれよりも大きな値にする必要があります。

#### LW-SSO トークンの期限の推奨設定

LW-SSO を使用するアプリケーションごとに、トークンの期限を設定する必要があります。推奨値は 60 分です。高度なセキュリティを必要としないアプリケーションの場合、値を 300 分に設定できます。

#### GMT 時間

LW-SSO に統合されているアプリケーションでは、すべて同じ GMT 時間を使用し、最大誤差を 15 分に抑える必要があります。

#### マルチドメイン機能

マルチドメイン機能では、LW-SSO 統合に含まれるアプリケーションを、別の DNS ドメインのアプリケーションに統合する必要がある場合、それらすべてのアプリケーションで `trustedHosts`（または `protectedDomains`）を設定する必要があります。さらに、設定の `lwssso` 要素に正しいドメインを追加する必要があります。

#### URL 機能のセキュリティ・トークンの取得

ほかのアプリケーションの URL に対するセキュリティ・トークンとして送信された情報を取得するには、ホスト・アプリケーション設定の `lwssso` 要素で、正しいドメインを設定する必要があります。

#### LW-SSO のシステム要件

次の表に、LW-SSO の設定要件を示します。

Application	バージョン	コメント
Java	1.5 以上	
HTTP サーブレット API	2.1 以上	
Internet Explorer	6.0 以上	ブラウザで、HTTP セッション cookie と HTTP 302 リダイレクト機能を有効にする必要あり
FireFox	2.0 以上	ブラウザで、HTTP セッション cookie と HTTP 302 リダイレクト機能を有効にする必要あり



Application	バージョン	コメント
Jboss 認証	Jboss 4.0.3 Jboss 4.3.0	
Tomcat 認証	Standalone Tomcat 6.0.29	
Acegi 認証	Acegi 0.9.0 Acegi 1.0.4	
Spring Security 認証	Spring Security 2.0.4	
Web サービス・ エンジン	Axis 1 - 1.4 Axis 2 - 1.2 JAX-WS-R1 2.1.1	

#### LW-SSO のセキュリティに関する警告

本項では、LW-SSO 設定に関するセキュリティの警告について説明します。

- **LW-SSO の `initString` 機密パラメータ** : LW-SSO では、対称暗号化方式を使用して LW-SSO トークンを検証、作成します。設定内にある `initString` パラメータは、秘密鍵の初期化に使用します。アプリケーションでトークンが作成され、同じ `initString` パラメータを使用するアプリケーションにより、トークンが検証されます。

##### 注意:

- **`initString` パラメータの設定を行わずに LW-SSO を使用することはできません。**
  - **`initString` パラメータは機密情報なので、公開、転送、永続性などの点で慎重に扱う必要があります。**
  - **`initString` パラメータは、LW-SSO を使用して相互に統合されたアプリケーション間でのみ共有する必要があります。**
  - **`initString` パラメータは 12 文字以上の長さにする必要があります。**
- **必要な場合のみ LW-SSO を有効化** : 特に必要な場合を除き、LW-SSO を無効にする必要があります。
  - **認証セキュリティのレベル** : 最も弱いタイプの認証フレームワークを使用し、ほかの統合アプリケーションで信頼されている LW-SSO トークンを発行するアプリケーションにより、アプリケーション全体の認証セキュリティ・レベルが決まります。

強力で安全な認証フレームワークを使用するアプリケーションの場合のみ、LW-SSO トークンを発行することをお勧めします。

- **対称暗号化方式の意味** : LW-SSO では、対称暗号化方式を使用して LW-SSO トークンを発行、検証します。そのため、LW-SSO を使用するアプリケーションから、同じ **initString** パラメータを共有する、その他すべてのアプリケーションに信頼されたトークンを発行できます。initString を共有するアプリケーションが、信頼されていない場所に置かれているか、またはそのような場所からアクセスできる場合、リスクが発生する場合があります。
- **ユーザ・マッピング (同期)** : LW-SSO フレームワークでは、統合アプリケーション間のユーザ・マッピングが保証されていません。そのため、統合アプリケーションでユーザ・マッピングを監視する必要があります。すべての統合アプリケーションで、同じユーザ・レジストリ (LDAP/AD など) を共有することをお勧めします。

ユーザのマッピングに失敗すると、セキュリティ違反が発生し、さまざまなアプリケーションの複数ユーザに同じユーザ名が割り当てられるなど、アプリケーションの動作不良が発生する場合があります。

さらに、あるアプリケーション (AppA) にユーザがログオンしてから、コンテナ認証またはアプリケーション認証を使用する別のアプリケーション (AppB) にアクセスすると、ユーザのマッピングに失敗した場合に、ユーザが手動で AppB にログオンし、ユーザ名を入力する必要があります。ユーザが AppA へのログオンに使用していたのとは別のユーザ名を入力した場合、次のような動作が発生する場合があります。その後ユーザが AppA または AppB から第 3 のアプリケーション (AppC) にアクセスすると、AppA または AppB へのログオンに使用していたユーザ名で、AppC にアクセスしてしまいます。

- **ID マネージャ** : 認証目的で使用する場合、ID マネージャの保護されていないリソースは、すべて LW-SSO の **nonsecureURLs** 設定により構成する必要があります。
- **LW-SSO デモ・モード** :
  - このデモ・モードは実証目的のみに使用します。
  - デモ・モードはセキュリティが確保されていないネットワークでのみ使用してください。
  - デモ・モードは実運用環境では使用できません。デモ・モードと実運用モードを組み合わせ使用しないでください。

## LDAP 認証と承認

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用して認証の設定を選択できます。これによって認証情報 (ユーザ名とパスワード) を保管するために外部の LDAP サーバを使用できます。

SiteScope は LDAP サーバを使用してユーザの資格情報を検証します。

情報を LDAP サーバに保管すると、多くの SiteScope にわたって多数のユーザを管理しやすくなります。LDAP 認証を使用すると、ユーザ・ロール・プロファイルを作成してユーザ権限の管理をより効率的に行えます。一度に各ユーザにアクセス権限を割り当てる代わりに、同じリソース上で同じ権限レベルが割り当てられているユーザを同じユーザ・ロール・プロファイルにグループ化できます。ユーザ・ロールの詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

ユーザ・ロールを作成して割り当て、SiteScope 外でユーザを管理することに加えて、SiteScope 管理者は SiteScope にログオンする権限を持つすべての LDAP ユーザのリストを CSV ファイルに保存することも可能です。

LDAP 認証の有効化とユーザ・ロールの作成の詳細については、「[SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする方法](#)」(784ページ)を参照してください。

**注:**

- 監査ログにはユーザ名（**[表示名]**）のみが含まれ、ユーザ・ロールや LDAP グループ（**[ユーザ ロール コンテキスト]** または **[LDAP コンテキスト]**）は含まれません。
- LDAP 認証を使用してユーザがログオンするとき、ユーザが作成されるのは 1 SiteScope セッション限りです。セッションが終了すると、ユーザは削除されます（永続性で保存されません）。

**ヒント:** YouTube で、LDAP における SiteScope ユーザの集中管理についてのガイドとナレーション付きのデモを見ることができます。

<http://www.youtube.com/watch?v=rntljP0qdJs&feature=plcp>。

## サイレント認証

ブラウザに保存される証明書、またはクライアント証明書認証によりスマートカードから認証を設定することも可能です。これは、ユーザ・ログイン名およびパスワードを SiteScope のログイン・ページに入力することなく SiteScope を起動する自動プロセスです。

証明書を提供するか、またはスマート・カードを入れると、SiteScope は証明書 / スマート・カードから一意の属性を取得し、LDAP サーバを使用してユーザの資格情報を検証します。ユーザを見つけると、LDAP ユーザ資格情報を使用して自動的にログオンします。

詳細については、「[LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法](#)」(786ページ)を参照してください。

## タスク

SiteScope で LW-SSO 文字列を変更する方法

SiteScope のインストール後、LW-SSO を使用して統合されているすべての HP ソフトウェア・アプリケーションについて、標準設定のパスフレーズ文字列を直ちに変更する必要があります。

- SiteScope 以外のアプリケーションでは、**lwssofmconf.xml** ファイルを見つけて、そのファイルの値を直接変更します。
- SiteScope では、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \conf\lwssso\lwssofmconf.xml ファイルで（サービスの初回読み込みの前のみ）直接変更できます。**[プリファレンス]** > **[一般プリファレンス]** > **[LW SSO 設定]** > **[LW SSO Init 文字列]** で値を変更することもできます。

## SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする方法

このタスクは、SiteScope へのログオンでの LDAP 認証と承認の使用に関係する手順を説明します。概念の詳細については、「[LDAP 認証と承認](#)」(782ページ)を参照してください。

**ヒント:** YouTube で、LDAP における SiteScope ユーザの集中管理についてのガイドとナレーション付きのデモを見ることができます。

<http://www.youtube.com/watch?v=rntljP0qdJs&feature=plcp>。

### 1. 前提条件

- LDAP を使用して SiteScope にアクセスする時、LDAP サーバでユーザに割り当てられたユーザ・ログインとセキュリティ・プリンシパルが必要です。詳細は、LDAP サーバ管理者に問い合わせてください。
- SiteScope LDAP ユーザ管理設定および権限を作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「**ユーザ・プリファレンスの追加、編集、または削除**」権限が付与されたユーザでなければなりません。標準設定では、正規ユーザは「**ユーザ・プリファレンスを追加、編集、または削除します**」権限を有していません。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規ユーザ プロファイル\] / \[ユーザ プロファイルの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(754ページ)を参照してください。
- SSL 接続の使用時に LDAP を使用するには、LDAP サーバから証明書をインポートする必要があります。(認証局が発行するデジタル証明書を取得します。自分の組織がこれに該当するデジタル証明書を持っていない場合は、認証局に証明書の発行を要求する必要があります。)

### 2. SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする

- SiteScope で、**[プリファレンス] > [ユーザ管理プリファレンス]**を選択して、**[標準設定]**の横にある矢印をクリックし、**[編集]**を選択します。**[ユーザ管理設定]**ダイアログ・ボックスが開き、LDAP ユーザ管理設定が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[ユーザ管理設定\] ダイアログ・ボックス](#)」(751ページ)を参照してください。

**注:** SSL 接続を使用する場合、セキュア LDAP サーバの URL を **[LDAP サーバ URL]** ボックスに入力する必要があります。たとえば、`ldaps://ldap.mydomain.com:636` を入力します。

- [LDAP 認証の有効化]** チェック・ボックスを選択して、LDAP 認証設定を設定します。


**ヒント:** これらの設定をするときには LDAP サーバ管理者に問い合わせることをお勧めします。

- LDAP 接続をテストするには、**[標準設定]**の横にある矢印をクリックして、**[テスト]**を選択します。テストのステータスが返されます(テストが成功すると、LDAP ユーザ数が表

示されます)。

**注:** [ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックスで **[すべての LDAP ユーザの表示権限の有効化]** を選択する場合、この LDAP のすべてのユーザはビューア・ロールを含まない表示権限を取得します。

### 3. LDAP ユーザ・ロール・プロファイルの作成

[ユーザ管理プリファレンス] ページで、**[新規ユーザ]**  ボタンの横の矢印をクリックして **[新規ユーザ ロール]** を選択します。ユーザ・ロール名、LDAP セキュリティ・グループ (コンテキスト) を入力して、このユーザ・ロール・プロファイルによってアクセスできるグループを選択し、このユーザ・ロールに付与される権限を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規ユーザ ロール プロファイル\] / \[ユーザ ロール プロファイルの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(768ページ)を参照してください。

### 4. 既存のユーザ権限をユーザ・ロールにコピー - オプション

既存の SiteScope ユーザ権限を新しいユーザ・ロールにコピーできます。これにより、ユーザ・プロファイルを作成または編集する時にユーザ・ロールとして同じ権限を割り当てられます。

- [ユーザ管理プリファレンス] ページで、権限をユーザ・ロールにコピーするユーザを選択し、**[コピー]** > **[ユーザ ロールへコピー]** を選択します。
- [新規ユーザ ロール プロファイル] ダイアログ・ボックスで、新しいユーザ・ロールの名前とコンテキストを入力して保存します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規ユーザ ロール プロファイル\] / \[ユーザ ロール プロファイルの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(768ページ)を参照してください。
- 選択されたユーザの権限はユーザ・ロールにコピーされます。これは **[一般ユーザ ロール]** または **[スーパー ユーザ ロール]** タイプ (付与された権限によって異なる) として [ユーザ管理プリファレンス] ページに追加されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[ユーザ管理プリファレンス\] ページ](#)」(748ページ)を参照してください。

### 5. SiteScope からのログオフ

**[ログアウト]** ボタンをクリックして SiteScope からログアウトします。

### 6. SiteScope へのログイン

LDAP を使用して SiteScope にアクセスする場合、ユーザは通常の方法で SiteScope にアクセスできます。詳細については、「[SiteScope へのログイン](#)」(18ページ)を参照してください。

**注:** SiteScope ユーザはこれまで通り [SiteScope ログイン] ページに入力しなければならない SiteScope ログイン名とパスワードを定義しておく必要があります (LDAP ユーザは SiteScope にログインするために固有の LDAP ユーザ名とパスワードを持っています)。

### 7. 結果

ユーザがログイン名とパスワードを [SiteScope ログイン] ページに入力した後で (またはサイ

レント・ログインを使用) , 要求が SiteScope から LDAP に送信されます。

要求がユーザの確認を返してユーザ・グループがユーザ・ロール定義に一致する場合, 関連するユーザ・ロール権限はユーザに帰属し, SiteScope はダッシュボード・ビューに開きます。

## LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法

このタスクは, クライアント証明書認証による SiteScope へのサイレント・ログインを設定する手順を説明します。

### 1. クライアント証明書の取得

認証局が発行するデジタル証明書を取得します。自分の組織がこれに該当するデジタル証明書を持っていない場合は, 認証局に証明書の発行を要求する必要があります。

### 2. サーバ証明書プロパティの設定

Tomcat サーバによって使用される設定ファイルに変更を行いサイレント・ログインを有効にします。

a. <SiteScope のルート・ディレクトリ>\Tomcat\conf ディレクトリにある **server.xml** ファイルを開きます。

b. 設定ファイルの次のようなセクションを探します。

```
<!-- Define a SSL HTTP/1.1 Connector on port 8443 -->
<!--
<Connector port="8443"
maxThreads="150" minSpareThreads="25" maxSpareThreads="75"
enableLookups="false" disableUploadTimeout="true"
acceptCount="100" debug="0" scheme="https" secure="true"
clientAuth="false" sslProtocol="TLS" />
-->
```

c. このセクションを次のように変更し, 必要なパラメータを入力します。

```
<!-- Define a SSL HTTP/1.1 Connector on port 8443 -->
<Connector port="8443"
maxThreads="150" minSpareThreads="25" maxSpareThreads="75"
enableLookups="false" disableUploadTimeout="true"
acceptCount="100" debug="0" scheme="https" secure="true"
sslProtocol="TLS"
keystoreFile="<Keystore_file_path>"
keystorePass="<Keystore_password>" keystoreType="<Keystore_type>" keyAlias="<Keystore_
alias>"
truststoreFile="<truststore_File>" truststorePass="<truststore_password>"
truststoreType="<truststore_type>"
clientAuth="true" />
/>
```

例:

```
<!-- Define a SSL HTTP/1.1 Connector on port 8443 -->
<Connector port="8443"
maxThreads="150" minSpareThreads="25" maxSpareThreads="75"
enableLookups="false" disableUploadTimeout="true"
acceptCount="100" debug="0" scheme="https" secure="true"
sslProtocol="TLS"
keystoreFile="c:\myclientstore.p12"
keystorePass="testing" keystoreType="PKCS12" keyAlias="client"
truststoreFile="..\java\lib\security\cacerts"
truststorePass="changeit" truststoreType="JKS" clientAuth="true" />
/>
```

**注:** SiteScope と同じサーバにほかの HP 製品がインストールされている場合は、競合を回避するために、ポート 8443 を別のポートに変更しなければならない場合があります。

Tomcat ログ出力は、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\ tomcat.log** ファイルに書き込まれます。ログ・ファイルの設定は、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > \Tomcat\common\classes\log4j.properties** ファイルで実行できます。

- d. ポート 8443 で SSL アクセスを設定した後で、**Define a non-SSL HTTP/1.1 Connector on port 8080** とコメントすることによって SiteScope へのセキュアでないアクセスを制限します。

### 3. SiteScope へのサーバ証明書のインポート

証明書管理を使用して認証局の証明書をインポートします。[プリファレンス] > [証明書管理] を選択し、[証明書のインポート] ボタンをクリックします。[ファイル] または [ホスト] を選択し、ソース・サーバの詳細を入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[証明書管理\] ページ \(551ページ\)](#)」を参照してください。

**注:** [証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope 管理者ユーザ、または「**証明書リストの表示/編集**」権限を持つユーザのみです。

### 4. LDAP ユーザ管理設定の設定

- a. [LDAP ユーザ管理設定] パネルで設定を設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[ユーザ管理設定\] ダイアログ・ボックス \(751ページ\)](#)」を参照してください。
- b. [LDAP ユーザ管理の詳細設定] パネルで、[LDAP アクティベーション キーの ID 属性] ボックスに LDAP ユーザの一意の属性を入力できます（または空白のままにしておくことができます。この場合、**userPrincipalName** 属性が使用されます）。

### 5. 結果

サイレント・ログインを使用して SiteScope にログオンしようとする時、SiteScope から要求が



LDAP に送信されます。要求がユーザの確認を返してユーザ・グループがユーザ・ロール定義に一致する場合、関連するユーザ・ロール権限はユーザに帰属し、SiteScope はダッシュボード・ビューに開きます。

SiteScope に表示されるユーザ名はユーザ証明書のユーザ個人名から取得されます。

**注:**

- ユーザが作成されるのは SiteScope の 1 セッションだけです。セッションが終了すると、ユーザは削除されます（永続性で保存されません）。
- SiteScope からログオフする時（**ログアウト** ボタンをクリックして）、サイレント・ログイン・パラメータ（sis\_silent\_login\_type\_default）が URL に表示されます。このパラメータを削除してからでなければ、更新アクションを使用して SiteScope にログオンできません。

## ヒント / トラブルシューティング

本項では、LW-SSO 認証のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- [「LW-SSO の既知の問題」 \(788ページ\)](#)
- [「LW-SSO の制限事項」 \(789ページ\)](#)

### LW-SSO の既知の問題

本項では、LW-SSO 認証の既知の問題について説明します。

- **セキュリティ・コンテキスト** : LW-SSO のセキュリティ・コンテキストでは、1 つの属性名につき 1 つの属性値のみがサポートされています。  
そのため、SAML2 トークンから、同じ属性名の値が複数送信されても、LW-SSO フレームワークで許可される値は 1 つのみです。  
同様に、IdM トークンから同じ属性名の値が複数送信されるよう設定されていても、LW-SSO フレームワークで許可される値は 1 つのみです。
- **Internet Explorer 7 を使用したマルチドメインのログアウト機能** : 次の状況では、マルチドメインのログアウトに失敗する場合があります  
ブラウザに Internet Explorer 7 を使用していて、アプリケーションのログアウト手順で、3 回連続 HTTP 302 リダイレクトの動作が呼び出される。  
この場合、Internet Explorer 7 で HTTP 302 リダイレクトの応答が正しく処理されず、**「Internet Explorer ではこのページは表示できません」** というエラー・ページが表示される場合があります。  
回避策として推奨されるのは、アプリケーションのログアウト手順で、できるだけリダイレクト・コマンドの数を少なくすることです。



## LW-SSO の制限事項

LW-SSO 認証を使って作業する場合は次の制限事項に注意してください。

### ・アプリケーションへのクライアント・アクセス:

#### ドメインが LW-SSO 設定で定義されている場合:

- ・アプリケーション・クライアントは、ログイン URL で FQDN（完全修飾ドメイン名）を持つアプリケーション（例: `http://myserver.companydomain.com/WebApp`）にアクセスする必要があります。
- ・LW-SSO では、IP アドレスによる URL（`http://192.168.12.13/WebApp` など）はサポートされていません。
- ・LW-SSO では、ドメインなしの URL（`http://myserver/WebApp` など）はサポートされていません。

**ドメインが LW-SSO 設定で定義されていない場合:** ログイン URL に FQDN がない場合、クライアントはアプリケーションにアクセスできません。この場合、LW-SSO セッション cookie はドメイン情報なしで単一のマシン専用で作成されます。そのため、cookie はブラウザによってほかの cookie に委任されないで、同一の DNS ドメインにあるほかのコンピュータに渡されません。つまり、同一ドメインでは LW-SSO が機能しません。

- ・**LW-SSO フレームワークの統合:** アプリケーションで LW-SSO の機能を活用できるのは、あらかじめ LW-SSO フレームワーク内に統合されている場合のみです。

### ・マルチドメインのサポート:

- ・マルチドメイン機能は、HTTP リファラに基づいています。そのため LW-SSO では、アプリケーション間のリンクはサポートされていますが、2つのアプリケーションが同じドメインにある場合を除き、ブラウザ・ウィンドウへの URL の入力にはサポートされていません。
- ・最初のクロス・ドメイン・リンクに **HTTP POST** を使用することはサポートされていません。  
マルチドメイン機能では、最初のアプリケーションから 2 番目のアプリケーションへ **HTTP POST** を要求することはサポートされていません（**HTTP GET** 要求のみサポートされています）。たとえば、最初のアプリケーションから 2 番目のアプリケーションへの HTTP リンクがある場合、**HTTP GET** 要求はサポートされていますが、**HTTP FORM** 要求はサポートされていません。2 回目以降の要求は、すべて **HTTP POST** か **HTTP GET** のいずれかです。

### ・LW-SSO トークンのサイズ:

LW-SSO が、あるドメインのアプリケーションから別のドメインのアプリケーションに転送できる情報量は、15 グループ/ロール/属性までに制限されています（各項目は平均 15 文字長）。

- ・マルチドメイン・シナリオでの、保護されたページ（HTTPS）から保護されていないページ（HTTP）へのリンク:

保護されたページ（HTTPS）から保護されていないページ（HTTP）にリンクする場合、マルチドメインは機能しません。これはブラウザの制限事項の 1 つです。この場合、保護されたり

ソースから保護されていないリソースにリンクするときに、Referer ヘッダが送信されません。具体例については、次の URL を参照してください。

<http://support.microsoft.com/support/kb/articles/Q178/0/66.ASP>

- サードパーティ cookie の Internet Explorer での動作:

Microsoft Internet Explorer 6 には、P3P (Platform for Privacy Preferences) プロジェクトをサポートするモジュールが含まれています。そのため、サードパーティ・ドメインの cookie は、標準設定で [インターネット] セキュリティ・ゾーンでブロックされています。IE では、セッションの cookie もサードパーティ cookie とみなされるため、セッションの cookie もブロックされてしまい、LW-SSO が機能しません。

この問題を解決するには、起動したアプリケーション (または \*.mydomain.com などの DNS ドメイン・サブセット) を、コンピュータの [ローカル イントラネット] または [信頼済みサイト] ゾーンに追加します (Microsoft Internet Explorer の場合、メニューから [ツール] > [インターネット オプション] > [セキュリティ] > [ローカル イントラネット] > [サイト] > [詳細設定] をクリックします)。こうすることで、cookie が許可されます。

**注意:** LW-SSO のセッション cookie は、ブロックされているサードパーティ・アプリケーションで使用する cookie の 1 つにすぎません。

- **SAML2 トークン:**

- SAML2 トークンを使用する場合、ログアウト機能がサポートされません。

そのため、SAML2 トークンを使用して 2 番目のアプリケーションにアクセスすると、ユーザが最初の実行アプリケーションからログアウトしても 2 番目のアプリケーションからログアウトされません。

- SAML2 トークンの期限切れは、アプリケーションのセッション管理に反映されません。

そのため、SAML2 トークンを使用して 2 番目のアプリケーションにアクセスする場合、各アプリケーションのセッション管理は個別に処理されます。

- **JAAS Realm:** Tomcat の JAAS Realm はサポートされていません。

- **Tomcat ディレクトリでのスペースの使用:** Tomcat ディレクトリでのスペースの使用はサポートされていません。

Tomcat のインストール・パス (フォルダ) にスペースが含まれている場合 ([Program Files] など)、および LW-SSO 設定ファイルが Tomcat の **common\classes** フォルダに置かれている場合、LW-SSO を使用できません。

- **ロード・バランサの設定:** LW-SSO によりデプロイされたロード・バランサは、セッション維持を使用するように設定する必要があります。
- **デモ・モード:** デモ・モードでは、LW-SSO は、アプリケーション間のリンクはサポートされていますが、ブラウザ・ウィンドウへの URL の入力はサポートされていません。これは、この場合、HTTP リファラ・ヘッダがないためです。

## 第8部: ユーザ定義のコンテンツ

SiteScope は再利用可能なテンプレート、およびコンテンツ・パッケージを作成して公開する機能をサポートします。これにより、類似する監視設定基準を用いて複数の IT 要素を迅速に設定およびデプロイできます。

テンプレートは、一連のモニタ・タイプや設定を 1 つの構造にまとめて標準化するために使用します。この構造を、同様の特性を共有する監視対象環境の複数の要素を対象とするモニタのグループとして、繰り返しデプロイできます。詳細については、「[テンプレートの作成](#)」(792ページ)を参照してください。

コンテンツ・パッケージは、スクリプトや警告テンプレート・ファイルを参照するカスタム・モニタまたは通常のモニタを含んでいる、ユーザ定義のテンプレートを共有するために使用されます。コンテンツ・パッケージは、[コンテンツパッケージのエクスポートウィザード] を使用して作成します。コンテンツ・パッケージには、1 つ以上のテンプレートとその依存関係ファイルを含めることができます。依存関係はモニタを実行するために必要となる jars や設定ファイルのような追加ファイルです。詳細については、「[コンテンツ・パッケージの作成](#)」(837ページ)を参照してください。

ほかの SiteScope インストールでできるようにテンプレートやコンテンツ・パッケージをエクスポートおよびインポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。詳細については、「[テンプレートとコンテンツ・パッケージのエクスポートおよびインポート](#)」(839ページ)を参照してください。

HP Live Network にテンプレートとコンテンツ・パッケージをパブリッシュすることによって、ほかの SiteScope ユーザとこれらを共有することもできます。詳細については、「[HP Live Network での SiteScope コンテンツの共有](#)」(906ページ)を参照してください。

SiteScope 監視テンプレートの作成後、テンプレートをグループにデプロイできます。詳細については、「[テンプレートのデプロイ](#)」(861ページ)を参照してください。SiteScope では、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用して SiteScope テンプレート（またはソリューション・テンプレート）を自動的にデプロイできます。詳細については、「[XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ](#)」(875ページ)を参照してください。

テンプレートのデプロイ後に、テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートを変更し、その変更をテンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに適用できます。詳細については、「[テンプレート変更の適用](#)」(891ページ)を参照してください。

ユーザ定義テンプレートで作業する場合のトラブルシューティングと制限事項については、「[ヒント / トラブルシューティング](#)」(794ページ)を参照してください。

## 第61章: テンプレートの作成

SiteScope テンプレートによって実現されるエンタープライズ・ソリューションにより、企業内のさまざまな IT 要素の監視を 1 つの再利用可能な構造として標準化できます。インフラストラクチャ内にある、同じような特性を持つシステムをチェックする一連のモニタを迅速にデプロイするには、テンプレートを使用します。

本項では、ユーザ定義のテンプレートについて説明します。専門領域の知識が組み込まれた SiteScope の事前定義のソリューション・テンプレートについては、[「ソリューション・テンプレート」\(909ページ\)](#)を参照してください。

**注:** SiteScope には、SiteScope を BSM に接続するときに使用できるモニタ・デプロイメント・ウィザード・テンプレートも用意されています。詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの「モニタ・デプロイメント・ウィザード」の項を参照してください。

### 学習事項

#### テンプレートの作成の概要

テンプレートは、事前定義したパターンと設定に従ってグループ、モニタ、サーバ、警告を再現するために使用するオブジェクトです（[「テンプレート・オブジェクト」\(797ページ\)](#)を参照）。テンプレートをデプロイするたびに動的または対話的に設定値を変更したい場合があります。テンプレート内の変数は、そうした設定値の置換マーカとしても使用できます（[「テンプレート変数」\(800ページ\)](#)を参照）。

テンプレートを作成するには、次のいずれかの方法を使用します。

- SiteScope から既存のグループとモニタの階層をテンプレートにコピーし、テンプレートとして使用するために要素を編集する。詳細については、[「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」\(811ページ\)](#)を参照してください。
- テンプレート内にテンプレートのグループ、モニタ、サーバ、警告を手動で作成する。詳細については、[「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」\(804ページ\)](#)を参照してください。

テンプレートを作成、設定すると、テンプレート・オブジェクトがテンプレート・ツリーに表示されます。テンプレート・ツリーで、テンプレートを SiteScope 階層内の特定の場所にコピーすることにより、テンプレートに定義されているすべての項目を 1 回の操作でデプロイできます。テンプレートのデプロイの詳細については、[「テンプレートのデプロイ」\(810ページ\)](#)を参照してください。

ソース・テンプレートを変更した場合、テンプレート変更適用ウィザードを使用して、そのテンプレートによってデプロイされた SiteScope オブジェクトに自動的にその変更を適用することもできます。テンプレートの更新の詳細については、[「テンプレート変更の適用」\(891ページ\)](#)を参照してください。

テンプレートやコンテンツ・パッケージをエクスポート、インポートして他の SiteScope インストール環境で使用することもできます（コンテンツ・パッケージは、テンプレート、および他の SiteScope ユーザとカスタム・モニタを共有するために必要な依存関係ファイルで構成されます）。これにより、企業全体で、コンテンツを共有し、標準化されたモニタ設定を複製できます。詳細については、「[テンプレートとコンテンツ・パッケージのエクスポートおよびインポート](#)」(839ページ)を参照してください。

**ヒント:**

- テンプレートには複数のオブジェクト・タイプを追加できるため、テンプレートを効果的にデプロイして使用するには計画が必要です。詳細については、「[テンプレートの計画](#)」(799ページ)を参照してください。
- SiteScope 監視がまだ設定されておらず、SiteScope モニタとグループを使った作業に慣れていない場合は、テンプレートを作成する前にサンプルのグループ、モニタ、警告を設定してください。これにより、モニタの設定とモニタ、グループ、警告間の関係を理解することができます。その後、SiteScope から構造をコピーし、設定をテンプレートに変換できます。
- テンプレートの作業を開始しやすいように、SiteScope には Windows と UNIX の環境を監視するためのテンプレート例が付属されています。詳細については、「[テンプレート例](#)」(798ページ)を参照してください。
- ブラウザの機能である「カウンタの取得」/「測定値の取得」を使用してターゲット・システム固有の測定値を監視するモニタを含むテンプレートを作成する場合は、テンプレートのデプロイ時にカウンタを選択するための追加の手順が必要になります。詳細については、「[モニタ・テンプレートで参照可能なモニタのカウンタの選択](#)」(812ページ)を参照してください。

**テンプレートを使用する利点**

- テンプレートは、監視対象環境の複数の要素を対象とするモニタのグループとして、繰り返しデプロイできます。
- テンプレートを使用することで、グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ、設定のデプロイメントを1回の操作で実行できるため、企業全体へのモニタのデプロイメント時間が短縮されます。
- テンプレートによって、実際の監視対象デプロイメントがテンプレートに定義されている標準化されたデプロイメントにどの程度準拠しているかを表示できます。これにより、監視対象環境に発生した変化は監視側のインフラストラクチャで迅速に更新されます。また、監視側のインフラストラクチャでは、テンプレートの標準セットへの準拠が維持されます。
- テンプレートはバックグラウンドでサイレントにデプロイできます。テンプレートのデプロイメントの処理が完了するまで待つ必要はありません。キュー内のすべての要求が完了する前に SiteScope が再起動された場合、再起動後にデプロイメントの処理が自動的に続行されます。

**ユーザ定義のテンプレートの利点:**

- 組織の要件に合わせて独自のテンプレートを作成およびカスタマイズできます。
- テンプレートを変更し、その変更をテンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブ

ジェクトに適用できます。テンプレート・オブジェクトを変更する必要がある場合は、テンプレートを1回更新するだけで、デプロイ済みのすべてのグループに変更内容を適用できます。詳細については、「[テンプレート変更の適用](#)」(891ページ)を参照してください。

- SiteScope ユーザ・インタフェースまたは外部 CSV ファイルから複数のテンプレートを同時にデプロイできます。詳細については、「[テンプレートのデプロイ](#)」(861ページ)を参照してください。SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートを自動的にデプロイすることもできます。詳細については、「[XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ](#)」(875ページ)を参照してください。
- [HP Live Network](#) にテンプレートをパブリッシュすることによって、ほかの SiteScope ユーザとテンプレートを共有できます。詳細については、「[HP Live Network での SiteScope コンテンツの共有](#)」(906ページ)を参照してください。
- SiteScope API を使用して、テンプレートを作成、デプロイ、管理できます。詳細については、「[SiteScope 公開 API](#)」(171ページ)を参照してください。

## ヒント/トラブルシューティング

本項では、ユーザ定義のテンプレートを使用する場合のヒント、トラブルシューティング、制限事項について説明します。

- 「[ユーザ定義のテンプレートに関するヒントとトラブルシューティング](#)」(794ページ)
- 「[テンプレートとテンプレート・コンテナ:](#)」(794ページ)
- 「[テンプレート・モニタとテンプレート・グループ:](#)」(794ページ)
- 「[テンプレート・リモート:](#)」(795ページ)
- 「[テンプレート変数:](#)」(796ページ)
- 「[テンプレート警告:](#)」(796ページ)
- 「[テンプレートの削除:](#)」(796ページ)
- 「[予約済みテンプレート・グループ・タイプ](#)」(796ページ)

### ユーザ定義のテンプレートに関するヒントとトラブルシューティング

#### テンプレートとテンプレート・コンテナ:

- テンプレート・コンテナは、テンプレート・ツリーの SiteScope ノードにのみ追加できます。
- テンプレートには、その直下に1つのテンプレート・グループ（親グループ）のみを含めることができます。

#### テンプレート・モニタとテンプレート・グループ:

- 標準モードでオブジェクトを設定するときにドロップダウン・リストが表示される一部のフィールドは、テンプレート・モードでのオブジェクト設定時にはテキスト・ボックスとして表示されます。
- 標準設定では、モニタをテンプレート・グループに作成する必要があります。[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で、[テンプレートエ

**ンティティの直下にテンプレートの作成を許可する**]を選択することでこの設定を上書きできます。

- コンテンツがテンプレートに含まれないようにテンプレート・サブグループを定義し、デプロイ済みグループに変更が適用されるときにコンテンツが無視されるよう定義することができます。これによってさまざまなデプロイ済みグループ内にテンプレートをデプロイできます。詳細については、[一般設定] の [変更を公開するとき、グループを無視する] を参照してください。
- テンプレート・モニタはアクティブなモニタ・インスタンスではありません。モニタは、テンプレートをデプロイしたときにのみ、これらのテンプレート設定に基づいて作成、アクティブ化されます。
- モニタの [サーバ] フィールドとリモート・サーバの [名前] と [サーバ] フィールドには、`「\」` を使用しないでください。
- 正規表現を使用してメトリック・カウンタを選択するか、しきい値を照合する場合、SiteScope では、相等性チェックを実行するのではなく、1つの文字列が別の文字列の一部であるかどうかのみに確認します。このため、デプロイ後にモニタで誤ったメトリックおよびしきい値のセットが定義される可能性があります。これは、SiteScope は標準設定で、メトリック・テーブル内のすべてのメトリックを正規表現で処理し、この表現に適合するすべてのメトリックとしきい値設定を一致させるためです。たとえば、選択されているモニタのしきい値が `x/y` である場合、`x/yy` も正規表現に一致するので、このしきい値も定義されます。これを回避するには、正確な要件を満たすために特定の正規表現を追加します。
- [タグの検索/フィルタ] をテンプレート・モニタに追加する時は、同じタグ値グループで実際のパラメータと変数パラメータの両方を使用できません。
- テンプレートからスクリプト・モニタをデプロイするときには、リモート・スクリプト名の大文字と小文字が、スクリプト・サブディレクトリ内のスクリプト名の大文字と小文字と一致する必要があります。一致しない場合、選択されたスクリプトは「なし」と表示されます。
- ネットワーク帯域幅モニタの標準設定以外のしきい値は、テンプレートに正しくコピーされません。

#### テンプレート・リモート:

- テンプレートには1つのリモート・サーバのみ追加できます。
- サーバがテンプレート・モニタから参照されている場合は、リモート・サーバ・リストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの [モニタ設定] パネルにある [サーバ] ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。
- テンプレート変更適用ウィザードまたは自動デプロイメント更新 (「XML を使用したテンプレート変更適用」を参照) を使用して既存の監視対象サーバを置換することはできませんが、必要に応じて監視対象サーバ自体のプロパティ値を変更することはできます。
- プレフィックスまたはサフィックスの文字が追加されていない変数名 (`%%hostname%%` など) を使用してリモート・サーバを指定し、同じ変数をモニタのいずれかのフィールドで指定している場合、デプロイ後その値は、デプロイで指定した単なる変数値ではなく、UNIX では **Remote-##**、Windows では **\\< 変数値 >** として表示されます。これを避けるには、変数名をリモート・サーバに使用する場合は、プレフィックスまたはサフィックスの文字を変数名に追加する必要があります。



す。

- テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時にテンプレート・サーバで定義されたサーバ、またはリモート・サーバ・ツリーのリモート・サーバ・コンテナで手動で定義されたサーバで実行できます。どちらの場合でも、[サーバ] ボックスの値は、テンプレート変数に値が代入された後のテンプレートのデプロイ時の、実際のサーバのホスト名と一致する必要があります。サーバ名が実際のサーバのホスト名と一致しない場合、監視は失敗します。テンプレート・リモート・サーバ名（作成済みの場合）を自動的に取得するには、[モニタ設定] フィールドの **[現在のテンプレートの下、既に設定済みのテンプレート リモートを使用します]** チェック・ボックスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[新規テンプレート モニタ\] ダイアログ・ボックス」\(833ページ\)](#)を参照してください。
- テンプレート・モニタの設定時に、入力した正規表現を使用して照合可能なカウンタを明示的に選択している場合は、**[カウンタの削除]** ボタンをクリックして余分なカウンタ文字列を削除できます。

#### テンプレート変数:

- [モニタの実行設定] で **[頻度]** と **[エラー頻度]** の変数を設定する場合、変数の値は秒単位でのみ指定できます。
- モニタをテンプレート間でコピーまたは移動すると、モニタ内のユーザ定義変数もコピーまたは移動されます。
- 割り当てたテンプレート変数の名前を変更した場合は、その変数を使用しているすべてのモニタが自動的に新しい変数名に更新されます。

#### テンプレート警告:

- 警告テンプレートを作成するときには、**[モニタの無効化/有効化]** 警告アクションは選択できません。テンプレート警告は、その定義の対象であるオブジェクトに属するすべてのモニタに対して有効になります。たとえば、警告がモニタに対して定義されている場合、そのモニタのみでアクティブ化されます。警告がテンプレートに対して定義されている場合、そのテンプレートにあるすべてのモニタでアクティブ化されます。

#### テンプレートの削除:

- テンプレートをデプロイした後、テンプレートまたはテンプレート・コンテナを削除するには、まず、モニタ・ツリーで、テンプレートがデプロイされた各グループを削除してから、テンプレートまたはテンプレート・コンテナを削除します。

#### 予約済みテンプレート・グループ・タイプ

次の表は、SiteScope アプリケーションで使用するテンプレート・タイプを示します。これらのディレクトリにあるテンプレートは予約されており、警告では使用されません。警告で使用されるテンプレートのリストについては、[「警告テンプレートのディレクトリ」\(1287ページ\)](#)を参照してください。

**ヒント:** 製品のドキュメントに記載された特定の手順に従う場合や、HP Software サポートから指示された場合を除き、これらのディレクトリ内のテンプレートを変更することはお勧めしません。





テンプレート・グループ	詳細	場所
MIB	SNMP トラップで使用するテキスト	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.mib
オペレーティングシステム	リモート UNIX サーバの監視時に実行するシェル・コマンド	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.os
パフォーマンス・モニタ	Windows パフォーマンスの監視に使用	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.perfmon
サウンド	サウンド警告に使用するオーディオ・ファイル	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.sound
ビュー	クエリおよび XML/XSL テンプレート	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.view

## テンプレート・オブジェクト

テンプレートは、テンプレート・ツリーのテンプレート・コンテナ内に作成され、保存されます。テンプレートを使用して設定できるテンプレート変数定義と SiteScope オブジェクトは、テンプレート内にオブジェクトとして表示されます。

次の表では、テンプレートで使用するオブジェクトについて説明します。

アイコン	オブジェクト・タイプ	詳細
	テンプレート・コンテナ	テンプレート・コンテナでは、テンプレート監視ソリューションを管理できます。テンプレートは、テンプレート・コンテナにのみ追加できます。このオブジェクトの設定の詳細については、「 <a href="#">[新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス</a> 」(821ページ)を参照してください。
	テンプレート	テンプレートには、テンプレート監視ソリューションを構成する SiteScope グループ、モニタ、リモート・サーバ、変数定義、警告が含まれています。このオブジェクトの設定の詳細については、「 <a href="#">[新規テンプレート] ダイアログ・ボックス</a> 」(822ページ)を参照してください。

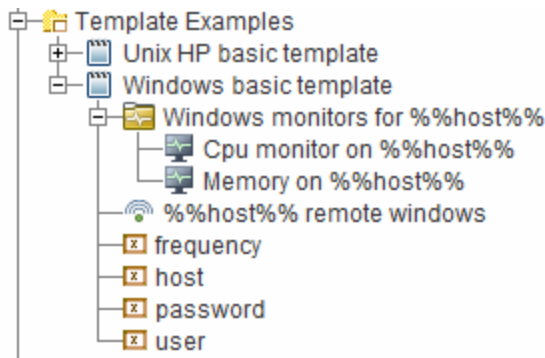
アイコン	オブジェクト・タイプ	詳細
	テンプレート変数	変数を使用して、テンプレートのデプロイ時にユーザ入力 を促すメッセージを表示します。テンプレート変数は、 ユーザ定義または事前定義されたシステム変数です。この オブジェクトの設定の詳細については、「 <a href="#">[新規変数] ダイアログ・ボックス</a> 」(824ページ)を参照してください。
	テンプレート・リモート・サーバ	テンプレート・リモート・サーバを使用して、テンプレートのデプロイ時に作成される Windows または UNIX のリモート・サーバ・プリファレンスを定義します。このオブジェクトの設定の詳細については、「 <a href="#">[新規テンプレート リモートサーバ] ダイアログ・ボックス</a> 」(826ページ)を参照してください。
	テンプレート・グループ	テンプレート・グループには、テンプレート・モニタと、 関連付けられた警告が含まれます。テンプレート・グループを使用して、モニタおよび関連付けられた警告のインフラストラクチャへのデプロイメントを管理します。このオブジェクトの設定の詳細については、「 <a href="#">[新規テンプレート グループ] ダイアログ・ボックス</a> 」(828ページ)を参照してください。
	テンプレート・モニタ	テンプレート・モニタを使用して、テンプレートのデプロイ時に作成されるモニタを定義します。このオブジェクトの設定の詳細については、「 <a href="#">[新規テンプレート モニタ] ダイアログ・ボックス</a> 」(833ページ)を参照してください。
	テンプレート警告	テンプレート警告を使用して、テンプレートのデプロイ時に作成されるグループおよびモニタに関する警告を定義します。テンプレート・モニタまたはグループに警告が設定されている場合、そのモニタまたはグループ・アイコンの横に警告記号が表示されます。このオブジェクトの設定の詳細については、「 <a href="#">[新規警告] ダイアログ・ボックス</a> 」(835ページ)を参照してください。

## テンプレート例

SiteScope には、Windows と UNIX の環境で監視するためのテンプレート例が付属しています。これらのテンプレートは、テンプレート・ツリーの **[Template Examples]** フォルダから使用できます。テンプレート例を使用して、SiteScope テンプレートの使用方法を習熟できます。また、テンプレート例を使用して次のことを確認できます。

- ・ テンプレート・グループ、モニタ、リモート・サーバの使用方法
- ・ テンプレート・リモート・サーバとそれを使用するモニタ間の接続
- ・ 変数値の使用方法和システム変数の使用方法

次の例は、**Windows basic template** を示しています。テンプレートには、テンプレート・グループである **Windows monitors for %%host%%**、2つのテンプレート・モニタ（CPU、メモリ）、4つのユーザ定義変数（ホスト、ユーザ、パスワード、頻度）、テンプレート・リモート・サーバが含まれています。



## テンプレートの計画

SiteScope を効果的に管理するには、テンプレートの計画が重要になります。テンプレート構造内でのグループとモニタの関係とプロパティ、また、それを監視環境全体にどのように適合させるかを考慮する必要があります。

テンプレートを計画する際の考慮事項を次に示します。

オブジェクト	考慮事項
可変プロパティ	テンプレートのデプロイメントに応じて変わるモニタ設定プロパティを決定します。たとえば、監視対象のサーバ・アドレスやリソースは一般的な可変プロパティです。グループとモニタに使用する命名規則も考慮する必要があります。テンプレートをデプロイするたびに可変プロパティの値を入力または選択するには、テンプレート変数を使用します。変数を使用して設定できないモニタ設定プロパティもあります。詳細については、 <a href="#">「テンプレート変数」(800ページ)</a> を参照してください。
サーバ	監視対象サーバにするサーバを決定します。これは、監視対象のオブジェクトが存在する場所です。テンプレート・サーバは、テンプレートのデプロイ時に自動的に複製されます。リモート・サーバ・ツリーの [Microsoft Windows リモートサーバ] または [UNIX リモートサーバ] コンテナで手動で定義することもできます。詳細については、 <a href="#">「リモート・サーバ」(478ページ)</a> を参照してください。

オブジェクト	考慮事項
モニタ・タイプ	テンプレートを使用して複製するモニタ・タイプを決定します。これは、複数のシステムを監視するモニタ・タイプである必要があります。たとえば、CPU、ディスク、メモリ、サービスの各モニタ・タイプは、一般的にインフラストラクチャのサーバごとにデプロイされます。テンプレートにサービス・モニタ・タイプの複数のインスタンスを含めて、各サーバで実行されているさまざまなサービスやプロセスを監視することもできます。
共通のプロパティ	テンプレートのデプロイメント間で同じ設定プロパティについては、値を決定する必要があります。たとえば、[頻度] 設定は、モニタ・タイプごとに必要な設定です。標準設定は 10 分です。監視対象と全体的なモニタ負荷に応じて、この値を変更し、テンプレートを使用して作成したモニタの実行頻度を高くすることもできます。
グループ構造	モニタの整理に使用するグループ構造を決定します。テンプレート内の組織のグループとモニタには、環境内の監視を整理するための全体的な計画との互換性が必要です。使用するグループ構造は、レポートिंग、警告、監視に影響する可能性があります。
警告	テンプレートの一部として警告をデプロイするかどうかを決定します。テンプレートとモニタにどの警告のタイプとアクションを関連付けるか検討します。テンプレートの一部としてデプロイする警告の[警告ターゲット] プロパティが、テンプレート内に定義されているすべてのモニタに設定されます（「 <a href="#">SiteScope 警告ページ</a> 」(1253ページ)を参照）。たとえば、テンプレート・グループに追加したテンプレート警告は、そのグループに属するすべてのモニタに関する警告を通知します。これが計画している警告に合わない場合、デプロイメント後に警告設定を編集するか、手動で警告を追加する必要があります。

## テンプレート変数

テンプレート変数を使用しなくてもテンプレートを作成できますが、変数の使用によってテンプレートの能力とユーティリティを十分に活用できるようになります。テンプレート変数は、モニタ設定の置換マークです。テンプレートのデプロイ時にいつでも変更できるモニタ設定を使用する場合に、テンプレート変数を作成します。1 つ以上のテンプレート・モニタのテキスト・ボックスで、変数を参照します。テンプレート内のモニタまたはグループ・オブジェクトで参照された各変数によって、テンプレートのデプロイ時に対応する入力ボックスの表示が促されます。変数名がテキスト入力ボックスのラベルとして使用されます。

テンプレート変数の一般的な使用例を次に示します。

- サーバまたはホスト・アドレス
- ディスク・ドライブ指定子

- ファイルのパス
- モニタ名の詳細

**注:** テンプレート・ツリーの **[Template Examples]** フォルダで、テンプレートに使用する変数の例を参照できます。詳細については、[「テンプレート例」\(798ページ\)](#)を参照してください。

## テンプレート変数の使用についてのガイドライン

- サーバやモニタなどほかのテンプレート・オブジェクトを作成する前に、テンプレート変数を策定します。これにより、テンプレートにオブジェクトを追加するときに、テンプレートのモニタ、グループ、または警告に、変数への参照を入力できます。テンプレート・オブジェクトすでに参照されているテンプレート変数を削除する場合、無効なリンクをクリアするためにテンプレートから参照オブジェクトを削除する必要があります。テンプレート変数の参照の詳細については、[「テンプレート変数の参照」\(803ページ\)](#)を参照してください。
- 一部のモニタ設定は、テンプレート変数を使用して設定できません。リモート・サーバ選択メニューを除き、通常は選択ドロップダウンを使用して選択される設定項目は、テンプレート変数を使用して定義できません。通常はチェック・ボックスまたはラジオ選択を使用して選択される設定項目は、テンプレート変数を使用して設定できません。
- テンプレート変数は常に、その変数が存在するテンプレート・コンテナの子要素です。変数を参照して、テンプレート内のグループ、モニタ、または警告設定テンプレートの設定を定義するために使用できます。SiteScope のテンプレート変数のタイプとその固有の構文規則の詳細については、[「変数の構文」\(801ページ\)](#)を参照してください。

### 本項の内容

- [「変数の構文」\(801ページ\)](#)
- [「テンプレート変数の参照」\(803ページ\)](#)

## 変数の構文

SiteScope では、次のタイプのテンプレート変数を使用できます。

- **ユーザ定義変数** : テンプレートをデプロイする際のテキストベースの値の入力に使用します。ユーザ定義変数には、変数名の両側に「%%」記号を使用する必要があります。
- **システム変数** : SiteScope で認識されているリモート・サーバのリストとシステム時刻情報の両方にアクセスするために使用する、事前定義された変数のセット。システム変数には、変数名の両側に「\$\$」記号を使用する必要があります。

**注:** ユーザ定義および事前定義のシステム変数は、テンプレートを設定する時にすべてのテキスト・フィールドおよびテキスト・テーブル・セルで使用できます。利用可能な変数のリストを表示するには、フィールドに %% と \$\$ のいずれかを入力し、関連する変数を選択します。これでフィールドに変数が表示されます。

変数の各タイプには、次項に記載されているように固有の構文規則があります。

## ユーザ定義変数の構文

ユーザ定義のテンプレート変数には、英数字とアンダースコアのみ使用できます。変数は、必要な数だけ作成できます。

有効なテンプレート変数構文の例を次に示します。

```
description_text
DiskDrive
TARGET_URL
matchExpression
```

表示される設定パラメータを説明する変数名を選択します。変数名は、テンプレートのデプロイ時に変数の値の入力ウィンドウにある変数入力ボックスのラベルとして使用されます。

## システム変数の構文

SiteScope では、いくつかの事前定義されたテンプレート変数を認識します。これらの値はシステムで認識され、SiteScope のサーバ、NetBIOS などの検出されたサーバ、およびリモート UNIX などのユーザ定義のサーバ接続プロファイルのリストを含みます。事前定義されたシステム変数の構文と詳細を次に示します。

システム変数の構文	詳細
\$\$SERVER_LIST\$\$	プラットフォームで認識されるすべてのサーバのいずれかを選択するリストを返します。[サーバ] または [ホスト名] プロパティのみでリモート・サーバの選択を有効にする場合にこの変数を使用します。  注：この変数をテンプレートで使用するときは、ユーザとの対話が必要なため、SiteScope API によるテンプレートのデプロイはできません。
\$\$SERVER_NAME\$\$	\$\$SERVER_LIST\$\$ 変数の派生。現在のサーバの名前の前に \ (バックスラッシュ) を追加して返します。ほかのボックスのサーバを参照する場合に使用します。
\$\$SERVER_NAME_BARE\$\$	\$\$SERVER_LIST\$\$ 変数の派生。現在のサーバの名前の前に \ (バックスラッシュ) を追加せずに返します。サーバの名前のみを必要とするボックスでサーバを参照する場合（たとえば、CPU モニタをデプロイする場合または「詳細」のサーバの名前を参照する場合）に使用します。■ 前分節に合併 ■
\$\$DATE\$\$	SiteScope を実行しているサーバのシステム日付を返します。モニタが作成された日付を名前または詳細に追加する場合に使用します。
\$\$TIME\$\$	

システム変数の構文	詳細
	SiteScope を実行しているサーバのシステム時刻を返します。モニタが作成された時刻を名前または詳細に追加する場合に使用します。値は、テンプレートがデプロイされた時刻を表します。

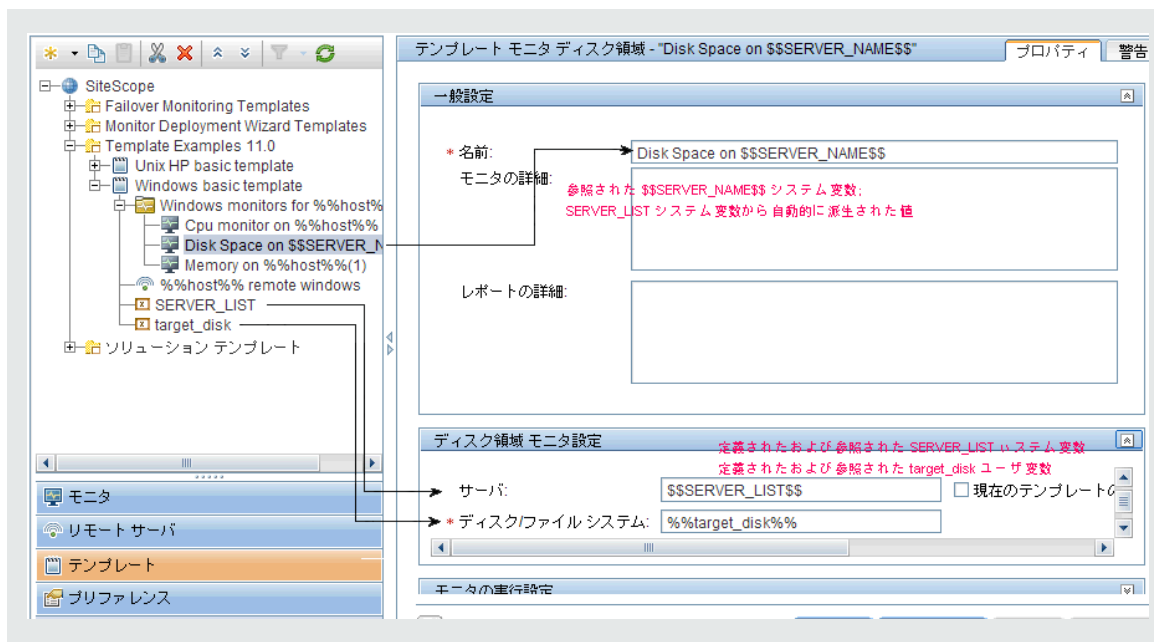
## テンプレート変数の参照

テンプレート変数をテンプレートへ追加したら、モニタまたはグループ設定オブジェクトでそのテンプレート変数への参照を作成する必要があります。変数の参照に使用する構文は、変数のタイプにより異なります。

変数タイプ	構文	情報
ユーザ定義	%%variable_name%%	参照は大文字と小文字を区別し、構文に依存します。  <b>注：</b> ユーザ定義のテンプレート変数は、モニタまたはグループ設定テンプレートで参照する前に作成する必要があります。テンプレート変数としてテンプレートに追加されていないテキスト文字列に %% 記号を使用した場合、一致する変数名が後から追加されたとしても、テンプレート変数への参照は作成されません。
システム	\$\$VARIABLE_NAME\$\$	参照は大文字と小文字を区別し、構文に依存します。  \$\$SERVER_LIST\$\$ 変数は、テンプレートの変数として明示的に定義する必要があります。この変数の定義後、モニタまたはグループ設定オブジェクトで直接 \$\$VARIABLE_NAME\$\$ 構文を使用して \$\$SERVER_NAME\$\$ と \$\$SERVER_NAME_BARE\$\$ 変数を参照することによって、これらの変数を設定オブジェクトで使用できます。  \$\$TIME\$\$ と \$\$DATE\$\$ 変数を直接参照することもできます。  システム変数の詳細については、 <a href="#">「変数の構文」(801ページ)</a> を参照してください。

**例：**モニタ・テンプレートのユーザ定義変数、\$\$SERVER\_LIST\$\$、派生システム変数を参照する方法

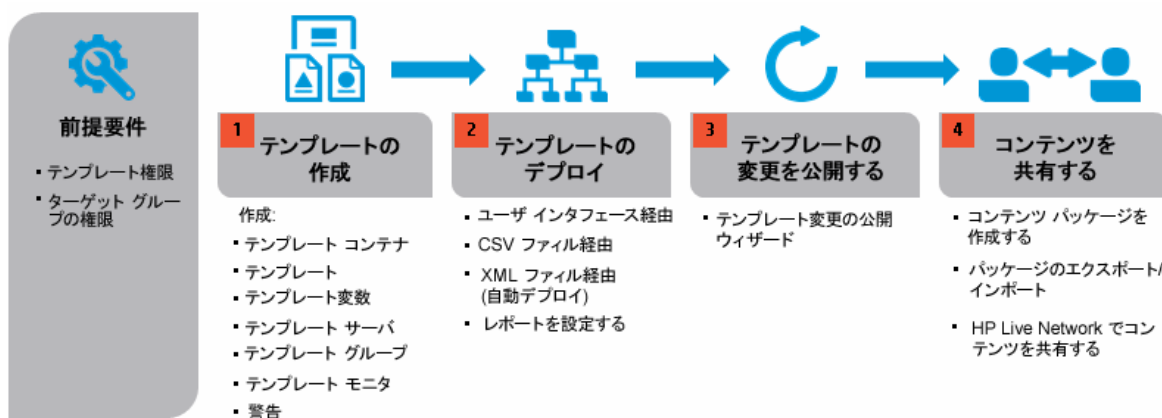




## テンプレートを使用した監視構造の作成方法

このタスクでは、再利用可能なテンプレートを作成して公開するための手順を説明します。これにより、類似する監視設定基準を用いて複数の IT 要素をデプロイできます。また、広範な手動による更新を実行することなく、組織全体にわたる変更をテンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに適用する手順についても説明します。

次に、このタスクのフローチャートを示します。



**ヒント:** 表示されている順番でテンプレート・オブジェクトを作成することをお勧めします。不要なテンプレート・オブジェクトの手順はスキップできます。テンプレートでの作業を開始しやすいようにするには、Windows と UNIX の環境の監視用として提供されているテンプレート例を使用します。詳細については、「[テンプレート例](#)」(798ページ)を参照してください。



## 1. 前提条件

- テンプレートを追加、編集、削除できるようにするには、「**テンプレートの表示**」および「**テンプレートの追加、編集、または削除**」権限が付与されている必要があります。
- テンプレートをデプロイするには、その内容に関わらず、デプロイ先グループの権限を編集する必要があります。テンプレート・オブジェクト（モニタ、リモート、警告）の権限は編集する必要はありません。ユーザ権限の詳細については、「[権限](#) (757ページ)を参照してください。

## 2. テンプレート・コンテナの作成

監視ソリューションを管理できる、テンプレート・コンテナを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規テンプレート コンテナ\] ダイアログ・ボックス](#)」(821ページ)を参照してください。

## 3. テンプレートの作成

テンプレートをテンプレート・コンテナに追加します。このテンプレートが監視ソリューションのコンテナとなり、監視ソリューションのグループ、モニタ、リモート・サーバ、変数、警告を作成できます。テンプレート・コンテナに複数のテンプレートを作成できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規テンプレート\] ダイアログ・ボックス](#)」(822ページ)を参照してください。

**注:** 既存のグループとモニタ階層を SiteScope からテンプレートにコピーし、テンプレートとして使用するためにその要素を編集することもできます。タスクの詳細については、「[既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法](#)」(811ページ)を参照してください。

## 4. テンプレート変数の作成

テンプレートには、テンプレートをデプロイするたびにオブジェクトに異なる名前を指定できる、テンプレート変数を作成できます。グループ、モニタ、サーバ、警告を作成するときに変数が参照されるため、テンプレートでは最初に変数のオブジェクトを作成する必要があります。

- a. テンプレートのテンプレート変数を作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規変数\] ダイアログ・ボックス](#)」(824ページ)を参照してください。
- b. テンプレート内の1つ以上の設定オブジェクトで、変数を参照します。このトピックの詳細については、「[テンプレート変数の参照](#)」(803ページ)を参照してください。

### 注:

- プレフィックスまたはサフィックスの文字が追加されていない変数名（%%hostname%%など）を使用してリモート・サーバを指定し、同じ変数をモニタのいずれかのフィールドで指定している場合、デプロイ後その値は、デプロイで指定した単なる変数値ではなく、UNIX では **Remote-##**、Windows では **\\ < 変数値 >** として表示されます。これを避けるには、変数名をリモート・サーバに使用する場

合は、プレフィックスまたはサフィックスの文字を変数名に追加する必要があります。

- 。 ユーザ定義および事前定義のシステム変数は、テンプレートを設定する時にすべてのテキスト・フィールドおよびテキスト・テーブル・セルで使用できます。利用可能な変数のリストを表示するには、フィールドに%%または\$\$のいずれかを入力し、関連する変数を選択します。これでフィールドに変数が表示されます。

## 5. テンプレート・リモート・サーバの作成

テンプレートで、監視対象のオブジェクトが含まれるリモート Windows サーバまたはリモート UNIX サーバを定義できます。テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時にテンプレート・サーバで定義されたサーバ、またはリモート・サーバで手動で定義されたサーバで実行できます。テンプレートのデプロイ時に、[Microsoft Windows リモートサーバ] または [UNIX リモートサーバ] のリモート・サーバ・ツリーにテンプレート・サーバが追加されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規テンプレート リモート サーバ\] ダイアログ・ボックス](#)」(826ページ)を参照してください。

**注:** テンプレートには1つのリモート・サーバのみ追加できます。

**例:** Windows テンプレート・リモート・サーバが「%%host%% remote windows」の名前で作成されています。

The screenshot displays the SiteScope configuration window with two tabs: '一般設定' (General Settings) and 'メイン設定' (Main Settings). The '一般設定' tab is active, showing fields for '名前' (Name) and '詳細' (Details). The '名前' field contains the text '%%host%%remote windows'. The 'メイン設定' tab is also visible, showing fields for 'サーバ' (Server), '資格情報' (Credentials), '接続方式' (Connection Method), and 'リモート サーバのエンコード' (Remote Server Encoding). The 'サーバ' field contains '%%host%%'. The '資格情報' section has two radio buttons: 'ユーザ名およびパスワードを使用' (Use username and password) which is selected, and '事前定義された資格情報を選択' (Select predefined credentials). The 'ユーザ名' field contains '%%user%%' and the 'パスワード' field contains '.....'. The '事前定義された資格情報を選択' option has a dropdown for '資格情報プロファイル' and a button '資格情報の追加'. The '接続方式' dropdown is set to 'NetBIOS'. The 'リモート サーバのエンコード' dropdown is set to 'Cp1252 (windows-1252)'. There is also a checkbox for 'トレース' (Trace) which is unchecked.

## 6. テンプレート・グループの作成

テンプレートで、モニタおよび関連付けられた警告のデプロイメントを組織で管理して効率的にする場合にテンプレート・グループを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規テンプレートグループ\] ダイアログ・ボックス](#)」(828ページ)を参照してください。

### 注:

- 標準設定では、モニタをテンプレート・グループに作成する必要があります。[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で、[テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] を選択することでこの設定を上書きできます。
- コンテンツがテンプレートに含まれないようにテンプレート・サブグループを定義し、デプロイ済みグループに変更が適用されるときにコンテンツが無視されるよう定義することができます。これによってさまざまなデプロイ済みグループ内にテンプレートをデプロイできます。詳細については、「一般設定」の「[変更を公開するとき、グループを無視する](#)」(829ページ)を参照してください。

- テンプレートには、その直下に1つのテンプレート・グループ（親グループ）のみを含めることができます。

## 7. テンプレート・モニタ・インスタンスの作成

- テンプレート・グループに追加するモニタ・インスタンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[新規テンプレート モニタ\] ダイアログ・ボックス](#)」(833 ページ)を参照してください。
- モニタのプロパティの値を入力します。
  - テンプレート変数を使用している場合、値が変数と置き換えられるすべてのフィールドの変数の構文を入力します。これには \$\$SERVER\_LIST\$\$ システム変数の使用が含まれます。概念の詳細については、「[システム変数の構文](#)」(802ページ)を参照してください。
  - 変数を入力するには、%% と \$\$ のいずれかを入力します。そのタイプの利用可能な変数のリストが自動的に表示されます。関連する変数をクリックして選択します（キーボードを使用した利用可能な変数のリストのナビゲートはサポートされません）。これでフィールドに変数が表示されます。

CPU モニタ設定

サーバ:  ☐ 現在のテンプレートの下の、既に設定済みのテンプレート リモートを使用します

モニタの実行設定

%%frequency%%  
%%host%%  
%%password%%  
%%user%%

**例：**モニタ設定時に変数を使用。この例では、テンプレート・モニタ（SiteScope CPU モニタ）をテンプレート・リモート・サーバ「%%host%% remote windows」で実行するように設定されています。

テンプレート モニタ CPU - "Cpu monitor on %%host%%"

プロパティ 警告

一般設定

CPU モニタ設定

サーバ:  ☐ 現在のテンプレートの下の、既に設定済みの

### 注:

- テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時にテンプレート・サーバで定義されたサーバ、またはリモート・サーバ・ツリーのリモート・サーバ・コンテナで手動で定義されたサーバで実行できます。どちらの場合でも、**[サーバ]** ボックスの値は、テンプレート変数に値が代入された後のテンプレートのデプロイ時の、実際のサーバのホスト名と一致する必要があります。サーバ名が実際のサーバのホスト名と一致しない場合、監視は失敗します。テンプレート・リモート・サーバ名（作成済みの場合）を自動的に取得するには、**[モニタ設定]** フィールドの**[現在**

のテンプレートの下で、既に設定済みのテンプレート リモートを使用します] チェック・ボックスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[新規テンプレート モニタ\] ダイアログ・ボックス」\(833ページ\)](#)を参照してください。

- ・ モニタの [サーバ] フィールドとリモート・サーバの [名前] と [サーバ] フィールドには、 「\」 を使用しないでください。
- ・ [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] を選択した場合、テンプレート・エンティティに直接モニタ・インスタンスを追加できます。

- c. 参照可能なカウンタを含むモニタの場合、カウンタを選択して監視対象システム固有の測定値を監視します。
- **[カウンタの取得]** ボタンをクリックして、サーバを選択するか、監視対象のサービスまたはアプリケーションを実行しているサーバの接続情報を入力します。
  - **[カウンタの取得]** ボタンを再度クリックして利用可能なカウンタを取得します。カウンタの選択ダイアログ・ボックスが更新されます。
  - 監視する測定値またはカウンタを選択します。監視対象システムの特定のカウンタがデプロイメントによって異なる場合、監視するカウンタのタイプまたはカテゴリを表すパターンを照合する正規表現を使用できます。タスクの詳細については、[「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法」\(816ページ\)](#)を参照してください。
- d. [プロパティ] タブで次のようなその他のモニタ設定を設定します。
- 報告される各モニタ・インスタンスの状態を決定するロジック条件を設定して、モニタのしきい値を手動で設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「しきい値の設定」\(298ページ\)](#)を参照してください。

**注:** テンプレートのデプロイ後、ベースラインを使用して1つ以上のモニタのしきい値を設定することもできます。タスクの詳細については、[「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」\(336ページ\)](#)を参照してください。

- 1つ以上のモニタについて2つ以上のメトリクスの関係を計算するために、手動で計算済み測定値を設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「計算済みメトリクスの設定」\(373ページ\)](#)を参照してください。
- グループと主要なモニタの依存関係を作成し、過剰な警告を制御できるようにします。概念の詳細については、[「グループの依存関係の監視」\(264ページ\)](#)を参照してください。
- 一般的なユーザ設定の完全なリストについては、[「共通モニタ設定」\(290ページ\)](#)を参照してください。

**注:** カスタム・モニタを含んでいるテンプレートをコピー、移動、削除すると、(<SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\workspaceディレクトリに作成され

た) コンテンツ・パッケージのフォルダに次のような影響が生じます。

- **コピー** : コンテンツ・パッケージのフォルダのコピーを **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\workspace** フォルダに作成します。
- **切り取り** : 変更はありません。
- **削除** : カスタム・モニタのテンプレートを削除すると、コンテンツ・パッケージのフォルダは SiteScope ファイル・システムの **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\workspace** フォルダから削除されます。

## 8. モニタとグループ警告の設定

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスに変化したときに通知を送信する警告を作成します。

タスクの詳細については、[「SiteScope 警告の設定」\(1231ページ\)](#)を参照してください。

## 9. テンプレートのデプロイ

SiteScope 監視テンプレートの作成後、テンプレートをグループにデプロイできます。

- ユーザ・インタフェースから1つのテンプレートをデプロイする、または複数のテンプレートをグループに同時にデプロイできます。タスクの詳細については、[「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」\(862ページ\)](#)を参照してください。
- SiteScope ユーザ・インタフェースの外側で CSV ファイルを使用することで、1つテンプレートの一括デプロイメントを実行できます。1つの CSV ファイルですべてのテンプレート変数値の入力と更新がしやすくなるため、一括デプロイメントの実行には CSV ファイルが適しています。詳細については、[「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」\(862ページ\)](#)を参照してください。
- SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイできます。詳細については、[「XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ」\(875ページ\)](#)を参照してください。

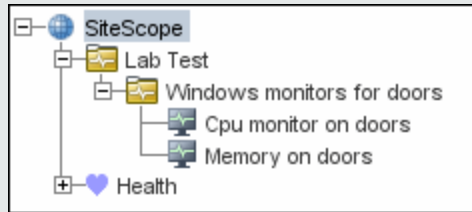
**注:** カスタム・モニタを含んでいるテンプレートをデプロイする場合、テンプレートおよびデプロイされたモニタがともに同じモニタをポイントします。デプロイしたモニタをコピーすると、内容パッケージが SiteScope ファイル・システムの **<SiteScope ルート・ディレクトリ>\packages\workspace** フォルダにコピーされます。

## 10. 結果

SiteScope によって、モニタ・ツリーの指定したグループにグループ、モニタ、警告が追加されます。

ユーザ定義テンプレートを設定して作業する場合のトラブルシューティングと制限事項については、[SiteScope テンプレートのトラブルシューティング](#)を参照してください。

例：テンプレートの例では、**Windows basic template** が、**Lab Test** という名前のグループ・コンテナにデプロイされています。テンプレートには **CPU モニタ**と**メモリ・モニタ**が含まれ、**doors** という名前のサーバでリソースの使用率を監視するためにデプロイされています。



#### 11. モニタ・ビューでのモニタとグループ・レポートの設定 - オプション

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

タスクの詳細については、[「SiteScope レポートの作成」\(1311ページ\)](#)を参照してください。

#### 12. 監視ソリューションへの変更の適用 - オプション

デプロイ済みテンプレートに対して、変更（モニタの追加や削除、モニタのプロパティの変更など）を加えることができます。この変更を実行するには、テンプレートを編集し、テンプレート変更適用ウィザードを使用して、テンプレートでデプロイされたすべての関連オブジェクトへの変更を適用します。

タスクの詳細については、[「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」\(892ページ\)](#)を参照してください。

#### 13. ほかの SiteScope ユーザとのテンプレートの共有 - オプション

テンプレートを個々の SiteScope ユーザに送信するか [HP Live Network](#) にテンプレートをパブリッシュすることによって、テンプレートを共有できます。HP Live network はオンライン・コミュニティで、HP カスタマが情報を共有し、アドオン・コンテンツ、エクステンション、HP Software ポートフォリオにわたる関連アクティビティについて知るための中心的な場所を提供します。

タスクの詳細については、[「HP Live Network での SiteScope コンテンツの共有」\(906ページ\)](#)を参照してください。

## 既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法

このタスクでは、既存のグループ、モニタ、またはリモート・サーバを SiteScope からテンプレートにコピーして、テンプレートとして使用するために要素を編集する手順について説明します。



## 1. 前提条件

既存の設定を SiteScope からテンプレートにコピーするには、エンティティをコピーするテンプレート・コンテナおよびテンプレートがテンプレート・ツリーに存在している必要があります。

**注:** 既存のモニタまたはリモート・サーバをテンプレートにコピーする場合、テンプレート・グループもテンプレートに存在している必要があります。

テンプレート・コンテナ、テンプレート、およびテンプレート・グループの作成の詳細については、「[テンプレートを使用した監視構造の作成方法](#)」(804ページ)を参照してください。

## 2. テンプレートへの設定のコピー

コピーするグループ、モニタ、またはリモート・サーバを右クリックし、**[テンプレートにコピー]**を選択します。**[テンプレート ツリーにコピー]** ダイアログ・ボックスで、コピーした設定を追加するテンプレートまたはテンプレート・グループを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[テンプレート ツリーにコピー\] ダイアログ・ボックス](#)」(326ページ)を参照してください。

## 3. テンプレート変数の編集

新しいテンプレートでテンプレート変数を使用する場合、該当する設定フィールドの値を必要な変数の構文に置き換えて、コピーした各オブジェクトを編集します。

概念の詳細については、「[テンプレート変数の参照](#)」(803ページ)を参照してください。

## 4. 結果

SiteScope によって、テンプレート・ツリーの指定したテンプレートまたはテンプレート・グループにグループ、モニタ、リモート・サーバが追加されます。

# モニタ・テンプレートで参照可能なモニタのカウンタの選択

SiteScope には、監視対象システム固有の測定値を監視するために設計された多数のアプリケーション・モニタ・タイプが含まれています。これらの参照可能なカウンタ・モニタ・タイプでは、**[モニタ設定]** パネルの**[カウンタの取得]**または**[測定値の取得]** ブラウザ機能を使用します。これらのモニタ・タイプを手動で設定する場合、モニタ・タイプの選択後に次の手順が必要です。

- 監視対象システムへの接続プロパティを指定し、SiteScope でリモート・システムから測定値カウンタを取得するように要求します。
- 監視対象のカウンタを選択し、設定に追加します。その後、モニタを SiteScope に追加できます。



## 参照可能なモニタのカウンタ選択の概要

テンプレートを使用したモニタのデプロイでは、カウンタ選択に独立した手順を使用しません。テンプレートを使用したこれらのモニタ・タイプのカウンタの選択を有効にするには、別のメカニズムを使用します。SiteScope では、テンプレート・デプロイメントのカウンタ選択手順を自動化するために、テキスト照合または正規表現照合を使用します。テンプレート・モニタの作成時に、カウンタ選択の手順を使用します。

テンプレートのカウンタ選択で最も簡単な方法は、モニタ・テンプレートで特定のカウンタを明示的に選択することです。この方法により、デプロイメント中に照合カウンタの選択に使用する明示的テキスト照合が作成されます。明示的に選択したカウンタを含む参照可能なカウンタ・モニタ・タイプを追加するために必要な手順の詳細については、「[テンプレートを使用した監視構造の作成方法](#)」(804ページ)の「テンプレート・モニタ・インスタンスの作成」手順を参照してください。

監視対象システムの特定のカウンタがデプロイメントによって異なる場合、監視するカウンタのタイプまたはカテゴリを表すパターンの照合に、正規表現を使用できます。詳細については、「[正規表現を使用したカウンタ選択](#)」(813ページ)を参照してください。

正規表現を使用するために、モニタの作成時にテンプレート・モニタのカウンタ選択文字列を変更するか、後からモニタを編集できます。正規表現カウンタ照合用にテンプレート・モニタを変更する方法の詳細については、「[正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法](#)」(816ページ)を参照してください。

## 正規表現を使用したカウンタ選択

多くのアプリケーションには、実行しているシステム、システム・オプションの設定、インストールされているコンポーネントによって異なる多数の測定値カウンタがあります。この場合、モニタ・テンプレートで明示的にカウンタを選択すると、アプリケーションまたはシステムの複数のインスタンスに渡って役に立たない可能性があります。一部のシステムには、パターンが似ていてもノードの名前またはオブジェクト・コンテキストが異なる測定値カウンタがあります。複数の測定値カウンタの選択を自動化するために、モニタ・テンプレートで正規表現を使用できます。

**注:** この正規表現カウンタ照合機能を使用するには、監視対象のシステムのカウンタの知識が必要です。テンプレートに追加するモニタ・タイプを手動で設定し、監視対象のシステムのタイプで利用可能なカウンタを慎重に確認する必要があります。リモート・システムで多数のカウンタを照合する「欲張りな」正規表現を作成すると、SiteScope のパフォーマンスが低下する可能性があります。

正規表現を使用するテンプレート・モニタを作成する手順は、前のセクションで説明されている手順と非常に似ています。明示的に監視するためのすべてのカウンタを選択する代わりに、選択するすべてのカウンタを代表する1つ以上のカウンタを選択します。モニタ・テンプレートでのカウンタ選択は、テキスト文字列で保存されます。モニタのデプロイ時に、選択したカウンタとの一致を検索するために SiteScope で使用するパターンを作成するには、この文字列を編集します。

**注:** 正規表現を使用して測定値カウンタを選択するか、しきい値を照合する場合、SiteScope では、相等性チェックを実行するのではなく、1つの文字列が別の文字列の一部であるかどうかの

を確認します。このため、デプロイ後にモニタで誤ったカウンタおよびしきい値のセットが定義される可能性があります。たとえば、選択されているモニタのしきい値が x/y である場合、x/yy も正規表現に一致するので、このしきい値も定義されます。

## 正規表現の例

- **例 1:** テンプレートで [MIB による SNMP] モニタ・タイプのカウンタを選択する場合に、正規表現を使用する方法の簡単な例を次に示します。

インフラストラクチャの複数の SNMP エージェントから、次の 3 つのカウンタを監視するとします。

```
iso/org/dod/internet/mgmt/mib-2/system/sysDescr  
iso/org/dod/internet/mgmt/mib-2/system/sysUpTime  
iso/org/dod/internet/mgmt/mib-2/system/sysName
```

テンプレート・モニタで 3 つのカウンタすべてを明示的に選択できます。あるいは、いずれか 1 つを選択して、カウンタ文字列を次のような正規表現に変更できます。

```
/iso\org\dod\internet\mgmt\mib-2\system\s[ys][DUN][a-zA]*
```

この例では、文字列の前後にスラッシュ (/) のペアを追加するようにカウンタ選択文字列が編集されています。この処理は、文字列が正規表現として解釈されるために必要となります。選択文字列には初期状態で複数のスラッシュ (/) が含まれているため、これらの文字のすぐ前にバックスラッシュ (\) を追加してエスケープする必要があります。[DUN][a-zA]\* 文字列には、正規表現構文で一般的に使用される 2 つの文字クラス宣言が含まれています。正規表現構文の詳細については、[「正規表現」\(187 ページ\)](#)を参照してください。

- **例 2:** テンプレートで [Unix リソース] モニタ・タイプのカウンタを選択する場合に、正規表現を使用する方法の例を次に示します。

インフラストラクチャの複数の UNIX または Linux サーバで実行されているデーモン・プロセスを監視するとします。実行中のプロセスのリストに次の情報が含まれています。

```
Process\-bash\NUMBER RUNNING  
Process\../java/bin/java\NUMBER RUNNING  
Process\./ns-admin\NUMBER RUNNING  
Process\./ns-proxy\NUMBER RUNNING  
Process\./ns-sockd\NUMBER RUNNING  
Process\bin/sh\NUMBER RUNNING  
Process\etc/init\NUMBER RUNNING  
Process\usr/apache/bin/httpd\NUMBER RUNNING  
Process\usr/lib/nfs/statd\NUMBER RUNNING  
Process\usr/lib/saf/sac\NUMBER RUNNING  
Process\usr/lib/saf/ttymon\NUMBER RUNNING  
Process\usr/lib/snmp/snmpdx\NUMBER RUNNING
```

```
Process\usr/lib/ssh/sshd\NUMBER RUNNING
...
```

文字「d」で終わるプロセスのみと照合する、正規表現カウンタ選択文字列を作成できます。このパターンを照合する正規表現の例を次に示します。

```
/Process[\\W\\w]{5,18}d[\\W]{1,2}NUMBER RUNNING/
```

例 1 のように、カウンタ選択文字列には、文字列が正規表現であることを示すために文字列の前後にスラッシュ (/) が含まれています。この例の UNIX サーバのプロセス文字列には、バックスラッシュ (\) とスラッシュ (/) の組み合わせが含まれています。これらの文字は正規表現で特別な意味を持つため、エスケープする必要があります。プロセス文字列には、これらの文字やその他の記号の多くのバリエーションと組み合わせが含まれるため、エスケープが複雑になる場合があります。

この例で使用した正規表現では、文字クラス宣言を使用して表現を簡素化しています。[\\W] クラスは句読点の照合に使用されています。この照合では、文字を個別にエスケープする必要がなく、一部のプロセス文字列で使用する \, -, :, / の文字に一致します。正規表現構文の詳細については、「[正規表現](#)」(187ページ)を参照してください。

- **例 3:** テンプレートで異なるモニタのカウンタ選択で正規表現を使用する方法について、より複雑な例を次に示します。この場合、%% <変数名>%% の部分はテンプレート変数を表します。

#### VMware ホスト・ネットワーク・モニタ :

```
/%%host%%/HostSystem/net/packetsRx.summation\[.*\]
/ %%host%%/HostSystem/net/packetsTx.summation\[.*\]/
```

#### VMware データストア・モニタ :

```
/.*/.*/accessible/
/.*/.*/capacity/
```

#### リソース・プールに対する VMware パフォーマンス・モニタ :

```
/ResourcePool/%%resource_pool_name%% (.) /Historical\[300 secs\]/mem/consumed.average\[\]/
/ResourcePool/%%resource_pool_name%% (.) /Historical\[300 secs\]/cpu/usagemhz.average\[\]/
```

#### Microsoft Windows リソース・モニタ :

```
/Network Interface\\(.*)\\Packets/sec/
/Network Interface\\(.*)\\Bytes Total/sec/ /Network Interface\\(.*)\\Bytes Received/sec/
```

```
/Network Interface\\(.*)\\Current Bandwidth/  
/Process\\java(.*)\\% User Time/ /Process\\java(.*)\\ID Process/ /.NET CLR Exceptions\\(.*)\\# of  
Exceps Thrown \\ / sec/
```

## 正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法


このタスクでは、測定値カウンタの選択に正規表現を使用するためにテンプレート・モニタを変更する手順について説明します。

**注:** このタスクは、参照可能なカウンタを使用するモニタのみに適用されます。

1. テンプレート・ツリーで、変更するモニタ・テンプレートをクリックして、テンプレート・モニタの「プロパティ」ビューを開きます。
2. 「モニタ設定」パネルを開き、「測定値」セクションまたは「カウンタ」セクション（モニタ・タイプによって異なる）で、モニタに設定するカウンタのパターンを表すカウンタ選択文字列を選択します。
3. カウンタ選択文字列の先頭と末尾にスラッシュ ("/") 文字を追加して、正規表現に変更します。必要に応じて、ほかのパターン照合構文を使用するように文字列を変更します。

カウンタ選択の例については、「[正規表現の例](#)」(814ページ)を参照してください。

正規表現構文の詳細については、「[正規表現](#)」(187ページ)を参照してください。

**注:** テンプレート・モニタの設定時に、入力した正規表現を使用して照合可能なカウンタを明示的に選択している場合は、「**カウンタの削除**」 をクリックして余分なカウンタ文字列を削除できます。

## 保存可能なカウンタの最大数

ブラウズ可能なモニタはモニタに指定されたカウンタ数によって制限されます。カウンタの最大数は、**master.config** ファイルの **\_browsableContentMaxCounters** パラメータで決定されます（「[プリファレンス](#)」 > 「[インフラストラクチャ プリファレンス](#)」 > 「[モニタ設定](#)」 > 「[選択されるブラウズ可能カウンタの最大数](#)」でも設定できます）。この値よりもカウンタ数が増えるようにモニタを作成または編集する場合、この値のカウンタ数までしか保存されません。

ブラウズ可能なモニタがテンプレートにデプロイされる時、選択されたパターンに一致するカウンタ数は **master.config** ファイルの **\_maxCountersForRegexMatch** によって制限されます。デプロイの間、パターンに一致するカウンタ数がこの値を超えると、この値までのカウンタ数だけが保存されます。

動的モニタを作成および更新する時に選択されたカウンタ・パターンに一致するカウンタ数を制限するために、**\_maxCountersForRegexMatch** パラメータも使用されます。**master.config** ファイルの **\_browsableContentMaxCounters** と **\_maxCountersForRegexMatch** の両パラメータに同じ値を使用することを推奨します。これらの両パラメータの標準設定値は 1000 です。

以前のバージョンの SiteScope からアップグレードするとき、これらの両パラメータの値は以前のバージョンの 2 つのパラメータ値よりも高い値、または 1000（いずれか高い方）に設定されます。

# SiteScope テンプレートのユーザ・インタフェース

## 本項の内容




- ・ [「\[SiteScope テンプレート\] ページ」](#) (817ページ)
- ・ [「テンプレート・ツリー - \[プロパティ\] ページ」](#) (818ページ)
- ・ [「テンプレート・ツリー - \[警告\] タブ」](#) (820ページ)
- ・ [「\[新規テンプレート コンテナ\] ダイアログ・ボックス」](#) (821ページ)
- ・ [「\[新規テンプレート\] ダイアログ・ボックス」](#) (822ページ)
- ・ [「\[新規変数\] ダイアログ・ボックス」](#) (824ページ)
- ・ [「\[新規テンプレート リモート サーバ\] ダイアログ・ボックス」](#) (826ページ)
- ・ [「\[新規テンプレート グループ\] ダイアログ・ボックス」](#) (828ページ)
- ・ [「\[新規テンプレート モニタ\] ダイアログ・ボックス」](#) (833ページ)
- ・ [「\[新規警告\] ダイアログ・ボックス」](#) (835ページ)
- ・ [「\[タグの検索/フィルタ\] ダイアログ・ボックス」](#) (835ページ)

## [SiteScope テンプレート] ページ

このページには、選択したテンプレート・コンテナの名前と詳細が表示されます。このページでは、テンプレート・コンテナを追加、または既存のテンプレート・コンテナのプロパティを編集できます（ソリューション・テンプレート以外）。

アクセス方法	<a href="#">[テンプレート]</a> コンテキストを開きます。テンプレート・ツリーで、 <a href="#">[SiteScope]</a> ノードを選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ テンプレートの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、<a href="#">「SiteScope 公開 API」</a> (171ページ)を参照してください。</li><li>・ SiteScope 管理者ユーザ、または適切なテンプレート権限を付与されたユーザのみがテンプレートを表示、追加、編集できます。ユーザ権限の詳細については、<a href="#">「権限」</a> (757ページ)を参照してください。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」</a> (804ページ)
関連情報	<a href="#">「テンプレート・ツリー」</a> (42ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>新規テンプレート・コンテナ</b> :新しいテンプレート・コンテナを作成できる [新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス</a> 」(821ページ)を参照してください。
	<b>テンプレート・コンテナの編集</b> :選択したテンプレート・コンテナを編集できます。
	<b>テンプレートの削除</b> :テンプレート・コンテナを削除します。
<b>&lt;SiteScope テンプレート・グループ&gt;</b>	SiteScope に含まれている定義済みテンプレート（テンプレート例、モニタ デプロイメントウィザードのテンプレート、ソリューション・テンプレート）およびユーザ定義のテンプレート・コンテナが表示されます。テンプレート・コンテナをダブルクリックすると、選択したテンプレートのテンプレート・コンテナ・ページが開きます。
<b>名前</b>	テンプレート・コンテナに割り当てられている名前文字列。
<b>詳細</b>	テンプレート・コンテナを作成または編集したときに割り当てたテンプレート・コンテナの詳細。

## テンプレート・ツリー - [プロパティ] ページ

このページには、選択したテンプレート・オブジェクトの名前と詳細が表示されます。テンプレート・ツリーでテンプレート・オブジェクト（テンプレート・グループ、テンプレート・モニタ、テンプレート変数）を選択して、特定のオブジェクトのプロパティを表示します。このページでは、テンプレートのプロパティを編集します。

<b>アクセス方法</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>[テンプレート]</b> コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレート・オブジェクトを選択してそのオブジェクトのプロパティを表示します。テンプレートの <b>[プロパティ]</b> タブが表示されるのは、テンプレート・グループまたはモニタが選択される時だけです。</li> <li>・ SiteScope 管理者ユーザ、または適切なテンプレート権限を付与されたユーザのみがテンプレートを表示、追加、編集できます。ユーザ権限の詳細については、「<a href="#">権限</a>」(757ページ)を参照してください。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」</a> (804ページ)

関連情報	<a href="#">「テンプレート・ツリー」(42ページ)</a>
------	-------------------------------------

## メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	テンプレートの名前。
詳細	テンプレートの詳細。
最終編集者	テンプレートを最後に編集した SiteScope ユーザ。このフィールドは読み取り専用です。 <b>注：</b> このフィールドが表示されるのは、テンプレート・ツリーでテンプレートが選択される時だけです。
最終編集時刻	テンプレートまたはテンプレート内の任意のオブジェクトが最後に編集された日時。このフィールドは読み取り専用です。 <b>注：</b> このフィールドが表示されるのは、テンプレート・ツリーでテンプレートが選択される時だけです。

## タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。  概念の詳細については、 <a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」(78ページ)</a> を参照してください。
既存のタグを追加	クリックして既存のタグを追加します。[検索/フィルタ] ダイアログ・ボックスが開きます。詳細については、 <a href="#">「[タグの検索/フィルタ] ダイアログ・ボックス」(835ページ)</a> を参照してください。








## テンプレート・ツリー - [警告] タブ

このタブには、ソリューション・テンプレートに関連付けられている警告のリストが表示されます。このページを使用して、テンプレートに関連付けられている警告を追加、削除、編集します。テンプレート・ツリーで、選択したオブジェクトの警告を表示するテンプレート・グループまたはモニタを選択します。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、警告を表示、追加、編集するグループまたはモニタに移動します。[警告] タブをクリックします。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li>「<a href="#">ソリューション・テンプレートのデプロイ</a>」(910ページ)</li><li>「<a href="#">SiteScope 警告の設定</a>」(1231ページ)</li></ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>「<a href="#">テンプレート・ツリー</a>」(42ページ)</li><li>「<a href="#">SiteScope 警告ページ</a>」(1253ページ)</li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
	<b>新規警告</b> : [新規警告] ダイアログ・ボックスが開き、新しい警告を定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(1256ページ)を参照してください。
	<b>警告の編集</b> : [警告の編集] ダイアログ・ボックスが開き、警告を編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス</a> 」(1256ページ)を参照してください。
	<b>警告のコピー</b> : 警告がコピーされます。
	<b>警告の貼り付け</b> : 警告が貼り付けられます。
	<b>警告の削除</b> : 警告を削除します。
名前	警告定義に割り当てられている名前の文字列。
状態	警告の状態（有効/無効）。 <ul style="list-style-type: none"><li><b>有効</b> : 無効化された警告アクションが上書きされ、定義した条件に基づいて</li></ul>



UI 要素	詳細
	<p>警告が実行されるようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>無期限に無効化</b> : このラジオ・ボタンをクリアして警告定義を更新するまで、警告の条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されないようになります。</li> <li>・ <b>&lt;Time1&gt; から &lt;Time2&gt; へ 1 回限定のスケジュールに基づいて無効化</b> : 指定した期間、条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されなくなります。警告は、この期間の開始時に無効になり、この期間を過ぎると再度有効になります。</li> </ul>
詳細	警告の作成時または編集時に割り当てられた警告定義の詳細。
アクション名	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。

## 〔新規テンプレート コンテナ〕 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しいテンプレート・コンテナを定義できます。テンプレート・コンテナは、テンプレートの格納と管理に使用します。テンプレート・コンテナでは、目的または分類別に複数のテンプレートをグループ化、整理できます。

アクセス方法	<p>〔テンプレート〕コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、SiteScope ノードまたは既存のテンプレート・コンテナを右クリックし、<b>〔新規作成〕</b> &gt; <b>〔テンプレート コンテナ〕</b> を選択します。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ テンプレート・コンテナは、テンプレート・ツリーの SiteScope ノードにのみ追加できます。</li> <li>・ テンプレートは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。テンプレート・コンテナにはテンプレートのみを格納できます。</li> <li>・ テンプレートのデプロイ後にテンプレート・コンテナを削除するには、まずモニタ・ツリーでテンプレートがデプロイされた各グループを削除してから、テンプレート・コンテナを削除する必要があります。</li> </ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」(804ページ)</a></li> <li>・ <a href="#">「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」(811ページ)</a></li> </ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <a href="#">「テンプレートの作成」(792ページ)</a></li> <li>・ <a href="#">「テンプレート例」(798ページ)</a></li> <li>・ <a href="#">「テンプレート・ツリー」(42ページ)</a></li> </ul>

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
名前	テンプレート・コンテナの名前。 <b>最大文字数</b> : 250 文字
詳細	テンプレート・コンテナの詳細。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。  概念の詳細については、 <a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」 (78 ページ)</a> を参照してください。
タグの追加	【新規タグ】ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「【新規タグ】 / 【タグの編集】ダイアログ・ボックス」 (87ページ)</a> を参照してください。

【新規テンプレート】ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレート・コンテナにテンプレートを追加できます。個々のテンプレートは、テンプレートのデプロイ時に作成されるオブジェクトのオブジェクト定義から構成されます。テンプレートは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	【テンプレート】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・コンテナを右クリックして、【新規作成】 > 【テンプレート】を選択します。
重要な情報	・ テンプレートには、直下にテンプレート・グループが1つだけあります（親

	<p>グループ)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• テンプレートには、グループ、サブグループ、変数、リモート・サーバを含めることができます。また、<b>【プリファレンス】 &gt; 【インフラストラクチャプリファレンス】 &gt; 【テンプレート設定】</b>で<b>【テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する】</b>が選択されている場合は、モニタを含めることができます。</li> <li>• テンプレートをデプロイ後に削除するには、まずモニタ・ツリーでテンプレートがデプロイされた各グループを削除してから、テンプレートを削除する必要があります。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」(804ページ)</a></li> <li>• <a href="#">「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」(811ページ)</a></li> </ul>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <a href="#">「テンプレートの作成」(792ページ)</a></li> <li>• <a href="#">「テンプレート例」(798ページ)</a></li> <li>• <a href="#">「テンプレート・ツリー」(42ページ)</a></li> </ul>

## メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
<b>名前</b>	<p>テンプレートの名前。入力する名前は、テンプレート・ツリーにテンプレート・コンテナの子ノードとして表示されます。</p> <p><b>最大文字数</b> : 250 文字です。</p>
<b>詳細</b>	テンプレートの詳細。
<b>最終編集者</b>	<p>テンプレートを最後に編集した SiteScope ユーザ。このフィールドはテンプレートが作成された後でなければ更新されません。</p> <p><b>標準設定値</b> : N/A</p>
<b>最終編集時刻</b>	<p>テンプレート（またはテンプレート内の任意のオブジェクト）が最後に編集された日時。このフィールドはテンプレートが作成された後でなければ更新されません。</p> <p><b>標準設定値</b> : N/A</p>

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。  概念の詳細については、 <a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」</a> (78 ページ)を参照してください。
タグの追加	<a href="#">[新規タグ]</a> ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」</a> (87ページ)を参照してください。

[新規変数] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートにテンプレート変数を追加できます。変数を使用することで、テンプレートのデプロイ時にユーザ入力が求められます。テンプレート変数は、ユーザ定義の変数か、SiteScope の既知のリモート・サーバ接続リストにアクセスできる定義済みシステム変数のいずれかです。テンプレート変数は、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">[テンプレート]</a> コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレートを右クリックして、<a href="#">[新規]</a> &gt; <a href="#">[変数]</a> を選択します。</li><li>・ <a href="#">[テンプレート&lt;モニタ&gt;]</a> ページで、<a href="#">[新規変数]</a> をクリックします。詳細については、<a href="#">「[新規テンプレート モニタ] ダイアログ・ボックス」</a> (833ページ)を参照してください。</li><li>・ <a href="#">[新規テンプレート警告]</a> ダイアログ・ボックスで、<a href="#">[新規変数]</a> をクリックします。詳細については、<a href="#">「[新規警告] ダイアログ・ボックス」</a> (835 ページ)を参照してください。</li><li>・ <a href="#">[警告アクション]</a> ダイアログ・ボックスで、<a href="#">[新規変数]</a> をクリックします。詳細については、<a href="#">「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」</a> (1265 ページ)を参照してください。</li><li>・ <a href="#">[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]</a> ダイアログ・ボックスで、<a href="#">[新規変数]</a> をクリックします。詳細については、<a href="#">「[新規テンプレート リモート サーバ] ダイアログ・ボックス」</a> (826ページ)を参照してください。</li></ul>
--------	---

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ [新規 UNIX リモート サーバ] ダイアログ・ボックスで、[新規変数] をクリックします。詳細については、「<a href="#">[新規テンプレート リモート サーバ] ダイアログ・ボックス</a>」(826ページ)を参照してください。</li> </ul>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ [モニタの実行設定] で[頻度]と[エラー頻度]の変数を設定する場合、変数の値は秒単位でのみ指定できます。</li> <li>・ モニタをテンプレート間でコピーまたは移動すると、モニタ内のユーザ定義変数もコピーまたは移動されます。</li> <li>・ 割り当てたテンプレート変数の名前を変更した場合は、その変数を使用しているすべてのモニタが自動的に新しい変数名に更新されます。</li> </ul>
関連タスク	<a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」</a> (804ページ)
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <a href="#">「テンプレートの作成」</a> (792ページ)</li> <li>・ <a href="#">「テンプレート変数」</a> (800ページ)</li> <li>・ <a href="#">「テンプレート例」</a> (798ページ)</li> <li>・ <a href="#">「テンプレート・ツリー」</a> (42ページ)</li> </ul>


## メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	<p>テンプレート変数の名前。入力する名前は、テンプレート・ツリーでテンプレートの変数を識別するために使用されます。これは、ほかのテンプレート・オブジェクトの変数を参照するときに使用する必要がある名前です。</p> <p><b>注：</b> 変数を追加した後に変数の名前の編集はできません。変数名を変更するには、その変数を削除してから、正しい名前で新しい変数を作成します。</p>
表示名	<p>デプロイ時の変数名の代わりに別の名前を表示する場合に使用する表示名。ただし、テンプレート・オブジェクトの変数を参照するときには、変数名を使用する必要があります。</p>
詳細	<p>変数の詳細。</p>
標準設定値	<p>この変数に使用する標準設定値。このボックスの値が必須である場合、値を入力しないと、テンプレートのデプロイ時に値の入力を求められます。</p> <p><b>注：</b> [パスワード変数] オプションが選択されていると、標準設定値はアスタリスクの背面に隠されます。その後、このチェック・ボックスをクリアする</p>

UI 要素	詳細
	と、隠されたデータは削除されます。
テンプレートでの表示順序	<p>変数の表示シーケンス番号。これは、デプロイ時に SiteScope から変数の値の入力が要求される順序です。変数は昇順で表示されます。表示番号のない変数は最後に表示されます。</p> <p><b>注：</b>表示順序によってテンプレート定義内の変数の順序が変更されることはありません。</p>
パスワード変数	<p>標準設定値とデプロイ時に入力した値をアスタリスクの背面に隠します。その後、このチェック・ボックスをクリアすると、隠されたデータは削除されます。</p> <p><b>標準設定値：</b>選択されていない</p> <p><b>注：</b>このオプションは、名前の末尾に PASSWORD または password が使用されている、以前のバージョンの SiteScope の変数に自動的に選択されます。</p>
必須変数	<p>変数フィールドには値が必須で、テンプレートのデプロイ時に値の入力が要求されます。変数を必須でない値として設定するには、チェック・ボックスをクリアします。このオプションがクリアされると、SiteScope では、必須でない変数の値に空の文字列 ("" ) が使用されます。</p> <p><b>標準設定値：</b>選択されている</p>

## 〔新規テンプレート リモート サーバ〕 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートに UNIX または Windows リモート・サーバを作成できます。テンプレート・リモート・サーバは、テンプレートのデプロイ時に作成されるリモート・サーバのプリファレンスを定義するために使用されます。テンプレート・リモート・サーバは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	<p>〔テンプレート〕 コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレートを右クリックして、〔新規作成〕 &gt; 〔新規 Microsoft Windows リモートサーバ〕 / 〔新規 UNIX リモートサーバ〕 を選択します。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>テンプレートのデプロイメント全体を通して一定のままであるフィールドには、実際の値を入力します。テンプレートのデプロイ時に変数値で置換される値のフィールドには、テンプレート変数を入力します。詳細については、<a href="#">「テンプレート変数の参照」 (803ページ)</a>を参照してください。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>• テンプレートには1つのリモート・サーバのみ追加できます。</li> <li>• サーバがテンプレート・モニタから参照されている場合は、リモート・サーバ・リストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの「モニタ設定」パネルにある「サーバ」ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。</li> <li>• 「新規テンプレート リモート サーバ」ダイアログ・ボックスから新しい変数を追加するには、「<b>新規変数</b>」ボタンをクリックして、「<b>「[新規変数] ダイアログ・ボックス」</b> (824ページ)に説明されている方法で変数を設定します。</li> <li>• テンプレート変更適用ウィザードまたは自動デプロイメント更新（「<b>XML を使用したテンプレート変更の適用</b>」 (876ページ)を参照）を使用して既存の監視対象サーバを置換することはできませんが、必要に応じて監視対象サーバ自体のプロパティ値は変更できます。</li> <li>• リモート・サーバの「名前」および「サーバ」フィールド、およびモニタの「サーバ」フィールドでは、「\」を使用しないでください。</li> <li>• 標準モードでオブジェクトを設定するときにドロップダウン・リストが表示される一部のフィールドは、テンプレート・モードではテキスト・ボックスとして表示されます。</li> </ul>
関連タスク	「 <b>テンプレートを使用した監視構造の作成方法</b> 」 (804ページ)
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 「<b>テンプレートの作成</b>」 (792ページ)</li> <li>• 「<b>リモート・サーバ</b>」 (478ページ)</li> <li>• 「<b>テンプレート例</b>」 (798ページ)</li> <li>• 「<b>テンプレート・ツリー</b>」 (42ページ)</li> </ul>


次のユーザ・インタフェースはページの全領域に共通です。

UI 要素	詳細
新規変数	クリックして新規変数を定義します。詳細については、「 <b>「[新規変数] ダイアログ・ボックス」</b> (824ページ)を参照してください。

「新規 Microsoft Windows リモート サーバ」ダイアログ・ボックスの要素の詳細については、「**「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」** (484ページ)を参照してください。

「新規 UNIX リモート サーバ」ダイアログ・ボックスの要素の詳細については、「**「[新規 UNIX リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」** (501ページ)を参照してください。

## [新規テンプレート グループ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートまたは既存のテンプレート・グループにテンプレート・グループを追加して、サブグループを作成できます。テンプレート・グループは、インフラストラクチャの複数の場所に監視のデプロイメントを複製するために使用します。テンプレート・グループは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	【テンプレート】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレートまたはテンプレート・グループを右クリックして、 <b>【新規作成】 &gt; 【グループ】</b> を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>テンプレートには、その直下に1つのテンプレート・グループ（親グループ）のみを含めることができます。</li><li>標準設定では、親グループまたはサブグループのみにテンプレート・モニタ、警告、サブグループを作成できます。テンプレート・エンティティの直下にテンプレート・モニタを作成する場合は、<b>【プリファレンス】 &gt; 【インフラストラクチャ プリファレンス】 &gt; 【テンプレート設定】</b> で <b>【テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する】</b> チェック・ボックスを選択します。</li><li><b>【新規グループ】</b> ダイアログ・ボックスから新しい変数を追加するには、<b>【新規変数】</b> ボタンをクリックして、<b>「<a href="#">【新規変数】ダイアログ・ボックス</a>」</b> (824ページ)に説明されている方法で変数を設定します。</li></ul>
関連タスク	<b>「<a href="#">テンプレートを使用した監視構造の作成方法</a>」</b> (804ページ)
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li><b>「<a href="#">テンプレートの作成</a>」</b> (792ページ)</li><li><b>「<a href="#">テンプレート例</a>」</b> (798ページ)</li><li><b>「<a href="#">テンプレート・ツリー</a>」</b> (42ページ)</li><li><b>「<a href="#">テンプレート・モニタおよびグループを設定するときの依存関係</a>」</b> (266ページ).</li></ul>

次のユーザ・インタフェースはページの全領域に共通です。

UI 要素	詳細
新規変数	クリックして新規変数を定義します。詳細については、 <b>「<a href="#">【新規変数】ダイアログ・ボックス</a>」</b> (824ページ)を参照してください。



## 一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
グループ名	<p>テンプレート・グループの名前（テンプレート変数を使用するのが望ましい）。テンプレート変数を使用すると、テンプレートをデプロイするたびにグループに異なる名前を指定できます。グループ名に変数が含まれていない場合は、グループ名が一意でないため、同じディレクトリ内にテンプレートを複数回デプロイすると失敗します。テンプレート変数の使用の詳細については、<a href="#">「テンプレート変数の参照」(803ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ テンプレートに同じ名前の複数のグループが含まれている場合は、各グループが異なる親グループであっても、テンプレート・デプロイメントは失敗します。</li><li>・ グループ名には、` , ; , " , &amp; ,   , &lt; , &gt; , / , \ , + のどの文字も含めることはできません。</li></ul>
グループの詳細	<p>テンプレート・グループの詳細。テキスト・スタイルの一般的な HTML タグ（&lt;BR&gt;、&lt;HR&gt;、&lt;B&gt; など）とハイパーリンクを含めることができます。詳細は、SiteScope ダッシュボードでグループのプロパティを表示または編集するときのみ表示されます。ハイパーリンクの追加の詳細については、<a href="#">「グループの詳細に URL リンクを追加 - オプション」(256ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>注：</b> このフィールドでは、JavaScript、iframes、frames やその他の高度な機能はサポートされていません。このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードなど）を修正する修正アクションが実行されます。</p>
変更を公開するとき、グループを無視する	<p>（このオプションはルート・グループには使用できません。またソリューション・テンプレートには非アクティブです。）</p> <p>デプロイ済みグループに変更を適用するとき、このサブグループ内の任意のオブジェクトに行った変更は無視されます。</p> <p>このオプションにより、次のことが可能になります。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 無視されたグループ内の SiteScope オブジェクトに影響を与えることなく、既存のデプロイ済みグループ内でテンプレートをデプロイし、デプロイ済みグループにテンプレートの変更を適用します。つまり、変更を適用する時に影響を与えることなくデプロイ済みグループでモニタ、グループ、警告を編集または削除できるということです。</li></ul>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>ソース テンプレートに含まれなかったデプロイ済みグループで作成されたその他のオブジェクトを削除することなく、ソース テンプレートから削除されたデプロイ済みグループでオブジェクトを削除します（<b>「更新による削除の有効化」</b> オプションが選択されている時）。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p> <p>異なるアクションを実行する時にこの設定を有効にする方法は、以下の表を参照してください。</p>


次に、異なるアクションが実行される時の**「変更を公開するとき、グループを無視する」**設定の影響をリストします。

アクション	<b>「変更を公開するとき、グループを無視する」</b> が選択された時に有効
デプロイ済みのグループ名を変更する	変更の適用フローで名前の変更は無視されます。
テンプレート・グループ名を変更する	
デプロイ済みのグループの削除	変更を適用する時にグループが再作成されます。
テンプレート・グループの削除	変更の適用フローでは、 <b>「更新による削除の有効化」</b> が選択された時にデプロイ済みグループが削除されます。
テンプレート・グループのコピー	テンプレート・グループとそのコンテンツをテンプレートにコピーする時 <b>「変更を公開するとき、グループを無視する」</b> 設定は変わりません。
テンプレートへコピー	グループとそのコンテンツをテンプレートにコピーする時 <b>「変更を公開するとき、グループを無視する」</b> 設定は False（クリア）に設定されます。
テンプレート間でコピー	<b>「変更を公開するとき、グループを無視する」</b> 設定は、その他のテンプレート・グループ設定とともにコピーされます。
テンプレートを以前のバージョンの SiteScope からインポート	<b>「変更を公開するとき、グループを無視する」</b> 設定は False（クリア）と解釈されます。

アクション	【変更を公開するとき、グループを無視する】が選択された時に有効
テンプレートのエクスポート	テンプレートをエクスポートする時【変更を公開するとき、グループを無視する】設定は変わりません。

## 依存関係

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
依存対象	<p>【依存対象】  をクリックして【依存の対象モニタの選択】ダイアログ・ボックスを開き、モニタの実行を依存させるモニタを選択します。【依存の対象モニタの選択】ダイアログ・ボックスの詳細については、「<a href="#">【依存対象モニタの選択】ダイアログ・ボックス</a>」(324ページ)を参照してください。</p> <p>1つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタからの過剰な警告を避ける場合に、このオプションを使用します。</p> <p><b>例：</b>システムの基本的な可用性をチェックするシステム・モニタを作成して、システムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。基本的な可用性をチェックするモニタの状態に依存するように、詳細テスト・モニタを設定します。</p> <p>システム・モニタによって対象システムが利用不可になったことが検出されると、依存関係によってほかのモニタが自動的に無効になります。また、依存するモニタによって生成される警告も無効になります。</p> <p><b>標準設定値：</b>モニタ・インスタンスに設定された依存関係はありません。</p> <p><b>注：</b>【変更をパブリッシュするときに、依存関係を無視します】を選択したときは、このフィールドはクリアされ、使用できません。</p>
依存条件	<p>【依存対象】設定を使用してモニタを別のモニタの状態に依存させた場合、このオプションを使用して、現在のモニタが通常どおりに実行されるように【依存対象】のモニタの状態の条件を選択します。</p> <p>次の状態カテゴリがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 良好</li> <li>・ エラー</li> <li>・ 利用可能</li> <li>・ 利用不可</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p>設定対象のモニタは、<b>【依存対象】</b> ボックスで選択したモニタがこのボックスで選択した条件をレポートしている場合、正常に実行されます。</p> <p><b>例：</b> <b>【正常】</b> を選択して、<b>【依存対象】</b> ボックスで選択したモニタが「正常」の状態をレポートする場合にのみこのモニタが有効になるようにします。<b>【依存対象】</b> ボックスで選択したモニタが「正常」以外のカテゴリまたは条件をレポートした場合、現在のモニタは自動的に無効になります。モニタがエラーを検出した場合に依存するモニタを有効にすることもできます。</p> <p><b>標準設定値：</b> 正常</p>
<b>依存関係をパブリッシュするときに、依存関係を無視します</b>	<p>デプロイしたオブジェクトにテンプレート変更がパブリッシュされた場合、選択したテンプレート・グループに対する依存関係は無視され、デプロイしたオブジェクトの既存の依存関係が保持されます。詳細については、<a href="#">「テンプレート・モニタおよびグループを設定するときの依存関係」</a> (266ページ) を参照してください。</p> <p><b>標準設定値：</b> 選択されていない</p> <p><b>注：</b> 選択すると、<b>【依存対象】</b> フィールドがクリアされ使用できません。</p>

## タグの検索/フィルタ


SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<b>&lt;タグ名と値&gt;</b>	<p>次のいずれかを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>【既存のタグを追加】</b> ボタンをクリックして、<b>【タグの検索/フィルタ】</b> ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスで既存のタグを選択できます。詳細については、<a href="#">「【タグの検索/フィルタ】ダイアログ・ボックス」</a> (835ページ) を参照してください。</li> <li>・ <b>【タグ名】</b> ボックスと <b>【値】</b> ボックスに値を入力し、新しいタグを作成します。タグと値として変数を使用することも可能です。概念の詳細およびタグ名と値の書式設定方法については、<a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」</a> (78ページ) を参照してください。</li> </ul> <p><b>【タグ名】</b> ボックスと <b>【値】</b> ボックスに選択または入力された値が表示されま</p>

UI 要素	詳細
	す。タグを選択するまでボックスは空です。
既存のタグを追加	<p>「タグの検索/フィルタ」ダイアログ・ボックスを開きます。これで既存のキーワード・タグを追加または新しいタグを定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">「タグの検索/フィルタ」ダイアログ・ボックス</a>」(835ページ)を参照してください。</p>

## 「新規テンプレート モニタ」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレート・グループまたはサブグループにテンプレート・モニタを追加できます。テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時に実際のモニタの作成の土台として使用されます。テンプレート・モニタは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。


アクセス方法	<p>「テンプレート」コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・グループを右クリックして、「<b>新規作成</b>」&gt;「<b>モニタ</b>」を選択します。テンプレートに設定するモニタ・タイプを選択します。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>標準設定では、テンプレート・モニタはテンプレート・グループ内に作成されます。テンプレート・エンティティの直下にテンプレート・モニタを作成するには、「<b>プリファレンス</b>」&gt;「<b>インフラストラクチャ プリファレンス</b>」&gt;「<b>テンプレート設定</b>」で「<b>テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する</b>」チェック・ボックスを選択します。テンプレート・モニタには警告を含めることができます。</li> <li>テンプレート・モニタはアクティブなモニタ・インスタンスではありません。モニタは、テンプレートをデプロイしたときにのみ、これらのテンプレート設定に基づいて作成、アクティブ化されます。</li> <li>モニタの「<b>サーバ</b>」フィールドとリモート・サーバの「<b>名前</b>」と「<b>サーバ</b>」フィールドには、「\\」を使用しないでください。</li> <li>正規表現を使用してメトリック・カウンタを選択するか、しきい値を照合する場合、SiteScope では、相等性チェックを実行するのではなく、1つの文字列が別の文字列の一部であるかどうかのみを確認します。このため、デプロイ後にモニタで誤ったメトリックおよびしきい値のセットが定義される可能性があります。これは、SiteScope は標準設定で、メトリック・テーブル内のすべてのメトリックを正規表現で処理し、この表現に適合するすべてのメトリックとしきい値設定を一致させるためです。たとえば、選択されているモニタのしきい値が x/y である場合、x/yy も正規表現に一致するので、このしきい値も定義されます。これを回避するには、正確な要件を満たすために特定の正規表現を追加します（「<a href="#">モニタ・テンプレートで参照可能なモ</a>」</li> </ul>

	<p><a href="#">ニタのカウンタの選択</a> (812ページ)を参照してください)。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ [タグの検索/フィルタ] をテンプレート・モニタに追加する時は、同じタグ値グループで実際のパラメータと変数パラメータの両方を使用できません。</li><li>・ テンプレートからスクリプト・モニタをデプロイするときには、リモート・スクリプト名の大文字と小文字が、スクリプト・サブディレクトリ内のスクリプト名の大文字と小文字と一致する必要があります。一致しない場合、選択されたスクリプトは「なし」と表示されます。</li><li>・ ネットワーク帯域幅モニタの標準設定以外のしきい値は、テンプレートに正しくコピーされません。</li><li>・ テンプレート・モニタ名には、", ` , &lt; , &gt; のどの文字も含めることはできません。</li></ul>
関連タスク	<p><a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」</a> (804ページ)</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「共通モニタ設定」</a> (290ページ)</li><li>・ <a href="#">「テンプレートの作成」</a> (792ページ)</li><li>・ <a href="#">「テンプレート例」</a> (798ページ)</li><li>・ <a href="#">「テンプレート・ツリー」</a> (42ページ)</li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<p>以下は、テンプレート・モードでの作業時に限り [新規モニタ] ダイアログ・ボックス固有の設定です。すべてのモニタに共通する設定については、<a href="#">「共通モニタ設定」</a> (290ページ)を参照してください。</p>	
現在のテンプレートの下の、既に設定済みのテンプレート・リモートを使用します	<p>監視するサーバを選択する時は、名前を入力しなくても、テンプレート・リモート・サーバ（作成されていれば）の使用が可能となります。</p> <p>標準設定値 :選択されていない</p>
新規変数	<p>[新規変数] ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスによって、[新規モニタ] ダイアログ・ボックスと別の場所にナビゲートせずに新しい変数を作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[新規変数] ダイアログ・ボックス」</a> (824ページ)を参照してください。</p>

## [新規警告] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレート・グループまたはテンプレート・モニタに警告を定義できます。テンプレート警告は、テンプレートのデプロイ時に作成されるモニタの警告を定義するために使用されます。テンプレート・グループまたはモニタに警告が設定されている場合、グループまたはモニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。

アクセス方法	<a href="#">[テンプレート]</a> コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・グループまたはテンプレート・モニタを右クリックして、 <a href="#">[新規作成]</a> > <a href="#">[警告]</a> を選択します。
重要な情報	警告テンプレートを作成するときには、 <a href="#">[モニタの無効化/有効化]</a> 警告アクションは選択できません。テンプレート警告は、その定義の対象であるオブジェクトに属するすべてのモニタに対して有効になります。たとえば、警告がモニタに対して定義されている場合、そのモニタのみでアクティブ化されます。警告がテンプレートに対して定義されている場合、そのテンプレートにあるすべてのモニタでアクティブ化されます。
関連タスク	<a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」(804ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">「共通モニタ設定」(290ページ)</a></li><li>• <a href="#">「テンプレートの作成」(792ページ)</a></li><li>• <a href="#">「SiteScope 警告ページ」(1253ページ)</a></li><li>• <a href="#">「テンプレート例」(798ページ)</a></li><li>• <a href="#">「テンプレート・ツリー」(42ページ)</a></li></ul>

次の要素はすべてのアクション・タイプに共通します。

UI 要素	詳細
新規変数	クリックして新規変数を定義します。詳細については、 <a href="#">「[新規変数] ダイアログ・ボックス」(824ページ)</a> を参照してください。



[\[新規警告\] ダイアログ・ボックス](#)のその他の要素の詳細については、[「\[新規警告\] / \[警告の編集\] ダイアログ・ボックス」\(1256ページ\)](#)を参照してください。

## [タグの検索/フィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスによって、1つ以上の既存のタグを選択でき、また新しいタグを作成できます。

アクセス方法	テンプレート・グループ、テンプレート・モニタ、およびテンプレート警告の [タグの検索/フィルタ] パネルで <b>既存のタグを追加</b> をクリックします。
関連タスク	<a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」 (804ページ)</a>
関連情報	<a href="#">「タグの検索 / フィルタ」 (730ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
タグの追加	クリックして、新しいタグを作成します。詳細については、 <a href="#">「<b>[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス</b>」 (87ページ)</a> を参照してください。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない）を表します。
	タグを表します。



## 第62章: コンテンツ・パッケージの作成

コンテンツ・パッケージを使用することで、ユーザ定義のコンテンツを他の SiteScope ユーザと共有できます。コンテンツ・パッケージは、[コンテンツ パッケージのエクスポート ウィザード] を使用して作成します。

### 学習事項

#### SiteScope コンテンツ・パッケージの概要

コンテンツ・パッケージはカスタム・モニタや、スクリプトまたは警告の拡張ファイルを参照するモニタを共有するために必要です。

パッケージ・タイプ	詳細	詳細情報
カスタム・モニタのコンテンツ・パッケージ	<p>カスタム・モニタの作成時にカスタム・モニタのコンテンツ・パッケージが作成されます（詳細については、「<a href="#">カスタム・モニタの作成</a>」(328ページ)を参照）。これは、カスタム・モニタから作成および参照が可能な、SiteScope ファイル・システム上の事前定義フォルダ構造内にあるファイルのセットです。このパッケージに、カスタム・モニタを実行するために必要なファイルを追加することができます。コンテンツ・パッケージにはテンプレートおよび jars や設定ファイルのような追加の依存関係ファイルを含めることができます。</p> <p>コンテンツ・パッケージは、&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\packages\workspace\package_&lt;Package ID&gt; の下で作成されます。</p>	<p>「<a href="#">カスタム・モニタのコンテンツ・パッケージを作成、エクスポートおよびインポートする方法</a>」(841ページ)</p>
テンプレート拡張のコンテンツ・パッケージ	<p>テンプレート拡張のコンテンツ・パッケージは、SiteScope ファイル・システム内でスクリプトまたは警告の拡張ファイルを参照するテンプレート・モニタを共有するために必要です。コンテンツ・パッケージは（モニタ、変数を含んでいる）テンプレートと、テンプレート内のモニタによって参照される拡張ファイルを含んでいる事前定義フォルダのセットで構成されます。</p> <p>テンプレート内でモニタによって参照されるスクリプトと警告の拡張ファイルは、&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\packages\workspace\package_&lt;Package ID&gt; の下で作成されます。</p>	<p>「<a href="#">テンプレート拡張のコンテンツ・パッケージを作成、エクスポートおよびインポートする方法</a>」(847ページ)</p>

パッケージ・タイプ	詳細	詳細情報
	リ>\packages\workspace\extensions ディレクトリの関連フォルダにコピーされます。	

## タスク

- 「カスタム・モニタのコンテンツ・パッケージを作成，エクスポートおよびインポートする方法」  
(841ページ)
- 「テンプレート拡張のコンテンツ・パッケージを作成，エクスポートおよびインポートする方法」  
(847ページ)

## 第63章: テンプレートとコンテンツ・パッケージのエクスポートおよびインポート

ほかの SiteScope インストールでできるように SiteScope コンテンツ・パッケージとユーザ定義テンプレートをエクスポートおよびインポートできます。これにより、コンテンツをほかの SiteScope ユーザと共有できます。また、類似する監視設定基準を用いて企業全体で複数の IT 要素をデプロイすることもできます。

### 学習事項

#### SiteScope コンテンツのエクスポートおよびインポートの概要

ほかの SiteScope インストールでできるようにテンプレートをエクスポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。1つ以上のテンプレートを含むテンプレート・コンテナをエクスポートする場合、そのテンプレート・コンテナとテンプレートがエクスポートされます。テンプレートは、エクスポートした後もテンプレート・コンテナに残ります。テンプレートのエクスポートおよびインポートの詳細については、「[テンプレートのエクスポートとインポートの方法](#)」(840ページ)を参照してください。

ほかの SiteScope インストールでできるようにコンテンツ・パッケージの SiteScope コンテンツをエクスポートすることもできます。コンテンツ・パッケージは、SiteScope のルート・ディレクトリにあるスクリプトまたは警告テンプレート・ファイルを参照するカスタム・モニタや標準のモニタを含むユーザ定義テンプレートを共有するために使用されます。コンテンツ・パックのエクスポートおよびインポートの詳細については、「[カスタム・モニタのコンテンツ・パッケージを作成、エクスポートおよびインポートする方法](#)」(841ページ)および「[テンプレート拡張のコンテンツ・パッケージを作成、エクスポートおよびインポートする方法](#)」(847ページ)を参照してください。

テンプレートまたはコンテンツ・パッケージにエクスポートした後に、個々の SiteScope ユーザに送信するか [HP Live Network](#) にパブリッシュすると、テンプレートまたはコンテンツ・パッケージを共有できます。詳細については、「[HP Live Network での SiteScope コンテンツの共有](#)」(906ページ)を参照してください。

パッチ 9.10.210 および Hotfix QCCR1A125751 を適用した HPOM 9.10 または、9.10.210 よりも後のパッチを適用した HPOM 9.10 に SiteScope が接続されている場合は、HP Operations Manager (HPOM) に SiteScope テンプレートをエクスポートすることもできます。これにより、HPOM ポリシーの割り当てとデプロイメントを介して、SiteScope のテンプレートおよびモニタを設定できます。詳細については、HP Operations Manager 9.10 のマニュアルを参照してください。

テンプレートをエクスポートしたら、エクスポート・ファイルを別の SiteScope サーバにコピーし、使用する単一または複数のテンプレートを含むテンプレート・コンテナをインポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で効率的に複製できます。

# タスク

## テンプレートのエクスポートとインポートの方法

このタスクでは、ほかの SiteScope インストールでできるようにテンプレートをエクスポートおよびインポートする手順について説明します。

**注:** インポートが失敗するか、または [ソリューション テンプレート] ツリーのソリューション・テンプレートを表示できない場合、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\export フォルダから <SiteScope のルート・ディレクトリ>\persistency\import フォルダにコピーするとこれらのテンプレートを回復できます。\\export フォルダにテンプレートのサンプルも含まれている場合、一意の名前に関する違反を避けるためにテンプレート・コンテナの名前を変更する必要があります。

### 1. 前提条件

- テンプレートを追加、編集、削除するには、「**テンプレートを追加、編集、または削除します**」権限が必要です。
- テンプレートをデプロイするには、その内容に関わらず、デプロイ先グループの権限を編集する必要があります。テンプレート・オブジェクト（モニタ、リモート、警告）の権限は編集する必要はありません。ユーザ権限の詳細については、「[権限](#)」(757ページ)を参照してください。

### 2. テンプレートのエクスポート

他の SiteScope インストールでできるようにテンプレートをエクスポートするには、テンプレート・ツリーで、テンプレートまたはエクスポートするテンプレートを含むテンプレート・コンテナ・オブジェクトを右クリックして、**[エクスポート] > [テンプレート]**を選択します。詳細については、「[\[テンプレートのエクスポート\] ダイアログ・ボックス](#)」(852ページ)を参照してください。

テンプレートをエクスポートした後に、個々の SiteScope ユーザに送信するか [HP Live Network](#) にパブリッシュすると、テンプレートを共有できます。詳細については、「[HP Live Network での SiteScope コンテンツの共有](#)」(906ページ)を参照してください。

### 3. Operations Manager (HPOM) へのテンプレートのエクスポート - 任意指定

HPOM ポリシーの割り当てとデプロイメントによって SiteScope テンプレート（ソリューション・テンプレートでない）およびモニタを設定できるようにするには、テンプレート・ツリーでエクスポートするテンプレート右クリックし、**[Export to OM]**をクリックします。

**注:** このオプションは、HPOM 9.x 以降および SiteScope が UNIX 環境の同じマシンにインストールされている場合で、Operations Manager 統合が SiteScope で有効化されている場合に限り利用可能です。Operations Manager 統合を設定する方法の詳細については、HP

Operations Manager 製品との統合を参照してください。 [HP ソフトウェア統合](#)で、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます。

Windows の場合：

<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>

UNIX の場合：

<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>

HPOM による SiteScope テンプレートの管理方法の詳細については、HPOM のドキュメントを参照してください。

#### 4. テンプレートのインポート

テンプレートをエクスポートしたら、エクスポート・ファイルを別の SiteScope サーバにコピーし、使用する単一または複数のテンプレートを含むテンプレート・コンテナをインポートできます。テンプレート・ツリーで、テンプレートのインポート先のテンプレート・コンテナを右クリックして、**[インポート]** をクリックします。インポートするファイルの名前と場所を入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[内容のインポート\] ダイアログ・ボックス](#)」(859ページ)を参照してください。

**注:** SiteScope の以前のバージョンの廃止されたモニタが含まれるテンプレートを SiteScope にインポートすると、廃止されたモニタはテンプレート・ツリーに表示されません。

#### 5. 結果

ファイルに含まれているテンプレートがテンプレート・コンテナに追加されます。インポートしたテンプレートは、直接使用するか、必要に応じて変更できます。

カスタム・モニタのコンテンツ・パッケージを作成、エクスポートおよびインポートする方法

このタスクでは、ほかの SiteScope ユーザとカスタム・モニタを共有できるようにコンテンツ・パッケージを作成、エクスポート、インポートする手順について説明します。

##### 1. 前提条件

- ・ カスタム・モニタを作成している必要があります。詳細については、「[カスタム・モニタの作成](#)」(328ページ)を参照してください。
- ・ コンテンツ・パッケージを追加、編集、削除するには、「**テンプレートを追加、編集、または削除します**」権限が必要です。

##### 2. テンプレートへのモニタのコピー

詳細については、「[既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法](#)」(811ページ)を参照してください。

## 3. モニタの実行に使用されるファイルのコピー

モニタの実行に必要なファイル（スクリプトで使用する追加の jar やほかのリソース・ファイルなど）を **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\workspace\package\_<パッケージ ID>** の事前定義されたコンテンツ・パッケージ・フォルダにコピーします。

事前定義フォルダ	詳細
\classes	モニタで使用する java クラスをコンパイルしている場合、その java クラスをパッケージ・フォルダ構造全体でこのフォルダにコピーします。クラス・ファイルが \lib フォルダにコピーされた jar にパッケージされた場合、この操作は必要ありません。クラス・ファイルはデータ処理スクリプトからアクセスできます。
\conf	設定ファイルやドキュメント・ファイルがある場合、このフォルダにコピーします。データ処理スクリプトは、このフォルダの読み取り専用アクセスを持ちます。
\lib	カスタム・モニタ・スクリプトで使用する外部 jar ファイルがある場合、このフォルダにコピーします。jar ファイルからの Java クラスはデータ処理スクリプトからアクセスできます。このモニタは外部 jar なしで使えることに注意してください。
\META-INF	内容パッケージに関する情報が保存されているマニフェスト・ファイルが含まれます。マニフェスト・ファイルはマニフェスト・プロセスによって自動的に作成されます（「 <a href="#">コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードを使用した zip ファイルへのコンテンツ・パッケージのエクスポート</a> 」（843ページ）を参照）。
\templates	カスタム・モニタを含むテンプレートがある、SiteScope からエクスポートされたテンプレート・ファイルをこのフォルダにコピーします。各テンプレートは、さまざまなタイプのモニタ（カスタム、標準）を含むことができます。

## 4. モニタで参照される拡張ファイルのコピー - 任意指定

モニタで SiteScope ファイル・システムのスクリプトまたは警告の拡張ファイルを参照している場合、**<SiteScope ルート・ディレクトリ>\packages\workspace\extensions** ディレクトリの該当するフォルダにそれらをコピーします。

事前定義フォルダ	詳細
\scripts	SiteScope が実行されているマシンでシェル・コマンドやほかのスクリプト

事前定義フォルダ	詳細
	<p>トを実行するために使用されるスクリプト・ファイルを保存します。</p> <p><b>注:</b> コンテンツ・パッケージをインポートしたら、このフォルダにインポートされたスクリプト・ファイルのファイル権限が 755（読み取り，書き込み，実行）に変わります。これは，Linux 環境で作業しているすべてのユーザが対象になります。</p>
\scripts.remote	<p>リモート・マシンに保存されているスクリプトを実行するときに使用するスクリプト・ファイルを保存するために使用します。</p> <p><b>注:</b> コンテンツ・パッケージをインポートしたら，このフォルダにインポートされたスクリプト・ファイルのファイル権限が 755（読み取り，書き込み，実行）に変わります。これは，Linux 環境で作業しているすべてのユーザが対象になります。</p>
\templates.mail	電子メールで送信される警告メッセージの形式と内容を含むファイルを保存するために使用します。
\templates.mail.subject	電子メールで送信される警告メッセージの件名の行を含むファイルを保存するために使用します。
\templates.mib	<p>横断時に検出したオブジェクトの名前と説明を含む参照可能なツリーを作成するときに使用する MIB ファイルを保存するために使用します。</p> <p><b>注:</b> インポート・プロセスの一環として，<b>templates.mib</b> ファイルが編集されて，一意のパッケージ ID がファイル内の一部のプロパティに追加されます。</p>
\templates.os	<p>リモート UNIX サーバの監視時に実行するシェル・コマンドを保存するために使用します。</p> <p><b>注:</b> インポート・プロセスの一環として，<b>template.os</b> ファイルが編集されて，一意のパッケージ ID がファイル内の一部のプロパティに追加されます。</p>

- コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードを使用した zip ファイルへのコンテンツ・パッケージのエクスポート

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで，内容パッケージにエクスポートするテンプレートまたはテンプレート・コンテナを右クリックして，【**エクスポート**】>【**コンテンツ パッケージ**】を選択します。

コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードで，コンテンツ・パッケージの詳細（マニフェスト）を入力し，テンプレートや，含めるテンプレートに関連付けられたファイルを選



択します。詳細については、「[コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザード](#)」(853ページ)を参照してください。

**注:** ウィザードの [ファイルの選択] ページには、表示されない **\META-INF** および **\templates** フォルダを除く、上記の手順 3 と手順 4 の **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\workspace\package\_<パッケージ ID>** および **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\workspace\extensions** フォルダのファイルが表示されます。

## 6. カスタム・モニタのほかの SiteScope ユーザとの共有

個々の SiteScope ユーザに送信することによって、コンテンツ・パッケージ zip ファイルを配布できます。あるいは、ほかのユーザとのテンプレートおよびコンテンツ・パッケージの共有に、[HP Live Network](https://hpln.hp.com/group/sitescope) (<https://hpln.hp.com/group/sitescope>) コミュニティを使用できます。

HP Live Network コミュニティへのコンテンツ・パッケージのパブリッシュの詳細については、「[HP Live Network コミュニティへのコンテンツのパブリッシュ方法](#)」(907ページ)を参照してください。

コンテンツ・パッケージの SiteScope マシンへのダウンロードの詳細については、「[HP Live Network からのコンテンツのダウンロード方法](#)」(908ページ)を参照してください。

## 7. コンテンツ・パッケージのインポート

- a. SiteScope で、[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、内容パッケージのインポート先となるテンプレート・コンテナを右クリックして、[インポート] をクリックします。
- b. [内容のインポート] ダイアログ・ボックスで [コンテンツ パッケージ] を選択し、[参照] をクリックします。インポートするパッケージが含まれるフォルダに移動します (パッケージは zip 形式で配布されます)。

[開く] をクリックしてから、[OK] をクリックします。選択したテンプレート・コンテナにカスタム・モニタ・テンプレートが追加されます。

[内容のインポート] ダイアログ・ボックスの詳細については、「[\[内容のインポート\] ダイアログ・ボックス](#)」(859ページ)を参照してください。

### 注:

- コンテンツ・パッケージには、上記の手順 3 と手順 4 の事前定義されているフォルダから、任意のタイプのファイルを含めることができます。コンテンツ・パッケージにほかのフォルダが含まれている場合は、エラーが表示され、インポート操作が失敗します。
- 既存の SiteScope ファイルは、コンテンツ・パッケージのファイルで上書きすることはできません。ただし、[内容のインポート] ダイアログ・ボックスで [既存のテンプレートのオーバーライド] チェック・ボックスが選択されている場合、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\imported\templates** フォルダにあるテンプレートは上書きできます。詳細については、「[\[内容のインポート\] ダイアログ・ボックス](#)」(859ページ)を参照してください。



- SiteScope の以前のバージョンの廃止されたモニタが含まれるテンプレートを SiteScope にインポートすると、廃止されたモニタはテンプレート・ツリーに表示されません。
- インポートするコンテンツ・パッケージが大きすぎる場合（パッケージ・サイズの制限は、ユーザの VM サイズによって異なります）、エラーと、エラーが書き込まれている **applet.log** へのパスが SiteScope に表示されます。例外はユーザ・インタフェース側からスローされるため、ユーザごとに異なるパッケージ・サイズの例外が発生する可能性があります。
- インポートされたファイルを編集しないでください。

8. テンプレートがテンプレート・ツリーに追加されたことをチェックして、テンプレートが正常にデプロイされたことを確認します。
- a. コンテンツ・パッケージが **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\imported** フォルダにコピーされていて、次の名前の新しいフォルダが作成されていることを確認します。  
**<Package/Zip Name>.zip\_<パッケージ ID>**  
フォルダには次の項目が含まれます。

フォルダ	詳細
\classes	コンパイルされた Java クラスを保存します。
\conf	設定ファイル、ドキュメント、XML ファイルの保存に使用されます。
\extensions	インポートされたテンプレートのモニタが参照するスクリプトおよび警告ファイルを保存します。
\lib	モニタ・スクリプトで使用する外部 jar ファイルを保存します。
\META-INF	内容パッケージに関する情報が保存されているマニフェスト・ファイルが含まれます。
\templates	この内容パッケージのテンプレートが SiteScope にインポートされたときに使用されたファイルが含まれます。
<パッケージ / Zip 名>	上記のフォルダを格納する、圧縮解除されたパッケージ。
<パッケージ / Zip 名>.zip.properties	ロールバック、アンインストール、アップグレードを行うときに使用する、SiteScope 11.20 で作成された内容パッケージの記述子（マニフェスト）ファイルです。このファイルには、デプロイした SiteScope テンプレートの ID、SiteScope でのファイルの場所、内容パッケージについてのその他の情報が含まれます。

インポートしたテンプレートおよび依存ファイルは直接使用するか、必要に応じて変更できます。

スクリプトまたは警告テンプレートがユーザ・インタフェースで参照される場合、固有のパッケージID がサフィックスとして追加されます。

例： [テンプレート] フィールドで参照される ShortMail 警告アクション・テンプレート

アクション タイプの設定

アクション名: 電子メール

\* 受信者:

電子メール警告受信者

Others...

選択済みの電子メール警告受信者

Default

アドレス:

件名: Typical

テンプレート: ShortMail\_06b62f60-807c-4102-adea-9a7ebdd80e8b

- b. テンプレート・モニタで拡張ファイルを使用している場合、これらのファイルが SiteScope ファイル・システムの **SiteScope** のルート・ディレクトリの該当するスクリプトおよびテンプレート・フォルダ（上記の手順 4 と同じ名前のフォルダ）にコピーされていることを確認します。
9. コンテンツ・パッケージの管理

コンテンツ・パッケージをインポートしたら、インポートしたカスタム・モニタをコピー、移動、削除できます。この操作を行う場合、コンテンツ・パッケージには次のような影響があります。

アクション	ファイル・システムへの影響
モニタのコピー	<SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\workspace フォルダのコンテンツ・パッケージ・フォルダがコピーされます。
モニタのカット	変更はありません。
モニタの削除	SiteScope ファイル・システムの <SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\imported フォルダからコンテンツ・パッケージが削除されます（コンテンツ・パッケージからインポートされたすべてのモニタを削除した場合）。
カスタム・モニタ	変更はありません。

アクション	ファイル・システムへの影響
と内容パッケージを含むテンプレートのデプロイ	デプロイしたモニタをコピーすると、SiteScope ファイル・システムの <b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\packages\workspace</b> フォルダにコンテンツ・パッケージがコピーされます。

テンプレート拡張のコンテンツ・パッケージを作成、エクスポートおよびインポートする方法

**注:** このコンテンツ・パッケージは、テンプレートの概念を拡張したものです。これにより、さまざまな SiteScope デプロイメント間で、類似する監視設定基準を用いてテンプレートの共有と再利用を行うことができます。

このタスクでは、スクリプトまたは警告の拡張ファイルを参照するテンプレート・モニタを共有できるように、コンテンツ・パッケージを作成、エクスポート、インポートする手順について説明します。拡張ファイルは、SiteScope のルート・ディレクトリにあり、モニタの実行に使用されます。コンテンツ・パッケージは、すべてのモニタ・タイプで使用できます。

#### 1. 前提条件

コンテンツ・パッケージを追加、編集、削除するには、「**テンプレートを追加、編集、または削除します**」権限が必要です。

#### 2. SiteScope 監視テンプレートを作成するか、テンプレート・ツリーから既存のユーザ定義テンプレートを選択します。

タスクの詳細については、「[テンプレートを使用した監視構造の作成方法](#)」(804ページ)を参照してください。

#### 3. モニタで参照される拡張ファイルのコピー

SiteScope ファイル・システムの **SiteScope** のルート・ディレクトリにあるスクリプトまたは警告の拡張ファイルを参照するテンプレート・モニタの場合、**<SiteScope ルート・ディレクトリ>\packages\workspace\extensions** ディレクトリの該当するフォルダに適切な拡張ファイルをコピーします。

事前定義フォルダ	詳細
\scripts	<p>SiteScope が実行されているマシンでシェル・コマンドやほかのスクリプトを実行するために使用されるスクリプト・ファイルを保存します。</p> <p><b>注:</b> コンテンツ・パッケージをインポートしたら、このフォルダにインポートされたスクリプト・ファイルのファイル権限が 755（読み取り、書き込み、実行）に変わります。これは、Linux 環境で作業しているすべてのユーザが対象になります。</p>

事前定義フォルダ	詳細
\scripts.remote	<p>リモート・マシンで保存されているスクリプトを実行するために使用されるスクリプト・ファイルを保存します。</p> <p><b>注:</b> コンテンツ・パッケージをインポートしたら、このフォルダにインポートされたスクリプト・ファイルのファイル権限が 755（読み取り、書き込み、実行）に変わります。これは、Linux 環境で作業しているすべてのユーザが対象になります。</p>
\templates.mail	<p>電子メールで送信される警告メッセージの形式と内容を含むファイルを保存します。</p>
\templates.mail.subject	<p>電子メールで送信される警告メッセージの件名行を含むファイルを保存します。</p>
\templates.mib	<p>横断時に検出したオブジェクトの名前と説明を含む参照可能なツリーを作成するために使用される MIB ファイルを保存します。</p> <p><b>注:</b> インポート・プロセスの一環として、<b>templates.mib</b> ファイルが編集されて、一意のパッケージ ID がファイル内の一部のプロパティに追加されます。</p>
\templates.os	<p>リモート UNIX サーバの監視時に実行するシェル・コマンドを保存します。</p> <p><b>注:</b> インポート・プロセスの一環として、<b>template.os</b> ファイルが編集されて、一意のパッケージ ID がファイル内の一部のプロパティに追加されます。</p>

**注:** コンテンツ・パッケージにファイルをエクスポートすると、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\imported\ ディレクトリと SiteScope のルート・ディレクトリの該当するフォルダにあるスクリプトおよびテンプレート・ファイルに一意のパッケージ ID が（ファイル拡張子の前に）サフィックスとして追加されます。

4. コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードを使用した zip ファイルへのコンテンツ・パッケージのエクスポート

【テンプレート】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、内容パッケージにエクスポートするテンプレートまたはテンプレート・コンテナを右クリックして、【エクスポート】>【コンテンツ パッケージ】を選択します。

コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードで、コンテンツ・パッケージの詳細（マニフェスト）を入力し、含めるモニタに関連付けられたテンプレートや拡張ファイルを選択し

ます。詳細については、「[コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザード](#)」(853ページ)を参照してください。

## 5. ほかの SiteScope ユーザとのテンプレート・モニタの共有

個々の SiteScope ユーザに送信することによって、コンテンツ・パッケージ zip ファイルを配布できます。あるいは、ほかのユーザとのテンプレートおよびコンテンツ・パッケージの共有に、[HP Live Network](https://hpln.hp.com/group/sitescope) (<https://hpln.hp.com/group/sitescope>) コミュニティを使用できます。

HP Live Network コミュニティへのコンテンツ・パッケージのパブリッシュの詳細については、「[HP Live Network コミュニティへのコンテンツのパブリッシュ方法](#)」(907ページ)を参照してください。

コンテンツ・パッケージの SiteScope マシンへのダウンロードの詳細については、「[HP Live Network からのコンテンツのダウンロード方法](#)」(908ページ)を参照してください。

## 6. コンテンツ・パッケージのインポート

- a. SiteScope で、**[テンプレート]** コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、内容パッケージのインポート先となるテンプレート・コンテナを右クリックして、**[インポート]** をクリックします。
- b. **[内容のインポート]** ダイアログ・ボックスで **[コンテンツ パッケージ]** を選択し、**[参照]** をクリックします。インポートするパッケージが含まれるフォルダに移動します（パッケージは zip 形式で配布されます）。**[開く]** をクリックしてから、**[OK]** をクリックします。

**[内容のインポート]** ダイアログ・ボックスの詳細については、「[\[内容のインポート\] ダイアログ・ボックス](#)」(859ページ)を参照してください。

### 注:

- コンテンツ・パッケージには、上記の手順 3 の事前定義されているフォルダから、任意のタイプのファイルを含めることができます。コンテンツ・パッケージにほかのフォルダが含まれている場合は、エラーが表示され、インポート操作が失敗します。
- 既存の SiteScope ファイルは、コンテンツ・パッケージのファイルで上書きすることはできません。ただし、**[内容のインポート]** ダイアログ・ボックスで **[既存のテンプレートのオーバーライド]** チェック・ボックスが選択されている場合、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\imported\templates** フォルダにあるテンプレートは上書きできます。詳細については、「[\[内容のインポート\] ダイアログ・ボックス](#)」(859ページ)を参照してください。
- SiteScope の以前のバージョンの廃止されたモニタが含まれるテンプレートを SiteScope にインポートすると、廃止されたモニタはテンプレート・ツリーに表示されません。
- インポートするコンテンツ・パッケージが大きすぎる場合（パッケージ・サイズの制限は、ユーザの VM サイズによって異なります）、エラーと、エラーが書き込まれている **applet.log** へのパスが SiteScope に表示されます。例外はユーザ・インタ

フェース側からスローされるため、ユーザごとに異なるパッケージ・サイズの例外が発生する可能性があります。

- 。 インポートされたファイルを編集しないでください。

## 7. テンプレート拡張ファイルが正常にインポートされたかどうかの確認

テンプレート拡張ファイルがコンテンツ・パッケージから抽出されて、SiteScope ファイル・システムの **SiteScope** のルート・ディレクトリの該当するスクリプトおよびテンプレート・フォルダ（上記の手順3と同じ名前のフォルダ）にコピーされていることを確認します。

**注:** カスタム・モニタのないテンプレート（CPU モニタのみのテンプレートなど）を含むコンテンツ・パッケージは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\packages\imported フォルダに保存されなくなりました。必要に応じて、この設定を上書きしてパッケージのコピーを保存できます。これを行うには、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [カスタム設定] で [拡張ファイルを持つコンテンツ パッケージのコピーのみを保存] プロパティを [true] に変更します。

## PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法

このタスクでは、PDF にレポートをエクスポートするときに現在のロケールとは異なる文字を表示する Unicode フォントを設定する方法について説明します。これにより、複数の言語の文字で構成されるテキストを表示できます。

**注:** Microsoft Office がインストールされているマシンを使用している場合、Arial Unicode MS フォントはすでにインストールされているため、このフォントをダウンロードまたは設定する必要はありません。

**フォント・ライブラリを使用して Arial Unicode MS フォントを設定するには、次の手順を実行します。**

1. SiteScope サーバのフォント・ライブラリに移動します。例：

環境	フォント・ライブラリ
AIX	/usr/lpp/Acrobat3/Fonts
HPUX	/usr/contrib/xf86/xterm/fonts /usr/lib/X11/fonts/ms.st/typefaces
Linux	/usr/share/fonts/truetype /usr/share/fonts/local
UNIX	/usr/openwin/lib/X11/fonts/TrueType /usr/X11/lib/X11/fonts/TrueType /usr/X11/lib/X11/fonts/Type1
Windows	C:\Windows\Fonts C:\WINNT\Fonts

2. 選択したフォント・ライブラリに Arial Unicode MS フォントをダウンロードします。このフォントは <http://www.microsoft.com/typography/fonts/family.aspx?FID=24> から入手できます。
3. SiteScope を再起動します。

## コンテンツのインポートおよびエクスポートのユーザ・インタフェース

### 本項の内容

- ・ 「[テンプレートのエクスポート] ダイアログ・ボックス」 (852ページ)
- ・ 「コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザード」 (853ページ)
- ・ 「[マニフェストの作成] ページ」 (854ページ)
- ・ 「[テンプレートの選択] ページ」 (855ページ)
- ・ 「[ファイルの選択] ページ」 (856ページ)
- ・ 「[エクスポート] ページ」 (857ページ)
- ・ 「[サマリ] ページ」 (858ページ)
- ・ 「[内容のインポート] ダイアログ・ボックス」 (859ページ)

## 「テンプレートのエクスポート」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ほかの SiteScope インストールで使用するためにテンプレートをエクスポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。テンプレートは、エクスポートした後もテンプレート・コンテナに残ります。

<b>アクセス方法</b>	<p>「<b>テンプレート</b>」コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、エクスポートするテンプレートを含むテンプレート・コンテナ・オブジェクトを右クリックして、「<b>エクスポート</b>」を選択します。</p> <p>テンプレート・ツリーのテンプレートを右クリックし、「<b>エクスポート</b>」をクリックすることもできます。</p>
<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope テンプレートは、バイナリ・データとして保存されます。これは、SiteScope の以前のバージョンで使用されたテキストベースのモニタ・セットとは異なります。テンプレートの変更は、SiteScope インタフェースを使用して行う必要があります。</li> <li>テンプレートのエクスポートおよびインポート・フローには、SNMP トラップのプリファレンスは含まれません。そのため、SNMP トラップのプリファレンスへの参照が含まれるテンプレートをエクスポートおよびインポートする場合、手動でこれらのプリファレンスを作成し、インポートされたテンプレートで SNMP トラップを更新する必要があります。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<p><a href="#">「テンプレートのエクスポートとインポートの方法」(840ページ)</a></p>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「共通モニタ設定」(290ページ)</a></li> <li><a href="#">「テンプレートの作成」(792ページ)</a></li> <li><a href="#">「テンプレートとコンテンツ・パッケージのエクスポートおよびインポート」(839ページ)</a></li> <li><a href="#">「テンプレート・ツリー」(42ページ)</a></li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>ファイル名</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>「<b>ファイル名</b>」ボタンをクリックし「保存」ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスではエクスポートするファイルを保存する場所を参照し選択できます。</li> <li>「保存」ダイアログ・ボックスの「<b>ファイル名</b>」フィールドに、エクスポートするテンプレートのわかりやすい名前を入力します。</li> </ol>



UI 要素	詳細
	3. <b>【保存】</b> をクリックし、 <b>【テンプレートのエクスポート】</b> ダイアログ・ボックスに戻ります。選択したパスとファイル名が、 <b>【テンプレートのエクスポート】</b> ダイアログ・ボックスの <b>【ファイル名】</b> フィールドに表示されます。
テンプレート・ツリー	エクスポートするテンプレートを選択します。 <b>標準設定値</b> : テンプレート・コンテナ内のテンプレートは選択されていません。

## コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザード

このウィザードでは、1つ以上のテンプレートとその依存関係をコンテンツ・パッケージにエクスポートできます。コンテンツ・パッケージは、カスタム・モニタ（スクリプトなどの拡張ファイルがあるモニタ）をほかの SiteScope ユーザと共有するために必要です。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。

アクセス方法	<b>【テンプレート】</b> コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、内容パッケージにエクスポートするテンプレートまたはテンプレート・コンテナを右クリックして、 <b>【エクスポート】</b> > <b>【コンテンツ パッケージ】</b> を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>ユーザ定義テンプレートのみをコンテンツ・パッケージにエクスポートできます（インポートしたテンプレート、ソリューション・テンプレート、モニタ・デプロイメント・ウィザード・テンプレートはコンテンツ・パッケージにエクスポートできません）。</li> <li>テンプレートをコンテンツ・パッケージにエクスポートするには、「<b>テンプレートを追加、編集、または削除します</b>」権限が必要です。ユーザ権限の詳細については、「<a href="#">権限</a>」(757ページ)を参照してください。</li> <li>エクスポート・ウィザードの起動元となるテンプレート・コンテナは、エクスポートのルート・コンテナとして指定されます。選択したテンプレートのすべての祖先コンテナ（ルート・コンテナまで（ルート・コンテナを含む））は、テンプレートとともにエクスポートされます。子孫テンプレートがないコンテナはエクスポートできません。コンテナなしでテンプレートをエクスポートするには、テンプレートを右クリックしてエクスポート・フローを開始します。</li> </ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザード」</a> (853ページ)</li> <li><a href="#">「テンプレート拡張のコンテンツ・パッケージを作成、エクスポートおよび</a></li> </ul>

	<a href="#">インポートする方法</a> (847ページ)
<b>ウィザード・マップ</b>	<p>このウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p>「<a href="#">[マニフェストの作成] ページ</a>」(854ページ) &gt; (「<a href="#">[テンプレートの選択] ページ</a>」(855ページ)) &gt; 「<a href="#">[ファイルの選択] ページ</a>」(856ページ) &gt; 「<a href="#">[エクスポート] ページ</a>」(857ページ) &gt; 「<a href="#">[サマリ] ページ</a>」(858ページ).</p>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「<a href="#">コンテンツ・パッケージの作成</a>」(837ページ)</li> <li>・「<a href="#">テンプレートとコンテンツ・パッケージのエクスポートおよびインポート</a>」(839ページ)</li> <li>・「<a href="#">カスタム・モニタの作成</a>」(328ページ)</li> <li>・「<a href="#">HP Live Network での SiteScope コンテンツの共有</a>」(906ページ)</li> <li>・「<a href="#">テンプレート・ツリー</a>」(42ページ)</li> </ul>

## 「マニフェストの作成」 ページ

このウィザード・ページでは、コンテンツ・パッケージに関する情報が保存されているコンテンツ・パッケージのマニフェストを作成できます。このページは、コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードに含まれています。ウィザードの重要な情報については、「[コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザード](#)」(853ページ)を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<b>名前</b>	コンテンツ・パッケージの名前。
<b>詳細</b>	コンテンツ・パッケージの詳細。
<b>プロバイダ URL</b>	コンテンツ・パッケージ・プロバイダの URL。
<b>プロバイダ企業</b>	コンテンツ・パッケージ・プロバイダの企業名。
<b>バージョン</b>	コンテンツ・パッケージのバージョン。
<b>サポートされる SiteScope バージョン</b>	<p>コンテンツ・パッケージのコンテンツをサポートするために SiteScope をインストールする必要があるオペレーティング・システム。</p> <p>演算子（「&gt;=」（以上）または「=」（等しい））を選択し、コンテン</p>


UI 要素	詳細
	<p>ツ・パッケージに必要な SiteScope のサポート対象バージョンを決定するバージョン番号を入力します。</p> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「=」 演算子を使用する場合、複数のバージョンをカンマ（「,」）で区切って入力できます。</li> <li>バージョン番号は、3 桁以上で構成されている必要があります。</li> </ul> <p><b>例：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>11.2 または 11.20 は、コンテンツ・パッケージが SiteScope バージョン 11.2x でサポートされることを示します。</li> <li>11.12 は、コンテンツ・パッケージが SiteScope バージョン 11.12 でサポートされることを示します。</li> </ul>
<b>サポートされる SiteScope サーバのオペレーティング・システム</b>	<p>SiteScope サーバがサポートされるオペレーティング・システム。</p> <p><b>注：</b> 少なくとも 1 つのオペレーティング・システムが選択されている必要があります。</p> <p><b>標準設定値：</b> Windows および UNIX が選択されています。</p>

## [テンプレートの選択] ページ

**注:** このページは、テンプレート・コンテナを選択した場合にのみ利用できます。

このウィザード・ページでは、ユーザ定義テンプレートを選択して、コンテンツ・パッケージに含めることができます。このページは、コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードに含まれています。ウィザードの重要な情報については、「[コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザード](#)」(853ページ)を参照してください。



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<b>&lt;ユーザ定義テンプレート&gt;</b>	<p>コンテンツ・パッケージに含めるユーザ定義テンプレート。</p> <p>標準設定では、テンプレート・コンテナで利用できるすべてのユーザ定義テンプレートが選択されています。</p> <p>選択を解除するには、<b>[選択を解除]</b>  ボタンをクリックします。</p> <p><b>注：</b> 必ずしもテンプレートを選択する必要はありません。</p>

## [ファイルの選択] ページ

このウィザード・ページでは、選択したテンプレートに関連付けられたファイルを選択して、コンテンツ・パッケージに含めることができます。このページは、コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードに含まれています。ウィザードの重要な情報については、「[コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザード](#)」(853ページ)を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<SiteScope ファイル>	<p>コンテンツ・パッケージに含めるファイル。</p> <p>標準設定では、選択したテンプレートに関連付けられたパッケージのすべてのファイルが選択されます。必要に応じて、ファイルを追加または削除できます。</p> <p>選択を解除するには、[選択を解除]  ボタンをクリックします。</p> <p>すべてのファイルを選択するには、[すべて選択]  ボタンをクリックします。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"><li>必ずしもファイルを選択する必要はありません。</li><li>（&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\packages\workspace ディレクトリの）作成したパッケージのファイルのみが選択肢として表示されます。ただし、\templates および \META-INF フォルダのコンテンツは対象外となります。（&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\packages\imported ディレクトリの）インポートしたパッケージのコンテンツは、エクスポートできないため表示されません。</li><li>同じ名前のファイルは選択できません。</li><li>エクスポート用に選択したファイルのファイル名が ASCII 文字でない場合、zip 出力ファイルのファイル名が破損する可能性があります。</li><li>各パッケージの \classes, \conf, または \lib フォルダから選択したファイルはすべて、エクスポートしたコンテンツ・パッケージの同じ \classes, \conf, \lib フォルダにマージされます。</li><li>[テンプレートの選択] ページに戻って追加のテンプレートを選択した場合、[ファイルの選択] ツリーでこれらのテンプレートに関連付けられたファイルが標準設定で選択されていないければ、含めるファイルをコンテンツ・パッケージの対応するパッケージから手動で選択する必要があります。</li><li>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\packages\workspace の次のフォルダ</li></ul>

UI 要素	詳細
	<p>も表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• \scripts</li><li>• \scripts.remote</li><li>• \templates.mail</li><li>• \templates.mail.subject</li><li>• \templates.mib</li><li>• \templates.os</li></ul> <p>これらのフォルダから選択した拡張ファイルは、同じ名前の一連のフォルダにある、エクスポートしたコンテンツ・パッケージに含まれます。</p>

## [エクスポート] ページ

このウィザード・ページでは、コンテンツ・パッケージ・ファイルの名前と保存先を選択できます。また、前のページの選択内容を確認することもできます。このページは、コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードに含まれています。ウィザードの重要な情報については、「[コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザード](#)」(853ページ)を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されま

UI 要素	詳細
ファイル名	<p>コンテンツ・パッケージ・ファイルの名前とパス。次のいずれかを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• コンテンツ・パッケージ・ファイルのパスと名前を入力する。</li><li>• <b>[参照]</b> ボタンをクリックして、エクスポートするコンテンツ・パッケージ・ファイルの保存先を選択する。<b>[開く]</b> ダイアログ・ボックスの<b>[ファイル名]</b> フィールドに、エクスポートするコンテンツ・パッケージのわかりやすい名前を入力するか、上書きする既存のファイルを選択し、<b>[開く]</b> をクリックします。選択したパスとファイル名が<b>[ファイル名]</b> フィールドに表示されます。<p><b>注：</b></p><ul style="list-style-type: none"><li>• ファイルは、自動的に zip 形式で保存されます。ウィザードによって、自動的にファイル名に「.zip」拡張子が追加されます。</li></ul></li></ul>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>ファイル・パスは、ディレクトリ区切り文字（「\」または「/」）で終了することはできません。正しいファイル名をパスに追加する必要があります。</li> <li>ファイル名に空白（スペース）と特殊文字（\" &gt;&lt;^）を使用することはできません。</li> </ul>
マニフェスト	「マニフェストの作成」ページで入力したコンテンツ・パッケージ情報を表示します。
選択したテンプレート	（「テンプレートの選択」ページで選択した）コンテンツ・パッケージに含めるテンプレート。
選択したファイル	（「テンプレートの選択」ページで選択した）コンテンツ・パッケージに含めるファイル。
エクスポート	選択したファイルをローカル・ファイル・システムの zip ファイルにエクスポートします。

## 「サマリ」 ページ

このウィザード・ページには、コンテンツ・パッケージのステータスが表示され、パッケージが正常に作成された場合は、コンテンツ・パッケージの zip ファイルへのリンクが表示されます。このページは、コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザードに含まれています。ウィザードの重要な情報については、「[コンテンツ・パッケージのエクスポート・ウィザード](#)」(853ページ)を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<サマリ>	<p>コンテンツ・パッケージのエクスポートのステータスをレポートします。</p> <p>パッケージが正常にエクスポートされた場合、コンテンツ・パッケージがエクスポートされた zip ファイルの名前とパスのリンクが表示されます。リンクをクリックすると、エクスポート・ファイルが作成されたフォルダが開きます。</p> <p>SiteScope でコンテンツ・パッケージをエクスポートできなかった場合、失敗の理由が表示されます。</p>

## 「内容のインポート」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、1つ以上のテンプレートおよびテンプレートの依存関係を含むほかの SiteScope インストールおよび内容パッケージから、テンプレート設定をインポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。

アクセス方法	「 <a href="#">テンプレート</a> 」コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレートまたはコンテンツ・パッケージのインポート先のテンプレート・コンテンツを右クリックして、「 <a href="#">インポート</a> 」をクリックして、インポートするコンテンツ・タイプを選択します。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「テンプレートのエクスポートとインポートの方法」</a> (840ページ)</li><li>・ <a href="#">「HP Live Network での SiteScope コンテンツの共有」</a> (906ページ)</li></ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「共通モニタ設定」</a> (290ページ)</li><li>・ <a href="#">「テンプレートの作成」</a> (792ページ)</li><li>・ <a href="#">「テンプレートとコンテンツ・パッケージのエクスポートおよびインポート」</a> (839ページ)</li><li>・ <a href="#">「テンプレート・ツリー」</a> (42ページ)</li><li>・ <a href="#">「HP Live Network での SiteScope コンテンツの共有」</a> (906ページ)</li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
内容のタイプ	<p>内容のタイプ・オプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>テンプレート</b> :ほかの SiteScope インストールからテンプレート設定をインポートする場合に選択します。</li><li>・ <b>内容パッケージ</b> :1つ以上のテンプレートおよびテンプレートの依存関係を含む内容パッケージをインポートする場合に選択します。依存関係は jars や設定ファイルのような追加ファイルです。カスタム・モニタをエクスポートする場合、モニタ・テンプレート、およびスクリプトとほかのリソースで使用した別の jar は、1つのコンテンツ・パッケージにまとめられます。</li></ul> <div><p><b>注:</b> コンテンツ・パッケージは zip 形式で、少なくとも1つのテンプレートを含まなければなりません。各テンプレートは、さまざまなタイプのモニタ（カスタム、標準）を含むことができます。</p></div> <p>内容パッケージの詳細については、<a href="#">「コンテンツ・パッケージの作成」</a> (837ページ)を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
ファイル名	<p>インポートするテンプレートまたは内容パッケージ・ファイルの名前。</p> <p>〔ブラウズ〕 ボタンをクリックし〔開く〕 ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスではインポートするファイルの場所を参照し選択できます。このファイル・ブラウザには、zip ファイルのみ表示されます。</p> <p>ファイルを選択したら、〔開く〕 をクリックして〔内容のインポート〕 ダイアログ・ボックスに戻ります。選択したパスとファイル名が〔ファイル名〕 フィールドに表示されます。</p>
既存のテンプレートのオーバーライド	<p>インポートしたテンプレート・ファイルまたは内容パッケージのテンプレートで、同じ名前の既存のテンプレートを上書きする場合にこのオプションを選択します。</p> <p><b>注</b> :テンプレート・ツリーのテンプレート・コンテナがインポートしたファイルのテンプレート・コンテナと同じ名前の場合、このオプションを選択すると、コンテナ内の同じ名前の既存のテンプレートが上書きされ、インポートされたファイルのほかのテンプレートが既存のテンプレートにマージされます。</p>



## 第64章: テンプレートのデプロイ

インフラストラクチャ内にある、同じような特性を持つシステムをチェックする一連のモニタを迅速にデプロイするには、テンプレートを使用します。テンプレートを作成、設定した後で、SiteScope 階層にデプロイします。テンプレートは、ユーザ・インタフェースから直接デプロイできます。また、外部のカンマ区切り (CSV) ファイルからデプロイすることもできます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレートを右クリックして【**変更の適用**】を選択します。

## 学習事項

### テンプレートのデプロイの概要

SiteScope 監視テンプレートの作成後、そのテンプレートを次の方法でグループにデプロイできます。

- 単一のテンプレート、または複数のテンプレートをユーザ・インタフェースから同時にグループにデプロイできます。タスクの詳細については、[「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」\(862ページ\)](#)を参照してください。
- SiteScope ユーザ・インタフェースの外部の CSV ファイルを使用して、単一のテンプレートに対して一括デプロイメントを実行できます。1 つの CSV ファイルですべてのテンプレート変数値の入力と更新がしやすくなるため、一括デプロイメントの実行には CSV ファイルが適しています。詳細については、[「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」\(862ページ\)](#)を参照してください。
- SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイできます。詳細については、[「XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ」\(875ページ\)](#)を参照してください。
- SiteScope が HPOM と統合されると、HPOM 内から複数の SiteScope インスタンスからのテンプレートを一元的に管理およびデプロイできます。詳細については、SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」「」の「HPOM からのテンプレートの中央管理」の項を参照してください。[HP ソフトウェア統合](#)サイトでは、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます (Windows の場合:

<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>, UNIX の場合:

<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>)。

その後、ソース・テンプレートを変更する場合、テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに変更を自動的に適用できます。テンプレートの更新の詳細については、[「テンプレート変更の適用」\(891ページ\)](#)を参照してください。

**注:** テンプレートを使ってモニタやグループをデプロイする場合、モニタおよびグループの依存関係もバブリッシュされます。これによってユーザが手動で操作しなくても、テンプレートがグループやモニタをツリーの正しい位置に自動的に書き込んだり、依存関係をいくつでも自動的に作成したりできるようになります。詳細と推奨事項については、[「テンプレート・モニタおよびグループを設定するときの依存関係」\(266ページ\)](#)を参照してください。

## CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ

テンプレートを作成、設定した後で、SiteScope 階層にデプロイします。テンプレートは、ユーザ・インタフェースから直接デプロイできます（[「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」\(862ページ\)](#)を参照）。または外部のカンマ区切り（CSV）ファイルからデプロイできます。CSV ファイルは、テンプレートに定義された変数値のデプロイに使用します。

SiteScope CSV テンプレート・デプロイメントを使用すると、次のような利点があります。

- 1 つの CSV ファイルですべてのテンプレート変数値の入力と更新がしやすくなるため、一括デプロイメントの実行にはユーザ・インタフェースよりも適しています。
- ユーザ・インタフェースでデプロイメントごとに変数値を手動で入力しなくても、複数のデプロイメントを 1 回で実行できます。
- テンプレートはサイレントにデプロイされます（テンプレート・デプロイメント要求はキューに送信され、デプロイメントはバックグラウンドで処理されます）。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent\_deployment.log** に記録されます。

**注:** サイレント・デプロイメントの最大キュー長は 2000 です（CSV ファイル内の各行がキュー内の 1 デプロイメントを表します）。

このタスクの実行方法の詳細については、[「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」\(864ページ\)](#)を参照してください。

## タスク

### ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、ユーザ・インタフェースを使用して SiteScope テンプレートをデプロイする手順について説明します。

#### ヒント:

- 単一テンプレートの一括デプロイメントの場合、CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイすることもできます。概念の詳細については、[「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」\(862ページ\)](#)を参照してください。
- また、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレート

をデプロイおよび更新することもできます。トピックの詳細については、[「XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ」\(875ページ\)](#)を参照してください。

## 1. 前提条件

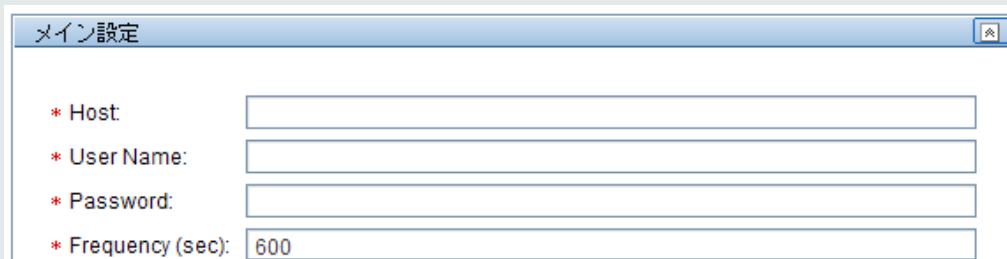
- SiteScope 監視テンプレートを作成するか、テンプレート・ツリーから既存のユーザ定義テンプレートを選択します。タスクの詳細については、[「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」\(804ページ\)](#)を参照してください。
- 複数のサーバにモニタを同時にデプロイする場合、テンプレート・リモート・サーバの **Host** 値として変数を使用する必要があります。デプロイメントのホスト変数に、複数のサーバ名をカンマ (",") 区切りで指定します。

## 2. 単一のテンプレートのデプロイ - オプション

- a. テンプレートをグループにデプロイします。
  - モニタ・ツリーで、テンプレートをデプロイするグループを右クリックし、**「テンプレートのデプロイ」**を選択します。[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスで、デプロイするテンプレートを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[テンプレートの選択\] ダイアログ・ボックス」\(325ページ\)](#)を参照してください。
  - テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックし、**「テンプレートのデプロイ」**を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートをデプロイするグループを選択します。または、**「新規グループ」** ボタンをクリックし、テンプレートをデプロイできる新しいグループを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[グループの選択\] ダイアログ・ボックス」\(868ページ\)](#)を参照してください。
- b. **「デプロイメント値」** ダイアログ・ボックスで、表示される入力ボックスに必要な変数値を入力します。表示される入力ボックスは、テンプレート・オブジェクトで使用するテンプレート変数に対応します。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[デプロイメント値\] ダイアログ・ボックス」\(871ページ\)](#)を参照してください。

### 例：

テンプレート・ツリーの **「Template Examples」** フォルダから **「Windows basic template」** を SiteScope グループにデプロイする場合、次の入力ボックスが **「デプロイメント値」** 入力ウィンドウに表示されます。



メイン設定

* Host:	<input type="text"/>
* User Name:	<input type="text"/>
* Password:	<input type="text"/>
* Frequency (sec):	<input type="text" value="600"/>

## 3. 複数のテンプレートのデプロイ - オプション

- a. テンプレート・ツリーでテンプレート・コンテナを右クリックして、**「テンプレートのデプロイ」**を選択します。**「グループの選択」** ダイアログ・ボックスで、テンプレートをデプロイするグループを選択します。または、**「新規グループ」** ボタンをクリックし、テンプレートをデプロイできる新しいグループを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、**「「グループの選択」ダイアログ・ボックス」 (868ページ)**を参照してください。
- b. **「複数のテンプレートのデプロイ」** ダイアログ・ボックスでは、次のとおりに実行します。
  - 左側の表示枠で、グループにデプロイするテンプレートを選択します。テンプレート・コンテナを選択する場合は、そのコンテナ内のすべてのテンプレートが自動的に選択されます。
  - 右側の表示枠で、表示される入力ボックスに必要な変数値を入力します。
  - 右側の表示枠の変数値セクションの下で、デプロイされているすべてのテンプレートの永続オプションを設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、**「「複数のテンプレートのデプロイ」ダイアログ・ボックス」 (869ページ)**を参照してください。

#### 4. 結果

テンプレート・デプロイメントのサマリが表示されます。デプロイメントが成功すると、テンプレート・オブジェクトがモニタ・ツリーに追加されます。

テンプレート・デプロイメントが失敗すると、失敗の理由を示すメッセージが表示されます。ディスク領域モニタを例に挙げると、テンプレートで指定したディスク・ドライブがデプロイ先のサーバに存在していない場合、テンプレート・モニタのデプロイが失敗する可能性があります。

### CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、CSV ファイルを使用して SiteScope テンプレートをデプロイする手順について説明します。

#### ヒント:

- 代わりに、ユーザ・インタフェースを使用してテンプレートをデプロイすることもできます。詳細については、**「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」 (862ページ)**を参照してください。
- また、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイおよび更新することもできます。このトピックの詳細については、**「XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ」 (875ページ)**を参照してください。

#### 1. 前提条件

- 新しい SiteScope 監視テンプレートを作成するか、既存のユーザ定義テンプレートまたはソリューション・テンプレートをテンプレート・ツリーから選択します。タスクの詳細については、**「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」 (804ページ)**を参照してください。

- CSV ファイルを使用してソリューション・テンプレートをデプロイするには、最初にテンプレート・コンテナにソリューション・テンプレートのコピーを作成し、コピーしたテンプレートに次の手順の必要な変更を加えます。
- テンプレート・グループ名は、各デプロイメント・インスタンスで一意的な値にする必要があります。値を一意的にするには、グループ名に変数を使用し、各デプロイメントでそれぞれ異なる変数の値を入力します。[Template Examples] フォルダの %%host%% 変数を含む [Windows basic template] のグループ名で、この例を確認できます。

## 2. テンプレート変数の表示順序の確認

CSV ファイルを作成する前に、各変数のテンプレート変数の表示順序を確認します。CSV ファイルの列の順序は 0 から始まります。そのため、テンプレート変数の表示順序も 1 ではなく 0 から開始することを確認します。この確認により、デプロイメントで CSV ファイルの正しい列が変数に確実にマップされます。

テンプレート変数の表示順序を確認するには、次の手順を実行します。

- a. [テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、CSV ファイルを使用してデプロイするテンプレートを含むテンプレート・コンテナを展開し、テンプレートを選択します。
- b. テンプレートのデプロイ時に最初に表示するテンプレート変数を選択し、[テンプレートでの表示順序] の値が 0 であることを確認します。
- c. テンプレートの各変数でこの手順を繰り返し、正しい表示番号（毎回 1 ずつ増加）が使用されていることを確認します。

**注:** 各変数に表示順序を定義していない場合は、デプロイメントが失敗します。

## 3. CSV ファイルの作成

新しいテキスト・ファイルを開き、次の手順を行います。

- a. デプロイメントに必要な各変数の値をカンマ (,) 区切りで入力します。テンプレートに定義したすべての変数を十分理解している必要があります。[テンプレートでの表示順序] フィールドに、表示される順序の値を入力します（表示順序 0 の変数から開始）。
- b. 各デプロイメント・インスタンスの別の行に変数の値を追加します。

### 注:

- 空白はフィールドの一部とみなされるため、無視されません。
- 必須でない変数または標準設定の変数の値は、CSV ファイルに入力する必要はありません。その代わり、その変数の値を示す二重カンマ (",,") 入力する必要があります。ただし、あるモニタのデプロイメントに失敗すると、テンプレートのデプロイメントにも失敗します。
- 変数値内にカンマを使用する場合は、そのカンマが正しく処理されるように、\"&quot;\"&quot; と入力する必要があります。そうしないと、そのカンマは新しい変数の開始として処理されてしまいます。たとえば、ou=Joe,cn=test,dc=com を含む LDAP モニタ・テ

ンプレートをデプロイするには、`ou=Joe\,cn=test\,dc=com` と入力します。

- 資格情報を使用する場合、パスワードは CSV ファイルで暗号化できないため、資格情報名の変数のみ使用することをお勧めします。

- ファイルを CSV 形式で保存します。テンプレートのデプロイ後、CSV ファイルの各行にグループが作成されます。

#### 例：

CSV ファイルを使用して **Windows basic template** をデプロイするため、変数の表示順序が次のように設定されていることを確認します: ホスト (0)，ユーザ (1)，パスワード (2)，頻度の変数 (3)。host テンプレート変数の設定を次に示します。

テンプレート変数 host

メイン設定

\* 名前: host

表示名: Host

詳細: The host name of the windows host

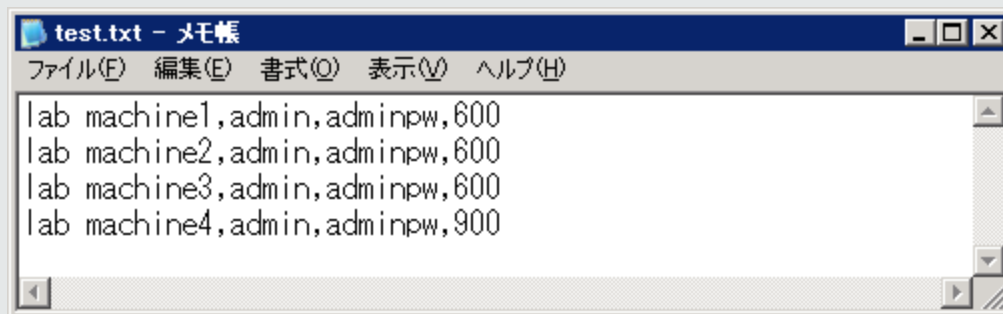
標準設定値:

テンプレートでの表示順序: 0

☐ パスワード変数

☒ 必須変数

次に、各デプロイメント・インスタンスに対して、CSV ファイルを作成してホスト、ユーザ、パスワード、頻度の値をカンマ区切りで入力します（これがテンプレートで使用する変数の表示順序です）。



頻度の変数はテンプレートで標準設定値が設定されているため、この変数が必須の場合でも CSV ファイルに値を入力する必要はありません（標準設定値の 600 秒を使用する場合）。

#### 4. テンプレートのデプロイ

- テンプレートの CSV ファイルを作成したら、そのテンプレートをグループにデプロイします。

- モニタ・ツリーで、テンプレートをデプロイするグループを右クリックし、**「CSV を使用してテンプレートをデプロイ」**を選択します。[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスで、デプロイするテンプレートを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、**「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」(325ページ)**を参照してください。
- テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックし、**「CSV を使用してテンプレートをデプロイ」**を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートをデプロイするグループを選択します。または、**「新規グループ」** ボタンをクリックし、テンプレートをデプロイできる新しいグループを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、**「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」(868ページ)**を参照してください。
- b. [CSV ファイルの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレート・デプロイメントに使用する CSV ファイルを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、**「[CSV ファイルの選択] ダイアログ・ボックス」(873ページ)**を参照してください。

## 5. 結果

デプロイメントが成功すると、テンプレート・オブジェクトがモニタ・ツリーに追加されます。モニタ・ツリーは定期的に更新されます。ツリー・ツールバーの**「更新」**をクリックしてツリーを更新し、デプロイメントを確認します。

**silent\_deployment.log** ファイルでデプロイメントのサマリを確認することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、**「[ログ ファイル] ページ」(1163ページ)**を参照してください。

**注:** 入力したパスワードの値はログ・ファイルには表示されません。実際のパスワードの代わりに、一連のアスタリスク (\*\*\*\*) が表示されます。

# ヒント / トラブルシューティング

## 注意事項および制限事項

- テンプレートに同じ名前の複数のグループが含まれている場合は、各グループが異なる親グループであっても、テンプレート・デプロイメントは失敗します。
- テンプレート・グループ名に変数が含まれていない場合は、グループ名が一意でないため、同じディレクトリ内にテンプレートを複数回デプロイすると失敗します。
- モニタ・カウンタの正規表現を使用するテンプレートをデプロイする場合、**「リモート サーバでモニタ プロパティを検証」** オプションを選択する必要があります。選択しないとモニタ・デプロイメントが失敗します。



# テンプレートのデプロイのユーザ・インタフェース

本項の内容



- ・ [「\[グループの選択\] ダイアログ・ボックス」](#) (868ページ)
- ・ [「\[複数のテンプレートのデプロイ\] ダイアログ・ボックス」](#) (869ページ)
- ・ [「\[デプロイメント値\] ダイアログ・ボックス」](#) (871ページ)
- ・ [「\[CSV ファイルの選択\] ダイアログ・ボックス」](#) (873ページ)

## [グループの選択] ダイアログ・ボックス


このダイアログ・ボックスでは、モニタ・ツリーでテンプレートのデプロイ先のグループを選択できます。または、SiteScope ノードを選択して、テンプレートのデプロイ先のグループを新規作成できます。

アクセス方法	<a href="#">[テンプレート] コンテキスト</a> を選択します。テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックして、 <a href="#">[テンプレートのデプロイ]</a> または <a href="#">[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]</a> を選択します。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」</a> (804ページ)</li><li>・ <a href="#">「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」</a> (892ページ)</li><li>・ <a href="#">「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」</a> (916ページ)</li></ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「テンプレート変更の適用」</a> (891ページ)</li><li>・ <a href="#">「テンプレート・ツリー」</a> (42ページ)</li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	SiteScope ルート・グループを表します。SiteScope ルート・グループにテンプレートをデプロイするか、 <a href="#">[新規グループ]</a> ボタンをクリックして、テンプレートのデプロイ先のグループを新規作成できます。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない）を表します。テンプレートのデプロイ先のグループを選択するか、 <a href="#">[新規グループ]</a> ボタンをク




UI 要素	詳細
	リックして、テンプレートのデプロイ先のグループを新規作成します。
	SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる利用可能な状況モニタの集合を表します。

## [複数のテンプレートのデプロイ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、（各テンプレートを別々にデプロイするのではなく）複数のテンプレートを選択して、グループに同時にデプロイできます。

アクセス方法	<p>[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・コンテナを右クリックして、<b>[テンプレートのデプロイ]</b> を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートのデプロイ先のグループを選択して <b>[OK]</b> をクリックします。<b>[複数のテンプレートのデプロイ]</b> ダイアログ・ボックスが表示されます。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>同時に複数のサーバにモニタをデプロイするには、サーバ名またはアドレスをカンマ(",")で区切って入力します。このとき、モニタによって参照されるテンプレート・リモート・サーバの <b>Host</b> プロパティの値は、変数値で構成される必要があり、かつ使用できる変数は1つのみです。</li> <li>デプロイ先グループの編集権限がある場合は、テンプレートの内容に関係なくテンプレートをデプロイできます。モニタ、リモート、警告などのテンプレート・オブジェクトの編集権限は必要ありません。</li> <li>モニタをデプロイできない場合は、エラー・メッセージが表示されます。これは、たとえば、ディスク領域モニタ・テンプレートをデプロイするときに、デプロイ先のサーバにディスク・ドライバが存在しない場合に発生します。</li> </ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」(804ページ)</a></li> <li><a href="#">「ユーザ・インターフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」(862ページ)</a></li> <li><a href="#">「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」(892ページ)</a></li> </ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「テンプレート変更の適用」(891ページ)</a></li> <li><a href="#">「テンプレート・ツリー」(42ページ)</a></li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<b>テンプレートの選択（左側の表示枠）</b>	
<b>&lt;テンプレート・ツリー&gt;</b>	<p>テンプレート・ツリーからデプロイするテンプレートを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>テンプレート・コンテナを選択すると、コンテナ内のすべてのテンプレートが選択されます。SiteScope ルートを選択すると、テンプレート・ツリー内のすべてのテンプレートが選択されます。</li> <li>SiteScope ルートまたはテンプレート・コンテナの左側に表示される  アイコンは、SiteScope または特定のコンテナ内でテンプレートの一部が選択されていないことを示します。</li> </ul>
<b>テンプレート・デプロイメント設定（右側の表示枠）</b>	
<b>&lt;テンプレート変数値&gt;</b>	<p>選択した各テンプレート内で使用される変数の一覧は、右側の表示枠の当該テンプレートのフル・パスとともにラベル下に表示されます。変数のデプロイメント値を入力します（必須の変数は赤のアスタリスクで示されます）。</p>
<b>サイレント・デプロイメント</b>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信されます。SiteScope ではバックグラウンドでデプロイメントを処理するため、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバと比較して、各テンプレートのモニタ設定プロパティが正しいかどうかを検証します。</p> <p><b>注</b>：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>リモート・サーバのテスト</b>	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>

## [デプロイメント値] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートのデプロイ時に変数の値を入力できます。

アクセス方法	[ <b>テンプレート</b> ] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレート（変数が含まれていること）を右クリックして、[ <b>テンプレートのデプロイ</b> ] を選択します。[ <b>グループの選択</b> ] ダイアログ・ボックスで、テンプレートのデプロイ先のグループを選択して [ <b>OK</b> ] をクリックします。[ <b>デプロイメント値</b> ] ダイアログ・ボックスが開きます。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• 同時に複数のサーバにモニタをデプロイするには、サーバ名またはアドレスをカンマ (",") で区切って入力します。このとき、モニタによって参照されるテンプレート・リモート・サーバの <b>Host</b> プロパティの値は、変数値で構成される必要があり、かつ使用できる変数は1つのみです。</li><li>• デプロイ先グループの編集権限がある場合は、テンプレートの内容に関係なくテンプレートをデプロイできます。モニタ、リモート、警告などのテンプレート・オブジェクトの編集権限は必要ありません。</li><li>• モニタをデプロイできない場合は、エラー・メッセージが表示されます。これは、たとえば、ディスク領域モニタ・テンプレートをデプロイするときに、デプロイ先のサーバにディスク・ドライバが存在しない場合に発生します。</li></ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」(804ページ)</a></li><li>• <a href="#">「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」(862ページ)</a></li><li>• <a href="#">「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」(892ページ)</a></li></ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">「テンプレート変更の適用」(891ページ)</a></li><li>• <a href="#">「テンプレート・ツリー」(42ページ)</a></li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
変数の値	SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の詳細については、各ソリューション・テンプレートに関するドキュメント（ <a href="#">「ソリューション・テンプレートのデプロイ」(910ページ)</a> ）を参照してください。

UI 要素	詳細
<変数名>	<p>テンプレートのデプロイ時に、テンプレート・オブジェクトで参照される各変数によって対応する入力ボックスが表示されます。変数名がテキスト入力ボックスのラベルとして使用されます。変数のデプロイメント値を入力します。</p> <p>特定の SiteScope ソリューション・テンプレートの設定およびデプロイの詳細については、個々のソリューション・テンプレートのヘルプで「<a href="#">ソリューション・テンプレートのデプロイ</a>」(910ページ)を参照してください。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレートのデプロイメント要求をキューに送信し、SiteScope がバックグラウンドでデプロイメントを処理するように指定します。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバと比較して、テンプレートのモニタ設定プロパティが正しいかどうかを検証します。</p> <p><b>注</b> :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</li> <li>モニタ・カウンタの正規表現を使用するテンプレートをデプロイする場合、このオプションを選択する必要があります。選択しないとモニタ・デプロイメントが失敗します。</li> <li>カスタマイズ可能なモニタにテンプレートをデプロイする場合は、このチェック・ボックスをクリアしても問題はありません。これは、テンプレート内のモニタ設定プロパティは、テンプレートのデプロイ先のリモート・サーバに対してチェックする必要があるためです。</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p><b>注</b> : このオプションは、リモート・サーバを含むテンプレートをデプロイする場合にのみ表示されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>

## [CSV ファイルの選択] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートのデプロイ時に使用する CSV ファイルを選択できます。

アクセス方法	<p>次のいずれかを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>[テンプレート]</b> コンテキストを開きます。テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックして、<b>[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]</b> を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートのデプロイ先のグループを選択して <b>[OK]</b> をクリックします。</li><li>・ <b>[モニタ]</b> コンテキストを開きます。モニタ・ツリーで、テンプレートのデプロイ先のグループを右クリックして <b>[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]</b> を選択します。[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスで、デプロイするテンプレートを選択して <b>[OK]</b> をクリックします。</li></ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「テンプレートを使用した監視構造の作成方法」(804ページ)</a></li><li>・ <a href="#">「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」(864ページ)</a></li></ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <a href="#">「テンプレート変更の適用」(891ページ)</a></li><li>・ <a href="#">「テンプレート・ツリー」(42ページ)</a></li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
CSV ファイル	<p>テンプレートで定義された変数値をデプロイするために使用するカンマ区切り値 (CSV) ファイル。[選択] ボタンをクリックして、テンプレートのデプロイメントに使用する CSV ファイルを選択します。</p> <p>注: CSV 拡張子のファイルのみを使用できます。</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注: このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバへの接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p>

UI 要素	詳細
	<p>注：このオプションは，リモート・サーバを含むテンプレートをデプロイする場合にのみ表示されます。</p> <p>標準設定値 :選択されていない</p>

## 第65章: XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ

SiteScope では強調表示されたテンプレート・コンテナの SiteScope テンプレートまたはソリューション・テンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイルを作成できます。XML ファイルを生成した後、このファイルを編集して、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部のファイル・ディレクトリからテンプレートをデプロイするために使用できます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、作成する自動デプロイ XML ファイルの対象とするテンプレート・コンテナを右クリックして、【**XML の生成**】を選択します。

## 学習事項

### テンプレートの自動デプロイの概要

SiteScope では、強調表示されたテンプレート・コンテナのテンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイルを作成できます。XML ファイルを生成した後、このファイルを編集して、SiteScope ユーザ・インタフェース以外のファイル・ディレクトリからテンプレートをデプロイするために使用できます。

SiteScope では、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用して SiteScope テンプレートまたはソリューション・テンプレートを自動的にデプロイできます。XML ファイルを使用して、テンプレートで定義したオブジェクトをデプロイします。このテンプレートには親グループを含める必要があります。また、サブグループ、モニタ、リモート・サーバ (1 つ)、警告、変数定義を含めることができます。XML ファイルを編集して、変数定義を必須変数、グローバル変数、インスタンス変数に割り当てることができます。

ユーザ定義テンプレートの詳細については、[「テンプレートの作成」 \(792ページ\)](#)を参照してください。事前定義されたソリューション・テンプレートの使用の詳細については、[「ソリューション・テンプレートのデプロイ」 \(910ページ\)](#)を参照してください。

自動テンプレート・デプロイメントを使用して、テンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用することもできます。自動テンプレート・デプロイメントでは、テンプレート変更適用ウィザードと同じ機能が使用されます。このウィザードの動作の詳細については、[「テンプレート変更の適用」 \(891ページ\)](#)を参照してください。

ユーザ・インタフェースの代わりに自動テンプレート・デプロイメントを使用してテンプレートをデプロイし、テンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用できます。それは、スクリプトで作業して複数の SiteScope にデプロイするためのユーザ・インターフェースよりもより適しています。こ

これは、自動テンプレート・デプロイメントが標準 XML スクリプティングを使用して、1つのファイルを使用して複数の SiteScope にデプロイできるからです。

## XML ファイルの作成と操作

次のいずれかの方法で XML ファイルを作成します。

- テキストがサポートされている任意のツールで XML を生成および編集します。ファイルは、SiteScope ファイル・ディレクトリにある XSD ファイルに基づいている必要があります。XSD ファイルは基本となる XML ファイルで、各自のバージョンのデプロイメント XML を作成するのに適したタグ、要素、属性がすでに含まれています。
- SiteScope インタフェースを使用して、テンプレート・コンテナまたはソリューション・テンプレートからデプロイメント XML ファイルを生成します。各テンプレート・コンテナおよびソリューション・テンプレートには、該当の自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルを生成するためのオプションがあります。詳細については、「[\[自動デプロイメント XML の生成\] ユーザ・インタフェース](#)」(882ページ)を参照してください。

テンプレートまたはソリューション・テンプレートから生成する場合も、手動で作成する場合も、使用する XML は有効な XML で、ATD スキーマ (XSD) に適合している必要があります。専用ツールを使用して XML ファイルを検証できます。

XML ファイルのデプロイは、関連するテンプレートまたはソリューション・テンプレートがモニタ・ツリーにある対象 SiteScope によって異なります。テンプレートまたはソリューション・テンプレートをデプロイするには、関連するテンプレートまたはソリューション・テンプレートがある対象 SiteScope の永続フォルダに XML ファイルをコピーします。複数のデプロイメントを1つの XML ファイルにグループ化できます。

## XML を使用したテンプレート変更の適用

自動テンプレート・デプロイメント XML を使用してテンプレートの変更を適用し、デプロイ済みグループの値または構造を更新することもできます。グループの **[ソース テンプレート]** フィールドが、XML で参照しているテンプレートとして識別される場合、自動テンプレート・デプロイメント XML を使用してグループの値およびオブジェクトを更新できます。

XML では、テンプレート変更適用ウィザードと同じ機能が使用されますが、ユーザ・インタフェースにアクセスする必要はありません。XML ファイルでは、テンプレートの変更を適用するために使用される変数に値を指定できます。ウィザードおよびテンプレートの更新機能の詳細については、「[テンプレート変更の適用](#)」(891ページ)を参照してください。

自動テンプレート・デプロイメントでは、XML を使用してグループ・デプロイメントを作成する場合と同じように、テンプレートの変更をテンプレートのデプロイ済みグループに適用できます。テンプレートを変更したら XML を作成し、編集済み XML をコピーしてデプロイ先 SiteScope マシンの永続フォルダに貼り付けます。

### デプロイメント XML タグの更新の詳細

デプロイ済みグループの値またはオブジェクトを更新する場合、XML ファイルでは **<sitescope:templateDeploymentUpdate>** タグ (テンプレートをデプロイする場合に使用する **<sitescope:templateDeployment>** タグではありません) を使用する必要があります。XML ファイル



で使用する要素および属性の詳細については、「[XML タグ参照情報](#)」(887ページ)を参照してください。

**<sitescope:templateDeploymentUpdate>** タグ内で、**enableDeleteOnUpdate** 属性に「yes」を入力し、XML ファイルを使用してデプロイメントを更新するときにデプロイ済みグループ内のオブジェクトを削除できます。自動テンプレート・デプロイメント XML で参照されるテンプレートに表示されていないオブジェクトが削除の対象になります。「no」を入力すると、XML ファイルで参照されるテンプレートに表示されていない場合でも、グループ内のすべてのオブジェクトがデプロイメントの更新後も保持されます。テンプレート変更適用ウィザードのこのオプションの詳細については、「[\[デプロイ済みグループの選択\] ページ](#)」(898ページ)の「更新による削除の有効化」を参照してください。

更新を正常に実行するには、デプロイ済みグループのデプロイ先 SiteScope グループの名前を **deploy:fullPathToDestinationGroup** タグの値として定義する必要があります。**fullPathToDestination** は、デプロイメントのルート・グループ（テンプレートのルート・グループ）で終わる必要があります。デプロイメント・セクションごとに1つのグループが更新されるため、複数のグループがある場合はそれぞれに個別のデプロイメント更新セクションとグループ名を定義する必要があります。

### テンプレート更新レポート

自動テンプレート・デプロイメントの更新を実行したら、XML 形式のレポートを使用できるようになります。このレポート・ファイルの名前には、XML ファイルの名前、タイムスタンプ、**string\_reports** が含まれています。これらのレポートは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ> \persistence\autodeployment\reports** にあります。

レポートは XML 形式で、次のタグが最初に含まれています。

- **totalNumberOfDeployments**
- **totalNumberOfFailedDeployments**
- **totalNumberOfSucDeployments**

デプロイメント・インスタンスごとに、XML の **<publishChangesSummaryPage>** セクションが表示されます。ここには、更新された内容の詳細が表示されます。正常に変更されなかったデプロイメントは、ファイルの最初に表示されます。

SiteScope ユーザ・インタフェースを使用してデプロイ済みグループを更新する場合、このファイルはテンプレート変更適用ウィザードによって作成される XML バージョンの PDF ファイルになります。レポートの詳細については、「[テンプレート変更適用サマリ・レポート](#)」(902ページ)を参照してください。

## タスク

### XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ方法

このタスクでは、自動テンプレート・デプロイメントを実行する方法について説明します。ソリューション・テンプレートをデプロイする場合も同じ手順を使用できます。

## 1. 前提条件

テンプレートを自動的にデプロイする各 SiteScope には、テンプレート・コンテナ内にそのテンプレートが含まれている必要があります。テンプレートの最上位レベルには、グループ・オブジェクトが必要です。ほかのすべてのオブジェクトはそのグループ内に作成する必要があります。テンプレートには、サブグループ、モニタ、警告、リモート・サーバ（1つ）、変数を含めることができます。

複数の SiteScope を使った作業の場合：

- 1つの SiteScope でテンプレートを作成したら、[テンプレート コンテナ] ショートカット・メニューの [エクスポート] / [インポート] オプションを使用してほかの SiteScope にエクスポートできます。タスクの詳細については、[「\[テンプレートのエクスポート\] ダイアログ・ボックス」\(852ページ\)](#)および [「\[内容のインポート\] ダイアログ・ボックス」\(859ページ\)](#)を参照してください。
- BSM を使って作業している場合、[SAM 管理] の [SiteScope の同期] ウィザードを使用して、SiteScope 間でテンプレートをコピーできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、BSM ヘルプにある BSM アプリケーション管理ガイドの [SiteScope の同期] ウィザードを参照してください。

## 2. XML ファイルの作成

次のいずれかの方法で XML ファイルを作成できます。

- テンプレート・コンテナを右クリックし、コンテキスト・メニューの **[XML の生成]** を選択します。ソリューション・テンプレートをデプロイする場合、このオプションはテンプレート・レベルで表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[自動デプロイメント XML の生成\] ユーザ・インタフェース」\(882ページ\)](#)を参照してください。
- 専用の XML アプリケーションを使用して XML ファイルを作成します。ファイルは有効な XML ファイルで、次のディレクトリにある XSD ファイルに基づいている必要があります。
  - **< SiteScope のルート・ディレクトリ > \conf\xsds\deploy.xsd**
  - **< SiteScope のルート・ディレクトリ > \conf\xsds\sitescope.xsd**

## 3. XML ファイルの編集

XML ファイルを編集して、デプロイメントに必要な値を入力する必要があります。ファイルの編集およびファイルのサンプルの詳細については、[「XML ファイルの例および変数」\(884ページ\)](#)を参照してください。

XML ファイルのタグの詳細については、[「XML タグ参照情報」\(887ページ\)](#)を参照してください。

**注:** ユーザ・インタフェースから XML が生成された場合、必須変数フィールドはテンプレートの必須変数に基づいて生成されます。XML ファイルを作成するときに、デプロイメントの成功に不可欠なフィールドがある場合、XML をデプロイする前にこれらのフィールドに値が割り当てられていることを確認する必要があります。

#### 4. ログインの詳細の指定（セキュリティ保護された環境で作業している場合に必須）

セキュリティ保護された環境で作業している場合、各デプロイメントで有効なユーザ名およびパスワードを指定する必要があります。ログイン資格情報を **audit.log** ファイルを使用して、テンプレートを変更するユーザの ID を追跡することもできます。

- 標準設定では、**【プリファレンス】 > 【インフラストラクチャ プリファレンス】 > 【カスタム設定】** の **【コントロールされたアクセス】** プロパティは **true** に設定されています。これは、SiteScope をセキュア・モードで使用していることを意味します。SiteScope がセキュア・モードのときに自動テンプレート・デプロイメントを使用するには、SiteScope マシンの各デプロイメントで生成された XML ファイルの `</deploy:fullPathToDestinationGroup>` の後に次の文字列を追加する必要があります。

```
<deploy:login user="<myUserName>" password="<myPassword>" />
```

暗号化ツールを使用して、ユーザ名とパスワードの暗号化手順を実行します。詳細については、次のステップを参照してください。

- セキュアでない環境を使用している場合は、この文字列を次のように変更します。

```
<deploy:login user="" password="" />
```

- コントロールされたアクセス** を **false** と設定した場合は、文字列を XML ファイルに追加しなくても自動テンプレート・デプロイメントを使用できます。この場合、セキュアな環境を使用しているかどうかに関係なく、正常に渡されます。

**注:** セキュリティ保護された環境で作業している場合、ログインを追加すれば以前のバージョンの SiteScope で生成された XML ファイルを使用できます。

#### 5. パスワードなどのフィールドの暗号化 - オプション

視認可能なテキスト形式で表示されないようにするフィールドが含まれているテンプレートをデプロイするには、暗号化ツールを使用します。このツールでは XML のフィールドのみが暗号化されます。テンプレート自体で永続ディレクトリの変数の暗号化が制御されます。

- 次のバッチ・ファイルを実行します。
  - Windows の場合 : **< SiteScope のルート・ディレクトリ > /tools/AutoDeployment/encrypt\_password.bat**
  - UNIX の場合 : **< SiteScope のルート・ディレクトリ > /tools/AutoDeployment/encrypt\_password.sh**
- コマンド・プロンプト・ウィンドウを開きます。
  - Windows の場合、ファイルをコマンド・プロンプト・ウィンドウにドラッグ・アンド・ドロップします。
  - UNIX の場合、.sh ファイルをそのディレクトリから実行する必要があります。
- スペースとパスワード値を入力します (Mypassword など)。ENTER キーを押します。
- XML ファイルの暗号化された変数の値として、戻り文字列を使用します。属性 **encrypted** の値を **yes** に、変数属性 **value** の値を戻り文字列に変更する必要があります。

たとえば、暗号化ツールによって `<deploy:variables encrypted="yes" name="password" value="(sisp)d5JLOSwaVfE="/>` のような値が生成されます。>

## 6. XML ファイルの検証

デプロイする前に XML ファイルを検証することをお勧めします。デプロイするときに XML ファイルが検証にパスしないと、デプロイメントは失敗します。

次のディレクトリにある検証ツールを使用します。

- Windows の場合: `<SiteScope のルート・ディレクトリ>/tools/AutoDeployment/validate_template_xml.bat`
- UNIX の場合: `<SiteScope のルート・ディレクトリ>/tools/AutoDeployment/validate_template_xml.sh`

概念の詳細については、[「XML バリデータ」\(887ページ\)](#)を参照してください。

## 7. SiteScope サーバ・マシンへの検証済み XML のコピー

各 SiteScope マシンの `\persistency\autodeployment` ディレクトリ (XML 形式のテンプレートをデプロイする場所) に XML ファイルをコピーします。

標準設定では、テンプレートは2分ごとに自動的にデプロイされます。[自動デプロイメントチェックの頻度 (秒)] フィールドの、[インフラストラクチャ プリファレンス] > [カスタム設定] で頻度を変更できます。

## 8. デプロイメントが成功したかどうかのチェック

デプロイおよび更新の両方の XML ファイルをコピー先 SiteScope の永続フォルダにコピーする場合、ファイルは次の2つのディレクトリのいずれかにコピーされます。

- `<SiteScope のルート・ディレクトリ>\persistency\autodeployment\successHistory` ディレクトリ。デプロイ済みグループのすべてのインスタンスを正常にデプロイまたは更新した XML ファイルが含まれます。
- `<SiteScope のルート・ディレクトリ>\persistency\autodeployment\failHistory` ディレクトリ。デプロイ済みグループのインスタンスのデプロイまたは更新に失敗した XML ファイルが含まれます。1 つでも失敗したインスタンスがあると、ほかのすべてが成功していても XML はこのフォルダに適用されます。

XML ファイルの名前が変更されます (アンダースコアとタイムスタンプが元の XML ファイルの名前に追加されます)。たとえば、すべてのグループとインスタンスのデプロイに成功した CPUgroups.XML という名前の XML ファイルは、`<SiteScope のルート・ディレクトリ>\persistency\autodeployment\successHistory` ディレクトリに保存され、CPUgroups\_1203951216931.xml という名前になります。

また、SiteScope のエラー・ログをチェックすることもできます。

## デプロイメントの更新方法

このタスクでは、自動テンプレート・デプロイメント XML を使用して、既存のデプロイ済みグループを更新する方法について説明します。テンプレートを変更した場合、デプロイメントの構造を更新できます。また、テンプレートで宣言されている変数に新しい値を指定してオブジェクト・プロパティを更新することもできます。

このタスクの手順は、以下で挙げる例外や追加情報以外は、テンプレートをデプロイする前のタスクと同じです。

### 1. 前提条件

デプロイ済みグループの更新する **[ソース テンプレート]** フィールドは、XML デプロイメント更新ファイルのテンプレートと同じである必要があります。これは、更新するテンプレートとともにデプロイ先 SiteScope に存在します。

### 2. オブジェクトおよび値を更新するための XML ファイルの作成および編集

XML ファイルを使って作業する場合、次の操作を実行する必要があります。

- **<templateDeployment>** タグの代わりに **<templateDeploymentUpdate>** タグを使用します。
- **<templateDeploymentUpdate>** タグの **enableDeleteOnUpdate** 属性に「yes」または「no」の値を入力します。
- **deploy:fullPathToDestinationGroup** タグを定義します。このタグの値として更新するグループ名を使用します。

これらのタグおよび更新 XML ファイルの詳細については、[「XML を使用したテンプレート変更の適用」\(876 ページ\)](#)の「デプロイメント XML タグの更新の詳細」を参照してください。

### 3. コピー先 SiteScope へのテンプレート更新適用 XML のコピー

自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルをデプロイするときのように、テンプレート更新適用 XML をコピー先 SiteScope の永続ディレクトリにコピーします。

### 4. パスワードなどのテキストの暗号化（任意指定）

タスクの詳細については、[「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ方法」\(877 ページ\)](#)の暗号化の手順を参照してください。

### 5. テンプレート更新適用 XML の検証

自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルをデプロイするときのように、バリデータ・ツールを使用して編集済み XML ファイルを検証します。

### 6. 結果のレポート

更新用の自動テンプレート・デプロイメント XML をデプロイすると、結果のレポート・ファイルが XML 形式で作成されます。これらのレポートは、**< SiteScope のルート・ディレクトリ**

> \persistence\autodeployment\reports にあります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「XML を使用したテンプレート変更の適用」(876 ページ)の「テンプレート更新レポート」を参照してください。

## UI の説明

[自動デプロイメント XML の生成] ユーザ・インタフェース

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
ファイル名	作成する XML ファイルの名前。これは、このテンプレート・コンテナ内のテンプレートを自動的にデプロイするために編集して使用できるファイルです。
パス	<p>XML ファイルの保存場所。標準設定の場所をそのまま使用するか、別の場所を入力します。パスが空の場合、XML ファイルは SiteScope がインストールされているルート・ドライブに保存されます。</p> <p><b>標準設定値：</b> &lt; SiteScope のインストール・パス &gt; \SiteScope\persistence\autodeployment\drafts</p> <p><b>注：</b> 以前に同じ<b>ファイル名</b>と<b>パス</b>を使用して XML ファイルが作成されている場合、以前に保存した XML ファイルは上書きされません。以前のファイルは、<b>_bck&lt;バックアップ番号&gt;</b>を末尾に追加した名前に変更されます。たとえば、<b>【ファイル名】</b>に「CPUtemplate」と入力し、標準設定の場所を受け入れた場合、標準設定のフォルダにある既存のファイルは CPUtemplate.xml_bck1 となり、生成されている現在の XML ファイルは CPUtemplate.xml として保存されます。</p>
テンプレート・ツリー	XML ファイルを作成するテンプレート。XML ファイルの内容は、選択するテンプレートにあるオブジェクトに基づきます。生成される XML ファイルには、選択したテンプレートごとに別々のデプロイ・セクションがあります。

## ヒント / トラブルシューティング

**注:** SiteScope テンプレート、ソリューション・テンプレート、テンプレート変更適用ウィザードに適用される注意事項、制限事項、トラブルシューティングの問題は、すべて自動テンプレート・デプロイメントの機能にも適用されます。

このセクションでは、自動テンプレート・デプロイメントを使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- [「ユーザ定義テンプレート」](#) (883ページ)
- [「XML を使用してテンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用」](#) (883ページ)
- [「ソリューション・テンプレート」](#) (883ページ)
- [「I18N ユーザ」](#) (883ページ)
- [「XML で禁止されている文字」](#) (884ページ)

## ユーザ定義テンプレート

- グループのないテンプレートを自動デプロイできない。

**問題：**親グループが定義されていないテンプレート（つまり、ルート・テンプレートの直下にモニタがあるテンプレート）を自動デプロイしようとする、デプロイメントは失敗し、次のエラーが **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\error.log** ファイルに書き込まれます。

[Autodeployment new XML detection] (XMLAutomationParser.java:294) ERROR - Prerequisites of template structure are unmet.Template must be rooted by only one group.

【プリファレンス】 > 【インフラストラクチャ プリファレンス】 > 【テンプレート設定】で【**テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する**】を選択した場合でも、自動デプロイメントは失敗します。

**回避策：**テンプレートを手動でデプロイします（テンプレート・ツリーで該当するテンプレートを右クリックしてから、【**テンプレートのデプロイ**】を選択します）。

- SiteScope テンプレートに関連するその他の問題。

SiteScope テンプレートに関連するその他の問題については、[「SiteScope テンプレートのトラブルシューティング」](#)を参照してください。

## XML を使用してテンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用

自動テンプレート・デプロイメント XML を使用した既存のデプロイメントの更新の制限事項については、[「テンプレート変更適用：トラブルシューティングおよび制限事項」](#) (896ページ)を参照してください。

## ソリューション・テンプレート

次のソリューション・テンプレートでは変数が動的に作成され、XML ファイルで値を指定できないため、自動テンプレート・デプロイメントを実行できません。

- JBoss Application Server 4.x
- WebLogic アプリケーション・サーバ
- WebSphere 5.x アプリケーション・サーバ
- WebSphere 6.x アプリケーション・サーバ

## I18N ユーザ

- メモ帳を使用して XML ファイルを編集しないでください。メモ帳ではファイルの先頭に余分な文字が追加されるため、XML ファイルを解析できなくなります。この文字は表示されませんが、英



語以外のファイルを解析不能にします。メモ帳ではなく、ワードパッドまたは XML エディタを使用してください。

- SiteScope のルート・ディレクトリへのパスに英語以外の文字が含まれている場合、XML を SiteScope の永続ディレクトリにコピーするまでは XML の検証に検証ツールを使用できません。このため、XML が XSD に準拠しているか、必須フィールドに値があるかが検証されません。

XML で禁止されている文字

アンパサンド (&)、引用符 (")、山括弧 (<>) 文字は、XML 属性値で禁止されているため、使用は避けてください。

不正な XML 文字をエスケープするには、一般的なエンコーディングを使用するか (&ではなく &amp; を使用するなど)、文字を CDATA (文字データ) セクションで囲みます。XML エスケープ・シーケンスに関する情報は一般的に公開されているさまざまな Web サイトに記載されています。

## XML ファイルの例および変数

自動テンプレート・デプロイメント・ファイルに含まれているすべての XML タグ、要素、属性の詳細については、「[XML タグ参照情報](#)」(887ページ)を参照してください。

各自動テンプレート・デプロイメント XML は、必ず次の宣言で始まります。

- **<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>** これは、UTF-8 文字エンコーディングの XML であることを宣言しています。
- **<sitescope:sitescopeRoot ...>** これは、スキーマの宣言です。URL が記載されますが、どのようなときでも SiteScope 外部の場所に接続することはありません。

XML ファイルの各セクションは次のいずれかのタグで始まり、そのアクションを実行するための指示があります。

- **<sitescope:templateDeployment>** テンプレートまたはソリューション・テンプレートをデプロイします。同じ XML ファイルに複数のインスタンスを含めることができます。
- **<sitescope:templateDeployUpdate>** 既存のデプロイメントに変更が適用されます。

各アクション内で、次を指定する必要があります。

- **<deploy:fullPathToTemplate>** ユーザ・インタフェースの SiteScope ツリー内のテンプレートへのパス。SiteScope ルート・ノードは含まれません。XML ファイルの例では、この値は Templates\Windows になります。
- **<deploy:fullPathToDestinationGroup>** アクションを実行するデプロイ先グループの SiteScope ツリー内のパス。たとえば、XML ファイルの例では、テンプレート・グループ・オブジェクトはグループ SiteScope\Windows\_Monitors のサブグループとして作成されます。

本項の内容

- [「XML ファイルの例」](#) (885ページ)
- [「変数」](#) (885ページ)



## XML ファイルの例

次に、自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルの例を示します。このファイルは、ユーザ・インタフェースから生成されました。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!-- SiteScope deployment descriptor -->
<sitescope:sitescopeRoot xmlns:sitescope="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance" xmlns:deploy="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance" xsi:schemaLocation="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance ./schemas/sitescope.xsd">
  <!-- To deploy use "templateDeployment", to update an existing deployment use templateDeploymentUpdate (this element can have the attribute enableDeleteOnUpdate with values of yes/no) -->
  <sitescope:templateDeployment>
    <!-- Path to source template in SiteScope tree (not including the root node) -->
    <deploy:fullPathToTemplate>Template Examples/Windows basic template
  </deploy:fullPathToTemplate>
    <!-- Path to destination group in SiteScope tree (not including the root node). New group will be created if need be -->
    <deploy:fullPathToDestinationGroup>
  </deploy:fullPathToDestinationGroup>
    <deploy:login user="admin99" password="(sisp)n9JRVAlxIsq"/>
    <!-- Mandatory variables names -->
    <deploy:mandatoryFields>host frequency password user</deploy:mandatoryFields>
    <!-- Global values for variables in current template -->
    <deploy:globalVariables>
      <deploy:variables encrypted="no" name="frequency" value="600"/>
      <deploy:variables encrypted="no" name="password" value="(sisp)d5JLOSWaVfe="/>
      <deploy:variables encrypted="no" name="user" value="admin"/>
    </deploy:globalVariables>
    <!-- Add here local variables for a deploy instance (overrides global variables with same name) -->
    <deploy:templateInstanceDeployVariable>
      <deploy:variables encrypted="no" name="group" value="Critical_monitors"/>
      <deploy:variables encrypted="no" name="frequency" value="600"/>
    </deploy:templateInstanceDeployVariable>
    <deploy:templateInstanceDeployVariable connectToServer="no">
      <deploy:variables encrypted="no" name="group" value="Minor_monitors"/>
      <deploy:variables encrypted="no" name="frequency" value="6000"/>
    </deploy:templateInstanceDeployVariable>
  </sitescope:templateDeployment>
</sitescope:sitescopeRoot>
```

## 変数

テンプレートとデプロイ先グループのパスを指定したら、XML ファイルの次のセクションでテンプレート変数と値に対応します。XML ファイルでは、変数とその値の定義、必須変数の宣言、対応する値の適用範囲（デプロイメント全体またはインスタンス単位）の決定を柔軟に行うことができます。

ユーザ・インタフェースから XML ファイルを生成し、変数に定義済みの値がある場合、その値が XML ファイルの変数に割り当てられます。

## 必須変数

テンプレートの必須変数の宣言は、**<deploy:mandatoryFields>** タグ内に表示されます。変数が必須変数として宣言されている場合、変数に対応する値をファイルで定義する必要があります。

ユーザ・インタフェースから XML を生成し、変数の作成時または編集時に **[Mandatory]** オプションを選択している場合、その変数は、**<deploy:mandatoryFields>** タグ内に表示されます。変数名を手動でこのリストに追加し、必須変数として宣言することもできます。

上記のファイルの例では、group と frequency が必須変数として定義されています。これらの変数の値は、**<deploy:globalVariables>** または **<deploy:templateInstanceDeployVariables>** のいずれかの **<deploy:variables>** タグ内に表示されます。

## グローバル変数またはインスタンス変数

任意指定の **<deploy:globalVariables>** タグには、デプロイメントの標準設定のグローバル・テンプレート変数が含まれています。グローバル・テンプレート変数を定義するかどうかは任意です。グローバル・テンプレート変数を定義する場合、ファイルのデプロイメント・インスタンス領域 (**<templateInstanceDeployVariables>** タグ) で別の変数の値を指定して変数の値を上書きできます。グローバル変数の値は、各デプロイメント・インスタンスの別の値で上書きできます。

XML ファイルの例のように、テンプレートの複数のインスタンスが同じ SiteScope の同じ場所にデプロイされる場合、各インスタンスにグループ名の変数を含める必要があります。グループ名は必須変数にし、各デプロイメント・インスタンスで異なる値を指定する必要があります。グループ・テンプレート・オブジェクトには、その値として同じ変数が定義されている必要があります。テンプレートには、名前値が変数ではないほかのグループを含めることができます。このグループは一度だけデプロイされます。

上記の XML ファイルの例では、デプロイメントのインスタンスが2つあるため、変数 group は必須変数として定義されており、各インスタンス・デプロイメントで異なる値 (Critical\_monitors と Minor\_monitors) が指定されています。この結果、テンプレートのグループ・オブジェクトの下に、同じモニタ・オブジェクトの2つのグループが作成されます。

XML ファイルの例では、次のグループがデプロイされます。

- SiteScope/Windows\_Monitors/Critical\_monitors (デプロイメントの最初のインスタンス)。  
このグループに該当するモニタおよび警告がテンプレートで定義されます。頻度値が変数 frequency として定義されているテンプレート・モニタ・オブジェクトの値が 600 秒 (10 分ごと) になります。
- SiteScope/Windows\_Monitors/Minor\_monitors (デプロイメントの2番目のインスタンス)。  
このグループに該当するモニタおよび警告がテンプレートで定義されます。頻度値が変数 frequency として定義されているテンプレート・モニタ・オブジェクトの値が 6000 秒 (1 時間 40 分ごと) になります。このグループには、connectToServer="no" 属性が追加されています。つまり、テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティは検証されません。

XML ファイルの例には、ユーザ名およびパスワード（<deploy:login user="admin99" password="(sisp)n9JRVALxIsq=" />）のログイン情報も含まれています。セキュリティ保護された環境を使用している場合、各デプロイメントで有効なユーザ名およびパスワードを指定する必要があります。暗号化ツールを使用してユーザ名とパスワードを暗号化できます。

**注:** テンプレートにシステム変数を定義している場合（%% ではなく \$\$ で定義されます），自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルでは通常の変数として扱われます。テンプレートでシステム変数を使用する場合に適用される制限は，XML ファイルで使用する場合にも適用されます。

## XML バリデータ

XML バリデータは，自動テンプレート・デプロイメントで使用するスキーマに対して XML ファイルを検証するユーティリティです。SiteScope デプロイメント自体は検証されません。バリデータ・ファイルへのパスは次のとおりです。

- Windows の場合 :<SiteScope のルート・ディレクトリ>/tools/AutoDeployment/validate\_template\_xml.bat
- UNIX の場合 :<SiteScope のルート・ディレクトリ>/tools/AutoDeployment/validate\_template\_xml.sh

このユーティリティでは，XSD ファイルに対して XML の構造がチェックされ，ファイルの内容が有効な XML であることと，XSD に対応していることが確認されます。また，すべての必須変数に値が定義されているかどうかも検証されます。値は，グローバル変数またはデプロイメント・インスタンス変数のいずれかとして定義できます。検証に失敗すると，失敗の理由が画面に出力されます。

## XML タグ参照情報

次の各表では，自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルで使用するすべての要素と属性について説明します

- 「要素表」(887ページ)
- 「属性表」(889ページ)

要素表

要素	詳細
sitescope:sitescopeRoot	これは，デプロイメントを作成するための指示，使用する XML のバージョン，XSD ファイルの場所を指定する XML ファイル内の最初のタグにする必要があります。

要素	詳細
	注: これは、SiteScope に関連するすべての XML ファイルで最初の要素になります。
sitescope:template Deployment	このタグを使用すると、テンプレートまたはソリューション・テンプレートをデプロイして、デプロイ先 SiteScope に新しいグループ構造を作成できます。これは、ユーザ・インタフェースからの生成時に XML ファイルで使用される標準設定のタグです。
sitescope:template DeploymentUpdate	このタグを使用すると、更新したテンプレートの変更を公開できます。この変更は、XML で識別されたテンプレートと一致する「ソーステンプレート」フィールドを持つグループの監視構造に適用できます。この XML ファイルではまた、テンプレートで使用する変数の値を更新できます。  たとえば、テンプレートで作成した既存のグループに警告やモニタを追加する場合、テンプレートを変更し、このタグを使用してデプロイできます。
deploy:fullPathToTemplate	このタグは、デプロイするテンプレートまたはソリューション・テンプレートの SiteScope ツリー内でのフル・パスを示します。  構文: <テンプレート・コンテナ名>/<テンプレート名>
deploy:fullPathTo DestinationGroup	このタグは、デプロイした監視構造の作成先となるグループ名の、SiteScope ツリー内でのフル・パス位置を示します。このタグに値がない場合、デプロイメントは SiteScope ノード・レベルに作成されます。
deploy:mandatoryFields	このタグ内の値は、テンプレート作成時に必須フィールドとして選択された変数です。このタグ内に値が存在する場合、グローバル変数には <deploy:globalVariables> タグで、その他の変数には <deploy:variables> タグで値を指定する必要があります。これらの必須フィールドに対応する値がない場合、XML は検証に失敗します。
deploy:globalVariables	このタグは、選択したテンプレート全体にデプロイされる変数が含まれるファイルのセクションをマークします。  属性が含まれます。詳細については、この後の属性表を参照してください。
deploy:templateInstance DeployVariable	このタグは、選択したテンプレートのインスタンスごとにデプロイされる変数が含まれるファイルのセクションをマークします。

要素	詳細
	<p>同じ変数が <b>&lt;deploy:globalVariables&gt;</b> に存在する場合、インスタンスの変数の値は、同じ変数が存在するインスタンスについてのみグローバル変数の値を上書きします。それ以外のすべてのインスタンスの値は、<b>&lt;deploy:globalVariables&gt;</b> セクションの入力値になります。</p> <p>属性が含まれます。詳細については、この後の属性表を参照してください。</p>
deploy:variables	<p>このタグでは、変数とその値を定義します。</p> <p>属性が含まれます。詳細については、この後の属性表を参照してください。</p>

## 属性表

親要素	属性	詳細
templateDeploymentUpdate	enableDeleteOnUpdate	<p>テンプレートのデプロイメントに存在するオブジェクトのインスタンスが、デプロイメントの構造の更新に使用する XML ファイルに存在しない場合、そのインスタンスを削除するかどうかを示します。</p> <p><b>使用可能な値</b> :yes, no</p> <p>このオプションの詳細については、「<a href="#">「[デプロイ済みグループの選択] ページ」 (898ページ)</a>」の「<a href="#">更新による削除の有効化</a>」を参照してください。</p>
deploy:globalVariables deploy:templateInstanceDeployVariable	description	デプロイメントのユーザ説明（任意指定）。
	connectTo Server	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティを検証します（任意指定）。これは、（この属性が指

親要素	属性	詳細
		<p>定されていないとしても) 標準設定の動作です。リモート・サーバに接続しないようにするには、connectToServer="no" を <b>&lt;deploy:globalVariables&gt;</b> または <b>&lt;deploy:templateInstanceDeployVariable&gt;</b> タグに追加します。</p> <p><b>使用可能な値</b> :yes, no</p> <p>詳細については、<a href="#">「[複数のテンプレートのデプロイ] ダイアログ・ボックス」(869ページ)</a>の「<b>リモートサーバでモニタ プロパティを検証</b>」を参照してください。</p>
	access Controlled	<p>(任意) テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。</p> <p><b>使用可能な値</b> :true, false</p>
deploy:variables	encrypted	<p>変数フィールドの値が暗号化されているかどうかを示します。</p> <p><b>使用可能な値</b> :yes, no</p> <p>値を暗号化するには、暗号化ツールを使用して変数の値を指定します。詳細については、<a href="#">「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ方法」(877ページ)</a>を参照してください。</p>
	name	変数の名前。
	value	変数の値。

## 第66章: テンプレート変更の適用

テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートを変更し、その変更をテンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに適用できます。しきい値の変更や、新しいモニタや警告が必要になるなど、テンプレート・オブジェクトに変更が必要な場合、テンプレートを1回更新すれば、各オブジェクトを個別に更新せずに変更をすべてのデプロイ済みグループに適用できます。

テンプレート変更適用ウィザードを使用して、実際の監視対象のデプロイメントがソース・テンプレートで定義された標準化デプロイメントに従う方法を表示できます。これにより、監視対象環境に発生した変化は監視側のインフラストラクチャで迅速に更新されます。また、監視側のインフラストラクチャでは、ソース・テンプレートの標準セットへの準拠が維持されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレートを右クリックして【**変更の適用**】を選択します。

## 学習事項

### テンプレート変更適用の概要

テンプレートをデプロイすると、デプロイ済み親グループが自動的にそのソース・テンプレートに関連付けられます。その後にそのソース・テンプレートを変更した場合、テンプレート変更適用ウィザードを使用して、そのテンプレートでデプロイされた SiteScope オブジェクトに自動的にその変更を適用できます。このウィザードでは、各オブジェクトを個別に更新しなくても、ソース・テンプレートが更新されるたびに組織全体の関連するデプロイ済みグループを更新できます。

デプロイ済みグループは、テンプレートで設定したグループ、モニタ、警告、変数、リモート・サーバで構成されます。テンプレートのデプロイ方法の詳細については、[「テンプレートのデプロイ」](#) (810ページ)の「テンプレートのデプロイ」手順を参照してください。

テンプレート変更適用ウィザードでは、次の方法でデプロイ済みグループを更新できます。

- ソース・テンプレートの変更のみをデプロイ済みグループに適用できます。これにより追加オブジェクトが作成されて既存のオブジェクトの値が更新されますが、ソース・テンプレートに存在しないその他のオブジェクトは変更されません。
- ソース・テンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用して、SiteScope で上記の変更を実行し、デプロイされたグループからソース・テンプレートに含まれないその他すべての SiteScope オブジェクトを削除できます。
- 変更を公開するとき、SiteScope でルート・グループ下のグループへの変更の適用を無視できます。これにより、

- テンプレートを既存のデプロイ済みグループ内にデプロイし、無視されるグループに含まれる SiteScope オブジェクトに影響を与えずに、デプロイ済みグループにテンプレートの変更を適用できます。これによってさまざまなデプロイ済みグループ内にテンプレートをデプロイできます。
- ソース・テンプレートから削除されたデプロイ済みグループのオブジェクトを削除できます（**「更新による削除の有効化」** オプションが選択されている場合）。ただし、ソース・テンプレートに含まれていないデプロイ済みグループで作成されたその他のオブジェクトは削除されません。
- テンプレートを使ってモニタやグループをデプロイする場合、モニタおよびグループの依存関係もパブリッシュされます。これによってユーザが手動で操作しなくても、テンプレートがグループやモニタをツリーの正しい位置に自動的に書き込んだり、依存関係をいくつでも自動的に作成したりできるようになります。
- 変更を適用すると、手動で実行しなくてもモニタとグループの依存関係も更新されます（テンプレートは、グループとモニタをツリー内の適切な場所に自動的に書き込み、自動的に依存関係を作成します）。選択したテンプレート・モニタやグループの依存関係設定を、デプロイしたテンプレート・オブジェクトの依存関係設定に上書きしない場合は、**「依存関係」** パネルの **「変更をパブリッシュするときに、依存関係を無視します」** を選択します。選択したテンプレート・モニタとグループの依存関係設定が無視され、デプロイしたオブジェクト内の既存の依存関係設定が保持されます。詳細については、**「テンプレート・モニタおよびグループを設定するときの依存関係」** (266ページ) を参照してください。

## タスク

### 関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法

このタスクでは、テンプレート変更適用ウィザードを使用してテンプレートの変更を関連グループ・デプロイメントに適用する手順について説明します。

#### 1. 前提条件

テンプレート変更適用ウィザードを実行するには **「グループを追加、編集、または削除します」** 権限が必要で、**「許可されているグループ」** リストで権限が付与されているグループのみで実行できます。**「許可されているグループ」** リストに含まれていないデプロイ済みのグループは、ウィザードには表示されません。

#### 2. ウィザードの実行

ウィザードを実行するには、テンプレート・ツリーでテンプレートを右クリックして、**「変更の適用」** を選択します。最初のページで、更新する関連テンプレート・グループを選択します。さらに次のオプションも選択できます。

- **「更新による削除の有効化」** を選択すると、ソース・テンプレートに含まれない SiteScope オブジェクトがデプロイ済みグループから削除されます。



- ・ **「リモート サーバでテンプレートの変更を検証」**を選択すると、テンプレートのデプロイ先のリモート・サーバと比較し、選択したテンプレートのモニタ設定変更が正しいかどうかを検証されます。

**注:** カスタム・モニタ・テンプレートの変更を適用する場合、このチェックボックスをクリアしても何の影響もありません。これは、テンプレート内モニタ設定プロパティが、テンプレートがデプロイ中のリモート・サーバと照合される必要があるためです。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「テンプレート変更適用ウィザード」](#) (897ページ) を参照してください。

#### 例 - デプロイ済みのグループの選択

デプロイ済みグループの選択

テンプレート変更を適用するデプロイ済みテンプレートと関連するグループを選択します。

☒ SiteScope  
☒ Lab Test  
☒ Lab Test 1

☐ 更新で削除できます  
(ソース テンプレートに含まれないすべての SiteScope オブジェクトをデプロイ済みテンプレートから削除できます)  
☐ リモート サーバでテンプレートの変更を検証

### 3. 構造および内容の相違の表示

テンプレートとデプロイ済みグループの構造上の相違を表示します。[整合性の確認] のユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[整合性の確認\] ページ」](#) (899ページ) を参照してください。







テンプレート・オブジェクトの内容の相違を表示するには、[相違の表示] リンクをクリックして [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックスを開きます。このリンクは、内容の相違があるテンプレート・オブジェクトにのみ表示されます。[コンテンツの変更] のユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[コンテンツの変更\] ダイアログ・ボックス」](#) (901ページ) を参照してください。




例 - 【整合性の確認】 ページ

整合性の確認

テンプレートとデプロイ済みグループ間の構造上の相違を表示します。  
テンプレートとデプロイ済みグループ オブジェクト プロパティ間の相違がある場合は、  
[相違の表示] リンクをクリックして、これらの相違を表示できます。

変更を適用するデプロイ済みグループの総数: 2  
2 のデプロイ済みグループに構造およびコンテンツの相違があります

グループ名	コンテンツの差異	
 SiteScope\Lab Te...		<input checked="" type="checkbox"/>
 Memory on 16....		
 Cpu monitor o...		
 Unix リモート ...		
 16.148.24.2...	<a href="#">相違の表示</a>	
 SiteScope\Lab Te...		<input checked="" type="checkbox"/>



例 - 【コンテンツの変更】 ページ

コンテンツの変更

オブジェクトのプロパティに行われる内容の変更の詳細をレビューします。  
タイプ: モニタ  
名前: Cpu monitor on localhost

プロパティ名	現在の値	置換する値	アクション
すべて更新	600	60	Modified
エラー条件	utilizationPercentage == ...	utilizationPercentage == 90e...	Modified
エラーの検証		on	Added

4. 新規変数の値の追加

テンプレートにある新規変数に値を追加します。必須の変数値は、赤のアスタリスク (\*) で示されます。既存の変数の値を編集することもできます。【適用】をクリックするとウィザードが完了し、テンプレートの更新が適用されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[変数の変更\] ページ](#)」(901ページ)を参照してください。

例 - 【変数の変更】 ページ

変数の変更

デプロイされたグループの新しい変数に値を追加するか既存の変数値を編集する、またはその両方を行ってください。

変更を適用するデプロイ済みグループの総数: 4  
4 のデプロイ済みグループに既存の変数値があるか変数がありません  
既存の値を持つ変数を持つ、あるいは変数のないデプロイ済みグループは以下の通りです。  
変数値を持つグループは展開でき、必要に応じて変数値を変更できます。

変数名	変数の値	
SiteScope\Lab Test 4...		<input checked="" type="checkbox"/>
user*		
host		
frequency	60	
test	Cp1252	
password	.....	
SiteScope\Lab Test 1...		<input checked="" type="checkbox"/>
user*		
host		
frequency	600	
test	Cp1252	
password	.....	
SiteScope\Lab Testl...		<input checked="" type="checkbox"/>

5. テンプレート変更適用の結果の確認

テンプレート変更適用の結果を確認し、必要な場合は、更新に失敗したデプロイ済みグループに変更を再適用します。【適用結果のサマリ】のユーザ・インタフェースの詳細については、[「【結果サマリの適用】 ページ」 \(902ページ\)](#)を参照してください。

例 - 【結果サマリの適用】 ページ

### 結果サマリの適用

テンプレート変更による影響を受けるデプロイ済みグループのサマリを表示します。  
PDF レポート アイコンをクリックして、デプロイ済みグループに行われた変更を確認してください。

1 個のデプロイ済みグループが正常に更新されました。  
1 個のデプロイ済みグループが更新されませんでした。  
変更されなかったルート グループ:

グループ名	理由
SiteScope\Lab monitors\Windows m...	
Memory on cinderella(1)	Parameter error occurred propertyThe fo...
Cpu monitor on cinderella	Parameter error occurred propertyThe fo...
Microsoft Windows リモート サーバ	Parameter error occurred propertyThe fo...
cinderella remote windows	更新できませんでした

## 6. サマリ・レポートへのテンプレート変更のエクスポート - オプション

任意で、テンプレート変更適用の結果をサマリ・レポート（PDF ファイル）にエクスポートできます。サマリ・レポートの詳細については、「[テンプレート変更適用サマリ・レポート](#)」（902 ページ）を参照してください。

# ヒント / トラブルシューティング

## テンプレート変更適用: トラブルシューティングおよび制限事項

この項では、ユーザ定義テンプレートを変更する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- （テンプレートでグループを作成せずに）テンプレートの直下に追加されたモニタは、テンプレート変更適用ウィザードではサポートされません。
- テンプレートとデプロイ済みグループは ID によって内部でリンクされています。そのため、テンプレート名またはデプロイ済みグループのルート・グループが変更された場合でも、変更を適用できます。ただし、ルート・グループの「ソース テンプレート」プロパティを使用してテンプレートにグループを手動で関連付ける場合、デプロイメントでルート・グループ名が変更されたときには変更を適用できません。
- 変更を適用するには、ルート・グループ階層のすべての変更が成功する必要があります。グループへのいずれかの変更が失敗すると、そのグループへのすべての変更がロール・バックされます。
- 「テンプレート変更適用ウィザード」の「整合性の確認」ページに表示されていない「タグの検索/フィルタ」値に変更します。ただし、変更はデプロイ済みグループに適用されます。
- テンプレート変更適用ウィザードは、しきい値の設定で正規表現をサポートしません。
- レポートを PDF にエクスポートするときに、ほとんどの言語で文字を表示できるようにするに

は、PDF の表示に使用するマシンに Arial Unicode MS フォントがインストールされている必要があります。詳細については、「[PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法](#)」(850ページ)を参照してください。

- SiteScope がインストールされているサーバのロケールに従って、テンプレート変更適用ウィザードにプロパティが表示されます。ブラウザのロケールは、プロパティの表示には影響しません。
- テンプレート変更適用ウィザードまたは自動デプロイメント更新（「[XML を使用したテンプレート変更の適用](#)」(876ページ)を参照）を使用して既存の監視対象サーバを置換することはできませんが、必要に応じて監視対象サーバ自体のプロパティ値は変更できます。
- 参照可能なモニタ・カウンタでの変更をデプロイ済みグループに適用するには、モニタ・グループをデプロイするリモート・サーバに接続されている必要があります。
- SiteScope API を使用して、テンプレートでデプロイされたグループ、モニタ、警告、リモート・サーバを更新することもできます。詳細については、「[SiteScope 公開 API](#)」(171ページ)を参照してください。
- カスタム・モニタ・タイプに変更を適用すると、変更が実行された後、モニタは一時的に無効になってから変更が適用され、有効な状態に復帰します。
- カスタム・トポロジへの変更の適用は、サポートされていません（BSM にあるモニタのカスタム・トポロジには影響しません）。デプロイされたテンプレート・モニタのトポロジ設定を修正するには、代わりに「[グローバル検索と置換](#)」(96ページ)を参照してください。
- SiteScope リモート・サーバの変更の適用は、サポートされていません。
- テンプレートのオブジェクトのプロパティで複数の変数を使用している場合は、文字または文字シーケンスで変数を区切る必要があります。「#」や「\_」などの区切り文字を使用して、正しい変数値がテンプレート変更適用ウィザードに表示されるようにすることをお勧めします。たとえば、**「グループ名」** ボックスで2つの変数を使用する場合は、次のように区切ります  
:%%firstVar%%#%%secondVar%%.

区切り文字は、変数の実際の値の一部ではないことが重要です。たとえば、テンプレートの値が %%firstVar%%agf%%secondVar%% で構成され、デプロイ済みグループの値が 11111agf222 の場合は、変更適用プロセスで firstVar は 11111 として定義され、secondVar は 222 として定義されます。

テンプレートの値が %%firstVar%%agf%%secondVar%% で構成され、デプロイ済みグループの値が 1agf1agf222 の場合は、firstVar の実際の値が 1agf1 で、secondVar の実際の値が 222 であっても、変更適用プロセスで firstVar は 1 として定義され、secondVar は 1agf222 として定義されます。

## テンプレート変更適用ウィザード

このウィザードでは、デプロイ済みグループのテンプレートの整合性を確認し、ソース・テンプレートが更新されるたびにテンプレートによってデプロイされる SiteScope オブジェクトを更新できます。

--	--

アクセス方法	<p>【テンプレート】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレートを右クリックして【変更の適用】を選択します。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>テンプレート変更適用ウィザードを実行するには「グループを追加、編集、または削除します」権限が必要で、【許可されているグループ】リストで権限が付与されているグループのみで実行できます。【許可されているグループ】リストに含まれていないデプロイ済みのグループは、ウィザードには表示されません。</li> <li>選択したテンプレートに関連付けられたデプロイメントがある場合にのみ、ウィザードが開きます。テンプレートのデプロイの詳細については、<a href="#">「テンプレートのデプロイ」</a> (810ページ)を参照してください。</li> </ul>
関連タスク	<p><a href="#">「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」</a> (892ページ)</p>
ウィザード・マップ	<p>このウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p><a href="#">「[デプロイ済みグループの選択] ページ」</a> (898ページ) &gt; <a href="#">「[整合性の確認] ページ」</a> (899ページ) &gt; <a href="#">「[コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス」</a> (901ページ) &gt; <a href="#">「[変数の変更] ページ」</a> (901ページ) &gt; <a href="#">「[結果サマリの適用] ページ」</a> (902ページ) &gt; (<a href="#">「テンプレート変更適用サマリ・レポート」</a> (902ページ))</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「テンプレート変更の適用」</a> (891ページ)</li> <li><a href="#">「テンプレート・ツリー」</a> (42ページ)</li> </ul>

## 「デプロイ済みグループの選択」 ページ

このウィザード・ページでは、テンプレートの変更を適用するソース・テンプレートに関連付けられたグループを選択できます。これは、テンプレート変更適用ウィザードの一部です。ウィザードの重要な情報については、[「テンプレート変更適用ウィザード」](#) (897ページ)を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<p>&lt;選択したテンプレートに関連付けられているグループのリスト&gt;</p>	<p>テンプレートの変更内容を使用して更新する、選択したテンプレートに関連付けられているグループ。</p> <p><b>標準設定値:</b> 関連付けられているすべてのグループとサブグループが選択されている</p>
更新による削除	<p>テンプレートの整合性を確保するには、このオプションを選択します。【変更</p>

UI 要素	詳細
の有効化	<p>を公開するとき、グループを無視する] オプションが選択されたルート・グループ内のグループに含まれるオブジェクトを除き、ソース・テンプレートに含まれていないすべての SiteScope オブジェクトをデプロイ済みグループから削除します。グループを無視する設定の詳細については、「<a href="#">[新規テンプレートグループ] ダイアログ・ボックス</a>」(828ページ)を参照してください。</p> <p><b>注：</b> [変更を公開するとき、グループを無視する] オプションが選択されたテンプレート・グループをデプロイ後にテンプレートから削除すると、<b>【更新による削除の有効化】</b> を選択した変更適用後にデプロイから削除されます。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されていない</p>
リモート・サーバでテンプレートの変更を検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバで、選択したテンプレートのモニタ設定の変更が正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注：</b> このオプションを選択すると、リモート接続のために更新パフォーマンス速度が低下します。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されていない</p>

## 〔整合性の確認〕 ページ

このウィザードでは、ソース・テンプレートとデプロイ済みグループ間の構造上の差異を表示可能にし、デプロイ済みグループ・オブジェクトの内容の差異へのリンクを提供します。これは、テンプレート変更適用ウィザードの一部です。ウィザードの重要な情報については、「[テンプレート変更適用ウィザード](#)」(897ページ)を参照してください。

**注：** [テンプレート変更適用ウィザード] の〔整合性の確認〕ページに表示されていない[タグの検索/フィルタ] 値に変更します。ただし、変更はデプロイ済みグループに適用されます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<N> のデプロイ済みグループに構造およびコンテンツの相違がありません	ソース・テンプレートとの間に構造上または内容の差異があるデプロイ済みグループとグループ・オブジェクト（サブグループ、モニタ、警告、リモート・サーバ）を表示します。
<N> のデプロイ済みグループに	ソース・テンプレートとの構造または内容の差異がないデプロイ済みグループを表示します。デプロイメントの差異がないグループは、折りたたまれて表示

UI 要素	詳細
構造およびコンテンツの相違がありません	されます。
グループ名	<p>デプロイ済みグループとそのすべてのオブジェクト（サブグループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート・サーバ）の名前を表示します。オブジェクトの構造上の差異は、グループ・ツリー階層に次のテキストと色分けで表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>追加済み</b>：デプロイ済みグループに追加された新規オブジェクトを示します。オブジェクトは緑色で表示されます。</li> <li>● <b>テンプレート内に存在しない</b>（<b>「更新による削除の有効化」</b> オプションが <b>「デプロイ済みグループの選択」</b> ページで選択されていない場合のみ使用可能）：ソース・テンプレートに存在しないオブジェクトを示します。オブジェクトは青色で表示されます。</li> <li>● <b>無視</b>：<b>「変更を公開するとき、グループを無視する」</b> オプションが選択されたサブグループであることを示します。無視されたグループが灰色で表示されます。</li> <li>● <b>削除</b>：（<b>「更新による削除の有効化」</b> オプションが <b>「デプロイ済みグループの選択」</b> ページで選択されている場合にのみ使用可能。）デプロイ済みグループから削除されるオブジェクトを示します。オブジェクトは赤色で表示されます。</li> <li>● <b>未使用</b>：テンプレート・リモート・サーバが使用されていないことを示します。未使用のリモート・サーバは灰色で表示されます。</li> </ul>
コンテンツの差異	<p>プロパティ、しきい値、その他の構造上以外の差異での内容の差異を含むオブジェクトでは、<b>「相違の表示」</b> リンクが表示されます。リンクをクリックすると <b>「コンテンツの変更」</b> ダイアログ・ボックスが開き、デプロイ済みグループまたはオブジェクトのプロパティ・レベルの差異が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、<b>「<a href="#">「コンテンツの変更」ダイアログ・ボックス</a> (901ページ)</b>を参照してください。</p> <p>デプロイされたテンプレート・リモート・サーバは、<b>「Microsoft Windows リモート サーバ」</b> または <b>「UNIX リモート サーバ」</b> セクションに表示されます。Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバにリモート・サーバがすでに存在する場合、テンプレートのデプロイ時にリモート・サーバは再デプロイされません。</p>



## [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス

このウィザード・ページでは、更新に選択したオブジェクトのすべてのプロパティ、現在の値と置換する値、プロパティ・アクションの状態のリストを表示できます。これは、テンプレート変更適用ウィザードの一部です。ウィザードの重要な情報については、[「テンプレート変更適用ウィザード」\(897ページ\)](#)を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
タイプ	オブジェクト・タイプ（グループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート）。
名前	選択したオブジェクトの名前。
プロパティ名	変更の適用で影響を受けるプロパティの名前。
現在の値	デプロイ済みグループの既存のプロパティ値。プロパティがデプロイ済みグループに追加される場合は、この値は空です。 <b>注：</b> 既存のパスワードのプロパティは暗号化されて表示されます。
置換する値	テンプレートの置換するプロパティ値。プロパティがデプロイ済みグループから削除される場合は、この値は空です。 <b>注：</b> <ul style="list-style-type: none"><li>置換するパスワードのプロパティは暗号化されて表示されます。</li><li>テンプレート・モニタの【<b>依存対象</b>】プロパティを変更すると、依存関係にあるテンプレート・モニタのフル・パスが表示されます（SiteScope\tc\template\group\CPU など）。</li></ul>
アクション	アクションの状態（「Modified」，「Added」，「Deleted」，「Ignored」）。ベースラインしきい値に変更がない場合、ベースライン・モニタには「Ignored」状態が使用されます。

## [変数の変更] ページ

このウィザードでは、デプロイ済みグループの新規変数に値を追加できます。既存の変数の値を編集することもできます。これは、テンプレート変更適用ウィザードの一部です。ウィザードの重要な情報については、[「テンプレート変更適用ウィザード」\(897ページ\)](#)を参照してください。


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
変数名	デプロイ済みグループの新規または既存の変数の名前。赤色のアスタリスクは、変数の値が必須であることを示します。  注：値が入力された変数を含むグループを展開して、必要に応じてその変数を変更できます。変数が含まれないグループは展開できません。
変数の値	デプロイ済みグループに追加された新規変数の値。既存の変数の値を編集することもできます。  注： <ul style="list-style-type: none"><li>リモート・サーバの変数の値は、読み取り専用で変更できません。</li><li>変数文字列にハイパーテキストのタグが含まれていると、その文字列が切り捨てられて「変数の値」ボックスに正しく表示されません（文字列の一部がテキスト・ラベルに表示されます）。</li></ul>

## 「結果サマリの適用」 ページ

このウィザード・ページでは、適用されたテンプレートの更新のサマリを表示できます。これは、テンプレート変更適用ウィザードの一部です。ウィザードの重要な情報については、「[テンプレート変更適用ウィザード](#)」(897ページ)を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>エクスポート</b> ：各ルート・グループの適用の結果を PDF ファイルにエクスポートします。詳細については、「 <a href="#">テンプレート変更適用サマリ・レポート</a> 」(902ページ)を参照してください。
グループ名	ルート・グループ名とグループのオブジェクト（サブグループ、モニタ）を表示します。
理由	SiteScope でデプロイ済みグループへの変更を適用できない場合、失敗した原因がそのグループの各モニタに表示されます。

## テンプレート変更適用サマリ・レポート

このレポートには、デプロイ済みグループに適用されるテンプレート変更に関する情報が表示されます。更新に失敗したまたは無視されたグループ・オブジェクトの情報も表示されます。結果はオブ


ジェクト・レベル（グループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート・サーバ）で表示されます。

これは、テンプレート変更適用ウィザードの一部です。ウィザードの重要な情報については、「[テンプレート変更適用ウィザード](#)」(897ページ)を参照してください。

テンプレート変更適用サマリ レポート

変更を適用するデプロイ済みグループの総数: 4  
更新されていないデプロイ済みグループの総数: 0  
正常に更新されたデプロイ済みグループの総数: 4

正常に変更されたデプロイ済みグループ				
デプロイ済みルート グループ: SiteScope\Lab Test 4\Unix monitors for 16.16.16.16				
タイプ	名前	理由	メッセージ	
モニタ	SiteScope\ Lab Test 4\ Unix monitors for 16.16.16.16 Memory on 16.16.16.16	未変更		
	プロパティ 名	デプロイメント 値 (以前)	テンプレート 値 (現在)	プロパティ 値の アクション
	すべて更新	150	120	正常に変更 されました
リモート サーバ	16.16.16.16 remote unix	正常に変更 されました		

アクセス方法	[テンプレート変更適用ウィザード] の [結果サマリの適用] ページで、[レポート  テンプレート変更適用ウィザード」(897ページ) で入手できます。 <li>テンプレート変更適用サマリ・レポートの PDF 版は、Firefox 2.x ではサポートされていません。</li>
--------	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>レポートを PDF にエクスポートするときに、ほとんどの言語で文字を表示できるようにするには、PDF の表示に使用するマシンに Arial Unicode MS フォントがインストールされている必要があります。詳細については、<a href="#">「PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法」</a> (850ページ)を参照してください。</li> </ul>
関連タスク	<a href="#">「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」</a> (892ページ)
ウィザード・マップ	<p><a href="#">「テンプレート変更適用ウィザード」</a> (897ページ)には、次のページが含まれています。</p> <p><a href="#">「[デプロイ済みグループの選択] ページ」</a> (898ページ) &gt; <a href="#">「[整合性の確認] ページ」</a> (899ページ) &gt; ( <a href="#">「[コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス」</a> (901ページ) ) &gt; <a href="#">「[変数の変更] ページ」</a> (901ページ) &gt; <a href="#">「[結果サマリの適用] ページ」</a> (902ページ) &gt; ( <a href="#">テンプレート変更適用サマリ・レポート</a> )</p>
関連情報	<a href="#">「テンプレート変更の適用」</a> (891ページ)

## レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<レポートのサマリ>	変更の適用対象として選択したルート・グループの総数。変更成功したグループ数と失敗したグループ数を含みます。
[ <a href="#">デプロイ済みルートグループ&lt;グループ・パス&gt;</a> ]	<p>テンプレートの変更による更新に成功または失敗した、デプロイ済みグループとすべてのグループ・オブジェクトの名前。更新されなかったデプロイ済みグループが最初に表示されます。</p> <p><b>注：</b>変更を適用するには、ルート・グループ階層のすべての変更が成功する必要があります。グループ・オブジェクトへのいずれかの変更が失敗すると、そのグループへのすべての変更がロール・バックされます。</p>
タイプ	オブジェクト・タイプ (グループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート・サーバ)。
名前	オブジェクトの名前とそのパス。
理由	オブジェクトの適用状態 (「Successfully added」, 「Successfully modified」, 「Successfully deleted」, 「Failed to add」, 「Failed to modify」, 「Failed to delete」, Ignored」, 「Unchanged」)。

UI 要素	詳細
メッセージ	テンプレートの変更によって更新されなかったデプロイ済みグループ・オブジェクトの、変更の適用に失敗した理由。
<プロパティの詳細>	<p>内容が変更されたデプロイ済みグループ・オブジェクトの場合</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>プロパティ名</b> : 更新されたプロパティの名前。</li><li>・ <b>デプロイメント値 (以前)</b> : デプロイ済みグループの以前のプロパティ値。プロパティがデプロイ済みグループに追加された場合は、この値は空です。以前のパスワード変数は暗号化されて表示されます。</li><li>・ <b>テンプレート値 (現在)</b> : デプロイ済みグループの置換するプロパティ値。これがテンプレートの現在のプロパティ値です。プロパティがデプロイ済みグループから削除された場合は、この値は空です。置換するパスワード変数は暗号化が解除されて表示されます。</li><li>・ <b>プロパティ値のアクション</b> : プロパティ値に加えられた変更のタイプ (「正常に変更されました」, 「正常に追加されました」, 「正常に削除されました」)。</li></ul>

## 第67章: HP Live Network での SiteScope コンテンツの共有

HP Live Network を使用して、SiteScope のルート・ディレクトリにあるスクリプトやアラート・テンプレートを参照するカスタム SiteScope モニタと標準 SiteScope モニタを共有することができます。他の SiteScope ユーザと知識を共有することによって、対象とする SiteScope モニタの範囲が拡大します。さらに、SiteScope のリリース・サイクル以外の新規コンテンツの開発について情報を得ることができます。

### アクセス方法

- **SiteScope ユーザ・コミュニティのページ**: SiteScope コミュニティ・フォーラムのディスカッションを読んだり、参加したり、製品のお知らせを取得したり、SiteScope コミュニティで共有しているコンテンツやその他のファイルにアクセスできます。  
このページにアクセスするには、Web ブラウザで <https://hpln.hp.com/group/sitescope> と入力します。
- **[Community Content for SiteScope] ページ**: このエリアは、SiteScope コンテンツの開発および交換のために使用されます。自分が開発したコンテンツを共有したり、他のユーザが提供するコンテンツをダウンロードして評価したり、フォーラムにフィードバックを投稿したりできます。  
[Community Content for SiteScope] ページに直接アクセスするには、Web ブラウザで <https://hpln.hp.com/group/community-content-sitescope> と入力します。

## 学習事項

### コンテンツ共有の概要

SiteScope モニタの開発後、そのモニタをテンプレートにコピーして、他の SiteScope ユーザと共有できるテンプレート・ファイルにエクスポートできます。テンプレートへのモニタのコピー方法の詳細については、「[既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法](#)」(811ページ)を参照してください。テンプレートのエクスポートの詳細については、「[テンプレートのエクスポートとインポートの方法](#)」(840ページ)を参照してください。

また、SiteScope のルート・ディレクトリにあるスクリプトやアラート・テンプレートを参照するカスタム SiteScope モニタまたは標準 SiteScope モニタを共有する場合は、モニタの作成に使用するファイルおよびモニタで参照される拡張ファイルをコンテンツ・パッケージにコピーする必要があります。コンテンツ・パッケージの作成の詳細については、「[コンテンツ・パッケージの作成](#)」(837ページ)を参照してください。

テンプレートまたはコンテンツ・パッケージを個々の SiteScope ユーザに送信するか [HP Live Network](#) の SiteScope コミュニティにテンプレートをパブリッシュすることによって、テンプレートまたはコ


ンテンツ・パッケージを配布できます。HP Live Network はオンライン・コミュニティで、HP カスタマが情報を共有し、アドオン・コンテンツ、エクステンション、HP Software ポートフォリオにわたる関連アクティビティについて知るための中心的な場所を提供します。

## タスク

### 本項の内容

- 「[HP Live Network コミュニティへのコンテンツのパブリッシュ方法](#)」(907ページ)
- 「[HP Live Network からのコンテンツのダウンロード方法](#)」(908ページ)

### HP Live Network コミュニティへのコンテンツのパブリッシュ方法

1. HP Live Network 上の [Community Content for SiteScope] ページに移動します
  - a. このサイトにアクセスする前提条件
    - HP カスタマが指定した製品の現在の保守契約でこのサイトへのフル・アクセスが可能。
    - フル・アクセスには、HP Passport アカウントが必要です。また、製品の契約 ID (SAID) を次に入力済みである必要があります。  
<http://support.openview.hp.com/entitlement/contracts>
  - b. Web ブラウザで <https://hpln.hp.com/group/sitescope> と入力します。SiteScope ユーザ・コミュニティ・ページの [CONTENT] リンクをクリックし、[Community Content for SiteScope] リンクをクリックします。  
または、次からこのページに直接アクセスすることもできます。  
<https://hpln.hp.com/group/community-content-sitescope>
2. [Community Content for SiteScope] ページで、[CONTENT] リンクをクリックして、コンテンツ・ファイルをアップロードする適切なフォルダを選択（または新しいフォルダを作成）して、 [Add content file] をクリックします。  
[Create File] ボックスで、次の動作を実行します。
  - a. ファイルの名前を入力して、ファイルの状態（ドラフト、アルファ、ベータ、安定、リリース済みなど）を選択します。
  - b. ファイルの説明を入力します。
  - c. ファイルのタイプ・オプションを選択します。
    - [Regular file] : [ブラウズ] をクリックし、アップロードするコンテンツを含むファイル（zip 形式のコンテンツ・パッケージ）を選択して、[開く] をクリックします。
    - [リンク] : ファイル・パスへのリンクを入力します。  
[保存] をクリックして、サイトにコンテンツ・ファイルをアップロードします。
3. 新しいコンテンツについてほかのユーザに通知するには、[ANNOUNCEMENTS] リンクをクリックして、アップロードされたコンテンツの詳細を追加します。製品に関するお知らせ購読しているすべてのユーザに新しいコンテンツが自動的に通知されます。

## HP Live Network からのコンテンツのダウンロード方法

次の手順で、HP Live Network コミュニティからコンテンツをダウンロードすることができます。

1. HP Live Network (<https://hpln.hp.com/group/community-content-sitescope>) の [\[Community Content for SiteScope\]](#) ページにアクセスします

このサイトにアクセスする前提条件

- HP カスタマが指定した製品の現在の保守契約でこのサイトへのフル・アクセスが可能。
- フル・アクセスには、HP Passport アカウントが必要です。また、製品の契約 ID (SAID) を次に入力済みである必要があります。

2. **[CONTENT]** リンクをクリックして、ファイルをダウンロードするフォルダを展開し、関連するファイル・リンクをクリックします。

### 注:

- また、SiteScope コミュニティ・コンテンツに関するディスカッションおよびお知らせについては、[\[Announcements\]](#) ページおよび [\[Forums\]](#) ページで確認することもできます。
- 製品のお知らせ、フォーラムのトピックの投稿、およびコンテンツ・ファイルの投稿の通知を受信するには、該当する **[Subscribe to]** リンクをクリックして、送信間隔と送信方法を選択し、**[購読する]** をクリックします。

3. ドキュメントの関連セクションの説明に従って、コンテンツ・ファイルのインポート手順を行います。
4. ダウンロード後は、コンテンツ・ファイルを使用して [\[Content\]](#) ページのダウンロードや [\[Forums\]](#) ページの投稿コメントを評価することができます。



# 第9部: ソリューション・テンプレート ト

SiteScope 提供のソリューション・テンプレートには、専用のモニタ、標準設定のメトリックとしきい値、事前のテスト、特定のアプリケーションやコンポーネントを監視するためのベスト・プラクティスといった形でさまざまな専門領域の知識が組み込まれています。

ソリューション・テンプレートを使った作業の一般的な詳細については、「[ソリューション・テンプレートのデプロイ](#)」(910ページ)を参照してください。

特定のテンプレートの設定およびデプロイの詳細については、個々のソリューション・テンプレートのヘルプを参照してください。

**注:** ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。必要なライセンスの取得の詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「ライセンス」の項を参照してください。

# 第68章: ソリューション・テンプレートのデプロイ

SiteScope ソリューション・テンプレートは、一般的なエンタープライズ・アプリケーションやネットワーク・システムを監視するために設計された、事前設定済みのモニタ・セット・テンプレートです。ソリューション・テンプレートを使用すると、標準の SiteScope モニタ・タイプとソリューション固有のモニタを組み合わせ、対象アプリケーションやシステムの可用性、パフォーマンス、状況を監視するために最適化された設定により迅速にデプロイできます。

ソリューションをデプロイすると、新しいモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に個々のソリューション・モニタが追加されます。ソリューション・テンプレートは、環境内のサーバごとにデプロイできます。ソリューション・テンプレートでシステム変数 **SERVER\_LIST** を使用すると、複数のリモート・ホストにソリューションをデプロイできます。

## アクセス方法

【テンプレート】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、【ソリューション テンプレート】コンテナを展開し、必要なテンプレートを選択します。

## 学習事項

### ソリューション・テンプレートのリスト

次の表に、SiteScope で利用可能なソリューション・テンプレートを示します。ソリューション特有のモニタ・タイプやサポートされているバージョンなど、各ソリューションの詳細については、各ソリューション・テンプレートに関する章を参照してください。

ソリューション名	詳細	対応バージョン	サポートされているプラットフォーム
「Active Directory ソリューション・テンプレート」 (920ページ)	グローバル・カテゴリの有無にかかわらず Microsoft Windows サーバ用 Microsoft ドメイン・コントローラのパフォーマンスと効率を監視します。	Windows Server 2003, 2003 R2, 2008, 2008 R2	Windows
「AIX Host ソリューション・テンプレート」	AIX ホスト・マシンのパフォーマンス、可用性、状況を監視します。	AIX 5.2, 5.3	すべて

ソリューション名	詳細	対応バージョン	サポートされているプラットフォーム
(923ページ)			
「Hadoop クラスタ監視ソリューション・テンプレート」 (926ページ)	Hadoop 分散ファイル・システム (HDFS) の状況とパフォーマンス統計, Hadoop クラスタ・インフラストラクチャの Hadoop MapReduce マスタ・ノードを監視します。	Hadoop 1.x	GNU/Linux
「HP Quality Center ソリューション・テンプレート」 (931ページ)	Windows 上と UNIX 上の HP Quality Center アプリケーション・サーバのパフォーマンス, 可用性, 状況, Oracle データベース・サーバ上の HP Quality Center ライセンスの使用状況と有効期限を監視します。	HP Quality Center Application Server 9.2, 10.x HP Quality Center Server License Server 9.2, 10.x	Windows / UNIX
「HP QuickTest Professional License Server サーバ・ソリューション」 (942ページ)	HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・アプリケーションのパフォーマンス, 可用性, 状況, およびシステムの可用性を監視します。	HP QTP License Server 7.1.0	Windows / UNIX
「HP Service Manager ソリューション・テンプレート」 (945ページ)	Windows および UNIX プラットフォーム上の HP Service Manager アプリケーション・サーバの可用性とシステム状態を監視します。	Service Manager 7.11	Windows / UNIX
「HP Vertica ソリューション・テンプレート」 (952ページ)	HP Vertica クラスタ・インフラストラクチャのパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。	Vertica Community Edition と Vertica Analytics Platform 6.0.1, 6.1, 7.0	すべて
「JBoss Application	JBoss 環境のパフォーマンス, 可用性, 状況を監視しま	JBoss 4.x, 5.x, 7.1 ~ 7.3	すべて

ソリューション名	詳細	対応バージョン	サポートされているプラットフォーム
Server ソリューション・テンプレート」 (955 ページ)	す。		
「Linux Host ソリューション・テンプレート」 (961 ページ)	Linux ホスト・マシンのパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。	Red Hat 7.x, 8.x, 9.x  Red Hat Enterprise Linux 3.x, 4.x, 5.2, 5.4, 5.5 (ES/AS)	すべて
「Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート」 (964 ページ)	Microsoft Exchange サーバのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。テンプレートには, Windows イベント・ログ・エントリ, Exchange のテスト操作と統計, システム・パフォーマンス・カウンタ, メッセージ・システムの使用統計をチェックするモニタが含まれます。	Microsoft Exchange 2007 (バージョン 8.0), 2010, 2013 Server	すべて
「Microsoft IIS ソリューション・テンプレート」 (971 ページ)	Microsoft IIS 環境のパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。	Microsoft IIS Server 6.0, 7.x, 8.0	Windows
「Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート」 (975 ページ)	次の Microsoft Lync Server 2010 Server のパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。A/V Conferencing サーバ, Archiving サーバ, Director サーバ, Edge サーバ, Front End サーバ, Lync Server Event Log, Mediation サーバ, Monitoring サーバ, Registrar サーバ。	Microsoft Lync Server 2010 サーバ	Windows

ソリューション名	詳細	対応バージョン	サポートされているプラットフォーム
「Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレート」(980ページ)	Microsoft SharePoint 2010 のパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。	Microsoft SharePoint 2010	Windows
「Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート」(984ページ)	Microsoft SQL サーバのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。	Microsoft SQL Server 2005, 2008, 2008 R2, 2012	Windows
「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート」(990ページ)	Microsoft Windows ホスト・マシンのパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。	Microsoft Windows Server 2003, 2008, 2012, Windows XP	Windows
「.NET ソリューション・テンプレート」(993ページ)	Microsoft Windows マシン上の .NET アプリケーションおよび環境のパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。	.NET 1.x, 2.x	Windows
「Oracle Database Solution Templates」(997ページ)	Oracle データベースのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。	Oracle データベース 9i, 10g, 11g	Windows / UNIX / Linux
「SAP ソリューション・テンプレート」(1003ページ)	SAP システム・コンポーネントのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。	SAP R/3 サーバ (バージョン 4.5B 以降)	Windows / Linux / Solaris
「Siebel ソリューション・テンプレート」(1007ページ)	Windows および UNIX オペレーティング・システムにインストールされた Siebel アプリケーション・サーバのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。	Siebel Application Server 6.x, 7.x, 8.x	Windows / UNIX

ソリューション名	詳細	対応バージョン	サポートされているプラットフォーム
<a href="#">「Solaris Host ソリューション・テンプレート」</a> (1016ページ)	Solaris ホスト・マシンのパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。	Solaris 9, 10	すべて
<a href="#">「VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレート」</a> (1019ページ)	SiteScope で VMware モニタからデータを収集し, HP のキャパシティ管理ソリューションである HP Service Health Optimizer (SHO) や HP のサービス中心クロス・ドメイン・レポーティング・ソリューションである Service Health Reporter (SHR) など, サポートされているレポート製品で使用するために, データを HP Operations Agent のデータ・ストアにレポートできます。	VMware VirtualCenter 2.x  VMware ESX 3.x, 4.0, 4.1  VMware ESXi 3.5, 4.0, 4.1, 5.0, 5.1  VMware ESX 2.5 via VirtualCenter 2.x  VMware ESX 3.x via VirtualCenter 3.x	vCenter サーバ: Windows XP Professional, Window Server 2003, 2003 R2, 2008, 2008 R2, 2012, 2012 R2, 仮想アプリケーション。詳細については, 『 <a href="#">VMware Compatibility Guide</a> 』 ( <a href="http://www.vmware.com/resources/compatibility">http://www.vmware.com/resources/compatibility</a> ) を参照してください。  ESX サーバ: 独自の OS
<a href="#">「VMware Host ソリューション・テンプレート」</a> (1027ページ)	VMware Host サーバ, ホスト・サーバのゲスト仮想マシン上の CPU, メモリ, ストレージ, 状態, ネットワーク・パフォーマンス, 使用統計を監視します。パフォーマンスの問題を特定せずに vCenter モニタの監視のみを行う場合は, このソリューション・テンプレートを使用します。	VMware vSphere 4.0, 4.1, 5.0, 5.1 (SSO ログインでもサポートされます), 5.5	
<a href="#">「VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレート」</a> (1031ページ)	VMware vSphere のパフォーマンスのトラブルシューティング用に VMware の公式ベスト・プラクティス・シナリオに従う一連のモニタをデプロイします。これらのモニタは, SiteScope の計算済みメト		

ソリューション名	詳細	対応バージョン	サポートされているプラットフォーム
	リックを使用して、VMware ホスト上のパフォーマンスに関する特定の問題を突き止め、問題のある ESX ホストや仮想マシンを報告します。このテンプレートは、VMware ホストでデータの収集や、全体的なパフォーマンスと可用性の監視を行う場合にも使用できます。		
<a href="#">「WebLogic ソリューション・テンプレート」</a> (1036ページ)	Oracle WebLogic アプリケーション・サーバのパフォーマンス、可用性、使用統計を監視します。	WebLogic Application Server 6.x, 7.x, 8.x, 9.x, 10.x	すべて
<a href="#">「WebSphere ソリューション・テンプレート」</a> (1042ページ)	IBM WebSphere アプリケーション・サーバのパフォーマンス、可用性、使用統計を監視します。	WebSphere Application Server 6.x, 7.x, 8.x	すべて

## タスク

### ソリューション・テンプレートのカスタマイズ方法

ソリューション・テンプレートに適合しないシステム設定もあるため、システム要件に合わせて次のようにソリューション・テンプレートをカスタマイズできます。

- ソリューション・テンプレートをテンプレート・コンテナにコピーし、システム要件に合わせて変更して、変更後のソリューション・テンプレートをデプロイする（デプロイの詳細については、下記を参照）。
- ソリューション・テンプレートをデプロイ（下記を参照）し、デプロイ後にシステムの要件に合わせて変更する。

たとえば、HP Quality Center アプリケーション・サーバ・ソリューション・テンプレートを使用して、アプリケーション・サーバとは別のホスト上にあるリポジトリのディスク変数を監視する場合、テンプレートのデプロイ後に、リポジトリのディスク使用率モニタをほかのホストを使用するように変更する必要があります。

## SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。環境内のサーバごとにソリューション・テンプレートをデプロイします。

### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。必要なライセンスの取得の詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「ライセンス」の項を参照してください。
- 各ソリューション・テンプレートの詳細については、ソリューション・テンプレートのベスト・プラクティス・ガイド（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\<solution template name>\_Best\_Practices.pdf で利用可能）を参照してください。これらのガイド（「Hadoop Cluster Monitoring」および「HP Vertica」以外）はパスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### 2. テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをグループにデプロイする方法を次から選択します。

- ユーザ・インタフェースからソリューション・テンプレートを直接デプロイできます。テンプレート・ツリーで、デプロイするソリューション・テンプレートを右クリックし、**【テンプレートのデプロイ】**を選択します。【グループの選択】ダイアログ・ボックスで、ソリューション・テンプレートをデプロイするモニタ・グループを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「**【グループの選択】ダイアログ・ボックス**」(868ページ)を参照してください。

**注:** 多数のテンプレート（テンプレート・コンテナ内でグループ化されている）を用意しているソリューションでは、グループを個別にまたは同時にデプロイできます。たとえば、Microsoft Exchange 2010 ソリューションをデプロイする場合、必要なテンプレートのみを選択し、別のサーバに分散された Exchange サーバのインストールに対し、このテンプレートをデプロイできます。複数のテンプレートを同時にデプロイする方法の詳細については、「**ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法**」(862ページ)の「複数のテンプレートのデプロイ」手順を参照してください。

- テンプレート内に定義した変数の値が含まれる CSV ファイルを使用して、ソリューション・テンプレートをデプロイできます。詳細については、「**CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ**」(862ページ)を参照してください。
- SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイし、更新できます。詳細については、「**XML ファイルを使用したテンプレートの自動デプロイ**」(875ページ)を参照してください。



3. テンプレート・デプロイメントの変数値の入力（ユーザ・インタフェースを使用したデプロイメント用のみ）

選択したソリューション・テンプレートの「デプロイメント値」ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、各ソリューション・テンプレートの「UI の説明」の項を参照してください。

4. 警告およびレポートの設定

新しく作成したソリューション・モニタに警告とレポートを設定します。  
警告の設定の詳細については、「[SiteScope 警告の設定](#)」(1231ページ)を参照してください。  
レポートの設定の詳細については、「[SiteScope レポートの作成](#)」(1311ページ)を参照してください。

5. 結果

ソリューション・テンプレートによって新しいモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に個々のソリューション・モニタが追加されます。このモニタ・グループ・コンテナには、<ソリューション・テンプレート名> on <サーバ名> の形式で名前が割り当てられます。サーバ名は、**【サーバ】** ボックスで選択したサーバです。  
これらのモニタは、SiteScope のほかのモニタと同じ方法で表示、編集、削除できます。

**注:** デプロイに失敗したモニタがある場合、モニタ名のリストを含むメッセージが、エラーを説明するメッセージと一緒に表示されます。

# UI の説明

[ソリューション テンプレート] ページ  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	ソリューション・テンプレートの名前（読み取り専用）。
詳細	ソリューション・テンプレートの説明（読み取り専用）。

# ヒント / トラブルシューティング

## 注意事項および制限事項

- [タグの検索/フィルタ] パネルは、ソリューション・テンプレート・オブジェクトのフィルタリングには使用できません。
- ソリューション・テンプレートを使用したモニタの作成中に検出されたエラーは、個々のモニタの実行時に返される状態とは関係ありません。つまり、モニタが正常に作成されていても、設定が不正確な場合や監視対象のシステムが使用できない場合があります。
- ソリューション・テンプレートのデプロイ後、関連するモニタが **[BSM への測定値レポートを無効化する]** の BSM レポーティング・レベルで定義されている場合があります。そのため、ソリューション・テンプレートのデプロイ後、モニタのレポーティング・レベルをチェックすることをお勧めします。デプロイされたモニタのレポーティング・レベルを変更する場合、[グローバル検索と置換] ウィザードを使用してレポーティング・レベル・オプションを変更できます。
- ソリューション・テンプレートでは、作成したモニタに対して自動警告やレポートは設定されません。警告定義やレポートを1つ以上作成し、ソリューション・テンプレートで作成したモニタまたはモニタ・グループに関連付ける場合もあります。

## 問題のトラブルシューティング

### • ソリューション・テンプレートの再インストール

インストールされたソリューション・テンプレートは、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > \persistence** ディレクトリにあります。このディレクトリの内容が削除されると、ソリューション・テンプレートはテンプレート・ツリーに表示されません。ソリューション・テンプレートを再インストールするには、ソリューション・テンプレート・ファイルを**永続**ディレクトリに再度コピーする必要があります。

**注:** **persistence** ディレクトリを削除すると、SiteScope 設定データと BSM の履歴データ (SiteScope が BSM と統合されている場合) がすべて永続的に削除されるため、お勧めしません。

ソリューション・テンプレート・ファイルを再インストールするには、次の手順を実行します。

- a. ソリューション・テンプレート・ファイルを次のディレクトリで特定します。 **< SiteScope のルート・ディレクトリ > \export**。
  - b. **< SiteScope のルート・ディレクトリ > \export** の内容を **< SiteScope のルート・ディレクトリ > \persistence\import** にコピーします。
  - c. ソリューション・テンプレートが再インストールされたことをチェックするには、テンプレート・ツリーの **[ソリューション テンプレート]** フォルダでそのソリューション・テンプレートを見つけます。
- ソリューション・テンプレートのインポート

- テンプレートをインポートする場合、同じテンプレート・コンテナに同じ名前のテンプレートがすでにある場合は、一意の名前に関する違反によりインポートが失敗する可能性があります。これを回避するには、既存のテンプレート・コンテナの名前を変更します。
- インポートが失敗するか、または [ソリューション テンプレート] ツリーのソリューション・テンプレートを表示できない場合、上記の「ソリューション・テンプレートの再インストール」の説明に従ってソリューション・テンプレートを回復できます。**\export** フォルダにテンプレートのサンプルも含まれている場合、前述の一意の名前に関する違反を避けるためにテンプレート・コンテナの名前を変更する必要があります。

## 第69章: Active Directory ソリューション・テンプレート

Active Directory ソリューション・テンプレートを使用して、ドメイン・コントローラのパフォーマンス、Active Directory が依存するサービス、分散 Active Directory パフォーマンスを監視できます。

Active Directory ソリューション・テンプレートでは、特定のドメイン・コントローラに対して一連のモニタがデプロイされます。これらのモニタは、Active Directory の監視のベスト・プラクティスを網羅しています。このテンプレートには、Windows イベント・ログ、サービス、LDAP、パフォーマンス・カウンタ、Active Directory レプリケーションのモニタが含まれています。

Active Directory ソリューション・テンプレートでは包括的な監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** Active Directory ソリューション・テンプレートの詳細については、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_Active\_Directory\_Best\_Practices.pdf の「SiteScope Active Directory Best Practices」ドキュメントを参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、【**ソリューション テンプレート**】を展開し、必要な Active Directory ソリューション・テンプレートを選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

Active Directory ソリューション・テンプレートは Microsoft Windows Server 2003, 2003 R2, 2008, および 2008 R2 をサポートしています。

### ソリューション・テンプレート・モニタ

- **ドメイン・コントローラのパフォーマンス:** このカテゴリの対象は、環境の各ドメイン・コントローラの低レベルの状況です。Active Directory ソリューション・テンプレートでは、ドメイン・コントローラの状況のモニタが自動的に設定されます。
- **依存するサービス:** Active Directory は、複数の重要なサービスに依存しています。これらのサービスがないと、Active Directory は反応しなくなるか、完全に機能しなくなります。Active

Directory ソリューション・テンプレートでは、Active Directory パフォーマンスを左右する重要なサービスのリストのモニタが自動的に設定されます。

- ・ **分散 Active Directory パフォーマンス** : Active Directory パフォーマンスの最も重要な側面であり、鍵となる指標は、Active Directory によってすべてのドメイン・コントローラに変更が複製される速度だと考えられます。Active Directory ソリューション・テンプレートでは、変更や更新のレプリケーションを監視およびテストするようにモニタが自動的に設定されます。

# タスク

## Active Directory ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Active Directory ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

### 1. 前提条件

ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。

### 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 \(916ページ\)](#)を参照してください。

### 3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

# UI の説明

## [Active Directory ソリューション テンプレート] ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
ReplicatingDomain Controllers	上記で選択したドメイン・コントローラのデータを複製するドメイン・コントローラのカンマ区切りリスト。

UI 要素	詳細
<b>LDAPSecurity Principal</b>	ドメイン管理者アカウントの LDAP セキュリティ・プリンシパル。Active Directory の場合、これは cn=Domain Admin User,cn=users,dc=yoursite,dc=com の形式になります。
<b>LogicalDrive</b>	該当のドメイン・コントローラで使用しているデータベースとログ・ファイルの論理ドライブ。
<b>PASSWORD</b>	上記で選択したユーザのパスワード。
<b>HostName</b>	ドメイン・コントローラのホスト名のホスト部分（完全修飾ドメイン名は含まれません）。
<b>Global Catalog</b> (グローバル・カタログを有する AD のみ)	ドメイン・コントローラがグローバル・カタログ・サーバである場合に選択します。
<b>SERVER_LIST</b>	監視するドメイン・コントローラ。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。
<b>サイレント・デプロイメント</b>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt; \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注</b> : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>リモート・サーバのテスト</b> (AD 2008 R2 のみ)	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>

# 第70章: AIX Host ソリューション・テンプレート

AIX Host ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ（AIX ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテスト）をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、SiteScope でサポートされているバージョンの AIX がサポートされます。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「システム要件」を参照してください。

UNIX リソース・モニタの場合、監視対象サーバの 3 つの異なる測定値のデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、[「サーバ中心のレポートの作成」\(1357ページ\)](#)を参照してください。

**ヒント:** 必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、UNIX リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。

AIX Host ソリューション・テンプレートは包括的な AIX オペレーティング・システムの監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** AIX Host ソリューション・テンプレートの詳細については、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_OS\_Best\_Practices.pdf の「SiteScope Operating System Host Best Practices」ドキュメントを参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

## アクセス方法

[**テンプレート**] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[**ソリューション テンプレート**] を展開し、[**AIX Host**] を選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

AIX Host ソリューション・テンプレートは、AIX 5.2 および 5.3 をサポートしています。

### ソリューション・テンプレート・モニタ

AIX Host ソリューション・テンプレートでは、AIX のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とする

モニタがデプロイされます。

- CPU の状態と使用率の詳細
- メモリの状態と使用率の詳細
- ファイル・システムの状態と使用率の詳細

## タスク

### Active Directory ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、AIX Host ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

**注:** AIX Host ソリューション・テンプレートでは、対象ホストごとに UNIX リソース・モニタがデプロイされます。これは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要となる補足モニタです。

#### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- SiteScope サーバから対象 AIX ホストに接続できる必要があります。
- 対象サーバを UNIX リモート・マシンとして SiteScope に追加し、UNIX リモート・テストにパスする必要があります（[\[リモート サーバ\]](#) > [\[UNIX リモート サーバ\]](#)）。詳細については、[「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定」](#) (499ページ)を参照してください。

#### 注:

- サポートされている AIX オペレーティング・システムが SiteScope サーバで実行されている場合、そのサーバ自体を監視することもできます。
- このテンプレートでは、SiteScope でサポートされているバージョンの AIX がサポートされます。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「システム要件」を参照してください。

#### 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする



ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、  
「[SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法](#)」(916ページ)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## UI の説明

[AIX Host ソリューション テンプレート] ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。UNIX 接続プロファイルを作成する手順については、「 <a href="#">リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定</a> 」(499ページ)を参照してください。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。  標準設定値 :選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。  注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。  標準設定値 :選択されている

# 第71章: Hadoop クラスタ監視ソリューション・テンプレート

Hadoop クラスタ監視ソリューション・テンプレートを使用して、Hadoop 分散ファイル・システム（HDFS）の状況およびパフォーマンス統計と、Hadoop クラスタ・インフラストラクチャの Hadoop MapReduce マスタ・ノードを監視できます。

Hadoop クラスタ監視ソリューション・テンプレートでは、特定の Hadoop クラスタ・ホストに対して一連のモニタがデプロイされます。これらのモニタは、大規模かつ急速に増大するデータを管理し、データ・ウェアハウスや大量のクエリを必要とする他のアプリケーションで使用する場合にクエリの高速パフォーマンスを提供できるよう設計されています。

テンプレートには、Hadoop、UNIX リソース、メモリ、マルチログ・モニタが含まれています。

Hadoop クラスタ監視ソリューション・テンプレートでは包括的な監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** Hadoop クラスタ監視ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Hadoop Best Practices』ドキュメント（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_Hadoop\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。

## アクセス方法

[**テンプレート**] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[**ソリューション テンプレート**] > [**Hadoop クラスタ監視**] を展開し、必要なテンプレート（**HDFS** または **MapReduce**）を選択します。

## 詳細な内容

### 対応バージョン

Hadoop クラスタ監視ソリューション・テンプレートでは、GNU/Linux で Hadoop 1.x をサポートしています。

## タスク

Hadoop クラスタ監視ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Hadoop クラスタ監視ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について

て説明します。

1. 前提条件

ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。

2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 \(916ページ\)](#)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

# UI の説明

HDFS（Hadoop 分散ファイル・システム）ソリューション・テンプレート・ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
HDFS マスタ・ノード	HDFS マスタ・ノードをホストするサーバの名前。 次の形式で URL を入力します。 <code>service:jmx:rmi:///jndi/rmi://&lt;host&gt;:&lt;port&gt;/jmxrmi</code>
JMX ドメイン	Hadoop 統計を収集するために使用されるドメイン（任意指定）。このフィールドを空白のままにすると、標準設定の Hadoop ドメイン・フィルタが使用されます。
JMX ポート	HDFS マスタ・ノード用に設定された JMX ポート。
JMX ユーザ名	HDFS マスタ・ノードの JMX に接続するためのログイン（設定されている場合）。
JMX パスワード	

UI 要素	詳細
	HDFS マスタ・ノードの JMX に接続するためのパスワード（設定されている場合）。
リモート・ユーザ名	HDFS マスタ・ノードのホストのログイン名。
パスワード	HDFS マスタ・ノードのホストのパスワード。
頻度	モニタ実行頻度（秒）。 標準設定値 : 600
HDFS ログ・フォルダ	HDFS ログ・フォルダへのパス。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうか検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている
リモート・サーバのテスト	テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。 標準設定値 : 選択されていない

### MapReduce ソリューション・テンプレート・ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>MapReduce マスタ・ノード</b>	Hadoop MapReduce マスタ・ノードをホストするサーバの名前。 次の形式で URL を入力します。  service:jmx:rmi:///jndi/rmi://<host>:<port>/jmxrmi
<b>JMX ドメイン</b>	Hadoop 統計を収集するために使用されるドメイン（任意指定）。このフィールドを空白のままにすると、標準設定の Hadoop ドメイン・フィルタが使用されます。
<b>JMX ポート</b>	Hadoop MapReduce マスタ・ノード用に設定された JMX ポート。
<b>JMX ユーザ名</b>	Hadoop MapReduce マスタ・ノードの JMX に接続するためのログイン（設定されている場合）。
<b>JMX パスワード</b>	Hadoop MapReduce マスタ・ノードの JMX に接続するためのパスワード（設定されている場合）。
<b>リモート・ユーザ名</b>	MapReduce マスタ・ノードのホストのログイン名。
<b>パスワード</b>	MapReduce マスタ・ノードのホストのパスワード。
<b>頻度</b>	モニタ実行頻度（秒）。  標準設定値 : 600
<b>MapReduce ログ・フォルダ</b>	MapReduce マスタ・ノードのログ・フォルダへのパス。
<b>サイレント・デプロイメント</b>	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。  標準設定値 : 選択されていない
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうか検証されます。  注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間

UI 要素	詳細
	<p>が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後，テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので，引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>

## 第72章: HP Quality Center ソリューション・テンプレート

HP Quality Center ソリューション・テンプレートは、HP Quality Center アプリケーション・サーバの可用性、HP Quality Center データベース・サーバのライセンスのステータスをテストする、標準設定のメトリックで設定された一連のモニタをデプロイするために使用できるテンプレートです。

HP Quality Center ソリューション・テンプレートは、包括的な HP Quality Center による監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織がアプリケーションのエキスパートである必要はありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

### 注:

- HP Quality Center Application Server for Windows は、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
- HP Quality Center ソリューション・テンプレートの詳細については、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_HP\_QC\_Best\_Practices.pdf の「SiteScope Quality Center Best Practices」ドキュメントを参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで【**ソリューション テンプレート**】を展開し、必要な HP Quality Center ソリューション・テンプレートを選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

HP Quality Center ソリューション・テンプレートでサポートされているバージョンは次のとおりです。

- HP Quality Center Application Server 9.2, 10.x
- HP Quality Center Server License Server 9.2, 10.x

### ソリューション・テンプレート・モニタ

HP Quality Center ソリューションには、次の主要コンポーネントを監視するソリューション・テンプレ

レートが含まれます。

- **HP Quality Center Application Server for UNIX/Windows** : このソリューション・テンプレートは、アプリケーションがインストールされているオペレーティング・システムの HP Quality Center アプリケーション・サーバの可用性とパフォーマンスを監視するために使用します。
- **HP Quality Center 9.2/10.0 License Status** : このソリューション・テンプレートは、HP Quality Center データベース・サーバでの HP Quality Center のライセンス使用状況と有効期限を監視するために使用します（ソリューション・テンプレートは Oracle および Microsoft SQL データベースで認定されています）。

**注:** ソリューション・テンプレートでは、Ping モニタを使用してシステムの可用性を監視します。ネットワークで Ping トラフィックがブロックされている場合は、代わりにポート・モニタを使用します。

### Quality Center のサードパーティ・アプリケーションの監視

Quality Center がデプロイされているアプリケーション・サーバ、使用されるデータベースなど、Quality Center のサードパーティ・コンポーネントの監視には、他の SiteScope ソリューション・テンプレート、モニタ、あるいはその両方を使用することをお勧めします。

Quality Center のサードパーティ・コンポーネントの監視に推奨されるソリューションの詳細については、次の表を参照してください。

#### データベース・サーバの監視

データベース・タイプ	推奨ソリューション
Oracle	<a href="#">「Oracle Database Solution Templates」 (997ページ)</a>
Microsoft SQL Server	<a href="#">「Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート」 (984ページ)</a>
LDAP	「LDAP モニタ」

#### アプリケーション/Web サーバの監視

アプリケーション/Web サーバのタイプ	推奨ソリューション
Apache サーバ	「Apache サーバ・モニタ」
JBoss	<a href="#">「JBoss Application Server ソリューション・テンプレート」 (955ページ)</a>
Microsoft IIS	<a href="#">「Microsoft IIS ソリューション・テンプレート」 (971ページ)</a> 「Microsoft IIS サーバ・モニタ」



アプリケーション/Web サーバのタイプ	推奨ソリューション
WebLogic 6.x-8.x, 9.x-10.x	<a href="#">「WebLogic ソリューション・テンプレート」 (1036ページ)</a>
WebSphere 5.x, 6.x	<a href="#">「WebSphere ソリューション・テンプレート」 (1042ページ)</a>
JMX アクセス (JSR 160) をサポートするその他の Web/アプリケーション・サーバ	「JMX モニタ」

## タスク

### HP Quality Center ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、変数を入力する手順と HP Quality Center ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。

#### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- 次の情報がわかっている。

ソリューション・テンプレート名	要件
HP Quality Center Application Server for Windows	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope サーバから Quality Center コンポーネントにアクセスできる。</li> <li>次の情報がわかっている。 <ul style="list-style-type: none"> <li>Quality Center アプリケーションのバージョン (9.2, 10.0)</li> <li>アプリケーション・サーバの完全なホスト名とログイン資格情報</li> <li>Quality Center リポジトリ・ディスクまたはリポジトリの場所 (別のホストにある場合)</li> </ul> </li> </ul>

ソリューション・テンプレート名	要件
	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ ログイン URL で使用されるポート（通常は指定なし。つまりポート 80 が使用される）</li> <li>• このソリューション・テンプレートは UNIX プラットフォームにインストールされている SiteScope ではサポートされません。</li> </ul>
HP Quality Center Application Server for UNIX	<ul style="list-style-type: none"> <li>• SiteScope サーバから Quality Center コンポーネントにアクセスできる。</li> <li>• 次の情報がわかっている。 <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ Quality Center アプリケーションのバージョン（9.2, 10.0）</li> <li>◦ UNIX オペレーティング・システムのタイプ</li> <li>◦ アプリケーション・サーバの完全なホスト名とログイン資格情報</li> <li>◦ System file system</li> <li>◦ Quality Center リポジトリ・ディスクまたはリポジトリの場所（別のホストにある場合）</li> <li>◦ ログイン URL で使用されるポート（通常は指定なし。つまりポート 80 が使用される）</li> <li>◦ UNIX オペレーティング・システムで Quality Center アプリケーションを実行する java プロセス・コマンドの名前（"ps -ef   grep java" を使用できる）。</li> </ul> </li> </ul>
HP Quality Center 9.2/10.0 License Status :	<ul style="list-style-type: none"> <li>• SiteScope サーバから Quality Center 9.2 または 10.0 コンポーネントにアクセスできる。</li> <li>• Quality Center データベースに関する次の情報がわかっている。 <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ データベースのホスト名</li> <li>◦ タイプ（Oracle, Microsoft SQL, MSDE 2000）</li> <li>◦ ドライバ（SiteScope に組み込まれているデータベース・ドライバの可能性あり）</li> <li>◦ データベース接続 URL</li> </ul> </li> </ul>

## 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、

[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」\(916ページ\)](#)を参照してください。

## 3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## UI の説明

HP Quality Center Application Server for Windows

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
Application server host name	Quality Center アプリケーション・サーバのホスト名。
Application server user name	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのログイン・ユーザ名。
Application server password	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのパスワード。
System disk	Quality Center アプリケーション・サーバがインストールされている論理ディスク・ドライブ。 標準設定値 : C
Repository disk	Quality Center リポジトリがインストールされている論理ディスク・ドライブ。リポジトリが別のホストにある場合は、システム・ディスク・ドライブを入力し、テンプレートをデプロイした後にリポジトリ・ディスク使用率モニターを変更します。 標準設定値 : D
Site Administration path	Quality Center Site Administration の URL のサフィックス。 標準設定値 : qcbn/SiteAdmin.htm（Quality Center バージョン 9.x の場合は sabin に変更します）。
Application port	Quality Center アプリケーションへのログイン URL で使用されるポート。通常はポートが指定されません。つまり、ポート 80 が使用されます。 標準設定値 : 80
	アプリケーション URL から応答を得るのに妥当な往復時間のエラー・ステータ

UI 要素	詳細
<b>Maximum round trip time (milliseconds)</b>	スしきい値として使用されるミリ秒の値。 標準設定値 : 1500 ミリ秒
<b>Quality Center service name</b>	Quality Server サービスの名前。 標準設定値 : HP Quality Center。Quality Center バージョン 9.x の場合は、これを Mercury Quality Center に変更します。
<b>サイレント・デプロイメント</b>	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている
<b>リモート・サーバのテスト</b>	テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。 標準設定値 : 選択されていない

## HP Quality Center Application Server for UNIX

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>Application server host name</b>	Quality Center アプリケーション・サーバのホスト名。

UI 要素	詳細
<b>Application server user name</b>	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのログイン・ユーザ名。
<b>Application server password</b>	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのパスワード。
<b>UNIX operating system</b>	UNIX オペレーティング・システムのタイプ。Solaris, Red Hat Enterprise Linux など。UNIX オペレーティング・システム・タイプのリストは、[新規 UNIX リモート・サーバ] / [UNIX リモート・サーバの編集] ダイアログ・ボックスの [オペレーティング システム] フィールドに表示されます。 <b>標準設定値</b> : Linux
<b>System file system</b>	Quality Center アプリケーション・サーバがインストールされているファイル・システム。
<b>Repository file system</b>	Quality Center リポジトリがあるファイル・システム。リポジトリが別のホストにある場合は、システム・ディスクのファイル・システムを入力し、テンプレートをデプロイした後にリポジトリ・ディスク使用率モニタを変更します。
<b>Site Administration path</b>	Quality Center Site Administration の URL のサフィックス。 <b>標準設定値</b> : qcbn/SiteAdmin.htm (Quality Center バージョン 9.x の場合は sabin に変更します)。
<b>Application port</b>	Quality Center アプリケーションへのログイン URL で使用されるポート。通常はポートが指定されません。つまり、ポート 80 が使用されます。 <b>標準設定値</b> : 80
<b>Maximum round trip time (milliseconds)</b>	アプリケーション URL から応答を得るのに妥当な往復時間のエラー・ステータスしきい値として使用されるミリ秒の値。 <b>標準設定値</b> : 1500 ミリ秒
<b>Quality Center process unique name</b>	システムで実行されているほかのプロセスと Quality Center の java プロセスを識別するために使用する名前。Quality Center プロセス名、または UNIX オペレーティング・システムで Quality Center アプリケーションを実行する java プロセス・コマンドの一意の部分を使用できます (ps -ef   grep java を使用できます)。

UI 要素	詳細
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注</b> : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>

HP Quality Center 9.2/10.0 License Status :

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
Site Administration database host	Quality Center Site Administration がインストールされているホスト名。
データベース ドライバ	<p>データベースへの接続に使用するデータベース・ドライバ。カスタム・ドライバを使用する場合は、ドライバを <b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\WEB-INF\lib</b> ディレクトリにインストールする必要があります。</p> <p><b>標準設定値</b> : com.inet.ora.OraDriver (Oracle データベースをサポート)。 Microsoft SQL の場合、次を使用します :com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver :</p>
Connection URL	Quality Center データベース接続 URL。

UI 要素	詳細
(full)	<p>例 :</p> <p>jdbc:inetora:[host]:[port]:[sid] ( Oracle データベースの場合)</p> <p>jdbc:mercury:sqlserver://labm1qcrnd05.devlab.ad:1433;DatabaseName=May22_2008_db (Microsoft SQL の場合)</p>
Connection URL (part 0-3)	<p>接続 URL がセミコロン (;) で区切られた値で構成されている場合は、全体を [Connection URL (full)] フィールドに入力し、各部分を別々のフィールドに入力します。</p> <p>例 :</p> <p>Connection URL (part 0) = jdbc:mercury:sqlserver://labm1qcrnd05.devlab.ad:1433</p> <p>Connection URL (part 1) = DatabaseName=May22_2008_db</p> <p>セミコロンで区切られていない場合は、次のように [Connection URL (part 0)] に接続 URL 全体を入力します。</p> <p>Connection URL (part 0) = jdbc:inetora:[host]:[port]:[sid]</p> <p>注 : このように分割するのは、接続 URL がスクリプト・モニタのパラメータとして使用され、セミコロン (;) 文字がセキュリティ上の理由で許可されないためです。</p>
Database user	<p>データベースのクエリに必要なユーザ名。</p> <p>指定するユーザ名には、Site Administration データベースの ADMIN と SESSION_LICENSE テーブルで SELECT クエリを実行する権限が必要です。</p>
データベース パスワード	<p>特定のユーザ名でデータベースにログオンし、SELECT クエリを実行するために必要なパスワード。</p>
Database password - encrypted	<p>暗号化形式のデータベース・パスワード。暗号化されたパスワードを取得するには、パスワードに対して次のツールを実行します。</p> <p>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\tools\AutoDeployment\encrypt_password.bat &lt;password&gt;</p> <p>UNIX プラットフォームの場合は、encrypt_password.sh &lt;パスワード&gt;を実行します。</p> <p>注 : 暗号化パスワードは、スクリプト・モニタのパラメータとして使用され、セキュリティ上の理由から必須です。</p>
Admin table	<p>Quality Center ADMIN テーブルの名前。</p>

UI 要素	詳細
<b>name</b>	標準設定値 : ADMIN (Oracle データベースをサポート)。Microsoft SQL データベースの場合は <b>td.ADMIN</b> を使用します。
<b>Session license table name</b>	Quality Center セッション・ライセンス・テーブルの名前。 標準設定値 : SESSION_LICENSE (Oracle データベースをサポート)。Microsoft SQL データベースの場合は <b>td.SESSION_LICENSE</b> を使用します。
<b>SiteScope expiration error status (days remaining)</b>	ライセンス有効期限のエラーしきい値。ライセンス有効期限のステータスがデプロイされた各モニタは、ライセンスの有効期限の残り日数がここで指定した数より少なくなるとエラー・ステータスになります。 標準設定値 : 7 日
<b>SiteScope expiration warning status (days remaining)</b>	ライセンス有効期限の警告しきい値。ライセンス有効期限のステータスがデプロイされた各モニタは、ライセンスの有効期限の残り日数がここで指定した数より少なくなると警告ステータスになります。 標準設定値 : 30 日
<b>Number of free licenses for error</b>	ライセンス使用状況のエラーしきい値。ライセンス使用状況のステータスがデプロイされた各モニタは、使用可能なライセンスの数がここで指定した数より少なくなるとエラー・ステータスになります。 標準設定値 : 5
<b>Number of free licenses for warning</b>	ライセンス使用状況の警告しきい値。ライセンス使用状況のステータスがデプロイされた各モニタは、使用可能なライセンスの数がここで指定した数より少なくなると警告ステータスになります。 標準設定値 : 20
<b>サイレント・デプロイメント</b>	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。



UI 要素	詳細
	<p><b>注:</b> このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値:</b> 選択されている</p>

**注:**

- Quality Center ライセンスは、XML 形式で Site Administration データベースの ADMIN テーブルに格納されます。これには、さまざまな Quality Center モジュール（不具合、要件など）の Quality Center ライセンスの有効期限およびクォータに関する情報が含まれています。この XML 形式は、Quality Center 9.2 と Quality Center 10.0 では異なります。SESSION\_LICENSE という名前の別のテーブルには、ログインした各セッションのリアルタイムのエントリと使用されているライセンス・タイプが表示されます。
- ライセンスの使用状況と有効期限を計算するために、SiteScope ソリューション・テンプレートではスクリプト（Microsoft Windows プラットフォームの場合は **runQCLicenseTool.bat**、UNIX プラットフォームの場合は **runQCLicenseTool.sh**）を実行するスクリプト・モニタが使用されます。スクリプトによって Quality Center データベースに照会され、要求したライセンス・タイプに関する次の情報がスクリプト・モニタに返されます。  
Total=<総割り当て額>;used=<このタイプの現在の使用量>;free=<総空き容量>;exp\_days=<ライセンスが期限切れになるまでの日数>。

## トラブルシューティングおよび制限事項

### 内容の照合エラー

ソリューション・テンプレートをデプロイした後に、モニタで**内容の照合エラー**が発生した場合、使用している Quality Center ではこのライセンス・タイプがサポートされていない可能性があります。

- その場合は、サポートされていないモニタを削除します。
- モニタがサポートされている場合は、  
<SiteScope のルート・ディレクトリ>\scripts\qc\_license\_tool.log にあるログ・ファイルを確認してください。

デバッグするためにログ・ファイルを設定するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\conf\ems\tools\conf\core\Tools\log4j\PlainJava\log4j.properties を開いて、

次のように設定します。

```
loglevel=DEBUG
```

## 第73章: HP QuickTest Professional License Server サーバ・ソリューション

HP QuickTest Professional License Server ソリューション・テンプレートは、HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・アプリケーションおよびシステム可用性をテストする標準設定のメトリックで設定された一連のモニタをデプロイする場合に使用できるテンプレートです。

このソリューション・テンプレートは、SiteScope ユーザまたは IT 組織によるアプリケーションの専門知識を必要としない包括的な HP QuickTest Professional License Server モニタリングを提供します。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

### 注:

- HP QuickTest Professional License Server ソリューション・テンプレートは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
- HP QuickTest Professional License Server ソリューション・テンプレートの詳細については、**<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_HP\_QC\_Best\_Practices.pdf** の「SiteScope Quality Center and QuickTest Professional License Server Best Practices」ドキュメントを参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで【**ソリューション テンプレート**】を展開して、HP QuickTest Professional License Server ソリューション・テンプレートを選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

HP QuickTest Professional License Server サーバ・ソリューションは HP QTP License Server 7.1.0 をサポートします。

# タスク

## HP QuickTest Professional License Server サーバ・ソリューションのデプロイ方法

このタスクでは、変数を入力する手順と HP QuickTest Professional License Server ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。

### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- 次の情報がわかっている。
  - SiteScope サーバから HP QuickTest Professional ライセンス・サーバにアクセスできる。
  - HP QuickTest Professional ライセンス・サーバのホスト名とログイン資格情報がわかっている。
  - このソリューション・テンプレートは UNIX プラットフォームにインストールされている SiteScope ではサポートされません。

### 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」\(916ページ\)](#)を参照してください。

### 3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

# UI の説明

## HP QuickTest Professional License Server

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
QTP license	HP QuickTest Professional ライセンス・サーバのホスト名。

UI 要素	詳細
server host name	
QTP license server user name	HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・システム・ログインのユーザ名。
QTP license server password	HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・システム・ログインのパスワード。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注</b> : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>

## 第74章: HP Service Manager ソリューション・テンプレート

SiteScope の HP Service Manager ソリューション・テンプレートでは、Windows および UNIX プラットフォーム上の HP Service Manager アプリケーション・サーバの可用性とシステム状態を監視し、トラブルシューティングできます。HP Service Manager のロード・バランサ状態と共有メモリの使用率を測定し、致命的エラーがないかログを監視します。水平拡張モードの HP Service Manager の監視にも使用できます。

HP Service Manager ソリューション・テンプレートは包括的な監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定とデプロイにかかる時間を短縮し、リアルタイムのパフォーマンス・ボトルネックと長期的な傾向のどちらの特定にも役立ちます。

**注:** HP Service Manager ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Service Manager Best Practices』ドキュメント（<[SiteScope のルート・ディレクトリ](#)>[\sisdocs\pdfs\SiteScope\\_HP\\_SM\\_Best\\_Practices.pdf](#)）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで【**ソリューション テンプレート**】を展開して、必要な HP Service Manager ソリューション・テンプレートを選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

HP Service Manager ソリューション・テンプレートでは、Service Manager 7.11 がサポートされています。

### ソリューション・テンプレート・モニタ

HP Service Manager ソリューション・テンプレートは、Windows および UNIX プラットフォーム上の HP Service Manager サーバのパフォーマンスと状況を監視対象とする動的なモニタのセットを作成します。モニタの詳細については、『SiteScope HP Service Manager Server Best Practices』ドキュメントを参照してください。

# タスク

## HP Service Manager ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、HP Service Manager ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- HP Service Manager ソリューション・テンプレートがサポートするのは Service Manager 7.11 のみです。
- テンプレートのデプロイ時、監視対象のプロセスはすべて起動し、稼動している必要があります。SiteScope が対象モニタを作成しようとしたときにプロセスが検出されない場合、「カウンタが選択されていません」というエラーが表示され、モニタが作成されません。  
**回避策:** 稼動していないプロセスがある場合、テンプレートを独自のテンプレート・コンテナにコピーし、プロセス・モニタを削除できます。後でプロセス・モニタを手動で作成するか、プロセス・モニタのみが含まれるテンプレートの別のコピーをデプロイします。
- HP Service Manager for Windows ソリューション・テンプレートの場合、HP Service Manager がインストールされている Microsoft Windows リモート・サーバ上で **sm-lbstatus-win-ssh.bat** および **sm-shm-win-ssh.bat** スクリプトを実行する必要があります。詳細については、次のステップを参照してください。

**注:** HP Service Manager for UNIX ソリューション・テンプレートは < **SiteScope のルート・ディレクトリ** > /scripts.remote にある **sm-shm.txt** および **sm-lbstatus.txt** ファイルを使用して、リモート Service Manager UNIX ホスト上でコマンドを実行します。

- ### 2. sm-lbstatus-win-ssh.bat および sm-shm-win-ssh.bat スクリプトの実行 (Windows 用 HP Service Manager 向け)
- a. SSH サーバ (OpenSSH) をインストールして設定します。詳細については、「[リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法](#)」(532ページ)を参照してください。
  - b. SiteScope がインストールされているマシンで、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > \tools ディレクトリにある **RemoteNTSSH.zip** ファイルを検索します。監視対象のリモート Service Manager ホスト上で **RemoteNTSSH.zip** ファイルを展開します。SiteScope がリ

モート・サーバにアクセスするために使用するアカウントのホーム・ディレクトリの中のスクリプト・サブディレクトリに、zip ファイルの内容を入れます（UNIX および Windows-Windows SSH のみ）。例 : home/sitescope/scripts

注: Windows プラットフォームでは、ホーム・ディレクトリへのパスは、個々の SSH サーバに依存します。たとえば、Cygwin SSH サーバを C:\Cygwin にインストールする場合、管理者ユーザ用ホーム・ディレクトリへの標準設定パスは、C:\Cygwin\home\Administrator となります。詳細については、ご使用の SSH サーバのマニュアルを参照してください。

- c. SiteScope がインストールされているマシンで、<SiteScope のルート・ディレクトリ> \tools\ServiceManager ディレクトリにある SM\_Scripts\_win\_ssh.zip というファイルを見つけます。リモート監視対象の Service Manager ホスト上のファイルを、SiteScope が使用するアカウントのホーム・ディレクトリ内のスクリプト・ディレクトリに解凍します。（その zip は sm-lbstatus-win-ssh.bat および sm-shm-win-ssh.bat ファイルを含みます。）両方のスクリプトに実行権限があることを確認します。Service Manager を水平拡張モードで実行している場合、これをすべてのシステムで繰り返す必要があります。
  - d. Service Manager ログ・フォルダを共有します。logs フォルダを右クリックし、[プロパティ] > [共有] を選択します。[このフォルダを共有する] を選択し、[共有名] を入力します。SiteScope モニタがそのマシン上でモニタの実行に使用するユーザに共有権限を設定し、[OK] をクリックします。
3. ソリューション・テンプレートをデプロイする
- ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 \(916ページ\)](#)を参照してください。
4. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）
- 次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

UI の説明

HP Service Manager for Windows

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
SM installation partition	HP Service Manager がインストールされているディスク・ドライブ。 標準設定値 : C
Application	アプリケーション・サーバ・ホストの名前。

UI 要素	詳細
server host name	
ユーザ名	このプロファイルを使用してアプリケーション・サーバにアクセスするためのログイン名。
パスワード	このユーザのアプリケーション・サーバ・ログイン・パスワード。
Installation path	HP Service Manager バイナリが実行されているディレクトリへのパス。 標準設定値 : C:\Program Files\HP\Service Manager 7.11\Server\RUN
ログ・ファイルのパス	HP Service Manager の <b>\logs</b> ディレクトリへの共有パス。 例 : \\<HP Service Manager のホスト名>\logs
CPU error threshold	CP エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 90
CPU warning threshold	CPU 警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 80
Memory error threshold	メモリ・エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 2202012 KB
Memory warning threshold	メモリ警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 1,782,580 KB
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間



UI 要素	詳細
	が遅くなります。 <b>標準設定値</b> :選択されている
<b>リモート・サーバのテスト</b>	テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。 <b>標準設定値</b> :選択されていない

## HP Service Manager for UNIX

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>Application server host name</b>	アプリケーション・サーバ・ホストの名前。
<b>ユーザ名</b>	このプロファイルを使用してアプリケーション・サーバにアクセスするためのログイン名。
<b>パスワード</b>	このユーザのアプリケーション・サーバ・ログイン・パスワード。
<b>UNIX operating system</b>	HP Service Manager が実行されている UNIX オペレーティング・システム。
<b>UNIX connection method</b>	UNIX オペレーティング・システムへの接続に使用する方法。
<b>Shell prompt</b>	リモート・システムがコマンドを処理できるときのプロンプト出力（Telnet および Rlogin 接続方法のみ）。
<b>Installation path</b>	HP Service Manager バイナリが実行されているディレクトリへのパス。
<b>CPU error threshold</b>	CP エラーを起動するためのしきい値。 <b>標準設定値</b> : 90
<b>CPU warning</b>	CPU 警告を起動するためのしきい値。

UI 要素	詳細
threshold	標準設定値 : 80
Memory error threshold	メモリ・エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 2202012 KB
Memory warning threshold	メモリ警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 1,782,580 KB
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている
リモート・サーバのテスト	テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。 標準設定値 : 選択されていない

## ヒント / トラブルシューティング

### 一般的なヒント / 制限事項

HP Service Manager を水平拡張モードで実行している場合、HP Service Manager ソリューション・テンプレートをすべてのシステムでデプロイして設定する必要があります。

### カウンタが選択されていない

テンプレートのデプロイ時、監視対象のプロセスはすべて起動し、稼動している必要があります。「カウンタが選択されていません」というエラーが表示された場合、停止しているプロセスがあるこ

とを示します。この問題を解決するには、テンプレートのコピーを作成し、エラーが発生したモニタを削除してからテンプレートをデプロイします。

Ping トラフィックがブロックされている

ソリューション・テンプレートでは、Ping モニタを使用してシステムの可用性を監視します。ネットワークで Ping トラフィックがブロックされている場合、ポート・モニタを使用し、[グローバル検索と置換] を使用して依存関係を Ping モニタからポート・モニタに置き換えます。

# 第75章: HP Vertica ソリューション・テンプレート

Vertica クラスタ・インフラストラクチャの異なる側面を監視するために HP Vertica ソリューション・テンプレートを使用できます。

HP Vertica ソリューション・テンプレートでは、特定の Vertica クラスタに対して一連のモニタがデプロイされます。これらのモニタは、大規模かつ急速に増大するデータを管理し、データ・ウェアハウスや大量のクエリを必要とする他のアプリケーションで使用する場合にクエリの高速パフォーマンスを提供できるよう設計されています。

Vertica は、SNMP トラップ、システム・テーブル、ログ・ファイルを使用して監視できます。

このテンプレートには、HP Vertica JDBC と SNMP トラップ・モニタが含まれています。

HP Vertica ソリューション・テンプレートは包括的な監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** HP Vertica ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope HP Vertica Best Practices』ドキュメント（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_Vertica\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。

## アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで【**ソリューション テンプレート**】を展開して、**HP Vertica** ソリューション・テンプレートを選択します。

## 詳細な内容

### 対応バージョン

HP Vertica ソリューション・テンプレートは、Vertica Community Edition と Vertica Analytics Platform 6.0.1, 6.1, 7.0 をサポートしています。

## タスク

### HP Vertica ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、HP Vertica ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

1. 前提条件

ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。

2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 \(916ページ\)](#)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

UI の説明

[HP Vertica ソリューション テンプレート] ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
データベース	Vertica データベース・サーバの名前。
ホスト	ホスト名。
ポート	Vertica データベース・サーバへのアクセス時に SiteScope が使用するポート。
ドライバ	このモニタで使用する Vertica JDBC ドライバの名前。 標準設定値 : com.vertica.jdbc.Driver
Username	Vertica データベース・サーバへのアクセス時に SiteScope が使用するユーザ名。
パスワード	Vertica データベース・サーバへのアクセス時に使用するパスワード。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレ

UI 要素	詳細
	<p>ト・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注</b>：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>

## 第76章: JBoss Application Server ソリユー ション・テンプレート

JBoss Application Server ソリユーション・テンプレートを使用して、JBoss アプリケーション・サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテストする、標準設定のメトリックで設定された一連のモニタをデプロイできます。

JBoss Application Server ソリユーション・テンプレートでは包括的な JBoss 監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識はありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** JBoss ソリユーション・テンプレートの詳細については、『SiteScope JBoss Best Practices』ドキュメント（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_JBoss\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリユーション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【テンプレート】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、【ソリユーション テンプレート】を展開し、必要な JBoss ソリユーション・テンプレートを選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

JBoss Application Server ソリユーション・テンプレートでは、JBoss Application Server のバージョン 4.x, 5.x, 7.1 ~ 7.3 がサポートされています。

JBoss AS 7.1 ~ 7.3 ソリユーション・テンプレートでは、Red Hat JBoss Enterprise Application Platforms 6.1.0 と 6.2.0 もサポートされています。

### ソリユーション・テンプレート・モニタ

JBoss Application Server ソリユーション・テンプレートを使用すると、JBoss アプリケーション・サーバのパフォーマンスと状況を監視対象とするモニタのセットが動的に作成されます。正確なモニタ・セットは、ソリユーション・テンプレートのデプロイ時に選択したエンティティにより異なります。モニタの詳細については、『SiteScope JBoss Application Server Best Practices』ドキュメントを参照してください。

# タスク

## JBoss Application Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、JBoss Application Server ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- 収集する JMX 統計情報（JMX インスタンスのホスト名とポートなど）の URL と、JMX のユーザ名およびパスワードを把握しておく必要があります。
- SiteScope と監視対象サーバは、同じホスト上で実行できます。
- SiteScope で監視できるように、JBoss を特定の方法で開始する必要があります。詳細については、次のステップを参照してください。

### 2. JBoss の開始

- JBoss 4.x のみ：

SiteScope で JBoss を監視するには、JBoss JVM の次のオプションを指定します。

```
-Dcom.sun.management.jmxremote
-Dcom.sun.management.jmxremote.port=12345
（他のポートもちろん使用できますが、その場合は ST のデプロイメントで指定する必要があります）
-Dcom.sun.management.jmxremote.ssl=false
-Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate=false
-Djboss.platform.mbeanserver
-Djavax.management.builder.initial=org.jboss.system.server.jmx.MBeanServerBuilderImpl
```

次のバッチ・ファイルを使用して、この指定を実行できます。

```
@echo off
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Dcom.sun.management.jmxremote.port=12345
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate=false
```



```
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Dcom.sun.management.jmxremote.ssl=false
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -
Djavax.management.builder.initial=org.jboss.system.server.jmx.MBeanServerBuilderImpl
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Djboss.platform.mbeanserver
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Dcom.sun.management.jmxremote
call run.bat -b my-jboss-host
```

**注:**

- **run.bat** は、JBoss AS 4.x の開始に使用される標準設定のスクリプトです。
- **-b** は、JBoss 4.2.2 を正しいネットワーク・インタフェースにバインドするオプションです（標準設定ではローカル・ホストにのみバインドされ、その他のホストからはアクセスできません）。
- UNIX 用に同様のスクリプトを作成できます。

- JBoss 7.1 ~ 7.3 のみ:

**スタンドアロン・モード**

SiteScope で JBoss を監視するには、次の手順を実行します。

- <JBoss ホーム>\standalone\configuration\** ディレクトリにある xml 設定ファイルで、すべての 127.0.0.1 エントリを JBoss サーバの IP アドレスに変更します。このようにしないと、JBoss をローカル・ホストからしか使用できなくなります。
- <socket-binding name="http" port="8080"/>** プロパティを編集して、HTTP ポートを異なるポートに変更します（SiteScope と JBoss を同じサーバにインストールした場合など）。
- jboss.management.native.port:9999** プロパティを編集して、JMX リモート・ポートを変更できます。
- <JBoss ホーム>\bin\add-user.bat**（Windows プラットフォームの場合）または **<JBoss ホーム>\bin/add-user.sh**（Linux プラットフォームの場合）を使用して、新しい管理ユーザを追加します。
- <JBoss ホーム>\bin\standalone.bat**（Windows プラットフォームの場合）または **<JBoss ホーム>\bin/standalone.sh**（Linux プラットフォームの場合）を使用して、JBoss を開始します。

**ドメイン・モード**

SiteScope で JBoss を監視するには、次の手順を実行します。

- <JBoss ホーム>\domain\configuration\** ディレクトリにある xml 設定ファイルで、すべての 127.0.0.1 エントリを JBoss サーバの IP アドレスに変更します。このようにしないと、JBoss をローカル・ホストからしか使用できなくなります。
- <socket-binding name="http" port="8080"/>** プロパティを編集して、HTTP ポートを異なるポートに変更します（SiteScope と JBoss を同じサーバにインストールした場合など）。
- <socket-binding name="remoting" port="4447"/>** プロパティを編集して、JMX リモート

ト・ポートを変更できます。

- iv. **<JBoss\_home>\domain\configuration\domain.xml** を次のように編集します。  
JBoss AS 7.1 の場合：  
**<remoting-connector/>** を次のように置き換えます。  
**<remoting-connector use-management-endpoint="false"/>**  
JBoss EAP 6.1 ~ 6.2 の場合：  
**<!--<remoting-connector use-management-endpoint="false"/>-->** を次のように置き換えます。  
**<remoting-connector use-management-endpoint="false"/>**
- v. **<JBoss ホーム>\bin\add-user.bat** (Windows プラットフォームの場合) または **<JBoss ホーム>\bin/add-user.sh** (Linux プラットフォームの場合) を使用して、新しいアプリケーション・ユーザを追加します。
- vi. **<JBoss\_home>\bin\domain.bat** (Windows プラットフォームの場合) または **<JBoss\_home>\bin/domain.sh** (Linux プラットフォームの場合) を使用して、JBoss を開始します。

3. ソリューション・テンプレートをデプロイする
- ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、  
[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 \(916ページ\)](#)を参照してください。
4. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力 (ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ)
- 次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## UI の説明

JBoss AS 4.x ソリューション・テンプレート・ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素 (変数の値) について説明します。

UI 要素	詳細
JMX_URL	JMX 統計情報を収集する URL。通常 URL の形式は次のとおりです。 service:jmx:rmi:///jndi/rmi://{hostname}:{port}/jmxrmi。 監視する JMX インスタンスのホスト名とポートを入力します。
USERNAME	JMX アプリケーションに接続するユーザ名 (任意指定)。
PASSWORD	JMX アプリケーションに接続するパスワード (任意指定)。

UI 要素	詳細
<b>Counters</b>	このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。 [カウンタの取得] ボタンを使用してカウンタを選択します。
<b>カウンタの取得</b>	[Get Counters] ダイアログ・ボックスが開き、監視するエンティティを選択できます。各インスタンスに対して、モニタとしきい値の特定のセットが作成されます。詳細については、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \sisdocs\pdfs\ <b>SiteScope_JBoss_Best_Practices.pdf</b> にある『SiteScope JBoss Application Server Best Practices Guide』を参照してください。
<b>サイレント・デプロイメント</b>	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。  <b>標準設定値</b> :選択されていない
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。  <b>注</b> : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。  <b>標準設定値</b> :選択されている

JBoss AS 7.1 ~ 7.3 ソリューション・テンプレート・ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>JMX URL</b>	JBoss Application Server から JMX 統計情報を収集する URL。通常 URL の形式は次のとおりです。service:jmx:remoting-jmx://<サーバ名>:<ポート>。
<b>ホスト名</b>	JBoss AS サーバが存在するマシンのホスト名。トポロジを HP BSM に送信するための JBoss CI タイプのホスト名として使用されます。
<b>ログイン</b>	JBoss Application Server に接続するためのログイン名。

UI 要素	詳細
パスワード	JBoss Application Server に接続するためのパスワード。
追加クラスパス	<p>クライアント JBoss Application Server の jar ファイルのパス。ファイル・パス要素はセミコロン (「;」) で区切ります。クライアント・ファイルは、<b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\templates.applications\lib</b> フォルダにあります。</p> <p><b>標準設定値</b> ../templates.applications/lib/jboss-client.jar;../templates.applications/lib/jboss-common-core-2.2.17.GA-redhat-2.jar</p>
タイムアウト	<p>ダイナミック JMX モニタのタイムアウト値 (秒)。</p> <p><b>標準設定値</b> : 120</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注</b> : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されている</p>

## 第77章: Linux Host ソリューション・テンプレート

Linux Host ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ（監視対象 Linux ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテストします）をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Linux がサポートされます。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「システム要件」を参照してください。

UNIX リソース・モニタの場合、監視対象サーバの 3 つの異なる測定値のデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、[「サーバ中心のレポートの作成」\(1357ページ\)](#)を参照してください。

**ヒント:** 必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、UNIX リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。

Linux Host ソリューション・テンプレートは包括的な Linux オペレーティング・システムの監視が可能です。SiteScope ユーザや IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** Linux Host ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』ドキュメント（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_OS\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

[**テンプレート**] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[**ソリューション テンプレート**] を展開し、[**Linux Host**] を選択します。

## 詳細な内容

### 対応バージョン

Linux Host ソリューション・テンプレートでは、次のバージョンがサポートされています。

- Red Hat 7.x, 8.x, 9.x
- Red Hat Enterprise Linux 3.x, 4.x, 5.2, 5.4, 5.5 (ES/AS)

## ソリューション・テンプレート・モニタ

Linux Host ソリューション・テンプレートでは、Linux のパフォーマンスと状況の次の側面を監視対象とするモニタがデプロイされます。

- CPU の状態と使用率の詳細
- メモリの状態と使用率の詳細
- ファイル・システムの状態と使用率の詳細

## タスク

### Linux Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Linux Host ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

**注:** Linux Host ソリューション・テンプレートでは、対象ホストごとに UNIX リソース・モニタがデプロイされます。これは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要となる補足モニタです。

#### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- SiteScope サーバから監視対象 Linux ホストに接続できる必要があります。
- 対象サーバを UNIX リモート・マシンとして SiteScope に追加し、UNIX リモート・テストにパスする必要があります（[\[リモート サーバ\]](#) > [\[UNIX リモート サーバ\]](#)）。詳細については、[「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定」](#) (499ページ)を参照してください。

#### 注:

- サポートされている Linux オペレーティング・システムが SiteScope サーバで実行されている場合、そのサーバ自体を監視することもできます。
- このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Linux がサポートされます。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「システム要件」を参照してください。

2. ソリューション・テンプレートをデプロイする
- ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、  
「[SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法](#)」(916ページ)を参照してください。
3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）
- 次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## UI の説明

Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。UNIX 接続プロファイルを作成する手順については、「 <a href="#">リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定</a> 」(499ページ)を参照してください。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。 <b>標準設定値</b> :選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 <b>注</b> ：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 <b>標準設定値</b> :選択されている

## 第78章: Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートは、Microsoft Exchange サーバのパフォーマンス、可用性、使用統計を監視します。このテンプレートには、Windows イベント・ログ・エントリ、Exchange のテスト動作と統計情報、システム・パフォーマンス・カウンタ、メッセージ・システムの使用統計をチェックするモニタが含まれています。

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは包括的な Microsoft Exchange システムの監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Microsoft Exchange Best Practices』ドキュメント（<[SiteScope のルート・ディレクトリ](#)>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_Exchange\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、【**ソリューション テンプレート**】を展開し、必要な Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートを選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでサポートされているバージョンは次のとおりです。

- Microsoft Exchange 2007 Server（バージョン 8.0）
- Microsoft Exchange 2010 Server
- Microsoft Exchange 2013 Server

### ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Exchange のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- **基本的なサーバ / OS パフォーマンス:** このカテゴリの対象は、サーバのシステム・レベルの状況です。Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、サーバ状況のモニタが自動的に設



定されます。

- **アプリケーション・パフォーマンス**:アプリケーション・パフォーマンスは、特定の Exchange コンポーネントの稼働状況の指標です。Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、一連の重要な Exchange アプリケーション・コンポーネントのモニタが自動的に設定されます。
- **Exchange Server のテスト動作と統計情報**: Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートを使用すると、Exchange Server のさまざまなテストおよび統計情報用コマンドレット (cmdlet) を監視できます。コマンドレットには次の用途があります。

検証:	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Exchange ActiveSync (Microsoft Exchange 2013 ソリューション・テンプレートのみ)</li> <li>• Web サービス機能</li> <li>• 匿名の予定表共有が有効になっており、正しく機能しているかどうか (Microsoft Exchange 2013 ソリューション・テンプレートのみ)</li> <li>• Mailbox Replication サービス (Microsoft Exchange 2013 ソリューション・テンプレートのみ)</li> <li>• 必須のサービスが実行されているかどうか (Microsoft Exchange 2013 ソリューション・テンプレートのみ)</li> <li>• エンドツーエンドのメール配信</li> </ul>
テスト:	<ul style="list-style-type: none"> <li>• POP3 サービス (Microsoft Exchange 2013 ソリューション・テンプレートのみ)</li> <li>• IMAP4 サービス (Microsoft Exchange 2013 ソリューション・テンプレートのみ)</li> <li>• DAG メンバ (Microsoft Exchange 2013 ソリューション・テンプレートのみ)</li> <li>• メールボックス・データベース</li> <li>• Mailbox Assistance パフォーマンス (Microsoft Exchange 2013 ソリューション・テンプレートのみ)</li> <li>• Exchange Search が現在有効になっており、新規の電子メール・メッセージがタイムリーにインデックス付けされているかどうか</li> </ul>
取得:	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 平均ストア使用統計値 (Microsoft Exchange 2013 ソリューション・テンプレートのみ)</li> </ul>

- **使用統計**:さらに、Microsoft Exchange のパフォーマンス関連のカテゴリとして使用状況がありま

す。使用状況自体は、必ずしもパフォーマンスの主要なインジケータではありませんが、使用状況の変化が Microsoft Exchange の全体的なパフォーマンスに影響を与える可能性があります。また、Microsoft Exchange の使用統計は、IT 組織が傾向を見極め、将来の計画を立てる際に役立ちます。Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、一連の重要な Microsoft Exchange 使用状況パラメータのモニタが自動的に設定されます。

**注:** ソリューション・テンプレートによってデプロイされるモニタ・タイプの中には、Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートを使用しないと SiteScope に追加できないものもあります。詳細については、特定のモニタ・タイプに関するセクションを参照してください。

## タスク

### Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

#### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OS) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートをデプロイする前に、デプロイするソリューション・テンプレートに応じて特定の手順を実行する必要があります。
  - **Microsoft Exchange 2007, 2010 ソリューション:** このソリューション・テンプレートは、Microsoft Exchange 2007 モニタおよび 2010 モニタを使用します。これらのモニタ・タイプを正常にデプロイするには、特定の設定を必要とします。詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「Microsoft Exchange モニタ」を参照してください。
  - **Microsoft Exchange 2013 ソリューション:** このソリューション・テンプレートは、Microsoft Windows イベント・ログ、Microsoft Windows Resources、Microsoft Exchange Base、サービス・モニタを使用します。これらのモニタ・タイプを正常にデプロイするには、特定の設定を必要とします。詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ」、「Microsoft Windows リソース・モニタ」、「Microsoft Exchange ベース・モニタ」、および「サービス・モニタ」を参照してください。

#### 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、  
[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 \(916ページ\)](#)を参照してください。  
 テンプレート・モニタの設定方法の詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の特定の Microsoft Exchange モニタのドキュメントを参照してください。

**注:** Microsoft Exchange 2010 と Microsoft Exchange 2013 ソリューションでは、テンプレートコンテナに多数のテンプレートが用意されています。これらは個々にまたは同時にグループにデプロイできます。これによって、必要なテンプレートだけを選択する、また個別のサーバに分散された Exchange サーバのインストールに対してデプロイできます。複数のテンプレートを同時にデプロイする詳細については、「[\[複数のテンプレートのデプロイ\] ダイアログ・ボックス](#)」(869ページ)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## UI の説明

[Microsoft Exchange 2007 / 2010 ソリューション・テンプレート] ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>ドメイン</b> (Exchange 2007 および 2010 のみ)	<p>使用するメールボックスの所有者と Microsoft Exchange サーバの両方が属するドメイン。</p> <p><b>注:</b> このソリューションで使用するメールボックスの所有者も SiteScope を実行しているマシン上の管理アカウント権限を持つ必要があります。SiteScope にも、Microsoft Exchange サーバを実行しているドメインへのユーザ・アカウント・アクセスが必要です。</p>
<b>Mailbox</b>	<p>MAPI を使用した電子メール往復時間テストに使用するメールボックスの名前（別名）。多くの場合、これは電子メール・アカウント名ですが、別の名前にすることもあります。</p> <p><b>ヒント:</b> このソリューションに使用している電子メール・アカウントの [E-Mail Account] プロパティに表示されるメールボックス名をコピーすることをお勧めします。</p>
<b>SERVER_LIST</b>	<p>監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成す</p>

UI 要素	詳細
	る手順については、「 <a href="#">リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定</a> 」(479ページ)を参照してください。
<b>Exchange PS Console File Path</b> (Microsoft Exchange 2007 および 2010 のみ)	Microsoft Exchange Management Shell PowerShell コンソール・ファイルのパス。 <b>標準設定値</b> : C:\Program Files\Microsoft\Exchange Server\Bin\ExShell.psc1
<b>サイレント・デプロイメント</b>	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。 <b>標準設定値</b> : 選択されていない
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 <b>注</b> : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 <b>標準設定値</b> : 選択されている

[Microsoft Exchange 2013 ソリューション テンプレート] ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素 (変数の値) について説明します。

UI 要素	詳細
<b>Exchange サーバ名 (ID)</b>	監視する Microsoft Exchange Server のドメイン名を除いた名前 (ServerIdParameter) <b>例</b> : exchange1
<b>Exchange ドメイン</b>	監視する Microsoft Exchange Server のドメイン名 <b>例</b> : some.exchange.domain

UI 要素	詳細
メールボックス・アカウント	現在の Exchange Server の既存のメールボックスの名前。 例 : Administrator
Remote Exchange スクリプト・ファイル・パス	Microsoft Exchange Server Management Shell スクリプト・ファイルの完全パス。 標準設定値 : C:\Program Files\Microsoft\Exchange Server\V15\Bin\RemoteExchange.ps1
タイムアウト (秒)	応答が返ってくるまでの待機時間 (秒)。タイムアウトは 1 秒以上 15 分以下に設定できます。 標準設定値 : 600 秒
リモート・サーバのユーザ (ドメイン\ユーザ)	現在の Exchange Server がインストールされているリモート・サーバのユーザ。 例 : exchange-domain\Administrator
リモート・サーバのユーザのパスワード	現在の Exchange Server がインストールされているリモート・サーバのユーザのパスワード
POP3 サービス・ポート	現在の Exchange Server の POP3 サービスのポート番号。 標準設定値 : 995 (SSL の場合は 995, テキスト / TLS の場合は 110)
IMAP4 サービス・ポート	現在の Exchange Server の IMAP4 サービスのポート番号。 標準設定値 : 993 (SSL の場合は 993, テキスト / TLS の場合は 143)
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間

UI 要素	詳細
	が遅くなります。 標準設定値 :選択されている

## 第79章: Microsoft IIS ソリューション・テンプレート

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートは、標準設定のメトリックで設定された一連のモニタ（Microsoft IIS サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテスト）をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートでは包括的な IIS 監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** Microsoft IIS ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Microsoft IIS Best Practices』ドキュメント（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_IIS\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、【**ソリューション テンプレート**】を展開し、必要な Microsoft IIS ソリューション・テンプレートを選択します（**Microsoft IIS 6** または **Microsoft IIS 7.x**）。

## 詳細な内容

### 対応バージョン

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートでは、Microsoft IIS 6.0, 7.x, 8.0 がサポートされています。

### IIS ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートでは、IIS サーバのパフォーマンスと状況の次のサービスと側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- Active Server Pages（ASP エラー、要求、テンプレート、セッション、トランザクション）
- FTP サービス、Web サービス、SMTP サーバ、NNTP サーバ、HTTP/HTTPS サービス、MSMQ キュー・サービス、IIS サーバ、グローバル IIS の状態、IIS WAS、IIS W3SVC、IIS Windows ログ、インデックス・サービス
- Windows プロセスとしての IIS 統計情報

# タスク

## Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- SiteScope サーバは、監視対象 Microsoft IIS ホストに接続する必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の Microsoft IIS Server Monitor を参照してください。
- 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[\[リモート サーバ\] > \[Microsoft Windows リモート サーバ\]](#)）。詳細については、[「\[新規 Microsoft Windows リモート サーバ\] / \[Microsoft Windows リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス」\(484ページ\)](#)を参照してください。  
または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、[「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」\(480ページ\)](#)を参照してください。

**注:** SiteScope と監視対象 IIS サーバは、同じホスト上で実行できます。

### 2. サーバ環境の設定 (Microsoft IIS 6 のみ)

コンポーネント・ツリーに ASP コンポーネント・パスを含むように IIS サーバを設定します。

- 【コントロールパネル】で、[\[プログラムの追加と削除\] > \[Windows コンポーネントの追加と削除\]](#)を選択します。
- 【Windows コンポーネント ウィザード】の【Windows コンポーネント】のページで、[\[アプリケーション サーバ\]](#)を強調表示し、[\[詳細\]](#)をクリックします。
- 【アプリケーション サーバ】で、[\[ASP.NET\]](#)チェックボックスを選択します。
- [\[インターネット インフォメーション サービス \(IIS\)\]](#)を強調表示し、次に[\[詳細\]](#)をクリックします。



- e. [インターネットインフォメーションサービス (IIS)] で, [World Wide Web サービス] チェックボックスを選択し, 次に [詳細] をクリックします。
  - f. [World Wide Web サービス] で, [Active Server Pages] チェックボックスを選択し, [OK] をクリックします。
  - g. [インターネットインフォメーションサービス (IIS)] で, [OK] をクリックします。
  - h. [アプリケーションサーバ] で, [インターネットインフォメーションサービス (IIS)] チェックボックスが選択され, 次にコンポーネントをインストールするために [OK] をクリックします。
  - i. [次へ] をクリックして, [Windows コンポーネントウィザード] の完了画面で, [完了] をクリックします。
  - j. ASP.NET を有効にするには, [コントロールパネル] で [管理ツール] > [インターネットインフォメーションサービス (IIS) マネージャ] を選択します。
  - k. コンソール・ツリーで, ローカル・コンピュータを展開し, [Web サービス拡張] をクリックします。
  - l. [詳細] ペインで, [ASP.NET] をクリックし, 次に [許可] をクリックします。
3. サーバ環境の設定 (Microsoft IIS 7.x のみ)
- コンポーネント・ツリーに ASP コンポーネント・パスを含むように IIS サーバを設定します。
- a. サーバ・マネージャを起動します ([スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックし, CompMgmtLauncher と入力します)。
  - b. ツリー・ビューで, [役割] を選択し, [役割] ペインで [役割の追加] をクリックします。
  - c. [役割の追加ウィザード] で, [サーバの役割の選択] をクリックし, [Web サーバ (IIS)] チェックボックスを選択して, [次へ] をクリックし, 次に [次へ] を再度クリックします。  
「Web サーバ (IIS) に必要な機能を追加しますか?」というメッセージが表示されたら, [必要な機能を追加] をクリックします。
  - d. [役割サービスの選択] ウィンドウで, [ASP.NET] および [ASP] サービスが選択されていることを確認します ([アプリケーション開発] の下にある)。
4. ソリューション・テンプレートをデプロイする
- ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については, [「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 \(916ページ\)](#) を参照してください。
5. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力 (ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ)
- 次の「UI の説明」の項の説明に従って, [デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## UI の説明

Microsoft IIS ソリューション・テンプレート・ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、「 <a href="#">リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定</a> 」(479ページ)を参照してください。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。  標準設定値 :選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。  注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。  標準設定値 :選択されている

## 第80章: Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート

以下にリストされた Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートを使用して Microsoft Lync Server 2010 サーバのさまざまな側面を監視できます。これらのテンプレートを使用して包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織がアプリケーションの専門家である必要はありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

Microsoft Lync Server 2010 モニタの場合は、監視対象のサーバについて 3 つの測定値のデータを表示するサーバ中心のレポートを作成できます。

**注:** Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Microsoft Lync Server 2010 Best Practices』ドキュメント（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_MS\_Lync\_Server\_2010\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【テンプレート】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、【ソリューション テンプレート】>【Microsoft Lync Server 2010】を展開し、必要な Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートを選択します。

## 詳細な内容

### Microsoft A/V Conferencing サーバ

Microsoft Lync A/V Conferencing サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。A/V 会議によって、リアルタイムのオーディオ/ビデオ（A/V）通信をユーザ間で行うことができます（オーディオ会議用のヘッドセットやビデオ会議用の Web カメラなどの適切なクライアント機器を有することを条件として）。音声ビデオ会議サーバは、A/V 会議機能をデプロイメントに提供します。このサーバはフロント・エンド・サーバと一緒に使用するか、1 つのサーバまたは音声ビデオ会議サーバ・プールとして個別にデプロイできます。

### Microsoft Archiving サーバ

Microsoft Lync Archiving サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。アーカイブ・サーバによって、規則への準拠のためにインスタント・メッセージング（IM）通信や会議の内容をアーカイブできます。企業や組織は、特定のタイプの通信の保管を求める業界および政府の多数の規則を受けています。Archiving サーバ機能を使用することで Microsoft Lync Server 2010 通信ソフトウェアは、Lync Server 2010 を介して送信される IM コンテンツや会議内容（一方または両方）をアーカイブ

する方法を提供します。Archiving サーバをデプロイしてフロント・エンド・プールと関連付けると、IM メッセージや会議をアーカイブするように設定したり、アーカイブを有効に設定されるユーザを指定できます。

### Microsoft Director サーバ

Microsoft Lync Director サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Director はユーザ要求を認証する Microsoft Lync Server 通信ソフトウェアを実行しているサーバですが、ユーザ・アカウントを保管したりプレゼンスまたは会議サービスを提供しません。Director は外部ユーザのアクセスを可能にするデプロイメントで最も役立ち、内部サーバに外部ユーザを導く前に要求を認証できません。Director は複数のフロント・エンド・プールを用いている組織のパフォーマンスを改善することもできます。

### Microsoft Edge サーバ

Microsoft Lync Edge サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。エッジ・サーバによって、ユーザは組織のファイアウォールの外側のユーザと通信したり共同作業できます。外部ユーザとしては、現在社外で作業中の組織のユーザ、連合するパートナー組織のユーザ、そして Lync サーバのデプロイメントにホストされる会議への参加を要請されている外部ユーザが挙げられます。エッジ・サーバは、Windows Live、AOL、および Yahoo! を含むパブリック IM 接続サービスへの接続も可能にします。

### Microsoft Front End サーバ

Microsoft Lync Front End サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。フロント・エンド・サーバはコアとなるサーバ・ロールで、多くの基本的な Lync Server 機能を実行します。フロント・エンド・サーバは、データベースを提供する Back End サーバとともに、Lync Server Enterprise Edition デプロイメントで必要となる唯一のサーバ・ロールです。

フロント・エンド・プールは、完全に同じように設定され、ユーザの共通グループにサービスを提供するために連動する一連のフロント・エンド・サーバです。プールはユーザにスケーラビリティとフェイルオーバー機能を提供します。

フロント・エンド・サーバの機能は次の通りです。

- ・ ユーザ認証および登録
- ・ プレゼンス情報および連絡先カード交換
- ・ アドレス帳サービスおよび配布リスト拡張
- ・ 複数人による IM 会議を含む IM 機能
- ・ Web 会議およびアプリケーション共有（デプロイされている場合）
- ・ Lync Server（たとえば、Conferencing Attendant および Response Group アプリケーション）およびサードパーティ・アプリケーションに含まれる両アプリケーションのためのアプリケーション・ホスティング・サービス。
- ・ アプリケーション・ホスティングおよびホスト・アプリケーション（たとえば、Response Group アプリケーションなど）のためのアプリケーション・サービス。

### Microsoft Mediation サーバ

Microsoft Lync Mediation サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。仲介サーバは、Enterprise Voice およびダイヤルイン会議を実装するために必要なコンポーネントです。仲介サーバは信号を変換しますが、一部の設定では、内部の Lync Server インフラストラクチャと公衆交換電話網 (PSTN) ゲートウェイ、IP-PBX、または Session Initiation Protocol (SIP) トランク間でメディアを変換します。Lync Server 側では、仲介サーバは単一の相互 TLS (MTLS) 転送アドレスでリスンします。ゲートウェイ側では、仲介サーバは単一の TCP および単一の TLS 転送アドレス、または単一の TLS 転送アドレスでリスンします。すべての正規のゲートウェイは TLS をサポートする必要がありますが、TCP も有効にできます。

### Microsoft Monitoring と CDR サーバ

Microsoft Lync Monitoring and CDR サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Monitoring サーバは、Enterprise Voice コールと A/V 会議の両方においてネットワーク・メディアの品質に関するデータを収集します。この情報は可能な限り最高のメディア・エクスペリエンスをユーザに提供する支援となります。コールの失敗を解決するために使用できるコール・エラー記録 (CER) も収集します。さらに、さまざまな Lync Server サーバ機能に関する使用情報を通話詳細記録 (CDR) の形式で収集するので、デプロイメントの投資に対するリターンを計算したり、将来におけるデプロイメントの拡張を計画できます。

### Microsoft Registrar サーバ

Microsoft Lync Registrar サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Lync Server 2010 Registrar は、クライアント登録および認証を可能にし、ルーティング・サービスを提供する新しいサーバ・ロールです。このサーバは、Standard Edition サーバ、Enterprise Front End サーバ、Director、または Survivable Branch Appliance で他のコンポーネントとともに置かれます。Registrar プールは、Lync Server プールで実行し、同じサイトに置かれている Registrar Service で構成されます。

## タスク

### Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

#### 1. 前提条件

ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追

加の容量が必要な場合) については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。

## 2. ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」\(916ページ\)](#)を参照してください。

## 3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

**注:** Microsoft Lync Server 2010 ソリューションは、テンプレート コンテナに多数のテンプレートを提供します。これらは個々にまたは同時にグループにデプロイできます。これによって、必要なテンプレートだけを選択できます。複数のテンプレートを同時にデプロイする方法の詳細については、[「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」\(862ページ\)](#)の「複数のテンプレートのデプロイ」手順を参照してください。

# UI の説明

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート・ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
ホスト	監視対象の Microsoft Lync Server 2010 インスタンスのホスト名。
ユーザ	Microsoft Lync Server 2010 インスタンスの管理者権限を持つユーザ名。
パスワード	Microsoft Lync Server 2010 のユーザのパスワード。
Connection method	サーバに接続するために使用される方法。オプションは、NetBIOS, WMI, または SSH。 <b>標準設定値 :</b> NetBIOS
Remote server encoding	リモート・サーバのエンコーディング。 <b>標準設定値 :</b> Cp1252
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使

UI 要素	詳細
	<p>用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注</b> : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>リモート・サーバのテスト</b>	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>

## 第81章: Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレート

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートを使用して、SharePoint Server 2010 システムの稼働状況を理解するために SharePoint 環境を監視したり、SharePoint 2010 製品にある重要なイベント、パフォーマンス・カウンタ、サービスの監視を行うことができます。

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートは、Microsoft SharePoint 2010 のパフォーマンスおよび状態のサービスおよび側面を対象とする一連のモニタ（Microsoft Windows イベント・ログ、Microsoft Windows リソース、CPU、ディスク領域、および SQL）をデプロイします。これらのモニタは、Microsoft SharePoint 2010 の監視のベスト・プラクティスを網羅しています。

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートでは包括的な監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

### 注:

- Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Microsoft SharePoint 2010 Best Practices』ドキュメント（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_SharePoint\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。
- Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートは、監視対象のリモート・サーバが SSH 用に設定されており、SSH 接続方法がテンプレートで使用されている場合には、UNIX バージョンで稼働する SiteScope でもサポートされます。詳細については、「[セキュア・シェル \(SSH\) を使用したリモート監視の設定](#)」(523ページ)を参照してください。

### アクセス方法

[**テンプレート**] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[**ソリューション テンプレート**] > [**Microsoft SharePoint 2010**] を展開し、必要な SharePoint テンプレートを選択します。

## 学習事項

### SharePoint 環境

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートでは、SharePoint 環境の次の側面の可用性、パフォーマンス、および状態を対象とするモニタがデプロイされます。



- IIS Process
- InfoPath Service
- Publishing Service
- Search Service
- Service Application
- SharePoint Server
- SQL Server

## タスク

### Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。

#### 1. 前提条件

ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。

#### 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」\(916ページ\)](#)を参照してください。

#### 3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

**注:** Microsoft SharePoint 2010 ソリューションは、テンプレート・コンテナに多数のテンプレートを提供します。これらは個々にまたは同時にグループにデプロイできます。これによって、必要なテンプレートだけを選択できます。複数のテンプレートを同時にデプロイする方法の詳細については、[「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」\(862ページ\)](#)の「複数のテンプレートのデプロイ」手順を参照してください。

## UI の説明

[Microsoft SharePoint 2010 ソリューション テンプレート] ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
ホスト	Microsoft SharePoint インスタンスのホスト名。
ユーザ名	監視対象の Microsoft SharePoint インスタンスの管理者権限を持つユーザ名。
パスワード	監視対象の Microsoft SharePoint インスタンスのユーザのパスワード。
Connection method	サーバに接続するために使用される方法。オプションは NetBIOS, WMI, および SSH です。  標準設定値 : NetBIOS
Remote server encoding :	リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システムのバージョンが、SiteScope が稼働するサーバとは異なる文字エンコーディングを使用する場合、リモート・サーバのエンコーディングを設定します。このエンコードによって、エンコードされた内容を SiteScope で適切に表示できます。  標準設定値 : Cp1252
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。  標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。  注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。  標準設定値 : 選択されている

UI 要素	詳細
リモート・サーバのテスト	テンプレートのデプロイ後，テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので，引き続き SiteScope を使用できます。  標準設定値 :選択されていない

## 第82章: Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートは、標準設定のメトリックで設定された一連のモニタ（Microsoft SQL サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテスト）をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートを使用して、Microsoft SQL サーバを包括的に監視できます。SiteScope ユーザまたは IT 組織がアプリケーションに精通している必要はありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** Microsoft SQL ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Microsoft SQL Best Practices』ドキュメント（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_MSSQL\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで【**ソリューション テンプレート**】を展開し、必要なソリューションを選択します（**Microsoft SQL Server 2005, 2008** または **Microsoft SQL Server 2008 R2, 2012**）。

## 詳細な内容

### 対応バージョン

- Microsoft SQL Server 2005, 2008 ソリューション・テンプレートでは、Microsoft SQL Server 2005 と 2008 がサポートされています。
- Microsoft SQL Server 2008 R2, 2012 ソリューション・テンプレートでは、Microsoft SQL Server 2008 R2 と 2012 がサポートされています。

### ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートでは、Microsoft SQL サーバ・パフォーマンスおよび状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- CPU の状態と使用率の詳細
- メモリの状態と使用率の詳細

- ディスク使用率情報
- SQL Server の可用性
- SQL Server オブジェクト（Buffer Manager，データベース，ロック，トランザクション，バッチ要求，キャッシュ）
- SQL Server のリソース（空き領域，現在のユーザ接続率，I/O 使用率，ラッチ，ミラーリング，レプリケーション，データ・アクセス）
- SQL Server のエラー

Microsoft SQL Server ソリューションでは、SiteScope データベース・カウンタ・モニタ，Microsoft SQL Server モニタ，Microsoft Windows リソース・モニタが使用されます。これらのモニタの詳細については、「データベース・カウンタ・モニタ」，「Microsoft SQL Server モニタ」，「Microsoft Windows リソース・モニタ」を参照してください。

## タスク

### Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定し、Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

#### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス（OSi）ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- SiteScope サーバから監視対象の Microsoft SQL ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「Microsoft Windows リソース・モニタ」を参照してください。
- 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[\[リモートサーバ\] > \[Microsoft Windows リモートサーバ\]](#)）。詳細については、[「リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定」\(479ページ\)](#)を参照してください。  
または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、[「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」\(480ページ\)](#)を参照してください。

- SQL Server ユーザは、SQL Server システム・ビューからデータを取得するために、監視対象の SQL Server インスタンスの **VIEW SERVER STATE** 権限が必要です。Microsoft SQL Server に対する権限付与の詳細については、<http://msdn2.microsoft.com/en-us/library/ms186717.aspx> を参照してください。

**注:** SiteScope と監視対象の Microsoft SQL Server は、同じホストで実行できます。

2. ソリューション・テンプレートをデプロイする
- ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 \(916ページ\)](#)を参照してください。
3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）
- 次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## UI の説明

Microsoft SQL Server 2005, 2008

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
Microsoft SQL Server URL	監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスの URL。 <ul style="list-style-type: none"><li>• <code>\${host}</code> を Microsoft SQL Server が実行されているホスト名で置き換えます。これは、Windows リモート・マシンに定義されているホスト名と同じである必要があります。詳細については、<a href="#">「[新規 Microsoft Windows リモートサーバ] / [Microsoft Windows リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」 (484ページ)</a>を参照してください。</li><li>• <code>\${port}</code> を Microsoft SQL Server で接続が許可されるポート番号で置き換えます。標準設定のポートは 1433 です。</li></ul> 例 : <code>jdbc:mercury:sqlserver://doors:1433</code>
Microsoft SQL Server インスタンス名	SQL Server サービス・インスタンスの名前。 標準設定値 : SQL Server (MSSQLSERVER)
Login to Microsoft SQL Server	監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスのユーザのログイン名。

UI 要素	詳細
<b>Microsoft SQL Server password</b>	監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスのユーザのパスワード。
<b>SERVER_LIST</b>	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、 <a href="#">「リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定」(479ページ)</a> を参照してください。
<b>サイレント・デプロイメント</b>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注</b> : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>

Microsoft SQL Server 2008 R2, 2012

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>Microsoft SQL Serverの URL</b>	<p>監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスの URL。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <code>\${host}</code> を Microsoft SQL Server が実行されているホスト名で置き換えます。これは、Windows リモート・マシンに定義されているホスト名と同じである必要があります。詳細については、<a href="#">「[新規 Microsoft Windows リモートサーバ] / [Microsoft Windows リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」(484ページ)</a>を参照してください。</li> <li>• <code>\${port}</code> を Microsoft SQL Server で接続が許可されるポート番号で置き換えます。標準設定のポートは 1433 です。</li> </ul> <p><b>例</b> : jdbc:mercury:sqlserver://doors:1433</p>

UI 要素	詳細
<b>Login to Microsoft SQL Server</b>	監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスのユーザのログイン名。
<b>Microsoft SQL Server</b>	監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスのユーザのパスワード。
<b>Microsoft SQL Server エージェント・サービス名</b>	SQL Server エージェント・サービスの名前。 標準設定値 : SQL Server (MSSQLSERVER)
<b>Microsoft SQL Server サービス・インスタンス名</b>	SQL Server サービス・インスタンスの名前。 標準設定値 : SQL Server (MSSQLSERVER)
<b>Microsoft SQL Server サービス名</b>	SQL Server サービスの名前。 標準設定値 : SQL Server
<b>エスケープ文字 \$ を含む Microsoft SQL Server サービス名</b>	SQL Server サービスの名前（サービス名に「\$」文字が含まれることを除き前述のフィールドと同じ）。  サービス名に「\$」文字（正規表現カウンタで使用される）が含まれている場合は、この文字の前にバックスラッシュ（「\」）を追加して、エスケープする必要があります。たとえば、MYSQL\$MYINSTANCE という名前の SQL インスタンスは、MYSQL\MYINSTANCE と入力する必要があります。
<b>SERVER_LIST</b>	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、 <a href="#">「リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定」(479ページ)</a> を参照してください。
<b>サイレント・デプロイメント</b>	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。



UI 要素	詳細
	<b>標準設定値</b> :選択されていない
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注</b>：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>

## 第83章: Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートは、Windows ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテストする標準設定の測定値で設定されたモニタの収集をデプロイするために使用できるテンプレートです。

Microsoft Windows リソース・モニタの場合は、監視対象のサーバについて3つの測定値のデータを表示するサーバ中心のレポートを作成できます。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、「[サーバ中心のレポートの作成](#)」(1357ページ)を参照してください。

**ヒント:** 必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、Microsoft Windows リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートを使用して、Windows オペレーティング・システムを包括的に監視できます。SiteScope ユーザまたはIT組織がアプリケーションに精通している必要はありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』ドキュメント（<[SiteScope のルート・ディレクトリ](#)>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_OS\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで【**ソリューション テンプレート**】を展開し、【**Microsoft Windows Host**】を選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Windows Server 2003, 2008, 2012, Microsoft Windows XP がサポートされています。

### ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Windows のパフォーマンスおよび状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- CPU の状態および使用率の詳細
- メモリの状態および使用率の詳細
- ディスク使用率情報

## タスク

### Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定し、Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

**注:** Microsoft Windows Host ソリューションでは、各監視対象ホストに Microsoft Windows リソース・モニタがデプロイされます。このモニタは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要な追加モニタです。

#### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- SiteScope サーバから監視対象 Windows ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「Microsoft Windows リソース・モニタ」を参照してください。
- 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[\[リモート サーバ\] > \[Microsoft Windows リモート サーバ\]](#)）。詳細については、「[\[新規 Microsoft Windows リモート サーバ\] / \[Microsoft Windows リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(484ページ)を参照してください。

または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、「[リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法](#)」(480ページ)を参照してください。

- SiteScope がテンプレートでサポートされる Windows オペレーティング・システムにインストールされている場合、SiteScope と監視対象サーバは同じホストで実行できます。このテンプレートでは、Microsoft Windows XP, Windows Server 2003, Windows Server 2008 がサポートされています。

2. ソリューション・テンプレートをデプロイする
- ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、  
「[SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法](#)」(916ページ)を参照してください。
3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース・デプロイメント用のみ）
- 次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## UI の説明

[Microsoft Windows Host ソリューション テンプレート] ページ  
次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、「 <a href="#">リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定</a> 」(479ページ)を参照してください。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。 <b>標準設定値</b> :選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 <b>注</b> ：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 <b>標準設定値</b> :選択されている

## 第84章: .NET ソリューション・テンプレート

.NET ソリューション・テンプレートでは、Windows オペレーティング・システムが実行されているサーバの .NET アプリケーションを監視できます。このソリューション・テンプレートでは、Windows ホストの .NET アプリケーションおよび .NET 環境の状況、可用性、パフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。

.NET ソリューション・テンプレートでは包括的な .NET 監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** .NET ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope .NET Best Practices』ドキュメント（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_NET\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、【**ソリューション テンプレート**】を展開し、必要な .NET ソリューション・テンプレートを選択します。

## 詳細な内容

### 対応バージョン

.NET ソリューション・テンプレートでは、Windows Server 2003 / 2012 と Windows XP サーバ上で実行されている .NET 1.x, 2.x をサポートしています。

### ソリューション・テンプレート・モニタ

.NET ソリューション・テンプレートでは、.NET のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- **.NET CLR データ** : このカテゴリの対象は、共通言語ランタイム・データ（.NET アプリケーションの環境）です。このカテゴリは、選択したアプリケーションを対象として .NET CLR の複数のリソースの統計情報をチェックするように設計されています。.NET ソリューション・テンプレートでは、サーバの状況のモニタが自動的に設定されます。
- **ASP.NET** : このカテゴリは、ASP.NET の複数のリソースの統計情報をチェックするように設計されています。アプリケーションの再起動と ASP.NET システム全体の安定性に関する一般的な情報が

収集されます。.NET ソリューション・テンプレートでは、サーバの状況のモニタが自動的に設定されます。

- **ASP.NET アプリケーション**: このカテゴリは、選択した ASP.NET アプリケーションの複数のリソースの統計情報をチェックするように設計されています。アプリケーションのキャッシュやエラーなどの重要な情報に関する一般的な情報が収集されます。.NET ソリューション・テンプレートでは、サーバの状況のモニタが自動的に設定されます。

## タスク

### .NET ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、.NET ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

#### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- SiteScope サーバから監視対象 Windows ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「Microsoft Windows リソース・モニタ」を参照してください。
- 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[\[リモート サーバ\] > \[Microsoft Windows リモート サーバ\]](#)）。詳細については、「[\[新規 Microsoft Windows リモート サーバ\] / \[Microsoft Windows リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(484ページ)を参照してください。  
または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、「[リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法](#)」(480ページ)を参照してください。
- SiteScope がテンプレートでサポートされている Windows オペレーティング・システムにインストールされている場合、SiteScope および対象 .NET アプリケーションを同じホストで実行できます。このテンプレートでは、Microsoft Windows XP と Windows Server 2003 をサポートしています。

#### 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、  
「[SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法](#)」(916ページ)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## UI の説明

### .NET ソリューション・テンプレート・ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
Server	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、「 <a href="#">リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定</a> 」(479ページ)を参照してください。
ASP.NET Application (ASP.NET アプリケーションのみ)	監視する ASP.NET アプリケーションの名前。この名前は、タスク・マネージャに表示される名前と同じにする必要があります。
Instance (.NET CLR データのみ)	監視するアプリケーションの名前。この名前は、タスク・マネージャに表示される名前と同じにする必要があります。同じでない場合はシステム全体の統計情報（標準設定）になる可能性があります。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。  標準設定値 :選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうか検証されます。  注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間

UI 要素	詳細
	が遅くなります。 標準設定値 :選択されている



## 第85章: Oracle Database Solution Templates

Oracle Database ソリューション・テンプレートを使用すると、Oracle データベースの状況、可用性、パフォーマンスをテストする一連のモニタをデプロイできます。デプロイしたモニタは、キャッシュ・ヒット率やディスク I/O などの一般的なシステム統計情報をチェックします。また、データベースの重要な側面に関する診断情報を提供するツールを備えています。

このソリューションは、データベース・カウンタ・モニタを使用して JDBC でアクセス可能なデータベースからパフォーマンス測定値を収集します。さらに、Oracle Database ソリューション・テンプレートを使用して標準設定の測定値が設定された一連のモニタをデプロイできます。

重要なシステム測定値は、Oracle データベースのシステム・テーブルから取得したデータを使用して計算されます。これらの測定値を作成するために、V\$SYSSTAT, V\$LATCH, V\$ROLL\_STAT, V\$BUFFER\_POOL\_STATISTICS などの幅広い Oracle システム・テーブルを参照します。このように、Oracle Database ソリューションは、Oracle インストールにバンドルされているシステム監視スクリプトの多くと同等の機能を実装します。

Oracle Database ソリューション・テンプレートでは包括的な Oracle データベースの監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** Oracle データベース・ソリューション・テンプレートの詳細については、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_Oracle\_Database\_Best\_Practices.pdf の「SiteScope Oracle Database Best Practices」ドキュメントを参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、【**ソリューション テンプレート**】を展開し、【**Oracle Database 9i and 10g**】または【**Oracle Database 11g**】を選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

Oracle Database ソリューション・テンプレートは、Oracle 9i, 10g, 11g データベースをサポートしています。

### ソリューション・テンプレート・モニタ

Oracle Database ソリューション・テンプレートでは、Oracle のパフォーマンスと状況の次の側面を監視対象とするモニタがデプロイされます。

- **一般的なシステム統計情報** : 最も重要な V\$SYSSTAT 統計は、Oracle Database ソリューションでデプロイされたモニタによって標準設定で監視されます。必要に応じて、これらの測定値は組み合わせられ、1 秒または 1 トランザクションあたりの差異や速度が計算されます。データベース内の V\$ テーブルから重要な測定値を監視する場合、手動で生成した SQL スクリプトの代わりに Oracle Database ソリューションを使用できます。
- **Oracle ログ** : ORA- エラーがないかどうか、重要な Oracle ログ・ファイルを監視します。データベース設定に応じて、ユーザがこれらのモニタをログ・ファイル内の特定のテキストを検索するようにカスタマイズすることも可能です。
- **データベース問題の診断** : デプロイしたモニタに加えて、Oracle ソリューションは、データベースに関する診断情報の取得に使用できる複数のツールを備えています。これらのツールでは、リソースを集中的に消費する SQL ステートメント、共有サーバ・プロセスの競合、特定のイベントを待機しているセッション数などの診断データを利用できます。

### Oracle Database ソリューション・テンプレートのツール

Oracle Database ソリューション・テンプレートでは、Oracle データベースに関する診断情報の収集に使用できる複数のツールがデプロイされます。これらのツールは、ソリューション・テンプレートでデプロイしたモニタと同じグループにデプロイされます。ツールは、モニタと同じように表示されますが、無効に設定されています。これらのツールは、グループ内容テーブルの【状態】フィールドに太字で表示されたテキスト「**Solution Tool**」で識別します。ソリューション・ツールはモニタ・テーブルに表示されますが、モニタ・インスタンスではありません。ソリューション・ツールが自動的に実行されることはありません。また、アクション結果に基づいて状態が表示されたり、警告が起動されることもありません。これらのツールは事前に設定されたアクションであり、SiteScope 診断ツールを利用して Oracle データベースからパフォーマンス問題を示す特定の統計情報をチェックします。

ユーザがいずれかのソリューション・ツールをクリックすると、SiteScope はデータベース接続テスト・ツールを使用して、データベースへのカスタム SQL クエリを実行します。クエリの結果は、ページ下部にあるテーブルに表示されます。このページで【接続とクエリ実行】ボタンをクリックすることで、ツールを必要に応じて何回でも実行できます。ツールによっては、データベースに著しいオーバーヘッドが発生するため、連続して実行することはお勧めしません。

### Oracle Database ソリューション・テンプレートのリスト

次に、Oracle Database ソリューションの一部としてデプロイされるツールについて説明します。

Oracle ソリューション・ツール名	説明と使用ガイドライン
Top Ten SQL Statements in Logical IOs Per Row	このツールは、データベースで実行されている SQL ステートメントのうち、最もリソースを集中的に消費するステートメントを見つけるように設計されたクエリを実行します。V\$SQL テーブルに対して、1 行あたり最も多くの論理 IO を実行する SQL ステートメント上位 10 個を求めるクエリが実行され、テーブル

Oracle ソリュ ション・ツール 名	説明と使用ガイドライン
	<p>に表示されます。</p> <p>これらの 10 個のステートメントのステートメント ID が、ステートメントごとの追加のリソース使用データとともにテーブルに表示されます。</p> <p>次のような追加データがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>物理 IO ブロック数</b> : ステートメントのために実行されたディスク読み取り回数。</li> <li>・ <b>論理 IO 数</b> : ステートメントのために実行されたバッファ取得回数。</li> <li>・ <b>処理された行数</b> : ステートメント実行時に処理された行数。</li> <li>・ <b>1 行あたりの論理 IO 数</b> : ステートメント実行時に処理された 1 行あたりのバッファ取得実行回数。</li> <li>・ <b>実行回数</b> : ステートメントの実行回数。</li> <li>・ <b>1 回の実行あたりの論理 IO 数</b> : 1 回のステートメント実行あたりのバッファ取得回数。</li> </ul> <p><b>注</b> : 実行するアクションはデータベース・リソースに重大な影響を与える可能性があるため、頻繁に実行しないでください。</p>
Number of Sessions Waiting Per Event	<p>このツールは、応答しなくなったセッションのトラブルシューティングに使用できます。複数のセッションが応答しなくなった場合、このツールを使用して、応答しなくなったセッションがすべて同じイベントを待機しているかどうかを判別できます。ツールのアクションによって、特定のイベントを待機しているセッション数を含むテーブルが表示されます。</p>
Shared Server Process Contention (Common Queue Average Wait Time)	<p>このツールは、共有サーバ・メッセージ・キュー（V\$QUEUE に記録された共通キュー）の平均待機時間を計算します。平均待機時間が長い場合、共有サーバ・プロセス間の競合を示している可能性があります。</p>

## タスク

### Oracle Database ソリュション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Oracle Database ソリュション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

## 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- Oracle Database 9i and 10g ソリューション・テンプレートを正常にデプロイするには、「CREATE SESSION」システム権限が必要です。
- Oracle Database ソリューション・テンプレートをデプロイする前に、データベース・カウンタ・モニタとログ・ファイル・モニタについてのドキュメント（「データベース・カウンタ・モニタ」と「ログ・ファイル・モニタ」）を参照し、このソリューション・テンプレートで要求される前提条件とパラメータの詳細を確認してください。たとえば、データベースとの通信に必要な Oracle JDBC ドライバのインストールや、ログ・ファイル・パス・パラメータの形式に関する詳細な情報を参照できます。

## 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 \(916ページ\)](#)を参照してください。

## 3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## Oracle Database ソリューション・ツールを実行する方法

このタスクでは、Oracle Database ソリューション・ツールを実行する方法について説明します。

1. Oracle ソリューション・モニタがデプロイされているグループのグループ名をクリックします。[Group Detail] ページが開きます。
2. 実行するアクションに対応するソリューション・ツールを見つけます。ソリューション・ツールで実行されるアクションの説明については、そのツールの【名前】列を参照してください。
3. アクションを実行するには、ツールの【名前】の右にある【ツール】リンクをクリックします。[データベース接続テスト] ページが開きます。このページで【接続とクエリ実行】ボタンをクリックすることで、ツールを必要に応じて何回でも実行できます。

**注:** クエリによっては、ソリューション・ツールがデータベースにとって著しいオーバーヘッドとなる場合があるため、ツールを短い間に連続して実行することはお勧めしません。

「データベース接続テスト」ページの上部には、テストに使用したデータベース接続パラメータが表示されます。ツール・クエリの結果は、ページ下部近くのテーブルに表示されます。該当するツールの説明と使用ガイドラインに基づいて、結果を確認します。

## UI の説明

Oracle Database ソリューション・テンプレート・ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>DatabaseConnection URL</b>	<p>監視対象のデータベースの接続 URL。構文は、jdbc:oracle:thin:@&lt;server name or IP address&gt;:&lt;database server port&gt;;sid=&lt;sid&gt; になります。</p> <p><b>例：</b>ポート 1521 を使用してマシン上の ORCL データベースに接続するには、次の URL を使用します。</p> <p>jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL。</p> <p><b>注：</b>前述の例のように:と@記号を含める必要があります。</p>
<b>DatabaseDriver</b>	<p>このモニタで使用する JDBC ドライバの名前。各ドライバがサポートするのは特定の接続 URL パターンであるため、<b>「データベース接続 URL」</b>に入力した URL とその URL パターンは一致する必要があります。</p>
<b>OracleAlertLogPath</b>	<p>Oracle 警告ログへのフル・パス。Windows マシンの場合、これはフル UNC パスです。Oracle 警告ログへのフル・パスを入力します。このファイルへのアクセス方法については、データベース管理者に問い合わせるか、Oracle のドキュメントを参照してください。</p>
<b>OracleListenerLogパス</b>	<p>Oracle リスナ・ログへのフル・パス。Windows マシンの場合、これはフル UNC パスです。このファイルへのアクセス方法については、データベース管理者に問い合わせるか、Oracle のドキュメントを参照してください。</p>
<b>DatabaseUserName</b>	<p>SiteScope がデータベースへの接続に使用するユーザ名。</p>
<b>DATABASEPASSWORD</b>	<p>SiteScope がデータベースへの接続に使用するユーザ名のパスワード。</p>
<b>Log File Encoding</b>	<p>監視するファイル内容で、SiteScope を実行するサーバとは別のエンコーディングを使用している場合、使用するコード・ページまたはエンコーディングを入力します。これは、SiteScope が使用するコード・ページが対象ファイルで使用する文字セットをサポートしていない場合に必要とな</p>

UI 要素	詳細
	<p>る可能性があります。ここで指定することで、SiteScope がエンコードされたファイルの内容を正確に照合および表示できます。</p> <p><b>例 :</b> Cp1252, Cp1251, Cp1256, Shift_JIS または EUC_JP。</p>
SERVER_LIST	<p>監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。</p> <p>接続プロファイルを作成する手順については、「<a href="#">リモート Windows サーバを監視するための SiteScope の設定</a>」(479ページ)または「<a href="#">リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定</a>」(499ページ)を参照してください。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注 :</b> このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されている</p>

## 第86章: SAP ソリューション・テンプレート

SAP ソリューションには、重要な SAP コンポーネントを監視するためのソリューション・テンプレートが含まれています。SAP ソリューション・テンプレートは、可用性およびパフォーマンスに関してレポートするためにメトリックスで構成されたモニタのコレクションをデプロイします。これらの監視設定は、ベスト・プラクティス・データとさまざまな情報源から得た専門知識を使用して調査されています。

SAP ソリューション・テンプレートは包括的な SAP 監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織に専門的な知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで【**ソリューション テンプレート**】を展開して、必要な SAP ソリューション・テンプレートを選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

SAP ソリューション・テンプレートでは、SAP R/3 サーバ（バージョン 4.5B 以降）をサポートしています。

### ソリューション・テンプレート・モニタ

SAP ソリューション・テンプレートは、SAP のパフォーマンスと状況について次の側面を監視対象とするモニタをデプロイします。

- SiteScope SAP R/3 Application Server ソリューション・テンプレートには、SAP R/3 システムの可用性の監視、使用状況の統計、サーバ・パフォーマンスの統計に使用するツールが用意されています。このソリューション・テンプレートでは、SAP R/3 サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテストする一連のモニタをデプロイします（バージョン 4.5B 以降）。
- SiteScope SAP NetWeaver Application Server ソリューション・テンプレートでは、SAP Java Web アプリケーション・サーバ・クラスタの可用性とサーバ統計情報を監視できます。このソリューション・テンプレートを使用して、サーバ全体のリソースと測定値のモニタをデプロイできます。



# タスク

## SAP ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、SAP ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- リモート・システム・ユーザの SAP 認証が必要です。SiteScope で必要な最小の SAP 権限の詳細については、次の場所にある「AAAB - Cross-application Authorization Objects」と「BC\_A - Basis: Administration」の各項を参照してください:SAP ドキュメント ([http://help.sap.com/saphelp\\_nw70ehp1/helpdata/en/49/bb35b8623a489aa63abd9f5ebf2448/content.htm](http://help.sap.com/saphelp_nw70ehp1/helpdata/en/49/bb35b8623a489aa63abd9f5ebf2448/content.htm))の「[SAP RFC User privileges](#)」。
- **SAP R/3 アプリケーション・サーバ:**
  - SAP Java コネクタのライブラリを、必要な SiteScope フォルダにコピーする必要があります。
  - SiteScope で SAP R/3 サーバへのログインに使用するユーザ名とパスワードが必要です。システムと設定要件の詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「SAP CCMS モニタ」を参照してください。このモニタは、SAP R/3 ソリューション・テンプレートの一部としてデプロイされます。
- **SAP NetWeaver アプリケーション・サーバ:**
  - SAP Java Web アプリケーション・サーバのライブラリを、必要な SiteScope フォルダにコピーする必要があります。
  - SiteScope で SAP Java Web アプリケーション・サーバへのログインに使用するユーザ名とパスワードが必要です。システムと設定要件の詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「SAP Java Web アプリケーション・サーバ・モニタ」を参照してください。このモニタは、SAP NetWeaver Application Server ソリューション・テンプレートの一部としてデプロイされます。

### 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする



ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、  
「[SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法](#)」(916ページ)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## UI の説明

### SAP R/3 アプリケーション・サーバ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
SYSTEM_NUMBER	SAP サーバのシステム番号。
USER_NAME	SAP サーバへの接続に必要なユーザ名。
パスワード	SAP サーバへの接続に必要なパスワード。
CLIENT_NUMBER	SAP への接続に使用するクライアント。
APPLICATION_SERVER	監視する SAP サーバのアドレス。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注</b> : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>

SAP NetWeaver アプリケーション・サーバ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
パスワード	SAP Java Web アプリケーション・サーバへの接続に必要なパスワード。
PORT	SAP Java Web アプリケーション・サーバのポート。
USER_NAME	SAP Java Web アプリケーション・サーバへの接続に必要なユーザ名。
TARGET_SERVER_NAME	監視する SAP Java Web アプリケーション・サーバのアドレス。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値 :</b>選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注 :</b> このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値 :</b>選択されている</p>

## 第87章: Siebel ソリューション・テンプレート

SiteScope Siebel ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Windows および UNIX オペレーティング・システムにインストールされている Siebel アプリケーション・サーバ、ゲートウェイ・サーバ、Web サーバのパフォーマンス、可用性、使用率の統計情報を効率的かつ詳細に監視できます。UNIX および Windows プラットフォームにインストールされているサーバに対応する個別のソリューション・テンプレートがあります。

Siebel の主なソリューション・テンプレートは、Siebel Application Server テンプレートです。このテンプレートを使用して、中核となる Siebel アプリケーションの監視をデプロイします。これらの任意指定のコンポーネントを IT 環境にデプロイする場合、Siebel Gateway Server テンプレートおよび Siebel Web Server テンプレートを使用します。

Siebel ソリューション・テンプレートは包括的な Siebel 監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタを設定およびデプロイする時間の削減や、リアルタイムのパフォーマンス・ボトルネックと長期的な傾向の特定に役立ち、実運用システムには最小限のオーバーヘッドのみが追加されます。

**注:** Siebel ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Siebel Best Practices』ドキュメント（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_Siebel\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで【**ソリューション テンプレート**】を展開して、必要な Siebel ソリューション・テンプレートを選択します。

## 詳細な内容

### 対応バージョン

Siebel ソリューション・テンプレートでは、Siebel 6.x, 7.x, 8.x アプリケーション・サーバをサポートしています。

### ソリューション・テンプレート・モニタ

Siebel ソリューションには、次の重要な Siebel コンポーネントを監視するためのソリューション・テンプレートが含まれています。

- **UNIX/Windows の Siebel アプリケーション・サーバ**:SiteScope Siebel Application Server ソリューションでは、Windows および UNIX プラットフォームにインストールされている Siebel アプリケーション・サーバの可用性、使用率の統計情報、サーバ・パフォーマンス統計情報を監視できます。これらのソリューション・テンプレートでは、Siebel 6.x, 7.x, 8.x のアプリケーション・サーバの状況、可用性、およびパフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。
- **UNIX/Windows の Siebel ゲートウェイ・サーバ**:SiteScope Siebel Gateway Server ソリューションでは、Windows および UNIX プラットフォームにインストールされている Siebel ゲートウェイ・サーバの可用性およびサーバ統計情報を監視できます。これらのソリューション・テンプレートでは、Siebel ゲートウェイ・サーバの状況、可用性、およびパフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。これらのソリューション・テンプレートを使用して、サーバ全体のリソースと測定値のモニタをデプロイできます。
- **UNIX/Windows の Siebel Web サーバ**:SiteScope Siebel Web Server ソリューションでは、Windows および UNIX プラットフォームにインストールされている Siebel Web サーバの可用性およびサーバ統計情報を監視できます。これらのソリューション・テンプレートでは、Siebel Web サーバの状況、可用性、およびパフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。

# タスク

## Siebel ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、Siebel ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

### 1. 前提条件

ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。

ソリューション・テンプレート名	要件
Siebel アプリケーション・サーバ	<ul style="list-style-type: none"><li>• (Siebel アプリケーション・サーバが UNIX にインストールされている場合でも) Siebel サーバ・マネージャ・クライアントは、SiteScope が実行されている、または SiteScope マシンにアクセスできる Windows マシンにのみインストールする必要があります。これを行う方法はいくつかあります。詳細については、Siebel サーバ・マネージャ・モニタのドキュメントを参照してください。</li></ul>

ソリューション・テンプレート名	要件
	<ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope で Siebel サーバ・マネージャ・モニタを設定するには、サーバ・マネージャ・クライアントのインストール・パスを把握しておく必要があります。SiteScope が実行されているマシンにクライアントをインストールする場合、このマシンのパスがインストール・パスになります。リモート・マシンにクライアントがインストールされている場合、そのマシンに対するクライアント実行ファイルの完全修飾パスを把握しておく必要があります。</li> <li>ネットワークで利用できる Siebel アプリケーションの名前を把握しておく必要があります。たとえば、call center や sales などです。</li> <li>Siebel データベース・マシン名、ユーザ名、パスワード、接続 URL、およびデータベース・ドライバを把握しておく必要があります。</li> <li>Siebel サーバにログインするために SiteScope で使用するユーザ名とパスワードを把握しておく必要があります。このユーザには、Siebel サーバの Siebel 管理者権限を付与する必要があります。</li> <li>次の Siebel サーバ・コンポーネント・グループが有効であることを確認する必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>Siebel コール・センター (CallCenter)</li> <li>Siebel リモート (Remote)</li> <li>システム管理 (System)</li> <li>補助システム管理 (SystemAux) - Siebel 8.x のみ</li> </ul> </li> <li>Siebel システム・コンポーネントの名前とそれに対応する別名の重要なリストを把握しておく必要があります。コンポーネントの名前と別名のリストについては、<a href="#">「Siebel ソリューション・テンプレート」(1007ページ)</a>を参照してください。  <b>注：</b>システムと設定要件の詳細については、「Siebel Web サーバ・モニタ」および「データベース・クエリ・モニタ」のセクションを参照してください。これらのモニタ・タイプは、Siebel Application Server ソリューション・テンプレートの一部としてデプロイされます。</li> </ul>
Siebel Web サーバ	<ul style="list-style-type: none"> <li>Siebel Web サーバが実行されているマシンに SiteScope サーバから接続できる必要があります。</li> <li>Siebel Web Server ソリューションは、Microsoft Windows プラットフォームで実行されている Siebel で使用するよう設計されています。</li> </ul>

ソリューション・テンプレート名	要件
	<p>す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>テンプレートでは、Siebel Web サーバが Microsoft Internet Information Server (IIS) で実行されていることを想定しています。</li> </ul>

## 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」\(916ページ\)](#)を参照してください。

## 3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

# UI の説明

[Siebel ソリューション テンプレート] ページ

Windows および UNIX 環境で動作する Siebel アプリケーション・サーバ 6.x, 7.x, 8.x を監視するためのユーザ・インタフェース要素（変数値）について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>Application</b>	Siebel アプリケーション・サーバ・マシンの名前。
<b>CG_Auxiliary_System_Management_Alias</b> (Siebel 8.x のみ)	Siebel 補助システム管理コンポーネント・グループの別名。
<b>CG_Auxiliary_System_Management_Name</b> (Siebel 8.x のみ)	Siebel 補助システム管理コンポーネント・グループの名前。
<b>CG_Callcenter_Alias</b>	Siebel CallCenter コンポーネント・グループの別名。
<b>CG_Callcenter_Name</b>	Siebel CallCenter コンポーネント・グループの名前。
<b>CG_System_Management_Alias</b>	Siebel システム管理コンポーネント・グループの別名。

UI 要素	詳細
<b>CG_System_Management_Name</b>	Siebel システム管理コンポーネント・グループの名前。
<b>CP_Callcenter_Alias</b>	Siebel CallCenter コンポーネントの別名。
<b>CP_Callcenter_Name</b>	Siebel CallCenter コンポーネントの名前。
<b>CP_Client_Administration_Alias</b> (Siebel 6.x ~ 7.x のみ)	Siebel クライアント管理コンポーネントの別名。
<b>CP_Client_Administration_Nam</b> (Siebel 6.x ~ 7.x のみ)	Siebel クライアント管理コンポーネントの名前。
<b>CP_eService_Alias</b>	Siebel eService コンポーネントの別名。
<b>CP_eService_Name</b>	Siebel eService コンポーネントの名前。
<b>CP_File_System_Manager_Alias</b>	Siebel ファイル・システム・マネージャ・コンポーネントの別名。
<b>CP_File_System_Manager_Name</b>	Siebel ファイル・システム・マネージャ・コンポーネントの名前。
<b>CP_Server_Manager_Alias</b>	Siebel サーバ・マネージャ・コンポーネントの別名。
<b>CP_Server_Manager_Name</b>	Siebel サーバ・マネージャ・コンポーネントの名前。
<b>CP_Server_Request_Broker_Alias</b>	Siebel サーバ要求ブローカ・コンポーネントの別名。
<b>CP_Server_Request_Broker_Name</b>	Siebel サーバ要求ブローカ・コンポーネントの名前。
<b>CP_Server_Request_Processor_Alias</b>	Siebel サーバ要求ブローカ・コンポーネントの別名。

UI 要素	詳細
<b>CP_Server_Request_Processor_Name</b>	Siebel サーバ要求プロセッサ・コンポーネントの名前。
<b>Database_Connection_URL</b>	<p>データベース接続の URL。</p> <p><b>例：</b> ODBC 接続の名前が test の場合、URL は jdbc:odbc:test になります。</p> <p>接続するデータベースの接続 URL を入力します。構文は、          jdbc:oracle:thin:@ &lt;サーバ名または IP アドレス&gt;:&lt;データベース・サーバ・ポート&gt;;sid=&lt;sid&gt; になります。</p> <p><b>例：</b> ポート 1521 を使用して、マシンの ORCL データベースに接続するには、次の接続 URL を使用します。          jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL.</p> <p><b>注：</b> 前述の例のようにコロンと @ 記号を含める必要があります。</p>
<b>Database_Driver</b>	データベース接続に使用するドライバ。
<b>Database_PASSWORD</b>	Siebel データベースにアクセスするために使用するユーザ名のパスワード。
<b>Database_Username</b>	Siebel データベースにアクセスするために SiteScope で使用する必要があるユーザ名。
<b>Enterprise</b>	Siebel Enterprise サーバの名前。
<b>Gateway</b>	Siebel ゲートウェイ・サーバ・マシンの名前。
<b>PASSWORD</b>	Siebel クライアントのパスワード。
<b>SERVER_LIST</b>	Siebel アプリケーション・サーバが実行されているサーバの名前。
<b>Server_Logical_Instance_Name</b>	Siebel サーバの論理名。
<b>Server_Manager_Path</b>	<p>Siebel サーバ・マネージャ・クライアントのローカル・パス。</p> <p><b>例：</b> D:\sea703\client\bin。</p>
<b>Siebel_Database_Machine_Name</b>	Siebel データベース・マシンの名前。



UI 要素	詳細
<b>Siebel_Disk</b>	Siebel がインストールされているディスク・ドライブの名前。
<b>Siebel_Root_Dir</b>	Siebel の共有ルート・ディレクトリのパス。 <b>例:</b> Siebel 7.5.2 サーバの共有ルート・ディレクトリはsea752 になります
<b>サイレント・デプロイメント</b>	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。 <b>標準設定値:</b> 選択されていない
<b>Username</b>	Siebel クライアントのユーザ名。
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 <b>注:</b> このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 <b>標準設定値:</b> 選択されている

## Siebel ゲートウェイ・サーバ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>SERVER_LIST</b>	Siebel ゲートウェイ・サーバが実行されているサーバの名前。サーバ名の一部として、UNC パスを示す円記号 (\\) は入力しないでください。
<b>Siebel_Disk</b>	Siebel ゲートウェイ・サーバが実行されているディスク・ドライブ。
<b>Siebel_Logical_Instance_Name</b> (UNIX のみ)	Siebel サーバの論理名の値 (UNIX のみ)。

UI 要素	詳細
<b>Siebel_Root_Dir</b>	Siebel のルート・ディレクトリのパス。このディレクトリには、少なくとも管理コンソールがインストールされている必要があります。
<b>サイレント・デプロイメント</b>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注</b> : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>

## Siebel Web サーバ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>Application</b>	<p>監視する Siebel アプリケーション。</p> <p><b>例</b> : callcenter_enu。インストールされている Siebel アプリケーションの名前については、Siebel 管理者にお問い合わせください。</p>
<b>パスワード</b>	Siebel Web サーバにログインするために必要な Siebel クライアントのパスワード。
<b>SERVER_LIST</b>	Siebel Web サーバ・マシンの名前。選択した Siebel Web サーバを使用して、サーバ選択ページを表示します。[サーバ] ドロップダウン・メニューを使用して、Siebel Web サーバが実行されているサーバを選択します。
<b>Siebel_Disk</b>	Siebel Web サーバがインストールされているディスク・ドライブの名前またはドライブ文字。

UI 要素	詳細
<b>Siebel_Logical_Instance_Name</b>	Siebel サーバの論理名の値（UNIX のみ）。
<b>Siebel_Root_Dir</b>	Siebel の共有ルート・ディレクトリの名前。 例：Windows の Siebel のルート・ディレクトリ :sea752。
<b>サイレント・デプロイメント</b>	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。 <b>標準設定値</b> :選択されていない
<b>Username</b>	Siebel Web サーバにログインするために必要な Siebel クライアントのユーザ名。
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 <b>注</b> ：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 <b>標準設定値</b> :選択されている

## 第88章: Solaris Host ソリューション・テンプレート

Solaris Host ソリューション・テンプレートは、Solaris ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテストする標準設定の測定値で設定された、モニタの収集のデプロイに使用できるテンプレートです。

UNIX リソース・モニタの場合、監視対象サーバの3つの異なる測定値のデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、「[サーバ中心のレポートの作成](#)」(1357ページ)を参照してください。

**ヒント:** 必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、UNIX リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。

Solaris Host ソリューション・テンプレートを使用して、Solaris オペレーティング・システムを包括的に監視できます。SiteScope ユーザやIT 組織がアプリケーションに精通している必要はありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** Solaris Host ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』ドキュメント（<[SiteScope のルート・ディレクトリ](#)>[\sisdocs\pdfs\SiteScope\\_OS\\_Best\\_Practices.pdf](#)）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、【**ソリューション テンプレート**】を展開して【**Solaris Host**】を選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

Solaris Host ソリューション・テンプレートでは、Solaris 9、10 をサポートしています。

### ソリューション・テンプレート・モニタ

Solaris Host ソリューション・テンプレートでは、Solaris のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタをデプロイします。

- CPU の状態と使用率の詳細
- メモリ の状態と使用率の詳細
- ファイル・システムの状態と使用率の詳細

## タスク

### Solaris Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Solaris Host ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

**注:** Solaris Host ソリューション・テンプレートでは、各監視対象ホストの UNIX リソース・モニタをデプロイします。これは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要となる補足モニタです。

#### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- SiteScope サーバは、監視対象 Solaris ホストに接続できる必要があります。
- 対象サーバを UNIX リモート・マシンとして SiteScope に追加し、UNIX リモート・テストにパスする必要があります（[\[リモート サーバ\]](#) > [\[UNIX リモート サーバ\]](#)）。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\[新規 UNIX リモート サーバ\] / \[UNIX リモート サーバの編集\] ダイアログ・ボックス」\(501ページ\)](#)を参照してください。

#### 注:

- サポートされている Solaris オペレーティング・システムを実行している SiteScope サーバ自体を監視することもできます。
- このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Solaris をサポートしています。詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）の「システム要件」を参照してください。

#### 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」\(916ページ\)](#)を参照してください。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

Solaris Host ソリューション・テンプレートの「デプロイメント値」ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、後述の「UI の説明」セクションを参照してください。

UI の説明

[Solaris Host ソリューションテンプレート] ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。UNIX 接続プロファイルを作成する手順については、「リモート UNIX サーバを監視するための SiteScope の設定」(499ページ)を参照してください。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 < SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 :選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 :選択されている

## 第89章: VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレート

VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレートを使用して、SiteScope で VMware モニタからデータを収集して、HP Operations エージェント上のデータ・ストアにデータを報告できます。このデータは、この後、サポートされている各種レポート製品（たとえば、HP の容量管理ソリューションである HP Service Health Optimizer (SHO) 、および HP のサービス中心クロス・ドメイン・レポートینگ・ソリューションである Service Health Reporter (SHR) ）で使用できます。

キャパシティ管理ソリューション・テンプレートは包括的な監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、【**ソリューション テンプレート**】を展開し、必要な VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレートを選択します（VMware データストア、VMware ホスト、VMware リソース・プール、VMware 仮想マシン）。

## 詳細な内容

### VMware データストア・テンプレート

VMware データストア・テンプレートは VMware データストア・モニタを使用して、VMware データセンター内の VMware データストア仮想マシン (VM) 上のパフォーマンス関連のリソース（接続性、容量、空き容量、スナップショット・サイズ）を監視します。

テンプレートをデプロイするときに指定する必要があるテンプレート変数は、connection\_link（VMware データストアの URL）、username（ホスト表示権限を持つ VMware データストア管理者の）、password（VMware データストアの）、vc\_name（VMware データストア名）です。そして、テンプレート・デプロイメント時に【**リモート サーバでモニタ プロパティを検証**】チェック・ボックスを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「VMware データストア・デプロイメント値」\(1023 ページ\)](#)を参照してください。

**注:** VMware ソリューション・テンプレート・モニタは、しきい値設定で設定されていません。これは、レポート製品には生データとトポロジだけが必要だからです。

## VMware ホスト・テンプレート

VMware ホスト・テンプレートは、VMware ホスト・モニタを使用して、VMware ホスト・サーバとそのゲスト仮想マシンのパフォーマンスと設定メトリックを監視します。VMware Host ソリューション・テンプレートでは、特定の VMware VirtualCenter に対して一連のモニタがデプロイされます。このテンプレートは、監視対象の各ホストにデプロイする必要があります。

VMware Host ソリューション・テンプレートでは、VMware Host パフォーマンスの次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- VMware ホスト CPU
- VMware ホスト メモリ
- VMware ホスト・ストレージ
- VMware ホスト・ネットワーク
- VMware ホスト状態

**注:** VMware Host ソリューションの詳細については、『SiteScope VMware Host Best Practices』ドキュメント ([<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\\_VMware\\_Host\\_Best\\_Practices.pdf](#)) を参照してください。

このテンプレートがサポートするものは次のとおりです。

- VMware VirtualCenter 2.x
- VMware ESX 3.x, 4.0, 4.1
- VMware ESXi 3.5, 4.0, 4.1, 5.0, 5.1
- VMware ESX 2.5 via VirtualCenter 2.x
- VMware ESX 3.x via VirtualCenter 3.x
- VMware vSphere 4.0, 4.1, 5.0, 5.1 (SSO ログインでもサポートされます) , 5.5

テンプレートをデプロイするときに指定する必要があるテンプレート変数は、Host name, connection\_link (vCenter または ホスト URL), username (vCenter またはホスト表示権限を持つホスト・ユーザ名), password (vCenter またはホスト・パスワード), is vCenter (vCenter の場合 true, ホストの場合 false) です。また、テンプレートのデプロイメント時に **リモートサーバでモニタ プロパティを検証** チェックボックスを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「VMware ホスト・デプロイメント値」\(1024ページ\)](#)を参照してください。

VMware ホストの各モニタは、BSM への次のトポロジのレポートも実行します。

- クラスタ -> ホスト
- データセンター -> ホスト
- データセンター -> クラスタ



## VMware リソース・プール・テンプレート

リソース・プール・テンプレートでは、VMware パフォーマンス・モニタを使用して、リソース・プールのパフォーマンスと設定測定値を監視します。このテンプレートは、プールと 1 対 1 に対応しており、すべてのリソース・プールに対してデプロイさせます。

テンプレートをデプロイするときに指定する必要があるテンプレート変数は、resource pool name, vCenter url, username (vCenter またはリソース・プール表示権限を持つホスト・ユーザ名), password (vCenter パスワード) です。また、テンプレートのデプロイメント時に **リモート サーバでモニタ プロパティを検証** チェックボックスを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「VMware リソース・プール・デプロイメント値」\(1025ページ\)](#)を参照してください。

VMware パフォーマンス・モニタは、BSM への次のトポロジのレポートも実行します。

- ・ クラスタ -> リソース・プール
- ・ ESX ホスト -> VM
- ・ クラスタ -> VM
- ・ クラスタ -> リソース・プールから VM

## VMware 仮想マシン・テンプレート

VM テンプレートでは、VMware パフォーマンス・モニタを使用して、VM のパフォーマンスと設定測定値を監視します。このテンプレートは、監視対象の各 VM にデプロイする必要があります。

テンプレートをデプロイするときに指定する必要があるテンプレート変数は、vm (VM 名), vCenter URL, username (VM表示権限を持つ vCenter ユーザ名), password (vCenter パスワード) です。テンプレートのデプロイメント時には **リモート サーバでモニタ プロパティを検証** チェックボックスをクリアすることをお勧めします。このオプションをクリアすると、サーバを接続しなくてもモニタがデプロイされ、したがって、VM の電源入切時にテンプレートのデプロイメントが可能となります。このオプションが選択されると (標準設定), 電源が投入されていない VM にはデプロイメントはできません。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「VMware バーチャル・マシン・デプロイメント値」\(1026ページ\)](#)を参照してください。

# タスク

## VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、VMware キャパシティ管理ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

## 1. 前提条件

ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。

## 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」\(916ページ\)](#)を参照してください。

### VMware ホスト・ソリューション・テンプレートに関する注意事項：

- VMware ホスト・ソリューション・テンプレートでは、2つの方法でESXホストを監視できます：<vCenter 経由>と<ESXで直接>vCenterマシンに対する負荷を抑えるためにESXホストを直接監視することをお勧めします。
- 参照可能なモニタがテンプレートにデプロイされている場合、選択したパターンに一致するカウンタ数は、（参照可能なモニタが持つことができるカウンタ数を制限する `_browsableContentMaxCounters` パラメータに加えて）<SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルの `_maxCountersForRegexMatch` パラメータによって制限されます。デプロイの間、パターンに一致するカウンタ数がこの値を超えると、この値までのカウンタ数だけが保存されます。これらの両パラメータに同じ値を使用することをお勧めします（これらの両パラメータの標準設定値は1000です）。

### ヒント:

CSVファイルを使用してソリューション・テンプレートをデプロイすることをお勧めします。これは、ユーザ・インタフェースでデプロイメントごとに変数値を手動で入力しなくても、複数のデプロイメントを1回で実行できるからです。

ファイル・オプションへのvSphereクライアント・エクスポートを使用してVMwareキャパシティ管理テンプレート用のCSVファイルを作成できます（**[ファイル]** > **[エクスポート]** > **[エクスポート リスト]**）。この方法で、すべてのVM名、リソース・プール名、ホスト名をCSVファイルにエクスポートできます。ファイルの作成後、ファイルを編集し、vCenter URL、ユーザ名、パスワードなどのテンプレート変数を追加できます。

CSVファイルを使用したデプロイの詳細については、[「CSVファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」\(864ページ\)](#)を参照してください。

## 3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UIの説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

**ヒント:** テンプレートのデプロイメント時には**「リモート サーバでモニタ プロパティを検証」**チェックボックスをクリアすることをお勧めします。このオプションをクリアすると、サーバを接続しなくてもモニタがデプロイされ、したがって、VM の電源入切時にテンプレートのデプロイメントが可能となります。このオプションが選択されると（標準設定）、電源が投入されていないVM にはデプロイメントはできません。

## UI の説明

### VMware データストア・デプロイメント値

VMware データストア・テンプレートは VMware データストア・モニタを使用して、VMware データセンター内の VMware データストア仮想マシン（VM）上のパフォーマンス関連のリソース（接続性、容量、空き容量、スナップショット・サイズ）を監視します。

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
connection_link	監視する VMware データストアの URL。
vc_name	監視する VMware データストアの名前。
username	ホスト表示権限を持つ VMware データストア管理者のユーザ名。
password	VMware データストアのパスワード。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。  標準設定値 :選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。  注 :このオプションは、テンプレートのデプロイメント時にはクリアすることをお勧めします。このオプションをクリアすると、サーバを接続しなくてもモニタがデプロイされ、したがって、VM の電源入切時にテンプレートのデプロ

UI 要素	詳細
	<p>イメントが可能となります。このオプションが選択されると（標準設定），電源が投入されていない VM にはデプロイメントはできません。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>

## VMware ホスト・デプロイメント値

VMware ホスト・テンプレートでは，VMware ホスト・モニタを使用してホストのパフォーマンスと設定測定値を監視します。このテンプレートは，監視対象の各ホストにデプロイする必要があります。

次に，各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>connection_link</b>	監視する vCenter またはホスト・サーバの URL。
<b>username</b>	VMware VirtualCenter またはホスト表示権限を持つホスト管理者のユーザ名。
<b>password</b>	VMware VirtualCenter またはホストのパスワード。
<b>host</b>	監視する VMware ホストの名前。
<b>is vCenter</b>	vCenter の場合「true」，ESX ホストの場合「false」を入力します。
<b>サイレント・デプロイメント</b>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され，SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより，テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は，<b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して，テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。このオプションを選択すると，リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>注</b> :このオプションは，テンプレートのデプロイメント時にはクリアすることをお勧めします。このオプションをクリアすると，サーバを接続しなくてもモニタがデプロイされ，したがって，VM の電源入切時にテンプレートのデプロイメントが可能となります。このオプションが選択されると（標準設定），電</p>

UI 要素	詳細
	<p>源が投入されていない VM にはデプロイメントはできません。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>

### VMware リソース・プール・デプロイメント値

リソース・プール・テンプレートでは、VMware パフォーマンス・モニタを使用して、リソース・プールのパフォーマンスと設定測定値を監視します。このテンプレートは、監視対象の各リソース・プールにデプロイする必要があります。

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>resource_pool_name</b>	監視するリソース・プールの名前。
<b>vcenter_url</b>	監視する vCenter の URL。
<b>username</b>	リソース・プール表示権限を持つ VMware vCenter の名前。
<b>password</b>	VMware vCenter のパスワード。
<b>サイレント・デプロイメント</b>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。このオプションは、必ずテンプレートのデプロイメント時に選択します。</p> <p><b>注</b> : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>

VMware バーチャル・マシン・デプロイメント値

VM テンプレートでは、VMware パフォーマンス・モニタを使用して、VM のパフォーマンスと設定測定値を監視します。このテンプレートは、VM と 1 対 1 に対応しており、すべての VM に対してデプロイさせます。

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
vm	監視する VM の名前。
vcenter_url	監視する vCenter の URL。
username	VM 表示権限を持つ VMware vCenter の名前。
password	VMware vCenter のパスワード。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>注</b> :このオプションは、テンプレートのデプロイメント時にはクリアすることをお勧めします。このオプションをクリアすると、サーバを接続しなくてもモニタがデプロイされ、したがって、VM の電源入切時にテンプレートのデプロイメントが可能となります。このオプションが選択されると（標準設定）、電源が投入されていない VM にはデプロイメントはできません。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>

## 第90章: VMware Host ソリューション・テンプレート

VMware ホスト・サーバの異なる側面を監視するために VMware Host ソリューション・テンプレートを使用できます。これには、VMware ホスト・サーバおよびそのゲスト仮想マシンの CPU、メモリ、ネットワーク、状態、およびストレージに関連するカウンタの監視が含まれます。

VMware Host ソリューション・テンプレートでは、特定の VMware VirtualCenter に対して一連のモニタがデプロイされます。これらのモニタは、VMware ホストの監視のベスト・プラクティスを網羅しています。このテンプレートには、VMware ホスト状態、VMware ホスト CPU、VMware ホスト・メモリ、VMware ホスト・ストレージ、および VMware ホスト・ネットワーク・モニタが含まれます。

VMware Host ソリューション・テンプレートは包括的な監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

### ヒント: VMware ソリューション・テンプレートを使用するケース

- VMware ホストを監視して、データを収集し、全体的なパフォーマンスおよび可用性を調べる場合は、VMware Host ソリューション・テンプレートを使用します。
- 特定のパフォーマンス上の問題を見つけ、VMware のベスト・プラクティスに従ってその根本原因を突き止める必要がある場合は、[「VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレート」](#) (1031ページ)を使用します。VMware Host ソリューション・テンプレートに含まれている大半のメトリックは、このテンプレートにも含まれています。

**注:** VMware Host ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope VMware Host Best Practices』ドキュメント（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_VMware\_Host\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

[**テンプレート**] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[**ソリューション テンプレート**] を展開し、**VMware Host** ソリューション・テンプレートを選択します。

## 詳細な内容

### 対応バージョン

VMware Host ソリューション・テンプレートでサポートされているバージョンは次のとおりです。

- VMware VirtualCenter 2.x
- VMware ESX 3.x, 4.0, 4.1
- VMware ESXi 3.5, 4.0, 4.1, 5.0, 5.1
- VMware ESX 2.5 via VirtualCenter 2.x
- VMware ESX 3.x via VirtualCenter 3.x
- VMware vSphere 4.0, 4.1, 5.0, 5.1 (SSO ログインでもサポートされます) , 5.5

### ソリューション・テンプレート・モニタ

VMware Host ソリューション・テンプレートでは、VMware Host パフォーマンスの次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- VMware ホスト CPU
- VMware ホスト メモリ
- VMware ホスト・ネットワーク
- VMware ホスト・ストレージ
- VMware ホスト状態

## タスク

### VMware Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、VMware Host ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

#### 1. 前提条件

ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。

#### 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする



ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、  
[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 \(916ページ\)](#)を参照してください。

ヒント:

- VMware ホスト・ソリューション・テンプレートでは、2つの方法でESX ホストを監視できます:< vCenter 経由 > と < ESX で直接 > vCenter マシンに対する負荷を抑えるために ESX ホストを直接監視することをお勧めします。
- CSV ファイルを使用してソリューション・テンプレートをデプロイすることをお勧めします。これは、ユーザ・インタフェースでデプロイメントごとに変数値を手動で入力しなくても、複数のデプロイメントを1回で実行できるからです。CSV ファイルを使用したデプロイの詳細については、[「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」 \(864ページ\)](#)を参照してください。

**注:** 参照可能なモニタがテンプレートにデプロイされている場合、選択したパターンに一致するカウンタ数は、（参照可能なモニタが持つことができるカウンタ数を制限する `_browsableContentMaxCounters` パラメータに加えて）<SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルの `_maxCountersForRegexMatch` パラメータによって制限されます。デプロイの間、パターンに一致するカウンタ数がこの値を超えると、この値までのカウンタ数だけが保存されます。これらの両パラメータに同じ値を使用することをお勧めします（これらの両パラメータの標準設定値は 1000 です）。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## UI の説明

[VMware Host ソリューション テンプレート] ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
connection_link	監視する vCenter またはホスト・サーバの URL（高負荷環境では、ホスト・サーバを使用して直接接続することをお勧めします）。
username	VMware VirtualCenter またはホスト表示権限を持つホスト管理者のユーザ名。
password	VMware VirtualCenter またはホストのパスワード。

UI 要素	詳細
host	監視する VMware ホスト・サーバの名前。
is vCenter	vCenter の場合「true」、ESX ホストの場合「false」を入力します。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。このオプションをクリアすると、サーバに接続しなくてもモニタがデプロイされ、したがって、VM のパワーオンおよびパワーオフ時にテンプレートのデプロイメントが可能となります。このオプションを選択すると（標準設定）、パワーオンになっていない VM にはデプロイできません。</p> <p><b>注</b>：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>

# 第91章: VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレート

VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレートは、VMware vSphere のパフォーマンス・トラブルシューティングを行うための VMware 公認のベスト・プラクティスに準拠したモニタのセットをデプロイします。これらのモニタは、SiteScope の計算済みメトリックを使用して、VMware ホスト上のパフォーマンスに関する特定の問題を突き止め、問題のある ESX ホストや仮想マシンを報告します。このテンプレートは、VMware ホスト・サーバとそのゲスト仮想マシン上の関連するカウンタのパフォーマンス・トラブルシューティングを行うため、VMware ホスト、CPU、メモリ、ネットワーク、状態、ストレージの各モニタをデプロイします。

VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレートを使用することで、包括的な監視を行うことができます。SiteScope ユーザや IT 組織に、アプリケーションの専門知識は不要です。また、モニタの設定やデプロイに要する時間が短縮され、リアルタイムのパフォーマンス・ボトルネックと長期のトレンドの両方を容易に特定できます。しかも、実運用システムで発生するオーバーヘッド・コストは最小限で済みます。

## ヒント: VMware ソリューション・テンプレートを使用するケース

- VMware ホストを監視して、データを収集し、全体的なパフォーマンスおよび可用性を調べる場合は、[「VMware Host ソリューション・テンプレート」 \(1027ページ\)](#)を使用します。
- 特定のパフォーマンス上の問題を見つけ、VMware のベスト・プラクティスに従ってその根本原因を突き止める必要がある場合は、[「VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレート」 \(1031ページ\)](#)を使用します。VMware Host ソリューション・テンプレートに含まれている大半のメトリックは、このテンプレートにも含まれています。

**注:** VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレートの詳細については、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_VMware\_Perf\_Troubleshooting\_Best\_Practices.pdf の「SiteScope VMware Host For Performance Troubleshooting Best Practices」ドキュメントを参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

## アクセス方法

[**テンプレート**] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[**ソリューション テンプレート**] を展開し、[**VMware Host For Performance Troubleshooting**] ソリューション・テンプレートを選択します。

# 詳細な内容

## 対応バージョン

VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレートでサポートされているバージョンは次のとおりです。

- VMware VirtualCenter 2.x
- VMware ESX 3.x, 4.0, 4.1
- VMware ESXi 3.5, 4.0, 4.1, 5.0, 5.1
- VMware ESX 2.5 via VirtualCenter 2.x
- VMware ESX 3.x via VirtualCenter 3.x
- VMware vSphere 4.0, 4.1, 5.0, 5.1 (SSO ログインでもサポートされます) , 5.5

## VMware Host Best Performance Troubleshooting の適用範囲

VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレートは、VMware ホストのパフォーマンスの尺度となる次の各側面を対象として、VMware のパフォーマンス・トラブルシューティングに関するベスト・プラクティスを実装しています。

CPU	メモリ	ネットワーク	ストレージ
<ul style="list-style-type: none"><li>• アクティブな VM のスワップ待ち時間</li><li>• ゲスト CPU の飽和状態</li><li>• 低稼働率のホストで実行されている VM の高 CPU レディ・タイム</li><li>• ホスト CPU の飽和状態</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• アクティブな VM のメモリ圧縮</li><li>• アクティブな VM のメモリ・スワップ</li><li>• ゲストの高メモリ要求</li><li>• ホストでの高メモリ要求</li><li>• 過去の VM メモリ・スワップ</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• 受信パケットのドロップ</li><li>• 送信パケットのドロップ</li><li>• ネットワーク・コントローラのデータ転送速度のランダムな急上昇</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• 過負荷ストレージ・デバイス</li><li>• 低速ストレージ・デバイス</li><li>• 小サイズのストレージ・デバイス</li><li>• 共有データストアにおける I/O 待ち時間のランダムな急上昇</li></ul>
VMware のパフォーマンス・トラブルシューティングに関するベスト・プラクティスの詳細については、VMware の『 <a href="https://communities.vmware.com/servlet/JiveServlet/downloadBody/14905-102-3-17952/vsphere41-performance-troubleshooting.pdf">Performance Troubleshooting for VMware vSphere 4.1</a> 』(https://communities.vmware.com/servlet/JiveServlet/downloadBody/14905-102-3-17952/vsphere41-performance-troubleshooting.pdf) ドキュメントを参照してください。			

このソリューションは、カウンタとパターンが事前に設定されたモニタ（VMware ホスト CPU / メモリ / ネットワーク / ストレージ / 状態）をデプロイすることで、VMware ホストのパフォーマンスを

監視することを目的としています。パターンには、SiteScope の計算済みメトリックで正規表現を使用します。1つのパターンが1つ以上のカウンタを表します。

上記の各パフォーマンス尺度がモニタに個別の計算済みメトリックとして実装されています。このメトリックは、パフォーマンス上の問題が発生すると 100（エラー状態）、そうでない場合は 1（良好状態）を返します。

モニタには、問題のある ESX、VM、VNIC、データストアの名前を返す補助用の計算済みメトリックも用意されています。補助用の計算済みメトリック名は、ダイアグラム名と同じプレフィックスと適切なポストフィックスから成ります（例：Active VM Memory Compression - VM with Highest Compression Rate）

すべての計算済みメトリックには、監視対象エンティティとして HostSystem が設定されます。テンプレート作成時に使用した特定の HostSystem が監視対象エンティティとして設定されます。

## タスク

### VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

#### 1. 前提条件

ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。

#### 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、「[SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法](#)」(916ページ)を参照してください。

#### ヒント:

- CSV ファイルを使用してソリューション・テンプレートをデプロイすることをお勧めします。これは、ユーザ・インタフェースでデプロイメントごとに変数値を手動で入力しなくても、複数のデプロイメントを 1 回で実行できるからです。CSV ファイルを使用したデプロイの詳細については、「[CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法](#)」(864ページ)を参照してください。
- 参照可能なモニタがテンプレートにデプロイされている場合、選択したパターンに一致するカウンタ数は、（参照可能なモニタが持つことができるカウンタ数を制限する \_

**browsableContentMaxCounters** パラメータに加えて) <SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルの **\_maxCountersForRegexMatch** パラメータによって制限されます。デプロイの間、パターンに一致するカウンタ数がこの値を超えると、この値までのカウンタ数だけが保存されます。これらの両パラメータに同じ値を使用することをお勧めします（これらの両パラメータの標準設定値は 1000 です）。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

**ヒント:** VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション・テンプレートでは、2 つの方法で ESX ホストを監視できます: <vCenter 経由> と <ESX で直接> vCenter マシンに対する負荷を抑えるために ESX ホストを直接監視することをお勧めします。

4. しきい値設定を調整する（任意指定）

エラーまたは警告しきい値は、検出されたパフォーマンス上の問題の重大度に応じて、該当する計算済みメトリックに定義されています。このデフォルトのしきい値設定は、必要に応じて調整できます。また、しきい値設定を追加することもできます。

5. 結果

ソリューション・テンプレートによって、モニタ・ツリーに新しいモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に個々のソリューション・モニタが追加されます。このモニタ・グループ・コンテナには、VMware Host For Performance Troubleshooting on <サーバ名> の形式で名前が割り当てられます。サーバ名は、[サーバ] ボックスで選択したサーバです。

これらのモニタは、SiteScope のほかのモニタと同じ方法で表示、編集、削除できます。

ソリューション・テンプレート・モニタに関するレポートを表示する場合は、計算済みメトリックよりも通常のカウンタに注目するようにしてください。

**注:**

- ・ ソリューション・テンプレート・デプロイメントが失敗すると、失敗の理由を示すメッセージが表示されます。
- ・ 計算済みメトリックが 100（エラー状態）を返した場合は、（ユーザ・インタフェースまたは『Best Practices Guide』で）補助用計算済みメトリックの説明を参照して、詳細を確認してください。

## UI の説明

[VMware Host For Performance Troubleshooting ソリューション テンプレート] ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>connection_link</b>	監視する vCenter またはホスト・サーバの URL。
<b>username</b>	VMware VirtualCenter またはホスト表示権限を持つホスト管理者のユーザ名。
<b>password</b>	VMware VirtualCenter またはホストのパスワード。
<b>host</b>	監視する VMware ホスト・サーバの名前。
<b>is vCenter</b>	vCenter の場合「true」、ESX ホストの場合「false」を入力します。
<b>High_CPU_Usage</b>	<p>デプロイ時に、ホスト・サーバの高 CPU 使用率を定義する値（パーセンテージ）が設定されます。この値を超えると、ホスト・サーバの CPU 使用率が高いとみなされます。</p> <p><b>標準設定値 : 80</b></p> <p><b>注 :</b> この変数値は 95 未満である必要があります。</p>
<b>サイレント・デプロイメント</b>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されていない</p>
<b>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</b>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。このオプションをクリアすると、サーバに接続しなくてもモニタがデプロイされ、したがって、VM のパワーオンおよびパワーオフ時にテンプレートのデプロイメントが可能となります。このオプションを選択すると（標準設定）、パワーオンになっていない VM にはデプロイできません。</p> <p><b>注 :</b> このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されている</p>

## 第92章: WebLogic ソリューション・テンプレート

WebLogic ソリューション・テンプレートを使用すると、標準設定の測定値が設定された一連の WebLogic モニタをデプロイできます。このモニタは、WebLogic アプリケーション・サーバとデプロイしたアプリケーションおよびコンポーネントの状況、可用性、パフォーマンスをテストします。デプロイしたモニタは、サーバ全体の統計（メモリ使用率など）と、個々の J2EE コンポーネントに固有の測定値（特定の EJB のアクティブ化とパッシブ化の数など）をチェックします。

このソリューションは、重要なアプリケーション・サーバ測定値を監視する複数のグループを標準設定で自動的に作成しますが、ユーザが監視可能な個々のコンポーネントのすべてまたは一部を選択できるユーザ・インタフェースも備えています。

WebLogic ソリューション・モニタのデプロイメント・プロセスは、高度なカスタマイズが可能で、ユーザがアプリケーション・サーバ上の特定の J2EE コンポーネントを選択して SiteScope でアクティブに監視できます。

WebLogic ソリューション・テンプレートを使用して、WebLogic を包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織が WebLogic の専門家である必要はありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** WebLogic ソリューション・テンプレートの詳細については、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_WebLogic\_Best\_Practices.pdf の「SiteScope WebLogic Best Practices」ドキュメントを参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【**テンプレート**】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、【**ソリューション テンプレート**】を展開し、必要な WebLogic ソリューション・テンプレートを選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

WebLogic ソリューション・テンプレートでは、WebLogic 6.x, 7.x, 8.x, 9.x, 10.x の各バージョンのサーバをサポートしています。



## ソリューション・テンプレート・モニタ

WebLogic ソリューション・テンプレートは、WebLogic のパフォーマンスと状況について次の側面を対象とするモニタをデプロイします。

- **サーバ・パフォーマンス統計** : このカテゴリは、WebLogic アプリケーション・サーバの管理インタフェースを介して公開されるサーバ全体の一連のリソースを参照します。
- **アプリケーション・パフォーマンス統計** : デプロイしたアプリケーション、EJB、Web アプリケーション、サーブレットのすべての測定値を WebLogic ソリューションを介して監視できます。モニタの自動デプロイ先となる J2EE コンポーネントは、ユーザが選択します。WebLogic ベスト・プラクティスに基づいた一連の測定値が、選択した J2EE コンポーネントごとに監視されます。
- **WebLogic ソリューションの測定値** : 監視可能なコンポーネントのリストについては、『SiteScope WebLogic Best Practices』ドキュメントを参照してください。

## 監視対象の WebLogic モジュールの選択

WebLogic ソリューションには階層リストが表示され、そこからユーザが WebLogic モニタのデプロイ先とするモジュールを選択できます。このリストは次の 2 つのメイン・セクションに分類されています。

- サーバ単位のリソース
- アプリケーション別に編成される J2EE コンポーネント

これらのカテゴリのモジュールの中には、システムの重要なコンポーネントを表すため、標準設定で自動的に選択されるものがあります（アプリケーション・サーバの JVM 統計など）。それ以外のモジュールは、自動的に選択されません。このため、ユーザはこのソリューションのデプロイメントを、特定のアプリケーション、特定タイプの EJB、一連のサーブレットや Web アプリケーション、その他何らかのアプリケーション・サーバの側面に特化するようにカスタマイズできます。

このモジュールのリストのほとんどの部分は、直感的に編成されています。アプリケーション、EJB、Web アプリケーション、サーブレットの階層は、WebLogic 管理コンソールに表示されるこれらのエンティティの編成とよく似ています。ほとんどの場合、モジュールを選択すると、関連するすべての測定値を持つモニタが、WebLogic サーバの対応する部分にデプロイされます。ただし、監視対象の EJB を選択する場合、EJB は 3 つの測定値タイプ（プール、トランザクション、キャッシュ）に従って分類されています。これには次の 2 つの理由があります。（1）警告と編成を目的とする場合、WebLogic モニタ単位よりも特定の EJB の 1 つの側面を監視できる方が利便性が高く、（2）すべての EJB がこれら 3 つの測定値タイプのすべてを使用できるとは限りません。

次に、EJB 監視のタイプごとに監視される測定値について簡単に説明します。

- **EJB 単位のトランザクション統計** : この EJB モニタのカテゴリには、EJB に対して実行されたトランザクションに関する測定値が含まれます。測定値には、ロールバックされたトランザクション数、タイムアウトしたトランザクション数、正常に確定されたトランザクション数などがあります。
- **EJB 単位のプール統計** : この EJB モニタのカテゴリには、EJB のプールに関連する測定値が含まれます。この見出しの下にある EJB をユーザが選択すると、プールから Bean インスタンスを取得しようとして失敗した回数、プール内で現在利用可能なインスタンス数、現在インスタンスを待機

中のスレッド数、アプリケーション以外の例外が原因で Bean インスタンスが破棄された回数など、多くの有用な測定値が監視されます。

- **EJB 単位のキャッシュ統計**: キャッシュ統計には、特定の EJB のキャッシュに関する測定値が含まれます。この見出しの下にある EJB を監視対象に選択すると、キャッシュ・ヒット数とキャッシュ不在数、EJB のアクティブ化数とパッシブ化数などの測定値が監視されます。

## タスク

### WebLogic ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、WebLogic ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

#### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- WebLogic ソリューション・テンプレートは、ユーザ・インタフェースから選択したモジュールごとに WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタをデプロイします。このモニタは、Java JMX インタフェースを使用して WebLogic サーバのランタイム MBean にアクセスします。MBean は、パフォーマンス測定値を保持するコンテナです。SiteScope が MBean を監視できるようにするには、WebLogic サーバに特定の権限の設定が必要になる場合があります。SiteScope モニタ用の WebLogic サーバへのアクセス設定の概要については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタ」を参照してください。

#### 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」\(916ページ\)](#)を参照してください。

#### 3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UIの説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

#### 4. 監視対象の WebLogic モジュールの選択

EJB 監視のタイプごとに監視される測定値については、[「監視対象の WebLogic モジュールの選択」\(1037ページ\)](#)を参照してください。

#### 5. メインのブラウザ・ウィンドウを更新する

【Module Selection】ウィンドウの下部までスクロールして，【**Select Modules**】ボタンをクリックします。これにより，ブラウザのメイン・ウィンドウが更新され，選択したモジュールのリストが表示されます。ここで選択内容を確認して，モニタを作成しないモジュールがあれば削除します。

ブラウザのメイン・ウィンドウに表示されている選択したモジュールのリストに問題がなければ，【送信】をクリックします。

## UI の説明

WebLogic 9.x-10.x

【メイン設定】には次の要素が含まれています。

UI 要素	詳細
WEBLOGIC_URL	WebLogic 9.x または 10.x アプリケーション・サーバの URL。  標準設定値 : service:jmx:rmi:///jndi/iiop://<ローカル・ホスト>:7001/weblogic.management.mbeanservers.runtime  <ローカル・ホスト> は，WebLogic アプリケーション・サーバ 9.x または 10.x を実行するマシンの名前です。
Counters	このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。 【カウンタの取得】ボタンを使用してカウンタを選択します。
カウンタの取得	【Get Counters】ダイアログ・ボックスが開き，監視対象のカウンタを選択できます。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され，SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより，テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は， <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。  標準設定値 :選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して，テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。  注：このオプションを選択すると，リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。

UI 要素	詳細
	標準設定値 : 選択されている

WebLogic 6.x, 7.x, 8.x

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>WEBLOGIC_PORT</b>	WebLogic サーバが応答するポート番号。 標準設定値 : 7001
<b>WEBLOGIC_PASSWORD</b>	WebLogic サーバへのログインに必要なパスワード。
<b>WEBLOGIC_USERNAME</b>	WebLogic サーバへのログインに必要なユーザ名。
<b>WEBLOGIC_SERVER</b>	WebLogic が実行されているサーバの名前またはアドレス。
<b>WEBLOGIC_TIMEOUT</b>	データ要求が WebLogic サーバに到達するまで待機する秒数。 標準設定値 : 180
<b>WEBLOGIC_JAR_FILE</b>	SiteScope マシンの weblogic.jar ファイルへの絶対パス。このファイルは、SiteScope サーバにインストールされている必要があり、WebLogic サーバからダウンロードできます。 例 : c:\bea\weblogic7\ebcc\lib\ext\weblogic.jar。
<b>Counters</b>	このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。 [カウンタの取得] ボタンを使用してカウンタを選択します。
<b>カウンタの取得</b>	[Get Counters] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のカウンタを選択できます。
<b>サイレント・デプロイメント</b>	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、

UI 要素	詳細
	<p>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 :選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 :選択されている</p>

## 第93章: WebSphere ソリューション・テンプレート

WebSphere ソリューション・テンプレートを使用すると、標準設定の測定値が設定された一連の WebSphere モニタをデプロイできます。これらのモニタは、IBM WebSphere アプリケーション・サーバの可用性、サーバ統計情報、デプロイ済みの J2EE コンポーネントをテストします。このソリューション・テンプレートを使用して、サーバ単位のリソースと測定値（スレッド・プールや JVM の測定値など）のモニタをデプロイできます。また、このソリューション・テンプレートを使用して、デプロイした EJB、Web アプリケーション、サーブレットのモニタも作成できます。

WebSphere ソリューション・モニタのデプロイメント・プロセスは、高度なカスタマイズが可能で、ユーザがアプリケーション・サーバの特定の J2EE コンポーネントを選択して SiteScope でアクティビティに監視できます。

WebSphere ソリューション・テンプレートを使用して、WebSphere を包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織が WebSphere の専門家である必要はありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

**注:** WebSphere ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope WebSphere Best Practices』ドキュメント（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\sisdocs\pdfs\SiteScope\_WebSphere\_Best\_Practices.pdf）を参照してください。これは、パスワード保護されたガイドです。パスワードは、ソリューション・テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後に提供されます。

### アクセス方法

【テンプレート】コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、【ソリューション テンプレート】を展開し、必要な WebSphere ソリューション・テンプレートを選択します。

## 学習事項

### 対応バージョン

WebSphere ソリューション・テンプレートでは、WebSphere Application Server 6.x、7.x、8.x をサポートしています。

### ソリューション・テンプレート・モニタ

WebSphere ソリューション・テンプレートは、WebSphere のパフォーマンスと状況について次の側面を対象とするモニタをデプロイします。

- **サーバ・パフォーマンス統計**: このカテゴリは、WebSphere アプリケーション・サーバの管理インタフェースを介して公開されるサーバ単位の一連のリソースを参照します。
- **アプリケーション・パフォーマンス統計**: デプロイしたアプリケーション、EJB、Web アプリケーション、サーブレットのすべての測定値を WebSphere ソリューションを介して監視できます。モニタの自動デプロイ先となる J2EE コンポーネントは、ユーザが選択します。WebSphere ベスト・プラクティスに基づいた一連の測定値が、選択した J2EE コンポーネントごとに監視されます。
- **WebSphere アプリケーション・サーバ・ソリューションの測定値**: 監視可能なコンポーネントのリストについては、『SiteScope WebSphere Best Practices』ドキュメントを参照してください。

## タスク

### WebSphere ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、WebSphere ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

#### 1. 前提条件

- ソリューション・テンプレートは、テンプレートをサポートする HP ライセンス・エディションの取得後にユーザ・インタフェースでのみ使用可能です。このテンプレートによってデプロイされたモニタを使用するには、使用可能な容量が十分にあるオペレーティング・システム・インスタンス (OSi) ライセンスが必要です。ライセンスについては、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』の「ライセンス」の項を参照してください。ライセンス購入の照会（または追加の容量が必要な場合）については、HP の営業担当にお問い合わせいただくか、[HP SiteScope 製品ページ](#)の「お問い合わせ」リンクを使用してください。
- WebSphere サーバ環境は、使用される環境に基づいて設定する必要があります。詳細については、『SiteScope モニタ・リファレンス・ガイド』の「WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ」を参照してください。

**注:** 標準設定では、WebSphere 6.x アプリケーション・サーバ・ソリューション・テンプレートは内部的な JVM メカニズムを使用します。したがって、このソリューション・テンプレートを使用する場合、内部 Java を使用するように監視環境を設定します。詳細については、「内部 Java を使用した WebSphere 6.0x サーバ環境の設定方法」および「内部 Java を使用した WebSphere 6.1x サーバ環境の設定方法」を参照してください。

#### 2. ソリューション・テンプレートをデプロイする

ソリューション・テンプレートのデプロイに使用できる方法と各手順の概要については、[「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 \(916ページ\)](#)を参照してください。

**注:** CSV ファイルを使用して WebSphere Application Server ソリューション・テンプレートをデプロイする場合は、二重スラッシュを使用してパスを指定する必要があります。例：  
C:\Folder\WAS\_8.5

これについてはドキュメントで説明する必要があると思われます。

3. ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力（ユーザ・インタフェース経由のデプロイメントの場合のみ）

次の「UI の説明」の項の説明に従って、[デプロイメント値] ページの各項目に入力します。

## UI の説明

[WebSphere ソリューション・テンプレート] ページ

次に、各ユーザ・インタフェース要素（変数の値）について説明します。

UI 要素	詳細
<b>WEBSphere_SERVER</b>	WebSphere アプリケーションが実行されているサーバの名前。サーバ名の一部として UNC パスを示すために円記号 (\\) を入力しないでください。
<b>WEBSphere_PORT</b>	WebSphere サーバのポート番号。 標準設定値 : 8880
<b>WEBSphere_USER_NAME</b>	SiteScope が WebSphere アプリケーション・サーバへのログオンに使用するユーザ名。  WebSphere 6.x では、ソリューション・テンプレートでグローバル・セキュリティはサポートされていません。つまり、任意のテキストを入力できますが、テキスト・ボックスを空白のままにすることはできません。グローバル・セキュリティの作業が必要な場合は、このテンプレートを完成させます。 WebSphere モニタを編集し、[モニタ設定パネルで、グローバル・セキュリティの各ボックスを更新します（[トラストストア]，[トラストストアのパスワード]，[キーストア]，[キーストアのパスワード]）。
<b>WEBSphere_PASSWORD</b>	SiteScope で WebSphere サーバへのログオンに使用するパスワード。  WebSphere 6.x では、ソリューション・テンプレートでグローバル・セキュリティはサポートされていません。つまり、任意のテキストを入力できますが、テキスト・ボックスを空白のままにすることはできません。グローバル・セキュリティの作業が必要な場合は、このテンプレートを完成させます。 WebSphere モニタを編集し、[モニタ設定パネルで、グローバル・セキュリティの各ボックスを更新します（[トラストストア]，[トラストストアのパスワード]，[キーストア]，[キーストアのパスワード]）。
<b>WEBSphere_</b>	SSL キー・ストア・ファイルのパスを入力します。通常、このファイルは秘密



UI 要素	詳細
<b>KEY_STORE_FILE</b>	<p>鍵を含む個人用証明書を保存するために使用されます。このファイルは、SiteScope マシンのクライアント・モニタ・ディレクトリにあります。</p> <p><b>標準設定値 :</b> C:\WebSphere\AppServer\profiles\default\etc\DummyClientKeyFile.jks</p>
<b>WEBSphere_KEY_STORE_PASSWORD</b>	<p>SSL キー・ストア・ファイルのパスワード。</p> <p><b>標準設定値 :</b> WebAS</p>
<b>WEBSphere_TRUST_STORE_FILE</b>	<p>SSL トラスト・ストア・ファイルのパスを入力します。通常、このファイルは、署名者の証明書（サーバの証明書の署名者が信頼できるかどうかを記述したもの）を保存するために使用されます。このファイルは、SiteScope マシンのクライアント・モニタ・ディレクトリにあります。</p> <p><b>標準設定値 :</b> C:\WebSphere\AppServer\profiles\default\etc\DummyClientTrustFile.jks</p>
<b>WEBSphere_TRUST_STORE_PASSWORD</b>	<p>SSL トラスト・ストア・ファイルのパスワード。</p> <p><b>標準設定値 :</b> WebAS</p>
<b>WEBSphere_CLIENT_PROPERTIES_FILE</b>	<p>クライアント・プロパティ・ファイル。</p> <p><b>標準設定値 :</b> /properties/soap.client.props</p>
<b>WEBSphere_DIRECTORY</b>	<p>WebSphere アプリケーション・サーバからの /java および /lib サブディレクトリが含まれる WebSphere ディレクトリへのパス。</p> <p>WebSphere 6.x では、このディレクトリには /profiles サブディレクトリも含まれている必要があります。このサブディレクトリには、グローバル・セキュリティに必要なキー・ストア・ファイルとトラスト・ストア・ファイルがすべて含まれています。/profiles サブディレクトリ内のサーバ・プロファイルは、<b>default</b> という名前にする必要があります。サーバ・プロファイルに別の名前が付いている場合は、名前を「<b>default</b>」に変更します。</p>
<b>WEBSphere_VERSION</b>	<p>監視する WebSphere Application Server のバージョン（6.0x, 6.1x, 7.0x, 8.0x, 8.5x）を選択します。</p> <p><b>標準設定値 :</b> WebSphere 6.x ソリューション・テンプレートの場合は 6.0x, WebSphere 7.x ソリューション・テンプレートの場合は 7.0x, WebSphere 8.x ソリューション・テンプレートの場合は 8.0x。</p>

UI 要素	詳細
<b>WEBSPPHERE_</b> <b>USE_</b> <b>EXTERNAL_JV</b> (WebSphere 6.x ソリューション のみ)	<p>外部 JVM を使用して監視が行えるようにします。標準設定では、WebSphere モニタは内部 JVM を使用します。外部 JVM は大量のリソースを消費し、起動に時間がかかる上、エラー処理が適切に行われません。</p> <p><b>注：</b> 外部 JVM を使用する場合は、証明書管理を介して追加される証明書は使用できません。</p> <p><b>標準設定値：</b> false</p>
<b>Counters</b>	<p>このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。  <b>〔カウンタの取得〕</b> ボタンを使用してカウンタを選択します。</p>
<b>カウンタの取得</b>	<p>〔Get Counters〕ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のカウンタを選択できます。</p>
<b>サイレント・デ プロイメント</b>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、  <b>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \logs\silent_deployment.log</b> に記録されます。</p> <p><b>標準設定値：</b> 選択されていない</p>
<b>リモート・サー バでモニタ・プ ロパティを検証</b>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p><b>注：</b> このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p><b>標準設定値：</b> 選択されている</p>

## 第10部: SiteScope でのデータの表示

SiteScope で監視されているインフラストラクチャ要素の現在のパフォーマンス・データは、**「SiteScope ダッシュボード」** で表示できます。ダッシュボードには、モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループとモニタのテーブルが表示されます。各グループまたはモニタのノードをダブルクリックして、子ノードおよびモニタに移動できます。ダッシュボードからグループまたはモニタに対してアクションを実行することもできます。詳細については、**「SiteScope ダッシュボード」 (1048ページ)**を参照してください。

あるいは、**「統合コンソール」**を使用して、大規模分散環境の管理を簡素化し、問題の特定および解決能力を高めることもできます。詳細については、**「SiteScope 統合コンソール」 (1077ページ)**を参照してください。

統合コンソールには、次のビューがあります。

- **Ops ビュー** : Multi-View とイベント・コンソールを組み合わせることで1つのビューにしたものです。両者を並べて作業できるため、調査担当者は、選択したモニタまたはモニタ・グループに関連付けられたイベント、または選択したイベントに関連付けられたモニタを特定し、ドリル・ダウンしてトラブルシューティングを実行することにより、問題を分離および診断できます。
- **イベント コンソール** : 単一のインタフェースから、監視対象環境のステータスのリアルタイム追跡、イベントの優先順位付けと配信、イベントのライフサイクル管理を実行できます。また、イベント履歴の詳細を確認することもできます。イベント履歴は、以前の問題の解決方法を追跡したり、トレンドや隠れたパターンを見つけ出すのに便利です。詳細については、**「イベント・コンソール」 (1102ページ)**を参照してください。
- **Multi-View** : IT インフラストラクチャに存在するあらゆる監視対象のステータスを単一のビューに表示します。各個人の見方に合わせてさまざまな方法でオブジェクトをグループ化できます。Multi-View では、たとえば、SiteScope のグループやモニタを、ネストされた矩形のセットとして階層ツリー・マップに表示できます。その際、データ間の関係が失われることはありません。モニタをターゲット・リモート・サーバでグループ化して表示したり、カスタムの検索 / フィルタ・タグでモニタをグループ化して表示するといったことが可能です。詳細については、**「Multi-View」 (1080ページ)**を参照してください。

## 第94章: SiteScope ダッシュボード

ダッシュボードには SiteScope によって監視されているインフラストラクチャ要素の現在のパフォーマンス・データが表示され、フィルタの定義に使用する機能にアクセスできます。ダッシュボードには、モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタのテーブルが表示されます。各グループまたはモニタのノードをダブルクリックして、子ノードおよびモニタに移動できます。

ダッシュボードでは、サーバ中心のレポート、事前に設定されたクイック・レポート、モニタの確認の状態、モニタ・ツール、SiteScope 状況ステータス、モニタ履歴情報にアクセスできます。また、モニタや警告を有効化/無効化することもできます。

### アクセス方法

【**モニタ**】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーでオブジェクトを選択し、右側の表示枠の【**ダッシュボード**】タブをクリックします。

## 学習事項

### SiteScope ダッシュボードの概要

SiteScope 監視では、システムの可用性とパフォーマンスが視覚的にリアルタイムに表示されます。SiteScope モニタを設定して、さまざまなインフラストラクチャ・コンポーネント（Web、アプリケーション、データベース、ファイアウォール・サーバなど）の測定値を収集します。次に、SiteScope ダッシュボードで表示するために状態と測定値が集計されます。

ダッシュボードは SiteScope モニタ・ツリー階層にリンクしています。ダッシュボードに表示されるデータは、モニタ・ツリーで選択したコンテキストを表しています。最上位レベルは、SiteScope ノードおよび適用可能なモニタ・グループです。【ダッシュボード】ビューに表示される最下位レベルの要素は、個々の SiteScope モニタとその測定値です。

ダッシュボードには、モニタ情報の表示をカスタマイズできる機能があります。この機能では、名前付きフィルタ設定を定義して、定義済みの条件に一致するデータのみを表示できます。また、さまざまなデータ表示オプションを選択することもできます。

ダッシュボードには、モニタ要素の階層の移動、モニタの手動実行、モニタの無効化、警告定義へのアクセスを行うために使用できるハイパーリンクやメニューもあります。

### SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ

レイアウトやフィルタを設定して SiteScope ダッシュボードの表示および内容をカスタマイズしたり、ビューをお気に入りに保存したりすることができます。

ダッシュボード・フィルタを使用して、【ダッシュボード】ビューに表示されるモニタをフィルタできます。ダッシュボード・フィルタは、SiteScope ツリー・フィルタとは異なります（「[SiteScope](#)

[ビューでのオブジェクトのフィルタ](#) (78ページ) を参照)。ダッシュボード・フィルタまたは SiteScope ツリー・フィルタのいずれかを使用して、特定のモニタ・タイプのみが表示されるようにノードをフィルタできます。ただし、ダッシュボード・フィルタは、現在選択されているツリー・フィルタ設定の結果に適用されます。ツリー・フィルタ設定がアクティブな場合、SiteScope 環境にフィルタ条件に一致するモニタが存在していても、ダッシュボード・フィルタでこのモニタが検出されない可能性があります。

**ヒント:** 通常、フィルタは **「子孫モニタをすべて表示」** ビュー・オプションとともに使用することが最適です。フィルタは、**「ダッシュボードフィルタ」** ウィンドウでフィルタ条件を変更またはリセットするまでアクティブな状態が維持されます。

次の条件を使用して、SiteScope ダッシュボードをフィルタできます。

- ・ 特定のテキスト文字列を含むモニタ名。
- ・ 特定のホストやサーバを監視するモニタ。
- ・ エラーを報告するモニタ。
- ・ 特定のテキスト文字列を含む測定値の結果

フィルタ条件は、グループ、警告、レポートには適用されません。SiteScope ツリー・フィルタを使用して他の要素をフィルタできます。

フィルタ設定を保存するには、フィルタ設定を定義して、ダッシュボードのお気に入りとしてビューを保存します。

タスクの詳細については、[「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」](#) (1052ページ) を参照してください。

## モニタの状態の確認

確認機能を使用して、SiteScope によって検出されたシステムおよびネットワーク・インフラストラクチャの問題の解決を追跡できます。この機能を使用すると、問題が確認された時間、実行されたアクション、実行したユーザが SiteScope によって記録されます。

この機能では、モニタの警告を一時的に無効化することもできます。これは、問題に対処している間、警告の重複を回避する場合に便利です。また、複数のユーザが SiteScope を使用してシステムの可用性を管理する場合、確認機能を単純な問題のチケット・システムとして使用することもできます。

**注:** 確認機能は、**「ダッシュボード」** ビューおよび **Multi-View** のみで使用できます。確認アイコンは、ダッシュボード **「詳細ビュー」** にのみ表示されます。

個々のモニタまたはモニタ・グループに確認を追加できます。モニタに追加された確認は、そのモニタにのみ適用されます。確認で選択した警告の無効化条件は、そのモニタ・インスタンスにのみ適用されます。グループを確認すると、確認の詳細と警告の無効化条件がグループ内のすべてのモニタに適用されます。グループに適用された確認は、グループのモニタごとに編集または削除できます。


モニタまたはグループに適用できる確認は1つのみです。これはいつでも適用できます。確認のコメントとインジケータは、該当の警告の無効化スケジュールの期限が切れても、削除されるまでインタフェースに表示されたままになります。

確認のデータおよびコメントは、SiteScope マシンのログ・ファイルに書き込まれます。確認を追加、編集、削除するたびに新しいログ・エントリが作成されます。問題のモニタまたはグループが確認されるか、確認済みの状態がクリアされると、確認ログでその履歴を表示できます。現在適用されている確認がない場合でも、項目の確認ログを表示できます。

タスクの詳細については、「[SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法](#)」(1054ページ)に示された「確認モニタ」の手順を参照してください。

### 診断ツールを使用したモニタ設定のテスト

SiteScope には、監視環境のテストに使用できる多数のツールがあります。これらのツールを使用して、監視対象となるシステムに照会し、アクションの詳細な結果を表示できます。これには、簡単なネットワーク接続のテストや、外部のデータベースまたはサービスにアクセスするためのログイン認証の検証などがあります。

[ツール]  ボタンは、下記のモニタ・インスタンスの設定または表示時にダッシュボードで有効になります。

モニタ	ツール
Active Directory レプリケーション・モニタ	<a href="#">「LDAP 認証状態ツール」</a> (125ページ)
Cisco Works モニタ	<a href="#">「SNMP ブラウザ・ツール」</a> (149ページ)
CPU モニタ	<a href="#">「パフォーマンス・カウンタ・ツール」</a> (139ページ)
データベース・カウンタ・モニタ	<a href="#">「データベース接続ツール」</a> (116ページ)
データベース・クエリ・モニタ	<a href="#">「データベース接続ツール」</a> (116ページ)
DB2 JDBC モニタ	<a href="#">「データベース接続ツール」</a> (116ページ)
ダイナミック・ディスク・スペース・モニタ	<a href="#">「パフォーマンス・カウンタ・ツール」</a> (139ページ)
DNS モニタ	<a href="#">「DNS ツール」</a> (120ページ)
F5 Big-IP モニタ	<a href="#">「SNMP ブラウザ・ツール」</a> (149ページ)
FTP モニタ	<a href="#">「FTP ツール」</a> (123ページ)

モニタ	ツール
LDAP モニタ	<a href="#">「LDAP 認証状態ツール」 (125ページ)</a>
メール・モニタ	<a href="#">「メールの送受信ツール」 (134ページ)</a>
メモリ・モニタ	<a href="#">「パフォーマンス・カウンタ・ツール」 (139ページ)</a>
Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ	<a href="#">「イベント・ログ・ツール」 (121ページ)</a>
Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ	<a href="#">「パフォーマンス・カウンタ・ツール」 (139ページ)</a>
ニュース・モニタ	<a href="#">「ニュース・サーバ・ツール」 (138ページ)</a>
Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタ	<a href="#">「URL ツール」 (157ページ)</a>
Ping モニタ	<a href="#">「Ping ツール」 (142ページ)</a>
ポート・モニタ	<a href="#">「Ping ツール」 (142ページ)</a>
サービス・モニタ	<a href="#">「サービス・ツール」 (145ページ)</a>
SNMP モニタ	<a href="#">「SNMP ツール」 (152ページ)</a>
MIB による SNMP モニタ	<a href="#">「SNMP ブラウザ・ツール」 (149ページ)</a>
SNMP トラップ・モニタ	<a href="#">「SNMP トラップ・ツール」 (155ページ)</a>
テクノロジー・データベース統合モニタ	<a href="#">「データベース接続ツール」 (116ページ)</a>
テクノロジー SNMP トラップ統合モニタ	<a href="#">「SNMP トラップ・ツール」 (155ページ)</a>
URL モニタ	<a href="#">「URL ツール」 (157ページ)</a>
URL 内容モニタ	<a href="#">「URL ツール」 (157ページ)</a>
Web サービス・モニタ	<a href="#">「Web サービス・ツール」 (163ページ)</a>
XML 測定値モニタ	<a href="#">「XSL 変換ツール」 (169ページ)</a>

タスクの詳細については、[「モニタ設定をテストするための SiteScope 診断ツールの使用方法」 \(1053ページ\)](#)を参照してください。

SiteScope で利用可能な診断ツールの完全なリストについては、SiteScope の左下の表示枠で **【ツール】** ボタンをクリックします。詳細については、[「SiteScope ツール」 \(112ページ\)](#)を参照してください。

## タスク

### SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法

このタスクでは、レイアウトやフィルタを設定して SiteScope ダッシュボードの表示および内容をカスタマイズする手順や、ビューをお気に入りに保存する手順について説明します。

#### 1. ダッシュボード・レイアウトの設定

##### a. 前提条件

SiteScope の管理者であるか、レイアウト・フィールドを設定するための「**レイアウトの編集**」権限が付与されたユーザ、SiteScope ダッシュボード・ビューのお気に入りのビュー・リストに項目を追加または削除するための「**お気に入りの編集**」権限が付与されたユーザである必要があります。詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」 \(744ページ\)](#)を参照してください。

##### b. **【モニタ】** コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで **【ダッシュボードの設定】** ボタンをクリックします。

##### c. **【ダッシュボードの設定】** ダイアログ・ボックスの設定を使用して、グループおよびモニタの情報の表示をカスタマイズします。

ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\*\*【ダッシュボードの設定】\*\* ダイアログ・ボックス」 \(1060ページ\)](#)を参照してください。

#### 2. ダッシュボード・フィルタの選択および設定 - オプション

**【ダッシュボードフィルタ】** ダイアログ・ボックスで一致基準を入力し、利用可能なオプションから選択して、ダッシュボード・フィルタを設定します。

1つのフィルタにフィルタ・オプションの組み合わせを含めることができます。たとえば、フィルタ定義では **【モニタ タイプ】**、**【監視対象サーバ】**、**【状態】** の組み合わせに基づいてフィルタすることができます。


ユーザ・インタフェースの詳細については、[「\*\*【ダッシュボードフィルタ】\*\* ダイアログ・ボックス」 \(1057ページ\)](#)を参照してください。

**例：**ダッシュボード・フィルタ






### 3. お気に入りへのビューの保存

ダッシュボード・フィルタおよびレイアウト設定を定義したら、**【お気に入りの管理】**  ボタンの横の矢印をクリックして**【お気に入り保存】**を選択して、お気に入りリストで名前付きのお気に入りビューとして保存できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[【ダッシュボードのお気に入り保存】ダイアログ・ボックス](#)」(1065ページ)を参照してください。

### モニタ設定をテストするための SiteScope 診断ツールの使用方法

1. **【モニタ】** コンテキストを選択します。ダッシュボードで、診断ツールを利用可能なモニタ・インスタンスを選択します（「[診断ツールを使用したモニタ設定のテスト](#)」(1050ページ)を参照）。
  2. モニタの既存のデータを入力に使用してツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの**【ツール】**  ボタンをクリックします。テスト結果は**【結果】** 表示枠に表示されます。結果をファイルに保存するには、**【ファイル保存】** ボタンをクリックします。
- UI の詳細については、「[SiteScope ツール](#)」(112ページ)を参照してください。

## SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法

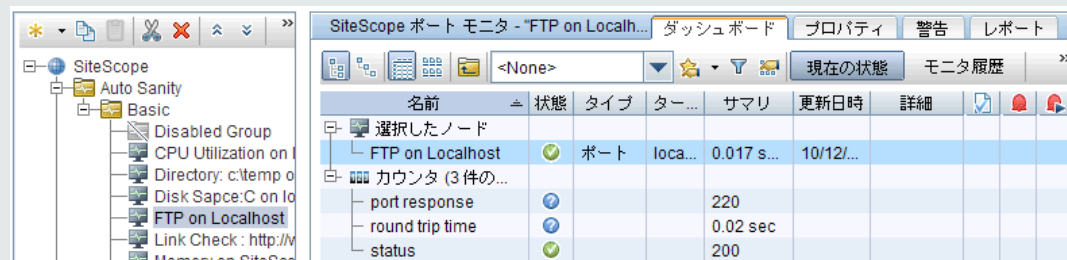
このタスクでは、SiteScope ダッシュボードでデータを分析する手順について説明します。

### 1. モニタや測定値の状態および可用性を表示するためのドリルダウン

ダッシュボードの「現在の状態」ビューで SiteScope データを表示中に、モニタ・ツリーをドリルダウンしてモニタや測定値の状態および可用性を表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[SiteScope ダッシュボード - 「現在の状態」ビュー](#)」(1066ページ)を参照してください。


#### 例：モニタの測定値の状態および可用性



The screenshot shows the SiteScope dashboard with the 'FTP on Localhost' monitor selected. The left pane shows a tree view with 'FTP on Localhost' highlighted. The main pane displays a table of metrics for this monitor.

名前	状態	タイプ	ター...	サマリ	更新日時	詳細
選択したノード						
FTP on Localhost	✓	ポート	loca...	0.017 s...	10/12/...	
カウンタ (3 件の...						
port response	?			220		
round trip time	?			0.02 sec		
status	✓			200		

### 2. 設定された警告および起動された警告の表示

設定された警告および起動された警告の列で警告のデータを表示できます。モニタに警告が設定されている場合、「**設定された警告**」 アイコンをダブルクリックして設定された警告のリストを表示し、警告を選択して警告のプロパティを表示または編集できます。

トラブルシューティングを促進するために、モニタの警告の履歴を確認して、その警告が再発している問題のものかどうかを判別することができます（すべての関連付けられた警告が警告セクションに表示されます）。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[SiteScope ダッシュボード - 「現在の状態」ビュー](#)」(1066ページ)を参照してください。

#### 例：設定された警告



The screenshot shows the SiteScope dashboard with the 'Windows monitors for localhost' group selected. The main pane displays a table of monitors and their status, including warnings.

名前	状態	タイプ	ターゲ...	サマリ	更新日時	詳細
選択したノード						
Windows monitor...	✓	グループ		グループ内に 4 ...	10/12/2 ...	
グループ (1 件の...						
Windows monitor...	⊘	グループ		グループ内に 2 ...	-	
モニタ (3 件のう...						
Cpu monitor on lo...	✓	CPU	SiteSc...	7% avg, cpu1 5...	10/12/2 ...	
Directory: c:\ on Sit...	✓	ディレ...	SiteSc...	access denied	10/12/2 ...	
Disk Space: D on ...	✓	ディス...	SiteSc...	58% full, 42455...	10/12/2 ...	

### 3. モニタまたはグループのモニタを無効化

診断に応じて、モニタまたはグループのモニタを無効化したり、モニタまたはグループに関連付けられた警告を無効化してモニタの使用を続行することができます。

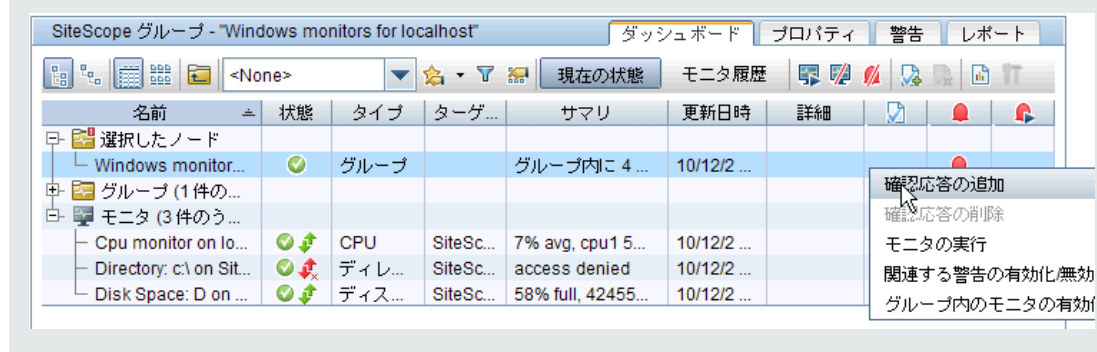
ユーザ・インタフェースの詳細については、「[「\[グループ内のモニタの有効化 / 無効化\] ダイアログ・ボックス」 \(1063ページ\)](#)を参照してください。

#### 4. モニタの確認

モニタの状態を確認するには、モニタまたはグループを選択して**「確認応答の追加」** アイコンをクリックするか、コンテキスト・メニューから**「確認応答の追加」**を選択し、**「グループ内のモニタを確認」** ダイアログ・ボックスで詳細を入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[「\[グループ内のモニタを確認\] ダイアログ・ボックス」 \(1056ページ\)](#)を参照してください。

##### 例：「グループ内のモニタを確認」ダイアログ



#### 5. Microsoft Windows / UNIX サーバのリソースの監視

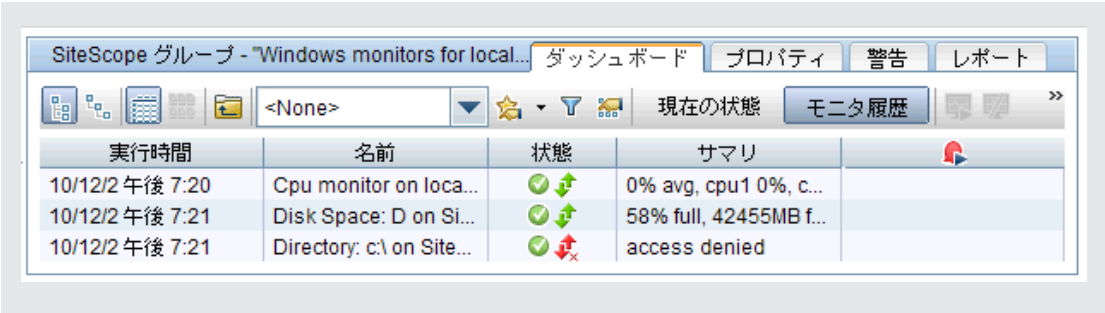
Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタを作成して、Windows サーバまたは UNIX サーバを監視し、サーバ中心のレポートを生成できます。タスクの詳細については、「[「サーバ中心のレポートの作成」 \(1357ページ\)](#)を参照してください。

#### 6. モニタ履歴の表示

【一般プリファレンス】でモニタ履歴を有効化および設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[「ダッシュボード・モニタ履歴表示オプション」 \(599ページ\)](#)を参照してください。

モニタ履歴を表示するには、SiteScope ダッシュボードの**「モニタ履歴」** ボタンをクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、「[「SiteScope ダッシュボード - 【モニタ履歴\] ビュー」 \(1075ページ\)](#)を参照してください。

##### 例：「モニタ履歴」ビュー



## 「グループ内のモニタを確認」ダイアログ・ボックス

注: このトピックは以下の内容に関連します。 [「SiteScope ダッシュボード」 \(1048ページ\)](#)

このダイアログ・ボックスでは、問題の解決を追跡するためにモニタまたはモニタ・グループの確認を追加または編集できます。


UI 要素	詳細
確認コメント	「ダッシュボード」ビューの確認アイコンに関連付けられたヒントとして表示される確認コメント。確認ログに記録されます。新しい情報が利用可能になると、コメントを更新できます。コメントは確認が削除するまで表示されます。
関連付けられたすべての警告を有効化	関連付けられたすべての警告を有効にします（標準設定）。
関連する警告を無期限に無効化	すぐに警告を無効にし、このラジオ・ボタンをクリアして警告定義を更新するまで、選択したモニタまたはグループに対する警告の抑止を続けます。 <b>注：</b> このオプションを使用すると、一時的な条件に対応するために警告が無効になっている場合、予想される警告機能が失われる場合があります。後でこの状態を確認し、必要に応じて警告定義を手動で有効にしてください。
次の時間設定で関連付けられたすべての警告を無効化	すぐに警告を無効にし、指定した期間、選択したモニタまたはグループに対する警告の抑止を続けます。
1 回限りのスケ	指定した期間、警告を無効にします。これは、監視対象のシステムが特定

UI 要素	詳細
ジュールに基づいて 関連付けられたすべての警告を無効化: 開始 <時刻> ~ 終了 <時刻>	の期間利用不可になると予想され、その間も警告をトリガせずに監視を続ける場合に便利です。
無効化の説明	確認済みコンテキスト内のモニタに関連付けられた警告アイコンの説明。 このテキスト説明は、[ダッシュボード] ビューでモニタに関連付けられた警告アイコンの上にポインタを置くと表示されるツールチップのテキストに追加されます。このテキストは、警告の無効化オプションが有効な間のみ表示されます。このテキストは、確認ログには書き込まれません。  1 回限りのスケジュールを元に戻します。  1 回限りのスケジュールの無効化の警告をキャンセルします。
確認ログの表示	確認応答ダイアログ・ボックスの起動元であるモニタまたはグループの確認応答エントリをすべて表示します。ログには、確認応答の日付と時刻、確認応答者のユーザ名、モニタまたはグループの状態、確認応答メッセージが含まれます。

## [ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス

注: このトピックは以下の内容に関連します。 [「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 \(1052ページ\)](#)

このダイアログ・ボックスでは、一致基準を入力し、メニュー・オプションを選択してダッシュボード・フィルタを設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで [ダッシュボード フィルタ]  ボタンをクリックします。
重要な情報	1 つのフィルタにフィルタ・オプションの組み合わせを含めることができます。たとえば、フィルタ定義では [モニタ タイプ] , [監視対象] , [状態] の組み合わせに基づいてフィルタすることができます。
関連タスク	<a href="#">「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」 (1054ページ)</a>

## グローバル設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
モニタ名	1 つ以上のモニタの名前と一致するテキスト文字列または正規表現。このフィルタを [ダッシュボード] ビューに適用すると、 <b>[モニタ名]</b> 基準に一致するモニタのみが表示されます。
モニタ・タイプ	選択したモニタ・タイプでモニタをフィルタします。
監視対象サーバ	特定のホストまたは監視対象サーバのサーバ名でモニタをフィルタします。
状態	<p>報告された状態でモニタをフィルタします。状態フィルタ基準は、モニタ・カテゴリの状態に基づいて定義できます。</p> <p>次の状態オプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>任意の状態</b> : 状態に関係なくすべてのモニタが表示されます。これが標準設定のオプションです。このオプションを <b>[データあり]</b> オプションと組み合わせて使用し、接続や可用性が原因でエラー状態にあるモニタを除外できます。</li><li>・ <b>Disabled</b> : 無効と報告されたモニタのみが表示されます。</li><li>・ <b>エラー</b> : エラー状態を報告したモニタのみが表示されます。</li><li>・ <b>良好</b> : 良好または OK 状態を報告したモニタのみが表示されます。</li><li>・ <b>良好, 警告またはエラー</b> : 無効と報告されたモニタを除く、すべてのモニタが表示されます。</li><li>・ <b>警告</b> : 警告状態を報告したモニタのみが表示されます。</li><li>・ <b>警告またはエラー</b> : 警告またはエラー状態を報告したモニタのみが表示されます。</li><li>・ <b>警告または良好</b> : 警告または正常状態を報告したモニタのみが表示されます。</li></ul> <p><b>例</b> : 警告またはエラーを報告したモニタのみを表示するフィルタを作成します。</p>
状態(可用性付き)	<p>モニタ状態カテゴリとデータの可用性の状態を組み合わせ、複合フィルタを作成します。</p> <p>次のデータの可用性の状態オプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>データあり</b> : データが利用可能なモニタが表示されます。つまり、モニタが対象システムから測定値を取得できたことを示します。</li></ul>

UI 要素	詳細
	<p>・ <b>データなし</b> : データが利用不可なモニタが表示されます。つまり、SiteScope が対象システムから測定値を取得できなかったことを示します。</p> <p><b>例</b> : <b>【エラー】</b> および <b>【データあり】</b> を報告したモニタのみを表示するフィルタを作成します。つまり、監視対象システムと通信できずにエラーを報告したモニタ（<b>【データなし】</b>）とは異なり、このフィルタを使用すると、監視対象システムからデータを受信できたもののエラー状態を示すモニタが表示されます。</p>
<b>サマリ・テキスト</b>	<p>サマリ文字列に含まれたテキストに基づいてモニタをフィルタします。リテラル・テキスト文字列または正規表現を入力して、テキスト・パターンと照合することができます。</p> <p>正規表現の詳細については、<a href="#">「正規表現」(187ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>確認済み</b>	<p>「オペレータ認知」の状態に基づいてモニタをフィルタします。確認済みのモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから<b>【はい】</b>を選択します。未確認のモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから<b>【いいえ】</b>を選択します。</p>
<b>確認メモ</b>	<p>「オペレータ認知」のメモに表示されるテキストに基づいてモニタをフィルタします。リテラル・テキスト文字列または正規表現を入力して、テキスト・パターンと照合することができます。</p> <p>正規表現の詳細については、<a href="#">「正規表現」(187ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>警告設定済み</b>	<p>警告が設定されているかどうかに基づいてモニタをフィルタします。1つ以上の警告が設定されているモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから<b>【はい】</b>を選択します。警告が設定されていないモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから<b>【いいえ】</b>を選択します。</p>
<b>トリガされた警告</b>	<p>警告イベントをトリガしたかどうかに基づいてモニタをフィルタします。1つ以上の警告を生成しているモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから<b>【はい】</b>を選択します。警告を生成していないモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから<b>【いいえ】</b>を選択します。</p>

モニタ履歴の設定


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
表示期間	過去のイベントのタイム・フレーム。 標準設定値 : 過去 1 時間
モニタの実行の状態	必要なイベント状態, 関係演算子, データ可用性。 標準設定値 : 任意

[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス

**注:** このトピックは以下の内容に関連します。 [「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 \(1052ページ\)](#)

このダイアログ・ボックスでは, [ダッシュボード] ビューでのグループおよび監視データの表示をカスタマイズできます。これにより, モニタ測定値の詳細, 警告情報, 確認機能の表示を有効化または非表示にできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで [ダッシュボードの設定]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>レイアウト・オプションは, [詳細ビュー] にのみ適用されます。[アイコンビュー] の使用時には無視されます。</li><li>SiteScope ダッシュボード・ビューでレイアウト・フィールドを設定するには, SiteScope の管理者, または「<b>レイアウトの編集</b>」権限が付与されたユーザである必要があります。詳細については, <a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」 (744ページ)</a>を参照してください。</li></ul>



## ダッシュボードのプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
ダッシュボードの更新間隔 (秒)	ダッシュボードの更新間の待機時間 (秒単位)。 <b>標準設定値</b> :60 秒 <b>最小値</b> : 30 秒
ダッシュボード・アイコンの最大数	ダッシュボード・アイコン・ビューに表示できるアイコンの最大数。 <b>標準設定値</b> : 700 <b>最大推奨値</b> : 1500 <b>注</b> : 選択した要素のアイコンが表示可能な最大数よりも多い場合、この設定を増やすのではなく、アイコン数を絞り込むツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。
ダッシュボード・オブジェクトの最大数	選択した要素について、[ダッシュボード] テーブルに表示できるオブジェクトの最大数。 <b>標準設定値</b> : 4000 <b>注</b> : 選択した要素のオブジェクトが表示可能な最大数よりも多い場合、この設定を増やすのではなく、アイコン数を絞り込むツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。
モニタが利用可能かを表示	SiteScope がリモート・システムに接続できたかどうか、または接続の問題が原因でリモート・システムを使用できなかったかどうかを示す、モニタの可用性アイコンをダッシュボードに表示します。 <b>標準設定値</b> :選択されている
折り返しテキスト	行の高さを自動的に調整して、ダッシュボード内でセル内容をすべて表示します。 <b>標準設定値</b> :選択されていない


ダッシュボード・テーブルのレイアウト  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
カラムの固定	テーブルの列の順序を固定します。設定をクリアしてテーブル・列の順序を変更するには、列・ヘッダを右または左にドラッグします。  標準設定値 :選択されていない
テーブル・カラム	詳細テーブルに表示される列。選択内容は、該当するすべてのグループまたはモニタの要素に適用されます。  次の列が表示可能です。 <ul style="list-style-type: none"><li>・ タイプ</li><li>・ サマリ</li><li>・ トリガされた警告</li><li>・ 警告設定済み</li><li>・ 詳細</li><li>・ 状態</li><li>・ ターゲット</li><li>・ 確認</li><li>・ 更新日時</li><li>・ 名前</li><li>・ グループ名</li><li>・ タグ</li></ul> 標準設定値 : グループ名とタグを除くすべてのプロパティが選択されている  列の詳細については、 <a href="#">「SiteScope ダッシュボード - [現在の状態] ビュー」 (1066ページ)</a> を参照してください。

## [ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス

**注:** このトピックは以下の内容に関連します。 [「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 \(1052ページ\)](#)

このダイアログ・ボックスでは、既存のお気に入りビューを削除できます。

アクセス方法	【モニタ】コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで、【お気に入りの管理】  ボタンの横にある矢印をクリックし、【お気に入りを削除】を選択します。
重要な情報	SiteScope ダッシュボード・ビューのお気に入りのビュー・リストに、項目を追加または削除するには、SiteScope の管理者であるか、「お気に入りの編集」権限が付与されたユーザである必要があります。このトピックの詳細については、「 <a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a> 」(744ページ)を参照してください。


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
既存のお気に入り	現在のお気に入りビューのリストから削除するビューを選択します。標準設定では、リストには次の事前に設定されたお気に入りが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"><li>• All Objects</li><li>• Disabled</li><li>• Errors Only</li><li>• Errors and Warnings</li><li>• Good</li><li>• Good and Warnings</li><li>• No Data</li><li>• Warnings Only</li></ul>

## 「グループ内のモニタの有効化 / 無効化」ダイアログ・ボックス

**注:** このトピックは以下の内容に関連します。 [「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」](#) (1054ページ)

このダイアログ・ボックスでは、モニタの【プロパティ】タブの個々のモニタ設定に関係なく、モニタまたはグループ内の全モニタを有効化または無効化するオプションを選択できます。【**モニタを無効化**】を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って【**モニタを有効化**】を選択するまでモニタは無効になります。

アクセス方法	【モニタ】コンテキストを選択します。ダッシュボードで、モニタまたはグループを選択して【 <b>モニタの有効化/無効化</b> 】ボタン  をクリックします。
--------	---

<b>重要な情報</b>	<p>【<b>モニタを無効化</b>】オプションを使用してモニタまたはグループを無効化する場合、ダッシュボードには、影響を受けるオブジェクトの【<b>サマリ</b>】列の状態として「<b>手動で無効化されています</b>」が表示されます。特定の期間オブジェクトを無効化するには、事前に状態が「<b>手動で無効化されています</b>」のオブジェクトを有効化する必要があります。これは、グループ・レベルでも同様です。たとえば、ある期間グループ内のモニタが無効化されていて、そのグループのサブグループに存在するモニタの状態が「<b>手動で無効化されています</b>」である場合、親グループの無効化期間が経過した後もサブグループのモニタは無効化されたままになります。</p>
<b>関連情報</b>	<p><a href="#">「モニタの有効化/無効化」(316ページ)</a></p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


<b>UI 要素</b>	<b>詳細</b>
<b>モニタを有効化</b>	<p>以前にモニタ・プロパティで無効化されている場合、モニタが有効になります。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>一時的に無効化されたモニタのみ有効にする</b>	<p>以前にモニタ・プロパティで一時的に無効化されている場合、モニタが有効になります。</p>
<b>モニタを無効化</b>	<p>グループ内のモニタが無効化されている場合、SiteScope では、引き続きモニタの【<b>頻度</b>】設定に基づいてモニタの実行をスケジュールしますが、モニタ・アクションは実行されません。モニタの実行がスケジュールされている場合、SiteScope によってモニタのデータ・ログ・エントリが記録されますが、測定データの代わりにモニタの状態が無効であるとして報告されます。</p>
<b>次の時間設定でモニタを無効化： &lt;期間&gt;</b>	<p>モニタが無効になっている期間。【<b>秒</b>】，【<b>分</b>】，【<b>時間</b>】，または【<b>日</b>】を選択して、適用する無効化期間を定義します。</p>
<b>1 回限りのスケジュールに基づいてモニタを無効化： &lt;時間&gt; ~ &lt;時間&gt;</b>	<p>モニタを将来のある期間だけ一時的に無効にします。1 日より長い期間に設定できます。</p> <p>次の形式で無効化期間の開始時間と終了時間を入力または選択します。 hh:mm:ss mm/dd/yyyy。</p> <p><b>注</b>：グループ・レベルでは、そのグループ内のすべての子モニタが一度だけ無効になります（この変更はモニタ・プロパティに表示されますが、グループ・プロパティをチェックしている場合は反映されません）。</p>

UI 要素	詳細
無効化の説明	モニタ・グループのモニタの状態とともに表示される詳細。無効化状態のテキストには、どの無効化オプションがモニタに適用されているかを示す文字列も含まれます。たとえば、「手動で無効化されています」は、 <b>「モニタを無効化」</b> オプションを使用してモニタが無効にされたことを示します。

## 「ダッシュボードのお気に入り」に保存」ダイアログ・ボックス

**注:** このトピックは以下の内容に関連します。 [「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 \(1052ページ\)](#)

このダイアログ・ボックスでは、ダッシュボード・フィルタとレイアウト設定（「ダッシュボードフィルタ」ダイアログ・ボックスおよび「ダッシュボードの設定」ダイアログ・ボックスで選択）の組み合わせを定義し、名前を付けてお気に入りビューとして保存できます。

アクセス方法	「 <b>モニタ</b> 」コンテキストを選択します。「ダッシュボード」ツールバーで、 <b>「お気に入りの管理」</b>  ボタンの横にある矢印をクリックし、 <b>「お気に入り」に保存</b> 」を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>ダッシュボードのお気に入りは、「ダッシュボード」ビューに適用可能な設定に制限されます。つまり、ダッシュボードのお気に入りには、ユーザのグローバル・ビュー設定や、お気に入りの保存時にモニタ・ツリーで選択されていたコンテキストは保存されません。</li><li>SiteScope ダッシュボード・ビューのお気に入りのビュー・リストに、項目を追加または削除するには、SiteScope の管理者であるか、「お気に入りの編集」権限が付与されたユーザである必要があります。このトピックの詳細については、<a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」 (744ページ)</a>を参照してください。</li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前	現在のダッシュボード・フィルタとレイアウト設定をお気に入りに保存するためのオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"><li><b>既存:</b> 既存のお気に入りのいずれかを現在の設定で置き換えることができ</li></ul>

UI 要素	詳細
	<p>ます。既存のお気に入りビューのリストが表示されます。標準設定では、リストには事前に設定されたお気に入りすべてが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• <b>新規</b> : 現在の設定を、ボックスに入力した表示名を付けて新しいお気に入りビューに保存できます。</li></ul>

## SiteScope ダッシュボード - [現在の状態] ビュー

**注:** このトピックは以下の内容に関連します。 [「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 \(1052ページ\)](#), [「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」 \(1054ページ\)](#)





SiteScope によって監視されているインフラストラクチャ要素の現在のパフォーマンス・データが表示され、フィルタの定義に使用する機能にアクセスできます。ダッシュボードには、モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタのテーブルが表示されます。各グループまたはモニタのノードをダブルクリックして、子ノードおよびモニタに移動できます。

ダッシュボードでは、サーバ中心のレポート、事前に設定されたクイック・レポート、モニタの確認の状態、モニタ・ツール、SiteScope 状況ステータス、モニタ履歴情報にアクセスできます。また、モニタや警告を有効化/無効化することもできます。

アクセス方法	<p><b>[モニタ]</b> コンテキストを選択します。モニタ・ツリーでオブジェクトを選択し、右側の表示枠の <b>[ダッシュボード]</b> タブをクリックします。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• 標準設定では、選択した要素の <b>[ダッシュボード]</b> テーブルに表示できるオブジェクトの最大数は 4000 で、<b>[アイコンビュー]</b> で表示できるアイコンの最大数は 700 です。これらの数を変更するには、<b>[ダッシュボードの設定]</b> ダイアログ・ボックスで値を変更します。ただし、標準設定を使用することをお勧めします。</li><li>• 選択した要素の行数が、<b>[ダッシュボード]</b> テーブルに表示できる最大数よりも多い場合、さらに限定的なツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。</li><li>• Ctrl+C ショートカットを使用してダッシュボードの中の選択した行から詳細をコピーできます。</li></ul>





ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
<b>共通ツールバー要素</b>	
	<b>子グループと子モニタを表示</b> :選択したノードの直接の子である要素のみが表示されます。グループおよびモニタの状態情報領域に、サブグループとモニタが個別のセクションで表示されます。
	<b>すべての子孫モニタを表示</b> :選択したノードのすべての子孫モニタが表示されます。[アイコン ビュー] オプションが選択されている場合、子孫モニタのアイコンと名前のみが表示されます。
	<b>詳細ビュー</b> :グループおよびモニタが表形式のリストとして表示されます。表の各行には要素の名前や状態などの情報が配置されます。
	<b>アイコン・ビュー</b> :グループおよびモニタが一連の状態アイコンとして表示されます。アイコンの下には要素の名前が表示されます。
	<b>上へ</b> :モニタ・ツリーの1つ上のレベルに移動します。このオプションは、SiteScope (ツリーの最上位レベル) では使用できません。
	<p>お気に入りボックスには、ダッシュボード・フィルタとレイアウト設定の既存のお気に入りビューのドロップダウン・リストがあります。[現在の状態] ビューまたは[モニタ履歴] ビューで表示するビューを選択できます。</p> <p><b>注</b> : お気に入りフィルタはモニタ・レベルで機能するため、グループはフィルタされません。[すべての子孫モニタを表示] ビューで作業している場合、フィルタに一致していない状態のグループが表示されることがあります。フィルタのモニタのみを表示するには、[すべての子孫モニタを表示] ビューを代わりに使用します。</p> <p>次のビューから選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>All Objects</b> : 無効と報告された場合も含め、すべてのステータスのすべてのモニタが表示されます。</li> <li>• <b>Disabled</b> : 無効と報告されたモニタのみが表示されます。</li> <li>• <b>Errors Only</b> : エラーと報告されたか、データが利用不可ステータスのモニタのみが表示されます。</li> <li>• <b>Errors and Warnings</b> : 警告またはエラー状態を報告したモニタのみが表示されます。</li> <li>• <b>Good</b> : 良好ステータスを報告したモニタのみが表示されます。</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Good and Warnings</b> : 警告または正常状態を報告したモニタのみが表示されます。</li> <li>• <b>No Data</b> : データがないモニタのみが表示されます。</li> <li>• <b>Warnings Only</b> : 警告状態を報告したモニタのみが表示されます。</li> </ul> <p>標準設定値 : &lt;なし&gt;</p>
	<p><b>お気に入りの管理</b> : 矢印をクリックして、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>お気に入りに保存</b> : [ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックスが開き、現在のダッシュボード・フィルタとレイアウト設定をお気に入りビューとして保存できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックス」 (1065ページ)</a>を参照してください。</li> <li>• <b>お気に入りを削除</b> : [ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックスが開き、既存のお気に入りにビューを削除できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス」 (1062ページ)</a>を参照してください。</li> </ul>
	<p><b>ダッシュボード・フィルタ</b> : [ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス」 (1057ページ)</a>を参照してください。</p>
	<p><b>ダッシュボードの設定</b> : [ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス」 (1060ページ)</a>を参照してください。</p>
	<p><b>現在の状態</b> : モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタのテーブルが表示されます。</p>
	<p><b>モニタ履歴</b> : 過去 24 時間分のモニタ、モニタ・グループ、警告の情報が表示されます。時間、モニタの状態、データ・エントリ数を使用してこの情報をフィルタします。</p> <p>モニタ履歴の表示の詳細については、<a href="#">「SiteScope ダッシュボード - [モニタ履歴] ビュー」 (1075ページ)</a>を参照してください。</p>
	<p><b>モニタの実行</b> : 選択したモニタ、またはグループ内に設定されている任意のモニタを実行します。結果を表示する情報ウィンドウが開きます。</p>



UI 要素	詳細
	<p><b>グループ内のモニタの有効化 / 無効化 :</b>モニタ・プロパティの設定に関係なく、選択したモニタまたはグループ内のすべてのモニタを有効化または無効化する [グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックスを開きます。[モニタを無効化] を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って [モニタを有効化] を選択するまでモニタは無効になります。[グループ内のモニタの有効化/無効化] のユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」 (1063ページ)</a>を参照してください。</p>
	<p><b>関連する警告の有効化/無効化 :</b> [関連する警告の有効化/無効化] ダイアログ・ボックスが開き、モニタやグループ内の全モニタに関連付けられているすべての警告を有効化または無効化できます。詳細については、<a href="#">「関連する警告の有効化/無効化」 (318ページ)</a>を参照してください。</p>
	<p><b>確認応答の追加 :</b> [グループ内のモニタを確認] ダイアログ・ボックスが開き、確認応答をモニタに追加できます。確認応答は、SiteScope によって検出されたシステムおよびネットワーク・インフラストラクチャの問題の解決を追跡するために使用されます。この機能を使用すると、問題が確認された時間、実行されたアクション、実行したユーザが SiteScope によって記録されます。</p> <p>[グループ内のモニタを確認] のユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[グループ内のモニタを確認] ダイアログ・ボックス」 (1056ページ)</a>を参照してください。</p>
	<p><b>確認応答の削除 :</b>モニタの確認応答を削除します。</p>
	<p><b>クイック・レポート :</b>選択したモニタの事前に設定された設定を使用して、1 回かぎりの SiteScope 管理レポートが作成されます。レポートの詳細については、<a href="#">「クイック・レポート」 (1348ページ)</a>を参照してください。</p>
	<p><b>ツール :</b>選択した監視環境をテストする診断ツールが開きます。このボタンは、適切な診断ツールがあるモニタ・インスタンスでのみ使用できます。SiteScope ツールの詳細については、<a href="#">「診断ツールを使用したモニタ設定のテスト」 (1050ページ)</a>を参照してください。</p>
	<p><b>ファイルにエクスポート :</b> [保存] ダイアログ・ボックスが開き、[ダッシュボード] テーブルに現在表示中のすべての列のデータを、カンマ区切り (CSV) ファイルにエクスポートできます。[ダッシュボードの設定] にどの列を表示するかを選択すれば、エクスポートするデータのタイプを</p>








UI 要素	詳細
	<p>変更できます。詳細については、「<a href="#">[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス</a>」(1060ページ)を参照してください。</p>
 統合コンソール	<p><b>統合コンソール</b>：次のビューを含む SiteScope 統合コンソールが開きます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Multi-View</b>：IT インフラストラクチャで監視している全対象のステータスを1つのビューで表示、管理できます。各個人の見方に合わせてさまざまな方法でオブジェクトをグループ化できます。SiteScope のすべてのグループとモニタを階層ツリー・マップに表示する、モニタをターゲットのリモート・サーバでグループ化して表示する、モニタをカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグでグループ化して表示するなどの操作が可能です。詳細については、「<a href="#">Multi-View</a>」(1080ページ)を参照してください。</li> <li>• <b>イベント・コンソール</b>：アプリケーションとサーバのパフォーマンスに関するすべての通知メッセージの中心的なビューを提供します。1つのインタフェースからイベントを解析することにより、パフォーマンスの問題をすばやく管理、特定、解決できます。詳細については、「<a href="#">イベント・コンソール</a>」(1102ページ)を参照してください。</li> <li>• <b>Ops ビュー</b>：この統合ビューでは、イベント・コンソールと Multi-View で同時に作業ができます。イベントとモニタを接続することで、モニタとイベントに関連付けられたグループ（およびその逆）が特定されるため、問題の特定と解決に役立ちます。</li> </ul>
テーブル要素	
	<p><b>【確認】列</b>：SiteScope ユーザがモニタの現在の状態を確認したことや、そのモニタに関連付けられている警告アクションを一時的に無効化した可能性があることを示します。このアイコンは、ダッシュボード「詳細ビュー」にのみ表示されます。ポインタをアイコンの上に移動すると、ツールチップとして確認応答情報が表示されます。アイコンをダブルクリックすると、「<a href="#">確認応答の編集</a>」ダイアログ・ボックスが開きます。このトピックの詳細については、「<a href="#">モニタの状態の確認</a>」(1049ページ)を参照してください。</p>
  	<p><b>【設定された警告】列</b>：1 つ以上の警告がグループまたはモニタに関連付けられていることを示します。アイコンをダブルクリックすると、設定された警告がツールチップに表示されます。リストから該当の警告定義名を選択すると、「<a href="#">警告の編集</a>」ダイアログ・ボックスが開き、警告プロパティを表示または編集できます。このトピックの詳細については、「<a href="#">SiteScope 警告の設定</a>」(1231ページ)を参照してください。</p>



UI 要素	詳細
	<p>すべての関連付けられた警告が無効化された場合、アイコンはグレー表示されます。</p> <p>該当警告自体ではなく個々のグループやモニタに関連付けられた警告の有効化および無効化の詳細については、「<a href="#">モニタの警告の設定 - オプション</a>」(272ページ)を参照してください。</p> <p>警告の有効化および無効化の詳細については、「<a href="#">モニタ警告の無効化 / 有効化</a>」(1241ページ)を参照してください。</p>
	<p>【トリガされた警告】列:モニタの1つ以上の警告が起動されたことを示します。起動された警告がない場合、アイコンは表示されません。起動された警告が1つの場合、特定の警告タイプを表すアイコンが表示されます。アイコンのリストについては、「<a href="#">警告アクション</a>」(1257ページ)を参照してください。</p> <p>起動された警告が複数の場合、複数の警告を表すアイコンが表示されます。警告アイコンをクリックすると、警告の詳細が表示されます。トリガされた警告列は、テーブルにモニタが含まれている場合にのみ表示されます。このトピックの詳細については、「<a href="#">SiteScope 警告の設定</a>」(1231ページ)を参照してください。</p>
<p>＜オブジェクト・テーブル＞</p>	<p>モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタが表示されます。各グループまたはモニタのノードをダブルクリックして、子ノードおよびモニタに移動できます。モニタをダブルクリックすると、そのモニタのパフォーマンス・カウンタが表示されます。</p>
<p>名前</p>	<p>モニタ・インスタンスまたはグループの表示名（別名）。新規グループを作成する場合、その名前を入力します。新規モニタを作成する場合、利用可能なモニタのリストからそのタイプを選択します。【名前】ボックスでこのタイプを上書きしない場合、モニタはそのモニタ・タイプで識別されます。このモニタを識別しやすくする別名を入力することもできます（任意指定）。</p>
<p>状態</p>	<p>【ダッシュボード】ビューの各ノードに色付きのアイコンが表示されます。このアイコンは、該当のコンポーネントに割り当てられている操作の状態（現在のパフォーマンス・レベルに対応します）を表しています。</p> <p>また、【ダッシュボード】ビューには要素ごとに色付きの矢印も表示されます。この矢印は、モニタのデータの可用性の状態を表しています。</p> <p>アイコンの上にマウス・ポインタを置くと、モニタの状態および可用性を表示できます。モニタの状態および可用性のアイコンの詳細については、</p>

UI 要素	詳細
	<p><a href="#">「SiteScope ダッシュボード - [現在の状態] ビュー」 (1066ページ)</a>を参照してください。</p>
タイプ	<p>表示されるモニタのタイプ。モニタ・タイプは、モニタ・インスタンスの作成時に [新規モニタ] ダイアログ・ボックスで選択します。</p>
ターゲット	<p>監視対象オブジェクトがあるリモート・サーバの名前が表示されます（該当サーバが存在する場合）。たとえば、モニタ・タイプが CPU の場合、監視する CPU が搭載されているサーバの名前が対象になります。</p> <p>サーバをモニタ・ツリーに追加したときに [名前] ボックスに入力した内容に応じて、[ターゲット] 列に表示される名前は、サーバのシステム ID か、ユーザが割り当てた名前（別名）のいずれかになります。</p> <p>グループに Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタが含まれている場合、[ターゲット] 列のサーバ名はリンクとして表示されます。リンクをクリックすると、サーバのサーバ中心のレポートが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「サーバ中心のレポートの作成」 (1357ページ)</a>を参照してください。</p>
サマリ	<p>モニタの場合、[サマリ] 列には、モニタによってレポートされた最新の測定値の結果が表示されます。モニタ・タイプによっては、複数の測定値が含まれていることがあります。モニタ・グループの場合、サマリにはグループ内のモニタの数や、エラー状態を報告したモニタの数（存在する場合）が表示されます。</p> <p>モニタが無効になっている場合、無効の状態（ [手動で無効化されています] , [disabled until x time] , または [disabled by &lt;Downtime Name&gt; from BSM] ）が表示されます。</p>
更新日時	<p>グループまたはモニタで最後にイベントが発生した日時。</p>
詳細	<p>[詳細] 列には、モニタまたはグループを説明するテキストか、リンクをクリックするとさまざまなアクションが実行される HTML のいずれかが表示されます。</p> <p>このフィールドにテキストが含まれている場合、そのテキストをダブルクリックすると、HTML 形式の詳細な説明が表示されるダイアログ・ボックスが開きます。</p> <p>この列に情報を入力するには、モニタ・ツリーでモニタまたはグループを選択して [プロパティ] タブを選択します。開いたページで、[一般設定] を展開し、[モニタの詳細] / [グループの詳細] ボックスに詳細を入力します。</p>

UI 要素	詳細
グループ名	モニタが所属するグループの名前を示します。SiteScope の階層内のモニタやグループの位置を確認して親ノードに移動する場合、および、子孫モニタ・ビューにすべての子孫を表示するときに警告をグループ名別に分類する場合に便利です。[グループ名] セルをダブルクリックして、モニタ・パスをクリップボードにコピーします（モニタ・パス情報のコピーや貼り付けに便利）。

## 状態および可用性のレベル

アイコン	詳細
	<b>正常な状態</b> :すべてのパフォーマンス測定値が「正常」のしきい値レベル内にあります。
	<b>警告状態</b> :1 つ以上のパフォーマンス測定値が「警告」の範囲内にありますが、「エラー」または「低」の範囲内の測定値はありません。
	<b>エラー/標準以下状態</b> :1 つ以上のパフォーマンス測定値が「エラー」または「標準以下」の範囲内にあります。これは、次のいずれかを示しています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>パフォーマンス測定値に値はあるが、品質レベルが低い。</li> <li>なんらかのエラーが原因で測定値がない。</li> </ul>
	<b>状態が定義されていません（データなし）</b> :グループまたはモニタのデータがありません。これは、次のいずれかの理由が原因で発生します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>新規モニタがまだ実行されていない。</li> <li>モニタ・カウンタがまだ収集されていない。</li> <li>グループまたはモニタが依存するモニタで「正常」状態がレポートされていない。</li> </ul>
	<b>しきい値がない状態</b> :モニタ・カウンタにしきい値が定義されていないため、状態が割り当てられていません。
	<b>手動で無効化されています</b> :グループまたはモニタが現在無効になっているため、データの更新が受信されていません。
	<b>データが収集されました</b> :SiteScope からリモート・システムに接続して、個々のモニタ設定で定義されているアクションを実行できたことを示します。

アイコン	詳細
	結果として生じるモニタの状態は、モニタ・アクションの結果を表しています。エラーまたは警告が示された場合、対象システムのパフォーマンスまたは対象リソースの可用性の正確な測定値が表示されます。
	<b>可用性に関する警告</b> : SiteScope で、リモート・システムとの接続に問題がある可能性が検出されたことを示します。
	<b>データを使用できません</b> : SiteScope からリモート・システムに接続できなかったことを示します。結果として生じる個々のモニタのエラー状態は、リモート・サーバとの接続の失敗に起因する可能性があります。これは、必ずしも対象リソースが機能していないことを表しているわけではありません。

## ダッシュボードのコンテキスト・メニュー

次のオプションは、グループまたはモニタのオブジェクト行の列を右クリックすると表示されます。

UI 要素	詳細
確認応答の追加	確認ダイアログ・ボックスが開き、確認をモニタに追加できます。
確認応答の削除	モニタの確認応答を削除します。
関連する警告の有効化/無効化	【関連する警告の有効化 / 無効化】ダイアログ・ボックスが開き、グループ内の全モニタの警告をすべて有効化または無効化できます。【 <b>モニタを無効化</b> 】を選択すると、このページに戻って【 <b>モニタを有効化</b> 】を選択するまで警告が無効になります。
モニタの有効化/無効化 グループ内のモニタの有効化/無効化	【グループ内のモニタの有効化/無効化】ダイアログ・ボックスが開き、モニタまたはグループ内の全モニタを有効化または無効化できます。【 <b>モニタを無効化</b> 】を選択すると、このページに戻って【 <b>モニタを有効化</b> 】を選択するまでモニタが無効になります。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」 (1063ページ)</a> を参照してください。
クイック・レポート	選択したモニタの事前に設定された設定を使用して、1 回かぎりの SiteScope 管理レポートが作成されます。詳細については、 <a href="#">「クイック・レポート」 (1348ページ)</a> を参照してください。  <b>注</b> : このメニュー項目は、モニタの場合にのみ表示されます。



UI 要素	詳細
モニタの実行	選択したモニタまたは選択したグループ内の全モニタが実行されます。
ツール	<p>モニタ設定の問題のトラブルシューティングに役立つ診断ツールが開きます。利用可能なツールの詳細については、<a href="#">「SiteScope ツール」 (112ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>注：</b> このメニュー項目は、モニタの場合にのみ表示されます。また、特定のモニタの場合にのみ使用できます。</p>


## SiteScope ダッシュボード - [モニタ履歴] ビュー

**注:** このトピックは以下の内容に関連します。 [「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 \(1052ページ\)](#), [「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」 \(1054ページ\)](#)

このビューには、過去 24 時間に収集されたモニタ、モニタ・グループ、警告の情報が表示されます。時間、モニタの状態、データ・エントリ数を使用してこの情報をフィルタします。

アクセス方法	[ <b>モニタ</b> ] コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで、 [ <b>モニタ履歴</b> ] ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>この機能を有効にするには、 [<b>プリファレンス</b>] &gt; [<b>一般プリファレンス</b>] &gt; [<b>ダッシュボード モニタ履歴表示オプション</b>] の [<b>ダッシュボード モニタ履歴ビューを有効にする</b>] を選択します。</li><li>この機能では、保存するデータ量を厳密に決めることができるため、データベースが過負荷状態になることはありません。</li><li>標準設定では、選択した要素の [<b>モニタ履歴</b>] テーブルに表示できるオブジェクトの最大数は 4000 で、 [<b>アイコン ビュー</b>] で表示できるアイコンの最大数は 70 です。これらの数を変更するには、 [<b>ダッシュボードの設定</b>] で値を変更します（ [<b>モニタ</b>] を選択して、 [<b>ダッシュボードの設定</b>] ボタンをクリックし、 [<b>ダッシュボードのプロパティ</b>] を展開する）。ただし、標準設定を使用することをお勧めします。詳細については、 <a href="#">「[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス」 (1060ページ)</a>を参照してください。</li><li>選択した要素の行数が、 [<b>モニタ履歴</b>] テーブルに表示できる最大数よりも多い場合、さらに限定的なツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。</li><li>SiteScope for Load Testing では、ダッシュボード・モニタ履歴表示はサポートされていません。</li></ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>トリガされた警告</b> :警告をトリガしたモニタの横に表示されます。
<b>実行時間</b>	モニタの実行時間。
<b>名前</b>	モニタの名前。
<b>状態</b>	実行時のモニタの状態（「エラー」，「警告」，「正常」） :ユーザ・インタフェースの詳細については，「 <a href="#">SiteScope ダッシュボード - [現在の状態] ビュー</a> 」(1066ページ)を参照してください。
<b>サマリ</b>	モニタの実行の詳細。  可用性  このボックスが表示されるのは，[詳細表示] 表示枠の <b>[モニタが利用可能かを表示]</b> を選択した場合だけです。  グループ  モニタが属するグループの名前。このボックスが表示されるのは，ダッシュボードの <b>[すべての子孫の表示]</b> を選択した場合だけです。

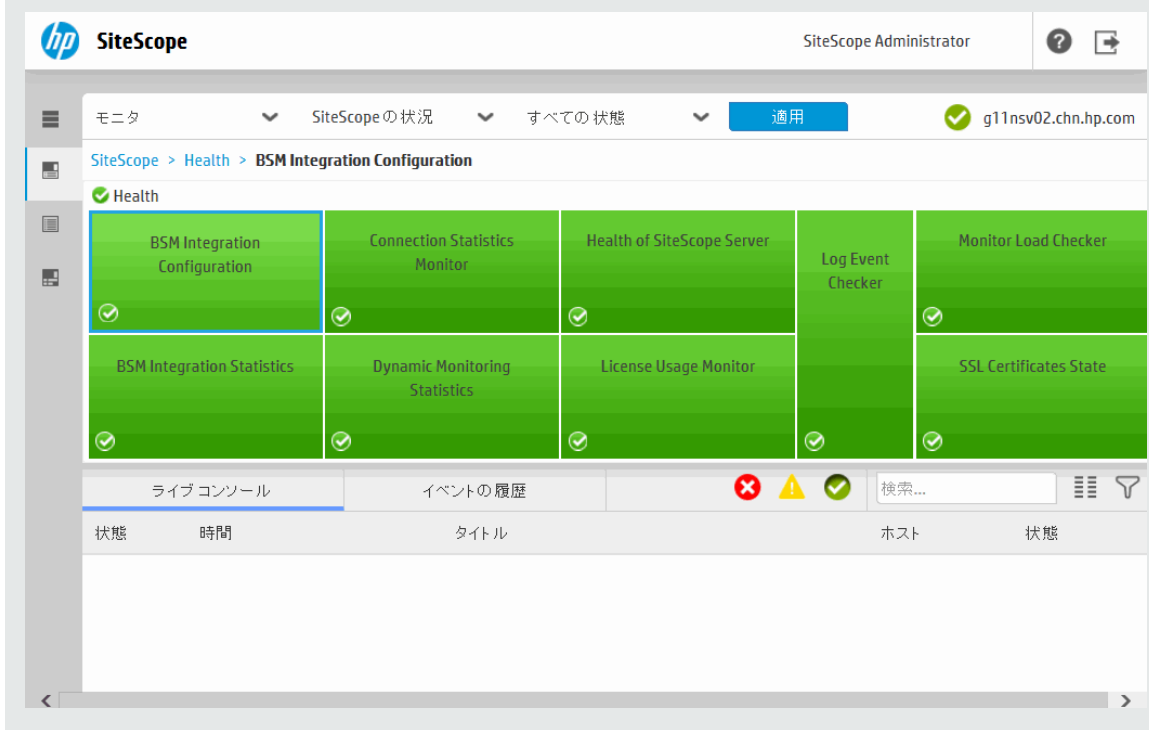


## 第95章: SiteScope 統合コンソール

【統合コンソール】を使用して、大規模な分散環境の管理を簡略化し、問題の特定と解決をすばやく行うことができます。統合コンソールには、次のオプションが含まれています。


- **Ops ビュー** : イベント・コンソールと Multi-View を組み合わせて 1 つのビューを形成します。両者を並べて作業できるため、調査担当者は、選択したモニタまたはモニタ・グループに関連付けられたイベント、または選択したイベントに関連付けられたモニタを特定し、ドリル・ダウンしてトラブルシューティングを実行することにより、問題を分離および診断できます。
- **イベント・コンソール** : 単一のインタフェースから、監視対象環境のステータスのリアルタイム追跡、イベントの優先順位付けと配信、イベントのライフサイクル管理を実行できます。また、イベント履歴の詳細を確認することもできます。イベント履歴は、以前の問題の解決方法を追跡したり、トレンドや隠れたパターンを見つけ出すのに便利です。詳細については、[「イベント・コンソール」 \(1102ページ\)](#)を参照してください。
- **Multi-View** : IT インフラストラクチャで監視している全対象のステータスを 1 つのビューに表示できます。各個人の見方に合わせてさまざまな方法でオブジェクトをグループ化できます。Multi-View では、たとえば、SiteScope のグループやモニタを、ネストされた矩形のセットとして階層ツリー・マップに表示できます。その際、データ間の関係が失われることはありません。モニタをターゲット・リモート・サーバでグループ化して表示したり、カスタムの検索 / フィルタ・タグでモニタをグループ化して表示するといったことが可能です。詳細については、[「Multi-View」 \(1080ページ\)](#)を参照してください。

### 例：統合コンソール



### アクセス方法

統合コンソールには、Web ブラウザから直接アクセスすることも、SiteScope ダッシュボードからアクセスすることもできます。

- ブラウザから統合コンソールにアクセスするには、次の形式で URL を入力します。  
http://<サーバ名>:<ポート>/SiteScope/WebMain
- SiteScope ダッシュボードから統合コンソールにアクセスするには、**【モニタ】** コンテキストを選択し、**【ダッシュボード】** タブをクリックして、**【統合コンソール】**  ボタンをクリックします。

## 学習事項

### サポートされているブラウザ

SiteScope イベント・コンソールは、次のブラウザでサポートされています。

- Google Chrome（最新認定バージョン）：34.0.1847.137 m
- Mozilla Firefox（最新認定バージョン）：31.2.0 ESR
- Safari（最新認定バージョン）：8.0 for Mac
- Internet Explorer 9, 10, 11

**注:**

- クライアント・マシンでサポートされる Internet Explorer 9 には、次の制限があります。
  - Microsoft Windows 7 N Edition ではサポートされません。
  - Microsoft Windows Server 2008 ではサポートされません。
- MyBSM の SiteScope Multi-View ページは、Internet Explorer 11 ではサポートされません。
- **【ブラウザー モード】** は IE のバージョンに従って設定し、**【ドキュメント モード】** は標準モードに設定することをお勧めします。

- Internet Explorer 8 (MyBSM でのみ)

**注:** Internet Explorer 8 を使用して MyBSM の Multi-View ページにアクセスすることはできますが、この操作は正式にはサポートされなくなりました。イベント・コンソールと、統合コンソールのタブの機能が動作しないため、サポート対象のブラウザのいずれかに切り替えることをお勧めします。

- Safari が搭載された iPad 3 (最新のアップデートが搭載された iOS 7)
- Chrome 34.0.1847 が搭載された Android タブレット (フル HD 表示)

## ヒント / トラブルシューティング

### 制限事項とトラブルシューティング

- 負荷テストのインストール用に、統合コンソールを SiteScope で使用しないでください。
- 統合コンソールと SiteScope のウィンドウが開いているときに SiteScope を再起動した場合、SiteScope の前に統合コンソールを更新すると、再起動後に SiteScope に再度ログインできなくなります (セッションが無効になり、タイムアウト j\_security\_check 後に復旧できなくなります)。  
**回避策:** 統合コンソールと SiteScope の開いているすべてのウィンドウを閉じてから、SiteScope と統合コンソールを再度開きます。
- 同時に開ける統合コンソールの最大数は 20 です。
- イベント・コンソールに関するその他のヒントとトラブルシューティングについては、[「ヒント / トラブルシューティング」\(1116ページ\)](#)を参照してください。

## 第96章: Multi-View

Multi-View では、IT インフラストラクチャで監視している全対象のパフォーマンスに統合ビューを提供することによって大規模な分散環境の管理が簡略化され、問題の特定と解決をすばやく行うのに役立ちます。

Multi-View は、ネットワーク・オペレーション・センタで企業全体の監視ステータスを表示するのに最適です。データ間の階層関係を失わずに、すべてのグループとモニタのほぼリアルタイムのステータスを表示する画面が、最大限に活用されています。グループとモニタは色分けされ、パフォーマンス・ステータスに関する情報を一目ですばやく把握できます。

Multi-View を使用すると、さまざまなユーザのパースペクティブに合わせて、オブジェクトを異なる方法でグループ化できます。たとえば、Multi-View を使用して、SiteScope のすべてのグループとモニタを階層ツリー・マップに表示する、モニタをターゲットのリモート・サーバでグループ化して表示する、モニタをカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグでグループ化して表示するなどの操作が可能です。

また、SiteScope モニタ・ツリーで事前定義のフィルタを使用して Multi-View をフィルタしたり、特定のステータス条件を満たす SiteScope グループとモニタのみをステータス別に表示することもできます。さらに、サーバ関連の問題の診断とトラブルシューティングを容易にするため、ドリルダウンしてグループとモニタに関する詳細情報を表示することもできます。

Multi-View を使用して、すべての SiteScope イベントを1つの場所から表示、管理することもできます。詳細については、「[イベント・コンソール](#)」(1102ページ)を参照してください。

### ヒント:

- 次の HP Video Gallery で、Multi-View の使用に関するガイドとナレーション付きの説明を表示できます。<http://h20621.www2.hp.com/video-gallery/us/en/sss/743CFBEB-2BC3-4EED-8BCB-94DCA429DA40/r/video/>.
- フィルタやタグを使用したモニタの管理および追跡については、YouTube のガイドとナレーション付きのデモ (<http://hpsw.co/r5D4GxA>) を参照してください。

例：すべてのグループとモニタのステータスをルート・レベルで表示する Multi-View ツリー・マップ



## アクセス方法

Multi-View には、SiteScope ダッシュボードからアクセスするか、ブラウザから直接アクセスできます。

- SiteScope ダッシュボードから Multi-View にアクセスするには、**【モニタ】** コンテキストを選択し、**【ダッシュボード】** タブをクリックして、**【統合コンソール】** ボタンをクリックします。

**ヒント:** Multi-View を開き、次の項目に焦点を当てることができます。

- モニタ・ツリーで選択した特定のグループまたはモニタ。これには、表示する必要があるグループまたはモニタを選択して、**【統合コンソール】** をクリックします。
- フィルタで定義した条件を満たす SiteScope オブジェクトまたはフィルタで選択したオブジェクト。これには、モニタ・ツリーのコンテキスト・ツールバーで必要なフィルタを選択するか、モニタ・ツリーに表示されるフィルタ済みオブジェクトでオブジェクトを選択して、**【統合コンソール】** をクリックします。
- ブラウザから Multi-View にアクセスするには、Web ブラウザに次の形式で URL を入力します。  
`http://<サーバ名>:<ポート>/SiteScope/WebMain` (Multi-View コンポーネントにフォーカスを置いて統合コンソールが開きます)

## 学習事項

### 本項の内容

- [「Multi-View の概要」 \(1082ページ\)](#)
- [「サポートされているブラウザ」 \(1083ページ\)](#)
- [「表示カテゴリ」 \(1083ページ\)](#)
- [「Multi-View の設定」 \(1084ページ\)](#)

### Multi-View の概要

Multi-View を使用すると、次のような利点があります。

- SiteScope のすべてのモニタとグループのほぼリアルタイムのステータスが1つのビューに表示されるため、IT インフラストラクチャの問題が全体に与える影響を簡単に把握できます。
- 異なるパースペクティブ（ターゲット・サーバ・ビュー、タグ・ビュー、標準の SiteScope 階層のパースペクティブでグループ化）でモニタを表示できます。たとえば、アプリケーション所有者はアプリケーションでグループ化した SiteScope オブジェクトを表示するのに対し、システム管理者はサーバでグループ化した表示を希望することがあります。またどちらのユーザも、異なる表示間を切り替えなければならない場合があります。
- イベント・コンソール（アプリケーションとサーバのパフォーマンスに関するすべての通知メッセージの中心的なビュー）と並行して作業ができるため、パフォーマンスの問題をすばやく管理、特定、解決できます。
- すべてのグループとモニタのステータスを表示する画面が、最大限に活用されます。Multi-View は、画面のサイズに関係なくサポートされるため、ネットワーク・オペレーション・センタで監視データを表示するのに最適です。また、iPad や Android タブレットにも対応しています。
- グループとモニタの詳細情報を表示するためのフィルタ処理とドリルダウンが用意されているため、表示するグループとモニタにのみ焦点を絞ることができます。
- 問題の根本原因を分離して、問題を軽減するためのトラブルシューティング・アクションを実行できます。
- Multi-View は HTML ベースです。Multi-View は、Chrome や Safari などの他のブラウザでサポートされており、Web ブラウザで実行されます。<http://<SiteScope>:8080/SiteScope/MultiView> リンクを使用すると、Multi-View に直接アクセスできます。サポート対象ブラウザのリストについては、[「サポートされているブラウザ」 \(1078ページ\)](#)を参照してください。
- SiteScope が BSM サーバに接続されている場合、Multi-View は MyBSM でサポートされるため、複数の SiteScope ビューを統合できます。事前定義の MyBSM Multi-View ページには、BSM システムに接続されているすべての SiteScope サーバの SiteScope プロファイル CI のステータスも表示されます。これにより、SiteScope インスタンスにドリルダウンしなくても、SiteScope にアクセスしてトラブルシューティングできます。

## サポートされているブラウザ

サポート対象ブラウザのリストについては、[「サポートされているブラウザ」\(1078ページ\)](#)を参照してください。

## 表示カテゴリ

Multi-View でオブジェクトを表示、グループ化するためのさまざまなオプションがあります。

次のビューでは、問題分析用に、同じユーザがビュー間を切り替えて、異なるパースペクティブで SiteScope データを表示することもできます。

### ・ モニタ・ビュー

SiteScope のすべてのグループとモニタは、フラット化したビュー内で、ネストされた一連の四角形として表示できます。データ間の階層関係は保持されるため、異なるレベルにドリルダウンできます。

タスクの詳細については、[「ビューを選択および設定する方法」\(1085ページ\)](#)を参照してください。

### ・ サーバ・ビュー

サーバ・ビューには、SiteScope データを表示するさまざまなユーザのパースペクティブに合わせた新しいグループ化オプションが備えられています。SiteScope モニタをターゲット・サーバでグループ化して表示できます。これは、リモート・サーバでグループ化したモニタ表示を希望するシステム管理者などの場合に便利です。

**注:** サーバ・ビューには、リモート・サーバ・ツリーに表示されるリモート・サーバのみが表示されます。SiteScope サーバ、URL/Ping モニタに使用される非永続サーバ、参照可能モニタは表示されません。

タスクの詳細については、[「ビューを選択および設定する方法」\(1085ページ\)](#)を参照してください。

### ・ タグ・ビュー

タグ・ビューには、SiteScope データを表示するさまざまなユーザのパースペクティブに合わせた新しいグループ化オプションが備えられています。モニタのタグに基づいて SiteScope モニタをグループ化することができ、各モニタはそのタグに従って新しいグループに表示されます。これにより、複数の方法でシステムのステータスを確認できます。タグまたはその値をドリルダウンして、タグまたはその値が割り当てられたモニタのみを表示できます。

たとえば、地理的な場所、アプリケーション、オペレーティング・システム、環境タイプ（テスト/開発）などでモニタにタグ付けすることができます。これにより、最大限の柔軟性を持って、表示のパースペクティブをカスタマイズできます。タスクの詳細については、[「ビューを選択および設定する方法」\(1085ページ\)](#)および[「タグ・ビューでカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグを割り当てモニタを表示する方法」\(1087ページ\)](#)を参照してください。

モニタにタグ付けするには、まず **プリファレンス** > **タグの検索/フィルタ** でタグとその値を定義し、そのタグをモニタ・ツリーで1つ以上のモニタに割り当てる必要があります。ドロップダウン・リストからタグ・ビューを選択すると、選択したタグが割り当てられたモニタのみが

表示されます。検索タグまたはフィルタ・タグの作成、および SiteScope へのそれらのタグの割り当てに関する詳細については、[「タグの検索 / フィルタを使用してビューをフィルタする方法」\(80ページ\)](#)を参照してください。

**注:**

- タグ・ビューは、SiteScope の管理者、または「**タグの表示**」権限が付与されたユーザのみが使用できます。ユーザ権限の詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」\(744ページ\)](#)を参照してください。
- すべてのタグの表示を選択した場合、モニタに複数のタグが割り当てられていると、ビューで同じモニタが複数回表示されることがあります。

• **状況モニタ**

SiteScope 自体のパフォーマンスと可用性を確認するためにデプロイされたモニタの [SiteScope の状況] グループを表示できます。SiteScope サーバ名と SiteScope サーバ名の横にある状況ステータスは、Multi-View ヘッダ・パネルに常に表示されます。アイコンは、ワースト・ステータス（グループ内のすべての状況モニタのワースト・ステータス）の子に基づいて [SiteScope の状況] グループのステータスを示します。

[SiteScope の状況] グループには、SiteScope サーバ名のリンク、またはモニタ・ビューの [SiteScope の状況] フィルタからリンクできます。

タスクの詳細については、[「Multi-View での SiteScope サーバ状況の表示方法」\(1088ページ\)](#)を参照してください。

Multi-View の設定

- [インフラストラクチャ プリファレンス] の [Multi-View の設定] パネルでは、次の Multi-View プロパティを設定できます。詳細については、[「Multi-View の設定」\(650ページ\)](#)を参照してください。設定を変更すると、SiteScope を再起動する必要があります。
- **設定変更の更新頻度（秒）** : Multi-View での設定変更の更新間の待機時間。設定データには、グループまたはモニタの追加、削除、移動、およびグループまたはモニタ名の変更が含まれます。標準設定値は 60 秒です（これは最小値でもあります）。
- **ランタイム・データの更新頻度（秒）** : Multi-View でのランタイム・データの更新間の待機時間。ランタイム・データには、モニタまたはグループのステータスの変更および有効化 / 無効化情報が含まれます。標準設定値は 5 秒です（これは最小値でもあります）。
- **Multi-View の最大数** : 開いている Multi-View の最大数に達すると、そのことをユーザに示すポップアップ・ウィンドウが表示され、他の Multi-View を開くことはできません。標準設定値は 20 秒です（1 ~ 20 の値である必要があります）。この数はキャッシュの頻度によって変わります。キャッシュをクリアする間隔を増やすと同時に開けるビューの数が減ります。
- **前回の使用時からビュー・キャッシュをクリアするまでの間隔（秒）** : ビューの前回の使用時からキャッシュをクリアするまでの待機時間（秒単位）。この数は同時に開ける Multi-View の



数に影響します。キャッシュをクリアする間隔を増やすと同時に開けるビューの数が減ります。標準設定値は 120 秒です（最小値は 5）。

- <multiViewUrl> 変数を電子メール・テンプレートに追加すると、Multi-View URL へのリンクを含む電子メール警告を送信するように設定できます。詳細については、[「SiteScope 警告の設定」\(1231ページ\)](#)を参照してください。

## タスク

### 本項の内容

- [「ビューを選択および設定する方法」\(1085ページ\)](#)
- [「タグ・ビューでカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグを割り当てモニタを表示する方法」\(1087ページ\)](#)
- [「Multi-View での SiteScope サーバ状況の表示方法」\(1088ページ\)](#)
- [「「Multi-View で問題を診断、トラブルシューティングする方法」」\(1088ページ\)](#)
- [「Multi-View ヘッダに会社名またはロゴを表示する方法」\(1089ページ\)](#)
- [「Multi-View のモニタまたはグループに直接リンクする URL を取得する方法」\(1090ページ\)](#)

### ビューを選択および設定する方法

このタスクでは、Multi-View でビューを選択、設定する方法について説明します。

#### 1. 前提条件:

- SiteScope Multi-View には、SiteScope にログオンしたユーザがアクセスできるグループのみが表示されます。同様に、グループとモニタで実行できるアクションは、ユーザ・アカウントに割り当てられたアクション権限によって異なります。ユーザ・アカウントの詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」\(744ページ\)](#)を参照してください。
- タグ・ビューを使用するには、特定の前提条件が必要です。詳細については、[「タグ・ビューでカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグを割り当てモニタを表示する方法」\(1087ページ\)](#)を参照してください。

#### 2. Multi-View を開きます（[「アクセス方法」\(1081ページ\)](#)を参照）。

**注:** SiteScope ダッシュボードからモニタ・ツリーでグループまたはモニタを選択して Multi-View を開いた場合は、選択したグループまたはモニタに焦点が当てられます。

- #### 3. ビューを選択または変更するには、Multi-View ウィンドウの左上にあるビュー・ドロップダウン・リストをクリックし、次のいずれかのビュー・カテゴリを選択します。
- **モニタ** :SiteScope のグループとモニタを、フラット化したビュー内で、ネストされた一連の四角形として表示します。データ間の階層関係は保持されるため、異なるレベルにドリルダウン/ドリルアップできます。

- **サーバ**: SiteScope モニタをターゲット・サーバでグループ化して表示します。これには、SiteScope データを表示するさまざまなユーザのパースペクティブに合わせた新しいグループ化オプションが備えられています。また、問題分析用に SiteScope データを異なるパースペクティブから表示することもできます。
- **タグ**: SiteScope モニタをカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグでグループ化して表示します。これには、SiteScope データを表示するさまざまなユーザのパースペクティブに合わせた新しいグループ化オプションが備えられています。また、問題分析用に SiteScope データを異なるパースペクティブから表示することもできます。

選択したビュー・オプションを適用するには、**〔適用〕** をクリックします。

4. SiteScope モニタ・ツリーで事前定義されたフィルタを使用して Multi-View でオブジェクトをフィルタするには、フィルタ・ドロップダウン・リスト（ビュー・ドロップダウンの右側にある）をクリックし、フィルタを選択します。フィルタ・リストに、次の内容が表示されます。
  - **すべてのモニタ**: SiteScope モニタ・ツリーで使用するすべてのグループとモニタを表示します。

**ヒント:** 高負荷の設定で、パフォーマンスを高め、Multi-View の利点を最大限に活用するため、すべての SiteScope オブジェクトを表示するのは避け、フィルタを選択するか、表示するグループ/モニタにドリルダウンすることをお勧めします。

- **<フィルタ名>**: SiteScope モニタ・ツリーで定義されたフィルタ（存在する場合）。モニタ名、モニタ・タイプ、ターゲット・サーバ、タグ、モニタまたは警告のステータスの有効化/無効化、BSM レポート設定によるフィルタなど、異なるユーザのパースペクティブから見たデータ表示に適用できるさまざまな条件を使用して、フィルタを定義できます。モニタ・ツリーでのフィルタの定義の詳細については、[「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」 \(78ページ\)](#)を参照してください。

**注:** モニタ・ツリーで作成した新しいフィルタは、ビューの更新 (F5) 後にのみ Multi-View に表示されます。

- **SiteScope 状況**: モニタの SiteScope 状況グループには、SiteScope 自体のパフォーマンスと可用性に関する情報が表示されます。詳細については、[「SiteScope サーバの状況モニタ」 \(1129ページ\)](#)を参照してください。

選択したフィルタ・オプションを適用するには、**〔適用〕** をクリックします。

5. 特定のステータス条件を満たす SiteScope のグループとモニタを表示するには、ステータス・ドロップダウン・リスト（フィルタ・ドロップダウンの右側にある）をクリックし、表示するステータス条件（**〔エラー〕**、**〔エラーと警告〕**、**〔無効〕**、**〔警告〕**、**〔データなし〕**、**〔良好および警告〕**、**〔良好〕**）を選択します。詳細については、[「Multi-View ツールバー」 \(1091ページ\)](#)を参照してください。

選択したステータス条件を適用するには、**〔適用〕** をクリックします。

**ヒント:** フィルタ・ドロップダウンで選択したフィルタにステータス・フィルタを適用すると、フィルタ条件を満たし特定のステータスにあるモニタのみを表示できます。

6. ツリー・マップでサブグループをクリックするか、階層リンクで適切なサブグループ・リンクをクリックすると、ドリルダウンして、選択したサブグループをマルチレベルのコンテキスト内で表示できます。ツリー・マップには、選択したサブグループとそのコンポーネントのみが表示されます。

階層リンクを使用して、以前のレベルに戻ることができます。

**ヒント:** イベント・コンソールが表示されている場合は、選択したモニタまたはグループに関連付けられているすべてのイベントを表示できます。

7. 表示またはトラブルシューティングするグループまたはモニタにカーソルを置き、情報 ⓘ アイコンをクリックすると、グループの「詳細」またはモニタの「詳細」ダイアログ・ボックスが開きます。詳細については、「[「\[モニタの詳細\] ダイアログ・ボックス」 \(1096ページ\)](#)」または「[「\[グループの詳細\] ダイアログ・ボックス」 \(1099ページ\)](#)」を参照してください。

この情報は、「[「Multi-View で問題を診断、トラブルシューティングする方法」 \(1088ページ\)](#)」に記載されているように、問題の根本原因の診断やトラブルシューティングの実行に役立ちます。

**注:** Multi-View の設定は、[\[プリファレンス\] > \[インフラストラクチャ プリファレンス\]](#) > [\[Multi-View の設定\]](#) から変更できます。設定の詳細については、「[Multi-View の設定 \(1084ページ\)](#)」を参照してください。

タグ・ビューでカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグを割り当てモニタを表示する方法

**ヒント:** フィルタやタグを使用したモニタの管理および追跡については、YouTube のガイドとナレーション付きのデモ (<http://hpsw.co/r5D4GxA>) を参照してください。

1. 前提条件:

タグ・ビューは、SiteScope の管理者、または「**タグの表示**」権限が付与されたユーザのみが使用できます。ユーザ権限の詳細については、「[「ユーザ管理プリファレンス」 \(744ページ\)](#)」を参照してください。

2. 検索/フィルタ・タグを作成します。

SiteScope で、[\[プリファレンス\] > \[タグの検索/フィルタ\]](#) を選択し、表示のフィルタ処理に使用する検索/フィルタ・タグを作成します。タグとその値を定義します。たとえば、「HR」, 「CRM」, 「Online Banking」という値を使用する Application というタグを定義します。

**注:** 検索/フィルタ・タグとタグの値を追加、編集、削除するには、SiteScope の管理者、または「**タグを追加、編集、または削除します**」権限が付与されたユーザである必要があります。

3. 1 つ以上の SiteScope モニタに検索/フィルタ・タグを割り当てます。
  - a. SiteScope モニタ・ツリーで、タグを付けるモニタを選択します。
  - b. [プロパティ] タブで、**【タグの検索/フィルタ】** パネルを展開し、タグとその値をモニタに割り当てます。
  - c. このタグと値を割り当てるすべてのモニタについて、同じ操作を繰り返します。
4. Multi-View を開き、ビュー・ドロップダウン・リストで **【タグ】** を選択します。
5. タグまたはその値をドリルダウンして、選択したタグ項目が割り当てられたモニタのみを表示できます。

たとえば、Application タグを持ち、CRM タグ値が割り当てられたすべてのモニタをフィルタすることができます。

**注:**

- タグ・グループのステータスは、ワースト・ステータス（タグ・グループ内のすべての SiteScope モニタのワースト・ステータス）の子に基づいています。このアイコンからグループの詳細にドリルダウンすることはできません。
- モニタに複数のタグが割り当てられており、それらのタグをフィルタで選択すると、タグ・ビューで同じモニタが複数回表示されることがあります。

## Multi-View での SiteScope サーバ状況の表示方法

1. Multi-View を開きます（「[アクセス方法](#)」(1081ページ)を参照）。
2. ウィンドウ上部で、SiteScope サーバ名リンクをクリックします。名前の左側にあるアイコンは、ワースト・ステータス（グループ内のすべての状況モニタのワースト・ステータス）の子に基づいて **【SiteScope の状況】** グループのステータスを示します。

（SiteScope の状況モニタには、**【モニタ】** ビューのフィルタ・ドロップダウン・リストからアクセスすることもできます。）

状況モニタの詳細については、「[SiteScope サーバの状況モニタ](#)」(1129ページ)を参照してください。


**注:** モニタとグループのツリー・マップに戻るには、フィルタ・ドロップダウン・リストで **【すべてのモニタ】** を選択し、**【適用】** をクリックします。

3. 「**「Multi-View で問題を診断、トラブルシューティングする方法」**」(1088ページ)の説明に従って、ドリルダウンして問題のモニタを表示します。

### 「Multi-View で問題を診断、トラブルシューティングする方法」

Multi-View から、問題の根本原因を診断し、トラブルシューティングを実行できます。

1. エラー状態のメトリックを特定する

確認またはトラブルシューティングするモニタの上にカーソルを移動し、[情報]  アイコンをクリックして、モニタの[詳細] ダイアログ・ボックスを開きます。[メトリクス] タブをクリックして、エラーまたは警告ステータスのモニタ・メトリックの一覧を表示します。

2. モニタを再実行して問題がまだ残っているかどうか確認する

グループの[詳細] またはモニタの[詳細] ダイアログ・ボックスで[今すぐ実行] をクリックして、問題がまだ残っているかどうか確認します。この操作により、モニタまたはグループ内の各モニタが再実行されます。

3. レポートを生成して時間の経過に伴うパフォーマンスと可用性の変化を確認する

[詳細] タブの[レポートの生成] をクリックして、グループまたはモニタのレポートを生成します。このレポートを参照して、問題の性質を判断したり、グループまたはモニタがエラー状態であった期間を確認したりできます。


4. モニタまたは警告を無効にして、これ以上通知がトリガされないようにする

診断に応じて、モニタまたはグループのモニタを無効化したり、モニタまたはグループに関連付けられた警告を無効化してモニタの使用を続行することができます。

トラブルシューティングを促進するために、モニタの警告の履歴を確認して、その警告が再発している問題のものがどうかを判別することができます（すべての関連付けられた警告が警告セクションに表示されます）。

**注:** トリガ済み警告テーブルは、警告を表示する権限のあるユーザに対してのみ表示されます。ユーザ権限の詳細については、[「権限」\(757ページ\)](#)を参照してください。

5. 問題の解決状況を追跡するため確認応答を追加する

警告を確認したら、[確認応答の追加]  ボタンをクリックし、モニタ・ステータスを確認するコメントを追加します。確認応答コメントは、[SiteScope ダッシュボード] ビューの表示を更新すると、確認アイコンに関連付けられたヒントとして表示されます。また、確認ログにも記録されます。

**注:** 確認応答は確認ログ（[SiteScope ダッシュボード] の[グループ内のモニタを確認] ダイアログ・ボックスからアクセス可能）からのみ削除できます。削除された確認応答は、Multi-View の確認応答一覧に表示されなくなります。

6. 問題をトラブルシューティングする

問題をさらに調査するには、[ダッシュボード ビューのトラブルシューティング] をクリックして [SiteScope ダッシュボード] ビュー内のグループまたはモニタを開きます。

**注:** このオプションは、タブレットで Multi-View を表示している場合には使用できません。

## Multi-View ヘッダに会社名またはロゴを表示する方法

1. 前提条件:

SiteScope サーバ・ファイル・システムにアクセスできるユーザである必要があります。

- 2. Multi-View ウィンドウ上部に表示する名前またはロゴの画面キャプチャを作成します。
  - 幅は最大 300 ピクセル、高さは最大 40 ピクセルのイメージを使用することをお勧めします。イメージがこのサイズを超えると、ヘッダに正しく表示されなくなります。
  - gif, png, jpg, bmp など、さまざまなイメージ形式がサポートされています。
- 3. 名前を customLogo\*.<イメージ形式> の形式にして、イメージを保存します。
- 4. イメージ・ファイルを <SiteScope のルート・ディレクトリ>\templates.multiView フォルダにコピーします。

**注:** SiteScope のアップグレード時にはカスタム・イメージがサポートされ、上記のフォルダにあるイメージが SiteScope のインポート / エクスポート設定に含まれます。

- 5. イメージ・ファイルのアップロード後、Multi-View ページを再ロードすると、会社名またはロゴが Multi-View ヘッダに表示されます。

Multi-View のモニタまたはグループに直接リンクする URL を取得する方法

- 1. SiteScope の [ダッシュボード] ビューのモニタ・ツリーで関係するグループまたはモニタに焦点を当て、[Multi-View] をクリックします。Multi-View がブラウザで開き、選択したグループまたはモニタに焦点が当てられます。
- 2. ブラウザから URL をコピーします。この URL を使用して、インフラストラクチャで関係するグループまたはモニタに直接ドリルダウンできます。

関連情報: [「イベント・コンソール」 \(1102ページ\)](#)

## Multi-View ユーザ・インタフェース

Multi-View を使用すると、ご使用の IT インフラストラクチャに存在するすべての監視対象のパフォーマンス・ステータスの概要を単一のビューに表示できます。Multi-View のフィルタ処理機能とドリルダウン操作を使用することにより、ユーザは、表示内容に関心のあるグループとモニタに絞り込むことができます。結果として、容易に問題の根本原因を分離し、トラブルシューティングを行うことができます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>• SiteScope ダッシュボードを使用する場合: [モニタ] コンテキストで、[ダッシュボード] タブをクリックし、[統合コンソール] ボタンをクリックします。</li><li>• ブラウザを使用する場合: Web ブラウザに Multi-View URL を入力します。次の URL 形式を使用します。http://&lt;サーバ名&gt;:&lt;ポート&gt;/SiteScope/MultiView</li></ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">「ビューを選択および設定する方法」 (1085ページ)</a></li><li>• <a href="#">「タグ・ビューでカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグを割り当てモニタを表示する方法」 (1087ページ)</a></li></ul>




	<a href="#">「Multi-View での SiteScope サーバ状況の表示方法」 (1088ページ)</a> <a href="#">「「Multi-View で問題を診断, トラブルシューティングする方法」」 (1088ページ)</a>
関連情報	<a href="#">「Multi-View」 (1080ページ)</a>


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

#### Multi-View ツールバー

Multi-View ツールバーを使用すると、各ユーザ（システム管理者、アプリケーション所有者など）の必要に応じてビューをフィルタできます。また、SiteScope データをさまざまなパースペクティブで表示して問題を解析できます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<SiteScope サーバ名>	<p>現在 Multi-View に表示されている SiteScope サーバの名前。</p> <p>サーバ名をクリックすると、モニタの [SiteScope の状況] グループにドリルダウンできます。状況モニタには、SiteScope 自身のパフォーマンスと可用性に関する情報が表示されます。詳細については、<a href="#">「SiteScope サーバの状況モニタ」 (1129ページ)</a>を参照してください。</p> <p>名前の左側にあるアイコンは、ワースト・ステータス（グループ内のすべての状況モニタのワースト・ステータス）の子に基づいて [SiteScope の状況] グループのステータスを示します。</p> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [SiteScope の状況] グループに対する表示権限がない場合、サーバ名リンクは非アクティブになります。</li> <li>• グループとモニタのツリー・マップに戻るには、ブラウザの [戻る] ボタンをクリックするか、フィルタ・リストで [すべてのモニタ] を選択してから [適用] をクリックします。</li> </ul>
ユーザ	ユーザ名を入力して SiteScope にログオンすると、ウィンドウの右上隅にユーザ名が表示されます。
	Multi-View のヘルプを表示します。

UI 要素	詳細
	<p>Multi-View からログアウトします。</p>
<p>&lt;ビュー&gt;</p> <div data-bbox="240 495 613 821"> <p>モニタ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>モニタ</li> <li>サーバ</li> <li>タグ</li> </ul> </div>	<p>ツリー・マップ内のオブジェクトの分類表示に使用するカテゴリを選択します。グループ化オプションを選択すると、SiteScope データを表示する各ユーザのパースペクティブに合わせてモニタをグループ化したり、問題を分析するためにさまざまなパースペクティブで SiteScope データを表示したりできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>モニタ</b>：ツリー・マップ内のオブジェクト（グループとモニタ）をグループ化して、フラット化したビュー内で、ネストされた一連の四角形として表示します。グループとモニタ間の階層関係は保持されるため、異なるレベルにドリルダウン/ドリル・アップできます。これは標準設定です。</li> <li>• <b>サーバ</b>：ターゲット・サーバ別にモニタをグループ化します。サーバ・ビューには、リモート・サーバ・ツリーに表示されるリモート・サーバのみが表示されます。SiteScope サーバ、URL/Ping モニタに使用される非永続サーバ、参照可能モニタは表示されません。</li> <li>• <b>タグ</b>：[プリファレンス] &gt; [タグの検索/フィルタ] で定義したカスタムの検索/フィルタ・タグでモニタをグループ化します。タグが割り当てられたモニタのみ表示されます。</li> </ul> <p>これらのカテゴリの詳細については、<a href="#">「表示カテゴリ」(1083 ページ)</a>を参照してください。</p>
<p>&lt;フィルタ&gt;</p> <div data-bbox="240 1373 613 1640"> <p>すべてのモニタ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>すべてのモニタ</li> <li>SiteScope の状況</li> </ul> </div>	<p>Multi-View でグループとモニタのフィルタを有効化します。次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>すべてのモニタ</b>：フィルタが選択されていないため、すべての SiteScope グループとモニタが Multi-View に表示されます。</li> </ul> <p><b>ヒント</b>：高負荷の設定で、パフォーマンスを高め、Multi-View の利点を最大限に活用するため、すべての SiteScope オブジェクトを表示するのは避け、フィルタを選択するか、表示するグループ/モニタにドリルダウンすることをお勧めします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>&lt;フィルタ名&gt;</b>：SiteScope モニタ・ツリーに事前定義されているフィルタ。フィルタ条件を満たす SiteScope グループ/モニタのみ Multi-View に表示されます。さまざまな条件で</li> </ul>



UI 要素	詳細
	<p>フィルタを定義して適用することにより、さまざまなユーザのパースペクティブからデータを表示できます。モニタ名、モニタ・タイプ、ターゲット・サーバ、タグ、モニタまたは警告の有効化 / 無効化ステータス、BSM レポート設定によってフィルタできます。モニタ・ツリー内のフィルタの定義の詳細については、「<a href="#">SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ</a>」(78ページ)を参照してください。</p> <p><b>注：</b>モニタ・ツリーで作成した新しいフィルタは、ビューの更新 (F5) 後にのみ Multi-View に表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>SiteScope 状況：</b>SiteScope 状況モニタ・グループを表示します。詳細については、「<a href="#">SiteScope サーバの状況モニタ</a>」(1129ページ)を参照してください。このオプションは、モニタ・ビューまたは Multi-View ヘッダ・パネル内でのみ使用可能です。</li> </ul>
<p>&lt;状態&gt;</p> <p>すべての 状態</p> <div data-bbox="240 1041 618 1583"> <p>すべての 状態</p> <p>エラー</p> <p>エラーと警告</p> <p>無効</p> <p>警告</p> <p>データなし</p> <p>良好および警告</p> <p>良好</p> </div>	<p>選択したステータス条件を満たす SiteScope グループ / モニタのみ表示されます。グループのステータスは、ワースト・ステータス (グループ内のすべての SiteScope モニタのワースト・ステータス) の子を基にしています。</p> <p><b>ヒント：</b>トラブルシューティングを実行するにはステータス条件を選択し、トラブルシューティングが完了したら「<b>すべての状態</b>」に戻すことをお勧めします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>すべての状態：</b>ステータス ( [無効] , [データなし] も含む) に関わらず、すべてのモニタまたはグループが表示されます。これは標準設定です。</li> <li>• <b>エラー：</b>エラー・ステータスを報告したモニタまたはグループのみ表示されます。</li> <li>• <b>エラーと警告：</b>警告またはエラー・ステータスのモニタまたはグループのみ表示されます。</li> <li>• <b>無効：</b>無効ステータスと報告されたモニタまたはグループのみ表示されます。</li> <li>• <b>警告：</b>警告ステータスを報告したモニタまたはグループのみ表示されます。</li> <li>• <b>データなし：</b>データなしと報告されたモニタまたはグループのみ表示されます。</li> <li>• <b>良好および警告：</b>良好または警告ステータスを報告したモニタまたはグループのみ表示されます。</li> </ul>




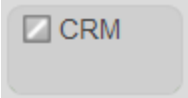


UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>良好</b>: 良好または OK ステータスを報告したモニタまたはグループのみ表示されます。</li> </ul> <p>ステータス・レベルの詳細については、「<a href="#">ツリー・マップ領域</a>」(1094ページ)を参照してください。</p>
<b>適用</b>	<p>SiteScope によって選択したビュー、フィルタ、ステータス設定が適用され、Multi-View の表示がそれに合わせて更新されます。</p> <p>フィルタに一致する項目が存在しない場合、または選択したビューを SiteScope で表示できない場合は、メッセージが表示されます。選択したビューの表示に 2 秒以上かかる場合は、<b>[キャンセル]</b> ボタンが表示され、フィルタを停止できます。フィルタが正しく適用されるまで、現在のビューがそのまま表示されます。</p>
<b>&lt;階層リンク&gt;</b>	<p>現在のレベルに移動する際に経由した各レベルが表示されます。ツリー・マップの上部に横長に表示されます。</p> <p>階層リンクのリストの各レベルはクリック可能なリンクになっているので、移動パスを辿って、ツリー・マップ内の特定のレベルに焦点を当てることができます。</p> <p><b>注</b>: フィルタは、フィルタ条件を変更しないかぎり有効なままです。このため、ステータス、フィルタ条件、選択したビューによっては、一部のモニタが表示されないことがあります。</p>

## ツリー・マップ領域

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<b>&lt;ステータス・アイコン&gt;</b>	<p>モニタ・ツリー内で強調表示されている要素、または階層リンク内にリストされている要素のグループとモニタが表示されます。グループをクリックすると、ツリー・ビュー内の当該オブジェクトにドリルダウンできます。階層リンクを使用して、以前のレベルに戻ることができます。</p> <p>各オブジェクトには、そのオブジェクトに割り当てられた動作ステータスを表</p>

UI 要素	詳細
	<p>すアイコンが表示され、現在のパフォーマンス・レベルが示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>良好ステータス</b>：グループまたはモニタのすべてのパフォーマンス測定値が「良好」しきい値レベル内にあります。</li> <li>● <b>警告ステータス</b>：グループまたはモニタの少なくとも1つのパフォーマンス測定値が「警告」の範囲にありますが、「エラー」または「標準以下」の範囲に該当する測定値はありません。</li> <li>● <b>エラー/標準以下状態</b>：グループまたはモニタの少なくとも1つのパフォーマンス測定値が、「エラー」または「標準以下」の範囲にあります。これは、次のいずれかを示しています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>パフォーマンス測定値に値はあるが、品質レベルが低い。</li> <li>なんらかのエラーが原因で測定値がない。</li> </ul> </li> <li>● <b>状態が定義されていません（データなし）</b>：グループまたはモニタのデータがありません。これは、次のいずれかの理由が原因で発生します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>新規モニタがまだ実行されていない。</li> <li>モニタ・メトリックがまだ収集されていない。</li> <li>グループまたはモニタが依存するモニタで「正常」状態がレポートされていない。</li> </ul> </li> <li>● <b>手動で無効化されています</b>：グループまたはモニタが現在無効になっているため、データの更新が受信されていません。</li> <li>● <b>グループ / モニタの詳細</b>：グループまたはモニタの上にカーソルを移動すると、ステータス・アイコンが情報アイコンに変わります。この情報アイコンをクリックしてドリルダウンすると、詳細な情報を確認できます。また、グループまたはモニタのトラブルシューティングも可能です。詳細については、「<a href="#">[モニタの詳細] ダイアログ・ボックス</a>」(1096ページ)または「<a href="#">[グループの詳細] ダイアログ・ボックス</a>」(1099ページ)を参照してください。</li> </ul>
<b>&lt;グループのステータス&gt;</b>	<p>グループのステータスは、ワースト・ステータス（グループ内のすべての SiteScope モニタのワースト・ステータス）の子を基にしています。グループのステータスには、現在表示されているかどうかに関係なく、グループ内のすべてのモニタ（のステータス）が反映されます（ステータスやフィルタ条件によっては、また、ユーザにグループ内の一部のモニタを表示する権限がない場</p>

UI 要素	詳細
	<p>合には、表示されないモニタもあります）。このため、グループ内のすべてのモニタが「良好」ステータスにある場合でも、グループは「エラー」ステータスとして表示されることがあります。</p> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>表示領域が不足している場合は、次のどちらかの表示になります。<ul style="list-style-type: none"><li>グループ内の一部のモニタ名を表示できない場合、モニタの状態アイコンのみが表示される。</li><li>グループ内の一部のモニタを表示できない場合、グループ名の横に  アイコンが表示される。</li></ul></li></ul> <p>グループ名をクリックしてドリルダウンすると、グループ内のすべてのモニタが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>グループがフィルタされる前から空の場合（エンティティが含まれていない場合）、そのグループのノードは（選択した背景色に応じて）の灰色と白の背景で表示され、 アイコンは表示されず、 ステータス・アイコンが表示されます。</li></ul> <div data-bbox="498 1085 685 1182"></div> <ul style="list-style-type: none"><li>エンティティを含むグループがフィルタ後に空になった場合、そのグループは、グループ内のワースト・ステータスの子のモニタに合わせて色づけされ、グループにエンティティが含まれていることを示すために  アイコンが表示されます。</li></ul> <div data-bbox="498 1383 886 1484"></div> <ul style="list-style-type: none"><li>ノード・サイズは、グループ内のオブジェクトの数ではなく、グループの階層レベルに応じて変わります。SiteScope ルート・ノードに近いグループほど、ノード・サイズが大きくなります。</li></ul>

## 「モニタの詳細」ダイアログ・ボックス


「モニタの詳細」ダイアログ・ボックスでは、選択したモニタの詳細情報を表示し、アクションを実行できます。

<b>アクセス方法</b>	Multi-View で、モニタにカーソルを置きます。ステータス・アイコンが「情報」  アイコンに変わります。アイコンをクリックしドリルダウンして詳細を表示するか、モニタをトラブルシューティングします。
<b>重要な情報</b>	【モニタの詳細】ダイアログ・ボックスでアクションを実行するには、SiteScope の管理者、または必要な権限が付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、 <a href="#">「権限」(757ページ)</a> を参照してください。
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「「Multi-View で問題を診断、トラブルシューティングする方法」(1088ページ)」</a>
<b>関連情報</b>	<a href="#">「Multi-View」(1080ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<b>【詳細】タブ</b>	
<b>状態</b>	モニタのステータス（良好、警告、エラー、無効、データなし）。
<b>サマリ</b>	モニタによってレポートされた最新の測定値の結果を表示します。モニタ・タイプによっては、複数の測定値が含まれていることがあります。モニタがエラー・ステータスの場合は、エラーの詳細が表示されます。モニタが無効になっている場合、無効のステータス（[手動で無効化されています]、[disabled until x time]、または [disabled by <ダウンタイム名> from BSM]）が表示されます。
<b>最後の実行日時</b>	モニタを最後に実行した日時。
<b>レポートの生成</b>	選択したモニタの事前に設定された設定を使用して、1 回かぎりの SiteScope クイック・レポートを作成します。レポートの詳細については、 <a href="#">「クイック・レポート」(1348ページ)</a> を参照してください。
<b>今すぐ実行</b>	モニタを実行し、サマリ・セクションの結果を更新します。このボタンは、無効な状態のモニタには使用できません。
<b>詳細</b>	モニタ・プロパティの【モニタの詳細】フィールドに入力した情報が含まれます。  <b>注：</b> このフィールドは、【モニタの詳細】フィールドが空の場合は表示されません。

UI 要素	詳細
モニタの状態	<p>モニタのアクティブ状態（有効 / 無効）を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>モニタが有効な場合は、<b>〔無効化〕</b> ボタンが表示されます。クリックして、モニタを無効にします。モニタを表すボックスの色とアイコンが灰色に変わり、モニタが非アクティブであることが示されます。Multi-View の [サマリ] フィールドには、「disabled manually, Disabled from MultiView by user - &lt;ユーザ名&gt;」と表示されます。</li> <li>モニタが無効な場合は、<b>〔有効化〕</b> ボタンが表示されます。クリックして、モニタを有効にします。モニタのステータスに応じて、モニタを表すボックスの色とアイコンが変わります。</li> </ul> <p>モニタの状態の変更に関する詳細は、<a href="#">「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」(1063ページ)</a>を参照してください。</p>
警告の状態	<p>モニタに関連付けられた警告の状態（有効 / 無効）を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>有効</b> : モニタに関連付けられた警告が有効であることを示します。モニタに関連付けられた警告を無効にするには、<b>〔無効化〕</b> ボタンをクリックします。</li> <li><b>無効</b> : モニタに関連付けられた警告が無効であることを示します。モニタに関連付けられた警告を有効にするには、<b>〔有効化〕</b> ボタンをクリックします。</li> </ul> <p>警告の状態の変更に関する詳細は、<a href="#">「関連する警告の有効化/無効化」(318ページ)</a>を参照してください。</p>
トリガされた警告	<p>トリガされたすべての警告の詳細を表示します。これには、次の内容が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>日付</b> : 警告がトリガされた日時。</li> <li><b>タイプ</b> : 警告アクションのタイプ（ポスト、サウンドなど）。</li> <li><b>名前</b> : 製品の表示でこの警告定義を識別するために使用される警告定義の名前。</li> <li><b>サマリ</b> : 実行された警告アクションのサマリ。</li> </ul> <p>トリガされた警告は、警告の表示権限を持つユーザに対してのみ表示されます。</p>
確認（過去 5 回）	<p>モニタに追加された過去 5 回の確認コメントの詳細を表示します。この機能は、SiteScope によって検出されたシステムおよびネットワーク・インフラストラクチャの問題の解決を追跡するために使用されます。この機能を使用すると、問題が確認された時間、実行されたアクション、実行したユーザが SiteScope によって記録されます。</p>

UI 要素	詳細
	<p><b>【確認応答の追加】</b>  ボタンをクリックして【確認応答の追加】ダイアログ・ボックスを開き、モニタのステータスを確認するコメントを追加します。ビューを更新（F5）すると、確認が表示されます。</p> <p><b>注：</b> 確認応答は確認ログ（【SiteScope ダッシュボード】の【グループ内のモニタを確認】ダイアログ・ボックスからアクセス可能）からのみ削除できます。削除された確認応答は、Multi-View の確認応答一覧に表示されなくなります。</p>
<b>ダッシュボード・ビューのトラブルシューティング</b>	<p>SiteScope インスタンスを新しいウィンドウで開き，【ダッシュボード】タブで選択したモニタにドリルダウンします。</p> <p>このオプションは，タブレットで Multi-View を表示している場合には使用できません。</p>
<b>【メトリック】タブ</b>	
<b>&lt;メトリックのリスト&gt;</b>	<p>エラーまたは警告ステータスにあるモニタ・メトリックの名前と値を表示します。メトリック・テーブルは，メトリック名と値でソートできます。</p>

## 【グループの詳細】 ダイアログ・ボックス


【グループの詳細】 ダイアログ・ボックスでは，選択したグループの詳細情報を表示し，アクションを実行できます。

<b>アクセス方法</b>	Multi-View で，グループにカーソルを置きます。ステータス・アイコンが「情報」  アイコンに変わります。アイコンをクリックしドリルダウンして詳細を表示するか，グループをトラブルシューティングします。
<b>重要な情報</b>	【グループの詳細】 ダイアログ・ボックスでアクションを実行するには，SiteScope の管理者，または必要な権限が付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については， <a href="#">「権限」 (757ページ)</a> を参照してください。
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「Multi-View で問題を診断，トラブルシューティングする方法」 (1088ページ)</a>
<b>関連情報</b>	<a href="#">「Multi-View」 (1080ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
状態	グループ内のモニタのステータス（良好，警告，エラー，無効，データなし）。グループのステータスは，ワースト・ステータス（グループ内のすべての SiteScope モニタのワースト・ステータス）の子を基にしています。
サマリ	グループ内のモニタの数や，エラー・ステータスを報告したモニタの数（存在する場合）を表示します。
最後の実行日時	モニタを最後に実行した日時。
レポートの生成	クリックすると、選択したグループのすべてのモニタの事前に設定された設定を使用して，1 回かぎりの SiteScope クイック・レポートを作成できます。レポートの詳細については，「 <a href="#">クイック・レポート</a> 」(1348ページ)を参照してください。
今すぐ実行	クリックすると、グループ内のモニタを実行し，サマリ・セクションの結果を更新できます。このボタンは，現在無効になっているグループには使用できません。
詳細	<p>モニタ・プロパティの「グループの詳細」フィールドに入力した情報が含まれます。</p> <p><b>注：</b> このフィールドは，「グループの詳細」フィールドが空の場合は表示されません。</p>
モニタの状態	<p>グループ内のすべてのモニタの状態を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>すべて有効化：</b> グループ内のすべてのモニタを有効化します。グループとモニタのステータスに応じて，ステータス・アイコンと色が変わります。</li> <li>・ <b>すべて無効化：</b> グループ内のすべてのモニタを無効化します。グループ内の各モニタの色とアイコンが灰色に変わり，モニタが非アクティブであることが示されます。Multi-View の「サマリ」フィールドには，「disabled manually」が状態として表示されます。</li> </ul>
警告の状態	<p>グループ内のモニタに関連付けられている警告の状態を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>すべて有効化：</b> グループ内のモニタに関連付けられているすべての警告を有効化します。</li> <li>・ <b>無効化：</b> グループ内のモニタに関連付けられているすべての警告を無期限に無効化します。</li> </ul> <p>警告の状態の変更に関する詳細は，「<a href="#">関連する警告の有効化/無効化</a>」(318ページ)を参照してください。</p>

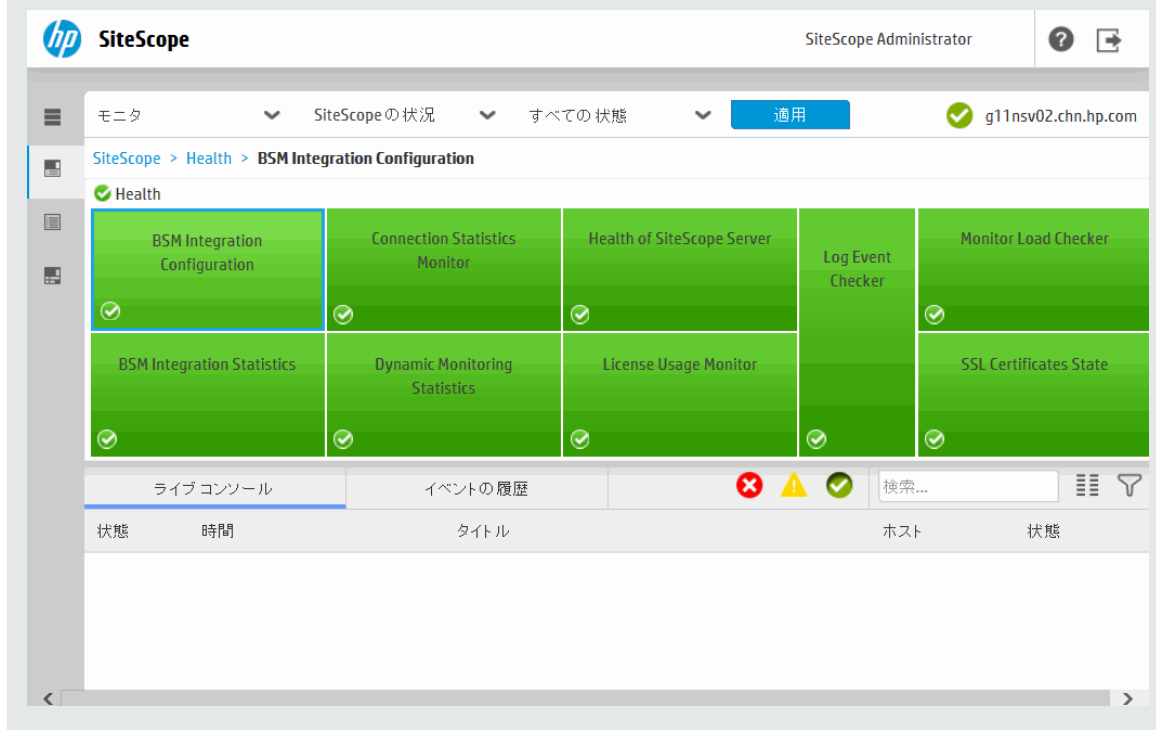


UI 要素	詳細
確認（過去 5 回）	<p>モニタに追加された過去 5 回の確認コメントの詳細を表示します。この機能は、SiteScope によって検出されたシステムおよびネットワーク・インフラストラクチャの問題の解決を追跡するために使用されます。この機能を使用すると、問題が確認された時間、実行されたアクション、実行したユーザが SiteScope によって記録されます。</p> <p><b>【確認応答の追加】</b>  ボタンをクリックして【確認応答の追加】ダイアログ・ボックスを開き、モニタのステータスを確認するコメントを追加します。ビューを更新（F5）すると、確認が表示されます。</p> <p><b>注：</b> 確認応答は確認ログ（【SiteScope ダッシュボード】の【グループ内のモニタを確認】ダイアログ・ボックスからアクセス可能）からのみ削除できます。削除された確認応答は、Multi-View の確認応答一覧に表示されなくなります。</p>
ダッシュボード・ビューのトラブルシューティング	<p>SiteScope インスタンスを新しいウィンドウで開き，【ダッシュボード】タブで選択したグループにドリルダウンします。</p> <p>このオプションは，タブレットで Multi-View を表示している場合には使用できません。</p>

## 第97章: イベント・コンソール

SiteScope のイベント・コンソールを使用すると、単一のインターフェースから、監視対象環境のステータスのリアルタイム追跡、イベントの優先順位付けと配信、およびイベントのライフサイクル管理を実行できます。これにより、大規模な分散環境の管理が簡素化され、迅速に問題を特定して解決できます。

例：Multi-View（上部）とイベント・コンソールの両方を表示する統合コンソール




**ヒント:** YouTube (<http://youtu.be/-BFVcF6Kh-k>) でイベント・コンソールに関するガイドとナレーション付きの説明を見ることができます。

### アクセス方法

SiteScope 統合コンソールからイベント・コンソールにアクセスできます。

- Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。
  - <http://<サーバ名>:<ポート>/SiteScope/WebMain#/eventconsole> (イベント・コンソールのみ)
  - <http://<サーバ名>:<ポート>/SiteScope/WebMain> (イベント・コンソールと Multi-View)
- SiteScope ダッシュボードを使用する場合：[モニタ] コンテキストで、[ダッシュボード] タブ

をクリックし、**[統合コンソール]**  ボタンをクリックします。統合コンソールで、Ops ビューが開き、イベント・コンソールと Multi-View の両方が表示されます。

## 学習事項

### 本項の内容

- ・ [「イベント・コンソールの概要」 \(1103ページ\)](#)
- ・ [「サポートされているブラウザ」 \(1103ページ\)](#)
- ・ [「SiteScope イベント・コンソールと OMi イベント・ブラウザの違い」 \(1103ページ\)](#)
- ・ [「ユーザ・ロールと必要な権限について」 \(1104ページ\)](#)
- ・ [「履歴イベント・ログ・ファイル」 \(1106ページ\)](#)
- ・ [「容量に関する推奨事項およびベスト・プラクティス」 \(1107ページ\)](#)

### イベント・コンソールの概要

イベント・コンソールには、監視対象システムのすべてのイベントに関する情報が表示されます。イベント・コンソールには、次のビューがあります。

- ・ **ライブ・コンソール**：日常的なイベントの表示と管理、およびイベント・ライフサイクルの状態や解決の進捗状況の追跡に使用します。このビューはカスタマイズ可能で、ユーザはさまざまなイベント属性でイベントの並べ替え、検索、フィルタを実行できます。これにより、ユーザは確認する必要のあるイベントのみに集中できます。

また、イベント・コンソールと Multi-View を併用して、問題の診断と解決を促進させることもできます。イベントとモニタを接続することで、選択したモニタまたはモニタ・グループに関連付けられたイベントや、イベントに関連付けられたモニタを特定し、ドリルダウンしてトラブルシューティングを実行できます。

- ・ **イベントの履歴**：履歴（終了）イベントの詳細を確認するために使用します。これは、以前の問題の解決方法を追跡する場合や、トレンドや隠されたパターンを特定する場合に便利です。

イベント・コンソールは、大小の画面に完全対応しているため、ネットワーク・オペレーション・センターでイベント・データやモニタ・データを表示する場合に最適です。また、iPad や Android タブレットにも対応しています。

### サポートされているブラウザ

サポート対象ブラウザのリストについては、[「サポートされているブラウザ」 \(1078ページ\)](#)を参照してください。

### SiteScope イベント・コンソールと OMi イベント・ブラウザの違い

SiteScope イベント・コンソールでは、単一の SiteScope がある中規模およびエンタープライズ・ユーザ・グループや、HPOM 統合を必要としない（データベースや RTSM を必要としない）軽量のデプロイメントでイベントを管理できます。

操作管理 (OMi) イベント・ブラウザは、市場をリードするイベント統合および相関処理ツールです。これは、トポロジ (RTSM) 機能に基づいており、BSM 製品と HPOM 製品の統合が必要になります。

ユーザ・ロールと必要な権限について

#### ユーザ権限

SiteScope スタンドアロンを使って作業している SiteScope ユーザや、BSM の SAM 管理から SiteScope に接続している BSM ユーザのイベント・コンソール・アクションを実行するには、次の権限が必要です。

アクション	必要な権限	
	SiteScope	SAM 管理 (BSM)
イベント・コンソール・プリファレンスの表示と編集	イベント・コンソール・プリファレンスの表示	SiteScope プリファレンスの CHANGE 権限または FULL CONTROL 権限
イベントの管理	割り当てられていないイベントの場合 : 割り当てられていないイベントの管理 (ユーザの割り当てる/イベント詳細の編集) 割り当てられたイベントの場合 : 割り当てられたイベントの管理 (ユーザの割り当てる/イベント詳細の編集)	SiteScope ダッシュボードの CHANGE 権限 (ユーザに割り当てられたイベントかどうかに関係なく)
イベントの表示	ユーザは、「許可されているグループ」権限のあるモニタに関連付けられたイベントの詳細を表示できます。	ユーザは、表示権限のあるグループのモニタのイベントを表示できます。

SiteScope ユーザ権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。BSM ユーザ権限の詳細については、BSM プラットフォーム管理ガイドを参照してください。

#### ユーザ・ロール

次に、SiteScope イベント・コンソールを使った作業に適した役割と、それらの役割を果たすのに必要な SiteScope 推奨ユーザ権限を示します。

ユーザ	役割 / 機能	推奨権限
ディスパッチャ / NOC オペレータ (監視チー	ロール:未解決イベントのディスパッチや監視対象環境全体のステータスの追跡を行います。 機能:	・ イベント・コンソール・プリファレンスの表示

ユーザ	役割 / 機能	推奨権限
ム)	<ul style="list-style-type: none"> <li>ライブ・コンソールでは、すべての未解決イベントがわかりやすく表示されるため、調査チームにすばやくディスパッチできます。</li> <li>アクティブなイベントのステータスと解決の進捗状況が表示されるため、フォローアップやエスカレーションを行うことができます。</li> <li>表示をカスタマイズできるため、ディスパッチャは確認する必要のあるイベント（[高] ステータスのイベントや、まだユーザに割り当てられていないイベントなど）を簡単に検索して表示できます。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>割り当てられていないイベントの管理 (ユーザの割り当てる/イベント詳細の編集)</li> <li>割り当てられたイベントの管理 (ユーザの割り当てる/イベント詳細の編集)</li> </ul>
アプリケーション・サポート・チーム / SME (調査チーム)	<p><b>ロール:</b> イベントを調査して解決します。</p> <p><b>機能</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Ops ビューにより、調査担当者はトリガされたイベントに関連付けられたモニタを（モニタ・グループ、サーバ、タグでグループ化された）さまざまなパースペクティブで確認し、問題を分離、診断できます。</li> <li>Multi-View により、調査担当者は、関連付けられたグループやモニタに関する詳細を確認するためにドリルダウンしたり、モニタを再実行して問題がまだ存在しているかどうかをチェックしたり、レポートを生成してパフォーマンスや可用性を経時的に表示したり、問題をトラブルシューティングしたりできます。</li> <li>調査担当者は、解決の進捗状況でイベントを更新できるため、フォローアップやエスカレーションを行うことができます。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>イベント・コンソール・プリファレンスの表示</li> <li>割り当てられたイベントの管理 (ユーザの割り当てる/イベント詳細の編集)</li> </ul>
SiteScope 管理者	<p><b>ロール:</b> イベント・コンソールを設定、管理します。この作業には、ライブ・イベントの設定、履歴イベントの設定、LDAP サーバの設定、特殊なログ記録の設定、イベント・フィルタの作成、システムのイベントを作成する警告アクションの定義が含まれます。また、ユーザとロールの定義や、必要なイベント・コンソール権限の割り当ても行います。</p> <p><b>機能:</b> 管理者は次の作業を行うことができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>イベント解決結果の追跡や統計の分析を行う。</li> <li>履歴イベントを表示する。これは、イベントの履歴、隠されたパターン、イベント解決の所要時間（イベントの</li> </ul>	すべてのイベント・コンソール権限

ユーザ	役割 / 機能	推奨権限
	作成時刻と終了時刻を比較) を分析する場合に便利です。終了時刻は、イベント履歴ログ・ファイルでのみ取得できます。	

## 履歴イベント・ログ・ファイル

イベント・コンソールの警告アクションからトリガされたすべての終了（非アクティブ）イベントに関する情報は、イベント・コンソールの「イベントの履歴」ビューまたはイベント履歴ログ・ファイル `event_console_history.log` から取得できます。各終了イベントはログに書き込まれ、最初にイベント終了時刻、次に残りの情報が続きます。イベント終了時刻以外の情報は、「イベント コンソール」ビューと「イベントの詳細」ダイアログ・ボックスに表示されます。

SiteScope によって新規ログが毎日作成され、24 時間以内に終了したすべてのイベントが記録されます。ログは次の形式になります。 `event_console_history<YYYY_MM_dd>.log`。SiteScope では、最大 40 個のイベント履歴ログ・ファイルが保持されます。ログ保存期間よりも古いファイルは自動的に削除されます。

ログ・ファイルは、`<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs` または「ログ ファイル」ページ（「サーバ統計」>「ログ ファイル」）から取得できます。

次の場合、イベントがログ（およびイベント・コンソールの「イベントの履歴」ビュー）に書き込まれます。

1. ユーザがイベントを手動で終了した場合。
2. コンソール・イベント・マッピング（ユーザが作成したカスタム・マッピングまたは標準設定コンソール・イベント・マッピング・テンプレート（標準設定で選択されている））で「**終了キー条件を送信**」チェック・ボックスが選択されている場合。選択すると、新規イベントの終了キー・パターンが前のすべてのイベントのキーと比較され、パターンに一致するキーのイベントが自動的に終了します。詳細については、「[「\[新規イベントマッピング\] / \[イベントマッピングの編集\] ダイアログ・ボックス」 \(560ページ\)](#)」を参照してください。
3. ユーザがコンソール・イベント・マッピング（標準設定コンソール・イベント・マッピング・テンプレートまたはユーザが作成したほかのカスタム・マッピング）で「**ログのみ**」を次のように設定した場合。
  - **True** :すべてのイベントが終了イベントとして直接履歴に送信されるか、書き込まれます（これらは履歴ログと「イベントの履歴」ビューで取得できます）。
  - **正常域の重大度に対して True**（標準設定）: 正常域の重大度のモニタに対してトリガされたイベント（モニタのステータスが「良好」に変わったときに発生したイベント）が終了イベントとして直接履歴に書き込まれます（これらは履歴ログと「イベントの履歴」ビューで取得できます）。
4. SiteScope によってイベントが自動的に終了した場合。これは、次の場合に発生します。

- サーバに保存できるライブ・イベントの最大数に達した場合。最大数に達すると、メッセージ (CLOSED BY AUTOMATIC PURGE) がイベント・タイトルに追加されます。
- イベントのトリガ元のモニタが削除された場合。削除されると、メッセージ (CLOSED BY MONITOR DELETION) がイベント・タイトルに追加されます。

### 容量に関する推奨事項およびベスト・プラクティス

イベント・コンソールは、監視対象システムの有意なイベントを表示するように設計されています。

SiteScope サーバでは、最大で毎分 40 のイベントを処理し、最大 5000 のイベントを [ライブ コンソール] および [イベントの履歴] ビューに表示できます。

ベスト・プラクティスとして、すべてのモニタ実行ではなく、モニタ状態の変化のみに関する警告を送信するように警告システムを設定することをお勧めします。これにより、コンソールで開かれたイベントの数を最適化し、関連チーム / ユーザが実行するイベントの管理および処理を簡素化できます。

イベント・コンソールに表示されるライブ・イベントの数は、**[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [イベント コンソールの設定] > [ライブ イベントの最大数]** で設定できます。標準設定は 1000 件のイベントで、最大数は 5000 件に設定されています。この限度に達すると、最も古いイベントが自動的に閉じられ、[イベントの履歴] ビューに表示されます。さらに、これらのイベントの特定を可能にする (CLOSED BY AUTOMATIC PURGE) メッセージとともに **event\_console\_history.log** に書き込まれます。

[イベントの履歴] ビューに表示できる履歴イベントの最大数 (**[履歴イベントの最大数]**) および表示する履歴イベントの時間数 (**[取得する履歴イベントの時間数]**) も設定できます。標準設定では、[イベントの履歴] ビューには過去 48 時間の履歴イベントが最大 1000 件表示できます (最大で過去 168 時間の 5000 件のイベント)。表示限度に達すると、最も古いイベントが [イベントの履歴] ビューから削除されます。ただし、それらのイベントは引き続き **event\_console\_history.log** ファイルで利用できます (イベントがログ・ファイルから削除されることはありません)。保存される履歴ファイルの数は 40 (1 日あたり 1 つ) です。41 日目に達すると、最も古いファイルが削除されます。

#### 注:

- イベント・コンソールに表示されるライブ・イベントの数は、**[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [イベント コンソールの設定] > [ライブ イベントの最大数]** で設定できます。標準設定は 1000 イベントで、最大数は 5000 に設定されています。この限度に達すると、最も古いイベントが自動的に閉じられ、[イベントの履歴] ビューに表示されます。さらに、これらのイベントの特定を可能にする (CLOSED BY AUTOMATIC PURGE) メッセージとともに **event\_console\_history.log** に書き込まれます。
- [イベントの履歴] ビューに表示できる履歴イベントの最大数 (**[履歴イベントの最大数]**) および表示する履歴イベントの時間数 (**[取得する履歴イベントの時間数]**) も設定できます。標準設定では、[イベントの履歴] ビューには過去 48 時間の履歴イベントが最大 1000 件表示できます (最大で過去 168 時間の 5000 件のイベント)。



表示限度に達すると、イベントが「イベントの履歴」ビューに表示されなくなりますが、これらのイベントは引き続き **event\_console\_history.log** ファイルで利用できます（イベントがログ・ファイルから削除されることはありません）。log4j.properties ファイルを使用して、保存できるログ・ファイルの数を設定できます。

## タスク

### 本項の内容

- ・「イベント・コンソールを設定、管理する方法（SiteScope 管理者）」(1108ページ)
- ・「イベントの割り当て方法（ディスパッチャ / NOC オペレータ）」(1110ページ)
- ・「イベントを調査、解決する方法（アプリケーション・サポート・チーム）」(1112ページ)
- ・「履歴イベントの表示方法（管理者 / アプリケーション・サポート・チーム）」(1113ページ)
- ・「イベント・コンソールに表示されるイベントの管理方法（すべてのユーザ）」(1114ページ)

### イベント・コンソールを設定、管理する方法（SiteScope 管理者）

1. ユーザとユーザ・ロールを定義し、必要なイベント・コンソール権限を割り当てます。  
「[ユーザ・ロールと必要な権限について](#)」(1104ページ)で説明されているように、イベント・コンソールを使って作業する必要があるさまざまなユーザ・グループのユーザとユーザ・ロールを作成し、必要に応じてイベント・コンソール権限を割り当てます。  
ユーザ権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。
2. イベント・コンソールを設定します。  
「[プリファレンス](#)」 > 「[インフラストラクチャ プリファレンス](#)」 > 「[イベント コンソールの設定](#)」を選択し、（必要に応じて）次の設定を行います。  
**ライブ / 履歴イベント設定：**
  - ・ イベント・コンソールに表示されている、新しくトリガされたイベントを有効 / 無効にします。この設定がクリアされると、イベント・コンソールの警告アクションから新しいイベントがトリガされません。
  - ・ サーバに保存でき、[Live Events] ビューに表示できるライブ・イベントの最大数を設定します。この値は 5000 を超えることはできません（標準設定値は 1000）。この限度に達すると、最も古いイベントが自動的に閉じられ、[イベントの履歴] ビューに表示されます。さらに、これらのイベントの特定を可能にする (CLOSED BY AUTOMATIC PURGE) メッセージとともに **event\_console\_history.log** に書き込まれます。
  - ・ サーバ・ログから取得して [イベントの履歴] ビューに表示できる履歴イベントの最大数を設定します。この値は 5000 を超えることはできません（標準設定値は 1000）。表示限度に達すると、最も古いイベントが [イベントの履歴] ビューから削除されます。ただし、それ



らのイベントは引き続き **event\_console\_history.log** ファイルで利用できます（イベントがログ・ファイルから削除されることはありません）。保存される履歴ファイルの数は 40（1 日あたり 1 つ）です。41 日目に達すると、最も古いファイルが削除されます。

- ・ サーバ・ログから取得して [イベントの履歴] ビューに表示できる履歴イベント前の時間数を設定します。この値は 168 時間（1 週間）を超えることはできません（標準設定値は 48 時間）。


#### LDAP 設定 (SiteScope が LDAP サーバと統合されている場合) :

- ・ ユーザ・リストをイベント・コンソールにロードするときに LDAP サーバから取得する LDAP ユーザの最大数を定義できます。標準設定では、LDAP サーバから最大 400 件の結果が返されます（最大 1000 件の結果が返されるように設定可能）。このユーザ数を超える Active Directory ドメインが存在すると、ユーザの電子メール・アドレスを手動で入力した場合でも、LDAP サーバから取得された結果に含まれていない LDAP ユーザにはイベントを割り当てることはできません。

#### イベント・コンソールのエラー :

- ・ イベント・コンソール・ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバのログ・ファイルへのエラーの送信を有効 / 無効にします。

詳細については、[「イベント・コンソールの設定」\(662ページ\)](#)を参照してください。

3. トリガ時にシステムのイベントを作成するイベント・コンソールの警告アクションを設定します。
  - a. モニタまたはモニタ・グループの警告を作成するには、モニタ / グループを右クリックして **[新規作成]** > **[警告]** を選択します。
  - b. **[新規警告]** ダイアログ・ボックスで、次の手順を実行します。
    - i. 警告の名前を入力し、**[警告ターゲット]** パネルで警告をトリガするターゲットを選択します。
    - ii. **[警告アクション]** パネルで、**[新規警告アクション]**  をクリックし、**[イベントコンソール]** を選択します。

**[新規警告]** ダイアログ・ボックスについては、[「\[新規警告\] / \[警告の編集\] ダイアログ・ボックス」\(1256ページ\)](#)を参照してください。
  - c. **[警告アクション]** で次の手順を実行します。**[イベントコンソール]** ダイアログ・ボックスで、次の手順を実行します。
    - i. 警告アクションの名前を入力します。
    - ii. 警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。詳細については、[「スケジュール・プリファレンス」\(723ページ\)](#)を参照してください。
    - iii. イベント・コンソールのイベント・マッピング・テンプレートを選択します。



このテンプレートには、イベント属性名 / キーとそのコンテンツ間のマッピングが含まれます（ユーザは各属性の実行時間データをマップできます）。このマッピングは、警告のトリガ時にイベントをイベント・コンソールに送信するために使用されます。

警告アクションごとに共通イベント・マッピングを選択することも（「[\[新規イベントマッピング\] / \[イベントマッピングの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(560ページ)を参照），イベント・コンソールに送信されるすべてのイベントで標準設定のグローバル・マッピングを使用することもできます。


標準設定のコンソール・イベント・マッピングについては、「[\[新規イベントマッピング\] / \[イベントマッピングの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(560ページ)を参照してください。

- iv. ステータス・トリガ（「[\[状態トリガ\] パネル](#)」(1282ページ)を参照）とトリガの頻度（「[\[トリガの頻度\] パネル](#)」(1283ページ)を参照）を選択します。

d. 警告設定を保存します。

警告が作成されると、 アイコンがモニタ・ツリーの指定したコンテナの横に追加されます。SiteScope ダッシュボードの「警告設定済み」列には、警告が1つ以上設定されている各グループまたはモニタの横に警告アイコン  も表示されます。

警告がトリガされると、トリガされた警告に対応するイベントがイベント・コンソールに表示されます。

SiteScope ダッシュボードにはイベントの通知も表示されます（「トリガされた警告」列にはイベント・コンソール警告  アイコンが表示されます）。

4. イベント・コンソール・フィルタを設定します。

イベント・フィルタを作成すると、各ユーザ・グループは表示する必要のあるイベントのみに集中できるようになります。

「[プリファレンス](#)」 > 「[イベント コンソール プリファレンス](#)」を選択し、イベント・コンソールに表示されるイベントを決定するイベント・フィルタを設定します。SiteScope には、事前定義された「Assigned to Me」イベント・フィルタが標準設定で備わっています。このフィルタでは、SiteScope のログイン・ユーザに割り当てられたすべてのイベントが表示されます。

タスクの詳細については、「[イベント・フィルタの設定方法](#)」(584ページ)を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[\[イベントフィルタの新規作成\] / \[イベントフィルタの編集\] ダイアログ・ボックス](#)」(586ページ)を参照してください。

## イベントの割り当て方法（ディスパッチャ / NOC オペレータ）

イベント・ディスパッチャは、イベントの表示、編成、特定のユーザへの割り当てができます。また、未解決の問題をエスカレートすることもできます。

## 1. 前提条件

- ユーザをイベントに割り当てたり、イベントの詳細を編集したりするには、SiteScope の管理者、または適切な「**イベント コンソール**」権限を付与されたユーザである必要があります（標準設定では、すべてのユーザにこの権限が付与されています）。
- ユーザは、「**許可されているグループ**」権限のあるモニタに関連付けられたイベントの詳細を表示できます。

ユーザ権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

## 2. イベント・コンソールを開きます（詳細については、「[アクセス方法](#)」(1102ページ)を参照してください）。

標準設定では、[ライブ コンソール] ビューが選択されています。このビューには、アクティブなすべての未解決イベントが表示されます。

イベントは受信時刻に基づいて並べ替えられ、最新のイベントがリストの上部に表示されます。[エラー] ステータスのイベントが最初に割り当てられるように、ステータスの降順でイベント・リストを並べ替えることをお勧めします。

## 3. イベントを特定のユーザに割り当てます。


- a. イベントをダブルクリックして、[イベントの詳細] ダイアログ・ボックスを開きます。詳細については、「[\[イベントの詳細\] ダイアログ・ボックス](#)」(1124ページ)を参照してください。
- b. 必要に応じて、次のイベント属性を設定します。
  - **重大度**: 選択したイベントに割り当てられた重大度。SiteScope のコンソール・イベントのモニタしきい値ステータスは、イベント重大度レベルにマップされます。次のような重大度があります。[危険域]、[重要警戒域]、[警戒域]、[注意域]、[正常域] および [不明] です。詳細については、「[\[重大度マッピングのプリファレンス\] ダイアログ・ボックス](#)」(588ページ)を参照してください。
  - **優先順位**: イベントに割り当てる優先順位を選択します。値は、[なし]、[最低]、[低]、[中]、[高]、[最高] です。
- c. **[割り当てユーザ]** フィールドに検索するユーザ名を入力し、イベントに割り当てる SiteScope ユーザを選択します。リストに表示されているユーザにのみイベントを割り当てることができます。

SiteScope で LDAP 認証を使用できる場合、LDAP 設定とユーザ・ロールで提供されるコンテキストに含まれる LDAP ユーザがリストに表示されます。LDAP ユーザには、割り当てられたユーザまたはユーザ・ロールの設定に基づいて権限が付与されます。

**注:** 標準設定では、LDAP サーバから最大 400 件の結果が返されます（最大 1000 件の結果が返されるように設定可能）。このユーザ数を超える Active Directory ドメインが存在すると、ユーザの電子メール・アドレスを手動で入力した場合でも、LDAP サーバから取得された結果に含まれていない LDAP ユーザにはイベントを割り当てることはできません。

LDAP 以外のユーザにイベントを割り当てる場合、SiteScope によってそのユーザの存在が検証されます。LDAP ユーザにイベントを割り当てる場合、SiteScope では LDAP ユーザを検証できないため、LDAP ユーザの存在を確認するかどうかはディスパッチ次第です。

4. イベント通知を送信します。
  - a. **【メールの送信先】** ボタンをクリックして、「SiteScope イベント通知」という件名の電子メールを開きます。メール本文には、イベント・コンソールのイベントへのリンクと、警告のトリガ元となった対応モニタ（Multi-View に表示される）が含まれます。
  - b. イベント受信者（割り当てられたユーザと通知するその他のユーザ）の電子メール・アドレスを入力します。
  - c. その他の詳細情報をメールに追加し、メールを送信します。
5. **【保存】** をクリックして、イベントの詳細の変更を保存します。

SiteScope で変更を保存できない場合、エラー  アイコンの上にカーソルを置き、メッセージを使用して問題を解決します。

6. 割り当てられた問題のステータスを定期的に確認します。

定義した修正期限を過ぎても問題が未解決のままの場合、イベントの優先順位を上げるか、イベントをエスカレートできます（割り当てられたユーザのマネージャに電子メールを送信するなど）。

イベントを調査、解決する方法（アプリケーション・サポート・チーム）

1. 前提条件
  - ・ ユーザをイベントに割り当てたり、イベントの詳細を編集したりするには、SiteScope の管理者、または適切な「**イベント コンソール**」権限を付与されたユーザである必要があります（標準設定では、すべてのユーザにこの権限が付与されています）。
  - ・ ユーザは、「**許可されているグループ**」権限のあるモニタに関連付けられたイベントの詳細を表示できます。

ユーザ権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

2. （ディスパッチャから電子メール通知があった場合、またはイベント・フィルタを使用して自分に割り当てられたイベントを追跡する場合）自分に割り当てられたイベントの警告が通知されたら、イベント・コンソールでそのイベントを開きます。
  - ・ 電子メール通知から、イベント・リンクをクリックすると、イベント・コンソールで特定のイベントが開き、関連するモニタが Multi-View に表示されます。
  - ・ 自分に割り当てられたイベントをイベント・コンソールで検索するには、**【Assigned to Me】** イベント・フィルタを使用します。このフィルタでは、自分（ログイン・ユーザ）に割り当てられたイベントのみが表示されます。ほかの事前定義フィルタを使用して、選択した条件に一致するイベントを表示することもできます。

イベントをフィルタリングおよび組織化する方法に関する詳細については、「[イベント・コンソールに表示されるイベントの管理方法（すべてのユーザ）](#)」（1114ページ）を参照してください。

3. イベントをダブルクリックして、イベントの追加の詳細情報が表示される「[イベントの詳細](#)」ダイアログ・ボックスを開きます。詳細については、「[「イベントの詳細」ダイアログ・ボックス](#)」（1124ページ）を参照してください。
4. イベントの「**状態**」フィールドを「**進行中**」に変更します。
5. イベントを調査します。  
イベントを調査するには、次の作業を行います。
  - 関連付けられた（接続された）モニタを開いて、問題の原因の特定に役立つ詳細情報を取得する。
  - Multi-View の特定のビューまたはパースペクティブに移動し、現在の調査の詳細情報（サーバ関連のモニタや場所関連のモニタ）を取得する。
  - モニタ・レポートを生成して、パフォーマンス・トレンドを確認する。
  - モニタ指示を使用して、問題のあるモニタに特定のアクションを実行する。
6. 問題を調査して、適切なアクションを実行したら、ライフサイクルの状態を更新します。
  - a. 「[イベントの詳細](#)」ダイアログ・ボックスで、必要に応じて「**状態**」フィールドを更新します。値は、「**オープン**」、「**進行中**」、「**解決済み**」、「**クローズ**」です。
  - b. イベントの状態や調査結果に応じて調査 / 解決コメントを追加したり、（必要に応じて）次のフィールドを変更したりできます。
    - **タイトル**：イベントの説明。
    - **詳細**：イベントを説明する詳細情報または補足情報。このフィールドには、到達したしきい値（またはほかのトリガ条件）や現在の値の情報を含めることができます。
  - c. 「**保存**」をクリックして、変更を保存します。イベントの状態を「**終了**」に変更すると、イベントが「**ライブ コンソール**」ビューから削除され、「**イベントの履歴**」ビューに表示されます。
7. 「**イベント コンソール**」を定期的にチェックして、自分に割り当てられた新しいイベントや、未解決のままの既存のイベントがないかどうかを確認します。

履歴イベントの表示方法（管理者 / アプリケーション・サポート・チーム）

履歴（非アクティブ）イベントに関する情報は、イベント・コンソールの「**イベントの履歴**」ビューまたはログ・ファイルから取得できます。

1. イベント・コンソールで、「**イベントの履歴**」ビューを選択します。履歴イベントが終了時刻に基づいて表示されます（最近終了したイベントが最初に表示されます）。

このビューには、イベント・コンソールの警告アクションからトリガされた終了（非アクティブ）イベントが表示されます。標準設定では、[イベントの履歴] ビューには過去 48 時間の履歴イベントが最大 1000 件表示されます。

管理者は、表示できる履歴イベントの最大数や、[イベントの履歴] ビューに表示する履歴イベント前の時間数を [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [イベント コンソールの設定] で変更できます。

**ヒント:** イベントの履歴は、[サーバ統計] > [ログ ファイル] または <SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs ディレクトリから取得できる `event_console_history.log` にも含まれています。

2. [イベントの履歴] ビューでは、「[イベント・コンソールに表示されるイベントの管理方法（すべてのユーザ）](#)」(1114ページ)で説明されているように、イベント順序を並べ替えたり、検索を使用したり、クイック・ステータス・フィルタを使用したりして、履歴イベントを検索、編成できます。

各イベントには、[イベントの詳細] ダイアログ・ボックスに表示されるすべての情報が含まれます。詳細については、「[\[イベントの詳細\] ダイアログ・ボックス](#)」(1124ページ)を参照してください。

履歴レコードが[イベントの履歴] ビュー（とログ・ファイル）に書き込まれるタイミングの詳細については、「[履歴イベント・ログ・ファイル](#)」(1106ページ)を参照してください。

**注:**

- [イベントの履歴] ビューのイベント属性は読み取り専用で、変更することはできません。
- [イベントの履歴] では、事前定義フィルタを利用できません。

## イベント・コンソールに表示されるイベントの管理方法（すべてのユーザ）

### 1. 前提条件

- ユーザをイベントに割り当てたり、イベントの詳細を編集したりするには、SiteScope の管理者、または適切な「**イベント コンソール**」権限を付与されたユーザである必要があります（標準設定では、すべてのユーザにこの権限が付与されています）。
- ユーザは、「**許可されているグループ**」権限のあるモニタに関連付けられたイベントの詳細を表示できます。

ユーザ権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

### 2. 前提条件

- ユーザをイベントに割り当てたり、イベントの詳細を編集したりするには、SiteScope の管理者、または適切な「**イベント コンソール**」権限を付与されたユーザである必要があります



(標準設定では、すべてのユーザにこの権限が付与されています)。

- ・ ユーザは、「許可されているグループ」権限のあるモニタに関連付けられたイベントの詳細を表示できます。


ユーザ権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

3. イベント・コンソールを開きます (詳細については、「[アクセス方法](#)」(1102ページ)を参照してください)。


標準設定では、[ライブ コンソール] ビューが選択されています。このビューには、アクティブなすべての未解決イベントが表示されます。

4. イベント・コンソールと Ops ビュー (イベント・コンソールと Multi-View) では、表示されるイベントが異なります。

#### イベント・コンソール：






- ・ イベント・コンソール  を選択した場合、すべて ( [ライブ イベントの最大数] で設定された、サーバで保存できるイベントの最大数まで) のアクティブなイベントが標準設定で表示されます。このリストは、クイック・ステータス・フィルタ・アイコンを使用したり、フィルタ選択フィールドの事前定義フィルタを選択したりしてフィルタできます。イベント・フィルタの設定の詳細については、「[イベント・コンソール・プリファレンス](#)」(584ページ)を参照してください。

#### Ops ビュー：

- ・ Ops ビュー  を選択した場合、Multi-View の下にイベント・コンソールが表示されます。イベント・コンソールには、「許可されているグループ」権限のあるモニタに関連付けられたすべてのイベントが表示されます。標準設定では、イベントは受信時刻に基づいて並べ替えられ、最新のイベントがリストの上部に表示されます。
- ・ Multi-View でモニタまたはグループを選択すると、選択したモニタまたはグループに関連付けられたイベントのみがイベント・コンソールに表示されます。
- ・ イベント・コンソールのイベントをクリックすると、関連付けられたモニタとその親グループが表示されるように Multi-View が変更されます (関連付けられたモニタは青色の枠線で強調表示されます)。
- ・ Multi-View で、ビュー・タイプ (モニタ / サーバ / タグ) の切り替えやフィルタを実行しても、Multi-View で特定のモニタまたはグループを選択するまで、表示されるイベントは変更されません。

**注:** モニタやそれに関連付けられた警告が無効になっている場合、そのモニタに関連づけられた新しいイベントはコンソールに表示されません。

5. 次のツールを使用して、アクティブなイベントを検索、編成できます。

- ・ 該当する列の上部にある上矢印 / 下矢印をクリックしてイベントの順序をステータス、重大度、優先順位、状態で並べ替えることができます。ほかの列は、アルファベット / 数字（値が有限の数字の場合）で並べ替えることができます。
- ・ **［フィルタ］**  ボタンをクリックし、事前定義フィルタ（「[イベント・コンソール・プリファレンス](#)」(584ページ)で定義）を選択して、イベントをフィルタできます。フィルタを選択すると、そのフィルタ・アイコンが  に変わります。フィルタをクリアするには、ボタンを再度クリックして**［フィルタなし］**を選択します。SiteScope には、事前定義された [Assigned to Me] イベント・フィルタが備わっています。このフィルタでは、SiteScope のログイン・ユーザに割り当てられたすべてのイベントが表示されます。
- ・ クイック・ステータス・フィルタ・アイコン    をクリックすると、特定のステータスのイベントのみが表示されます。フィルタをクリアするには、アイコンを再度クリックします。
- ・ **［クイック検索］** を使用すれば、表示されているフィールドの特定の名前または値でイベントを検索できます。

## ヒント / トラブルシューティング

### イベント・データのエクスポート

標準設定では、SiteScope 設定ツールを使用してデータをインポート / エクスポートすると、アクティブなイベントが永続ファイルに書き込まれ、自動的に SiteScope 設定データに追加されます。

履歴イベントは **event\_console\_history.log** ファイルに書き込まれます（「[履歴イベント・ログ・ファイル](#)」(1106ページ)を参照）。データのインポートまたはエクスポート時に履歴イベントを含めるには、SiteScope 設定ツールの [設定のインポート] / [設定のエクスポート] オプションで **［ログファイルを含める］** を選択する必要があります。

SiteScope 設定ツールの使用に関する詳細については、『SiteScope デプロイメント・ガイド』（<SiteScope ルート・ディレクトリ>\sisdocs\doc\_lib\Get\_Documentation.htm）を参照してください。

### イベント・コンソールのエラー・ログ・ファイル

イベント・コンソールのエラー情報（クライアント側とサーバ側）は、次のログ・ファイルから取得できます。

ログ・ファイルは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs または [ログ ファイル] ページ（[サーバ統計] > [ログ ファイル]）から取得できます。**event\_console.log** を [ログ ファイル] ページで利用できるようにするには、最初にアクティブ化する必要があります（下記参照）。



ログ・ファイル	詳細
<b>event_console_ui.log</b>	<p>イベント・コンソール・ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバの <b>event_console_ui.log</b> に送信されたすべてのエラー・メッセージのリスト。たとえば、ユーザに必要な権限がない場合、「権限がない」というエラーが含まれます。</p> <p>通常、SiteScope には複数のユーザが存在しますが、エラー・メッセージは &lt;ユーザ表示名&gt; &lt;セッション ID&gt; (例: SiteScope Administrator DC8AF1DC325C3E745646AD6FC5C7A23C) で始まるため、送信されたエラーの対象ユーザを識別できます。</p> <p>現在のログの名前は <b>event_console_ui.log</b> です。現在のログがそのサイズ制限（標準設定では 1000 KB）に達すると、そのログが終了して新しいログが作成されます。古いログの名前は <b>event_console_ui.log.1</b>, <b>event_console_ui.log.2</b> のようになります（以下同様）。名前に連結される数値が高いほど、古いログになります。このログのパラメータは、<b>log4j.properties</b> ファイルで設定されます。</p>
<b>event_console.log</b>	<p>イベント・コンソールに関連するすべてのサーバ側エラーのリスト。ログをアクティブ化する（[ログ ファイル] ページで利用できるようにする）には、<b>log4j.properties</b> ファイルにアペンドを追加する必要があります（標準設定では、ログはデバッグ・レベルに対して開いています）。ログ・レベルは変更可能です。</p> <p>ログをアクティブ化するには、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. &lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\conf\core\Tools\log4j\PlainJava フォルダにある <b>log4j.properties.debug</b> ファイルを開きます。</li> <li>2. 「Event Console Appenders and Loggers」セクションを検索して、該当する行（ログを参照）を <b>log4j.properties</b> ファイルにコピーします。</li> <li>3. 変更を保存します。SiteScope を再起動する必要はありません。</li> </ol>

## イベント・コンソールのトラブルシューティング

- Internet Explorer を使用しているときに、サポートされていないブラウザであることを示すメッセージが表示された場合、ブラウザの [ブラウザー モード] と [ドキュメント モード] が正しく設定されていることを確認してください。[ブラウザー モード] は IE のバージョンに従って設定し、[ドキュメント モード] は標準モードに設定することをお勧めします。モードを確認するには、F12 キーを押して開発者ツールを開きます。これより、メニュー・バーにモードが表示されます。必要に応じて、モード設定を変更します。
- イベント・コンソールにイベントが表示されていない場合、次の事項を確認します。
  - 事前定義されたイベント・フィルタが正しく設定されているかどうか（[プリファレンス] > [イベント コンソール プリファレンス]）。
  - ログイン・ユーザにイベントの表示または管理に必要な権限が付与されているかどうか（[プ



リファレンス] > [ユーザ管理プリファレンス] )。詳細については、[「ユーザ・ロールと必要な権限について」 \(1104ページ\)](#)を参照してください。

- ・ イベント・コンソールに欠落している列がある場合や、[イベントの詳細] ダイアログ・ボックスが破損している場合、次のようにメタデータ・ファイルをリセットします。
  - a. Java 監視および管理 (JConsole) ツールを開きます。詳細については、[「JMX コンソールの使用方法」 \(66ページ\)](#)を参照してください。
  - b. JConsole で、[MBeans] タブをクリックし、  
`co.mercury.sitescope\Web\EventConsole\ConsoleMBean\Operations\resetTableMetadata` を開きます。
  - c. [resetTableMetadata] ボタンをクリックします。
- ・ 事前定義フィルタを使用している場合、正規表現がどのイベントにも一致しないと、イベント・コンソールにイベントの一覧が表示されます。正規表現ツールを使用して正規表現を確認できます。詳細については、[「正規表現ツール」 \(144ページ\)](#)を参照してください。

# イベント・コンソール・ユーザ・インタフェース

イベント・コンソールでは、SiteScope のライブ・イベントや履歴イベントを1つの場所から表示、管理できます。




アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"><li>・ SiteScope ダッシュボードを使用する場合：[モニタ] コンテキストで、 [ダッシュボード] タブをクリックし、[統合コンソール] ボタンをクリックします。</li><li>・ Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。 <code>http://&lt;server_name&gt;:&lt;port&gt;/SiteScope/WebMain#/eventconsole</code> (イベント・コンソールのみ) または <code>http://&lt;サーバ名&gt;:&lt;ポート&gt;/SiteScope/WebMain</code> (イベント・コンソールと Multi-View)</li></ul>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ イベントを管理できるようにするには、SiteScope の管理者、または適切な「イベント コンソール」権限を付与されたユーザである必要があります (標準設定では、すべてのユーザにこの権限が付与されています)。ユーザ権限の詳細については、<a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」 (744ページ)</a>を参照してください。</li><li>・ ユーザは、「許可されているグループ」権限のあるモニタに関連付けられたイベントの詳細を表示できます。これは、ライブ・イベントと履歴イベントに適用されます。</li></ul> <p>イベント・コンソール：</p>



	<ul style="list-style-type: none"><li>イベント・コンソール  を選択した場合、すべて（<b>ライブ イベントの最大数</b>）で設定された、サーバで保存できるイベントの最大数まで）のアクティブなイベントが標準設定で表示されます。このリストは、クイック・ステータス・フィルタ・アイコンを使用したり、フィルタ選択フィールドの事前定義フィルタを選択したりしてフィルタできます。イベント・フィルタは、<b>「イベント・コンソール・プリファレンス」</b> (584ページ) で設定します。</li><li>イベントをダブルクリックして、選択したイベントの追加の詳細情報を表示し、イベントの詳細を更新します。詳細については、<b>「[イベントの詳細] ダイアログ・ボックス」</b> (1124ページ) を参照してください。</li><li>標準設定では、イベントは受信時刻に基づいて並べ替えられ、最新のイベントがリストの上部に表示されます。</li></ul> <p><b>Ops ビュー :</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>Ops ビュー  を選択した場合、Multi-View の下にイベント・コンソールが表示されます。イベント・コンソールには、<b>「許可されているグループ」</b> 権限のあるモニタに関連付けられたすべてのイベントが表示されます。標準設定では、イベントは受信時刻に基づいて並べ替えられ、最新のイベントがリストの上部に表示されます。</li><li>Multi-View でモニタまたはグループを選択すると、選択したモニタまたはグループに関連付けられたイベントのみがイベント・コンソールに表示されます。</li><li>イベント・コンソールのイベントをクリックすると、関連付けられたモニタとその親グループが表示されるように Multi-View が変更されます（関連付けられたモニタは青色の枠線で強調表示されます）。</li><li>Multi-View で、ビュー・タイプ（モニタ / サーバ / タグ）の切り替えやフィルタを実行しても、Multi-View で特定のモニタまたはグループを選択するまで、表示されるイベントは変更されません。</li></ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li><b>「イベント・コンソール」</b> (1102ページ)</li><li><b>「イベント・コンソール・プリファレンス」</b> (584ページ)</li><li><b>「Multi-View」</b> (1080ページ)</li></ul>

# イベント・コンソール- [ライブ コンソール] ビューと [イベントの履歴] ビュー

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されま  
す）。

UI 要素	詳細
タブ	
【ライブ コンソール】 ビュー	<p>このビューには、イベント・コンソールの警告アクションからトリガされたアクティブ（終了していない）イベントのリストが表示されます。表示されるイベント数は、<a href="#">[プリファレンス]</a> &gt; <a href="#">[インフラストラクチャ プリファレンス]</a> &gt; <a href="#">[イベント コンソールの設定]</a> の <a href="#">[ライブ イベントの最大数]</a> 設定によって決まります。この数値に達すると、最も古いイベントが自動的に終了して <a href="#">[ライブ コンソール]</a> ビューから削除されます。破棄されたイベントは <a href="#">[イベントの履歴]</a> ビューに表示され、<code>event_console_history.log</code> に書き込まれます。</p> <p>このビューを選択すると、<a href="#">[ライブ コンソール]</a> に現在表示されているイベント数がビュー・ヘッダの括弧内に表示されます。フィルタがビューに適用されている場合、この数がライブ・イベントの総数を反映していない可能性があります。</p> <p>ライブ・イベントの特定のイベント属性は、<a href="#">[イベントの詳細]</a> ダイアログ・ボックスで変更できます。詳細については、<a href="#">「[イベントの詳細] ダイアログ・ボックス」(1124ページ)</a>を参照してください。</p>
【イベントの履歴】ビュー	<p>このビューには、イベント・コンソールの警告アクションからトリガされた終了（非アクティブ）イベントのリストが表示されます。標準設定では、<a href="#">[イベントの履歴]</a> ビューには過去 48 時間の履歴イベントが表示されます。<a href="#">[イベントの履歴]</a> ビューに表示する履歴イベント前の時間数や、表示できる履歴イベントの最大数を <a href="#">[プリファレンス]</a> &gt; <a href="#">[インフラストラクチャ プリファレンス]</a> &gt; <a href="#">[イベント コンソールの設定]</a> で変更できます。</p> <p>このビューを選択すると、<a href="#">[イベントの履歴]</a> に現在表示されているイベント数がビュー・ヘッダの括弧内に表示されます。フィルタが <a href="#">[イベントの履歴]</a> ビューに適用されている場合、この数がビューのイベントの総数を反映していない可能性があります。</p> <p>次の場合、<a href="#">[イベントの履歴]</a> ビューにレコードが表示されま</p>

UI 要素	詳細
	<p>す。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ユーザがイベントを手動で終了した場合。</li> <li>2. サーバに保存できるライブ・イベントの最大数に達した後に SiteScope によってイベントが自動的に終了した場合。</li> <li>3. 別のイベントで問題がレポートされた場合。典型的な例として、（イベントが発生するたびに警告がトリガされるように設定されている状態で）次のモニタの実行で同じイベントが発生した場合が挙げられます。この場合、SiteScope は、レポートされたイベントの前のインスタンスを終了します。</li> </ol> <p><b>注：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [イベントの履歴] ビューのイベント属性は読み取り専用で、更新することはできません。</li> <li>• 履歴イベントは更新できず、[イベントの履歴] ビューに切り替えたときにオンデマンドで取得されます。</li> <li>• イベントの履歴は、[サーバ統計] &gt; [ログ ファイル] または &lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\logs ディレクトリから取得できる <b>event_console_history.log</b> にも含まれています。</li> </ul>
<b>イベント・コンソールのツールバー</b>	
	<p><b>クイック・ステータス・フィルタ:</b> クイック・ステータス・フィルタ・アイコンをクリックすると、特定のステータスのイベントのみが表示されます。フィルタをクリアするには、アイコンを再度クリックします。標準設定では、すべてのアクティブなイベントが表示されます。</p>
	<p><b>クイック検索:</b> 表示されているフィールドの特定の名前または値でイベントを検索できます。検索文字列を [クイック検索] ボックスに入力します。検索文字列に一致するテキストがあるすべてのイベントがイベント・コンソールに表示されます。</p>
	<p><b>カラムの選択:</b> イベント・コンソールに表示される列を選択します。</p> <p>標準設定では、[ステータス]、[時間]、[タイトル]、[ホスト]、[状態] が表示されます。</p> <p>その他に次の列が表示可能です。[重大度]、[優先順位]、[割り当てユーザ]、[カテゴリ]、[サブカテゴリ]、[詳細]、[キー]、[クローズ キー]。</p>



UI 要素	詳細
	<p><b>イベント・フィルタ:</b> ( [ライブ コンソール] ビューでのみ利用可能) 事前定義されたイベント・フィルタを選択できるイベント・フィルタ・セレクトが開きます。SiteScope には、事前定義された [Assigned to Me] イベント・フィルタが標準設定で備わっています。このフィルタでは、SiteScope のログイン・ユーザに割り当てられたすべてのイベントが表示されます。</p> <p>[プリファレンス] &gt; [イベント コンソール] &gt; [プリファレンス] &gt; [イベント フィルタ] でほかのフィルタを定義できます。フィルタの定義の詳細については、<a href="#">「イベント・フィルタの設定方法」(584ページ)</a>を参照してください。</p> <p>フィルタを選択すると、アイコンの色が青色に変わります。フィルタをクリアするには、[&lt;フィルタなし&gt;] を選択します (アイコンが灰色に変わります)。</p>
テーブル・カラム	
状態	<p>コンソール・イベントに対応する、SiteScope のモニタしきい値ステータスを表示します。</p> <p>次のアイコンは、イベントのステータス ( [エラー] , [警告] , [良好] ) を示します。</p> 
時間	監視対象環境でイベントが発生した日時。
タイトル	<p>イベントの説明。</p> <p><b>標準設定値:</b> Console Event was triggered due to alert '&lt;&lt;alertName&gt;&gt;' being fired on monitor '&lt;&lt;fullMonitorName&gt;&gt;'</p>
ホスト	イベントに関連するターゲット監視ホスト。
状態	<p>イベントのライフサイクル状態を表すために使用される状態。</p> <p>値は、 [オープン] , [進行中] , [解決済み] , [クローズ] です。</p>
優先順位	<p>ディスパッチャが選択したイベントに割り当てた重要度。</p> <p>値は、 [なし] , [最低] , [低] , [中] , [高] , [最高] です。</p>

UI 要素	詳細
重大度	<p>イベントに関連する項目の重大度。重大度のマッピングは、SiteScope 内のモニタしきい値ステータスを、コンソール・イベントの重大度レベルに関連付けます。</p> <p>標準設定のイベント重大度マッピングは、【プリファレンス】&gt;【イベント・コンソール管理】&gt;【標準設定】&gt;【重大度設定の編集】の【重大度マッピングのプリファレンス】ダイアログ・ボックスで変更できます。詳細については、「<a href="#">【重大度マッピングのプリファレンス】ダイアログ・ボックス</a>」(588ページ)を参照してください。</p> <p>重大度の値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>危険域（標準設定では、これは【エラー】ステータスのモニタに対応します）</li> <li>重要警戒域</li> <li>警戒域（標準設定では、これは【警告】ステータスのモニタに対応します）</li> <li>注意域</li> <li>正常（標準設定では、これは【良好】ステータスのモニタに対応します）</li> <li>不明（標準設定では、これは【利用不可】ステータスのモニタに対応します）</li> </ul>
割り当てユーザ	問題を解決するユーザ。
カテゴリ	イベントが属するモニタ・タイプ（Ping, CPU など）。
サブ・カテゴリ	SiteScope\Test\CPU Utilization on SiteScope Server などのモニタ・グループのパス。
詳細	イベントを説明する（「タイトル」以外の）詳細情報または補足情報。このフィールドには、到達したしきい値（またはほかのトリガ条件）や現在の値の情報を含めることができます。
キー	発生したイベントのタイプを表す一意の文字列。環境で両方のイベントが同じ状況を表している場合（2つのイベントが重複している場合）、2つのイベントのキーが同じになることがあります。このフィールドは編集できません。
クローズ・キー	送信するイベントによって、この式に一致するキー属性を持つ

UI 要素	詳細
	<p>すべてのイベントが自動的に閉じるようになります。</p> <p><b>注：</b> SiteScope では、終了キー・パターンの最後に必ず「&lt;*&gt;」が追加されます。</p>

## 「イベントの詳細」ダイアログ・ボックス

「イベントの詳細」ダイアログ・ボックスには選択したイベントの詳細情報が表示され、イベントの「重大度」、「タイトル」、「状態」、「優先順位」、「割り当てユーザ」、「詳細」属性を更新できます。

<b>アクセス方法</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>統合コンソール (<a href="http://&lt;サーバ名&gt;:&lt;ポート&gt;/SiteScope/WebMain">http://&lt;サーバ名&gt;:&lt;ポート&gt;/SiteScope/WebMain</a>) を開き、<b>「Ops ビュー」</b>  を選択してイベント・コンソールと Multi-View を表示するか、<b>「イベント・コンソール」</b>  を選択してイベント・コンソールのみを表示します。</li> <li>イベント・コンソールでイベントをダブルクリックすると、「イベントの詳細」ダイアログ・ボックスが開きます。</li> </ol>
<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>イベントを管理（イベントへのユーザの割り当て、イベントの詳細の編集）するには、SiteScope の管理者、または適切な<b>イベント・コンソール</b>権限が付与されたユーザである必要があります（標準設定ではすべてのユーザに付与されます）。ユーザ権限の詳細については、「<a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a>」(744ページ)を参照してください。</li> <li>ユーザは、「許可されているグループ」権限のあるモニタに関連付けられたイベントの詳細を表示できます。</li> <li>コンソール・イベント属性で使用する標準設定値（および例）の詳細については、「<a href="#">[共通イベントモデル設定] - [一般] タブ</a>」(562ページ)を参照してください。</li> <li>編集可能ないずれかのフィールドでエラーが発生すると、SiteScope で変更内容を保存できません。エラー・アイコンにカーソルを置き、メッセージを利用して問題を解決してください。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「イベント・コンソール」</a> (1102ページ)</li> <li><a href="#">「イベント・コンソール・プリファレンス」</a> (584ページ)</li> </ul>
<b>関連情報</b>	<p><a href="#">「Multi-View」</a> (1080ページ)</p>



## イベントの詳細

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
メールの送信先	<p>「SiteScope イベント通知」という件名の電子メールを開きます。電子メールには、イベント・コンソールのイベントへのリンクが含まれています。リンクをクリックすると統合コンソールが開き、イベント・コンソールにイベントが表示されます。また、イベントをトリガした対応するモニタ（およびモニタの親グループ）が、Multi-View に表示されます。</p> <p>イベント受信者（通知の対象となる割り当てユーザまたは他のユーザ）の電子メール・アドレスを入力し、他の詳細情報を電子メールに追加して、電子メールを送信します。</p>
状態	<p>コンソール・イベントに対応する、SiteScope のモニタしきい値ステータスを表示します。次のようなステータスがあります:エラー、警告、良好。</p> <p>イベント状態は、ダイアログ・ボックスの左側に表示される次のアイコンでも示されます。</p> 
重大度	<p>選択したイベントに割り当てられた重大度。次のような重大度があります。[危険域]，[重要警戒域]，[警戒域]，[注意域]，[正常域] および [不明] です。このフィールドは編集可能です。</p> <p>注：SiteScope 内のコンソール・イベントのモニタしきい値状態は、イベントの重大度にマップされます。標準設定のイベント重大度マッピングは、[プリファレンス] &gt; [イベント コンソール プリファレンス] &gt; [標準設定] &gt; [重大度設定の編集] の [重大度マッピングのプリファレンス] ダイアログ・ボックスで変更できます。詳細については、<a href="#">「[重大度マッピングのプリファレンス] ダイアログ・ボックス」(588 ページ)</a>を参照してください。</p>
時間	監視対象環境でイベントが発生した日時。
タイトル	イベントの説明。このフィールドは編集可能です。
ホスト	

UI 要素	詳細
	イベントに関連するターゲット監視ホスト。
状態	<p>選択したイベントが到達した、イベント・ライフサイクル内の状態。このフィールドは、次のいずれかの状態を選択して編集できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>オープン</b>： イベントの発生原因となった問題を調査する必要があることを示します。イベントはユーザに割り当て済みであるか未割り当てのいずれかですが、作業はまだ開始されていません。</li> <li>• <b>進行中</b>： 割り当てユーザにより、イベントの基になる問題の調査が開始されています。割り当てユーザの名前は、[ユーザ] 列に表示されます。</li> <li>• <b>解決済み</b>： 選択したイベントの基になる問題は調査され、修正済みです。</li> <li>• <b>終了</b>： アクティブ・イベントのリストからイベントが削除されます。</li> </ul>
優先順位	<p>選択したイベントに割り当てられた優先順位。このフィールドは編集可能です。</p> <p>値は、[なし]、[最低]、[低]、[中]、[高]、[最高] です。</p>
割り当てユーザ	<p>イベントの基になる問題を解決するユーザの名前。このフィールドは編集可能です。</p> <p>ユーザを割り当てるには、イベントを割り当てる SiteScope ユーザの名前を検索ボックスに入力します。SiteScope で LDAP 認証を使用できる場合、LDAP 設定とユーザ・ロールで提供されるコンテキストに含まれる LDAP ユーザがリストに表示されます。</p> <p><b>注</b>： 標準設定では、LDAP サーバから 400 件の結果が返されます（最大 1000 件を取得するように設定できます）。このユーザ数を超える Active Directory ドメインが存在すると、ユーザの電子メール・アドレスを手動で入力した場合でも、LDAP サーバから取得された結果に含まれていない LDAP ユーザにはイベントを割り当てることはできません。</p> <p><b>【メールの送信先】</b> ボタンをクリックして、電子メール通知を送信します。</p>
カテゴリ	イベントが属するモニタ・タイプ (Ping, CPU など)。
サブ・カテゴリ	SiteScope\Test\CPU Utilization on SiteScope Server などのモニタ・グループのパス。
詳細	イベントを説明する（「タイトル」以外の）詳細情報または補足情報。

UI 要素	詳細
	これには、到達したしきい値や現在の値に関する情報が含まれる場合があります。このフィールドは編集可能です。
キー	発生したイベントのタイプを表す一意の文字列。環境で両方のイベントが同じ状況を表している場合（2つのイベントが重複している場合）、2つのイベントのキーが同じになることがあります。
クローズ・キー	送信するイベントによって、この式に一致するキー属性を持つすべてのイベントが自動的に閉じるようになります。終了キーが選択されていない場合は、このイベントによって他のイベントが閉じることはありません。
カスタム属性	
名前	値
サービス ID	モニタのサービス ID の値を入力して、SiteScope イベントから HPOM に送信されるサービス名をカスタマイズできます。これは、SiteScope モニタが HPOM サービス名と関連する場合に便利です。
SiteScopeDrilldownURL	イベントがトリガされた SiteScope ダッシュボード・ビューでモニタが開き、問題をトラブルシューティングできます。
customerId	カスタム ID（標準設定では1）。
統合コンソール URL	統合コンソールでイベント・コンソールが開きます。

## 第11部: SiteScope サーバの状況

SiteScope には、SiteScope アプリケーションのパフォーマンス監視に使用する主要インジケータがいくつか用意されています。

SiteScope サーバの状況は、SiteScope のパフォーマンスと可用性に関する情報を表示する、特別に設計されたモニタのグループです。状況モニタでは、SiteScope のリソースの使用状況、主要なプロセス、モニタ負荷、サーバのパラメータ、および主要な構成ファイルの整合性に関するデータが取得されます。詳細については、[「SiteScope サーバの状況モニタ」\(1129ページ\)](#)を参照してください。

また、SiteScope の【サーバ統計】コンテキストに表示された主要パフォーマンス・メトリックを使用して、パフォーマンス、安定性、状況の解析と SiteScope サーバのボトルネックのデバッグを実行できます。このコンテキストには、SiteScope サーバの負荷、実行中のモニタや最近実行されたモニタのリスト、perfex プールのサマリ、WMI 統計、SSH 接続、Telnet 接続、ダイナミック・モニタリング統計が表示されます。また、SiteScope ログ・ファイルも表示されます。詳細については、[「SiteScope サーバ統計」\(1153ページ\)](#)を参照してください。

また、SiteScope サーバ負荷とパフォーマンス統計情報の概要を、SiteScope 状況マップとパフォーマンス統計情報ログから直接取得することもできます。SiteScope ユーザ・インタフェースを開く必要はありません。詳細については、[「SiteScope 状況マップとパフォーマンス統計情報ログ」\(1226ページ\)](#)を参照してください。

## 第98章: SiteScope サーバの状況モニタ

SiteScope サーバ状況は、SiteScope のパフォーマンスと可用性に関する情報を表示する、特別に設計されたモニタのグループです。状況モニタでは、SiteScope のリソースの使用状況、主要なプロセス、モニタ負荷、サーバのパラメータ、および主要な構成ファイルの整合性に関するデータが取得されます。

**ヒント:** SiteScope サーバ・パフォーマンスの概要は「[SiteScope サーバ統計](#)」(1153ページ) コンテキストまたは「[SiteScope 状況マップとパフォーマンス統計情報ログ](#)」(1226ページ) からも取得できます。

### アクセス方法

【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで【状況】コンテナをクリックすると、デプロイ済みの使用可能な状況モニタのコレクションが表示されます。

## 学習事項

### SiteScope サーバ状況の概要

標準設定では、毎日のモニタ・ログに SiteScope 状況の監視データが記録され、SiteScope のパフォーマンスと運用状況のレポートを作成できます。これらのログ・ファイルは、SiteScope のパフォーマンスに関する問題の把握、モニタや警告に関する問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認に役立ちます。たとえば、SiteScope の監査ログには、モニタ、テンプレート、警告の作成など、新しいユーザ・インタフェースで実行された設定変更が含まれます。

SiteScope 状況の監視とともに、SiteScope 進捗レポートでは、SiteScope アプリケーションのパフォーマンスを監視するために使用する、鍵となるいくつかの指標が提供されます。

### SiteScope 状況のグループ

SiteScope の状況モニタでは、モニタ設定の問題や SiteScope サーバ負荷の特定に役立てるために、モニタ自体の環境の主要な側面を監視できます。また SiteScope では、BSM と接続しているときのその接続および関連するデータ・イベントを監視できます。

通常のモニタと同じように、状況モニタは頻度およびしきい値を再設定するために編集できます。管理者は、追加のサーバおよび環境を対象とする新しいモニタを追加することによって状況グループを拡張できます。

状況モニタ・グループは、メインの SiteScope コンテナ内に状況アイコンとして表示されます。状況モニタ・グループの内容を表示するには、【状況】コンテナをクリックします。

SiteScope の状況の監視に含まれるモニタ・タイプは次のとおりです。

モニタ・タイプ	詳細
BAC 統合設定	SiteScope を BAC/BSM のデータ・コレクタとして設定するときに、SiteScope と BAC/BSM の間の設定が正しいかどうかをチェックします。詳細については、 <a href="#">「BAC 統合設定モニタ」(1135ページ)</a> を参照してください。
BAC 統合統計モニタ	SiteScope を BAC/BSM のデータ・コレクタとして設定するときに、SiteScope と BAC/BSM の間のトラフィック量をチェックします。詳細については、 <a href="#">「BAC 統合統計モニタ」(1137ページ)</a> を参照してください。
接続統計	リモート UNIX または Windows サーバと接続するために使用するとき、SSH および Telnet 接続の状態をチェックします。Perfex、Perfex ディスパッチャ統計、および各 perfex プールの状態もチェックします。詳細については、 <a href="#">「接続統計モニタ」(1138ページ)</a> を参照してください。
ダイナミック・モニタリング統計	ダイナミック・モニタを定義したら、ダイナミック・モニタリング・フレームワークのパフォーマンスをチェックします。詳細については、 <a href="#">「ダイナミック・モニタリング統計モニタ」(1141ページ)</a> を参照してください。
SiteScope サーバの状況	SiteScope が実行されているサーバの多数のサーバ・プロセスおよびリソースをチェックします。詳細については、 <a href="#">「SiteScope サーバの状況モニタ」(1143ページ)</a> を参照してください。
ライセンス使用状況	SiteScope の OS インスタンス、URL、トランザクション・ライセンスの可用性と使用状況をチェックします。詳細については、 <a href="#">「ライセンス使用状況モニタ」(1147ページ)</a> を参照してください。
ログ・イベント・チェッカー	SiteScope エラー・ログに記録された特定のイベントをチェックします。詳細については、 <a href="#">「ログ・イベント・チェッカー・モニタ」(1148ページ)</a> を参照してください。
モニタ負荷チェッカー	実行中または実行待機中のモニタ数に関するデータをチェックします。詳細については、 <a href="#">「負荷チェッカー・モニタの監視」(1150ページ)</a> を参照してください。
SSL 証書の状態	標準設定のキーストアにある SSL 証明書の状態をチェックします。詳細については、 <a href="#">「SSL 証書の状態モニタ」(1151ページ)</a> を参照してください。

## スキップされるモニタ・イベント

スケジュールされている次の実行時までにはモニタのアクションが完了しなかった場合、SiteScope モニタはスキップとして報告されます。これは、データベースの照会、マルチページ URL シーケンス

の処理、スクリプトの実行の待機、ハングアプリケーションに対する待機など、複雑なアクションが実行されるモニタで発生する場合があります。

たとえば、8 ページの一連の Web ページを通過するように設定されている URL シーケンス・モニタがあるとした場合、このシーケンスには、応答時間が遅い可能性がある検索の実行が含まれます。モニタは 60 秒に 1 回実行されるように設定されています。システムの応答が良好な場合、モニタの実行は 45 秒で完了できます。ただし、検索要求が長くかかる場合もあり、その場合はトランザクションが完了するまでに最長で 90 秒かかります。この場合、SiteScope でスケジュールされているモニタの次の実行時までモニタが完了しません。SiteScope ではこれを検出し、**SiteScopeskip\_monitor.log** にイベントが記録されます。SiteScope ログ・イベント・モニタでは、これを検出し、エラー状態を知らせます。ログ・ファイルの詳細については、「[\[ログ ファイル\] ページ](#)」(1163 ページ)を参照してください。

モニタがプロセス・プールからのプロセスを必要とするモニタ・タイプで、プロセス・プールの制限に達した場合にも、モニタがスキップされることがあります。一般に発生する可能性は高くありませんが、監視負荷が高い一部の状況で発生することがあります。SiteScope の状況ログ・イベント・モニタでは、プロセス・プール・イベントも監視されます。モニタがスキップされると、前の実行が完了していないために、または応答しないアプリケーションによってハングしたためにモニタの実行が一時停止されるときに、データの損失を引き起こす可能性があります。モニタのスキップは SiteScope の自動的な停止、再起動も引き起こし、このようなイベントも SiteScope の状況ログ・イベント・モニタによって監視されます。再起動は、問題を解消し、モニタをリセットするために行われます。ただし、これは監視範囲およびデータのギャップにつながる可能性があります。多くの場合、モニタに設定されている実行頻度を調整、または適切なタイムアウト値を指定すると、モニタのスキップの問題を修正できます。

**注:**

- 最大許容数を超えたためにスキップしたモニタを自動的に無効にする設定を有効にできます。これが発生すると、SiteScope はエラーを出力してシャットダウンし、無効イベントを知らせるために SiteScope 管理者にモニタのスキップについて電子メールを送信します。この設定を有効にするには、プリファレンス・ビューで **[インフラストラクチャ プリファレンス]** をクリックして、**[モニタ設定をスキップ]** パネルを展開します。**[スキップされるモニタをシャットダウン]** チェック・ボックスを選択します。モニタを無効にする期間も決定できます。スキップされるモニタの設定の詳細については、「[インフラストラクチャ・プリファレンス](#)」(622 ページ)を参照してください。
- 利用可能な最大プロセス数を制御できます。この設定は、モニタ・パフォーマンスの問題がモニタ設定の調整によって解決されない場合のみ変更してください。初期値は 1 プールあたり 200 プロセスです（標準設定の 1 プールあたりの最大プロセス数は 20）。この設定を変更するには、プリファレンス・ビューで **[インフラストラクチャ プリファレンス]** をクリックして、**[一般設定]** パネルを展開します。**[プールあたりの最大プロセス数]** ボックスでプロセス数を設定します。

モニタ・スキップのトラブルシューティングの詳細については、「[ヒント/トラブルシューティング](#)」(1134 ページ)を参照してください。



## タスク

### SiteScope の状況監視データの分析方法

このタスクでは、SiteScope の状況監視データを分析し、SiteScope ログ・ファイルとサーバ統計を表示する手順について説明します。

#### 1. 前提条件

ログ・ファイルおよび進捗レポートにアクセスするには、適切なユーザ権限が必要です。

- 左側の表示枠で **【プリファレンス】** をクリックして、**【ユーザ管理プリファレンス】** を選択します。
- ユーザ名を右クリックして、**【ユーザの編集】** を選択します。
- 【Edit User Profile】** ダイアログ・ボックスで **【権限】** を展開します。
- 【その他】** セクションで **【サーバ統計の表示】** と **【ログの表示】** が選択されていることを確認します（これらの設定は標準設定で選択されます）。

#### 2. SiteScope の状況モニタのデプロイ

**注:** SiteScope の状況モニタは SiteScope がデプロイされるときに自動的に有効になるので、通常は存在します。

SiteScope を BSM のシステム可用性管理にインポートするときに SiteScope の状況モニタがない場合は、モニタをデプロイする必要があります。

タスクの詳細については、[「SiteScope 状況モニタのデプロイ方法」](#) (1133ページ)を参照してください。

#### 3. SiteScope の状況モニタの表示

SiteScope の状況モニタで収集されたデータは、SiteScope ダッシュボードで表示できます。

SiteScope 状況モニタのリストについては、[「SiteScope 状況のグループ」](#) (1129ページ)を参照してください。

#### 例 : SiteScope ダッシュボード内の状況モニタ

名前	状態	タイプ	ターゲット...	サマリ	更新日時	詳細			
選択したノード									
Health	✖	グループ		グルー...	10/12/3 ...				
グループ (0 件のうち 0 ...)									
モニタ (7 件のうち 7 件)									
Log Event Checker	✖	ログイベント...		*skippe...	10/12/3 ...				
Monitor Load Checker	✔	モニタ負荷		Current ...	10/12/3 ...				
BAC Integration Statistics	✔	BAC 統合統計		Currentl...	10/12/3 ...				
Health of SiteScope Ser...	✔	負荷モニタの...	SiteSco...	Network...	10/12/3 ...				
BAC Integration Configu...	✔	BACIntegratio...		*SiteSco...	10/12/2 ...				
SSL Certificates State	✔	SSLCertificate...		Expired ...	10/12/2 ...				

#### 4. SiteScope ログ・ファイルの表示



【サーバ統計】コンテキストの【ログ ファイル】ページで、さまざまな SiteScope ログ・ファイルを表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、「[【ログ ファイル】 ページ](#)」(1163ページ)を参照してください。

例: 【ログ ファイル】 タブ上のログ・ファイル

ログ ファイル			
タイプ	ログ ファイル	サイズ	最終更新日
その他のログ	alert.log	1 K	11/6/2 14:13
その他のログ	amazon_ec2_integrat...	0 バイト	11/5/27 14:25
監査ログ	audit.log	516 バイト	11/6/3 13:50
監査ログ	audit.log.2011-05-27	73 バイト	11/5/27 14:25
監査ログ	audit.log.2011-05-30	86 バイト	11/5/30 16:32
監査ログ	audit.log.2011-06-01	470 バイト	11/6/1 18:01
監査ログ	audit.log.2011-06-02	1 K	11/6/2 14:45
その他のログ	authentication.log	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	baselining.log	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	data_integration.log	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	downtime.log	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	dynamic_monitoring_...	0 バイト	11/5/27 14:25
エラー ログ	error.log	8 K	11/6/3 13:44
その他のログ	ha.log	223 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	HPSiteScopeOperatio...	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	HPSiteScopeOperatio...	0 バイト	11/5/27 14:25

#### 5. モニタ・パフォーマンス・データの表示

【サーバ統計】コンテキストで、SiteScope サーバの負荷および最近実行されたモニタのリストを表示できます。

概念の詳細については、「[SiteScope サーバ統計](#)」(1153ページ)を参照してください。

### SiteScope 状況モニタのデプロイ方法

このタスクでは、SiteScope をBSMのシステム可用性管理 にインポートしたときにモニタがなかった場合に、SiteScope インストールに SiteScope の状況モニタをデプロイする方法について説明します。

**注:** このタスクは高度なタスクのうちの1つです。詳細については、「[SiteScope の状況監視データの分析方法](#)」(1132ページ)を参照してください。

1. 状況モニタを表示する SiteScope コンテナを開きます。SiteScope に状況モニタ・グループ・コンテナが含まれていることを確認します。

**注:** 状況モニタ・グループ・コンテナは、状況インジケータ・アイコンで識別されます。

2. モニタ・ツリーで **[Health]** テンプレートを見つけます。クリックしてコンテナの内容を展開します。利用可能な状況モニタのテンプレートが表示されます。
3. 監視対象の SiteScope が実行されているオペレーティング・システムの状況モニタ・テンプレートを選択します。次を選択できます。
  - UNIX 状況モニタ
  - Windows 状況モニタ
4. テンプレート・アイコンを右クリックして、ショートカット・メニューから **[コピー]** を選択します。
5. 状況モニタのデプロイ先の SiteScope の **[Health]** モニタ・グループ・コンテナを右クリックして、**[貼り付け]** を選択します。選択したテンプレートのモニタが設定され、選択した SiteScope サーバにデプロイされます。

## ヒント / トラブルシューティング

### スキップされたモニタのトラブルシューティング

**問題 :** モニタがスキップを開始し、スレッド・ダンプに大量の待機スレッドがある。

**考えられる原因:** この問題は、IPv4 アドレスに IPv6 getaddrinfo() ライブラリを使用したとき、JVM と libc の間で無限ループが発生し、JVM がブロックされたために発生することがあります。標準設定では IPv6 スタックが使用されます。

**考えられる解決策 :** 次の JVM 引数を指定することによって、Java プロセスが IPv4 スタックを使用するように設定します。

```
-Djava.net.preferIPv4Stack=true
```

これにより、モニタ・スクリプトが開始され、SiteScope が再起動されます。

Linux 上の SiteScope は 10 を超えるプロセスが機能していない状態になると必ず再起動します。

この問題は <SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルに **\_sisDefunctProcessNumber** パラメータを追加して、機能していないプロセスの数を設定できるようにすることで解決されました。

### BSM へのデータのレポートに関する問題

SiteScope の状況モニタは、BSM インストールへの SiteScope モニタおよび設定データの転送に関する問題を示すイベントをレポートするように設定されています。

BSM へのデータのレポートに関する注意事項および制限事項:

- SiteScope は、数値メトリック値のみ BSM に報告します。文字列値を含むメトリックは報告しません。

- BSM SaaS ユーザに @ 記号などの特殊文字が含まれている場合、HP SaaS 環境に SiteScope を登録することはできません。BSM ユーザ・アカウントには、英字や数字のみを含める必要があります。
- 監視のデプロイメントやネットワーク通信の複雑さによっては、SiteScope が一時的に BSM サーバと通信できなくなることがあります。SiteScope の状況の監視には、BSM サーバへの接続およびデータ転送を監視する複数のモニタが含まれています。

SiteScope が BSM サーバに接続できない場合、SiteScope は引き続き監視データ・ファイルをローカルに記録して保存します。データ・ファイル数が指定したしきい値を超えると、SiteScope は構文 **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\cache\persistent\topaz\data<インデックス>.old** を使用してデータ・ファイルをキャッシュ・フォルダに保存します。また、ハートビートサンプルを **bus\_<インデックス>.old** ファイルに、設定サンプルを **config\_<インデックス>.old** ファイルに保存します。保持する **data.old** フォルダの数を設定するには、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config** ファイルの **\_topazMaxOldDirs** プロパティを変更します。

**注:** 標準設定では、データ・ファイル数のしきい値が 1,000 ファイルに設定されています。この設定を変更するには、**master.config** ファイルの **\_topazMaxPersistenceDirSize** プロパティを変更します。

SiteScope とエージェント・サーバ間の接続が復旧したら、これらのフォルダから **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\cache\persistent\topaz\data** フォルダに手動でファイルをコピーする必要があります。

大量のアップロード・データによるシステムの過負荷を避けるため、これらのファイルはデータ・フォルダが空の場合にのみコピーすることをお勧めします。**data.old** フォルダの数が指定したしきい値（標準設定は 10 フォルダ）を超えると、最も古いフォルダが削除されます。

## BAC 統合設定モニタ

BAC 統合設定モニタを使用して、BAC / BSM 構成との SiteScope の統合の正確性を追跡できます。このモニタは、無効なパス、内部名、または ID が含まれる BAC / BSM にレポートされるグループ、モニタ、測定値の数を表示するのに便利です。また、重複する Topaz ID の数、および Topaz ID が (-1) のインスタンスも表示されます。

**注:** 監視データは、SiteScope が BAC / BSM のデータ・コレクタとして統合される場合にのみ関係します。

### アクセス方法

[**モニタ**] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [**Health**] を展開して、[**BAC Integration Configuration**] をクリックします。

# タスク

## 関連タスク

- 「[SiteScope の状況監視データの分析方法](#)」 (1132ページ)
- 「[SiteScope 状況モニタのデプロイ方法](#)」 (1133ページ) (SiteScope を BAC / BSM のシステム可用性管理 にインポートするときに状況モニタがない場合)

# UI の説明

## BAC 統合設定モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
Counters	<ul style="list-style-type: none"><li>• <b>Total Groups</b> : データを BAC / BSM に報告するグループの総数。</li><li>• <b>Total Monitors</b> : データを BAC / BSM に報告するモニタの総数。</li><li>• <b>Duplicate BAC ID</b> : BAC / BSM に報告された重複する BAC ID の数。すべての SiteScope オブジェクトには、一意の BAC ID があります。2つのオブジェクトで同じ ID が使用されている場合、データを BAC / BSM に送信できるのは、これらのオブジェクトのうちの1つのみです。この問題のトラブルシューティングについては、「<a href="#">ヒント / トラブルシューティング</a>」 (1137ページ)を参照してください。</li><li>• <b>BAC ID == (-1)</b> : すべての SiteScope オブジェクトには、一意の BAC ID があります。SiteScope オブジェクトの ID 値が (-1) の場合、そのデータは BAC / BSM に送信されません。この問題のトラブルシューティングについては、「<a href="#">ヒント / トラブルシューティング</a>」 (1137ページ)を参照してください。</li><li>• <b>Group with invalid path</b> : SiteScope グループに有効なパスがない場合、そのグループは BAC / BSM に送信されません。</li><li>• <b>Groups with duplicate name</b> : SiteScope グループに一意の内部名がない場合、SiteScope はそのグループを BAC / BSM に送信しません。</li><li>• <b>Monitor with invalid path</b> : SiteScope モニタに有効なパスがない場合、そのモニタは BAC / BSM に送信されません。</li><li>• <b>Monitors without internal ID</b> : SiteScope モニタに一意の内部 ID が含まれていない場合、そのモニタは BAC / BSM に送信されません。</li><li>• <b>Monitors without internal name</b> : SiteScope モニタに有効な内部名が含まれていない場合、SiteScope はこのモニタを BAC / BSM に送信しません。</li></ul>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"><li>• <b>Measurements with wrong category ID</b> : SiteScope 測定値に有効なカテゴリ ID が含まれていない場合, SiteScope はその測定値を BAC / BSM に送信しません。この問題のトラブルシューティングについては, <a href="#">「ヒント / トラブルシューティング」 (1137ページ)</a>を参照してください。</li><li>• <b>Target with BSM ID == (-1)</b> : すべてのリモート・ターゲットには, 一意の BAC ID があります。リモート・ターゲットの ID 値が (-1) の場合, SiteScope はそのデータを BAC / BSM に送信しません。この問題のトラブルシューティングについては, <a href="#">「ヒント / トラブルシューティング」 (1137ページ)</a>を参照してください。</li></ul>

**注** : すべてのモニタに共通する設定パネルの設定の詳細については, [「共通モニタ設定」 \(290ページ\)](#)を参照してください。

## ヒント / トラブルシューティング

### 一般的な注意事項 / 制限事項

- 重複する BAC ID や BAC ID == (-1) を使用するオブジェクトがある場合:
  - JMX コンソール ( < **SiteScope** のルート・ディレクトリ > \java\bin\jconsole.exe ) を開き, [ポート] フィールドに「28006」と入力します。
  - [MBeans] タブで, **com.mercury.sitescope/Integration/Bac/Tools/BacIntegrationToolsJMX** を選択します。
    - 重複する BAC ID を使用するオブジェクトの場合は, fixDuplicateBACConfiguration() をアクティブ化します。
    - BAC ID == (-1) を使用するオブジェクトの場合は, fixMinusOneBACConfiguration() をアクティブ化します。
  - 新しい設定を BAC / BSM に送信するために, softSync() をアクティブ化することも推奨します。
- 測定値に誤ったカテゴリ ID が使用されている場合は, SiteScope を再起動します。

## BAC 統合統計モニタ

BSM / BAC の状況をチェックするには BAC 統合統計モニタを使用します。この状況モニタにより, SiteScope と BAC / BSM との間のトラフィック量を追跡できるようになります。SiteScope は測定値を BAC / BSM に毎分送信します。

**注:** 監視データは、SiteScope が BAC / BSM のデータ・コレクタとして統合される場合にのみ関係します。

アクセス方法

【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで **Health** を展開して、**BAC Integration Statistics** をクリックします。

タスク

関連タスク

- ・ [「SiteScope の状況監視データの分析方法」 \(1132ページ\)](#)
- ・ [「SiteScope 状況モニタのデプロイ方法」 \(1133ページ\)](#) (SiteScope を BAC / BSM のシステム可用性管理 にインポートするときに状況モニタがない場合)

UI の説明

BAC 統合統計モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
Counters	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>Business Availability Center に現在ログイン中</b> 現在 BAC / BSM にログ記録されている 1 分あたりの測定値の数を表示します。</li><li>・ <b>Number of Topology Scripts in Queue</b> : 実行待機中のトポロジ・スクリプトの数を表示します。これらのスクリプトによって、BAC / BSM にトポロジ・データが転送されます。これらのスクリプトは SiteScope で設定変更があるたびに実行する必要があります。キューは、SiteScope が最初に BAC / BSM に登録されるとき、または SiteScope で多数の設定変更が行われたときに増えます。</li></ul>

**注:** すべてのモニタに共通する設定パネルの設定の詳細については、[「共通モニタ設定」 \(290ページ\)](#)を参照してください。

接続統計モニタ

接続統計モニタを使用して、SSH および Telnet 接続の動作についてのデータと、Perfex および Perfex dispatcher プールの統計情報を収集できます。このモニタは、接続の問題やリモート・サーバの設定の問題を分析するのに役立つ、全体的な接続ハンドルの概要を提供します。

アクセス方法

【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで【Health】を展開して，【Connection Statistics Monitor】をクリックします。

タスク

関連タスク

- ・ [「SiteScope の状況監視データの分析方法」\(1132ページ\)](#)
- ・ [「SiteScope 状況モニタのデプロイ方法」\(1133ページ\)](#) (SiteScope を BSM のシステム可用性管理にインポートするときに状況モニタがない場合)

UI の説明

接続統計モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
SSH Connection Counters	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>開いた合計</b>：開いた SSH 接続の総数。この数が【現在割り当て済みのリソース】の数を大きく上回っている場合は，設定の問題を示しています。次を確認します。<ul style="list-style-type: none"><li>・ 接続キャッシュが無効になった</li><li>・ 不正なログインまたはパスワードが使用された</li><li>・ リモート・サーバ・タイムアウトが短すぎる</li></ul></li><li>・ <b>閉じた合計</b>：最後に SiteScope が再起動されてから閉じた SSH 接続の数。</li><li>・ <b>V1 を開くのに失敗した合計</b>：SSH バージョン 1 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。標準設定では，SiteScope は V2 での接続を試みる前に，V1 を使用して接続を試行します。この数が大きい場合は，問題が発生しているリモート・サーバで【SSH バージョン 2 のみを使用】オプションを選択することをお勧めします。</li><li>・ <b>V2 を開くのに失敗した合計</b>：SSH バージョン 2 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。この数が大きい場合は，リモート・サーバで正しいログインとパスワードが使用されたことを検証し，リモート・サーバ上の SSH バージョンを検証します (V1 または V2)。</li><li>・ <b>再利用</b>：最後に SiteScope が再起動されてから再利用された SSH 接続の数。</li></ul>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>現在割り当て済みのリソース</b>：現在開いている SSH 接続の数。</li> <li>・ <b>現在使用中</b>：現在開いていて、実行中のモニタで使用されている SSH 接続の数。</li> <li>・ <b>最後の 10 分間の平均呼び出し時間</b>：最後の時間の平均呼び出し時間。</li> <li>・ <b>合計平均呼び出し時間</b>：平均呼び出し時間。</li> </ul>
<b>Telnet Connection Counters</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>開いた合計</b>：最後に SiteScope が再起動されてから開いた telnet 接続の数。</li> <li>・ <b>閉じた合計</b>：最後に SiteScope が再起動されてから閉じた telnet 接続の数。</li> <li>・ <b>再利用</b>：最後に SiteScope が再起動されてから再利用された telnet 接続の数。</li> <li>・ <b>現在割り当て済みのリソース</b>：現在開かれている telnet 接続の数。</li> <li>・ <b>現在使用中</b>：現在開かれていて、実行中のモニタで使用されている telnet 接続の数。</li> </ul>
<b>Perfex/Perfex dispatcher Connection Counters</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>アイドル・プロセス</b>：現在アイドル状態のプロセスの数。</li> <li>・ <b>使用中プロセス</b>：現在使用中状態のプロセスの数。</li> <li>・ <b>プロセス合計</b>：プロセスの総数（アイドル・プロセスと使用中プロセスの合計）。</li> <li>・ <b>プロセス プール キューの長さ</b>：利用可能な perfex の現在待機中のモニタ数。この値は、perfex で実行中のモニタ数が多すぎる、または perfex プールが小さすぎることを示す場合があります。</li> <li>・ <b>空きプロセスの平均待機時間</b>：プロセスが利用可能になるまでの平均待機時間（ミリ秒単位）。この値が 30,000 ミリ秒（30 秒）を超えると、それ以降のモニタが失敗します。平均待機時間が長い場合は、プールのプロセス数を増やす必要があることを示します。</li> <li>・ <b>平均実行時間</b>：perfex の実行にかかる平均時間（ミリ秒単位）。ここでは、次を示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ネットワーク速度。要求を送信し、サーバから応答を受信するのにかかる時間。</li> <li>・ perfex の可用性。実行を完了し、perfex をプールに戻すまでにかかる平均時間。</li> <li>・ perfex を使用しているモニタ数。</li> </ul> </li> <li>・ <b>サーバ タイムアウトを待機するプロセス</b>：呼び出しタイムアウトを過ぎたプロセス、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているプロセ</li> </ul>



UI 要素	詳細
	ス, またはプールに戻るために応答を待機しているプロセスの数。

**注:** すべてのモニタに共通する設定パネルの設定の詳細については、[「共通モニタ設定」\(290 ページ\)](#)を参照してください。

## ダイナミック・モニタリング統計モニタ

ダイナミック・モニタが定義されている場合には、ダイナミック・モニタリング統計を使用して、ダイナミック・モニタリング・フレームワークのパフォーマンスの概要を取得します。これは、ダイナミック・モニタリング・カウンタおよびしきい値を自動的に更新するために、ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用する場合、パフォーマンス統計を表示し問題を分析するのに便利です。

### アクセス方法

【**モニタ**】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで【**Health**】を展開して、【**Dynamic Monitoring Statistics**】をクリックします。

この情報は【**ダイナミック モニタリング**】タブをクリックして、【**サーバ統計**】コンテキストからも入手できます。

## タスク

### 関連タスク

- [「SiteScope の状況監視データの分析方法」\(1132ページ\)](#)
- [「SiteScope 状況モニタのデプロイ方法」\(1133ページ\)](#) (SiteScope を BSM のシステム可用性管理にインポートするときに状況モニタがない場合)

## UI の説明

### ダイナミック・モニタリング統計モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>定義:</b>	
* ダイナミック・タスク:サーバからカウンタを取得し、モニタに定義されたパターンに一致する	

UI 要素	詳細
<p>カウンタをその中から見つけ出すという定期的なアクション。</p> <p><b>** カウンタ ファイル:</b>カウンタは &lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\templates.application フォルダの下に配置される xml ファイルに保存されます。</p>	
平均タスク実行時間（ミリ秒）	ダイナミック・タスク* の実行を開始するためにかかった平均時間（ミリ秒）。
最後の 10 分間の平均タスク実行時間（ミリ秒）	最後の 10 分間にダイナミック・タスク* の実行を開始するためにかかった平均時間（ミリ秒）。
平均タスク待機時間（ミリ秒）	タスクを受け取ったときからダイナミック・タスク* の実行を開始するためにかかった平均時間（ミリ秒）。
最後の 10 分間の平均タスク待機時間（ミリ秒）	最後の 10 分間にタスクを受け取ったときからダイナミック・タスク* の実行を開始するためにかかった平均時間（ミリ秒）。
最後 10 分間のダイナミック・モニタリング・フレームワークと同時実行のユーザ変更の間のクラッシュの数	最後の 10 分間に、（ユーザ変更をオーバーライドしないように）ユーザが同時実行の変更を実行した結果としてダイナミック・モニタリング・フレームワークの変更を保存できない回数。
最後の 10 分間にカウンタのマッチングの最大数を越えた回数	最後の 10 分間にサーバからパターン用のカウンタのマッチングが限度を超えた回数。
最後の 10 分間にサーバからのカウンタをマッチングできなかった回数	最後の 10 分間にサーバからパターン用のカウンタをマッチングできなかった回数。
最後の 10 分間にファイルからカウンタを抽出できない回数	最後の 10 分間に、カウンタ・ファイル ** からカウンタを抽出できない回数。
最後の 10 分間にサーバからカウンタを検索できない回数	最後の 10 分間にサーバからカウンタを検索できない回数。
最後 10 分間にリソース消耗のためにダイナミック・タスクを実行できない回数	最後の 10 分間に、最大ダイナミック・モニタリング・フレームワークしきい値プールとキュー・サイズの限界に達したためダイナミック・タスク* を実行できない回数。

UI 要素	詳細
	[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [ダイナミック モニタリング設定] でこれらの設定を実行できます。詳細については、 <a href="#">「インフラストラクチャ・プリファレンス」 (622ページ)</a> を参照してください。
最後の 10 分間に変更を保存できない回数	最後の 10 分間に永続 SiteScope にカウンタ変更を保存できない回数。
最後の 10 分間に保存されていないカウンタ・ファイル数	最後の 10 分間に既存のカウンタ・ファイル** を削除、または新しいカウンタ・ファイル保存できない回数。

注: すべてのモニタに共通する設定パネルの設定の詳細については、[「共通モニタ設定」 \(290ページ\)](#)を参照してください。

## SiteScope サーバの状況モニタ

SiteScope サーバの状況モニタは、SiteScope が実行されているサーバでサーバ・リソースおよびプロセス統計をチェックするために使用します。これには、CPU、ディスク領域、メモリ、主要プロセスのモニタが含まれます。

SiteScope サーバのリソース使用率に関する問題は、設定に問題があるモニタが原因であったり、単に特定の SiteScope がパフォーマンス能力の上限に達していることを示していることもあります。たとえば、SiteScope による CPU 使用率が高い場合、実行中のモニタの総数が制限に到達しようとしていることを示す場合があります。ディスク領域使用率が高い場合、SiteScope 監視データのログが、ローカル・ディスク・ドライブの容量を超えようとしていることを示す場合があります。SiteScope データのログ記録オプションの詳細については、[「ログ・プリファレンスの概要」 \(710ページ\)](#)を参照してください。

### アクセス方法

[**モニタ**] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [**状況**] を展開して、[**SiteScope サーバの状況**] をクリックします。

## タスク

### 関連タスク

- [「SiteScope の状況監視データの分析方法」 \(1132ページ\)](#)
- [「SiteScope 状況モニタのデプロイ方法」 \(1133ページ\)](#) (SiteScope を BSM のシステム可用性管理

にインポートするときに状況モニタがない場合)

## UI の説明

SiteScope サーバの状況モニタの設定  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
カウンタ (UNIX の場合)	Current Monitors Run Per Minute Current Monitors Running Current Monitors Waiting Maximum Monitors Run Per Minute Maximum Monitors Running Maximum Monitors Waiting Used Disk Space on SiteScope Drive (UNIX にインストールされている SiteScope からアクセス可能) MegaBytes Available on SiteScope Drive Physical Memory Free Physical Memory Free Megabytes Swap Free Swap Free Megabytes Load Avg 5min SiteScope Process Memory SiteScope Process Thread Count SiteScope Process Handle Count Average CPU PageIns/sec PageOuts/sec SwapIns/sec SwapOuts/sec ContextSwitches/sec Net_TotalPacketsIn/sec Net_TotalPacketsOut/sec Net_TotalCollisions/sec
カウンタ (Windows の場合)	メモリ Page Faults/sec Pool Paged Bytes Pool Nonpaged Bytes

UI 要素	詳細
	<div>% Committed Bytes In Use</div> <div>Available MBytes</div> <div>システム</div> <div>Context Switches/sec</div> <div>File Data Operations/sec</div> <div>System Up Time</div> <div>Processor Queue Length</div> <div>Processes</div> <div>スレッド</div> <div>Processor</div> <div>_Total</div> <div><div>% Processor Time</div><div>% DPC Time</div></div> <div>Process</div> <div>java</div> <div><div>Thread Count</div><div>Pool Paged Bytes</div><div>Pool Nonpaged Bytes</div><div>Handle Count</div></div> <div>Network Interface</div> <div>MS TCP Loopback interface</div> <div><div>Bytes Total/sec</div><div>Current Bandwidth</div><div>Bytes Received/sec</div><div>Bytes Sent/sec</div><div>&lt;イーサネット・ハードウェア&gt; (特定の SiteScope サーバに固有のハードウェア)</div><div>Bytes Total/sec</div><div>Current Bandwidth</div><div>Bytes Received/sec</div><div>Bytes Sent/sec</div></div> <div>LogicalDisk</div> <div>&lt;論理ドライブ&gt; (特定の SiteScope サーバに固有のハードウェア)</div> <div><div>% Free Space</div><div>Free Megabytes</div></div>

UI 要素	詳細
	<div>Avg : Disk Bytes/Transfer</div> <div>_Total</div> <div><div><div>% Free Space</div><div>Free Megabytes</div><div>Avg : Disk Bytes/Transfer</div></div></div> <div>PhysicalDisk</div> <div>_Total</div> <div><div><div>Current Disk Queue Length</div><div>Disk Transfers/sec</div></div></div> <div>&lt; 物理ディスク &gt;（特定の SiteScope サーバに固有のハードウェア）</div> <div><div><div>Current Disk Queue Length</div><div>Disk Transfers/sec</div></div></div> <div>Server</div> <div>Bytes Total/sec</div> <div>Errors Logon</div> <div>Errors Access Permissions</div> <div>Errors System</div> <div>Files Open</div> <div>Server Sessions</div>

注：すべてのモニタに共通する設定パネルの設定の詳細については、[「共通モニタ設定」\(290 ページ\)](#)を参照してください。

## ヒント / トラブルシューティング

### 注意事項および制限事項

- プロセス/perfex カウンタは、SiteScope サーバの状況モニタから削除されており、現在はサポートされていません。
- テンプレート・モードで作業している場合、選択できるカウンタの最大数は 100 です。SiteScope の以前のバージョンからテンプレート・モニタをインポートする場合、またはテンプレートへのコピーを実行する場合、カウンタ数に制限はありません。

# ライセンス使用状況モニタ

ライセンス使用状況モニタでは、ローカルの SiteScope インストールの SiteScope ライセンスの可用性および使用状況をチェックできます。このモニタは、利用可能、使用中および残りの OS インスタンス・ライセンス、URL ライセンス、トランザクション・ライセンスの数、ライセンスの残りの合計日数、SiteScope が使用するライセンス容量が利用可能なライセンス容量を超えた場合のライセンスのステータスを表示します。

## アクセス方法

【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで【Health】を展開して、【License Usage Monitor】をクリックします。

## タスク

### 関連タスク

- ・ [「SiteScope の状況監視データの分析方法」 \(1132ページ\)](#)
- ・ [「SiteScope 状況モニタのデプロイ方法」 \(1133ページ\)](#) (SiteScope を BSM のシステム可用性管理にインポートするときに状況モニタがない場合)

## UI の説明

ライセンス使用状況モニタのモニタ設定  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細	しきい値
Counters	ライセンスの残り日数	< 10 日の場合、エラー < 30 日の場合、警告
	ライセンス・タイプ	
	OS インスタンス・ライセンスの残りの %	< 10 の場合、エラー < 30 の場合、警告
	残りのOS インスタンス・ライセンス	
	OS インスタンス・ライセンスの合計	

UI 要素	詳細	しきい値
	使用中の OS インスタンス・ライセンス	
	ライセンス超過の状態	「true」の場合、エラー
	状態	「OK」の場合、エラー 「OK」の場合、正常
	トランザクション・ライセンスの残りの %	
	残りのトランザクション・ライセンス	
	トランザクション・ライセンスの合計	
	使用中のトランザクション・ライセンス	
	URL ライセンスの残りの %	< 10 の場合、エラー < 30 の場合、警告
	残りの URL ライセンス	
	URL ライセンスの合計	
	使用中の URL ライセンス	

注：すべてのモニタに共通する設定パネルの設定の詳細については、[「共通モニタ設定」\(290 ページ\)](#)を参照してください。

## ログ・イベント・チェッカ・モニタ

ログ・イベント・モニタを使用すると、ローカルの SiteScope インストール環境の **error.log** ファイルを監視して、特定のイベントを検出できます。これらのイベントには、モニタがスキップされたことを示すログ・エントリや、別のアプリケーションへのデータのレポートで問題があったことを示すログ・エントリがあります。

エラー（たとえば、モニタのスキップ）が検出されると、[ログ・イベント状況モニタの設定] で [リセット] ボタンをクリックするまで、ログ イベント状況モニタはエラー・ステータスのままになります。



アクセス方法

【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで【Health】を展開して，【Log Event Checker】をクリックします。

タスク

関連タスク

- ・ [「SiteScope の状況監視データの分析方法」 \(1132ページ\)](#)
- ・ [「SiteScope 状況モニタのデプロイ方法」 \(1133ページ\)](#) (SiteScope を BSM の システム可用性管理 にインポートするときに状況モニタがない場合)

UI の説明

ログ・イベント状況モニタの設定  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
Counters	<ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>skipped #1</b> : モニタがスケジュールされていた実行を 1 回スキップしました。</li><li>・ <b>skipped #2</b> : モニタがスケジュールされていた実行を 2 回スキップしました。</li><li>・ <b>skipped #3</b> : モニタがスケジュールされていた実行を 3 回スキップしました。</li><li>・ <b>skipped #4</b> : モニタがスケジュールされていた実行を 4 回スキップしました。</li><li>・ <b>skipped #5</b> : モニタがスケジュールされていた実行を 5 回スキップしました。</li><li>・ <b>SiteScope is shutting down</b> : SiteScope がシャットダウンしました。</li><li>・ <b>Reached the limit of processes in the process pool</b>. プロセス・プールから要求されたプロセス数が，プールで利用可能なプロセス数を超えています。</li><li>・ <b>エラー : data reporter failed to report chunk of data</b>. BSM への SiteScope モニタ測定値データの転送で障害が発生しました。</li><li>・ <b>エラー : config reporter failed to report chunk of data</b>. BSM のシステム可用性管理への SiteScope 設定データの転送で障害が発生しました。</li><li>・ <b>エラー : HP Business Service Management failed to process data :</b></li></ul>

UI 要素	詳細
	<p>SiteScope から送信されたデータの処理で障害が発生したことが BSM からレポートされました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Error. CacheSender. Got to the max number of cached files</b> : SiteScope は BSM への転送待機中にキャッシュ・データ・ファイルの最大数に達しました。これは、SiteScope と BSM の間のデータ転送が中断された場合に発生することがあります。</li> <li>• <b>Error. CacheSender. Got to the max old dir size</b> : SiteScope は BSM への転送待機中にキャッシュ・データ・ファイルの最大ディレクトリ・サイズに達しました。これは、SiteScope と BSM の間のデータ転送が中断された場合に発生することがあります。</li> <li>• <b>HP Business Service ManagementSEVERE</b> : BSM が、SEVERE ステータスのデータ転送またはデータ処理エラーを報告しました。</li> <li>• <b>Commit verification failed。</b></li> <li>• <b>Error loading monitor。</b></li> <li>• <b>Error contacting mirror server。</b></li> <li>• <b>Error:open SSH connections limit reached。</b></li> <li>• <b>Error:failure in baseline process。</b></li> <li>• <b>Error:failed to parse rule。</b></li> <li>• <b>Topology Reporter failed to report。</b></li> </ul>
カウンタ値のリセット	<p>モニタのカウンタ値が 0 にリセットされます。</p> <p><b>注</b> : エラー（たとえば、モニタのスキップ）が検出されると、<b>[リセット]</b> ボタンをクリックするまで、ログ イベント状況モニタはエラー・ステータスのままになります。</p>

**注** : すべてのモニタに共通する設定パネルの設定の詳細については、[「共通モニタ設定」\(290 ページ\)](#)を参照してください。

## 負荷チェッカー・モニタの監視

負荷チェッカー・モニタの監視では、実行中モニタ数と実行待機中モニタ数がチェックされます。

監視のパフォーマンスおよび継続性を維持するためにモニタ負荷の監視は重要です。待機中モニタ数が実行中モニタ数に近づいているか超えると、待機中モニタ数を減らすためにモニタ設定を調整する必要があります。これを行うには、一般的に一部のモニタの実行頻度を減らします。

アクセス方法

【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで【Health】を展開して，【Monitor Load Checker】をクリックします。

タスク

関連タスク

- 「[SiteScope の状況監視データの分析方法](#)」(1132ページ)
- 「[SiteScope 状況モニタのデプロイ方法](#)」(1133ページ) (SiteScope を BSM の システム可用性管理にインポートするときに状況モニタがない場合)

UI の説明

負荷チェッカー・モニタの監視の設定  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
Counters	<ul style="list-style-type: none"><li>• Current Monitors Run Per Minute</li><li>• Current Monitors Running</li><li>• Current Monitors Waiting</li><li>• Maximum Monitors Run Per Minute</li><li>• 定時に測定された実行モニタの最大数 / 分</li><li>• Maximum Monitors Running</li><li>• 定時に測定された実行中モニタの最大数 / 分</li><li>• Maximum Monitors Waiting</li><li>• 定時に測定された待機中モニタの最大数 / 分</li></ul>

注：すべてのモニタに共通する設定パネルの設定の詳細については，「[共通モニタ設定](#)」(290ページ)を参照してください。

SSL 証書の状態モニタ

SSL 証書の状態モニタを使用すると，標準設定のキーストア（<SiteScope のルート・ディレクトリ>\java\lib\security\cacerts）にある SSL 証明書の状態を確認できます。この場所に，URL，

WebSphere アプリケーション・サーバ、または VMware ベースのサーバを監視するためにインポートされたクライアント証明書が保存されます。

アクセス方法

【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで【Health】を展開して、【SSL Certificates State】をクリックします。

タスク

関連タスク

- ・ [「SiteScope の状況監視データの分析方法」 \(1132ページ\)](#)
- ・ [「SiteScope 状況モニタのデプロイ方法」 \(1133ページ\)](#) (SiteScope を BSM のシステム可用性管理にインポートするときに状況モニタがない場合)

UI の説明

SSL 証書の状態モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
期限切れ残り日数	指定の日数で証明書の期限が切れる（ただしまだ期限は切れていない）場合、 【Certificates expiring soon】カウンタに追加されます。  標準設定値：7 日
Counters	<ul style="list-style-type: none"><li>・ Expired certificates :すでに期限が切れている証明書のカンマ区切りリスト。</li><li>・ Certificates expiring soon :【期限切れ残り日数】に指定された期間内に期限切れになる証明書のカンマ区切りリスト。</li><li>・ Number of expired certificates</li><li>・ Number of certificates expiring soon</li></ul>

注：すべてのモニタに共通する設定パネルの設定の詳細については、[「共通モニタ設定」 \(290ページ\)](#)を参照してください。

# 第99章: SiteScope サーバ統計

SiteScope の [サーバ統計] コンテキストには、いくつかの重要な SiteScope サーバのパフォーマンス測定値の概要が表示されます。このパフォーマンス測定値は、SiteScope のパフォーマンス、安定性、状況の分析、およびボトルネックのデバッグに使用できます。このコンテキストには、SiteScope サーバの負荷を表す統計情報、実行中のモニタや最近実行されたモニタのリスト、perfex プールのサマリ、WMI 統計、SSH 接続、Telnet 接続、ダイナミック・モニタリング統計が含まれます。また、SiteScope ログ・ファイルも表示されます。[サーバ統計] コンテキストは、20 秒ごとに更新されます。

**ヒント:** 「[SiteScope 状況マップとパフォーマンス統計情報ログ](#)」(1226ページ)を使用して、SiteScope サーバのパフォーマンスの概要を取得することもできます。SiteScope ユーザ・インタフェースを開かなくても、これらのログから SiteScope の負荷統計とパフォーマンス統計情報に簡単にアクセスできます。

## アクセス方法

[サーバ統計] コンテキストを選択し、左側の表示枠で必要な [サーバ統計] メニューのオプションを選択します。

## 学習事項

### サーバ統計の概要

[サーバ統計] コンテキストには、次のページがあります。

ページ	詳細
ダイナミック・モニタリング	ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用してダイナミック・モニタリングのカウンタとしきい値を自動的に更新するときに統計を表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[ダイナミック モニタリング] ページ</a> 」(1159ページ)を参照してください。
一般	SiteScope サーバの負荷を表す重要な統計情報（実行中モニタ数や待機中モニタ数など）およびタイプごとの実行中モニタ数のリストが表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[一般] ページ</a> 」(1162ページ)を参照してください。
ログ・ファイル	SiteScope のパフォーマンスの問題の理解、モニタと警告の問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認に役立つ、SiteScope のログ・ファイルのリストを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細について

ページ	詳細
	は、 <a href="#">「[ログ ファイル] ページ」(1163ページ)</a> を参照してください。
<b>Perfex プロセス・プール</b>	プロセス・マネージャ・サマリや、perfex ツールおよび perfex_dispatcher ツールの統計情報テーブルが表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[Perfex プロセス プール] ページ」(1169ページ)</a> を参照してください。
<b>PowerShell プロセス・プール</b>	Microsoft Exchange ベースのモニタで使用される PowerShell プロセス・プールの統計情報テーブルを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[PowerShell プロセス プール] ページ」(1171ページ)</a> を参照してください。
<b>実行中のモニタ数</b>	実行中の SiteScope モニタ、最近実行されたモニタ、実行された時間、実行で返された状態のリストを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[実行中のモニタ数] ページ」(1173ページ)</a> を参照してください。
<b>SSH 接続</b>	SSH を使用して、UNIX または Windows のリモート・サーバに接続している場合、SSH 統計および SSH 接続サマリが表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[SSH 接続] ページ」(1174ページ)</a> を参照してください。
<b>Telnet 接続</b>	リモート UNIX または Windows サーバへの接続に Telnet を使用した場合の Telnet 統計を表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[Telnet 接続] ページ」(1176ページ)</a> を参照してください。
<b>WMI 統計</b>	Windows Management Instrumentation (WMI) 統計のプロセス・マネージャ・サマリを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[WMI 統計] ページ」(1177ページ)</a> を参照してください。

## SiteScope ログ・ファイル

SiteScope には多数のログ・ファイルが保持されています。ログ・ファイルは、SiteScope のパフォーマンスの問題の把握、モニタや警告の問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認を行う場合に役立ちます。

【サーバ統計】コンテキストの【ログ ファイル】メニューを使用して、ログ・ファイルにアクセスできます。ログ・ファイルをクリックすると、新しいブラウザ・ウィンドウが開き、ログ・ファイルのテキストが表示されます。スクロール・バーを使用してログの内容を表示できます。また、ブラウザのテキスト検索ユーティリティを使用して特定の情報を見つけることもできます。たとえば、モニタの【名前】プロパティに表示される一意のテキスト文字列を検索して、特定のモニタ・インスタンスのエントリを見つけることができます。各種 SiteScope ログ・ファイルの詳細については、[「\[ロ](#)

[ログ ファイル\] ページ](#) (1163ページ)および [「監査ログ・ファイル」](#) (1178ページ)を参照してください。

ログ・ファイルはプレーン・テキストで書き込まれ、**<SiteScope のルート・パス>\logs** ディレクトリに保存されます。標準設定では、これらのログ・ファイルはタブ区切りのテキスト・ファイルになります。これらのファイルの順序や内容を理解しておく、特定のモニタの結果を検証する場合や、SiteScope モニタの結果を別のデータベースに移す場合に役立ちます。詳細については、[「SiteScope ログ・ファイルの列」](#) (1155ページ)を参照してください。

**注:** SiteScope ログ・ファイルでは Unicode 文字はサポートされません。英語以外の文字はログで文字化けします。回避策として、対応する OS のロケールにインストールされた SiteScope サーバを使用します。たとえば、日本語ロケールの場合は日本語版の Windows OS にインストールされた SiteScope を使用します。

## SiteScope ログ・ファイルへのアクセス

SiteScope には多数のログ・ファイルが保持されています。ログ・ファイルは、SiteScope のパフォーマンスの問題の把握、モニタや警告の問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認を行う場合に役立ちます。

[サーバ統計] コンテキストの [ログ ファイル] メニューを使用して、ログ・ファイルにアクセスできます。ログ・ファイルをクリックすると、新しいブラウザ・ウィンドウが開き、ログ・ファイルのテキストが表示されます。スクロール・バーを使用してログの内容を表示できます。また、ブラウザのテキスト検索ユーティリティを使用して特定の情報を見つけることもできます。たとえば、モニタの **【名前】** プロパティに表示される一意のテキスト文字列を検索して、特定のモニタ・インスタンスのエントリを見つけることができます。各種 SiteScope ログ・ファイルの詳細については、[「\[ログ ファイル\] ページ」](#) (1163ページ)および [「監査ログ・ファイル」](#) (1178ページ)を参照してください。

ログ・ファイルはプレーン・テキストで書き込まれ、**<SiteScope のルート・パス>\logs** ディレクトリに保存されます。標準設定では、これらのログ・ファイルはタブ区切りのテキスト・ファイルになります。これらのファイルの順序や内容を理解しておく、特定のモニタの結果を検証する場合や、SiteScope モニタの結果を別のデータベースに移す場合に役立ちます。詳細については、[「SiteScope ログ・ファイルの列」](#) (1155ページ)を参照してください。

**注:** SiteScope ログ・ファイルでは Unicode 文字はサポートされません。英語以外の文字はログで文字化けします。回避策として、対応する OS のロケールにインストールされた SiteScope サーバを使用します。たとえば、日本語ロケールの場合は日本語版の Windows OS にインストールされた SiteScope を使用します。

## SiteScope ログ・ファイルの列

SiteScope が、インフラストラクチャ内のコンポーネントの可用性をテストするようにモニタ指示を実行すると、モニタの結果がデータ・ログ・ファイルに書き込まれます。SiteScope 監視データのログの各ログ・エントリの先頭 6 列は、どのモニタ・タイプでも同じです。各ログ・エントリの第 7 列以降、各列の内容はモニタ・タイプごとに固有になります（個々のモニタについては次のリストを参

照してください)。

**注:** フィールド名は、SiteScope モニタ設定に応じて動的に変わります。データベースに記録されるデータについてフィールド名のリストを手動で生成するには、[「データベースにログ記録されるデータのフィールド名の生成方法」\(712ページ\)](#)を参照してください。

次の表で、それぞれの列の内容について説明します。各ログ・ファイル内の列は、タブ区切りのテキストとして書き込まれます。

列	列のデータ
1	サンプルが記録された日時。
2	カテゴリ (たとえば, good, error, warning, nodata など)。
3	モニタが定義したモニタ・グループ名 (ownerID と呼ばれます)。
4	モニタ・タイトルのテキスト。
5	stateString ( [Group details] ページに表示される状態文字列)。
6	ID:サンプル番号 (このモニタの一意の ID。グループ + ID がモニタの一意のキーになります)。サンプル番号は、そのモニタの一意のサンプル番号です。

特定のモニタのログ・ファイルの列の詳細については、[「モニタ固有のログ列の内容」\(1185ページ\)](#)を参照してください。

## SiteScope サーバの負荷を表す統計情報の解析

監視負荷は、SiteScope の拡大・縮小の問題、モニタ設定の問題、またはネットワーク・パフォーマンスの問題の重要な指標になります。SiteScope モニタの実行モデル、および該当のモデルに応じたサーバ・パフォーマンス・データの解析に関する簡単な説明を次に示します。

SiteScope モニタ・インスタンスは、スケジュールされた間隔で定期的に SiteScope アプリケーションによって実行される不可欠な命令セットです。モニタ・インスタンスを定義すると、SiteScope によって、実行 (更新) の頻度とスケジュール・オプションに基づいてモニタが実行用のキューに入れます。モニタ・インスタンスが「無効」とマークされている場合でも、キューにスケジュールされますが、通常の命令は実行されません。

Java ベース・アプリケーションとして、SiteScope では、マルチスレッドを利用してモニタ・タスクを並列実行できます。実行がスケジュールされた各モニタ・インスタンスはスレッドに割り当てられます。スレッドに割り当てられると、モニタ・インスタンスは**実行中モニタ**になります。モニタの実行命令の結果が得られるか、タイムアウト値 (該当する場合) に達するまで、スレッドに割り当てられたままになります。



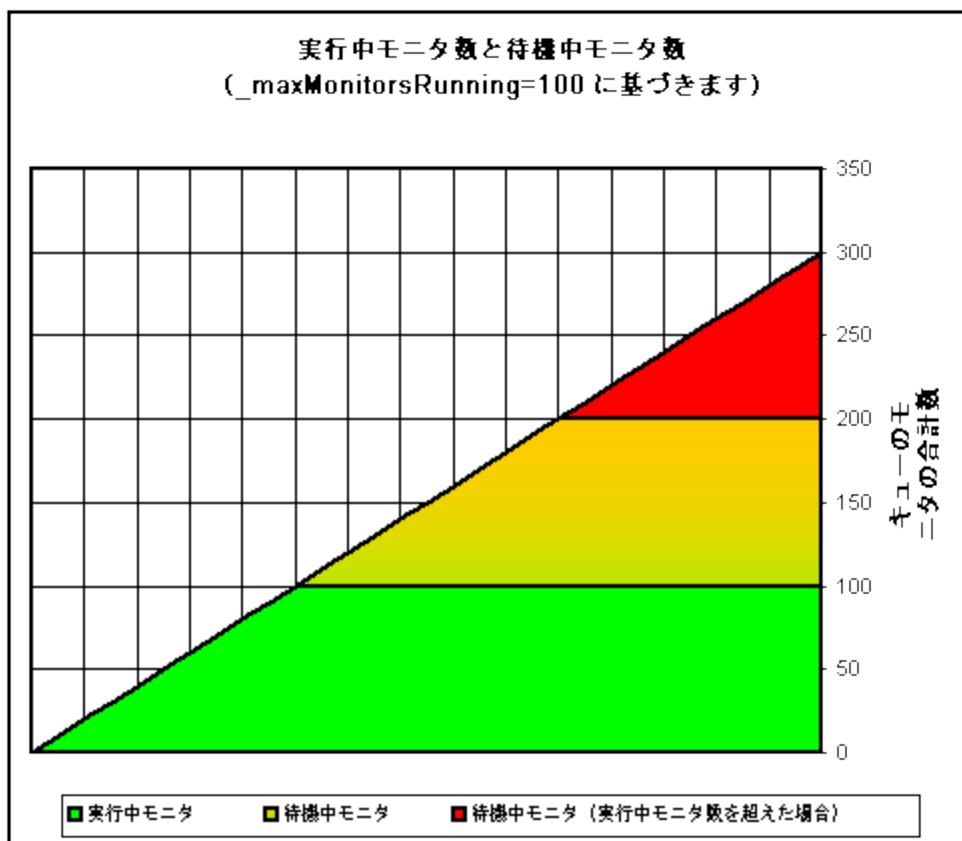
このモデルでも、モニタはすぐに実行されるわけではなく、同時に実行できるモニタ・スレッドの数には制限があります。使用できるスレッドの上限に達すると、実行を要求されたモニタは、実行スレッドを待機する**待機中モニタ**になります。

サーバ容量やネットワーク・デプロイメントの詳細は大きく異なる可能性があるため、特定の値や制限を SiteScope の監視負荷に割り当てることは困難です。また、単純にトランザクションのネットワーク・トラフィックの問題や SiteScope のモニタ設定の問題が原因で、監視負荷が時間の経過とともに大きく変わる場合もあります。

監視負荷を解析するための重要な警告シグナルとして、実行中モニタ数に対する待機中モニタ数の割合が挙げられます。通常、実行中モニタ数に対する待機中モニタ数の割合が常に 1:2 以上になっていなければ、一部のモニタが実行を待機していても問題はありません。たとえば、実行中モニタの最大数が 100 で、待機中モニタ数が 50 の場合、待機中モニタと実行中モニタの割合が 1:2 になります。

**注:** < SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルで制御される `_maxMonitorsRunning`= 設定のモニタ実行スレッドの初期最大数は 400 です (**master.xml** の標準設定値は 30 です)。

次のグラフは、実行中モニタ数と待機中モニタ数の関係を視覚的に表しています。このグラフは、モニタ数が 100 に設定されている `_maxMonitorsRunning` に基づいています。緑色の領域は、キューのモニタの数が 100 を超えるまでは、要求されたすべてのモニタを SiteScope で実行できることを表しています。このレベルでは、実行がスケジュールされている追加モニタの状態が [Monitor Waiting] になります。赤色の領域は、待機中モニタ数が実行中モニタ数の 2 倍以上になっていることを表しています。これは、SiteScope モニタ設定がサーバおよびネットワークの容量に対してうまく調整できていないことを示しています。



待機中モニタ数が多すぎる状態が継続する場合、次のモニタ設定を調整できます。

- ・ **頻度** : これは、すべてのモニタ・タイプの基本的なスケジュール・パラメータです。短い間隔で多数のモニタが実行（または更新）されるように設定されていることがよくあります。最小更新間隔は 15 秒です。さまざまなシステム要因によって、一部のモニタ・アクションで完了時間が 15 秒より長くなる場合があります。たとえば、Web トランザクション、データベース・クエリ、リモート・サーバへのログオン、正規表現の照合でモニタの完了が遅延する可能性があります。[「モニタ・サマリ・レポート」\(1352ページ\)](#)を使用して、モニタ・グループの**【頻度】**設定を確認し、一部のモニタの値を増やすことを検討してください。
- ・ **エラーの検証** : このオプションを定期的または頻繁に使用すると、該当の SiteScope モニタでエラー状態が検出されるたびにモニタ実行のキューが急激に増加します。このオプションにはその目的がありますが、すべてのモニタに標準設定で使用しないでください。[「モニタ・サマリ・レポート」\(1352ページ\)](#)を使用して、**【エラーを検証】**設定が有効になっている可能性のあるモニタを表示します。

SiteScope サーバのパフォーマンス・データの詳細については、[「【実行中のモニタ数】ページ」\(1173ページ\)](#)を参照してください。

# タスク

SiteScope ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバ統計を分析する方法  
このタスクでは、SiteScope サーバ統計とログ・ファイルを分析する手順について説明します。

1. 前提条件
- サーバ統計コンテキストにアクセスするには、SiteScope の管理者、または**サーバ統計の表示**権限を付与されたユーザ（この設定は標準設定で選択されている）でなければなりません。  
ユーザ権限の詳細については、「[権限](#)」(757ページ)を参照してください。
2. SiteScope サーバ統計の表示
- 【サーバ統計】コンテキストでは、SiteScope サーバの負荷、実行中および最近実行したモニタのリスト、perfex プロセス・プール、WMI、SSH 接続、Telnet 接続、およびダイナミック・モニタリング統計を表示できます。  
ユーザ・インタフェースの詳細については、下記を参照してください。
3. SiteScope ログ・ファイルの表示
- 【サーバ統計】コンテキストの【ログ ファイル】ページで、さまざまな SiteScope ログ・ファイルを表示できます。  
ユーザ・インタフェースの詳細については、「[ログ ファイル](#)」ページ」(1163ページ)を参照してください。

## [ダイナミック モニタリング] ページ

このページには、ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用してダイナミック・モニタリングのカウンタとしきい値を自動的に更新するときに統計が表示されます。これは、ダイナミック・モニタリングのパフォーマンスの表示と問題分析に役立ちます。

アクセス方法	【サーバ統計】コンテキスト>【ダイナミック モニタリング】を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>管理者、または「<b>サーバ統計の表示</b>」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、「<a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a>」(744ページ)を参照してください。</li><li>この情報は【モニタ】コンテキストからも使用できます（【Health】フォルダを展開して【ダイナミック モニタリング統計】をクリックします）。</li></ul>
関連タスク	「 <a href="#">SiteScope ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバ統計を分析する方法</a> 」(1159ページ)
関連情報	「 <a href="#">SiteScope サーバ統計</a> 」(1153ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

パラメータ	詳細
<b>定義:</b> <b>*ダイナミック・タスク:</b> サーバからカウンタを取得し、モニタに定義されたパターンに一致するカウンタをその中から見つけ出すという定期的なアクション。 <b>**カウンタ・ファイル:</b> カウンタは <SiteScope のルート・ディレクトリ>\templates.application フォルダの下に配置される xml ファイルに保存されます。	
<b>最後の 10 分間の平均タスク待機時間 (ミリ秒)</b>	最後の 10 分間にタスクを受け取ったときからダイナミック・タスク*の実行を開始するためにかかった平均時間 (ミリ秒)。
<b>平均タスク待機時間 (ミリ秒)</b>	タスクを受け取ったときからダイナミック・タスク*の実行を開始するためにかかった平均時間 (ミリ秒)。
<b>最後の 10 分間の平均タスク実行時間 (ミリ秒)</b>	最後の 10 分間にダイナミック・タスク*の実行を開始するためにかかった平均時間 (ミリ秒)。
<b>平均タスク実行時間 (ミリ秒)</b>	ダイナミック・タスク*の実行を開始するためにかかった平均時間 (ミリ秒)。
<b>最後の 10 分間に保存されていないカウンタ・ファイル数</b>	最後の 10 分間に既存のカウンタ・ファイル** を削除、または新しいカウンタ・ファイル保存できない回数。 .
<b>最後 10 分間のダイナミック・モニタリング・フレームワークと同時実行のユーザ変更の間のクラッシュの数</b>	最後の 10 分間に、(ユーザ変更をオーバーライドしないように) ユーザが同時実行の変更を実行した結果としてダイナミック・モニタリング・フレームワークの変更を保存できない回数。
<b>最後の 10 分間にカウンタのマッチングの最大数を越えた回数</b>	最後の 10 分間にサーバからパターン用のカウンタのマッチングが限度を越えた回数。
<b>最後の 10 分間にファイルからカウンタを抽出できない回数</b>	最後の 10 分間にカウンタ・ファイル** からカウンタを抽出できない回数。
<b>最後の 10 分間に変更を保存できない回数</b>	最後の 10 分間に永続 SiteScope にカウンタ変更を保存できない回数。
<b>最後 10 分間にリソース消耗のためにダイナミック・タスク</b>	最後の 10 分間に、最大ダイナミック・モニタリング・フレームワークしきい値プールとキュー・サイズの限界に達したためダイ

パラメータ	詳細
クを実行できない回数	ナミック・タスク*を実行できない回数。  [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [ダイナミック モニタリング設定] でこれらの設定を実行できます。詳細については、「 <a href="#">インフラストラクチャ・プリファレンス</a> 」(622ページ)を参照してください。
最後の 10 分間にサーバからカウンタを検索できない回数	最後の 10 分間にサーバからカウンタを検索できない回数。
最後の 10 分間にサーバからのカウンタをマッチングできなかった回数	最後の 10 分間にサーバからパターン用のカウンタをマッチングできなかった回数。
未保存カウンタ・ファイルの総数	既存のカウンタ・ファイルを削除、または新しいカウンタ・ファイルを保存できない総回数。
ダイナミック・モニタリング・フレームワークと同時実行のユーザ変更の間のクラッシュの総数	(ユーザ変更をオーバーライドしないように) ユーザが同時実行の変更を実行した結果としてダイナミック・モニタリング・フレームワークの変更を保存できない総回数。
カウンタのマッチングの最大数を超えた総回数	サーバからパターン用のカウンタのマッチングが限度を超えた回数。
ファイルからカウンタを抽出できない総回数	カウンタ・ファイル** からカウンタを抽出できない総回数。
変更を保存できない総回数	永続 SiteScope へカウンタ変更を保存できない総回数。
リソース消耗のためにダイナミック・タスクを実行できない総回数	最大ダイナミック・モニタリング・フレームワークしきい値プールとキュー・サイズの限界に達したためダイナミック・タスク*を実行できない総回数。  [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [ダイナミック モニタリング設定] でこれらの設定を実行できます。詳細については、「 <a href="#">インフラストラクチャ・プリファレンス</a> 」(622ページ)を参照してください。
サーバからカウンタを検索できない総回数	サーバからカウンタを検索できない総回数。

パラメータ	詳細
サーバからのカウンタをマッチングできなかった総回数	サーバからパターン用のカウンタをマッチングできなかった総回数。

## 〔一般〕 ページ

このページでは、現在実行中のモニタ数、実行中モニタの最大数、待機中のモニタ数、1分あたりのモニタ実行数など、主要な SiteScope サーバ・パフォーマンス統計の概要を表示できます。現在実行中のモニタ・タイプのリスト、タイプごとの実行中インスタンス数も表示されます。

アクセス方法	〔サーバ統計〕 コンテキスト > 〔一般〕 を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「 <a href="#">サーバ統計の表示</a> 」権限を付与されたユーザのみが、各モニタ・パフォーマンス・データ・ページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、「 <a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a> 」(744ページ)を参照してください。
関連タスク	<a href="#">「SiteScope ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバ統計を分析する方法」</a> (1159ページ)
関連情報	<a href="#">「SiteScope サーバ統計」</a> (1153ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
全体統計	
実行中モニタ数	<p>〔現在〕列:更新頻度またはスケジュールに基づいて実行キューに入っており、現在実行中のスレッドを持つモニタ数が表示されます。つまり、これらのモニタは実行中であることを示します。</p> <p>〔最大数〕列と〔次で測定〕列:実行されたモニタの最大数と、いつ実行されたかが表示されます。</p>
待機中モニタ数	<p>〔現在〕列:更新頻度またはスケジュールに基づいて実行キューに入っており、現在実行待機中のスレッドを持つモニタ数が表示されます。つまり、これらのモニタは実行中ではないことを示します。</p> <p>〔最大数〕列と〔次で測定〕列:いずれかの時点で発生した待機中モニタの最大数と、いつ発生したかが表示されます。</p>

UI 要素	詳細
実行モニタ数/秒	<p>【現在】列 :最後の 10 分間の監視における平均が周期的に表示され、モニタが実行される速度（1 分あたり）が追跡されます。</p> <p>【最大数】列と【次で測定】列 :1 分あたりの実行中モニタの最大数と、いつ実行されたかが表示されます。</p>
タイプごとの実行中モニタ数	
<実行中のモニタ・リスト>	現在実行中のモニタ・タイプのリストと、タイプごとの実行中インスタンス数が表示されます。


## [ログ ファイル] ページ

このページでは、SiteScope ログ・ファイルを調査できます。

アクセス方法	【サーバ統計】 コンテキスト > 【ログ ファイル】 を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>SiteScope ログ・ファイルでは Unicode 文字はサポートされません。英語以外の文字はログで文字化けします。回避策として、対応する OS のロケールにインストールされた SiteScope サーバを使用します。たとえば、日本語ロケールの場合は日本語版の Windows OS にインストールされた SiteScope を使用します。</li><li>特定のモニタ専用のログを作成する方法については、<a href="#">「ログ設定」(322ページ)</a>を参照してください。すべてのモニタのセパレート・モニタ・ログ記録を無効にする方法については、<a href="#">「モニタのセパレート・ログを無効化」(714ページ)</a>を参照してください。</li></ul>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"><li><a href="#">「SiteScope ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバ統計を分析する方法」(1159ページ)</a></li><li><a href="#">「監査ログの設定方法」(1184ページ)</a></li></ul>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li><a href="#">「SiteScope ログ・ファイル」(1154ページ)</a></li><li><a href="#">「モニタ固有のログ列の内容」(1185ページ)</a></li><li><a href="#">「監査ログのエントリ」(1179ページ)</a></li><li><a href="#">「SiteScope 状況マップとパフォーマンス統計情報ログ」(1226ページ)</a></li></ul>

## 「ログ ファイル」 テーブル

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	列タイトルの矢印をクリックして列の並べ替え順序を変更します。並べ替え順序を示す矢印の左側に小さい上向き矢印と下向き矢印が表示されます。 <b>注：</b> 「 <b>タイプ</b> 」列のタイトルの矢印をクリックすると、ログ・タイプのリストが開き、表示するログ・タイプでリストをフィルタできます。フィルタをクリアするには、矢印をもう一度クリックして「 <b>(すべて)</b> 」を選択します。
<b>タイプ</b>	ログ・ファイルのタイプ。ログ・ファイルの各種タイプの詳細については、「 <a href="#">ログ・ファイルのタイプ</a> 」(1164ページ)を参照してください。
<b>ログ・ファイル</b>	ログ・ファイルの名前。ログ・ファイルのリンクをダブルクリックすると、Web ブラウザでファイルが開きます。
<b>サイズ</b>	ログ・ファイルのサイズ。
<b>最終更新日</b>	ログ・ファイルが最後に変更された日時。

## ログ・ファイルのタイプ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>監査ログ</b>	ユーザ・インタフェースから実行されたすべての設定変更操作（モニタ、テンプレート、警告の作成など）が格納されたログ。監査ログの詳細については、「 <a href="#">監査ログ・ファイル</a> 」(1178ページ)を参照してください。
<b>BSM 統合ログ</b>	BSM にレポートするように SiteScope が設定されている場合、接続および監視データの転送に関する情報が含まれています。このログは、<SiteScope のルート>\logs\bac_integration フォルダに格納されます。 <ul style="list-style-type: none"><li>• <b>bac_integration.log</b> : BSM 統合フレームワークによって登録されたすべてのメッセージが格納されます。</li><li>• <b>bac_integration_tools.log</b> : SiteScope を再起動するたびに BSM 統</li></ul>



UI 要素	詳細
	<p>合の一貫性をチェックするツールによって生成されたメッセージが格納されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>discovery.log</b> : トポロジ・レポート・モジュールによって生成されたメッセージが格納されます。</li> <li>• <b>eti_resolver.log</b> : 状況インジケータをメトリック（カウンタ）・マッピングに解決する処理を実行するモジュールによって生成されたメッセージが格納されます。</li> <li>• <b>quota_control.log</b> : 現時点では使用されていません。</li> </ul>
日次ログ	<p>個々のモニタ測定値が含まれているログへのリンクがあります。SiteScope によって新規モニタ・ログが毎日作成され、24 時間以内に実行されたすべてのモニタが記録されます。これらのログは、SiteScope レポートのベースになります。</p> <p>日次ログは次の形式になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• SiteScope&lt;YYYY_MM_DD&gt;.v2.log このログには、従来のログより詳細なモニタ実行結果が含まれています。</li> <li>• SiteScope&lt;YYYY_MM_DD&gt;.log 従来の日次ログ・ファイル。</li> </ul> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• モニタの環境によっては、モニタ・ログのサイズが非常に大きくなることがあります。サイズが大きくなると、Web ブラウザを使用して表示することが実質的にできなくなります。</li> <li>• 標準設定では、両方のタイプの日次ログ・ファイルが生成されます。ベースライン設定を使用しない場合は、<b>&lt; SiteScope のルート &gt; \groups\master.config</b> ファイルのプロパティ <b>_shouldLogToLegacyDailyLog=</b> を <b>false</b> に設定して、従来の日次ログを無効にすることをお勧めします。</li> <li>• 両方のタイプの日次ログ・ファイルへのログ記録を無効にするには、<b>&lt; SiteScope のルート &gt; \groups\master.config</b> ファイルのプロパティ <b>_dailySiteScopeLogs=true</b> を <b>_dailySiteScopeLogs=</b> に変更します。無効にされると、<b>SiteScope.log</b> という名前のログ・ファイルが代わりに作成され、毎日更新されます。これは、SiteScope レポートのモニタ実行の結果の履歴データがないということを意味します。（日次ログ・ファイルについては、<b>［プリファレンス］ &gt; ［ログ プリファレンス］</b> の <b>［日次ログ保存日数］</b> 設定で、監視データを保存しておくログ・ファイル数を決めることができます。SiteScope では、1 日に 1 回、保持するよう指定した数を超えて作成されたログを削除します。</li> </ul>

UI 要素	詳細
エラー・ログ	<p>SiteScope の操作に関連するさまざまなメッセージが含まれています。このメッセージには、モニタ・アクションやデータ通信アクションの実行時に SiteScope で発生した可能性のあるエラーの記録が含まれます。また、いつ SiteScope が停止または開始されたか、およびタスクを完了できないことが原因でスキップしているモニタがあるかどうかを示すメッセージも含まれます。このログ・ファイルはすべてのメッセージの標準設定ログ・ファイルです。専用のログ・ファイルに出力されなかったメッセージはすべて、このログ・ファイルに出力されます。</p> <p>現在のエラー・ログの名前は <b>error.log</b> です。現在のエラー・ログが上限サイズに達すると、ログが閉じて新しいログが作成されます。古いログの名前は、error.log.1, error.log.2（以下同様）のようになります。名前に連結される数値が高いほど、古いログになります。</p>
実行モニタ・ログ	<p>モニタの管理に関連する特定のモニタの実行やアクションの情報が含まれています。これは、モニタのトラブルシューティングに役立ちます。</p>
<b>その他のログ</b> 次のようなさまざまなログ・ファイル・タイプがあります。	
<b>alert.log</b>	<p>SiteScope で警告が生成されるたびに警告情報が記録されます。これは、警告アクションのトラブルシューティングや、警告が送信されたかどうかの確認に使用できます。</p>
<b>amazon_ec2_integration.log</b>	<p>Amazon EC2 統合ログ（統合が定義されていない場合は空）に関する情報が格納されます。</p>
<b>baselining.log</b>	<p>ベースラインしきい値の計算時に生成されたエラー・メッセージと情報メッセージが格納されます。</p>
<b>data_integration.log</b>	<p>汎用データ統合のメッセージが格納されます（統合が定義されていない場合は空）。</p>
<b>downtime.log</b>	<p>BSM CI ダウンタイム機能によって無効化されたモニタによって生成されたメッセージが格納されます。</p>
<b>dynamic_monitoring_changes.log</b>	<p>すべてのダイナミック・モニタのスケジュールされたアクションが格納されます。</p>

UI 要素	詳細
<b>event_console_history.log</b>	イベント・コンソールの警告アクションからトリガされた、すべての終了した（非アクティブな）イベントのメッセージが格納されます。メッセージがこのログに書き込まれるタイミングの詳細については、 <a href="#">「履歴イベント・ログ・ファイル」 (1106ページ)</a> を参照してください。
<b>event_console_ui.log</b>	イベント・コンソールに表示されたイベント・コンソールの警告アクションからトリガされたイベントのメッセージが格納されます。
<b>ha.log</b>	SiteScope Failover Manager の共有ディスク・ソリューション（SiteScope 11.20 以降廃止）によって生成されたメッセージが格納されます。
<b>health_map.log</b>	SiteScope パフォーマンスのサマリ・ステータスが格納されます。サマリ・ステータスには、次の各パフォーマンス・メトリックが含まれます。実行中モニタ数、待機中モニタ数（モニタ・キューのサイズ）、モニタの平均実行時間（モニタ・タイプ別）、現在オープンされている SSH の数。詳細については、 <a href="#">「SiteScope 状況マップとパフォーマンス統計情報ログ」 (1226ページ)</a> を参照してください。
<b>high_availability.log</b>	SiteScope Failover のミラー化操作中に生成されたメッセージが格納されます。
<b>HPSiteScopeOperationsManagerIntegration.log</b>	HP Operation Manager Agent とのイベント統合のシステム・ログ。
<b>HPSiteScopeOperationsManagerIntegration.HA.log</b>	SiteScope Failover 設定の HP Operation Manager Agent とのイベント統合のシステム・ログ。
<b>monitorCount.log</b>	SiteScope で使用されているモニタおよびライセンス・インスタンスの総数が計測されます。また、各タイプのサーバの状況モニタの数やライセンスの使用状況も示されます。このログは、SiteScope が起動したとき、1 日に 1 回更新されます（変更ごとに更新はされません）。このログ・ファイルは、 <a href="#">[ヘルプ] &gt; [SiteScope のバージョン情報]</a> を選択していつでも更新できます。
<b>mirror.log</b>	SiteScope Failover によって生成されたメッセージと初期設定情報が格納されます。
<b>oa_metric_integration.log</b>	HP Operations Agent との統合に関連する情報が格納されます。

UI 要素	詳細
<b>Operator.log</b>	SiteScope オペレータのアクション（主に確認機能の使用に関する情報）を記録するために使用する任意指定のログ・ファイル。このログは、1 つ以上のモニタに確認応答が追加された場合に作成されます。
<b>ログ・ファイルの送信</b>	作成された SiteScope サーバへの HTTP Post 要求を記録するために使用する任意指定のログ・ファイル。このファイルを使用して、実行された管理アクションを追跡できます。このログは、 <code>_postLogFile=true</code> 設定が <b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\groups\master.config</b> ファイルに存在している場合にのみ有効になります。
<b>remotes_multi_test</b>	複数のリモートについてテストを行った場合に、リモート・サーバ接続のテスト結果を表示します。
<b>request_statistics.log</b>	Tomcat 要求統計情報フィルタを表示します。
<b>server_statistics.log</b>	使用中のメモリとシステム・リソースに関する情報が格納されます。
<b>server_statistics_raw.log</b>	ログ・レベルが DEBUG に変更されると、このファイルに、使用中のプロセス・プールと perfex プールに関する詳細な情報が格納されます。
<b>silent_deployment.log</b>	<p>送信されたサイレント・デプロイメントの要求の詳細と対応するデプロイメントの結果が記録されます。また、失敗したサイレント・デプロイメントのエラー・メッセージも含まれます。このログは、SiteScope が起動したとき、1 日に 1 回更新されます（変更ごとに更新はされません）。</p> <p><b>注：</b> CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイする場合、CSV ファイルで使用している英語以外の文字は、silent_deployment ログ・ファイルではサポートされません。正しいエンコーディング・オプションが選択されている場合、デプロイメント値はユーザ・インタフェースに正しく表示されます。</p>
<b>SiteScope_&lt;グループ&gt;_&lt;モニタ名&gt;.log</b>	<b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\logs\monitor_runs</b> フォルダにある選択したモニタ・インスタンスのログ・データが格納されます。このフォルダには、モニタ・インスタンスごとに 1 つのファイルが格納されます。ログ・ファイル名の形式は、次のように、

UI 要素	詳細
	SiteScope ツリーのモニタ・パスに応じて決まります :SiteScope_<グループ>_<モニタ名>.log  このログは、モニタのセパレート・ログ記録が有効化されているときに、モニタを起動すると有効になります。モニタのセパレート・ログ記録を有効にする方法については、 <a href="#">「ログ設定」(322ページ)</a> を参照してください。
skip_monitor.log	スキップされたモニタ実行に関する情報が格納されます。スキップが発生するたびに、スキップの日時、モニタの名前（および ID）、サーバ名、スキップ数、モニタの状態（モニタが無効になっていたかどうか）が含まれる行が追加されます。
template_persistence_upgrade.log	テンプレートを永続保存先にインポートする際に発生したメッセージが格納されます。
upgrade.log	アップグレーダの使用中に発生したメッセージが格納されます。

## [Perfex プロセス プール] ページ

このページには、プロセス・マネージャ・サマリ、perfex プールごとのプール統計と状態が表示されます。perfex は、イベント・カウンタの処理に使用されるコマンド・ライン・インタフェースです。perfex は、指定されたコマンドの完了後に、さまざまなハードウェア・パフォーマンス・カウンタの値を出力します。perfex\_dispatcher は、Microsoft Windows リソース・モニタに使用されるプロセスです。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [Perfex プロセス プール] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>管理者、または「<b>サーバ統計の表示</b>」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、<a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」(744ページ)</a>を参照してください。</li><li>負荷容量の低い環境では、&lt;SiteScope root&gt;\groups\master.config ファイルの _internalKillProcessOnTimeout プロパティの値を「=true」に設定する必要があります。ただし、このパラメータを使用する際には、まず、HP サポートにお問い合わせください。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「SiteScope ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバ統計を分析する方法」(1159ページ)</a>

関連情報	<a href="#">「SiteScope サーバ統計」(1153ページ)</a>
------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>プロセス・マネージャ・サマリ</b>	
<b>分あたりの呼び出し数</b>	SiteScope サーバで 1 分あたりに発生するプロセス呼び出し数。
<b>二重の失敗</b>	SiteScope が 2 回連続してリモート・サーバへの接続を試みた後に接続に失敗した回数。接続の失敗の詳細については、モニタの実行ログとエラー・ログを確認してください。
<b>停止したプロセス</b>	SiteScope が最後に再起動してから、エラーが原因で停止したプロセスの数（プロセスがタイムアウトした場合など）。
<b>生成したプロセス</b>	SiteScope が最後に再起動してから、すべてのプールについて生成したプロセスの数。生成したプロセスと停止したプロセスの数が多い場合、 <b>[プリファレンス] &gt; [インフラストラクチャ プリファレンス] &gt; [一般設定] &gt; [perfex タイムアウト (秒)]</b> で perfex タイムアウト値を増やします。
<b>クリーン済みプロセス</b>	SiteScope は、最大アイドル時間を超えたプロセスを除去します。標準設定で、アイドル・プロセスは 10 分経過すると除去されます。アイドル・プロセスの最大時間は、 <b>[プリファレンス] &gt; [インフラストラクチャ プリファレンス] &gt; [一般設定] &gt; [perfex プロセスの最大アイドル時間 (分)]</b> で変更できます。クリーニング・プロセスにより、SiteScope マシンのメモリ・フットプリントが改善されます。プロセスの除去が特に重要なのは、ネットワーク速度が低下して perfex の終了までに時間がかかる場合です。この場合、結果的により多くの perfex が作成されますが、それらは使用されません。
<b>プール統計 - perfex/perfex_dispatcher</b>	
<b>プロセス・プール・キューの長さ</b>	利用可能な perfex の現在待機中のモニタ数。この値は、perfex で実行中のモニタ数が多すぎる、または perfex プールが小さすぎることを示す場合があります。
<b>空きプロセスの平均待機時間 (ミリ秒)</b>	プロセスが利用可能になるまでの平均待機時間（ミリ秒単位）。この値が 30,000 ミリ秒（30 秒）を超えると、それ以降のモニタが失敗します。平均待機時間が長い場合は、プールのプロセス数を増やす必要があることを示します。
	perfex の実行にかかる平均時間（ミリ秒単位）。ここでは、次を示します。

UI 要素	詳細
平均実行時間 (ミリ秒)	<ul style="list-style-type: none"><li>ネットワーク速度。要求を送信し、サーバから応答を受信するのにかかる時間。</li><li>perfex の可用性。実行を完了し、perfex をプールに戻すまでにかかる平均時間。</li><li>perfex を使用しているモニタ数。</li></ul>
アイドル・プロセス	現在アイドル状態のプロセスの数。
使用中プロセス	現在使用中状態のプロセスの数。
プロセス合計	プロセスの総数 (アイドル・プロセスと使用中プロセスの合計)。
プロセス・プールの最大サイズ	プロセス・プールあたりに使用可能な最大プロセス数。標準設定の値は 200。プロセス・プールの最大サイズは、 <b>[インフラストラクチャ プリファレンス]</b> > <b>[一般設定]</b> > <b>[プールあたりの最大プロセス数]</b> で変更できます。
サーバ・タイムアウトを待機するプロセス	呼び出しタイムアウトを過ぎたプロセス、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているプロセス、またはプールに戻るために応答を待機しているプロセスの数。

## [PowerShell プロセス プール] ページ

このページには、Microsoft Exchange Base モニタによって使用される PowerShell プロセス・プールの統計情報テーブルが表示されます。**[プリファレンス]** > **[インフラストラクチャ設定]** > **[一般設定]** の PowerShell プール・パラメータを変更することによって、Microsoft Exchange Base モニタのパフォーマンスを調整できます。

この統計情報は、<SiteScopeのルート・ディレクトリ>\logs\server\_statistics.log でも確認できます。Microsoft Exchange Base モニタを使用すると、このログ・ファイルの PowerShell プールの統計情報行は次のようになります。

[StatisticsLogger] INFO - PoolName=PowerShellPool active processes:1; idle processes:0; total processes:1; max pool size:20; pool utilization:5.00%

アクセス方法	<b>[サーバ統計]</b> コンテキスト > <b>[PowerShell プロセス プール]</b> を選択します。
重要な情報	管理者、または「 <b>サーバ統計の表示</b> 」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細につ



	いては、 <a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」 (744ページ)</a> を参照してください。
関連タスク	<a href="#">「SiteScope ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバ統計を分析する方法」 (1159ページ)</a>
関連情報	<a href="#">「SiteScope サーバ統計」 (1153ページ)</a> <a href="#">「インフラストラクチャ・プリファレンス」 (622ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>PowerShell プール統計</b>	
<b>アクティブ・プロセス</b>	<p>現在使用中の PowerShell プロセスの数。</p> <p>標準設定では、PowerShell アクティブ・プロセスの最大数（キーあたり）は 20 です。この値は、<a href="#">[インフラストラクチャ プリファレンス]</a> &gt; <a href="#">[一般設定]</a> &gt; <a href="#">[PowerShell プール:アクティブ プロセスの最大数 (キーあたり)]</a> で変更できます。</p>
<b>アイドル・プロセス</b>	<p>現在は使用されていないが、Microsoft Exchange Server との接続は維持されている PowerShell プロセスの数。</p> <p>標準設定では、アイドル状態の PowerShell プロセスの最大数（キーあたり）は 8 です。この値は、<a href="#">[インフラストラクチャ プリファレンス]</a> &gt; <a href="#">[一般設定]</a> &gt; <a href="#">[PowerShell プール:アイドル プロセスの最大数 (キーあたり)]</a> で変更できます。</p> <p>新規またはアイドルの PowerShell プロセスが利用可能になるまでの最大待機時間は、標準設定では、1000 ミリ秒です。この値は、<a href="#">[インフラストラクチャ プリファレンス]</a> &gt; <a href="#">[一般設定]</a> &gt; <a href="#">[PowerShell プール：新規またはアイドル プロセスが利用可能になるまでの最大待機時間 (ミリ秒)]</a> で変更できます。</p> <p>プール内でアイドル状態のまま一定時間が経過したオブジェクトは退出対象になります。この時間は、標準設定で、最低 5 分です。この値は、<a href="#">[インフラストラクチャ プリファレンス]</a> &gt; <a href="#">[一般設定]</a> &gt; <a href="#">[PowerShell プール：プロセスの最小アイドル時間 (ミリ秒)]</a> で変更することができます。</p> <p>退出スレッドは、標準設定で、15 分ごとにアイドル・オブジェクトがないかチェックします。この値は、<a href="#">[インフラストラクチャ プリファレンス]</a> &gt; <a href="#">[一般設定]</a> &gt; <a href="#">[PowerShell プール：プロセスの最小アイドル時間 (ミリ秒)]</a> で変更することができます。</p>
<b>プロセス合計</b>	<p>現在、PowerShell プール内に存在する PowerShell プロセスの総数（アイドル・プロセス数 + アクティブ・プロセス数）。</p>



UI 要素	詳細
PowerShell プールの最大サイズ	プール内に同時に存在することができる PowerShell プロセスの最大数。 標準設定の値は 20。プール内に同時に存在することができる PowerShell プロセスの最大数は、 <a href="#">[インフラストラクチャ プリファレンス]</a> > <a href="#">[一般設定]</a> > <a href="#">[PowerShell プール: プロセスの最大数]</a> で変更できます。
PowerShell プールの使用率 (%)	PowerShell プールの使用率を表すパーセンテージ。

## [実行中のモニタ数] ページ

このページでは、実行中の SiteScope モニタ、最近実行されたモニタ、実行された時刻、実行で返された状態のリストを表示できます。

アクセス方法	<a href="#">[サーバ統計]</a> コンテキスト > <a href="#">[実行中のモニタ数]</a> を選択します。
重要な情報	管理者、または「 <a href="#">サーバ統計の表示</a> 」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、「 <a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a> 」(744ページ)を参照してください。
関連タスク	<a href="#">「SiteScope ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバ統計を分析する方法」</a> (1159ページ)
関連情報	<a href="#">「SiteScope サーバ統計」</a> (1153ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
実行中のモニタ数	
実行時間	現在実行中のモニタの実行時間（秒単位）。
スキップ	現在実行中のモニタのスキップ数。スケジュールされている次の実行時までモニタのアクションが完了しなかった場合、SiteScope モニタはスキップとしてレポートされます。
グループ名	現在実行中のモニタが属するグループ。

UI 要素	詳細
モニタ名	現在実行中の SiteScope モニタの名前。モニタ名リンクをクリックすると、選択したモニタの [ダッシュボード] ページが開きます。実行時間が長引いているモニタやスキップは赤で表示されます。
現在の状態	現在実行中のモニタから返された状態。
最近のモニタの実行	
日付と時刻	モニタが実行された日時。モニタは、実行を完了した日時の新しい順に表示されます。
グループ名	モニタが属するグループ。
モニタ名	SiteScope が実行したモニタの名前。
現在の状態	モニタが返した状態（正常，警告，エラー）と測定値サマリの詳細。

## [SSH 接続] ページ

このページには、リモート UNIX または Windows サーバに接続するためにセキュア・シェル (SSH) を使用する場合、SSH 統計および SSH 接続のサマリが表示されます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [SSH 接続] を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、「 <a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a> 」(744ページ)を参照してください。
関連タスク	<a href="#">「SiteScope ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバ統計を分析する方法」</a> (1159ページ)
関連情報	<a href="#">「SiteScope サーバ統計」</a> (1153ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
SSH 統計	
開いた合計	開いた SSH 接続の総数。この数が [現在割り当て済みのリソース] の数を大き

UI 要素	詳細
	<p>く上回っている場合は、設定の問題を示しています。次を確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 接続キャッシュが無効になった</li> <li>• 不正なログインまたはパスワードが使用された</li> <li>• リモート・サーバ・タイムアウトが短すぎる</li> </ul>
閉じた合計	最後に SiteScope が再起動されてから閉じた SSH 接続の数。
すべてクリーン済み	最後に SiteScope が再起動されてからクリーンした SSH 接続の数。
V1 を開くのに失敗した合計	SSH バージョン 1 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。標準設定では、SiteScope は V2 での接続を試みる前に、V1 を使用して接続を試行します。この数が大きい場合は、問題が発生しているリモート・サーバで <b>SSH バージョン 2 のみを使用</b> オプションを選択することをお勧めします。
V2 を開くのに失敗した合計	SSH バージョン 2 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。この数が大きい場合は、リモート・サーバで正しいログインとパスワードが使用されたこと、リモート・サーバ上の SSH バージョン (V1 または V2) を確認します。
再利用	最後に SiteScope が再起動されてから再利用された SSH 接続の数。
現在割り当て済みのリソース	現在開かれている SSH 接続の数。
現在使用中	現在開かれていて、実行中のモニタで使用されている SSH 接続の数。
最後の 10 分間の平均呼び出し時間	最後の 10 分間の平均 SSH 呼び出し時間。
合計平均呼び出し時間	平均呼び出し時間。
SSH 接続サマリ	
<ホスト名>	<p>各ターゲット・リモート・サーバについて、次の情報を表示する行があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>マシン名</b>。監視対象のリモート・サーバの名前。</li> <li>• <b>使用中セッション数</b>：監視対象のリモート・サーバで開かれている SSH セッション数。</li> <li>• <b>アイドル・セッション数</b>：監視対象のリモート・サーバのアイドル SSH セッ</li> </ul>

UI 要素	詳細
	<p>セッション数。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• <b>最大セッション数</b> : 監視対象のリモート・サーバの SSH セッション（アイドル状態および使用中）の最大数。</li><li>• <b>キューの長さ</b> : キューにある SSH セッション数。</li><li>• <b>平均待機時間</b> : SSH セッションが空くまでの平均待機時間（ミリ秒単位）。</li><li>• <b>最後の 10 分間の平均呼び出し時間</b> : 最後の 10 分間の平均 SSH 呼び出し時間。</li><li>• <b>合計平均呼び出し時間</b> : 平均呼び出し時間の合計。</li></ul> <p>注 : SiteScope で同時に使用できる SSH 接続数は 500 に制限されています。</p>

## [Telnet 接続] ページ

このページには、リモート UNIX または Windows サーバに接続するために telnet を使用する場合、telnet 統計が表示されます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [Telnet 接続] を選択します。
重要な情報	管理者、または「 <a href="#">サーバ統計の表示</a> 」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、「 <a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a> 」(744ページ)を参照してください。
関連タスク	<a href="#">「SiteScope ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバ統計を分析する方法」</a> (1159ページ)
関連情報	<a href="#">「SiteScope サーバ統計」</a> (1153ページ)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

パラメータ	詳細
Telnet 統計	
開いた合計	最後に SiteScope が再起動されてから開いた telnet 接続の数。
閉じた合計	最後に SiteScope が再起動されてから閉じた telnet 接続の数。
再利用	最後に SiteScope が再起動されてから再利用された telnet 接続の数。

パラメータ	詳細
現在割り当て済みのリソース	現在開いている telnet 接続の数。
現在使用中	現在開いていて、実行中のモニタで使用されている telnet 接続の数。
Telnet 接続サマリ	
<ホスト名>	<p>各ターゲット・リモート・サーバについて、次の情報を表示する行があります。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ <b>マシン名</b>。監視対象のリモート・サーバの名前。</li><li>・ <b>使用中セッション数</b>：監視対象のリモート・サーバで開かれている telnet セッション数。</li><li>・ <b>アイドル・セッション数</b>：監視対象のリモート・サーバのアイドル telnet セッション数。</li><li>・ <b>最大セッション数</b>：監視対象のリモート・サーバの telnet セッション（アイドル状態または使用中）の最大数。</li><li>・ <b>キューの長さ</b>：キューにある telnet セッション数。</li><li>・ <b>平均待機時間</b>：telnet セッションが空くまでの平均待機時間（ミリ秒単位）。</li></ul> <p><b>注</b>：SiteScope で同時に使用できる telnet 接続数は 500 に制限されています。</p>

## [WMI 統計] ページ

このページは、Windows Management Instrumentation (WMI) 統計のプロセス・マネージャ・サマリを表示します。WMI を使用して、パフォーマンス・ライブラリのオブジェクトのシステム・カウンタ・データにアクセスできます。これは、Perfmon ユーティリティに表示されるパフォーマンス・データと同じデータです。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [WMI 統計] を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、「 <a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a> 」(744ページ)を参照してください。
関連タスク	<a href="#">「SiteScope ユーザ・インタフェースから SiteScope サーバ統計を分析する方法」</a> (1159ページ)

関連情報	<a href="#">「SiteScope サーバ統計」(1153ページ)</a>
------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
プロセス・マネージャ・サマリ	
分あたりの呼び出し数	SiteScope サーバで 1 分あたりに発生するプロセス呼び出し数。
二重の失敗	SiteScope が 2 回連続してリモート・サーバへの接続を試みた後に接続に失敗した回数。接続の失敗の詳細については、モニタの実行ログとエラー・ログを確認してください。
停止したプロセス	SiteScope が最後に再起動してから、エラーが原因で停止したプロセスの数（プロセスがタイムアウトした場合など）。
生成したプロセス	SiteScope が最後に再起動してから、すべてのプールについて生成したプロセスの数。生成したプロセスと停止したプロセスの数が多い場合、 <a href="#">[プリファレンス]</a> > <a href="#">[インフラストラクチャ プリファレンス]</a> > <a href="#">[一般設定]</a> > <a href="#">[perfex タイムアウト (秒)]</a> で perfex タイムアウト値を増やします。
クリーン済みプロセス	SiteScope は、最大アイドル時間を超えたプロセスを除去します。標準設定で、アイドル・プロセスは 10 分経過すると除去されます。アイドル・プロセスの最大時間は、 <a href="#">[プリファレンス]</a> > <a href="#">[インフラストラクチャ プリファレンス]</a> > <a href="#">[一般設定]</a> > <a href="#">[perfex プロセスの最大アイドル時間 (分)]</a> で変更できます。クリーニング・プロセスにより、SiteScope マシンのメモリ・フットプリントが改善されます。プロセスの除去が特に重要なのは、ネットワーク速度が低下して perfex の終了までに時間がかかる場合です。この場合、結果的により多くの perfex が作成されますが、それらは使用されません。
サーバ・タイムアウトを待機するプロセス	呼び出しタイムアウトを過ぎたプロセス、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているプロセス、またはプールに戻るために応答を待機しているプロセスの数。

## 監査ログ・ファイル

SiteScope の監査ログには、SiteScope で実行されたアクション、実行時間、実行ユーザが記録されています。また、ユーザが SiteScope 設定に対して行った変更の詳細も記録されています。変更が行われるたびに、該当する箇所に対して変更前後の値が表示されます。さらに、監査されたエンティティの完全パスも一覧で表示されます。

## アクセス方法

現在の監査ログに、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\audit.logまたは SiteScope アプリケーションからアクセスできます。監査ログの表示の詳細については、「[\[ログファイル\] ページ](#)」(1163ページ)を参照してください。

## 学習事項

### 監査ログ・ファイルの概要

監査ログには、新規ユーザ・インタフェースで実行された設定変更が記録されています。次の項目があります。モニタ、グループ、テンプレート、警告、レポートなどの作成 / 更新 / コピー / 削除。ユーザのログイン / ログアウト、ユーザ・パスワードの変更、プリファレンス設定の変更、手動で実行されたモニタに対しても、エントリが作成されます。監査ログには、レポート・タイプ、ターゲット、レポートを生成したユーザといった詳細も含まれているため、ユーザは SiteScope レポートの生成時にユーザがパフォーマンスの問題を特定できます。

それぞれの操作が実行されると、監査ログにエントリが作成されます。複数の手順が実行される操作には、通常 start および end エントリ行が含まれています。

#### 例：

```
2011-11-10 08:04:41 - User:SiteScope Administrator.Operation performed:UPDATE Monitor  
'SiteScope\autosanity\cpu' start:
```

```
2011-11-08 14:43:56 - User:SiteScope Administrator.Operation performed:Monitor  
'SiteScope\autosanity\cpu' update:'_alertDisabled' updated from '-1' to ''.
```

```
2011-11-08 14:43:56 - User:SiteScope Administrator.Operation performed:UPDATE Monitor  
'SiteScope\autosanity' end.
```

現在の監査ログの名前は audit.log です。現在の監査ログがそのサイズ制限に達すると、監査ログが閉じて新しいログが作成されます。古いログの名前は、audit.log.1, audit.log.2 のようになります（以下同様）。名前に連結される数値が高いほど、古いログになります。保持するバックアップ監査ログのサイズ制限と最大数の設定の詳細については、「[監査ログの設定方法](#)」(1184ページ)を参照してください。

モニタ・ツリーで実行される大部分の操作は、監査ログに記録されます。監査ログ・エントリの詳細については、「[監査ログのエントリ](#)」(1179ページ)を参照してください。

監査ログに記録されない操作のリストについては、「[ヒント / トラブルシューティング](#)」(1185ページ)を参照してください。

### 監査ログのエントリ

監査ログの各行には、SiteScope で実行された操作が記述されます。複数の手順が実行される操作には、通常 start および end エントリ行が含まれています。

監査ログには、SiteScope で実行した次の変更に対するアクションの記録のリストが表示されます。

変更したエンティティ	監査ログに記録されたアクション
グループ / モニタ / テンプレート・エンティティ	<ul style="list-style-type: none"><li>• <b>created in</b> : ユーザがエンティティを作成した場所。</li><li>• <b>update : 'entity' from '&lt;x&gt;' to '&lt;y&gt;'</b> : ユーザが更新したエンティティと、更新前後の各値。</li><li>• <b>deleted from</b> : ユーザがエンティティを削除した場所。</li><li>• <b>copied to</b> : ユーザがエンティティ間で情報をコピーしている。</li><li>• <b>moved to</b> : ユーザがエンティティ間で情報を移動している。</li></ul>
プリファレンス	<ul style="list-style-type: none"><li>• <b>created</b> : ユーザがプリファレンスを作成している。</li><li>• <b>deleted</b> : ユーザがプリファレンスを削除している。</li><li>• <b>update : 'entity' from '&lt;x&gt;' to '&lt;y&gt;'</b> : ユーザが更新したエンティティと、更新前後の各値。</li></ul>
テンプレート	<ul style="list-style-type: none"><li>• <b>DEPLOY template</b> : デプロイしたテンプレート。たとえば、デプロイしたオブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ）。</li><li>• <b>REDEPLOY template</b> : テンプレートが更新された後、デプロイ済みグループ / モニタにパブリッシュされた変更。</li><li>• <b>IMPORT template</b> : 外部ファイルからインポートされたテンプレート設定。</li></ul>

#### 本項の内容

- [「モニタ / グループ / 警告 / レポート / テンプレート / リモート・エンティティに関するアクション記録」 \(1180ページ\)](#)
- [「SiteScope プリファレンスに関するアクション記録」 \(1182ページ\)](#)
- [「監査ログに入力されたその他の SiteScope 操作に関するアクション記録」 \(1183ページ\)](#)

モニタ / グループ / 警告 / レポート / テンプレート / リモート・エンティティに関するアクション記録

監査ログに入力される SiteScope エンティティに対して実行したアクションのリストを、次の表に示します。

エンティティ	アクション
グループ (モニタ / テンプレート・モード)	<ul style="list-style-type: none"><li>• 作成</li><li>• 更新</li></ul>



エンティティ	アクション
	<ul style="list-style-type: none"> <li>削除</li> <li>コピー / 切り取り / 貼り付け</li> <li>テンプレートにコピー (モニタ・モードのみ)</li> <li>グローバル検索と置換 (モニタ・モードのみ)</li> <li>すべての子モニタの手動実行 (モニタ・モードのみ)</li> </ul>
<b>モニタ</b> (モニタ / テンプレート・モード)	<ul style="list-style-type: none"> <li>作成</li> <li>更新</li> <li>削除</li> <li>コピー / テンプレートにコピー (テンプレート・モード)</li> <li>移動 (切り取り / 貼り付け)</li> <li>有効化/無効化</li> <li>手動実行 (モニタ・モードのみ)</li> <li>グローバル検索と置換 (モニタ・モードのみ)</li> </ul>
<b>モニタの確認応答</b> (モニタ・モードのみ)	<ul style="list-style-type: none"> <li>追加</li> <li>編集</li> <li>削除</li> </ul>
<b>テンプレート</b> (テンプレート・モードのみ)	<ul style="list-style-type: none"> <li>作成</li> <li>削除</li> <li>コピー / 切り取り / 貼り付け</li> <li>デプロイ</li> <li>変更の適用</li> <li>ユーザ・インタフェースから、または、&lt; <b>SiteScope</b> のルート・ディレクトリ &gt; \persistence\import フォルダにファイルを置くことによる。</li> <li>含まれるエンティティの更新</li> </ul>
<b>テンプレート変数</b> (テンプレート・モードのみ)	<ul style="list-style-type: none"> <li>作成</li> <li>更新</li> <li>削除</li> <li>コピー / 切り取り / 貼り付け</li> </ul>

エンティティ	アクション
<b>テンプレート・コンテナ</b> (テンプレート・モードのみ)	<ul style="list-style-type: none"> <li>作成</li> <li>更新</li> <li>削除</li> <li>コピー / 切り取り / 貼り付け</li> </ul>
<b>警告</b> (モニタ / テンプレート・モード)	<ul style="list-style-type: none"> <li>作成</li> <li>更新</li> <li>削除</li> <li>コピー / 切り取り / 貼り付け</li> <li>有効化/無効化 (モニタ・モードのみ)</li> <li>グローバル検索と置換 (モニタ・モードのみ)</li> </ul>
<b>警告アクション</b> (モニタ / テンプレート・モード)	<ul style="list-style-type: none"> <li>作成</li> <li>更新</li> <li>削除</li> <li>コピー</li> <li>グローバル検索と置換 (モニタ・モードのみ)</li> </ul>
<b>レポート</b> (モニタ・モードのみ)	<ul style="list-style-type: none"> <li>作成</li> <li>更新</li> <li>削除</li> <li>コピー</li> <li>グローバル検索と置換</li> </ul>
<b>リモート・サーバ</b> (リモート・サーバ / テンプレート・モード)	<ul style="list-style-type: none"> <li>作成</li> <li>更新</li> <li>削除</li> <li>コピー / 切り取り / 貼り付け</li> </ul>

#### SiteScope プリファレンスに関するアクション記録

監査ログに入力される SiteScope プリファレンスに対して実行したアクションのリストを、次の表に示します。

プリファレンス	アクション
一般プリファレンス	更新
インフラストラクチャ・プリファレンス	更新
ログ・プリファレンス	更新
電子メール / ページャ / SNMP / 共通イベント・マッピング (標準設定)	更新
電子メール / ページャ / SNMP / 共通イベント・マッピング (インスタンス)	<ul style="list-style-type: none"><li>作成</li><li>更新</li><li>削除</li></ul>
スケジュール・プリファレンス	<ul style="list-style-type: none"><li>作成</li><li>更新</li><li>削除</li></ul>
ユーザ管理プリファレンス	<ul style="list-style-type: none"><li>作成</li><li>更新</li><li>削除</li></ul>
資格情報のプリファレンス	<ul style="list-style-type: none"><li>作成</li><li>更新</li><li>削除</li></ul>
タグの検索/フィルタ	<ul style="list-style-type: none"><li>作成</li><li>更新</li><li>削除</li></ul>
証明書管理	<ul style="list-style-type: none"><li>作成</li><li>削除</li></ul>

監査ログに入力されたその他の SiteScope 操作に関するアクション記録  
監査ログに記録されるその他の SiteScope 操作のリストを、次の表に示します。

その他	アクション
ダウンタイム	<ul style="list-style-type: none"><li>追加</li><li>更新</li><li>削除</li></ul>
状況のログ記録	<ul style="list-style-type: none"><li>有効化</li><li>無効化</li></ul>
BSM 統合	<ul style="list-style-type: none"><li>登録</li><li>登録解除</li></ul>
認証	<ul style="list-style-type: none"><li>ログイン</li><li>ログアウト</li></ul>
ライセンス	<ul style="list-style-type: none"><li>インポート</li><li>削除</li></ul>
外部ファイル	インポート

## タスク

### 監査ログの設定方法

このタスクでは、監査ログの最大サイズを設定する手順について説明します。

1. <SiteScope のルート・ディレクトリ> \conf\core\Tools\log4j\PlainJava\ ディレクトリにある **log4j.properties** ファイルを開きます。
2. **MaxFileSize** にログの最大行数を設定します。
3. **MaxBackupIndex** に、保持しているバックアップ監査ログが何個に達したら最も古い監査ログを削除するのか、最大数を設定します。

**例：**MaxBackupIndex が 5 の場合、保持するバックアップ監査ログは最大 5 個です。5 個のバックアップ・ログ・ファイルが存在する場合、現在の audit.log ファイルが **MaxFileSize** サイズに達すると、audit.log.5 が削除され、audit.log.4 が audit.log.5 に、audit.log.3 が audit.log.4 というように名前が変更されます。現在の audit.log の名前が audit.log.1 に変更されて、新しい audit.log が作成されます。

## ヒント / トラブルシューティング

### 一般的な注意事項 / 制限事項

- 監査ログのエントリは、英語でのみ作成できます。これは、SiteScope の表示言語に関係なく、監査ログのエントリの表示も英語のみであることを意味しています。
- SiteScope オブジェクトにテンプレートの変更が適用されると、監査ログには更新されたオブジェクトが記録されます。ただし、変更前後の値は表示されません。
- ダウンタイムを変更すると監査ログに記録されますが、変更前後の値は記録されません。
- SOAP メソッドを使用して設定が変更された場合、監査は拡張されません。

## モニタ固有のログ列の内容

各ログ・エントリの第 7 列以降、各列の内容はモニタ・タイプに応じて変化します。指示したモニタ・タイプのモニタ結果に書き込まれるデータを、次の表に示します。

### Apache モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	カウンタ 1 の値
8	カウンタ 2 の値
9	カウンタ 3 の値
10	カウンタ 4 の値
11	カウンタ 5 の値

列	列のデータ
12	カウンタ 6 の値
13	カウンタ 7 の値
14	カウンタ 8 の値
15	カウンタ 9 の値
16	カウンタ 10 の値
17	カウンタ 11 の値
18	カウンタ 12 の値
19	カウンタ 13 の値
20	カウンタ 14 の値
21	カウンタ 15 の値
22	カウンタ 16 の値
23	カウンタ 17 の値
24	カウンタ 18 の値
25	カウンタ 19 の値
26	カウンタ 20 の値

ASP モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル

列	列のデータ
5	stateString
6	_id

BroadVision アプリケーション・サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

ブラウズ可能な Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

Check Point モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	カウンタ 1 の値
8	カウンタ 2 の値
9	カウンタ 3 の値
10	カウンタ 4 の値
11	カウンタ 5 の値
12	カウンタ 6 の値
13	カウンタ 7 の値
14	カウンタ 8 の値

Cisco Works モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル



列	列のデータ
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

Citrix モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

ColdFusion サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

コンポジット・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数
8	エラーの項目数 (%)
9	警告の項目数 (%)
10	エラーの項目数
11	警告の項目数
12	適切な項目数
13	検査済み項目

CPU モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString

列	列のデータ
6	_id
7	使用率
8	使用率 cpu # 1
9	使用率 cpu # 2

**注:** 個々の CPU 使用率カウンタ（使用率 cpu # 1, 使用率 cpu # 2 など）の数は、環境およびモニタの設定によって異なります。

データベース・カウンタ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウンタ数

データベース・クエリ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString

列	列のデータ
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	結果カラム 1
10	結果カラム 2
11	行
12	内容の照合

DB2 JDBC モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

ディレクトリ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID

列	列のデータ
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	ファイル数
8	ファイル・サイズ合計
9	ディレクトリ存在
10	アクセス許可
11	修正後経過時間

ディスク容量モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数
8	空き領域 (MB)

DNS モニタ

列	列のデータ
1	データ

列	列のデータ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	statusText

e ビジネス・トランザクション・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	適切な項目数 (%)
8	エラーの項目数 (%)
9	警告の項目数 (%)
10	エラーの項目数
11	警告の項目数

列	列のデータ
12	適切な項目数
13	検査済み項目

F5 Big-IP モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

ファイル・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	サイズ
8	ファイル・エイジ

列	列のデータ
9	内容の照合

フォーミュラ・コンポジット・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	結果
8	状態

FTP モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間



列	列のデータ
9	サイズ

SiteScope の状況モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

IPMI モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

LDAP モニタ

列	列のデータ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間

リンク・チェック・トランザクション・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	リンク・エラー数
8	合計リンク数
9	合計グラフィック数
10	平均

ログ・イベント状況モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	.*skipped #1.*
8	.*skipped #2.*
9	.*skipped #3.*
10	.*skipped #4.*
11	.*skipped #5.*
12	.*SiteScope shutting down.*
13	.*Reached the limit of processes in the process pool.*
14	.*Error. data reporter failed to report chunk of data.*
15	.*Error. config reporter failed to report chunk of data.*
16	.*Error.Topaz failed to process data.*
17	.*Error. CacheSender. Got to the max number of cached files.*
18	.*Error. CacheSender. Got to the max old dir size.*
19	.*Topaz SEVERE.*
20	.*Commit verification failed.*

列	列のデータ
21	.target not found in LDAP.*
22	カウンタ 16 の値
23	カウンタ 17 の値
24	カウンタ 18 の値
25	カウンタ 19 の値
26	カウンタ 20 の値

ログ・ファイル・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	一致数/分
8	行数/分

メール・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID

列	列のデータ
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	往復時間
8	状態
9	内容の照合
10	送信時間
11	受信時間

MAPI モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	送受信

メモリ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category

列	列のデータ
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	使用領域 (%)
8	空き領域 (MB)
9	ページ数 / 秒
10	virtual memory used %
11	virtual memory MB free
12	physical memory used %
13	physical memory MB free

Microsoft IIS サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

Microsoft SQL Server モニタ

列	列のデータ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

Microsoft Windows ダイアルアップ・モニタ（廃止）

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	合計時間
8	正常モニタ数（%）
9	monitorCount
10	monitorErrorCount
11	monitorWarningCount
12	接続所要時間
13	認証所要時間

Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	一致カウント
8	確認済みレコード
9	間隔内の一致

Microsoft Windows Media Player モニタ（廃止）

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	カウンタ 1 の値
8	カウンタ 2 の値
9	カウンタ 3 の値



列	列のデータ
10	カウンタ 4 の値
11	カウンタ 5 の値
12	カウンタ 6 の値
13	カウンタ 7 の値
14	カウンタ 8 の値
15	カウンタ 9 の値
16	カウンタ 10 の値
17	カウンタ 11 の値
18	カウンタ 12 の値
19	カウンタ 13 の値
20	カウンタ 14 の値
21	カウンタ 15 の値
22	カウンタ 16 の値
23	カウンタ 17 の値
24	カウンタ 18 の値
25	カウンタ 19 の値
26	カウンタ 20 の値

Microsoft Windows Media Server モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category

列	列のデータ
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	カウンタ 1 の値
8	カウンタ 1 パーセント・デリベーション
9	measurement0
10	lastMeasurement0
11	カウンタ 2 の値
12	カウンタ 2 パーセント・デリベーション
13	measurement1
14	lastMeasurement1
15	カウンタ 3 の値

列	列のデータ
16	カウンタ 3 パーセント・デリベーション
17	measurement2
18	lastMeasurement2
19	countersInError

Microsoft Windows リソース・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

Microsoft Windows サービス・ステート・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

列	列のデータ
7	現在非実行中のサービス数
8	現在実行中のサービス数
9	実行中に変更された数
10	非実行に変更された数
11	追加されたサービス数
12	削除されたサービス数
13	非実行に変更されたサービス
14	実行中に変更されたサービス
15	追加されたサービス
16	削除されたサービス

ネットワーク帯域幅モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

ニュース・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	記事数

Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	カウンタ 1 の値
8	カウンタ 2 の値
9	カウンタ 3 の値

列	列のデータ
10	カウンタ 4 の値
11	カウンタ 5 の値
12	カウンタ 6 の値
13	カウンタ 7 の値
14	カウンタ 8 の値
15	カウンタ 9 の値
16	カウンタ 10 の値
17	カウンタ 11 の値
18	カウンタ 12 の値
19	カウンタ 13 の値
20	カウンタ 14 の値
21	カウンタ 15 の値
22	カウンタ 16 の値
23	カウンタ 17 の値
24	カウンタ 18 の値
25	カウンタ 19 の値
26	カウンタ 20 の値

Oracle データベース・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category

列	列のデータ
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

Ping モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	正常パケット数 (%)

ポート・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID

列	列のデータ
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間

Radius モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間

Real Media Player モニタ（廃止）

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル



列	列のデータ
5	stateString
6	_id
7	カウンタ 1 の値
8	カウンタ 2 の値
9	カウンタ 3 の値
10	カウンタ 4 の値
11	カウンタ 5 の値
12	カウンタ 6 の値
13	カウンタ 7 の値
14	カウンタ 8 の値
15	カウンタ 9 の値
16	カウンタ 10 の値
17	カウンタ 11 の値
18	カウンタ 12 の値
19	カウンタ 13 の値
20	カウンタ 14 の値
21	カウンタ 15 の値
22	カウンタ 16 の値
23	カウンタ 17 の値
24	カウンタ 18 の値
25	カウンタ 19 の値

列	列のデータ
26	カウンタ 20 の値

Real Media Server モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id

SAP パフォーマンス・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

スクリプト・モニタ

列	列のデータ
1	データ

列	列のデータ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間

サービス・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	プロセス
9	cpu
10	メモリ

SNMP モニタ

列	列のデータ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_ id
7	状態
8	value

SNMP トラップ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_ id
7	一致数/分
8	一致数/分
9	value
10	値 2
11	値 3

列	列のデータ
12	値 4

MIB による SNMP モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

SunONE Web サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

Sybase モニタ

列	列のデータ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

TUXEDO モニタ（廃止）

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

UNIX リソース・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID

列	列のデータ
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

URL 内容モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	statusText
10	サイズ
11	エイジ
12	DNS 時間
13	応答時間
14	ダウンロード時間
15	接続時間

列	列のデータ
16	内容の照合
17	matchValue2
18	matchValue3
19	matchValue4
20	matchValue5
21	matchValue6
22	matchValue7
23	matchValue8
24	matchValue9
25	matchValue10

URL リスト・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	期間
8	エラー数
9	正常



列	列のデータ
10	左

URL モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	statusText
10	サイズ
11	エイジ
12	内容の照合
13	DNS 時間
14	応答時間
15	ダウンロード時間
16	接続時間
17	全体の状態
18	合計エラー数

URL シーケンス・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	状態
8	往復時間
9	statusText
10	ステップ 1 接続時間
11	ステップ 1 DNS 時間
12	ステップ 1 ダウンロード時間
13	ステップ 1 応答時間
14	ステップ 1 往復時間
15	ステップ 2 接続時間
16	ステップ 2 DNS 時間
17	ステップ 2 ダウンロード時間
18	ステップ 2 応答時間
19	ステップ 2 往復時間

**注:** URL シーケンス・ステップ・パラメータ使用率カウンタ（ステップ 1 \*\*\* 時間，ステップ 2 \*\*\* 如何 など）の数は，環境およびモニタの設定によって異なります。

WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

Web サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	ヒット数
8	送信バイト数
9	ヒット数 / 分
10	バイト / 分

WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

WebSphere パフォーマンス・サーブレット・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

XML メトリクス・モニタ

列	列のデータ
1	データ
2	category

列	列のデータ
3	ownerID
4	タイトル
5	stateString
6	_id
7	エラーのカウント数

# 第100章: SiteScope 状況マップとパフォーマンス統計情報ログ

SiteScope サーバの負荷とパフォーマンス統計情報を表示するには、SiteScope 状況マップとパフォーマンス統計情報ログにアクセスします。これにより、SiteScope ユーザ・インタフェースを開くことなく、ログ・ファイル内の SiteScope の負荷およびパフォーマンス統計情報に直接アクセスできます。

**ヒント:** この情報は、[「SiteScope サーバの状況モニタ」\(1129ページ\)](#)または [「SiteScope サーバ統計」\(1153ページ\)](#) コンテキストからも表示できます。

## アクセス方法

<SiteScope のルート・パス>\logs ディレクトリに移動して、**health\_map.log** または **perf\_statistics.csv** ファイルを開きます。

**注:** **health\_map.log** には、[サーバ統計] コンテキストの [ログ ファイル] ページからもアクセスできます。詳細については、[「\[ログ ファイル\] ページ」\(1163ページ\)](#)を参照してください。

## 学習事項

### 状況マップとパフォーマンス統計情報ログの概要

次のログ・ファイルを使用して、SiteScope サーバ・パフォーマンスの概要を把握できます。

- **health\_map.log**: 実行中モニタ数、待機中モニタ数 (モニタ・キュー・サイズ)、モニタの平均実行時間 (モニタ・タイプごと)、現在開いている SSH 接続数の各パフォーマンス・メトリックについて、SiteScope サーバ負荷統計情報の概要が表示されます。異なる期間におけるパフォーマンス統計情報の集計 (たとえば、過去 1 時間のモニタ実行平均時間など) が示されます。パフォーマンス・メトリック間で時間をシフトすることにより、同じメトリックを異なるタイム・フレームでチェックすることもできます。
- **perf\_statistics.csv**: 時間の経過に伴う SiteScope パフォーマンスの変化を表すレポートを生成できます。このレポートには、タイムスタンプ、実行中モニタ数、待機中モニタ数 (モニタ・キューのサイズ)、モニタの平均実行時間 (モニタ・タイプ別)、現在開いている SSH 接続数の各パフォーマンス・メトリックが含まれます。このログは CSV 形式なので、グラフに変換して、時間の経過と共に SiteScope パフォーマンス統計情報を比較できます (下記のタスクを参照してください)。ログ・レポートの頻度は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルで変更できます。

## タスク

ログ・ファイルを使用して SiteScope パフォーマンスのステータス・サマリを取得する方法

このタスクでは、SiteScope ユーザ・インタフェースを開くことなく、SiteScope サーバの負荷およびパフォーマンスの統計情報の概要を取得する方法について説明します。

1. <SiteScope のルート・ディレクトリ>\conf\core\Tools\log4j\PlainJava ディレクトリに移動して、log4j.properties ファイルを開きます。
2. HealthMapLogger 定義を検索して、ログ・レベルを DEBUG に変更します。

ログ・レベルを変更すると、状況マップが次の形式の SiteScope サーバ負荷データで 60 秒ごとに更新されます。

```
[MONITOR COUNT] [MIN AVG] [MIN MAX] [HOUR AVG] [HOUR MAX] [DAY AVG] [DAY MAX]
[# RUNNING]
[# WAITING]
[# SSH CONNECTIONS]
[RUN AVG TYPE 1]
...
[RUN AVG TYPE N]
```

状況マップのログ・レポート頻度はハード・コーディングされており変更できません。

3. ログ・ファイルの SiteScope サーバ・パフォーマンス・データを表示します。

### health\_map.log の例

	[MONITOR COUNT]	[MINUTE AVG]	[MINUTE MAX]	[10 MIN AVG]	[10 MIN MAX]	[HOUR AVG]	[HOUR MAX]	[DAY AVG]	[DAY MAX]
[# RUNNING]	NA	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
[# WAITING]	NA	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
[# SSH CONN]	NA	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
[RUNTIME MS WTEEventLogMonitor]	1	0.00	0.00	4.30	4.30	4.64	4.99	4.99	7.88
[RUNTIME MS LogEventHealthMonitor]	1	0.00	0.00	0.00	0.00	5.86	6.32	5.79	7.81
[RUNTIME MS HealthServerLoadMonitor]	1	38.10	38.10	38.10	38.10	37.96	41.80	58.92	1017.87
[RUNTIME MS SSLCertificateStateMonitor]	1	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
[RUNTIME MS MonitorLoadMonitor]	1	0.00	0.00	5.03	6.57	5.13	6.57	4.83	8.93
[RUNTIME MS CPUMonitor]	1	0.00	0.00	4034.97	4034.97	4034.68	4034.97	4035.16	4038.98
[RUNTIME MS URLLineMonitor]	1	8.29	8.29	8.29	8.29	8.29	8.29	7.16	15.15
[RUNTIME MS BACIntegrationStatisticMonitor]	2	0.00	0.00	4.25	4.59	4.59	5.78	4.49	7.88
[RUNTIME MS DynamicMonitoringStatisticMonitor]	1	0.00	0.00	0.00	0.00	5.84	7.42	5.60	7.42
[RUNTIME MS ConnectionStatisticMonitor]	1	0.00	0.00	0.00	0.00	6.05	6.63	7.01	8.54
[RUNTIME MS LicenseUsageMonitor]	1	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
[RUNTIME MS BACIntegrationConfigurationMonitor]	3	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	7.04	12.59

注: モニタの平均実行時間の単位はミリ秒です。

ログ・ファイルの詳細については、「[\[ログファイル\] ページ](#)」(1163ページ)を参照してください。

ログ・ファイルを使用して時間の経過に伴う SiteScope パフォーマンスの変化を示すレポートを生成する方法

このタスクでは、SiteScope ユーザ・インタフェースを開くことなく、SiteScope サーバの負荷およびパフォーマンスの統計情報の概要を取得する方法について説明します。

- 1. <SiteScope のルート・ディレクトリ>\conf\core\Tools\log4j\PlainJava ディレクトリに移動して、log4j.properties ファイルを開きます。
- 2. PerformanceStatisticsLogger 定義を検索して、ログ・レベルを DEBUG に変更します。

ログ・レベルを変更すると、現在のパフォーマンス統計情報が次の形式の SiteScope サーバ負荷データで 60 秒ごとに更新されます。

```
[TIMESTAMP],[#RUNNING MONITORS],[#WAITING MONITORS],[# SSH CONNECTIONS],[RUN AVG TYPE 1], • [RUN AVG TYPE N]
```

ログ・レポートの頻度を変更するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルの \_statisticsReportFrequencyMillis プロパティの値を変更します。

注: \_statisticsReportFrequencyMillis プロパティは、すべての統計情報ロガー（モニタ統計情報、プール統計情報、メモリ統計情報）のレポート頻度に影響を与えます。

- 3. ログ・ファイルの SiteScope サーバ・パフォーマンス・データを表示します。

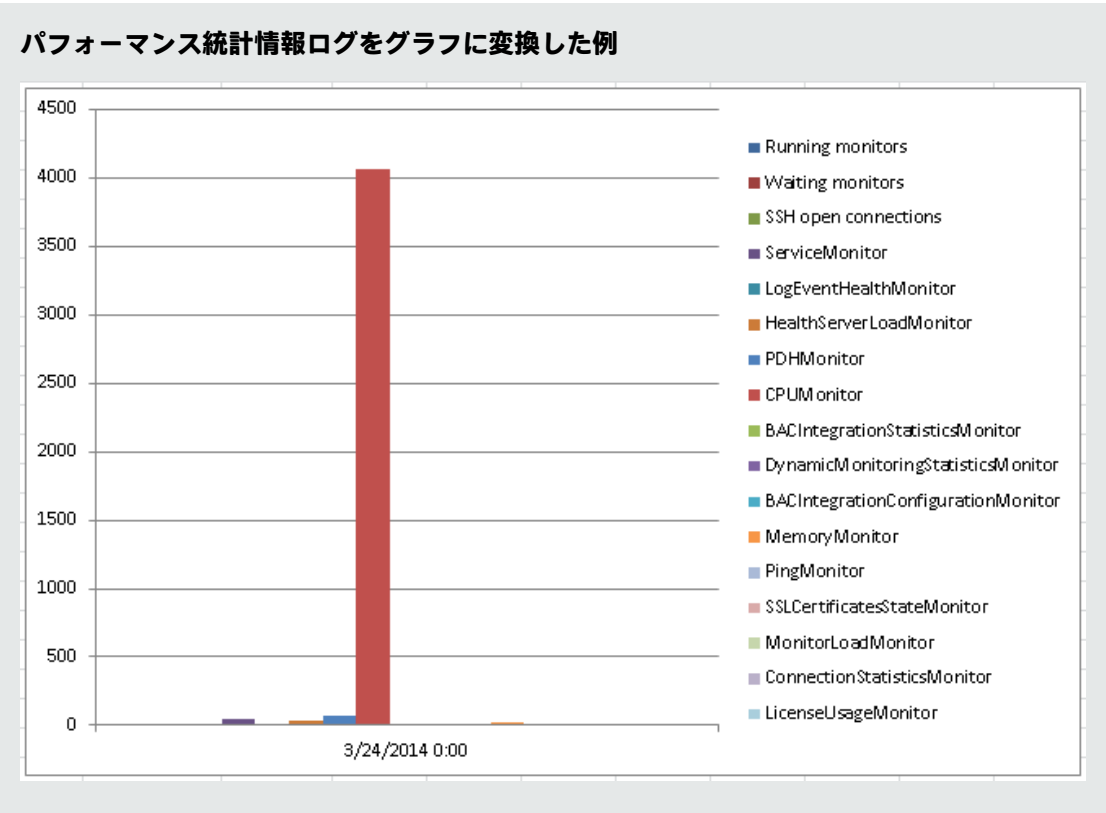
perf\_statistics.csv の例

Time	Running m	Waiting m	SSH open	ServiceMoni	LogEventHi	HealthSe	PDHMoni	CPUMoni	BACInteg	Dynamid	BACInteg	MemoryA	PingMon	SSLCertif	MonitorLo	Connector	LicenseUs
3/24/2014 2:41	0	0	0														
3/24/2014 2:42	0	0	0					4064.67	2.06662							3.168657	
3/24/2014 2:43	0	0	0			31.4351											
3/24/2014 2:44	0	0	0						2.04242							3.134098	
3/24/2014 2:45	0	0	0						1.94681							3.220879	
3/24/2014 2:46	0	0	0														
3/24/2014 2:47	0	0	0						2.23979							4.195436	
3/24/2014 2:48	0	0	0	38.129479	3.859065	33.0574				4.52643		17.4706				4.525665	
3/24/2014 2:49	0	0	0						2.15877				7.25274			3.266573	
3/24/2014 2:50	0	0	0				67.9238		2.00403							3.793019	
3/24/2014 2:51	0	0	0														
3/24/2014 2:52	0	0	0					4063.94	2.00287							3.105684	
3/24/2014 2:53	0	0	0	44.5218562		31.6812	67.4485	4063.84				22.536	13.9121				
3/24/2014 2:54	0	0	0	38.1095115			64.9623	4063.91	1.91456			17.0765	5.46557			2.889115	
3/24/2014 2:55	0	0	0	39.344028			65.3892	4064	2.41758			16.6474	5.64047			2.633379	
3/24/2014 2:56	0	0	0	38.466907			64.603	4064.08				16.4736	5.48486				
3/24/2014 2:57	0	0	0	37.36668925			68.1575	4063.78	1.94374			16.7284	5.37773			3.797243	
3/24/2014 2:58	0	0	0	38.920587	3.917814	31.3805	62.5682	4064		4.47421		16.5144	5.70153			4.871637	
3/24/2014 2:59	0	0	0	39.294014			62.6275	4063.9	1.90265			16.4074	5.7214			2.907546	
3/24/2014 3:00	0	0	0	39.13072375			61.9197	4063.97	2.30546			16.2422	5.33348			2.313135	
3/24/2014 3:01	0	0	0	38.96311375			63.3388	4063.99				16.6422	5.47517				



4. ログ・データをグラフに変換する（任意指定）

.csv ファイルを Excel で開いて、ログ・ファイル・データをグラフに変換します。これにより、時間の経過と共に SiteScope パフォーマンス統計情報を比較できます。



## 第12部: 警告

SiteScope は、IT インフラストラクチャの問題を検出するたびに警告を送信して重要な関係者に通知し、SiteScope が修正アクションを開始するように設定できます。SiteScope 警告の詳細については、[「SiteScope 警告の設定」\(1231ページ\)](#)を参照してください。

SiteScope 警告テンプレートをカスタマイズして、警告メッセージの内容と形式を変更することができます。また、パーサで特定の区切り文字が必要な場合や、変数の識別に使用する括弧の区切り文字を変更する場合に、警告テンプレートのタグ・スタイルをカスタマイズすることもできます。詳細については、[「警告テンプレートのカスタマイズ」\(1286ページ\)](#)を参照してください。

テキストの追加や削除、プロパティ変数の追加（[「警告、テンプレート、イベントで利用可能なプロパティ」\(1295ページ\)](#)のリストを参照）、テンプレートに含まれるテキストやプロパティ変数の順序の変更によって、警告テンプレートをカスタマイズできます。

警告アクションには、電子メール・メッセージの送信やSNMPトラップの送信など、複数のタイプがあります。SiteScope では、エラーまたは警告ステータスが検出された場合に自動的に復旧スクリプトまたはバッチ・ファイルを実行するよう設定できます。通常、スクリプトのトリガとして機能するスクリプト警告を作成することによって、これを実行します。スクリプト警告のスクリプト作成の詳細については、[「スクリプト警告のスクリプトの記述」\(1291ページ\)](#)を参照してください。

## 第101章: SiteScope 警告の設定

SiteScope 警告は、警告定義の状態が検出された場合にトリガされる通知アクションです。警告を使用して、イベント、要素の状態の変更、インフラストラクチャのシステムの変更の通知を送信します。たとえば、「Good」から「Error」への変更（監視対象システムが応答しなくなったことを示します）が SiteScope モニタで検出された場合に警告がトリガされます。

警告は、ビジネス・モニタがベースラインしきい値を超過したときに通知を送信する予防的解析でも使用されます。詳細については、「[予測解析の設定](#)」(1368ページ)を参照してください。

**注:** また、警告を使って作業する場合、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、「[SiteScope 公開 API](#)」(171ページ)を参照してください。

### アクセス方法

【**モニタ**】コンテキストを選択します。【モニタ】ツリーで、警告を生成する対象となる SiteScope オブジェクトを右クリックし、【**新規**】 > 【**警告**】をクリックします。

## 学習事項

### SiteScope 警告の概要

警告定義には、警告をトリガできるモニタ、対象となる条件、送信する情報、警告の受信者を SiteScope に通知する設定が含まれています。たとえば、特定のシステムでエラー状態が検出されたときに、特定のサーバ・アドレスおよびエラー・コードを SiteScope からページまたは電子メールに送信するための指示が含まれる警告を作成できます。また、SiteScope では、スクリプト警告を使用して復旧スクリプトやアクション・スクリプトを自動的に起動することで、問題に対応することもできます。たとえば、システムが応答しなくなったことや、CPU 使用率が 100% に達したことがモニタで検出された場合に、スクリプトを実行してサーバを再起動するようにスクリプト警告を設定できます。警告のタイプの詳細については、「[\[アクションタイプ\] ダイアログ・ボックス](#)」(1263ページ)を参照してください。

SiteScope 警告は、複数の方法で設定できます。警告は、1 つ以上の個々のモニタ、1 つ以上のモニタ・グループ、モニタとグループの組み合わせ、すべてのモニタおよびグループにグローバルに関連付けることができます。通常、グローバルまたはグループ全体に警告を関連付けるのが最も効率的ですが、必要な制御ができない可能性もあります。

### 警告アクション

SiteScope で警告スキームを作成する際には、警告条件を満たしたときにトリガされる警告アクションを作成します。警告アクションは、[\[警告時のアクション\] ダイアログ・ボックス](#)を使用して作成します。このダイアログ・ボックスでは、次の項目を決定します。

- 警告アクションのタイプ。利用可能な警告アクションの詳細なリストについては、「[\[アクションタイプ\] ダイアログ・ボックス](#)」(1263ページ)を参照してください。
- 送信する警告のタイプに関する設定。たとえば、電子メール警告アクションには受信者と受信者アドレスを定義できます。
- 警告をトリガする状態の条件。たとえば、モニタの状態が「エラー」から「利用不可」に変化した場合に警告アクションをトリガするように SiteScope に指示できます。
- 警告をトリガして送信する時期を決定するトリガ設定。詳細については、「[SiteScope 警告が送信される時期について](#)」(1237ページ)を参照してください。

1つの警告スキームに複数の警告アクションを作成できます。

- **複数の送信方法**: サウンド警告を送信する警告アクションと、電子メール警告を送信する別の警告アクションを作成できます。どちらも警告をトリガすると送信されます。
- **スケジュールに依存した送信**: 同じ警告定義内に、異なるアクションのための異なるスケジュールを設定することもできます。たとえば、通常の業務時間中は電子メール警告アクションを送信し、夜間は SMS 警告アクションを送信するようにスケジュールを設定できます。どちらも同じ条件の変化によってトリガされますが、警告がトリガされる時間に応じて異なる時間に送信されます。
- **アクションの依存関係**: ほかの警告アクションに依存する警告アクションを作成することもできます。これにより、トリガ条件が最初に満たされたときにはある警告タイプを送信し、最初の警告タイプが複数回送信されている場合は別のタイプの警告のみを送信するように SiteScope に指示できます。

警告アクションをほかのモニタやグループにコピーして、ほかの警告で使用できます。ほかの警告の警告アクションを使用するには、警告をコピーしてほかのモニタまたはグループに貼り付けます。その警告のすべての警告アクションが新しい警告にコピーされます。その後で、新しいターゲット・モニタまたはグループに対してトリガする警告を編集できます。

異なる警告のタイプを使った作業の詳細については、「[\[アクションタイプ\] ダイアログ・ボックス](#)」(1263ページ)を参照してください。

## 警告フィルタ

各警告定義ページの **[フィルタ設定]** 機能を使用してフィルタ条件を作成すると、グローバル警告およびグループ警告をより詳細な条件で制御できます。フィルタ条件を使用して、特定のタイプのモニタや特定のテキスト文字列、タグを含むモニタなど、フィルタ条件に一致したモニタに警告を限定することができます。たとえば、CPU モニタのフィルタ条件を使用してグローバル警告を作成すると、CPU モニタ・タイプの場合にのみトリガされる警告が作成されます。タグを使用して個々のモニタ警告を制御することもできます。たとえば、選択されたタグのフィルタ条件を用いて個々のモニタ警告を作成できます。警告は、モニタにこれらのタグのいずれかが含まれる場合に限りトリガされます。グローバルまたはルート警告を設定しタグを割り当て、同じタグをグループに割り当てる場合で、グループ内のどのモニタにも警告の時と同じタグが含まれない場合には、モニタのこのグループに警告はトリガされません。

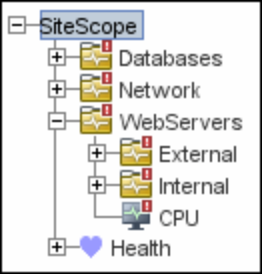
警告タイプ

SiteScope で警告スキームを作成する際には、警告条件を満たしたときにトリガされる警告アクションを作成します。警告アクションは、[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスを使用して作成します。SiteScope には次の警告タイプが含まれています。

- ・「[モニタの無効化 / 有効化警告のプロパティ](#)」(1269ページ)
- ・「[電子メール警告のプロパティ](#)」(1270ページ)
- ・「[イベント・コンソール警告のプロパティ](#)」(1272ページ)
- ・「[ログ・イベント警告のプロパティ](#)」(1273ページ)
- ・「[送信警告のプロパティ](#)」(1274ページ)
- ・「[スクリプト警告のプロパティ](#)」(1276ページ)
- ・「[SNMP トラップ警告のプロパティ](#)」(1279ページ)
- ・「[サウンド警告のプロパティ](#)」(1280ページ)
- ・「[トリガのプロパティ](#)」(1281ページ)

警告の関連付けと考慮事項

次の表に、各種警告の関連付けと考慮事項の概要を示します。

警告のクラス	詳細
グローバル警告	<p>特定の SiteScope の任意のモニタによって、警告に定義されたカテゴリの状態がレポートされたときにトリガされる警告。</p> <p>警告定義を作成した後に追加した新規グループおよび新規モニタは、自動的にこの警告に関連付けられます。</p> <p>次に、SiteScope ノードに関連付けられたグローバル警告の例を示します。この警告は、すべてのモニタでトリガされます。</p> <div data-bbox="467 1390 727 1663">A hierarchical tree diagram of SiteScope components. The root node is 'SiteScope'. It has several child nodes: 'Databases', 'Network', 'WebServers', 'External', 'Internal', 'CPU', and 'Health'. Each node has a small icon next to it. The 'Health' node is highlighted with a blue background.</div> <p>注：グローバル警告は SiteScope 内のすべてのグループおよびモニタでトリガされる可能性があるため、グローバル警告を作成することはお勧めしません。</p>
グループ警告	関連付けられているグループ内のモニタによって、警告に定義されたカテゴリ

警告のクラス	詳細
	<p>の状態がレポートされたときにトリガされる警告。</p> <p>次に、グループ警告の例を示します。この警告は、グループ WebServers 内にあるモニタまたはサブグループでトリガされます。</p> <div data-bbox="467 485 727 756"></div> <p>警告定義を作成した後に関連付けられているグループ内に追加した新規サブグループおよび新規モニタは、自動的にこの警告に関連付けられます。</p>
個別モニタ警告	<p>関連付けられているモニタによって、警告に定義されたカテゴリの状態がレポートされたときにトリガされる警告。</p> <p>次に、個別モニタ警告の例を示します。この警告は、関連付けられているモニタでのみトリガされます。</p> <div data-bbox="467 1083 745 1344"></div> <p>警告定義を作成した後に追加した新規モニタは自動的にこの警告に関連付けられませんが、警告定義を編集して追加できます。</p>

**ヒント:** SiteScope 警告の定義は、必要な数だけ作成できますが、警告定義の数を最小限に抑えるように警告を計画および統合する必要があります。これにより、警告の管理が容易になり、警告のメッセージやアクションの重複を削減できます。

# タスク

## 警告の設定方法

このタスクでは、警告定義を設定する手順について説明します。

### 1. 前提条件

SiteScope 管理者ユーザ、または適切な警告権限を付与されたユーザのみが警告を表示、作成、編集できます。ユーザ権限の詳細については、[「権限」\(757ページ\)](#)を参照してください。

### 2. 警告の作成

SiteScope ツリーのグループまたはモニタ・コンテナに、新規警告を作成するか、既存の警告をコピーすることができます。

- **新規警告を作成します。**警告に関連付けるコンテナを右クリックし、**「新規作成」** > **「警告」**を選択します。警告の名前を入力し、警告をトリガするターゲットを選択して、警告アクションを設定します（**「警告アクション」**パネルで、**「新規警告アクション」**をクリックして**「警告時のアクション」**ウィザードを起動します）。各警告スキームに1つ以上の警告アクションを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[「「新規警告」 / 「警告の編集」ダイアログ・ボックス」\(1256ページ\)](#)を参照してください。
- **警告定義をコピーします。****「警告」**タブでコピーする警告を選択し、目的のグループまたはモニタ・コンテナに貼り付けます。警告ターゲットが、自動的に警告のコピー先のグループまたはモニタに変わります。

**注:** ページャまたは SMS アクション・タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope ではこれらの警告アクション・タイプのサポートを削除する予定です。

**注意:** 警告定義をグループ・コンテナ間でコピーする場合、貼り付けた警告の**「警告ターゲット」**が自動的にリセットされて、警告の貼り付け先であるコンテナの子がすべて含まれます。警告の貼り付け後、割り当てた**「警告ターゲット」**が新しい警告コンテキストと全体的な警告計画に対し適切になるように、警告定義のプロパティを編集します。

### 3. 警告のテスト

モニタ・ツリーの**「警告」**タブで警告を選択し、**「テスト」**をクリックします。テストするモニタ・インスタンスを選択し、**「OK」**をクリックします。ダイアログ・ボックスが開き、警告テストに関する情報が表示されます。

**注:** 警告をテストするために、選択したモニタが、警告をトリガするように選択した状態カテゴリと同じ状態カテゴリを報告する必要はありません。たとえば、エラー条件によってトリガされる警告をテストする場合、テスト時点でモニタがエラーを報告する必要はあり


ません。

#### 4. 警告メッセージの内容とテンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ

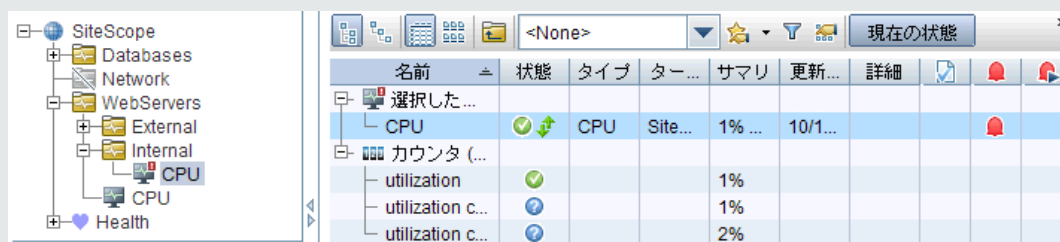
SiteScope 警告テンプレートをカスタマイズして、警告メッセージの内容と形式を変更できます。詳細については、「[警告メッセージ内容のカスタマイズ方法](#)」(1288ページ)を参照してください。






また、パーサで特定の区切り文字が必要な場合や、変数の識別に使用する括弧の区切り文字を変更する場合に、SiteScope 警告テンプレートのタグ・スタイルをカスタマイズすることもできます。詳細については、「[警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法](#)」(1290ページ)を参照してください。

#### 5. 結果

警告がモニタ・ツリーの指定したコンテナに追加されます (■ アイコンで示されます)。  
SiteScope ダッシュボードには、警告が1つ以上設定されている各グループまたはモニタの横に警告アイコン  も表示されます。

例：



名前	状態	タイプ	ター...	サマリ	更新...	詳細		
選択した ...								
CPU		CPU	Site...	1% ...	10/1...			
カウンタ (...)								
utilization				1%				
utilization c...				1%				
utilization c...				2%				

#### 6. 警告の無効化 (任意指定)

【警告】タブから警告を無効化できます。無効化する警告を選択して、【無効化】ボタンをクリックします。【警告】タブから無効化した警告は発行できません。これは、モニタの【プロパティ】タブまたはダッシュボードのモニタに対して設定された、関連警告ステータスを上書きします。

**注:** 特定のグループおよびモニタに関連付けられた警告 (警告自体ではなく) の無効化の詳細については、「[モニタの警告の設定 - オプション](#)」(272ページ)を参照してください。

## ヒント / トラブルシューティング

警告の設定をレポートにエクスポート

警告の設定を解析する (警告があるモニタと警告がないモニタを判別する) ために Excel ファイルにエクスポートできます。

警告テーブルの内容を Excel にエクスポートするには、次の手順を実行します。



- 1. 警告テーブル内のすべての行を選択します。
- 2. CTRL + C を押します。
- 3. Excel ファイルに貼り付けます。

注: 列の値の多くがユーザ・インタフェースでの表示と同様の文字列値として表示されますが、一部の値には内部 ID が含まれる場合があります。

SiteScope 警告が送信される時期について

SiteScope では、関連付けられているモニタが警告トリガ条件に一致するとただちに警告がトリガされます。[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスの[トリガの設定] オプションを使用すると、特定の条件が検出されたときに、それに関連して警告が送信される時期を制御できます。たとえば、エラー条件が特定のモニタ実行数に対応する特定の間隔で継続して発生した後にのみ SiteScope から警告が送信されるように選択できます。これは、頻繁に変化する動的な環境パラメータを監視する、頻繁に実行されるモニタで使用する则便利です。場合によっては、1つのエラー条件では介入が正当化されないことがあります。トリガの設定の詳細については、「[トリガの頻度] パネル」(1283ページ)を参照してください。

次の例では、異なる警告設定での、複数のモニタ実行でエラー条件が継続して発生した後の警告の送信方法について説明します。サンプリング間隔は、モニタの実行頻度に対応することに留意してください。モニタが 15 秒おきに実行され、3 回目のエラー読み取り後に警告が送信されるように設定されている場合、警告はエラー検出から 30 秒後に送信されます。モニタの実行間隔が 1 時間に 1 回で、同じ警告設定を使用する場合、警告は 2 時間後まで送信されません。

例 1 - 常時：条件が最低 N 回発生後

例 1a：最低 3 回のモニタ実行で条件が継続して発生した後、モニタがエラーになるたびに警告が送信されます。これを次の例 1b と比較してください。

警告設定	常時：条件が最低 3 回発生後								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告！	c=4 警告！	c=5 警告！	c=0	c=1	c=2

**例 1b :** 最低 3 回のモニタ実行で条件が継続して発生した後、モニタがエラーになるたびに警告が送信されます。連続するエラー読み取りの間にエラー以外の読み取りがモニタから 1 回返されたときに、カウントがリセットされることを示しています。これを前述の例 1a と比較してください。

警告設定	常時：条件が最低 3 回発生後								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=0	c=1	c=2	c=3 警告！	c=0	c=0

例 2 - 1 回のみ：条件がちょうど N 回発生後

最低 3 回のモニタ実行でモニタがエラーになると、それ以降にエラーが返される期間に関係なく、警告が 1 回だけ送信されます。

警告設定	1 回のみ：条件がちょうど 3 回発生後								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告！	c=4	c=5	c=6	c=7	c=8

例 3 - 最初に X 回、以後 Y 回ごとに繰り返す

**例 3a :** モニタが 5 回エラーになると警告が送信され、それ以降はエラー読み取りが連続して 3 回発生するたびに送信されます。これを次の例 3b と比較してください。

警告設定	最初に 5 回、以後 3 回ごとに繰り返す								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3	c=4	c=5 警告!	c=6	c=7	c=8 警告!

**例 3b :** モニタが 3 回エラーになると警告が送信され、それ以降はエラー読み取りが連続して 5 回発生するたびに送信されます。これを前述の例 3a と比較してください。

警告設定	最初に 3 回、以後 5 回ごとに繰り返す								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告!	c=4	c=5	c=6	c=7	c=8 警告!










#### 例 4 - 複数の警告の設定

複数の警告を作成し、モニタに複数の警告を関連付けることができるため、特定の状況で複数のアクションが実行されるように SiteScope に指示できます。たとえば、任意のモニタからエラー状態が返されるたびにユーザを呼び出すように SiteScope に指示する警告を作成できます。次に、ディスク領域モニタからエラーが返されるとサーバの /tmp ディレクトリにあるファイルを削除するスクリプト・ファイルを実行するように SiteScope に指示する別の警告を作成できます。ディスクがいっぱいになると、SiteScope により、最初の警告定義によってユーザが呼び出され、2 つ目の警告定義によって /tmp ディレクトリにあるファイルを削除するスクリプトが実行されます。

SiteScope 警告は、モニタ読み取りの状態に変化があると生成されます。そのため、OK または警告条件、およびエラー条件に対し警告を設定できます。これを利用する 1 つの方法として、エラーと OK に 1 つずつ、2 つの警告を追加します。条件が 3 回検出された後に警告が送信される

ように設定します。OK 警告には、**「モニタが以前に少なくとも 3 回エラー状態だった場合」** チェック・ボックスを選択します。これによって、モニタが何らかの理由で（手動、スケジュール、**依存対象**によって）無効にされた場合など、一致しない OK 警告が回避され、再起動されます。また、OK 警告が対応するエラー警告が送信された後にのみ送信されるよう使用することもできます。これらの 2 つの警告を使用すると、リンクまたはサービスが停止する（モニタが OK から error への変更を検出する）と呼び出しを受け、正常に戻る（モニタが error から OK への変更を検出する）と再び呼び出しを受けます。

次に、1 つのモニタで 2 つの警告を使用する例を示します。条件が少なくとも 3 回のモニタ実行で継続して発生した後のエラーに対して 1 回送信される Alert on error。少なくとも 1 回のエラーまたは警告間隔の後の「good」状態に対して 1 回送信される Alert on OK。

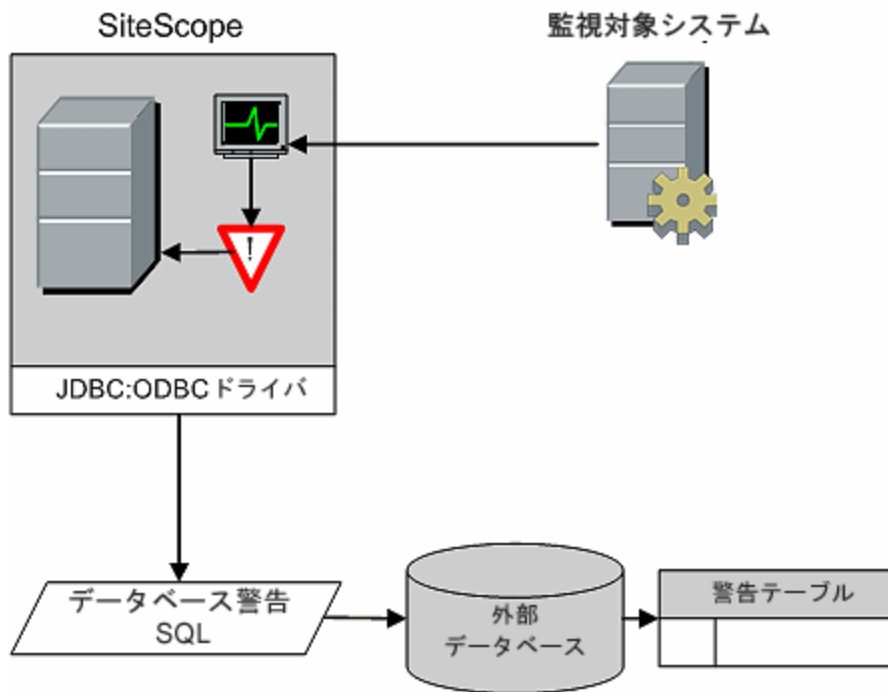
エラー の警告 の設定	対象 エラー		1 回のみ：条件がちょうど 3 回発生後						
OK の 警告の 設定	対象 OK		1 回のみ：条件がちょうど 1 回発生後および モニタが以前に 3 回以上エラーである						
サンプ リング 間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウン ト	c=0	c=1	c=2	c=3 警告！	c=4	c=5	c=6	c=7	c=1 警告！

モニタの状態が変化すると、関連する状態のカウン트가ゼロにリセットされます。

## データベース警告

データベース警告では、システムの障害データやその他の状態の情報を任意の SQL 準拠データベースに転送できます。

次の図に、データベース警告を示します。



データベース警告タイプを使用するには、次が必要です。

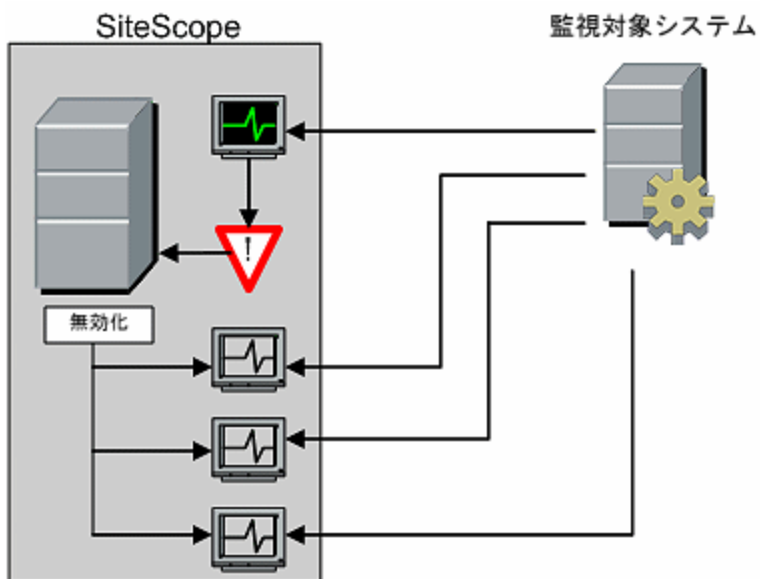
- SQL 準拠データベースへのアクセス。
- SiteScope サーバがデータベースへの接続に使用する適切なデータベース接続 URL。一般的なデータベース接続 URL の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。
- SiteScope サーバのデータベースと通信するために SiteScope アプリケーションで使用される、適切なデータベース・ミドルウェア・ドライバのインストール。一般的なデータベース・ドライバ文字列の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。
- データベースに警告を入力するために SiteScope で使用される、対応する SQL ステートメントに一致するように作成および構造化されたデータベース・テーブル。

警告を設定する方法の詳細については、[「SiteScope 警告の設定」\(1231ページ\)](#)を参照してください。

## モニタ警告の無効化 / 有効化

モニタの無効化 / 有効化警告では、モニタの警告のトリガをオンおよびオフにできます。これは、一部のモニタでエラーが発生して不要な警告が生成されるサーバの保守やほかの活動を実行する場合に便利です。

次の図に、1つのモニタに報告される条件に基づいて複数のモニタを無効化するための、警告タイプの例を示します。

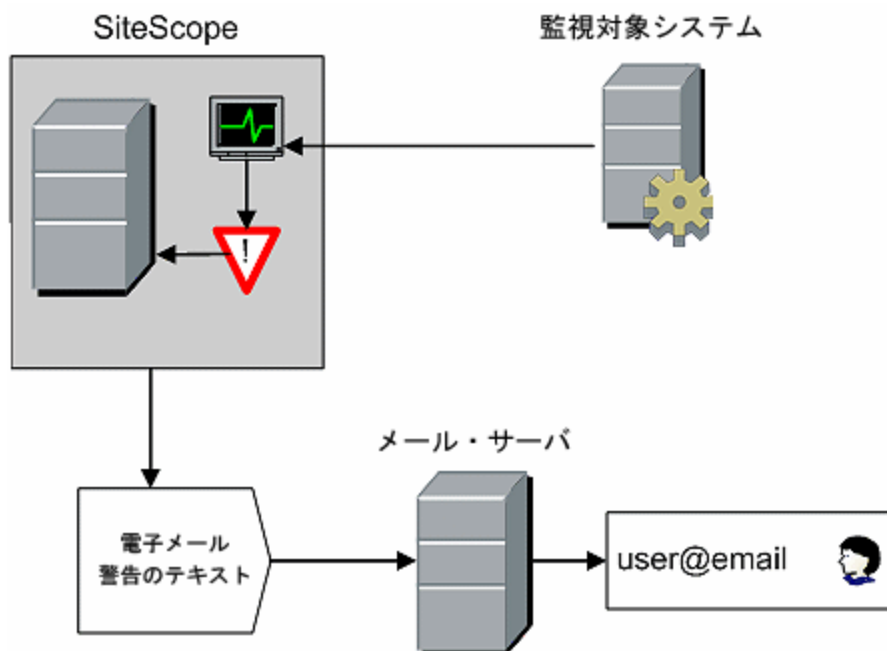


この警告タイプの機能は、モニタとモニタ・グループ間のグループ依存関係を作成する**【依存対象】**機能と類似しています。重要な違いの1つは、対象のモニタまたはグループの状態が元の状態に戻っても、このタイプの警告によって無効化されたモニタは自動的に再有効化されない点です。モニタを無効化する、警告カテゴリが**【エラー】**の警告を1つ作成できます。次に、そのモニタを有効化する、警告カテゴリが**【良好】**の2番目の警告を作成できます。

警告を設定する方法の詳細については、[「SiteScope 警告の設定」\(1231ページ\)](#)を参照してください。

## 電子メール警告

次の図のように、電子メール警告では SiteScope から指定の電子メール・アドレスにイベント通知が送信されます。



電子メール警告タイプを使用するには、次が必要です。

- アクティブな電子メール・サーバへのアクセス
- 電子メール警告を受信できる1つ以上の電子メール・アカウント
- 外部の電子メール・サーバと連携できるように設定された SiteScope の電子メール・プリファレンス

SiteScope の電子メール受信者の設定の詳細については、[「電子メール・プリファレンス」\(577ページ\)](#)を参照してください。

警告を設定する方法の詳細については、[「SiteScope 警告の設定」\(1231ページ\)](#)を参照してください。

**注:** 電子メール警告は、プレーン・テキスト形式です。警告リストに表示されたモータ相互間の改行を付けて電子メール警告を受信するには、改行を削除しないように Microsoft Outlook を設定する必要があります。

## イベント・コンソール警告

イベント・コンソール警告は、イベント通知をイベント・コンソールに送信するために使用されます。これにより、すべての SiteScope イベントを1つの場所（SiteScope ダッシュボード、Multi-View、またはスタンドアロン・イベント・コンソール）から表示および管理できます。

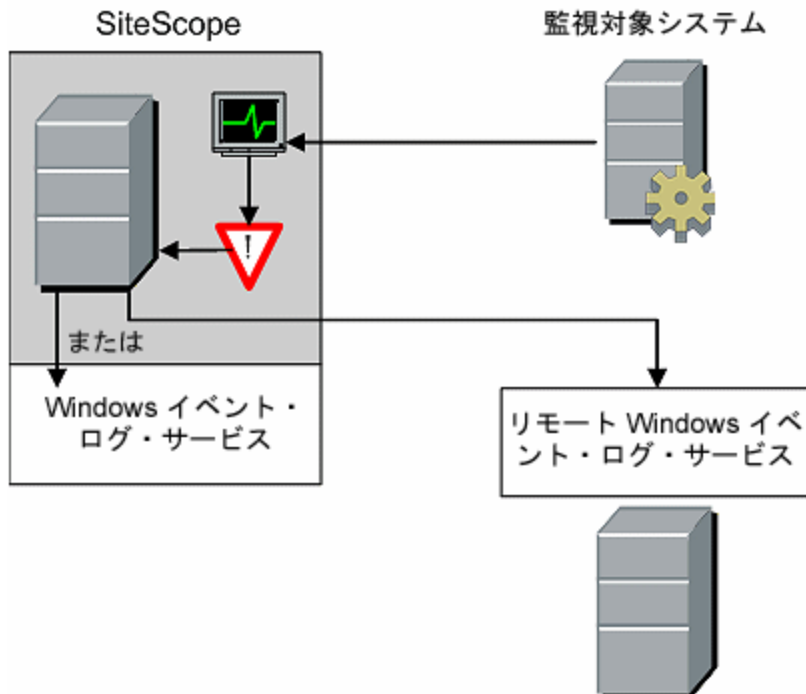
イベント・コンソール警告の使用を SiteScope に設定する方法の詳細については、[「イベント・コンソール警告のプロパティ」\(1272ページ\)](#)を参照してください。

警告を設定する方法の詳細については、[「SiteScope 警告の設定」\(1231ページ\)](#)を参照してください。

## ログ・イベント警告

ログ・イベント警告を使用して、Windows アプリケーションのイベント・ログに記録されるイベントのタイプを拡張できます。これにより、通常は Windows オペレーティング・システムによって記録されないイベント・データをログ・クエリ・システムに転送できます。

次の図に、ログ・イベント警告を示します。



ログ・イベント警告タイプを使用するには、次が必要です。

- Windows イベント・ログ・サービスへのアクセス。標準設定では、SiteScope が実行されているマシンのイベント・ログになります。警告定義を設定して、ログ・イベントを別のサーバに送信できます。
- Microsoft Windows プラットフォームで実行されている SiteScope。

**注意:** SiteScope の Microsoft Windows イベント・ログ・モニタを使用している場合、無限ループ状態が発生してイベント・ログ・ファイルの空き領域がなくなる可能性があるため、ログ・イベント警告タイプを使用するときには注意が必要です。たとえば、Microsoft Windows イベント・ログ・モニタによって、ログ・イベント警告をトリガするイベントが検出され、新しいイベントがイベント・ログに書き込まれます。このことがイベント・ログ・モニタで検出され、ログ・イベント警告がトリガされます。このようなことが繰り返されると無限ループが発生します。これを回避するため、ログ・イベント警告タイプを Microsoft Windows イベント・ログ・モニタに関連付けないようにしてください。



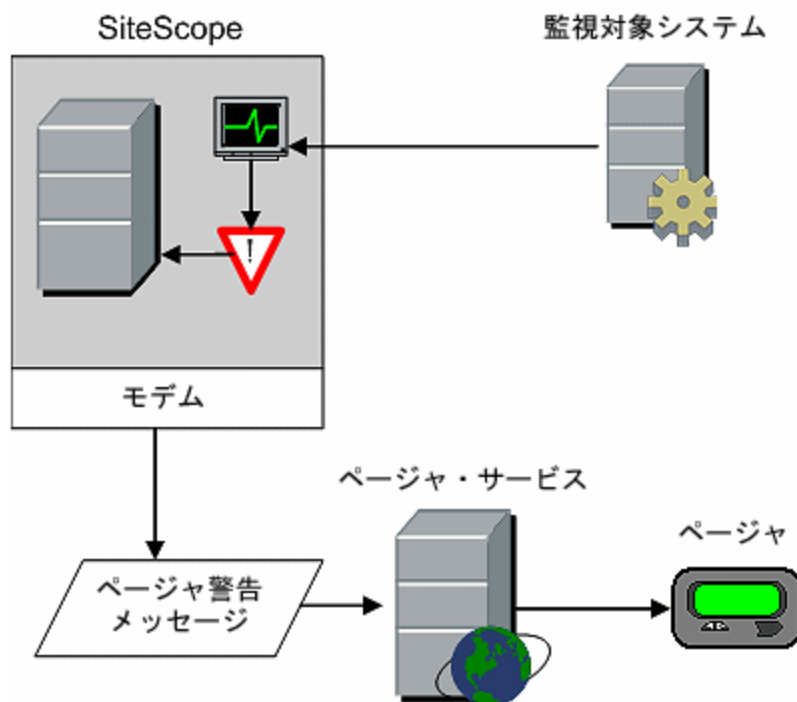
警告を設定する方法の詳細については、「[SiteScope 警告の設定](#)」(1231ページ)を参照してください。

## ページ警告（廃止）

**注:** この警告アクション・タイプは使用できなくなったため、次のバージョンの SiteScope ではそのサポートが削除される予定です。後方互換のために、この警告アクション・タイプは、プロパティ `_enableDeprecatedAlertActions=pager` を <SiteScope root directory>\groups\master.config ファイルに追加することで有効にすることができます。値は、大文字と小文字の区別がなく、その他の値が並んでいる場合コンマで区切ります。

ページ警告を使用して、電子ページにイベント通知を送信できます。これは、電子メールにアクセスできない場合に特に便利です。使用するページのタイプやページ・サービスの機能に応じて、問題や検出した条件についての簡略化した説明を含むページ・メッセージを送信するように「ページ警告」を設定できます。

次の図に、ページ警告を示します。



ページ警告タイプを使用するには、次が必要です。

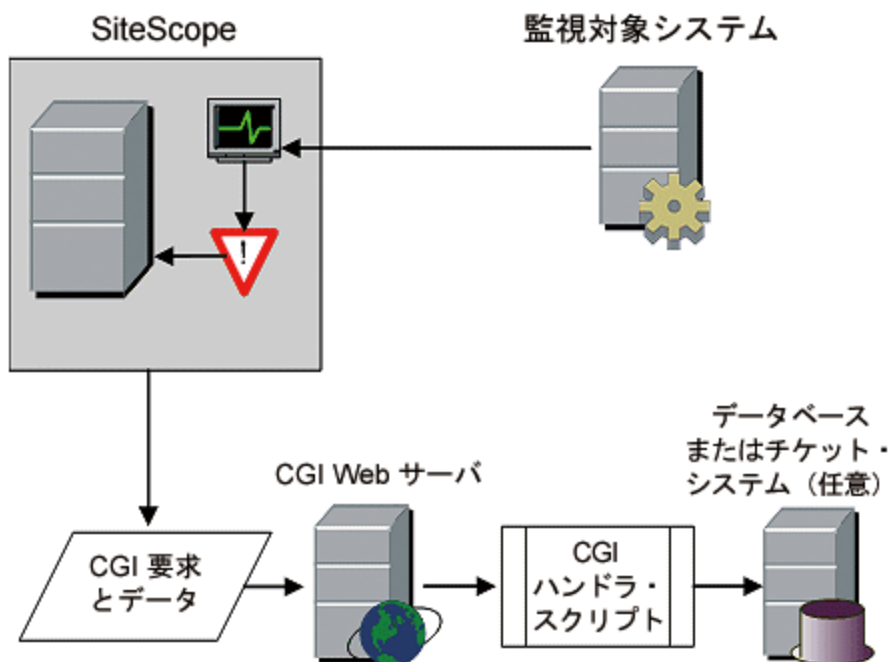
- ・ アクティブなページャ・サービスへのアクセス
- ・ SiteScope サーバがページャ・サービスへの接続に使用できるモデム
- ・ ページ警告を受信できる 1 台以上のページャ

警告を設定する方法の詳細については、「[SiteScope 警告の設定](#)」(1231ページ)を参照してください。

## 送信警告

送信警告では、共通ゲートウェイ・インタフェース・プロトコル（CGI）を使用して、POST データが CGI 対応プログラムに転送されます。これは、トラブル・チケット・システムまたはレポート・データベースのフロント・エンドである別のサーバの CGI スクリプトにイベント・データを転送するために使用できます。この警告のタイプは、ほかのセキュリティ設定を変更せずに HTTP または HTTPS を使用し、ファイアウォールを通して警告情報を送信する手段を提供します。

次の図に、送信警告を示します。



送信警告タイプを使用するには、次が必要です。

- SiteScope サーバと、CGI スクリプトまたはサーバを実行しているサーバの間の HTTP アクセス
- 適切な CGI スクリプトまたはサーバへの CGI POST 要求の形式および構文

警告を設定する方法の詳細については、[「SiteScope 警告の設定」\(1231ページ\)](#)を参照してください。

## スクリプト警告

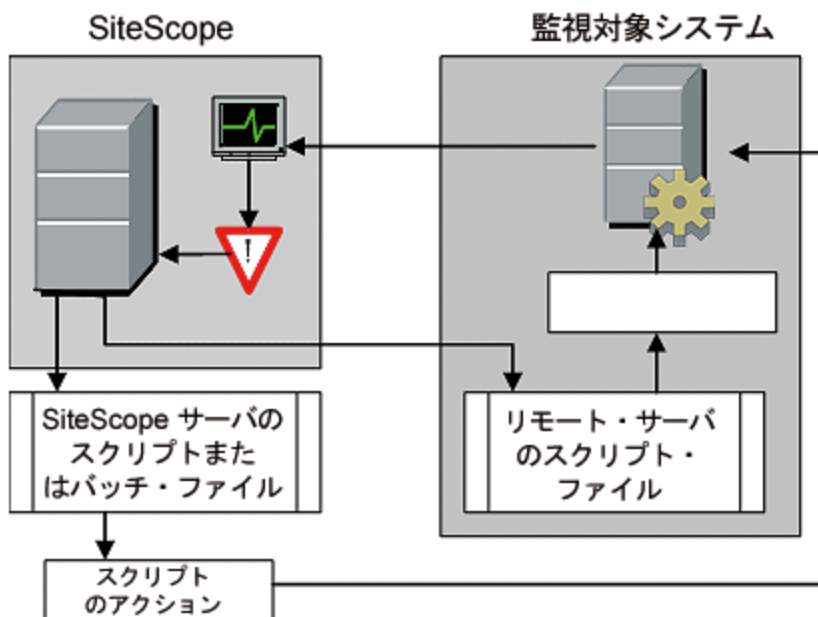
スクリプト警告では、自動的に復旧スクリプトを起動できます。スクリプト警告を設定して、サーバまたはサービスを再起動するコマンドを実行できます。

スクリプト警告の最も重要なコンポーネントは次のとおりです。

- スクリプト定義自体
- 警告をトリガするために割り当てられたモニタ
- 警告によって実行されるスクリプト

スクリプトの使用目的によっては、警告メッセージのテンプレートや、結果として生成される警告メッセージ・ファイルについても検討する必要があります。データをスクリプトに渡す[パラメータ]設定と共に、スクリプト・テンプレートを使用できます。

次の図に、ローカル・スクリプトおよびリモート・ホストのスクリプトの、一般的なスクリプト警告の概念を示します。



スクリプト警告の定義またはインスタンスと、警告をトリガするモニタは、SiteScope のほかの警告やモニタと同様に処理されます。たとえば、リモート UNIX サーバで実行されている Web サーバを監視するモニタを作成するとします。スクリプトを実行するモニタに関連付けられたスクリプト警告を作成して、モニタでエラーが報告された場合に Web サーバ・プロセスを強制終了して再起動させることができます。

警告を設定する方法の詳細については、「[SiteScope 警告の設定](#)」(1231ページ)を参照してください。

#### 本項の内容

- 「[スクリプト・ファイルの管理](#)」(1248ページ)
- 「[スクリプトへのデータの引き渡し](#)」(1248ページ)
- 「[各種スクリプトの実行](#)」(1249ページ)
- 「[スクリプトのトラブルシューティング](#)」(1249ページ)

## スクリプト・ファイルの管理

スクリプト警告定義によって呼び出される、または実行されるスクリプト・ファイルを作成することは、SiteScope のこの自動化機能を使用する場合のもう1つの重要な手順です。スクリプトによって実行される特定のコマンドおよびアクションは、ユーザが決定できます。スクリプト・ファイルは、スクリプトを実行するオペレーティング・システムと互換性のあるプレーン・テキスト・ファイルで作成する必要があります。これは、SiteScope が実行されているサーバや、SiteScope からアクセスできるリモート・マシンになります。

SiteScope が実行されているマシンでスクリプトを実行するには、スクリプト警告が定義されている SiteScope マシンの **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\scripts** ディレクトリにスクリプト・ファイルを保存する必要があります。

リモート・マシンでスクリプトを実行するには、SiteScope にリモート・マシンでの実行権限があるユーザ・アカウントの、ホーム・ディレクトリ・ツリーの **\scripts** ディレクトリにスクリプトを保存する必要があります。

スクリプト実行時の現在の実行ディレクトリは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\classes\** ディレクトリであり、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\scripts\** ディレクトリではありません。スクリプト自体によって実行されるコマンドの場合、相対実行ディレクトリは **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\classes\** になります。スクリプトによって呼び出されるほかのファイル・システム・コマンドまたはプログラムでは、現在のディレクトリに注意を払う必要がないようにフル・パスを使用してください。また、サーバ・システムの環境変数はスクリプトの実行に対応するように設定されていない場合があります。これも、スクリプトによって呼び出される実行可能ファイルにフル・パスを使用する理由の1つです。SiteScope ではなくコマンド・ラインからスクリプトを実行して動作させる場合、ユーザがエラーを特定する必要があります。

## スクリプトへのデータの引き渡し

多数のパラメータがコマンド・ライン引数として SiteScope からスクリプトに渡されます。このオプションを使用して、スクリプトのアクションの変更に使用できるデータをスクリプトに渡すことができます。これにより、スクリプト警告に汎用性が備わります。標準設定では、SiteScope スクリプト警告からスクリプトに7個のコマンド・ライン引数が渡されます。コマンド・ライン引数は次のとおりです。

- スクリプト・ディレクトリのパス
- 警告の原因となったモニタの名前
- モニタの現在の状態
- 警告メッセージ・ファイルへのパス
- モニタの ID コード
- モニタのグループ
- 警告フォームの **[パラメータ]** テキスト・ボックスで指定した追加パラメータ

これらの標準設定の引数の2つによって、スクリプトからより多くのデータにアクセスできます。1つは警告メッセージ・ファイルで、もう1つは **[パラメータ]** テキスト・ボックスです。警告メッ

セージ・ファイルは、スクリプト警告インスタンスに選択された警告テンプレートに基づいて SiteScope によって作成される、一時的なテキスト・ファイルです。作成または使用するテンプレートに応じて、警告メッセージ・ファイルには、カスタム情報や、警告をトリガしたモニタに固有のデータが含まれます。警告メッセージ・ファイルへのパスをスクリプトに渡すと、スクリプトからこのデータにアクセスできるようになります。

【パラメータ】テキスト・ボックスを使用して、スクリプトに渡す個々のモニタ・パラメータ・データを指定します。パラメータをスペースで区切って複数のパラメータを含めることができます。これにより、スクリプトに渡すパラメータの総数を効率的に増やすことができます。

スクリプト・ディレクトリのパスは、別のプログラムへの実行パスを設定する場合や、スクリプトによって作成される出力のディレクトリ・パスを設定する場合に役に立ちます。

スクリプトへのパラメータやデータの引き渡しの詳細およびその例については、「[スクリプト警告のスクリプトの記述](#)」(1291ページ)を参照してください。

## 各種スクリプトの実行

非バッチ・スクリプト (VBScript や Perl など) をバッチ・ファイルにラッピングせずに実行できます。

- スクリプトを拡張子付きで表示するには、\_scriptMonitorExtensions プロパティを <SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルに追加します。たとえば、.pl, .py, または .php スクリプトを表示するには、次の形式を使用します。

```
_scriptMonitorExtensions=.pl;.py;.php
```

- スクリプトの拡張子を使用してスクリプト・インタプリタを実行するには、次のように、\_scriptInterpreters プロパティを <SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルに追加します。\_

```
scriptInterpreters=pl=c:/perl/perl.exe;py=c:/python/python.exe;php=c:/php/  
php.exe
```

## スクリプトのトラブルシューティング

本項では、SiteScope スクリプトを使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- スクリプトは、SiteScope サービスによって使用されるアカウントの権限で実行されます。スクリプトによっては、さらに権限が必要になります。この場合、[サービス] コントロール・パネルを使用して SiteScope のログイン・アカウントを変更し、SiteScope を再起動する必要があります。たとえば、サービスの再開またはリモート・マシンの再起動を行うスクリプトや、保護されたファイルをコピーするスクリプトがこれに該当します。
- スクリプトは SiteScope サービスによって実行されるため、ログイン時に実行される操作はスクリプトでは実行されない可能性があります。たとえば、マッピングされているドライブ、環境変数、ほかのログイン・スクリプトの項目は使用できません。また、キーボードなどの入力デバイスから対話形式の入力を受け付けることはできません。ユーザの確認や入力が必要なスクリプトのアクションまたはコマンドは、スクリプトがハングアップする原因になります。ユーザのアクションが必要な対話形式のコマンドをスクリプトに含めないでください。また、WIN32 アプリ

ケーション（メモ帳など）を開く場合も、ユーザがアプリケーションを終了するまで待機してからスクリプトの実行が継続されるため、スクリプトがハングアップする原因になります。

- スクリプト警告の状態のサマリに引用符が含まれている場合、スクリプト警告の結果では、SiteScope によって引用符が二重引用符に変更されています。内容の照合フィルタを定義する場合は、この点を考慮する必要があります。

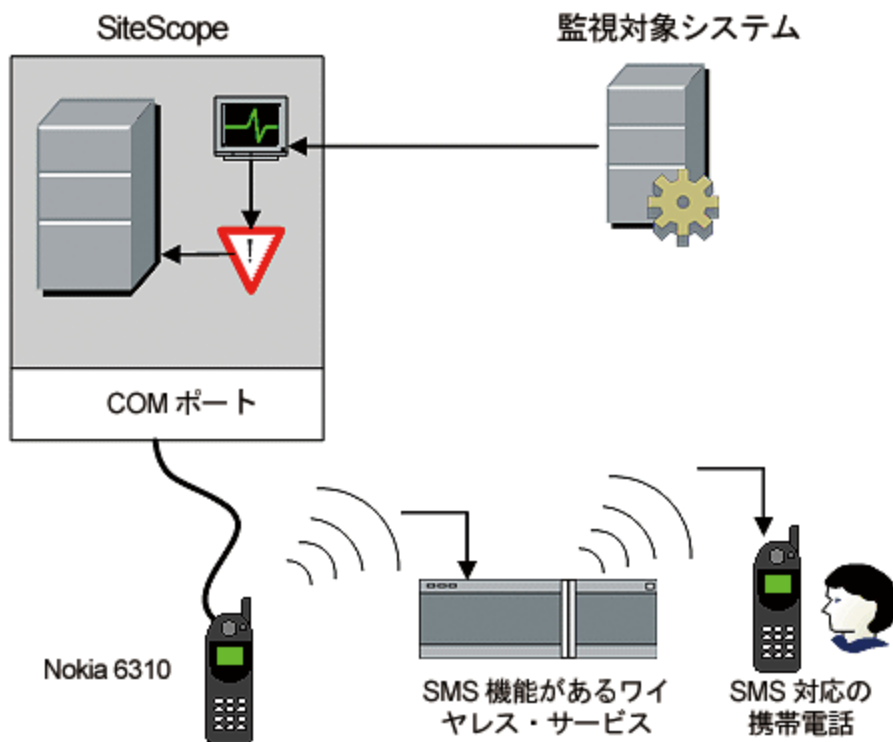
## SMS 警告（廃止）

**注:** この警告アクション・タイプは使用できなくなったため、次のバージョンの SiteScope ではそのサポートが削除される予定です。後方互換のために、この警告アクション・タイプは、プロパティ `_enableDeprecatedAlertActions=SMS` を **<SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config** ファイルに追加することで有効にすることができます。値は、大文字と小文字の区別がなく、その他の値が並んでいる場合コンマで区切ります。

SMS 警告は、イベント条件を報告した SiteScope モニタの名前とそのモニタの状態をメッセージの内容として送信するように設計されています。ページ警告の代替手段として、モバイル・ユーザに電子メールを使用せずにイベント通知を送信するために使用します。

**注:** 現時点では、SMS 警告を SiteScope から送信するには、このセクションで指定したハードウェアを使用する必要があります。SiteScope を使用して SMS メッセージを送信する代替方法については、[HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報](https://softwaresupport.hp.com/group/softwaresupport/search-result)（<https://softwaresupport.hp.com/group/softwaresupport/search-result>）を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。

次の図に、SMS 警告を示します。



SMS 警告タイプを使用するには、次が必要です。

- SMS 警告を送信する SiteScope マシンの空きシリアル通信ポート 1 個
- SiteScope を実行するマシンにワイヤレス伝送デバイスを接続するためのシリアル - ワイヤレス・デバイス間インタフェース・ケーブル (RS-232 アダプタ・ケーブル Nokia DLR-3P)
- 警告を送信する SiteScope マシンに接続された SMS 対応のワイヤレス・デバイス (インタフェース・ケーブルを使用する Nokia 6310 電話)
- SMS 警告を有効にするために必要なソフトウェア (通常, SiteScope 7.6c1 以降に付属)

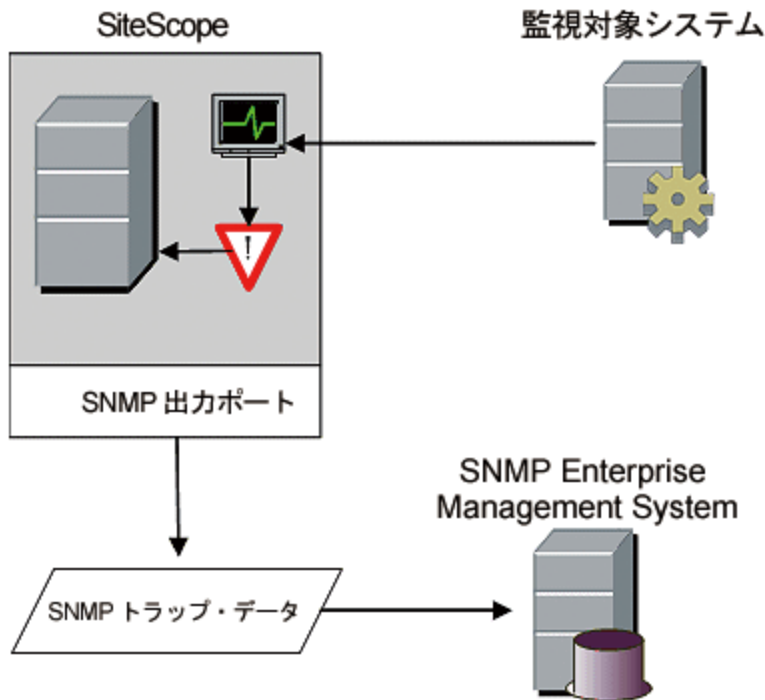
**注:** Nokia Data Suite, Palm Hot Sync, その他の PDA ソフトウェアが SiteScope を実行するサーバ上で実行されていないことを確認してください。これらのプログラムは、COM ポートをバインドしてダイヤラを正常に動作できなくする可能性があります。

警告を設定する方法の詳細については、「[SiteScope 警告の設定](#)」(1231ページ)を参照してください。

## SNMP トラップ警告

SNMP トラップ警告は、任意のタイプの SiteScope モニタから SNMP 対応のホストまたは管理システムにイベント・データを転送します。つまり、SiteScope を使用して、独自の SNMP エージェントを持たないアプリケーションやシステムのイベントを監視および報告できます。たとえば、SNMP トラップ警告を使用して、SiteScope Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・ベースのモニタ・タイプまたは URL モニタから SNMP トラップの形式で測定値データを送信できます。

次の図に、SNMP トラップ警告を示します。



SNMP トラップ警告タイプを使用するには、次が必要です。

- 適切な SNMP ネットワーク・ポートへのアクセス
- 適切な SNMP 管理コンソールと連携するように設定された SiteScope SNMP プリファレンス

送信 SNMP トラップ警告のエンコーディングを指定するには、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups\master config ファイルの `_snmpTrapEncoding` パラメータを設定します。

SNMP 警告の使用を SiteScope に設定する方法の詳細については、[「SNMP プリファレンス」 \(734ページ\)](#)を参照してください。

警告を設定する方法の詳細については、[「SiteScope 警告の設定」 \(1231ページ\)](#)を参照してください。

## サウンド警告

サウンド警告は、警告の発生時に SiteScope が稼働しているマシンでサウンド・ファイルまたはオーディオ・ファイルを再生します。この警告は、サポート・スタッフが常駐する領域内に SiteScope サーバがあり、関連付けられたサウンド・ファイルを処理できるサウンド・カードがサーバに装備されている場合에만効果があります。

または、SiteScope で提供する Web ページに警告オーディオ・ファイルを埋め込むように、SiteScope を設定できます。このオーディオ・ファイルは、メイン表示枠やグループの詳細ページなどの、モニタのエラー状態を含む SiteScope ページに埋め込まれます。これにより、ユーザ・インタ



フェース経由ですべての SiteScope クライアントにオーディオで通知できますが、これは SiteScope 警告とは異なるため、サウンド警告と同じ設定オプションは使用できません。

ユーザ・インタフェースでイベントが発生した場合にブラウザからサウンドを再生するように SiteScope を設定する方法の詳細については、「[「（モニタの状態ではなく）ユーザ・インタフェース・イベントのサウンドを再生するように SiteScope を設定する方法」](#) (1289ページ)を参照してください。

サウンド警告のその他の情報については、[HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報](https://softwaresupport.hp.com/group/softwaresupport/search-result) (https://softwaresupport.hp.com/group/softwaresupport/search-result) を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。

警告を設定する方法の詳細については、「[SiteScope 警告の設定](#)」 (1231ページ)を参照してください。

## トリガ警告

トリガ警告では、特定のアクションを実行することなく警告をトリガします。追加でアクションを実行することなく、警告によってイベント情報を HPOM または BSM に送信しようとする場合に使用されます。警告の [HP Operations Manager 統合設定] パネルで **イベント送信** が選択されている必要があります。

警告を設定する方法の詳細については、「[SiteScope 警告の設定](#)」 (1231ページ)を参照してください。

## SiteScope 警告のユーザ・インタフェース


本項の内容

- [「SiteScope 警告ページ」](#) (1253ページ)
- [「\[新規警告\] / \[警告の編集\] ダイアログ・ボックス」](#) (1256ページ)
- [「\[アクションタイプ\] ダイアログ・ボックス」](#) (1263ページ)
- [「\[警告アクション\] ダイアログ・ボックス」](#) (1265ページ)
- [「アクション・タイプの設定パネル」](#) (1267ページ)
- [「\[状態トリガ\] パネル」](#) (1282ページ)
- [「\[トリガの頻度\] パネル」](#) (1283ページ)





## SiteScope 警告ページ

このページには、選択したモニタまたはグループに関連付けられている警告に関する情報が表示されます。また、予防解析を使用して設定された解析アラートも含まれます（[「予測解析の設定」](#) (1368ページ)を参照）。このページを使用して、警告定義を追加、編集、削除します。

--	--

アクセス方法	モニタ・ツリーまたはテンプレート・ツリーで、警告の記号  が横に表示されているグループまたはモニタを選択します。右側の表示枠で「警告」タブをクリックすると、オブジェクトに設定されている警告が表示されます。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>特定のモニタまたはグループに対して作成された警告は、オブジェクトの「<b>モニタ/グループの警告</b>」リストに表示されます。ターゲットのモニタまたはグループは、「<b>モニタに関連付けられた警告</b>」 / 「<b>グループに関連付けられた警告</b>」リストに表示されます。</li> <li>各テーブル・列は、列タイトルを右クリックすると昇順または降順に並べ替えられます。上矢印または下矢印は、並べ替え順序を示します。</li> <li>また、警告を使って作業する場合、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、「<a href="#">SiteScope 公開 API</a>」(171ページ)を参照してください。</li> <li>Ctrl+C ショートカットを使用して「警告」テーブルの中の選択した行から詳細をコピーできます。</li> <li>解析アラートは、このページから管理します。</li> </ul>
関連タスク	<a href="#">「SiteScope 警告の設定」</a> (1231ページ)
関連情報	<a href="#">「SiteScope 警告の設定」</a> (1231ページ)


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>子の警告を表示</b> : 選択したノードの直接の子の警告のみを表示します。
	<b>すべての子孫の警告を表示</b> : 選択したノードのすべての子孫の警告を表示します。
	<p><b>新規警告</b> : 「<b>新規警告</b>」ダイアログ・ボックスが開き、警告を設定して、選択した SiteScope グループまたはモニタに追加できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」</a>」(1256ページ)を参照してください。</p> <p><b>注</b> : このボタンは、「<b>モニタの警告</b>」 / 「<b>グループの警告</b>」テーブルでのみ使用できます。</p>
	<b>警告の編集</b> : 「 <b>警告の編集</b> 」ダイアログ・ボックスが開き、選択した警告のプロパティを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」</a> 」(1256ページ)を参照してください。

UI 要素	詳細
	<p><b>コピー</b> : 警告がコピーされます。</p> <p><b>注</b> :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>このボタンは, <b>【モニタの警告】 / 【グループの警告】</b> テーブルでのみ使用できます。</li> <li>解析アラートを別のターゲット・モニタまたはグループにコピーすることはできません。</li> </ul>
	<p><b>貼り付け</b> : ツリーの選択した場所に警告を貼り付けます。</p> <p><b>注</b> : このボタンは, <b>【モニタの警告】 / 【グループの警告】</b> テーブルでのみ使用できます。</p>
	<p><b>警告の削除</b> : ツリーから警告を削除します。</p>
有効化	<p><b>有効化</b> : モニタ / グループに関連付けられている警告が有効になります。</p>
無効化	<p><b>無効化</b> : モニタ / グループに関連付けられている警告が無効になります。</p>
	<p><b>テスト</b> : 選択したサーバの警告定義をテストします。</p>
	<p><b>すべて選択</b> : 表示されている警告がすべて選択されます。</p>
	<p><b>選択を解除</b> : 選択を解除します。</p>
名前	SiteScope で認識される警告の名前。
状態	警告の状態 (有効/無効)。
詳細	警告の詳細。
アクション名	「 <b>【アクションタイプ】 ダイアログ・ボックス</b> 」(1263ページ)で指定された警告アクション・タイプと, 警告アクションに付けられた名前。
パス	警告に関連付けられているグループまたはモニタのパス。

## [新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、SiteScope、グループ、またはモニタの警告を定義できます。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、[新規作成] > [警告] を選択するか、[警告] タブ（モニタまたはテンプレート・ビュー）で既存の警告を選択して、[警告の編集]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>SiteScope 管理者ユーザ、または適切な警告権限を付与されたユーザのみが警告を表示、作成、編集できます。ユーザ権限の詳細については、<a href="#">「権限」(757ページ)</a>を参照してください。</li><li>ページまたは SMS アクション・タイプを使用した警告の作成オプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope ではページおよび SMS 警告アクション・タイプのサポートを削除する予定です。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「警告の設定方法」(1235ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li><a href="#">「SiteScope 警告の設定」(1231ページ)</a></li><li><a href="#">「[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス」(1263ページ)</a></li><li><a href="#">「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」(1265ページ)</a></li><li><a href="#">「共通イベント・マッピング」(556ページ)</a></li></ul>

このダイアログ・ボックスには次のペーンが含まれます。

- ・ [「一般設定」\(1256ページ\)](#)
- ・ [「警告ターゲット」\(1257ページ\)](#)
- ・ [「警告アクション」\(1257ページ\)](#)
- ・ [「HP Operations Manager 統合設定」\(1260ページ\)](#)
- ・ [「警告の有効化 / 無効化」\(1261ページ\)](#)
- ・ [「フィルタ設定」\(1262ページ\)](#)
- ・ [「タグの検索/フィルタ」\(1263ページ\)](#)

### 一般設定


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細

UI 要素	詳細
名前	警告定義の名前。SiteScope の表示でこの警告定義を識別するために使用します。
警告の説明	警告の詳細。この詳細はほかのコンテキストには表示されません。警告の編集時にのみ表示されます。



## 警告ターゲット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	詳細
警告ターゲット	<p>ショートカット・メニュー・ツリーを使用して、この警告をトリガするためのグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。ショートカット・メニューには、現在選択されているオブジェクトおよびすべての子オブジェクトが含まれます。オブジェクトを選択するには、オブジェクト名の左側にあるチェック・ボックスを選択する。グループまたはモニタの任意の組み合わせを選択できます。グループの左側に表示される  アイコンは、そのグループ内に含まれるモニタおよびサブグループのすべてが選択されていないことを示します。</p> <p>あるいは、SiteScope のルートを選択し、フィルタに設定された条件に一致するオブジェクトに警告の対象を制限する警告フィルタ・ルールを [フィルタ設定] で定義することもできます。詳細については、<a href="#">「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」(1256ページ)</a>を参照してください。</p>

## 警告アクション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>新規警告アクション:</b> [アクションタイプ] ダイアログ・ボックスが開き、警告をトリガしたときに実行するアクションを定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス」(1263ページ)</a> を参照してください。
	<b>警告アクションの編集:</b> [アクションタイプ] ダイアログ・ボックスが開き、警告アクションを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス」(1263ページ)</a> を参照してください。

UI 要素	詳細
	さい。
	<b>警告アクションの削除</b> : 警告アクションを削除します。関連付けられたモニタは無効にはなりません。
	<b>重複</b> : 警告アクションを複製します。
	<b>すべて選択</b> : 表示されている警告アクションをすべて選択します。
	<b>選択を解除</b> : 選択範囲を解除します。
<b>&lt;警告アクション・タイプ・アイコン&gt;</b> 	警告に定義されているアクションの種類を示します。
	 <b>データベース</b> : 問題の詳細を含む警告メッセージを SQL データベースへのレコードとして送信します。
	 <b>モニタの無効化 / 有効化</b> : 警告の生成を手動で制御します。
	 <b>電子メール</b> : エラーまたは警告の詳細を含む電子メール・メッセージを、1 つ以上の電子メール・アドレスに送信します。
	 <b>ログ・イベント</b> : Microsoft Windows イベント・ログにイベントのログを記録します。
	 <b>ポスト</b> : モニタ条件の詳細を含む CGI POST を CGI スクリプト、サーブレット、またはその他の CGI 対応プログラムに送信します。
	 <b>スクリプト</b> : SiteScope は、警告トリガ条件が検出されるとスクリプトまたはバッチ・ファイルを実行できます。呼び出されるスクリプトまたはバッチ・ファイルは、コマンド・ライン入力から呼び出し可能なシステム・コマンドまたは任意の言語のプログラムを実行できます。
	 <b>SNMP トラップ</b> : SNMP ホストまたは管理コンソールに SNMP トラップを送信します。
	 <b>サウンド</b> : イベントが検出されると、SiteScope が稼働するマシン上でサウンドまたはオーディオ・ファイルを再生します。

UI 要素	詳細
	 <b>トリガ</b> : 特定のアクションを呼び出すことなく警告をトリガします。追加でアクションを実行することなく、警告によってイベント情報を HPOM または BSM に送信しようとする場合に使用されます。警告の [HP Operations Manager 統合設定] パネルで <b>イベント送信</b> が選択されている必要があります。
<b>名前</b>	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。
<b>カテゴリ</b>	[状態トリガ] パネルで選択した、警告アクションをトリガするカテゴリ。 [状態トリガ] のユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[状態トリガ] パネル」(1282ページ)</a> を参照してください。
<b>いつ</b>	[トリガの頻度] パネルで選択した、いつ警告を送信するかを示すスケジュール。 [トリガの頻度] のユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[トリガの頻度] パネル」(1283ページ)</a> を参照してください。
<b>スケジュール</b>	[アクションタイプの設定] パネルで選択した毎日または毎週のスケジュール。 [アクションタイプの設定] のユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」(1265ページ)</a> を参照してください。
<b>ターゲット</b>	アクション・タイプのターゲット・データが含まれます。タイプに応じて、ターゲット列には次の内容が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>データベース</b>: [データベース接続 URL] ボックスで入力した URL が含まれます。</li> <li>・ <b>無効化または有効化</b>: [ターゲット] リストで選択したターゲットが含まれます。</li> <li>・ <b>電子メール</b>: [電子メールの送信先] セクションで選択した電子メール受信者が含まれます。</li> <li>・ <b>ログ・イベント</b>: [電子メールの送信先] セクションで選択したログ・イベント受信者が含まれます。</li> <li>・ <b>ポスト</b>: [フォーム送信先 URL] ボックスで入力した URL が含まれます。</li> <li>・ <b>スクリプト</b>: [スクリプト] ボックスで選択したスクリプトが含まれます。</li> <li>・ <b>SNMP トラップ</b>: [SNMP トラップ] リストで選択した SNMP トラップが含まれます。</li> <li>・ <b>サウンド</b>: (この列は空です)。</li> <li>・ <b>トリガ</b>: (この列は空です)。</li> </ul>

## HP Operations Manager 統合設定

**注:** [HP Operations Manager 統合設定] パネルは、HP 操作エージェントがインストールされて、HPOM/BSMサーバに接続され、かつ、[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで **[ イベント送信の有効化 ]** が選択された場合にのみ使用できます（ **[プリファレンス] > [統合プリファレンス] > [HP Operations Manager 統合メイン設定]** ）。詳細については、SiteScope ヘルプの「HP Operations Manager 製品との統合」にある「SiteScope を使用して HPOM または OMi にイベントを送信する方法」を参照してください。 [HP ソフトウェア統合サイト](http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39) では、本書の最新版が利用できるかどうかを確認できます（Windows の場合：<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=39>、UNIX の場合：<http://support.openview.hp.com/sc/solutions/integrations.jsp?intid=628>）。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
イベント送信	警告がトリガされると HPOM/BSM サーバへのイベントの送信を有効にします。 <b>標準設定値:</b> 選択されている
モニタのイベント・マッピングの使用	選択した場合、警告がトリガされると、SiteScope は警告をトリガしたモニタに関連付けられたイベント・マッピング・テンプレートを使用してイベントを送信します。  クリアした場合、SiteScope は警告イベント属性値を使用してイベントを送信します。これらの値は、選択した警告イベント・マッピング・プリファレンスに従って入力されます。次の <b>[ イベント マッピング ]</b> 設定は、警告イベント・マッピングが使用される場合にのみ使用できます。  <b>標準設定値:</b> 選択されていない
イベント・マッピング	モニタ・インスタンスのイベントの送信に使用するイベント・マッピング・テンプレート。このテンプレートには、警告および警告をトリガしたモニタ（測定値レベルの実行時データは利用不可）の SiteScope 実行時データとイベント送信に使用される属性値のマッピングが含まれます。  必要なイベント・マッピング・テンプレートを選択するか、標準設定のマッピングを使用します。 <b>[新規]</b> または <b>[編集]</b> をクリックして共通イベント・マッピング・ダイアログ・ボックスを開き、新しいイベント・プリファレンスを設定するか、既存のイベント・プリファレンスを変更します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <b>[ [新規イベントマッピング] / [イベントマッピングの編集] ダイアログ・ボックス ]</b> (560ページ) を参照してください。  <b>注:</b> この設定は、 <b>[モニタのイベント マッピングの使用]</b> がクリアされている場合にのみアクティブになります。



UI 要素	詳細
イベント・タイプ・インジケータ	<p>このイベントと一緒に送信される警告のイベント・タイプ・インジケータを入力できます。これは、測定値とインジケータの間のマッピングです。この設定は任意で、インジケータがなくてもイベントは送信されます。</p> <p>トリガされた警告のCIタイプは、警告（グループの警告や測定値ごとにCIタイプをレポートするモニタの警告）の設定時に毎回わかっているわけではないので、インジケータを手動で入力すると役に立ちます。</p> <p><b>注:</b>警告インスタンスは複数のモニタに関連付けられているか、複数のカウンタによってトリガされる場合があるため、インジケータは自動的に解決できません。</p>
イベント・タイプ・インジケータ状態	<p>このイベントと一緒に送信されるイベント・タイプ・インジケータの状態を入力できます。これは、この状態変化を発生させるしきい値にマップされているイベント重大度レベル（不明、正常域、注意域、警戒域、重要警戒域、危険域）です。このフィールドの設定は任意で、インジケータ状態がなくてもイベントは送信されます。</p> <p><b>注:</b>警告インスタンスは複数のモニタに関連付けられているか、複数のカウンタによってトリガされる場合があるため、インジケータ状態は自動的に解決できません。</p>

## 警告の有効化 / 無効化

警告の生成を手動で制御するために使用します。監視対象のシステムが保守のためにオフラインになっている場合や、警告の受信者が一定期間受信不可能な場合などに役立ちます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
警告を有効化	無効化された警告アクションが上書きされ、定義した条件に基づいて警告が実行されるようになります。
警告を無期限に無効化	<p>このラジオ・ボタンをクリアして警告定義を更新するまで、警告の条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されないようになります。</p> <p><b>注:</b> このオプションを使用すると、一時的な条件に対応するために警告が無効になっている場合、予想される警告機能が失われる場合があります。後でこの状態を確認し、必要に応じて警告定義を手動で有効にしてください。</p>

UI 要素	詳細
警告を次の時間設定で無効化: <期間>	指定した期間、警告条件が満たされても警告アクションの実行を停止します。警告はすぐに無効になり、期間が終了すると再度有効になります。
<time1> から <time2>へ 1 回限定のスケジュールに基づいて無効化	指定した期間、条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されなくなります。警告は、この期間の開始時に無効になり、この期間を過ぎると再度有効になります。
無効化の説明	無効操作の目的の詳細（任意指定）。

## フィルタ設定

入力した基準に一致するモニタのみに警告アクションを制限するフィルタ条件を作成します。大量のモニタに警告を定義しておき、選択したリスト内の特定のモニタのみが警告をトリガするようにフィルタを適用できます。これによって警告定義の作成と警告管理を簡素化できます。警告のフィルタリングを無効にするには、該当するフィールドをクリアして、警告定義を更新します。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
名前の一致	<p>名前の一部に特定のテキストが含まれるものを除き、関連付けられたグループまたはモニタすべてに対する警告を停止します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>名前の文字列パターンを照合するための正規表現をこのテキスト・ボックスに入力します。詳細については、<a href="#">「正規表現」(187ページ)</a>を参照してください。</li><li>フィルタ基準として使用するモニタ名文字列の全部または一部を入力します。たとえば、文字列 URL:を入力すると、この警告は名前にURL:が含まれるモニタに制限されます。</li></ul> <p><b>注：</b>照合では大文字と小文字が区別されます。</p>
状態の一致	<p>特定の状態テキストを返したものを除き、関連付けられたモニタすべてに対する警告を停止します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>警告をトリガするモニタの状態テキストに表示される文字列を入力します。たとえば、テキスト「timeout」を入力すると、この警告に関連付けられ、タイムアウト状態になっているモニタのみが警告をトリガします。</li><li>状態の文字列パターンを照合するための正規表現をこのテキスト・ボックスに入力します。詳細については、<a href="#">「正規表現」(187ページ)</a>を参照してくだ</li></ul>

UI 要素	詳細
	さい。 注：照合では大文字と小文字が区別されます。
モニタ・タイプ の一致	警告アクションを、この警告に関連付けられている一連のモニタの中の特定のモニタ・タイプに制限します。[モニタ タイプ リスト] から対象とするモニタ・タイプを選択し、[選択されたモニタ タイプ リスト] ボタンに移動します。
タグの一致	警告アクションを、タグ値を選択したこの警告と関連付けられているモニタのみに制限します。含めるタグを選択します。


タグの検索/フィルタ


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。  概念の詳細については、 <a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」(78 ページ)</a> を参照してください。
タグの追加	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」(87ページ)</a> を参照してください。





[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス







このダイアログ・ボックスでは、警告がトリガされたときに実行されるアクションを選択できます。

アクセス方法	<ol style="list-style-type: none"><li>警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、[新規作成] &gt; [警告] を選択するか、[警告] タブ（モニタまたはテンプレート・ビュー）で既存の警告を選択して、[警告の編集]  ボタンをクリックします。</li></ol>
--------	--

	<p>2. <b>【新規警告】</b> または <b>【警告の編集】</b> ダイアログ・ボックスの <b>【警告時のアクション】</b> セクションで、<b>【新規警告アクション】</b>  ボタンをクリックします。</p>
<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一度に選択できる警告のタイプは1つのみです。</li> <li>警告を編集する場合、アクションの種類は変更できません。たとえば、警告のアクションの種類が電子メールの場合、<b>【サウンド】</b> には変更できません。</li> <li>ページまたは SMS アクション・タイプを使用した警告の作成オプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope ではページおよび SMS 警告アクション・タイプのサポートを削除する予定です。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<p><a href="#">「警告の設定方法」 (1235ページ)</a></p>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li><a href="#">「SiteScope 警告の設定」 (1231ページ)</a></li> <li><a href="#">「【新規警告】 / 【警告の編集】 ダイアログ・ボックス」 (1256ページ)</a></li> <li><a href="#">「【警告アクション】 ダイアログ・ボックス」 (1265ページ)</a></li> </ul>



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
 <b>データベース</b>	<p>問題の詳細を含む警告メッセージを SQL データベースへのレコードとして送信します。次にデータベース・ツールを使用して、監視データのより詳細な記録、並べ替え、レポート作成を提供できます。データベース警告の詳細については、<a href="#">「データベース警告のプロパティ」 (1268ページ)</a>を参照してください。</p>
 <b>モニタの無効化 / 有効化</b>	<p>別のモニタでの状態の変化に基づいて、モニタまたはモニタ・グループを自動的に有効または無効にします。</p> <p><b>注：</b> このアクションは、テンプレート警告の作成時には使用できません。モニタの無効化 / 有効化警告の詳細については、<a href="#">「モニタの無効化 / 有効化警告のプロパティ」 (1269ページ)</a>を参照してください。</p>
 <b>電子メール</b>	<p>1つ以上の電子メール・アドレスに、警告をトリガした条件の詳細を含む電子メール・メッセージを送信します。電子メール警告の詳細については、<a href="#">「電子メール警告のプロパティ」 (1270ページ)</a>を参照してください。</p>
 <b>イベント・コンソール</b>	<p>SiteScope イベント・コンソールにイベントを送信します。イベント・コンソール警告の詳細については、<a href="#">「イベント・コンソール警告のプロパティ」 (1272ページ)</a>を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
 <b>ログ・イベント</b>	Microsoft Windows イベント・ログにイベントのログを記録します。  イベント・ログのエントリは、イベント・ビューアで表示、およびイベント・ログから中央管理された警告を実行するほかのソフトウェア・ユーティリティで使用できます。ログ・イベント警告の詳細については、 <a href="#">「ログ・イベント警告のプロパティ」 (1273ページ)</a> を参照してください。
 <b>ポスト</b>	CGI POST メッセージを CGI スクリプト、サーブレット、その他の CGI 対応プログラムに送信します。メッセージには、モニタ条件の詳細が含まれます。送信警告の詳細については、 <a href="#">「送信警告のプロパティ」 (1274ページ)</a> を参照してください。
 <b>スクリプト</b>	警告条件に一致した場合に SiteScope でスクリプトまたはバッチ・ファイルを実行できます。スクリプトまたはバッチ・ファイルで、コマンド・ライン・エントリから呼び出せる任意の言語でシステム・コマンドまたはプログラムを実行できます。  この警告を使用して、重大状態または障害に自動的に対応する復旧スクリプト（サーバの再起動やファイルのコピーなど）を実行できます。スクリプト警告の詳細については、 <a href="#">「スクリプト警告のプロパティ」 (1276ページ)</a> を参照してください。
 <b>SNMP トラップ</b>	SNMP 管理コンソールまたはホストに SNMP トラップを送信します。SNMP エージェントでは通常サポートされないシステム・パラメータの SNMP レポートが使用可能になります。SNMP トラップ警告の詳細については、 <a href="#">「SNMP トラップ警告のプロパティ」 (1279ページ)</a> を参照してください。
 <b>サウンド</b>	イベントが検出されると、SiteScope が稼働するマシン上でサウンドまたはオーディオ・ファイルを再生します。サウンド警告の詳細については、 <a href="#">「サウンド警告のプロパティ」 (1280ページ)</a> を参照してください。
 <b>トリガ</b>	特定のアクションを呼び出すことなく警告をトリガします。追加でアクションを実行することなく、警告によってイベント情報を HPOM または BSM に送信しようとする場合に使用されます。警告の [HP Operations Manager 統合設定] パネルで [イベント送信] が選択されている必要があります。トリガ警告の詳細については、 <a href="#">「トリガのプロパティ」 (1281ページ)</a> を参照してください。

## [警告アクション] ダイアログ・ボックス

[警告アクション] ダイアログ・ボックスでは、警告のタイプに固有の設定を定義し、警告がトリガされたときに実行するアクションを設定します。



アクセス方法	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 警告を定義する SiteScope, グループ, またはモニタを右クリックし, <b>【新規作成】</b> &gt; <b>【警告】</b> を選択するか, <b>【警告】</b> タブ (モニタまたはテンプレート・ビュー) で既存の警告を選択して, <b>【警告の編集】</b>  ボタンをクリックします。</li> <li>2. <b>【新規警告】</b> または <b>【警告の編集】</b> ダイアログ・ボックスの <b>【警告時のアクション】</b> セクションで, <b>【新規警告アクション】</b>  ボタンをクリックします。 <b>【アクションタイプ】</b> ダイアログ・ボックスで, アクションの種類を選択します。</li> </ol>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>【警告アクション】</b> ダイアログ・ボックスは, 次の3つの表示枠で構成されます。</li> <li>• <b>アクションの種類の設定</b>: <b>【アクションタイプの設定】</b> は, 「<b>【アクションタイプ】</b> ダイアログ・ボックス」 (1263ページ) で選択した警告アクションの種類により異なります。アクション・タイプ・プロパティの詳細については, 「<b>【アクション・タイプの設定パネル】</b> (1267ページ) を参照してください。</li> <li>• <b>状態トリガ</b>: 詳細については, 「<b>【状態トリガ】</b> パネル」 (1282ページ) を参照してください。</li> <li>• <b>トリガの頻度</b>: 詳細については, 「<b>【トリガの頻度】</b> パネル」 (1283ページ) を参照してください。</li> </ul>
関連タスク	<p><b>「警告の設定方法」</b> (1235ページ)</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>「SiteScope 警告の設定」</b> (1231ページ)</li> <li>• <b>「【新規警告】 / 【警告の編集】 ダイアログ・ボックス」</b> (1256ページ)</li> </ul>

次の要素はすべてのアクション・タイプに共通します。

UI 要素	詳細
新規変数	<p>クリックして新規変数を定義します。詳細については, 「<b>【新規変数】</b> ダイアログ・ボックス」 (824ページ) を参照してください。</p> <p>このボタンを使用できるのは, テンプレート警告の <b>【新規警告】</b> ダイアログ・ボックス, <b>【警告の編集】</b> ダイアログ・ボックス, および <b>【新規アクション】</b> ダイアログ・ボックスからに制限されます。</p>

## アクション・タイプの設定パネル

このパネルのコンテンツは、[アクションタイプ] ダイアログ・ボックスで選択されたアクション・タイプによって異なります。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、[新規作成] > [警告] を選択するか、[警告] タブ（モニタまたはテンプレート・ビュー）で既存の警告を選択して、[警告の編集]  ボタンをクリックします。[新規警告] または [警告の編集] ダイアログ・ボックスの [警告時のアクション] セクションで、[新規警告アクション]  ボタンをクリックします。[アクションタイプ] ダイアログ・ボックスで、アクションの種類を選択します。
重要な情報	ページャまたは SMS アクション・タイプを使用した警告の作成オプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope ではページャおよび SMS 警告アクション・タイプのサポートを削除する予定です。
関連タスク	<a href="#">「SiteScope 警告の設定」(1231ページ)</a>
関連情報	<a href="#">「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」(1265ページ)</a>

### 本項の内容

- ・ [「データベース警告のプロパティ」\(1268ページ\)](#)
- ・ [「モニタの無効化 / 有効化警告のプロパティ」\(1269ページ\)](#)
- ・ [「電子メール警告のプロパティ」\(1270ページ\)](#)
- ・ [「イベント・コンソール警告のプロパティ」\(1272ページ\)](#)
- ・ [「ログ・イベント警告のプロパティ」\(1273ページ\)](#)
- ・ [「送信警告のプロパティ」\(1274ページ\)](#)
- ・ [「スクリプト警告のプロパティ」\(1276ページ\)](#)
- ・ [「SMS 警告のプロパティ」\(1278ページ\)](#)
- ・ [「SNMP トラップ警告のプロパティ」\(1279ページ\)](#)
- ・ [「サウンド警告のプロパティ」\(1280ページ\)](#)
- ・ [「トリガのプロパティ」\(1281ページ\)](#)



## データベース警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アクション名	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。
データベース接続 URL	<p>データベースに接続する URL を入力します。</p> <p>例 :Windows では、[設定] コントロール・パネルの ODBC データ・ソース・マネージャを使用して、「test」という名前の接続を作成し、データベース接続 URL に「jdbc:odbc:test」と入力します。</p> <p><b>Windows 認証使用時の注意事項 :</b> Windows 認証を使用してデータベースにアクセスする場合、接続 URL として「jdbc:mercury:sqlserver:// &lt;サーバ名または IP アドレス&gt;:1433;DatabaseName= &lt;データベース名&gt;; AuthenticationMethod=type2」を、データベース・ドライバとして「com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver」を入力します。SiteScope サービスの実行元であるアカウントの Windows ユーザ資格情報を使用してデータベースへの接続が確立されるため、[データベース ユーザ名] ボックスおよび [データベース パスワード] ボックスは空のままにします。</p>
データベースドライバ	<p>JDBC データベース・ドライバの Java クラス名を入力します。</p> <p>SiteScope では、プライマリとバックアップのデータベース接続の両方に同じデータベース・ドライバを使用します。カスタム・ドライバを使用する場合、&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; /java ディレクトリにそのドライバをインストールする必要があります。SiteScope のデータベース・ドライバの設定の詳細については、「データベース・クエリ・モニタ」を参照してください。</p>
SQL ステートメント	<p>データベースへの警告の追加に使用する SQL ステートメントを入力します。</p> <p>山括弧 (&lt; および &gt;) で囲まれた項目は、警告をトリガしたモニタのフィールドで置換されます。</p> <p><b>標準設定値 :</b> INSERT INTO SiteScopeAlert VALUES('&gt;time&lt;', '&gt;group&lt;', '&gt;name&lt;', '&gt;state&lt;')</p>
データベース ユーザ名	必要に応じて、データベースに接続するユーザ名を入力します。
データベース パスワード	必要に応じて、データベースに接続するパスワードを入力します。



UI 要素	詳細
バックアップ・データベース接続 URL	<p>SiteScope 警告のログ記録にバックアップ・データベースが必要で、メインのデータベース接続が使用できない場合に使用するバックアップ・データベース接続の URL を入力します。</p> <p>例 :バックアップ・データベース接続の ODBC 接続の名前が testdb2 の場合、URL に「jdbc:odbc:testdb2」と入力します。</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。スケジュール・プリファレンスで作成された既存のスケジュールを選択または新規スケジュールを作成することができます。詳細については、「<a href="#">スケジュール・プリファレンス</a>」(723ページ)を参照してください。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 毎日, 全日</p>

## モニタの無効化 / 有効化警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アクション名	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。
グループ / モニタ・アクション	<p>警告がトリガされたときに、この警告アクションでモニタを無効化するか有効化するかを選択します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 無効化</p>
ターゲット	この警告のアクションによって影響を受けるグループおよびモニタを選択します。【ターゲット】リストには、SiteScope に設定されたすべてのグループおよびモニタが含まれます。この警告アクションのグループ内で実行中のグループまたはモニタを選択し、【選択済みターゲット】リストに追加できます。

UI 要素	詳細
	<p><b>例：</b>この警告アクションがディスク領域モニタに設定されているとします。このモニタに対してトリガされた警告によって、同じサーバを監視しているすべての CPU モニタを無効にできます。</p> <p><b>標準設定値：</b>選択されていない</p>
<b>スケジュール</b>	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。スケジュール・プリファレンスで作成された既存のスケジュールを選択または新規スケジュールを作成することができます。詳細については、<a href="#">「スケジュール・プリファレンス」 (723ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値：</b>毎日、全日</p>
<b>選択したグループのサブグループにアクションを適用する</b>	<p>選択されている場合、警告アクションは選択したグループのサブグループにも適用されます。</p> <p><b>標準設定値：</b>選択されていない</p>

## 電子メール警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>アクション名</b>	<p>警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。</p> <p><b>例：</b>すべての Solaris マシンの CPU をチェックして、警告がトリガされたときに電子メール・メッセージを送信するように警告を設定する場合、[一般設定] の警告名を Solaris_CPU、アクション名を send_email に指定できます。</p>
<b>受信者</b>	<p>[電子メール警告受信者] リストから、警告の 1 人以上の電子メール受信者を選択します。このリストには、[電子メールのプリファレンス] で設定した受信者が表示されます。詳細については、<a href="#">「電子メール・プリファレンス」 (577ページ)</a>を参照してください。</p>

UI 要素	詳細
	<p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p> <p><b>注</b> : 「<a href="#">[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス</a>」 (581 ページ) で <b>SMTP SSL</b> が選択されている場合、電子メールは SSL SMTP サーバ経由でセキュアに送信されます。</p>
<b>アドレス</b>	<p>1 つ以上の電子メール・アドレスをカンマ (",") で区切り入力します。このアドレスは、公式規格の RFC 2822 に従って構文が有効かチェックされますが、その他のエラー（電子メールのユーザが存在するかどうかなど）はチェックされません。</p> <p><b>注</b> : <b>[アドレス]</b> ボックスにデータが含まれる場合、<b>[電子メール警告受信者]</b> リストからの選択は無視されます。</p>
<b>件名</b>	<p>電子メール警告アクション・メッセージの件名フィールド・テンプレートを選択します。Typical テンプレートには次の値が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• メッセージの件名 (SiteScope 警告)</li> <li>• モニタ警告のカテゴリ (「エラー」, 「警告」, 「OK」, 「データなし」)</li> <li>• モニタの名前またはモニタ・タイトル</li> <li>• モニタにより返された状態</li> <li>• 警告を送信した SiteScope インストールのアドレス (括弧で表示)</li> </ul> <p><b>標準設定値</b> :Typical</p> <p><b>例</b> : SiteScope警告, エラー, URL : http://gate.company.com, 不明なホスト名 (gate.company.com)</p>
<b>スケジュール</b>	<p>電子メール受信者には事前定義されたスケジュールがあります。</p>
<b>テンプレート</b>	<p>電子メール警告アクションのテンプレートを選択します。</p> <p>短い電子メール・メッセージの場合は、電子メール警告アクションで <b>ShortMail</b> テンプレートを選択します。その他のオプションでは、電子メール警告に含める詳細のレベルを選択できます。</p> <p><b>標準設定値</b> : Typical。このテンプレートには次の値が含まれます。 Monitor:&lt;groupID&gt;:&lt;name&gt;; Tags &lt;tag&gt;; Group:&lt;group&gt;; Status:&lt;state&gt;; Sample #: &lt;sample&gt;; Time:&lt;time&gt;</p> <p><b>注</b> : &lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\templates.mail ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。利用可能なテンプレートの詳細については、テキスト・エディタでこのディレクトリ内のファイルを開き、各オプションで</p>

UI 要素	詳細
	送信される値を参照してください。詳細については、 <a href="#">「警告テンプレートのカスタマイズ」 (1286ページ)</a> を参照してください。
警告を解除するようアクションをマークする	<p>状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。</p> <p>標準設定値 :選択されていない</p>

イベント・コンソール警告のプロパティ  
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アクション名	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。スケジュール・プリファレンスで作成された既存のスケジュールを選択または新規スケジュールを作成することができます。詳細については、<a href="#">「スケジュール・プリファレンス」 (723ページ)</a>を参照してください。</p> <p>テンプレート警告のためのみにこのフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。</p> <p>標準設定値 : 毎日, 全日</p>
イベント・マッピング	<p>イベント・コンソールのイベント・マッピング・テンプレートを選択または新規イベント・マッピングを作成します。このテンプレートには、SiteScope 実行時データとイベント送信に使用される属性値の間のマッピングが含まれます。イベントは、メトリック・ステータスの変更イベントがトリガされたときイベント・コンソールに送信されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[新規イベントマッピング] / [イベントマッピングの編集] ダイアログ・ボックス」 (560ページ)</a>を参照してください。</p>

## ログ・イベント警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アクション名	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。
送信先	イベントがイベント・ログに追加される Windows マシンの名前を入力します。 <b>標準設定値</b> :localhost (SiteScope が稼動しているマシン)。
テンプレート	ログ・イベント・タイプの警告アクション用のテンプレートを選択します。 <b>標準設定値</b> : Typical <b>注</b> : <SiteScope のルート・ディレクトリ>\templates.eventlog で、既存のテンプレートの内容を表示するか、別のテンプレートを追加できます。警告テンプレートの詳細については、 <a href="#">「警告テンプレートのカスタマイズ」(1286ページ)</a> を参照してください。
メッセージ	イベント・ログに送信されるメッセージのプレフィックスを入力します。 次の文字列を入力して警告されたモニタのコンテキストで SiteScope を開くリンクを追加できます。 Login:<sitescopeurl>/servlet/Main?activeid=<_internalId> &activerighttop=dashboard&view=new&dashboard_view=Details&dashboard_model=true&dashboard_favorite=test.
イベント・ソース	ログが記録されたイベントの <ソース> フィールドの設定に使用する文字列を入力します。 <b>構文</b> : テキストで指定する必要があります。 <b>標準設定値</b> : SiteScope
イベント ID	ログが記録されたイベントの <ID> フィールドの設定に使用する数字を入力します。 <b>構文</b> : 数値で指定する必要があります。 <b>標準設定値</b> : 1000
イベント タイプ	イベントに使用されるイベント・タイプを選択します。 <b>標準設定値</b> : モニタの状態の使用。つまり、イベント・タイプは、モニタの状態が「エラー」の場合は Error, 「警告」の場合は Warning, 「正常」の場合は

UI 要素	詳細
	Informational となります。
イベント カテゴリ ID	<p>この警告で作成されたイベントの &lt;カテゴリ ID&gt; として使用される数字を入力します。</p> <p><b>標準設定値 : 0</b></p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。スケジュール・プリファレンスで作成された既存のスケジュールを選択または新規スケジュールを作成することができます。詳細については、「<a href="#">スケジュール・プリファレンス</a>」(723ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定値 : 毎日, 全日</b></p>
警告を解除するようアクションをマークする	<p>状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。</p> <p><b>標準設定値 : 選択されていない</b></p>

## 送信警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アクション名	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。
フォーム送信先 URL	<p>SiteScope から警告に送信する CGI スクリプトの URL を入力します。次に例を示します。</p> <p>http://admindb.server.net/cgi-bin/error.pl。</p> <p><b>構文 :</b> 文字列 <b>http://</b> を含める必要があります。URL アドレスの構文が有効か</p>

UI 要素	詳細
	チェックされます。
テンプレート	<p>送信警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。</p> <p><b>標準設定値</b> : Typical</p> <p><b>注</b> : &lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\templates.post ディレクトリで、既存のテンプレートの内容を表示するか、別のテンプレートを追加できます。警告テンプレートの詳細については、<a href="#">「警告テンプレートのカスタマイズ」(1286ページ)</a>を参照してください。</p>
認証ユーザ名	<p>送信警告で CGI スクリプトの URL にアクセスするユーザ名を入力します。ユーザ名が不要な CGI スクリプトもあります。</p> <p>または、このエントリを空白のままにし、[一般設定]（[プリファレンス] &gt; [一般プリファレンス]）の[標準設定の認証ユーザ名]セクションにユーザ名を入力します。複数のモニタで使用する共通の認証資格情報を定義する場合、この方法を使用します。</p>
認証パスワード	<p>送信警告の認証ユーザ名のパスワードを入力します。</p> <p>または、このエントリを空白のままにし、[プリファレンス] &gt; [一般プリファレンス] の[標準設定の認証パスワード]セクションにパスワードを入力します。複数のモニタで使用する共通の認証資格情報を定義する場合、この方法を使用します。</p>
HTTP プロキシ	CGI スクリプトの URL へのアクセスに使用する、HTTP プロキシ・サーバのドメイン名とポートを入力します。
プロキシ サーバのユーザ名	<p>プロキシ・サーバで必要な場合、CGI スクリプトの URL にアクセスするユーザ名を入力します。</p> <p>プロキシ・サーバがプロキシ認証をサポートしている必要があります。</p>
プロキシ サーバのパスワード	<p>プロキシ・サーバで必要な場合、CGI スクリプトの URL にアクセスするパスワードを入力します。</p> <p>プロキシ・サーバがプロキシ認証をサポートしている必要があります。</p>
スケジュール	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。

UI 要素	詳細
	<p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。スケジュール・プリファレンスで作成された既存のスケジュールを選択または新規スケジュールを作成することができます。詳細については、「<a href="#">スケジュール・プリファレンス</a>」(723ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 毎日, 全日</p>

## スクリプト警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>アクション名</b>	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。
<b>Server</b>	<p>スクリプトを実行するサーバを選択します。</p> <p>スクリプト・ディレクトリは、リモート・スクリプトを SiteScope で実行できるリモート・ログイン・アカウントのディレクトリ・ツリー内にある必要があります。</p> <p><b>標準設定値</b> : SiteScope Server</p> <p><b>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。</b> このフィールドのテンプレート変数の使用を有効にするテキスト・ボックスとして、ドロップダウン・リストが表示されます。</p>
<b>スクリプト</b>	<p>選択した条件に応じて実行するスクリプトを選択します。</p> <p>カスタム・スクリプトは、必要な数だけ作成できます。カスタム・スクリプトは、&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\scripts ディレクトリまたはリモート・マシンの該当するスクリプト・ディレクトリに置きます。SiteScope では、選択したサーバのこのディレクトリにあるすべてのファイルがドロップダウン・リストに表示されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : restartServer.bat</p>
<b>パラメータ</b>	<p>スクリプトに渡すことのできる追加のモニタ・パラメータ。その例を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>スクリプト・ディレクトリのパス</li></ul>



UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>警告の原因となったモニタの名前</li> <li>モニタの現在の状態</li> <li>警告メッセージ・ファイルへのパス</li> <li>モニタの ID</li> <li>モニタ・グループ</li> </ul> <p>これらのパラメータは、それぞれ 7 番目, 8 番目, 9 番目のようにコマンド・ラインの引数として送信されます。</p> <p>スクリプトに渡すことのできるパラメータは、警告をトリガするモニタのタイプにより異なります。</p> <p><b>構文:</b> プロパティ・リストのプロパティ名変数を山括弧 (&lt; &gt;) で囲みます。たとえば、サーバ名をスクリプトに渡す場合、テキスト・ボックスに「&lt;_machine&gt;」と入力します。複数の追加パラメータを渡すには、パラメータを 1 つの空白で区切ります。これは、コマンド・ラインで引数を追加する方法と同じです。</p> <p><b>標準設定値:</b> 値なし。スクリプト警告では、コマンド・ライン引数として常に上記のパラメータをスクリプトに渡します。上記のパラメータを値に含める必要はありません。</p>
出力のエンコード	<p>スクリプト出力のエンコードを選択します。ここで指定することで、SiteScope がエンコードされたファイルの内容を正確に照合および表示できます。</p> <p><b>標準設定値:</b> windows-1252</p>
テンプレート	<p>スクリプト警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。</p> <p><b>標準設定値:</b> Typical</p> <p><b>注:</b> 既存のテンプレートの内容を表示するか、&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \templates.script ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。警告テンプレートの詳細については、<a href="#">「警告テンプレートのカスタマイズ」(1286 ページ)</a>を参照してください。</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p>

UI 要素	詳細
	<p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。スケジュール・プリファレンスで作成された既存のスケジュールを選択または新規スケジュールを作成することができます。詳細については、「<a href="#">スケジュール・プリファレンス</a>」(723ページ)を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> : 毎日, 全日</p>
<b>タイムアウト (秒)</b>	<p>タイムアウトの前にスクリプトが正常に実行されるのを待機する時間 (秒単位)。</p> <p><b>標準設定値</b> : -1 (タイムアウトなし)</p>

## SMS 警告のプロパティ

**注:** SMS アクション・タイプを使用する警告を作成するオプションは利用できなくなりました。次のバージョンの SiteScope では SMS アクション・タイプのサポートを削除する予定です。ただし、後方互換性のために、プロパティ `_enableDeprecatedAlertActions=SMS` を <SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルに追加することで、この警告アクション・タイプを有効にすることができます。値は、大文字と小文字の区別がなく、その他の値が並んでいる場合コンマで区切ります。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>アクション名</b>	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。
<b>SMS 番号</b>	<p>メッセージの宛先を識別する SMS サービスに必要な電話番号を入力します。</p> <p><b>構文</b> : 数値のみ。最大 16 桁です。</p>
<b>スケジュール</b>	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時</p>

UI 要素	詳細
	<p>の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。スケジュール・プリファレンスで作成された既存のスケジュールを選択または新規スケジュールを作成することができます。詳細については、「<a href="#">スケジュール・プリファレンス</a>」(723ページ)を参照してください。</p> <p><b>注:</b> この警告を使用できるのは Windows プラットフォームに制限されます。このテンプレート・アクションの [スケジュール] フィールドで、変数を使用できます。</p> <p><b>標準設定値:</b> 毎日, 全日</p>

## SNMP トラップ警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>アクション名</b>	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。
<b>SNMP トラップ</b>	<p>警告をトリガする 1 つ以上の SNMP トラップを選択します。</p> <p><b>標準設定値:</b> 選択されていない</p>
<b>テンプレート</b>	<p>SNMP トラップ警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。</p> <p>テンプレートの各行は、別々の SNMP 変数として送信されます。次の方法でテンプレート・ファイルを変更することもできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [Agent Host:&lt;hostname-or-ip-address&gt;] をテンプレートの最初の行に使用し、トラップ元としてこのホスト名または IP アドレスのあるトラップを送信します。標準設定では、SiteScope が稼動しているマシンの IP アドレスがトラップ元として使用されます。</li> <li>• [Command:&lt;command name&gt;] を使用し、標準設定のコマンドを上書きします。</li> <li>• [Type:&lt;var-type&gt;] を使用し、オブジェクトの標準設定のタイプを上書きします。</li> </ul> <p>[OID:&lt;object id&gt;] 標準設定のオブジェクト ID を変更します。たとえば、var-binding 変数オブジェクト ID の変更にご利用します。</p> <p><b>標準設定値:</b> Typical</p>

UI 要素	詳細
	<p>注: 既存のテンプレートの内容を表示するか、&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \templates.snmp ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。警告テンプレートの詳細については、<a href="#">「警告テンプレートのカスタマイズ」(1286ページ)</a>を参照してください。</p>
メッセージ	この警告によって送信される、SNMP トラップに追加する任意のプレフィックスを入力します。
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。スケジュール・プリファレンスで作成された既存のスケジュールを選択または新規スケジュールを作成することができます。詳細については、<a href="#">「スケジュール・プリファレンス」(723ページ)</a>を参照してください。</p> <p>テンプレート警告のためのみにこのフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。</p> <p><b>標準設定値:</b> 毎日, 全日</p>
警告を解除するようアクションをマークする	状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。

## サウンド警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
アクション名	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。
サウンド・ファイル	<p>&lt; SiteScope のルート・ディレクトリ &gt; \templates.sound ディレクトリから再生されるサウンドを選択します。 .au のサフィックスの AU 形式 (8 ビット, &amp;micro;law, 8000 Hz, 1 チャンネル) で別のサウンドをディレクトリに追加できます。</p>

UI 要素	詳細
	<b>標準設定値</b> :Default
<b>スケジュール</b>	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。スケジュール・プリファレンスで作成された既存のスケジュールを選択または新規スケジュールを作成することができます。詳細については、「<a href="#">スケジュール・プリファレンス</a>」(723ページ)を参照してください。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して利用可能な変数のリストを表示します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 毎日, 全日</p>

## トリガのプロパティ



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>アクション名</b>	<p>警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。</p> <p><b>例</b> : すべての Solaris マシンの CPU をチェックして、警告がトリガされたときに通知を HP Operations Manager に送信するように警告を設定する場合、[一般設定] の警告名を Solaris_CPU, アクション名を notify OM に指定できます。</p>
<b>スケジュール</b>	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。スケジュールを使用すると、適切ではない時間または業務時間外に警告アクションが実行されないように設定することができます。</p> <p>たとえば、モニタを毎日 24 時間実行するが、警告アクションは 7 時から 22 時の間にだけ実行する場合は、スケジュールの範囲を選択して 7 時から 22 時の間だけ有効にします。スケジュール・プリファレンスで作成された既存のスケジュールを選択または新規スケジュールを作成することができます。詳細については、「<a href="#">スケジュール・プリファレンス</a>」(723ページ)を参照してください。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力し</p>

UI 要素	詳細
	て利用可能な変数のリストを表示します。 <b>標準設定値</b> : 毎日, 全日

## [状態トリガ] パネル

[状態トリガ] パネルは、警告アクションをトリガするオブジェクト・タイプの状態の選択に使用します。ある状態から別の状態に変化したときに警告がトリガされます。警告アクションをトリガするカテゴリを選択します。

<b>アクセス方法</b>	警告を定義する SiteScope, グループ, またはモニタを右クリックし, <b>[新規作成]</b> > <b>[警告]</b> を選択するか, <b>[警告]</b> タブ (モニタまたはテンプレート・ビュー) で既存の警告を選択して, <b>[警告の編集]</b>  ボタンをクリックします。 <b>[新規警告]</b> または <b>[警告の編集]</b> ダイアログ・ボックスの <b>[警告時のアクション]</b> セクションで, <b>[新規警告アクション]</b>  ボタンをクリックします。 <b>[アクションタイプ]</b> ダイアログ・ボックスで, アクションの種類を選択します。 <b>注</b> : 解析アラートはモニタにのみ設定できます。設定操作は, モニタ・ビューからのみ実行できます。
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「SiteScope 警告の設定」 (1231ページ)</a>
<b>関連情報</b>	<a href="#">「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」 (1265ページ)</a>



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>利用不可</b>	以前は使用可能だった監視対象マシンが使用不能に変化した場合, 警告がトリガされます。
<b>エラー</b>	モニタが報告するステータスがそれまでのステータスから変化した場合, 警告がトリガされます (通常の警告の標準設定オプション)。
<b>注意域</b>	モニタが報告するステータスがそれまでのステータスから変化した場合, 警告がトリガされます。
<b>良好</b>	モニタが報告するステータスがそれまでのステータスから変化した場合, 警告

UI 要素	詳細
	がトリガされます。
解析	(解析アラートでのみ使用可能) モニタのベースラインしきい値を超えた場合、警告がトリガされます (解析アラートの標準設定オプション)。詳細については、 <a href="#">「予測解析の設定」(1368ページ)</a> を参照してください。

## [トリガの頻度] パネル

[トリガの頻度] パネルは、トリガの頻度の選択に使用します。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、 <b>[新規作成]</b> > <b>[警告]</b> を選択するか、 <b>[警告]</b> タブ (モニタまたはテンプレート・ビュー) で既存の警告を選択して、 <b>[警告の編集]</b>  ボタンをクリックします。 <b>[新規警告]</b> または <b>[警告の編集]</b> ダイアログ・ボックスの <b>[警告時のアクション]</b> セクションで、 <b>[新規警告アクション]</b>  ボタンをクリックします。 <b>[アクションタイプ]</b> ダイアログ・ボックスで、アクションの種類を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>使用可能なオプションは、<a href="#">「[状態トリガ] パネル」(1282ページ)</a>で選択した内容により異なります。</li><li>このオプションの詳細については、<a href="#">「SiteScope 警告が送信される時期について」(1237ページ)</a>を参照してください。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「SiteScope 警告の設定」(1231ページ)</a>
関連情報	<a href="#">「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」(1265ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
エスカレート、次のアクション <> が、<N> 回エラー状態だった場合	<p>作成する警告アクションが別の警告アクションに依存する場合、このオプションを選択します。この警告アクションが依存する別の警告アクションの名前を選択し、この警告アクションがトリガされる前に別の警告アクションがトリガされる回数を選択する必要があります。</p> <p><b>例</b> :特定の条件に一致したときにサウンド警告を送信する警告アクションを作成したとします。サウンド警告アクションが3回トリガされたときに、電子メール警告を送信するようにします。サウンド警告アクションの名前と3を</p>

UI 要素	詳細
	<p>選択します。</p> <p><b>注:</b> このオプションは、警告に別の警告アクションが定義されている場合にのみ表示されます。</p>
<b>常時: 条件が最低 &lt;N&gt; 回</b>	<p>警告条件が少なくとも N 回発生後の最初のトリガ以降、警告条件が再度一致するたびに警告がトリガされます。</p> <p>警告が最初にトリガされる前に、警告条件が一致する必要がある最小回数を入力します。</p> <p><b>構文:</b> 数値のみ</p> <p><b>範囲:</b> 1-99</p>
<b>1 回のみ: 条件がちょうど &lt;N&gt; 回</b>	<p>警告条件が N 回一致した後に、1 回のみ警告がトリガされます。</p> <p>警告がトリガされる前に、警告条件が一致する必要がある回数を入力します。</p> <p><b>標準設定値:</b> 選択されている</p> <p><b>構文:</b> 数値のみ</p> <p><b>範囲:</b> 1-99</p>
<b>最初に &lt;X&gt; 回、以後 &lt;Y&gt; 回</b>	<p>警告条件が X 回連続で発生した後に警告がトリガされ、その後は警告条件が Y 回連続で発生するたびに警告がトリガされます。たとえば、X に 3 を設定して Y に 4 を設定した場合、警告アクションは警告条件発生 の 3 回目、7 回目、11 回目のように実行されます。</p> <p><b>構文:</b> 数値のみ</p> <p><b>範囲:</b> 1-99</p>
<b>1 回のみ: &lt;N&gt; 件のグループ・エラーの後</b>	<p>「状態トリガ」パネルで「エラー」を選択した場合にこのオプションが表示されます。</p> <p>グループ内のいずれかのモニタが警告を N 回連続で報告した後にのみ、警告がトリガされます。</p> <p><b>注:</b> このオプションは SiteScope グループでのみ使用できます。</p>
<b>1 回のみ: このグループ内のすべてのモニタがエラー状態になった後</b>	<p>「状態トリガ」パネルで「エラー」を選択した場合にこのオプションが表示されます。</p> <p>警告は、初めてグループ内のすべてのモニタ（サブグループのモニタを除く）がエラー状態になったときにトリガされます。</p>



UI 要素	詳細
	注：このオプションは SiteScope グループでのみ使用できます。
モニタが以前に error/warning 少 なくとも <N> 回	<p>〔状態トリガ〕パネルで〔正常〕または〔警告〕を選択した場合にこのオプションが表示されます。</p> <p>このオプションは、対象モニタまたはグループが次のいずれかの状態を報告するまで、警告のトリガを抑制します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>警告カテゴリが「正常」の場合、「エラー」または「警告」</li><li>警告カテゴリが「警告」の場合、少なくとも入力した回数での「正常」または「エラー」</li></ul>

## 第102章: 警告テンプレートのカスタマイズ

SiteScope では、警告メッセージおよびレポートを生成するときにテンプレートを使用します。ほとんどの場合、警告の作成時には [警告] ページで使用するテンプレートを選択します。既存のテンプレートをカスタマイズするか、既存のテンプレートをコピーして独自のテンプレートを作成できます。テキストの追加や削除、プロパティ変数の追加（「[警告、テンプレート、イベントで利用可能なプロパティ](#)」(1295ページ)のリストを参照）、テンプレートに含まれるテキストやプロパティ変数の順序の変更によって、警告テンプレートをカスタマイズできます。

### 学習事項

#### 警告テンプレートのカスタマイズの概要

カスタム警告テンプレートを SiteScope で使用できるようにするには、該当する警告タイプのテンプレートを含むディレクトリにカスタマイズした警告テンプレートを保存する必要があります。コピーおよびカスタマイズできる SiteScope 警告テンプレートが含まれるディレクトリ名のリストについては、「[警告テンプレートのディレクトリ](#)」(1287ページ)を参照してください。

これらのグループのテンプレートは、プロパティ変数マーカを含むテキスト・ファイルです。これらのテンプレートを作成または変更するには、テキスト・エディタを使用します。示されたディレクトリに保存した新規テンプレートは、[警告] ページの該当する警告で利用可能になります。

次に、電子メール警告に使用される標準設定テンプレートの例を示します。最初のセクションは警告ヘッダです。警告ヘッダの最初の行には、問題を送信した SiteScope インストールへのリンクが含まれます。これにより、問題を報告した SiteScope インストールにアクセスできます。

このリンクの下には、発生した警告の概要を示すテキスト・ブロックが表示されます。次の内容が含まれます。

- 警告をトリガしたモニタの名前。
- モニタが属するグループ。
- モニタにより報告された警告の状態。
- 状態が報告される前にモニタを実行した回数を示すサンプル ID 番号。
- エラーが発生した時刻。

```
This alert is from SiteScope at <SiteScopeURL>
Monitor:<groupID>:<name>
Group:<group>
Status:<state>
```

```
Sample #:<sample>
Time:<time>
-----Detail -----
<mainParameters>
<mainStateProperties>
```

<山括弧> 内に表示される名前は、プロパティ変数マーカーです。警告の生成時に、SiteScope によってこれらのマーカーが警告をトリガしたモニタまたはモニタ・グループの変数の対応する値に置換されます。

テンプレートのテキスト部分を追加または編集します。たとえば、上記のテンプレートの最初の行の文章を次のように変更できます。

```
< SiteScope URL > で Web 監視の警告が SiteScope によって生成されました
```

警告テンプレートのディレクトリ

次に、コピーおよびカスタマイズできる SiteScope 警告テンプレートが含まれるディレクトリ名のリストを示します。

テンプレート・グループ	詳細	場所
イベント・ログ	イベント・ログに書き込まれたデータの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.eventlog
履歴	レポートが生成された受信者に通知する電子メール・メッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.history
電子メール	電子メールで送信された警告メッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.mail
テンプレート	ページ警告のグループ、詳細、場所、ページ形式、内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.page
ポスト	送信警告によって CGI スクリプトに送信されたメッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.post

テンプレート・グループ	詳細	場所
スクリプト	スクリプト警告がトリガされたときにスクリプトに送信されたメッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.script
SNMP	SNMP トラップがトリガされたときに SNMP によって送信されたメッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > \ templates.snmp

## タスク

### 警告メッセージ内容のカスタマイズ方法

このタスクでは、SiteScope 警告テンプレートをカスタマイズして、警告メッセージの内容と形式を変更する方法について説明します。

1. SiteScope マシンの警告テンプレート・ディレクトリにアクセスできるテキスト・エディタを開きます。

SiteScope 警告テンプレートがあるディレクトリの名前のリストについては、「[警告テンプレートのディレクトリ](#)」(1287ページ)を参照してください。

2. カスタマイズする警告のタイプの既存のテンプレート・ファイルをテキスト・エディタで開きます。
3. テンプレートを変更します。警告のタイプに応じて、テキストの追加や削除、テキストまたはプロパティ変数の順序変更、ほかのプロパティ変数の追加ができます。特定のプロパティを追加するには、該当のプロパティ変数名を山括弧のペア (< >) の間に入れてテンプレートに追加します。

特定のプロパティ変数のリストについては、「[警告、テンプレート、イベントで利用可能なプロパティ](#)」(1295ページ)を参照してください。

4. 該当の警告のタイプのディレクトリ内に、一意のファイル名で変更を保存します。新しいテンプレートが [Action Type Settings Template] ドロップダウン・リストに追加されます。

### 電子メール警告メッセージの短縮方法

電子メール警告の長さを短くするには、不要な情報を表示するプロパティを削除します。たとえば、特定の警告の時間を報告する必要がない場合、<time> プロパティをテンプレートから削除できます。

**ヒント:** カスタマイズするテンプレートのベースとして、Typical テンプレート (標準設定) を使用することをお勧めします。

1. <SiteScope のルート・ディレクトリ>\templates.mail ディレクトリで、Typical テンプレート・ファイルを開きます。Time:<time> という行を削除します。
2. 新しいファイル名で変更を保存します。

### SNMP 警告メッセージの変更方法

SNMP モニタの状態ではなく、「Error」状態のカウンタとその値のリストが表示されるように SNMP 警告メッセージを変更できます。これにより、「Error」のしきい値を超えたカウンタのみがメッセージに表示されるようになり、ほかのすべてのカウンタは除外されます。

1. <SiteScope のルート・ディレクトリ>\templates.SNMP ディレクトリで、Default テンプレート・ファイルをテキスト・エディタで開きます。このファイルには次の行が含まれています。  
SiteScope\<group>\<name>\<sample>\<state>\
2. 文字列 <state> を文字列 <errorOnly> に置換します。山括弧 (<, >) でテキストを囲んだ状態のままにしておきます。

**注:** 状態が「Warning」のカウンタのリストを表示するには、文字列 <state> を文字列 <warningOnly> に置換します。

3. <SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルを編集して、次の行を追加します。

```
_errorOnlyDelimiter=,
```

同様のエラー定義をほかにも追加します。

この例では、区切り文字はカンマ (,) ですが、スペース ( " ) やタブ (\t) も使用できます。**master.config** に追加した行は次のようになります。

```
_errorSoundURL=
_errorOnlyDelimiter=,
_errorOnlyNewlineFormat=true
```

**注:**

- 文字列 <warningOnly> を使用する場合、**master.config** で文字列 **\_warningOnlyDelimiter= <区切り文字>** を使用する必要があります。
- **master.config** で **\_errorOnlyDelimiter** が定義されていない場合、標準設定の区切り文字は空白 (「」) になります。

(モニタの状態ではなく) ユーザ・インタフェース・イベントのサウンドを再生するように SiteScope を設定する方法

ユーザ・インタフェースでイベントが発生するとブラウザでサウンドを再生するように SiteScope を設定できます。パラメータ **\_errorSoundURL** が設定されると、ユーザ・インタフェースでイベントが発生した場合にエラー音が聞こえるようになります。たとえば、グループの作成時に名前フィールドを空のままにしている場合や、いくつかのモニタに関連付けるスケジュールを作成し、そのスケジュールを削除しようとする場合に、警告音が再生されます。**\_warningSoundURL=** または **\_**

goodSoundURL= 設定を変更することによって、再生される警告音を変更することができます。

**注:** モニタの状態に変更があるときには、警告音は再生されません。

1. < SiteScope のルート・ディレクトリ > \groups\master.config ファイルをテキスト・エディタで開きます。
2. \_errorSoundURL 設定を見つけます。
3. この設定を次に変更します。  
`_errorSoundURL=http:// < SiteScope のホスト > : < SiteScope のポート > /  
SiteScope/templates.sound/alarm.au`
4. **master.config** ファイルを保存します。
5. SiteScope を停止および開始します。
6. この変更の後、ユーザ・インタフェースでエラーが発生したときは常に SiteScope でアラーム音（この場合、<SiteScope>\templates.sound ディレクトリの **Alarm.au**）が再生されます。上記のタブでソースを変更して再生されるサウンドを変更できます。警告または正常のイベントのサウンドを追加する場合には、\_warningSoundURL= または \_goodSoundURL= 設定を同様に変更できます。

## 警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法

このタスクでは、たとえば、警告メッセージを処理するパーサで特定の区切り文字が必要な場合に、リストの項目間の区切り文字を変更する方法について説明します。変数の識別に使用される括弧の区切り文字を変更することもできます。これは、XML でメッセージを読み込み、XML 文字列で変数を置換する場合に便利です。

1. 括弧の区切り文字を変更するテンプレート・ファイルを編集します。例 : < SiteScope のルート・ディレクトリ > \templates.mail\.
2. テキスト・エディタを使用して、関連するファイルの最上部に次の行を追加します。  
[Tag-Style:{}]  
html の山括弧 (<>) の代わりに区切り文字として使用する文字（この例では {}）を、コロンの後に入力します。
3. Tag-Style 文字列で定義した新しい文字で関連する変数を囲むように編集します。例 :{state}。

## ヒント / トラブルシューティング

### ヒント

新しいファイル名でカスタム警告テンプレートを作成することをお勧めします。SiteScope に装備されたいずれかの標準設定テンプレートを変更し、同じファイル名で変更を保存した場合、SiteScope を再インストールするか SiteScope インストールをアップグレードすると、その変更が失われる可能性があります。

## 第103章: スクリプト警告のスクリプトの記述

SiteScope では、エラーまたは警告ステータスが検出された場合にスクリプトまたはバッチ・ファイルを実行できます。通常、スクリプトのトリガとして機能するスクリプト警告を作成することによって、これを実行します。スクリプトまたはバッチ・ファイルは、システム・コマンドで実行するか、任意の言語で記述されたほかのプログラムを呼び出すことができます。危険域状態または失敗に自動的に対応する復旧スクリプトを作成する場合に、これを使用できます。

### 学習事項

SiteScope のスクリプトを使った作業

SiteScope スクリプト警告が実行に使用するスクリプト・ファイルは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>\scripts** フォルダまたはリモート UNIX マシン（リモート・スクリプトの場合）に置く必要があります。たとえば、SiteScope がディレクトリ C:\SiteScope にインストールされていてスクリプトの名前が actionTest.bat の場合、SiteScope によって、作成したスクリプト警告に応じて次のコマンド・ラインが試行されます。

```
C:\SiteScope\scripts\actionTest.bat C:\SiteScope\scripts monitor_name
```

ここで、C:\SiteScope\scripts は最初のコマンド・ライン・パラメータで、monitor\_name は 2 番目のコマンド・ライン・パラメータとなります（以下同様）。

**注:** スクリプト警告によって実行されるローカル・スクリプトは **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\scripts** に置く必要がありますが、実行パスは **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\classes** ディレクトリになります。現在の実行ディレクトリの定義に関する問題を避けるため、スクリプトで呼び出されるファイル・システム・コマンドやプログラムにはフル・パスを使用する必要があります。

スクリプトで実行するアクションは、スクリプトの作成者によって決定されます。SiteScope は、スクリプト警告で呼び出される各スクリプトにいくつかのコマンド・ラインの引数を渡します。この引数を使用して、SiteScope から送信された情報に基づいてプログラム・スクリプトを実行できます。標準設定では、SiteScope は次のパラメータをコマンド・ラインの引数として各スクリプト警告に渡します。

- スクリプト・ディレクトリのパス
- 警告の原因となったモニタの名前
- モニタの現在の状態
- 警告メッセージ・ファイルへのパス

- モニタの ID コード
- モニタが配置されたグループ
- 警告フォームの **【パラメータ】** ボックスで指定された追加パラメータ

これらのコマンド・ラインの引数は、通常のコマンド・ライン変数表記規則を使用して、ターゲット・スクリプトによってアクセスできます。これらの表記規則は、Windows システムの場合は %1, %2, %3 の形式で、UNIX スクリプトの場合は \$1, \$2, \$3 の形式です（使用されるスクリプトのシェルまたは言語により異なります）。標準設定では、最初の 6 つのパラメータ（つまり、%1 から %6）が各スクリプトに渡されます。その他のパラメータを渡すには、**【パラメータ】** ボックスでスクリプト警告設定にプロパティ変数またはパラメータを追加する必要があります（「[スクリプト警告のプロパティ](#)」(1276ページ)を参照）。**【パラメータ】** ボックスに入力された最初の変数またはテキストは %7 としてアクセス可能で、以降 2 番目のパラメータは %8, 3 番目のパラメータは %9 のように指定してアクセスできます。

スクリプト警告のパラメータにアクセスする、Perl で記述されたスクリプトの例を次に示します。

```
print "スクリプト・ディレクトリのパス名:$ARGV[0]\n";
print "name of monitor causing alert:$ARGV[1]\n";
print "current status monitor:$ARGV[2]\n";
print "pathname to alert message file:$ARGV[3]\n";
print "id code of monitor:$ARGV[4]\n";
print "group for the monitor:$ARGV[5]\n";
```

スクリプトに渡されたパラメータを表示する、Microsoft Windows のバッチ・ファイルの例を次に示します。

```
echo スクリプト ディレクトリのパス名: %1
echo name of monitor causing alert: %2
echo current status monitor: %3
echo pathname to alert message file: %4
echo id code of monitor:echo モニタのグループ: %5 %6
```



標準設定パラメータに加えて、その他パラメータとデータをスクリプトに渡すための 2 つのメカニズムがあります。一つは、スクリプト警告設定の追加用パラメータ・ボックスを使用するメカニズムです。スクリプトに渡された 7 番目の標準設定パラメータ（警告フォームで指定される追加パラメータ）には、スクリプトに送られる 1 つ以上のカスタム・パラメータを指定できます。もう一つは、警告メッセージ・ファイルにアクセスするメカニズムです。詳細については、「[スクリプト警告設定を使用してパラメータとデータを渡す方法](#)」(1293ページ)および「[警告メッセージ・ファイルを使用してパラメータとデータを渡す方法](#)」(1293ページ)を参照してください。



## タスク

スクリプト警告設定を使用してパラメータとデータを渡す方法

このタスクでは、スクリプト警告設定を使用してパラメータとデータをスクリプトに渡す手順について説明します。これは、追加のカスタム・パラメータとデータをスクリプトに送信する最も簡単な方法です。

1. 警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、**【新規作成】** > **【警告】** を選択するか、**【警告】** タブ（モニタまたはテンプレート・ビュー）で既存の警告を選択して、**【警告の編集】**  ボタンをクリックします。**【新規警告】** または **【警告の編集】** ダイアログ・ボックスの **【警告時のアクション】** セクションで、**【新規警告アクション】**  ボタンをクリックします。
2. **【アクションタイプ】** ダイアログ・ボックスで、**【スクリプト】** アクション・タイプを選択し、**「スクリプト警告のプロパティ」** (1276 ページ) の説明に従ってスクリプト警告を設定します。

**【パラメータ】** ボックスを使用して、スクリプトに送信する追加のカスタム・パラメータとデータを指定します。

これらのパラメータには、ハード・コーディングされた値を指定できます。複数のパラメータをそれぞれ空白で区切って含めることができます。たとえば、次に示す 4 つのテキスト文字列をスクリプトに渡すとして、**【パラメータ】** ボックスに、次のように文字列を入力します。

パラメータ:

これらは、スクリプトに送られる 7 番目から 10 番目のコマンド・ライン・パラメータとなります。次の Windows バッチ・ファイル・スクリプトでは、標準設定パラメータと、**【アクションタイプの設定】** ページの **【パラメータ】** ボックスに入力した上記の追加例のカスタム・パラメータを表示します。

```
echo スクリプト ディレクトリのパス名: %1
echo name of monitor causing alert: %2
echo current status monitor: %3
echo pathname to alert message file: %4
echo id code of monitor: %5
echo group for the monitor: %6
echo seventh parameter(customA): %7
echo eighth parameter(customB): %8
echo ninth parameter:(customC) %9
echo tenth parameter(customD): %10
```

警告メッセージ・ファイルを使用してパラメータとデータを渡す方法

このタスクでは、警告メッセージ・ファイルを使用してパラメータとデータをスクリプトに渡す手順

について説明します。このファイルは、[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスで指定した警告テンプレートを使用して、SiteScope により作成されます（「[アクション・タイプの設定パネル](#)」(1267ページ)）。独自のカスタム警告テンプレートを作成し、カスタム・テキスト文字列、または利用可能な SiteScope パラメータのいずれかを渡すことができます。

次に、SiteScope に含まれる標準設定の NTEventLog テンプレートを示します。<> 括弧で囲まれたパラメータは、該当するスクリプト警告がトリガされるたびに、対応する値と置換されて警告メッセージ・ファイルに書き込まれます。

SiteScope 警告テンプレートに含まれる一般的なプロパティのリストについては、「[警告、テンプレート、イベントで利用可能なプロパティ](#)」(1295ページ)を参照してください。

```
The NTEventLog Script Alert Template
タイプ:<eventType>
Event Time:<eventTime>
Source:<event>
Source ID:<eventID>
Category:<eventCategory>
Machine:<eventMachine>
Message:<eventMessage>
Monitor:<name>
Group:<group>
Sample #:<sample>
Time:<time>
<mainParameters>
<mainStateProperties>
```

スクリプトでこのデータを使用するには、4 番目の標準設定コマンド・ライン・パラメータで指定されたパス名の場所にある警告メッセージ・ファイルに、スクリプトからアクセスする必要があります（「[SiteScope のスクリプトを使った作業](#)」(1291ページ)を参照）。その後、スクリプトで警告メッセージ・ファイルの内容を解析し、スクリプトで使用するデータを抽出する必要があります。

復旧スクリプトの記述方法の詳細については、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\scripts ディレクトリにあるスクリプト・ファイルを参照してください。**actionTest.bat** のテンプレート例を使用して、独自のスクリプトを作成できます。**perlTest.pl** の例には、Perl スクリプトを呼び出す方法が示されています。**restartIIS.bat**, **restartService.bat**, **restartServer.bat** のスクリプトは、一般的な復旧アクションを実行します。

UNIX 環境のスクリプトの例には、アクションの **Test.sh** と **perlTest.pl** があります。

# 第104章: 警告，テンプレート，イベント で利用可能なプロパティ

次のプロパティは SiteScope 警告や，警告と電子メールのテンプレート内，およびイベントを管理コンソールに送信するための共通イベント・マッピングで見つかり，使用されます。

## 本項の内容

- ・ [「警告，警告テンプレート，およびイベントのプロパティ」 \(1295ページ\)](#)
- ・ [「共通イベント・テンプレートのプロパティ」 \(1306ページ\)](#)
- ・ [「Microsoft Windows イベント・ログ・モニタのプロパティ」 \(1307ページ\)](#)
- ・ [「電子メール・レポートのプロパティ」 \(1308ページ\)](#)

警告，警告テンプレート， およびイベントのプロパティ

次に，SiteScope 警告，警告テンプレート， および（モニタおよび警告イベントの） 共通イベント・マッピングで使用される属性に含まれる共通プロパティのリストを示します。

注:

- ・ イベント・マッピングの属性には，以下の表には示されていない追加の左山括弧（"<"）と右山括弧（">"）があります。
- ・ ✓ はプロパティが警告や共通イベント・マッピング（モニタまたは警告に関連付けられているもの）で使用可能かどうかを示します。
- ・ 特定の警告テンプレートにプロパティが含まれている場合，関係するテンプレートが **【該当する警告テンプレート】** 列にリストされます。

利用可能 プロパティ	詳細	該当する 警告テン プレート	警告	イベント	
				モニタ	警告
<alertHelpURL>	警告のトピックを含む SiteScope ヘルプの URL	NoDetails Traceroute WithDiagnostic	✓	✓	✓
<alert::name>	警告の名前		✓		
<alert::id>	警告 ID		✓		
<alert::description>	警告定義のテキストの説明		✓		

利用可能 プロパティ	詳細	該当する 警告テン プレート	警告	イベント	
				モニタ	警告
<alert::disable Description>	無効化操作の目的の説明		✓		
<alert::actionID>	警告アクションの ID		✓		
<alert::actionNam e>	警告アクションの名前		✓		
<all>	モニタのすべてのプロパ ティ		✓	✓	✓
<allThresholds>	電子メール警告でモニタ のすべてのしきい値を返 す		✓	✓	✓
<analyticsResults>	次の内容を含む, 解析結 果のサマリを表示しま す。  <ul style="list-style-type: none"> <li>解析されたモニタの名 前と解析オブジェクト の名前。</li> <li>すべての関連処理結果 または解析された (ソース) モニタ・メ トリックにつき上位 500 の最適な結果。</li> <li>静的しきい値によって トリガされた警告の場 合 : 警告がトリガされ た状態にあるメトリク ス。</li> <li>解析によってトリガさ れた警告の場合 : ペー スライン・スリープか ら外れているモニタの メトリクス。</li> </ul>	AnalyticsM ail			
<bacMonitorID>	モニタの BSM ID		✓		
<bacSessionID>	BSM プロファイル ID		✓		
<category>	モニタのカテゴリ	Typical	✓	✓	✓
<changedToErrorOn ly>	エラーの状態に変化した メトリクスのみを表示し ます。		✓	✓	✓

利用可能 プロパティ	詳細	該当する 警告テン プレート	警告	イベント	
				モニタ	警告
<changedToWarningOnly>	警告の状態に変化したメトリクスのみを表示します。		✓	✓	✓
<changedToGoodOnly>	正常の状態に変化したメトリクスのみを表示します。		✓	✓	✓
<classifier> (or _<classifier>)	電子メール警告でモニタの最初のしきい値を返す		✓	✓	✓
<currentTime>	警告の実行時刻		✓	✓	✓
<customerId>	SAAS 環境のカスタマ ID		✓	✓	✓
<_description>	モニタの動作をわかりやすくするためにモニタの【一般設定】の【レポートの詳細】フィールドに 入力された詳細を表示します。この詳細は、管理レポートの各棒グラフに 表示されます。		✓	✓	✓
<diagnosticText>	モニタが返すことが可能な他のプロパティからの文字列を計算します。このプロパティに対して、モニタはそれぞれ異なる値の組み合わせを選択できるため、モニタの各タイプに応じて、変換結果が異なる可能性があります。	Default User  NoDetails  WithDiagnostic	✓	✓	✓
<diagnosticTraceRoute>	このタグは、トレースルート電子メール・テンプレートが URL 内容モニタとともに使用されるときに警告およびエラーの状態になった場合のみに 入力されます。	Traceroute  WithDiagnostic	✓	✓	✓
<errorCounterOnly>	エラー状態のモニタ・カウンタのリスト（カウンタ名のみを返す）		✓	✓	✓

利用可能 プロパティ	詳細	該当する 警告テン プレート	警告	イベント	
				モニタ	警告
<errorOnly>	エラー状態のモニタ・カウンタのリスト（カウンタ名とカウンタ値を返す）	Typical	✓	✓	✓
<firstgroupdescription>	部分的なグループの説明。いくつかの異なる説明から最初の説明のみが表示されます。		✓	✓	✓
<fullgroupdescription>	完全なグループの説明です。		✓	✓	✓
<FullGroupId>	SiteScope のルート・ディレクトリからグループへのフル・パス（\SiteScope を除外）		✓	✓	✓
<fullMonitorName>	SiteScope ルート・ディレクトリからモニタへのフル・パス。例： \SiteScope\MyGroup\MyCPUMonitor		✓	✓	✓
<goodCounterOnly>	正常状態のモニタ・カウンタのリスト（カウンタ名のみを返す）	Typical	✓	✓	✓
<goodOnly>	正常状態のモニタ・カウンタのリスト。	Typical	✓	✓	✓
<group>	モニタが配置されたグループの名前	AllErrors AnalyticsMail Default Default User Irr-Default_mail_template NoDetails NTEventlog	✓	✓	✓

利用可能 プロパティ	詳細	該当する 警告テン プレート	警告	イベント	
				モニタ	警告
		PagerMail ShortMail Traceroute Typical WithDiagn ostic XMLMail			
<groupdescription>	完全なグループの説明と グループの親の説明。		✓	✓	✓
<groupId>	グループの ID	Default Typical WithDiagn ostic XMLMail	✓	✓	✓
<group.propertyname>	モニタが配置されたグ ループのプロパティタグ で使用可能なグループの プロパティは次のとおり です。_externalId, _ dependsCondition, _ name, および _topazId。		✓	✓	✓
<group.parent. propertyname>	モニタが配置されたグ ループの親グループのプ ロパティタグで使用可能 なグループのプロパティ は次のとおりです。_ externalId, _ dependsCondition, _ name, および _topazId。		✓		
<_httpPort>	SiteScope へのアクセスに 使用するポート番号（電 子メール・レポートのプ ロパティのものと同様）	NTEventlog	✓	✓	✓
<id>	現在のモニタの ID 番号。 グループ内でモニタを識 別します	XMLMail	✓	✓	✓

利用可能 プロパティ	詳細	該当する 警告テン プレート	警告	イベント	
				モニタ	警告
<mainParameters>	パラメータとして設定されたメイン・モニタ・プロパティのリスト	Default Default User NTEventlog WithDiagnostic	✓	✓	✓
<mainStateProperties>	状態プロパティとして設定されたメイン・モニタ・プロパティのリスト。統計結果が「レポート」に表示されます。	Default Default User NTEventlog WithDiagnostic	✓	✓	✓
<matchedLine>	【警告の実行】で【ログエントリが一致するたび】オプションを選択しているときにマルチ・ログ・モニタに対して使用します。このプロパティが使用されると、モニタの状態で、照合した内容とそれが見つかったファイルのみではなく、行全体が表示されます。		✓		
<monitorClass>	モニタのクラス名。			✓	✓
<monitorDrilldownUrl>	モニタ URL へのイベントでハイパーリンクを作成します。		✓	✓	✓
<monitorDrilldownUrlSecured>	モニタ URL へのイベントでハイパーリンクを作成します。リンク自体にはログイン情報は含まれません。		✓	✓	✓
<_monitorDescription>	モニタの一般設定の【モニタの詳細】フィールドに入力されたモニタの詳細を表示します。		✓	✓	✓
<monitorName>	モニタの名前。		✓	✓	✓



利用可能 プロパティ	詳細	該当する 警告テン プレート	警告	イベント	
				モニタ	警告
	(「<name>」と同じ)				
<<monitorServiceId>>	モニタのサービス ID の値を入力して, SiteScope イベントから HPOM に送信されるサービス名をカスタマイズできます。これは, SiteScope モニタが HPOM サービス名と関連する場合に便利です。		✓	✓	✓
<monitorType>	CPU などのモニタのタイプ		✓	✓	✓
<monitorTypeDisplay Name>	モニタのクラス Topaz 名。		✓	✓	✓
<monitorUUID>	Monitor の UUID		✓	✓	✓
<mountName>	マウント名を返します。これが適用されるのは, ダイナミック・ディスク・スペース・モニタを使用しながら, リモート UNIX サーバを監視しているときです。		✓	✓	✓
<multiViewUrl>	SiteScope Multi-View URL へのハイパーリンクを作成		✓	✓	✓
<name>	モニタの名前。 (「<monitorName>」と同じ)	AnalyticsMail Default Default User Irr-Default_mail_template NoDetails NTEventlog PagerMail	✓	✓	✓

利用可能 プロパティ	詳細	該当する 警告テン プレート	警告	イベント	
				モニタ	警告
		ShortestMail ShortMail ShortSubject Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail			
<newSiteScopeURL>	SiteScope サーバの URL	Default Typical	✓	✓	✓
<processtext>	プロセスの統計。オブジェクトにマシンがある場合のみ関係します。		✓	✓	✓
<remoteMachineName>	モニタによって使用される設定済みのリモート・サーバの名前を表示します。		✓	✓	✓
<sample>	サンプル番号。	AllErrors AnalyticsMail Default Default User NoDetails NTEventlog PagerMail ShortMail Traceroute Typical Typical.mail WithDiagn	✓	✓	✓

利用可能 プロパティ	詳細	該当する 警告テン プレート	警告	イベント	
				モニタ	警告
		ostic XMLMail			
<sitescopeurl>	追加のアカウント情報が 含まれた SiteScope サー バの URL。		✓	✓	✓
<siteScopeBaseUrl>	別の形式の SiteScope サーバの URL。		✓	✓	✓
<siteScopeHost>	SiteScope ホスト名の URL。		✓	✓	✓
<secondaryParame ters>	メインの状態プロパティ とその他の内部プロパ ティのリスト		✓	✓	✓
<secondaryState Properties>	メインの状態プロパティ とその他の内部プロパ ティのリスト		✓	✓	✓
<sitescopeURL>	管理者アクセス用の SiteScope のメイン・ペー ジへの URL。	AllErrors Default User NoDetails Traceroute WithDiagn ostic	✓	✓	✓
<sitescopeuserurl>	ユーザ・アクセス用の SiteScope のメイン・ペー ジへの URL		✓	✓	✓
<state>	モニタが報告する状態文 字列。 (stateString と同じ)。	AllErrors AnalyticsM ail Default Default User lr-Default_ mail_ template NoDetails	✓	✓	✓

利用可能 プロパティ	詳細	該当する 警告テン プレート	警告	イベント	
				モニタ	警告
		PagerMail ShortestMail ShortMail ShortSubject Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail			
<tag>	モニタのタグ（存在する場合）	AnalyticsMail Default Default User Ir-Default_ mail_ template NoDetails NTEventlog PagerMail ShortestMail ShortMail ShortSubject Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail	✓	✓	✓
<tag:[tagName]>	警告をトリガしたモニタに割り当てられた		✓	✓	✓

利用可能 プロパティ	詳細	該当する 警告テン プレート	警告	イベント	
				モニタ	警告
	<p>[tagName] を含む検索 / フィルタ・タグの値を表示します。</p> <p><b>例:</b> 値 Apache がモニタに割り当てられた AppServer というタグがあり, モニタ用に設定された警告テンプレートに <b>&lt;tag:AppServer&gt;</b>を含めます。警告がトリガされた場合, 警告テキストの新しいプロパティが Apache に置き換えられます。</p>				
<targetHost>	ターゲット・ホストの名前		✓	✓	✓
<targetIP>	ターゲット・ホストの IP。		✓	✓	✓
<targetIPAsHEX>	HEX 形式でのターゲット・ホストの IP。		✓	✓	✓
<targetIPVersion>	モニタ・ホストの IP バージョンを取得します (IPV6 または IPV4) 。		✓	✓	✓
<templateDeployPath>	モニタがデプロイされたテンプレート・グループのパスを表示します。		✓	✓	✓
<time>	モニタが最後に実行を完了した時間	AllErrors AnalyticsMail Default Default User Ir-Default_mail_template NoDetails NTEventlog Traceroute	✓	✓	✓

利用可能 プロパティ	詳細	該当する 警告テン プレート	警告	イベント	
				モニタ	警告
		Typical WithDiagn ostic XMLMail			
<time-date>	モニタが完了した時間の 日付部分		✓	✓	✓
<time-time>	モニタが完了した時間の 時刻部分		✓	✓	✓
<warningCounterOn ly>	警告状態のモニタ・カウ ンタのリスト（カウンタ 名のみを返す）		✓	✓	✓
<warningOnly>	警告状態のモニタ・カウ ンタのリスト（カウンタ 名とカウンタ値を返す）	Typical	✓	✓	✓
<unifiedConsoleUrl>	Ops ビューを, Multi-View とイベント・コンソール を表示する統合コンソ ールで開きます。			✓	✓
< _webserverAddress>	SiteScope サーバの IP ア ドレス（電子メール・レ ポートのプロパティのも のと同様）	NTEventlog	✓	✓	✓

### 共通イベント・テンプレートのプロパティ

次のメトリクス固有のプロパティはモニタのカウンタ・データから解決され、モニタ・イベントのみの共通イベント・テンプレートで使用されることになります。

これらのプロパティは、特定のメトリクスの変更によってトリガされるモニタ・イベントに関係します。これらは、複数のメトリクスの変更から解決可能な1つの状態になる状態変更によってトリガされる警告イベントには関係しません。

利用可能なプロパティ	詳細
<metric>	警告をトリガしたカウンタの名前
<metricValue>	超過しているしきい値に関連付けられた ETI 値

利用可能なプロパティ	詳細
<newStatus>	メトリックの現在の状態。
<oldStatus>	メトリックの以前の状態
<etiValue>	超過しているしきい値に関連付けられた ETI 値
<etiType>	イベントを作成するしきい値を超えたカウンタに関連付けられた ETI タイプ
<thresholdCrossed>	超過したしきい値設定の表示名
<thresholdCrossedFull>	超過したしきい値設定の完全文字列表現。この中には、このしきい値に関連付けられた ETI 値とステータスも含まれ、そのしきい値を一意に識別します。
<severity>	イベントに関連するオカレンスの重大度。
<ciHint>	イベントに関連する CI の情報。この属性は、イベント処理で正しい「関連 CI」を検出できるように 1 つまたは複数のヒントを提供するためのものです。
<subCiHint>	<p>CI のサブコンポーネントを識別するために使用される情報。この CI サブコンポーネントは、選択した CI について BSM のサービス状況で集計された状態の計算に使用されます。</p> <p>複数のコンポーネントからのイベントで HI にデータが設定される場合、このフィールドにコンポーネント名を指定すると、HI 状態を適切に計算できます。</p> <p><b>例:</b> 2 個の CPU (cpu #1 と cpu #2) を含むコンピュータ CI がある場合、両方の CPU からのイベントが同じ CPU ロード HI に送信されます。標準設定では、これらのイベントが互いに上書きして正しくない HI 状態が作成されます。この状態は、ComponentCi に値 "cpu #1" および "cpu #2" を設定して、この 2 イベント間の集計された状態を HI 状態とすることにより回避できます。</p>
<alertName>	警告の名前

### Microsoft Windows イベント・ログ・モニタのプロパティ

次のプロパティは Microsoft Windows イベント・ログ・モニタでのみ使用できます。これらは、SiteScope 警告、警告テンプレート、および共通イベント・マッピング（モニタと警告）で使用されます。

利用可能なプロパティ	該当するテンプレート
<eventCategory>	NTEventlog
<eventID>	NTEventlog
<eventMachine>	NTEventlog
<eventSource>	NTEventlog
<eventType>	NTEventlog

### 電子メール・レポートのプロパティ

次のプロパティは、<SiteScope>\templates.history ディレクトリに保存されている電子メール・テンプレートに適用されます。

利用可能なプロパティ	詳細
_httpPort	SiteScope へのアクセスに使用するポート番号
_webserverAddress	SiteScope サーバの IP アドレス
basicAlertSummary	トリガされた警告に関する基本情報
detailAlert Summary	警告に関する詳細な情報
reportIndexURL	管理レポート用の索引ページへの URL
reportPeriod	このレポートの対象期間
reportURL	HTML バージョンの管理レポートへの URL
summary	サマリと測定値情報
textReportURL	SiteScope で生成されたカンマ区切りのファイルへの URL
userReportIndexURL	ユーザがアクセス可能なレポート用の索引ページへの URL
userTextReportURL	ユーザがアクセス可能なレポートで生成されたカンマ区切りのファイルへの URL



利用可能なプロパティ	詳細
userXMLReportURL	ユーザがアクセス可能なレポートで生成された XML ファイルへの URL
xmlReportURL	管理レポートで生成された XML ファイルへの URL

## 第13部: レポート

SiteScope レポートには、時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報が表示されます。SiteScope レポートは、運用パフォーマンスと可用性の監視とトラブルシューティング、監視対象環境の確認を行う上で重要なツールです。

単一のモニタ、複数のモニタ、さらには多数のモニタ・グループのレポートを作成できます。レポート定義には、特定のモニタの測定値、結果のサマリ、グラフなど、レポートの内容のオプションが含まれます。詳細については、[「SiteScope レポートの作成」\(1311ページ\)](#)を参照してください。

また、Microsoft Windows および UNIX リソース・モニタの場合、監視対象のリモート・サーバに関する3つの異なるメトリックのデータが表示される、サーバ中心のレポートも作成できます。詳細については、[「サーバ中心のレポートの作成」\(1357ページ\)](#)を参照してください。

セールス、マーケティング、カスタマ・サポート、運営の管理層を含む、組織の多くのユーザが SiteScope レポートを活用できます。ユーザ・アカウントによって、レポートを表示する SiteScope サービスへのこれらのユーザのアクセスを制限できます。詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」\(744ページ\)](#)を参照してください。

## 第105章: SiteScope レポートの作成

SiteScope は特定のサーバから複数の事前選択されたメトリックスを収集し、ご使用の環境内の任意のサーバの主要なパフォーマンス監視データに素早くアクセスできる単一のグラフに結合します。サーバベースのレポートの主な利点の1つは、サーバ関連の問題のトラブルシューティングのためにレポートをドリルダウンが可能なことです。

### アクセス方法

【モニタ】コンテキストを選択します。【モニタ】ツリーで、レポート生成対象となる SiteScope オブジェクトを選択し、【レポート】タブをクリックします。

## 学習事項


### SiteScope のレポート・タイプ

次の表で、SiteScope で利用可能なレポート・タイプとその使用法を説明します。

レポート・タイプ	詳細
警告レポート	警告レポートでは、指定した期間に生成された SiteScope 警告に関する情報を表示できます。警告レポートはその場に応じて作成されます。このため、警告レポートの設定は後で使用できるよう SiteScope 設定データに保存されません。
BSM 設定変更レポート	BSM 設定変更レポートでは、BSM に報告する設定に関する統計情報を表示できます。この情報はトラブルシューティングのみに使用します。レポートは BSM から生成されます。BSM に報告する SiteScope が複数ある場合、このレポートに表示される情報には、選択した特定の SiteScope 以外の情報も含まれます。プロファイル・データベースへのデータ入力の実行失敗などの、レポート・ログの例外。  注: このレポートは、SAM 管理から SiteScope にアクセスしていて、ユーザに SiteScope ログを表示する権限が付与されている場合にのみ利用可能です。
管理レポート	管理レポートでは、特定の期間のインフラストラクチャの可用性とパフォーマンス・データのサマリを表示できます。管理レポートは、SiteScope モニタによって収集されたデータから、事前に設定されたスケジュールで自動的に生成されます。事前に設定されたスケジュールに従い、SiteScope によって適切なログ・ファイルが読み取られ、指定した時間間隔のモニタ測定値に基づいてレ

レポート・タイプ	詳細
	ポートが生成されます。レポート・データは、サードパーティ製のアプリケーションへのエクスポートに適したファイルに保存できます。詳細については、 <a href="#">「SiteScope 管理レポート」 (1312ページ)</a> を参照してください。
モニタ・レポート	モニタ・レポートでは、設定のプロパティと既存のモニタの設定を確認できます。モニタ・レポートはその場に応じて作成されます。このため、モニタ・レポートの設定は後で使えるよう SiteScope 設定データに保存されません。
クイック・レポート	クイック・レポートでは、特定の期間の指定したモニタまたはモニタ・グループの監視データを表示できます。クイック・レポートはその場に応じて作成されます。このため、クイック・レポートの設定は後で使えるよう SiteScope 設定データに保存されません。
サーバ中心のレポート	Microsoft Windows および UNIX リソース・モニタの場合、監視対象のリモート・サーバに関する3つの異なる測定値のデータ（CPU 使用、メモリ使用、ネットワーク利用）を表示できる、サーバ中心のレポートを作成できます。詳細については、 <a href="#">「サーバ中心のレポートの作成」 (1357ページ)</a> を参照してください。

## SiteScope 管理レポート

レポートは、モニタ・ビューの「レポート」タブに要素として追加されます。SiteScope ノード、グループ、または個々のモニタに、レポートを子として追加できます。レポートは、次の例に示すように、レポートを作成したグループまたはモニタの横にある  アイコンで、左側のメニュー・ツリーに表示されます。



レポートには、レポートが追加されたコンテナに基づくスコープがあります。レポートに含めるデータのあるすべてのモニタを含む、コンテナまたは要素にレポートを追加します。その後、**「レポートのターゲット」**パネルを使用して、レポートに含めるモニタの選択を絞り込みます。

レポート・アイコンのあるノードを選択すると、「レポート」タブに2つのテーブルが表示されます。「レポート」テーブルには、このノードで作成したレポートが表示されます。「**関連付けられたレポート**」テーブルには、祖先ノードで作成され、監視対象の選択でこのノードに適用されたレポートが表示されます。

SiteScope レポート定義は、必要な数だけ作成できます。ただし、レポート定義数を最小に保つために、計画を立ててレポートを統合する必要があります。これによりレポートの管理が容易になり、過剰なレポート・メッセージやアクションを抑えることができます。多数のモニタのレポートを作成する場合は、モニタまたは測定値のタイプに基づいて別々のレポートを作成することを検討します。たとえば、20 の異なるリモート・サーバのシステム・リソースのレポートを作成する場合、CPU やディスク領域などの数値を測定するモニタのレポートと、サービスやプロセスなどの基本的な可用性を報告するモニタのレポートを別々に作成することを検討します。

標準設定では、SiteScope は最近生成された 10 件のレポートを保持します。つまり、1 時間ごとのレポートでは過去 10 時間、日次レポートでは過去 10 日間、週次レポートでは過去 10 週間のレポートが利用可能です。<SiteScope ルート・ディレクトリ>\groups\master.config ファイルにある `_maximumReports` 設定の値を変更して、このレポート保存期間を変更できます。

管理レポート定義を削除すると、対応するレポートの生成は中止されます。以前に生成されたレポートは、基になるデータが削除されるまで引き続き使用できます。

レポート定義はコピーして貼り付けできます。レポート定義の設定は、**【レポートのターゲット】** 設定（レポートを貼り付けるコンテナのすべての子を含むように自動的にリセットされる）を除き、新しい場所に貼り付けられます。レポートの貼り付け後、割り当てられた **【レポートのターゲット】** が新しいレポート・コンテキストと全体のレポート計画に適したものになるように、レポート定義のプロパティを編集します。

レポートの **【説明】** フィールドにテキスト/HTML を入力することにより、管理レポートにバナーを追加できます。バナーを作成し、作成したすべてのレポートに適用するには、`_reportHeaderHTML` プロパティおよびバナー・テキストを <SiteScope ルート>\groups\master.config ファイルに追加します。例: `_reportHeaderHTML=<p><b>MY CUSTOM BANNER</b></p>`

## SiteScope 監視データ・ログ・ファイル

レポートの生成に使用できる SiteScope 監視データは、SiteScope サーバに格納されたログ・データの量に制限されます。標準設定では、SiteScope では監視データ・ログ・ファイルを 40 日間保持します。ログ・ファイルは循環式で、ログ保有期間よりも古いファイルは自動的に削除されます。

### 注:

- 長期間監視データ・ログを保持すると、設定したモニタの総数と日ごとに実行するモニタの頻度に応じて、SiteScope サーバのデータ格納上の問題が発生する可能性があります。データの累積率を見積もるため、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs ディレクトリのログ・ファイルのサイズを監視する必要があります。
- SiteScope サーバに最低限 10 GB の格納領域を割り当てること、および、高負荷環境では 30 GB（1 分あたりのモニタ実行回数を 2,000 回に設定した場合モニタの数は 16,000）を推奨します。

ログ・プリファレンスを使用して、SiteScope で監視データを保持する期間を変更できます。監視データを外部の SQL 準拠データベースにエクスポートして、監視データをより長期間保持するか、他のレポート・アプリケーションで使用できるように、SiteScope を設定できます。詳細については、[「ログ・プリファレンス」\(710ページ\)](#)を参照してください。

## レポートのカスタマイズ

CSS ルールをカスタム CSS ファイルに追加することで SiteScope レポートの外観をカスタマイズできます。CSS（カスケディング・スタイル・シート）は、外観について記述し、マークアップ言語で作成するドキュメントをフォーマットするために使用されるスタイル・シート言語です。

カスタマイズするには、<SiteScope ルート・ディレクトリ>\conf\custom\_css\report にある **reports-style-custom.css** に CSS ルールを追加します。

次にいくつかの例を示します。以下の例は、単に **reports-style-custom.css** ファイルにコピー・アンド・ペーストするだけで使用できます。以下は例に過ぎないため、独自のルールを追加して、任意のレポート・スタイルを調整できます。

例：

```
/*change header style:*/  
H2 {  
  color:#0096d6;  
  font-weight:500;  
  margin:0;  
  font-size:28px;  
}
```

```
/*change table style:*/  
.data-table th, .data-table td {  
  color: #404040;  
  font-size:14px;  
  border:1px solid #e5e5e5;  
  height:17px;  
  line-height:34px;  
  padding:1px 2px 2px 1px;  
  text-align:center;  
  padding-left:5px;  
  padding-right:5px;  
  background-color:white;  
}
```

```
/*change table header style:*/  
.data-table th {  
  background-color:#efefef;  
  font-weight:700;  
}
```

```
/*change table title style:*/  
H3,table.data-table caption{  
  margin:0;  
  padding:5px;
```

```
padding-left:0px;  
padding-right:0px;  
color:#0096d6;  
font-weight:700;  
font-size:18px;  
text-align:left;  
}
```

## タスク

### レポートの作成方法

このタスクでは、SiteScope レポートの作成に関する手順を説明します。

#### 1. 前提条件

レポートを生成または管理できるようにするには、SiteScope で管理者である必要があります。または、ユーザ管理プリファレンスで必要なレポート権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、[「ユーザ管理プリファレンス」\(744ページ\)](#)を参照してください。

#### 2. レポート・タイプの選択

レポートを作成するグループまたはモニタ・コンテナを右クリックし、**「レポート」**をクリックするか、**「レポート」**タブから新しいレポートを作成します。追加または作成するレポート・タイプを選択します（管理レポートのみ追加できます。その他すべてのレポートはその場に応じて作成され、SiteScope に保存されません）。

レポート・タイプの詳細については、[「SiteScope のレポート・タイプ」\(1311ページ\)](#)を参照してください。


#### 3. レポートの設定

レポートに含めるモニタを選択し、レポートを設定します。

各種レポートの設定の詳細については、[「SiteScope レポートの作成」\(1311ページ\)](#)を参照してください。

**注:** 標準設定では、選択したコンテナ内のすべてのモニタのデータが含まれます。警告レポートの場合、レポートから選択したコンテナのモニタは削除できません。

#### 4. 結果

管理レポートは、モニタ・ツリーの選択したコンテナに追加されます（レポート  記号で表示）。その他すべてのレポートは生成され、Web ブラウザに表示されます。詳細については、[「SiteScope レポートの作成」\(1311ページ\)](#)を参照してください。

**注:** SiteScope レポートに関するトラブルシューティングおよび制限事項については、[「トラブルシューティングおよび制限事項」\(1316ページ\)](#)を参照してください。

## ヒント / トラブルシューティング

### トラブルシューティングおよび制限事項

- モニタ・レポートの形式を .csv 形式にすると、SiteScope はモニタ・プロパティ内のいくつかの特殊文字を異なる文字で置換します。たとえば、カンマ (,) を空白に、二重引用符 (") は引用符 (') に、その他の特殊な HTML 文字はそれらのエンティティにそれぞれ置換します。
- UNIX/Linux の SiteScope で特定のレポート要素を表示するには、SiteScope を実行しているサーバで X Window システムがインストールされ稼働している必要があります。
- SiteScope インストールのアップグレード後に SiteScope バージョン 9.0 以降で生成されたレポートを開くには、レポート・フォルダ **<SiteScope ルート・ディレクトリ>\htdocs** の手動バックアップを作成し、新しいインストール・ディレクトリにコピーする必要があります。
- インジケータ値は SiteScope レポートには表示されません。
- **<SiteScope のルート・ディレクトリ>\groups\master.config** ファイルでは、レポートをカスタマイズするために独自のスタイル設定キーを追加することができなくなりました。必要に応じて、[「レポートのカスタマイズ」 \(1314ページ\)](#)の説明に従って **<SiteScope ルート・ディレクトリ>\conf\custom\_css\report\reports-style-custom.css** にあるカスタム .css ファイルにスタイル設定キーを追加することができます。


## SiteScope レポートのユーザ・インタフェース

### 本項の内容

- [「\[レポート\] ページ」 \(1317ページ\)](#)
- [「\[新規 SiteScope 管理レポート\] / \[SiteScope 管理レポートの編集\] ダイアログ・ボックス」 \(1319ページ\)](#)
- [「グラフ・メトリック・オプション」 \(1327ページ\)](#)
- [「\[新規 SiteScope クイック レポート\] ダイアログ・ボックス」 \(1328ページ\)](#)
- [「\[新規 SiteScope モニタ レポート\] ダイアログ・ボックス」 \(1334ページ\)](#)
- [「\[メール詳細\] ダイアログ・ボックス」 \(1337ページ\)](#)
- [「\[新規 SiteScope 警告レポート\] ダイアログ・ボックス」 \(1339ページ\)](#)
- [「管理レポート」 \(1343ページ\)](#)
- [「クイック・レポート」 \(1348ページ\)](#)
- [「モニタ・サマリ・レポート」 \(1352ページ\)](#)
- [「警告レポート」 \(1356ページ\)](#)













## [レポート] ページ

このページには、SiteScope で定義されたレポートに関する情報が表示されます。このページでは、レポート定義の追加、編集、削除を行います。SiteScope オブジェクト（グループまたはモニタ）にレポートが設定されている場合、モニタ・ツリーのオブジェクト・アイコンの横にレポート記号  が表示されます。

アクセス方法	【モニタ】コンテキストを選択します。【モニタ】ツリーで、レポート生成対象となる SiteScope オブジェクトを選択し、【レポート】タブをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>特定のモニタまたはグループに作成されたレポートは、オブジェクトの【モニタのレポート】 / 【グループのレポート】リストに表示されます。対象のモニタまたはグループは、【モニタに関連付けられたレポート/グループに関連付けられたレポート】リストに表示されます。</li><li>SiteScope 管理者ユーザ、または適切なレポート権限を付与されたユーザのみがレポートを生成でき、管理レポートを追加、編集できます。ユーザ権限の詳細については、<a href="#">「権限」(757ページ)</a>を参照してください。</li></ul>
関連タスク	<a href="#">「SiteScope レポートの作成」(1311ページ)</a>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<b>子レポートの表示</b> ：選択したノードの直接の子レポートのみを表示します。
	<b>すべての子孫レポートの表示</b> ：選択したノードのすべての子孫レポートを表示します。
	<b>新規レポート</b> ：設定するレポートの種類を選択できます。【レポート】タブに追加されるのは管理レポートのみです（その他のレポート・タイプはすべてその場に応じて作成され、SiteScope には保存されません。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「【新規 SiteScope 管理レポート】 / 【SiteScope 管理レポートの編集】ダイアログ・ボックス」(1319ページ)</a> を参照してください。  <b>注</b> ：このボタンは、【モニタのレポート】 / 【グループのレポート】テーブルでのみ使用できます。
	<b>レポートの編集</b> ：選択した管理レポートのプロパティを編集できます。【管理

UI 要素	詳細
	レポートの編集] のユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規 SiteScope 管理レポート] / [SiteScope 管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」 (1319ページ)</a> を参照してください。
	<b>レポートのコピー</b> : 選択したレポートのコピーを作成します。 <b>注</b> : このボタンは、 <a href="#">[モニタのレポート] / [グループのレポート]</a> テーブルでのみ使用できます。
	<b>貼り付け</b> : ツリー内の選択した場所にレポートを貼り付けます。 <b>注</b> : このボタンは、 <a href="#">[モニタのレポート] / [グループのレポート]</a> テーブルでのみ使用できます。
	<b>レポートの削除</b> : 選択した管理レポートを [レポート] タブから削除します。
	<b>レポートの生成</b> : 選択したモニタまたはグループの管理レポートを生成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「管理レポート」 (1343ページ)</a> を参照してください。
	<b>すべて選択</b> : 表示されているすべてのレポートを選択します。
	<b>選択を解除</b> : 選択範囲を解除します。
<b>タイプ</b>	レポート・タイプを示します。
<b>タイトル</b>	SiteScope で認識されるレポートの名前。
<b>詳細</b>	レポートの詳細。
<b>有効</b>	このレポートの生成が有効かどうかを示します。
<b>パス</b>	このオブジェクトを対象とする祖先ノードへのリンクを表示します。 <b>注</b> : この列は、 <a href="#">[関連付けられたレポート]</a> テーブルのみに表示されます。

## 〔新規 SiteScope 管理レポート〕 / 〔SiteScope 管理レポートの編集〕 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、特定の期間のシステム可用性データのサマリを提供するレポートを作成できます。

アクセス方法	<p>〔モニタ〕コンテキストを選択し、モニタ・ツリーで次のように操作します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックし、〔レポート〕 &gt; 〔管理〕を選択するか、</li><li>• レポート作成対象となる SiteScope オブジェクトを選択し、〔レポート〕タブで〔レポートの新規作成〕 &gt; 〔管理〕を選択します。</li></ul>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• 管理レポートを操作するには、SiteScope で管理者である必要があります。または、ユーザ管理プリファレンスで「<b>管理レポートを追加、編集、または削除します</b>」および「<b>管理レポートの生成</b>」権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、<a href="#">「ユーザ管理プリファレンス」(744ページ)</a>を参照してください。</li><li>• レポートの〔説明〕フィールドにテキスト/HTML を入力することにより、管理レポートにバナーを追加できますバナーを作成し、作成したすべてのレポートに適用するには、_reportHeaderHTML= プロパティおよびバナー・テキストを &lt;SiteScope ルート&gt;\groups\master.config ファイルに追加します。例:_reportHeaderHTML=&lt;p&gt;&lt;b&gt;MY CUSTOM BANNER&lt;/b&gt;&lt;/p&gt;</li><li>• レポート・テキスト・ボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードなど）を修正する修正アクションが実行されます悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。<ul style="list-style-type: none"><li>• タグ:script, object, param, frame, iframe。</li><li>• on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover</li><li>• 値に javascript が指定された属性。</li></ul></li></ul>
関連タスク	<a href="#">「SiteScope レポートの作成」(1311ページ)</a>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">「レポート」(1310ページ)</a></li><li>• <a href="#">「〔レポート〕ページ」(1317ページ)</a></li><li>• <a href="#">「管理レポート」(1343ページ)</a></li></ul>

本項の内容

- ・ [「一般設定」 \(1320ページ\)](#)
- ・ [「レポートのターゲット」 \(1320ページ\)](#)
- ・ [「表示設定」 \(1320ページ\)](#)
- ・ [「フィルタとスケジュールの設定」 \(1323ページ\)](#)
- ・ [「レポート配布」 \(1324ページ\)](#)
- ・ [「計算メソッド」 \(1326ページ\)](#)
- ・ [「管理設定」 \(1326ページ\)](#)
- ・ [「タグの検索/フィルタ」 \(1327ページ\)](#)

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
レポートのタイトル	この管理レポートのタイトルを入力します。この名前は、表示される管理レポート定義を識別するために使用されます。
詳細	(任意指定) このテキスト・ボックスは、レポート定義に関するその他の情報を記述するために使用します。たとえば、このレポートの目的、監視対象、設定日、読者などの情報を含みます。

レポートのターゲット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
レポートのターゲット	コンテキスト・メニュー・ツリーで、このレポートに含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。コンテキスト・メニューには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。  標準設定値 : 現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。

表示設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
しきい値	

UI 要素	詳細
すべてのしきい値	<p>レポートに含まれているすべてのモニタのモニタ・エラー、警告、良好しきい値設定のテーブルを作成します。選択されている場合、このテーブルは最初のレポート・セクションに表示されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
エラーしきい値	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々のエラー読み取りのテーブルを作成します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
警告しきい値	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の警告読み取りのテーブルを作成します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
良好しきい値	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の正常読み取りのテーブルを作成します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>稼働時間および読み取り</b>	
稼働時間サマリおよび測定値サマリ・テーブル	<p>2つのレポート・テーブルを作成:「稼働時間サマリ」および「測定値サマリ」。これらのテーブルに含まれるデータの詳細については、<a href="#">「管理レポート」(1343ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
稼働時間:警告を含む	<p>全体の稼働時間の計算に、警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
稼働時間:警告を無視する	<p>全体の「稼働時間および読み取り」のサマリ・セクションで警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。</p> <p><b>注</b>: このオプションでは、テーブルの「警告 %」列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
稼働時間:エラーを無視する	<p>全体の「稼働時間および読み取り」のサマリ・セクションでエラーとしてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。</p>

UI 要素	詳細
	<p><b>注：</b> このオプションでは、テーブルの [エラー %] 列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されていない</p>
<b>一般</b>	
<b>測定値グラフ</b>	<p>ドロップダウン・リストを使用して、グラフ・レポートに含めるグラフ測定値を選択します。オプションの詳細については、<a href="#">「グラフ・メトリック・オプション」 (1327ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>モニタ読み取り</b>	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の読み取り（エラー、正常、警告のすべての読み取りを含む）のテーブルを作成します。レポートの対象期間およびその期間中にモニタが実行された頻度によっては、このレポート・テーブルに空の「バケツ」が含まれる場合があります。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されている</p>
<b>警告テーブル</b>	<p>モニタに対して送信される警告のテーブルをレポートに含めるオプションを選択します。警告テーブル・レベルのオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>警告テーブルなし：</b> レポートに警告のテーブルは含まれません（標準設定）。</li> <li>・ <b>基本警告テーブル：</b> 送信された各警告の時間およびサマリ情報を表示します。</li> <li>・ <b>すべての警告に対する詳細警告テーブルの表示：</b> レポートに各警告の詳細な警告情報を表示します。</li> <li>・ <b>失敗した警告に対する詳細警告テーブルの表示：</b> 各警告の時間とサマリ情報、および失敗した各警告の完全診断のブレイクダウンを表示します。</li> </ul>
<b>モニタの詳細情報</b>	<p>各モニタについて収集したすべての情報をレポートに表示します。詳細情報を表示しない場合は、各モニタの主要なデータのみが表示されます。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されていない</p> <p><b>例：</b> URL シーケンス・モニタでこのボックスがチェックされている場合、シーケンスの各ステップのタイミング情報がレポートに表示されます。</p>
<b>エラーの時間</b>	<p>レポート用に選択した各モニタを一覧表示するテーブル・サマリを作成し、レポート期間中にモニタの状態がエラーとして計算された時間（分単位）のサマリを表示します。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されていない</p>

## フィルタとスケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
モニタ・フィルタ	<p>レポートに表示する、レポートのタイム・フレーム中に指定した状態になったモニタのサブセットを選択します。エラーまたは警告のモニタ、エラーのモニタ、警告のモニタ、OK のモニタのみ、あるいはすべてのモニタを選択できます。</p> <p><b>標準設定値 :</b> すべてのモニタを表示</p> <p><b>例 :</b> <b>「エラー状態であるモニタのみ表示」</b> を選択すると、そのモニタがレポートの時間間隔中にエラーになった場合にのみレポート・データが表示されます。</p>
スケジュール・フィルタ	<p>スケジュールの期間中にサンプルがある、モニタのデータのサブセットのみをレポートに表示するスケジュール・フィルタ・オプションを選択します。</p> <p><b>標準設定値 :</b> レポートには、レポートの期間全体（毎日、終日）のデータが表示されます。</p> <p><b>例 :</b> <b>「平日、09:00 ~ 18:00」</b> を選択すると、月曜日から金曜日の午前 9 時から午後 6 時までの期間のサンプルがある、選択したモニタのレポート・データが表示されます。すべての計算にはこのデータのみが使用されます。</p>
レポートの対象期間	<p>監視データを表示する期間を選択します。設定した期間（時間単位）、過去 1 日、過去数日、過去 1 週間、過去 1 か月、または月の始まりから現在までのデータをレポートできます。</p> <p>毎日および過去 1 か月のレポートは、毎日予定の時間に生成されます。毎週のレポートは、日曜日の予定時刻に生成され、毎月のレポートは、1 か月分のデータが含まれるように、当月の翌月の 1 日に生成されます。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 最終日</p>
レポート対象期間の終了時間	<p>ドロップダウン・リストから時間を選択して、レポートの終了時間を選択します。たとえば、午前 0 時から午前 0 時までレポートを実行できます。</p> <p><b>標準設定値 :</b> レポートの実行時刻（SiteScope 指定した時間に開始され、レポートが生成された時刻に終了するレポートを生成します）</p>

## レポート配布

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
HTML 形式	<p>レポートを HTML 形式で送信するかどうかを選択します。SiteScope レポート・グラフィックを含めるには、このオプションを使用します。このオプションを選択しない場合は、テキスト形式のレポート・サマリのみが送信されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
レポートを電子メール・アドレスに送信する	<p>生成されたレポートを電子メールで転送するには、生成時に毎回レポートを送信する宛先の電子メール・アドレスを入力します。複数の電子メール・アドレスにレポートを送信するには、電子メール・アドレスをカンマで区切ります。レポートは、電子メールに添付された .HTML ファイルとして送信されます。</p> <p><b>注</b> : 「<a href="#">[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス</a>」 (581 ページ) で <b>SMTP SSL</b> が選択されている場合、電子メールは SSL SMTP サーバ経由でセキュアに送信されます。</p>
フォーマット・テンプレート	<p>SiteScope で電子メール・メッセージを作成するときに使用するテンプレートを選択します。次のテンプレートから選択するか、いずれかのコピーを作成して、必要に応じてカスタマイズできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>HistoryLongMail</b> : 詳細な履歴レポートを送信するには、このオプションを選択します。ユーザ・リンクと管理リンクの両方が含まれます。</li> <li>• <b>HistoryLongXMLMail</b> : 詳細な履歴レポートを送信するには、このオプションを選択します。レポートおよび XML ファイルのユーザ・リンクと管理リンクの両方が含まれます。&amp;</li> <li>• <b>HistoryMail</b> : 履歴レポートを送信するには、このオプションを選択します。これが標準設定のオプションです。</li> <li>• <b>HistoryMailAlertDetail</b> : 電子メールで送信されるレポートにすべての警告を含めるには、このオプションを選択します。</li> <li>• <b>HistoryMailNoLinks</b> : リンクを含まないレポートを送信するには、このオプションを選択します。</li> </ul>
カンマ区切りのファイル	<p>生成された管理レポートをカンマ区切りのテキスト・ファイルに保存する場合に選択します。このファイルは後でスプレッドシート・アプリケーションにインポートできます。</p> <p>これらのファイルは自動的に <b>&lt;SiteScope のルート・ディレクトリ&gt;\htdocs</b> ディレクトリに保存されます。SiteScope 自分のマシンに保存されているファ</p>



UI 要素	詳細
	<p>イルの正確な場所を調べるには、レポートの [<b>レポートの表示</b>] タブをクリックして、 [<b>情報対象</b>] 列にあるレポートの<b>テキスト</b>・リンクの上にポインタを移動します。Web ブラウザのステータス・バーにファイルの完全パスが表示されます。マシンに保存されているファイルを開くには、 <b>テキスト</b>・リンクをクリックして [<b>レポート</b>] ページに移動します。 [<b>電子メール</b>] テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスにカンマ区切りファイルのコピーが送信されます。 SiteScope</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>注</b> :カンマ区切りのファイルには、各モニタ読み取りに2つの列が作成されます。1つには値と単位が含まれ、もう1つには値のみが含まれます。サードパーティ・アプリケーションではデータ値と単位を表すテキストが自動的に分離されない場合がありますが、この形式によってカンマ区切りデータをより簡単にそのようなアプリケーションにインポートできます。</p>
<b>カンマ区切りのファイルを電子メールで送信</b>	<p>テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスにファイルのコピーが送信されます。 SiteScope</p>
<b>XML ファイル</b>	<p>生成された管理レポートを XML テキスト・ファイルに保存するには、このボックスを選択します。これらのファイルが自動的に &lt;<b>SiteScope ルート・ディレクトリ</b>&gt;\htdocs ディレクトリに保存されます。 SiteScope 自分のマシンに保存されているファイルの正確な場所を調べるには、レポートの [<b>レポートの表示</b>] タブをクリックして、 [<b>情報対象</b>] 列にあるレポートの <b>xml</b> リンクの上にポインタを移動します。Web ブラウザのステータス・バーにファイルの完全パスが表示されます。マシンに保存されているファイルを開くには、 <b>xml</b> リンクをクリックして [<b>レポート</b>] ページに移動します。 [<b>電子メール</b>] テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスにカンマ区切りファイルのコピーが送信されます。 SiteScope</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p> <p><b>注</b> : XML ファイルには、各モニタ読み取りに2つの列が作成されます。1つには値と単位が含まれ、もう1つには値のみが含まれます。サードパーティ・アプリケーションではデータ値と単位を表すテキストが自動的に分離されない場合がありますが、この形式によって XML データをより簡単にそのようなアプリケーションにインポートできます。</p>
<b>XML ファイルを電子メールで送信</b>	<p>テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスに XML ファイルのコピーが送信されます。 SiteScope</p>

## 計算メソッド

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
サンプリング間隔	<p>このタイム・スケール・オプションを使用して、モニタ読み取りの時間間隔を選択します。毎分 1 回から毎日 1 回の範囲から間隔を選択するか、自動スケールを使用できます。自動スケールを使用すると、SiteScope では特定のモニタの選択した期間に取得された読み取り数を判断し、管理レポートの適切な間隔が選択されます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 自動タイム スケール</p>
最大のグラフ値	<p>グラフに表示される最大値を選択するには、垂直スケール・オプションを選択します。特定のスケール値を選択すると、異なるモニタおよび時間のグラフとの比較が容易になります。</p> <p><b>標準設定値</b> : 自動垂直スケール</p>

## 管理設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
レポートの無効化	<p>このレポートの生成を一時的に無効にする場合に選択します。レポートをもう一度有効にするには、ボックスをクリアします。</p> <p><b>標準設定値</b> : 選択されていない</p>
次の時間にレポートを生成 (HH:MM)	<p>この管理レポートを生成する時刻。SiteScope レポートには、レポート実行時までの過去 1 日、1 週間、または 1 か月の情報が含まれます。たとえば、毎日のレポートを 18:00 (午後 6 時) に生成する場合、前日の 18:00 から当日の 18:00 までの間に生成されたデータが含まれます。標準設定値は 00:00 (午前 0 時) です。</p> <p><b>標準設定値</b> : 04:00</p> <p><b>ヒント</b> : 全体の監視タスクおよび負荷と比較して、オフピークの時間帯にレポートが生成されるようにスケジュール設定してください。レポート生成は一時的に全体的な SiteScope のパフォーマンスと応答に影響する場合があるからです (モニタ数、およびレポートの対象期間によって異なる)。毎日多数のレポートを生成する場合は、各レポートの [次の時間にレポートを生成] の値をずらして設定することを検討してください。</p>

## タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。  概念の詳細については、 <a href="#">「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」(78 ページ)</a> を参照してください。
タグの追加	<a href="#">[新規タグ]</a> ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」(87ページ)</a> を参照してください。

**注:** 棒グラフは、すべてのブラウザ・タイプから印刷できるように、標準 HTML を使用して生成されます。折れ線グラフは java アプレットを使用して生成され、すべてのブラウザからは直接印刷できない場合があります。

## グラフ・メトリック・オプション

この表では、レポートに含めることができるグラフのメトリック・オプションについて説明します。

グラフ	詳細
なし - グラフなし	レポートにグラフは含まれません。レポートには、選択した表形式のデータ内容のみが含まれます。
棒グラフ - 1つの測定値に1つのグラフ	この棒グラフ・オプションを選択すると、指定したタイム・フレームで、グラフごとおよびモニタごとに1つのメトリック・タイプが表示されます。複数のモニタをレポートする場合、各モニタのメトリック・タイプごとに1つの棒グラフが生成されるので、グラフの数が最も多くなります。
折れ線グラフ - 1つの測定値に1つのグラフ	この折れ線グラフ・オプションを選択すると、1つのモニタのメトリック・タイプごとに折れ線グラフが表示されます。棒グラフ・オプションと同様に、メトリック・タイプの互換性に関係なく、レポートの対象として選択した各モニタのメトリック・タイプごとに1つの折れ線グラフが生成されるので、折れ線


グラフ	詳細
	グラフの数が最も多くなります。
線グラフ - モニタ インスタンス ごとのグループ 分け	この折れ線グラフ・オプションを選択すると、1つのモニタ・インスタンスからのすべてのメトリックが、モニタごとに1つのグラフにグループ分けされます。生成される折れ線グラフの数は、モニタでモニタ実行（Microsoft Windows リソース・モニタ、UNIX リソース・モニタなどのタイプ）ごとに複数のメトリックが記録されるかどうか、およびメトリック・タイプの互換性があるかどうかによって異なります。メトリック・タイプに互換性がない場合は、別々のグラフが生成されます。
線グラフ - 同じ 測定値の種類の グループ分け	複数のモニタ・インスタンスで収集された同じメトリック・タイプを1つのグラフにプロットするには、このオプションを選択します。折れ線グラフは、レポートの対象として選択したモニタの数に関係なく、互換性のあるメトリック・タイプのセットごとに生成されます。
線グラフ - 互換 性のある測定値 のグループ分け	選択したモニタからの互換性のあるメトリックをすべて1つのグラフに表示するには、このオプションを選択します。このオプションは、生成される折れ線グラフの合計数を最小化することを目的としています。生成されるグラフの数は、選択したモニタ・タイプおよびそれらのモニタによって収集されるメトリック・タイプの互換性によって決まります。レポートで選択されたすべてのモニタが同じタイプ、たとえば URL モニタである場合、各モニタを色分けした線で示す1つのグラフが生成されます。

**注:** 棒グラフは、すべてのブラウザ・タイプから印刷できるように、標準 HTML を使用して生成されます。折れ線グラフは java アプレットを使用して生成され、すべてのブラウザからは直接印刷できない場合があります。

## 〔新規 SiteScope クイック レポート〕 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、特定の期間にわたるモニタまたはモニタ・グループの1回限りの SiteScope 管理レポートを作成できます。

アクセス方法	〔モニタ〕コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックして、〔レポート〕>〔クイック〕を選択します。（または、レポート生成対象となる SiteScope オブジェクトを選択し、〔レポート〕タブで〔レポートの新規作成〕>〔クイック〕を選択します）。レポートのプロパティを設定し、〔レポートの生成〕をクリックします。
--------	---

	<p>あるいは、モニタを選択して SiteScope ダッシュボードの <b>【クイック レポート】</b>  ボタンをクリックすることで、事前設定を使用してレポートを作成できます。</p>
<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>クイック・レポートの時間間隔は、自動的には増分されません。つまり、クイック・レポートには必ず、レポート定義で指定した <b>【レポート期間】</b> の絶対的な間隔のデータが含まれます。クイック・レポートでより最近のデータを表示するには、<b>【レポート期間】</b> 設定を編集します。</li> <li>レポートを生成するには、SiteScope で管理者である必要があります。または、ユーザ管理プリファレンスで <b>「クイック レポートの生成」</b> 権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、<b>「ユーザ管理プリファレンス」</b> (744ページ) を参照してください。</li> <li>BSM で作業する場合、SAM 管理のクイック・レポート定義は、BSM コンテキストでのみ格納されます。クイック・レポート定義は SiteScope サーバに格納されず、サーバ上に存続しません。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<b>「SiteScope レポートの作成」</b> (1311ページ)
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li><b>「レポート」</b> (1310ページ)</li> <li><b>「クイック・レポート」</b> (1348ページ)</li> </ul>

#### 本項の内容

- 「レポートのターゲット」** (1329ページ)
- 「表示設定」** (1330ページ)
- 「フィルタとスケジュールの設定」** (1332ページ)
- 「レポート・フォーマット」** (1333ページ)
- 「レポート配布」** (1333ページ)
- 「計算メソッド」** (1333ページ)

#### レポートのターゲット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>レポートのターゲット</b>	<p>コンテキスト・メニュー・ツリーで、このレポートに含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。コンテキスト・メニューには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。</p>

## 表示設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>しきい値</b>	
<b>すべてのしきい値</b>	<p>レポートに含まれているすべてのモニタのモニタ・エラー、警告、良好しきい値設定のテーブルを作成します。選択されている場合、このテーブルは最初のレポート・セクションに表示されます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>エラーしきい値</b>	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々のエラー読み取りのテーブルを作成します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>警告しきい値</b>	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の警告読み取りのテーブルを作成します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>良好しきい値</b>	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の正常読み取りのテーブルを作成します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>稼働時間および読み取り</b>	
<b>稼働時間サマリおよび測定値サマリ・テーブル</b>	<p>2つのレポート・テーブルを作成:「稼働時間サマリ」および「測定値サマリ」。これらのテーブルに含まれるデータの詳細については、<a href="#">「クイック・レポート」(1348ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されている</p>
<b>稼働時間 :警告を含む</b>	<p>全体の稼働時間の計算に、警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めます。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>
<b>稼働時間 :警告を無視する</b>	<p>全体の「稼働時間および読み取り」のサマリ・セクションで警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p> <p><b>注</b> : このオプションでは、テーブルの「警告 %」列が非表示になるだけで、</p>

UI 要素	詳細
	稼働時間 % の計算は変更されません。
<b>稼働時間 : エラーを無視する</b>	<p>全体の [稼働時間および読み取り] のサマリ・セクションでエラーとしてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されていない</p> <p><b>注 :</b> このオプションでは、テーブルの [エラー %] 列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。</p>
<b>一般</b>	
<b>測定値グラフ</b>	<p>ドロップダウン・リストを使用して、グラフ・レポートに含めるグラフ測定値を選択します。オプションの詳細については、<a href="#">「グラフ・メトリック・オプション」 (1327ページ)</a>を参照してください。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 棒グラフ - 1つの測定値に1つのグラフ</p>
<b>モニタ読み取り</b>	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の読み取り（エラー、正常、警告のすべての読み取りを含む）のテーブルを作成します。レポートの対象期間およびその期間中にモニタが実行された頻度によっては、このレポート・テーブルに空の「バケツ」が含まれる場合があります。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されている</p>
<b>警告テーブル</b>	<p>モニタに対して送信される警告のテーブルをレポートに含めるオプションを選択します。警告テーブル・レベルのオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>警告テーブルなし :</b> レポートに警告のテーブルは含まれません（標準設定）。</li> <li>・ <b>基本警告テーブル :</b> 送信された各警告の時間およびサマリ情報を表示します。</li> <li>・ <b>すべての警告に対する詳細警告テーブルの表示 :</b> レポートに各警告の詳細な警告情報を表示します。</li> <li>・ <b>失敗した警告に対する詳細警告テーブルの表示 :</b> 各警告の時間とサマリ情報、および失敗した各警告の完全診断のブレイクダウンを表示します。</li> </ul>
<b>モニタの詳細情報</b>	<p>各モニタについて収集したすべての情報をレポートに表示します。詳細情報を表示しない場合は、各モニタの主要なデータのみが表示されます。</p> <p><b>例 :</b> URL シーケンス・モニタでこのボックスがチェックされている場合、シーケンスの各ステップのタイミング情報がレポートに表示されます。</p> <p><b>標準設定値 :</b> 選択されていない</p>



UI 要素	詳細
エラーの時間	<p>レポート用に選択した各モニタを一覧表示するテーブル・サマリを作成し、レポート期間中にモニタの状態がエラーとして計算された時間（分単位）のサマリを表示します。</p> <p><b>標準設定値</b> :選択されていない</p>

## フィルタとスケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
モニタ・フィルタ	<p>レポートに表示する、レポートのタイム・フレーム中に指定した状態になったモニタのサブセットを選択します。エラーまたは警告のモニタ、エラーのモニタ、警告のモニタ、OK のモニタのみ、あるいはすべてのモニタを選択できます。</p> <p><b>標準設定値</b> : すべてのモニタを表示</p> <p><b>例</b> : <b>【エラー状態であるモニタのみ表示】</b> を選択すると、そのモニタがレポートの時間間隔中にエラーになった場合にのみレポート・データが表示されます。</p>
スケジュール・フィルタ	<p>スケジュールの期間中にサンプルがある、モニタのデータのサブセットのみをレポートに表示するスケジュール・フィルタ・オプションを選択します。</p> <p><b>標準設定値</b> : レポートには、レポートの期間全体（毎日、終日）のデータが表示されます。</p> <p><b>例</b> : <b>【平日、09:00 ~ 18:00】</b> を選択すると、月曜日から金曜日の午前 9 時から午後 6 時までの期間のサンプルがある、選択したモニタのレポート・データが表示されます。すべての計算にはこのデータのみが使用されます。</p>
レポート期間	<p>監視データを表示する期間を指定します。レポートの対象範囲の開始時間を <b>【開始】</b> ボックスに入力し、終了時間を <b>【終了】</b> ボックスに入力します。</p> <p><b>標準設定値</b> : 期間は、クイック・レポートが生成された時刻の 1 時間前から現在の時刻までです。監視データをクイック・レポートに含める標準設定の期間を設定するには、<b>【プリファレンス】 &gt; 【インフラストラクチャ プリファレンス】 &gt; 【レポート設定】</b> の <b>【レポートの標準設定時間 (時間)】</b> を設定します。</p> <p><b>注</b> : 時間は 24 時間形式で入力する必要があります。</p>



## レポート・フォーマット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
レポート形式	レポートの表示に使用するフォーマットを選択します :HTMLフォーマット, テキスト・フォーマット, XMLフォーマット  標準設定値 : HTML 形式

## レポート配布

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
レポートを電子メール・アドレスに送信する	生成されたレポートを電子メールで転送するには, 生成時に毎回レポートを送信する宛先の電子メール・アドレスを入力します。複数の電子メール・アドレスにレポートを送信するには, 電子メール・アドレスをカンマで区切ります。レポートは, 電子メールに添付された .HTML ファイルとして送信されます。  注 : 「 <a href="#">[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス</a> 」(581 ページ)で <b>SMTP SSL</b> が選択されている場合, 電子メールは SSL SMTP サーバ経由でセキュアに送信されます。

## 計算メソッド

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
サンプリング間隔	このタイム・スケール・オプションを使用して, モニタ読み取りの時間間隔を選択します。毎分 1 回から毎日 1 回の範囲から間隔を選択するか, 自動スケールを使用できます。自動スケールを使用すると, SiteScope では特定のモニタの選択した期間に取得された読み取り数を判断し, 管理レポートの適切な間隔が選択されます。  標準設定値 : 自動タイム スケール
最大のグラフ値	グラフに表示される最大値を選択するには, 垂直スケール・オプションを選択します。特定のスケール値を選択すると, 異なるモニタおよび時間のグラフとの比較が容易になります。

UI 要素	詳細
	標準設定値 : 自動垂直スケール

## 〔新規 SiteScope モニタ レポート〕 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、1 つ以上のモニタ・グループで定義されたモニタの詳細情報を含むレポートを作成できます。

アクセス方法	<p>〔モニタ〕 コンテキストを選択し、モニタ・ツリーで次のように操作します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックし、〔レポート〕 &gt; 〔モニタ〕 を選択するか、</li><li>• レポート生成対象となる SiteScope オブジェクトを選択し、〔レポート〕 タブで〔レポートの新規作成〕 &gt; 〔モニタ〕 を選択します。</li></ul>
重要な情報	<p>レポートを生成するには、SiteScope で管理者である必要があります。または、ユーザ管理プリファレンスで「<b>モニタ サマリ レポートの生成</b>」権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、「<a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a>」(744ページ)を参照してください。</p>
関連タスク	<p><a href="#">「SiteScope レポートの作成」</a> (1311ページ)</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• <a href="#">「レポート」</a> (1310ページ)</li><li>• <a href="#">「モニタ・サマリ・レポート」</a> (1352ページ)</li></ul>










本項の内容



- [「モニタ・レポート・ツールバー」](#) (1334ページ)
- [「モニタ・レポート・テーブル・ツールバー」](#) (1336ページ)

モニタ・レポート・ツールバー

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。




UI 要素	詳細
	<p>〔折りたたみ〕 レポート・フィルタ :クリックしてレポート・フィルタの折りたたみ / 展開を行います。</p> <p>レポート・フィルタを選択すると、SiteScope モニタ・ツリーが表示されま</p>


UI 要素	詳細
	<p>す。このレポートに含めるグループ、モニタ、あるいはその両方を選択します。ツリーには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。</p> <p><b>標準設定値</b> : 現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。</p>
	<p><b>実行</b>。レポートに含めるグループとモニタを選択したら、<b>実行</b> ボタンをクリックしてレポートを実行します。</p>
	<p><b>レポート・データの形式...</b> クリックすると、利用できるレポートの形式が表示されます。レポートが出力されたら、ローカル・マシンに保存できます。</p> <p>ファイルの形式を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>  <b>印刷用</b>。レポートをプリンタに送信できる形式にします。  <b>ヒント</b> : 印刷前に、プリンタ設定がフレームを画面に表示された状態ではなく、選択されたフレームを印刷する設定になっていることを確認します。            最適な印刷結果を得るために、Microsoft Internet Explorer を使用している場合は、<b>背景の色とイメージを印刷する</b> オプションをオンにします（<b>ツール</b> &gt; <b>インターネットオプション</b> &gt; <b>詳細設定</b> タブ &gt; <b>印刷</b>）。         </li> <li>  <b>PDF</b>。PDF 形式でレポートを出力します。PDF ファイルですべての言語の文字を表示できるようにするには、次のようにサーバで Arial Unicode MS フォント・ファイルが利用可能であることを確認する必要があります。           <ol style="list-style-type: none"> <li>システムのフォント・ライブラリに移動します。たとえば、Windows では次の場所にあります。C:\Windows\Fonts</li> <li>選択したフォント・ライブラリに Arial Unicode MS フォントをダウンロードします。このフォントは次のサイトから入手できます。  <a href="http://www.microsoft.com/typography/fonts/family.aspx?FID=24">http://www.microsoft.com/typography/fonts/family.aspx?FID=24</a> </li> <li>サーバを再起動します。</li> </ol> </li> <li>  <b>CSV</b>。CSV 形式でレポートを出力します。         </li> <li>  <b>Excel</b>。Excel 形式でレポートを出力します。         </li> <li>  <b>XML</b>。XML 形式でレポートを出力します。         </li> <li>  <b>ヘルプ</b>。このメニュー・オプションのオンライン・ヘルプにアクセスします。         </li> </ul>
	<p><b>レポートのエクスポート先...</b> レポートのエクスポートに利用できるオプションを表示します。</p>

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"><li>•  <b>電子メール</b>：[メール詳細] ダイアログ・ボックスを開き、電子メールを使ってレポートを送信する方法を設定します。ユーザインタフェースの詳細については、「<a href="#">[メール詳細] ダイアログ・ボックス</a>」(1337ページ)を参照してください。 <b>注</b>：メール・サーバが（「<a href="#">[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス</a>」(581ページ)で）SSL SMTP を使用するように定義されている場合、SiteScope はレポートを電子メールにエクスポートできません。</li><li>•  <b>ヘルプ</b>。このメニュー・オプションのオンライン・ヘルプにアクセスします。</li></ul>

モニタ・レポート・テーブル・ツールバー



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されま  
す）。

UI 要素	詳細
<レポートのターゲット>	このレポートに含まれるモニタと、[カラムの選択] ダイア ログ・ボックスで選択された情報が表示されます。
	<b>カラム幅のリセット</b> ：表のカラム幅を標準設定にリセットし ます。表のカラムの幅は、カラムの枠線を右または左にド ラッグすることによって調節できます。
	<b>カラムの選択</b> ：レポート・カラムに表示するモニタ情報を選 択します。[無効] や [頻度] などの特定のオプションが選 択されている場合、または[モニタの詳細] などの値が指定 されている場合にのみ、選択したパラメータのデータがレ ポートに表示されます。オプションや値が特定のモニタ・ セットアップで定義されていない場合、そのモニタのパラ メータの列は空白になります。 <b>注</b> ：隣接する一連のグループを選択するには、SHIFT キーを押 しながら選択します。隣接していない複数の項目を選択する には、CTRL キーを押しながらクリックします。
	データの表やレポートのリストをページに分割します。対応 するボタンをクリックすることで、ページ間を移動できま す。

UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>レポートの次/前のページを表示するには、<b>【次のページ】</b> / <b>【前のページ】</b> ボタンをクリックします。</li> <li>レポートの前/最初のページを表示するには、<b>【前のページ】</b> / <b>【最初のページ】</b> ボタンをクリックします。</li> </ul>
<b>&lt;モニタ情報カラム&gt;</b>	<p>このレポートに含まれる SiteScope モニタと、選択されたカラムに対する情報が表示されます。利用可能なカラムと説明のリストは、<b>「モニタ・サマリ・レポート」</b> (1352ページ) を参照してください。</p> <p>特定のカラムによってレポートをソートするには、カラム・ヘッダをクリックします。カラムがソート可能な場合は、小さな矢印アイコンが表示されます。矢印の方向がカラムのソート方向（昇順/降順）を示します。</p> <p> アイコンをクリックしてソート方向を変更します。</p> <p>カラムを使ってレポートをソートした場合、カラム・ヘッダが濃い青色になります。</p>

## 「メール詳細」 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、電子メールで送信されるレポートを設定できます。

<b>アクセス方法</b>	<b>「レポートのエクスポート先...」</b>  をクリックして、  <b>「電子メール」</b> を選択します。
<b>重要な情報</b>	レポートの内容を電子メール・クライアントに表示するメール・オプションを選択した場合は、電子メール・クライアントのセキュリティ制限事項で、HTML メールに含まれるスクリプトが実行されるように設定します。このように設定されていない場合、レポートのすべての内容を適切に表示できないことがあります。
<b>関連タスク</b>	<b>「SiteScope レポートの作成」</b> (1311ページ)
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li><b>「レポート」</b> (1310ページ)</li> <li><b>「[新規 SiteScope モニタ レポート] ダイアログ・ボックス」</b> (1334ページ)</li> <li><b>「モニタ・サマリ・レポート」</b> (1352ページ)</li> </ul>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
件名	内容を示す件名を入力するか、または標準設定値を受け入れます。
送信先	レポートの送信先の電子メール・アドレスを入力します。
返信アドレス	返信を受信する電子メール・アドレスを入力します。
コメント	必要に応じて、関連するコメントを入力します。
レポートの送信形式	<p>レポートを送信する形式を指定します。次のオプションのいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>HTML メール</b> : レポートを電子メール・クライアント内に表示します (HTML が電子メール・クライアントでサポートされており、表示するように設定されている必要があります)。</li> <li>• <b>HTML アタッチメント</b> : レポートをブラウザ内に HTML 形式で表示します。</li> </ul> <p>注 : 添付ファイルを表示するには、SiteScope マシン に接続が必要です。</p>
画像を含める	<p>電子メール内にすべてのレポート・リソース (たとえば、グラフィックス) を含めるにはこのオプションを選択します。</p> <p>電子メールから画像を削除する場合は、このオプションをクリアします。この場合、画像は SiteScope サーバ上に置かれるため、レポート画像を表示するには、SiteScope にネットワーク接続してサーバにアクセスする必要があります。</p> <p>注 : [レポートの送信形式] フィールドで [HTML メール] が選択されている場合にのみ、このオプションが表示されます。</p>
Internet Explorer HTML アーカイブ・ファイル (.mht) として送信する	<p>ブラウザ内にすべてのレポート・リソース (たとえば、グラフィックス) を表示する場合は選択します。ただし、MHT 形式がサポートされている必要があります (Microsoft Internet Explorer など)。添付ファイルを表示するために、SiteScope マシンに接続する必要はありません。</p> <p>注 : [レポートの送信形式] フィールドで [HTML アタッチメント] が選択されている場合にのみ、このオプションが表示されます。</p>
Zip されたアタッチメント	<p>添付ファイルを圧縮された形式で送信します。</p> <p>注 : [レポートの送信形式] フィールドで [HTML アタッチメント] が選択されている場合にのみ、このオプションが表示されます。</p>

## 〔新規 SiteScope 警告レポート〕 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、特定の期間に送信された SiteScope 警告を表示するために使用するレポートを作成できます。


アクセス方法	<p>〔モニタ〕コンテキストを選択し、モニタ・ツリーで次のように操作します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックし、〔レポート〕&gt;〔警告〕を選択するか、</li><li>• レポート生成対象となる SiteScope オブジェクトを選択し、〔レポート〕タブで〔レポートの新規作成〕&gt;〔警告〕を選択します。</li></ul>
重要な情報	<p>警告レポートを生成するには、SiteScope で管理者である必要があります。または、ユーザ管理プリファレンスで「警告レポートの生成」権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、「<a href="#">ユーザ管理プリファレンス</a>」(744ページ)を参照してください。</p>
関連タスク	<p>「<a href="#">SiteScope レポートの作成</a>」(1311ページ)</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"><li>• 「<a href="#">レポート</a>」(1310ページ)</li><li>• 「<a href="#">警告レポート</a>」(1356ページ)</li></ul>






### 本項の内容

- 「[警告レポート・ツールバー](#)」(1339ページ)
- 「[警告レポート・テーブル・ツールバー](#)」(1342ページ)










### 警告レポート・ツールバー

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
	<p>〔折りたたみ〕レポート・フィルタ :クリックしてレポート・フィルタの折りたたみ / 展開を行います。レポート・フィルタを選択すると、次の操作が可能になります。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• レポートでカバーしたい時間範囲を時間範囲バー（以下に説明）を使って選択します。</li><li>• 左側の表示枠で、このレポートに含めるグループ、モニタ、あるいはその両方を選択します。ツリーには、現在選択されているコンテナお</li></ul>

UI 要素	詳細
	<p>よびすべての子コンテナが含まれます。標準設定では、現在のコンテナおよびすべての子要素が選択されています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>右側の表示枠で、このレポートに含める警告タイプを選択します。標準設定では、すべての警告タイプが選択されています。</li> </ul>
<p>表示期間: </p>	<p><b>&lt;時間範囲バー&gt;</b> レポートの粒度には次のものが含まれます。時間範囲および時間単位。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>表示。</b> レポートでカバーしたい時間範囲を選択します:過去1時間, 過去1日, 過去1週間, 時間, 日, 週, またはカスタム (ユーザ定義の時間帯)</li> <li>ボタンは次のように使用します。 <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>戻る</b> : 現在表示している時間枠の1つ前の時間枠のレポートを表示します。  <b>[表示]</b> ボックスの値が <b>[日]</b> である場合、このボタンをクリックすると、現在表示しているレポートの1日前のデータが表示されます。</li> <li> <b>進む</b> : 現在表示している時間枠の1つ後の時間枠のレポートを表示します。  <b>[表示]</b> ボックスの値が <b>[時間]</b> である場合、このボタンをクリックすると、現在表示しているレポートの1時間後のデータが表示されます。</li> </ul> </li> <li><b>開始 ~ 終了</b> : このリンクをクリックするとカレンダーが表示され、レポートの開始日時と終了日時を設定できます。カレンダーには次のボタンがついています。 <ul style="list-style-type: none"> <li><b>現在</b> : カレンダーで今日の日付を選択します。</li> <li><b>キャンセル</b> : 変更せずにカレンダーを閉じます。</li> <li><b>OK</b>。選択した日付の日付リンクを更新してカレンダーを閉じます。</li> </ul> </li> </ul>
	<p><b>実行。</b> レポートに含める時間範囲、グループ、モニタ、および警告タイプを選択したら、<b>[実行]</b> ボタンをクリックしてレポートを生成します。</p>
	<p><b>レポート・データの形式...</b> 利用できるレポートの形式が表示されます。レポートが出力されたら、ローカル・マシンに保存できます。</p>







UI 要素	詳細
	<p>ファイルの形式を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>  <b>印刷用。</b> レポートをプリンタに送信できる形式にします。 <p><b>ヒント：</b>印刷前に、プリンタ設定がフレームを画面に表示された状態ではなく、選択されたフレームを印刷する設定になっていることを確認します。最適な印刷結果を得るために、Microsoft Internet Explorer を使用している場合は、[背景の色とイメージを印刷する] オプションをオンにします（[ツール] &gt; [インターネットオプション] &gt; [詳細設定] タブ &gt; [印刷]）。</p> </li> <li>  <b>PDF。</b> PDF 形式でレポートを出力します。PDF ファイルですべての言語で文字が表示されるようにするには、次のように、Arial Unicode MS フォントがサーバで利用できることを確認してください。 <ol style="list-style-type: none"> <li>システムのフォント・ライブラリに移動します。たとえば、Windows では次の場所にあります。C:\Windows\Fonts</li> <li>選択したフォント・ライブラリに Arial Unicode MS フォントをダウンロードします。フォントは、次の Web サイトから入手できます。 <a href="http://www.microsoft.com/typography/fonts/family.aspx?FID=24">http://www.microsoft.com/typography/fonts/family.aspx?FID=24</a>.</li> <li>サーバを再起動します。</li> </ol> </li> <li>  <b>CSV。</b> CSV 形式でレポートを出力します。 </li> <li>  <b>Excel。</b> Excel 形式でレポートを出力します。 </li> <li>  <b>XML。</b> XML 形式でレポートを出力します。 </li> <li>  <b>ヘルプ。</b> このメニュー・オプションのオンライン・ヘルプにアクセスします。 </li> </ul>
	<p><b>レポートのエクスポート先...</b> レポートのエクスポートに利用できるオプションを表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>  <b>電子メール：</b> [メール詳細] ダイアログ・ボックスを開き、電子メールを使ってレポートを送信する方法を設定します。ユーザインタフェースの詳細については、「<a href="#">[メール詳細] ダイアログ・ボックス</a>」(1337ページ)を参照してください。 <p><b>注：</b>メール・サーバが（「<a href="#">[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス</a>」(581ページ)で）SSL SMTP を使用するよう定義されている場合、SiteScope はレポートを電子メールにエクスポートできません。</p> </li> <li>  <b>ヘルプ。</b> このメニュー・オプションのオンライン・ヘルプにア </li> </ul>

UI 要素	詳細
	クセスします。

## 警告レポート・テーブル・ツールバー

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
	<b>カラム幅のリセット</b> : 表のカラム幅を標準設定にリセットします。表のカラムの幅は、カラムの枠線を右または左にドラッグすることによって調節できます。
	<b>カラムの選択</b> : レポート・カラムに表示するモニタ情報を選択します。[無効] や [頻度] などの特定のオプションが選択されている場合、または [モニタの詳細] などの値が指定されている場合にのみ、選択したパラメータのデータがレポートに表示されます。オプションや値が特定のモニタ・セットアップで定義されていない場合、そのモニタのパラメータの列は空白になります。  <b>注</b> : 隣接する一連のグループを選択するには、SHIFT キーを押しながら選択します。隣接していない複数の項目を選択するには、CTRL キーを押しながらクリックします。
	データの表やレポートのリストをページに分割します。対応するボタンをクリックすることで、ページ間を移動できます。  <ul style="list-style-type: none"> <li>レポートの次/前のページを表示するには、<b>【次のページ】 / 【前のページ】</b> ボタンをクリックします。</li> <li>レポートの前/最初のページを表示するには、<b>【前のページ】 / 【最初のページ】</b> ボタンをクリックします。</li> </ul>
<b>&lt;警告情報カラム&gt;</b>	指定された時間帯にフィルタで選択されたモニタおよび警告タイプに対して生成された SiteScope 警告についての情報を表示します。表示された情報は [カラムを選択] ダイアログ・ボックスで選択されたフィールドに対応しています。利用可能なカラムと説明のリストは、 <a href="#">「警告レポート」(1356 ページ)</a> を参照してください。

UI 要素	詳細
	<p><b>注:</b> レポートには、選択されたオブジェクトをターゲットとする親グループからの警告を含む、すべての警告が含まれます。</p> <p>特定の列によってレポートをソートするには、列・ヘッダをクリックします。列がソート可能な場合は、小さな矢印アイコンが表示されます。矢印の方向が列のソート方向（昇順/降順）を示します。</p> <p> アイコンをクリックしてソート方向を変更します。</p> <p>列を使ってレポートをソートした場合、列・ヘッダが濃い青色になります。</p>

## 管理レポート

このレポートには、特定の期間のモニタおよびモニタ・グループの、インフラストラクチャの可用性およびパフォーマンス・データのサマリと特定の詳細情報が表示されます。管理レポートは、新たに出現した傾向を検出し、危機的状態になる前に潜在的問題を修正するために使用します。

# hp SiteScope レポート

## クイックリンク

- テーブル形式
- エラーリスト
- 警告リスト
- 良好リスト

## BSM Integration Configuration の サマリ


(情報 開始日時: 14/11/13 14:51 終了日時: 14/12/03 14:51 )

### 稼働時間サマリ

名前	稼働時間 %	エラー %	警告 %	最終
BSM Integration Configuration	100	0	0	

### 測定値サマリ

名前	測定値	Max	Avg	最終
BSM Integration Configuration	Total Groups	0	0	0

アクセス方法	<p>【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、【レポート】 &gt; 【管理】を選択します。レポートのプロパティを設定し、【OK】をクリックします。【レポート】タブで、レポートを選択し、【レポートの生成】 ボタンをクリックします。表示するレポート期間の日付が記述されたリンクをクリックします。生成されたレポートがない場合、または更新されたレポートを作成する場合は、【生成】ボタンをクリックします。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>管理レポートでは、英語以外のラベルはサポートされていません。</li><li>インジケータ値は SiteScope レポートには表示されません。</li><li>カウンタを文字列（数字以外）でカスタム・モニタ用に設定した場合、または、文字列（数字以外）の値を含む参照可能なモニタ・カウンタを使用した</li></ul>

	場合は、〔測定値サマリ〕テーブルの中の最大値と平均値は「n/a」と表示されます。カウンタ値タイプを変更した場合も同様です（たとえば、カウンタを数値で設定した後、文字列の値に変更したか、または、その逆の場合）。
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「SiteScope レポートの作成」 (1311ページ)</a>
<b>関連情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <a href="#">「[新規 SiteScope 管理レポート] / [SiteScope 管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」 (1319ページ)</a></li> <li>・ <a href="#">「[レポート] ページ」 (1317ページ)</a></li> </ul>

#### 本項の内容

- ・ [「レポートの内容 - インデックス・ページ」 \(1345ページ\)](#)
- ・ [「レポートの内容 - 管理レポート・ページ」 \(1345ページ\)](#)

#### レポートの内容 - インデックス・ページ

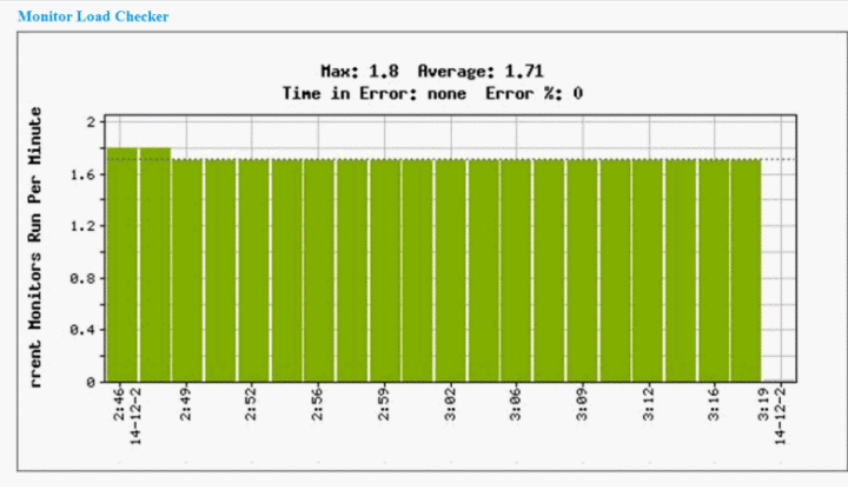
次の要素が管理レポート・インデックス・ページに含まれます（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<b>&lt;ライセンスの詳細&gt;</b>	ページ下部にライセンスの詳細が表示されます。アクティブなライセンス・エディションと、容量タイプ（使用可能な量、使用中の量、残量）のサマリを表示します。
<b>最新のレポート</b>	現在選択されているモニタまたはグループの最新の管理レポートを表示する場合にクリックします。
<b>情報対象日&lt;レポートの日付と時刻&gt;</b>	現在選択されているモニタまたはグループの、リンクで指定されている期間の管理レポートを表示する場合にクリックします。〔管理レポート〕ページの詳細については、「レポートの内容 - 〔管理レポート〕ページ」参照してください。
<b>生成</b>	レポートの生成が予定されている日時に関係なく、現在選択されているモニタまたはグループのレポートを新規作成する場合にクリックします。

#### レポートの内容 - 管理レポート・ページ

次の要素が管理レポート・ページに含まれます（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
テーブル形式	現在選択しているレポートでテーブル形式の測定値データに移動するには、 <b>「テーブル形式」</b> リンクをクリックします。
エラー・リスト	現在選択しているレポートでエラー状態のモニタのリストに移動するには、 <b>「エラー リスト」</b> リンクをクリックします。
警告リスト	現在選択しているレポートで警告状態のモニタのリストに移動するには、 <b>「警告リスト」</b> リンクをクリックします。
良好リスト	現在選択しているレポートで正常状態のモニタのリストに移動するには、 <b>「良好リスト」</b> リンクをクリックします。
レポートのインデックス	管理レポートのインデックスに移動するには、 <b>「レポートのインデックス」</b> リンクをクリックします。管理レポートのインデックス・ページの詳細については、 <b>「管理レポート」 (1343ページ)</b> を参照してください。
稼動時間サマリ	このテーブルには、次が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>名前</b> : レポートに含まれているモニタの名前。</li> <li>・ <b>稼動時間 %</b> : 正常であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。</li> <li>・ <b>警告 %</b> : 警告であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。</li> <li>・ <b>エラー %</b> : エラーであるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。</li> <li>・ <b>最終</b> : レポート期間のモニタの最終読み取り値。</li> </ul>
測定値サマリ	このテーブルには、次が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>名前</b> : レポートに含まれているモニタの名前。</li> <li>・ <b>測定値</b> : 監視対象のパラメータ（エラー条件）。</li> <li>・ <b>Max</b> : レポート期間中に測定値パラメータについて記録された最大値。</li> <li>・ <b>Avg</b> : レポート期間中に記録された読み取りの平均値。</li> <li>・ <b>最終</b> : レポート期間のモニタの最終読み取り値。</li> </ul>
<測定値グラフ>	レポート期間中に監視された各インスタンスのグラフ形式の測定値データ。  赤または黄色で強調表示された棒は測定値がモニタのエラーまたは警告ステータスのしきい値を超えたことを示し、緑色の棒は測定値が良好ステータスであることを示します（以下の左側）。

UI 要素	詳細																										
	<p>一部が灰色で表示される棒（以下の右側）は、棒がいくつかのデータ・サンプルの集計に基づいた平均値である場合の最大値を示します（これは、[新規 SiteScope 管理レポート] / [SiteScope 管理レポートの編集] ダイアログ・ボックスの[計算メソッド] セクションで[サンプリング間隔] オプションを使用して設定します）。グラフでは通常、短期レポート（[サンプリング間隔] が「自動タイム スケール」に設定され、選択した時間範囲の未処理のデータを表示できる）の場合は未処理のデータ（灰色の棒がない）が表示され、長期レポートの場合は集計データが表示されます。</p> <p><b>例：</b></p>  <table border="1"><caption>Monitor Load Checker Data (Estimated)</caption><thead><tr><th>Time Interval</th><th>Current Monitors Run Per Minute</th></tr></thead><tbody><tr><td>2:46 14-12-2</td><td>1.8</td></tr><tr><td>2:49 14-12-2</td><td>1.7</td></tr><tr><td>2:52 14-12-2</td><td>1.7</td></tr><tr><td>2:55 14-12-2</td><td>1.7</td></tr><tr><td>2:58 14-12-2</td><td>1.7</td></tr><tr><td>3:01 14-12-2</td><td>1.7</td></tr><tr><td>3:04 14-12-2</td><td>1.7</td></tr><tr><td>3:07 14-12-2</td><td>1.7</td></tr><tr><td>3:10 14-12-2</td><td>1.7</td></tr><tr><td>3:13 14-12-2</td><td>1.7</td></tr><tr><td>3:16 14-12-2</td><td>1.7</td></tr><tr><td>3:19 14-12-2</td><td>1.7</td></tr></tbody></table>	Time Interval	Current Monitors Run Per Minute	2:46 14-12-2	1.8	2:49 14-12-2	1.7	2:52 14-12-2	1.7	2:55 14-12-2	1.7	2:58 14-12-2	1.7	3:01 14-12-2	1.7	3:04 14-12-2	1.7	3:07 14-12-2	1.7	3:10 14-12-2	1.7	3:13 14-12-2	1.7	3:16 14-12-2	1.7	3:19 14-12-2	1.7
Time Interval	Current Monitors Run Per Minute																										
2:46 14-12-2	1.8																										
2:49 14-12-2	1.7																										
2:52 14-12-2	1.7																										
2:55 14-12-2	1.7																										
2:58 14-12-2	1.7																										
3:01 14-12-2	1.7																										
3:04 14-12-2	1.7																										
3:07 14-12-2	1.7																										
3:10 14-12-2	1.7																										
3:13 14-12-2	1.7																										
3:16 14-12-2	1.7																										
3:19 14-12-2	1.7																										
<測定値テーブル>	レポート期間中に監視された各インスタンスの測定値データを 30 分単位でテーブル形式で表示したもの。赤または黄色で強調表示されたエントリは、測定値がモニタのエラーまたは警告ステータスのしきい値を超えたことを示します。青はモニタが無効になっていることを示します。																										
<エラー・リスト・テーブル>	モニタのエラー・ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは赤で強調表示されます。																										
<警告リスト・テーブル>	モニタの警告ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは黄色で強調表示されます。																										
<良好リスト・テーブル>	モニタの正常ステータスしきい値内のモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは緑で強調表示されます。																										

## クイック・レポート

このレポートには、特定の期間のモニタおよびモニタ・グループの、インフラストラクチャの可用性およびパフォーマンス・データのサマリと特定の詳細情報が表示されます。クイック・レポートは、その場に応じて生成され、SiteScope 設定データには保存されません。



# hp SiteScope レポート

## クイックリンク

- テーブル形式
- エラーリスト
- 警告リスト
- 良好リスト

## 複数のモニタのサマリ


(情報 開始日時: 14/12/03 14:17 終了日時: 14/12/03 15:17)

### 稼動時間サマリ

名前	稼動時間 %	エラー %	警告 %	最終
Monitor Load Checker	100	0	0	✓
BSM Integration Statistics	100	0	0	✓
Windows HardwareEvents Log on SiteScope Server	0	100	0	✗
Log Event Checker	100	0	0	✓
Configuration Services Monitor	100	0	0	✓
Health of SiteScope Server	100	0	0	✓
Dynamic Monitoring Statistics	100	0	0	✓
TestsURL	100	0	0	✓
CPU Utilization on SiteScope Server	100	0	0	✓

### 測定値サマリ

名前	測定値	Max	Avg	最終
Monitor Load Checker	Current Monitors Run Per Minute	2.6	2.55	2.6
BSM Integration Statistics	Currently logging to Business Availability Center	n/a	n/a	0 metrics/minute
Windows HardwareEvents Log on SiteScope Server	match count	n/a	n/a	n/a

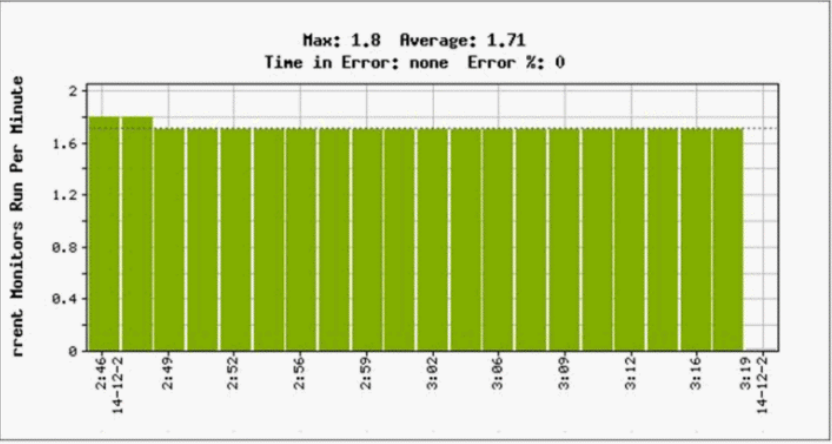
<b>アクセス方法</b>	<p>【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、【レポート】&gt;【クイック】を選択します。レポートのプロパティを設定し、【レポートの生成】をクリックします。</p> <p>あるいは、モニタを選択して、ダッシュボード・ツールバーの【クイックレポート 】 SiteScope ボタンをクリックすることで、事前定義されている設定を使用してレポートを作成できます。</p>
<b>重要な情報</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>クイック・レポートの時間間隔は、自動的に増分されません。つまり、レポートには必ず、レポート定義で指定した【レポート期間】の絶対的な間隔のデータが含まれます。クイック・レポートでより最近のデータを表示するには、【レポート期間】設定を編集します。</li> <li>BSM で作業する場合、SAM 管理のクイック・レポート定義は、BSM コンテキストでのみ格納されます。クイック・レポート定義は SiteScope サーバに格納されず、サーバ上に存続しません。</li> </ul>
<b>関連タスク</b>	<a href="#">「SiteScope レポートの作成」(1311ページ)</a>
<b>関連情報</b>	<a href="#">「[新規 SiteScope クイック レポート] ダイアログ・ボックス」(1328ページ)</a>

## レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	詳細
<b>&lt;ライセンスの詳細&gt;</b>	ページ下部にライセンスの詳細が表示されます。アクティブなライセンス・エディションと、容量タイプ（使用可能な量、使用中の量、残量）のサマリを表示します。
<b>テーブル形式</b>	現在選択しているレポートでテーブル形式の測定値データに移動する場合にクリックします。
<b>エラー・リスト</b>	現在選択しているレポートでエラー状態のモニタのリストに移動する場合にクリックします。
<b>警告リスト</b>	現在選択しているレポートで警告状態のモニタのリストに移動する場合にクリックします。

UI 要素	詳細
良好リスト	現在選択しているレポートで正常状態のモニタのリストに移動する場合にクリックします。
稼動時間サマリ	<p>このテーブルには、次が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>名前</b> : レポートに含まれているモニタの名前。</li> <li>・ <b>稼動時間 %</b> : 正常であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。</li> <li>・ <b>警告 %</b> : 警告であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。</li> <li>・ <b>エラー %</b> : エラーであるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。</li> <li>・ <b>最終</b> : レポート期間のモニタの最終読み取り値。</li> </ul>
測定値サマリ	<p>このテーブルには、次が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>名前</b> : レポートに含まれているモニタの名前。</li> <li>・ <b>測定値</b> : 監視対象のパラメータ（エラー条件）。</li> <li>・ <b>Max</b> : レポート期間中に測定値パラメータについて記録された最大値。</li> <li>・ <b>Avg</b> : レポート期間中に記録された読み取りの平均値。</li> <li>・ <b>最終</b> : レポート期間のモニタの最終読み取り値。</li> </ul>
<測定値グラフ>	<p>レポート期間中に監視された各インスタンスのグラフ形式の測定値データ。</p> <p>赤または黄色で強調表示された棒は測定値がモニタのエラーまたは警告ステータスのしきい値を超えたことを示し、緑色の棒は測定値が良好ステータスであることを示します（以下の左側）。</p> <p>一部が灰色で表示される棒（以下の右側）は、棒がいくつかのデータ・サンプルの集計に基づいた平均値である場合の最大値を示します（これは、[新規 SiteScope 管理レポート] / [SiteScope 管理レポートの編集] ダイアログ・ボックスの[計算メソッド] セクションで[サンプリング間隔] オプションを使用して設定します）。グラフには通常、短期レポート（[サンプリング間隔] が「自動タイム・スケール」に設定され、選択した時間範囲の未処理のデータを表示できる）の場合は未処理のデータ（灰色の棒がない）が表示され、長期レポートの場合は集計データが表示されます。</p> <p><b>例 :</b></p>

UI 要素	詳細
	<div><div>Monitor Load Checker</div><div><div>Max: 1.8 Average: 1.71 Time in Error: none Error %: 0</div></div></div>
<測定値テーブル>	レポート期間中に監視された各インスタンスの測定値データを 30 分単位でテーブル形式で表示したもの。赤または黄色で強調表示されたエントリは、測定値がモニタのエラーまたは警告ステータスのしきい値を超えたことを示します。青はモニタが無効になっていることを示します。
<エラー・リスト・テーブル>	モニタのエラー・ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは赤で強調表示されます。
<警告リスト・テーブル>	モニタの警告ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは黄色で強調表示されます。
<良好リスト・テーブル>	モニタの正常ステータスしきい値内のモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは緑で強調表示されます。

## モニタ・サマリ・レポート

このレポートには、レポートに含めるように選択したグループのモニタの構成および現在の設定に関する情報が表示されます。このレポートは、モニタのセットアップ情報およびモニタ・グループの構成と構成を表示するために使用します。

たとえば、モニタのスキップで問題がある場合は、モニタ実行頻度（[\[頻度\]](#) 設定）を確認し、比較できます。モニタのスキップの詳細については、[「SiteScope サーバの状況モニタ」](#) (1129ページ)を参照してください。

また、警告に影響する可能性があるモニタの依存関係を確認するためにレポートを使用することもできます。依存関係の詳細については、「[グループの依存関係の監視](#)」(264ページ)を参照してください。

HP SiteScope モニタ レポート			
実行(R)			
HP SiteScope モニタ レポート - 表			
モニタタイトル	モニタタイプ	グループ	頻度
BSM Integration Configuration	BAC Integration Configuration	ABC Insurance CO	1 day
BSM Integration Configuration(1)	BAC Integration Configuration	ABC Insurance CO	1 day
BSM Integration Statistics	BAC Integration Statistics	ABC Insurance CO	100 seconds
CPU Utilization on SiteScope Server	CPU Utilization	ABC Insurance CO	10 minutes
TestsURL	URL List	ABC Insurance CO	10 minutes
Windows HardwareEvents Log on SiteScope Server	Microsoft Windows Event Log	ABC Insurance CO	10 minutes

アクセス方法	【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、【レポート】>【モニタ】を選択します。レポート設定を設定し、【実行】ボタンをクリックしてレポートを生成します。
関連タスク	<a href="#">「SiteScope レポートの作成」</a> (1311ページ)
関連情報	<a href="#">「[新規 SiteScope モニタ レポート] ダイアログ・ボックス」</a> (1334ページ)

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。






UI 要素	詳細
モニタ・タイトル	モニタの名前を表示します。
モニタ・タイプ	表示されるモニタのタイプ。
グループ	モニタが属するグループ名。
頻度	モニタに設定されている実行頻度。
依存対象	このモニタの実行が他のモニタの状態に依存する場合は、依存する側のモニタを一覧表示します。
URL	監視対象の URL。

UI 要素	詳細
ホスト	監視対象のオブジェクトを含みモート・サーバの名前。
マシン	マシン名。
OID	監視対象のパラメータのオブジェクト ID。
無効	モニタが無効かどうかを示します。
スケジュール	標準設定以外のスケジュールが選択されている場合は、モニタのスケジュール。
エラー頻度	【エラー頻度】オプションが選択されている場合は、エラー条件をレポートしたモニタの監視間隔（秒単位）。
タイムアウト	モニタのタイムアウト設定。
エラーを検証	【エラーの検証】オプションが選択されている場合は、[On] が表示されます。このオプションを選択すると、モニタでエラーが検出された場合にモニタを自動的に再実行します。
レポートの詳細	レポートの【詳細】ボックスに入力されている場合の、レポートのテキスト説明。
モニタの詳細	【モニタの詳細】ボックスに入力されている場合の、モニタのテキスト説明。
ユーザ名	認証に必要な場合のユーザ名。
プロキシ	使用する場合のプロキシ・サーバ名。
しきい値	モニタ・インスタンスのしきい値条件。
タグ	モニタに割り当てられた検索/フィルタ・タグ。
パラメータ	パラメータとしてマークされたプロパティ・オブジェクトとそれぞれの値のリスト。
モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート	SiteScope がモニタおよび関連 CI のトポロジ・データを BSM の RTSM（Run-time Service Model）にレポートするかどうかを示します。
トポロジ・タイ	

UI 要素	詳細
プ	BSM の RTSM にデータをレポートするために使用される、モニタのトポロジ。通常、モニタの標準設定の CI タイプ（ほとんどのモニタでは Computer）が使用されます。
カスタム CI タイプ	選択した CI タイプに従って、CI タイプのキー属性が表示されます（モニタの標準設定以外の CI タイプが選択されている場合のみ）。
カスタム・トポロジ・プロパティ	<p>選択した CI タイプのキー属性値を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>名前</b> : CI の名前（BusinessApplication, BusinessService, Computer, DB2, InfrastructureService, JBoss AS, Oracle, Oracle iAS, SQL Server, Sybase, WebLogic AS, および WebSphere AS CI タイプ用）。</li> <li>・ <b>サーバ</b> : 選択した CI のコンテナ CI。この属性は、DB2, JBoss AS, Oracle, Oracle iAS, SQL Server, Sybase, WebLogic AS, WebSphere AS, および Windows CI タイプに必要です。</li> <li>・ <b>組織タイプ</b> : 組織内のレベルを識別するために使用される識別子。この属性は、BusinessApplication, BusinessService, および InfrastructureService CI タイプに必要です。</li> <li>・ <b>組織名</b> : 組織の名前。この属性は、BusinessApplication, BusinessService, および InfrastructureService CI タイプに必要です。</li> </ul>
イベント送信	モニタ・インスタンスのメトリック・ステータスが変更されたときに、SiteScope がイベントを HPOM または 操作管理 に送信するかどうかを示します。
エージェントにメトリクスをレポート	HPOM および 操作管理がデータの収集元として使用できる HP Operations Agent に対して、SiteScope からモニタ・インスタンスの測定値をレポートするかどうかを示します。
イベント・マッピング	モニタ・インスタンスのイベント送信時に使用される属性値に対して SiteScope のランタイム・データをマップするために使用されるテンプレート。
次の要因に影響される BSM サービス状況	<p>SiteScope イベントおよびメトリックスの両方がサービス状況 にレポートされるときに BSM のサービス状況 に影響を与えるプリファレンス（イベントまたはメトリックス）（SiteScope イベントおよびメトリックス両方のインジケータが CI に影響を与えるため）。</p> <p><b>注</b> : BSM との統合がない場合、このフィールドは空になります。</p>

## 警告レポート

このレポートには、選択したコンテナのモニタに対して指定した期間中に生成された SiteScope 警告に関する情報が表示されます。

HP SiteScope 警告レポート					
 		  1 / ページ 			
モニタ	タイプ	ステータス	メッセージ	日付	グループ
16.186.75.42	Sound	Pass	Default	12-5-4 下午12:13	test

重要な情報	モニタのレポートを生成するとき、レポートは、選択したモニタをターゲットにする親グループからの警告を含みません。
アクセス方法	【モニタ】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、【レポート】>【警告】を選択します。レポート設定を設定し、【実行】ボタンをクリックしてレポートを生成します。
関連タスク	<a href="#">「SiteScope レポートの作成」(1311ページ)</a>
関連情報	<a href="#">「[新規 SiteScope 警告レポート] ダイアログ・ボックス」(1339ページ)</a>

### レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
モニタ	警告が起動されたモニタの名前。
タイプ	警告アクションのタイプ（たとえば、Mailto、Sound など）。
状態	警告の状態（たとえば、パス、失敗など）。
メッセージ	警告のメッセージのタイプ（標準、alarm など）。
日付	警告が起動された日時。
グループ	警告が起動されたグループの名前。
詳細	レポートに各警告の詳細な警告情報を表示します。これには失敗した各警告に対する完全な診断ブレイクダウンが含まれます。



# 第106章: サーバ中心のレポートの作成

Microsoft Windows および UNIX リソース・モニタの場合、監視対象のリモート・サーバに関する 3 つの異なるメトリックのデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。

レポートには、CPU 使用率およびメモリ消費別の上位 5 プロセスを表示するテーブルが含まれます。グラフを操作して、テーブルに表示するデータの時間を変更できます。これにより、グラフの問題のある期間に焦点を当てて、その時点で実行されていたプロセスを特定できます。

## アクセス方法

【**モニタ**】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、選択したモニタ、グループ、または SiteScope ルートを右クリックして、【**レポート**】 > 【**サーバ中心**】を選択します。

## 学習事項

### サーバ中心のレポートの概要

サーバ中心のレポートには、同じグラフ上に次のメトリックが表示されます。

- **CPU 使用率** : UNIX リソース・モニタの場合、この測定値は次の 3 つのカウンタの平均として計算されます。システム処理使用率、ユーザ処理使用率、入力/出力処理使用率。Microsoft Windows リソース・モニタの場合、合計処理容量のうち使用された処理容量の割合として測定値が計算されます。
- **メモリ使用率** : 利用可能な合計メモリのうち使用されたメモリの割合として計算されます。
- **ネットワーク使用率** : システム固有のカウンタによって計算されます。ネットワーク使用率の計算は、Windows サーバに対してのみサポートされています。

各測定値は、グラフ上に固有の色の個別の線で表示されます。このレポートでは、異なる測定値間の相関関係を容易に表示できます。

### サーバ中心のレポートの測定値

次の表に、サーバ中心のレポートのモニタを手動で定義するときを選択する必要のあるカウンタを示します。

オペレーティング・システム・タイプ (プラットフォーム)	サーバ中心の必須カウンタ
Microsoft Windows リソース・モニタ	Memory\% Committed Bytes In Use
	Processor\_Total\% Processor Time
UNIX リソース・モニタ (Solaris プラットフォーム)	CPU utilization\%sys

オペレーティング・システム・タイプ (プラットフォーム)	サーバ中心の必須カウンタ
	CPU utilization\%usr
	CPU utilization\%wio
	Memory\swap_avail
	Memory\swap_resv
UNIX リソース・モニタ (AIX プラットフォーム)	Processor\Total\%sys
	Processor\Total\%usr
	Processor\Total\%wio
UNIX リソース・モニタ (Linux プラットフォーム)	Memory\MemFree
	Memory\MemTotal
	Processor\Total\System
	Processor\Total\User
	Processor\Total\User low

## タスク

### サーバ中心のレポートの作成方法

このタスクでは、Windows および UNIX サーバを監視するモニタの作成とサーバ中心のレポートの生成に関する手順を説明します。

#### 1. 前提条件

サーバ中心のレポートを生成できるようにするには、SiteScope で管理者である必要があります。または、ユーザ管理プリファレンスで「**サーバ中心のレポートを生成する**」権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、「[ユーザ管理プリファレンス](#)」(744ページ)を参照してください。

#### 2. Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタの作成

Microsoft Windows または UNIX サーバを監視するには、Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタを作成する必要があります。手動で、またはソリューション・テンプレートを使用して (推奨) 、モニタを作成できます。

- Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタの手動作成の詳細については、次を参照してください。

- 「Microsoft Windows リソース・モニタ」
- 「UNIX リソース・モニタ」

**注:** モニタを手動で定義する場合は、次の操作を実行する必要があります。

- 必要なモニタの設定ページで **「サーバ中心のレポートを有効化」** を選択する。
- **「サーバ中心のレポートの測定値」** (1357ページ) に記載された表に従って、モニタに必要なメトリックを選択する。

- ソリューション・テンプレートを使用したモニタの作成の詳細については（テンプレートには必要なすべての測定値カウンタが含まれるため、これを推奨します）、次を参照してください。

- **「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート」** (990ページ)
- **「AIX Host ソリューション・テンプレート」** (923ページ)
- **「Linux Host ソリューション・テンプレート」** (961ページ)
- **「Solaris Host ソリューション・テンプレート」** (1016ページ)

### 3. サーバ中心のレポートの生成

次のどちらかを使用してレポートを生成できます。

- SiteScope ダッシュボードに移動して該当する Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタのデータを表示し、使用するリソース・モニタに対応する行の **「ターゲット」** 列でサーバ名をクリックします。
- モニタ・ツリーで、選択したモニタ、グループ、または SiteScope ルートを右クリックして、**「レポート」** > **「サーバ中心」** を選択します。[サーバ中心のレポート] ダイアログ・ボックスで、レポート生成の対象とするリモート・ターゲット（**「サーバ中心のレポートを有効化」** チェックボックスが選択されている Windows/UNIX リソース・モニタ）を選択し、**「実行」** ボタンをクリックします。

ユーザ・インタフェースの詳細については、**「サーバ中心のレポート」** (1362ページ) を参照してください。

### 4. レポート内のデータの分析

このレポートでは、同じグラフでサーバの CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率の 3 つの異なる測定値を表示できます。CPU 使用率およびメモリ消費別の上位 5 プロセスもこのレポートに表示されます。グラフのデータ・ポイントをクリックして、特定の時間に掘り下げることができます。

## サーバ中心のレポートの作成方法 - 使用例のシナリオ

この使用例のシナリオでは、サーバ中心のレポートの作成方法について説明します。

### 1. 背景情報

Acme 社の SiteScope ユーザが、監視対象サーバ Apollo の CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率に関するデータを表示するレポートを作成します。

### 2. リモート・サーバの設定

レポートの作成前に、リモート Windows サーバ Apollo を監視するように SiteScope を設定し、Microsoft Windows リモート・サーバのサーバを設定します。

The screenshot shows the 'Main Settings' (メイン設定) dialog box. It contains the following fields and options:

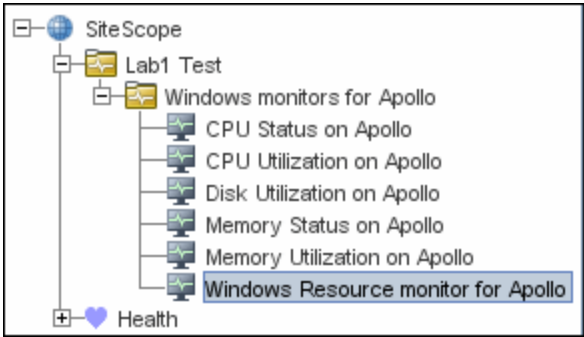
- \* サーバ:** A text box containing '\Apollo'.
- 資格情報:**
  - ☒ ユーザ名およびパスワードを使用
    - ユーザ名:** A text box containing 'administrator'.
    - パスワード:** A text box containing '.....'.
  - ☐ 事前定義された資格情報を選択
    - 資格情報プロファイル:** A dropdown menu.
    - 資格情報の追加:** A button.
  - ☐ トレース
- \* 接続方式:** A dropdown menu showing 'NetBIOS'.
- リモート サーバのエンコード:** A dropdown menu showing 'Cp1252 (windows-1252)'.

### 3. Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ

Apollo のデータを監視する SiteScope の有効化後、Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートを選択したグループ・コンテナにデプロイし、監視するサーバとして [Apollo] を選択します。サーバ中心のレポートの生成に必要なモニタと測定値がすでに設定されているため、Microsoft Windows リソース・モニタの作成時にソリューション・テンプレートを使用します。



ソリューション・テンプレートのデプロイ後、Microsoft Windows リソース・モニタを含む「Windows monitors for Apollo」という名前のグループが SiteScope によって作成されます。



4. サーバ中心のレポートの作成

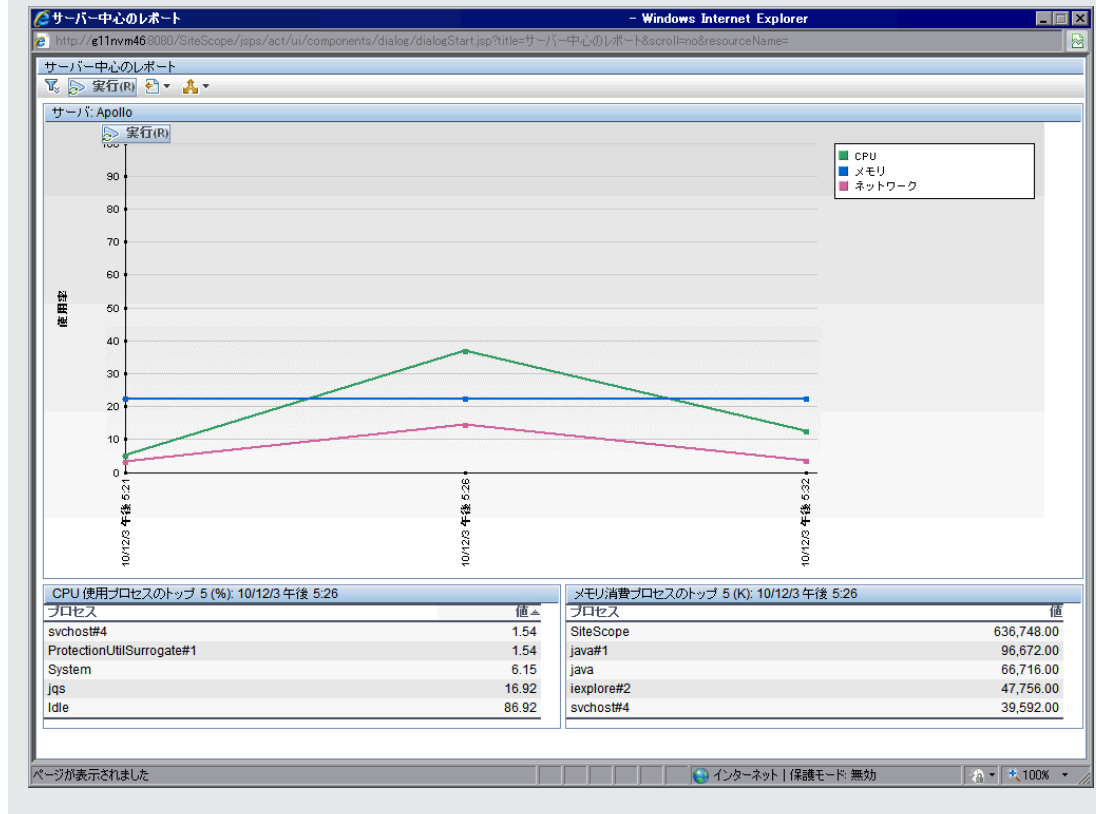
サービス状況の「現在の状態」ビューから、Apollo のサーバ中心のレポートを生成します。

SiteScope グループ - "Windows monitors for Apollo"						
ダッシュボード プロパティ						
<None> 現在の状態 モニタ履歴						
名前	状態	タイプ	ターゲット	サマリ	更新日時	
選択したノード						
Windows monitors for Apollo	✖	グループ		グループ内に...	10/12/3 午...	
グループ (0 件のうち 0 件)						
モニタ (6 件のうち 6 件)						
CPU Status on Apollo	✔	CPU	Apollo	36% avg, cpu...	10/12/3 午...	
CPU Utilization on Apollo	✔	Microsoft Windows Resourc...	Apollo	Processor0\...	10/12/3 午...	
Disk Utilization on Apollo	✖	Microsoft Windows Resourc...	Apollo	LogicalDisk...	10/12/3 午...	
Memory Status on Apollo	✔	メモリ	Apollo	11% used, 1...	10/12/3 午...	
Memory Utilization on Apollo	✔	Microsoft Windows Resourc...	Apollo	Memory\Avail...	10/12/3 午...	
Windows Resource monitor for Apo...	✔	Microsoft Windows Resourc...	Apollo	Memory% C...	10/12/3 午...	

サーバ中心のレポートが開き、同じグラフに CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率の測定値が表示されます。このデータを使用して、異なる時間の CPU 使用率およびメモリ消費

別の上位のプロセスを表示し、問題のある期間に焦点を当ててその時点で実行されていたプロセスを特定できます。

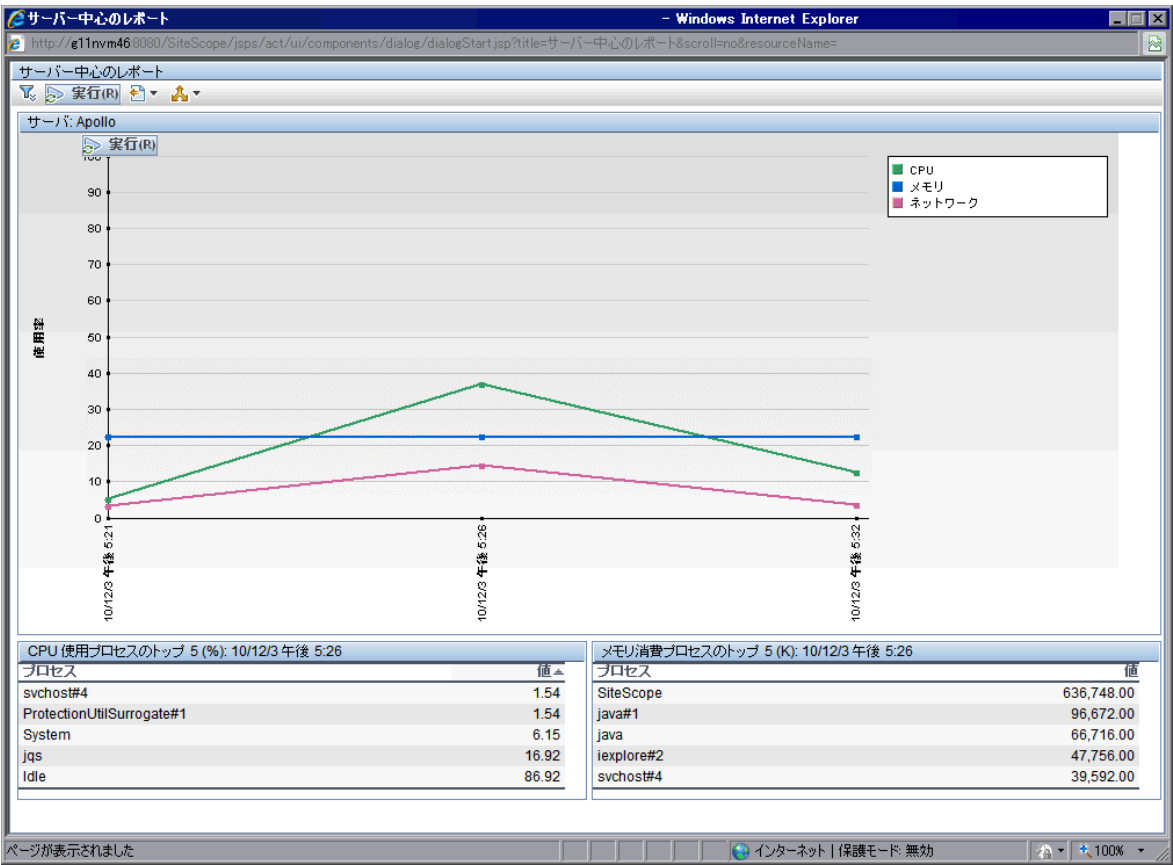
#### 例：モニタの測定値の状態および可用性



## UI の説明

### サーバ中心のレポート

このレポートには、選択したサーバの CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率の測定値が表示されます。









重要な情報

- このレポートは、[サーバ中心のレポートを有効化] が選択されている Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタによって監視されるサーバのみで利用可能です。
- これらのモニタの該当するソリューション・テンプレートを使用して、モニタをデプロイすることを強くお勧めします。テンプレートは、適切な測定値カウンタとオプションが選択された状態で事前設定されています。
- サーバ中心のレポートは、Firefox 2.x ではサポートされていません。
- モニタに問題が発生して不適切なデータを返すと、そのデータ・ポイントはスキップされます。そのため、グラフに欠落したデータ・ポイントが含まれる場合があります。

レポート設定
ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細

UI 要素	詳細
	<b>【折りたたみ】 レポート・フィルタ</b> : レポートの時間範囲設定を表示または非表示にする場合にクリックします。
	<b>実行</b> 。日付リンクに表示された日付範囲のレポートを作成します（【フィルタ】）。
	<b>形式</b> : レポート・データをエクスポートするファイルの形式に合わせます。ファイルの形式を選択します。印刷用, CSV, Excel, XML のオプションがあります。
	<b>エクスポート</b> : レポート・データを電子メールでエクスポートします。ファイルを送信するオプションを選択します。HTML メール, HTML 添付, PDF のオプションがあります。  <b>注</b> : <ul style="list-style-type: none"> <li>エクスポート機能を使用するには、信頼されたサイトに SiteScope マシンを追加する必要があります。</li> <li>メール・サーバが（「<a href="#">【電子メール プリファレンスの標準設定】 ダイアログ・ボックス</a>」(581ページ)で）SSL SMTP を使用するように定義されている場合、SiteScope はレポートを電子メールにエクスポートできません。</li> </ul>
	<b>戻る</b> : 現在表示している時間枠の 1 つ前の時間枠のレポートを表示します。  <b>例</b> : 【表示】ボックスの値が【日】である場合、このボタンをクリックすると、現在表示しているレポートの 1 日前のデータが表示されます。
	<b>進む</b> : 現在表示している時間枠の 1 つ後の時間枠のレポートを表示します。  <b>例</b> : 【表示】ボックスの値が【日】である場合、このボタンをクリックすると、現在表示しているレポートの 1 日後のデータが表示されます。
<b>ビュー</b>	レポートを表示する時間範囲。次の時間範囲を使用できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>カスタム（任意の範囲を設定できます）</li> <li>時間, 日, 週</li> <li>過去 1 時間, 過去 1 日, 過去 1 週間</li> </ul>
<b>開始/終了 &lt; 日付リンク &gt;</b>	<b>【開始】</b> リンクをクリックし、レポートの開始日付と時刻を設定します。 <b>【終了】</b> リンクをクリックし、レポートの終了日付と時刻を設定します。カレンダーには次のボタンがあります。 <ul style="list-style-type: none"> <li><b>OK</b>。選択した日付の日付リンクを更新してカレンダーを閉じます。</li> </ul>



UI 要素	詳細
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>現在</b> : カレンダーで今日の日付を選択します。</li> <li>・ <b>キャンセル</b> : 変更せずにカレンダーを閉じます。</li> </ul>

## レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>&lt;ツールチップ&gt;</b>	<p>グラフのデータ・ポイント上にポインタを置くと、選択した測定値の選択した時間での使用率の値、および日付と時間を表示する、ツールチップが表示されます。</p> <p>グラフのデータ・ポイントをクリックし、より短い時間範囲に焦点を当てることができます。データ・テーブルが更新され、選択したデータ・ポイントの時間の結果が表示されます（同じ時間の3つのデータ・ポイントのいずれかをクリックすると、レポートは同じように更新されます）。</p> <p>ページ上部にある階層リンクを使用すると、サーバ中心のサマリ・レポートに戻ることができます。</p>
<b>サーバ名</b>	使用率グラフの上部に表示されるサーバの名前。
<b>使用率グラフ</b>	<p>経過時間ごとの使用率を表示します。CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率が異なる色の線で表示されます。3つのすべての測定値は、パーセント単位（つまり、100%の使用率に対する割合）です。</p> <p>グラフのデータ・ポイントをクリックし、より短い時間範囲に焦点を当てることができます。データ・テーブルが更新され、選択したデータ・ポイントの時間の結果が表示されます（同じ時間の3つのデータ・ポイントのいずれかをクリックすると、レポートは同じように更新されます）。使用率が非常に高いポイントがある場合に、これを活用できます。そのポイントをクリックすることによって、高い使用率の原因を特定できます。</p> <p><b>注</b> : ネットワーク使用率は、Windows サーバに対してのみサポートされています。</p>
<b>CPU 使用プロセスのトップ 5 テーブル</b>	グラフの任意のポイントでの CPU 使用率のトップ 5 プロセスを表示します。このテーブルには、プロセス名と、利用可能な合計 CPU 処理の割合として CPU 使用率が表示されます。

UI 要素	詳細
メモリ消費プロセスのトップ 5 テーブル	グラフの任意のポイントでのメモリ消費のトップ 5 プロセスを表示します。このテーブルには、プロセス名とメモリ消費の値（キロバイト）が表示されます。

## 第14部: 予測解析

予測解析は、クリティカルなアプリケーションでの潜在的な問題を予測し、ビジネス・フローに影響する可能性がある問題について通知することによって、ビジネスにIT問題が影響しないよう保護するのに役立ちます。SiteScope はベースライン計算と相関計算を使用してシステムの問題を分析し、根本原因分析を支援するよう詳細情報を提供して、ビジネス・フローに影響が及ぶ前に問題を予期できるようにします。

詳細については、[「予測解析の設定」\(1368ページ\)](#)を参照してください。

## 第107章: 予測解析の設定

予測解析を使用すると、ビジネス・モニタでの潜在的な問題を予測し、基幹アプリケーションで問題が発生する前にユーザに警告できます。予測解析では、システムの異常な動作を解析して IT 障害を予測するランタイム解析エンジンを使用しており、問題がビジネスに影響を及ぼす前に、IT 管理者にビジネス・フローのパフォーマンスの低下を警告します。また、相関処理計算によって、イベントが発生した時間の前後にシステム・メトリックとビジネス・メトリックで発生している類似トレンドを見つけ出し、根本原因の解析に有用な詳細情報を提供して問題解決を促進します。

**ヒント:** 次の YouTube で、SiteScope Analytics を使用して潜在的な問題を予期する方法についてのガイドとナレーション付きの概要を表示できます。 <http://hpsw.co/Ln5i6C9>

### アクセス方法

【**モニタ**】コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、予測解析に使用する【SiteScope モニタ】を右クリックして、【**予測解析**】>【**新規予測解析**】の順に選択します。

または、モニタを選択し、右側の表示枠で【**解析**】タブをクリックして、【**新規予測解析**】をクリックします。

## 学習事項

### 定義

予測解析では、ビジネス・アプリケーション・トランザクションとビジネス IT 環境のインフラストラクチャ・レイヤの両方を監視できる SiteScope の機能を利用しています。

- **ソース・モニタ**: 解析対象のモニタ。通常は、基幹ビジネス・アプリケーションのパフォーマンスを監視するために使用するビジネス・モニタまたはアプリケーション・モニタ（URL、データベース、JMX など）を指します。ソース・モニタは、選択したターゲット・モニタのメトリックと相関関係を形成します。一部のモニタ・タイプは、標準設定では、解析用のソース・モニタとして定義できません。
- **ターゲット・モニタ**: ターゲット・モニタのメトリックは、ビジネス・アプリケーションで問題が検出された時間前後のソース・モニタのメトリックと相関関係を形成します。これにより、ソース・モニタとビジネス・モニタで類似トレンドを見つけて、アプリケーションで発生している問題の原因を突き止めます。ターゲット・モニタには通常、システム・インフラストラクチャ・モニタ（CPU、Ping、メモリなど）を指定しますが、任意のモニタ・タイプを解析計算用のターゲットとして定義できます。標準設定では、最大 700 個のターゲット・モニタを選択できます。この設定値は、「[解析処理](#)」(657 ページ)の【**ターゲット モニタの最大数**】で、システムのハードウェア容量に応じて変更できます。

## 予測解析の主な機能

SiteScope の予測解析で提供されている主な機能は次のとおりです。

- **潜在的な IT 障害を事前に予測** - SiteScope はアプリケーション・モニタ・メトリックにおける挙動の変化（異常）を検出し、問題がビジネスに影響を及ぼす前に予測警告を送信します。
- **根本原因の解析に役立つ詳細情報を提供して問題の解決を促進** - システム・インフラストラクチャ・モニタがビジネス・アプリケーションに及ぼす影響を特定し、この相関関係に基づいて根本原因の解析に役立つ詳細な情報を予測警告に含めます。
- **ダウンタイムを排除または短縮** - 潜在的な問題による影響が IT システムで顕在化する前に、問題を特定し報告します。これにより、IT システムまたはサービスで障害が発生する前に、措置を講じるための貴重な時間を確保できます。
- **インパクト・ツリーを表示する新しいビューを用意** - ビジネス・モニタとその相関ターゲット・システム・モニタを 1 つのビューに表示する、Multi-View 内のフィルタリングされたビューです。インパクト・ツリーにより、システム・インフラストラクチャ・モニタがビジネス・アプリケーションに及ぼす影響を詳細に調査し、問題の根本原因を診断できます。

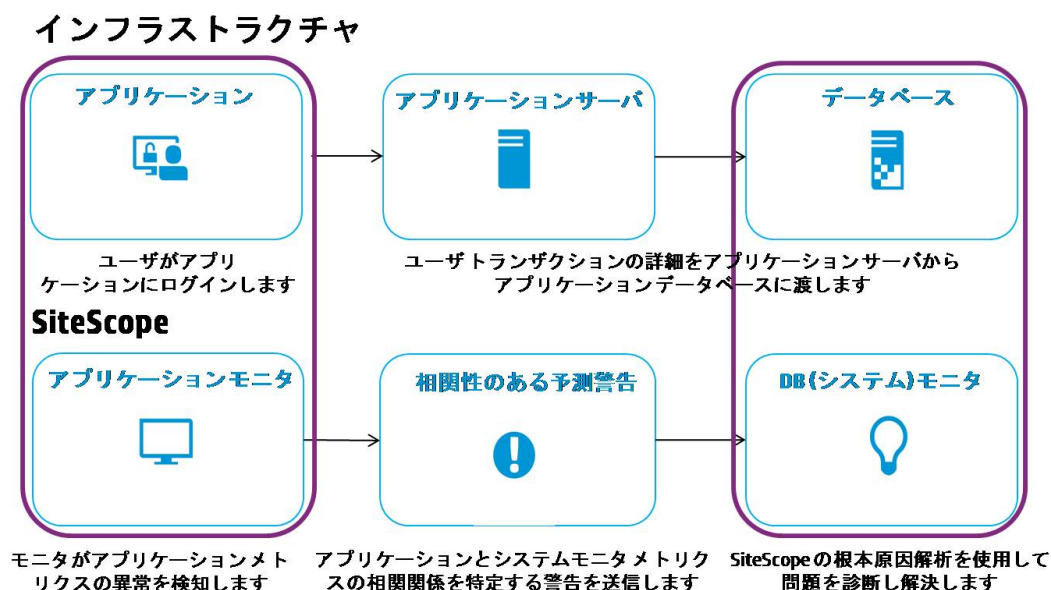
## 予測解析が各ユーザにもたらす利点

- **アプリケーション・サポート・チーム** - 根本原因解析情報を参照して問題解決に要する時間を短縮できます。SiteScope は、ソース・モニタで異常を検出すると、（静的しきい値を超える前に）問題の原因を特定するために役立つ詳細な情報を提供します。
- **監視チーム** - 高度なサービスにより問題を事前に検出します。また、アプリケーション・モニタのしきい値はベースラインを使用して自動的に計算および更新されるため、SiteScope 管理者は、アプリケーションの監視の設定（静的なしきい値の定義）に費やす時間を短縮できます。
- **アプリケーション所有者/ユーザ** - アプリケーションの所有者およびユーザのユーザ・エクスペリエンスが向上します。従来に比べて問題を早く検出できるようになったため、アプリケーションの堅牢性と安定性が向上します。

## 予測解析 - 動作原理

エンド・ユーザがビジネス・アプリケーションでアクションを実行するたびに、アプリケーションは何らかの影響を受けます。たとえば、アプリケーションのビジネス・メトリックがデータベースに挿入されたり、ログ・ファイルに記録されたりします。SiteScope は、ビジネス・メトリック（トランザクション数、往復時間など）およびシステム・メトリック（CPU、空き領域（MB）など）を監視する機能を備えているため、ユーザがアプリケーションでアクションを実行するたびに、システム・パフォーマンスがビジネス・アプリケーションに及ぼす影響を追跡できます。

SiteScope は、アプリケーションでの異常な動作を検出するたびに、相関処理計算を実行して、イベントが発生した時間の前後にシステム・メトリックとビジネス・メトリックで発生している類似トレンドを見つけ出し、その情報を予測警告としてユーザに送信します。予測警告には、アプリケーション・メトリックの異常（監視対象のアプリケーションで近い将来発生する可能性のある問題の予測に使用可能）が含まれており、アプリケーションの問題の原因と考えられる相関関係のあるすべてのシステム・モニタがリストされます（トラブルシューティングに有用）。



## 予測解析フロー

予測解析では、次のメカニズムを使用して、インフラストラクチャにおける潜在的な問題を予測および通知します。これにより、ユーザは、ビジネスに影響が及ぶ前に問題に対処できます。

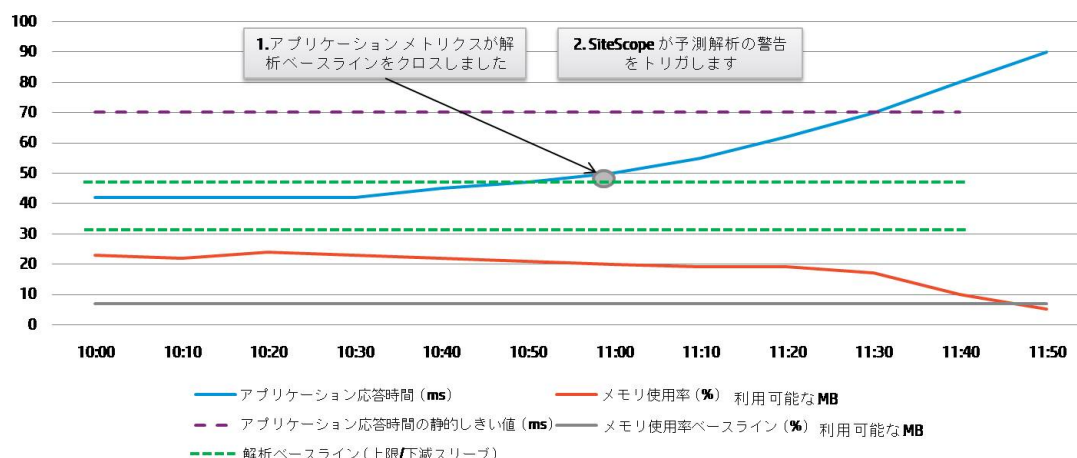
### 1. ビジネス・アプリケーション・モニタの解析ベースラインを計算する

解析が開始されると、SiteScope はビジネス・モニタから一定期間にわたってメトリック・データを収集します。十分な量のデータが収集されたら、SiteScope は今後メトリック値が正常かどうかを判断するためのベースライン・スリープを作成します。

### 2. 予測解析ステージ:静的しきい値を超える前に潜在的な問題を予測する

SiteScope は、（前の手順で得た）ベースライン計算の結果を使用して起こりそうな問題を予測します。予測には、ビジネス・メトリックの変動を認識して、異常なイベントやパフォーマンスおよび可用性の問題を検出および予測できるアルゴリズムを使用します。このため、対処する必要はあるが、ビジネス・アプリケーションが影響を受けるわけではないため即座に対応する必要はないとされたビジネス・メトリックの異常も SiteScope によって警告される可能性があります。

異常が見つかり、ビジネス・アプリケーションに潜在的な問題があることをユーザに知らせる警告が SiteScope によってトリガされます。これにより、異常による影響がビジネスで顕在化する前に重要なイベントを早期に警告できます。



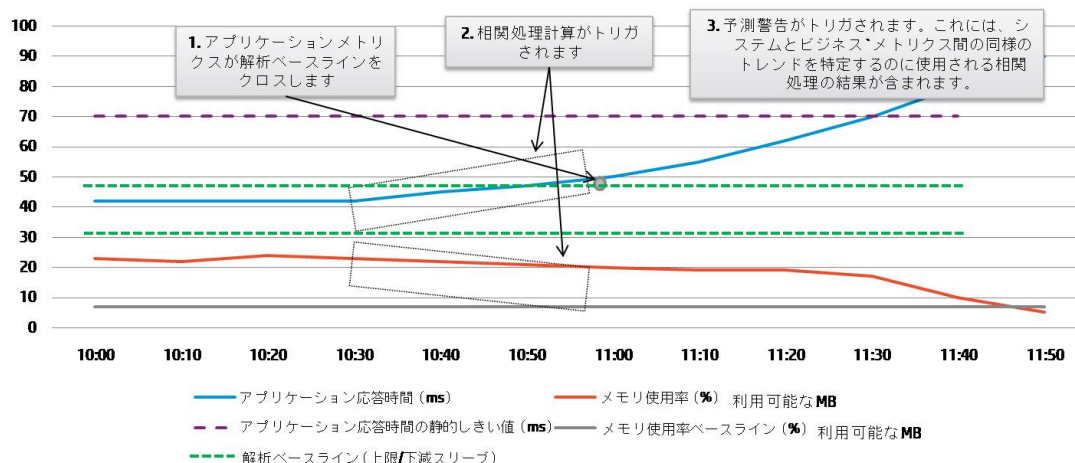
### ベースライン計算が実行されるタイミング

ベースライン計算は、前月に収集されたデータを使用して週に 1 回だけ実行されます（この設定は、「[解析処理](#)」(657 ページ) に示した [ベースライン計算の頻度 (ミリ秒)] および [ベースライン計算のデータ期間 (ミリ秒)] を指定することにより変更可能です）。

**注:** ベースライン計算を実行するには最低でも 50 のモニタ・サンプルが必要です。SiteScope では、日次ログに十分な量のメトリックが存在しない場合、十分なメトリック・データが蓄積されるまで待ってから最初のベースライン計算が開始されます。ベースライン計算の期間を変更する場合は、SiteScope の再起動後すぐにベースライン計算がアクティブ化されるように [ベースライン結果のエイジング期間 (ミリ秒)] （「[解析処理](#)」(657 ページ) を参照）も変更する必要があります。

### 3. 根本原因解析ステージ: メトリックが解析ベースラインを超えたとき問題の原因を突き止めるための詳細な情報を提供する

アプリケーション・メトリックが解析ベースラインを超えた結果、ビジネス・アプリケーションで問題が検出されると、SiteScope は、アプリケーション・モニタとシステム・モニタの定義済み相関関係を検索し、アプリケーションで発生している問題の原因と考えられる、すべての相関システム・モニタをリスト表示します。そして、相関アルゴリズムを使用して、イベントの発生した時間の前後にシステム・メトリックとビジネス・メトリックで発生している類似トレンドを見つけ出します。この設定は、[[相関処理のデータ保存期間 \(時間\)](#)] （「[解析処理](#)」(657 ページ) を参照）を設定することにより変更可能です。



### 相関処理計算が実行されるタイミング

相関処理計算は解析設定後に最初に実行され、計算完了後に最初の警告が送信されます（「解析アラート」パネルで「相関処理計算の完了時に警告を送信」を選択した場合）。

以降、解析アラートがトリガされたとき（ビジネス・モニタが解析ベースラインを超えるたびに毎回）、および解析ターゲット・モニタが変更されたとき（「解析」タブの解析ターゲット・ツリーでターゲット・モニタの追加または削除が実行された場合など）に相関処理計算が実行されます。

### 計算に使用されるデータ量

相関処理計算の対象となるのはサンプルの最後の 10 時間です（この設定は、「解析処理」(657 ページ)の「相関処理のデータ保存期間（時間）」で設定可能です）。以前の相関処理計算結果は新規の相関処理計算結果で置換されます。

### 相関関係の計算方法

メトリックの相関関係の計算には、ほぼ同じ率で同じ時間帯に値が増減しているメトリックを検索するアルゴリズムが使用されます。この線形の相関処理では、ソース・モニタとターゲット・モニタのメトリックを比較して、特定の時間帯における異なるメトリックの類似性を見つけます。

メトリックの相関関係は、ビジネス・モニタで選択したベース・メトリックとシステム・モニタのメトリックを比較することによって計算されます。メトリックの相関関係は「解析」タブの相関テーブルで確認できます。

### 相関処理結果に使用されるサンプル

相関処理結果は、選択したモニタ領域のすべてのメトリックを使用して計算されます。

- 相関処理計算では、各ビジネス・モニタの各メトリックを入力として、辞書の並びで先頭の 10 個のメトリックについて相関処理を実行します。
- 上記の各メトリックについて、（それぞれのターゲット・モニタ・メトリックから選択した）最大 25,000 のスコアが計算されます。



- 警告電子メールには、ビジネス・モニタの 10 個のメトリックについてそれぞれ、最大 500 のスコアが表示されます。ビジネス・メトリックあたりのスコア数が 500 を超える場合は、値の大きなスコアから順に選択されます。

#### 解析アラートの【解析】タブに表示される相関処理結果

選択したビジネス・モニタ・メトリックが解析ベースラインを超えると、相関処理計算結果が表示されます。【解析】タブの相関テーブルには、モニタ別の相関処理スコアが表示されます。警告には、さらに詳細な結果（メトリック別の相関処理スコア）が表示されます。

相関処理スコアが【相関処理スコアのしきい値 (%)】（標準設定は 60%）を超えるターゲット・メトリックのみ相関関係があるとみなされ、解析アラートの【解析】タブに表示されます。上記のしきい値よりもスコアの低いメトリックは相関関係がないとみなされ、結果から排除されます。このしきい値の設定は、「[解析処理](#)」(657ページ)で変更できます。

#### 例：【解析】タブの相関処理計算結果

このモニタのメトリック: errors

errors メトリックで、設定されたしきい値を上回る相関処理結果は見つかりませんでした。  
最終時間相関処理スコアが計算されました: 火 12/02/2014 05:50:01 午後 CST

相関テーブル:

ターゲット モニタ	相関処理スコア
SiteScope	

### 例：解析ベースラインを超えたビジネス・アプリケーション・モニタによってトリガされた解析アラート

```
This alert is from SiteScope at ACE10 (http://10.30.186.31:8080/SiteScope)

-----
Monitor: SiteScope\test\URL monitor
Link to the Monitor: http://ACE10:8080/SiteScope/servlet/Main?activeid=201640539&activerighttop=dashboard&view=new&dashboard\_view=Details&dashboard\_model=true
Status: 0.47 sec
Last Monitor Run: 4:40 PM 11/21/13

-----
Alert reason: This alert was sent because a monitor metric crossed the baseline.

-----
Analyzed monitor: SiteScope\test\URL monitor Analyzed monitor type: URLAnalytics name: analytics on URL monitor

-----
Links to impact view:
analytics_cc - http://10.30.186.31:8080/SiteScope/MultiView?selectedGroupID=201640608&viewType=Tags

-----
Metrics that crossed their baseline during 04:40 11/21/13 - 20:40 11/21/13 [Metric Name] [Metric Value] [Lower band .. Upper band]
roundtrip time          1.0      [0.02 .. 0.04]
deviation percentage    50%      [0 .. 10]

-----
Highest Correlation Scores (%)

    Analyzed metric: SiteScope\test\URL monitor\roundtrip time
    * Correlated metrics of target monitor: SiteScope\test\CPU monitor on SiteScope Server
      utilization          91%
      utilization cpu # 1  90%
      utilization cpu # 2  88%
    * Correlated metrics of target monitor: SiteScope\test\dynamic disk space\MB free
      utilization          70%
      utilization cpu # 1  65%
      utilization cpu # 2  64%
```

### 自動検出

SiteScope は、ビジネス・アプリケーションのモニタ・サンプルから定期的にデータを受信します。

SiteScope は、異常を検出すると、次の値に基づいて予測警告を送信します。

- **メトリクス**:メトリックは、サンプルの特定のフィールドの値とその値になった時間の組み合わせです。解析が始まると、SiteScope では一定期間にわたって受信サンプルからメトリック・データが収集されます。
- **メトリック・ベースライン・スリープ**:十分な量のメトリック・データが収集されると、SiteScope は、メトリックのベースラインを作成し、平均と標準偏差を計算します。平均値と標準偏差値は、以降、メトリック値を正常とみなすかどうかを決定するベースライン スリープを作成するために使用されます。標準設定では、メトリックの平均値からの標準偏差に73の係数を乗じて、ベースライン・スリープが計算されます。

ベースライン・スリープが作成されたメトリックは、その値が、平均値に標準偏差の係数倍を加えた値を上回るか、平均値から標準偏差の係数倍を引いた値を下回ると異常とみなされます。

**注:** SiteScope 解析は、数学的および統計的なアルゴリズムに基づいているため、数学的なゆがみが生じることがあります。ユーザはこの点を考慮に入れた上で、解析アラートをテストし、使用しているビジネス・モニタに最適なスリープ係数を見つける必要があります。

## 自動タグ作成

タグは、ソース・モニタとそのターゲット・モニタのフィルタリングを可能にするために使用されます。タグを作成すると、これらのモニタを、SiteScope の Multi-View の単一の [Impact View]、およびモニタ・ツリー・フィルタ内（タグでフィルタリングした場合）に表示できます。

SiteScope では、各解析設定について解析タグ値を自動的に生成して、ソース・モニタに割り当てます。ソース・モニタで問題が発生し、解析アラートがトリガされると、SiteScope は、ソース・モニタに割り当てた解析タグを、相関関係にあると判定された（相関処理スコアが 60% を超える）ターゲット・モニタに割り当てます。タグの値は analytics\_<monitor\_name> の形式となり、同じ名前のモニタが複数ある場合は丸括弧で囲まれた数字が後に付きます。

**AnalyticsMail** テンプレートを使用している場合に解析アラートがトリガされると、電子メール警告に、ソース・モニタおよび相関ターゲット・モニタのみを含むようにフィルタリングされた Multi-View へのリンクが含まれます。詳細については、「[Multi-View](#)」(1080ページ)を参照してください。

ソース・モニタとターゲット・モニタ用にカスタム・タグを手動で作成し、必要に応じて割り当てることで、Multi-View にカスタム・タグで分類されたモニタを表示することもできます。詳細については、「[タグを解析モニタに手動で割り当てる方法](#)」(1382ページ)を参照してください。

## 解析アラートについて

### 解析アラートがトリガされるタイミング

1. 解析が最初にモニタに設定されたとき。

初回の相関処理計算の後、ダミー警告が送信されます（[解析アラート] パネルで **相関処理計算の完了時に警告を送信** が選択されている場合）。

2. ビジネス・アプリケーション・モニタが解析ベースラインを超えたとき。

SiteScope は、アプリケーション・モニタ・メトリックに基づいて挙動の変化（異常）を検出すると、問題の影響がビジネスに及ぶ前に潜在的な問題に関する予測警告を送信します（警告ステータス・トリガ設定が **解析** に設定されている場合）。この処理は、ビジネス・アプリケーション・モニタが静的しきい値を超える前に実行されます。

3. ビジネス・アプリケーション・モニタが静的しきい値を超えたとき。

警告ステータス・トリガ設定が **良好 / 警告 / エラー** に設定されている場合は、ビジネス・アプリケーション・モニタが静的しきい値を超え、なおかつステータスが選択したトリガ・ステータスに変化した後に警告がトリガされます。

### 解析アラートの詳細

**ヒント:** 解析アラートの例については、「[予測解析 - 動作原理](#)」(1369ページ)の「解析アラートの [解析] タブに表示される相関処理結果」を参照してください。

解析電子メール警告には、次に示す解析結果のサマリが含まれます。

- 解析されたモニタの詳細。これには、解析された（ソース）モニタの名前と説明、解析されたモニタのタイプ、モニタによって報告された最新の測定結果、モニタの最終実行日時が含まれます。
- 警告の理由。警告が送信された理由（上記の3つの理由のいずれか）
- [Impact View] へのリンク。これは、解析されたモニタとそのターゲット・モニタのみを単一のビューに表示するフィルタリングされたビューです。[Impact View] を使用することで、イベントの根本原因を容易に解析および診断できます。タスクの詳細については、「[問題の診断とトラブルシューティング](#)」(1380ページ)を参照してください。
- ステータス。解析されたモニタのすべてのメトリックのステータスです（トリガされた警告タイプによって異なります）。
  - 解析によってトリガされた警告の場合（解析ベースラインを超えた場合）、ベースライン・スリープの外にある解析済みモニタ・メトリックが表示されます。
  - 静的しきい値によってトリガされた警告の場合、警告のトリガ対象となったステータスを持つ解析済みモニタ・メトリックが表示されます。
- 相関処理スコアの最高値。各解析済みモニタ・メトリックについて、最も適合する相関処理スコアが最大 500 個まで含まれます。相関処理スコアのパーセンテージ値を超えると、相関処理結果は相関があるとみなされます。相関処理スコアによって、解析アラートに表示される結果が決まります。上記のしきい値よりもスコアの低いメトリックは相関関係がないとみなされ、結果から排除されます。相関処理計算の詳細については、「[予測解析 - 動作原理](#)」(1369ページ)の「相関処理結果に使用されるサンプル」を参照してください。

**注:** 解析アラートを利用するには、「[予測解析の設定方法](#)」(1378ページ)の説明に従って、警告アクション・タイプ、テンプレート、ステータス・トリガを設定する必要があります。

【解析】以外のトリガ・ステータスを選択した場合は、そのステータスが選択したステータスに変化したときのみ警告がトリガされます。

### [Impact View] からの問題の診断とトラブルシューティング

[Impact View] では、解析済みモニタの相関処理計算による影響を確認できます。このビューは、Multi-View 内のフィルタリングされたビューで、ビジネス・モニタとその相関ターゲット・システム・モニタが単一のビューに表示されます。

次のようにして、問題の診断とトラブルシューティングを実行できます。

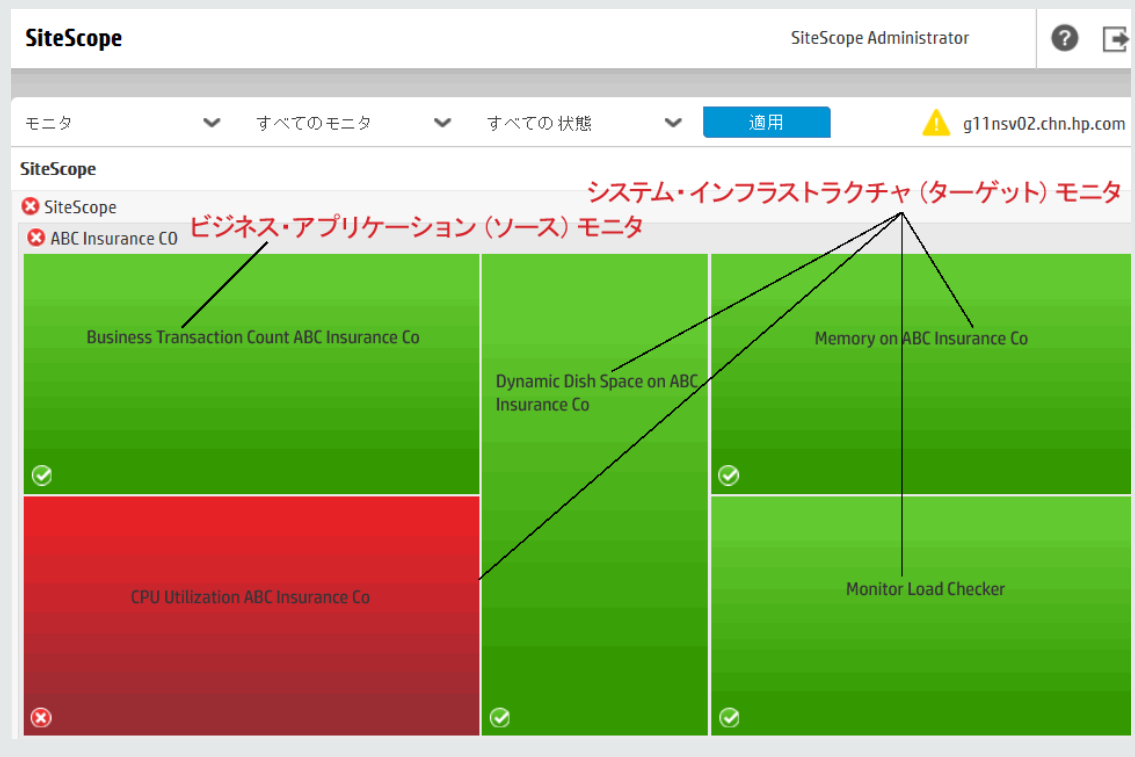
- モニタをドリル・ダウンして詳細な情報を表示します。これにより、関心のあるモニタのみに表示を絞り込むことができます。
- 異常なメトリックの動作を調べます。たとえば、異なるメトリックがほぼ同時に異常な動作を見せている場合、それらの異常なメトリックは同じ問題の兆候を示している可能性があります。メトリックが論理的に関連している場合もあります。たとえば、同じデータ・コレクタ、アプリケーション、または場所に属しているメトリックなどです。

- 異なるメトリック間の相関関係を詳細に調べます。ベース・メトリックと選択したメトリック間で相関処理結果が類似している場合は、選択したメトリックもベース・メトリックと同じ問題の兆候であることを示していることがあります。あるいは、選択したメトリックをさらに調べることで問題の根本原因を突き止める必要があることもあります。

タスクの詳細については、「[問題の診断とトラブルシューティング](#)」(1380ページ)を参照してください。

**注:** 解析アラートは、ビジネス・モニタが静的しきい値を超えていない場合でもトリガされる予測警告であるため、ビジネス・モニタは緑色（OK）で表示されているのに、関連しているシステム・モニタは赤色（エラー）で表示されるといったことも起こり得ます。

**例:** ビジネス・アプリケーション・モニタは静的しきい値を超えていないが、予測警告は、CPU モニタがエラー状態にあることを示しています。



### 予測解析のパフォーマンスへの影響

- 予測解析では、最大 100 個のビジネス・モニタ、および各ビジネス・モニタについて 700 のシステム・モニタとの相関関係の解析と追跡が可能です。
- 予測解析は、CPU またはネット・リソースに影響を与えません。
- 予測解析によるディスク・スループットの消費量は 5% 未満、メモリの消費量は 100 MB 未満です。

## タスク

### 予測解析の設定方法

**ヒント:** YouTube (<http://hpsw.co/Ln5i6C9>) で、SiteScope Analytics を使用して潜在的な問題を予測する方法についてのガイドとナレーション付きの概要が表示できます。

このタスクでは、予測解析の設定手順について説明します。

#### 1. 前提条件

- グループとモニタを表示する権限、それらに対してアクションを実行するために必要な権限があることを確認します。解析および解析アラートを追加または編集するには、選択したソース・モニタのモニタ権限を編集する必要があります。ユーザ権限の詳細については、「[権限](#)」(757ページ)を参照してください。
- 使用しているビジネス・アプリケーションを監視するようにモニタを設定します。モニタ設定の詳細については、「[モニタを作成、デプロイする方法](#)」(270ページ)を参照してください。

#### 2. 解析対象のモニタを選択する

- モニタ・ツリーで、解析するモニタを右クリックして、**[予測解析]** > **[新規予測解析]** を選択します。**[新規予測解析]** ダイアログ・ボックスが開きます。
- [一般設定]** パネルで、解析対象のモニタを説明する名前を入力するか、標準設定の名前 (Analytics for monitor:<モニタ名>) を使用します。必要に応じて、解析対象モニタの説明を入力します。


#### 3. ターゲット・モニタを選択する

**[解析ターゲット]** パネルで、ターゲット・モニタまたはターゲット・グループ (通常はシステム・インフラストラクチャ・モニタ) を選択します。ターゲット・モニタのメトリックは、ビジネス・アプリケーションで問題が検出された時間前後のソース・モニタのメトリックと相関関係を形成します。これにより、アプリケーションの問題の原因を突き止めるための類似トレンドを見つけ出します。

#### 4. 解析アラートを定義する

**[解析アラート]** パネルで、ソース・モニタのメトリックが解析しきい値を超えるたびに起動される警告を設定します。設定の際には、警告アクションのタイプを選択し、送信される警告のタイプを設定します。

**注:** 解析される各モニタについて、少なくとも1つの警告を設定する必要があります。

- [解析アラート]** パネルで **[新規警告]**  をクリックします。**[新規警告]** ダイアログ・ボックスが開きます。
- [警告アクション]** パネルで、**[新規警告アクション]**



をクリックして、警告アクション・タイプを選択します。

【電子メール】警告アクション・タイプを使用することをお勧めします。【電子メール】警告アクション・タイプは、しきい値を超えたソース・モニタの根本原因解析を行うための詳細な情報を提供するカスタマイズされた解析テンプレートを使用しています。

- c. 【アクションタイプの設定】パネルで必須の設定値を入力します。詳細については、[「アクション・タイプの設定パネル」\(1267ページ\)](#)を参照してください。

電子メール警告アクションを選択した場合は、（標準設定で選択されている）

【AnalyticsMail】テンプレートを使用することをお勧めします。解析電子メール警告には、しきい値を超えたソース・モニタの根本原因解析に役立つ次の詳細情報が含まれています。

- 関連システム・モニタへのリンク。
- 関連処理スコア（パーセンテージ）。
- ベースラインを超えたシステム・モニタの一覧。

- d. 【状態トリガ】パネルで、予測警告をトリガするために【解析】オプション（標準設定で選択されている）を選択します。このオプションを選択すると、ビジネス・モニタがベースラインを超えるたびに電子メール警告が送信されます。解析電子メール警告の詳細については、[「解析アラートについて」\(1375ページ\)](#)を参照してください。

**注:** その他のステータス（**利用不可 / エラー / 警告 / 良好**）のいずれか）を選択した場合は、【トリガの頻度】設定の静的しきい値および警告アクション設定に応じて警告が送信されます。

- e. 【トリガの頻度】パネルで、警告をトリガして送信する時期を決定するトリガ設定を構成します。

詳細については、[「【トリガの頻度】パネル」\(1283ページ\)](#)を参照してください。

- f. 【OK】をクリックして警告アクション設定を保存し、再度【OK】をクリックして新規警告設定を保存します。

- g. 解析アラートをテストするには、【警告アクション】パネルで警告を選択し、【テスト】



ボタンをクリックします。ダイアログ・ボックスが開き、警告テストに関する情報が表示されます。

**注:** 警告をテストするために、選択したモニタが、警告をトリガするように選択した状態カテゴリと同じ状態カテゴリを報告する必要はありません。たとえば、モニタがテスト時点で実際に解析しきい値を超えている状態を示していなくても、解析条件によってトリガされるアラートをテストすることはできます。

## 5. 解析タグを定義する（任意指定）

SiteScope はビジネス・モニタに割り当てる各分析構成に対して自動的に解析タグの値を生成します。このタグを使用することにより、解析電子メール警告に、該当するビジネス・モニタのタグを含むようにフィルタリングされた Multi-View へのリンクを含めることができます。



カスタムのタグを手動で作成して、別のソース・モニタに割り当てることもできます。これにより、Multi-View に、このカスタム・タグによってグループ化された複数のソース・モニタを表示できます。詳細については、「[タグを解析モニタに手動で割り当てる方法](#)」(1382ページ)を参照してください。

## 6. 解析処理を保存する

【保存】をクリックして処理を保存し、解析メカニズムを開始します。

【解析アラート】パネルで【**相関処理計算の完了時に警告を送信**】が選択されている場合は、解析処理計算の完了後に最初の警告が送信されます。相関テーブルで、ビジネス・モニタと相関関係のあるシステム・モニタ・メトリックを確認できます。各システム・モニタには相関値(%)が表示されます。詳細については、「[【解析】タブ](#)」(1386ページ)を参照してください。

## 問題の診断とトラブルシューティング

### 1. 解析アラートの情報を解析する

ビジネス・アプリケーション・モニタのメトリックが静的しきい値または解析しきい値を超えると、警告がトリガされます。

どのしきい値を超えたのかに応じて、次のように警告の情報を解析します。

- ビジネス・モニタのメトリックが静的しきい値を超えることによってトリガされた警告の場合、警告がトリガされたステータスを示しているすべてのメトリックが表示されます。たとえば、ステータスが【エラー】に変わったすべてのメトリックが表示されます。
- ビジネス・モニタのメトリックが解析ベースラインを超えることによってトリガされた警告の場合、解析ベースラインしきい値を超えたすべてのビジネス・メトリックが表示されます。表示内容には、メトリック名、メトリック値、メトリックの上限および下限ベースライン・バンドが含まれます。
- 相関処理スコアの最高値。各解析済み(ソース)モニタ・メトリックについて、最も適合する相関処理スコアが最大 500 個まで表示されます。相関処理スコアのパーセンテージ値を超えると、相関処理結果は相関があるとみなされます。スコアが高いほど、相関関係が強いことを意味します。相関処理スコアを解析することにより、システム・インフラストラクチャ・モニタがビジネス・アプリケーションに及ぼす影響を特定し、根本原因の解析に役立つ詳細な情報が得られます。

警告に含まれる情報の説明については、「[解析アラートについて](#)」(1375ページ)を参照してください。


### 2. 【Impact View】を使用して問題の根本原因を診断する

#### a. 【Impact View】を開く

解析アラート内のリンクをクリックして、【Impact View】を開きます。Multi-View 内のフィルタリングされたビューである【Impact View】には、ビジネス・モニタとその相関ターゲット・システム・モニタが表示されます。

#### b. エラー状態のメトリックを特定する



確認またはトラブルシューティングするモニタの上にカーソルを移動し、[情報]  アイコンをクリックして、モニタの[詳細]ダイアログ・ボックスを開きます。[メトリクス]タブをクリックして、エラーまたは警告ステータスのモニタ・メトリックの一覧を表示します。

- c. モニタを再実行して問題がまだ残っているかどうか確認する

グループの[詳細]またはモニタの[詳細]ダイアログ・ボックスで[今すぐ実行]をクリックして、問題がまだ残っているかどうか確認します。この操作により、モニタまたはグループ内の各モニタが再実行されます。

- d. レポートを生成して時間の経過に伴うパフォーマンスと可用性の変化を確認する

[詳細]タブの[レポートの生成]をクリックして、グループまたはモニタのレポートを生成します。このレポートを参照して、問題の性質を判断したり、グループまたはモニタがエラー状態であった期間を確認したりできます。


- e. モニタまたは警告を無効にして、これ以上通知がトリガされないようにする

診断に応じて、モニタまたはグループのモニタを無効化したり、モニタまたはグループに関連付けられた警告を無効化してモニタの使用を続行することができます。

トラブルシューティングを促進するために、モニタの警告の履歴を確認して、その警告が再発している問題のものかどうかを判別することができます（すべての関連付けられた警告が警告セクションに表示されます）。

**注:** トリガ済み警告テーブルは、警告を表示する権限のあるユーザに対してのみ表示されます。ユーザ権限の詳細については、[「権限」\(757ページ\)](#)を参照してください。

- f. 問題の解決状況を追跡するため確認応答を追加する

警告の内容を確認したら、[確認応答の追加]  ボタンをクリックして、モニタのステータスを確認するコメントを追加します。確認応答コメントは、[SiteScope ダッシュボード] ビューの表示を更新すると、確認アイコンに関連付けられたヒントとして表示されます。また、確認ログにも記録されます。

**注:** 確認応答は確認ログ（[SiteScope ダッシュボード] の[グループ内のモニタを確認]ダイアログ・ボックスからアクセス可能）からのみ削除できます。削除された確認応答は、Multi-View の確認応答一覧に表示されなくなります。

- g. 問題をトラブルシューティングする

問題をさらに調査するには、[ダッシュボード ビューのトラブルシューティング]をクリックして [SiteScope ダッシュボード] ビュー内のグループまたはモニタを開きます。

## 解析処理を微調整する方法

解析ベースラインおよび相関処理計算の標準設定は、[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [解析処理] で変更できます。詳細については、[「解析処理」\(657ページ\)](#)を参照してください。

**ヒント:** 最適な SiteScope のパフォーマンスを得るため、標準設定を使用することをお勧めします。使用するべき設定がわからない場合は、SiteScope カスタム・サポートにお問い合わせください。

タグを解析モニタに手動で割り当てる方法

**注:** SiteScope はビジネス・モニタに割り当てる各分析構成に対して自動的に解析タグの値を生成します。詳細については、[「自動タグ作成」\(1375ページ\)](#)を参照してください。

ビジネス・モニタおよびシステム・モニタのカスタム・タグは手動で作成できます。タグを使用すると、ビジネス・モニタとその相関ターゲット・システム・モニタを SiteScope Multi-View 内の単一ビューに表示できます。また、モニタ・ツリーをタグ・フィルタでフィルタリングできます。詳細については、[「Multi-View」\(1080ページ\)](#)および [「SiteScope ビューでのオブジェクトのフィルタ」\(78ページ\)](#)を参照してください。

たとえば、Business monitors, System monitors, Application monitors の各値をとる Analytics というタグを定義し、必要に応じてタグを割り当てることにより、Multi-View に、このカスタム・タグによってグループ化されたモニタを表示できます。詳細については、[「タグ・ビューでカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグを割り当てモニタを表示する方法」\(1087ページ\)](#)を参照してください。

また、[解析] タブで新規のタグを作成すると、そのタグが、相関処理のトリガ後に自動的に相関モニタに割り当てられます。

ソース・モニタから予測解析を削除する方法

モニタから予測解析を削除するには、モニタ・ツリーでモニタを右クリックし、**[予測解析]** > **[予測解析の削除]** を選択します。

ソース・モニタから予測解析を削除すると、関連するすべてのオブジェクトも削除されます。削除されるオブジェクトとして、相関処理およびベースライン・オブジェクト、モニタに関連付けられた解析アラート、ソース/ターゲット・モニタ上の解析タグなどがあります。

[新規予測解析] ダイアログ・ボックス

[新規予測解析] ダイアログ・ボックスでは、モニタの解析を追加、編集、削除できます。

アクセス方法	<b>[モニタ]</b> コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、ビジネス・モニタを右クリックし、 <b>[予測解析]</b> > <b>[新規予測解析]</b> を選択します。
重要な情報	変更内容を保存して解析計算を開始するには、ダイアログ・ボックス下部にある <b>[保存]</b> ボタンをクリックします。
関連タスク	<a href="#">「予測解析の設定」(1368ページ)</a>





一般設定


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
解析名	分析の対象となるモニタを示す名前。ビュー・フィルタの作成をより効果的にするため、すべてのモニタに有益な命名規則を使用します。  標準設定値 :SiteScope では、次の形式で標準設定の名前が作成されます。  Analytics for monitor:<モニタ名>
解析の説明	解析の対象となるモニタの説明（必要な場合）。この詳細はほかのコンテキストには表示されません。解析プロパティの編集時にのみ表示されます。

解析ターゲット



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。



UI 要素	詳細
モニタの選択	<p>クリックすると、[モニタの選択] フォームが開きます。ここでは、解析の対象となるターゲット・システム・モニタまたはモニタ・グループを選択します。ターゲット・モニタのメトリックは、ビジネス・アプリケーションで問題が検出された時間前後のビジネス・アプリケーション・モニタのメトリックと関連します。これにより、類似トレンドを見つけ、アプリケーションの問題の原因特定が容易になります。</p> <p>[ターゲット] リストには、SiteScope に設定されたすべてのグループとモニタ（解析用に選択した状況モニタとモニタ・インスタンスは除く）が含まれます。</p> <p>選択すると、[解析ターゲット] リストのモニタとグループには ✓ が表示されます。</p> <p>[モニタの選択] フォームの次のアイコンを使用して、解析の対象となるシステム・モニタを検索して選択します。</p> <div> <b>すべて折りたたみ</b> : ツリーの分岐をすべて折りたたむ。</div> <div> <b>すべて展開</b> : ツリーの分岐をすべて展開する。</div> <div> <b>すべて選択</b> : 表示されているモニタをすべて選択します。</div> <div> <b>選択を解除</b> : 選択範囲を解除します。</div>

UI 要素	詳細
	 <b>クイック検索</b> ：名前でモニタを検索できます。また、このフィールドに入力した特定の値を含むモニタを検索することもできます。詳細については、 <a href="#">「クイック検索」(76ページ)</a> を参照してください。
<b>選択済みのモニタ</b>	分析用に選択したすべてのターゲット・モニタのツリーを表示します。 選択したターゲットの総数がツリーの下に表示されます（最大 700 個）。 <b>標準設定値</b> ：選択されていない

## 解析アラート

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>相関処理計算の完了時に警告を送信</b>	電子メール警告を送信して、最初の相関処理計算が完了したことを通知します。 <b>標準設定値</b> ：選択されていない
<b>&lt;モニタに関連付けられた警告&gt;</b>	このモニタに関連付けられたすべての解析アラートを表示します。
	<b>新規警告アクション</b> ：[アクションタイプ] ダイアログ・ボックスが開き、警告をトリガしたときに実行するアクションを定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス」(1263ページ)</a> を参照してください。
	<b>警告アクションの編集</b> ：[アクションタイプ] ダイアログ・ボックスが開き、警告アクションを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、 <a href="#">「[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス」(1263ページ)</a> を参照してください。
	<b>警告アクションの削除</b> ：警告アクションを削除します。関連付けられたモニタは無効にはなりません。
<b>有効化</b>	<b>有効化</b> ：モニタに関連付けられている警告が有効になります。
<b>無効化</b>	<b>無効化</b> ：モニタに関連付けられている警告が無効になります。
	<b>テスト</b> ：選択したサーバの警告定義をテストします。

UI 要素	詳細
	<b>すべて選択</b> : 表示されている警告がすべて選択されます。
	<b>選択を解除</b> : 選択を解除します。
<b>名前</b>	SiteScope で認識される警告の名前。
<b>状態</b>	警告の状態 (有効/無効)。
<b>詳細</b>	警告の詳細。
<b>アクション名</b>	「 <a href="#">[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス</a> 」(1263ページ)の警告アクションの名前。

## 解析タグ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>Analytics Auto Tags</b>	<p>タグ作成により、同じタグでグループ化されたモニタを SiteScope の Multi-View の単一の Impact View で表示できます。</p> <p>SiteScope は、各解析設定の解析タグ値を自動生成し、ソース・モニタに割り当てます。ソース・モニタに問題が発生して、解析アラートがトリガされた場合、SiteScope はこのタグを取得してターゲット・モニタに割り当てます。タグの値は analytics_&lt;monitor_name&gt; の形式となり、同じ名前のモニタが複数ある場合は丸括弧で囲まれた数字が後に付きます。</p> <p>「Analytics Auto Tag」を使用するだけでなく、追加のタグ値を作成してソース・モニタに割り当てることもできます。これにより、これらのタグまたはタグ値が割り当てられたモニタのみを表示できます。カスタム・タグの作成の詳細については、<a href="#">「タグ・ビューでカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグを割り当てモニタを表示する方法」</a> (1087ページ)を参照してください。</p>
<b>タグの追加</b>	<p>「新規タグ」ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。「解析」タブで手動で作成したタグは、相関処理が計算されるたびにビジネスおよびシステム (相関) モニタに動的に割り当てられます。</p> <p>ユーザ・インタフェースの詳細については、<a href="#">「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」</a> (87ページ)を参照してください。</p>


## 「解析」タブ

「解析」タブには、モニタ・インスタンスに設定されている解析処理が表示されます。このタブから解析定義を追加、編集できます。また、ソース・モニタ・メトリックとターゲット・モニタ・メトリック間の類似トレンドを識別する相関処理結果も表示されるため、根本原因解析に役立ちます。

アクセス方法	「 <b>モニタ</b> 」コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、ビジネス・モニタを選択し、右側の表示枠の「 <b>解析</b> 」タブをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"><li>モニタ・インスタンスの解析が設定されていない場合、「解析」タブの設定は灰色で表示されます。</li><li>次の場合、「解析」タブの設定は利用できません。<ul style="list-style-type: none"><li>「<b>インフラストラクチャ プリファレンス</b>」 &gt; 「<b>解析処理</b>」の「<b>有効化された解析</b>」設定が無効になっている（「解析」は標準設定で有効になっています）。</li><li>「<b>インフラストラクチャ プリファレンス</b>」 &gt; 「<b>解析処理</b>」 &gt; 「<b>除外されたモニタ タイプ</b>」リストに、選択したモニタが除外されたモニタ・タイプとして表示されている。</li></ul></li></ul>
関連タスク	<a href="#">「予測解析の設定」(1368ページ)</a>

### 相関処理結果

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
	<p>「新規予測解析」ダイアログ・ボックスが開き、選択したモニタの解析を設定できます。詳細については、「<a href="#">「新規予測解析」ダイアログ・ボックス(1382ページ)</a>」を参照してください。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"><li>モニタの解析が設定されていない場合、このボタンは表示されません。</li><li>解析が無効になっている場合、またはモニタが解析から除外されたタイプである場合（「<a href="#">解析処理(657ページ)</a>」の「<b>除外されたモニタ タイプ</b>」で変更可能）、このボタンは灰色で表示されます。</li></ul>
このモニタのメトリック	ビジネス・モニタのメトリックが表示されます。相関テーブルで相関処理結果を確認するメトリックを選択します。

UI 要素	詳細
相関テーブル	<p>選択したメトリックに相関関係がある場合、設定したしきい値を超える相関処理結果が表示されます。この情報により、システム・インフラストラクチャ・モニタがビジネス・アプリケーションに及ぼす影響を特定し、根本原因解析に役立つ詳細な情報を得られます。</p> <p>相関処理計算は、解析の設定後に最初に実行されます。その後は、ビジネス・モニタがベースラインを超えるたびに、または解析ターゲットへの変更がある場合に計算されます。選択したビジネス・モニタ・メトリックがベースラインしきい値を超えていない場合、相関処理結果は表示されません。</p> <p>選択したビジネス・モニタ・メトリックがベースラインしきい値を超えている場合、そのビジネス・メトリックの相関処理計算結果が表示されません。相関処理スコアが（「<a href="#">解析処理</a>」(657ページ)で設定する）<b>【相関処理スコアのしきい値 (%)】</b>を超えるターゲット・メトリックのみがここに表示されます。上記のしきい値よりもスコアの低いメトリックは相関関係がないとみなされ、結果から排除されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ターゲット・モニタ</b>：選択したビジネス・モニタ・メトリックと相関関係にあり、相関処理スコアが相関処理しきい値スコアを超えているターゲット・システム・モニタのメトリックのリストが表示されます。</li> <li>• <b>相関処理スコア</b>：メトリック・スコア（精度）が最も高いターゲット・モニタの結果が相関処理のパーセンテージ値として表示されます。各ターゲット・メトリックのメトリックは警告に表示されるため、この結果には表示されません。</li> </ul> <p>パネルには、相関処理結果の最終計算時刻が表示されます。</p> <p><b>注</b>：このテーブルは、解析が設定されている場合にのみ表示されます。履歴データの必要な時間数（「<a href="#">解析処理</a>」(657ページ)の<b>【Correlation calculation data retention period (hours)】</b>で変更可能）が収集されたら、結果が表示されます。</p>

## 一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。






UI 要素	詳細
解析名	<p>分析の対象となるモニタを示す名前。ビュー・フィルタの作成をより効果的にするため、すべてのモニタに有益な命名規則を使用します。</p> <p><b>標準設定値</b> :SiteScope では、次の形式で標準設定の名前が作成されます。</p> <p>Analytics for monitor:&lt;モニタ名&gt;</p>



UI 要素	詳細
解析の説明	解析の対象となるモニタの説明（必要な場合）。この詳細はほかのコンテキストには表示されません。解析プロパティの編集時にのみ表示されます。

解析ターゲット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
モニタの選択	<p>クリックすると、[モニタの選択] フォームが開きます。ここでは、解析の対象となるターゲット・システム・モニタまたはモニタ・グループを選択します。ターゲット・モニタのメトリックは、ビジネス・アプリケーションで問題が検出された時間前後のビジネス・アプリケーション・モニタのメトリックと関連します。これにより、類似トレンドを見つけ、アプリケーションの問題の原因特定が容易になります。</p> <p>[ターゲット] リストには、SiteScope に設定されたすべてのグループとモニタ（解析用に選択した状況モニタとモニタ・インスタンスは除く）が含まれます。</p> <p>選択すると、[解析ターゲット] リストのモニタとグループには ✓ が表示されます。</p> <p>[モニタの選択] フォームの次のアイコンを使用して、解析の対象となるシステム・モニタを検索して選択します。</p> <div> <b>すべて折りたたみ</b>：ツリーの分岐をすべて折りたたむ。</div> <div> <b>すべて展開</b>：ツリーの分岐をすべて展開する。</div> <div> <b>すべて選択</b>：表示されているモニタをすべて選択します。</div> <div> <b>選択を解除</b>：選択範囲を解除します。</div> <div> <b>クイック検索</b>：名前でもニタを検索できます。また、このフィールドに入力した特定の値を含むモニタを検索することもできます。詳細については、<a href="#">「クイック検索」(76ページ)</a>を参照してください。</div>
選択済みのモニタ	<p>分析用に選択したすべてのターゲット・モニタのツリーを表示します。</p> <p>選択したターゲットの総数がツリーの下に表示されます（最大 700 個）。</p> <p><b>標準設定値</b>：選択されていない</p>



## 解析アラート

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>相関処理計算の完了時に警告を送信</b>	電子メール警告を送信して、最初の相関処理計算が完了したことを通知します。 <b>標準設定値</b> :選択されていない
<b>&lt;モニタに関連付けられた警告&gt;</b>	このモニタに関連付けられたすべての解析アラートを表示します。
	<b>新規警告アクション</b> : [アクションタイプ] ダイアログ・ボックスが開き、警告をトリガしたときに実行するアクションを定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス</a> 」(1263ページ)を参照してください。
	<b>警告アクションの編集</b> : [アクションタイプ] ダイアログ・ボックスが開き、警告アクションを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、「 <a href="#">[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス</a> 」(1263ページ)を参照してください。
	<b>警告アクションの削除</b> : 警告アクションを削除します。関連付けられたモニタは無効にはなりません。
有効化	<b>有効化</b> : モニタに関連付けられている警告が有効になります。
無効化	<b>無効化</b> : モニタに関連付けられている警告が無効になります。
	<b>テスト</b> : 選択したサーバの警告定義をテストします。
	<b>すべて選択</b> : 表示されている警告がすべて選択されます。
	<b>選択を解除</b> : 選択を解除します。
<b>名前</b>	SiteScope で認識される警告の名前。
<b>状態</b>	警告の状態（有効/無効）。
<b>詳細</b>	警告の詳細。
<b>アクション名</b>	「 <a href="#">[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス</a> 」(1263ページ)の警告アクションの名前。

解析タグ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	詳細
<b>Analytics Auto Tags</b>	<p>タグ作成により、同じタグでグループ化されたモニタを SiteScope の Multi-View の単一の Impact View で表示できます。</p> <p>SiteScope は、各解析設定の解析タグ値を自動生成し、ソース・モニタに割り当てます。ソース・モニタに問題が発生して、解析アラートがトリガされた場合、SiteScope はこのタグを取得してターゲット・モニタに割り当てます。タグの値は analytics_&lt;monitor_name&gt; の形式となり、同じ名前のモニタが複数ある場合は丸括弧で囲まれた数字が後に付きます。</p> <p>「Analytics Auto Tag」を使用するだけでなく、追加のタグ値を作成してソース・モニタに割り当てることもできます。これにより、これらのタグまたはタグ値が割り当てられたモニタのみを表示できます。カスタム・タグの作成の詳細については、<a href="#">「タグ・ビューでカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグを割り当てモニタを表示する方法」(1087ページ)</a>を参照してください。</p>
<b>タグの追加</b>	<p>「新規タグ」ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。「解析」タブで手動で作成したタグは、相関処理が計算されるたびにビジネスおよびシステム（相関）モニタに動的に割り当てられます。</p> <p>ユーザ・インタフェースの詳細については、「<a href="#">「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」(87ページ)</a>」を参照してください。</p>



# ドキュメントに関するフィードバックの送信

本書に関してコメントがある場合は、電子メールで[ドキュメント・チーム](#)にご連絡ください。電子メール・クライアントがこのシステム上で設定されている場合は、上にあるリンクをクリックすると、件名の行に以下の情報が付いた電子メールのウィンドウが開きます。

## **Feedback on Using SiteScope (SiteScope 11.30)**

電子メールにお客様のフィードバックを追加し、送信をクリックしてください。

使用できる電子メール・クライアントがない場合は、上記の情報を Web メール・クライアントの新しいメッセージにコピーして、フィードバックを [SW-doc@hp.com](mailto:SW-doc@hp.com) に送信してください。

お客様のフィードバックをお待ちしております。